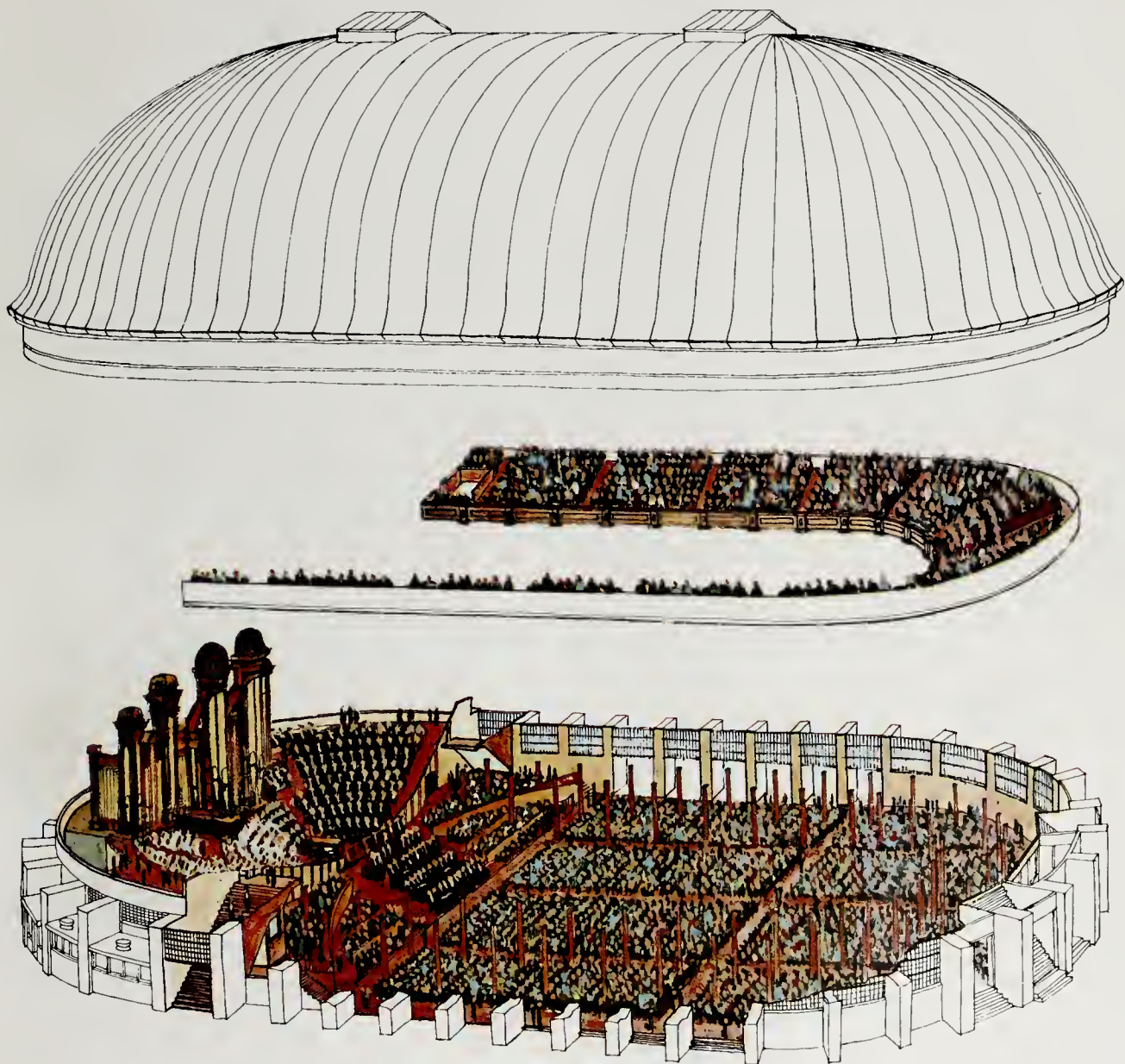
大会報告

1973-75

大管長会会員・十二使徒評議員会会員
大祝福師による説教

大会報告

1973—75年

大管長会会員
十二使徒評議員会会員
大祝福師
による説教

末日聖徒イエス・キリスト教会

東京ディストリビューションセンター

大会報告1973—75
Conference Report

発行所
末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューションセンター
東京都世田谷区上用賀4－9－19

発行日
1978年11月30日

印刷所
フォト印刷株式会社

目　次

目　次

第143回 年次総大会
1973
4. 6-8

時の動き1972

1972

10.19 フィリッピンのルバング島で元日本兵発見さる。撃ち合いでひとり死亡，小野田元小尉は逃亡。

10.28 中国のパンダが羽田着，上野動物園へ。

11.6 北陸トンネルで列車炎上。死者30人，重軽傷者719人。

11.7 米国大統領選挙。ニクソン氏再選さる。

11.23 ニカラグアの首都マナグアで大地震。死者推定1万8000人。

12.10 総選挙。日本共産党，第3党となる。

12.28 アラブゲリラ，タイのイスラエル大使館占拠。

1973

1.22 米国最高裁，妊娠中絶手術を認める。ヨルダン航空機，着陸に失敗。死者172人。

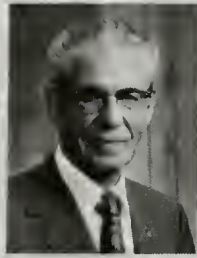
1.27 ベトナム和平協定調印さる。

2.1 浅間山,12年振りに爆発。噴煙数kmに達し，茨城県にも降灰。

2.20 ニューヨークで大停電。3時間，都市機能マヒ。

3.1 パレスチナゲリラ，スーダンのサウジアラビア大使館を占拠。23日には米国大使ら3人を射殺。

4.6― 第143回年次総大会。

大管長会

第一副管長
N・エルドン・タナー

大管長
ハロルド・B・リー

第二副管長
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

スペンサー・W・キンボール

エズラ・タフト・ベンソン

マーク・E・ピーターセン

デルバート・L・ステイプレー

リグランド・リチャーズ

ヒュー・B・ブラウン

ハワード・W・ハンター

ゴードン・B・ヒンクレー

トーマス・S・モンソン

ボイド・K・パッカー

マービン・J・アシュトン

ブルース・R・マッコンキー

大祝福師

エルドレッド・G・スミス

シオンのステーキ部を堅くせよ

大管長

ハロルド・B・リー

きょうこうして皆さんとお会いでき心から喜んでいる。また世界各地でこの放送に耳を傾けている方々にも心から歓迎の意を表わしたい。

1973年4月6日という日は，特に意義深い日である。それは，この日がこの神権時代における末日聖徒イエス・キリスト教会の設立を記念する日であるということだけではなく，私たちの救い主であり，主であるイエス・キリストの生誕を祝う日でもあるからである。ジョセフ・スミスは，この同じ4月6日に与えられた啓示を次のように記録している。

「この末の代におけるキリストの教会の起りはこれなり。而して時はわれらの主，われらの救い主なるイエス・キリストが，肉身を以てこの世に来りたまいてより千八百三十年にじて第四の月すなわち四月の六日，神意と神命によりて，わが国の国法に従い正式に組織創立せられたり。」(教義と聖約20：1)

この時以来，教会の年次総大会が毎年4月6日を含む数日間開催されることが伝統となっている。

2年後，また別の啓示が与えられた。この啓示は，当時でも重要な意味を持ってはいたが，今日増加の一途をたどる教会員たちの要求を考えてみる時，一層大きな意味を持つものである。今日，私はこの聖句を引用して，私の説教を進めたいと思う。

「すなわちシオンはその美と聖とを増し，その境域は拡がりそのステーキ部は堅うせられざるべからず。われ誠に汝らに告ぐ，シオンは起ちてその美しき衣を着けざるべからずと。」(教義と聖約82：14)

この聖句に使われているシオンという言葉は，疑いなく教会のことを意味していた。当時，教会は設立されたばかりで，これから発展しようとしている小さな団体にしか過ぎなかった。しかし，やがて教会外の敵から冷酷な仕打ちを受けた教会員たちは，主が「シオンの地」として指定されたミズーリ州ジャクソン郡に集合するよう指示を受けた。

こうして数々の困難と闘っている初期の教会員たちの行く末を暗示するかのように，主は，また他の啓示で次のように言われた。

「故に，誠に主かくの如く言う。シオンよ喜べ。そはこれこそシオン，すなわち『心の清き者』なればなり。この故にシオンよ喜べ。一方，すべて悪しき者は悲しまん。」(教義と聖約97：21)

この「シオン」という名称にふさわしくなるために，教会員は，黙示者ヨハネが義人の住む聖なる都が，夫となる神の小羊のために花嫁のように着飾っているのを示現で見て記録しているように，自分自身を夫を迎えるために着飾る花嫁として考えなければならない。この黙示録の中に描かれている関係こそ，丁度，妻が夫のために美しい衣で着飾るように，私たちが主に受け入れられる者となるため，主が私たち教会員に望んでおられる関係なのである。

主の民が，神の目から見て充分受け入れられるに値する者となって生活するための規範は，今，私が引用した聖句に示されている。教会員は，世の人々の前にその美を増し，内面的な麗しさを堅持しなければならない。世の人々は，その麗しさが神聖さに反映し，その神聖さから生ずる固有の性質に反映するものであることを知るであろう。義人と心の清い者が住むシオンは，今その境域を広げ始めなければならない。シオンのステーキ部は堅く強められなければならない。これは皆，シオンが全世界の人々に救いの計画を推し進めるに当たって，ますます勤勉になることによって輝きを増し，立つためである。

まだ教会がその揺籃期にある時，

主が教会員はひとつとなるようにと言われたため，人々はひとつ所に集合しようとした。主は，この時，いずれ初期の集合地には，こうした人々に見合うだけの土地が無くなる時が来るであろうと告げられた。次のような主の言葉がある。

「わが教会は，末の世に於て須らく末日聖徒イエス・キリスト教会と称えらるべし。」さらに次の戒めが続く。「汝ら起ちて己が光を輝かせ。これ汝らの光よろずの国民のはたじるしとならんため……。」(教義と聖約115：4,5)

ここで明確に推論できることは，この時代における主の教会の出現は，次のような古代の予言の成就の始まりであるということである。

「主の家の山は，もろもろの山のかしらとして堅く立ち，もろもろの峰よりも高くそびえ，すべて国はこれに流れてき，多くの民は来て言う，『さあ，われわれは主の山に登り，ヤコブの神の家へ行こう。彼はその道をわれわれに教えられる，われわれはその道に歩もう』と。……」(イザヤ2：2,3)

こうした一連の啓示の中で，主はステーキ部と呼ばれる教会の組織単位について語っておられる。私たちと信仰を同じくしない人々はそれを司教管区という風に考えている。これらのユニットは，次に挙げるような根本的な目的のために，組織されたものである。その第一の目的は，見えるもの，見えざるものを問わず，主のみ業を妨げる敵に対する防御である。

使徒パウロは，私たちが注意を怠ってはならない敵について，次のように語っている。

「わたしたちの戦いは，血肉に対するものではなく，もろもろの支配と，権威と，やみの世の主権者，また天上にいる悪の霊に対する戦いである。」(エペソ6：12)

これらの組織は，「暴風雨の避所となり，憤りのありのままに全地に注がるる時に一つの避所ともならんため」(教義と聖約115：6)に存在すると前述の啓示に述べられている。

この神権時代に入って以来与えられてきた一連の主の啓示の端書きの中で，主は，次のような重大な警告を与えられた。私たちはこの警告を片時も忘れてはならない。1831年に与えられたこの予言的な警告の目的は，主のみ言葉の中に明らかである。

「すべての人々をしてその日の速に来るを知らしめんと思えばなり。而して地より平和の取り去られ，悪魔自らの領土を支配する時はなおいまだしといえども今や近きにあり。」(教義と聖約1：35)

この警告が与えられてから142年経た今，私たちは，確かに現在の荒廃振りを目撃している。現代は，サタンがみずからの領土を支配している時である。このサタンは，救い主がこの地上におられた時，「この世の君」とも「あらゆる義の敵」とも言われたほどの，強大な力を持っている。

今述べたような恐ろしい予言や，その予言の成就の証拠は今日，私たちの前に歴然としているが，同じ啓示の中で，主のみ業を破壊しようとするサタンの計画を打ち砕くために，さらに大いなる力が与えられると約束がされている。主はここで，いと高き神の聖徒たち，すなわち主が「シオンの民」と呼ばれた心の義しい人たちとこの約束を交わしておられる。次の聖句は主のみ言葉である。

「されど主もまたその聖徒らを支配し，その真中にありてこれを統治せん。而してイヅミヤ，すなわちこの世に下る審判のために天より降り来らん。」(教義と聖約1：36)

この聖句は，主が弟子たちに，この世的なことを警戒するよう言われた時の言葉と同様な意味で述べられたものである。主は弟子たちに，世にあっても世にある罪からは身を守らなければならないと教えられた。

天地創造以来，今日ほど，主がそのみ業を破壊しようとする悪魔の支配を許しておられ，また義の業の完全な崩壊を救おうとしている義人の中にあっても，御自分の力を現わそうとされない時はないと思う。

今日，私たちは次のような主の約束を目の当たりにしている。それは，「もし汝ら誠心誠意わが光栄を顕さんとすれば」，主が予言者モーセに言われたように，「人に不死不滅と永遠の生命とをもたらす」という約束であり，さらに「汝らの全身光明に充たされて汝らの中に暗黒なく，その光明に充ちたる体はすべての事を理解せん」(教義と聖約88：67)という約束である。

また次のような主の約束も与えられている。「見よ，みよ，われ汝らの羊群を護り，長老たちを起して彼らに遣わさん。見よわれその時期に於けるわが業を急ぐべし。」(教義と聖約88：72,73)

今日私たちは，主の聖徒たち，すなわち教会の会員たちの間にあって，主のみ手の働きを目撃している。この神権時代において，いやおそらくは，今だかつてどの時代においても，今日この教会の会員の間に感じられるほどの緊迫感が感じられたことはなかったであろう。教会の境域は現在広がりつつあり，そのステーキ部も堅くされつつある。教会の設立後間もなく，聖徒たちの集合する特別の場所に関する啓示が与えられ，主はこの集合地が変えられることはないと言われた。だがそれと同時に，次のような条件も付けられた。

「されど，ついに聖徒を容るる余地なき日来らば，その時はわれ彼らに

指定すべき他の場所あり，而してこれらの地はシオンのあげ幕またはシオンの力となるためにステーキ部と呼ばれん。」(教義と聖約101：21)

昨年8月メキシコ・シティー地域大会において，十二使徒評議員会のブルース・R・マッコンキー長老は，示唆に富んだ説教の中でこの主題に関して述べている。私は，そのマッコンキー長老の説教の中から少し引用したいと思う。

「この栄光に満ちた回復と集合の時代について，ひとりのニーファイ人予言者は次のように言った。『主の誓約……とは主がイスラエルの全家と結びたもうたものであり，また……ユダヤ人が神の真の教会と羊の群に再び復され，その受け嗣ぎの地に帰して集められそのすべての約束の地に住む日がくる。』(IIニーファイ9：1,2)

私はここで，この聖句に述べられている事柄に注目していただきたいと思う。すなわち，イスラエルの集合とは，真の教会に加入し，真の神と救いの真理を知るようになることであり，あらゆる国々，あらゆる人々の中にあって聖徒たちの会衆とともに神を礼拝することである。この啓示されたみ言葉は，主の羊の群，受け継ぎの地に集められるイスラエル，そのすべての約束の地に打ち立てられるイスラエル，かつまた，主の再臨の折，あらゆる国語を話すあらゆる国々に，あらゆる人々の中に，主の聖約の民である会衆がいるということを述べていることに注意していただきたい。」

さらにマッコンキー長老は，この説教の結びに，教会をそれぞれの国々で打ち立てるために，地元の指導者を教育し，訓練することが大いに必要であると，声を大にして述べていた。

「メキシコの聖徒のための集合の地はメキシコにあり，グァテマラの聖徒のための集合地はグァテマラにある。またブラジルの聖徒のための集合の地はブラジルにあり，これが同じ意味で全世界の規模にまで広がる。日本は日本の聖徒のためにあり，韓国は韓国の聖徒のためにある。またオーストラリアはオーストラリアの聖徒のためにあり，あらゆる国々は，その国の民のための集合の地である。

次のような質問が幾度も発せられる。「他の数多くの教会が衰退の一途をたどっている今日，この教会が驚くべき発展を遂げているのはどういうことなのか。」

教会が日々発展を続けていることを説明できるような要素，要因は数多くあるが，私は，ここではほんの少しだけ例を挙げて，こうした質問をする人々の一考に付したいと思う。

この教会が「ユタの教会」であるとか，「アメリカの教会」であるとか考える人はもはやいない。教会員は，今日全地に満ちて，その数は78カ国に及び，現在17カ国語で福音が教えられている。

今日，私たちが直面している最大の問題は，この異常なほどの膨張を続ける教会員をどうするか，ということである。無論，教会のこのように広範な発展を私たちは心から喜ぶものではあるが，この発展は同時に，数多くの問題に対して，教会の指導が後手に回らないようにするための数々の大きなチャレンジをはらんでいるとも言える。

こうした状況に対応するための計画を立てるに当たって教会の指導者たちは，常にふたつの根本的な原則に導かれている。最初に人の注意を引き関心を持たせると思われるのは，世の創造の前に定められた救いの計画という根本的な原則である。これは全人類の贖いのためであり，この神権時代の予言者たちに啓示されている事柄であり，決して変わることのないものである。かつて使徒パウロがしたように，今日私たちも次のように宣言しよう。

「しかし，たといわたしたちであろうと，天からの御使であろうと，わたしたちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら，その人はのろわるべきである。

兄弟たちよ。あなたがたに，はっきり言っておく。わたしが宣べ伝えた福音は人間によるものではない。

わたしは，それを人間から受けたのでも教えられたのでもなく，ただイエス・キリストの啓示によったのである。」(ガラテヤ1：8,11,12)

なぜ教会が着実に発展しているのかを尋ねる人々に答えようとするならば第一の根本的な理由は，私たちは教会の根本的な教義を教えるに当たって首尾一貫してきたからである，と答えることができよう。私たちの信仰箇条は次のように宣言している。

「われらは，すべて神のこれまでに啓示したまいしこと，すべて今啓示したもうことを信じ，なお今より後，神の王国につきて多くの偉大にして重要なることを啓示したもうことを信ず。(これに「教う」と加えてもよいだろう)」(信仰箇条第9条)

この神権時代に主が与えられた啓示の内，最も初期の啓示のひとつに，当時存在した数多くの教会の間に混乱があるのはなぜかを，明らかにした啓示がある。主はその理由を次のように述べておられる。

「そは彼らわが儀式より離れ去り，わが永遠の誓約を破りたればなり。彼らは主の義を打建てんために主を求めずして，あらゆる者おのが心のままに振舞いおのれらの神の姿を求むれども，その姿は人の世の像にして……」(教義と聖約1：15,16)

それゆえ，新しい回復が必要であった。主は次のように明確に説明し

ておられる。

「さらば，主なるわれ，この世に住める人々に襲い来るべき禍を知れば，わが僕ジョセフ・スミス（二代目）を呼び天より語りて彼に誡命を下せり。

また地の者どもにもこれを世の人々に宣ぶる様誡命を与えたれど，すべてこは予言者たちの記せし事の成就せんがためなり。……

されどこは，あらゆる人々主なる神すなわち世の救い主の名によりて語らんため，……

完全なるわが福音，弱き者たち単純なる者たちによりて世界のいやはてまでも宣べられ，また王と統治者との前に宣べられんがためなり。

……これらの誡命は……わが僕らの理解せんがため，彼らの言葉ぶりにならいて……与えられたり。」（教義と聖約1：17，18，20，23，24）

教会統一運動について語る人がいるが，この運動は理論上，あらゆる教会がひとつの普遍的な組織の下に集まるということであると考えられる。だが本質的には，この運動によって，各教会は，その根本的な原則を捨て去り，まったく漠然とした組織の下にひとつになるのだということを考える必要がある。その結果，そうした組織は，イエス・キリストの教会の始まり以来，伝統的に根本的な教義となっていたものとは似て非なる原則に基づいた組織となってしまうことであろう。

主の啓示を明確に理解するなら，ひとつにまとまった普遍的な教会の基盤が明確に打ち出されるであろう。その教会は，人の作った信条によって実現できるものではなく，使徒パウロがエペソ人に教えたように，イエス・キリストの福音の完全な原則が教えられ実践される時にのみ，実現可能なのである。使徒パウロは，教会というものは「使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって，キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である」（エペソ2：20）と説明している。

教会の使命についても，聖典の中にはっきり述べられている。

「而して，この末の世にわが選びたる弟子たちの口より，すべての人々に警めの声は及ばん。

この故に，主の声は耳ありて聞かんとするすべての人々に聞かれんため地の果てにまで及ぶ。」（教義と聖約1：4，11）

この指示に従順に従うべく，教会の始まり以来，宣教師たちは，世界のあらゆる国々に派遣されている。今日，宣教師の数は著しく増加しており，しかもその大部分は青年であり，この人々は，子供の時から宣教師として奉仕しようと，召しにこたえる準備のために訓練を受けている人々なのである。

教会設立当時，ほんの一握りだった宣教師も，今日では1万7千人以上にも達し，それぞれ自費か，もしくは家族の助けによって，2年間かそれ以上自分に与えられた召しが神からのものであるという確信を胸に抱いて，その使命のためには，ひとたび召されたら世界のどこへでも赴く覚悟をして奉仕に務めているのである。

主のみ業の進展には，また他の理由を挙げることもできよう。それは，おそらく，かつて世界でこれほど多くの人々が，様々な込み入った問題に対する解答を求めている時代はなかった，ということである。

イエス・キリストの福音の原則は，決して変わることはないが，今日の世界の要求する様々な問題に対応するための方法は，時代の要求に応じられるものでなければならない。幸いなことに，この教会に与えられた啓示で，主は私たちがどのように時代の要求にこたえたらよいのか，その指針ともいうべきものを示して下さったのである。救いの計画は，人々のこの世の要求にいかに対処すればよいか，その方法を明確にしている。教会は福祉計画を通じて，困難な状況にある人々を見付け出し，彼らにはこの世の救いの計画として，まず第一に，自活の仕方を教える。主は家庭や結婚の神聖さを脅かす恐るべき影響力に対抗するため，家庭を堅固にし，両親たちが子供たちに，正直，貞節，高潔，節約，勤勉などの根本的な原則を教えることができるよう指針を与えることにより，かきねを設けられたのである。

教会は，幼年期から青年期，また青年期から成人期に至るまで，あらゆる年代層の教会員の要求にこたえることができるよう，関心を払っている。

教会には落伍者や背教者はいないのかどうかという質問には，私たちはいつも，主の種まきのたとえ話を引き合いに出すことにしている。種まきが種をまきに出て行った，というあのたとえ話である。その話の中で，ある種は良い地に落ちたが，良い地に落ちた種の中でも，あるものは30倍に，あるものは60倍に，あるものは90倍に実を結んだ，という部分がある。今日でも，同じように，やや活発な会員もいればそれより少し活発な会員もいる。また教会の活動に，完全に活発な会員もいる。だが，私たちは，道を踏み外した人々に常に援助の手を差し伸べているし，そのような人々を再び活発にするため，日夜努力しているのである。

しかし，おそらく，教会の進展する最も重要な理由は，この神聖なみ業に対する一人一人の証であろう。そして，その証は，教会員の心の中で加速的に強まっていくものなのである。つまり，教会の強さは，教会

員の数でもなければ，忠実な会員たちの納める什分の一や献金の金額によるのでもなく，礼拝堂や神殿の大きさによるものでもない。ただ，忠実な教会員たちの心の中の，これが確かに地上における神の教会であり，王国であるという揺るぎない確信によるのである。もしこの確信がなかったなら，私の知っているある有能な実業家が言ったように，「教会の福祉計画は，混乱以外の何物でもなくなってしまうであろう。」同様に，宣教師活動も実を結ぶことがなく，教会員も教会の数多くの事業を財政的に支えるために，私心のない貢献をするという点において忠実でなくなるであろう。この教会の強さの秘密は，ある州立大学の学生自治会の会長をしている学生の手紙の中に読み取ることができるように思える。この学生の行状は，無論，信頼に足るものであり，次の文は彼が私にあてた個人的な手紙の中から抜粋したものである。

「この国を風靡しつつある急進的な思想の所産として，家族の絆というものが知識階級の間で無視され，崩壊の危機にひんしています。この国は，見たところ，性教育，堕胎，産児制限，ポルノグラフィー，ウーマンリブ，同棲，婚前交渉，婚外交渉などの諸問題のあくなき攻撃を受けています。……」

それから，この若い学生指導者は，手紙の結びに，次のような心温まる言葉を書いてくれた。私はこれが，彼の心の奥底から出たものであることを知っている。次のように書いてくれたのである。

「リー大管長，私は大管長に，この大学に籍を置く末日聖徒の学生で，戒めを守っている者は皆，大管長を完全に支持しているということを知っていただきたいと思います。私たちは，何ものにも換えられない大切な結びつきである家族というものを滅ぼそうとしている悪魔に対し，固く立って，果敢に戦いをいどんでいる立派な指導者がいる，ということを神に感謝しています。また，大管長が，この種々交錯する世の中を生き抜こうとする私たち青年にとって，充分理解できる方であり，また心から従っていける方であることに感謝しています。」

さらに，立派な大学生の言葉を借りて申し上げるが，私も，この教会の強さを生み出している根本的な理由の内の最大のものは，神の戒めを守っている人々が，この教会の指導者を完全に支持していることである，と確信している。また，こうした全会員の一致した支持がなければ，この教会でも時代の様々な問題に対処しつつ前進することなど不可能であるということが容易に理解できるであろう。私たちの念願は，教会の全会員がこぞって神の戒めを守ることであり，世界の安全もこれに懸かっている。神の戒めを守る人は，教会の指導者たちの教えに従って義の道を歩むよう説かれているだけではなく，その人個人の行動のために，主の「みたま」の導きを受けることができるのである。教会員は皆，バプテスマを受けた時，ある神聖な儀式をも受けたはずであるが，これは，神権の権能によってすべてバプテスマを受けた会員に施されるものである。主が言われたように，すべてのことを教え，すべてのことを思い起こさせ，さらには来るべきことまでも示す聖霊の賜である。（ヨハネ14：26参照）

これまでのことからはっきりと理解できることは，神を信じさせまい，教会の指導者の言葉に従わせまいとする邪悪な者の手中に落ちる者がひとりもないように，全能の神の戒めに従って生活するよう説き，教え，正しく導くことが教会の指導者，教師たちの偉大な責任であるということである。

私はこの業が神のみ業であることを知っており，神聖な証を述べたいと思う。卑劣な手段で教会を攻撃しようとしたり，粗探しをしたり，世の中での教会の影響力を損なうことに躍起になっている敵もいるが，この教会は最後まで耐え忍び，時の試練に耐え抜き，主のみ業を阻もうとする人間のあらゆる奮闘と試みが水泡に帰する時，その手中に勝利を収めることであろう。私は，主イエス・キリストが，この教会の頭であることを知っている。また主が，教会の高い地位にいる指導者だけではなく，神の戒めを守るあらゆる会員と，主のみが御存じの働きを通し，日々交わっておられることを知っている。このことを心から証申し上げ，教会のあらゆる忠実な人々に，世界中の忠実な人々に皆，私の祝福を残す次第である。主イエス・キリストのみ名により，アーメン。

主の力にすがる

十二使徒評議員会会員

マービン・J・アシュトン

今年の冬は実に厳しいものであった。数週間前のことである。当地を襲ったひどい吹雪で，結婚するためソルトレーク神殿に向かっていた二人の男女が難渋を強いられていた。女性はソルトレーク盆地内の某所で，男性は市街をはずれた地点で立往生していた。夜来の大雪と強風のため，ハイウェイが通行不能となっていたのである。参列者がやきもきしながら待つこと数時間，ようやく友人の助けを得て二人は到着し，夜半前に儀式は予定通り終了した。

この最も大切な約束に間に合わせるために寄せられた助けと関心に，二人は言うに及ばず家族と友人も感謝の気持ちに満たされた。この友人を，かりにビルと呼んでおくが，彼は次のように心からの感謝を述べた。「私たちの結婚を可能にして下さったすべての方々に心から感謝申し上げます。私は皆さんがこれほどの悪条件の中をどうして助けて下さったのか理解できないほどです。私のような取るに足らない者を。」

ビルは真心からの謝辞を述べたに違いない。しかし，私はビルの言葉に対して，断固たる気持ちでこう答えた。けれども私の愛も察して欲しい。「ビル，私はこれまで『取るに足らない人』を助けたことは一度だってありませんよ。天父の王国には『取るに足らない人』など一人もいないのですから。」

このように人間の真価を正しく認識しようとしない風潮を改めて実感したのは，その後問題を抱えたある夫人と面接した時である。彼女の結婚生活は破局にひんしていた。夫との間に立ちはだかる壁を取り除こうと懸命に努力したが，無為に終わっていた。彼女はカウンセリングに時間を割いてくれた監督に感謝していた。ステーキ部長も忍耐強く，また彼女を理解しようと努め，あらゆることを試み，助けてくれた。

その結果，問題のすべてが解決されたわけではないが，事態は明るい方向へと向かっていた。正しい神権の系路を通じて求めた援助に，彼女は感謝の念だけでなく，多少の驚きも覚えていた。そしてこう語った。「私のような『つまらない者』に，どうして皆さんが多くの時間を割き，多くの関心を示して下さるのか，よく分かりません。」

もし私たちが，自分は「つまらない人間だ」などと言ったら，天父はきっと悲しまれることであろう。このように自分をきめつけてしまうことは正しいことだろうか。私たちの家族にとってはどうだろうか。神にとってはどうだろうか。

私たちは，この世に付き物の悲劇や逆境，苦悩や失望などに出会うと，自分を必要以上に悪く考えてしまうものである。しかし，どのような状態であれ，自分を「つまらない人間」などときめつけることは許されないのである。

私たちは神の子供である。「つまらない人間」などではない。私たちが胸を張り，両手を広げ，神とともに歩むならば，神は私たちを導き，力付けて下さるのである。私たちは神にかたどって造られた。そして，神のようになれる力を内に秘めており，また神の助けを得ることもできる。このことを知っている私たちは，何と恵まれていることだろう。私たちは神の力をもってすればすべてのことを行なえるのである。まことに偉大な恵みではないか。

アルマ26章の10節から12節に記されている偉大な教えは，単にその兄弟のアロンだけでなく，今日の私たち全員に対して向けられたものである。

「アンモンがこう言ったのでその兄弟のアロンがこれをとがめて言った

『アンモンよ，おそらく汝は喜びのためにわれを忘れて大言を吐くようになったのであろう』と。

しかしアンモンはこれに答えて言った『私は自分の能力も智恵も誇るのではない。ごらん，私は喜びが満ち充ちて心に溢れるばかりであるから，私の神がましますことを喜ぼう。……私の能力は弱い。それであるから，私は自分のことを誇らないでただ私の神のことを誇る。それは神のたもう能力によって何事もすることができるからである。ごらん，私たちはこの土地で多くの大きな奇蹟を行なったが，私たちはとこしえに神の御名にこの誉を帰して讃美する。』」

自分を「つまらない人間」ときめつけることと同様に，人は他人をも「つまらない人間」ときめつける傾向がある。これも悲しむべきことである。時として人はおごり高ぶって，見知らぬ人を取るに足らない人ときめつけてしまうことがある。自分の都合だけを考える時や他人の話に耳を貸そうとしない時に，これが起きる。14歳の「取るに足らない者」を受け入れないがために，ジョセフ・スミスと彼のメッセージを拒んでいる人々が今日無数にいる。19歳の長老や21歳の姉妹宣教師，あるいは近所の人を「つまらない人間だ」と思い込んでいるがために，回復された永遠の真理を目前にしながら背を向ける人々もいる。

救い主イエス・キリストが拒まれ，十字架にかけられた理由のひとつは，世の人々が見る目を持たず，イエスを「取るに足らない人」と考えたためである。飼葉おけの中でいやしく生まれ，「地には平和は，人には良き思い」と当時の人には耳新しい教えを説いた方を「つまらない人間」と考えたのである。

私は皆さんと世のすべての人々に証する。ジョセフ・スミスはみずからの謙遜な祈りが答えられて，神が御子イエス・キリストとともに現われ，ジョセフと名を呼んで語り掛けられた時，天地が逆さまになるほどの衝撃で，かのお方が「ただの人ではない」ことを知ったのである。歴史をひもといてみると，神は，世の人々が「つまらない人間」と呼ぶ階級の人から，真理を証する人を選んでこられたことが分かる。この点に関するジョセフ・スミスの考えと自己分析に注目してみよう。

「満十四才を少し超えたような一介の少年であり，またその日の労働でようやく生計を得て行かねばならぬ運命におかれた一少年の私が，当時最も評判の教派に属する偉い方々の目を惹くほどの，また言わば，最もひどい迫害と悪口雑言をあびせようとする精神を彼らの心中に引き起こすほどの重要な人物と思われようとはいかにも不思議である，ということは当時私を本気に深く考えさせまたそれ以来しばしば深く考えていることである。しかし不思議であろうがなかろうが事実は迫害と悪口雑言であった。そしてこのことは度々私自身にとって非常な悲しみの種となった。

然しながら，これにも関わらず私が先に示現を受けたことは事実である。」(ジョセフ・スミス2：23—24)

ジョセフ・スミスは自分のことを「一介の少年」とは言ったが，「つまらない人間」とは言わなかったことに注意していただきたい。ジョセフの険しい人生を通じて彼を支えたものは，神の力にすがればあらゆることを成し遂げることができるという知識であった。

私たちに課せられている最大の責任と特権は，自分に対して張った「つまらない人間」というレッテルを「価値のある人間」というレッテルに張り替えることである。私は，私たちがこのことを悟ることができるよう神の助けを願っている。この管理の責任について私たちはまず自分自身に対してこれを果たす義務を負っている。「私はつまらない人間です」と言うのは破壊的な考えであり，詐欺師が用いる手だてである。

窮地に立つ若者が，差し伸べられた手に対して，「私のようなつまらない者のことは，ほうっといて下さい」と言うのを聞く時ほど，胸が張り裂ける思いをする時はない。

学内で問題になっている学生から「僕は何も特別なことをしているわけではありませんよ。みんなと同じ，取るに足らない一介の学生ですよ」と言われた時も，同様の気持ちを味わった。

先日，ある宣教師と面会する機会があったが，私はそこで大切な教訓を得たので御紹介したい。「御両親からはよく便りがありますか」という質問に対して，この長老はこう答えた。「めったにありません。」

「あなたはそのことについてどうしていますか。」

「毎週書き続けています。」

手紙を書いてくれない両親，これだけでもこの長老が，自分を「つまらない人間」と思い込む根拠となり得るはずだった。けれどもこの長老はそうした素振りはまったく見せなかった。さらに話を進めて行くと，私はこの青年がますます「ただの人ではない」という観を強くした。両親が手紙を書かなくとも，それは両親の問題であって，長老には手紙を書く責任がある。こうしてせっせと手紙を書き続けていた。私はこの宣教師の両親にお会いしたことがないし，今後もないと思うが，このお二人は「ただの人ではない」と私は考えている。これほどの息子を持っているからである。この長老は宣教師

として成功を収めると思う。彼は自分が「ただの人間ではない」ことを知っており，それに基づいて行動しているからである。

ここ数カ月間，私はハロルド・B・リー大管長から事務所へ一度ならず呼ばれて，大管長が招いた人の提案，関心事，当惑，心の痛みを拝聴してきた。リー大管長には，これらの兄弟たちのような普通の人のために割く時間はないだろうと考える向きもあろうが，リー大管長は王国においてはすべての人が大切であることを御存じである。私はある人が別れ際に，リー大管長に向かってこう言ったのを忘れることができない。「大管長が私のような者の話を聞いて下さるとは，思いも寄りませんでした。」

父親，母親，夫，妻，子供の皆さん，皆さんが今どこでどのような境遇にあろうとも，決して「つまらない人間」ではない。たとえ一介の少年，少女，男性，女性であろうとも，「取るに足らない者」ではないのである。このことを考えるに当たり，聖典中の偉大なたとえ話を読んでみたいと思う。

「ある人に，ふたりのむすこがあった。

ところが，弟が父親に言った。『父よ，あなたの財産のうちでわたしがいただく分をください』。そこで，父はその身代をふたりに分けてやった。

それから幾日もたたないうちに，弟は自分のものを全部とりまとめて遠い所へ行き，そこで放蕩に身を持ちくずして財産を使い果たした。

何もかも浪費してしまったのち，その地方にひどいききんがあったので，彼は食べることにも窮しはじめた。

そこで，その地方のある住民のところに行って身を寄せたところが，その人は彼を畑にやって豚を飼わせた。

彼は豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいと思うほどであったが，何もくれる人はなかった。

そこで彼は本心に立ちかえって言った，『父のところには食物のあり余っている雇人が大ぜいいるのに，わたしはここで飢えて死のうとしている。

立って，父のところへ帰って，こう言おう，父よ，わたしは天に対しても，あなたにむかっても，罪を犯しました。

もう，あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ，雇人のひとり同様にしてください』。

そこで立って，父のところへ出かけた。まだ遠く離れていたのに，父は彼をみとめ，哀れに思って走り寄り，その首をだいて接吻した。

むすこは父に言った，『父よ，わたしは天に対しても，あなたにむかっても，罪を犯しました。もうあなたのむすこと呼ばれる資格はありません』。

しかし父は僕たちに言いつけた，『さあ，早く，最上の着物を出してきてこの子に着せ，指輪を手にはめ，はきものを足にはかせなさい。

また，肥えた子牛を引いてきてほふりなさい。食べて楽しもうではないか。

このむすこが死んでいたのに生き返り，いなくなっていたのに見つかったのだから』。それから祝宴がはじまった。

ところが，兄は畑にいたが，帰ってきて家に近づくと，音楽や踊りの音が聞えたので，

ひとりの僕を呼んで，『いったい，これは何事なのか』と尋ねた。

僕は答えた，『あなたのご兄弟がお帰りになりました。無事に迎えたというので，父上が肥えた子牛をほふらせなさったのです』。

兄はおこって家にはいろうとしなかったので，父が出てきてなだめると，

兄は父にむかって言った，『わたしは何か年もあなたに仕えて，一度でもあなたの言いつけにそむいたことはなかったのに，友だちと楽しむために子やぎ一匹も下さったことはありません。

それだのに，遊女どもと一緒になって，あなたの身代を食いつぶしたこのあなたの子が帰ってくると，そのために肥えた子牛をほふりなさいました』。

すると父は言った，『子よ，あなたはいつもわたしと一緒にいるし，またわたしのものは全部あなたのものだ。

しかし，このあなたの弟は，死んでいたのに生き返り，いなくなっていたのに見つかったのだから，喜び祝うのはあたりまえである』。」（ルカ15：11—32）

兄弟姉妹の皆さん，どうかこの言葉をもう一度考えてみていただきたい。「父よ，あなたの財産のうちでわたしがいただく分をください。わたしは自分でやっていきますから。」日ならずして，この息子は放蕩に身を持ち崩して財産を使い果たしてしまった。どん底の生活を強いられ，食べることにも窮し，豚と一緒に住む始末であった。そして，「父よ，わたしは天に対しても，あなたにむかっても，罪を犯しました。もうあなたのむすこと呼ばれる資格はありません」と言った。彼は心でこう叫んでいた。「私は落ちる所まで落ちました。今や私はまったく取るに足らない者です。本当につまらない人間です。」

父がこの息子をどのように迎えたかをもう一度考えていただきたい。父は息子がやってくるのを見た。父は走り寄り接吻した。そして最上の着物を着せ，肥えた子牛をほふらせ

た。そしてみんなで喜んだ。みずから「取るに足らない者」と呼んだこの人は彼の息子だった。この息子は「死んでいたのに生き返り，いなくなっていたのに見つかった」のである。

父は喜びに浸りながらも，気分を害した兄に向かって，彼も大切な存在であることを教えている。「子よ，あなたはいつもわたしと一緒にいるし，またわたしのものは全部あなたのものだ。」永遠の見地から，「わたしのものは全部あなたのものだ」という言葉を不可能にする要因について考えてみていただきたい。私は，私のあらん限りの力を振り絞って宣言する。私たちがどのような所にいようと，天父は私たちすべてを愛し，御自分の子供であることを主張される。皆さんは天父の息子娘であり，天父から愛されている。

自分を責め続けないでいただきたい。落胆を避けなさい。正しい原則を学び，誉れをもってみずからを治めなさい。隣人を助けることも忘れてはならない。私たちは自分自身について正しいイメージを自分の中に築き，他人にもそれを伝えるならば，「取るに足らない者」というような姿勢は跡形もなく消えうせることを私は約束する。私の話を今聞いておられるすべての方々に，あなたは決して「取るに足らない人間」などではないことを申し上げたい。

神は生きておられる。神は実在の，永遠の御方であって，私たちが御自身と同じようになることを望んでおられる。主の力にすがることにより，私たちはそのようになれることを証する。この証をイエス・キリストの御名により申し上げる。アーメン。

ユダヤの平原で

十二使徒評議員会会員

ブルース・R・マッコンキー

ペテロは言った，「語る者は，神の御言を語る者にふさわしく語る」べきである（Ⅰペテロ4：11)。これは聖霊の力によって導かれなければならないという意味であり，私が今一番望んでいるのは，まさにこのことである。今朝，私たちはこの地上における神の王国の第一の代弁者が末日聖徒を初め，世界の人々に主のみこころとみ声を告げるのを耳にした。現在，その教えに従い，リー大管長が勧めるように語ること以上に重要なことを私は知らない。と同時にもし私たちがリー大管長のような生活をするならば，大管長と同じような人々と永久に交わることができるのである。

私は自分が話すことについて，主に相談した。話すに適切であると思ったことを主に提案したのである。もちろん，主の同意が得られるものと仮定してである。そしてその同意を得ることができた。したがって，もし今私が語る賜を与えられ，あなた方が，聞き取る耳を持たれるなら，ここに霊と誠とをもって主を礼拝しようとしている私たちは，一同そろって啓発されることであろう。

「ユダヤの平原で」と題する私の詩を引用して，話を始めようと思う。

われユダヤの平原に立ちぬ。
わが耳にささやく天界のざわめき
　と調べ。
また，罪の汚れを知らぬ天使がダ
　ビデの末の誕生を告げし声。

羊を守る羊飼いの上に，
　輝けるまばゆき光下れり。
天の円蓋より聖歌隊の，
　神の御子が肉の体を得るを見守
　るうちに。

明るき声は歌う，
「高き神，栄えあれ
　地には平和を，人に親しみ
　今ぞみ子は生まれける。」

心に響くは固き証，
「清き至高者，神の子イエス，
　地上に来れり，わが魂救わんと
罪と死と墓よりわが身を救わん
　と。」

さて，救いはキリストの内にある。キリストは私たちの救い主であり，贖い主である。アダムの堕落によって世にもたらされた肉体の死と霊の死を贖うためにこの世に来られた。そして，救いの計画を私たちに与えられた。これこそイエス・キリストの福音と呼ばれるものである。この救いの計画とはこうである。すべての人がキリストを信じる信仰を持ち，罪を悔い改める。次に，バプテスマの水に入って，戒めを守り，心を尽くし，勢力を尽くし，思いを尽くし，体力を尽くして神に仕えるという誓約を交わす。そして聖霊の賜と臨在を受け，以後毎日正しい，献身の日々を過ごすことである。そうすれば，この世で平安を得，来るべき世では永遠の栄光を授けられると約束されている。

私たちは主の代理人であり，主の代表者である。主は私たちに，永遠の福音を完全な形で与えられた。天は，私たちの時代にその幕を開かれた。神のみ声が再び聞こえたのである。そしてみ使いが主のもとから遣わされ，もろもろの鍵と権能，権威，神権が再び人に与えられた。再びすべての律法と特権を与えられた私たちは，人を救い，昇栄させるのに必要なあらゆる力を所有している。すなわちこの王国に，この教会に神の王国の鍵，全地の人類を救う鍵を持っているのである。

主が私たちに委任されたことがある。それは，同様の権能を持っていた古代の人々に委任されたと同じこ

とである。すなわち，主の言葉を全世界に伝え，全地にいる主の子らに救いをもたらすということである。そこで私たちは，この何ものにも比べることのできない，非常に重要な任務を，どのように果たしていけばよいかを知らなければならない。救いの真理を同胞の間で宣言し，回復のメッセージを世界に携えていくには，どうすればよいだろうか。

このことについては，永遠の原則がある。私たちが今日することは，原則だけではない。過去のあらゆる時代に予言者や義人たちがしたこととまったく同じことを行なわなければならない。

この神権時代の初期に，主は言われた。「……当教会の長老，祭司および教師たちは，聖書と完全なる福音を載せたるモルモン経とに誌されたるわが福音の原則を教うべし」(教義と聖約42：12) と。また，「民に証し民を警め」(教義と聖約88：81) るためにあなたがたを遣わした，とも言われた。

このふたつの務め，すなわち，福音の教義を教えることと，私たちが宣言している事柄は真実であるという個人的な証を述べることを例証して余りあるのが，モーサヤの息子たちの伝道の話である。記録によると，「この兄弟たちはまことに正しい理解をもっている者たちで，神の道を知るために熱心に聖文を研究したから，すでに真理について深い知識を持つようになっていた。そればかりでなく，かれらは非常に熱心に祈りと断食とをしたから『予言のみたま』と『啓示のみたま』とを受け，その教えを宣べるときには神に授かった権能と威勢とによって教えた。」(アルマ17：2,3)

上記の務めを果たすには，ふたつの前提がある。まず私たちは，教会の教義を知るように求められている。これは義務である。永遠の生命の言葉を蓄えなければならない。可能な限り，知的に思考しなければならない。私たちは与えられた才能と能力の限りを尽くして，救いのメッセージを宣言しなければならない。私たちのメッセージを自分にとっても，天父の他の子らにも理解し得るものにすることが求められている。しかも，それを証する義務がある。言い換えれば，聖霊が与える啓示によって，私たちが説くみ業と教義が真実で，神のものであることを，世の人々にも教会の兄弟姉妹にも知らせることである。

ここで証がどのように述べられたか昔の例を引用したい。私たちが今日の時代に対して負っているのと同じように，ペテロとその同僚は，当時，救いのメッセージを全地に宣べ伝える義務を負っていた。おそらくペテロは，イザヤや他の予言者が，キリストとその福音について記した啓示を読んで教えたものと思われる。ペテロは，人々とそのことについて論じた。彼は，「さあ，われわれは互に論じよう」(イザヤ1：18) という神の勧めに，また，「なんじらの道理(ことわり)をとり出せ」(文語訳イザヤ41：21) という神の命令に従ったのであった。

しかし，彼はそれだけにとどまってはいなかった。教義を教えた後，論じた後に，自分が同胞に伝えていることが真実であり，神聖なものであることを証した。また主は，霊的な経験をさせ，聖霊の力を宿らせることによってペテロを備えられた。

例えば，次のことを覚えておられるだろう。ペテロや他の十二使徒および聖徒たちの小さな群が，二階の部屋に集まっていた。その時，主イエスが現われ，そこに集っていた人々は，恐れ驚いた。すると主は彼らに言われた，「なぜおじ惑っているのか。どうして心に疑いを起すのか。わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわって見なさい。霊には肉や骨はないが，あなたがたが見るとおり，わたしにはあるのだ。」(ルカ24：38,39) そこで彼らは手を伸ばして，イエスの体にある傷跡に触れた。イエスは食物を求め，みんなの前で食べられた。

トマスはこの時その場にいなかった。それで仲間の使徒が述べる証を信じなかった。8日後，主は，今度は全員そろっている所へ，同じように姿を現わされ，トマスに言われた。「あなたの指をここにつけて，わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで，信じる者になりなさい。」トマスは言った。「わが主よ，わが神よ。」(ヨハネ20：24—28参照)

これはすべて，イエスが墓から触知し得る体をもって出て来られたことを示すために，なされたのであった。ペテロと同僚たちに，イエスが神の子であることを示す主の方法だったのである。もし死人の中からよみがえられたのであれば，イエスは神の子であった。もしイエスが神の子であるなら，彼らが宣べ伝えている救いの福音は真実であった。そこで彼らは，人々の心に，イエスが死からよみがえったことを信じさせるという義務を負うことになった。さて，彼らはイザヤの言葉を引用し，啓示を基に論じて，信じさせようとしたに違いなかった。事実そうした。しかし，それが終わると，個人的な証をした。ここでペテロが述べたそのような証の例を読んでみよう。ペテロは集まっていた一群の異邦人にこう語り掛けた。

「あなたがたは，神がすべての者の主なるイエス・キリストによって平和の福音を宣べ伝えて，イスラエルの子らにお送り下さった御言をご存

じでしょう。
それは，ヨハネがバプテスマを説いた後，ガリラヤから始まってユダヤ全土にひろまった福音を述べたものです。
神はナザレのイエスに聖霊と力とを注がれました。このイエスは，神が共におられるので，よい働きをしながら，また悪魔に押えつけられている人々をことごとくいやしながら，巡回されました。
わたしたちは，イエスがこうしてユダヤ人の地やエルサレムでなさったすべてのことの証人であります。人々はこのイエスを木にかけて殺したのです。
しかし神はイエスを三日目によみがえらせ，全部の人々にではなかったが，わたしたち証人としてあらかじめ選ばれた者たちに現われるようにして下さいました。わたしたちは，イエスが死人の中から復活された後，ともに飲食しました。
それから，イエスご自身が生者と死者との審判者として神に定められたかたであることを，人々に宣べ伝え，またあかしするようにと，神はわたしたちにお命じになったのです。」（使徒10：36―42）
そしてこの後にすべてを包括するような，含蓄のある言葉が続いている。「預言者たちもみな，イエスを信じる者はことごとく，その名によって罪のゆるしが受けられると，あかしをしています。」（使徒10：43）
ペテロが述べている証をもうひとつ読ませていただきたい。
「わたしたちの主イエス・キリストの力と来臨とを，あなたがたに知らせた時，わたしたちは，巧みな作り話を用いることはしなかった。わたしたちが，そのご威光の目撃者なのだからである。
イエスは父なる神からほまれと栄光とをお受けになったが，その時，おごそかな栄光の中から次のようなみ声がかかったのである，『これはわたしの愛する子，わたしの心にかなう者である』。
わたしたちもイエスと共に聖なる山にいて，天から出たこの声を聞いたのである。」（IIペテロ1：16―18）
私たちに課せられている数々の義務，すなわち私たちが福音について深い知識を持つ者となり，啓示に精通し，論じ合ったり分析したりする方法を身に着ける義務，あるいは私たちが身に着けている力と才能の限りを尽くして，救いのメッセージを私たちの間ではもちろん，この世に向けて宣べる義務，私はこれらを決して過小評価するものではない。しかし上記の義務を果たしただけでは，十分ではないのである。すべてを尽くした後で，主が今日の私たちに与えられた戒めに従わなければならない。「『……あなたがたはわが証人である』と主は言われる」。（イザヤ43：12）私たちは自分が教える義務に，神聖な承認の印を押さなければならない。この印は，証の印であり，聖霊が個々に与える知識である。
さてペテロは，長々と論じることもできたであろう。しかし，そうしていたら，人々はペテロと議論して，次のように言ったかも知れない。「あなたは聖書が分かっていない。あなたの解釈は間違っている。ここが，またあそこが誤っている。」しかし，人は証と議論することはできない。したがって，ペテロが論じた後で，多くの場合にしたように，次のように言ったとしたらどうであろうか。「私はある二階の部屋にいた。すると主が壁を通り抜けて入って来られた。私たちの前に姿を現わされたのだ。私はイエスであることをはっきり見分けることができた。それは3年半ともに働き，旅をした同じ方であった。カペナウムで私の家に泊まった方であった。私はまたイエスの手足にある傷跡に触った。脇にも手を差し入れてみた。またみんなの前で飲食されるのを私もこの目で見た。私はイエスが神の御子であることを知っている。神の聖いみたまが，私にこの証を与えて下さったからである。」もしペテロがこのように言っていれば，議論の余地はまったく残されていなかっただろう。上記のような発言に対して，議論を吹き掛けることはできない。フェストがパウロに言ったように，「おまえは気が狂っている。博学が，おまえを狂わせている」（使徒26：24）と言うことができるかも知れない。しかし最終的には，述べられた証を受け入れるか，拒否するかしかできない。真実であるか虚偽であるかのいずれかなのである。中間はない。
あなたは御父と御子がジョセフ・スミスに現われたことをどのように証明し，説明するだろうか。天使が今の時代に来られたこと，福音が回復されたこと，さらに私たちが世界に伝えていることが真実であるということはどうだろうか。そう，あなたは啓示を引いて論じることができる。あなたには十分な言い分があるだろう。それはまったく問題ではない。真理は私たちとともにあり，私たちが受けている教えの源は，主だからである。しかし，あなたは論じて，分析した後は，自分が言っていることを十分に認識した証人として，立たなければならない。あなたがたは，モーサヤの息子たちがしたようにしなければならない。予言のみたまと啓示のみたまとによって語り，教えるのである。そうすれば，権威ある者のように語ることができる。これは，私たちを世から区別する，素晴らしい事柄である。私たちにこのことが知らされていることを，神に感謝しよう。私たちはこの啓示を

受けているので，権威ある者のように語る立場にある。

そこで，私もこの知識を持った多数の末日のイスラエルのひとりであるので，この席で力を尽くして，そのように語ろうと努めている。私は今教えているこの業と教えが真実であり，神のものであることを知っている。

私は，「ユダヤの平原で」という詩で話を始めた。そこで，「二階の部屋で」という詩で閉じよう。

我ら食卓に着けり。その心は悲しみのうちにあり。
不義なる者，我らの主をほふりたればなり。
死の十字架の上に我ら主を見たり。
そのなきがらは横たわる，ヨセフの墓に。

そして主は再び立ちぬ。我らの傍らに。
主は生ける。主は生ける一かつてのごとく。
食し，飲み干す主を我ら見，手をもて触れ，
畏れのうちに，足下にひざまずく。

主，トマスに命じたもう，隠やかに。
「我が手に触れよ。そは異ならず。
十字架に上りし時のその手なり。
我となんじらのために死を受けしその手なり。

主，我に命じたもう。おごそかに。
「我が身に触れよ。こは肉と骨」
我が魂は呼ばわりぬ。「伏し拝め，主の笏の下に，
声高らかに叫べ，彼の人は救い主，主，神なりと」

これらのことを，私はイエス・キリストのみ名によって厳粛に，しかも確信をもって証する。アーメン。

見守る者よ 悪人を戒めなさい

十二使徒評議員会会員

エズラ・タフト・ベンソン

予言者エゼキエルは言った。

「人の子よ，わたしはあなたをイスラエルの家のために見守る者とした。あなたはわたしの口から言葉を聞くたびに，わたしに代って彼らを戒めなさい。わたしが悪人に『あなたは必ず死ぬ』と言うとき，あなたは彼の命を救うために彼を戒めず，また悪人を戒めて，その悪い道から離れるように語らないなら，その悪人は自分の悪のために死ぬ。しかしその血をわたしはあなたの手から求める。しかし，もしあなたが悪人を戒めても，彼がその悪をも，またその悪い道をも離れないなら，彼はその悪のために死ぬ。しかしあなたは自分の命を救う。」（エゼキエル3：17—19）

モルモン経の霊感を受けた予言者たちは，現代を先見し，悪魔の策略について警告した。

「ごらん，その時に悪魔はある人々の心に入って荒々しい行いをさせ，またこの人たちに善い事を怒らせる。またほかの人々をなだめ，この人たちをすかして肉欲をほしいままにさせる……実に人の誡命に聞き従い，神の権能と聖霊の賜とをしりぞける者は禍である。」（IIニーファイ28：20,21,26）

主は近代の予言者ジョセフ・スミスを通じて，さらに警告された。「この故に，主の声は耳ありて聞かんとするすべての人々に聞かれんため地の果にまで及ぶ。……主の声もまた主の僕らの声も聞かんとせず，予言者にして使徒なる者たちの言にも耳傾けんとせざる者のその民の中より絶たるべき日来るなり。そは彼らわが儀式より離れ去り，わが永遠の誓約を破りたればなり。彼らは主の義を打建てんために主を求めずして，あらゆる者おのが心のままに振舞いおのれらの神の姿を求むれども，その姿は人の世の像にして……主，われ言いたることは，われ言いたるなり。われ言い逃れせず，天地は過ぎ行くとも，わが言は過ぎ行くことなくして成就すべし。わが声にて，言わるるも，僕らの声にて言わるるもみな一つなり。」（教義と聖約1：11,14—16,38）

この警告は140年前に与えられた。そして今，成就されつつある。自己満足や悪人の狡猾さによって目をくらまされていなければ，私たちはこの目でそれを見ることができる。

シオンの塔の見張り人である私たちが，キリストの真の教会員，キリスト教国家の国民として信じている事柄の根本を揺り動かす現今の諸悪に対し，指導者の立場からはっきりと反対を述べることは，義務であり権利である。

その見守る者のひとりとして，私は人類愛をもって謙遜にその義務とチャレンジを受け入れ，恐れずに喜んで務めを果たそうと思う。容易ならぬ現代にあって，私たちのこの勧告が当局に監視される懸念があったり，政府がますます生活に介入して来る時でさえ私たちは批判を恐れるあまりに義務を怠るようであってはならない。

私たちが今経験している危機については，これまでよく警告されてきた。それはとかくの批判を生んだ。言葉を聞きたくない人も私たちの中にいる。それが問題である。私たちの生活や福祉や自由を脅かすものを，私たちのある者は許容してきた。多くの人は気持ちよい自己満足に浸っている時，それを乱されることを望まない。

教会は永遠の真理の上に立っている。私たちは原則において妥協せず，現代の風潮や圧力にも屈せずに標準を守り抜く。教会の真理に対する忠誠は不動である。遠い昔から，不道徳や不正を非難することは神の予言者，神の弟子たちの責任であった。

彼らの多くが迫害されたのも，実にこのゆえであった。それでもなお，民に警告を発することは，塔の見張り人である彼らに神より与えられた務めであった。

この時代は妥協の時代，原則を忘れかけた時代である。しかし妥協からは何の解答も得られない。それは決して正しい答えではない。

近代の教会を見守る者のひとりが，次のような正しい警告を与えている。

「情熱を傾けた献身は，大義やその支持者たちに魂と生命を与えるが，気の抜けた忠誠心はそれらを骨抜きにしてしまう。世の煩いは多分に，熱くも冷たくもない者たち，常に風当たりの一番少ない側に付こうとする者，また小心で真理の側に付くのに四苦八苦する者の戸口に横たわるものである。天上の大会議同様，地上のキリストの教会に中立は存在しない。主の側に付くか付かないかのどちらかである。堅い信仰と一切の妥協を許さない態度が教会と教会員を勝利へと導き，主が示された高い理想を実現させるのである。

地上の最後の征服者は，数の多少を問わず，恐れずためらわず真理に付く男女，『はい』と同時に『いいえ』を言える男女である。彼らが高く揚げる旗にはこう記されている。『悪と妥協をしてはならない。……』

寛容は，世の見解や習慣に服従することではない。私たちはいかに愛する人，力ある人であっても，その人とうまく折り合うために自分の信念を曲げてはならない。社会的な地位を得たり，同調するためであっても，その払う代価は高すぎるであろう。……福音は永遠の真理に支えられている。真理は決して捨てられることはないからである。」（ジョン・A・ウイッツォー *Conference Report*「大会報告」1941年4月，pp. 116，117）

「国家最大の問題は侵食である。それも土壌の侵食ではない。国の道徳の侵食である」とよく言われる。

アメリカ合衆国は自由であったがために偉大であった。神に信頼を置き，神のみ言葉に述べられた自由の原則に基礎を置いたために，国は自由であった。この国は霊感を基に建てられた。私には，この国が予言的な歴史を持つように思える。

1831年，フランスの有名な歴史家アレクシー・ド・トクビルはフランス政府の要請でアメリカ合衆国の刑罰制度を視察に訪れた。彼は合衆国の政治形態と社会制度を綿密に調べ上げた。そして10年たらずの内に「アメリカの民主主義」という4巻にわたる書物を著わし，世界的な名声を得た。その書物の中で彼はアメリカの偉大さをこう述べている。

「私はアメリカの偉大さ，その特性を広い港や豊かな河に探し求めたが，そこにはなかった。肥沃な畑や限りない草原に探し求めたが，そこにもなかった。富める鉱山や大規模な外国貿易に捜し求めたが，そこにもなかった。アメリカの教会へ行き，正義に燃える聖職者の説教を聞く時まで，私はアメリカの特性と力の秘密を見いだせなかった。アメリカは善良であるがために偉大である。もしもアメリカが善を放棄したならば，アメリカの偉大さは止むであろう。」（ジェレルド・L・ニュークィスト編，*Prophets, Principles, and National Survival*「予言者，原則，国家の命運」 p. 60）

私たちは自由を守り，善良であろうとする堅固な意志を持っているであろうか。最も心地良い外見に包まれた誤った思想，誤ったイデオロギーは，静かに，ほとんど意識されずに，私たちの道徳の防壁を突き崩し，私たちの心を捕らえようとする。それは明るい将来の保証やゆりかごから墓場までの至れり尽くせりの保証で私たちを誘う。いろいろな名目にかこつけるが，すべてはひとつの共通のものに，要約される。それは人格と，自分で考えて行動しようとする人の自由をむしばみ，侵食することである。

私たちをだまして安心させようと，いろいろな働きかけがなされるであろう。広く訴える力を持つ提案が今後も出され，多くの人の心を動かす活動が提唱されるであろう。最も危険な活動に興味を引きそうな題目が付けられ，それが公共の福祉，個人の安寧という名目であることもしばしばである。再度繰り返す。惑わされないようにしよう。

自由が抹殺されるのはこうした，直接的な攻撃のほかに怠慢によることもある。

あまりに長い間，あまりに多くのアメリカ人そして自由世界の国民が，自由に対する攻撃，国家を強固ならしめていた根本的な経済的，霊的な伝統や習慣を攻撃する犯罪に対して，物言わぬ共犯者となってきた。

善と自由の道を前進すべく励もうではないか。主の助けと恵みがあれば自由世界の国民は，恐れなく，疑いなく，自信を持って明日に立ち向かうことができる。もし自由と善良さを保つことができれば，人口爆発や食糧不足という偽りの教えを恐れることもない。「地は物満ち足りて余りあり」（教義と聖約104：17）と主は述べておられる。これは確かな約束である。

ある合衆国大統領は何年か前に，次のような言葉でその問題を指摘した。「私たちにはこれ以上の物質的進歩は必要なく，霊的な進歩が必要である。これ以上の知力は必要なく，道徳的な力が必要である。これ以上の知識は必要なく，人格が必要であ

る。これ以上の統治は必要なく，さらに必要なのは文化である。これ以上の法は必要なく私たちに必要なのは信仰である。目に見えるものはこれ以上必要ない。私たちに必要なのは見えないものである。生活のこうした側面こそ，現在私たちが強調しなければならない点である。もしこの側面が強化されるなら，他の面は自然に強くなるであろう。他のすべての基礎となるのがこの側面である。基礎が堅ければ建物は立つであろう。」(「予言者，原則，国家の命運」p. 35)

自由の国民である私たちは，多くの点で大ローマ帝国を崩壊へ導いた道によく似た道を歩んでいる。ローマ滅亡を来らしめた状態を，有名な歴史家たちがこのような言葉で端的に語っている。

「……ローマは，私たちの開拓期とそう違わない歴史をたどって興こされた。そして偉大な2世紀に入り，その後半に頂点を迎え，3世紀目に衰退し崩壊した。しかし罪による衰退は2世紀後半に顕著になってきた。

怠惰な富者，怠惰な貧者の数が急増したと記録されている。後者（怠惰な貧者）は私たちの国の福祉対策とさほど違わない終身失業手当てを与えられた。この手当てが終身制になると，受給者や福祉事業が増えた。そして受給者はかなりの力を持つ政治勢力となった。彼らは憶せずに要求した。政府もためらわずに………ひんぱんになる一方の要求にこたえた。独り善がりの皇帝が彼らに迎合した。今日のアメリカと同様にローマの力となっていた多数の堅実な中産階級に，強大になり続ける官僚政府を支えるための税が次々と課せられた，緊急事態に処するため，収入に付加税が掛けられた。また政府の財政は赤字であった。50セント硬貨に似たデナリ銀貨からは銀の光沢が消え始めた。政府が銀の分量を減らしたため銅の赤褐色が出てきたのである。

そしてグレシャムの法則の通りに，純粋な銀貨はすぐに姿を消し，隠匿（いんとく）された。

ローマ人にとって，兵役は非常に名誉ある義務であった。事実，ローマ軍団に志願するだけで外国人はローマ市民権を得ることができた。しかし富が増すとともに，ローマの若者は，甘く，腐敗した都市生活にとどまる口実を見付けては兵役を拒否し始めた。若者たちは化粧品を使い始め，女性のような髪や衣装を着け，ついには男女の区別も付けにくくなったと歴史に記されている。

教師や学者の中からキニク学派と呼ばれるグループが生まれ，頭髪とひげを伸ばし，薄汚ない服を着，「中産階級の価値観」と呼ぶものを軽蔑して，俗世のものへの無関心を公言した。

道徳は退廃した。郊外や町の通りを安心して歩けなくなった。暴動は日常茶飯事で，町や都市が焼かれることもしばしばあった。

また終始，税の徴収と忍び寄るインフレという二重の病幣に打ちのめされ，まさに瀕死（ひんし）の状態を迎えようとしていた。

こうして結局，中産階級の精力と野望もこうした勢力の前に砕かれてしまったのである。

ローマは滅亡した。

私たちは，今やこのアメリカの2世紀目の終わりに近づいているのである」(1969年，ニューヨーク州アイゼンハワー大学におけるロナルド・リーガン知事の講演より)

1787年エドワード・ギボンは有名な「ローマ帝国の衰退と滅亡」という本を書いた。彼が書いた滅亡の過程は次の通りである。

1. 人間社会の基礎である家族の尊厳と神聖さが危うくなる。

2. 税金や，民衆にただで食べ物や見せ物を提供するための公費の出費が増加の一途をたどる。

3. 娯楽熱，スポーツ熱が年を追うごとに異常に高まり，残酷になる。

4. 真の敵は国民の退廃の中にあるのに，巨大な軍備を整える。

5. 宗教の衰微一信仰は単なる形に成り果て，生活と懸け離れ，警告や指導の力を失う。

現代の私たちと類似してはいないだろうか。ローマが滅びたと，同じ原因で，自由世界諸国が滅びはしないだろうか。

この8年間，私の机には祈りを込めたこの言葉が置いてある。

「おお神よ，投票によってではなくもっと高貴なところから命を受けた人々を，我らに与えたまえ。」

数々の業績を上げてきた今こそ多くの重大な示唆を含む歴史の教訓に目を向けなくてはならない。成功は最大の危険をはらんでいるからである。繁栄の間にも国は崩壊の種をまくことがある。歴史によっても明らかなように，国の内部に混乱がなくて，外部から征服されたという大文明はごくまれである。

歴史の教訓は道標であり，私たちの将来を安全に導いてくれる座標である。

私たちは自由世界の国民として，当面する問題に立ち上がらなくてはならない。これらの道徳，霊的面において基礎となる根本原則が，私たちの過去の業績の土台となっていたことを認識しなくてはならない。今享受している祝福を将来も享受するために，私たちはその根本的な基本原則にもどらなくてはならない。経済も道徳も分離不可能な真理の本体の一部である。ふたつは調和しなくてはならない。私たちはこれら永遠の真理に自分の行動を一致させる必

要がある。

末日聖徒イエス・キリスト教会は，自由世界の根本をなす伝統である大切な霊的，道徳的原則を堅く支持するものである。私たちは，時の初めから文明の底力となってきたこの永遠の真理を下落させたり，脅かしたりする悪の試みに対抗してきた。

私たちはあらゆる正しい手段を講じて家庭と家族を強固にしようとする。気高い両親によって生めよ殖えよ，地に満ちよとの最初の大いなる戒めに従うよう勧め，高度の霊的，道徳的原則を固く守ることにより人格を高めようとする。

末日聖徒イエス・キリスト教会にあっては，純潔はいつまでも決して時代遅れとならない。男性にも女性にも同じひとつの標準がある。その標準とは道徳的な清さである。私たちは，最も基本の単位，すなわち家庭と家族という基礎を攻撃する忌むべき堕胎やその他，神を冒瀆する汚れた行為をすべて憎み，反対する。

それらの不道徳な行ないを続ければかならずや全能者の怒りと裁きが下るであろう。

私たちは物の獲得と物質主義に心を集中して，この繁栄と安全と自由の土台である霊的な基盤を忘れてはいないだろうか。私たちが良くない行ないを悔い改め，犯した罪の大きさを知り，低くへりくだるよう，神は助けて下さる。

大きな安全はひざをかがめる国に存在する。

各地の民が朝な夕なにひざまずき，神に頼って神の導きを求め，受けた恵みを感謝したならば，必要とする主の祝福は確かに得られるのである。

祈りがある国家のさまは原子爆弾よりも大きな脅威を与え，さらに強力である。人力をいかに結集しても，祈りの力には到底かなわない。なぜなら，「祈りは神の力に頼む人間最大の手段」だからである。建国の祖父はこの永遠の真理を受け入れたが，今の私たちはどうであろうか。将来の私たちはどうであろうか。

この簡単な習慣，祈りという強力は実際私たち自身の益となる。何年も前にある人が言った。「何にも勝ってこの国に必要なものは，昔ながらの家族の祈りである。」

その通り，私たちに最も必要なのは年月に耐え抜いた昔ながらの真理に復帰することである。

神の助けがあって，私たちが自由な人間として受けている祝福の源を悟り，自由と，道徳的，霊的標準を脅かすものを見極め，謙遜にしかし勇気ある行動を持って，時の試練に耐え抜いた価値ある恵みを守り抜く必要を悟るように，イエス・キリストのみ名により，へりくだり祈るものである。アーメン。

食うと食わざるとは汝に任す

大管長会第一副管長

N・エルドン・タナー

神が人類に与えた最大の賜のひとつは，選択の自由である。

私たちは人生行路を歩み始めて程なくひとつの別れ道に差し掛かり，2本の道のどちらに進むのかを選択しなければならないという事態に遭遇する。1本は正義の道で，進歩と幸福へ通じるものであり，もう1本は邪悪の道で，退廃と悲痛に通じるものである。ここに，人間として生を受けたものが皆，みずからの選びによって自分の行く末を決定してゆくという永遠の法則が存在するのである。成功も失敗も，平安も不安も，幸福も悲痛も皆，私たちの日々の選択に懸かっている。

聖典によれば，個人に関する最初の，また最も重要な問い掛けは，選択の自由に関するものであった。この世の始まる前，父なる神は天上の大会議において，この地球を組織し人を住まわせるための計画を提示された。

天父の説明によれば，天父の霊の子供たちは地球に降りて行き，骨肉の体を得，あらゆることに試練を受け，戒めをすべて守るかどうか試され，天父のみもとに帰る備えをすることになっていた。

黎明の子ルシフェルは，ひとりも失うことなく強制的に全人類を贖う計画を提示し，それによって名誉を求めた。また，キリストも計画を提示した。この計画は，天父のみこころに従い，すべての人にみずから選択することを認め，その栄光を天父に帰す，というものであった。そしてキリストの計画が受け入れられた。現在，骨肉の体をもってこの地球に来ている人は皆，この大会議においてイエス・キリストに従うことを選んだのである。サタンは，これに背き，天軍の3分の1を動かしてみずからに従う者とした。

モーセの書の中で神は次のように言われた。

「これを以てそのサタンわれに叛きて，われ主なる神のすでに人に与えたる人の自由意志を滅ぼさんとなし，しかもまたわが持てる権能を自らに与うべきことを求めたるにより，われわが生みたる独子の権能によりて彼を投げ落さしめたり。

而して彼はサタンと成れり，実にあらゆる偽りの父なる悪魔となりて人を欺きだまし，以てわが声に聴き従わぬすべての者を欲するままに虜となすなり。」（モーセ4：3，4）

この時，サタンはその追従者とともに私たちの自由意志と正義とを滅ぼそうと画策した。サタンは，エデンの園においてその邪悪な業を開始し，首尾よくアダムとイヴを誘惑し，禁断の実を食べさせることに成功した。

神は次のように言いわたしておられたのである。

「この園のすべての樹よりは汝の意のままに食うことを許さる。

されど善悪を知るの樹よりは汝食うべからず。然はあれども，食うと食わざるとは汝に任す，そは汝に与えられたればなり。」（モーセ3：16，17）

私たちを滅ぼそうとするこうしたサタンの策略の中にあって，救い主は次のように述べておられる。「……これわが業にしてわが栄光，すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」（モーセ1：39）

救い主は，全人類が不死不滅を享受できるよう，その生命を捧げられた。また救い主の福音と過去，現在の予言者の教えを通じて，私たちは人生の目的をはっきりと理解し，善悪の区別の仕方を知っており，また戒めを守る者にはすべて，救いと昇栄が与えられると約束されている。だが，サタンも人類を滅ぼし，次のことを成し遂げようと力を振り絞っ

ていることを忘れてはならない。聖典には，こう記されている。

「サタンは人々を煽て上げかくてかれらを亡びに導かんとす。

而して，かくの如くサタンは一つの奸計を企てて神の業を破らんと考うるなり。……

かくの如く，サタンはこの世をかなたこなたにさまよい歩きて人々の身も霊も亡ぼさんとす。」(教義と聖約10：22，23，27)

サタンの実在とその力と影響の大きさとは，エデンの園での最初の誘惑以来はっきりと分かっている。サタンはカインをそそのかして，弟アベルを殺させた。この殺人は激しい苦悩と悲しみを引き起こした。またモルモン経は，個人にせよ団体にせよ，主の教えに従うことを拒み，サタンの力に屈服した人々がたどった破滅の事例で満ちあふれている。

聖書の中にも，大洪水の物語がある。当時，民の罪悪のため，ノアとノアの家族を除いて，ひとりとして助かった者はいなかった。

さらに，民がサタンに従うことを選んだために起こった，ソドムとゴモラの大都市の悲劇を知っている。歴史を振り返って見ても，ローマ帝国の滅亡の話や，主に背を向けることを選んだ文明，都市，個人の破滅の例は枚挙にいいとまがないほどである。

最近，「アメリカの精神を荒廃させている者はだれか」という意欲的な講演が行なわれたが，その講演で，ジェンキン・ロイド・ジョーンズ氏は，歴史という1本の道の上には滅び去った国家，帝国の骨が散らばっていると語った。彼は，ローマが滅亡したのは城壁が低かったからではなく，ローマ自体が低落していたからであると指摘している。官能と遊興によって，それまで鍛え上げられた人々の性格は骨抜きにされ，ローマは退廃の道をたどるしかなかったのである。(アメリカ新聞論説者協会での講演より)

これらすべての事例を見れば，義の道ではなく悪の道を選んだ時私たちは自由を失い，また私たちを破滅に陥れ，義人に与えられる祝福を奪おうとする人々の奴隷になるということをさらに確信させるためにこれ以上の証拠を挙げる必要はないだろう。日々選択をする時，私たちは，自分たちがまくものを刈り取るということを心に留めておかなければならない。私たちは，悪の種をまきながら祝福の実を刈り取ることはできないのである。ここでひとつの話をお聞かせしたい。

社会的にかなり成功しているひとりの人がおり，彼の前途は洋々たるものであった。しかしある日，実業家たちの昼食会の席上，彼は公の場で酒を飲めば，もっと有名になり，成功もするだろうと考えた。間もなく，彼は飲酒の時間を心待ちにするようになったが彼の仲間は以前ほど顔を見せなくなった。ついに彼はアルコール中毒になり仕事を失い，妻を失い，友を失った。誤った選択をしたため，かつては希望に燃え熱心に目標に向かって努力していたもののすべてを失ってしまったのである。

そのほか，私たちは，エジプトに売られたヨセフやイスラエルの民を捕らわれの身から導き出したモーセの例を知っている。また主から驚くべき予言を示され，ししの穴から穴から連れ出された時，「……その身になんの害をも受けていなかった。これは彼が自分の神を頼みとしていたからである」(ダニエル6：23)と言われたダニエルの例がある。こうした誘惑に屈することのない勇気と，義を選ぶ勇気を持ち，それによって，みずからとその民を破滅から救った人々はほかにも数多くいる。

私たちが適正な選択を行なっていく上で，欠くことのできないものは自己を制御する力である。舟をこぐよりも流される方が，登るよりも下る方がずっと楽である。サタンは，私たちのそこかしこにアルコール，タバコ，麻薬，ポルノグラフィー，虚偽，不正直，そして甘言といった形の誘惑をまき散らし，何としても私たちを悪事に走らせようと絶えず待ち構えているのである。

今日の世界にはびこり，私たちを取り囲む邪悪に，私たちはいかにして対抗することができるであろうか。サタンは，以前にも増して，人々の身も霊も自分の支配下におこうとして躍起になっている。私たちはこうしたサタンの力を打ち砕かなければならない。否，私たちがイエス・キリストの教えに従うことを選び，私たちの力を活発にしかも積極的に発揮するならば，打ち砕くことができる。指導者として，両親，教師として，また隣人として，自由と平和と成功と幸福とを希求し，そして天父のみもとで永遠の生命を享受したいと願う世界各地の善良な人は皆，私たちを脅かし，私たちと子供たちの安寧を危うくしているこれらの諸勢力に対抗するため，模範と教えによって，熱心に働かなければならない。抑制と古い慣習が子供の精神を損っているという声が，今日世界中にあるがこうした主張に翻弄されたり，惑わされたりしてはならない。抑制も何もない自由奔放な社会では，不品行に対して何の訓練もされていない子供たちが育つことになる。こうした考えは誤っているし，私たちは，次のような主の勧告にもっとよく耳を傾けなければならない。

「また，シオンまたは組織せられたるシオンのステーキ部内にて子供を有する両親あらば，その子供八才の時，悔改め，生ける神の子キリスト

の信仰，バプテスマと按手による聖霊の賜などの教義を教えて理解せしめざれば，罪その両親の頭に留るべし。

また両親はその子供たちに祈ることと，主の前に正しく歩むこととを教えざるべからず。」（教義と聖約68：25，28）

子供というものは，善悪の区別の方法を自分で学ぶものではない。両親は子供たちが責任を受ける準備ができているかどうか，また子供たちがみずからひとつを選択し，その結果を正しく評価する能力が身に着いたかどうかを決定しなければならない。子供たちを教える時，私たちには，子供たちを訓練し，子供たちが正しい行ないをしていることを見極める責任がある。もし子供が泥まみれになってきた時は，子供が成長して自分で風呂に入るべきかどうかを決定できるようになるまで待つ必要はまったくない。また病気の時には，自分で薬を服用すべきかどうか決断することができるようになるまで待つ必要もない。同じことは，学校や教会に行く場合にも言えることである。私たちは模範と説得と愛によってその子にとって最善と考えられることを行なわせなければならない。その際，模範によって教えることほど重要なものはない。故J・エドガー・フーバー氏（元FBI長官）は，もし両親が子供たちを連れて日曜学校や教会に規則正しく出席するなら，青少年犯罪の原因を作っている勢力に対し大きな打撃を加えることができるであろう，と言った。

両親はまた，子供たちに幼い内に，自分たちが神の霊の子供であるという輝かしい概念とその事実を教える義務があり，イエス・キリストの教えに従うことを選ぶ道こそが，現世においても，来世の永遠の生活においても成功と幸福を享受できる唯一の道であるということを教える義務がある。またサタンが実在し，あらゆる力を駆使して子供たちを悪に誘い，迷わせ，サタンのとりこにしようとしていることも教えなければならない。そしてサタンに従わなかったならば享受できるはずの至高の幸福と昇栄とを取り去ってしまおうと懸命になっているということも教えなければならない。

今日，それぞれの地域社会で直面している重大問題に対処するためには，私たち自身が，徳と義の模範を示さなければならない。そして私たちの脅威の的となっている道徳問題に関して私たちの立場を明確にする必要がある。私たちは，高い霊的水準を維持していくことができず，動物的本能に支配されるところまで身を落としてしまって，私たちの文明を滅ぼしたり，堕落させたりはしたくない。

ジェンキン・ロイド・ジョーンズ氏の言葉をもう一度引用しよう。彼は，私たちが現在，道徳の退廃，不正に対する義憤の消滅というふたつの危機にひんしている，と指摘している。次いで，私たちの父祖である清教徒に触れて次のように述べている。「彼らは罪に対しておおげさなほどまでに気を配っていたが，それでいて自分たちの物の見方を決して変えようとはしなかった。人は自分の身と心の支配者であって，悪人になるはずがないとしている。より善い人になることができるし，またそうならなければならない。永遠の炎から逃れたいと思うならば，みずからの意志でそうできる，というのが彼らの教えである。」

今日の娯楽というものについては次のように言っている。

「映画が今日ほどに退廃的なことはかつてなかった，ということを否定できる人がいるだろうか。しかし，今日では『退廃的』とは言わない。『リアリズム』という名称で正当化しているのだ。なぜ私たちはばかにされるがままになっているのか。わいせつと言っても，単に芸術の大胆な表現にほかならず，そういった不品行を描くことは，実は社会批判なんですよ，などと言われて，なぜいかにも分かったような顔をして黙ってうなずいているのか。……

私たちは，現在ないがしろにされている寛容の原理を再検討する時期に来ている。この寛容の原理を，自由の原理と混同してはならない。……

故意に悪事を犯せば，旧来通り，何らごまかしのきかない罪に問われる，という概念が残っているということを今こそ示す時である。自己鍛練ということを，いま再び，今日の風潮としなければならない時である。

それと同時に，こういった悪い風潮は皆，人類を滅ぼそうとするサタンの計略であるということを認識する時でもある。書店の店頭にテレビに，ラジオに，あるいは娯楽の場に，ポルノやわいせつ物が見られ，未熟な青少年がアルコール類を容易に入手できるような状態を作り，それに伴う飲酒運転，交通事故，家庭の崩壊などの諸悪を助長するような人々がいるなら，また，神の戒めを無視してはばからないような法律の横行に脅かされているのなら，一致団結して声を上げ，私たち自身と地域社会を悪の侵略から守ることは，個人としての私たちの義務であり，責任である。私たちの地域社会で，道徳と子供たちの生命そのものまでをも脅かしている不道徳と邪悪に対抗することは，私たちにとってきわめて重要なことである。

自分の権利を主張し，不義な目的を遂げるために，いわゆる自由意志を行使したがっている人々は，自由

意志の意味を悪用し，他の人々の権利をも奪っているのである。私たちの直面している問題の多くは，故意に，利己的で非道な利益を図っている人々によって引き起こされているが，一方，他の問題の原因を作っている騒々しい，迷える人々も少数ながらいる。私たちの方でも同じように，私たちの環境の保全のために，声を大にしてしっかりと努力しなければならない。こうした状況でこそ，私たちは家族の強い結束を享受できるのであり，その結果こそが国の強さなのである。世界各地でまるで申し合わせたかのように家族の絆を破滅しようという動きが見られるが，私たちはこれに断固として反対しなければならない。

今日の世界に顕著な，戦争，死，災害，貧困，疫病などの恐ろしい状況について熟慮する時，なぜ神は私たちがかように騒然たる状況に悩むのを黙って見ておられるのかという質問がたびたび発せられるが，人自身にその責任があるということを忘れてはならない。罪のない者が邪悪な者に苦しめられる状態が多く見受けられるが，今日国内に広くはびこっているあらゆる闘争，論争，邪悪の原因は，人がイエス・キリストの教えに従って生活することを受け入れず，サタンに従うことを選んだことにあるのである。私たちが与えられた神の御計画に従って進歩するためには，あらゆることに反対のものがなければならないということは時の初めから教えられてきた。再び聖典の言葉に目を向けてみよう。

「それは，すべての物事には必ずその反対のものがなければならぬからである。……もしも物事にその反対のものがないならば，正義も不正も聖潔も憐むべき様も善も悪も生ずることができぬ。……

それであるから，主なる神は随意に行う自由を人間に許したもうた。しかし人間はもしもあれに誘われこれに誘われなければ，随意に選び行うことはできないのである。

それであるから，人はみな現世に於て自由であり，およそ人間のためになるものは何でも与えられる。そして万人に為したもうメシヤの大いなる賢い仲裁によって自由と永遠の生命とを選ぶか，または悪魔は万人が自分のようにみじめになることを求めているから，その束縛と力とに由って定まる束縛と死とを選ぶか，これは全く人間の自由である。」（IIニーファイ2：11，16，27）

人類は悲しみを経験するために創造されたのではない。「人類が現世に在るのは幸福を得んため」（IIニーファイ2：25）だからである。神は，私たちが選択する時に助けと導きを与え，サタンの力に対抗し，人々が求めている喜びと幸福を与えるために，御子イエス・キリストを通じて完全な福音を有する神の教会，すなわち神の王国をこの末の世に地上に再び打ち建てられることをよしとされたのである。そして神のみ名によって働く権能である神権を回復され，私たちを導くために，神の代弁者となって働く予言者を召された。私は，数百万の聖徒とともに，私たちを想像を絶するほどの幸福と平安へ導いてくれる唯ひとつの真実の道は福音しかないことを証する。しかもこの福音はそれを受け入れ，戒めを守るすべての人に永遠の生命をもたらすものである。

確かに日々の生活において，私たちは，良い実を刈り取るか，悪い実を刈り取るか，救いを取るか，滅びを取るか，あるいは私たちの天父とともに住むことのできる永遠の生命を取るか，天父のみもとから追い出されて絶望の淵をさ迷うか，といった決断に迫られている。さらに永遠の父なる神とその御子イエス・キリストの存在を信ずるかどうか，またその教えを受け入れ，戒めを守るかどうか，ということを決断するのである。

ハロルド・B・リー大管長が確かに主の代弁者であり，今日この地上における神の子供たちの指導者であるという確固たる証を持って，彼を神の予言者として受け入れ，彼の声に耳を傾けるかどうか，彼に従っていくかどうか，私たちは決断を下すのである。さらに，喜んで信仰箇条に従って生活し，正直で，真実で，貞潔で，優しく，高潔で，誉れ高く，同胞との取り引きに公正で，しかも同胞に良き隣人として愛を示すかどうかについても決断を下さなければならない。もし神の国と神の義とを求めることを第一に選ぶならば，私たちの益になるものはすべて添えて与えられることを知るに違いない。

予言者の声に耳を傾け，その言葉に従うなら，私たちは決して道を踏み外すことはない。また，そうすることによってのみ私たちは真理と義の道に導かれ，同胞の愛と尊敬と信頼とを勝ち得て，ついには，天の御父のみもとで永遠の生命を享受することができるのである。もしそれができなければ，私たちは，このあらゆる偉大な祝福を拒み，失うことになるのである。

「然はあれども，食うと食わざるとは汝に任す」

私たちが賢明に選ぶことができるよう，イエス・キリストのみ名によりへりくだり祈るものである。アーメン。

灰色の羽を持つ黄色のカナリヤ

十二使徒評議員会会員

トーマス・S・モンソン

23年ほど前，私は若くしてソルトレーク・シティーの大きなワード部の監督に召された。私は召しの重さに圧倒され責任に恐れを感じた。自分の力の無さが私をへりくだらせた。しかし天父は私に教えや導きを与えずに暗やみや沈黙の中でさまよわせたりはされなかった。主は主の方法で教訓を与え，私に教えられた。

ある晩遅く電話のベルが鳴った。「モンソン監督，こちらは病院です。あなたの教会のキャサリン・マックィーさんが今亡くなられました。こちらの記録には親族がおられないことになっていますが，死亡時の連絡者にあなたのお名前が載っています。すぐ病院に来ていただけますか。」

病院に着くと，一枚の封筒を渡された。開けると，キャサリン・マックィー姉妹の質素なアパートの鍵が入っていた。73歳の，子供のいないやもめの彼女は，ぜいたく品をほとんど持たず，必需品がわずかにあるだけだった。彼女は人生のたそがれ時に末日聖徒イエス・キリスト教会に入ったのだった。無口で控え目だったせいか彼女の生活についてはほとんど知られていなかった。

その晩私は，アパートの地下にある彼女の部屋に入り，明かりをつけた。中はきちんと片付けられていた。すぐに目に入ったのは，キャサリン・マックィー姉妹の自筆の細かに書かれた手紙だった。小さなテーブルに表を上にして置いてあった手紙の文面は，こうだった。

「モンソン監督，私はもう病院から帰れないと思います。たんすの引き出しに少額ですが保険の証書が入っていますので，それを葬儀費用にして下さい。家具は近所の方々に差し上げて下さい。

台所には大事なカナリヤが3羽います。2羽はきれいな黄色で姿も見事です。それぞれのかごの上に差し上げる方の名前を書いておきました。3番目のかごとは「ビリー」です。私のお気に入りです。ビリーはせっかくの黄色い羽に灰色が混じって少々みすぼらしく見えます。あなたのお宅でビリーを飼って下さいませんか。きれいではないですが鳴き声は一番です。」

それからの数日というもの，私はキャサリン・マックィー姉妹について多くのことを知った。彼女は大勢困っている人を助け，通りの先の方に住んでいる体の不自由な人を毎日のように励まし，元気付けて上げていた。彼女は接する人たちの生活に光をともしていたのである。キャサリン・マックィー姉妹は，大事にしていた灰色の羽のカナリヤ，ビリーとよく似ていた。彼女は美しさに恵まれず，身のこなしは洗練されず子供もなかった。しかし彼女の歌う歌は人々に喜んで重荷を担う力を与えたのである。彼女はこの歌の歌詞そのままに生きたのだった。

行け寂しき者や悲しむもの救え
親切のわざ撒け　世を輝かせ
世をさらに輝かせ
(讃美歌240番)

世には灰色の羽をしたカナリヤが多くいる。悲しむべきは，その内のごく少数しか，歌うことを知らないことである。おそらくは良い手本の確かな鳴き声が耳に響かないか心に留まらないのであろう。

若者の中には，自分が何者であり，どのようになれるか，あるいはどのようになりたいかさえ知らない人々がいる。彼らは恐れを抱くが，何を恐れているかを知らない。怒りはするが何を怒っているのかを知らない。拒否されるが，その理由を知らない。彼らの望みといえば，地位，名声を持つ人間になることである。

またある人は年齢に負け，世の煩いに悩み，疑惑に心を奪われ，自分の能力より低い生活をする。

私たちはだれでも自分の劣った行ないを弁解仕勝ちである。不運や姿の悪さいわゆるハンディキャップのせいにする。自分を正当化の犠牲にして，心につぶやくのである。「私は弱いからだ」，これ以上に良いものなんて，私にはできるはずがないんだ。」と。またある人たちは自分の力量以上のことを夢見て，ねたみと落胆の声を上げる。

人は，人生の務めが他人に抜きんでることではなく自分自身に抜きんでることにあるということを，理解できないのだろうか。自分の記録を更新すること，また一日一日，進歩を重ねてゆくこと，自分ができること考えていたよりももっと立派に試練を耐え抜くこと，今まで以上のものを人に与えること，今までよりももっと頑張ってより完成された仕事をすること――これが自分に抜きんでることの本当の意味である。

立派に生きるために，私たちは困難に勇気をもって，落胆にほほえみを，勝利に謙遜をもって処する能力を伸ばさなくてはならない。あなたは「どうしたらそのようにできるのか」と尋ねるだろう。その答えは「自分が本当は何者であるかを正しく認識することによって」である。私たちは「神のかたちにかたどって造られた」生ける神の息子，娘である。この真理を考えてみなさい。私たちがこの確信を得たならば，強さと力を，神の戒めに従う強さとサタンの誘惑に抗する力を新たに深く感じないではいられない。

実に私たちは，人格が顔や姿の美しさの二の次にされ勝ちな世の中に住んでいる。地方や国や国際間の美人コンテストが記事になり，ニュースになる。ミスアメリカ，ミスワールド，ミスユニバースに大勢の人々が賛美の目を向ける。運動選手にも崇拝者がいる。冬季スポーツ，世界オリンピック，国際試合は感動した群衆の熱烈な賞賛を生む。これが人の常である。

ところで神よりの啓示の言葉はどうであろうか。いにしえの時代から予言者サムエルの忠告が聞こえてくる。「……わたしが見るところは人とは異なる。人は外の顔かたちを見，主は心を見る」。（サムエル上16：7）

王の王，主の主には見せ掛けや偽善は通用しない。主は律法学者やパリサイ人の虚栄と浅薄な生き方，見せ掛けと偽善を非難された。主は彼らを「白く塗った墓に似ている。外側は美しく見えるが，内側は死人の骨や，あらゆる不潔なものでいっぱいである」と言われた。（マタイ23：27）

彼らは美しい黄色のカナリヤのように，外側はきれいだが，彼らの心からは，美しい歌は聞こえてこない。

それと同様のことをアメリカ大陸で神の予言者が述べている。「ごらん，あなたたちは金銭と自分の財産と自分の華やかな衣と自分の教会の華やかな飾り物とを，貧しい人々，病気の人々および悩んでいる人々よりも愛するのである。……なぜキリストの御名を受けることを恥とするか。……なぜあなたたちは生命のない物を自分の身に飾りながら，飢えている者，貧しい者，はだかでいる者，病んでいる者，また悩んでいる者たちがあなたたちの前を通り過ぎて行くとき憐まないのか。」（モルモン8：37―39）

主は貧しい者，しいたげられた者，悩む者，苦しむ者の中に進んで行かれた。絶望した者に望みを，弱い者に強さを，捕らわれた者に自由をもたらされた。主は来るべきより良い生活，永遠の生命についてさえ教えられた。その知識は，「わたしについてきなさい」という聖なる命令を受けた人々を常に導いたのであった。ペテロがその知識に導かれた。パウロが動かされた。この知識は私たちの将来を形作る。私たちは正しくまた真心から世の贖い主に従おうという決心ができるだろうか。贖い主の助けがあれば，反抗的な少年も従順な青年になり，わがままな少女も古い自分を捨てて新たな一歩を踏み出すことができる。事実イエス・キリストの福音は人生を変えることができるのである。

使徒パウロはコリント人への手紙の中で教えた。「神は……強い者をはずかしめるために，この世の弱い者を選び……」。（Ⅰコリント1：27）

救い主が信仰の人を捜された時，ユダヤ人の会堂によく見られる独善的な人を選びはしなかった。それよりもカペナウムの漁師の中から人を選ばれたのである。

主は岸辺で教えておられた時，そこに寄せてある2そうの舟に目を留められた。主はその1そうに乗り，持ち主に頼んで群衆に押されないように舟を水の上に出した。さらに教えを説き続けてから，主はシモンに「沖へこぎ出し，網をおろして漁をしてみなさい」と言われた。

シモンは答えた。「『先生，わたしたちは夜通し働きましたが，何も取れませんでした。しかし，お言葉ですから，網をおろしてみましょう。』そしてそのとおりにしたところ，おびただしい魚の群れが入って，網が破れそうになった。……これを見てシモン・ペテロは，イエスのひざもとにひれ伏して言った，『主よ，わたしから離れてください。わたしは罪深い者です。』」（ルカ5：4―6，8）

その返事はこうであった。「わたしについてきなさい。あなたがたを，

人間をとる漁師にしてあげよう。」（マタイ4：19）漁師シモンは自分の召しを受けた。疑い深く，不信仰で無学な，また経験も浅く，激しい気性のシモンは，主の道が楽な道ではないこと，苦しみとは無縁の道ではないことも知らなかった。シモンはやがて叱責と非難の言葉を聞く。「信仰の薄い者よ」，（マタイ14：31）「サタンよ，引きさがれ，わたしの邪魔をする者だ。」（マタイ16：23）しかし主は彼に問われた。「『…あなたがたはわたしをだれと言うか』。シモン・ペテロが答えて言った。『あなたこそ生ける神の子キリストです』。」（マタイ16：15,16）

疑い深いシモンは，信仰の使徒ペテロとなった。灰色の羽のカナリヤは救い主の全幅の信頼と変わらぬ愛を得る者となった。

救い主が熱心で力ある宣教師を選ぼうとされた時，主はその人を賛成者ではなく，反対者の中から捜し出された。タルソのサウロは教会を滅ぼそうとし，主の弟子を脅迫，殺害しようと息巻いていた。しかしそれはダマスコへ行く途中の経験で変わった。主はサウロについて言われた。「……あの人は，異邦人たち，王たち，またイスラエルの子らにも，わたしの名を伝える器として，わたしが選んだ者である。わたしの名のために彼がどんなに苦しまなければならないかを，彼に知らせよう。」（使徒9：15,16）

迫害者サウロは改宗者パウロとなった。灰色の羽のカナリヤと同じく，パウロも汚点があった。彼自身が言っている。「そこで，高慢にならないように，わたしの肉体に一つのとげが与えられた。それは，高慢にならないように，わたしを打つサタンの使なのである。このことについて，わたしは彼を離れ去らせて下さるようにと，三度も主に祈った。ところが，主が言われた，『わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる。……』」（IIコリント12：7−9）

パウロもペテロも真理のために持てる力を使い，命をとられた。贖い主は不完全な人間を選び，完全への道を教えられた。主は昔，そのようにされた。そして今もそうされる。灰色の羽のカナリヤを使って。

主は御自身に仕える者としてあなたがたや私をこの地で召され，私たちの働きを求めてそれぞれの職務に任じられた。全力を尽くしてその責任を果さなければならない。良心の葛藤はない。私たちが苦闘する時，失敗をした時，祈り願おうではないか。「導きたまえ，おお，導きたまえ，大いなる我らが造物主，やみより抜け出て今ひとたび奮起すべく。」（ヤンカーズ高校「ファイトソング」より）

言われた仕事が無意味で不必要でつまらなく見えるかもしれない。私たちは疑いという誘惑を受けるかもしれない。

「父よ，きょう我いずこの地に働かん」
我が愛は生気に満ち，よどみなくあふれいず。
父，小さき所を指して言えり。
「我がために，かの地の手入れを」
我すぐと答えぬ「ああ，かの地にはあらず。かの地にはあらず
ああ，我いかに良き働きをなせども
顧みるものひとりとしてなからん。
我がために，かの小さきにはあらぬ所を」
父言えり。猛けき言葉にてはあらず。
愛もて我に言えり。
「おお，小さき者よ，なんじ，心に尋ねみよ。
なんじの働き，かの人々のためなるか，我がためなるかを。
ナザレは小さき所。
ガリラヤも，またしかり」
——ミード・マックガイアー

私はきょう，こう祈りたい。真実心から，かのガリラヤ人に従い，そのみ名をたたえ，持てる愛を反映した生活をするように。天父が私たちに御子を与えられたことと，イエス・キリストが私たちのために御自身の命を捧げられたことを忘れないように。イエス・キリストが生きておられることを証し，私たちがその聖なる賜にふさわしい者となるようにイエス・キリストのみ名により祈るものである。アーメン。

教会を支える力

十二使徒評議員会会員

ゴードン・B・ヒンクレー

偉大なみ業でともに働く兄弟姉妹の皆さん，このタバナクルに入る度に，私の心をよぎるものがある。それは，この建物を主の家として建てた開拓時代の父祖の献身と犠牲である。彼らは，この建物を礼拝の家，真理を教える家として捧げ，奉献した。この壇上に立つ私たちには，信仰の言葉を語るという大きな期待が置かれている。私はこのため，へりくだり聖きみたまの導きを求めている。

私はこれまで世界の各地で数多くの素晴らしい人々とお合いする機会に恵まれてきた。忘れることのできない印象を受けた人も少なくない。その中に，合衆国で高度な訓練を受けるためにアジアから派遣された，ある聡明な海軍将校がいる。彼は合衆国海軍の何人かの同僚を見ていたく感動し，彼らの宗教について話を聞くことにした。彼はキリスト教徒ではなかったが，興味をそそられた。世の救い主，ベツレヘムで生まれ，全人類のために命を捧げたイエス。永遠の父なる神と復活した主が少年ジョセフ・スミスに現われたもうたこと。現代の予言者。主の福音。みたまが彼の心を動かし，彼はバプテスマを受けた。

私は，祖国に帰る直前の彼に合った。改宗の話を聞いた私はこう言った。「故国の人々はキリスト教徒ではありませんね。あなたのお国ではキリスト教徒は困難な時代を経てきたと聞いています。キリスト教徒として，特にモルモン教徒としてお国へ帰られたら，どうなりますか。」

彼の顔は一瞬暗くなった。「家族はがっかりするでしょう。勘当されるかも知れません。私がこの世にいないものと考えるかも知れません。自分の仕事や将来についても，あらゆる機会から見離されることになると思います。」

私はこう尋ねた。「福音のためにそれほどの代価を支払うのですか。」

涙のにじんだ黒い瞳を光らせると，彼はこう言った。「福音は真実です。違いますか。」

私はこうした愚問を心に恥じながら答えた。「その通りです。確かに真実です。」

「それなら，ほかのことを気にする必要はないわけですね」という言葉が返ってきた。

私はこの質問を皆さんにも投げ掛けたい。「福音は真実ではないですか。それなら，ほかのことを気にする必要はないわけですね。」

昨日は教会の統計が発表され，教会の成長振りに感動と満足を覚えている。私はこの発表を聞きながら，先日放映されたある有名なテレビ番組のことを思い出した。合衆国宗教協議会のディーン・M・ケリー牧師がジョー・ガラジオラとの対談で，ある著名な大宗教団体の会員数が減少していること，またある団体は急増していることに触れ，退潮の理由をこう語っていた。「これらの宗教団体は寛大になり過ぎたからです。どういった人でも会員になるのを認め，どのような人でも会員としてとどまることを許しています。信仰や貢献について何も厳しい要求をしないのです。」彼はまた一方で，時間と労力と財力の犠牲を求める宗教は目覚ましい発展を遂げていることも指適していた。

またこう語った。「わが国で100万以上の会員を擁する教会の中で最も急速な成長を遂げているのは，ソルトレーク・シティーに本部を置くモルモン教会，末日聖徒です。この教会は毎年5パーセントの伸びを示しています。これは驚異的数字です。」

心ある人ならばこの言葉に注意を向けるはずである。献身と犠牲と訓練を要求する宗教は，誠実な会員を

得，他の人々の関心と尊敬を受ける。

宗教とは常にそうしたものである。救い主はニコデモに対して語られた時，決してあいまいな言葉で言われたのではなかった。「だれでも，水と霊から生れなければ，神の国にはいることはできない。」（ヨハネ3：5）例外は存在しないのである。律法に従うことにおいてあいまいさは許されていない。主が言われたすべての事柄にこのことが言える。

パウロはイエス・キリストの福音で求められている事柄を示すに当たって，言い逃れの余地を残したり，あいまいな言葉を使ったりはしなかった。それは今日でも生きている。主御自身が「門は狭く，その道は細い」と言っておられる。人の行動の永遠の結果に関与する組織，機構は何らかの指針を打ち出し，それに従わなければならない。ある程度の訓練，特に自己修養を求めない組織は，人々の忠誠を長期にわたって得ることはできない。生活から安楽さが消えるかも知れない。本当の犠牲を支払わなければならないかも知れない。しかし，こうした要求の中から人格と強さと高潔さが培われるのである。

放縦の中から偉大なものは生まれない。高潔，誠実，強さという徳は，神より求められたことに従って自己を鍛える人が味わう苦闘の中で育まれるものである。

けれどももうひとつ大切なことがある。それがなければこの自己修養も形ばかりのものに終わってしまう。訓練のための訓練は抑制でしかない。これはイエス・キリストの福音の精神に反する。恐れのために行なっても，得るものはないからである。

しかしながら，個人の確信に基づくものは積極的であり，驚くばかりに人を築き，高め，強める。宗教について言うと，人は真理に対して強い確信を抱いた時にはじめて，自己を訓練する。教会が要求するからでなく，神が生きておられることを心の中に知識として持っているからである。自分が永遠無限の可能性を持つ神の子供であること，奉仕には喜びがあり，大きな目的のために働くことによって心が満されることを知っているからである。

ケリー牧師が指摘したこの教会の著しい成長は，教会が会員に多くを要求したためではなく，会員が心の中に，この業が真に神のみ業であること，義に基づく奉仕の中に幸福と平安と満足があることを確信したために実現したのである。

私たちはきょう，数々の由緒ある建物に囲まれて立つこのタバナクルに集まっている。しかし，教会の強さと力は，これらの建物や世界中の無数の礼拝堂の中にあるのでもなければ，教会の大学や病院の中にあるものでもない。素晴らしい施設は沢山あるが，それらは真の強さの脇役でしかない。昨日リー大管長が指摘されたように，この教会の強さは，教会員の心の中，この業が真実であるという個人の証と確信の中にある。この証を得ると，教会の要求する事柄はもはや重荷ではなく，手ごたえのある課題となる。救い主は言われた。「わたしのくびきは負いやすく，わたしの荷は軽い……。」（マタイ11：30）

イエス・キリストの教会の献身的な会員にとって教会の責任というくびきや教会で指導するという重荷は，問題ではなくなり，むしろ進歩の機会となる。

先日，合衆国東部で開かれたある大会に出席して，何カ月か前に教会に加わった技師の体験談をうかがった。宣教師の訪問を受けた彼の妻は二人を家に招き入れた。妻は宣教師のメッセージに積極的だったが，夫は自分の意志とは逆に逃げ出したい気持ちに駆られていた。ある晩のこと，妻はバプマスを受けたいという気持ちを夫に打ち明けた。夫は怒りが込み上げてきた。それがどういうことを意味するのか妻は知っているのだろうか。時間が取られるし，什分の一を納めなければならない。友達も捨てることになる。タバコもやめなければならない。彼は上着を引っ掛けると，ドアをバタンと閉めて外へ出て行った。歩きながら彼は，妻を，宣教師を，そして宣教師にレッスンを許した自分をののしった。やがて歩き疲れたころ，怒りも収まってきた。そして何かしら祈りたい気持ちに駆られた。彼は歩きながら祈った。疑問に答えて下さるよう神に懇願した。すると，はっきりと心に訴えるものを感じた。声が聞こえたように感じた「それは正しい。」

「それは正しい。それは正しい」彼は何度も繰り返し言った。心が平安になった。家に着くまでに，あれほど激怒した制限や要求は進歩の機会と変わっていた。ドアを開けると，そこに見たのはひざまずいて祈りを捧げる妻の姿だった。

大会でこの経験を語る彼は，次に家庭が喜びにあふれる所となったと述べている。什分の一は問題ではなかった。すべてを与えたもう神と財産を分かち合うことで十分だった。奉仕の時間も問題ではなかった。一週の計画をもう少し慎重に行なえばよかった。責任も問題ではなかった。むしろ成長と人生に対する新しい見方が生まれた。こうして，物質界の事実のみを扱ってきたこの聡明な技師は，自分の生活に起きた奇跡に目を潤ませながら証を述べたのである。

このような体験を持つ人が世界に何十万といる。才能や教育に恵まれた人，実業家など世の中のことだけを考えていた人が，今や心の中に静かな証の火を燃やしているのである。

彼らは神が生きておられること，イエスがキリストであること，この業が神のみ業であり，機会をとらえるすべての人に祝福をもたらすべく地上に回復されたことを証する。

主は言われた。「見よ，わたしは戸の外に立って，たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら，わたしはその中にはいって彼と食を共にし，彼もまたわたしと食を共にするであろう。」（黙示3：20）

イエスは宮の中でユダヤ人に対して言われた。「わたしの教はわたし自身の教ではなく，わたしをつかわされたかたの教である。

神のみこころを行おうと思う者であれば，だれでも，わたしの語っているこの教が神からのものか，それとも，わたし自身から出たものか，わかるであろう。」（ヨハネ7：16―17）

これがこの業の素晴らしい点である。すなわち，だれでも自分で知ることができるのである。真理を教えず証をしない教師や説教師，聖職者に頼る必要はない。いにしえにヨブが述べたように，「人のうちには霊があり，全能者の霊感が人に悟りを与える」のである。（欽定訳ヨブ32：8）

人は聖霊の賜によって，朝日が昇るように確かに，それが真実であることを自分で知ることができるのである。そしてこれを知った人は，人生の意義と目的，隣人に対する大きな責任，家族と神に対する責任に気付き，みずからを修めようとする。

主は言われた。「われに就きて学び，わが言を聴き，わが『みたま』の柔和なる道を歩め，さらば，汝われに在りて安きを得ん。」（教義と聖約19：23）

これは「すべての悟りをもたらす平安」である。この平安は頭で理解して得るものではなく，みたまによりもたらされるものだからである。

そして，「神につける事柄は神のみたまによって悟る」のである。

ドイツのベアクタスガーデンで開かれた当教会の米軍人大会に出席した時，高等教育を修めたある女性の話を聞いたことがある。彼女は陸軍少佐と医学博士の肩書きを持ち，専門分野で広く名を知られた人物だった。彼女はこう語った。

「私が世の中で何よりも望んだことは神に仕えることでした。そして，神を見いだそうと努力しましたが，無為に終わっていました。ところが，神が私を見付けて下さったのです。1969年9月のある土曜日の午後のこと，私はカリフォルニア州バークレーの実家におりました。呼び鈴が鳴ってドアを開けると，ワイシャツとネクタイ，それに背広で身を固めた二人の青年が立っていました。髪もきちんと手入れした青年でした。好感をもった私はこう言いました。『何のセールスか知りませんが，買わせていただきますわ。』すると，青年の一人が言いました。『私たちはセールスマンではありません。私たちは末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師で，お話をしにまいりました。』そこで私は二人を家に招き入れました。宣教師たちは宗教について話をして下さいました。

これが証を得ることになったきっかけです。私は末日聖徒イエス・キリスト教会の会員となる特権と栄誉に，言葉に尽くせない感謝の気持ちを抱いています。この喜ばしい福音が私の心にもたらしてくれた喜びと平安は，この世の天国とも言うべきものです。このみ業に対する私の証は，私の生活で一番大切なものであり，天父からの贈り物です。私はこの贈り物を永遠に感謝し続けると思います。」

いにしえの時代の人々にもたらされたこの知識は今日も同様にもたらされる。アジアから来た海軍将校の場合も，東部の技師の場合も，この医学博士の場合もそうである。この会場にも同様の体験を持つ方が大勢おられると思う。全世界には何百万といる。今私の話を聞いている方で，これらのことについて聖霊の証を求めている方があれば，私は皆さんがそれを得られるように私の証を差し上げたいと思う。かつてペテロが得たと同じように，今日もその証を受けることができるのである。

「イエスがピリポ・カイザリアの地方に行かれたとき，弟子たちに尋ねて言われた，……『あなたがたはわたしをだれと言うか』。

シモン・ペテロが答えて言った，『あなたこそ，生ける神の子キリストです』。

すると，イエスは彼にむかって言われた，『バルヨナ・シモン，あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは，血肉ではなく，天にいますわたしの父である。

そこで，わたしもあなたに言う。あなたはペテロである。そして，わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。黄泉の力もそれに打ち勝つことはない』。」（マタイ16：13―18）

この啓示の岩は，神につける事柄の知識の源である。永遠の真理を証するのは清きみたまの証であり，その証を受け入れ，養い，その証に従って生きる人に対しては，地獄の門も力を及ぼすことができない。

私はこれらの神聖な事柄を厳粛に証し，真理を熱心に求めるすべての人にこの知識が与えられるよう祝福する。これらを真理の源である主イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

汝らの子供たちを見よ

十二使徒評議員会会員

ボイド・K・パッカー

この罪のない子供たちが歌うのを聞いて，心を動かされない人がおられたでしょうか。私は今，ニーファイ第三書の17章にある記録のことを考えています。この時主は，子供たちを連れて来るようにとお命じになりました。人々は，連れて来た子供たちを地面に座らせました。また主は群衆に，子供たちを皆連れて来るまで道を開けておくように，と言われました。そして，群衆にひざまずくように命じられると，御自分も子供たちの間でひざまずき，祈りを捧げられました。

次のように記録されています。

「『私たちが見たり聞いたりしたイエスの御父に対するお祈りは，人の目がまだ見ず，耳がまだ聞かないほど偉大で驚嘆すべきものである。

これを口で言いあらわせる者もなく，筆で書きあらわせる者もなく，また人間の心で想像できぬほど偉大で驚嘆すべきものである。……』。」

この祈りを捧げられた後に，イエスは涙を流された，と書いてあります。そして「イエスはそれからかれらの小さい子供たちを一人一人近寄せてこれに祝福を与え，かれらのために御父に祈りたもうた。

そしてこれをしてしまうとまた涙を流したもうた。

イエスが群衆に『汝らの子供たちを見よ』と仰せになった……」（IIIニーファイ17：16,17,21―23）とあります。

小さな子供たちは，本当にたやすく私の心の中に入り込んで来ます。私はそれを認めざるを得ません。でも別にそれを恥ずかしいこととは思っていません。私の家にも，まだ4歳にならない子供がひとりいます。その子がほんのひと言「パパ」と言うだけで，私の心には火がともされるのです。私はきょうのこの責任を果たすに当たってこの子からいささかの助けを受けています。

「………子供たちは神から賜わった嗣業」（詩篇127：3）です。そこできょう，私は小さな子供たちのために話したいと思っています。歌を歌ってくれた子供たちが，今大勢ここにいます。また他にも本当に沢山の子供たちが，テレビやラジオを通じてこの話を聞いています。私が大人向けの話をしないからといって，きげんを損ねる方はおられないとは思いますが……。

さあ，子供たち。私はこれからとても大切なことをお話したいと思っています。決して忘れないで欲しいことです。また，小さい内に知っておく必要のあることです。では，よく聞いていて下さい。

あなたたちは，自分がこの地上に来る前にも生きていたことを知っていますか。お父さんとお母さんの所に生まれる前，あなたたちは霊の世界に住んでいたのです。

これはとても大切なことです。これが分かると，他のとても分かりにくいことも，沢山分かるようになります。世の中の多くの人々は，このことを知りません。でも本当のことです。

あなたたちは，この世に生まれた時にはじめて造られたのではありません。ただ，あなたたちの骨や肉の体だけが造られたのです。あなたたちはどこか別の所からやって来ました。そう，天のお父様のもとから来たのですね。丁度，地上で住む時間になったので，送られて来たのです。

あなたたちがこの地上に来たのにはふたつの理由があります。第1の理由は，この骨や肉の体を受けることです。これは，とても大きな恵みなのです。私たちの天のお父様は，あなたたちが生まれる前にいろいろ準備をして下さいました。そして，あなたたちのお父さんとお母さんが

とても愛し合っていましたから，あなたたちの体がお母さんのおなかの中に入り，大きくなり始めたのです。それからある時，確かな時は分かりませんが，あなたたちの霊が体の中に入り込みました。このようにして，あなたたちはこの世での命を受けたのです。でも，小さな赤ちゃんとして生まれた時がはじめでないことはお話しましたね。

あなたたちの体を動かしているのは心です。そして性格が作られています。あなたたちは，この世で生活している間に，いろいろな経験を通して，いつも正しいことをすることができるようになります。そして，このことは，いつまでもとても大切なことなのです。

さて皆さん，今私の手があなたたちの霊だとしましょう。手は生きていますからちゃんと自分で動くことができますね。では，この手袋があなたたちの体だとしましょう。手袋は自分では動けません。ですから霊が体の中に入るとそのとき体は，跳んだり跳ねたり，息を吸ったり吐いたりすることができるのです。こうしてあなたたちは，霊と体がひとつになって，この地上で生活を始めたのです。

でも神様は，私たちがいつまでも，この地上に住むような計画をお立てになりませんでした。ただ，この世に生活している間だけです。皆さん，皆さんは今，その生活を始めたばかりですね。でも，あなたたちのおじいさんやおばあさん，そしてひいおじいさんやひいおばあさんは，そろそろ，この地上での生活を終わろうとしています。あなたたちのおじいさんやおばあさんも，少し前までは，あなたたちと同じように小さな子供だったのですよ。でも，そのおじいさんもおばあさんも，いつかこの世からいなくなってしまいます。また，あなたたちにも同じことが起こります。

人はいつの日か，年を取ったり，病気にかかったり，事故に遭ったりすると，霊と体が別々になります。この時のことを，人が死んだ，と言いますね。死ぬことは別々になることです。でもこれは皆，ひとつの計画で決められた通り起こっていることなのです。

さっき私の手をあなたたちの霊，そして手袋を体ということにしましたね。覚えていますか。あなたたちが生きている間，あなたたちの体の中に入っている霊は，体に命令して，働かせたり，動かしたりしています。

でも私が手袋を外すと，そう，手袋はあなたたちの体でしたね。その手袋は，霊から離れてしまいます。もう働くことはできません。手袋は倒れて，そのままです。でも，霊の方はまだ生きています。

「神から生まれた霊は，不死不滅（決して死ぬことがない，ということです）のものである。肉体が死んでも，霊は死ぬことがない。」大管長会，（*Improvement Era*「インプルーブメント・エラ」1912年３月，p. 463）

死ぬとはどうなることなのか，よく覚えていて下さい。大切なことですから。さっきお話したように，死ぬとは別々になることです。

あなたたちの体のどこかから，目を使って外を見るものがあるでしょう。またあなたたちは体の中の何かから命令を受けて，考えたり，にこにこしたり，遊んだりしています。新しいことを知ったり，生きていることもそうです。こういう働きをしているのがあなたたちの霊なのです。霊は永遠のものです。決して死ぬことはありません。

あなたたちは，だれかが，例えばおばあさんが死んだ時のことを覚えていますか，おとうさんとおかあさんは，きっとこんな風にお話してくれたことでしょう。「ひつぎの中にあるのは，おばあちゃんの体だけなんだよ。おばあちゃんは，今はもう天のお父様の所へ行って，そこでずっと待っているんだよ。」きっと，こんなお話を聞いたことでしょう。

死ぬとは，別々になることです。そして，計画に従って起こります。でもその計画が死ぬことで終わりになるとしたら，ちょっとひどすぎますね。せっかく地上に来て体をいただいたのに，それがなくなってしまうのですから。

私たちは，天のお父様のお陰で，この地上に来ることができました。そして，天のお父様は，私たちが天のお父様の所へ帰る方法も備えて下さいました。天のお父様は私たちのお父様ですし，私たちのことを愛して下さっているからです。私たちは天のお父様から遠く離れて，この地上で生活しています。そして，今は天のお父様にお会いできません。でも，だからと言って天のお父様が私たちのことをお忘れになったのではありません。

あなたたちのお兄さんが伝道に出ていく時のことを思い出してみて下さい。また，お姉さんが家を離れて大学で勉強していた時のことを思い出してみて下さい。その時，お父さんとお母さんは，どうして愛することをやめなかったか分かりますか。ときどき，お父さんとお母さんがあなたたちよりも，お兄さんやお姉さんの方をずっと愛しているのではないかしら，などと思ったのではありませんか。そうでなくとも，お父さんたちは，お兄さんやお姉さんのことをよく話していたことでしょうし，ときには心配することもあったことでしょう。遠く離れていてもお父さんたちは，いろいろ気を遣ってあげ

たり，手紙を書いたりして，お兄さんやお姉さんを励ましたことと思います。このように遠く離れれば離れるほど愛は強くなるものです。

皆さん，天のお父様は，私たちには助けが必要になることを知っていらっしゃいました。ですからお父様は計画の中で，この地上に来て私たちを助けて下さる方法を準備して下さったのです。

この方が，神様の御子，イエス・キリストでした。イエス様も，私たちと同じ霊の子供です。でも，イエス様はこの地上での神様のただひとりの御子でもあります。私はイエス様についてお話する時，とても敬虔な気持ちになります。とにかく，イエス様のお陰で，私たちは死んでもまた生き返ることができるようになりました。そしてすべての物も，完全な姿形にもどることができるようになりました。

あなたたちは今，日曜学校や初等協会や家庭の夕べで，イエス様について勉強しています。イエス様のことをいつも忘れず，またイエス様がどんなことをなさったのか，それを一生懸命勉強して下さい。とても大切なことですから。

イエス様は，私たちのこの体が一度死んでも，また生き返れるようにして下さいました。イエス様の贖いによって，私たちの霊と体は，またひとつになることができます。イエス様のお陰で，私たちは復活できるのです。イエス様がいらっしゃったので，私たちは復活できます。そう，霊と体がまた元のように一緒になるのですね。これが復活というものです。復活はイエス様からの贈り物です。だれでも皆，この贈り物をいただくことができます。そういうわけで，私たちは，イエス様のことを救い主とか贖い主とかとお呼びするのです。

あなたたちがこの地上に来た２番目の理由は，試されるためです。それは丁度，学校へ行って，何が良いことで何が悪いことかを勉強するようなものです。私たちは，正しいことと間違っていることをちゃんと区別することができます。これは，とても大切なことです。

また，悪い人がいて，何とかしてあなたたちに悪いことをさせようとしています。このことは覚えていて下さい。大切なことですから。私たちが悪いことをしてしまうと，そのために霊と体が別々になってしまったのと同じようなことが起こります。あなたたちはまだ小さいですけれど，このことは忘れないで下さい。いつも考えておかなければならないことです。悪いことをした時は霊と体が別々になるのではありません。そうではなくて，私たちの天のお父様から離れてしまうのです。

もし，私たちが天のお父様から離れたままでいて，天のお父様の所へもどることができなかったら，私たちの霊まで死んだようになってしまいます。これは決して良いことではありませんね。このようにお父様から離れることは，死ぬようなものです。このようになることを，霊の死と言います。

あなたたちは今一生懸命読み方の勉強をしていることでしょう。もう，聖典を読めるようになりましたか。聖書，もちろんモルモン経，教義と聖約，高価なる真珠がありますね。この４冊の本を読むと，どんなに小さな子供でも正しいことが分かると書いてあります。予言者はこのように言いました。

「神は天使によって男ばかりでなく女にも御言葉を伝えたまい，そればかりでなく，またたびたび賢人や博学の人の知識も及ばない御言葉を子供に与えたもう。」（アルマ32：23）

聖典を読むと，天のお父様の所へ帰るためには，私たちの霊はきれいでなければならないことが分かります。

「……どんな不潔なものも神の王国に入ることができないのである。……」（Ⅰニーファイ15：34）

天のお父様の所に帰るには，ふたつの大切なことが起こらなければなりません。そのひとつは，私たちが死んだ後，何とかして私たちの体を元にもどすことです。これは，私たちが復活したいと思っているからですね。第２はいつも自分をきれいにしておくことです。霊はきれいでなければいけません。霊がきれいなら，私たちは，天のお父様から離れなくてもいいのです。また，私たちが死んで，この世の生活を終える時に，天のお父様のいらっしゃるところへ帰ることができるのです。

あなたたちは一度死んでも，かならず生き返ります。私たちはそれを信じています。あなたたちはかならず復活します。キリスト様が私たちのために働いて下さったからです。また，一度死んだあなたたちの霊――そう，霊が死ぬということは，私たちの天のお父様のところから離れることでしたね――その死んだ霊が生き返るかどうかは，あなたたちがどれだけ良い子でいるかで決まります。

イエス・キリストは地上にいらっしゃった時，福音を教え，教会をお建てになりました。もし私たちが福音の教えを守って生活していたら，私たちの霊はいつまでもきれいです。でも私たちは，教えを守らない時があるかも知れません。その時のために，もう一度きれいになる方法があります。これが，悔い改めということです。

イエス様の教会に入るためには，主イエス・キリストを信じる信仰を

持たなければなりません。そして，悔い改めなければなりませんし，バプテスマを受けなければなりません。

バプテスマは，水のお墓の中に埋められるようなものです。水から出ると生まれ変わったようになります。私たちはきれいになるのです。その時，私たちは今までの罪を赦してもらいます。罪が無くなるということですね。それから一生懸命教えを守れば，ずっと罪を赦していただいたままでいることができます。

その後，私たちは，頭の上に手が按かれて，イエス様の教会の会員として確認されます。イエス様の教会は，末日聖徒イエス・キリスト教会です。その時に，私たちは聖霊の賜を受けます。聖霊は私たちを導いて下さいます。ちょうど，私たちの天の家から手紙を受けるようなものです。この手紙を読むと私たちはどっちへ行ったらよいか分かります。

主は，教会を導くために，予言者と使徒を召されました。主は，御自分で選ばれた予言者に，いつも御自分の気持ちをお伝えになります。

ひとつの出来事をお話しましょう。私があなたたちと同じ年のころの出来事です。6歳か7歳だったと思います。私は，すぐ上のお兄さんと一緒にステーキ部大会に歩いて行ったことがあります。今でも，ユタ州のブリガム市にその建物があります。そして，その二階席の真下へ行くと，「あの時，あの辺に座っていたんだなあ」と思い出すことができます。

どんな出来事があったと思いますか。その大会で，ひとりの男の人が話をしました。それは，ジョージ・アルバート・スミス長老です。スミス長老は，その時十二使徒でした。スミス長老が，どんな話をしたか覚えていません。知恵の言葉か，悔い改めか，バプテスマか何かについてだったと思いますが，よく分かりません。でも，スミス長老が話していた時，私の心の中に，とても強い気持ちが起こりました。それは今そこに立っているスミス長老は，主のお使いなんだ，という気持ちです。私は，その時からずっと今まで，その時の証や気持ちを忘れたことがありません。私はその時心の中に，スミス長老は主イエス・キリストの使徒だということがはっきり分かったのです。

皆さん，私は今ここで十二使徒のひとりとして話しています。でも，ここにいらっしゃる使徒の方たちも，やっぱりイエス様の使徒です。私はその気持ちを絶対に忘れません。私たち十二使徒は，よく集まって会を開きます。その時，丸い輪を作って座っている使徒の人たちを見るとまた，この人たちは主イエス・キリストの使徒なんだという気持ちになります。本当にこの人たちは，イエス様について特別の証をする人たちなのです。

あなたたちは，これからいろいろ試されることでしょう。それも，今までのどんな人たちよりも沢山試されることでしょう。キリストを信じない人たちにも沢山会うでしょう。悪い人の仲間もいるでしょうし，悪いことを教える人もいることでしょう。時には，悪いことをしてみたいという気持ちになることもあるでしょう。また，何か間違ったことをする時もあるでしょう。私たちはだれでも，何かしら間違ったことをすることがあると思います。イエス様が教えられた通りに生活しているかどうか，いろいろ考える時もあるでしょう。でも,何か試されている時,がっかりした時，恥ずかしい時，悲しい時，そんな時には，イエス様のことを思い出して，イエス様の名前によって，天のお父様に祈って下さい。

イエス様は地上に来られなかった，と言う人があるかもしれません。でもイエス様は本当に来られたのです。イエス様は神様の御子ではない，と言う人がいるかも知れません。でも，イエス様は本当に神様の御子なのです。また，地上にはイエス様の使いはいない，と言う人がいるかもしれません。でも，本当にイエス様の使いはいるのです。それは，イエス様が生きていらっしゃるからです。私は，イエス様が生きていらっしゃることを知っています。イエス様の教会には，イエス様のことを証できる人が沢山います。私もイエス様のことを証できます。覚えていて欲しいことをもう一度お話しましょう。これは小さい内に知っておいて欲しいことです。

あなたたち一人一人が，天のお父様の子供だ，ということを忘れないで下さい。そのように私たちは子供ですから，天のお父様のことを「お父様」と言うのです。

あなたたちは，この地上に来る前にも，生きていました。あなたたちがこの地上に来たのは，骨や肉の体をいただき，そしていろいろ試されるためです。

この世での生活が終わると，あなたたちの霊と体は別々になります。これが，死ぬことです。

私たちのお父様は，御子イエス・キリストを送って下さいました。そしてイエス様は，私たちを贖って下さったのです。イエス様のお陰で，私たちは復活するのです。

人はもうひとつ，別の意味で死ぬことがあります。このことも考えないといけません。これは，私たちがお父様のみ前から離れてしまうことです。でも，私たちがバプテスマを受けて，福音の教えを守って生活すれば，私たちは贖われて，天のお父様と離れ離れにならなくてもよくなります。

私たちの天のお父様は，私たちを愛していらっしゃいます。そして，私たちには主が付いています。救い主が付いているのです。

私は教会のことを神様に感謝しています。この教会では，あなたたちのようなかわいい子供たちを，何よりも大切な宝のように思っているからです。また，救い主のことも神様に感謝しています。救い主は，「幼な子らをそのままにしておきなさい。私のところに来るのをとめてはならない」と言われました。

あなたたちは，ついさっき，このような歌を歌ってくれました。

世にイエスさまあるときの
　お話を読むとき
私もそのときいたなら
　よかったと思うよ
イエスさまの手が私のあたまに
　おかれたら
『子供よ，われに来よ』という
　やさしい声を聞くでしょう。
（子供の歌B―69)

かわいい兄弟，姉妹の皆さん。私は神様が生きていらっしゃることを知っています。イエス様の手があなたたちの頭の上におかれた時の気持ちが少し分かります。，私は，あなたたちをイエス様のお仕事のために召すことがありますから。私は，はっきり証できます。そして，その証をあなたたちに分けてあげたいと思っています。特別に大切な証だからです。イエス様はキリストです。イエス様は私たちを愛していらっしゃいます。私はあなたたち，かわいい子供たちのために心からお祈りしています。かわいい子供たちを見守って下さいますように，そして子供たちに恵みを与えて下さいますように。イエス・キリストの名前によってお話しました。アーメン

（訳者注：この説教は，子供たちのために行なったものである。子供たちがこの記事を読むことは無理であろうが，両親がパッカー長老に代わって，子供たちにこの説教を読んで聞かせるなら，子供たちにとってそれほど難しいものとはならないであろう。）

彼は道を備えるために遣わされた

十二使徒評議員会会員

リグランド・リチャーズ

10年近くの歳月を伝道地で過ごした私にとって，ただ今ピネガー兄弟が運び込んでくれた伝道地のスピリットは何よりの喜びである。伝道活動は，私にとって世の中でもっと大切なものである。現在もなお，私は伝道地に赴任する宣教師たちと話す特権をほとんど毎週のように得ている。私はきょう，聖典の活用法と価値についてお話したい。

しばし考えていただきたい。もし聖典がなかったら，私たちは天父について，独り子を与えたもうほどに私たちに注いでおられる天父の愛，あるいは御子の贖いの犠牲について，知ることができるだろうか。また，主がどういう目的でこの地球を創造されたのか，私たちはなぜここにおり，これからどこへ行くのか，どうすればそこへ行けるかについて知ることができるだろうか。私は，福音の回復によってもたらされた知識により，聖典を一層よく理解できることに感謝している。

さて，私たちは，すでに実現し聖典に記録された過去に基づいて生活しているだけにとどまらない。イザヤが語っているように，主は「終りの事を初めから告げ」られた。(イザヤ46：10) 私たちが理解の仕方を知ってさえいれば，聖典の中にあらゆる事柄が記されている。主は言われる。「草は枯れ，花はしぼむ。しかし，われわれの神の言葉はとこしえに変ることはない。」(イザヤ40：8)

主が予言者マラキに語った言葉が思い出される。「見よ，わたしはわが使者をつかわす。彼はわたしの前に道を備える。またあなたがたが求める所の主は，たちまちその宮に来る。……その来る日には，だれが耐え得よう。……彼は金をふきわける者の火のようであり，布さらしの灰汁のようである。」(マラキ3：1－2)

これが主の最初の降臨を指しているのではないことは明らかである。主は突然主の宮に来られたのではなかった。主の降臨の時，だれもが耐えることができた。主は金をふきわける者の火のように，布さらしの灰汁のように，清めはしなかった。だが，主が末日に来られると，邪悪な者たちは叫び声を上げ，「人々は山にむかって，われわれの上に倒れかかれと言い，また丘にむかって，われわれにおおいかぶされと言い出すであろう」(ルカ23：30) と言われている。

もし，主が降臨に先立って道を備える使者を送られたとしたら，その使者は予言者だったはずである。アモスの言葉を覚えておいでだと思う。「まことに主なる神はそのしもべである予言者にその隠れた事を示さないでは，何事をもなされない。」(アモス3：7)

時の絶頂の時代に，救い主の道を備えるためにバプテスマのヨハネが遣わされた時，救い主はイスラエルの中でバプテスマのヨハネより偉大な予言者はいないと証された。(ルカ7：28参照)

さて，最初の降臨の時にされたように，救い主の再降臨に備えるためこの末日に使者を遣わされることが本当だとしたら，その使者が世に宣言した事柄を知ることが私たちにとって重要になる。私は，主が「終りの事を初めから告げ」られたことは，素晴らしいことだと考えている。ここで，現代に関する予言を少しばかり引用したいと思う。

ヨハネがパトモス島に追放された時，主の使いは次のように言った。「ここに上ってきなさい。そうしたら，これから後に起るべきことを，見せてあげよう。」(黙示4：1) これは救い主が十字架上で処刑されてから30年後のことである。ヨハネは，サタンに力が与えられて聖徒たち

(イエスに従う者)に戦いをいどんでこれに勝ち，さらに，すべての部族，国語の民，国民を支配する権威を与えられ(黙示13：7参照)，本来の教会からまったく違背していく姿を見た。

しかし，主はその状態を放置してはおかれなかった。この天使はヨハネに，「地に住む者，すなわち，あらゆる国民，部族，国語，民族に宣べ伝えるために，永遠の福音〔人を救い得る唯一の福音〕を」携えたもうひとりのみ使いが中空を飛ぶのを見せた(黙示14：6)。これは人の福音ではない。回復されたイエス・キリストの福音である。

地に住む者，すなわち，あらゆる国民，部族，国語の民，民族に宣べ伝えるために，永遠の福音を携えた天使が来るのを，もし私たちが待ち望まないとしたら，この聖句が聖書の中に記されていても，意味があるだろうか。この聖句の対象からはずれる人はひとりとしていない。そのため，主はみ使いを送って，このみ業が地上に回復される準備をさせられたのである。

ヨハネはみ使いが永遠の福音を携えて来るのを見ただけでなく，人々に，「天と地と海と水の源とを造られた」(黙示14：7)生けるまことの神を礼拝するよう呼び掛けている。ここでジョセフ・スミスが御父と御子にまみえたあの驚くべき示現のことを考えてみていただきたい。ジョセフが見たのは栄光に輝く御方であり，体も部分も感情もない三方が一体となった方ではなかった。私たちの知る限りにおいて，当時生ける真の神を礼拝する教会は存在しなかった。したがって，天使は永遠の福音を携えて来るに当たって，天と地と海と水の源とを造られた生ける真の神を礼拝するよう人々に教える必要があった。

当時のキリスト教会はいずこも，体も部分も感情もない神を信じていた。つまり，神は目がないので見ることができず，耳がないので聞くことができず，声がないので話すことができなかったのである。どうしてこのような神を信じることができるだろうか。

モーセはこの状態が世に広がることを知っていた。なぜならば，モーセはイスラエルの子らを約束の地へ導いて行く時，彼らは約束の地に長くとどまらず，国々に散乱し，「人が手で作った，見ることも，聞くことも，食べることも，かぐこともない木や石の神々に仕えるであろう」(申命4：28)と言っているからである。

そして，モーセは，もしイスラエルが末日に(私たちは今その末日に住んでいる)神を探し求めるならば，かならず神を見いだす(申命4：29参照)と言った。予言者ジョセフが神を探し求め，そして見いだしたのは御存じの通りである。

もし実現しないのならば，聖書に記録をとどめる必要があるだろうか。そして聖書の記録通りのことが現代に起きたと宣言したら，人々はそのことをもっと知りたいと思うはずである。使徒たちが主の再臨のしるしと世の終わりについて尋ねた時，主は戦争と疫病，地震とききんが起こると答えられた。そのほかにも多くのことが記録されている。そして主は次のように言われた。「そしてこの御国の福音は，すべての民に対してあかしをするために，全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである。」(マタイ24：14)

もし主の再臨を待ち望むなら，私たちは主が宣べられたと同じ福音を探さなければならない。真理を証するために全世界へ出て行って語るモルモンの長老のメッセージこそがその福音である。私は宣教師に向かって次のように言う。「もしあなたがたが，人々にこのメッセージを理解させ，信じる信仰を持たせることができたら，それは100万ドルを出しても買えないほどの価値あることをしたのです。」

私は数年前にオレゴン州で伝道した宣教師の報告を聞いたことがある。この宣教師は改宗者で，こぶしを握りしめて壇上に立つと，これらの尊い真理を世の人々に分かち合う伝道経験は100万ドルでも売り渡すことはできないと言った。

私は彼の後ろに座っていて自分に問うてみた。私は，オランダでの最初の伝道と100万ドルを引き換えるだろうか。そして，私を媒介として教会に加わった家族を数えてみた。彼らはシオンに移住して，息子や娘を伝道に送っている。もし，100万ドルで彼らを教会から売り渡すとしたら，私は一体どのような人間だろうか。この世のすべてのお金を目の前に積まれても，私にはとてもできない。教会のこの偉大な宣教師プログラムから受ける喜びと幸福に比肩し得るようなものはないのである。

さて，ほかの予言を考えてみよう。主はイザヤを通して次のように言っておられる。

「この民は口をもってわたしに近づき，くちびるをもってわたしを敬うけれども，その心はわたしから遠く離れ，彼らのわたしをかしこみ恐れるのは，そらで覚えた人の戒めによるのである。

それゆえ，見よ，わたしはこの民に，再び驚くべきわざを行う，それは不思議な驚くべきわざである。彼らのうちの賢い人の知恵は滅び，さとい人の知識は隠される。」(イザヤ29：13－14)

福音の回復に当たって非常に多くの驚くべきことが起こった。一例と

してモルモン経を考えてみよう。これを読み，研究するならば，だれにもまねすることのできない奇跡であることが分かるであろう。この書物に対するもっとも激しい批判は，それを読んだことのない人から出ている。この書物には，出版された当時の知識ではいかなる人も記し得なかった驚くべき事柄で満ち満ちている。

モルモン経によると，リーハイは荒野にいた時，息子のヨセフに対して，モーセの場合と同じように，主がエジプトに売られたヨセフの子孫から末日に一人の予言者を立てると約束しておられると述べた。また，その予言者はヨセフ（ジョセフ）と呼ばれ，主の言葉を世に知らせると言った。（IIニーファイ3：6，9，15参照）これが予言者ジョセフ・スミスであったことは明らかである。ジョセフは，モルモン経，教義と聖約，高価なる真珠，その他多くの書物を世にもたらした。

そして主は言われた。「……ただわが言葉を宣べ伝うるのみならず，またすでに汝の子孫の中に伝わりたるわが言葉をかれらに証明する能力をもこれに与えん。」（IIニーファイ3：11）つまり，彼は人々に聖書を正しく理解させるはずであった。

そして次のように記されている。「〔彼は〕わが民を救うものである。」（IIニーファイ3：15）なぜだろうか。救いにかかわる福音の儀式を執行するために，回復された聖なる神権を受けたからである。主は次のように付け加えておられる。「わが目の前に於て彼を大いなる者となさん。」（IIニーファイ3：8）世の人々がこの神権時代の予言者に対してどう考えようと，主は彼が偉大な者になることを知っておられた。主は，ヨセフに対して彼の子孫から現代に予言者を起こすと約束して以来，3,000年の間，彼をとどめおかれたからである。

私は主が次の言葉を言われた意味を知った経験があるので，それを紹介したい。「…ただわが言葉を宣べ伝うるのみならず，またすでに汝の子孫の中に伝わりたるわが言葉をかれらに証明する能力をもこれに与えん。」

私はオランダで最初の伝道に召されていた時，ハーグで実業家の聖書研究会で講演をするように依頼を受けた。彼らは聖書研究会を毎週開いていた。その日は市内でも有名な家具商の家に集まった。出席者は家具商の娘を除いて全員男性だった。

私が依頼を受けたテーマは，死者を含む全人類の救いだった。1時間半の時間が与えられた。彼らは私たちが別の聖書を持っていると考えているようであったので，私は聖句を挙げ，彼らに自分の聖書から読んでもらうことにした。そして私は聖書を閉じて机の上に置き，腕を組んで彼らの意見を待った。

最初に意見を言ったのは，その家の娘であった。「お父さん，一体どうしたの。いつもの聖書研究会ではあんなによく話すのに，今夜はひとことも話さないじゃない。」

父親は頭を振ってこう言った。「何も言うことがないのだよ。この人は私たちが聞いたこともないことを，私たちの聖書から教えて下さった。」

主がお立てになった予言者はただ主のみ言葉を広めるだけでなく，すでに伝えられている主のみ言葉を証明するということの意味がこれである。

私はまたジョージア州クイットマンでも結婚の誓約と家族の結び付きの永遠性について話したことがある。集会が終わって戸口に立っていると，一人の紳士が来て，聖職に就いていると告げた。私はその集会で，主の教会がその原則に対してどういう立場をとっているかに触れ，結婚の誓約と家族の結び付きの永遠性を信じている教会はひとつとしてないと話したため，彼にこう言った。「あなたの教会について何か間違ったことを申し上げましたか。」

「いいえ，リチャーズさん，おっしゃる通りです。私たちは，私たちの教会がすべてのことを教えていると信じているわけではありません。」

「あなたも信じていらっしゃらないわけですね」と私は言った。

「ではお帰りになったら，真理をお教えになって下さい。教会に集っている人々はあなたからでしたら受け入れるでしょうが，モルモンの長老から聞いて受け入れる準備はできていないと思いますから。」

彼は，「またお目に懸かりましょう」と言った。彼はそれだけしか言わなかった。

それから4ヵ月ほどして，再びその地を訪れた。かの牧師が教会の前に立っていて，私たちは握手を交わした。「この前の話についてあなたがどのように考えられたか，期待してきたんですよ」と私は言った。

すると，「リチャーズさん，私はあれ以来ずっと考えてきました。私はあなたがおっしゃったことを全部信じています。きょうはその続きを伺いたくて参りました。」

教会の説教壇に座を占めるこの人は，私の言ったことをすべて信じていながら，彼の教会に集まる人々にそれを話すことができないのである。

もうひとつの体験をお話したい。数年前に，カリフォルニア州，オレゴン州，ワシントン州，アイダホ州，ユタ州，ネバタ州を含む合衆国西岸地方の二大教会がこのソルトレークで大会を開いた。その教会の指導者からマッケイ大管長のもとに手紙が寄せられ，教会幹部のひとりを大会

に派遣し，午前の部で2時間モルモンの教えについて話し，その後ともに昼食を取り，午後の部で1時間半質問を受けて欲しいとの要請があった。そしてこの割り当てが私に来た。私はその責任を喜んでお受けした。私は宣教師に，私たちのメッセージの話し方を知っていれば，だれとも言い争う必要はないと常日ごろ言っている。

何人かの牧師が早い便で帰る必要が出たため，昼食の時刻を30分間ずらし，私に午前中の2時間半をくれた。私は福音の回復，回復と改革の違いについて説明した。そして，話を終えるまでに，これらの教会の牧師と指導者から受けた質問はたったひとつしかなかった。

それは大会の責任者からの質問である。「リチャーズさん，あなたは感情，感覚，体を持ちたもう神を信じているとおっしゃいましたね。」

「その通りです。」

「あなたがたは，神に妻がいると信じているそうですが，そのことを説明して下さいませんか。」

彼は私が答えに窮するだろうと思っていたようである。そこで私は少しおどけたようにこう答えた。「この世の中で妻なしに息子をもうけられる人がいたらお目に懸かりたいもの」です。

全員がくすくす笑い始めた。そしてそれ以上は何の質問も出なかった。

私は話を終えるに当たって，私が教会の管理監督だった頃，建築プログラムの責任をもっていたが，その時の経験をお話した。私たちはロサンゼルス神殿の設計図を作成していた。ある日私たちは設計図を持って大管長会のもとへ行った。けれども電気や下水などの工事についてはまだ何も記していなかった。設計図は，縦76センチ横122センチの大きさで84ページに及ぶものだった。皆さんも一度は設計図を目にしたことがあると思う。さて私はその集会でこう言った。「これだけの設計図があれば，世界中のどんな建物でも作ることができると思われるかも知れません。しかし，この設計図に合った建物はロサンゼルスのモルモンの神殿しかないのです。もちろん，セメントや材木，電気配線，配管その他を施した建物は沢山あります。けれどもその設計図に合った建物はほかにないのです。」

ついで私は聖書をかざして，こう言った。「ここに主の設計図があります。イザヤは，主が初めから終わりの事を告げたと言っています。そのすべてがここに記されています。さて，この主の設計図を世のあらゆる教会に当てはめようとしても，これに合う教会はひとつしかありません。それが末日聖徒イエス・キリスト教会です。どうしてそうなるのか御説明しましょう。」

フレデリック・ウィリアム・ファラーはその著書「キリストの生涯」で，新約聖書の中に見逃すことのできない聖句がふたつあると言っている。ひとつはヨハネ伝の10章16節で，イエスは次のように述べておられる。「わたしにはまた，この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも，わたしの声に聞き従うであろう。そして，ついに一つの群れ，ひとりの羊飼となるであろう。」

私は次のように言った。「この聖句がなぜ聖書の中にあるのか御存じの方はいらっしゃいますか。この理由を知っている教会を御存じの方はいらっしゃいますか。私たちは完全に知っています。」そして私は，とこしえの丘にある新しい地がヨセフに約束されたこと，モーセはこの地を説明するのに4度も尊いという語を用いていることを話した。(申命33：13－16参照)

そして次のように言った。「このヨセフの地がどこにあるか御存じですか。」私はそれはアメリカ大陸であること，イエスがここアメリカの民を訪れて，弟子たちに語った他の羊とは彼らのことであると言われたことを説明した。(IIIニーファイ15：21参照）主は御父から，弟子たちにほかの羊がだれであるかを言うようにとは命じられていなかった。ただほかの羊をもっていることだけを言えばよかった。(IIIニーファイ15：15－17参照)

彼らが理解できなかったもうひとつの聖句は，パウロが語ったものである。「そうでないとすれば，死者のためにバプテスマを受ける人々は，なぜそれをするのだろうか。もし死者が全くよみがえらないとすれば，なぜ人々が死者のためにバプテスマを受けるのか。」(Iコリント15：29)私は次のように言った。「この聖句がなぜ聖書の中にあるのか御存じの方はいらっしゃいますか。この理由を知っている教会を御存じの方はいらっしゃいますか。」こうして彼らにその教義を説明した。

私はペンテコステの日の翌日，キリストを死に追いやった人々に向かってペテロが言った言葉を引用した。「あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエスを，神がつかわして下さるためである。このイエスは，神が聖なる預言者たちの口をとおして，昔から預言しておられた万物更新の時まで，天にとどめておかれねばならなかった。」(使徒3：20－21)

それは改革ではなく，更新である。そして私は次のように言った。「2時間半ここでお話してきたことはこのことです。改革ではなくて更新の時が来なければ，ペテロや予言者たちが約束した救い主の降臨は実現しな

いのです。」

話を終えると，責任者が次のように言った。「リチャーズさん，私の全生涯を通じてもっとも興味深い経験のひとつでした。」それこそイザヤが語ったことの真意である。「………彼らのうちの賢い人の知恵は滅び，さとい人の知識は隠される。」(イザヤ29：14)

心から主を愛する人でこの教会に加わらない人はいないことを証したい。ただ真理を探しさえすればよいのである。教会には神の永遠の真理がある。主は御自身の降臨に備えるため使者を遣わされた。願わくは神の祝福があって，私たち全員が宣教師となることができるように。皆さんを祝福し，イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

神権の召しを全力を尽くして遂行する

大管長会第二副管長

マリオン・G・ロムニー

神権を持つ愛する兄弟の皆様，

私は皆様方の一人一人を励まし，その力があるならば，皆様方が神権の召しを全力を尽して遂行するよう霊感を与えたいと願うものである。

神権に聖任された時に，私たちは，その召しを全力で遂行すると主に誓約した。同時に主は，私たちがそれを行なうならば「『みたま』により聖められてその肉体再新さる」さらに「……アブラハムの子孫となり，また教会員にして王国の民となり神の選民となる」，そして「わが父のもてるすべて」が与えられると私たちに誓約された。（教義と聖約84：33－38参照）

自分の立てた誓約を破り，「ことごとくにこれに違背する者」への罰は，「この世に於ても未来の世に於ても罪の赦しを受くることなかるべし」ということである。（教義と聖約84：41）

さらに主は，その場に集まった兄弟たちに次の誓約を啓示された。

「われ今汝らに一つの誡命を与えて汝ら自らを警めしむ。すなわち汝ら永遠の生命なる言に勉めて心を留めよ。そは，汝ら神の口より出るすべての言によりて生くべければなり。」（教義と聖約84：43，44）

私たちが神権の召しを全力を尽くして遂行するには，少なくとも3つのことが必要である。

ひとつは実行の動機となる望みを持つこと。もうひとつは永遠の生命の言葉を調べ，深く考えること。

第3番目は祈ることである。

聖典は，人はその望みに応じて主から与えられると繰り返し教えている。アルマは述べた。

「……人が死を願うのにも生を願うのにも神はこれに応じたまい，人の心が救いを求めるのも亡びを求めるのも神はこれを許したもうと言うことを知っている……。」（アルマ29：4）

イエスはこの原則に従って行動された。ヨハネは羊皮紙の記録の中でこう書いている。

「かくて主，われに言いたもう。わが愛する者ヨハネよ，汝何を願うか。…而してわれ神に申して曰く，主よ，われに死に打ち勝つ力を与えたまえ。かくてわれ生きて人々を汝に導かん，と。主，われに言いたもう。誠にまことにわれ汝に告ぐ，汝このことをわれに願いしにより汝をしてわれわが栄光を以て来るまでこの世に留まり，もろもろの国民，もろもろの血族，もろもろの国語の民および世の人々の前に予言せしむ，と。」（教義と聖約7：1－3）

この最後の神権時代の幕開けに，主は予言者の父に言われた。「汝らもし神に仕えんと望むならば，汝ら神の業に召さるるなり。」（教義と聖約4：3）

またその2カ月後に，ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリにこう語っておられる。「……汝らわれに願うが如く，正に汝らに成るべし。」（教義と聖約6：8）

望みの大切なことは，教義と聖約18章の次の聖句に，劇的に述べられている。

「さて見よ，汝らのほかにまたわが福音を異邦人とユダヤ人との両方に宣べ伝うるために召さるる者あり。然り，すなわち十二人あり。而してこの『十二人』はすなわちわが弟子たるべき者にして，彼らはわが名をその身に引き受けん。誠に，この『十二人』こそ誠心誠意わが名をその身に引き受けんと願う者たちなり。彼らもし誠心誠意わが名をその身に引き受けんと願わば，……召さるるなり。

さて見よ，オリヴァ・カウドリおよびデビッド・ホイットマーよ。われ汝らに命ず。わが語れることを為

さんと願う『十二人』を尋ね出すべし。而して，彼らはその願いと行為とによりて知らされん。」（教義と聖約18：26－28，37，38）

これらの人の持った願いは，役職に召されたいという願いではなかった。それは「誠心誠意」キリストのみ名をわが身に引き受けたいという願いであった。

私は以前伝道部で，落胆した宣教師に何とかしてやる気を起こさせようとしたことがある。私は最後に彼に聞いた。「あなたは何か望んでいることがありますか。」彼は答えた。「はい，ロムニー兄弟，私は使徒になりたいと願っています。」

だれであろうとも，教会の特定の役職への任命を求めるべきではない。その望みは正しい望みではない。それは利己的な野心である。私たちはたとえ何であっても，自分に与えられる神権の召しを全力を尽くして果たそうという望みを持つべきである。福音に従い，召された仕事を何であろうと勤勉に果たすことで，その望みを立証するべきである。教会の特定の役職を保持することが，人を救うのでは決してない。人の救いは，自分の召しに伴う義務をいかによく果たしたかによるのである。予言者ジョセフ・スミスは述べている。

「福音を説く神の僕らの資格を顧みれば，われわれは祭司にふさわしい者さえほとんどいないことを発見する。もし祭司がその義務，その召し，その職務を理解して，聖霊により説くならば，その喜びは大管長会の一員になったがごとく大いなるものであり，彼の奉仕は教師や執事同様，教会全体にとって必要なのである。」（「予言者ジョセフ・スミスの教え」p. 112）

ただ願っているだけではその希望も実りあるものとはならない。それは人の心を感動させずにはおかないものであり，人を行動へ駆りたてる確信である。神権者を行動へと駆りたてる事柄のひとつに永遠の生命の言葉を調べ，深く考えることがある。

私たちはその何たるかを知らずに「神の口から出る一つ一つの言で生きる」ことはできないので，神の言葉を学ぶことが絶体に必要である。主はそうすることを私たちに命じられた。

イエスが神を父と言われたことでユダヤ人の怒りが高まった時，イエスはそれに対してこのように言われた。「あなたがたは，聖書の中に永遠の命があると思って調べているが，この聖書は，わたしについてあかしをするものである。」（ヨハネ5：39）

主は誡命（いましめ）の書の序文で言われた。「人々よ，これらの誡命をしらべよ。そはこれらは真実確なる誡命にして，その中に言われたる予言も約束もすべて成就さるべければなり。」（教義と聖約1：37）

私たちは，「聖書と……モルモン経とに誌されたるわが福音の原則を教うべし」との神よりの指示を受けている。（教義と聖約42：12）その原則が何であるかを知らなければ，教えることはできない。

予言者ジョセフとオリバー・カウドリとジョン・ホイットマーに主は言われた。「見よ，われ汝らに告ぐ。汝らは聖典を学び……専ら汝らの時を費すべし。」（教義と聖約26：1）

主はすでに与えた指示についてカートランドの聖徒たちに言われた。「汝らこれらの言を聞け。見よ，われは世の救い主なるイエス・キリストなり。これらのことを汝らの胸にしかと銘ぜよ。汝らのこころに永遠の厳粛なることを銘記すべし。」（教義と聖約43：34）

私は，聖典を読んでいて，モルモン経によく出てくる「深く考える」，「よくよく考える」，「思いにふける」という言葉に心を動かされた。辞書では，これらの言葉（*ponder*, *meditate*, *reflect*，以上は同意語である）は「心にはかる，物事について深く考える，思案する」という意味である。モロナイはこの言葉を自分の記録の最後に用いている。

「ごらん，私はあなたたちにすすめたい。あなたたちがこの記録を読むことを神が許したもうならば……主が世の人々にどれほど憐みを垂れたもうたかを思い起して心の中に深く考えてほしい。」（モロナイ10：3）

イエスはニーファイ人に言われた。

「汝らは理解力弱く……教えが，ことごとく汝らに了解されざること明らかなり。されば，汝らは各々その住居に帰りて後，われがこれまで汝らに語りしことをよくよく考えて，汝らの理解できるために……わが名によりて御父に祈るべし。」（IIIニーファイ17：2，3）

「深く考える」とは，思うに，祈りのひとつの形である。少なくとも，多くの場合に主のみたまに近づく方法となる。ニーファイはそのような場合のことを語っている。

「私は父の見たことを知りたいと思い，主は私にもまたそれを知らせたもうことができると信じて思いに耽りながら腰をかけていたが，私は主の『みたま』にとらえられて，まだ見たこともないし一度も足を踏み入れたこともない非常に高い山へやってきた。」（Iニーファイ11：1）

その後に，主のみたまにより与えられた大いなる示現の説明が続いている。それはニーファイが予言者である父の言葉を信じ，自分が熟考し祈った事柄についてもっと多くのことを知りたいと強く願ったためであった。

ジョセフ・F・スミス大管長は，「1918年10月3日，私は自分の部屋にいて聖典の言葉に思いをはせ，…

…」と記述している。彼はこの時，キリストの体が墓に横たわっている間に，「獄に捕われている霊どものところに下って行き，宣べ伝えることをされた」（Ｉペテロ３：19）というペテロの記事のことに言及した。

「これらのことについて深く考えていると，主のみたまが私の上にとどまり，理解の眼が開かれた。そして，死者が，小さき者も大いなる者も共に，群れをなしているのが見えた。……」この後スミス大管長は，死者の霊たちの間における伝道事業について素晴らしい示現を見たことを説明している。（高価なる真珠「死者の贖いに関する示現」p.４）

「永遠の生命の言」を望み，調べ，深く考えること，かくも重要なこの３つがすべてそろっても，祈りがなければ不十分である。

祈りは，救い主に至る門を開く仲立ちとなるものである。主は言われる。「見よ，わたしは戸の外に立って，たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら，わたしはその中にはいって彼と食を共にし，彼もまた，わたしと食を共にするであろう。」（黙示３：20）

この世の初めから，私たちは祈るように教えられてきた。主はアダムとイヴに「主なる汝らの神を礼拝」せよと命じられ，あとで天使が遣わされて「汝悔い改めて今よりいつまでも御子の御名によりて神を呼ぶべし」と告げた。（モーセ５：５，８）

イエスはニーファイ人に教えられた。

「われ，まことにまことに汝らに告ぐ，汝らは誘惑に負けざるよう，たえず目を覚して祈らざるべからず。そはサタンが汝らを支配して麦のごとくにふるわんと欲すればなり。されば汝らはわが名によりてたえず御父に祈らざるべからず。

汝らの妻子が祝福を受くるよう，たえずわが名によりて家族の祈りを御父に捧げよ。」（IIIニーファイ18：18，19，21）

この神権時代に，教会が組織される以前から，主は予言者にこのように言われた。

「勝利者たらんことを常に祈るべし。誠にサタンに打ち勝つ様に祈れ，また現にサタンの仕事に力を与うるサタンの僕らの手より免れんことを祈るべし。」（教義と聖約10：５）

また祭司たちに，「各会員の家庭を訪れ，彼らが声を挙げてもひそかにても祈りを」なすように勧めよと教えられた。（教義と聖約20：47，51）

また，ミズーリ州ジャクソン郡建設に向かった教会員について，「……およそ，祈るべき時にわが前に祈りをなすことを守らざる者は，わが民を審く者の前に覚えらるべし」と言われた。（教義と聖約68：33）

そしてまた，主はこう言われた。「……汝らかの悪魔に征服せられて，今居る所より立ちのかされざる様常に祈るべし。」（教義と聖約93：49）

結びとして，ニーファイの訓戒を聞いていただきたい。私はこの言葉が私を感動させたように，皆様方の心を打つことを願うものである。ニーファイは言った。

「さてごらん，私の愛する兄弟たちよ。……

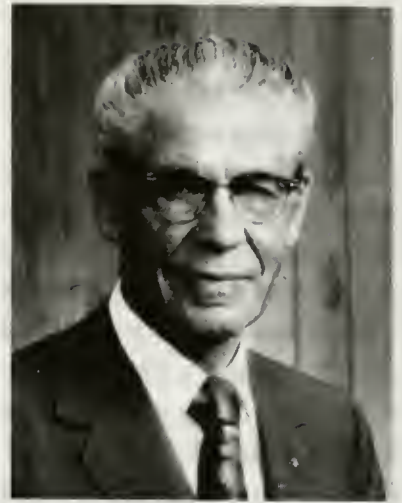
……私はキリストの言葉をよく味わえとあなたたちに勧めた。それはキリストの言葉は，あなたたちのしなくてはならないことをみな教えるからである。従って私がこのようなことを話してからでも，もしあなたたちがまだ解らないならば，それはあなたたちが尋ね求めもせずまた天の門を叩かないからである。従ってあなたたちは光明のある所に導かれないで，暗黒の中にさ迷って亡びるに違いない。

さて私の愛する兄弟たちよ。私はあなたたちがまだ心に考えこんでいるのを認め，このようなことをあなたたちに戒めなければならないのをまことに悲しく思う。あなたたちがもし祈らねばならぬことを教える『みたま』の言葉に聞き従うならば，あなたたちは祈らなくてはならないことを覚るであろう。悪魔は祈れと人に教えず，かえって祈ってはならないと教える。しかしごらんよく言っておく。あなたたちは力を落さず，いつも祈らなくてはならない，そして自分たちの働きが自分の身も霊も救われるように天の御父がその働きを祝福したもうよう，キリストの御名によってまず天の御父に祈らないでは主の御前にどのような働きもしてはならないと。」（IIニーファイ32：１，３，４，８，９）

聖なる神権を保持する各神権者が，永遠の生命の言葉を調べ，熟考し，それについて祈ることにより，その人を動機づける力強い望みを得て，神権の召しを全力を尽くして遂行する人となるように主が助けたまわんことを。また，それにより私たちが「神権につける誓約」の約束された祝福を受けるにふさわしくならんことを。イエス・キリストのみ名により，へりくだり祈る。アーメン。

神権者の責任

大管長会第一副管長

N・エルドン・タナー

私たちは神権の意味を本当に理解しているのだろうかと考えることがよくある。非常に主に近い人であるロムニー副管長が，今晩，幾つかの指示を与えられた。私たちがそれを守るならば，神権についてよく理解でき，神権の召しを一生懸命に果たす人々の受ける祝福を自分も受けることができるであろう。今晩の私の話も神権の召しを全力を尽くして遂行することについてのものである。ロムニー副管長の話とまったく同じで，あなたがたの持つ神権の職を全身全霊をもって全うするようにと申し上げたい。なぜならば，兄弟たちよ，それこそが私たちのなすべきことだからである。神の神権を授かる時に，この重大な責任を課せられるのである。

私は神権について考える度に，天父のみ名によって語り，行動する素晴らしい名誉と特権，およびそれらのことから生ずる自分の責任のことが頭に浮かぶ。私はよく，「神権を身に受けた私たちは何をしようとしているだろうか。私たちは自分が何者で，何を持っていて，どんな責任があるのかを自覚しているだろうか」と言う。

私はあなた方青年に申し上げたい。楽しみなさい。バスケットボールをして，フットボールをして，テニスをして，したいことは何でも楽しく行ないなさい。正しいことである限りしたいことは何でもしなさい。しかしどこにいても，あなたの神権を尊びなさい。そうすればあなたは世の模範となるであろう。

ついで，神権者である私たちがいかに生活すべきかという問題について，簡単にお話したい。まず家族について少しお話したいと思う。父親は，自分の生活にとって一番大切なものは家族であることを常に心得ていなくてはならない。決して家族をないがしろにしてはならない。家族に心を配る時，現在と永遠にわたって家族とともに過ごしたければ福音の教えに従って生活しなければならないということを忘れないように。「いかなる成功も家族の失敗を償うことはできない」という言葉を心に留めるべきである。また，一番印象に残る教えを学ぶのも，子供の一生が決まるのも家庭であることを忘れてはならない。

もし父親が神を愛し，妻を愛し，子供たちを愛し，神権を尊ぶならば，煩いはほとんどないであろう。全世界の神権者がそうしたならば，いかに大きな影響力を持つことであろううか。「少女や母親，婦人たちは，どうなのか」と言う人があろう。彼女たちについても同じである。しかし今私は神権者に，そのとるべき行動について話しているのである。

安息日を聖くしなさい。知恵の言葉を堅く守りなさい。常に祈り，互いにまた隣人に正直でありなさい。福音を学びなさい。自分に何が期待されているのか，なぜこの世にいるのかを知りまた私たちが実際に神の霊の子であることを知りなさい。そのために私たちは自分を道徳的に清く保たなくてはならないのである。父親たちよ，私たちは少年にこのことを教えなくてはならない。

デビッド・O・マッケイ大管長についてのマッケイ姉妹の言葉を，家族と父親に関する模範として紹介したい。「私は夫をとても誇りに思います。家庭での夫は，ほかの場所にいる時と少しも変わりません。優しく，礼儀正しく，親切で，丁寧で，素晴らしいのです。そのような夫を私は心から誇りに思っています。私はこのような夫に対し，感謝しています。私は夫に悪い点を見付けることができません。私は，兄弟たちが振る舞いや身なりにおいて彼の模範に従う

よう願っています。」

兄弟たちよ，私たちにとってこれに勝る助言はないと思う。

私は良い教えの例として，かつて自分の両親のことを話してくれた少年のことを思い出す。彼は，神殿に行くこと，また定期的に神殿へ行って，主の家に入るにふさわしい状態を保つことがどんなに大切かを両親から学んだと話してくれた。神殿へ行く準備をしながら，彼らは神殿や神殿での経験についてよく話をした。神殿へ行くこと，しかも定期的に行くことがいかに大きな特権であるかについても話をした。神殿から帰って来ると，彼らはそこで得た経験についていろいろ話し合ったそうである。神殿結婚をした人たちを「ああ，あのふたりはこれから神様の霊の子供たちの両親になれるんだなあ」と思いながらながめた時のあの素晴らしい気持ち，そして，自分たちにとって神殿に入ることが掛け替えのない特権であることについて。その少年は神殿に入って自分のエンダウメントを受けられる日を待ち兼ねており，身を清く保って自分を備え，主が受け入れて下さるという自覚を持って神殿に行くことがいかに大切であるかをよく知っていた。

私事であるが，いつも感じている父への感謝を申し述べたい。父は私たちに祈ることを教えてくれた。父がひざまずいて家族の祈りをする時は，じかに主に話をしているようであった。父はひそかにひとりで祈ることを教えてくれた。父はあらゆる行動に正直で名誉を尊んだ。父が隣人に対してどれほど正直で誠実な人であったか，その経験の中から，時間をいただいて話させていただきたいと思う。父は神権をよく行使し私たちにもそうすることを期待した。父はいつも母に大きな愛を示していた。

私たちは農場でよく仕事をしたが，それに劣らず狩猟や魚つりにもよく連れて行ってくれた。出掛けるのが困難だと思えるような時にも，父は一緒に出掛けた。しかし日曜日に出掛けることは決してしない人で，そのようなことは考えもしない人だった。私たちはいつもきまって父と一緒に集会に出席した。私は友達からある時このように言われたことがある。「ぼくのお父さんも君のお父さんのようだったらな。君のお父さんと一緒にいられるって，とっても素晴らしいことだね」と。私たち兄弟4人は皆，だれよりも父と一緒にいることを好んだ。それほど良い父であった。父親の皆様，自分の生活を息子に知ってもらい，また息子の生活を知るために，一緒に過ごすことはとても大切なことである。

私は，父が私に寄せてくれた信頼を忘れることができない。先程述べたように，私たちは農場で働いていたが，父は夕方か早朝に私を呼んで自分の計画や一日のスケジュールを話し，私の考えを聞いた。これをした方が良いだろうか，それともこちらが良いだろうかと。そのために，私は自分も父と一緒になって働いていると感じた。今にして思えば，父は自分でかなり綿密な計画を立てていたのだが，そのようにして私に信頼を示してくれたのだと思う。私は自分の仕事だという気持ちがして，くじけずに終わりまで働いた。そしてそのような父を愛した。

父がある日このように言ったことを覚えている。「私はどんな人を雇うよりもおまえに手伝って欲しいと思うよ。おまえを心から信頼しているんだ。おまえは本当によく働いてくれるね。」このように信頼され，感謝されれば，期待にたがわず働こうとさらに決意を強くするものである。

息子に高い目標を定めさせ，その達成に努めさせることは，実に大切である。私たちは，今晩重ねて言われたように，サタンが現に存在して，私たちを滅ぼし，失望させ，試み，迷わせようと決意していることを知らねばならない。

私がかつて非常に感銘を受けた素晴らしい出来事をここでお話したい。フェザーストーン副監督の許しをいただいてその話をしよう。それは彼の家族が，友だちが大勢いて住み慣れた故郷から，この地に引っ越して来てすぐの出来事であった。フェザーストーン副監督が仕事から帰って普段着に着替えてくつろいでいると，下の息子さんのジョー君がやって来て言った。「お父さん，ここの生活に慣れて楽しくなるようにぼくに特別な祝福をして欲しいんだけど。」

副監督は2階に行って服を着替えてきた。その途中で奥さんが声を掛けた。「今晩は外出なさらないはずでしょう。」彼は答えた。「ある人に祝福をするんだよ。」そしてこう言った。「ジョーから特別の祝福を頼まれた。服を着替えて，神権を尊ぶ気持ちとジョーへの関心を伝えるんだよ。こうすればジョーは私と神権に対して信頼を抱いてくれる。そうすれば，祝福が受けられるだろうからね。」

兄弟たちよ，これが私たちの持つべき精神である。もちろん，監督が奥さんに語った通り，その後何が起きたかは想像が付くであろう。みずから模範となり，子供に関心を持ち，神権者として主を代表する時の心構えを子供に教えた父親，そのような夫を持った喜びを夫人は涙をもってかみ締めたのであった。

私は監督，およびステーキ部長を含むワード部，ステーキ部の役員および伝道部長にひと言申し上げたい。私たちには重い責任がある。特に監督は，副監督とともにアロン神権者に対する責任を受けている。このこ

とについては今晩多くのことが言われたが，私もほんのひと言申し上げたい。皆様方はすべての少年を個人的に知り尽くす必要がある。一人一人に関心を示し，密接なつながりを保ちなさい。名前が分かったら，名前で呼びなさい。父なる神と御子イエス・キリストがジョセフに現われたもうた時のことを思い出してみなさい。ジョセフが質問をすると，神は「ジョセフ」と名前を呼び，「こはわが愛子なり」と言われたのである。（ジョセフ・スミス2：17参照）少年は自分の名前を呼ばれるとうれしいものなのである。

少年たちが神権者として職務を果たす時には，彼らは主を代表しているのだということをかならず思い起こさせるようにしよう。ほかの所ならどこでも楽しく過ごしてかまわないし，したいように振る舞ってよい。しかし神権者として職務を果たす時には主を代表していることを覚えて，主の代表者にふさわしい服装と用意と謙遜さ，敬虔さを持つべきである。

監督の皆さん，少年たちに神権の意味を理解させることは重要なことである。私がかつて監督であった時，ワード部には長老に聖任される年齢の若者が6人いた。しかしその内のひとりは用意ができていなかったため，5人しか推薦できなかった。私は彼とそのことで何回も話し合ったが，彼は私に，「自分には資格がありません」と言っていた。彼は非常に気分を害していたが，ステーキ部長へ推薦されるとは期待していなかった。彼のおじに当たる人が私の所へやって来て言った。「まさかあなたはほかの5人が昇進するというのに，あの子だけをそのままにしておくというようなことはなさらないでしょうね。」彼はその若者を推薦するように私に頼んだ。彼は「推薦しないと言うのなら，それはあの子を教会から追い出すことになりますよ」とも言った。

そこで私は彼に説明した。「私が彼に与えられるもので一番大切なのが神権です。私たちは神権を銀のお盆の上でやり取りなぞはしません。彼と私とはお互いに理解し合っています。彼は長老に聖任される用意ができていないのです。」その若者はやはり推薦を受けなかった。

数年前，このテンプルスクェアで開かれた総大会に出席した時，ひとりの若者が私の所へ来た。「タナー副管長，私を覚えておられますか。長老に推薦されなかった，あの時の少年です。」彼は手を差し伸べながら言った。「あなたにお礼を言いたいと思っていました。私は今カリフォルニアで監督をしています。もしふさわしくないのに推薦を受けていたら，私はきっと神権の意味や神権者に求められていることを理解できないで，今のように監督になることもなかったでしょう。」

監督の皆さん，これらの若者たちは無償で何かを求めてはいない。無償で得たものに対しては本当の理解を持つことはできない。彼らは神権の意味をよく理解して，昇進の前にはふさわしい準備をすべきである。

神殿の推薦や神権昇進の推薦，伝道の推薦，そのほか何らかの資格を考慮する場合には，面接によって彼らの状態を知り，かならずふさわしい備えができているようにしなさい。ふさわしくないのに推薦することは，実に愛情に欠ける行為である。それは大きな害となることでもあり，決して行なうべきことではない。それ自体の持つ意味と，ふさわしい準備をすることの大切さとを彼らに理解させなさい。あなたが彼らを愛していること，また，自分にできることなら何でもして，彼らがふさわしくなれるように手伝いたいと思っていることを知らせ，励ましなさい。

監督の皆さんに申し上げたい。あなたがたはワード部の父としてワード部の諸事に関して指示を与え，将来ワード部やステーキ部の指導者となり，いつの日かこの壇上に立つ若者たちを助け導く大きな特権と大きな喜びを受けているのである。若者たちの中から，だれかがそうなることは確実である。若者たちにいつか責任ある役職を受けるかもしれないことを理解させ，準備させなさい。私は今晩このことを言わせていただきたい。神権者全員が指導者の役職に召されることは不可能である。しかし神権を持つことは大きな特権であり，大きな祝福である。もし私たちが神権を尊ぶならば，そのことだけでも救いと昇栄を受ける備えとなるのである。もしどこに召されても主に仕える用意ができているならばそれで十分である。神権は，世の人が持たないものである。

監督の皆さん，あなたがたにはそのほかにも責任がある。あなたがたはイスラエルの判士であり，罪人を常に愛と信頼と，助けたいとの望みとをもって裁き，処する責任を遂行しなくてはならない。ステーキ部長，伝道部長もその責任を持つ。非道な行為を認めたら，大きな愛の気持ちを抱いて罪人に関心を示し，彼を悔い改めに導くことが大切である。それが親切である。どんな人をも愛しなさい。しかし不正を容認してはならない。何か悪いことがあるようならば，事の重大さに応じて，すべての違背行為を調査し，処置することはあなたがたの義務である。処置が早ければさらに罪を犯すといった事態を避けることができるだろう。

聖典と手引きを学び，その通りに行ないなさい。監督とステーキ部長はこの責任を回避してはならない。自分はだれも罰しなかった，会員資

格の剥奪も破門もしなかったし，またそうしようと思ったことは一度もなかったと言う者は，まったく誤っており，自分がその責めを負うことになるであろう。

主は言われた。「誰にてもキリストの教会員にして罪を犯し，または過ちに陥りたる者は聖典の指図するところに則りて処置すべし。」（教義と聖約20：80）

またジョン・テイラー大管長はこのように述べている。「さらに，何人かの監督は，会員の罪を隠そうとしているということを耳にしている。私は神のみ名によって彼らに告げる。その罪はあなた方の頭に下ると。あなた方の中で人の罪に加担したり，あるいはそれを弁護する者はその罪を負わなければならなくなるだろう。監督やステーキ部長の責任にある人々はよくこのことを心に留めていただきたい。神はそれをあなた方の手に求められるのである。あなた方は正義の原則に手を加えたり，人々の非行や腐敗を覆い隠すために教会の職に任命されているのではない。」（*Conference Report*「大会報告」1880年４月，p. 78）

教会の扱う事例には，婚前交渉，姦淫，同性愛，堕胎，その他道徳的に恥ずべき行為，すなわち暴力，窃盗，詐欺，殺人などの犯罪，そして背教すなわち教会の規則や規律に対する公然たる反抗，故意に行なわれる教会のもろもろの規則への違背，妻子への虐待，いわゆる多妻結婚の唱道あるいは実施，その他，教会の律法と秩序を乱すキリスト教徒らしからぬ行為のすべてが含まれる。

罪を犯した人は，自分の罪を告白し，悔い改めるまでは決して安らかな気持ちにはなれない。経験から分かるのだが，愛と援助の手と適切な懲罰によってしかるべき処置を受けた罪人は，皆，明らかな良心をもって再出発をし，他のいかなる方法でも果たし得ない進歩を遂げることができる。彼はあなたの処置に感謝するだろう。あなたが彼を助けようと努める時，主はあなたと悔い改めたその人を祝福される。

私は神権を持つ少年や青年たちに，特に青年にひと言申し上げたい。あなたがたは今晩，自分の責任の何たるかを知った。私はあなたがたに，身を清く保つことの重要さをよく知っていただきたいと思う。神殿の祝福や伝道，その他自分が受けた職の中でできる事柄など，神権によってしか得られない大きな祝福を受ける準備をしなさい。年齢のいかんにかかわらず，神権を持つ者は，女性を敬い，大切にすることなく神権を尊ぶことはできない。若者は皆，必要ならば命を懸けて，女性の節操を守る備えをすべきである。女性に欲情を抱いたり，女性を卑しめたり，貞操を失わせるような罪の行ないを断じてしてはならない。神権を持つ若者と外出する若い女性は，彼がすべてにわたって自分を尊び，保護してくれることを知って安心するはずである。若い女性にはその権利がある。

周知のように，世の道徳は低落しきっている。私たちは世にあるが，世のものとなってはならない。あなたの仲間が教会員であろうとなかろうと罪人であろうとなかろうと，彼らは神権を持つあなたは神権を尊ぶと思っているし，そうするあなたを尊敬するであろう。もしあなたが神権を尊ばないならば，彼らはあなたへの信頼とあなたや教会への敬意を失うことであろう。

もし私たちが，監督や支部長，ステーキ部長，大管長，さらには主の目を見詰めて，「私は最善を尽くして神権を行使しています」と言えるように毎日を生活したら，心配はいらない。

重大な罪を犯した若者は，悔い改めてふさわしくなるまで，神殿の推薦状を受けたり，伝道に召されることを期待したり，神権の昇進を願ったりしてはならない。ふさわしくなく，その召しに専念することもない，背罪を犯した宣教師を中途で解任したり，会員資格を剥奪したり，また破門したりして帰すことほどに大きな失望と悲しみはない。それは同僚にとっても大きなショックであり，伝道前のことであれ伝道中のことであれ，罪を犯した宣教師を国へ送り返すという難しい責任には，伝道部長も心を引き裂かれる思いであろう。両親は嘆き，監督やステーキ部長や身近で働いた彼を知る人々は悲しむであろう。それは主に対する侮辱であり，当の宣教師の人生に重大な影響を及ぼすであろう。

自分が何者であるかを知り，私たちがイエス・キリストの教会にあって神権を与えられていること，世にあって神のみ名によって語る権能を与えられた唯一の民であることを知って，ふさわしく生活するように主が助けたまわんことを。今晩この幾つかの建物に集まっている人々は，教会の神権の職を持つすべての人々を代表している。この教会の成功と進歩は，神権を持つあなたがた一人一人に懸かっているのである。私たちが，それにふさわしい者となることができるように，イエス・キリストのみ名によりへりくだり祈っている。アーメン。

教会の指導者に従いなさい

大管長

ハロルド・B・リー

私はある人から手紙を受け取った。それによると，彼は象形文字の中に人類の前途に待ち受ける数々の事柄への答えとなるものを見いだしたということであった。手紙を読んだ私は非常に興味をそそられ，1931年10月4日にこの壇上でアンソニー・W・アイビンズ副管長が行なった説教のことを思い出した。なぜそれを思い浮かべたかは，彼がその大会の壇上で，最近出版された「石に刻まれた聖書」(*Our Bible in Stone*) を引き合いに出して説教されたからである。あなたがたの多くはその時話された，ケオプス王を祭ったギゼのピラミッドの，主としてその建造物，象徴，予言的特徴についての話を覚えておられるであろう。ピラミッド学者たちはピラミッドの測量や象徴，現存した場合にはその記録を研究した後で声明を出した。それは，1928年は一大苦難の時代の始まりとなり，1936年に絶頂に達するであろうというものであった。学者たちの計算によると，この時代は主の再臨で終わりを告げ，平和と幸福と善意の時代が到来するというのであった。

その時アイビンズ副管長は，この本に関して次のような賢明な勧告を与えた。「さて，愛する兄弟たち，……私はこの小さな本とその内容についてあなたがたに理解してもらいたいと思う気持ちから話している。この本が伝道地でも読まれることは確かで，長老たちはこの本を使うかもしれない。私はただあなたがたに，センセーションは絶対に招かぬようにと警告する。……彼の結論が悪いとは言わない。しかしそれは教会の声として私たちに与えられたものではなく，そのように受け入れることのできるものでもないということである。」

そして彼は，私には非常に意味深いと思われることを述べた。「J・ゴールデン・キンボール兄弟は昨日私たちに，自分は夢が実現すると固く信じていると語った。」このことについて考えていただきたいと思う。それは私の気持ちと一致する。私も夢は実現していると固く信じている。

彼は言った。「世界大戦終結後すぐにそれらのピラミッド学者たちが，彼らの測量と計算によれば1928年に世界中の国民に苦難と悲嘆をもたらす時代が始まるという発表をし，出版もしたことを思い出す。人々は主の前にへりくだらなくてはならないことや，この艱難の時代が1936年まで続くことも宣言された。……私たちは少なくともこの夢の一部が実現したことを知っている。」

アイビンズ副管長は1930年当時の世界各国の経済状態を論評した後，知恵ある言葉で締めくくった。「では兄弟姉妹，どうお考えだろうか。ただ落ち着いて主に心を向けなさい。……私はこの民に，自分の家を整え，負債を避けるようにとお願いした。なぜなら私はそのようなことが起きると知っていたからである。それは神御自身が独り子を通して言われたことだからである。

さて，兄弟姉妹，もし教会があなたがたに言うことがあるとすれば，それは直接に教会の大管長からであって，他の人々の書物を通して言われるのではない。それは，あなたがたに理解できるような方法で伝えられる。人間による思わくなどではない。理性的に，真実ありのままに常識で納得の行くように伝えられるであろう。神があなたがたを祝福されるよう，へりくだり祈るものである。」(*Conference Report*「大会報告」1931年10月，pp. 87—94)

さてこれは，神権者全員に繰り返す必要のあることである。なぜならば，忠実な教会員であると主張するある人々が盛んに本を出して，広告

や端書きや挿話の中でかなりの細部にわたって，自分の過去，現在の教会への加入や活動振りを述べているからである。それにはセンセーショナルな予言や発言が見られる。彼らは，確実な筋からの本として教会員に買わせたいために，その本の保証であるかのようなやり方で，過去現在の教会指導者の説教や引用文を引き合いに出す。そうすると教会の承認を受けた書物らしく見えるからである。

さてまた，教会には，忠実な教会員であると言って大会に集まる聖徒たちを利用する人々がいる。彼らは自分たちのためにグループ集会の計画までする。非常に大切な大会や教育部会の欠席を余儀なくしてまでも，大勢の大会訪問者を自分たちの集会に出させようとする意図が明白である。

さらに，何かたくらみを持つ人々がファイヤサイドや神権定員会や聖餐会その他の教会の集会に話の機会を願い出ている。さて兄弟たち，私たちは，自分の利益を図り主張を広めようとする彼らの見え透いた策略から，私たちの民を守るために警告の声を上げなければならないことをひしひしと感じている。

私たちは，神権指導者が確かな思慮分別をもって，その目的とするところが重大問題となりそうな人々をふるい分けるようにと勧めなくてはならない。

さて，神権の召しを遂行することについてひと言述べてみたいと思うこのことについては，今夕，多くが語られた。私は1830年に予言者ジョセフ・スミスを通してエドワード・パートリッヂに与えられた短い啓示から，一部を読みたいと思う。

「イスラエルのいと大いなる神，主なる神，わが僕なるエドワードにかくの如く告ぐ。見よ，汝は幸福なり。而して汝の罪は赦されたれば，高鳴るラッパの如き声をもてわが福音を宣ぶるために汝は召されたり。われ，わが僕なるシドニー・リグドンの手によりてわが手を汝の頭の上に按かん。さらば汝はこれによりてわが『みたま』，聖霊，すなわち王国に属ける平和なることを教うる『慰め主』を受けん。

われ今すべての人々に就きて，この召と誡命とを汝に与う。すなわちこの召と誡命とを奉じて，わが僕シドニー・リグドンとジョセフ・スミス（二代目）の前に来る者は，みな聖職の按手任命を受けて諸々の国民の中に永遠の福音を宣べんために遣わさるべし。

われまたわが教会の長老たちにこの誡命を与う。すなわち真心を以てこの誡命を奉ずる者は，ことごとく正にわが今語りし如く聖職の按手任命を受けて福音を宣ぶるために出で行くを得ん。われは，神の子イエス・キリストなり。この故に汝ら腰をひきからげよ。さらば，われにわかにわが神殿に来らん。……」（教義と聖約36：1,2,4,5,7,8）

ここで私はこの中のひとつの聖句を取り上げて，神権の召しを全力を尽くして遂行することについて少々話したい。主のこの言葉に注意してみなさい。「われ，わが僕なるシドニー・リグドンの手によりてわが手を汝（エドワード・パートリッヂ）の頭の上に按かん。さらば汝はこれによりわが『みたま』，聖霊，すなわち王国に属ける平和なることを教うる『慰め主』を受けん。」

ある日の晩，私は執事に聖任される年ごろの若いカブスカウトたちのグループと会い，こう尋ねた。「執事になったら，どんな義務があるでしょうか。」

すると彼らは全員で答えた。「執事の義務は聖餐のパスです。」

私は言った。「では，そのことを少し違った風に考えて欲しいと思います。それは執事の義務を説明する方法ではありません。聖餐のパスを行なうことは，どういうことですか。執事が出席者のために祝福された記念のパンと水を配る時，誓約が新たにされてもし彼らが神の戒めを守り，パンと水によって象徴される主イエス・キリストを心に覚えるならば，主のみたまとともにいることができるのです。」

執事には，主を代表して記念のしるしを配る責任があり，そのようにして彼らは主の使いとなるのである。

教師にその義務を尋ねると，「ホーム・ティーチングです」という答えが返ってくるかもしれない。ではこう言ってみたらどうだろう。「ホーム・ティーチングを行なう時，あなたは主を代表して教会員の家庭を訪問し，その人たちが自分の義務を果たしているのを見届け，みんなが神の戒めを守っていることを確認するのです。」祭司の義務は「説き，教え，釈き，勧め，バプテスマを施し，聖餐式を執り行うべきことなり。また各会員の家庭を訪れ，彼らが声を挙げてもひそかにても祈りをなし，またすべて家庭の務めにいそしむように勧め」（教義と聖約20：46,47）ることである。彼らがこれらの務めに働く時は，主のために働いているのであり，主に対して責任を負っているのだということを心に留めるべきである。

私たちが神権者として主のみ名によって働く時，それは天父なる神のみ名のもとに天父を代表して働くことである。神権とは，天父が人間を通して，執事を通して，教師を通して，祭司を通して働かれる力である。そのことを私たちは教会の青少年にはっきり印象付けていないように感じるのである。若人は自分の神権の

重要さを，その通りに理解していない。もし理解していたならば，タナー副管長がフェーザーストーン監督について語ったようにしたいと，いつも思うはずである。彼らは，神権を行使する時には最高の姿でありたいといつも思う。髪にはきちんとくしの目を入れ，衣服や外見は，神権の義務を執り行なうにふさわしい，神聖さを反映するものにしたいと。私もそれと同じ気持ちを持っている。私はこれまで，例えば病人の癒しのような儀式を頼まれた時それを断わることはしないで，たとえ庭などの外に出ていた時でも服装をきちんとしたものに整えた後でなければ執行しなかった。なぜならば，そうすることによって主御自身に近くなった気持ちがしたからである。私は，主のみ前では最高の服装をしたいと思う。

兄弟たち，私は長老のある人々がこのことを理解していないのではないかと憂慮している。すなわち，彼らが教会の長老として，あるいは七十人，大祭司として職務を執行している時，儀式の執行には，主が彼らを通して儀式を施される者の頭に力を及ぼしておられるということを。私はときどき考えるのだが，私たちが神権の召しを遂行していない理由のひとつは，神権者として，主が聖なる神権の力により私たちを通して働いておられることを理解していないことである。私は，私たち全員がこの気持ちを持って，教会の若人に神権を持つということの意味と神権を重んじることの意味を教えるよう願っている。

さて兄弟たち，私たちは今晩数々の事柄に触れた。私たちは今回，神権者の出席がこれまでの最高を数えたと見ている。影響はいかに大きいことであろうか。この大会において，あなたがたは私たちの社会生活に見られるもっとも危険な風潮の幾つかに，すなわち性教育やポルノグラフィーや放縦という現代社会を風靡する傾向について注意を呼び覚まされた。神権を持つ兄弟たち，この主の軍勢が，もし影響力のすべてを身によろい，天父の代表者として神権の召しに奮起邁進するならば，力が生ずるであろう。そしてその力は，様々の場にあって私たちが神権を行使することにより，生ける神の神権者の側にあって，かならずや頑強な防御となることであろう。

私たちは今や新たな召しと新たな責任に専念しなければならない。怠惰に傍観し，これらの物事にチャレンジせず，見過ごすようなことをしてはならない。教会の若人は危険に囲まれている。あなたがたの家族の絆を強くしなさい，兄弟たちよ。私たちがこれまで述べてきたように，私が何回となく繰り返すように，またこの大会でも何人かが話したように，「あなたがた兄弟たちが父親としてできる最大の主のみ業は，あなたがたの家庭の囲いの中にある」ことをしっかり心に留めなさい。兄弟たちよ，妻をないがしろにしてはならない。子供たちをおろそかにしてはならない。家庭の夕べの時間を取りなさい。子供たちを集めて教え，導き，彼らを守りなさい。家庭に一致と力がかくも必要な時代はかつてなかった。もし私たちがこれを実行するならば，教会の力と影響力は世界中で飛躍的に増進するであろう。あなたがたは，もはや物笑いやあざけりの種にされることはない。私たちは，誉れあること，正しいこと，純粋なこと，徳あること，真実なことのために，確固として立ち上がらなくてはならない。

神権を持つ兄弟たちよ，私たちはあなたがたを愛している。私たちの用意はすでに整った。あなたがたが私たちのために祈る時，私たちは神を援助者に迎えて高い期待に添うように努力しよう。私たちは自分の持つ責任の重要さを感じている。あなたがたの信仰と忠実さと，たじろがずに神の戒めを完全に守ることを確信できなければ，その務めにこたえることができないのである。

私は今大会の最初に，ある学生自治会会長からの素晴らしい手紙を披露した。彼は大学のキャンパスや自分の属する社会に起こりつつある状況に大きな関心を寄せ，このように述べている。「この大学に籍を置く末日聖徒の学生で，戒めを守っている者は皆，大管長を完全に支持しています」と。兄弟たち，私はこのことが全教会にわたってその通りであると知っている。戒めを守るすべての末日聖徒は，教会の指導者に従う。同じ理由で，もし教会の指導者に従わない人があるなら，あなたは彼らが神の戒めを100パーセント守っていないことを確信できるであろう。

これは武器を持って備えよとの命令である。何のためであろうか。それは，今大会でも幾人かが話し，教会の若人も感じ取っているようなこの不安定な時代，狂気の，混乱した世の中にあって，私たちがどうしても受けなければならない祝福を要求できるように，神の戒めを守るためである。教会の若人の新たな動きに伴い，私たちがただひとつ希望することは，神権の責任を若人の組織に強調して彼らの手を強くすること，すなわち神権の守護を多く必要とする，これら青年男女に手を差し伸べることである。なぜならば，そうすることにより来るべき時代にみ業を推進する義しい世代の育成の一翼を担っているという確信が得られるからである。

愛する兄弟たちよ，私は今晩語られた事柄が主の霊感を受けて語られ

たことを厳粛に証申し上げる。そしてこのことをあなたがたが熟考し，祈りをもって思い図るよう，批判を慎しみ，非難の声を上げないようにと申し上げる。私は今晩あなた方にこれを証し私の祝福を与え，神の祝福がシオンの力，地上の神の王国の背骨である教会の神権者たるあなたがたの上にあるよう願うものである。祝福があなたがたの上にあらんことを。イエス・キリストのみ名により。アーメン。

永遠の栄えに至る道

十二使徒評議員会会員

デルバート・L・ステイプレー

兄弟姉妹と友人ならびにラジオ，テレビを通じてこの大会の模様に耳を傾けている皆さん，ロムニー副管長の後に話をするのはつらいことである。副管長の話と説教は中身が非常に濃いからである。

今日，世の多くの人々は，神の導きが必要ないほど自分たちは知的にも科学の上でも進歩したと考え，神に対する信仰を持つことに疑問を抱いている。彼らは，神がすべての知識の源であり，あらゆるものの生命をつかさどり，万物を創造されたお方であることを知ろうともしない。

人は，己の知性のみに頼って，神を捨て去ることはできない。それは混乱と破滅を招くだけである。たとえどのように優れた知識をもっている人であろうと，永遠の神のみ旨，みこころ，目的を知らなければ，世のあらゆる問題を解決するための知恵を得ることはできないし，適格な判断を下し，正しい答えを導き出すこともできない。私たちはすべて，神に心を向け，神に対する絶対の信仰を持ち，へりくだって真心からの祈りをもって勧告と導きを求める必要がある。

予言者イザヤはイスラエルの子らに対して次のように戒めている。「あなたがたは主にお会いすることのできるうちに，主を尋ねよ。近くおられるうちに呼び求めよ。

悪しき者はその道を捨て，正しからぬ人はその思いを捨てて，主に帰れ。そうすれば，主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ，主は豊かにゆるしを与えられる。」（イザヤ55：6－7）

この勧告は古代と同様現代においても重要である。人々がキリストの真の教えと倫理を無視し遠ざかっているため，世の中の問題はますます深刻の度を強めている。これは，人が罪を捨て，真心から悔い改めて神に立ち帰らない限り，危機と大きな悲しみがかならず来るという警告である。悪魔の仕掛ける落し穴を避け，イザヤの勧告に従わなければ，神の憐れみと豊かな赦しを望むことはできないのである。

正しい生活を送る上でのより所となるべきものは，イエス・キリストの福音をおいてほかにない。他のいかなる計画，道徳律，教えも，この福音に一致することはないし，取って代わることができない。福音は，すべての人が従うべき律法，原則および儀式を盛り込んだ道しるべである。

今日，多くの人はその弱さと愚かさのゆえに，古代，近代の聖典で明らかにされている神の教えよりも，人の教えに目を向けている。不幸なことに，ほとんどの人は永遠の生命ではなく，この世の生活に心を奪われている。しかし，人の生み出した哲学は，神の啓示の中で明らかにされた福音の教えに取って代わることも，それをしのぐこともできない。ましてや人の科学が，予言者を通して神より啓示された真理に取って代わることもないのである。

神の道は人の道とは異なり，しかもはるかに優れている。主は，予言者イザヤに次のように語っておられる。

「わが思いは，あなたがたの思いとは異なり，わが道は，あなたがたの道とは異なっている……。

天が地よりも高いように，わが道は，あなたがたの道よりも高く，わが思いは，あなたがたの思いよりも高い。」（イザヤ55：8－9）

救い主は啓示を通して，私たちに永遠の栄えに至る道を示しておられる。

「誠に，主かくの如く言う。その罪を捨ててわれに来り，わが名を呼び，わが声に従い，わが誡命を守るあら

ゆる人々は，わが面を見てわれ在るを知ることあらん。

また，われは世に来るあらゆる人を照らす真の光なること，」(教義と聖約93：1－2)

末日聖徒イエス・キリスト教会は，完全な生活の方法を教えている。私たちはいついかなる時にも真のキリスト教徒として高い理想を求め，気高い行動の標準を維持していかなければならない。末日聖徒の信仰は，人の知恵ではなく，神の知識と力の上に築かれなければならない。

使徒パウロは次のように警告している。「まちがってはいけない，神は侮られるようなかたではない。人は自分のまいたものを，刈り取ることになる。

すなわち，自分の肉にまく者は，肉から滅びを刈り取り，霊にまく者は，霊から永遠のいのちを刈り取るであろう。」(ガラテヤ6：7－8)

主のみ旨とみこころを知るために，信仰と熱心な祈りによって学びなさい。従う勇気を持ちなさい。主は御自身が従っておられない戒めや律法を人の子らに与えるようなことはなさらない。従順は正義の神が愛を込めて下された原則である。私たちは従順によって天よりの力を受ける。

私たちはこの世において誤りを正す機会を受けているが，これは同時に義務でもある。生活を霊的に立て直すには，悪行を悔い改めて告白しなければならない。また，永遠の御父と，私たちの贖い主である御子に対して信仰を持つよう命じられている。忠実な者のために備えられている天の家で御二方と再び住まうことができるように望み，正しい生活によってそれを実現すべきである。これを裏付ける聖句を挙げてみよう。

「汝らもし，日の栄の世界に一つの所を得んことをわれに願わば，わが命じて汝らに求むるところを行いてその備えを為さざるべからず。」(教義と聖約78：7)

苦しみをなめて人生の教訓を学んでいる人が実に多いのは悲しむべきことである。それに対して，私たちを教え，悔い改めの機会と赦しを与えようとしておられる永遠の御父を知っていることは，大いなる祝福であると言うことができる。予言者エゼキエルの語る励ましの言葉に耳を傾けていただきたい。「主なる神は言われる，わたしは悪人の死を好むであろうか。むしろ彼がそのおこないを離れて生きることを好んでいるではないか。」(エゼキエル18：23)

主は主の子らの幸福に大きな関心を寄せておられることを，モーセに語っている。「見よ，これわが業にしてわが栄光，すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」(モーセ1：39)

不死不滅は救い主イエス・キリストの贖罪により，全人類に約束されている。しかし，永遠の生命は，私たちがそれにふさわしい状態を築いて獲得するという個人的な責任である。

詩篇の作者ダビデは，次のような霊感あふれる言葉で，人の大切さを強調している。

「人は何者なので，これをみ心にとめられるのですか，人の子は何者なので，これを顧みられるのですか。

ただ少しく人を神よりも低く造って，栄えと誉とをこうむらせ，

これにみ手のわざを治めさせ，よろずの物をその足の下におかれました。」(詩篇8：4－6)

最近の科学，技術部門で達成した偉業や，宇宙探険への意欲と勇気，その他の学問の分野での業績は，人が神の子供であることを証明するものにほかならない。したがって，人は神に導きと一層の光と真理を求める必要がある。

神は，あらゆる人々が信仰と理解と献身ということにおいてひとつとなり，ともに成長することを望んでおられる。使徒パウロはコリントの聖徒たちに対してそのように奨励している。「さて兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの名によって，あなたがたに勧める。みな語ることを一つにし，お互の間に分争がないようにし，同じ心，同じ思いになって，堅く結び合っていてほしい。」(Ⅰコリント1：10)

私たちがこの世にいるのは，お互いの成長を助け，お互いが愛を示し，良き業を行なうよう励ますためであって，裁くためにいるのではない。不活発な人や道を誤った人を励ますのは私たちの責任である。私たちには，「教会員の中に邪曲なきよう，互いの間に頑固なることのなきよう，また虚言，蔭口，悪口などもなきよう注意」する義務がある。(教義と聖約20：54)

使徒ペテロもこの教えに重きを置いて，次のように忠告している。

「……あなたがたは皆，心をひとつにし，同情し合い，兄弟愛をもち，あわれみ深くあり，謙虚でありなさい。

悪をもって悪に報いず，悪口をもって悪口に報いず，かえって，祝福をもって報いなさい。あなたがたが召されたのは，祝福を受け継ぐためなのである。」(Ⅰペテロ3：8－9)

教会の真の力は，会員の人格と献身の中にある。使徒パウロはコリント人に対して次のように教えている。「それと同様に，主は，福音を宣べ伝えている者たちが福音によって生活すべきことを，定められたのである。」(Ⅰコリント9：14) この勧告は，末日聖徒イエス・キリスト教会のすべての会員に当てはめることができる。福音に添って生活し，良い模範を示すことが，おのずと信じて

いる事柄を伝え，他の人々も従うべき正しい道を示しているのである。私たちが他人に与えることのできる最大の贈り物は，良い模範という贈り物である。

スペンサー・W・キンボール十二使徒定員会会長は次のように述べている。「今日，私たちに与えられた課題は，世の光となることである。……もし300万の教会員が福音の原則に従って生活するならば，世のあらゆる誤ちは消え失せるであろう。世が私たちに近づき，私たちは世の苦悩を福音の平安へと変えていくことであろう。」(*Church News*「チャーチ・ニューズ」1972年2月26日，p. 13)

私はすべての教会員に対して，キリストの福音に対して積極的に，また正直に生活するようお願いしたい。私たちの永遠の幸福と喜びは，この世でどのような人生を計画し，実際に過ごすかに懸かっている。使徒パウロはこのように教えている。「主の杯と悪霊どもの杯とを，同時に飲むことはできない。主の食卓と悪霊どもの食卓とに，同時にあずかることはできない。」(Ｉコリント10：21)言い換えれば，「だれも，ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し，あるいは，一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは，神と富とに兼ね仕えることはできない。」(マタイ6：24)

キリストの福音に定められている以外の方法で，永遠の目標を達成できると考えている人は，盗人であり，強盗であると救い主が言っておられることを忘れてはならない(ヨハネ10：1参照)。キリストは弟子たちに次のようなたとえで教えておられる。

「また天国は，良い真珠を捜している商人のようなものである。

高価な真珠一個を見いだすと，行って持ち物をみな売りはらい，そしてこれを買うのである。」(マタイ13：45―46)

私たちには，良い真珠すなわち天の王国，さらに救い主のたとえ話で言えば高価な真珠を探す責任がある。それを得るために，あらゆる努力と犠牲を払ったとしてもなおそれに見合うものがある。神の王国に救われるということは，神のあらゆる賜の内，最も大いなるものである。なぜならば，救いの賜に勝る賜はなく，主の言葉によれば，永遠の生命を持つ者は富める者だからである。(教義と聖約6：7，13参照)

福音に従って生活していない会員に対して私は，1年間福音の要求するすべての事柄に従い，教会の集会に欠かさず出席するようチャレンジする。そして1年後に，福音に忠実に従った生活と，それ以前の生活を比較し，どちらの生活が良いか真剣に考えてみていただきたい。福音に従って生活することにより，あなたとあなたの家族にとって価値があることを証明する機会を福音に与えていただきたい。

聖霊を伴侶とするにふさわしい生活を送っていただきたい。聖霊の力を受けると，あなたは心に確信と証を得，主への愛が築かれる。そして，主の律法と戒めを守り，主に仕えることによってその愛を表わす。聖霊はこれらの教えが真理であることを証し，あなたはかの使徒パウロが知ったように，イエス・キリストの福音は救いを得させる神の力であることを知るであろう。(ローマ1：16参照)

また，主の道は救い主が約束された豊かな命を見いだす唯一の道であることの確信を得るだろう。

私は，真理を知りたいと願い，現在の生活や交わりに飽き足らないでいるすべての人にこのチャレンジをしたい。主を見いだすことのできる内に主を求め，主が近くにおられる内に主を呼び求めるというチャレンジを引き受けるには勇気が必要である。しかし，私は約束する。これを実行するならば，心の平安，喜び，慰め，個人の必要が満たされること，絶えることのない愛という報いがもどってくることを。

兄弟姉妹，友人の皆さん，私は神が生きておられることを知っている。イエスはキリストであり，私たちの贖い主，救い主であり，まさしく神の御子であることを知っている。イエスは私たちが永遠に生きられるようにするため，十字架上でみずからの命を捧げられた。全人類に復活をもたらすため，みずから復活することにより死の縄目を断ち切られた。主は御自分の血を流すという代価を払って私たちを買い取られた。私たちは感謝の気持ちを表わすために正しい生活を営み，あらゆる人に正しい模範を示す必要がある。

願わくは，神の祝福により私たちが正しく導かれるように。霊的な力を得て，あらゆる悪魔の誘惑へのとびらを閉め，主の前に正しく歩むことができるように，へりくだりイエス・キリストのみ名により祈る。アーメン。

人——神の子

大管長会第二副管長

マリオン・G・ロムニー

愛する兄弟姉妹ならびに友人の皆さん。きょう私は皆さんに非常に大切なメッセージをお伝えしたいと思っている。しかし私が語ることも，もし主のみたまがなかったならば単なる言葉に終わってしまうであろう。そこで私が話す間主の祝福があるように皆さんも私とともに祈っていただきたい。

私が力説したいと思っている真理は，死すべき体を持つ私たちが，実際，文字通り神の子であるということである。もし人がこの真理を理解し，信じ，受け入れ，そして，それに従って生活するなら，私たちの枯渇寸前の社会は癒され，改革されるであろう。さらに人もまた，この現世において平安を得，来世においては永遠の喜びを得るであろう。

末日聖徒イエス・キリスト教会の会員はこの概念を，当教会の神学における根本教義として受け入れている。この概念の意味するところを充分認識したいと考えている人々は，この概念に従って自分の生活を律している。また，この概念は，教会員のあらゆる思想や行動に意義と方向付けを与えるものである。これは皆，教会員が，動植物の世界でも，人間の世界でも，子孫が繁殖すれば，その成長の暁には親と同形になるという普遍的な自然の法則が存在することを知っているからである。

教会員は，このことから，まったく同じ法則が神の子に関しても成立することを正しく論証している。それゆえ，教会員の目標はいつの日か天の父母のようになることである。

教会員はこれを論証するだけではない。神が，人に永遠の命をもたらすのは神の業であり，神の栄光である（モーセ1：39） ということを啓示されたために，教会員はいつかそうなれることを知っているのである。この永遠の生命こそ，神が現在持ちたもう生命である。

最初の人であるアダムは，自分が神の子であることを知っていた。アダムは，堕落の前には，エデンの園で神とともに歩き，神とともに話していた。堕落の後，「アダムとその妻イヴ主の御名を呼びたるに，エデンの園を指して行く途（みち）のかなたより声聞えて彼らに語りたまえる……。」（モーセ5：4，5）

その後，主はふたりに福音の計画を教えるためひとりの天使を遣わされた。そこで「アダムとイヴとは神の御名を讃め，息子娘らにすべての事を知らしめたり。」すると「サタン彼らの中に来りて言いけるは，…アダムとイヴの言を信ずるなかれ，と。されば，彼らアダムとイヴの言を信ずることなくサタンを神よりも愛でたり。人はその時より，肉体，肉欲，悪魔に従う者となり始めたり。」（モーセ5：12，13）

その時以来今日に至るまで，大部分の人々は，アダムの子孫の最初の世代のように，「アダムとイヴの言を信ずること」がなくなってしまった。しかし神は，アダムからノアに至るまで，あらゆる予言者たちにみ言葉を繰り返し啓示しておられる。また同様にアブラハムにも啓示され，またモーセが，「いと高き山の中に捉えられ行きし」時にも啓示された。

「モーセ神と顔を合せて相見，神と相語りける……。

神，モーセに語りて言いたまえり。見よ，われは全能の主なる神……なり。……

見よ，汝はわが子なり。

わが子モーセよ，われ汝に為さしむる一つの業あり。而して汝はわが生みたる独子の生写しなり，わが生みたる独子は今も将来も救い主となならん。そは彼は恩恵と真理に充てる者なればなり。……

さて見よ，わが子モーセよ。われ

この一事を汝に示す。そは汝この世に在れば，今やわれ汝にそれを示すなり。」(モーセ1：1—4,6,7)

この短い聖句の中で，主は3度までモーセを「わが子」と呼んでおられる。パウロも，アレオパゴスの評議所での偉大な説教の中で，神について次のように語った。「われわれは神のうちに生き，動き，存在している……。われわれも……その子孫である。」(使徒17：28)

ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリは「主は実に生きたもう」と高らかに宣言した。

「われらは，彼……を見たり。また……証したもう声を聞けり。

すなわち諸々の世界は彼の手により，彼の手を経て，また彼に因りて先に作られ，また現に作られ，これに住む者たちも皆神より生れたる息子と娘なることを証したもう。」(教義と聖約76：23—24)

「神より生れたる息子と娘」とある。私たちは皆，肉親の父から生まれた息子と娘であることを知っているが，この聖句は，在来の知識に照らしてみて，真実であると言えるだろうか。確かに真実である。人間というものが，骨肉の体で包まれた霊を持つ二元的な存在であるため，この聖句は真実なのである。啓示には次のようにある。「人間は霊と体とより成る。」(教義と聖約88：15) 人の肉親の父が人の死すべき体の父であると同じように，神は人の霊の父である。

霊の性質は聖典の中に明確に啓示されている。モルモン経イテル書第3章には，霊についての克明な描写がされている。特にこの箇所は，霊体としてのイエス・キリストの現われの記録であり，この出来事は，イエス・キリストが肉の身でマリヤのもとに生まれる，およそ2,200年前のことである。記録によれば，イエスは，人の姿かたちをしてジェレドの兄弟の前に立ち，次のように言われた，とある。

「見よ，……われはイエス・キリストなり。……

……汝らがわが形にかたどりて造られたることを今汝は見ずや。最初に一切の人々はわが形にかたどりて造られたり。

見よ，今汝が見るこの体は，わが霊体なり。われはわが霊の体にかたどりて人を造れり。われは今わが霊のまま汝に現わるると同じ形の肉体を具えてわが民にもまた現われん。」(イテル3：14—16)

この真理を強調すべく，イエスは1833年，ジョセフ・スミスに次のように言われた。

「……太初にわれ御父と共に在りき。われはその『長子』(もちろん，霊の長子，の意味) なり。

汝らもまた太初に御父と共に在りき。『みたま』……なる御父と共に在りき。」(教義と聖約93：21，23)

私たちは，前世の状態における霊についても，アブラハムに与えられた示現の記録からいくばくかの知識を得ている。この示現の中で，アブラハムは，天上の大会議に集う大勢の霊を示された。この大会議では地球の創造に関する問題が討議された。そこは霊たちが降りて行き，骨肉の体を得て人間になるはずの場所であった。この計画では，死すべき状態で試しの期間を送った後死ぬことになっていた。つまり永遠の霊の体と朽ちるはずの死すべき体とが分離するはずであった。その後，復活の時に，ふたつの体は再びひとつになって不死不滅の体になるのである。

アブラハムはまた，この地上での務めの間に忠実であることを証明すれば，復活体となって，霊の父である天父のみもとに帰ることを許され，また永遠の進歩が享受できることを知った。次の聖句はアブラハムの書の中にある言葉である。

「さて，主はわれアブラハムに，この世に先だちて組織されたる英智たちを見せたまいたりき。……

神，これらの霊を善しと見たまい，……言いたまえり，これらの者をわが統治者となさん。神，霊なりしこれらの者の中に立ちて……われに言いたまいけるは，アブラハムよ，汝はこれらの者の一人なり。汝は生れざる前に選ばれたり，と。

これらの者の中に，神の如き者（霊の長子であるイエス・キリストのこと）一人立ちて共に在りし者たちに言いけるは，われら降り行かん。かしこに空間あればなり。而してこれらの材料をとりて，これらの者の住まうべき地を造らん。

而して，これにより彼らを試し，何にてもあれ，主なる彼らの神の命じたまわんすべてのことを彼らが為すや否やを見ん。而して，最初の位を保つ者は更に附け加えられ（これは，私たちのことを指している。私たちは最初の位を保ったため，さらに附け加えられて，死すべき体を得たのである)，……第二の位（つまり，この世の生涯）を保つ者は，とこしえに栄光をその頭に附け加えられん。」(アブラハム3：22—26)

人の高遠な位に関する真理が，このように啓示されているのである。

一方，これと対照的に，人がその本質に関する神の啓示のみ言葉を拒んだ結果として生じた堕落の状態を見事に描写した，アレクサンダー・ポープ*の詩を考えてみるとよい。ポープは，次のように描写している。

いずれの地位にあるものか
　谷間のうちに置かれた
賢けれども陰にして
　偉大なれども粗野なり
あまたの知識に恵まれど
　懐疑のために旗を揚げ

あまたの弱さ見いだせど
　克己の誇り胸に満つ
赴くべきか居るべきか
　悩みし問いに答得ず
己は神かそれとも獣
　いずれの道にも迷いたり
霊を選ぶかはたまた肉か
　いずれの問いにも答得ず
死ぬるをもって生を受け
　誤りをもて正となす
無知なることはこの如く
　その理知もまた然り
卑しむべきか誉むべきか
　常に思案の的となる
思考と熱意が千々乱れ
　あらゆることに乱れたり
悪を受けるやそれとも為すや
　とどまることなきこの思案
高きを望みつ低きも望む
　被造物の倣いなり
万物の王たる主なれど
　よろずのえじきともなれり
真理の判官（はんがん）自負すれど
　誤りもまた限りなし
栄光嘲笑共に受け
　不可解なるはこの身なり
定められたる星のごと
　ひとつところにとどまれり
生み，増え，地には満つるとも
　やがて朽ちるを定めとす……

世の広大な海原に
　人生航路の帆揚げて
あまたの望み抱きしが
　情欲の風起こりたり……

かくして胸にわきいずる
　俗世の王たる情欲は
アロンの投ぜし蛇のごと
　正しき望み飲み干せり
(*An Essay on Man*「人間論」第2巻)

人は神の子などではないという理論は，これまで，人の霊の成長を阻害し，道徳を低下させる主要な原因であったが，人々がこの理論を受け入れ，この理論に基づいて行動している限り，これは将来も変わることはないであろう。

そうなることは，はっきりと予想できたのである。このような理論の信奉者は，ポープが持った「己は神か，それとも獣」という疑問が起きれば，すぐに「獣」の方に味方することに決めているし，「霊を選ぶか，はたまた肉か」という疑問には「肉」の方に味方することに決めているのである。

人は獣であるという考えは，責任感から解放してくれるし，「われらは明日死ぬかも知れないから，飲んだり食ったりして楽しめ」という宿命論的な態度を助長することにもなる。だが実際には，そのような人は，ポープの詩にあるような人間になってしまうのである。

定められたる星のごと
　ひとつところにとどまれり
生み，増え，地には満つるとも
　やがて朽ちるを定めとす……

世の広大な海原に
　人生航路の帆揚げて
あまたの望み抱きしが
　情欲の風起こりたり……

かくして胸にわきいずる
　俗世の王たる情欲は
アロンの投ぜし蛇のごと
　正しき望み飲み干せり

愛する兄弟姉妹たちよ，人は神の子であり，いわば胚芽の状態の神である。これは真理である。心の義しい人は皆，子供たちが次のように歌うのに，まったく同意できるであろう。

神の子です　わたしやあなた
いろんなお恵み　感謝します……
みこころ行ない　また天に住む
わたしを助けて　導いて
いつかみもとへ　行けるように
(ナオミ・W・ランドール作詞)

人が神の子であるという知識は，私たちが持ち得る知識の中で，最も重要なものである。このような知識は，霊感を受けない者にとっては，何ら理解できるものではない。いかなる理論，科学，哲学，またいかなる分野のこの世の学問を動員しても，この知識を得ることはできなかったし，今後もできないであろう。また，このような学問の方法を用いて，その研究が限界に来ている人々は，昔から常にそうであったように，「常に学んではいるが，いつになっても真理の知識に達することができない」(IIテモテ3：7）のである。

このような知識を得ることのできる唯一の手段は，神からの啓示である。幸いなことに今まで述べてきたように，私たちには，アダムから今日に至るまで，繰り返し啓示されてきたみ言葉がある。

自分が神から生まれた息子，娘であるという知識を受け入れ，信じ，かつ聖霊の力によってその証を得た人の熱意や願望や行動の動機は，他のことを信じている人の熱意とは非常に異なっている。丁度，成長しているぶどうの木が，切り落とされた枝とはまったく異なっているようなものである。

自分が神の子であると知っている人は，「己は神か，それとも獣」か，などと疑問に思うことはないし，「思考……が千々乱れ」ることも，「情欲」に駆り立てられることも，「あらゆることに乱れ」ることも決してない。また「定められたる星のごとひとつところにとどまれり。生み，増え，地には満つるとも，やがて朽ち

るを定めとす」ということもない。それどころか，聖典の中に教えられているように，自分には天賦の能力があり，子孫を生み出すことのできる他のあらゆるものと同様，成長の暁には，天の父母のような状態に到達でき，「とこしえに栄光をその頭に附け加えられ」（アブラハム3：26）ると考えているのである。これこそ，人の目指すべき目標である。

また，十戒を受け入れ，山上の垂訓を受け入れ，知恵の言葉を守り，律法として神から与えられたあらゆる指示と戒めに従い，自分が生命を捧げるはずの目標に到達するのに絶対必要なすべての戒めを受け入れるのである。

そして，救い主の次の呼び掛けに心から応じようとする。

「すべて重荷を負うて苦労している者はわたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。」（マタイ11：28）

また救い主のチャレンジにも応ずる。「……われまたは天にまします汝らの父が完全なるごとく，汝らもまた完全とならんことを。」（IIIニーファイ12：48）

また，賢明で適切な答えが，主の次の戒めに耳を傾けることであることを知っている。

「……汝ら永遠の生命なる言に勉めて心を留めよ。そは，汝ら神の口より出ずるすべての言によりて生くべければなり。」（教義と聖約84：43，44）

また，そのような人は，次の主の約束を絶対的に信じている。

「その罪を捨ててわれに来り，わが名を呼び，わが声に従い，わが誡命を守るあらゆる人々は，わが面を見てわれ在るを知ることあらん。」（教義と聖約93：1）

また，ヨブとともに次のように叫ぶ。

「わたしは知る。わたしをあがなう者は生きておられる，末の日に彼は必ず地の上に立たれる。

わたしの皮のうじがこの体を滅ぼしたのち，わたしは肉にありて神を見るであろう。」（欽定訳ヨブ19：25，26）

また，アルマと同じ願いを持つ。

「ああ私が天使になって私の心の願いを達することができたら善いものを。私の願いとは出ていって神のラッパのように地を震わせる声で話し，万民に悔改めをすすめることである。

まことに私は雷のような声で悔改めと贖いの計画とを万人に宣べ伝え，もはや全地の上に悲しみのないように悔い改めて私たちの神に立ち帰れと万人にすすめようと願う。」（アルマ29：1，2）

そして，最後に，ニーファイとともに次のように決心するのである。

「私は，主が命じたもうたことを行って行う。私は，主が命じたもうことには，人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり，それでなくては，主は何の命令も下したまわないことを承知しているからである。」（Iニーファイ3：7）

以上のことに，私の証を付け加えたいと思う。私は自分が神の子であることを，また愛する聴衆であるあなた方も皆，神の息子，娘であることを知っている。さらに，この知識が私たちの生活で立派に実を結べば，私たちは，救い主であるイエス・キリストの贖いの犠牲によって，かならず天父のみ許に帰ることができることを知っている。イエス・キリストの御名により，この証を申し上げる。アーメン。

※アレクサンダー・ポープ（1688―1744）イギリスの詩人

家庭の持つ影響力

十二使徒評議員会会長

スペンサー・W・キンボール

兄弟姉妹ならびに友人の皆様，本大会において，家族と家庭の訓育が次代を担う若者に力強い影響を与えてきたこと，また今後もそれは続くことが語られてきた。ハロルド・B・リー大管長は，映画「堅固な家庭」を通じて世界各地に住む人々に，この大切なメッセージを伝えている。全世界の人々がことごとく，まがいものや醜いもの，また誤りを受け入れているように思われる昨今である。しかし，家族と家庭生活の大切さを説き，記している賢明な指導者の数は逆に増えている。

こうした指導者の一人が次のように書いている。「……堅固な家庭が不可欠なのは，単に子供たちを養い育てるためだけではない。実に人類の存亡が懸かっているのである。」（ポール・ポピノー，*Family Life*「家族の生活」1972年9月）

さらに彼は続けてこう述べている。「人類の歴史を通じて次々に登場した国家は，この〔家族の生活をおざなりにするという〕型をたどって，姿を消して行った。」

家族は，己を空しくして働き，責任を引き受ける場を提供する。再び彼は語る。

「……社会の安寧，さらには国家の存立を決定するとも言うべき大切な事柄がある。それは，文化が変化を遂げようとする時に，『これによって家族が強められるか』と問うことである。」

主は初めに，すべての計画を立てられた時，子をもうけ，養い，愛し，指示を与える者として父親を，子を宿し，産み，育て，食物を与え，訓育する者として母親を定められた。主は別の方法を採ることもできた。しかし，主は，子供たちが互いに切磋琢磨し，互いを愛し，敬い，認めるようになる単位を設けられた。それには責任が伴うと同時に目的を持った交わりがある。家族とは，天父が考え，組織された偉大な生命の計画である。

心ある人ならば，夫婦関係にない者たちが密接な交わりを持つことが罪であることに異論をはさむことはないはずである。親がなく，家族としての生活を味わうことのできない子供は，悲劇である。根幹となる家族の生活を無視した社会には基礎がなく，やがて崩壊し忘れられて行くであろう。

御父は1831年11月にこの戒めを下された時，これらすべてのことを御存じであった。家族の必要，不必要については論じられなかった。それは当然のこととして，命じられたように思われる。「……シオン……にて子供を有する両親あらば，……また両親はその子供たちに祈ることと，主の前に正しく歩むこととを教えざるべからず。」（教義と聖約68：25，28）

私は，家族の生活を通してもたらされる祝福を数多くこの目で見てきた。これは世の姿とまさに好対照をなしている。先に述べた映画の中で，リー大管長は次のような統計を示している。

「合衆国人口調査局に記録された，18万組の離婚の内，57パーセントは家庭に子供がいなかった。21.2パーセントは子供がひとり，5人以上の子供を持つ家庭の離婚は1パーセントにも満たない。」

この数字は何かを教えている。

私はかつて，子供たちがさまざまな主義主張に取り囲まれたある国の指導者と話したことがある。子供たちの心をとらえて，悪から遠ざけるために親としてどうしているかを尋ねた。その答えは，実に自然で当を得たものであった。

「私たちは，子供が正しい真理にかなった道を歩むよう家庭で厳格に教

えます。そうすれば，どんな先生が神を信じない破壊的な哲学や異論を唱えても，子供たちは何の影響も受けずに，信仰を守ることができます。」

これが正解である。家族の生活，家庭を中心にした生活，献身的で利己心のない両親。主はこのようにして人生を築くよう定められたのである。

10年以上も昔のことになるが，私は合衆国空軍の少佐から試験飛行の話を聞いたことがある。彼は良い父母から生まれ，正しいことを教えられていた。彼は25種の軍用機を操縦し，飛行時間は4,000時間に上る。韓国では戦闘飛行を142回経験し，数多くの勲章を受けている。彼は私たちにこう話してくれた。「離陸直前の数秒間，私たちパイロットはエンジンや操縦装置，水圧，気圧装置その他基本的な装置を最終点検し，少なくとも安全に飛び立てることを確認します。……緊急事態の際，パイロットは本能的に反応し，絶対に確実でなければなりません。

パイロットはそれぞれチェックリストを持っていますが，このチェックリストに載っていない大切なことがあります。それは安全に飛行し，車輪を下げて異常なく着陸するために，是非とも必要なものです。つまり天のお父様に祝福を願う祈りです。特に緊急事態が発生した時は，正しい判断を下し，正しく操縦できるように祈ることが是非とも必要です。私は，劇的な方法でこの祈りが答えられた経験を何度もしています。……」

良い家庭で良い父母から生まれ，幼児期から青年期に至るまで良い訓練を受けた彼は，危険な仕事に従事していてもなお心を安らかに保っているのである。

この少佐は恐れを抱いていなかった。準備ができていたからである。また，「もし汝らに備えあらば怖るることなからん」という主のみ言葉の持つ力を知っていた。（教義と聖約38：30）

このような言葉がある。「恐れと不屈の精神は相反するものであるが，人格を伸ばすためには両者とも不可欠である。……健全な恐れは，恐れに対する抗体を作り出す。」

ダンケルクの攻防が繰り広げられていた頃，どんなに不慣れであっても，船を操縦できる男性は子供であろうと大人であろうと皆，英国海軍を救出する意気に燃えていたという。その当時のイギリスのホテルに，次のような言葉が記された暖炉があった。

「恐怖がとびらを叩いた。

　　すると信仰はこう答えた，

　『ここにはだれもいませんよ』」

電撃戦のさ中にも，ロンドンの岸壁に下がるスローガンを見て，それに従った人も多い。「ひざががくがくしてきたらすぐにひざまずきなさい。」

再び啓示は語る。「もし汝らに備えあらば怖るることなからん。」

この備えは，幼児期，少年期に培われる。信仰が生まれ，人格が確立される時期である。船が沈み，飛行機が墜落し掛けてから，正面衝突が避けられなくなってから，信仰を築こうとしても遅過ぎるのである。

ある飛行士は次のように述べている。「私は第15軌道で祈りの答えを受けました。」また別の人はこう言っている。「勇気とは祈りで述べたことに畏怖の念を抱くことです。」

子供たちが正しい波長に合うよう調整されていれば，つまりこの世と永遠にわたる責任について幼い頃から教えを受けていれば，緊急事態に際しても正しく対処できるのが普通である。求められたことをすべて忠実に行なっていれば，間違った道に迷い込むことはないのである。ニーファイ人の予言者はこう命じている。「あなたたちが一人で部屋に居るときも，秘密の所に居るときも，また野に居るときも，心にあることをうち明けて祈れ。」（アルマ34：26）

イザヤは私たちの子供に偉大な遺産を約束している。「あなたの子らはみな主に教をうけ，あなたの子らは大いに栄える。」（イザヤ54：13）

心ある両親はことごとく，この栄えを子供たちに望むに違いない。末日聖徒は自分の家庭と家族を第一に考えて生活するだけで，この栄えと平安を受けることができるのである。

「汝らの妻子が祝福を受くるよう，たえずわが名によりて家族の祈りを御父に捧げよ。」（IIIニーファイ18：21）

この要求は途方もなく大きなものだろうか。

私はアイダホ・フォールズを訪れた時，ある典型的な教会の家族から招きを受けた。そこには，献身的な両親と多くの子供がいた。長男は兵役で南太平洋の激戦地にいた。長男が戦地を転々とする度に，家族の心もそこへ向けられていた。戦地から届けられたばかりの手紙を見せてくれた。そこには次のように記されていた。

「これまで，恐ろしさのあまり立ちすくんでしまうようなことが何度もありました。けれども，私たちは祈りを捧げ，主の導きを受けているという確信を持つことにより，その恐れを追い出しています。

お父さん，私は教会を愛しています。お父さんとお母さんから教えられたように祈ることができる自分を誇りに思っています。また家族が朝晩私のために祈ってくれていることを知っています。……」

霊性は家庭の中で生まれ，家庭の

夕べや朝晩の祈り，そして一日を通じてしばしば捧げられる祈り，家族が毎週そろって行く集会の中で育まれる。人の生活の基盤となるこの霊性は，いざという時にその人を救出に向かうのである。

安心感というものは，莫大な富から生まれるのでなく，揺るぎない信仰から生まれるのである。そして，一般的にこうした信仰は家庭の中で幼児期に生まれ，育まれる。

祈りは霊的な力を得るための通行証である。

第二次世界大戦の折，故郷から遠く離れた戦地に送られたユタの青年の話がある。

彼はごく普通の腕時計をしていた。けれどもどういうわけか，彼は現地の時間とは違う時間を表示している時計をもうひとつ，それも古びた重い時計をポケットに入れていた。戦友たちは，彼がしばしば腕時計を見て，次にポケットから古い時計を出して見ているのに気付き，なぜふたつも時計を持っているのかと尋ねた。すると彼はためらう様子も見せずに，こう答えた。

「腕時計はここの時間を，父がくれたこの大きいのはユタの時間を見るのさ。僕の家族はとても大勢だけど，みんなとても仲が良くてね。大きい時計が朝5時を指すと，父が牛乳を搾りに行くことが分かるし，夜は7時半になると，家族全員が食卓を前にひざまずいて，食べ物を主に感謝し，僕が守られ，清く立派な生活をするよう主に祈っていることを心に浮かべるんだよ。そのお陰で，僕はどんな辛いことにも向かってゆくことができるんだ。……ここの時刻はすぐに分かるけど僕が本当に知りたいのはユタの時刻なんだ。」（ボーン・R・キンボール著『故郷の時刻』より改作「リーダーズ・ダイジェスト」1944年5月号，p. 43）

私はこの家族をよく知っている。海軍軍人の息子は知らないが，父親を知っている。牛を飼って大家族を養っていたが，父親が一番関心を寄せていたことは，ミルクやパン以上のものを必要とする発育盛りの子供たちのことであった。私はこの素晴らしい家族と共にひざまずいて祈りを捧げたことがある。家庭における訓練がこの大家族に永遠の祝福をもたらしている。

教会の100万に上る家族がこのように朝晩祈りを捧げたら，この世はどれほど素晴らしい状態になることであろうか。またこの地の1億近い家族と世界の何億という家族が一日二回息子や娘のために祈りを捧げるとしたら，この世はどれほど素晴らしい世界になるであろうか。また全世界の10億に上る家族が家庭の夕べを開き，教会に集い，さらにはひざまずいて子供たちと家族，指導者，政府のために祈りを捧げるとしたらどうであろうか。

このような生活こそが，身を変えられた義人エノクの歩んだ道へと向かわせるのである。そして福千年を迎える準備ができる。エノクが自分について尋ねられた時の答えの中に，次のような言葉がある。「……わが父は神の道をすべてわれに教えたり。」（モーセ6：41）そしてエノクは神とともに歩き，姿を消した。神がエノクを取り上げられたからである。

エノクとその民は聖なる都シオンで正義の中に住んだ。そしてシオンは天に取り上げられた。

ここに答えがある。すなわち，正義，両親の教え，従順で愛に満ちた子供たち，家庭の務めに忠実であること，である。

このような資質が見られる家庭は，子供たちに安心感を植え付け，人格を築く。

次に，100年以上の昔に書かれたアデレイド・プロクターの詩を読んでみたい。家族の一致と両親の真の愛が描かれている。

子供に恵まれない金持ちが，7人の子供を持つ親に富と子供一人とを交換しようと言った。ではどの子供がいいだろうか。

「どの子にしたらいいだろうか。どの子にしたらいいだろうか。
私はジョンを見た。するとジョンも私を見詰めた。
何か言わなくては，と我に帰った時，
私の声はいつもと違う弱々しい声になっていた。
『ロバートが言ったことをもう一度言って下さい』
私は聞きながら，うつむいた。
『7人の内のひとりを永久にくれたら，あなたの生きている限り，家と土地を差し上げましょう。』
私はジョンの着ている古い擦り切れた服を見た。
ジョンはこれまで貧しさに耐え，働き，そして子供たちを育ててきた。
何とかしたいと思いながら，私にはできなかった。
食物を求める7つの小さな口，7人の小さな子供たちの求めるものを考えた。
そして，私は言った。
『ジョン，こちらへ来て下さい。みんなが眠っている間に，どの子にするか決めましょう。』 愛するジョンと私は手を取って子供たちを見に行った。生まれて間もないリリアンが眠っているゆりかごに，そっと歩いて行った。
夢を見ているのだろうか，それともだれかと話をしているのだろうか。お父さんの手が優しく娘の方に伸べられた時，
『いいや，この子じゃない。』彼は

言った。
私たちはベッドの傍らに立った。
淡い光が，快く眠る子供の顔に注いでいた。ジェームスの赤いほおに，まだ乾いていない涙の跡が光っていた。ジョンは何も言えなかった。
『この子もまだ赤ちゃんよ』と私は言った。私たちはジェームスにキスをすると，急いで立ち去った。
病気で青白いロビーの顔には，苦しみの跡が残っていた。
『冠をたとえ千もらったとしても，この子ははだめだ』
お父さんはこうささやいた。私たちの目は涙でかすんでいた。
かわいそうなディック，悪い子ね。わがままな息子ディック。
乱暴で，落ち着きがなく，怠惰な息子。
この子にしようか。
いいや，神は死ぬまでこの子を助けよと命じておられる。
このような子を我慢できるのは，母親しかいないのだから。
ジョンは言った，『この子を私たちの祈りからはずすのはよそう』
そして，そっと掛け布団を掛けながら愛にあふれた娘マリーの傍らにひざまずいた。
『この子にとっては，いいかも知れませんね』私はジョンに言った。ジョンは静かに娘のほほにかかった髪を直すと，頭を振って『いいや，この子はだめだ』
残っているのは長男だけ。頼りがいがあり，忠実で善良でしかも明るく，お父さんそっくりの男の子。『いいえ，ジョン，この子を行かせることはできません』
そして私たちは，ひとりもあげることはできないと，ていねいに手紙を書いた。
それからの私たちは苦しみが和らぐ思いがした。
私たちが夢見たことを考え，見慣れた子供たちの顔がひとつも欠けていないことの幸せをかみ締めた。
ほかのことはすべて天におられるお方にゆだねて，7人の子供たちのために働けることを感謝する。」

願わくは，私たちが教会にあっても世にあっても主の方法を知り，それに厳密に従うことができるように。ハロルド・B・リー大管長が主より召された世の予言者であることを厳粛に証し，イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

救いは教会を通じて得られる

十二使徒評議員会会員

マーク・E・ピーターセン

この世で導きと教えを施すみ業に携わられた救い主が教会を設立された時に，そして当時の十二使徒が教会をさらに発展させている間に，ひとつの重要な事実がはっきりと浮彫りにされた。それは，救いは教会を通じて得られるということである。

救いは分離した組織や分裂したグループ，あるいは個人的な党派から得られるものではない。それは主が建てられた教会によってのみ得られるのである。

教会は聖徒たちを整えるために組織されたものである。また奉仕の業を行なうために建てられたのであった。

パウロがエペソ人に語ったようにキリストの体を建てさせるために用意されたのが教会であった。

したがって，救いは教会にあり，教会から出，教会を通じてのみ得られるのである。

主は一本のまっすぐな狭い道を設けられたが，「それを見いだす者が少ない」ことも承知しておられた。

主は，正式に組織された主の教会によらなければ救いが与えられないようにされた上に，教会員が様々な教えの風に吹きまわされたり，もてあそばれたりしないように，また悪巧みをもってだまし惑わそうとする巧妙な人々から守られるように，守護者を置かれた。(エペソ4：14参照)

その守護者とは，パウロのエペソ人への手紙によれば，まず第一に神が特別な目的のもとに教会の長として選ばれた使徒と予言者であった。

彼らは神より霊感を受けた教会の指導者であった。彼らは主の代弁者であり，彼らの語る霊感に満ちた言葉は主のみ心であり，み旨であり，主のみ声であり，救いに導く神の力であった。(教義と聖約68：4参照)

これほどに天の導きを受けているなら，だれも迷うこともなかったはずである。

しかし主の時代にも，偽りの教えを教えて，民を誤った道に誘う人々がいた。救い主は彼らを痛烈に批判し，彼らは教えを述べているだけであって明らかにモーセの律法からの背教であると非難された。

主は彼らに言われた。「モーセはあなたがたに律法を与えたではないか。それだのに，あなたがたのうちには，その律法を行う者がひとりもない。」(ヨハネ7：19)

そしてまた言われた。「もし，あなたがたがモーセを信じたならば，わたしをも信じたであろう。モーセは，わたしについて書いたのである。」(ヨハネ5：46)

何と悲しい言葉であろうか！もし当時の人々が言葉巧みな偽教師でなくモーセを信じていたならば，キリストを信じたはずである。モーセはキリストについて書いているからである。またもしイエスを受け入れたならば，イエスの教会から救いを得たであろう。

しかし人々は偽教師に目をくらまされてモーセをもキリストをも拒み，そのため主の教会に入らず，教会から得られる救いも受けなかった。

現在の聖書にはモーセの著書のすべては含まれていないが，救い主の時代にはあったことが明白である。なぜなら長老や律法学者はモーセのキリストを証した言葉を信じていないとイエスが批判したからである。

モーセは救い主のことを証した。しかし人々はそのモーセを信じようとはしなかった。彼らにはまだキリストを受け入れる用意ができていなかったのである。これは興味深いことである。モーセの律法はキリストを連れて行く養育掛だというパウロの言葉が思い出されはしないだろうか。(ガラテヤ3：24，25参照)

モーセばかりでなく，他の予言者も主について書いている。ペテロはイエスについて語った。「予言者たちもみな，イエスを信じるものはことごとく，その名によって罪のゆるしが受けられると，あかしをしています。」(使徒10：43)

使徒行伝の28章には，パウロがローマ滞在の間に大勢の人がやって来たので，「朝から晩まで，パウロは語り続け，神の国のことをあかしし，またモーセの律法や予言者の書を引いて，イエスについて彼らの説得につとめた。」(使徒28：23) ことが記録されている。

これらのことから見れば，当時の聖典はすべての予言者が証した通り，繰り返し救い主について語っていたことが明らかである。

したがって，聖典がはっきりと主について告げていることを充分承知しながら，民を迷わせ，主を十字架にかけるよう扇動した人々に，弁明の余地はない。

新約時代のこの偽教師たちは神の真のみ業から分離，離脱して自分の宗教を作った。人の考え出したしきたりを持つ彼らは，み業を始めたイエスに反対する者の主流となったのである。

あなたがたはそれらの宗派の内，幾つかの名前を知っているであろう。パリサイ派とサドカイ派が一番知られている。両派とも背教の教えを持ち，主から非難され，そのかたくなな信仰によって，結果的に主を十字架につけるに至ったのである。

ほかにも宗派がある。モーセの律法を厳格に守るザドク派。

死海の書を書いたと信じられているエッセネ派。彼らは神殿での礼拝を拒んだ。

反ローマの熱心党。

とりわけ強力だったのは，ギリシャ哲学を導入し，モーセの律法と融合させようとしたヘレニストである。彼らも神殿での礼拝を拒んだ。

しかし主が教えと導きを施していた間にも新しい背教が進んでいたのである。ヨハネ伝の6章の記録に見られるように，こうした背教は早くから起こっていた。新約聖書のこの章を読めば，主の弟子たちの多くがキリストの純粋な教えを受け入れようとせず，主から離れ去ったことが分かる。

落胆されたイエスは，十二使徒に向かって，「あなたがたも去ろうとするのか」と尋ねられた。

するとシモン・ペテロが答えた。「主よ，わたしたちは，だれのところに行きましょう。永遠の命の言をもっているのはあなたです。」

この永遠の生命の言葉が，脱落した人々ではなく，信仰厚く忠実に主のもとにとどまった人々とともにあったことに注意していただきたい。

こうして十二使徒の時代に，再びひどい背教が起こった。そのため新約聖書の書簡のほとんどはこうした背教と闘うために書かれたのである。

歴史家は，キリスト以後の100年間の内に30ものキリスト教宗派が出現したと述べている。

そのほか，教会初期の背教の証拠はパウロがコリント人へあてた第一の手紙の中の書き振りからみても明白である。

パウロはこの手紙の中で，キリストには分争があり得ないと証した。彼は言った。「さて兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの名によってあなたがたに勧める。みな語ることを一つにし，お互いの間に分争がないようにし，同じ心，同じ思いになって，堅く結び合ってほしい。」(Ⅰコリント1：10)

ごく初期に興ったキリスト教の宗派には，次のようなものがある。

ユダヤ的キリスト教を試みてモーセの祭式を取り入れさせたユダヤキリスト教。

至福千年派。

聖餐式にぶどう酒ではなく水を用いる慣習を続けているエビオン派。

エホバとモーセの律法を否認したグノーシス派。

バプテスマの施行で知られるエルケサイ派。

至高なる母の存在を教えたアーカン派。

現在エジプトに残存するコプト派。

シリアキリスト教。

別のバプテスマ施行派のマンダヤ教。

マネキン派，その他数々の宗派。

紀元70年頃にエルサレムが崩壊した後，ギリシャの影響が地域の既存文化に根を下ろしたのを利用して，ヘレニストがキリスト教の上位に立った。その結果ギリシャ哲学思想がキリスト教に強い勢いで入り込み，福音の教義と儀式が変えられた。これについては，ニケア宗教会議で論争したアリウスとアタナシウスがどちらもギリシャ哲学者であったことで，より容易に理解できるであろう。それは，初期の新約聖書の原本がギリシャ語で書かれた理由でもある

ここに挙げた歴史の一端は，分派を防ぐことの大切さをはっきり示している。パウロが述べたように，ある者は「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケパに」(Ⅰコリント1：12) と言うが，キリストに分裂はない。イエス以後に救い主はなく，イエスは人の作った教義や儀式に従った者でなく，御自身がお定めになったまっすぐな狭い道を歩む者だけを救われるのである。

それゆえに，教会員が真の教会から離れず，背教せず，破門されるような罪を犯さないということは実に重要なことなのである。

人がみずから主の教会から離れる

ならば，それによって救われるための手段から離れることになるのである。救いは教会を通じて得られるからである。

現在，ある人々は自分の宗教を作り出しており，その中のある者は教義と聖約85章を盾に取ろうとする。

彼らは，教会はすでに道をはずれ，指導者に霊感は下らず，主につける事柄をあずかる「一人の強くして力がある者」が必要だと主張する。また確たる証拠もなしに，自分がその力ある者であると名乗り出る。

その章に，彼らが見落としたひとつの決定的な聖句がある。そこには，背教者や教会から絶たれた人々は，末の日に至高者なる神の聖徒たちの中に数えられないと書かれている。なぜなら救いはほかならぬ教会にあるからである。

主のみ言葉に耳を傾けなさい。

「また，大神権を有する者はもちろん小神権を有する者，教会員たちにして律法の書にその名を見出されざる者，或いは教会に叛きたることを知られまたは教会より絶縁せられたることを知られたる者は，その日に於ていと高き神の聖徒の中にあるゆずりを見出すことなかるべし。」（教義と聖約85：11）

しかし自分の宗教を作り出す人は教会を破門された人に限らない。道徳的な背罪や主の定められた規範を破ったために教会から締め出される人々がいるが，彼らもこの聖句を熟考すべきである。

人がもし心から神を信じるならば，またもし自分の救いに思いを懸けているならば，聖句に言われているように，救いが教会を通して得られること，また何らかの理由でもし教会から絶縁されるようなことがあれば神の王国のゆずりを失ってしまうことを認識すべきではなかろうか。

ブリガム・ヤング大管長は背教者の行く末を意味深長な言葉で表現している。

「人々はなぜ背教するのだろうか。今『古船シオン』に乗っていると想定しよう。私たちは大海のただ中にいる。そして嵐に見舞われると船は困難を極め，なかなか前に進めない，『もうこれ以上ここにはおれない。これが「シオン」の船とはとても信じられない。』『しかし私たちは今大海の真中にいる。』『いや構わない。こんな所にじっとしていることはできないのだ。』彼は上着を脱ぎ，海中に飛び込んだ。彼はおぼれないだろうか。もちろんおぼれたであろう。この教会を離れる人はこれと同様である。教会は『古船シオン』であり，この船の中にとどまろうではないか。」

また彼はこのように付け加えた。「もし全能者の掲げるろうそくがここから輝き出ないとしたら，ほかのどこに光を捜しても無駄である。」そしてこのイスラエルのつわものはこう語った。

「教会員のある者に，全教会の諸事を導く大管長の権利を疑う気配が見えた時，それは背教のきざしであり，放置しておけば教会からの逸脱と終極的な滅びへと導かれるであろう。どのような召しの資格であれ，この王国の正式に任命された役員に対して反対する動きが感じ取られる時には，もしそれが持続されるならば，それと同様の結果を招くであろう。」（*Discourses of Brigham Young*「ブリガム・ヤング説教集」pp. 83，85）

主のみ言葉は簡明で理解しやすい。教会から背教した者，主の備えたもう正規の法廷で教会から絶縁された者は悔い改めない限り，いと高き神の聖徒たちの間にゆずりを見いだすことはないであろう。

救いは，古代あるいは初期のキリスト教時代にモーセの教えを汚したり，律法を犯したり，儀式を変えたり，永遠の聖約を破ったりした様々な宗派の中に見いだされないのとまったく同様に，今日の各分派にも見いだされない。

主は教義と聖約の同じ章の中で，さらに言っておられる。「……覚えの書に載せられざる者たちは，すべてその日にゆずりを与えられずして寸断にせられ，彼らの受くべき分は不信者の中に定められ，その所にて悲しみ切歯（はがみ）することあらん。」（教義と聖約85：9）

教会から破門されても神権と神殿の祝福は取り上げられないと言う人がいる。結び固めの力を持つ人は解く力もあることを思い出そうではないか。主は真の僕について，「あなたが地上でつなぐことは，天でもつながれ，あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう」と言われたからである。（マタイ16：19，教義と聖約132：46）破門は教会の祝福と権利，特権の一切を剝奪するものである

救いほどに貴重なものがあるだろうか。それはいかにして勝ち取ったらよいのであろうか。それは，教会を通じて，教会のプログラムに「熱心に参加することによって」のみ得られるのである。

ほかに道はない。もし私たちがイエスについて雄々しく証せず，悔い改めなかったならば，王国の王位を失って他の場所に行かなければならない。（教義と聖約76：79参照）

しかし私たちには悔い改めという素晴らしい原則が与えられている。主は，罪を悔い改めてその後に主の命令のすべてを守るならば，赦しが与えられて，新たに生れることが可能であると言われた。

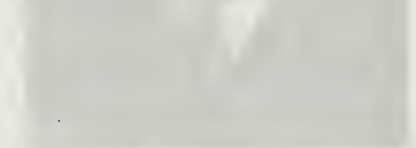
過ちを犯した者にとって，これに勝る大きな約束があるだろうか。

主は罪人を救うためにこの世に来られた。主は病人には医者が必要であると教えられた。こうして，主は他の人々と同じように病人も招き，我れに来て，悔い改め，汚れを取り去って，聖められ，主の王国で救いを得るようにと言われた。

「主なる神は言われる，わたしは悪人の死を好むであろうか。むしろ彼がその行いを離れて生きることを好んでいるではないか。」(エゼキエル18：23)

主は愛と隣れみをもって次のように呼び掛けておられる。

「すべて重荷を負うて苦労している者は，わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから，わたしのくびきを負うて，わたしに学びなさい。そうすれば，あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく，わたしの荷は軽いからである。(マタイ11：28—30)

主のくびきとは教会から離れないこと，主の荷は私たちに対して，神の口から出るすべての言葉に従うことであることを忘れないようにしようではないか。これらのことを，聖なる主イエス・キリストのみ名によりへりくだって証する。アーメン。

救い主の福音

十二使徒評議員会会員

ハワード・W・ハンター

大会も終わりに近づくと，救い主の教えの中で，まだだれも取り上げていないテーマを探すのは非常に難しくなってくる。兄弟たちが語った事柄をまとめる能力が私にあればと思うが，私は救い主が教えを施された状況のひとつを取り上げて話してみたい。

私がこれを取り上げるのは，全世界のキリスト教徒が救い主の地上における最後の数日間に起きた出来事，主の死と復活を記念する復活祭を迎えようとしているからである。私たちがはるか昔に起きたこれらの出来事に思いをはせることができるのは，新約聖書のお陰である。しかし，主は死をもって使命を終えられたのではない。

キリストの第二の証人であるモルモン経は，主の教えに関してさらに知識を提供している。この記録は，主が死と復活の後にこの西半球に現れたもうたことについて言及しており，大いなる贖いの犠牲について深い理解を与えてくれる。

ニーファイ人の予言者たちは，救い主が十字架にかけられる時にこのアメリカ大陸の民にしるしが示されると予言した。そして予言通りに破壊的な大混乱が起きた。かつて聞いたことのない雷鳴がとどろき，稲光が天地を貫き，地震が発生した。ゼラヘムラ市は焼け落ち，モロナイ市は海に沈んで民は溺れ，モロナイハ市は土に埋まった。街道は破壊され，ほかにも多くの都会が壊滅し，また大風のために死亡した人や吹き飛ばされた人も多かった。このような暴風と天変地異が3時間続き，全地の様相は一変してしまった。

天変地異が鎮まると，今度は暗黒の霧が出て，3日間何も見ることができなかった。暗黒の中から聞こえてきたのはひどい悲しみと嘆きと泣き叫ぶ声だけだった。

「ところで，地の全ての人々に聞える声があって次のように言いたもうた。

『禍なるかな。禍なるかな。この民は禍なるかな。全世界の人々悔い改めずば禍なり。わが民の中にて美しき男子と女子とが死にし故に悪魔は笑いその使たちは共に楽しみ喜べり。されどこの美しき男子と女子の亡びたるは，かれら自身の為したる悪事と憎むべき行いの結果なり。」(IIIニーファイ9：1－2)

この声は全地に起こった破壊を次から次へと述べた。天変地異を経て生き残った人々は心を改めるよう命じられた。悔い改めて，救い主の福音に心を向ける者には望みが残されたのである。

そして声の主はこう名乗った。

「見よ，われは神の子イエス・キリストなり。われは天地とその中にある万物を造れり。われは最初より御父と共に在りき。而して今，われは御父に在り，御父はわれにまします，御父はすでにわれによりその御名の栄えを示したまえり。

われは，わが民のところへ降りしが，わが民はわれを受け容れざりき。すなわち，わが来ることを示す聖文はすでに事実となりたり。」(IIIニーファイ9：15—16)

主は，モーセの律法はその目的を達したため，もはや燔祭を要求されないこと，犠牲として主に捧げるべきものは，へりくだりたる心と悔いる精神であることを告げられた。

「われがこの世に来れるは，世の人に贖いと救いとを与え，また世の人を罪より救うためなり。

この故に，悔い改めて幼児のごとくわれに来る者は，われことごとくこれを受け容れるべし。かかる者はすでに神の王国に居る者と同じなればなり。見よ，われはかれらのために一度わが生命を捨てて，また生命

を得たり。故に，世界の隅々に至る者たちよ。悔改めををなし，われに来りて救いを受けよ。」（Ⅲニーファイ9：21—22）

長い沈黙と暗黒の時が過ぎて再び，民を悲しむ主の声があった。そして，人々が「真心より悔い改めてわれに立ち帰らば，雌鳥がその雛を翼の下に集むるごとくに」人々を集めると約束された（10：6）。暗黒はなお続く。そして3日目の朝にようやく地震が治まり，静けさを取りもどした。キリストが墓からよみがえられたのである。そして，西半球のこの地に住んだ多くの義人も，ユダヤの聖徒たちと同様に復活した。

多くの民がバウンテフルの地の神殿に集った。聖典の記事を追いながら，偉大な教えを学んでゆきたい。人々は，地震と津波の結果地の様相が一変したことを，これらのしるしによって示されたイエス・キリストについて話し合っていた。このように人々が話していると，次のように言う声が聞えた。「わが喜ぶ愛子を見よ。われはこれに由りてすでにわが名の栄光を示しぬ。わが愛子に聞け。」（Ⅲニーファイ11：7）群衆が天を仰ぐと，白い衣を召した一人の男の方が降り，彼らの中に立たれた。

「時にそのお方は手を伸して群衆に話しかけて仰せになった。

『見よ，われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。

われは世の光にしてまた世の命なり。われは御父がわれに授けたまいしかの苦き杯をすでに飲み，……

汝らわが肋にその手をさし入れ，わが手足にある釘あとに触れ……るために起ちてわれに近づけ』と。」（Ⅲニーファイ11：9—11，14）

主は十二人の弟子を召して彼らにバプテスマを施す権能を授けられた。群衆に対しては論争をやめるように命じ，そして，東大陸の弟子たちに宣言された真理を教えられた。山上の垂訓，主の祈り，モーセの律法の成就などについてである。また主は病人を癒し，幼な子を祝福し，聖餐を施行し，聖餐について教えられた。

救い主はニーファイ人に対して福音を定義しておられる。また計画の素晴らしさ，人が永遠の生命と昇栄を得るための条件について述べておられる。主の言葉を読んでみよう。

「見よ，われはすでにわが福音を汝らに授けたるが，その福音を言い換うれば次のごとし。まずわが父われをつかわしたまいたれば，われは父のみこころを行わんとてこの世に来れり。

わが父のわれをつかわしたまいしは，われが十字架にかけられて，後にあらゆる人々をわれに引きよせんがためなり。また人がわれを十字架に上げたる故に，今度は御父が世の中の人を必ずひき上げて，これを各々の行いの善悪に応じて裁判するためにわが前に立たせたもう。

悔い改めてわが名によりてバプテスマを受くる者は聖霊に満さる。またその者が終りまで忍ばば，われが世の中の人々を裁判する日に，御父の前にてこれを罪無き者とせん。

終りまで忍ばざる者は，また切り倒されて火の中へ投げこまるべし。その者は御父の正義が要求するによりて，いつまでも火の中より出ることを得ず。

さて，世界の隅々に至る者たちよ。汝らは聖霊を受けて聖められ，また終りの日にわが前に罪なしとせられんために今悔い改め，われに来てわが名によりてバプテスマを受けよ。これ汝らに与うる命令なり。われまことに，まことに汝らに告ぐ，以上はわが福音なり。……」（Ⅲニーファイ27：13—14，16—17，20—21）

福音はよきおとずれとも救いの喜ばしいおとずれとも呼ばれている。救いの計画はイエス・キリストの福音である。主は御父のみこころに従うことにより地上での使命を果たし，それによって全人類の贖い主となったことをニーファイ人に説明された。さらに「悔い改め，わが名によりてバプテスマを受けよ」との言葉により，永遠の生命に通じる細い道の門を明示しておられる。これを踏まえて，信仰箇条は次のように宣言している。

「われらは，キリストの贖罪により，すべての人類は，福音のおきてと儀式とを守ることによりて救われ得ると信ず。

われらは福音の第一原則と儀式とは第一，主イエス・キリストを信ずる信仰。第二，悔改め。第三，罪の赦しを受くるために水に沈めらるるバプテスマ。第四，聖霊の賜を授かるための按手礼なることを信ず。」（信仰箇条，第3，第4条）

これらは，福音のすべての原則と儀式の中で最初に従わなければならない4項目に過ぎない。ニーファイ人に語った救い主の言葉にもどって考えてみると，これらの4項目に従った後，生涯主の戒めと律法に従わなければならないことが分かる。主が次のように言われたからである。「……またその者が終りまで忍ばば，われが世の中の人々を裁判する日に，御父の前にこれを罪無き者とせん。」（Ⅲニーファイ27：16）

第一原則に従うだけでは不十分である。人は永遠の裁きの場において，この世での行ないの善悪に対して責任を問われる。まさしくこの目的，すなわち全人類に復活と裁きをもたらすために贖罪が行なわれたのである。主はこのことを明確にするため，次のように述べておられる。「われが十字架にかけられたるはこのわけなり。すなわち，われは御父の権能に

よりてあらゆる行いによりて裁判をなす。」(IIIニーファイ27：15)

福音の計画を分析してみると，ふたつの部分に分かれる。

第一は，アロン神権の権能の下に執行される準備の福音である。教義と聖約84章には次のように記されている。「されど小神権は続きたり。而して，この神権は天使の人を助くる鍵と備えの福音の鍵とを保つ。またこの福音は悔改めとバプテスマ……に関わる福音にして……。」(教義と聖約84：26―27)

第二は，メルケゼデク神権の権能により執行される完全な福音である。先の啓示から読んでみよう。「而してこの大神権は福音を授け，また王国の奥義の鍵，すなわち神の知識の鍵を保つものなり。

この故に，これを以て礼式を執り行う時に神の能力顕る。

而して，この神権を以てする礼式と神権の権能なくしては，肉身を持てる人間に神の能力顕るることなし。

そはこれなくしては，何人も神の御顔，すなわち御父の御顔を見て生き得る者なければなり。」(教義と聖約84：19―22)

主は復活後しばらく，ニーファイ人を訪れて福音の計画を明らかにされた。私たちが罪の赦しを受けるための準備の福音と，王国への入口がはっきりと示されたのである。聖霊のみたまの祝福を受けて人が享受できる完全な永遠の福音への道が示されたのである。つまり，ふさわしい生活をするならば，私たちは神につける知識を得，復活によって神よりの承認を受ける。

復活祭を間近に控えて，私たちは，西半球の民の記録に対する感謝の念を今一度新たにする必要がある。これは復活した救い主がニーファイ人に教えられた事柄の記録であり，主の神聖な使命に対するもう一人の証人である。私はモルモン経が神のみ言葉であることを知っている。

私はイエスがキリストであることを証する。もし，世の人々が，主の言われた通りに福音の原則に従って生活するならば，単なる休戦ではなく，真の平和が全人類にもたらされるであろう。主は言われる。「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える……」(ヨハネ14：27)

願わくは，私たちが救い主の戒めを守り，地上における主の予言者の勧告に従うことにより，この平安が実現されるよう，主イエス・キリストのみ名により祈る。アーメン。

汝ら聖なる所に立つべし

大管長

ハロルド・B・リー

私は，この教会の業のために主御自身が選ばれた偉大な人々のことを考えると，自分の心が喜びに満たされるのを感じる。この偉大な人々とは，教会幹部の方々のことであり，また十二使徒評議員会地区代表，十二使徒評議員会及び七十人最高評議員会伝道部代表を務めて下さっている方々のことであり，さらに，様々な組織で働いて下さっている人々のことである。その重要な地位に召された人々のことを考えてみると，まったく奇跡としか言いようのない方法で，必要な人が，必要な時に，必要な職に任じられてきており，これに驚きを禁じ得ない。

私は，幹部の兄弟たちの説教を聞いて，予言者アルマによって与えられたひとつの教えのことを思い起こしていた。改宗したばかりの人々が，モルモンの泉の傍らでバプテスマを待っていた時のことである。アルマは，バプテスマを受ける者として結ぶ誓約がどのようであるか説明して次のように言った

「……あなたたちは神の羊の群に入って神の民と言われること，互いに苦難を軽くするために喜んで助け合うこと，

悲しむ者を思いやって共に悲しむこと，慰めが要る者を慰めること，また……いついかなる時でも，どのような所に居ても，どんなことについても，……神の証し人になりたいと心から思っている。

従って，あなたたちがもしも真心からこれを望んでいるならば，あなたたちは主からますます豊にその『みたま』を賜るよう，主に仕えてその命令を守るという誓約を主に立てた証拠として，主の御名によってバプテスマを受けるのに何のさしつかえがあろうか。」（モーサヤ18：8—10)

私は，あなたたちに，この誓約の条件のひとつである「互いに苦難を軽くするために喜んで助け合うこと」という点を注目していただきたいと思う。このことは大会の中でもしばしば強調されてきた。もし私が，「この世で人が背負わなければならない最大の苦難とは何だろうか」と尋ねたら，あなたたちは何と答えるだろうか。人がこの世で背負わなければならない最大の苦難，すなわち重荷とは，罪の重荷である。一体この罪の重荷を軽くするためには，どのように助け合ったらよいのだろうか。

数年前，ロムニー副管長と私がオフィスにいた時のことである。ドアが開いて，ひとりの立派な青年が入って来た。しかし，その青年の表情にはありありと苦難の色がうかがえた。青年は言った。「リー長老，ロムニー長老。私は明日はじめて神殿に入ります。私は過去にある過ちを犯しました。私は監督の所に行き，そしてステーキ部長の所へ行き，その罪を皆完全に告白しました。そして，私が悔い改めて，二度とそのような過ちを犯さずに，ある期間たったので監督とステーキ部長は，神殿に入る準備ができたと判断して下さいました。でも，それで十分とは言えないのです。どうしたら主が私を赦して下さったということを知ることができますか。」

そのような質問をして来る人に，あなたたちならどう答えるだろうか。私たちはしばらく深く考えて，モーサヤ書にあるベンジャミン王の説教のことを思い出した。この箇所では，バプテスマを求める群衆のことが書かれている。群衆は，自分たちが肉の欲に支配されている有り様を省みて，次のように言った。

「かれらは，……声をそろえて高く叫んで言った『ああ憐みたまえ。キリストの血による身代りの贖罪の効

力を及ぼして，われらが各々その罪を赦されて心を清められるようになしたまえ。……』

それから後，かれらは……もはやその罪の赦しを受けて良心が安らかになったから，主の『みたま』がかれらに下ってその心が喜びに満たされた。」(モーサヤ4：2，3）

ここに答えがあった。

自分が何者であろうと，どこにいようと関係なく，罪を悔い改めるために自分のできることはすべて行い，能力の限りを尽くして償いと回復をしたなら，また，その罪が教会員としての資格に影響を与えるものである場合は，しかるべき権能を持つ人の所へ行ったのなら，その時には，主が自分を受け入れて下さったのかどうか知りたいと心から願うことであろう。もし心の奥底から良心の安らぎを求め，見いだすなら，そのしるしによって，主が悔い改めを受け入れて下さったことを知ることができるのである。しかし，サタンは別の考え方を抱かせようとすることであろう。しかもときには，すでに一度過ちを犯したのだからもとにもどることはない。だからどんどん罪を犯し続けた方がいい，とそそのかすかも知れない。これは大きな間違いである。赦しの奇跡は，悪い行いを捨て去って，二度と同じ過ちを犯さない人々には皆与えられるものである。それは，主が今日私たちに与えられた啓示で次のように言っておられるからである。「………汝ら往きて今より罪を犯すなかれ，罪を犯す者（再び罪を犯すの意）には前の罪彼に返るべしと主なる汝らの神言う。」(教義と聖約82：7） 罪の重荷のために苦しんでいる人がいたら，そのような人は皆，この聖句を心に留めておいていただきたい。

また，教師である人々に申し上げる。そのような罪の重荷を背負っている人々から，また良心の苛責に耐え兼ねて動きのとれなくなっている人々からその重荷を取り除くために，彼らに手を差し伸べていただきたい。そのような人々は，自分がどこに行ったら答えを見付け出すことができるか，知らずにいるのである。悔い改めて，完全に償いができるまで助けを与えるなら，彼らもまた，良心の安らぎを得，主がその悔い改めを受け入れて下さったことを主のみたまによって確信することができる。

幹部の兄弟たちの説教を通じ，助けを必要としている人々を助けなさいという偉大な呼び掛けがあった。それは物質的な助けばかりでなく，霊的な助けについても言える。今日，私が目にする最大の奇跡は，かならずしも病める肉体の癒しではない。むしろ，私が目にする最大の奇跡は，病める人，すなわち心に病を持ち，落胆して取り乱し，まさに精神的に挫折する一歩手前にいる人々の癒しである。私たちはそのような人々にもすべて，援助の手を差し伸べている。それは，そのような人々も主の目には大いなる者だからであり，またただれひとりとして，自分は忘れているのだと感じることがないよう私たちも望んでいるからである。

私は神殿に通じる美しの門という所でペテロとヤコブに起きた出来事を何度も読んでいる。そこには，生まれつき足の利かない男が門の所で人々から施しを請うていた。そしてペテロとヨハネが通り掛かった時，この足なえは施しを願って手を差し伸べた。当時教会の役員であったこのふたりの宣教師を代表してペテロはこう言った。「わたしたちを見なさい。」もちろん，この足なえは何かいいものをもらえると思ったであろう。するとペテロは言った。「金銀はわたしには無い。しかし，わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい。」(使徒3：4，6）

私は今，この男が心の中でどう思ったかはっきり描くことができる。「この人は私に歩くように命じたが，私が歩けないのを知っているのだろうか。」続いて聖書にはこう書き記されている。ペテロはこの男に歩くよう命じただけで満足しなかった。「彼の右手を取って起して」やったのである。(使徒3：7）

それではあなたがたは，使徒の頭であるこの気高い人が，おそらくこの足なえの肩に手を掛けて次のように語っている姿を心に描くことができるだろうか。「さあ，私の友人よ。勇気を持って立ちなさい。私が一緒に歩いてあげよう。あなたは，神がその僕である人間に授けられた権威と権能によって祝福されたのであるから，かならず歩けるはずです。」こうしてこの男は躍り上がって歩き出した。

あなたがたは自分が低い所にいて他人を引き上げることはできない。もし人を救いたいと思うならば，その人にこうなって欲しいと望むことを，まず自分自身が模範で示すことである。自分が心の内に燃えていなくて，他の人を燃やすことはできない。あなた方教師が持っている証また，教え導くみたまこそ，助けを必要としている人を励ます上でもっとも大切な特質である。私たちが今，どのような状態にあろうと，私たちの中にこうした励ましを必要としない人がいるだろうか。

しばしの間，数年前に私の身の上に起きた出来事について話を聞いていただきたいと思う。その頃，私は潰瘍（かいよう）を病んでいて，それは日増しに悪化していた。私たちはその時，伝道部を視察中であったが，ある日の朝，妻のジョーンも私も，できるだけ早く家へ帰るようにという霊感を

受けた。そのため，計画していた様々な集会を変更して，家へ帰ることにした。

その帰途，私たちが飛行機の前部座席に座っていた時のことである。何人かの教会員が次のセクションに座っていた。ところがある所まで来ると，だれかが私の頭の上に手を按くのである。そこで私は顔を上げて見たが，そこにはだれもいなかった。家に着く前に，また同じ事が起こり，再び同じ経験をした。それが一体だれであったのか，また何によったのか，私には分からなかった。しかし数時間後，私は自分がその時祝福を受けていたことを，しかも最も必要とする祝福を受けていたことを知ったのである。

家に着くとすぐに，妻は非常に心配して医者を呼んでくれた。すでに夜の11時ごろであった。医者が私に電話口に出てくれと言ったので出てみると，気分はどうか，と尋ねてきた。私は「ひどく疲れている。でも，大丈夫だと思う」と答えておいた。ところがその直後，私は大量の血を吐いた。もしそれが飛行機の中で起こっていたら，私はきょう，こうしてここに立ち，この話をすることもなかったであろう。

私は，ほかに助けを得るすべのない時には，かならず神からのみ力がいただけることを知っている。

私は，今自分に与えられている責任の圧倒的な重さをひしひしと感じている。もし私がただ座って，その重荷について思い巡らしているだけであったら圧倒された気持になり，その重荷に耐え兼ねていたに違いない。しかし私はみたまの導きを受けて，N・エルドン・タナー副管長とマリオン・G・ロムニー副管長のふたりの気高い方々を指名することができたのである。あなたたちはきょうこの方々の力強い教えと証を聞いたことであろう。私はこのふたりの方々を指名した時，自分の責任が，自分ひとりだけで数々の責任を果たすことにあるのではないということを認識した。さらに，私たちは毎週神殿で集会を持つが，私が部屋を見渡すと，12人の忠実な人々の姿が目に映る。この人々は，世から選び出されて聖なる使徒職の権能を与えられている人々であって，私はこの人々以上に偉大な人を知らない。

偉大な指導者であるあなた方，ステーキ部長会，伝道部長会，監督会，神権定員会の指導者，また世界各地で私たちのために祈って下さっているすべての信仰深い聖徒の皆様，私たちも神殿の聖壇にひざまずく度に，私たちのために祈って下さっているあなたがたすべてのために，心からの祈りを捧げていることを知っていただきたい。私たちは，あなた方にどれ程感謝しているか。

この大会の終わりに当たり，もうひとつの出来事をお話ししたいと思う。ただし残念ながら，種々の制約があってその一部だけしかお話することができない。

ロサンゼルス神殿が献堂される少し前のことであった。私たちは皆，その素晴らしい献堂式のために，様々な準備をしていた。その出来事は，どちらかというと，私の生涯では新しい経験であった。明け方の３時か４時ごろであったと思う。私はひとつの素晴らしい経験をした。私はその時，夢を見ていたのではない。確かにそれは示現であった。その示現の中で，私は数多くの霊たちが一堂に会しているのを目撃した。そこでは数多くの男女が立ち上がり，一度に２，３人ずつ，種々の異言で語っていた。それは常ならぬ出来事であった。私は，その時デビッド・O・マッケイ大管長が次のように言う声を聞いたような気がした。「もし神を愛したいと望むなら，人々を愛し，人々に仕えるようにしなければならない。これが，神に対する愛を示す方法である。」そのほか，この示現の中で沢山のことを見聞きした。

今，ここで私はあなた方に申し上げる。私は心の中に一点の疑いもなく，この教会を管理しておられるお方が実在するお方であることを知っている。そのお方は，私たちの主，イエス・キリストである。私はイエスが実在しておられることを知っている。また主が私たちの考えている以上に，私たちの近くにおられることも知っている。御父と主の存在は漠たるものではない。天父と主は，常に私たちに関心を払い，私たちを救い主の再臨に備えさせようと種々助けを与えて下さっている。様々なしるしが明らかになっている現今，主の再臨は，それほど遠い将来のことではない。

あなたたちがしなければならないことは聖典を読むことである。とりわけ，高価なる真珠のジョセフ・スミスの著の中にある，マタイ伝第24章の霊感訳の部分を読むことである。この中で主は弟子たちに，聖なる場所に立って，動くなと言われている。それは，主は速やかに降臨され，だれもその日その時を知らないからである。これこそ準備なのである。

皆さんがそれぞれの国に帰り，かつて古代の予言者ヨシュアが述べたように，「わたしとわたしの家とは共に主に仕えます」（ヨシュア24：15）と言えるように祈っている。

家庭の夕べを通して，家族に教えなさい。家族に神の戒めを守るように教えなさい。神の戒めを守ってはじめて，この時代で安心して生活してゆけるからである。もしそのように生活するならば，全能の神の力が，まさに天から下る露のごとく家族に

下り，また聖霊が伴うであろう。聖霊は私たちの導き手となることができ，そのみたまが私たちを教え，主の聖なる宮居まで私たちを導いて下さるのである。

私は大管長という自分の特権によって，世界各地の忠実な教会員に祝福を与えたいと思う。神の祝福とみ守りがあって皆さんが無事に自国に帰ることができるように，また事故や不幸に遭遇することのないように願っている。各地の民に私たちが抱いている愛を伝えていただきたい。確かに，宣教師が伝道に出て，愛を示すのは，すでに教会員となった天父の子供たちだけではない。これから真理の福音に立ち帰ろうと努力している人々，彼らにも私たちが今受けている祝福を享受できるようにしてあげなければならない。

何とぞ，主の助けがあって，私たちが自分の職務を理解し，行ない，そして完成させることができるよう，また義のうちに主のみ業を進める方法を知っていながらそれを行なわなかったということで裁きの日に不十分であるとされることのないよう，切に祈っている。これらのことを，心からへりくだって主イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

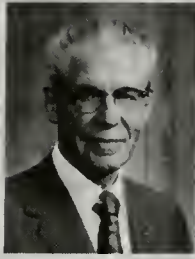
目　次

第143回 半期総大会
1973 10. 5-7

時の動き

1973

4.9　ピカソ死去。91歳。
4.30　ウォーターゲート事件で米国司法長官辞任。
5.11　西アフリカ干ばつ深刻。600万人,家畜400万頭が餓死の危機。国連が世界に援助を呼び掛け。
6.17　根室半島沖で地震，北海道，東北などの広域に地震。
8.5　パレスチナゲリラ，アテネ空港を襲撃。
8.8　金大中事件。韓国前大統領候補，都内のホテルから誘拐され，行方不明に。13日，ソウルに姿を現わす。
8.28　農林省，6月下旬以後の全国の農産物被害状況発表。干ばつによる被害，推定1000億円を越える。戦後最悪。
9.8　8日未明，メキシコ中南部にマグニチュード7の強震。死者700人。
10.6　中東戦争火を噴く。シナイ半島，ゴラン高原で大規模戦闘。第4次中東戦争に発展（17日停戦）
10.5―第143回半期総大会。

大管長会

第一副管長
N・エルドン・タナー

大管長
ハロルド・B・リー

第二副管長
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

スペンサー・W・キンボール

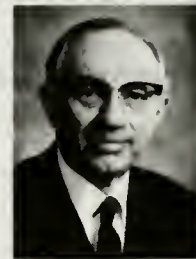
エズラ・タフト・ベンソン

マーク・E・ピーターセン

デルバート・L・ステイプレー

リグランド・リチャーズ

ヒュー・B・ブラウン

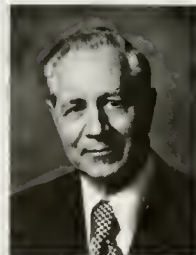
ハワード・W・ハンター

ゴードン・B・ヒンクレー

トーマス・S・モンソン

ボイド・K・パッカー

マービン・J・アシュトン

ブルース・R・マッコンキー

大祝福師

エルドレッド・G・スミス

自分が何者かを知り，自尊心を持つ

大管長

ハロルド・B・リー

愛する兄弟姉妹，ラジオやテレビで聞いておいでの友人の皆様，私は今しばしの時をいただいて，現在私たちの間で重大な関心事となっているある状況について少しお話したいと思う。数多い人々に自尊心が驚くほど欠如していることである。それは人々の服装や行動を見れば，また怒濤の勢いで世界を風靡しつつある許容の風潮を見れば明らかである。

時の初め以来私たちの先祖にとって大きな意義を持ち，また今日に至るまで人格を高め世界に義と調和と一致と平和を促進してきた古くからの言い伝えの，その真髄を理解せずに高潔な標準を捨てる傾向が，教会員の中にさえ見られる。

しかし，永遠の言い伝え，永遠の言葉というものはたしかに存在し，それを正しく理解し，教え，実践したならば，老若男女，過去の人，現在の人，将来の人すべてに救いがもたらされるのである。

美徳，貞潔，正直，道徳，信仰，品性などをテーマに話をするのはいささか時代遅れと感じる人がいるかもしれない。だが，これらの諸徳こそ，これまで立派な人々を築き上げてきたものであり，この世では幸福を，来たるべき世では永遠の喜びを得るための道をさし示してくれるものである。これらの諸徳は私たちの人生の錨となって，さまざまな試練や悲惨や害悪や，また破滅と飢餓と流血を伴うむごたらしい戦争にも耐えることができるのである。

こうした諸原則を教えようと努める人の忠告に耳を貸さず，正反対の道を進もうとしている人々は，結局は周囲によく見るようなみじめな状態に自分も陥るであろう。予言者イザヤは，世の悪に対して主の民を強くしようと願ったときに神から与えられたみ言葉を告げた中で，そうした悲惨な結果をきわめて劇的に描写している。そのイザヤの言葉を引用してみよう。

「『遠い者にも近い者にも平安あれ，平安あれ，わたしは彼をいやそう』と主は言われる。しかし悪しき者は波の荒い海のようだ。静まることができないで，その水はついに泥と汚物とを出す。わが神は言われる，『よこしまな者には平安がない』と。」（イザヤ57：19－21）

ほかにも多くの予言者が同様なことを述べている。誤解の余地なく，力強く，「罪悪は決して幸福を生じたことはない」（アルマ41：10）と。

予言者イザヤは，平安を与えるはずの道に背を向ける人は荒れ狂う海のようであり，その水は泥と汚物とを出すと言ったが，私はそのような道を選び取る人々がなぜそうするのか，理由をじっくり考えてみた。そして，それはみな，自尊心を持たないことに帰因するのではないかと思うようになった。時代の現実をつぶさに体験し，模範に足る生涯を送った先達たちの，知恵にあふれた言葉を聞いていただきたい。

「自尊心，それはあらゆる美徳の礎石」（ジョン・フレデリック・ウィリアム・ハーシェル卿）

「自尊心とは人が自らまとうことのできる最も気高い衣であり，精神を高揚し，最も高きに上げる感情である。」（サミュエル・スマイルズ）

「人はみな自ら自分にその価値を刻印している。自分にかける値を人が払うのである。人はみな，自分の意志しだいで大きくも小さくもなる。」（ヨハン・フォン・シラー）

家の近くに住むある美しい母親が，私に次のような手紙をよこされた。「私はアメリカを愛しております。夫を，子供たちを，神様を愛しております。なぜ，そのように愛せるのでしょうか。それは，自分を心から愛しているからです。」

これこそ，自尊心のもたらす実である。しかし逆に，この姉妹が述べたような自分を愛する気持を持たなかったならば，まったく別の結果になることもあろう。そのような人は人生を喜ばず，結婚しても妻や子供たちを愛する気持を失い，家庭をおろそかにし，国を軽んじて，ついには神への愛を失ってしまう。国への反抗，家庭の乱れと愛の欠如，親に従わない子供たち，神との断絶，これらはみな，自尊の念を失ったからにほかならない。

かつてある会合に招待されて話をしたことが思い出されるが，その人々は大半が進歩に必要な標準に従うことの大切さを理解していなかったり，望みを持たなかったりで，教会の中で向上してゆく経験を持ったことのない人たちであった。私がきょうの話に選んだテーマは「自分は何者なのか」ということである。私はこのテーマについて考え，責任に備えて神のみ言葉を尋ね求めていたとき，自分が話そうとしているこのテーマは私たち一人一人にとって最も大切なのだと，また，あの会合に集まった人々の中にもまだ自分が何者であるかを知らず，人生を築くだけの確固たる基盤を持てずにいる人がいたが，このテーマは彼らにとっても最も大切なことなのだと感じたのである。

粗暴な子供たちやわがまま放題の青少年は，実力では獲得できない人気や注目を自分に集めようとしている姿にほかならない。享楽に倦む少女もだらしない少年も，浅薄に飾りたてたり奇をてらった異常な行動をして，自分では魅力的だと考えるあの言いようのない格好を身につけようとするポーズなのであろう。それは，人間としての真の自己を理解していないところから来る欲求不満の行動で人の注目を引こうとするぎこちない試みである。

では，「自分は何者なのか」ということだが，この大切なことを知らないで，そのため自己の価値を低く考えている人は，知りさえすれば高い評価もできたであろうに，自尊心に欠ける人である。

私は聖典から人の心を打つふたつの質問をご紹介して，人は何者であるかの疑問に答えてゆきたいと思う。

詩篇作者はこう言っている。「人は何者なので，これをみ心にとめられるのですか，人の子は何者なので，これを顧みられるのですか。ただ少しく人を神よりも低く造って，栄えと誉とをこうむらせ……ました。」（詩篇８：４，５）

そして次の聖句は，主がヨブに尋ねた質問である。「わたしが地の基をすえた時，どこにいたか。もしあなたが知っているなら言え。……かの時には明けの星は相共に歌い，神の子たちはみな喜び呼ばわった。」（ヨブ38：４－７）

聖典から引用したこのふたつの質問をもっと簡単な言葉で言いかえてみよう。予言者たちはひとりひとりにこう尋ねている。「あなたはどこから来たのか。なぜここにいるのか」と。

有名な心理学者のマクドガルはこう言った。「道徳の刷新を助けるうえで最初にしなければならないことは，可能なことなら，人の自尊心を回復することである。」また，イギリス人の老職工が捧げた祈りが思い出される。「神よ，私が自分に高い評価を持てるよう，助けをお与え下さい。」これはあらゆる人間の祈りでもある。それは異常に発達して高慢やうぬぼれやごうまんに変わるような自尊心ではなく，「自分自身の価値に対する信頼，神の価値と人の価値に対する信頼」と定義できる正しい意味での自尊心である。

ではここで，今までのふたつの質問の答えについて考えてみよう。それは，混沌とした世の中でまだ自分の真の価値を認識するに至っていない人々，道を迷う人々の心に意識の火をともしてくれるに違いない。限られた時間の中で，私の声がこのひどく荒廃した世界にぜひとも届くように願っている。

使徒パウロはこう記している。「その上，肉親の父はわたしたちを訓練するのに，なお彼をうやまうとすれば，なおさら，わたしたちは，たましい（霊）の父に服従して，真に生きるべきではないか。」（ヘブル12：９）

この聖句は，父親を持ってこの地上に住む者にはみな，同じように霊の父がおられると教えている。モーセにしてもアロンにしてもそうである。彼らはひれ伏してこう叫んだ。「神よ，すべての肉なる者の命（霊）の神よ，このひとりの人が，罪を犯したからといって，あなたは全会衆に対して怒られるのですか。」（民数16：22）

彼らが主に向かってどのように叫んだかに注意していただきたい。「すべての肉なる者（全人類）の霊の神（父），」と呼んだのである。

アブラハムを通じて与えられた啓示から，この霊がどのようなものであるかをうかがい知ることができる。

「さて，主はわれアブラハムに，この世に先だちて組織されたる英智たちを見せたまいたりき。而して，これらすべてのものの中には，高貴にして偉大なるもの多くありたり。

神，これらの霊を善しと見たまい，これらの霊の中に立ちて言いたまえり，これらの者をわが統治者となさん。神，霊なりしこれらの者の中に立ちてこれを善しと見たまいたればなり。而して，神われに言いたまいけるは，アブラハムよ，汝はこれら

の者の一人なり。汝は生れざる前に選ばれたり，と。」(アブラハム3：22，23)

ここでは，前世で忠実だった人々は，さらにつけ加えられて，第二の位であるこの現世で肉体を得，その上啓示によって教えられる通り神の戒めを守るならば，「とこしえに栄光をその頭に附け加えられん」(アブラハム3：26) と主が約束しておられる。

この聖句には幾つかの大事な真理が語られている。第一には，霊とは何かということが私たちの肉体と関連づけて定義してある。霊は前世でどのような姿かたちをしていたのだろうか。(むろん，霊を体から分離して見ることができればの話であるが。) 末日の予言者は，霊感を受けて次のように答えている。

「……霊界のものはこの世のものの象にして，この世のものは霊界のものの象なればなり。すなわち，人間の霊は人の身体の象にして，また神の造りたまいしあらゆる獣およびその他の生物の霊も皆かくの如きを誌せしなり。」(教義と聖約77：2)

前述の聖句から知ることのできる第二の真理は，かつては霊で今は肉体を持つあなたがたや私が，第一の試しを無事通過して，この地上に肉体をとって生まれる特権を授けられた者たちだということである。もしその試しをくぐり抜けられなかったならば，現在肉体を得て地上にいはしないであろうし，それどころかその特権を拒まれて，前世で創造された霊の三分の一，肉体を授かる特権を取りあげられたあの三分の一の霊と共に，のちに知られるようになったかのルシフェル，サタンに従っていたことであろう。その三分の一の霊は現在私たちと共にいて，霊の存在ながら，従う人々を命を下さった父なる神のもとへ帰すという栄えある救いの計画をくつがえそうとなおもねらっている。

そこで旧約聖書の予言者たちは，畏敬をこめて死を語った。「ちり(人の肉体) は，もとのように土に帰り，霊はこれを授けた神に帰る。」(伝道12：7)

いたことのない場所に帰るはずのないことは当然である。死も誕生と同様に，救い主が弟子たちに祈れと教えられた「天にいますわれらの父」のみもとに帰るための奇跡の一過程にすぎないというのである。

前述の聖句 (アブラハム3：22—23) の中には，まだほかの真理がはっきりと述べられている。それはアブラハムと同じように大勢の人が，生まれる前から選ばれていたということである。そのことを，主はモーセにもエレミヤにも語っておられる。この教えは，末日の予言者ジョセフ・スミスによっていっそう明確なものとなった。彼はこう述べている。「私は，神の王国において重要な働きをなすよう召されている人はみな，この世に先だってその職に召され，予任されていたものと信じている。」またさらにこう語った。「私は，召されている仕事に自分があらかじめ予任されていたと信じている。」(*Documentary History of the Church*「教会歴史記録」第6巻，p. 364参照)

だが，同時に警告もある。聖句に「予任」と言われる召しがある一方で，「見よ，召さるる者は多けれども選ばるる者は少し。……」(教義と聖約121：34) という霊感の言葉もあるのである。

それはつまり，私たちはこの世で自由意志を持っているが，この世に先だって，現世に備えて自分でなした準備以上の大いなる召しに予任された人が大勢いるということである。彼らは高貴にして偉大なる霊の中に数えられ，御父はその中から指導者を選ぶと言われたのだが，その彼らでさえ，この現世で召しを全うできないかもしれない。そこで主がこう問うておられる。「……選ばるることなきは，これぞもそも何の故ぞ。」(教義と聖約121：34)

答えはふたつある。第一は「人々の心甚しくこの世に属けるものの上に」あるため，第二は「唯々人間の誉を得ることをのみ」望むためである。(教義と聖約121：35)

ではここで，これまで読んだことのまとめとして，もう一度あなたがたに尋ねてみたい。「あなたはいったい何者なのか。」あなたがたはみな，神の息子，娘である。あなたがたの霊は創世の前から組織された英智として創造され，生活していた。前世で戒めに従順であったため，肉体を授かるという祝福を得たのである。こうして，あなたがたは地上に来る前の生活の報いとして，使徒パウロがアテネの群衆に教えた通り，また主がモーセに啓示された通り，創世以前の忠実さに応じて，歴史のこの時期に現在住んでいる国の現在の家族の中に生を受けたのである。

ここで，使徒パウロが石や真ちゅうや木の像を知らずに拝んでいる人々に向かって説いた，「知られない神」についての力強い説教の言葉を聞いていただきたい。そこを引用してみよう。

「この世界と，その中にある万物とを造った神は，天地の主であるのだから，手で造った宮などにはお住みにならない。

また，ひとりの人から，あらゆる民族を造り出して，地の全面に住まわせ (この点に注目していただきたい)，それぞれに時代を区分し，国土の境界を定めて下さったのである。

こうして，人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば，神を見い出せるようにして下さった。事実，神はわ

れわれひとりびとりから遠く離れておいでになるのではない。」(使徒17：24，26－27)

次にあげる申命記中の聖句は主がモーセに語られた言葉だが，私たちの理解の目をさらに開いてくれる。

「いと高き者は人の子らを分け，諸国民にその嗣業を与えられたとき，イスラエルの子らの数に照して，もろもろの民の境を定められた。」(申命32：8)

この言葉がイスラエルの民に告げられたのは，民が嗣業の地である「約束の地」に到着する以前であったことを心に留めていただきたい。

そして次の聖句である。「主の分はその民であって，ヤコブはその定められた嗣業である。」(申命32：9)

これで，のちにイスラエルと呼ばれるヤコブの血統の者とやはりのちにイスラエル民族となるヤコブの子孫たちは，地上に生を受けた人々の中でも最も傑出した血統に生まれた人々であることがはっきりするであろう。

こうした報いはみな，おそらくは創世以前に約束され，予任されていたのであろうと思う。もちろん，このような事柄は，私たちが霊であった前世でどのように生活したかによって決められたことに違いない。このような推測に疑問を抱く人がいるかもしれないが，そういう人も，私たちが世を去って裁きを受けるときにはこの地上での行ないによってすべての人が裁かれるという教えを，疑いなく認めることであろう。それならば，今地上で受けているものが，前世での所業に応じてめいめいに与えられたものであると信じるのが道理ではないだろうか。

ここで，聖典からもうひとつ大事な教えがある。私たちはみな，自由意志を持つということである。こういうと，思いのままに何でもする自由があるというふうに曲論する人がいようが，それは予言者たちが聖典の中で述べた自由意志の説明とまったく異なる。聖句を引用してみよう。

「それであるから，人はみな現世に於て自由であり，およそ人間のためになるものは何でも与えられる。そして万人に為したもうメシヤの大いなる賢い仲裁によって自由と永遠の生命とを選ぶか，または悪魔は万人が自分のようにみじめになることを求めているから，その束縛と力とに由って定まる束縛と死とを選ぶか，これは全く人間の自由である。」(IIニーファイ2：27)

使徒パウロは，人の体の神聖さを次のような言葉で述べた。「あなたがたは神の宮であって，神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。もし人が，神の宮を破壊するなら，神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら，神の宮は聖なるものであり，そして，あなたがたはその宮なのだからである。」(Iコリント3：16，17)

そしてさらにパウロは，バプテスマを受けた教会員に聖霊という特別な賜物が授かっていると語り，次のように教えた。「あなたがたは知らないのか。自分のからだは，神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって，あなたがたは，もはや自分自身のものではないのである。……それだから，自分のからだをもって，神の栄光をあらわしなさい。」(Iコリント6：19，20)

この言葉の意味を考えると，あの高名な心理学者マクドガルの言葉の意義が悟られる。もう一度引用しよう。「道徳の刷新を助けるうえで最初にしなければならないことは，可能なことなら，人の自尊心を回復することである。」人の自尊心を回復するには，「自分は何者なのか」の質問の答えを十分理解するように助ける以上の方法があるだろうか。

行動や外観や話し振りや品位のなさで，自尊心を失っているとわかる人をときおり目にするが，その姿はサタンに勝利を許した人の悲惨な有様なのである。主は，サタンが「……人を欺きだまし，……欲するままに虜となすなり」(モーセ1：1－4参照) と言われた。これが，モーセに語った主のみ言葉通り，「わが声に聴き従わぬすべての者」(モーセ4：4) の末路である。

私は何年か前に，自殺した学生たちについての数人の牧師による調査報告を読んだことがある。徹底調査の末，結論がはっきりこう出されていた。「自分で命を断った学生たちの考え方には信念というものが欠けていたため，人生の重大危機に直面すると依るべきものがなく，臆病者の道に逃避したのである。」

そのような状態は，主が山上の垂訓の結びに言われたあのたとえ話の状況そのままである。

「また，わたしのこれらの言葉を聞いても行わない者を，砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができよう。

雨が降り，洪水が押し寄せ，風が吹いてその家に打ちつけると，倒れてしまう。そしてその倒れ方はひどいのである。」(マタイ7：26，27)

主は救いの計画における永遠の目的を，次のようにモーセに告げられた。「見よ，これわが業にしてわが栄光，すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」(モーセ1：39)

この永遠の計画の最初の目標は，私たちひとりひとりが地上に来て肉体を得ることであり，それから死と復活とを経たのち，霊と復活体は結合してその後は死を味わうことがない。これは，パウロが次のように述べた通り，万人に無条件で与えられ

る賜物である。「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように，キリストにあってすべての人が生かされるのである。」（Ⅰコリント15：22）

不治の病で死んでゆく人や子に先立たれた母親にとってこの聖句がどんな意味を持つのかということは，私が数年前ある病院に見舞った若い母親の言葉が教えてくれる。彼女はこのように言った。「私はこの聖句について長い間考えてきました。そして今死のうが70歳，80歳，90歳まで生きようが，たいして違いはないと思うようになったのです。私が永遠の喜びを受けられるような仕事に精いっぱい働ける場所へ早く行けるものなら，かえってそのほうが心配して下さる人たちにとっても喜ばしいことです。」その母親は，自分が神のみもとに行って永遠の生命を受けるにふさわしい生活をしてきたと考えて，心に慰めを得たのである。

この地上で私たち一人一人に与えられた貴重な時間を刻一刻有効に使うことの大切さを，私は自分の家庭に起きた出来事から身にしみて教えられた。若い母親が亜麻色の髪をした6歳のかわいらしい娘を私たち祖父母のもとへ連れて来て，プライマリーで習ったばかりの美しい子供の歌を聞いてほしいというのである。母親が伴奏をして，子供が歌い出した。

「神の子です　わたしやあなた
いろんなお恵み　感謝します

神の子です　わたしやあなた
みことば正しく　わかるように

神の子です　わたしやあなた
みこころ行ない　また天に住む

わたしを助けて　導いて
いつかみもとへ　行けるように」
（子供の歌*B*―76）

祖父母は歌を聞きながら涙を流していた。このときは何も知らなかったのだが，やがてまだ若いその母親は，無常の人生を歩んでゆく子供の「わたしを助けて導いて」という祈りに答えてやる責任を人にゆだねて，自分は天の家に帰るための道を子供に十分教える機会もなく，死の訪れを受けたのである。

もし私たちが天父なる神との神聖な関係や救い主で私たちの長兄であるイエス・キリストとの関係や私たちお互いの間の関係をしっかり感じていたならば，大きな違いが生まれることであろう。

病院で会ったあのすばらしい姉妹にもたらされた荘厳ともいえる心の平安とは対照的に，死が近づいてもその大きな慰めを得ることのできない人々の恐ろしい状態を，主は簡潔にこう述べておられる。「また，われにあらずして死ぬる者は禍なるかな。そは，死は彼らにとりて苦ければなり。」（教義と聖約42：47）

次のように言ったのはジョージ・バーナード・ショーである。「もしも私たちが，みんな同じひとりの父親の子なのだと認識したなら，今のようにお互いをののしることはなくなるだろう。」

私はこの説教を終えるにあたって，あなたがたおよびこのような勧告を初めて聞いた人々に自分が何者で，いったいどこから来たのかについて何かしら真剣な気持を感じていただいたと信じ，また，これ以後は自尊心を高く持ち，天来の霊が住む神の宮である自分の肉体を大切にしようという決意が胸に生まれたものと信じている。あなたがたに勧めることは，プライマリーで教える歌のように，「神の子です。わたしやあなた」と常々胸に言い聞かせて，自分が何者であるかをはっきり自覚しつつ，より幸せな実りの多い生活を保証するそれらの理想に近づいた生活を始めることである。

神よ，願わくばきょうここに集う一人一人がそのように生きて，すべて私たちが尋常の私たちではなく，神のみもとから来る神聖なものを見つめることができるように。人の行くべき道を見失った人々の行末を考えるとき，私は彼らが力を受け，決心をして，永遠の生命の目標に向かって一歩一歩着実に登ってくれるように，また私自身も私にできる限りの模範と言葉を尽くして自分の務めを果たしたいと心から祈っている。

私はここに再び，悲しむマルタに主が告げられたあの深いみ言葉が真実であることを，つつしんで証する。「わたしはよみがえりであり，命である。わたしを信じる者は，たとい死んでも生きる。」（ヨハネ11：25）

私もまた，みたまの導きのままに心の奥底から証を述べたマルタと同じ気持で，こう言えることを神に感謝する。

「主よ，信じます。（私も）あなたがこの世に来られたキリスト，神の御子であると信じております。」

世の救い主なるキリスト，主イエスのみ名により，アーメン。

霊感の音楽――価値ある思い

十二使徒評議員会会員

ボイド・K・パッカー

リー大管長は先回の4月大会の最後に，霊感に満ちた説教にはこれまた霊感あふれる美しい音楽がつきもののことを教会幹部としての32年間に知った，と話された。今朝，私は聖歌隊の美しい合唱に心を励まされたことを感謝している。

アジソンはこのように言った。「音楽は，人間の道徳感情や宗教感情を害することなく熱中できる唯一の感覚的喜悦である。」

彼の時代はそうであったとしても，現代ではしかし違う。かつては無害であった音楽が，今は悪意ある目的のためにしばしば使われている。

ここ数世紀間，それ自体は無害な音楽に実に劣悪な歌詞がつけられているのは知られるとおりである。良くあってしかるべき音楽に良くない歌詞がつけられて人々を迷わせている。

先頃大管長会が次のような忠告を再度繰り返した。

「音楽により自己を表現する能力は，繊細さと力強さにおいて言語の域を越えるものである。音楽は人を高め，鼓舞する一方，人を堕落させ，破滅に導くこともある。従って，私たち末日聖徒は，自分を取りまく，音楽を選択する際には，いつも福音の原則を適用し，みたまの導きを求めることが大切である。」

現代は音楽そのものが腐敗してきた。テンポで，ビートで，音の強さで，人の霊的感受性が音楽によって鈍らされることがある。

極端な現代音楽による生理的影響を調べた調査も，最も肝心なことをひとつ見逃している。

教会の若者は，穏やかな気持にするどころか心をかき乱して興奮させるためのけたたましくせわしない音楽にさらされている。その傾向が本来無害で教会の若者にも喜ばれるさわやかな音楽やまじめな音楽にも広がっていることに問題があるのである。

現代キリスト教教会における背教のひとつのしるしは，聖職者たちが自ら進んで最も神聖であるはずの宗教的会合に麻酔のたぐいのハードロック音楽を迎え入れることである。このような音楽に良い点はほとんどない，神のみたまをしりぞけるものである。

気の毒なことに，その愚かしさがもともとの目的の達成を邪魔している。若者たちは期待通りに漁られることなく，かえっていわゆる自分たちの教会を作り出し，日常生活に飽き足らない何かをそこに模索している。

私たち教会の指導者が教会活動で使用する音楽の種類を制限していることに，批判的な人々がいる。

「若い人たちを失うことになってもいいのですか」と彼らは聞く。

私はそのような批評者たちに申し上げたい。台に乗せて人が満足するところまで運んで行ってやるように教会をずるずる動かして行くことは，指導者として召された者の仕事ではない。

J・ルーベン・クラーク副管長はこう言った。

「私たちは，もし私たちが提供しなくても若人はどのみちほかへ行ってそれを得る，といった理屈で不健全な娯楽を容認することは自分たちの責任においてできない。私たちが与えてやらなければ若人は賭博場へギャンブルに行くという理屈をつけて，教会のレクリエーションホールにギャンブル目的のルーレットテーブルを置くなどはとてもできないことである。教会の若人は，そのようにしては決して本当につかむことはできない。私たちの仕事は，家庭が若者たちの心により良い標準を植えるように手伝うことである。」

従って，教会の両親たちは，子供が家に持ち帰る書籍や雑誌，購入するテープやレコードに関心を示していただきたいと思う。ポルノ雑誌は決して家に置かせない一方で音楽にかかるお金は考えもせずに与えている親は多いが，その悪影響も決してポルノに劣りはしない。

つい先日，音楽に低俗などというものはない。音楽はそれ自体無害で純粋なものだと言う人がいた。

もしそれが本当ならば，次のような状況をどう解釈するのだろうか。地域の指導者が広々として明るい美しい建物を提供し，上品な服装をして身だしなみが整った礼儀正しい若者たちを招いた。それが，けたたましいハードミュージックの音色が響いたとたんに，神のみたまを寄せつけない雰囲気が室内に充満した。

教会の若人は，概して現代風の身づくろいや服装を分別よく上手に取り入れている。教会の青年男女は慎しみある上品な服装をしながら，流行遅れやまるで異質なスタイルにもならずにいられると思う。

私たちは若人の組織や教会学校などの場で身なりや身だしなみの標準についてつとめて語ってきて，それが功を奏している。

しかしそれに比べて，教会の若者たちの熱中する音楽には注意や忠告がいかにも不充分であったと思う。「熱中」とはよくいった言葉である。ハードミュージックのたぐいを避ければ，教会の若人もいっしょになって楽しめる現代音楽は数多い。

このことについて若者に助言する。親や教会指導者は，よくよく賢明に行動しなければならないことを，じき悟るはずである。

幼児がとがった危険物を手にしたとき，思慮のない親は危険を恐れてそれをひったくろうとする。すると子供は本能的になおしっかり握りしめ，けがをしてしまうかもしれない。賢い親なら，子供が喜んで放してくれるように，子供の興味を引く安全な品物と交換するはずである。

若者や若者たちの音楽のことで問題があるとき，これを心にとめていてほしい。事を変えるには時間がいるであろうし，霊感も必要であろう。

教会は教会の若者たちを心から信頼している。特にここ1，2年，若者たちの望みが教会の活動にいっそうの影響力を持つという状勢になってきているのである。

そのため，あなたがた教会の若者たちに大きな責任が課せられている。活動で用いる音楽にはよく気をつけなさい。

かといって，私たちがあなたがたを信頼していないのではないが，世間や世間の極端な音楽とこの教会とを分ける溝は，今，かつてないほどに深い。そして道の真ん中には，数年前とはまったく違う谷が走っている。

若い指導者たちよ，忘れてはならない。主はあなたがたの主であり，教会は私たちのものであると同時にあなたがたの教会である。

私がお勧めしたいのは，家にあるレコードアルバムを総点検して，いわゆるニューモラル，薬物，ハードロックに関係したレコードを破棄することである。このような音楽は霊の進歩にとって若者にはふさわしくない。

あなたのレコードコレクションを見直してはどうだろうか。良くないものは除いて，良いものだけにしなさい。自分の心を使って熱中するもの，自分の作り出すものを上手に選択しなさい。それがあなたの一部となるのである。

自分に音楽の才能があったら，良い音楽を巾広く開拓しなさい。

心を高めるすばらしい音楽，聞いてためになる音楽はたくさんある。教会員はあらゆる種類の良い音楽の中に身を置くべきである。

両親は家庭内で良い音楽を大事にし，子供に霊感の讃美歌を学ばせようという望みを育てることである。

小さい子供のいる家族にとって，音楽のレッスンにちょうど良いという年頃は，ほかにもさまざまな出費があるときに重なるようでもあろう。しかし，両親は子供の生活に音楽教育を含めていただきたいと思う。

アンドリュー，オリーブのキンボール夫妻はどういう方法でかそれをして，スペンサー・キンボールは楽器の演奏を覚えた。サミュエル，ルイーザのリー夫妻もそのようにして，ハロルド・リーは楽器を学んだ。現在，教会指導者が神殿の上の部屋で聖なる集会につどうとき，私たちはいつも讃美歌を歌う。オルガン奏者はスペンサー・W・キンボール長老やハロルド・B・リー大管長である。

子供や若者に楽器演奏を教え，形成期に礼拝音楽を含めて良い音楽になじませる音楽教師はいかにすばらしいことか，そういう音楽を生活の一部にするのは大きな祝福である。

主はこう言われた。「すべて心の歌は，われの悦びなり。然り，義しき者の歌はわれに対する祈りなり。彼らの頭に祝福を与えてその応えとなさん。」（教義と聖約25：12）

私は楽器の心得がないが，そのような音楽が生活になぜ大切なのかについて，若い人たちにお話したいと思う。

どの年代にとっても一番の課題であると思うのだが，特に若い人たちにとって，この人生で出会う最もむずかしい事柄は自分の心のコントロールを学ぶことである。「人となりはその心に思うそのままであるからだ。」（箴言23：7）思いを制することのできる人は己れに勝つ人である。

私が10歳位の頃，家は果樹園に囲まれていた。いつも木々に水がたりない感じで，春になって溝を掘っても掘ったそばから雑草が繁茂していた。ある日，私は水を引く番になって，困りはてた。

雑草にふさがれた溝に水を流すと，あちこちに水が流れ出すのである。私は泥土に水路を作って堤防をこしらえようとしたが，1カ所が崩れて直すとまた1カ所が崩れるといった調子であった。

そこへ隣人が通りかかり，ちょっと見ただけですぐにシャベルをさっさと動かして溝の底をさらい，水が流れるように道をつけた。

「水をまっすぐに流したかったら，行く先を作るんだよ」と彼は言った。

私は，思いもちょうど水のように，行く先を作れば外にもれ出ることがないと思う。そうでなければ，思いはいつも低い標準へと一番抵抗の少ない道をたどってしまう。

私は子供時代に，それこそ百回以上も心をコントロールしなさいと言われてきた。しかしだれも，このようにしてコントロールしなさいと教えてはくれなかった。

私はあなたがた若人に，思いをコントロールするひとつの方法をお話したいが，それは音楽と関係がある。

心は舞台のようなものである。眠っているとき以外は常にカーテンが上っている。舞台の上では絶えず芝居が上演されている。あるときは喜劇，あるときは悲劇，おもしろかったり退屈だったり，良い劇だったり良くない劇だったり，心の舞台では何かの劇がいつも演じられている。

あなたはわかっているだろうか。たいがいの劇の最中に自分では意識がないのに，舞台の片袖からうしろ暗い小さな思いがしのび出て来て，あなたの注意を引くのである。その罪な思いはみんなを食って視線をひとり占めしようとする。

あなたがそのひとり舞台を許すなら，有徳の思いはみな舞台を下りてゆくであろう。残るのはあなたである。不義の思いに承諾を与えたのはあなただからである。

屈してしまえば，その思いはあなたの心の舞台であなたが許す限りのことを演じる。悲痛をテーマに，嫉妬をテーマに，あるいは憎悪をテーマに。主題は俗悪かもしれない。不道徳であったり，堕落そのものであったりするかもしれない。

あなたが招じ入れてそれらに舞台をまかせるならば，知恵をしぼった最高の戦術であなたの注意を引こうとするであろう。好感の持てるおもしろいものにして，それは無害だ，たかが考えでしかないと思い込ませることもあろう。

あなたの心がだいたいきれいに見える灰色だったり，疑う余地のない真っ黒だったりする不潔な考えに占拠されるそのようなときに，いったいどうすればよいのだろうか。

思いをコントロールできれば，たとえ下劣な習慣といえども習慣を克服することができる。習慣を従わせることができれば，幸せな生活ができる。

あなたがたにお教えしたいのはこのことである。教会の聖なる音楽の中から，好きな讃美歌を1曲選びなさい。心を高めてくれる歌詞と敬虔な音楽で，霊感に近い何かを感じさせてくれる1曲を。リー大管長の勧めを思い出しなさい。「わたしは神の子」の歌もそのような曲であろう。それを心で消化し，おぼえ込みなさい。たとえ音楽教育を受けていなくても，讃美歌を心に蓄えることはできる。

そこでその讃美歌を，あなたの思いの行き場にしなさい。いざというときの水路にしなさい。うしろ暗い役者が思いの端から心の舞台にすべり出て来るときには，その曲をかなでるのである。

音楽が始まり，思いの中に歌詞が登場すれば，価しない役者は恥じたように消え去るであろう。そこで心の舞台の雰囲気はがらっと変る。心を高揚する清らかな雰囲気に，卑しい思いは姿を消す。徳は不浄と好んで交わらず，悪は光に耐えられないからである。

やがてあなたは，折にふれ心の中に音楽を口ずさむ自分に気がつくであろう。自分の思いを顧みてまわりの世からの影響を発見するとき，ふさわしくない思いを心の舞台から下ろそうとして，音楽が自然に始まるのである。

グラッドストーンはこう言った。「音楽は，人の心と霊を支配するのに最も強力な武器のうちのひとつである。」

私は，霊感し，高揚させる価値ある音楽を心から感謝している。

心の舞台から不潔な思いを追い出すことを知ったら，次は熱心に価値あることを学びなさい。まわりに，心を高める良い思いを誘うようなことがあるように，自分の環境を変えなさい。正しいことで多忙になりなさい。

若い人たち，あなたがたは価値のない現代のハードミュージックに心を占領されてはならない。それは決して無害ではない。あなたの心の舞台に良くない思いを呼び出して，踊りのテンポ，あなたの行動のテンポを決めるのである。

現今，そのような極端な音楽につきものであるかのような卑しさ，非礼さ，不倫や薬物中毒などに関わることは自分を堕落させる。そのような音楽はあなたがたにふさわしくない。あなたがたは自尊の心を持つべきである。

あなたがたは全能の神の息子であり，娘である。神は学び，行なうべきうるわしい事物，楽しむべきさまざまな良い音楽に満ちた世界を教えておられる。

結びに，聖歌隊があの開拓者の讃美歌である「恐れず来たれ，聖徒」を歌うと思う。

私には空軍の准将になった兄弟があるが，彼は第2次世界大戦中爆撃機のパイロットになり，危険きわまる欧州の襲撃飛行に何回か参加した。彼がワシントンD. C. の任務に戻って来たのは，私が同じB24爆撃機の飛行訓練を終了して太平洋に進撃するというときで，私たちは私の出撃前にワシントンで1日ふつかいっしょにいられた。

ふたりで勇気とか恐怖とかについて話しあったが，そのとき私は，これまでいろいろな目にあったときにどうやって自分を保っていられたかと尋ねた。

すると彼はこう言った。「大好きな讃美歌があってね。『恐れず来たれ，聖徒』なんだ。いよいよというときや生還の望み薄というときにはこの歌を歌うと，機のエンジンまで伴奏してくれるような気がしたよ。」

恐れず来たれ　聖徒
進み行けよ
その旅はつらくとも
恵みあらん。

(讃美歌23番)

この歌によって，彼は勇気に不可欠な信仰を失わずにいられたのであった。

良い音楽の及ぼす影響は，古代の聖典にも近代の聖典にも数多く言われている。主ご自身もその助けを貸りて，最大の試みにあう用意をされた。聖書にこう記されている。「彼らは，さんびを歌った後，オリブ山へ出かけて行った。」(マルコ14：26)

神は私たちの父である。私たちは神の子供である。神は私たちを愛され，この人生に偉大なすばらしいものを備えられた。自分の生活や子供たちの生活に心を高める良い音楽を恵まれていることを自分で知ると同時に，そのことを神に感謝している。家族がひとつになって行なうことのできるものはたくさんあり，霊感豊かな音楽をいっしょになって鑑賞することもできるのである。イエス・キリストのみ名によって，アーメン。

ごらんなさい，あなたの母です

十二使徒評議員会会員

トーマス・S・モンソン

夏の日，私はフィリピンの戦没米兵記念墓地にひとりたたずんだ。静寂な南国の大気に敬虔さがみなぎり，きれいに刈られた芝草が広がる中に，戦火に散った多くの若者たちの墓標が立っていた。誉れある幾多の墓標に刻まれた氏名に次々と目を転じて読んで行くうち，涙が目にあふれ，ほおを伝った。目は涙で曇り，胸は誇りにふくらんだ。大勢の若者が身を賭して支えた自由の尊さと犠牲の大きさがひしひしと感じられた。

さらには勇敢に仕え，雄々しく死んだその若者たちから思いは一転して，かわいい息子の戦死を知らされたときの，嘆きに打ちひしがれる母親の姿が脳裏に浮かんだ。母親の悲嘆はだれにわかろう。母親の愛はだれにはかられよう。母親の気高いつとめをだれが完全に理解できよう。彼女は神にまったき信頼を置き，神と手を携えて，生命の復活に至る死の谷陰を歩む。

「母という名」
「魂が叫ぶ無上高潔な思い，
舌が出だす無上清らかな言葉，
名を口にするに価せず
すべてを超えて神聖なり，
その愛をはじめに受けし幼子
長じて我，同じ愛を見たり。
慎みてその名をささやく
恵みの名，母よ」

ジョージ・グリフィス・フェッター

この気持で母のことを考えてみよう。母の姿が4つ浮かんでくる。第1は忘れられた母，第2は覚えられている母，第3は祝福された母，そして愛される母。

「忘れられた母」を私たちはよく見かける。療養院はあふれ，病院のベットは満員のまま日が明け，日が暮れて何週も何カ月も過ぎるが，そこにいる母を見舞う者はない。年老いた日々を，訪れる愛する者とてなく手紙を届ける郵便夫さえ見ず，窓に見入るだけの母の心の願いが，その孤独の悲しみが，私たちに理解できるだろうか。

彼女は音せぬノックや鳴らぬ電話や聞こえぬ声に耳をそばだてる。隣人が笑顔の息子の来訪を受け，娘と抱きあい，「こんにちは，おばあちゃん」という子供のはずむ声を聞くとき，この母の思いはどんなであろう。

それだけではない。私たちが自分の分を果たせずにいるとき，それも実に母を忘れることである。

私は昨年のクリスマスに，ソルトレーク・シティーのある療養院の院長と話をした。私たちが立っている廊下から，数人の老婦人が集っている落着いたリビングルームを指さして，院長はこのように語った。「ハンセンさんです。娘さんが毎週必ず日曜日の3時にやってきます。その右がピークさんで，水曜日ごとにニューヨークにいらっしゃる息子さんから手紙が届きます。何べんも何べんも読み返して，まるで宝物のように大事にしまうのですよ。でもあのキャロルさんですが，ご家族が電話をかけてきたことはありませんし，手紙もお見舞もないのです。『みんな忙しいんです』と言ってかばって，ご自分はじっと辛抱しておいでですけれど，そんなのありませんよねえ。」気高いその婦人を「忘れられた母」にしている人たちは，恥を知るべきである。

ソロモンはこう書いている。「あなたを生んだ父のいうことを聞き，年老いた母を軽んじてはならない。」（箴言23：22）私たちは忘れられた母を「覚えられている母」にできないものだろうか。

母を心にかける人は悪から離れ，より良い本性に従う。アメリカ南北

戦争に名高いヒギンソン陸軍大佐が，南北戦争中で一番印象的な勇気ある出来事は何かと問われたときに，自分の連隊にいた兵士の名をあげた。

彼はみんなから愛され，勇敢で気高く，日常生活もすがすがしく，大勢の仲間たちのような自堕落な生活とはまるで縁がなかった。

ある晩，シャンペン夕食会の席で酔いどれた数人がその青年をひっぱり出して乾杯の音頭を取らせた。ヒギンソン大佐の言葉によれば，青年は立ち上がり，弱ったふうだがりんとしてこう言ったという。「みなさん，みなさんはそのままお酒で，しかし私は水で，乾杯の音頭を取ります。『私たちの母に乾杯！』」

とたんにほろ酔い気分の男たちが奇妙な呪文にかかったように，無言でさかずきを飲み下した。もはや笑いも歌も出ず，ひとりまたひとりと部屋を出て行った。思い出のランプに火がともって，「母」の名が男たちの胸を突き動かしたのだった。

私は少年時代の母の日の日曜学校をよく覚えている。子供たちが自分の母に小さな鉢植えをプレゼントし，静かにすわって，盲目のメルビン・ワトソン兄弟がピアノのかたわらに立って，「すばらしい母」を歌うのを聞くのだった。私はそのときはじめて，盲人の人が泣くのを見た。今も記憶の中に，彼の見えぬ目から涙の粒があふれ，細いすじを作ってほおを伝わり，まだ見ぬ衣服の上衣のえりに落ちた様子がくっきりと見えている。子供心にも，大人たちがひっそりと静まり返ってたくさんの人がハンカチを取り出すのが不思議に思えたものである。しかし，今はそれがわかる。母を思い出していたのである。少年も少女も父親も夫も，「すばらしい母を忘れまい」と心に誓っていたのであろう。

私は何年か前に，優に中年を越えたひとりの男性から母親の話を聞いたことがある。未亡人となって子供たちを育てあげた彼の母親は，永遠の良き報いが待つ来世に旅立って行った。子供たちはなつかしい家に集まり，大きな食堂のテーブルのまわりを囲んで，母親が大事にしていた金属製の小さな宝石箱を敬虔な気持で開いた。中の品物がひとつひとつテーブルに置かれて行った。中にソルトレーク神殿発行の結婚証明書があった。「そうだ，今母さんは父さんといっしょなんだ。」屋根の下に子供たちの出生を見てきた古い屋敷の権利書もあった。母の家に対する愛情は査定価値とは比べるべくもなかった。　それから，いかにも年代風の黄色い封筒が出てきた。注意して開封すると，子供の筆跡で「母さん，大好きです」と書かれた手作りのバレンタインカードが入っていた。母親はすでに亡いが，彼女のいとおしんでいた物から母の教えが語られていた。部屋を静寂がおおい，子供たちはおのおのに母を忘れずにいよう，母を尊ぼうと胸に誓ったのである。彼らにとって，それはささいなことではなく，また遅すぎることでもなかった。

次に「覚えられている母」から「祝福された母」に移ろう。その最もうるわしい姿のひとつが聖典に描かれている。

私は主の新約聖書では，主の恵みにあずかった悲しむナインの未亡人の話に最も胸を打つ「祝福された母」の姿を見るのである。

「そののち，間もなく，ナインという町へおいでになったが，弟子たちや大ぜいの群衆も一緒に行った。

町の門に近づかれると，ちょうど，あるやもめにとってひとりむすこであった者が死んだので，葬りに出すところであった。大ぜいの町の人たちが，その母につきそっていた。

主はこの婦人を見て，深い同情を寄せられ，『泣かないでいなさい』と言われた。

そして近寄って棺に手をかけられると，かついでいる者たちが立ち止まったので，『若者よ，さあ，起きなさい』と言われた。

すると，死人が起き上がって物を言い出した。イエスは彼をその母にお渡しになった。」（ルカ7：11―15）

何という力，何という優しさ，何という同情が，救い主とこの模範から示されたことだろうか。私たちも，主の尊い模範に従いさえすれば，その祝福をあげることができる。機会はどこにでもある。必要なのは失意の心の無言の願いを聞く耳と，苦境を見る目である。そして，目から目，声から耳に限らず，救い主に厳然として特有な心から心への交流による同情に満ちた精神である。そのときに，いたるところどの母親も「祝福された母」になることであろう。

最後に，「愛される母」のことを考えてみよう。「一番好きな子は？」という子供時代を回想しての詩は今も子供たちに愛唱されているが，これはだれにでも共感される詩である。

『母さん，好きだよ』とジョン坊やは言った。
勉強も忘れて，帽子をかぶり，
くるりとうしろ向いて庭へ駆けて行った。
運ぶたきぎを母さんに渡して。

『母さん，好きよ』と　赤いほっぺでネルは言った。
『口では言えないくらい　だいすきよ。』
ところが半日，ネルはふくれっ面，ようやく遊びに出かけて母さんは喜んだ。

『母さん，好きよ』と　小さなファ

ンが言った。

『きょうは何でもお手伝いさせて。学校がお休みだからうれしいの。』

ファンは赤ちゃんを　あやして寝かせ，ぬき足さし足ほうきを出して床をはいては　部屋を拭いた。

くるくる，いそいそ　朝から晩までごきげん，

子供だって楽しくお手伝いができる。

『母さん，好き』とみんなで言った。

3人の子供はベッドに入った。

母さんをほんとに好きなのはどの子だと思う?

ジョイ・アリソン

母親に真心の愛を示すひとつの確かな方法は，母が忍耐強く教えてくれた真理に従うことである。この高い目標は現代にとって目新しいものではない。モルモン経に記録されている時代に，2千人の青年たちの先頭に立って義の戦いに赴いたヒラマンという雄々しく，正しく，気高い指導者がいた。ヒラマンは2千人の青年たちの行状をこう描写した。「われは……次に言うような偉大な勇気を見たことがない。……かれらもまたわれを指して……『……われらの神はわれらと共にましまして必ずわれらを倒れさせたまわないから，われらは行って戦おう。……』と答えた。わが子らはまだ戦ったことがなかったが死ぬことを恐れず，……疑いを抱かないならば神が必ず自分らを救いたもうとその母から教えを受けていた。かれらはその母の言葉をわれに話して『われらの母はわれらに教えたことを自分で確に知っている。われらはこれを疑わない』と言った。」(アルマ56：45—48)

この戦いの最後に，ヒラマンはこう記述した。「嬉しいことに一人も失わなかった。まことにかれらは神の限りない力を得たかのように戦った。人がこのように不思議な力で戦ったことはいまだかつて例のないことであった。……」(アルマ56：56)

驚くべき力，母の愛と母への愛が合して勝利を得たのであった。

聖典の歴史の扉の各ページに，「愛される母」の心優しい感動的な話が満ちている。しかし他のだれにもまさる至上の母がある。所はエルサレム，時の絶頂と言われる時代，ローマ兵士が大勢集まっていた。かぶとはカイザルへの忠誠を示し，盾はカイザルの紋章をつけ，やりはローマのわし印を冠していた。エルサレムには群衆も集まっていた。白々と明け始めた静かな空に，「彼を十字架につけよ，彼を十字架につけよ」という荒々しい叫びが果てることなく聞こえていた。

やがて時が来た。神の御子の地上の召しは，急転直下劇的な終結に向かうのである。孤独に違いない。この御方のために歩けるようになった足なえの乞食も，この御方のために聞こえるようになった耳しいも，この御方のために見えるようになった目しいも，この御方のために生き返った死人も，姿はどこにも見あたらない。

しかし，数人の忠実な弟子たちが残っていた。御子は苦しい十字架の上から，そばに立つ母親と愛弟子を見て，こう言われた。「婦人よ，ごらんなさい。これはあなたの子です。それからこの弟子に言われた。「ごらんなさい。これはあなたの母です」。(ヨハネ19：26—27)

時は止まり，地は震え，山が沈んだあの恐ろしい夜から，幾世紀を経た歴史の中に時の経過を超えて，「ごらんなさい。これはあなたの母です」という主の簡潔神聖なみ言葉がこだましている。

私たちがこの優しい諭しに聞き従い，喜びをもってその心に添うならば，無数の「忘れられた母」の姿は消え失せるであろう。どこもかしこも「覚えられている母」「祝福された母」，「愛される母」に満ち，神ははじめのときと同様にみ手に成るわざを再度見渡して，「はなはだよし」と言われるであろう。

各々がこの真理を心に銘記されんことを。母を忘れては神を覚えられない。母を覚えて神を忘れはできない。それはなぜなのか。この尊いふたり，母とそして神とは，創造において，愛において，犠牲において，奉仕において，あたかもひとつだからである。

私たちが思いと行ないによって神とそして母とを尊ぶようにと，へりくだって心の底から祈るものである。イエス・キリストのみ名により，アーメン。

永遠の生命への道

十二使徒評議員会会員

デルバート・L・ステイプレー

兄弟姉妹，きょうの大会午前の部の時宜を得たリー大管長のすばらしい話を，私たちはみな心から感謝していると思う。大管長は私たちを，主のみまえに正しく歩み，主の律法と戒めを守るように励まし，勧告した。神がご自分の民の忠実な人々にとっておかれる永遠の生命への道を見いだすことができるのは，その道ひとつしかない。私たちの神は実にこう約束された。「もし汝わが誡命を守り終りまで忍ぶならば永遠の生命を得ん。これ神のあらゆる賜の中最大なるものなり。」(教義と聖約14：7)

「見よ，永遠の生命を有つ者は富めるなり。」(教義と聖約6：7) 永遠の生命をよくよく思う人はごくわずかだが，それは私たちのだれもが知と情のまず第一に据えおくべきことである。神の子供である私たちは，日の栄えの栄光を望むならば，自分の素性と将来を決して忘れてはならない。

神は啓示によって，人の生き方を示す救いと昇栄の福音の計画を与えられた。永遠の生命とは神の生命であり，神はそれをすべての子供たちに分け与えたいと願っておられる。しかし私たちには自分で行動する自由があり，「……万人に為したもうメシヤの大いなる賢い仲裁によって自由と永遠の生命とを選ぶか，または悪魔は万人が自分のようにみじめになることを求めているから，その束縛と力とに由って定まる束縛と死とを選ぶか，これは全く人間の自由である。」(IIニーファイ2：27)

永遠の生命への道を歩み出す第一歩は，バプテスマである。私たちの救い主は，水に沈めるバプテスマをイエスに施す権能を神から与えられていたバプテスマのヨハネと共に水に入り，そうして自ら範を示された。それが，万人の従うべきバプテスマの様式である。

使徒パウロは，「主は一つ，信仰は一つ，バプテスマは一つ。」(エペソ4：5) と教えた。

キリストはひとりの主，キリストが教えた福音の計画はひとつの信仰，水に沈んだキリストのバプテスマはひとつのバプテスマである。

モルモン経の予言者，ニーファイはそれをこう語った。「……その門とはすなわち悔い改めて水のバプテスマを受け，それから火と聖霊によって罪の赦しを受けることを言う。

そうすれば，あなたたちはすでに永遠の生命へ行く真直ぐで狭い道に入ったのである。……」(IIニーファイ31：17—18)

「狭い門からはいれ。……

命にいたる門は狭く，その道は細い。そして，それを見いだす者が少ない。」(マタイ7：13—14)

キリストははっきりとこう宣言された。「わたしは道であり，真理であり，命である。だれでもわたしによらないでは，父のみもとに行くことはできない。」(ヨハネ14：6) キリストとキリストの使命を信じる私たちは，キリストを無視して永遠の生命を受けることはできない。救い主は世の罪のために贖いの犠牲となって命を捨て，そうして忠実な者たちが永遠の生命と昇栄を得るための扉を開いて下さったのである。

しかしながら，改宗してバプテスマを受けるだけで永遠の生命が保証されるわけではない。神の王国に昇栄するには，日の栄えの完全な律法にそわなければならないのである。(教義と聖約76：50—70参照)

ある人々は，福音の儀式を全部受ければ，罪があっても，神の日の栄えの住まいを継ぐことができると誤って考えている。間違った考え方をしているそのような人の行く手には，何と荒涼たる目覚めが待ちかまえて

いることか。「……主はいささかも罪を見逃したまわない。」(アルマ45：16)

このことについて，ニーファイの教えを聞きなさい。「またまことに『われらは明日死ぬかも知れないから，飲んだり食ったりして楽しめ，そうすればわれらは幸福で満足である』と言う者が多くあり，『飲み食いをして楽しめ，しかし同時に神をおそれよ。神は小さな罪を犯すことは許したもう。それであるから少々偽を言い，人の言葉につけ込んで欺き，隣人をおとし入れる穴を掘れ。これは少しも悪い事ではない。われらは明日死ぬかも知れないから，すべてこのようなことをしても差支えない。たとえ，われらに罪があると認められても，神はわずかにわれわれを鞭うちたもうだけであって，われらは結局神の王国に救われる』と言う者も多くある。

このようにして偽で愚な空しい教えを宣べ伝える者の数は実に多い。この連中は心に誇り高ぶって，その計ごとを主に隠そうと深く企て，その行いを暗黒の中に置くようにする。」(IIニーファイ28：7－9)

私たちは人間の誤った教えに迷い，愚かにも神の律法を破って，昇栄の機会を逃してしまってはならない。イエスは言われた。

「わたしにむかって『主よ，主よ』と言う者が，みな天国にはいるのではなく，ただ，天にいますわが父の御旨を行う者だけが，はいるのである。」(マタイ7：21)

熱心に永遠の生命を求める者は，誘惑や罪のわなを避けることである。自分を充分整えて，誘惑がやって来る前に，どの道を取るか決めておくのでなければ，罪を犯すことを免かれ得ない。

世の中には，相反する大きな2つの力が働いている。ひとつは，人の自由意志を取り上げて人を縛り，サタンの女々しい従者にしてしまう悪の力であり，それは不幸な人生と永遠の悲惨をもたらす以外のなにものでもない。もうひとつは神の力である。それは善を行う力，正しく生き，選択の自由を享受し，救いと昇栄をもたらす唯一の御方キリストの勇気ある誠実な従者となる力である。

私たちは自分がどの側につくかを決め，それからは悪の誘いにめげず，主の側に忠実に立つ勇気を持たなければならない。

善悪をあわせ持ちながら，天父の永遠の住まいに行くことはできない。私たちの義務は常に正しいわざを行なうことである。主は，神のみ言葉である光明と真理が悪を捨て去ると言っておられる。(教義と聖約93：37参照) 生活に光明と真理がなければ，私たちはサタンの力にさらされる。

私たちはサタンの軍勢の狡猾な手下に気をつけなければならない。サタンはさまざまな計略を用いて，人類を自分の配下に引き入れようとしている。手の内が見えているものを少しあげてみても，無関心，自己満足，不道徳，薬物，貪慾，不正直，悪習慣などがある。

救い主は弟子たちにこう教えられた。

「だれも，ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し，あるいは，一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは，神と富とに兼ね仕えることはできない。」(マタイ6：24)

これは別の言い方もできる。あなたは神とサタンとに兼ね仕えることはできない，と。人生は真剣勝負である。しかし，神から力を恵まれた私たちは，サタンが道の途中に置く一つ一つの謀略や障害物に打ち勝つことができる。永遠の生命への道は，まわりに世の誘惑が多いため容易なものではないが，狭い道を歩むときの報いと祝福を考えれば，何の犠牲にも価する。

アルマは民に，この人生は自分の働きをなして永遠に備える時だと教えた。彼は悔い改めを引き延ばす人々にこう警告した。「あなたたちは，このおそろしい危機に陥ってから『私は悔い改めて私の神に立ち帰る』と言うことはできない。あなたたちは本当にこう言うことはできない。なぜならば，あなたたちがこの世を去る時あなたたちの肉体を離れる霊は，永遠の来世に於て再びあなたたちの身体に宿る力を持っているからである。

あなたたちが，もしも悔改めを引き延して死んでしまうならば，すでに悪魔に従ったのであるから，……従って主の『みたま』はもはやあなたたちから離れて再びあなたたちに宿らず，……」(アルマ34：34—35)

私たちには聖霊との交わりが常に必要である。それがなければ，私たちは霊的な導きにあずかれず，永遠の価値あるものに感じる心を失い，不信仰と悪習に流されてしまう。

主は，悪の道や心の高慢やむさぼりなど，用意しておられる永遠の生命から人を遠ざけるさまざまな忌まわしいものを捨てないでいる人々を喜ばれない。(教義と聖約98：20参照)

ベンジャミン王は民に言った。「しかし，これだけは言えると言うのは，もしもお前たちが自分自身と自分の思想と自分の言葉と行いに注意をせず，神の命令を守らず……生涯の終りまで信じないならばお前たちは必ず亡びると言うことである。それであるから世の人々よ，記憶をせよ，亡びるな。」(モーサヤ4：30)

永遠の生命の招待状は，喜んで代価を払うすべての人に公開されてい

る。主は言われた。「……わが福音に従い居る者は幸福なるかな。その者は報いとして地の善きものを受け，……またわが前に忠実にして勤勉なる者は，天より祝福をもて冠を受くべく……」（教義と聖約59：３－４）

神と聖なる誓約をし，義務を負うだけが，求められていることのすべてではない。ニーファイはこう言った。「さて私の愛する兄弟たちよ，私は尋ねたい，あなたたちはこの真直ぐで狭い道に入ったら，それで万事終りであるか。ごらんそうではない。あなたたちがもしもキリストの言葉によってキリストを確く信仰し，人を救う大きな能力のあるキリストの功徳に全く頼らなかったなら，あなたたちはここまで進んでくることさえできなかったのである。

それであるから，あなたたちはこれからもキリストを確く信じて疑わず，完全な希望の光を抱き，神とすべての人とを愛して強く進まなければならない。それであるから，この後もたえずキリストの言葉をよく味わいながら強く進み，終りまで堪え忍ぶならば『永遠の生命を受ける』，かくの如く天の御父が言いたもうた。」（IIニーファイ31：19－20）

私たちは参加者とならずにただ興味があるだけの傍観者になって怠けていながら，永遠の祝福を受けることはできない。自分の生活を良きに変え，進歩させる証を自分で得ることは私たちの責任である。

永遠の生命の賜は，御父と御子によって立てられた教会以外に得ることはできない。時の絶頂にキリストが立てられた教会は，キリストの使徒たちがわざを終えたのちに背教し，そのため福音は間違って教えられ，儀式が変わり，神聖な権威も失われて，誤りの中に浸ることとなった。中世の暗黒時代をそのような状態が支配し，新しい福音の神権時代，すなわちキリストの教会の回復が待たれたのである。私はその回復が1830年に，予言者ジョセフ・スミスによって実現したことを証する。

末日聖徒イエス・キリスト教会は永遠の真理の聖い原則を基として堅く立っている。教会員の物的，霊的必要に応え，キリストのみ教えや標準をしっかりと保っている。モルモニズムはその戒めゆえに発展を続けている。正直，誠実，道徳，貞節，これら旧来の徳は，神から与えられた生活の標準である。残念なことにこれらの特性は世間から急速に失われ，悪が台頭しつつある。

私は，神の忠実な子供たちには将来の生活に多くが約束されていると証する。今こそ，あらゆる人が神にたちかえる時である。神に対する信頼と信仰が，忠実，誠実であれば聖なるみ前に導いてくれる神のみ守りと導きをもたらすのである。

兄弟姉妹，私たちはだれもがそのすばらしい賜と祝福にあずかる資格を持っている。神はたしかに生きておられる。この教会は神の教会である。神よりの霊感によって導かれている教会である。私たちは愛するハロルド・Ｂ・リー大管長を生ける予言者にいただいている。彼は偉大な人物であり，私たちが尊敬し，賛美し，教えと勧告と導きを仰ぐ人である。私たちが神と交したすべての誓約や義務に忠実であるよう，イエス・キリストのみ名により，祝福を願うものである。アーメン。

贖い主イエス・キリスト

大管長会第二副管長

マリオン・G・ロムニー

教会員であるなしを問わず，世界の各地におられる愛する兄弟姉妹，

末日聖徒イエス・キリスト教会の信仰箇条第1条にはこうある。「われらは，永遠の父なる神と，その御子イエス・キリストと聖霊とを信ず。」

先回，春の総大会において私は「永遠の父なる神」について話をした。きょうは，私たちの贖い主である「神の御子イエス・キリスト」についてお話したい。これは実に神聖なテーマなので，私たちの一人一人が神の独り子なる私たちの救い主について理解を深め，感謝を深めるよう，皆様も神の助けを祈っていただきたい。

年代的に言うと，イエスについての最も古い記事は，神の霊の子たちが参加した前世の大会議のことが書かれているあの聖典に見られる。その大会議で，御父は人類の永遠進歩の計画を提案された。そのときイエスは自ら望んで，人間が救いと昇栄を得るに必要な贖罪をする役目を引き受けられたのである。アブラハムは，示現で見て，その大会議の様子をこう記録した。

「さて，主はわれアブラハムに，この世に先だちて組織されたる英智たちを見せたまいたりき。而して，これらすべてのものの中には，高貴にして偉大なるもの多くありたり。

神，これらの霊を善しと見たまい，これらの霊の中に立ちて……」(アブラハム 3：22—23)

故オルソン・F・ホイットニー長老は次に紹介する詩，「エライヤス，時代の叙事詩」(*Elias*：*An Epic of the Ages*) の中で，この天上の会議の情景と結末，イエス・キリストの占めた役割などにつき，アブラハムや他の聖見者たちが啓示したことを詩句にした。ホイットニー兄弟のその壮大な詩を聞いていただきたい。

おごそかなる会議に神々は座し…
……
……荘厳なそのいっとき
思考こそ最たる益なりしとき
未来世界の運命は
揺れつつ定まらずあり。
己れを呪縛する沈黙に，
なみいる王と祭司のなか
群衆をぬきんでて威厳あり
高貴なる神　ひとり立ちぬ。

優美と力を兼ねそなえ
神の風貌に柔和をたたえ，
面の栄光は
ひなかの光彩にまさって輝き……
彼語れり——人みなの心はいやまして高まり
静寂はいよよ黙するごとく

「父よ，」——声は楽にも似て……
「み父よ，」「たれか　死すべきを，
汝が子らを贖うに
今は一切の形なきうつろなる天空より
やがて生命の脈動が満ち満ちるかしこに
大いなるミカエル（アダム）あまたに先んじて下る，
死すべき人を起こすべく。
汝遣わすは選ばれし救い主
見よ，我ここにあり，我を遣わしたまえ！
報いはさらに求めず
我がものはただに
望む犠牲のみ
永久なる栄光　汝にあれ！」
その声のいまだ響くなか，すっくと
面高く立ち上がりし者，
そびえ立つ峰さながらに誇りつつ
並み居る者の驚きの中に……

「我を遣わしたまえ！」
へつらいの笑みの中に

さげすみをあらわに
「さらば天地かけて落ちる者
　ひとりとてなし。
恥じることなき我が救いの計画。
人の意志とや？――否，我が意志
　なり。
報いはそれ，かしこの玉座に
　座する権威を。」

ルシフェル黙し，息つかぬ静寂
　またもや重く
衆目はいっせいに
引かれるごとくかの人へ
しばしよどむかに厳粛なる一瞬―
　聞けり
永劫全能の口よりとどろきわたる
　み父の堅き命
「エホバよ，汝れこそ我が使者なり！
サン・アーマン，我　汝を遣わさ
　ん。
汝が面前をひとり行くべし
汝が跡に十二の者つき従うべし
かのはるかな国になおあまたの人
　を
道は備えおくべし，
しかしてはじめにして終りなる
　我来たり行かん
地は我が栄光をわかちて……

行け，汝神々より選ばれし者，
　力よ汝が内に宿れ！
疾く行きて地を救え，
　死と地獄とを退けよ。
人の運命を握るは汝れ一人
　人みなの運命。
汝自由なりしも敗るるべからず
　自由よ，誤つにはあまりに大い
　なり。

我と汝れとの聖なる腕(かいな)にて
汝失われしものを戻せ，
贖われたる人，神と共に
神さながらに永遠を生きん。
返せ，親のかこいに
このさまよえる星を戻せ，
　地は汝を勝利者と呼ばん，
　天は汝を王と迎えん。」

ことなれり。群衆よりあまねく
　ざわめき起きて
相反せし　声のうねり，二海(ふたうみ)の
　であいて相克するがごとし。
こと終りぬ。諸天涙す。
その年代史こそ
一人エローヒムの選び
一人戦いて堕ちし者にまさりしを
語る。

アダムから現在の予言者ハロルド・B・リーに至るまで歴代の予言者はみな，神の霊の長子であるイエス・キリストがそうして選ばれた私たちの贖い主であることを証している。

イエスに先だって世に来た予言者たちは，イエスが選ばれていたこと，やがて地上に来て使命を果たされることを証した。

はじめに，アダムが神の命令に従って犠牲を捧げていたときのことである。「……主の天使一人アダムに現われて言いけるは，汝何故に主に犠牲を捧ぐるやと。アダム彼に言いけるは，われその故を知らず，ただ主の誡命に従うのみ。

ここに天使語りて言いけるは，この犠牲を捧ぐることは，御父の生みたもう……ただ独りの御子が犠牲となりたもうことのひながたなり。」（モーセ５：６，７）

このときからキリストが世に降臨されるまで，神が定めた人類の永遠進歩の計画を理解した人々は，みな同じような犠牲を捧げた。御父が人々にこのことを要求されたのは，キリストの降臨と，贖い主としてキリストが果たされる贖罪のことを常に思わせるためであった。

主はさらにアダムにこう言われた。「……もし汝われに心を向け，わが声を聴きて信じ，且つすべて汝の罪を悔い改め，恩恵と真理に充ちたるわが生みし独子の名により，すなわちそれによりて後に人の子らの救わるる天下に与えらるる唯一の名，すなわちイエス・キリストの名によりて水に入りてバプテスマを受くるならば，汝聖霊の賜を受くべし。……」（モーセ６：52）

「この故に，汝の為すすべてを御子の御名によりて為せ。また汝悔い改めて今よりいつまでも御子の御名によりて神を呼ぶべし。

アダムとイヴとは……息子娘らにすべての事を知らしめたり。」（モーセ５：８，12）

アダムから時の絶頂に至るまで，地の住民は人類の救いについての神の神聖な計画，すなわちイエス・キリストの福音を繰り返し教えられた。エノク，ノア，メルケゼデク，アブラハム，モーセ，イザヤ，エレミヤ，その他の予言者たちもそれを教えた。

キリスト降誕直前までの２千年間，アメリカ大陸ではふたつの大文明が花開いた。その民にも，キリストの使命は知らされていた。モルモン経には，神のみ手により「大塔」からアメリカへ導かれてきた一移民団のひとりの指導者に，このようなことがあったと書かれている。「主は現われて……言いたもうた。『見よ，われはわが国を贖うために創世の前より備えられたる者なり。われはイエス・キリストなり。……わが名を信ずる一切の者はわれによりて永遠に光を受け……

見よ，今汝が見るこの体はわが霊体なり。……われは今わが霊のまま汝に現わるると同じ形の肉体を具えてわが民にもまた現われん』と。」（イテル３：13，14，16）

モルモン経には，さらにその2200年後，キリスト生誕の前の晩にひとりのアメリカの予言者に「主の御声が聞こえ」てきたと記されている。

そのみ声はこう言った。

「頭をあげよ。元気を出せ。予言の成就する時は近づきたり。……われはわが聖き予言者らの口を借りて言い伝えたるすべての事を必ず成就せしむることを世の人々に証明せんために明日世の中に来らん。」（Ⅲニーファイ1：13）

私たちはみな，むろんのこと，ベツヘレムの野原で天使が告げたことを知っている。「きょうダビデの町に，あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。」（ルカ2：11）

御父も御子も，イエスは私たちの贖い主であると，確信に満ちた証を繰り返しておられる。キリストのバプテスマのときに御父は言われた。「あなたはわたしの愛する子，わたしの心にかなう者である。」（ルカ3：22）またのちに変貌の山で，「これはわたしの愛する子，わたしの心にかなう者である。これに聞け。」（マタイ17：5）

新約聖書には，キリストご自身がその身分と使命を証されたことが，たびたび記録されている。御父と御子の最も印象的な宣言のひとつは，キリストがエルサレムの地で復活後のみわざを行なわれたあと，アメリカ大陸にいたニーファイ人を訪れて彼らに告げられた言葉である。

御父はよみがえられたキリストを次のような言葉でニーファイ人に紹介された。

「わが喜ぶ愛子を見よ。われはこれに由りてすでにわが名の栄光を示しぬ。わが愛子に聞け。」（Ⅲニーファイ11：7）

そのあと，復活されたイエスご自身が天から下り，「群衆の中に立ちたもうた。……時に……群衆に話しかけて仰せになった。

『見よ，われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。』」（Ⅲニーファイ11：8―10）

「われがこの世に来れるは，世の人に贖いと救いとを与え，また世の人を罪より救うためなり。

この故に，悔い改めて幼児のごとくわれに来る者は，われことごとくこれを受け容るべし。……故に，世界の隅々に至る者たちよ。悔改めをなし，われに来りて救いを受けよ」（Ⅲニーファイ9：21，22）

時間が少々あるので，贖い主としてのキリストの責任と使命について私自身の証を述べたい。

私は，これまで引用してきた証がすべて真実であると証する。イエス・キリストの贖罪によって人類はみな復活し，不死不滅となること，イエス・キリストの福音に対する従順の度合いに応じて永遠の生命を受けることを証する。

イエス・キリストは父なる神の霊の長子であり，肉における神の独り子である。聖典が教えるとおり，地球の創造以前の霊界で，現世，死，復活，人類に与える永遠の生命といった御父のご計画をイエス・キリストは支持された。また御父から委任されてこの地球の創造主となられた。イエス・キリストは旧約聖書におけるエホバでもある。「まことにイエス・キリストは過去においても現世においてもエホバであり，アダムの神，ノアの神であり，アブラハム，イサク，ヤコブの神であり，イスラエルの神であり，世々の予言者に語らしめたもうている神であり，万国の民の神であり，また今に『王の王』『主の主』として地上に君臨したもうはずの神である。」（ジェームズ・E・タルメージ著「基督イエス」）

イエスは御父から生を与えられ，マリヤから生まれて，ベツレヘムのみどり児としてこの世に降臨した。キリストの教えた福音こそ，人が創造された意義を全うできる唯一の手段である。「肉身におけるキリストの完全無欠な生涯」と「全人類の罪のために自ら犠牲となられたその死」とが，死に対する勝利と共に，全人類の復活と不死不滅をもたらし，さらにキリストが定められた条件しだいで永遠の生命をも可能にしたのである。

私はこれらのことが真実であると証し，さらに1820年の春，この同じイエス・キリストが御父と共にニューヨーク州パルマイラの近くの森でジョセフ・スミス（二代目）に姿を示されたと証する。これは人類の歴史上，最も大いなる神の顕現のひとつであった。予言者はそのことをこう語っている。

「……そしてその光が私の上に留った時，私は筆紙に尽し難い輝きと栄光とを有ちたもう二人の御方が私の真上の空中に立ちたもうのを見た。そしてその中のお一人が私に言葉をかけて私の名を呼びたまい，他のお一人を指して『こはわが愛子なり，彼に聞け』と仰せられた。」（ジョセフ・スミス2：17）

イエスはそのみ言葉の通り，「世の生命にして世の光明」（教義と聖約10：70）である。「……イエス・キリストとは，御父より賜わりたる御名にして，この名のほかにはよりて以て人類の救われ得る名一つもなし。」（教義と聖約18：23）キリストの「『みたま』は世に来るあらゆる人々に光を与え……その声を聴く全世界のあらゆる人々を照すなり。

この『みたま』の声を聴くすべての人は神に来る。すなわち，御父の許に来るなり。」（教義と聖約84：46―47）

私は，現在主の予言者であるハロルド・B・リー大管長によって管理されているこの末日聖徒イエス・キリスト教会が，キリストの指示の下

に設立され，キリストの権能を授けられ，キリストの福音を教え，その福音の救いの儀式を行なうように命を受けたキリストの教会であると証する。贖い主である主イエス・キリストが手の届くところに置いて下さった祝福，喜び，栄光を，私たちがふさわしくなって得られるようにということが，すべてその目的である。私はこれらのことをみな，贖い主イエス・キリストの聖なるみ名により，証する。アーメン。

このことを思え

十二使徒評議員会会員

ブルース・R・マッコンキー

もしも，主が自ら下って大会を開き，聖徒たちに語られるとしたならば，主はどんな話をされるだろうか。もしも主がこの大会に臨んで語ろうとされたならば，私たちのため，私たちの救いと祝福のためにどんなみ言葉を与えられるだろうか。

そのようなことは可能性の領域をまったくはずれていることではない。予言者ジョセフ・スミスは，私たちが心からねたみをすっかりぬぐい去り，完全な信仰を持ってひとつに集まったならば，幕はすぐにでも裂けるであろうと言った。(教義と聖約67：10参照，*Teachings of the Prophet Joseph Smith*「予言者ジョセフ・スミスの教え」 p. 9）主がエノクの市に住まわれたときは，民の会合で語られたに違いないし，やがて地上が輝く福千年に入って主が統治されるときには，またそのように語られると思う。

しかし私たちは，人の子らに与えられる永遠の真理の言葉は，主ご自身の声も主のしもべたちの声も同じひとつであるという原則をいただいている。昨日リー大管長が大会を開幕したときも，またロムニー副管長が，もしも主自らここにおられたとしたら兄弟たちが述べたと同じことを語られるはずだと，口ずから力あるまことの証を述べたときも，私はその原則を痛感した。

教会の大管長会に属するこれらの兄弟たちは主のしもべであり主の代表者である。彼らは現在の地上の神の王国の鍵を持つ人々であり，この世では平安，来世では永遠の栄えをもたらす命と真理と啓示の言葉は，彼らから来るのである。

さて私は，これまで壇上に立った方々と同じように力強いみたまが自分にもそそがれ，自分の語る言葉が，主が今私に語らせたいと思われる言葉そのものとなるように，心から願っている。末日聖徒が国内外の情勢に前向きで健全な姿勢を持ち，破壊的で有害なことには背を向け，すべてに善なる良いものを求め，自分に永遠の福音の栄光と不思議とを恵む主の慈愛をほめたたえるように，私がみたまに導かれて語れるものならそう勧告したい。

世を席巻するものをみわたすと，良くないものにすぐ目が行きがちであり，価値を疑うような運動や事業，あるいはどうかと思われるような活動に自分の力をつい浪費しそうである。

しかし，つとめて良きわざに携わるようにという神の命令があること，人類の自由と幸福に寄与するまことの原則はどれも主に認められるものであること，正しい主張とまことの原則を首唱する人々を支持する必要があることを，私はよく承知している。これらのことを，私たちも有益，最善の方法で実行すべきである。問題は何をすべきかではなく，それをいかにして行なうかにあると思う。私は，あらゆる善なるものを支援するために末日聖徒にできる最も有益なことは，永遠の福音の原則を守り，また教えることであると思う。

特別な賜物を持って別の分野で働くべき人はいるだろうが，この知識と証をもってする私に関する限り，この試みの世に自分の力と勢力と能力を用いて教会と他の天父の子らの間で真理と義の道を宣べ広め，この道のために働く以上に大切なことはない。

末日聖徒には，主にあって喜び，主の恵みをほめたたえ，心に永遠の真理を熟考し，義なるものに心を向ける一大義務があると思う。

ここでイザヤの言葉を読んでみたい。イザヤが私たちに，イスラエルの家に，主の王国の民に問うた言葉である。

「われわれのうち，だれが焼きつくす火の中におることができよう。われわれのうち，だれがとこしえの燃える火の中におることができよう」。（イザヤ33：14）

それはつまり，こうである。教会員のうち，だれが日の栄の王国を受継ぐことができよう。だれが神とキリストと聖者たちのいる場に行くことができよう。だれが世に打ち勝って義のわざをなし，信仰と献身をもって終りまで耐え忍び，「来て，父のみ国を受継ぎなさい」という恵みのみ言葉を聞くのだろうか。

イザヤはこう告げている。

「正しく歩む者，正直に語る者，しえたげて得た利をいやしめる者，手を振って，まいないを取らない者，耳をふさいで血を流す謀略を聞かない者，目を閉じて悪を見ない者，このような人は高い所に住み，……」（イザヤ33：15—16）

ここでもしよければ，聖霊の力によって語られたこのイザヤの言葉を引いて，これが現代の私たちにどうあてはまるか，少しお話してみたい。

まず，「正しく歩む者，正直に語る者」だが，主イエス・キリストの贖罪の犠牲の上に立つ私たちは，主の戒めを守らなければならない。また，真理を語り，義しいわざをなさなければならない。私たちは自分の思いと言葉と行ないによって裁かれる。

第二に，「……しえたげて得た利をいやしめる者」だが，私たちは隣人に対して公正に行動しなければならない。再臨の日には雇い人を不当にしいたげる人々に対して証人になると言われたのは，ほかならぬ主ご自身である。

第三に，「……手を振って，まいないを取らない者」だが，私たちはあらゆるたぐいの買収を拒否し，隣人とは公明正大につきあわなければならない。神は人をかたより見ない御方である。すべての人間を同じように尊重して，神の戒めを守る人々はことさら愛される御方である。救いは無償である。それは金で買われるものではなく，保証書付きの福音の律法に従った人々だけが救われるのである。贈収賄はこの世のものである。

第四は「……耳をふさいで血を流す謀略を聞かない者，目を閉じて悪を見ない者」である。私たちはよこしまや邪悪に心を向けてはならない。世の中や政治のあら捜しをやめ，良いものを求めよう。万事に肯定的で健全な見方をしよう。

あらゆる人は自分の播くものを刈り取る，という世界の創造以前から神ご自身が定められた永遠の律法がある。私たちが悪いことを考えれば，舌は清くない言葉を出す。私たちが悪い言葉を語れば，結局悪い行ないにゆきあたる。心が肉欲や世の悪に占領されていれば，俗心や不義が普通の生き方に見えてくる。頭に不道徳な思いが巣くえば，だれもが不道徳で不貞に思われ，自分と世間との壁が取払われてしまう。それはほかにも，不健全なこと，みだらなこと，不純なこと，不敬なことのすべてに言われる。それが，主の憎むと言われる「悪しき計りごとをめぐらす心」（箴言6：18）である。

その一方，心に義なることを思えば，私たちは義人となる。絶えず徳を以て自分の想いを飾れば，信じること神の前に強くなり，神は私たちに義の雨を注がれる。実にヤコブの言う通り，「肉欲に迷う心は死を招き霊のことを思う心は永遠の生命を招く」（IIニーファイ9：39）のである。パウロもこう語っている。「まちがってはいけない，神は侮られるようなかたではない。人は自分のまいたものを，刈り取ることになる。すなわち，自分の肉にまく者は，肉から滅びを刈り取り，霊にまく者は，霊から永遠のいのちを刈り取るであろう。」（ガラテヤ6：7—8）

パウロはまたこう言った。

「……すべて真実なこと，すべて尊ぶべきこと，すべて正しいこと，すべて純真なこと，すべて愛すべきこと，すべてほまれあること，また徳といわれるもの，称賛に値するものがあれば，それらのものを心にとめなさい。」（ピリピ4：8）

義なるものを心にとめるには，救いの真理を意識して念頭に置くことである。昨日パッカー長老は，健全な思いを胸に抱くためにシオンの歌を歌おうと雄弁に語られた。私はそれに加えて，開会の歌を歌ったあとから自分で説教するつもりになることを提案したい。私は町の人込みを縫いながら，あるいはへんぴな道を歩きながら，また人里離れた場所にいながらいろいろな説教を説いて，自分の心を主のみわざや義しいことに向けている。その説教は，会衆を相手に行なったどんな説教よりも良いものであると言うことができる。

自分の救いをかちえるために，私たちは主にあって喜ぼう。心に主の真理を想い，自分の関心や興味を主と主の恵みに集中しよう。私たちは世を捨て，力と勢力と能力のすべてを用いて主のみわざのために働かなければならない。

主の民は主を喜び，主の聖きみ名をほめたたえなければならないと思う。ホザナの叫びが絶えず唇から出るはずだと思う。この御方を知ることが永遠の生命であるという主に関する啓示された知識を思い，主が私たちのために定められた救いの偉大な計画を思い，血をもって私たちを贖い，贖罪によって命と不死不滅をもたらして下さった主の愛する御子を思い，また，イエスを除くほか人類の救いに最大の貢献をし，殉教に

よって現世の召しを閉じた予言者ジョセフ・スミスの一生とその働きを思うとき，私の胸には永遠の感謝が湧き上がり，天軍と共に声をあげて絶え間なく賛美を歌いたいと思うのである。

地上の王国を導くために主が生ける予言者を召して再び地上に使徒と予言者を立てられたことを思い，私たちが天よりの啓示を得て魂を清める力を持つようにと，主が聖霊の力と賜物を与えておられることを思い，数限りない祝福を，賜物と奇跡と家族が永遠に続くという約束と，私たちに豊かに注がれ，全人類にも価なく提供されているあらゆる祝福を思うとき，主をほめ，主のみ恵みを感謝する私の声はとどまるところを知らない。

けさほどロムニー副管長が話された折りと同じこの賛美と感謝の心をもって，私のつたない賛美の歌で話を終えたいと思う。

主をたたえよ
善なる主をたたえよ
恵み深き主をたたえよ
主のみ名をほめ，み顔を仰げや
おお，主をたたえよ

主をあがめよ
慈悲なる主をあがめよ
いつくしみ深き主をあがめよ
主のみ名をほめ，み顔をたずねよ
おお，主をあがめよ

主をたたえよ
万物の造り主なる主をたたえよ
万物を贖いたもう主をたたえよ
主のみ名をほめ，み顔をたずねよ
おお，主をたたえよ

主をたずねよ
高きに統べたもう主をたずねよ
み旨を知らしめる主をたずねよ
主のみ名をほめ，み顔をたずねよ
おお，主をたずねよ

私たちがみ前にまっすぐ歩み，戒めを守りつつ，心の誠を尽くして主を求めるならば，主のみ顔を実際に見，ついには主と共に御父の王国で永遠の生命を受け継ぐと約束されている。私はそのことを証し，またすべての人のため，このことをイエス・キリストのみ名によって祈るものである。アーメン。

世のものか，神の王国のものか

十二使徒評議員会会員

ハワード・W・ハンター

この壇上に立つ短い時間に，私は末日聖徒イエス・キリスト教会の教えと教義が真実であるとの証を述べたいと思う。

私たちは，世界の創造この方，最も開かれた時代と評される時代に生きている。現代科学は人心を呆然とさせるほどの業績を生んだ。しかし私たちは，これらの業績の背景となった法則が過去も常に存在してきて，現代になってからやっと，人の知恵と理解が，自然の法則を使って現代世界の功績を生み出せるほどに増しただけに過ぎないことを知っている。

数世代前には原料を手で加工して物を生産したが，現代はそれが大量生産に代わり，人間の才と技術とそれが生み出した機械とによって能率と品質が格段に向上した。

農業は世界人口の過半数を支える生活手段である。ところが近代化された農業地帯を行くと，馬やすきを使って土地を耕し，1本ずつあぜをつけて行く農夫の姿や，実りの季節に一家そろって畑で働く姿が見あたらなくなった。今では巨大な農機具が百頭分もの馬力で寸時にあぜをそろえるのである。つい先頃までは収穫にかまを用い，からざおで打って，風でもみがらを分けたものだが，今では大きなコンバインがうなりながら，ひとつの操作で全部の仕事をしてくれる。

遠い土地の出来事が家にいながら見られるが，これは数世代前なら奇跡とも思われることである。現代生活は即座にダイヤルして仕事を処理したり，どんなに遠い場所でも会話することの楽しみがあるなど，身近に即時の通信手段がある。過去何世紀にもわたって動物が人間の輸送手段を提供してきたが，今ではそれが超スピードの快適な乗り物にかわった。また，川のかなたに何があるかが人の心を捕らえてやまない時代は昔となり，空を飛ぶ飛行機が海と海をかつての川と川を結ぶように簡単に結んで，人は気軽に世界へ足を延ばすようになった。

食住の向上，便利さ，医療設備の発展，教育の恩恵，高い生活水準など，かつて世界史が味わったことのない現代のこうした功績を，私たちは誇りとする。

私たちの先祖の大勢が，最もありふれた農耕という仕事に携わっていた。そういう人々がイギリスの故郷をあとに新世界の岸にたどりつき，プリマスやマサチューセッツの植民地に入植した。彼らが家族と共に困苦を克服していった感動の記事を読むと胸を打たれる。

教会の初期の宣教師たちは，私の先祖の地であるスコットランドやデンマークやノルウェーにも出かけて行った。先祖は福音の教えを受け入れ，住み慣れた故国を捨ててシオンに合流した。手製の荷車に家財を全部積み，中西部の荒涼たる平原を徒歩で横切り，ロッキー山脈を越えて砂漠の盆地に入ったその人々は，なお大きな苦難に遇った。彼らが耐えた辛苦は，今その恩恵にあずかる人々の目に涙を誘う。

今は亡きそれらの人々の物語は，信仰と熱意と献身の物語である。そこには困難や苦労があり，現代社会に必要と思う便利さは欠けていたが，生活に，個々の暮らしに，家庭生活に幸福があった。彼らの家には信仰と祈りがあった。主イエス・キリストを信じる信仰と，必要なことを願い慈愛に感謝する神への祈りが存在した。家庭では聖書が読まれ，聖書に対する深い信仰があった。生活はもっと質素であったが，質素だから小さな幸せだと言えるだろうか。

社会は力を傾注して教育，通信，交通，衛生，商業，住居その他あらゆる方面に近代化を実現し，生活水

準は向上したが，そのような近代化は社会の基礎単位である家族に何をもたらしたというのだろうか。不安は過去になく増大し，未曾有の離婚率を示し，近代化によって教育の責任が家庭から公共機関に移り，そこでは道徳の原則がすたれて近代思想が全盛である。犯罪の増加は驚くほどであり，薬物の常用，法律違反，性病の蔓延，あらゆる形の不正行為が世間に受け入れられているふうである。この現代は思想と行動の自由が唱道され，社会の安定には不可欠な，そのような自由に付随する責任を無視したまま，自由がもてはやされている。このまま進めば，私たちの社会では家族というものが決定的な崩壊を見るだろうことは異議のないところであろう。

かつて，教会は人々に神への信仰と堅実な道徳を教える上で先導者の役割をになってきた。今，社会安定の一勢力としての既成宗教に何が起きているだろうか。大きなキリスト教会の多くが信者数や宗教活動資金の減少を報告しているが，ここにも近代化に払う多額の代償がある。

近代思想は宗教思想の幾つかにも入り込んできた。近代主義者は，学問や科学の進歩により聖書や教義に新しい解釈が求められるとして伝統的な教えの見直しを主張している。「現代主義」という語が「自由主義」という語と同じように用いられ，その信奉者たちは宗教的真理も近代学問に照らしあわせて常に再解釈すべきである。だから近代思想や近代の進歩を反映する新しいより進んだ概念が求められている，と主張している。

聖書は現代主義者たちの攻撃の的となり，天地創造や生命の誕生，アダムとイブ，エデンの園，ノアの洪水，その他旧新約聖書の出来事の信憑性を科学は支持できないと主張する人々がいる。現代文明のよりすぐれた知識と称するものをかさに，聖書の記事は神話であると見る人々もいる。しかしそのために，キリストの信者が教えを拒否できるものであろうか。進歩的な多くの教会が信仰を失った教会員の信頼を取り戻そうとして教義を次々に捨て，個としての神の存在についての教えを放棄するまでになっている。彼らはもはや，十字架にかかって死なれた救い主の復活を事実とは認めず，贖罪の教えも真実とは考えない。このような環境にあって，宗教組織は社会安定の一勢力たる立場をどうして維持できるだろうか。

知識は増し，思想は高度に，古さが近代化される現代は，単純なものが見落とされ，難解なものがもてはやされる。福音の単純で基本的な真理が無視されているのである。パウロはガラテヤの民にイエス・キリストの真の福音を教えたが，パウロが去ったあとでにせの教師がやってきて，教えから民を引き離した。そのためパウロは強い非難の言葉を手紙に書き，自分の教えを曲げる人々を攻撃した。パウロはこう書いている。

「あなたがたがこんなにも早く，あなたがたをキリストの恵みの内へお招きになったかたから離れて，違った福音に落ちていくことが，わたしには不思議でならない。それは福音というべきものではなく，ただ，ある種の人々があなたがたをかき乱し，キリストの福音を曲げようとしているだけのことである。しかし，たといわたしたちであろうと，天からの御使であろうと，わたしたちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら，その人はのろわるべきである。(ガラテヤ1：6—8)

キリスト教がごく初期の時代から，にせの福音が数々教えられてきた。それは，パウロが指摘する通り，本当は福音ではない。キリストの福音はただひとつだからである。それは現在も例外ではない。私たちのまわりを疑問や疑念をわかせる学問，思想の進歩と，頓挫が囲んでいる。それが人々を引っぱり下ろし，信仰や道徳を破壊しているかに見える。このざせつと道徳衰退の時代に，では，希望はどこにあるのだろうか。救い主が教えられた真理を知って理解することの中に，である。キリストの教会がまっすぐに教えるべき真理，信者たちが信じて守るべきその真理を知ることの中にである。それは永遠の真理である。社会環境が変わろうと科学が新たな発展をみようと人の知識がふえようと，それには関係なく永久に変わらぬ真理である。

私たちは現代に添い現代世界の所産と高い生活水準を享受できると思う。現代主義者の理論に転向せずとも，近代学問と近代科学の恩恵に浴することができると思う。救い主がご自身で宣べ伝えられた福音の原則は，説かれた当時も今も真実であると信じる。真理は永遠であり，変わることがない。イエス・キリストの福音は，変遷する世界にあって常に時代に即している。

世が誇る華々しい知識も，人が造り出したものではない。それは，神が持っておられる無限の知識や情報の幾分を発見したにすぎない。それをどう使うかは，私たちが永遠の神の王国に属するか，この世のみの理解にとどまるかによって左右される。問題はただこれだけ，つまり，この世の思考の領域に身を落着けるか，それとも不変の神の王国に身を据えるかである。

現代を良しとしながらも，救い主が説かれた真理や教義を，いわゆる近代思想，近代の進歩と称する修正や再評価にはゆだねずに，変わり行

く世界にまっすぐの道を歩む，この末日聖徒イエス・キリスト教会の一教会員であることを，私は心から感謝している。

多くの現代主義者の見解とは相反して，私は，永遠の父なる神が生きておられること，聖書は霊感を受けて書かれたもので，モルモン経も同じく霊感による書物であることを信じている。神の御子，イエス・キリストは実在し，現に生きておられること，キリストは私たちのために血を流され，真実文字通り復活されたことを，私はたしかに知っている。現在の地上に神の予言者がいることも証する。

世の道に誘うさまざまな影響力を近寄せまいとする私たちの正しい努力を主が祝福されて，信仰と信念と神の王国に，自分の落着き場所を得んことを，イエス・キリストのみ名により，へりくだって祈るしだいである。アーメン

啓示された福音の真理

十二使徒評議員会会員

リグランド・リチャーズ

兄弟姉妹，私はこの大いなる大会に皆様と共に集う特権を喜んでいる。この末の日の王国を建てるに際して，私たちが一堂に集って永遠の命のパンを食することのできる大会を備えて下さったことを，主に感謝するしだいである。歌の歌詞にこうある。

来たれ　予言者よりみことば聞け
喜びてうたえ　真理の道
(讃美歌83番)

私たちはこの大会で予言者の声を聞いた。私たちは信仰を強められ，主の王国の建設を助けよう，主なる救い主イエス・キリストの再臨に備えをなそうという望みを大きくして，各々の働き場へ戻ることであろう。

予言者イザヤは，人の考えによって神を拝む私たちの時代を見て，それゆえ，主は「この民に，再び驚くべきわざを行う，それは不思議な驚くべきわざである。彼らのうちの賢い人の知恵は滅び，さとい人の知識は隠される」(イザヤ29：14) と言った。イザヤは，主が不思議な驚くべきわざを行なわれるのはそのためだと言っているので，不思議な驚くべきわざは人の誤った考えを正すためのものであると，私は理解している。

福音の回復，この不思議な驚くべきわざによって訂正されたすばらしい事々のすべてを話す時間はない。しかしながら一番重要な訂正は，天父と御子が予言者ジョセフ・スミスにまみえられたあの示現から知った知識であると思う。そのことは，今朝マリオン・G・ロムニー副管長が美しい言葉で語られた。体なく肢体なく感情もないあらゆる所に満ちた霊的実在が神である，つまり神には目がなくて見ることができず，耳がなくて聞くことができず，声がなくて語ることもできないというのに対して，私たちも復活ののちにそのようになる栄光化された骨肉体の別個の御二方が存在されるのである。その約束を受け，自分たちが神の子供，永遠の父なる神の子供であり，やがてみ前に住んで神なる御方を知り，死からよみがえって世の罪を贖われた御子イエス・キリストをも知ることができるというのは何とすばらしいことであろうか。

次に重要な訂正は，教会の大いなる組織であると思う。この教会の神権と全補助組織についてだけ考えても，指導役員を支持したこの集会ですでに言及されている。リー大管長は，今晩の神権会が850の建物で放送されていると言われた。

世の中のいったいどこに，このような神権者の組織があるだろうか。すべての男性は神の神権を受けて，地上の神の王国の建設に働くことができる。こうして彼らは，虫が食い，さびがつき，盗人が押し入って盗み出すことのない天に宝を蓄えるのであり (マタイ6：19)，そこで自分の賜や才能を伸ばすのである。神の王国はその目的のためにこそ存在するからである。

ここで，きょうぜひとも一言したい教会のうるわしい教義がある。それは，結婚の誓約と家族の単位が永遠に続くという教えである。この原則が聖典で教えられていることは明白であるというのに，このことを信じるのが私たちの教会だけらしいことは信じがたいことである。今から数年前に，教会のある兄弟が*Do Men Believe What Their Churches Prescribe*？「人々は自分の教会の規定を信じているか」(ルロン・S・ハウエルズ著，デゼルト出版社，1932年出版) という本を書いた。その本には主要な教会 (私たちの教会を入れて全部で10) から簡単な説明をもらって，さまざまな教義原則の一覧表が載っているのだが，他の9つの教

会はどこも結婚誓約と家族の永続を信じてはいなかった。結婚は「死が二人を分かつまで」で，これは実質，離婚の約束手形である。死が二人を分けるまでの結婚であるなら，それ以後はどうするのだろうか。私たちを結ぶきずなはどこにあるのだろうか。特に子供たちの教育を妻にまかせて兄弟たちが始終神権の務めに働くこの教会で私たちを結ぶきずなはどこにあるというのだろうか。それがみな死と共に断ち切られるのだろうか。

私は伝道部長に召されていた頃にジョージア州のキットマンで行なわれた集会で，さきほどの本の一覧表から引用して話をしたことがある。その会が終り，ドアの所に立って出席者たちと別れの挨拶をしていると，ひとりの男性が近寄ってきて，自分はバプテスト教会の牧師ですと自己紹介をした。それで私は，「きょうの引用した説明は間違いだったでしょうか」と尋ねた。

すると彼は「いいえ，リチャーズさん，お言葉通りです。私たちはだれでも自分の教会の教義を全部信じているわけではないのです」と返事した。

私は言った。「あなたも信じていらっしゃらないのですか。教会に帰られたら信徒の皆さんに真理を教えられてはいかがです。あなたからなら受け入れるでしょう。モルモンの長老から聞いて受け入れる用意はまだできていないでしょうが。」

彼は「では，また」と答えた。

それから4カ月ほどして私がまたキットマンへ行ったとき，その小さな教会に入って行こうとするとそこにあのバプテスト教会の牧師の姿があった。私は握手をしながら言った。「この前の私の話をあなたがどう思われたか，非常に知りたいのですが。」すると彼が言った。「リチャーズさん，あれからずっと考えていたのです。あなたのおっしゃったことは全部信じますから，残りが聞きたいのです。」この不思議な驚くべきわざを通し，福音の回復によって主から与えられた数々のうるわしい原則について話し始めると，私たちの話はとどまるところを知らなかった。

また，私がジョージア州アトランタで伝道部長の任にあったとき，ピーター・マーシャル博士の書斎に招かれたことがある。マーシャル博士はアトランタの長老教会の牧師で，そのとき1，2時間談話した。彼は死亡時には合衆国の上院付き牧師であった人で，彼の著書である *A Man Calld Peter*「ペテロという人」を読まれた方や，あるいは彼の一生を描いた映画をごらんの方もあると思う。彼の主張の多くは，アトランタの私たちから聞いたことである。マーシャル博士は，彼の教会の若者たちが次々と私たちの教会にくら替えするので，人を頼んで伝道本部からMIAの本や若者向けの教会図書を買っておられた。

私は書斎で彼と並んで腰かけながら，永遠の結婚や結婚誓約の永続について長老教会の見解を尋ねた。それに対して彼はこう答えた。「そうですねえ，リチャーズさん，私たちの教会ではそのような教えを認めていませんが，私は内心片意地な反対意見を持っていましてね。」彼の話は続いた。「子猫を親猫から取り上げると，何日かすれば親は子のことなど忘れてしまいます。親牛から子牛を取り上げても，何日かたてば子牛のことなど忘れます。ところが人間の子を親から取り上げれば，親は百歳になっても子供のことを忘れませんよ。」「神が，死ねば滅びてしまうような愛を創造されたなど，私にはどうも信じられないのです。」神が，死ねば滅びてしまうような愛を創造されたのではないことを知っている祝福を，ありがたいと思う。愛は永遠である。

他の教会は永遠の結婚の原則を教えていないが，それを信じる人々はいる。そのひとり，アンダーソン・M・ベートンは妻のビューラに，人生の深奥を語る小さな1編の詩を送った。

我，汝と永久に結ばれたり。今生のみにあらず　つかのまのあだし世のみにあらず
我，悲哀を越えしのちの世に　汝と結ばれたり。
病む胸，曇るまゆのその彼方に。
愛は墓を知らず，我らを導く，愛し人よ，
人生の残りわずかな灯が　力なくゆらめくときに

これが私たちの信じていることである。私たちは結婚のきずなが永遠であることを信じる。

きょうの大会で，アダムが園に置かれたときの主の言葉が引用された。主は「人独りなるは善しからず」と言って助け手を送り，「二人一体となるべし」（モーセ3：18，24）と言われた。半分ずつが合わさるのではなく，一体なのである。男女なくして主が地上に人を住まわせることはできず，その意味で完全な人間をなすには二人が必要なのである。それで，私はこう言いたい。死がこの世界にやって来る前に，人がひとりでいることがよくなかったとすれば，私たちが死から復活してアダムの堕落以前の状態に回復されたのちに，人がひとりでいることはやはりよくないのである。

パウロが次のように言った言葉の意味はそれである。「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように，キリストにあってすべての人

が生かされるのである。」（Ｉコリント15：22）

堕落以前に妻なしでいることがよくなかったとすれば，復活後に伴侶なしでいることも明らかによくない。そのことを認めない人は，偉大な贖罪を否定する人である。なぜなら，救い主が贖罪によって，アダムとイブの堕落による損失を一部しか贖われなかったということになるからである。

これは主がよく理解しておられた大いなる永遠の真理である。主はこう言っておられる。「……それゆえに，人はその父母を離れ，ふたりの者は一体となるべきである』彼らはもはや，ふたりではなく一体である。だから，神が合わせられたものを，人は離してはならない。」（マルコ10：7－9）これ以上に簡潔な表現があっただろうか。結婚のきずながそれ自体死を超えたものでなかったとしたら，ふたりは一体となるべきである。人はそれを離してはならないと言われたとき，それを言われた主の真意は何であっただろうか。

パウロはこう言った。「……主にあっては，男なしには女はないし，女なしには男はない。」（Ｉコリント11：11）男女はこの死ぬべき現世ではお互いなしでいられるかもしれないが，来たる永遠の世では違う。

ペテロは，夫は「自分よりも弱い器であることを認めて，知識に従って妻と共に住み，いのちの恵みを共どもに受け継ぐ者として，尊びなさい。それは，あなたの祈が妨げられないためである」（Ｉペテロ３：７）と言った。ここで「いのちの恵みを共どもに受け継ぐ者」というのはどういう意味だろうか。どんないのちなのだろうか。人々はすでに現世の命を受けており，やがて永遠の命の祝福をいっしょに受け継ぐというのである。これより簡潔な説明がいったいあるだろうか。

ここで，イザヤが，羊と狼が共に食み，「ししは牛のようにわらを食らい……」（イザヤ65：25）という新しい天と新しい地を見たことが思い出される。イザヤは人々が「家を建てて，それに住み，ぶどう畑を作って，その実を食べる。

彼らが建てる所に，ほかの人は住まず，彼らが植えるものは，ほかの人が食べない。……わが選んだ者は，その手のわざをながく楽しむからである。……彼らは主に祝福された者のすえであって，その子らも彼らと共におるからである」（イザヤ65：21―23）と言った。民とその子らが自分たちの建てる家に住むということを，これ以上明白に語ることができるだろうか。

このすばらしい永遠の原則は，福音の回復に伴って啓示された偉大な真理のうちのひとつである。この現世で私と妻を，また家族や愛する者たちを結ぶその愛のきずなが断ち切られて私たちが永遠に生き続けるのだと考えるなら，死が体と霊との完全な消滅であるとも容易に信じられることだろう。天は現世の生活の投影なのである。

そこで考えるのは，この世のどんな成功も家庭の失敗を償い得ないというマッケイ大管長の言葉である。またリー大管長は，死によって分かたれるまで良い家庭を保つばかりでなく，誠実，忠実であれば来たるべき永遠において自分たちが管理することのできる王国の基礎を今作っているのだという理由で，私たちの最大の責任は家族の中にあると述べ，それと同様のことを強調している。これは，現代の地上に回復されて知らされた福音の栄えある原則のひとつである。

新聞紙上で，子供が誘拐されるとその親が，この世を子供と共に生きることを願ってばく大な身代金を払うことがあると報道されるが，私たちは神の聖なる神殿で新しくかつ永遠の誓約と聖なる神権の結び固めの儀式により，子供たちと永遠の世を通じて共にいられるのである。主は予言者ジョセフを通じて，彼らが第一の復活の朝にいで来て「罪を犯すことなく育ちて救いに入らん」（教義と聖約45：58）と言われた。幼い子供をなくした人々にとって，永遠の世に家族関係が存在しないという思いに比べれば，この教えのもたらす喜びと幸せはどれほどであろうか。

兄弟姉妹，私は，主の福音の回復によって知らされたこの偉大な真理を神に感謝している。しかしこれはほんの初まりである。きょうここにおられる大勢の皆さん，ラジオを聞いておられる皆さん，今晩聞かれる皆さん，このわざの聖なることの証を神から胸に植えられた皆様に，私は自分の証を申し上げたい。御父が大予言者を通して私たちに送ると約束されたのは，不思議な驚くべきわざである。私の愛と祝福と証を皆様にお伝えし，主イエス・キリストのみ名によってお話申し上げる。アーメン。

対立するものの存在

大祝福師

エルドレッド・G・スミス

地が形成される以前，天上において，地上の生活の計画が私たち全員に説明された。そのとき私たちは天の父，母から生まれた霊の子供であった。

私たちは，地上の生活を経ることが天の父，母が経験されたようなことを経験して天の父，母のようになるための機会であることを知った。

記録には，その栄えある知らせを聞いて，みな喜び呼ばわったと書かれてある。

そのとき，その高遠な目標を達するには，あらゆることにおいて忠実，誠実で，サタンによる試練や試みに負けないことを証明しなければならないことも知った。そのようなさまざまな警告を聞きつつも，私たちは地上に生まれる日を首を長くして待ったに違いない。

アダムとイブが，地上に来た最初の人間であった。ふたりは自由意志を与えながら，「善悪を知るの樹」（モーセ3：17）の実を食べるまで，善と悪を知る能力を持たなかった。

その樹の実を食べる結果は，「……地は汝のために呪わる……」（モーセ4：23）ということであると，主はアダムに宣言しておられた。私たちは，アダムは禁断の木の実を食べたせいでのろわれたと言うのをよく聞くが，記録にはアダムではなく，「地」がのろわれたとある。そこへ「汝のために」と主が言い足しておられるのである。これは，アダムによかれということ，つまり私やあなたがたのためにも良いように，ということである。

アダムとイブはそれまで停滞の状態にいた。何の進歩も，何の成長も，何を生み出すこともなく。変化もなしにその状態が永遠に続いたはずであった。しかし，変化は必要であった。その変化とは，アダムと子孫のすべてが働いて，障害を乗り越え，生活の糧を得ることであった。

アダムとイヴがエデンの園を放逐されてから，ひとりの主の天使が現われ，彼らに福音の計画を教えた。生命と救いの計画であった。天使は，やがて救い主が来て全人類を贖い，人間が天父のみもとに帰ることができるようにして下さると語った。

モーセの書にはこう書かれている。「彼の妻イヴ，すべてこれらのことを聞き喜びて言いけるは，もしわれら罪を犯さざりせば，われら子孫を得ざりしならん。また善悪の区別も知らず，われらの贖わるる喜びも知らず，すべて従順なる者に神の賜わる永遠の生命も知らざりしならん，と。」（モーセ5：11）

近代の啓示はこう告げている。「……悪魔が人の子らを試むるは是非必要なり。すなわち人は悪魔の誘惑なければ己が自由意志を使い得ず，何となれば，人もし苦きを知らざれば甘きを知り得ざればなり。」（教義と聖約29：39）

これは現代の私たちも同じである。私たちも甘きを知るために苦きを知らなければならない。苦きばかりが多くて甘きは少ないと思う人がいようが，それは普通である。私たちを強くするために人生の試しがあるのである。自分こそが最高の厳しい試練にあっているとだれしも考えるが，それは自分にとって非常にむずかしいために，最高の試練と思われるだけではないだろうか。ダイアモンドは磨くことで価値を増す。はがねは焼くことで強く立派になる。そのように，対立するものは人格を磨いてくれる。

進歩はどれも，相対するものに打ち勝って得られることである。リーハイは息子のヤコブに言った。「それは，すべての物事には必ずその反対のものがなければならぬからである。……」（IIニーファイ2：11）

「アダムが堕落したのは人類を生ずるためであり，人類が現世に在るのは幸福を得んためである。」(IIニーファイ2：25)

「……神は汝の受けた艱難を神聖なものにしてこれを汝の利益にして下さる。」(IIニーファイ2：2)

対立するものは，反対のために反対を求めるというのではない限り，私たちにとってよいものである。

そのことで思い出すのは，リー大管長の好きなこの言葉である。「ぬかるみにはまった牛を土曜の晩に押し上げられなかったら，日曜日に引き上げてもいっこうにかまわない。」

鉄鋼業界のヘンリー・カイザーが，会社幹部を抜てきするには，仕事をどんどん与えることだと言った。そうすれば幹部にすべき人物がわかってくるという。

それはちょうど，主が私たちに対しておられることと同じではないだろうか。主も指導者を育てようとしておられる。

私がずっと若かった頃に，自宅の壁に掛けていた飾り板のことを思い出す。生け垣を飛び越えようとしている浮浪者のズボンの尻が破けていて，ブルドッグが引きちぎった布をくわえてすぐうしろに迫っている絵であった。それにこう書かれていた。

「人生，ゆかいなときに
ゆかいでいるのは　しごく簡単
逆境のときに
ほほえむ人こそ本物だ」

もし人に打ち勝つてだてを与えずただルシフェルの思うままにさせるとすれば，神は実に不当であろう。だが神は，あなたが求めて受けさえすれば自分のものになるその力以上の力をサタンに許しはされない。

はじめに，主の天使はアダムとイブに教えた。何もかも教えて，アダムとイブは主のみこころを知った。

私は，それは今も同じだと思う。私たちは聖典を学んで，私たちに対する主の計画を知らなければならない。従順と不従順のもたらす結果を知らなければならない。主はそれぞれの神権時代に，私たちに関する神のみこころを教える予言者や教師を備えられた。聖書，モルモン経，近代の啓示といった聖典を恵まれた。完全な神権と共にこの福音を回復された。私たちに，御父と御子のみ旨を啓示し，あらゆる真理を教える聖霊を授けられた。神殿と，そこで儀式を行なう鍵を与えられた。

予言者ジョセフ・スミスは次のように述べている。「神はその聖き『みたま』により，すなわち聖霊の言い尽し難き賜によりて，世の始めより今日に至るまで嘗て表したまいしことなき知識を汝らに与えたまわん。

これこそ，わが先祖らの末の世に顕されんことを熱心なる期待もて待ち望みしものにして，彼らの栄光の完全に顕れんため保存し置かれしと天使らによりて彼らの心に示されたるものなり。」(教義と聖約121：26―27)

これは，私たちの先祖も私たちの働きを確信して私たちのために先んじて地上に生まれて来たという意味である。

私たちが自分の分を果たすならば，たしかに主は助けて下さる。私たちはただサタンに抵抗する以上のことをしなければならない。隣人に奉仕しなければならない。あなたは自分の分を果たしているだろうか。

神は言われた。「見よ，これわが業にしてわが栄光，すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」(モーセ1：39)

この地球が創造されて，アダムから現在に至るまで，進歩発展のすべては第一にほかならぬあなたがたのためであることを忘れてはならない。

キリストはあなたを贖うために生まれてこられた。

福音はあなたのために回復された。

主はあなたの祈りに答えられる。

神はあなたを心にかけておられる。あなたが神の息子や娘だからである。

これは事実である。だれにも違った人生があり，違った天職がある。仕事の重要さはそれぞれに異っても，しかしあなたは，神の息子，娘であるあなたは，ほかのみんなと同じように神にとって大切である。

ウィリアム・クレイトン作のこの讃美歌は，開拓者時代と同じく現代の私たちをも励ましてくれる。

「恐れず来たれ聖徒　進み行けよ
その旅はつらくとも　恵みあらん
無益な憂いは　払いて努めよ
されば喜ばん　すべては善し

わが定めを嘆くや　いな善きなり
たたかいを厭うなら　報いはなし
勇みて進めや　神は守ります
やがて話されん　すべては善し」
(讃美歌23番)

あなたがた一人一人が人生の目標を達成できるよう，イエス・キリストのみ名により祈るしだいである。アーメン。

汝らに備えあらば

十二使徒評議員会会員

エズラ・タフト・ベンソン

会場内外の兄弟姉妹たち，私たちはみな，同じ霊の父をいだく兄弟姉妹である。私は今，へりくだり，感謝して皆様の前に立っている。私は家族といっしょに断食をしつつひざまずいて，みたまの祝福が得られるように祈ってきた。

きょう引用する聖句は，1831年1月2日の教会の大会中に，主から予言者ジョセフ・スミスに与えられた啓示である。「……もし汝らに備えあらば怖るることなからん。」(教義と聖約38：30)

現代の聖典，教義と聖約の第1章にはこうある。「汝ら備えをなせ，まさに来るべき事のために備えをなせ，……」(教義と聖約1：12) この同じ啓示のさらにあとには，「……主なるわれ，この世に住める人々に襲い来るべき禍を知れば，……」(教義と聖約1：17) という警告の言葉がある。

私たちはどのような禍のために備えるべきなのであろうか。29章で，主は「烈しき雹遣わされてために地の収獲は損われん」(教義と聖約29：16) と警告し，45章には「世を滅ぼすべき疫病，地を覆う」(教義と聖約45：31) とあり，63章には「地の面に戦あれと命じたれば……」(教義と聖約63：33) と言われている。

マタイ伝の24章には「ききんが起り，また地震があるであろう」(マタイ24：7) とある。主はこのような災難が起きると宣言された。これらの予言は条件付きになってはいない。先をご存知の主は災いが起きると知っておられる。あるものは人為的に，あるものは天上の自然力によって。しかし災害が来ることは確かである。予言は逆の歴史であり，神によって開かれる将来の出来事である。

しかし，その中にも主イエス・キリストは「……もし汝らに備えあらば怖るることなからん」(教義と聖約38：30) と言っておられる。

ではそれらの災難に備えをさせる主の方法は何であろうか。その答えは，これも教義と聖約の第1章にある。

「されば，主なるわれ，この世に住める人々に襲い来るべき禍を知れば，わが僕ジョセフ・スミス（二代目）を呼び天より語りて彼に誡命を下せり。

また他の者どもにもこれを世の人々に宣ぶる様誡命を与えたれど，……」(教義と聖約1：17—18) 主はまたこのようにも言われた。「これらの誡命をしらべよ。そはこれらは真実確なる誡命にして，その中に言われたる予言も約束もすべて成就さるべければなり。」(教義と聖約1：37)

ここに鍵がある。予言者に神のみ言葉を求めること，そこには来たるべき災いに備える方法が教えられている。それは，同じ章で主がこう言っておられる通りである。「主，われ言いたることは，われ言いたるなり。われ言い逃れせず。天地は過ぎ行くとも，わが言は過ぎ行くことなくして成就すべし。わが声にて言わるるも，僕らの声にて言わるるもみな一つなり。」(教義と聖約1：38)

また，主は主を代表する者の霊感の言葉を拒む人々にこう警告された。「……主の声もまた主の僕らの声も聞かんとせず，予言者にして使徒なる者たちの言にも耳傾けんとせざる者のその民の中より絶たるべき日来るなり。」(教義と聖約1：14)

現在の教会の福祉計画は，神から神の代弁者である予言者，すなわち末日聖徒イエス・キリスト教会の地上の長，に与えられた啓示によって創設された。今から37年前の1936年10月に開催された教会の総大会で，大管長会は福祉計画の開始を宣言した。四半世紀にわたって教会福祉委員会の初代実務部長として働いた人物が現在は地上の主の代弁者ハロル

ド・B・リー大管長となり，彼と労を共にしたマリオン・G・ロムニー長老が今彼のかたわらに副管長として立つことには感深いものがある。

1937年4月の教会総大会で・J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は，「私たちは全体としてあるいは個人として，英知の神にして私たちの逃れ得ないものとされたその来たるべき災難に対して，自らどのような備えができるだろうか」と問い，続いて霊感による教会福祉計画の基本原則を語った。

「第一に，まず何よりも大事なこととして，義しい生活をしよう。……

家族の長である者は，最低向こう1年分の食料，衣料，またできれば燃料を手もとに確保するようにしよう。収入のわずかな人は蓄えや証券どころか食料や被服費にお金を充当し，収入の多い人は自分のまかないは自分でできると考えるだろうが，私はあえて投機をするなと提言したい。すべて家庭の長は自分の家を持つように，抵当を避けるように努めよう。庭のある人は菜園を作ろう。農地のある人は耕作しよう。」(『大会報告」1937年4月，p. 26)

義人にとって，福音は災害の前に警告を発し，危機に備える計画を告げ，災難の避け所を教える。

主は，「炉のように燃える日が来る」(マラキ4：1）と言われたが，「『什分の一』を納めたる者は……火に焼かるることなし」(教義と聖約64：23) と約束しておられる。

主はききんが来ると私たちに警告されたが，義人は予言者の声に聞き従って1年分の最低食料を蓄えるであろう。

主は天使を放って地の刈り入れをされるが（'*Discourses of Wilford Woodruff*「ウィルフォート・ウッドラフ説教集」 p. 251参照)，知恵の言葉その他の戒めに従う人々には，「さつりくの天使はイスラエルの小児たちが如く，彼らを過ぎ越して居ることなかるべし。……」(教義と聖約89：21) と確言されている。

主は来たるべき危機の時代に聖徒たちに自由，独立を願っておられる。しかし，経済的なかせがあっては本当の自由にはなれない。ベンジャミン・フランクリンは，「借金をするときは自分のすることをよくよく考えるがよい。自分の自由を他人の翼下に引き渡す」と言い，エリシャは「行って，……負債を払いなさい。……その残りで暮すことができる,」(列王下4：7）と言った。また教義と聖約では主が，「……汝らことごとくその債務を償却すべし。これわが旨なり」(教義と聖約104：78) と言っておられる。

私たちは100年以上も昔から穀物を蓄えよと勧告されている。オルソン・ハイド長老は次のように言った。「出された忠告を心に留めなさい。『……穀物をすべて貯蔵せよ。』このことを心がけなさい。……また申し上げたい。霊に糧が必要不可欠なごとく，体を養うにはパンが必要である。私たちが地上で神のみわざを遂行するにはこのどちらも必要なのである。」(*Journal of Discourses*「説教集」第5巻，p. 17) ハイド長老はこうも語った。「世界のどんな政策を積んだとて，小麦1個の救いと安全には及ばない。」(「説教集」2：207)

貯蔵する食料に関しては，教会は選択を個々の教会員主体にまかせている。教会福祉委員会からはすぐれた提案が出されているが，主は「すべての穀類は人間の食用としてよろし」(教義と聖約89：16) と，もっぱら穀物を名ざしておられる。適切に貯蔵すれば，穀類は乾燥でも硬質でも全穀でも，無期限に貯蔵が可能であり，発芽させて栄養分を強化することもできる。

各家庭で最低1年分の穀類を常備できたらよいと思う。申し添えたいことだが，穀物を家畜の飼料にまわして獣肉を確保するには何倍もの土地がいる。教会の福祉農場では家畜の飼育に比重をかけすぎないようにしようではないか。

食料の生産，貯蔵，処理と主の勧告の見地からすれば，穀類を最優先すべきである。当然，水も重要である。ほかに大事なのははちみつか砂糖，豆類，乳製品かその代用品，塩かそれに相当するものである。食料貯蔵の啓示は，ノアの時代の箱舟同様，現代の実際的な救いに必要なのであろう。

ハロルド・B・リー大管長はこう忠告した。「通常の生活での一年分という意味ではなし，何も食べる物がない事態が発生した時に生きて行くための食料を一年分と考えるならば大してむずかしいことではない。…………快適に暮らせはしないだろうが，生きてゆくことはできるであろう。通常食べているものをすべて貯蔵するというのは，平均的家族にとってはほとんどがまったく不可能だと思うが，そうではなく，切りつめた生活で1年分の食料を貯蔵するということで考えれば，さかのぼって1937年にクラーク副管長が勧告したことに近づくと思うのである。」(福祉大会説教，1966年10月1日)

庭先の小さな畑であれ，1,2本の果樹であれ，土に親しむこと，食料を自給することには祝福がある。人の富はもともと，土地や自然の産物に根ざすものである。この富は人の活力と結びつき，道具によって幾倍にもふえ，自由と正義の中で拡張される。末の時代に必要な食料を手もとに持つ家族は幸いである。

人の活力については，「走れども疲れず，歩けども気を失うことなからん」(教義と聖約89：20) と告げる知

恵の言葉をありがたいと思う。主は私たちに,「早く臥床に入りて疲れを休めよ。朝は早く起きて汝の肉体と精神とを活気づけよ」(教義と聖約88：124)と勧めておられる。また,「……与えられたる力と方法以上に働くことなかれ」(教義と聖約10：4)と助言しておられる。

健全な食べ物,ほどよい休養,適当な運動,そして明らかな良心,これらが前途に待つ苦難への備えをさせてくれる。

被服に関しては,燃料の欠乏時に冬季でも暖かく過ごせるような防寒衣料や作業着がよけいに必要だというふうに,将来のことをあらかじめ考えておくべきである。皮生地や布地を,戸外で活発に遊ぶ成長期の子供がいる家庭では特に用意しておくとよい。

ウイルフォード・ウッドラフ大管長はこう語っている。「言われていた通りに,だれもが自分の靴や服,また食物を手ずから作る必要を痛感する時代はやがて来るであろう。……」(G・ホーマー・ダーハム *Discourses of Wilford Woodruff*「ウイルフォード・ウッドラフ説教集」p. 166)

1970年7月に,ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は聖徒たちに宛てたメッセージの中で,開拓者たちは「指導者から,及ぶ限り自分たちの使うすべての物を自給せよと教えられた。……これは,今の時代にも通じる立派な助言である。」と述べた。(「インプールブメント・エラ」第73巻(1970年) p. 3)

まき,石炭,ガソリン,石油,燈油,ろうそくなどは,暖房,料理,あるいは明かりや動力用にも保存ができる。多目的に利用できるものもあるが,慎重な取扱いと保管がいるものもある。また,1年は有効な薬用品のおもなものを用意しておくこともよいと思う。

男性は良い職を捜し,熱心に働いて,生活の糧を得るべきである。手に職を持つ人がますます求められる時代になるであろう。何でもこなせる人,農業従事者,建築業者,仕出屋,庭師,職工などは自分の家族や隣人にとって実に祝福である。

聖徒たちは,借金をせず,貯金せよと勧められている。近代史を見ればわかることだが,苦境期には,インフレによって価値がなくなるものよりもそのものの価値が変わらないものの方がずっと貴重である。国家的赤字が続くとインフレを招く。インフレは無効な物価統制の口実にされ,物価統制は物不足を生み,人為的な物不足は必然的に消費制限を招く。

これらの基本的経済原則を,私たちはいつみわけるのだろうか。クラーク副管長はこう述べている。「……深刻な不況に入ると,食料が乏しい所や皆無の所,衣や住に不足している所で,買うべき物がないためにお金が何の役にも立たなくなる。お金を食べるわけにはゆかないし,燃やして暖まるだけのかさもなし,着るわけにもゆかない。」(「チャーチニューズ」1953年11月21日号p. 4)

教会福祉計画の力の根源は,備えによって自立することを勧める教会指導者の,霊感による指示に従う個々の家族なのである。神は「日の栄の世界の下に在る他の一切の生くる者の上にわが教会員の自立せんがため」(教義と聖約78：14)聖徒たちが自ら備えることを望んでおられる。

昔,ジョージ・A・スミス長老はこう語った。「ききんの日に備えることを主から教えられていながら,それをせずに,自分たち家族を扶養できたはずのものを空費していた者に,いったい自分の信仰が享受できるものだろうか。」(「説教集」第12巻,p. 142)

また,ブリガム・ヤング大管長は言った。「あなたがたにパンがないならば,どれほどの知恵を誇れようか。欠乏の時に備え自分たちの生活を支えるための物を備えて暮らしをまかなうことができずにいるならば,あなたがたの才能はどれほど本当に有用だというのだろうか。……平常の生活を自分でまかなえないならば,永遠の生命を得る知恵をどうして期待できるだろうか。」(「説教集」第8巻,p. 68)

そういう災害はいつ襲って来るのだろうか。その正確な時を私たちは知らない。しかし,そう遠くない将来であろう。今備えている人は早くから従順であることの祝福を受け,すでに用意ができている。ノアは洪水が来る前に箱舟を造り,家族と共に助かった。洪水が始まってから腰を上げた人々はすでに遅すぎたのである。

現代のうわべの繁栄,いかにも泰平な世の中にまどわされて備えることを忘れてしまわないようにしよう。

私は数々のインフレの爪跡を見てきた。1920年初頭のドイツは忘れることができない。1923年の12月にドイツのケルンで,朝食に60億マルクを払った経験がある。アメリカ貨幣にすればわずか15セントであった。現在,インフレ問題はアメリカその他の諸国で深刻である。

兄弟姉妹,私はこの福祉計画が神の霊感によることを知っている。私は第2次世界大戦後の戦禍に引き裂かれたヨーロッパを,大管長の指示を受けて単身1年ほど,窮乏する教会員に食料,衣料,寝具を配ってまわり,この目で飢えと貧困の悲惨を見てきた。聖徒たちの目は餓死寸前にくぼみ,母親たちは栄養失調のために歩くことすらできない3,4歳の子供を抱いて運んでいた。空腹の母親

は食べ物を糸のように細かく裂き，大の大人がシオンのアメリカから運ばれた小麦や豆に両手を突っ込んでは泣いていた。

この霊感による計画を下した予言者を，また自ら管理して自分の家族のためまわりの人のために備えをなしている聖徒たちのあることをありがたいと思う。これはシオン山の救い手となる，なんとすばらしい方法であることか。

リー大管長は語った。「時は熟しつつある。主が世の光として，またこの民のしるべとして，また異邦人の求め来る旗じるしとしてもくろまれた主のご計画の力と効力とのあらわになる時が。」(「デゼレトニューズ」教会欄，1941年12月20日，p. 7。教義と聖約45：9も参照)「……もし汝らに備えあらば怖るることなからん」(教義と聖約38：30）という主の約束を忘れないでいられるように。

福音に完全に従おうではないか。そして，「……わが声にて言わるるも，僕らの声にて言わるるもみな一つなり」(教義と聖約1：38）という神の霊感のみ言葉が確かなことを，認識しようではないか。来たるべき時代は，確実，多難である。私たちが霊的にも物的にもその備えをなさんことを，イエス・キリストのみ名により，へりくだって祈るしだいである。アーメン。

教会福祉——その基本原則

大管長会第二副管長

マリオン・G・ロムニー

兄弟たち，けさの福祉集会にご出席の方々は，昨年中におよそ1400名の監督が新たに任命されたというタナー副管長の発表をお聞きのことと思う。そのため，教会福祉の基本原則について一言するのはかなわしいことと思う。きょうの話では，すでに発行された手引きや説教から引用したい。その出所は原稿に明記してある。

教会福祉は，主の完璧な経済計画である奉献の律法への入門ともいうべきものである。その完全な計画を実践したエノクとその民についてこう記されている。

「……主はその土地を祝したまいたれば，……その民をシオンと呼びたまえり。彼ら心を一にし，精神を一にし，義に住みたればなり。されば彼らの中に貧しき者一人もなかりき。

……みよ，誠にシオンは時到りて天にとり挙げられたるを。……」（モーセ7：17—18,21）

イエスの死に伴う地の激変を無事乗り越え，その後奉献の計画に従って生活したニーファイ人についても，こう記録されている。

「……全地の住民がみな心を改めて主を信ずるようになったので，その間に何の不和争論もなく一人のこらずみな互いに正しく扱った。

そればかりでなく，一同は一切の所有物を共有したので富んでいる者と貧しい者との区別もなく，自由な者と奴隷との区別もなくて，誰もかれも自由となり天の賜を授けられた。

……まことに神が造りたもうたすべての民の中でこの民ほど幸福な民があるはずがなかった。」（Ⅳニーファイ2—3,16）

神の完璧な経済計画の基礎は労働である。エデンで，主はアダムにこう言われた。

「……汝は……わが汝に命じて『食うべからず，地は汝のために呪わる』と言いたる樹の実を食いたるによりて，汝は生涯苦しみて地より食を得ん。

汝は顔の汗によりて食物を食い，而して終に土に帰る。……」（モーセ4：23,25）

しかしこれは懲罰的な命令ではない。主がアダムに報復されたのではない。ただアダムを，生きるためには働かなくてはならない状態に置かれたというだけである。

他は，アダムに不都合なようにというのではなく，アダムのためにそのような形で呪われたのである。アダムと子孫が働かなくても生きてゆけたとすれば，人類は生き残らなかったに違いない。怠惰は有害である。

先日，私の秘書が，国立精神衛生研究所によるある調査の記事を机に置いておいてくれた。「マウスのための小さなエデン」を設定したとの記事であった。そこに「マウスにとってはまさに天国，食べ物から設備から何もかもたっぷり」入れて，4組のつがいを放した。広さは「44匹相当で，55日ごとにマウスの教が倍増したが，600匹を少し越えたとたんに事が起きてきた。数が減少するとともに，マウスの社会に大問題が発生してきたのである。……マウスが怠け者になり，疲労感が激しいもの，イライラがひどいものがめだってきた。突拍子もない行動をとるようになり，巣作りが減ってきた。食いあいをするマウスも出てきた。

当初の増殖計画の4千匹は達成できず，半数をわずかばかり上まったところで繁殖は完全に停止した。マウス社会は情緒集団と化した。

マウスのエデンの住人は今や600匹少々にまで減り，赤ん坊は一匹も生まれない。マウス社会の運命はすでに決まり，一匹のマウスとて死につつある自分のパラダイスを救おうなどの気持はない。」（ロン・ウッドラ

ム *Applied Christianity*「応用キリスト教」1973年9月）

怠惰はねずみのみならず，人間を荒廃させる。

「努力は何も要求せずに言われることをみなかなえてやれば，人は欠陥者集団に堕落する。」（同上）

これは全歴史の教訓である。ブリガム・ヤングはこう言った。「経験が教えてくれたことで，それは自分の信条にもなっている。健康体で働いて稼ぐことができるなら，男でも女でも，食べ物や衣服その他，何でもかんでも与えることは決して何の益にもならない。……これは私の主義で，このようにしようと努めている。反対を取るとこの世界のどの社会も荒廃し，人々は怠け者になる。」（「ブリガム・ヤング説教集」1925年版）

主ご自身はこの神権時代に福音を啓示された中で，こう言われた。

「汝怠惰なることなかれ。およそ怠惰なる者は働く者のパンを食することもなく，またその衣服も着るべからざればなり。」（教義と聖約42：42）

また，宣教師にはこう言われた。「……汝らは時を空しく過すことなかれ。……」（教義と聖約60：13）

また，「シオンに住む民は，……働きあらば，これを憶えて全く忠実に務むべし。およそ怠る者は主の前に憶えらるべければなり。」（教義と聖約68：30）そしてさらにこう命じられた。

「あらゆる人は，すべてこのことに精励せよ。怠惰なる者は悔い改めて行いを改むるにあらざれば，教会の中にて地位を与えらるることなし。」（教義と聖約75：29）

この戒めを敷衍して言えると思うのは，ブリガム・ヤング大管長が什分の一について言った言葉である。

「人々は，私たちが什分の一を納めない人を教会から閉め出していると言う。そういうことは決してないが，しかしうなずけることである。神は彼らを養われない。」（「ブリガム・ヤング説教集」1925年版）

什分の一に問題のある人は，このことを考えてみなさい。「神は彼らを養われない。」

以上の原則と教えに則り，「……福祉従事者は……教会員が能力のそれこそ限界まで自足するように熱心に教え，勧めなさい。本物の末日聖徒であれば，健康体でありながら自分から自立の責任を回避する人はいない。力の限り，全能者の霊感のもと自らの労働によって，生活の必要物を自給するであろう。私たちは，教会福祉計画を実行するときに，この原則を忘れてはならない。

当然のこととして，親類に世話する能力があれば，その人を公的機関（あるいは教会）に託すべきではない。それについては親族関係の考慮と，正義，公正，良識，および人道的見地からの判断が要される。全教会福祉従事者は，援助する充分な資産がある場合，困窮者の世話をその身内に託すよう，最大限の努力を払うべきである。教会員の親族が，経済的能力がありながらその者の世話を拒否する場合は，その一件を親族が住むワード部の監督に報告すべきである。」（「福祉計画の手引き」1952年）

この声明の最後部は後日，大管長会の承認を受けた。私たちはこの点について，家族ぐるみの責任を忘れたり怠ったりしてはならない。

パウロはテモテに次のように書き送っている。「もしある人が，その親族を，ことに自分の家族をかえりみない場合には，その信仰を捨てたことになるのであって，不信者以上にわるい。」（Iテモテ5：8）

この神権時代に，主は教会員に次の律法を与えられた。

「妻たる者は夫の死に至るまで夫に扶養を要求する権利あり。……

すべて子女たる者は丁年に達するまで養育の義務を両親に要求する権利を有す。」（教義と聖約83：2，4）

私たちはだれでも働いて自分や家族を支えるように神から命じられているが，私たちの環境はさまざまで，全教会員と家族が常時自立するということは不可能である。

主はこの教会が組織されて1年にならない前に，努力しても親族が援助しても自立できない貧しい人々は，教会が世話するということをはっきり言われた。

「……われ汝らの救われんために一つの誡命を与う。そは，われ汝らの祈りを聞き貧しき者の訴えを聞きたればなり。われは富める者を造りたれど，一切の人はわがものにしてわれは人を偏より見る者にあらざるなり。

……われ汝らに向いて言わん，汝らひとつとなれ。もしひとつとならずば，汝らはわがものにあらず。」

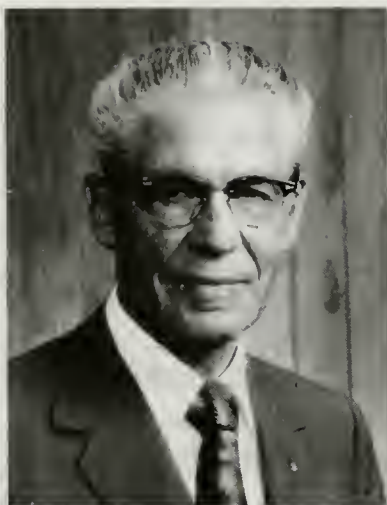
この聖句はいろいろな形での一致として引用されるが，しかしもともとは貧者と富者とのことについて言われた言葉である。主は続けてこう言われた。

「さて，またわれこの地方の教会員に一つの誡命を下さん。すなわちこの教会員の中，ある人々は任命を受くれどもこの任命は教会員の支持の挙手によりて為すべきなり。任命されたる人々は貧しき人々乏しき人々に心を留めて，その苦しまざるよう救助を施すべし。……」（教義と聖約38：16，27，34—35）

主は貧者の世話という聖徒たちの義務を繰り返し強調された。……

主が『教会規律』と呼ばれたその啓示の中ではこう言っておられる。

「見よ，汝ら貧しき者のことを思い起し，……己が財物を神に奉献せよ。また汝らの財物を貧しき者に分ち与

うれば汝らこれをわれに為すなり。……」(教義と聖約42：30,31)
その後，主はこう言われた。
「見よわれ汝らに告ぐ。汝ら貧しき者，乏しき者を訪れて救いを施さざるべからず。…」(教義と聖約44：6)
またさらにのちには，
「貧しき者に財物を与えんとせざる汝ら金持は禍なるかな。汝らの富は汝らを腐蝕すればなり。而して主の来りたもう日，また審きの日，また主の怒りの日に汝らは歎き悲しみて言わん。ああ，刈り入れは終り夏はすでに過ぎ去りぬ，われは救われず，と。」(教義と聖約56：16)
この一致についての指示を与えられた中で，主は言われた。
「この故に，もし何人たりともわが造りし多くの物の中より取り，わが福音の律法に従いてこれを貧しき者乏しき者に自己の取前をわかつことをせざる時は，悪人と共に地獄に落ちて苦悩を受け目を挙げて望み視ん。」(教義と聖約104：18)(*Church Relief Activties*「教会扶助活動」1933年)
これらの教えから考えれば，すべての教会員，ことに現世では平和と喜び，来世では永遠の生命を願う神権者たちのすべてが，貧しい人々を惜しみなく援助することであろうと思う。
全教会員に与えることが求められているが，監督は困窮者を教会として救援する権威を持った主の代表である。教会福祉のこの点について，クラーク副長管の言葉を引用してみよう。
「……主のみ言葉によれば，教会の貧者の世話に関して，監督に一切の指図権と裁量権がある。……教会基金を，あるいはワード部の援助をだれにいつ，どのようにして，どれだけ提供するかを決定するのは監督，しかも監督だけの務めである。……
監督による援助は，他の組織や機関による援助と異っている。
公的機関による援助は主として政治，社会，経済的見地から与えられ，道義的，霊的配慮は二の次である。合衆国の福祉は，個人を強めることではないただの方策である。……
教会以外の私的機関や個人による援助は，高い配慮による場合もかなりある。
……しかしこの援助にしても，受ける側よりも与える側がめだっている。……
監督による援助は，この両方（公的機関や個人の慈善）ともまったく違っている。……
まず第一に，教会にはっきりとした言葉で貧しい者，困っている者の世話が命じられており，監督にそれを実行する責任が課せられていて，それに必要な権威，特権，職能がすべて与えられている。
第二に，援助基準が示されている。監督は（主から)，『主の倉庫を守り，……教会の資金を受け納め，……不足するところを援く，……』と指示されている。」(教義と聖約72：10―11)（監督と扶助協会の役割に関するＪ・ルーベン・クラーク副管長の未刊の記事から，1941年７月)
困窮者に援助を行なう際に，監督は自分が主の使いであり，主が次のように言っておられるということをしっかり胸にとめなければならない。
「……わが聖徒らを扶養するはわが目的なり。
されどその事たるや，必ずわが道に適いて行われざるべからず。見よ，この道は主なるわれ，わが聖徒らを扶養するため命を下したるところにして，貧しき者は高くせられ，それにて富める者は低くせられんことこれなり。」(教義と聖約104：15―16)
また，監督は，貧しき者が助けを受けて高くせられるには方法はただひとつ，能力の及ぶ限り，受けたものに対して労働で応える機会を与えることだということを忘れてはならない。被援助者の尊厳と自尊心は守られなければならない。
主の完璧な経済計画に向かって私たちが大きく足を踏み出すときとは，(1)全員がやもめの２レプタの精神で教会福祉に貢献するとき，(2)全員が自立をめざし，家族に対する責任を果たそうと自分で努力するとき，(3)監督の倉庫から援助を受けた全員が労働の機会を望み，その機会を与えられるときである。結局，主の計画に従って貧しい者，乏しい者を世話する本当の目的は，単にこの世的な援助のみならず，人の霊を救うことにある。
「これらすべての事柄における監督の役割は，神権者の役割，すなわち親切と慈善と愛と正義の役割なのである。」(監督と扶助協会の役割に関するＪ・ルーベン・クラーク副管長の未刊の記事から，1941年７月9日)
「如何なる権力も勢力も，神権によりて維持する能わず，または維持すべきものにあらず，ただ説服と堅忍と柔和と温情と偽らざる愛とによる。
また，親切と浄き知識すなわち偽善にあらず奸智にあらずしてその人を甚だ大いならしむるものによる。」(教義と聖約121：41―42)
この大いなる奉仕を実践するときに，神が私たちを祝福されんことを，イエス・キリストのみ名により，祈るものである。アーメン。

従　順

大管長会第一副管長

N・エルドン・タナー

私は神権者の皆様の前に立つたびに，皆様が主のみ名によって行動し，世の光となり，生活を通してサタンの術策を阻止する影響力を及ぼすべく，選ばれ，聖任され，権威を受けた人々であることを思い，励まされ，霊感を受けて心を低くするものである。今晩のお集まりの神権者の中には少年の姿も多い。

私の孫息子がちょうど，今週，あるものを手に入れるためにしなければならないことを教えられて，「だって，まだまだ先のことだよ」と言った。私たちが神権者の義務について，特に若い人たち，また恐縮ながら，死期は自分に訪れないと考えている壮年，老年の方々と話すときに，彼らが，しなければならないことはまだまだ先のことだと考えているように感じる。きょうという日は気の向くままに，主の目にかなった生活はあしたに，と考えているふうなのである。

私はそういう若者たちに，あなたがたの一番興味あることなので，話をよく聞いていただきたいと思う。あなたがたは神権を持っている。あなたがたは，神の神権を持つ地上唯一の教会でその神権を受けるべく，この末日に選ばれて生を受けた。あなたがたは神のみ名によって事を行なう機会があり，自分の神権の召しを全力を尽くして遂行し，地上の神の王国の建設を手伝うという誓約を主と交わしたのである。あなたがたはこう約束されている。

「およそ忠実にしてわが今語れる二つの神権を得，而してその天よりの召を全力を尽して遂行する者たちは，『みたま』により聖められてその肉体再新さる。

これらの者はモーセの息子たちとなり，アロンの息子たちとなり，アブラハムの子孫となり，また教会員にして王国の民となり神の選民となる。

……この故にわが父のもてるすべては彼に与えらるべし。」(教義と聖約84：33，34，38)

次に，主が全神権者に与えておられる戒めをみてみよう。

「われ今汝らに一つの誡命を与えて汝ら自らを警めしむ。すなわち汝ら永遠の生命なる言に勉めて心を留めよ。

そは，汝ら神の口より出るすべての言によりて生くべければなり。」(教義と聖約84：43—44)

ニーファイ第二書に告げられているような世の悪と闘うのに，あなたがたの力と影響力が現在ほど必要なことは今までになかった。ニーファイは現代のことを語り，諸悪に言及しながらこう言った。

「ごらん，その時に悪魔はある人々の心に入って荒々しい行いをさせ，またこの人たちに善い事を怒らせる。

またほかの人々をなだめ，この人たちをすかして肉欲をほしいままにさせるから，その人々は『シオンの中では万事よろしい。シオンは栄えて実に何事もみなよろしい』と言う。このように悪魔はこの人々をだまし，心を配って地獄へつれて行くのである。」(IIニーファイ28：20—21)

兄弟たち，私たちはこのような状態を自分とは縁遠いと考えがちだが，主が言われていることを行なって用意をしていなければ，死んだときにふさわしい者とはなれないのである。

自分の召しと責任を全うするには，自分の神権を尊び，召しを全力を尽くして遂行し，リー大管長が勧告されたように，神を愛して神の戒めを守ることである。さて，戒めを守るには自己鍛練と律法に対する従順が要求される。従順は天における第一の律法であり，神の律法は私たちの地上の幸福や福利ばかりか永遠の生命にとっても不可欠なものなので，

私は時に，神の律法に対する従順についてお話したいと思う。

まず，神が人に授けられた大いなる賜のひとつは自由意志であることを強調したい。あなたは自分の生き方や自分の未来を選ぶことができる。だが，少年であろうが，大人であろうが主はこう言っておられる。「もしあなたがたがわたしを愛するならば，わたしのいましめを守るべきである。」（ヨハネ14：15）

私たちには律法がある。それをどう応用するかは，自分で選ぶことができる。しかし，その選択の結果を自分で負う覚悟が必要である。神の律法は，すべて私たちの福利のため，私たちを益するためにある。私たちは従順によって祝福される。不従順であれば，結果はずっとあとに出てくる場合もあろうが，苦痛を味わうのである。

自己鍛練は成功の基である。人には考える心があり，何をするか，犠牲や自制が価値あるものかどうか，また教会にあっては，仲間たちの嘲笑や圧力に屈しないでいられるかどうかなどを決める心がある。あなたは召されている。神権を受けている。福音を受けている。あなたがたは世の模範である。立派な人になりなさい。

私たちの成功は，決断力や自制力や人から得られる信頼にかかっている。だが，主のこの言葉はいつも胸にとどめていようではないか。

「すなわち，われら何にても神より祝福を受くる時は，この祝福の基く律法に従うによりて然るなり。」（教義と聖約130：21）

主はまたこう言われた。

「汝らわが言うところを行わば，主なるわれこれに対して責任あり。されど，汝らわが言うところを行わずば汝ら何ら約束を受けず。」（教義と聖約82：10）

自然の法は変わらず，厳正で，整然としている。そのつもりであろうとなかろうと，熱いストーブに手を触れれば火傷をするし，高圧線にさわれば感電する。引力に逆らって高いビルや絶壁から飛び下りるといえば，落ちる空中で「すべてはよし」とつぶやくところがおちであろう。日や月や星を思い，日や月の満ち欠けを思うとき，時は移り変わっても，いまだに学者は日食の時刻や観測に最良の場所を言いあてることができる。日の出がもしも不規則であったら，被害は何とじん大なことか。たったの数日間でも日の出が遅れたら厄介なことになる。太陽が「いや，きょうは休業だ」と言っただけで，私たちはこごえ死に，たとえ生きのびたところで地上にはごくわずかの生命しか残らないであろう。

スカイラブやアポロ計画の担当者たちは自然の法を自分たちの仕事にわくをはめるものとは考えていない。それを手段として使いながら仕事を進めるのである。彼らも関係した他の人たちも，自然の法の命じるところに従うことに長年を費してきた。

動物の調教も興味あることである。教えた通りにさせることを目標として何時間も何日も何カ月も狩猟犬や番犬や馬を訓練し，サーカスではサーカスの動物をしこむ。サーカスの軽業師は何カ月も何年もかけて自然の法を使い，法に従いながら腕を上げていく。

これは人生のすべてにあてはまることである。しかし動物には訓練の準備をし，上手にできればほうび，できなければ罰を与え，言うことを聞かなかったり訓練は不可能とみればお払い箱である。しかるに，私たちが時間を取って子供たちに正しいことを教え，自分たちも神の子として正しいことを行ない，あらゆることに従順であれという神の戒めを守ってなすべきことを行ないながら，居るべきときに居るべき場所に必ず居ることの方が，それに比べてどれだけ大切なことであろうか。私たちはそうすることができるのである。それは何とたしかなことか。

神権者たち，私たちを導く神のみ言葉，聖典と指導する神の予言者があることは何という祝福，何という幸せであろう。教会には，正しい原則を教えて励ましてくれる定員会や指導者たちがある。

私たちが予言者の声を聞いて自分を治め，自分たちのために命を捨て，自分たちを導く福音を与えて下さった主なる救い主イエス・キリストの教えに従うことは，いかに大切であろうか。予言者ジョセフ・スミスのこの言葉をいつも忘れてはならない。

「どんなことであろうと，たとえすべての事物が示されるときまで理由がわからないとしても，神が求められることはみな正しい。」

過去の時代を通じて，与えられた律法がなぜなのか理解できないときがしばしばあったが，賢明な人は神に対する信仰によってその戒めを受け入れ，守ってきた。

アダムは，自分の捧げる犠牲は何のためなのかと聞かれて，「われその故を知らず，ただ主の誡命に従うのみ」（モーセ５：６）と答えた。アダムにはそれで充分であった。彼はその戒めを守った。主がノアに箱舟を作れと命じられたときに，あなたがノアといっしょにいたと想像してみてほしい。雨は降らず心配な様子はないのに，ノアは行って舟を作るようにと言われ，指示に従って箱舟を作り始めた。しかしノアに従わない人々は多く，彼らはノアを信じず，それはまだまだ先のことで起こるはずはないと考えたが，その結果はご承知の通りである。

また，リーハイはエルサレムを去

れと命じられたが，ご存知のように家族の中でも反対があった。正気がどうかと疑う者もいたが，リーハイは主の言葉を受け入れて従順に従い，主の指示を受けて海を渡るための船を作った。

今ここに，人は水に沈むバプテスマを受けなければならないと主が言われたそのわけを知っている者が，はたしているだろうか。私たちはそれに従っている。按手礼はなぜなのだろうか。「はい，私はこの教会の会員になりたいのです」と言うだけではだめなのはなぜだろうか。知恵の言葉が与えられたとき，大勢の人が異議を唱え，主のみ言葉として受け入れなかった。ある人々はそれは戒めではなかったと言うが，主がこうしてほしいと言われることは戒めにほかならないと，私は思う。今手もとにニコチンの摂取に関する記事があるが，これは知恵の言葉が与えられてから140年後に書かれたものである。記事の冒頭にはこう述べられている。

「ニコチンは肺，心臓，脳を冒し，チフス，結核，黄熱病の流行病よりも大勢の人間を殺している。」

この記事の最後にはこうある。「合衆国のタバコ生産量１年分が引き起こす死亡者数は，16世紀以降の西欧全土におけるチフス患者の推定死亡者総数よりも多い。」

主はよくご存知の上で語られたのではないだろうか。この民は，理由をはっきり知らない場合にも主の戒めに聞き従うべきではないだろうか。兄弟たち，私たちは神権者として，地上の神の王国である主の教会の一員として私はこの教会が神の教会で，神の予言者によって神から導かれていると証するのだが，戒めを守るべきである。

先にあげた同じ記事の中で，合衆国南部の大都市の著名な弁護士が喫煙による心臓病で死んだと報じられている。また，地方大学の学部長が喫煙による気腫の苦しさに耐えかねてこめかみを撃って自殺したことも述べている。

その記事には，ニコチン，タバコの使用がヘロインその他の薬物やアルコールに進む発端ともなると書かれている。これらさまざまな事実や情報を見ながら，なおぼう大な人数の人々がタバコを続けている。次の言葉は，神の予言者の声に従い，彼を通じて与えられた戒めを守ることの大切さを示すひとつの例である。主はご自分の予言者についてこう言われた。

「この故に汝ら教会員は，彼が上より受くるままに汝らに与うる誡命と彼の言とを皆心にとめてよく聞き，わが前に全く聖き道を履むべきなり。

そは彼の言は，汝ら全き忍耐と信仰とを以て，あたかもわが口より聞くが如くにこれを受け入るべきなればなり。

これらのことを為さば，地獄の門も汝らに打勝たざるべし。而して，誠に主なる神は汝らの前より暗闇の力を追い払い，汝らの為と神の御名の栄光のためにもろもろの天をも震い動かしめん。」（教義と聖約21：４—６）

この約束だけでも充分ではないだろうか，兄弟たち。

安息日について言えば，主が安息日を聖く守れと戒められれば，教会員や神権者はその主に必ず従うことであろう。

「汝なおさら充分に世の汚れに染まざる様，祈りの家に行きてわが聖日に汝の聖式を捧ぐべし。

そは誠にこの聖日は，汝命ぜられて働きを休み，いと高き者に礼拝を捧ぐべき日なればなり。」（教義と聖約59：９—10）

私たちは，自分たちのために命を捧げて下さった主のために七日のうちの一日を捧げることができるはずである。これらのことを行なえ，主を礼拝せよ，主の犠牲に感謝せよと言われるときに，その主の教えに従うことができるはずである。しかし，神権を持つ人々が，この戒めをしばしば無視したり破ったりしているようにみうけられる。

兄弟たち，今こそ，私たちが実にさまざまな分野で自分を反省し，主のみ旨を行なうべき時である。つい先日，ある人が私に，「この教会はたくさんのことを要求しすぎますよ」と言った。

私はこう答えた。「兄弟，この教会はあなたに何も要求していません。より良い生き方を教えているだけです。」そして「どうなることか。タバコを買って吸ってみましょう。ギャンブルに手を出してみましょう。今晩，仲間といっしょに飲みに行きましょう。」すると彼は，「タナー副管長，からかわないで下さい」と言った。私は，「はい，それではやめましょう。では，ご自分で守らなくてもいい，息子に守らないように教えたいという戒めをひとつあげてみて下さい」と言った。彼はそれに答えられなかった。

兄弟たち什分の一に関して，私たちは，特に一晩で火事やハリケーンや何かで丸々それを失うことを考え主から与えられたものの10分の１を納める用意をいつもきちんとしているべきである。

私がエドモントン支部を管理していた時代に，ある人がやって来てこう言った。「私は今年分の什分の一が全部払えません。建築費や修繕費など，物入りが多かったのです。」私は，主があふれるほどの祝福を与えると言っておられることを話したが，彼は「それでもやはり無理です」と言った。その年が終わってすぐに，そ

の人が数日病院に入院して高い医療費を払ったのである。それが什分の一をちゃんと納めなかったせいだと言うつもりではない。ただ，彼が什分の一を完全に納められたはずのことがはっきりしているということである。

あなたは自分の什分の一を計算する調子で，主に祝福を勘定してほしいだろうか。あなたが大きな悩みや心身の病気に遭い，あるいは家族に問題が生じて心配が深刻なときに，「さて，わたしはどれだけの助けをしていればいいかな。この祝福はどれくらいに相当するだろう」と主に言われたいだろうか。

兄弟たち，神の戒めに従順になろうではないか。忠実さを示し，世の模範，世の光になろうではないか。受けている神権と受けている召しを感謝しなさい。私たちは，神権を持つ特権と，福音を世に伝える責任が与えられている。言葉と，そしてそれよりももっと大事な行ないとによって，それができるのである。私たちはあらゆることに従順に神の戒めを守って生活することによって，世の中に良い影響を及ぼしつつ，地上の神の王国の建設を手伝い，幸福な人生と来たるべき世における永遠の生命を享受することができるのである。

私たちがイエス・キリストの教会員としてそれを行ない，選ばれて主のみ言葉を語る神の予言者の声に聞き従うことを，へりくだりイエス・キリストのみ名によって祈るしだいである。アーメン。

神権会説教

大管長

ハロルド・B・リー

神権者の兄弟たち，私たちは今晩この大会に集ったが，あなたがたは楽しみ半分で来られたのではない。おそらく教えを受け，導きを得たいと願ってここに来たのだと思う。あなたがたはこれまで話をした人々から，思索に足る重要な事々を受け取ったはずである。私はここで語られたすべてのことを，真剣になって考えていただきたいとお勧めする。

この大会を閉じる前に，二，三のことをお話したい。

私たちはドイツのミュンヘンで開かれた地域総大会からすばらしい経験をして帰ったばかりである。大会にはドイツ，フランス，スペイン，イタリア，オーストリア，ベルギー，オランダ，スイスを含む欧州8カ国以上から，1万4千人の聖徒たちが集まった。会場にはドイツ民主共和国の代表者が大勢臨席し，いわゆる「鉄のカーテン」の向こうからも教会員の出席が許可された。またアメリカからも大勢の出席者があった。5カ国語の通訳と英語を含めて6カ国語のために，広範にわたって周到な準備が行なわれた。

それは非常な大仕事だったため，私たちは大会の閉会時にこう話をした。「さて，兄弟姉妹たち，教会幹部が現在福音を教えるのに用いている17カ国語を全部習得するのは不可能である。そこで，もしあなたがたに自国語のほかに英語を勉強していただけたら，どんなにか事は簡単であろう。教会幹部に17カ国語をマスターするのを期待するよりも，ひとつの英語を勉強することならきっとできると思う。」

欧州各国の断食証会で，「英語を勉強するように言われたから，勉強に取りかかろう」という声が聞かれたので，私たちの話を聞いてくれた人々があることはたしかである。またそのような意識が生まれているのもたしかだと思う。人々は何をなすべきかのはっきりした合図を知りたいと思うようになっている。

諸国を巻き込んで，当時は政体の違いが導火戦にもなったという過去幾たびかの戦争を思えば，現在それら諸国の人々がそうしてひとつ屋根の下に集まっている。私たちは彼らに，使徒パウロがガラテヤ人に書き送った言葉を引用して語った。「もはや，ユダヤ人もギリシャ人もなく，奴隷も自由人もなく，男も女もない。あなたがたは皆，キリスト・イエスにあって一つだからである。……約束による相続人なのである。」（ガラテヤ3：28—29）

私たちはそれをこう言い換えた。「もはや，イギリス人もドイツ人も，フランス人，スペイン人，イタリア人，オーストリア人，ベルギー人もオランダ人もない。あなたがたは皆，末日聖徒イエス・キリスト教会にあって一つだからである。国政の相違を越えて，あなたがたはみなイエス・キリストの教会につながる者であるから，戦争は少くともあなたがたに限り終っていなければならない。」

国籍を異にする人々が一堂に会して一致した兄弟愛に満たされたとき，今大会で私が冒頭の話に引用したジョージ・バーナード・ショーの言葉，すなわち「もしも私たちが，みんな同じひとりの父親の子なのだと認識したなら，今のようにお互いをののしることはなくなるだろう」というその気持をみな感じたのだが，想像していただけるだろうか。私たちはみなひとつの大きな家族である。こと政治に限らず，人々とのつきあいにしてもそうでなければならない。政治家としても，あるいは競争相手としても，「私は生ける神の神権者です。天父の代表者で，天父の仕事を代わりに行なう神権をいただいています。神の神権を持っていますから，

ふさわしくないようなことはできません」と言わなければならない。

あの大会で身を持って感じた貴重な経験から，地域総大会は続けてゆかなければならないと思う。そのような大会の第1回目はイギリスのマンチェスターで開かれ，出席者は1万4千人であった。第2回はメキシコシティーで，中米諸国とメキシコから政府関係者も集めて1万6千人の参加があり，1945年に私が初めてかの地を訪れた時を思うと隔世の感があった。人々といえば，当時は床が汚れた家屋に何回も集まり，はだしの女性が多く，貧困の様子がうかがわれて，指導者もごく少人数であったのが，ここ数年になっては，1枚屋根の下に，監督会やステーキ部長会や高等評議員，ステーキ部伝道部長という責任を持って，身なりの立派な堂々とした指導者たちがすわっているのを見れば，それはまさにひとつの奇跡である。世間は「どうしてこんなことができたのですか」と聞くが，その返事はひとつ，神の王国に加われば私たちは別人になるのである。神権者は自分にこう言い聞かせなければならない。「他の人々と同じようでいては神権者になれない。神権は神の王国の王者の家柄をさすので，私たちは違っていなければならない」と。

また，もうひとつ話したいことがある。この6月に教会はMIAの機構を若干変更すると発表し，現在はアロン神権MIAが12歳から18歳，メルケゼデク神権MIAが18歳から25歳はヤングアダルト，26歳以上がスペシャルインタレストである。このスペシャルインタレストを設定した意図は，それまで枠からはずれていた人々に手を差しのべることであった。ここ2，3年，現在のスペシャルインタレストに該当する人々から「私たちは行くところがありません。扶助協会には関係ないし，ヤングアダルトではないし。ただ聖餐会と日曜学校に行くだけです。私たちに合った活動がなぜないのですか」という声を何度も聞いていたのだが，それが契機になって，現在MIAはあらゆる人に照準をあて，すべての人が必要であることを感じてもらうことをめざして動いている。教会の指導者は，各年令別グループの必要にみあったこの活動を先頭に立って盛りあげていただきたいと思う。

熱心な参加者が多いことはたしかなのだが，残念なことに，この活動を聞いた人々から問い返しの手紙などが教会に寄せられている。兄弟たち，ここで一，二の意見をご紹介しようと思うが，もしこのような状態がよくあるとすれば，それが早く解消されることを願うものである。

ある姉妹は手紙にこう書いている。「心には大きな平安があるのですが，がっかりすることもあります。監督から教会にスペシャルインタレストのグループがあることを聞きましたが，私たちの地方ではこの活動はまだ始まったばかりで，まだ知らない人が大勢おります。私も1カ月ほど前にはじめて知ったばかりです。この活動が必要なのに，監督たちがよくわかっておられないために，要領を得ないでいる人たちがきっとたくさんいると思います。そのために，監督たちはうまく活動が始められないのだと思います。」

また別の姉妹の手紙だが，「日の栄の最高の位に上るには，その人がふさわしくなければならないのはもちろんですが，ふさわしい伴侶と結婚することが必要です。でも，私たちはときどき結婚相手の選択をまちがって，離婚したりします。未亡人になることもありますし，25歳でまだ良い相手がみつからない人もいます。」

もうひとりの姉妹は，「理由は何であっても，『自分も必要とされたい』という気持はとても強いものです。スペシャルインタレストのグループがなければ，25歳を越えた独身者は5つ目の車輪のようだと思います。教会ではたいていの話が，みんなそろった家族を中心にしているのです。私はその考え方にまったく賛成ですので，もっと奨励していただきたいと思います。

また，次のように経験を語った姉妹がある。彼女は未亡人である。「葬儀が終ってから5人の子を連れて家に帰ると，すてばちな気持に襲われました。ぐったりとして，ひとりぼっちでした。これからどうして5人の子を育てて行ったらよいものか。それはもう，監督が面倒を見て下さって食べるものに困りはしないでしょうが，でもそんなものとは違ったものが必要だったのです。」

彼女はこう言っている。「世の中には自分と同じような気持の人がほかにもいることがわかるので，私にはスペシャルインタレストが必要なのです。心理学者がどうこう言うような問題をかけらも持たずに，ひとりで立派に子供たちを育てているお母さんたちとお会いしたいのです。自分よりもまだ大変な人たちもいらっしゃることを知って，自分の受けている恵みがよくわかるのです。私の問題や必要なことをよく理解してくれる話相手がほしいのです。自分の問題をどう解決して行ったらよいか，それを学ぶためにもスペシャルインタレストが必要です。私が未亡人になって最初に知ったことは，非常時以外はだれも助けてくれない。非常時さえ助けてくれる人がいないこともある。ということでした。葬式が終ったら，自分ひとりにすべてがかかってきたものです。」

彼女はこう続けた。「そんなとき，

親子そろった家族向けのクラスは少しも助けになりません。ですが，この秋に入ったスペシャルインタレストのクラスで，子供たちや友人たちとどう接していったらよいのか，よく学ぶことができました。同じ経験をした人でなければ，私たちの持つ問題や必要をよく理解できないと思います。妻や夫が亡くなるということがどんなものか，ご存知ですか。父や娘を亡くすことと全然違います。私は夫が死ぬ前に父も娘も亡くしておりますから，それがわかります。離婚の苦しさがどんなものか，おわかりですか。26歳になっても独身でいることがどんなものか，おわかりですか。おわかりでないと思います。私たちはお互いが必要なのです。小さなグループ活動が必要な人がいれば，人を訪問してみんなで話し合うような大きなグループ活動が必要な人もいます。話をしたくない時もあります。スペシャルインタレストはデートや結婚の紹介所ではありません。そうなってしまったら，もう終りです。私たちのステーキ部には，いろんな場所に出かけるのは好きだけれどひとりはいやだという女の人たちがいます。そういう人が私たちの小活動に参加して，趣味の合う人たちといっしょに出かけるのです。ある人は毎年交響楽団のシーズンパスを買っているのですが，いっしょに行きたい人はいないか，捜しています。

私たちはヤングマリードの活動に招待されるのには抵抗を感じます。スペシャルインタレストをパーティーに招待しますというヤングマリードや長老たちの発表には，顔を平手打ちで叩かれるような思いです。私がそんなにこだわるわけをご存知ないとは思いますが，今まで話をしたスペシャルインタレストの人たちやそのほかの人たちもたいていは同じ気持です。私はこの新しいスペシャルインタレストの活動が神さまの霊感によるものだと思うのです。その通りにちゃんと行なわれたら，私たちの必要そのもののような活動だと思います。８年半前の私にもその活動が必要でした。ありがたいことに，会長が熱心で，活動に力を入れて下さいました。教会は他とは違った問題や必要や関心を持っていることを長い間ないがしろにされてきた私たちを，独自のグループとして認めて下さるのですね。私たちの中には，父親のいない少年や母親のいない少女たちを育てている人もおります。そういう方たちにはそれなりの違った問題や必要があるのです。私たちの必要が満たされなければ，そういう方たちの必要も満たされないのです。」

さて，神権者の兄弟たち，この新しいプログラム誕生のいきさつを知れば，それが単なる思いつきやだれかの知恵ではないことがおわかりであろう。このプログラムは，私には初めてと思われるほどの精魂こめた祈りと討論を経て生まれたのである。私たちはそれが主からのものであることをよく知っており，そのように発表もした。それが必要に即して，このようにせよと主から教えられたことであったのはたしかである。しかし，監督やステーキ部長がプログラムの意図を把握できないでいるところを何とかしてほしいという願いが，姉妹たちから来るのを読むと心配になる。

福祉計画が始まったばかりの頃も，行く先々で「リー長老，福祉計画はどうなっているのですか」と聞かれ，私はそのつど，「各ワード部の監督が行なうのです。まったくの失敗だというワード部もあれば，好調に進んでいる支部もありますよ」と返事をした。今始まったスペシャルインタレストの活動も，それとまったく同じ状況である。

熱意の感じられる地方があるが，今から始めれば，若人や若い未亡人や離婚者，独身者たちの熱意を受けとめることができるであろう。熱意と期待に燃えている間に人々を掌握できれば，大きなことが生まれるに違いない。そこであなたがた兄弟たちにお願いしなければならないのだが，それはあなたがたが教えを乞いたいと思うその御方から来ることを忘れないでいただきたい。どうか，指導者の言うことに耳を傾け，スペシャルインタレストの活動で言われる助言に従ってほしいとあなたがたに望む人々を，失望させないでいただきたい。

ここで，また別にお話したいことがある。25歳を過ぎた男性に直接関係することだが，何らかの理由で，理解しがたいことだが，神権者でありながら，夫となり父となる責任を回避している人々がいる。

ジョセフ・F・スミス大管長はこう語った。「主の家は秩序の家であって混乱の家ではない。これは主にあっては，男なしには女はないし，女なしに男はないという意味であり，男は神の王国にあって女なしに救われず，昇栄することはなく，女は神の王国にあって一人で完全に昇栄に到達することはできないという意味である。神は初めより結婚を定められた。」（「大会報告」1913年４月，「福音の教義」第２巻，p. 3）

ジョセフ・F・スミス大管長はさらに次のように述べたが，私の言わんとするところの核心もまさしくそこである。「私はこれを強調したい。シオンの若者はこの結婚制度が人の手による制度ではないことを認識してもらいたい。これは神の定められた制度である。また尊いものである。自らの宗教に忠実で結婚できる年令

に達している人が独身でいるべきではない。男性が一人でいるのは不便だから，自らの考えや理想に合わせ，気の向くままに結婚し，離婚するというために結婚が定められたのではない。……結婚は人類を存続させるものである。結婚が行なわれなければ，神の目的は達成されず，徳は砕かれて悪徳は堕落と化し，地は空虚なものとなるだろう。

……教会の若人はすべてこれを完全に理解していなければならない。教会幹部と教師は，末日において啓示されたままに，結婚の神聖さを説き，その義務を教えるべきである。この点に関しては教会において改革が必要である。結婚を尊び，神の認めたもう権能によらずして教会員の若い男女が結婚しないような気持を植え付けるべきである。資格があり，相当の年令に達している神権者は結婚せずにいるべきではない。……」

ジョセフ・F・スミス大管長はさらに続けて語った。「結婚を罪悪視し，結婚に対して神のみこころにはずれる伝統を受け継いでいる人々がいる。これは間違った考えであり，非常に有害な考え方である。これは全く逆で，神は結婚を勧めておられるばかりか，命じておられるのである。」（ジョセフ・F・スミス「福音の教義」第2巻，pp. 3－5）

先日の晩，7人の子供を連れた美しい母親が私の事務室にやって来た。遠方の人であり，だれであるかがわかる人はおそらくいないと思う。まだ若く，才能もある彼女はしかし，「夫との離婚を考えなければいけないところまで来てしまいました」と言った。そこで私が夫のことを尋ねると，彼女は質問に答えて，夫は親切で給料も良いが，子供たちがかなり大きくなった今になるとロマンチックな結婚の夢がよみがえって，もしも自分が自由な身になれたら今の夫といるよりももっとたくさんのことができるだろうにと考えるまでになってしまったと言う。私たちはじっくり話しあったが，数日前，大会の最初の部が終ってから，その女性がやってきてほおを涙で濡らしながらこう言った。「全部の問題の答えをいただきました。大会で人生が変わりました。今までわからなかったことがわかって，今は別人のようです。私，戻ります。家族の世話をします。夫を愛して，自分の間違いは直そうと思います。問題はほとんどそこから出ていたと思うのです。」

兄弟たち，現在の世の中にはそのような人が多いかもしれない。女性がある年令に達するのと同じくして夫の生活も変わり，甘い結婚生活の夢をなくしてしまうのである。しかしそこで，妻はこのように考えることもあろう。「容貌はまだ捨てたものではない。若さだってまだ失ってはいない。自由になって別の人と交際したほうがよさそうだ」と。そういう軽薄なことを考える女性たちがいると心理学者は述べているが，そのようなことがこの教会に生じるようであってはならない。

私は10年か15年位前にある結婚の司式をしたが，先頃その女性から1通の手紙を受けた。手紙を開くと「ああ，またひと組の神殿結婚が失敗したか」と思った。しかし文面はそれから調子が変わって，こうあった。「もう終りだ，離婚以外に方法はないとふたりで考えたとき，監督に相談しなさいと言われていたのでそうしようと思いましたが，監督はまだ若いため初めは気が進みませんでした。私たちより年がお若いのです。でもとにかく監督ですから，ふたりで彼のところへ行きました。そして一部始終，心の中を若い監督に打ち明けました。彼はじっとすわって黙って聞いていましたが，私たちの話のとぎれたときにただひと言，『そうですか。私たち夫婦にも同じような問題が起きたことがあります。どうしたら解決できるか，そのときわかりました』と，たったそれだけおっしゃったのです。若い監督のその言葉から残るものがあって，私たちは部屋を出てから，『彼らに解決できたとおっしゃるんだ。私たちはどうなんだろう』と話しあいました。」

問題を持っている人々に，ワード部の父親である監督のところへ相談に行くように教えなさい。忠実な教会員には，ワード部の監督こそが，どんな精神科医や結婚カウンセラーにもまさる助言者である。あなたがた監督は，結婚が神によって定められた神の律法で，使徒パウロの言うとおり主にあって男なしに女はなく，女なしに男はないということを，おくすることなく語りなさい。

さて，結婚についてもう少しお話したいと思う。婚期に達した人々に結婚を勧めるとは思いきったことと思われるのであろうが，新しい改宗者がふえている幾つかの地方で，30代後半や40代まで結婚せず，その間結婚のことを口にもしないという男性たちがいることを知って驚いたしだいである。教会の大管長であったジョセフ・F・スミスの言葉を先ほど引用したが，彼は諸悪が文明世界をおおっているそのひとつの大きな要因は，結婚軽視の風潮だとはっきり述べている。大多数の人にとって結婚は尊厳を失い，よくてひとつの人間関係，せいぜいひとつの出来事，あるいは気まぐれ，欲望の充足と考えられており，誓約の神聖さが無視されるか失われるかすると，現今一般の道徳教育においては結婚誓約を無視するなどはとるに足らない行為である。

兄弟たち，私たちは今再び，神権者としての責任を自覚しなければな

らない。私のところにひとりの姉妹から手紙が来たが，同じような経験をしている女性は少なくないと思う。名は伏せて，わからないようにして手紙を読んでもよいと思う。自分の経験談なのだが，同じようなことを友だちからも聞くという。彼女には何年もデートをしている男性がいて，食事を共にすることが多かった。女性は27歳である。

また，「私は40歳の独身女性です」,「30歳の独身女性です」という人たちもいるが，彼女たちはみな同じことを言っている。一様に同じ文面なのでひとつをご紹介しよう。「私はこれまで1年半，33歳の男性とデートをしてきました。毎日のように会っております。監督にご相談はしたのですが，親切でしんぼう強く気持をわかって下さる監督が，私にどんな助言をしたらよいかおわかりではないのです。いっそ交際をやめようと努めたのですが，なかなかできません。情熱もありませんし，実際に望みもほとんどないのです。」

少しの違いはあれ，同じような話が幾つも寄せられているのである。

「彼にはお役目なのです。離れた目で私を見て，結婚ごっこをしているみたいです。彼の生活は，有益なものも熱意もなくいっしょにいるだけという世間の恋人たちと同じに見えます。不道徳などとは関係ないのが大多数でしょうが，それでも一歩落ちた状態ですし，どうみても『悪のきざしを避ける』ことができません。このような状態になった責任は男だけではなく女にもあると思うのですが，満足できる解決をしようと頑張っても，限界があるのです。」

不満をつのらせている女性たちの側から話を聞くだけで充分であろうと思う。どの女性も交際を望んでいる。彼女たちは妻となり母となることを願っているが，たとえどんな理由があったにしても男性が結婚の責任を回避すれば彼女たちは結婚できないのである。兄弟たち，適令期に達していながら，結婚して家庭を持ちたいという女性最大の願いを踏みにじって結婚を避けている神権者は，神権者としての義務を怠る者である。

ここで誤解しないでほしい。若すぎる男性に早婚を勧めているのではない。早婚は現代社会のひとつの危険であると私は思う。男性は家族を養う能力がつき，独立するだけの仕事を得るまで，結婚を考えないでほしいと思う。意中の人を見つけてから，お互いを知って欠点がわかりながらなお愛しあえるだけの充分な時間をかけて交際してほしいと思う。宣教師たちに「半年以内に結婚しない人は宣教師として失敗だ」と話している，という報告をしてきた伝道部長があるが，私は伝道部長たちにこのように言った。「宣教師にはそういうことを言わないで下さい。半年以内に結婚相手のみつからない人が，あなたの言葉を深刻に受けとめていいかげんな結婚に走ったりするかもしれませんから」と。

私たちの言っていることをどうか誤解しないでいただきたい。兄弟たち，結婚は，この責任を理解するすべての男性が待望すべきものであり，神権者は結婚の義務についてもっと真剣に考えていただきたい。それというのも，神殿で今も永世にも結婚の新しくかつ永遠の誓約を結ぶ人々，彼らだけが日の光栄の昇栄にあずかるのである。それが主のみ言葉である。

さて，兄弟たち，このことを真剣に考え，私たちの勧告を容れて，むやみに結婚を急がないでほしい。時間をかけなさい。しかし自分の責任を，また聖なる神権を持つ者としての責任を怠ってはならない。

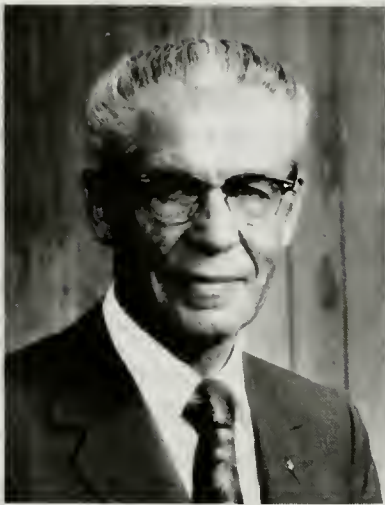
兄弟たち，私たちは神の神権の旗じるしを掲げるあなたがたに期待している。何と大きな軍勢であろうか。今宵私たちの声を聞くあなたがたの数は，推定で18万5千人である。兄弟たち，私たちは目を永遠の価値あるものに向け，ひたすら神の栄光を仰ぎみて，それぞれにこう決意しようではないか。「今から，神が私の助け手だ。いつか天父のみ前に帰って永遠の生命を受けるという目標に近づく以外のことには，手を染めないようにしよう」と。

神権者の兄弟たち，ホームティーチャーの兄弟たち，離婚の瀬戸際に立つ家族や道を迷っている子供たちや子供との接触を欠いた親たちを見るとき，神権者の兄弟，あなたがたにはその家族といっしょになって，離婚を回避するためのあらゆる努力をする責任がある。

私の受ける責任の中で最も辛いことのひとつは，神殿結婚をした人々から結び固めの取消し願いを次々受けとることである。兄弟たち，それはゆゆしいことであり，多くはあらゆる罪のうち殺人に次ぐ大罪，すなわち姦淫の罪に端を発しており，実に姦淫は教会の中にも広まりつつある。兄弟たち，私たちは純潔の律法を守ろうという決意を今新たにしなければならない。またもし間違いを犯したならば，今，間違いを正そうではないか。光に向かって歩もう。どうか兄弟たち，妻や子供の心を踏みにじるだけの不法な関係にかかわることで，神と協同して人間を出生させるすばらしい機会を卑しめてはならない。兄弟たち，道徳的に清く，真理と義の道を歩み，天父の賞賛をかちえていただきたいと心からお願いする。

私は自分の証を述べたいと思う。また，神権を持つ兄弟たちへの私たちの愛を知っていただきたいと思う。兄弟たち，あなたがたは自分の責任

をしっかり自覚し，主のみたまと一致しなさい。最大の悲しみのひとつは，主のみたまを得た人が罪によってそれを失い，暗闇の中でサタンに打ち叩かれ，主が警告しておられる通りの恐ろしい地獄の苦悩を経験するのを見ることである。兄弟たち，人々がそのような境遇に落ちる前にぜひとも彼らを抱きとめ，そのような人を見たら責任に奮起して，教会の男性たちを救おうと努めようではないか。

兄弟たちへのお願いとまた祝福と証を，今宵，主イエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。

最も大いなる誉れ——女性の役割

大管長会第一副管長

N・エルドン・タナー

私は今，「力あるイエスのみ名に代々の栄えあれ」，「立てよ，輝け，光ぞ　来たりぬ」の美しい2曲の歌と含蓄豊かな祈りを聞きながら，イエスがキリスト，生ける神の子であり，私たちのためにこの地上に来て命を失われたということを証したいと思った。イエスは生命と救いの計画を私たちに示されながらも，ご自身は十字架にかけられた。その主の復活によって，私たちは永遠の生命を享受できるのである。神の予言者たちは常に迫害され，多くは主のみ言葉を教えているときに殺された。それは思うだけでも何とゆゆしい事態であろうか。

また，完全な福音を持つ主の教会が選ばれた予言者のひとりによって地上に再興されたこと，イエス・キリストの教会が現在の地上に存在すること，イエスが生ける予言者ハロルド・B・リーを通じてご自身の教会を導いておられることを，きょう皆様に証したいと思う。私は世界各地の人々に，主が全人類を救うために予言者の口を通して私たちに語られるその言葉に聞き従うよう，心からお願いする。無視したり，愚弄したり，論破しようと試みてはならないと。

きょう，私はこの教会における女性の役割についてお話したい。教会には，主のみわざと同胞への奉仕に携わる妻，母，独身女性からなるすばらしい女性たちがいる。彼女たちは，婦人の主たる組織である扶助協会や，子供たちが学ぶ初等協会や，全教会員が福音を学ぶ日曜学校や，青少年，成人が活動を行ない交流を深めるMIA（相互発達協会），その他さまざまな場にあって，献身的に立派な奉仕を行なっている。

先日，数人の人と事務的な話をしたあとで，くだけた個人的な話になり，ある人がこう言った。「私の妻は世界一すばらしい妻ですよ。」すると別の人が言った。「それはあなたのお考えで，私は自分の妻が最高だと思いますよ。」そして3番目の人はこう言った。

「大きな祝福ではないですか。相愛の妻がいる。それも良い母親で，良い主婦で，高い理想を持って，神様を信じて，自分の家族がイエス・キリストの福音の教えに従うように助けてくれる。」

女性にとって，夫から愛と感謝のこのような賛辞を受けること以上に大きな名誉があるだろうか。神に認められ，最も身近な最愛の人々の口から愛と感謝の言葉を聞くことに比べれば，世の賞賛も尊敬も影は薄く微々たるものである。

神は時の初めから，女性が特別な存在であることを明確にし，女性の立場，義務，神の計画における将来を非常にはっきりと説明された。パウロは，男は神のかたちであり栄光である。女は男の光栄である。主にあっては女なしには男はないと言った。（Iコリント11：7，11参照）この大切な協力者という関係において，神のことが述べられているのにお気づきであろう。私たちは，女性の持つ特権，祝福，機会のうちで最大のもののひとつが，神と協力して神の霊の子供を世に送り出すことであることを決して忘れてはならない。

サタンとその群勢が科学論争やふらちな主張を使い，女性を妻として，母として，主婦としての才一の責任からおびき出そうとしていることは，この栄えある教えを理解するすべての人の憂慮のまとである。私たちは，女性解放，女性独立，性の自由化，産児制限，堕胎，その他女性の役割をおとしめる悪らつな主張を非常に多く耳にしているが，それらはすべて，女性は言うに及ばず，社会の根底をなす家庭と家族をも崩壊させよ

うとのサタンの策略である。

効果ある武器としてラジオ，テレビ，雑誌があり，そこではポルノグラフィーが氾濫し，女性が性のシンボルとして，ある人々によれば性の食い物にされ，いやしめられている。毎日のあからさまな服装や幻覚剤やアルコールが強力な武器となって，徳や純潔や生命までがむしばまれていく。コミュニケーション手段が近代化し，輸送機関が高速化した現在，そのために世界中で一層多くの人がさらに多くのことを見聞きし，悪影響が急速に浸透していく。

ポルノグラフィーや幻覚剤やアルコールが驚くべき数にのぼる青少年，成人に使用され，道徳観をくつがえし，さらにはこの悪魔の策略に負ける人々の精神や心を退廃させている。

ブリガム・ヤング大学のダリン・オークス学長は，最近同大学の全学生にこう語った。「私たちのまわりには，不義の性関係を唱道する文学が印刷物や映画の中に氾濫している。あなたがた自身のために，それを避けなさい。ポルノグラフィーや猥せつな本や写真は，汚れた食物よりもまだ悪い。身体には良くない食べ物を排泄する作用が働くが，頭脳は悪いものを吐き出しはしない。いったん記憶されると，それはいつも記憶の底にあって，邪な考えが脳裏に浮かび，人生の健全な物事からあなたをそらしていくのである。」

教会の若い女性がそのような汚れに染まらずにいることは非常に大切である。きょうの少女はあすの婦人である。少女たちが女性の役割について備えをなすことが必要である。もし現在，少女たちが家庭で貞節を教わらず道徳的に堕落して，またもしその子供たちが結婚の神聖な律法に基づいて聖められた家庭の中で育たなかったならば，世の中ははたしてどのようになるか想像できるだろうか。

結婚は神によって定められた。それゆえに私たちはあらゆる機会を捕えて結婚の絆を強め，家庭を強め，身を修めて，模範により子供たちに神の道を教えなくてはならない。これこそ，この世でも来たるべき永遠の世でも幸福を見いだすための唯一の方法である。

女性には妻，母，主婦，姉妹，良き隣人として数々の義務と責任がある。一方多くの女性が才能，興味，創造性，献身，活力，技能などを家庭外に求めているが，実はこれら女性の責任はそれらの必要を満たし得るのである。女性がそれらの役割の中で及ぼす良い影響をはかり知ることはとうてい不可能である。女性の持つ大事な責任を，これからあげてみようと思う。

まず何よりも，先ほど述べたように，女性は神と協力して霊の子供たちをこの世に迎える人である。これは何とすばらしいことであろうか。これにまさる栄誉はない。その栄誉に伴って，子供を愛し，育て，市民としての責任と天父のみもとへ帰るための道を教えるという非常な責任が課せられるのである。子供たちは，イエス・キリストの福音とイエス・キリストの教えを受け入れ，守ることを，教わって理解しなくてはならない。彼らが人生の目的を知り，なぜこの地上にいるのか，死後どうなるのかを知るならば，正義を選び，サタンの誘惑と攻撃とを避ける分別を持つことであろう。サタンは実在し，彼らを滅ぼそうと機を伺っている。

子供にだれよりも大きな影響を及ぼすのはその母親である。母親は，自分の言葉と行ないと受け答えと態度のすべて，外見と服装までが，子供たちや家族の生活に影響を与えることを承知すべきである。子供が，態度や希望や，将来の人生と社会に対する貢献を左右する信念を母親から学び取るのは，家庭にいる時である。

ブリガム・ヤング大管長は，母親は神のみ手にあって働く器であり，男性の全身全霊に力を吹き込み，人と国の現在，将来を導く者であるとの考えを述べた。彼はさらにこう言った。「どの国の母親にも，子供にいさかいをしないように教えさせなさい。そうすれば子供たちは，成長したあかつきに戦争を始めるようなことはしないだろう。」（*Discourses of Brigham Young*「ブリガム・ヤング説教集」〔英文〕*P* 199）

主なる神が「人がひとりでいるのは良くない。彼のために，ふさわしい助け手を造ろう」と言われたとき，主は文字通りそれを意図して，アダムにイブを与えられた。（創世2：18）私たちは，男は父母のもとを離れて妻と結びあい，ふたり一体となるべきであると教えられている。夫婦の間の関係がこのように説明されているのである。（創世2：24）立派な男性のかげには必ず立派な女性がいると言われているが，経験からみると，それはおおむねあたっている。

会社の幹部が社員を雇い入れたり，新事業のために経験者を募集する際に必ずその妻について情報を求めようとするが，これは興味あることである。これは実に大切なことと思われる。教会で男性が新しい神権の職を受けようとするとき，妻が正しい生活を送っているか，夫に全幅の支持を寄せられるかどうかについて必ず考慮される。

女性の皆様，あなたがたは日常，男性の大きな力となり，支えとなっている。男性は力の及ばないときにあなたの援助を必要とすることがある。自分の母や恋人や妻が自分を信頼し，愛していると知ること以上の

励ましや希望や力はない。男性は毎日その愛と信頼に応えようと努力するであろう。

ヒュー・B・ブラウン副管長はあるとき扶助協会の大会でこのように語った。「女性は男性に劣ると言いたがる人々がいるが，私はそうは思わない。体力的には劣るかもしれないが，霊的，道徳的，宗教的，また信仰において，福音に真実改宗した女性にどの男性が匹敵しようか。女性は男性よりも犠牲心に富み，辛抱強く苦しみに耐え，熱心に祈る。快活さ，善良さ，道徳性，信仰において，女性は男性と互角か，ときには男性をしのぐ。」（扶助協会大会1965年9月29日）

若い女性の皆様，兄弟や恋人に及ぼす自分の影響を軽く見ないように。あなたがたが彼らの愛と尊敬に価する生活をするとき，それは，彼らが清く，徳高く，成功して幸福になろうとする大きな助けとなるのである。人気よりも尊敬によってこそ，人生の妙味を会得できることを，いつも忘れてはならない。先日私は，ベトナム戦争で捕虜となったふたりの青年の会話を本で読んだ。ひとりは，「戦争も爆撃機も殺りくと捕虜収容所も，何もかもだれもかもみんないやだ」と言った。

するともうひとりは，「本当にその通りだ。しかし故郷には帰りを祈ってくれるガールフレンドがいる。彼女はぼくのことを心配してくれる。彼女のおかげで，殺ばつなことにも耐えていられるんだ」と言った。

母たち，娘たち，そしてすべての女性たちに特に申し上げたい。あなたがたには，私たちの生活に良い影響を及ぼす力と大きな可能性がある。サタンがあなたがたを滅ぼそうとねらっているのは，まさにその理由によるのである。サタンに妥協してはならない。あなたがたは，主の願い通りに正しく清い生活をしようという決意と希望と勇気と力を持たなくてはならない。若い女性の皆様，徳高く，身を清く保ちなさい。清い生活をする立派な青年にふさわしい者となり，共に主の宮居に行って今も永世にも結婚の聖なる絆に結び固められ，神が喜んで霊を子供たちを送られる良い家庭を築けるように。そうしたときに，自分の模範に従えば幸福と永遠の進歩を得られると確信して，胸を張って子供たちの前に立てるであろう。子供たちにはその遺産を受け継ぐ権利がある。あなたがたがそのような生活をして，尊い財産を子供たちに伝えることができるように，へりくだって祈るしだいである。

地球創造の究極の目的は，神の霊の子供たちが肉体をまとって生活し，第二の位を保って救いと昇栄の用意をする場所を作ることであった。イエス・キリストの使命の究極の目的は，人に不死不滅と永遠の生命をもたらすことであった。父たる者，母たる者が究極の目的とするところは，その祝福にふさわしい生活をして，父なる神と御子イエス・キリストのみわざを援助することでなくてはならない。その神の計画を手伝うことは，女性に与えられる最高の栄誉である。断言したい。女性は賢明な母親となって立派な子供たちを育てることにこそ，ほかのどんな職業に見いだすよりも大きな喜びと満足を得，人類に対してより大きな貢献をするのである。

主は，私たちがこの神の計画の中で自分の分を果たすならば大きな祝福を与えると約束された。合衆国大統領ハーバート・フーバーはこのように語っている。「ただの1世代でも，子供たちが正しく生まれ，しつけられ，教育された健全な時代があったなら，何千という政治問題が消え失せたであろう。より健康な精神と活気にあふれた肉体が保証されて，私たちのエネルギーをより高い目的に向けることができたであろう。」（デビド・O・マッケイ大管長「大会報告」より引用，1931年4月〔英文〕P79，80）

この末日にイエス・キリストの建てられた教会があり，そこに神の予言者がいて，人の子らのために神から啓示と指示を受けているとは，何と幸いなことであろうか。私たちは，神が感情，感覚，体を持っておられることを知り，神の属性と個性を知る恵みに浴している。生命と救いの計画を与えられ，この世でも来たるべき永遠の世でも幸福を得るにはどう生きるべきかについて，断えず導きを受けている。また，物的，霊的福祉に関したすべての事柄を教え導く種々の組織がある。

教会の最もすばらしいプログラムのひとつは，週に1回家族全員が共に集う家庭の夕べと呼ばれるプログラムである。月曜日ごとに世界中全教会員の家族が各々家庭で集まり，でき得れば家長の父親が家族をまとめ，周到に編集されて教会員の各家庭に配布されたテキストを用いて，家族の霊的，物質的な福祉に関する諸問題を話し合っているさまを思いめぐらすと，私の胸は躍るのである。この集まりを定期的に正しく行なうと，家族の一致にとってはかりしれない力となる。それは，これまで私共に寄せられた多くの証が証明している。私はあらゆる家族がこのプログラムを行なうようにお勧めしたい。このプログラムを実行するならば，一致と愛と献身において豊かに祝福され，そしてすばらしい実りを刈ることができると私ははっきりお約束できる。もちろんのこと，毎日家族の祈りと個人の祈りを行なうように，この夕べに家族の祈りを捧げること

が大切である。

夫が宗教を実践して神権の召しを全力を尽くして遂行し，妻は手立てを尽くして夫を支える愛と一致のある家庭，天父のみ前に連れ帰るべく正しい息子，娘を育てようと夫婦が一致して努力する家庭ほどにうるわしいものを，私は思い浮かべることができない。これは実現不可能な夢のように聞こえるかもしれない。しかし，この教会にそのような家族がたくさんあることを，そしてイエス・キリストの教えを受け入れ，教えに従うならば，だれにでもそれが現実となり得ることを断言できる。そのような家庭に育つ子供はいかに幸せであろうか。そのような子供たちを持つ親の喜びはいかに大きいであろうか。

繰り返し申し上げる。サタンは，私たちが神の戒めを守って全き喜びを得るのを妨げようとしている。決して忘れてはならない。また，子供たちにそれを教えなくてはならない。サタンは実在して，私たちを滅ぼそうとしているのである。サタンは家族の一致の重要なこと，大切なことを承知している。サタンは，これまでの文明のすべてが家族の生活いかんによって存続あるいは衰退してきたことを承知している。私たちはイエス・キリストの福音の原則を守り，子供たちにもそれを教えることによって，家庭をサタンから守ることができる。そのようにすれば，必ずや迫り来る誘惑を撃退することができるのである。

若い女性の皆様，良い教育を受けて知恵と知識を得，母親の責任を引き受ける用意をされるように。私たちは，神の栄光は英智であると教えている。従って，私たちは皆周囲の事態に目を向けて，私たちからすばらしい将来を奪おうとするサタンを阻止する用意をしなくてはならない。知識と知恵と決断と，私たちを助ける主のみたまによって，それができるのである。

私たちはまた，女性も社会的行事や教会の補助組織活動に活発に参加すべきであると信じるが，それでもなお，家庭と子供を優先すべきこと，決しておろそかにしてはならないことを常に心する必要があろう。母親は，子供を愛し，子供のためを思い，子供の一挙一動を心にかけていることを，子供たちに感じさせなくてはならない。これはほかのだれにもまかせられないことである。母親の世話と愛を十分に受ける子供が，母親の愛を受けられない子供や別の人のそばで育つ子供よりもあらゆる面で進歩の早いことは，数々の実験や研究で証明されている。

父親たちもまた，自分の役割と責任を引き受けなくてはならない。子供には両親が必要である。父親は家庭内で，母親と共に子供たちを育てることに伴う義務を果たし，年長の子供を正しくしつけ，問題がある子供や助言と指導を求める子供の良き聞き手となるべきである。愛によって，子供たちと良い関係を築き，心を通わせる道をつけなさい。

すべての夫，父親，息子，兄弟たちにお勧めしたい。抱いている大きな愛と尊敬を実際に表わし，私たちの妻，母，娘，姉妹，恋人である人々にふさわしくなろうと努力しなさい。女性に対して尊敬に欠ける行動を見せたり，女性をいやしめる言動をとることは，何よりもその男性の人格の貧しさと礼儀のなさを示すものである。夫や父たる人々が独裁者となって，妻より優れているという態度を何かの形ででもとることは，キリスト教徒らしくない神の不興を呼ぶ不当なやり方である。

リー大管長はドイツのミュンヘンで開かれた地域総大会でこう語った。「もしあなたがた夫が，主のみわざの中で自分にできる一番大事なことが自分の家庭の中にあることを忘れないならば，……家族の絆を固く保ち続けることができる。家族の絆を固くし，子供たちのことを心にかけようと思うならば，家庭という場を，子供たちが混迷と苦悩の時代に必要な錨を下ろす場，愛が豊かに満ちて喜びが増す確固たる場にすることである。」

女性たちが家庭と家族の大切さを認識し，夫と共に神の戒めを守り，生み，ふえ，地に満ちて，自分を愛するように隣り人を愛し，子供たちに祈ることと主の前に正しく歩むことを教えるとき，彼らの喜びは増し，恵みに恵みが加わってあふれるばかりになるであろう。

これらの恵みは，この生き方を拒む人々の決して知り得ない喜び，すなわち健康で幸せな子孫を得るという喜びである。立派に成功し，やがては中心となってまだ生まれ出ない世代のためにより良い世界を作ることのできる子供，そのような子供を育てあげることには，平安と満足がある。再び天父のみ前に帰り，「良い忠実な僕よ，よくやった。……主人と一緒に喜んでくれ」（マタイ25：21）と言われるように，従順と愛によりその備えをなしている家族にとって，それは何と喜ばしい特権であり，祝福であろうか。

それが私たちの特権，祝福となることを，イエス・キリストのみ名によりお祈り申し上げる。アーメン。

イエスが手を取って起こされると

十二使徒評議員会会員

マービン・J・アシュトン

昨晩の神権会で，リー大管長は先日終了したミュンヘン総大会から受けた祝福を述懐しておられた。私の胸にもあの大会でのひとつの出来事がよみがえってきたので，末日聖徒の美しいヤングアダルトの女性が語った心のこもる言葉をご紹介したい。

その女性はさっぱりした身なりで，頭を心もち高く上げ，日曜日午後の部の閉会後も浮かんでくる感動の涙にまぶたを濡らしていた。少しばかりわかる英語をけんめいに使って，そのため私はそのときも今も彼女が，どの国の人かわからないのだがそれはどうでもよい，とにかく彼女は私たち末日聖徒のひとりである。彼女は私と握手をしながらこう言った。リー大管長は私の心を高めて下さいました。今，私は自分の力以上に歩んでゆけると感じています。」

この胸を打った言葉に，私はマルコ伝の中の似たような聖句を思い出した。「イエスが手を取って起されると，その子は立ち上った。」（マルコ9：27）

たしかに時は今である。主の歩みにつき従うには，私たちが疲れた人，孤独な人，気落ちした人，悩む人，福音に飢えた人たちの手を取って，起こしてあげなければならない。そしてまた，不誠実な人，自責に苦しむ人，正しい原則に便宜を優先させてしまった人たちをも起こしてあげなければならない。私たちが信頼と励ましの手を伸べて，リー大管長が今大会の開会に述べたような自尊の心を取り戻す手助けをするとき，今も大勢の人々が正しい方向に一歩を踏み出すであろう。

「あなたがたは，わたしが空腹のときに食べさせ，かわいていたときに飲ませ，旅びとであったときに宿を貸し，裸であったときに着せ，病気のときに見舞い，獄にいたときに尋ねてくれたからである。」（マタイ25：35—36）

今，そこにはこうつけ足すことができよう。「あなたがたは，わたしが倒れたときに起こし，悲しむときに慰め，ふらつくときに手を貸し，足元の危なげなときにたしかな道へ連れて行ってくれた。」

霊的に健やかな人，手を取られ起きて霊が癒えた人は，主の目にいかに美しいことか。求める手を握って起こした人は，主の目にいかに美しいことか。心の平安は霊を癒されてこそもたらされる。真の喜びは内から湧き出るものである。悩みを解かれた自由は，万人の求めるものである。

救い主によって大勢が体の悩みや病いを癒されたが，必ずしも真の喜びと幸福が実現したわけではなかった。癒されても起き上がることのない人がいた。体が良くなった，社会的，経済的に成功したといって幸福になれるものではない。「…… たといたくさんの物を持っていても，人のいのちは，持ち物にはよらないのである。」（ルカ12：15）

救い主は病いを癒された人々に対して，新しく得た力を自慢しないで自分は真理の道を歩みながらその力で人々を立ち上がらせなさいと，よくさとされた。体が癒されても，未熟で霊的には病気同然の人が多いことは，まわりに見る通りである。救い主は，「……… われが汝らを医すを得るために，汝らは今われに立ち帰りて罪を悔いまた心を改めざるか」（IIIニーファイ9：13）と言われた。

癒しは誇るために行うべきものではない。癒しは，自他両方を起こして，より高い奉仕に引き上げるためのもののはずである。起こすことが癒しにまさって重要にもなるとは言えないであろうか。

現代最大の奇跡のひとつは，悩める魂を癒し，起こすことである。霊の力は義を守って耐え抜く人々に与

えられる貴重な財産である。悩める魂の癒しは，義に鈍い人々に健康と力をもたらす。清さと信仰，希望，愛がよみがえり，いったんは霊の病に冒された人を再び健康にする。

このような癒しは，真理に目を開いて正しい原則に従ったときに実現する。キリストは「自身にある癒しの能力をもって，死者の中からよみがえりたもう。それであるから，およそその御名を信ずる者は皆神の王国に救われる」（IIニーファイ，25：13）と聖典に約束されている。

キリストとその贖いの犠牲によって癒される人の前からは，霊の死と霊の病いが姿を消す。

リー大管長は先日神権者に対する話の中で，このように勧告した。「あなたがたは手中に，主のみ名により行動する権威を持つと共に，神聖な神権の儀式を通じて全能の神の力が現わされるように，己れを汚れのない清い器として準備するという神の信頼を握っているのである。」その通り，私たちの手中には事を行なう権威，権能と共に，忠実でありさえすれば，人を立ち上がらせることのできる力さえ存在するのである。

兄弟姉妹，私たちは肉を超えて霊を，魂を，心を，人そのものを，見なければならない。

私はここで最近の新聞から，そのような視野と価値観に立っていると思われる投稿文をご紹介したいと思う。「ディア・アビー」という人生相談のコラムである。

「アビー様，私は，看護婦のお嬢さんが障害者と結婚されるのにお悩みのお母様が書かれた手紙を読んで，背筋に悪寒が走る思いがいたしました。（結婚相手はベトナム戦争で地雷を踏んで両足をなくした方です。）そのお母さまは，お嬢さんはきれいだし『五体満足な人』と充分結婚できたはずだと言っておられました。私は自分についても，夫は私のような障害者ではない『五体満足な』人と結婚できただろうにと，きっと大勢の人が考えているに違いないと思っています。私は3歳のときに22口経のライフル銃に撃たれて，幸運にも命は助かりましたが左半身が麻痺しているのです。でも歩けますし，人並のことはたいていできます。なかでも一番うれしいことは，ひとりのすばらしい男性が私を結婚できる『満足な人間』と考えてくれたことです。彼はすてきで，やさしく，誠実で，私を大事にしてくれます。結婚以来10年になりますが，今でも私は幸運な自分が信じられないくらいです。フレディーの妻より。」

「『フレディーの妻』様，それは『幸運』ではありません。あなた自身に負うところが大きいのです。おめでとう。」

私は回答者のアビー氏にも，人々の手を取って起こしておられることに祝いの言葉を贈りたいと思う。

私たちはこのすばらしい教会の中で，「これわが業にしてわが栄光，すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり」（モーセ1：39）というみ言葉にそって主としっかり手を携え，経済的，社会的，あるいは身体面や霊的面で私たちを必要としている人たちを立ち上がらせてあげようでではないか。

「さて，ペテロとヨハネとが，午後三時の祈のときに宮に上ろうとしていると，

生まれながら足のきかない男が，かかえられてきた。この男は，宮もうでに来る人々に施しをこうため，毎日『美しの門』と呼ばれる宮の門のところに，置かれていた者である。

彼は，ペテロとヨハネとが，宮にはいって行こうとするのを見て，施しをこうた。

ペテロとヨハネとは彼をじっと見て，『わたしたちを見なさい』と言った。

彼は何かもらえるのだろうと期待して，ふたりに注目していると，

ペテロが言った，『金銀はわたしには無い，しかし，わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい』。

こう言って彼の右手を取って起してやると，足と，くるぶしとが，立ちどころに強くなって，

踊りあがって立ち，歩き出した。そして，歩き回ったり踊ったりして神をさんびしながら，彼らと共に宮にはいって行った。

民衆はみな，彼が歩き回り，また神をさんびしているのを見」た。（使徒3：1－9）

この聖句はいろいろな点をとらえてさまざまな目的に引用されるが，きょうは，この足のなえた男が，自分は歩けると思っていなかったのを，ペテロに手を取って起されてはじめて歩けたことを取りあげてみて，お話したいと思う。

彼は自分で前に歩いてゆけるなどと予想だにしなかった。初めに手を引かれて起きたときが歩みの第一歩であった。ペテロは神のみわざに堂々立っていたからこそ，彼を立たせることができたのである。

こう考え，手を取って起こすことについて思いを巡らすと，この聖句は誤解されがちな聖句ではないかと思われてくる。ところで，この大会の部で先ほどタナー副管長が次のような聖句を引用された。

「それで人は父と母を離れて，妻と結び合い，一体となるのである。」（創世2：24）

新家庭を持った男性が誠実に全幅の支持を置いて妻を守り，励ますのは当然だが，自分の父母や兄弟姉妹から離れたといって家族を省みずに遠ざけ，捨てておくつもりは毛頭な

いはずである。親兄弟もまた家族であることには変わりなく，大きな力の源，避け所，喜び，永遠の1単位である。賢い両親は子供が各自の家族を持とうというときに，自分たちの役目はまだ終わるものではなく，支配や統制や規則や指揮や押しつけによらず，愛と関心と励ましによってそれが続くことを自覚するのである。

大勢の宣教師がこのように言っている。「印象深い手紙というのを祖母やおばや義兄からもらいました。」，「父は何年も前に亡くなりましたが，おじや祖父が伝道の資金を出して支えてくれました。」私たちには大家族があり，私たちも大家族の輪の中にいる。それは祝福であり，また神聖な義務でもある。

予言者ジョセフ・スミスは家族を尽きない力の源とみていた。彼は幾度となく，病んだ父親の回復を願って熱心に祈った。「両親との交流は地上の幸福の最大のもののひとつだと考えるので，父の健在と父の意見をいまだ恵みたもうようにと。長年の経験に培われた円熟した人格は最良の助言を語らしめるのである。」（*Documentary History of the Church*「教会歴史記録」第2巻，p. 289）この予言者にして良き家族の愛と知恵から学んだとは言えないであろうか。

ジョセフはハイラムについてこう言ったことがある。「私の手を取ってくれるハイラムがいた。真の兄弟だった。私は自分で考えた。ハイラム兄弟，あなたは何と忠実な魂の持ち主だろうか。おお，永遠のエホバが，私の魂を養いしめたあなたの労に報いてあなたの頭に永遠の祝福を授けたまわんことを。」（「教会歴史記録」第5巻，pp. 107—108）「兄弟たち全員が愛する兄ハイラムのようであるようにと心に祈ることができた。ハイラムは小羊の柔和さとヨブの気高さとまた端的に言ってキリストの温和さ，謙遜さを具えている。私は死よりも強い愛をもって彼を愛する。私が彼を責めることも彼に責められることも一度としてなかったからである。」（「教会歴史記録」第2巻，p. 338）

大事なことの折に家族のだれかに手を取って起されるということはよくある。一番必要とする手は一番身近な人の手，ということも多い。近しい手ほど力は強いということがある。私たちが家族内のお互いのその関係を認識し始めると，イエス・キリストの福音である教会の大福祉計画の基本の実際が理解できるようになる。神は，家族のお互いは相手にとって祝福であると定められた。だれか，自分の家族に手を差し伸べても空しいと落胆する人がいたなら，目先の結果にこだわらずにそれを続ければ自分の力が増すと申し上げたい。起そうと手を伸べれば伸べるだけ，起こすことができるようになってゆく。

資格ある末日聖徒の結婚は永遠であり，最も大切な人に誠実であるとき，家族全体に祝福が来る。私たちは家族の手を借りて起こしてもらうことができる。また，自分でも家族の手を取って，自分たちの愛がいつも変らない真実の愛であることを示さなければならない。手を取りあえば，両方の手は力が増す。人を起こすには，だれでも一歩高い所へ足をかけるのである。自分の家族のきずなを強くし，家族のみんながそのきずなに結ばれるようにしよう。家族は，子供たちが帰って来たいと思うような場所でなくてはならない。

私たちが神の戒めを守り，神と手を携えて神の道を歩むならば，サタンは私たちに手が出ない。忠実な教会員はひとりで歩まなくともよい。悩む魂はひとり振り返らなくともよい。私たちが手を伸べさえすれば，神のみ手はだれにも差し伸べられているのである。

「………イエスが手を取って起されると，その子は立ち上がった。

家にはいられたとき，弟子たちはひそかにお尋ねした，『わたしたちは，どうして霊を追い出せなかったのですか』。

すると，イエスは言われた，『このたぐいは，祈によらなければ，どうしても追い出すことはできない。』（マルコ9：27—29）

内なる力とまわりの人々の手を取って起こす力とが得られるような生活が私たちにできるように，天父の助けを祈るものである。

神は生きておられることを証する。この教会は末の時代に全人類のために回復されたイエス・キリストの教会である。ハロルド・B・リー大管長は神の予言者である。ミュンヘンのあの若い女性のように大勢の人々が証するとおり，私たちが戒めを守り，彼の勧告に従うならば，彼は神から授かった力を持って私たち全員の手を取り，新たな高さへと立ち上がらせてくれる。このことを，イエス・キリストのみ名により，証申し上げる。アーメン。

どんな代価を払って

十二使徒評議員会会員

マーク・E・ピーターセン

救い主は多くのたとえ話で教えられ，数々の話がよく知られている。しかしまた，適切な鋭い質問で教えてもおられる。そのひとつがこれである。「……人はどんな代価を払って，その命を買いもどすことができようか。」（マタイ16：26）

主が，永遠の生命を神のあらゆる賜のうちで最大だとされたことを知るときに，このことは特別重要に思われる。

私たち一人一人には救うべき命がある。だれにも永遠の生命を得る機会がある。私たちの命は非常に尊いので，あらゆる手段を尽くしてそれを救おうと努力しなければならない。

救い主はその大なる真実を幾つかの有名なたとえ話で説明された。例をあげれば，こう言っておられる。

「……天国は，良い真珠を捜している商人のようなものである。高価な真珠一個を見いだすと，行って持ち物をみな売りはらい，そしてこれを買うのである。」（マタイ13：45—46）

天国は，畑に隠してある宝のようなものである。人がそれを見つけると隠しておき，……行って持ち物をみな売りはらい，そしてその畑を買うのである。」（マタイ13：44）

このように主は，救いとは高価な真珠であり，畑の宝であり，その価値を知れば私たちは自分の持ち物をすべて棒げてそれを手に入れると言っておられる。

私たちはこの大切な教えに目をさまそうではないか。それは偽ることのできない神の口から出ている。

私たちにとって最も価値あることは主に仕えることである。

それは，金の輝きや地位の魅力や罪の楽しみ，誤った興奮に目をくらまされてはならないということである。

私たちは目を見開いて，神に仕えることが人生最大の仕事であるという事実を見るべきである。

神のみ前に救われることは私たちの受け得る最大の賜であり，家族と共に救いの喜びにあずかることは人生最高の業績である。

しかし，救いが無償の賜でないことを私たちは知らなければならない。救い主の贖罪によって，その機会が与えられるのは無償でありこそすれ，実際に救いを享受するにはいいかげんではない努力が必要とされる。主イエス・キリストの福音と呼ばれる進歩の計画を，真心から集中して実践することである。

もし不死不滅を心底信じたら，神を信じずにはいられない。神を信じれば，私たちが神のようになることは可能だという事実を受け入れるはずである。実際，それこそは神が私たちに期待しておられることである。

神は愛子イエス・キリストを頼るべき人生の手本として私たちに遣わして下さった。私たちはキリストによって，完全に，また神のようにさえなることができる。

何というすばらしい将来であろうか。何という機会であろうか。

聖句がそれを高価な真珠と呼ぶことに何の不思議があろう。

そうであるならば，私たちは力を尽くしてそれを手に入れようではないか。反面，努力をしなければ，私たちはどんな代価を払ってその命を買いもどすのであろう。

救い主は，わたしの家には住まいが多くある，と言われた。使徒パウロは，来たるべき世では栄光にさまざまな段階があると，それを詳しく語った。私たちは自分にふさわしい所へ行くのである。自分の働きに従って審判されるのである。

審判の日に受ける報いは，ちょうどこの星とあの星に栄光の差があるようにそれぞれ違うであろう。パウロは，星の栄光の上にまた別の栄光

があるとも言い，その栄光を星に比較して月の明るさになぞられた。

またパウロは，それとも別の栄光について，月や星よりも明るい太陽の光のように他のすべてをしのぐ日の栄光があるとも述べている。

近代の啓示の中には，神と神が示される生き方に献身する人だけが日の栄光に達し得ると言われている。日の栄光に行く人々だけが神に似た者となるのである。

それより劣るそれぞれの栄光に行く人々には限界があって，神のようになることはできない。

きょうここで，私は皆さんにお聞きしたい。あなたはどこで永遠を過ごしたいか。家族に，どこで永遠の時を送らせたいだろうかと。

福音に従うことで最高の日の栄光にあずかることができると知れば，そのために努力をする価値があるのではないだろうか。

日の輝きに浴することができるのに，わずかばかりの星のまたたきに満足する人がいるだろうか。

太陽のまばゆい光をあびられるというのに，照り返す月の光で満足する人はいるだろうか。

神のようになるという特権を，この世限りのいかがわしい都合と交換に拾てようという人はいるだろうか。

正しい心を持ちながら，神のようになることよりも，霊感の知恵を持つことよりも，いつの日か主権を持って歩む神が用いられるその力の幾分を使うことよりも，肉の腐敗，官能の楽しみ，罪の誤った興奮を好む人はいるだろうか。

私たちのだれが，自分の生得権を一椀のあつもののために売り渡すだろうか。

主の問われた言葉を自分自身に問うてみるとよい。「……人はどんな代価を払って，その命を買いもどすことができるでしょうか。」

それと意識しようがしまいが，私たちは日々の生活に自分の考えや言動でその返事をしているのである。私たちの行ないが，自分は神に向かっているか世に向かっているかを示している。

人はどんな代価を払って，その命を買いもどすことができるだろうか。

小さな子供たち，全能者ご自身から世話をまかされた子供たち，正しい原則を教えて正しい人生の道へ導く責任のある幼子たちの命を，親はどんな代価と交換できるだろうか。

子供たちの将来を，自分の欲のために一椀のあつものと交換できる親はいるだろうか。幼子を犠牲にして自分勝手な欲望を満そうと，はたしてするだろうか。

子供がなおざりにされている。この風潮がなんと広まっていることか。

子供ひとりの価値はどれほどであろうか。

人ひとりの価値はどれだけであろうか。

あなたはそれを一遍のスリルと交換できるだろうか。仕事のかけひきに使えるだろうか。社交の道具や，家族軽視の女性解放運動にゆずり渡すことができるだろうか。あなたはそれをお金で売ることができるだろうか。幾らで交換できるのだろうか。

意識しようがしまいが，世のものを自分の宗教よりも愛すれば，私たちはその取引きに手を染めているのである。

人の命を救う唯一の道は，神を生活の第一に置くことである。

それを変えて，神を2番目，3番目，あるいは4番目に落とすならば，私たちは永遠の後悔を招く取引きをしているのである。私たちは義務を怠ったために自分の救いを失うこともある。

そのことを知れば，私たちはどうして教会を離れることができよう。自分の家族をなおざりにすることができよう。ふたつが相容れないことやイエスが私たちは神と富とに兼ね仕えることはできないと言われたことをよく承知しながら，世と神とを一緒にすることができよう。

主は，主に雄々しく仕えなければ日の栄光に入る機会を失うと教えておられる。雄々しいとは，努めて善き業に従うことである。それはひたすら神の栄光を仰ぎ見て熱心に神に仕え，心をつくし，勢力をつくし，思いをつくし，体力をつくして神の王国で働くことである。

働き場は，他の宗教や他の団体ではなく，神の王国でなければならない。

私たちは自分の命を何と交換するであろうか。悪にはどんな惨禍にも甘んじるだけのスリルがあるからといって，この世の都合やお金や楽しみや不正な罪と引換えにするのだろうか。

人はどんな代価を払って，その命を買いもどすことができようか。

父親，母親たちよ，聞いているだろうか。あなたや子供たちに呼びかける救い主の声を。

救いのみ言葉を聞いているだろうか。「すべて重荷を負うて苦労している者は，わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから，わたしのくびきを負うて，わたしに学びなさい。そうすれば，あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく，わたしの荷は軽いからである。」(マタイ11：28—30)

あなたの救い主，贖い主のこのみ言葉を聞きなさい。

「………シオンまたは組織せられたるシオンのステーキ部内にて子供を有する両親あらば，その子供八才の時，悔改め，生ける神の子キリスト

の信仰，バプテスマと按手による聖霊の賜などの教義を教えて理解せしめざめれば，罪その両親の頭に留るべし。

およそ，シオン，またはその組織せられたるステーキ部内に住める者の律法はかくの如し。

またその子供たちは八才の時，彼らの罪の赦しを得さするバプテスマと按手とを受くべし。

また両親はその子供たちに祈ることと，主の前に正しく歩むこととを教えざるべからず。」（教義と聖約68：25—28）

両親の方々，私たちはこのことをしているだろうか。あるいはのちに後悔するような取引きをしてはいないだろうか。

近代の啓示によって語られた救い主のこのみ言葉が聞こえるだろうか。「………汝心を尽し，勢力と思いと体力とを尽して主なる汝の神を愛すべし。また，イエス・キリストの名によりて神に仕うべし。」（教義と聖約59：5）

私たちはこのことをしているだろうか。あるいは何か別のものと交換してはいないだろうか。

救い主のみ声は言う。「汝己れの如く汝の隣りを愛せよ。………」（教義と聖約59：6）

あなたはそれに従っているだろうか。救い主のみ声がまた告げている。「………汝盗むなかれ。また，姦淫を犯すなかれ。また，人を殺すなかれ。また何事にてもこれに類することを為すことなかれ。」（教義と聖約59：6）

あなたはそれに従っているだろうか。それとも自分の欲望と交換に主のみ言葉を捨ててはいないだろうか。寸時でも，自分の救いと福音に対する従順とは別のものだと考えはしないだろうか。

あらゆる戒めの中で最も大切なことのひとつが,黄金律である。私たちは自分でしてほしいことを人々にしているだろうか。もししていなければ，それ何と交換しているだろうか。

小さい新聞少年が集金したお金をだましとる人を，私たちは何と言うだろうか。そのような人はどんな取引をしているのだろうか。

また，医療費や入院費の支払いを拒みながら，臆面もなく教会の日曜学校に来て主を賛美して歌う人を，私たちは何と言うだろうか。

救い主はまた，こう呼びかけておられる。

「シオンに住む民は，また安息日を守りてこれを聖くすべし。」（教義と聖約69：29）

「汝なおさら充分に世の汚れに染まざる様，祈りの家に行きてわが聖日に汝の聖式を棒ぐべし。」（教義と聖約59：9）

どれだけの人がこの要求に応えているだろうか。これは私たち一人一人に与えられた天よりの戒めである。それを忠実に守らなければ，自分の命を日曜日の仕事や娯楽や休暇といった世のものと交換することであろう。

人はどんな代価を払って，その命を買いもどすことができるだろうか。

私たちは，主が私たちのためを思って言っておられることを知るべきである。主は私たちに永遠の宝を提供しておられる。私たちが世にある間は，心の平安と真の幸福を罪に隷従することからの自由がある豊かな人生を提供して下さる。

しかし，これはただ従順によってしか得られないものである。なぜ従順でなければならないのだろうか。それは，主が私たちに主のようになることを望んでおられるから，私たちが神の子供だから，不完全な手段では完全に達することができないからである。

私たちがキリストのようになるためには，キリストが行なわれたことを自分も行なわなければならない。

主はこの戒めを私たちに与えるに際して，私たちの自由意志をいささかでも奪おうとはされない。主は，私たちに制限のない選択の自由を与えておられる。

しかし，私たちが主に仕えなければ主から報いを受けることもないということは，はっきりと言われている。

私たちは単に教会員だというだけでは救われない。啓示がこう語るとおりである。

「………すべての事己むを得ざれば為さざる者は怠惰なり，賢き僕にあざればなり。これを以て彼は良き報いを受くることなし。

われ誠に汝らに告ぐ，人は努めて善き業に従い，……

………命令を受くるまでは何事をもなすことなく，疑いの心を以て命令を受けこれを不精不精に守る者は救われず。」（教義と聖約58：26—27,29）

また，「わが律法を受けてこれを行う者はすなわちわが弟子にして，わが律法を受けたりと言いてこれを行わざる者はわが弟子にあらず。これらの者は，汝らの中より追い出さるべし。」（教義と聖約41：5）

ここに言われるとおり，私たちのなすこと，なさないことが神のみ前での自分を決めるのである。

主が求めておられるのは教会員という資格だけではない。聖典を読むことだけでもなければ，什分の一を納めるだけでもない。大事なのは真心からの従順と忠実な心である。

世のものか救いか，選択は私たちの前にある。どちらを選ぶべきか。このことに中間の立場はない。なまぬるい従順は主に一蹴される。人はどんな代価を払って，その命を買い

もどすことができようか。

救い主は，関連してこうも問われた。「………人が全世界をもうけても，自分の命を損したら，なんの得になろうか。………」（マタイ16：26）

物事には必ずその反対がなくてはならない。

私たちには完全な選択の自由がなければならない。

この事実を知れば，私たちはこの世と来たるべき世の聖なる祝福を，世のいかがわしいものと交換するだろうか。光よりも闇，喜びよりも悲しみを選ぶことが考えられるだろうか。

しかし，私たちが教会で活発に奉仕することに背を向けるならば，それをしているのである。その交換をしているのである。

主が，まず神の国と神の義を求めるならば主が持っておられるすべてのものを下さると約束されたことを，いつも忘れないようにしようではないか。

これが私の証である。主イエス・キリストの聖なるみ名により，アーメン。

報い，祝福，約束

十二使徒評議員会会長

スペンサー・W・キンボール

愛する兄弟姉妹，私たちはまた再び栄えある大会でまみえている。

感動的な大会のそれぞれの部で訓戒や教えや警告を聞いたが，説教はどれも力と権威を備えていた。主の道を歩めと十分に教えられたが，説教の中で特に印象的な言葉は，「まっすぐに歩みなさい。私の戒めを守りなさい。私の律法に従いなさい」という言葉であった。結婚，それも正しい結婚について，また悔い改めと許しについて，自尊の心を持つことについて，義の道を歩むことについてそれぞれ考えさせられ，「荒海」という言葉や「罪悪は決して幸福をもたらさない」という言葉を耳にした。

次の話は，合衆国東部である宗教雑誌を主宰しているロイ・H・ステトラー氏の書いたものである。「リバデアにあるクリミヤ城の外での出来事であった。城はライトに明るく照り輝いていた。ひとりの兵士がきっかり同じ歩幅で行きつ戻りつ城の警備にあたっていたが，その城の中では世界各国から人が集まり，非常に重要な会議が開かれていた。兵士は自分の任務に誇りを感じている様子であった。それも当然「3巨頭」が顔を合わせる重要な会議の警備の任務を受けたということを，自分の孫，子に語り伝えたいと思わない兵士がいったいいるだろうか。

すると突然，闇の中から幽霊のように人影が現われて，城の門に通じる道を進んできた。歩哨は近づく人影に向かって大声で叫んだ。『止まれ！だれだ。ここへ来て，名をなのれ。』歩哨はすばやく肩から銃をはずし，緊急事態に備えてさっとみがまえた。

すると，『この城の中にいる人たちと話がしたいのですが。』という声があった。

『ばかを言うな！』歩哨は思わず叫んだ。『城内は立入禁止だ。おまえは3巨頭が世界の将来を決めるのに会談していることを知らないのか。だれであろうが立入禁止だ。』

男はそれに答えて言った。『3巨頭とおっしゃいましたね。なぜその3人を3巨頭と呼ぶのですか。』『それは，その3人が世界をどう治めるか決めるからだ。』

すると男は真剣なまなざしで歩哨を見た。輝く目で，男はこう言った。『だからこそ，その3人に会わなければならないのです。3人を助けることができるのです。私には良い計画があります。この計画を彼らが取り入れてくれさえしたら，世界に平和が来るはずです。』

それを聞いて兵士は笑い出した。『さあ，さあ，帰りな。おまえさんは信任状も何も持っていないんだろう。』

『信任状ですか。そういう物は持ち合わせていません。』こう言うと，男は軽く手を上げて挨拶し帰ろうとした。そのとき，歩哨は男のてのひらにひどい傷跡があるのを見た。もう一方の手を見ると，そこにも傷跡があった。

『おまえ，戦争に行ったのか。』歩哨は語気を和らげて聞いた。『両手にひどい傷跡があるじゃないか。』男は振り返って答えた。『お気づきにならないだろうと思っていましたが。いいえ，戦争の傷ではありません。』これだけ言うと，まるで暗やみに吹い込まれるように男は突然姿を消した。

歩哨は男のうしろ姿を見送り，はっと驚いて叫んだ。『知っている御方だ！ああ，あの御方を中にお入れさえしていたら！』歩哨はろうばいのあまり，その場にへたり込んでしまった。

それは世に住むあらゆる人々に祝福をもたらした御方であり，次のように語られた御方であった。

「『汝の手と足にある傷は何ぞや』

と。その時，彼らはわれの主なることを知らん。そはわれ彼らに向いて『この傷は，わが友の家にありて得たる傷なり。われは挙げられたる者なり。十字架につけられたるイエスなり。それは，すなわち神の子なり。』と言えばなり。」(教義と聖約45：51,52)

人生が報いと罰の時であることを心に留め，きょうはしばらくの間，その積極的な面について考えてみようと思う。従順であるがゆえに主からもたらされる報いについてである。

「さて，イエスがガリラヤの海べを歩いておられると，ふたりの兄弟，すなわち，ペテロと呼ばれたシモンとその兄弟アンデレとが，海に網を打っているのをごらんになった。彼らは漁師であった。

イエスは彼らに言われた，『わたしについてきなさい。あなたがたを，人間をとる漁師にしてあげよう。』

すると，彼らはすぐに網を捨てて，イエスに従った。(マタイ4：18—20)

さらに，ふたりの兄弟，すなわちゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが主に従った。

こうして2組の兄弟が主イエス・キリストの使徒となったのである。

たしかに，主の使徒であるということは人にたまわる祝福の最大のもののひとつであり，また名誉でもあると思う。ちょうど30年前のきょう，1943年10月7日のほぼ同時刻，私はヒーバー・J・グラント大管長の足もとにひざまずき，イエス・キリストの使徒に聖任された。

教義と聖約の第76章の啓示は示現と呼ばれ，中には数々の祝福が約束されている。

「すなわち，かく誡命を守ることによりあらゆる彼らの罪を洗い潔め，聖霊を授くる権能を結び固められ按手聖任せられたる者の按手によりて聖霊を受けんためなり。

而して，これらの者は信仰によりて打ち勝ち，御父が正しく且つ真実なる者に皆注ぎたもう約束の聖き『みたま』によりて結び固めらる。

而して，これらの者は，『長子」の教会員にして，

御父はこれらの者の手にすべてのものを与えたまい，

また，彼らは御父の無上完全と御父の栄光とを受けたる祭司にして，また王たるなり。

而して，エノクの神権に等しく，また神の生みたもう独子の神権に等しかりしメルケゼデクの神権に等しきいと高き神の祭司なり。

この故に彼らは誌されたる如く神々にして，すなわちまた神の子なり。

この故に，すべてのものは皆彼らのものなり。生けるも死ねるも，現在のものも，はた未来のものも皆然り。すべては彼らのものにして，彼らはキリストのもの，キリストはまた神のものなり。

この故に彼らはすべてのものに打ち勝たん。(教義と聖約76：52—60)

「これらの者は神とそのキリストとの御前に，いつまでも限りなく住まわん。

これらの者は，正しき者の復活に出で来らん。

これらの者は，新しき誓約の仲保者にして而も自らの血を流してこの完き贖罪を為し遂げたるイエスによりて完くせられたる義人たちなり。」(教義と聖約76：62,65,69)

「イエスはガリラヤの全地を巡り歩いて，諸会堂で教え，御国の福音を宣べ伝え，……おいやしになった。

こうして，ガリラヤ……から，おびただしい群衆がきてイエスに従った。」(マタイ4：23,25)

「イエスはこの群衆を見て，山に登り，……弟子たちがみもとに近寄ってきた。そこで，イエスは口を開き，彼らに教えて言われた。

『こころの貧しい人たちは，さいわいである，天国は彼らのものである。

悲しんでいる人たちは，さいわいである，彼らは慰められるであろう。

柔和な人たちは，さいわいである，彼らは地を受けつぐであろう。

義に飢えかわいている人たちは，さいわいである，彼らは飽き足りるようになるであろう。

あわれみ深い人たちは，さいわいである，彼らはあわれみを受けるであろう。

心の清い人たちは，さいわいである，彼らは神を見るであろう。

平和をつくり出す人たちは，さいわいである，彼らは神の子と呼ばれるであろう。

義のために迫害されてきた人たちは，さいわいである，天国は彼らのものである。

わたしのために人々があなたがたをののしり，また迫害し，あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には，あなたがたは，さいわいである。

喜び，よろこべ，天においてあなたがたの受ける報いは大きい。……』」(マタイ5：1—12)

イエスの心は，たえず数々の祝福で満ちていたように思われる。

予言者ジョセフはこう記録した。

「またわれらかくの如く日の光栄を見たれども，こはあらゆる点に於て他より勝れたり，すなわち此所に於ては神すなわち御父その御座より永遠に治めたもうなり。

そもそも，父なる神の御座の前にはすべてのもの皆畏れ敬いて額づき，永遠に御栄を讃め奉る。」(教義と聖約76：92,93)

そしてさらに，

「されど，神の御業は偉大にして驚嘆すべく，われらに示されたるその王国の奥義はその光栄，勢い，支配

の及ぶところ，如何なる智を以てもこれを量り知るべからず。」（教義と聖約76：114）
「またこれらのことは，人の言葉によりて，知らすことを得るものにあらず。こは神を愛し神の前に自らを潔くする人々に神の与えたもう聖き『みたま』の力によりてのみ，ただこれを見これを悟るべきものなればなり。
神はかかる人が独りこれを見，これを知る特権を与えたもう。」（教義と聖約76：116,117）
また，1832年に受けた示現として知られる啓示は，次のような言葉で始まっている。
「聞け，汝ら諸々の天よ，地よ耳を傾けよ。喜べ，そこに住む者たちよ。主は神にして，主の他に救い主なければなり。
主の智恵は偉大にして，その為したもうところは驚嘆すべく，その御業の終は誰も知る者なし。
その企図は敗るることなく，またその御手を止め得る者絶えてなし。
永遠より永遠に主は同じにして，その齢は尽くることなし。
主かくの如く言う。主なるわれはわれを畏るる者に恩恵と憐みとを与え，終りまで義しく且つ真実にわれに仕うる者に誉を与うるを喜ぶ者なり。
彼らの得る報いは大きく，その栄は永遠なるべし。」（教義と聖約76：1－6）
主は，祝福を与えればそれを実現され，約束すればそれを成就される。1831年に，主は次のように言われた。
「主，われ言いたることは，われ言いたるなり。われ言い逃れせず。天地は過ぎ行くとも，わが言は過ぎ行くことなくして成就すべし。わが声にて言わるるも，僕らの声にて言わるるもみな一つなり。」（教義と聖約1：38）
主の携えるおとずれは，愛と平和であった。
主は十字架にかけられるに先立って弟子たちに心の準備をさせ，こう言われた。
「わたしを信じる者は，またわたしのしているわざをするであろう。そればかりか，もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみもとに行くからである。」（ヨハネ14：12）
ここでアブラハムの話が思い出される。3人の人が，マムレのテレビンの木のかたわらにいるアブラハムのもとを訪ねて行くくだりである。このとき，アブラハムは彼らを迎えて地に身をかがめた。彼らは「あなたの妻サラはどこにおられますか」と尋ね，こう言った。
「『あなたの妻サラには男の子が生れているでしょう』サラはうしろの方の天幕の入口で聞いていた。
さてアブラハムとサラとは年がすすみ，老人となり，サラは女の月のものが，すでに止まっていた。
それでサラは心の中で笑って言った。『わたしは衰え，主人もまた老人であるのに，わたしに楽しみなどありえようか。』
主はアブラハムに言われた，『なぜサラは，わたしは老人であるのに，どうして子を産むことができようかと言って笑ったのか。
主にとって，不可能なことがありましょうか。……サラには男の子が生れているでしょう。』」（創世18：9－14）
たしかに，主にとって不可能なことは何ひとつない。主の約束は必ず成就される。
1833年に，主は軽々しく考えることのできない数々の約束をされた。
主は，「さつりくの天使は……彼らを過ぎ越して居ることなかるべし」と言われたが，それにはエジプトの時代が思い出される。
主はまた，聖徒は健康を受ける，骨に髄を受け，へそに健康を受けて頑健な体を恵まれるとも言っておられる。
そして，とりわけすばらしい約束はこれである。「また智恵と知識の大いなる宝まことに秘れたる宝を見出さん。」（教義と聖約89：18－21参照）
これらの祝福は，その言葉を心にとめ，それに従って歩むすべての人に与えられる。
「もしあなたがたがわたしを愛するならば，わたしのいましめを守るべきである」と，主はたえず教えておられた。（ヨハネ14：15）
海面で吹き荒れる嵐も深い海底には決して届かない。人生の深みに到達し，その静寂のなかで神のみ声を聞く人々には，難事の嵐の中を平穏無事に航海させる揺るがぬ確信がある。
美しい約束は数えきれない。聖典を開いてページを繰ること，それ自体がすでに報いであるように思われるし，主の戒めに従っている証拠とも思われるのである。
ほかにも，厳粛な約束が主から与えられた。
「（義のうちに生きた者たちは）瞬く間にその身変り……」（教義と聖約101：31）
「汝らこれらの言を聞け，見よ，われは世の救い主なるイエス・キリストなり。これらのことを汝らの胸にしかと銘ぜよ。汝らのこころに永遠の厳粛なることを銘記すべし。
汝ら謹みて，わが誡命のすべてを守れ。」（教義と聖約43：34,35）
また，別の祝福も約束されている。
「そは，わが時至らばわれ審判のため地上に来り，その時わが民は贖われてわれと共に地上を支配すべければなり。」（教義と聖約43：29）
詩篇にも，次のような祝福が告げ

られている。

「地と，それに満ちるもの，世界と，そのなかに住む者とは主のものである。

主の山に登るべき者はだれか。その聖所に立つべき者はだれか。

手が清く，心のいさぎよい者……こそ，その人である。このような人は主から祝福を受け，その救いの神から義をうける。」（詩篇24：1—5）

そして，私たちのこの神権時代には，次のような大きな報いが約束された。

「すべてわれによりて祝福を受けんと願う者は，その祝福を与うるために定められたる律法……を……守らざるべからず。」（教義と聖約132：5）

続けて，主は永遠の祝福について語っておられる。戒めを守り，義しく生活している人々についてこう言っておられる。

「……彼らは彼処に置かれたる諸天使諸神の前を通り過ぎ，各々その頭に結び固められたる如く，各々最高の栄に進むを得てあらゆることに光栄を受くべし。この光栄は最高完全の光栄にして，永久にその子孫の続くことなり。

それより，彼らは神々となるべし。彼らは終りなければなり。……それより，彼らは神々とならん。彼らはすべての権能を有し，諸天使彼らに従えばなり。……

もし汝らこの世に於いてわれを受け入れなば，汝らわれを知りて最高の栄に進むを得ん，すなわちわが在るところに汝らもまた在らん。」（教義と聖約132：19,20,23）

主はイスラエルの民に次のように語られた。これは現代の私たちへの約束でもある。

「わたしはあなたがたを顧み，多くの子を獲させ，あなたがたを増し，あなたがたと結んだ契約を固めるであろう。

あなたがたは古い穀物を食べている間に，また新しいものを獲て，その古いものを捨てるようになるであろう。

わたしは幕屋をあなたがたのうちに建て，心にあなたがたを忌みきらわないであろう。

わたしはあなたがたのうちに歩み，あなたがたの神となり，あなたがたはわたしの民となるであろう。」（レビ26：9—12）

主は弟子たちのもとを去るときに，彼らにこう約束された。

「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは，世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな。またおじけるな。」（ヨハネ14：27）

これほど多くの祝福が与えられているならば，いったいほかに何を求めようというのだろうか。ここに述べたすべての祝福とまだほかのさまざまな祝福は，喜んで戒めに従い，誠実に徳高く生活するすべての人に与えられる。

私は，神が私たちに条件つきでこれらの約束とその他多くの良いものを与えて下さったと証する。神は御自分の真実の教会を地上に設立された。この教会こそ，その神の教会である。神は私たちを完全な者にまで引き上げるために完璧な計画を立てて下さり，私たちを導くために予言者を授けて下さった。現在，ハロルド・B・リー大管長が主の王国の指導者，この民の指導者であり，神の予言者である。私はそのことを知っている。以上のことを，イエス・キリストのみ名により厳粛に証申し上げる。アーメン。

感謝を神に捧げん

十二使徒評議員会会員

ゴードン・B・ヒンクレー

賜豊かで霊感にあふれた34人の話し手がこれまでに話をされたが，リー大管長が最後の説教と祝福を話される前に少しの時間をいただく私は，この秋日に木に一葉をとり残された葉っぱのような心境である。リー大管長のすぐ前に話す経験は初めてではない。最近もその特権を何回となくいただいた。私はそのたびごとに，大試合に臨む新人チームのように感じてきた。

しかし，この経験は私の証しを増す大きな機会であると思う。私は神聖なテーマについて話すに際して，聖霊の導きを謙遜に求めるものである。

「感謝を神に捧げん，予言者の導き」，このすばらしい讃美歌は1世紀以上にわたって大会で歌い継がれ，今大会でも歌われた。それは私たち独特の歌である。私たちは他の教会の歌を何曲か歌い，他の教会も私たちの歌を歌う。しかし，「感謝を神に捧げん，予言者の導き。末日に福音を……」と歌うことのできるのは私たちだけである。

この曲は今から1世紀余り昔に，英国シェフィールドに住む貧しい境遇の一男性が書いたものである。彼は製鉄工場で働いていたが，モルモン教会に入ったために解雇された。しかし彼の胸には熱い証が燃えていた。彼はあふれ出る感謝に筆を取り，このすばらしい歌詞をしたためたのである。その言葉は世界数百万の人々の感謝の歌となった。私は，この歌が神よりの啓示を感謝する敬虔な祈りとして歌われるのを21カ国語で聞いてきた。

兄弟姉妹たち，私たちはこの混迷した困難な時代を歩むときに，神よりの知恵の言葉をもって私たちに勧告する予言者の存在をいかに感謝すべきであろうか。またいかに感謝していることであろうか。私たちが心に抱く確信，神が認めておられるしもべの口を通して民にみこころを知らされるという確信は，私たちの信仰と行動の本当の基礎である。私たちには予言者があるか，さもなくば無である。私たちには予言者があってこそ，すべてがある。

12年前，私は責任を受けて香港から来た伝道部長に同行し，フィリピンの伝道を開始した。1961年4月28日に初めての集会が開かれたが，それは出席した私たちにとって決して忘れられないものとなった。そのとき集会を行うホールはなかった。それでアメリカ大使館に交渉し，マニラ近郊フォート・マッキンレーの米軍基地内大理石造りの記念館の美しいポーチを借りる許可を得た。集会は朝の6時半に始まった。悲劇の戦争を記念する神聖な場所で，平和の福音を教える業が始まったのである。

私たちはたったひとりだけ捜しあてることのできたフィリピン人教会員の家を訪ねたのだが，彼は忘れることのできない印象的な話をしてくれた。

彼は少年のとき，ごみ箱の中にばらばらになりかけた古い「リーダーズ・ダイジェスト」が捨ててあるのを見つけた。そこにモルモンについての本の要約が載っていた。その本にはジョセフ・スミスのことが書いてあり，予言者と説明されていた。「予言者」という言葉は少年の心に強く響いた。この世の中に本当に予言者がいるものだろうかと，彼はあやしんだ。その雑誌はなくしたが，生ける予言者がいるという話は，暗く長い戦争の占領下にあるときも彼の心を去ることがなかった。やがて解放軍がやってきて，クラーク空軍基地が再開された。デビッド・ラグマンという名のそのフィリピン人は基地に就職した。彼は，自分の監督者となった空軍将校がモルモンであることを知った。彼は将校に予言者を信じているかどうか聞きたかった

が，こわいような気がした。しかし心の葛藤が続いた挙句に，ようやく尋ねる勇気が出た。

青年は聞いた。「あなたはモルモンでいらっしゃいますか。」「はい，そうですよ」という答えがすぐに返ってきた。「あなたは予言者を信じていますか。あなたの教会には予言者がいるのですか。」と，真剣な質問が続いた。

「はい，予言者がいます。生きた予言者です。私たちの教会を管理して，主のみこころを教える人なのですよ」

デビッドは将校にさらに詳しいことを教えてもらい，その後バプテスマを受けた。彼はフィリピンで最初に長老に聖任された人で，現在は北ルソン地方部の地方部長である。今や彼は地上に生ける予言者が存在することを身をもって知ったのである。

「私たちはたったひとりだけ捜しあてることのできたフィリピン人教会員の家を訪ねたのだが，彼は忘れることのできない印象的な話をしてくれた。」

自分たちに関心を寄せておられる神のみこころを伺い，それを私たちに教えてくれる人を長に持つこと以上に大きな祝福があるだろうか。私たちは「賢き者の知恵も滅し，慎しみ深き者の覚りも物の数ではない」ことを知るのに，世の中をあちこち捜し歩かなくてもよい。世の捜し求めるべき知恵は，神よりの知恵である。世を救う唯一の悟りは，神についての悟りである。

「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは，何事をもなされない。」（アモス3：7）

これはアモスの時代もどの時代も同じである。聖なる神の人々は聖霊に感じて語った。（IIペテロ1：21参照）それらの古代の予言者たちは来たるべきことを警告したばかりか，それよりも大事な，民に対する真理の啓示者となった。生活に平安を見いだし，幸福になるにはどう生きるべきかを教え示したのは，彼らであった。

ある青年のことが思い出される。彼はキリスト教徒としていろいろな教会をめぐり歩いたが，どこも予言者について教えてはいなかった。予言者たちをあがめるのはユダヤ人の間だけで，そのため彼はユダヤ教を信じた。

1964年の夏，彼はニューヨーク市へ行き，そこでモルモン・パビリオンに入り，旧約聖書の予言者たちの絵を見た。エホバのみこころを啓示した昔の偉大な人々について宣教師が感謝をこめて話すのを聞くうちに，彼の胸は熱くなってきた。そしてパビリオンの先に進むと，近代の予言者たちについて，また予言者，聖見者，啓示を受ける者と言われるジョセフ・スミスについて説明があった。何かが彼の心を動かした。彼の霊は宣教師の証に答えた。彼はバプテスマを受けた。そして南米で伝道し，多くの改宗者を得た。家に帰ってからは，家族や他の人々を教会に導く器となっている。ジョセフ・スミスが実に神の予言者であり，彼に続く予言者たちもその神聖で高貴な責任の正当な継承者であると彼が証するのを聞くと，私の心は温かくなる。

偏見をはさまずにジョセフ・スミスの話を読むならば，彼が来たるべきことの偉大な予言者であったことを，いったいだれが疑い得ようか。銃口が火を吹く13年近くも前に，彼は悲劇の南北戦争を予言し，それ以後地上のあらゆる国に戦争が起こることを述べた。この世代のあなたがたや私が，その驚くべき言葉が成就されたことの証人である。

彼はまた，当時イリノイ州に住んでいた教会員が，やがて追いたてられ，多くの艱難を経た末にロッキー山中で強大な民になると予言した。今，ソルトレーク・シティーのテンプルスクェア，大タバナクルに集まっている私たちは，このすばらしい予言者の言葉の成就した証拠である。

彼の継承者にしてもそうである。1849年の厳冬のある日，ソルトレーク盆地の先駆者たちがセゴユリの根とアザミの葉で飢えをしのいでいるとき，カリフォルニアで金が発掘された。そのときブリガム・ヤングは，この地の窮乏状態を脱して将来があるカリフォルニアへ行こうと考えた人々に向かい，この場所で古ぼけた演壇に立ち，予言の言葉を告げた。その中で彼はこう言っている。

「私たちはナベの中から火の中へ，火の中から乾ききった床の真ん中へ追い立てられてきた。私たちは今ここにいる。そして将来もここに留まる。……

私たちはこの地に，至高者に捧げる神殿と町を建設する。私たちは開拓地を西に東に広げ，多くの町々を建て，世界各国から幾千の聖徒たちが集まるであろう。

ここは各国の大路となるであろう。王や皇帝，世の貴人，賢人がここに私たちを訪れるであろう。……」

この地にある訪問者センターに立ち，毎年何十万，何百万の人々がここを訪れるのを見れば，ブリガム・ヤングが予言者として語ったことに，何の疑いが持てるであろうか。ここ何年も，要人が列をなして大管長会事務室に足を運び，私たちが教会の大管長，現在の予言者として支持する人との面会を求めている。そこには各国の政治，経済，教育，法曹の指導者の姿が見られる。彼らは，教会員がのけ者にされ，山間の荒野で孤立していた時代にブリガム・ヤングが「世の貴人，賢人」と語った人々である。

私は2週間前にサンフランシスコからオーストラリアのシドニーまで

飛行機に乗った。その機上で，近くの席にすわった青年が「アメリカの予言者ジョセフ・スミス」という本を読んでいるのに気がついた。私はこれ幸いと彼に話しかけた。自分もその本を読んだこと，著者を知っていることを話してから，どんな関心があるのか尋ねてみた。彼はいろいろと答えてくれたが，なかでも予言者に関心があり，現在も予言者がいるという点に興味をそそられたという。図書館でその本を見つけたとのことであった。ふたりで長々と話をしたなかで，私はジョセフ・スミスが本当に予言者であったと証した。ジョセフ・スミスは来たるべきことを語った。しかしそれより大事なのは，彼が永遠の真理の啓示者，主イエス・キリストの神聖な使命の証人であったことである。私は，あの青年が研究を続け，やがて心にこれと同じ証を持つようになることを願っている。きっとそうなると確信している。

兄弟姉妹たち，私はジョセフ・スミスが予言者として全能者のみ手に使われてこの業を回復したことと同時に，彼に続いた人たちのことを深く感謝している。彼らの生涯を研究すれば，主がいかにして彼らを選び，永遠の目的にかなうように練り鍛えられたかがわかる。ジョセフ・スミスはあるときこう語った。「私たちは高山から転げ落ちるごつごつした巨大な石のようだ。……地獄が総力をあげてこっちの角あっちの角と砕きけずり，そうして私たちは全能者の矢筒の中のなめらかに研かれた矢になるのだ。」

彼は憎まれ，迫害された。追いたてられ，投獄された。ののしられ，打ち叩かれた。彼の生涯を知れば，彼自身が語った変遷の跡が歴然とする。一生の間に力は増し加えられた。鍛練された。自分の命よりも他人を愛する愛が養われた。荒削りの石の角がけずり取られて，彼は全能者のみ手の中の研かれた矢となったのである。

ジョセフ・スミスのあとを継いだ人々にしても同じである。長年の献身の間に，彼らは鍛えられ，選り分けられ，試されて，全能者の目的にかなうように作り上げられたのである。ブリガム・ヤング，ウイルフォード・ウッドラフ，ジョセフ・*F*・スミスらの生涯を読めば，だれがそれを疑い得ようか。主は彼らの心を和らげ，性質を練って，のちに彼らに負わせたもう大いなる神聖な責任の備えをさせられたのである。それは，愛する指導者，現在の大管長ハロルド・B・リーについても同様である。ここで大管長について一言するのを許していただきたい。他意はないつもりである。リー大管長をこれまでの幾分なりとも知る人ならば，その同じ影響が彼にも働いているのを否定できないであろう。彼は，今でいえば貧困とされる境遇から身を起こした人である。彼は肉体労働の意義を，じかに経験して知っている。宣教師となり，訪ねた大半の家で拒まれた経験を持っている。苦学をし，大病をわずらって生死の境をさまよったことがある。また，悲しみの暗く深い谷間を歩いたこともある。生涯をかえりみれば，すべてがあの通り，他人の苦労と苦悩と悲嘆をさらに理解できるようにとの鍛練の道程にほかならないのである。しかし，それと共に，そこには接するすべての人を，不幸や悲嘆にもめげずにより高い次元に引き上げるたくましい気力があった。

私は最近，リー大管長の後輩同僚としてヨーロッパと英国の伝道部をめぐってきたが，青年たちは大管長に強い感銘を受け，目に涙をたたえ，顔に美しいほほえみを浮かべて大管長を見つめていた。彼が聖典から救い主のように「権威ある者として」語るとき，宣教師たちは心を奪われた様子ですわっていた。子供たちは，聖餐の聖なる真理を教えようと子供の言葉で語る彼の話に，身じろぎもせず聞き入っていた。彼が祝福を与えるとき，年老いた男女は泣いていた。

たくましい青年が大管長を双手に抱いて，そのあと目をうるませながら「こんなに天国に近い気持を味わったことはありません」と言っていたが，まれに見る感動的な光景であった。

私はみたまの証を受けた者として，彼の予言者の召しを証し，地上数百万の民と声を合わせて「感謝を神に捧げん。予言者の導き。末日に……」と歌うのである。私は感謝している。主のみこころを行なうときにこの民にもたらされる平和と進歩と繁栄に満足している。そのみこころは，この大会を閉じるにあたってこれから私たちに語ろうとする主の予言者から告げ知らされるからである。私たちがもしも彼の勧告を守らないならば，彼の聖なる召しを否むことになる。しかし彼の勧告に従うならば，神から祝福されるであろう。

汝がために祈る，愛する予言者よ
慰めと力とをたもうよう
しわ刻まれる歳月に
内なる光，今のごと輝きいでんことを

(英文讃美歌386番)

神は生きておられ，永遠の真理を啓示される。イエス・キリストは私たちの救い主であり，この教会の頭である。地上には予言者がいる。私たちを教える聖見者，啓示を受ける者である。その教えに従うよう，神が私たちの心に信仰と修養とを与えたもうことを，へりくだって祈るしだいである。イエス・キリストのみ名により，アーメン。

閉会説教

大管長

ハロルド・B・リー

主が能弁を恵みたもうなら，2，3，のことをお話したいと思う。教会員は世界各地にいるが，現在気がかりな土地のひとつが戦火のただなかにあるイスラエルである。戦争の規模については詳しいことがわからないが，エジプトとシリアがイスラエルに進軍していると聞く。

イスラエルにはBYUの学生がおり，エルサレムには教会の支部がある。両親たちは心配しながら経過を見守っているが，教会員は全員無事に保護されているという知らせがあった。群れには羊飼いがついている。私たちもともに引き続き全員の無事を祈ろう。南米のチリにも動乱があった。チリには大勢の教会員と2百名ほどの宣教師がいる。そこからもサンチャゴから帰国した管理役員を介して，知らされる限り教会員に死者はないという知らせを受けた。教会員は動乱に組せず，イエス・キリストの真の教会員にふさわしく毅然として立ち，指揮者に忠実に，機に乗ずることをせず，権威を持つ政府に従っている。

私たちは世界各地の聖徒のためを，彼らが堅く立って揺るがぬようにと祈っている。しかし，最大の敵は私たち自身の中にもいる。それは救い主の嘆きでもあった。救い主は御自身で霊感によって十二使徒に選んだ，その選ばれたひとりによって，口づけとささやかな銀貨をひきかえに敵の手に引き渡されたのである。横で見ていたユダは事の重大さを悟り，その場を逃れ出て自らの命を絶った。イエスは，ユダをさして十二使徒のひとり，彼に悪霊が入ったと言われただけである。

ひるがえって現代に同じようなことがあり，過去には教師や指導者として尊敬されていた人が道をはずれるのを見るとき，私たちの心は痛む。しかし，救い主と同じに，ただ「彼らはサタンに迷ったに違いない」と言うしかないときがある。

数年前，予言者ジョセフ・スミスについて下品な手紙を送ってきた女性があった。(それについては当時の大会で話された。) その後すぐ，私は路上で会った人たちから，先日の総大会に予言とみなされる啓示や言葉があったかどうか尋ねられた。私はこう言った。「ジョージ・アルバート・スミス大管長の閉会説教を聞きませんでしたか。聞いていれば予言者の言葉も聞いたはずです。お教えしましょう。」たまたま書類入れに切り抜きを持っていたのだが，ジョージ・アルバート・スミス大管長の話はこういうことであった。

「大勢の人がジョセフ・スミスをざん言するが，彼らは母なる地球が残る間にも忘れ去られ，汚名がいつまでもまとわりつく。しかるにジョセフ・スミスに示され，その名に添えられる栄誉と威厳と神への忠誠とは，決して消えないのである。」

これほどたしかな言葉はない。あの女性は，主のみわざを破ろうとするすべてのものと行く先を同じくしてざせつした。

道をはずれた人の中には，時おり新聞雑誌に投稿する者がいる。彼らは自分の家名を汚す者であり，代々かちえてきた名誉を踏みにじる者であり，主のみわざの敵対勢力に加担する者である。私たちは彼らに，ジョージ・アルバート・スミス大管長の言葉をそのまま，「彼らは母なる地球が残る間にも忘れ去られ，汚名がいつまでもまとわりつく。しかるに教会指導者に示され，その名に添えられる栄誉と威厳と神への忠誠とは決して消えない」と言うのである。

私は主のみわざを崩そうとする者たちの言葉を聞くときに，いつも主のこのみ言葉を思い出す。

「この故に汝らの敵に公にも私にも，

共に立合うよう呼びかけよ。……

されば汝らの敵をして，主に対して強く抗弁せしめよ。

誠に主汝らにかくの如く告ぐ，汝らに刃向う刃は栄ゆることなからん。

もし何人にても声を挙げて汝らに逆らう者あらば，わが時節至りて言い破られん。

この故にわが誡命を守るべし。……」（教義と聖約71：7-11）

主が言われんとしておられることは，私たちが戒めを守るならば，敵をご自分に引き受けるということである。だから，あなたがた至高なる神の聖徒たちはこのことが起きたら，そういうことは必ずある。予言されているからである。そのときには，ただこう言うのである。

「主のみわざにはむかう刃は栄えることがない。主のみ手になるこのみわざのすべての栄光と威厳とは，教会の名とそこに連なる人々の名を辱めようと企てる人々が忘れ去られ，その企ても続いて潰えたのちに末長く覚えられる。」

私たちはそのようなことを見るときに，気の毒だと思う。

さて，ここでもうひとつお話したいことがある。この大会には，さまざまな問題を心に秘めながら，悩みの答えを求め，こういうことはどうしたらよいか，あのようなときには何ができるか，その解決法を知ろうとやってきた人々が大勢いる。私たちは彼らの問題を聞いて，主が啓示の序文に言われた言葉を思い出すのである。

「その時主の腕現われて，主の声もまた主の僕らの声も聞かんとせず，予言者にして使徒なる者たちの言にも耳傾けんとせざる者のその民の中より絶たるべき日来るなり。」そしてさらに，主はこう言っておられる。

「主，われ言いたることは，われ言いたるなり。われ言い逃れせず。天地は過ぎ行くとも，わが言は過ぎ行くことなくして成就すべし。わが声にて言わるるも，僕らの声にて言わるるもみな一つなり。」（教義と聖約1：14，38）

主はまた別の啓示の中で，現代の聖徒たちの心すべきことを次のように告げておられる。あなたは，今自分がどうすることが主のみ旨であるかを聞くのに，どこへ行くだろうか。主はここでもこう宣言された。

「すなわち，また聖霊によりて感ずるままに語るべきことは彼らに対する範例なり。

およそ聖霊に感じたる時語るところはことごとく聖典の言となり，主の意となり，主の精神となり，主の言となり，主の声となり，世を救いに導く神の能力となるべし。」（教義と聖約68：3-4）

主はこの教会を組織してまもなく，十二使徒たちにあることを語られたが，ここで主のみ言葉から一，二の結論を引き出す前に，そのことをぜひ心に留めていただきたいと思う。ここで主は，当時まで教義と聖約に編集されていた啓示について語っておられる。

まず，モルモン経についての予言者ジョセフ・スミスの言葉を引用してみたい。「私は兄弟たちにこう語った。モルモン経は地上で最も正確な書物であり，私たちの宗教のかなめ石であって，人がその教えに従って最も神に近づくことのできる書物である。」（*Documentary History of the Church*「教会歴史記録」第4巻，p. 461）彼はまたこのようにも語っている。「モルモン経と啓示がなかったら，私たちの持つものは無であろう。」（「教会歴史記録」第2巻，p. 52）

現代に神の王国である教会が依って立つ基は，モルモン経と啓示であり，そのため主はその啓示についてこう言われた。教義と聖約の18章である。

「われ今汝ら『十二人』に告ぐ，見よわが恵みは汝らに充ち満ちたり。わが前に正しき道を履りみて罪を犯すことなかれ。

汝らの主，汝らの神なるイエス・キリストなるわれこれを語れり。

これらの言（啓示をさす。）は世の人々より出でしにもあらずまた人間の言にもあらず，われより出でし言なり。この故に汝らはこの言がわれより出でし言にして，人間より出でしにあらざることを証すべし。

この言を汝らに語れるはわが声なり。そはわが『みたま』によりて汝らに与えられ，わが能力によりて互いにこれを読むを得るなり。されどもしわが能力によらざれば，汝らこれを有つこと能わざらん。」（教義と聖約18：31，33-35）

そしてさらにこう言われた。「これを以って，汝らわが声を聞きわが言を知るを証する（この壇上に立って啓示を読むことを言う。）を得べし。」（教義と聖約18：36）すでに引用したように，「わが声にて言わるるも，僕らの声にて言わるるもみな一つなり」（教義と聖約1：38）と言われる通りである。

そこであなたがた末日聖徒は，大会のこの3日間にほとんどの問題や悩みについてこの上ない霊感の言葉を聞いたことと思う。聖徒たちに主が知ってほしいと思っておられる事柄が何であるかを知り，以後半年間の導きを得たいと思うならば，大会の説教録を1部入手することである。そうすれば，聖徒たちに関する最新の主のみ言葉がわかる。それはまた，教会員ではなくとも，語られたことが「主の意となり，主の精神となり，主の言となり，主の声となり，世を救いに導く神の能力となる」（教義と聖約68：4参照）ことを信ずるすべての人に関するみ言葉でもある。

ところで，非常に大胆な宣言であると思うのだが，宇宙の創造について主が言われた大いなる啓示が心に浮かぶ。教義と聖約の88章に載っている言葉である。

「地はその道をかけり，日輪は昼間その光を与え，月輪は夜その光を与え，諸星もまた夜にその光を与え，みな神の能力の中にその光栄を顕してかけり行く。

汝らの理解せんがためにわれこれらの王国を何に譬えんか。

そもそも，これらは皆王国なれば，その何れにてもまた如何に小さきものにても，見たる人は皆みいつ堂々と進む神を見たるなり。」（教義と聖約88：45-47）

これと同じように，私も申し上げたい。共に現代世界各国の諸事に働く主のみ手を見るとき，私たちは予言者たちや救い主ご自身が予言された時のしるしを見，現代に私たちの眼前で起きている事々の何であるかを知るのである。教会では劇的な数々のことを目のあたりに見て，私はこれが現代の主の民の必要に即して主が啓示しておられることだと証することができる。

今引用した啓示の主のみ言葉を言い換えてみたい。「その出来事の何れにてもまた如何に小さきことにても，見たる人は皆みいつ堂々と進む神を見たるなり。」私たちはそれについて間違わないようにしようではないか。

そのほかに，あなたがたはどこから導きが受けられるだろうか。現代世界のどこに安全が存在するだろうか。安全は戦車や銃や戦闘機や原子爆弾で得られはしない。安全が存するのはただ一カ所，そのために定められた系統を通じて語られるとおりに，戒めを守り，み声に聞き従った人々に全能の神が与えられる，全能者の力でおおわれた領域がそれである。

主はまた再び来ると弟子たちに話されたとき，弟子たちに答えた中で大事な事を幾つか説明された。弟子たちは，「どうぞお話しください。いつ，そんなことが起るのでしょうか。世の終りや悪人たちが滅びるときにはどんな前兆がありますか」（マタイ24：3参照）と尋ねたが，この質問の中で「世の終り」ということがどういうことかご存知であろう。

主はこの質問に対してマタイ伝24章に記されていることを答えられたのだが，もっとはっきり理解できるように，高価なる真珠にある霊感訳から引用してみたい。主は，いちじくの木が「その枝なお柔かにして葉めぐめば汝ら夏の近きを知る」（ジョセフ・スミス1：38）と言われた。

そして，再降臨がまさに門口近くにあることを知るしるしを幾つか語られた。ユダヤ人とエルサレムの住民の上には大きな苦難があり，「イスラエルの王国の始めより今に至るまで嘗てかかるなやみのイスラエルに神より遣わされしことなし。否，この後にもまたイスラエルに遣わさるることあらじ。」（ジョセフ・スミス1：18）

「もしその日少くせられずば，かれらは一人だに救わるることなからん。されど選民のため，誓約に従いてその日少くせらるべし。

見よ，ユダヤ人につき，われ汝らにこれらのことを言えり。またエルサレムにおそい来らんとするこれらの日のなやみの後，もし人ありて汝らに『見よ，キリストここにあり』或いは『かしこにあり』と言うとも信ずるなかれ。

その時また偽キリスト，偽予言者起りて大いなる徴と不思議とを現わし，為し得べくんば，誓約によりて選民たる真の選民（この教会員をさす。）をも騙さんとするなり。

されば，人もし汝らに『見よ，彼は荒野にあり』と言うとも出で行くな。『見よ，彼はひそかなる部屋にあり』と言うとも信ずるな。

暁の光束よりさし出でて西の方まで輝きわたり全地をおおう如くにまた『人の子』も来るべし。」（ジョセフ・スミス1：20-22，25-26）

ここで，主は起こるべき戦争について語られた。「……民は民に国は国に逆らいて立ち，また飢饉，疫病，地震ところどころにあらんためなり。

また，不法多くなるが故に多くの者の愛ひややかにならん。されど，打ち勝たれざる者は救わるべし。

また王国のこの福音は，すべての国民に証をなさんため全世界に宣べ伝えられん。而して後に，終りすなわち悪しき者の滅亡は至るべし。

これらの日のなやみの後，直ちに日は暗く月は光を放たず星は空より落ち天の力震動すべし。

誠にわれ汝らに告ぐ，これらのことのゆくさき示さるる世は，その過ぎ行く前にわが汝らに語りしことごとく成就すべし。

されど，その日その時を知る者なし。天にある神の使たちも知らず，ただわが父のみ知りたもう。

されど，ノアの時にありし如く『人の子』の来る時にもまた然あるべし。

洪水の前の時にありし如く，彼らにも然あるべし。ノアの箱舟に入る日までは，人々飲み食い，めとり嫁ぎなどし，

洪水の来りて彼らをことごとく取り去るまでは知らざりければなり。人の子の来るも然あるべし。

そのとき録されたることは成就すべし。すなわち終りの日に二人畑に居らんに，一人は取られ他の一人は残さるべし。

二人臼ひき居らんに，一人は取られ他の一人は残さるべし。

われ一人に語るは，すべての者に

語るなり。されば，目を覚し居れ，汝らは汝らの主の来るは何れの時なるかを知らざればなり。」（ジョセフ・スミス1：29-31，33-34，40-46）

兄弟姉妹，これが主の告げておられる日である。あなたがたはそのしるしを今ここに見ている。だから，備えなさい。

どのようにし備えるべきかは，兄弟たちがこの大会で話をした。これほどの直接な教え，これほどの勧告が告げられた大会は過去にない。問題がはっきりと示され，解決の道も提案された。

今や耳をそむけず，主に霊感を受けた主よりの言葉としてこれに聞き従おうではないか。そうすれば，主が子らのために取っておかれるすべてのことが成就する日に至るまで，私たちはシオンの山上に守られるであろう。大会の閉会にあたり，私はかつてない感動を覚えている。主が近くにいて私たちを導いておられるというこの確心がもしもなかったならば，私は荷の重さに耐えられなかったであろうが，主はたしかにおられて私たちの声を聞き，私たちが聞く耳を持ちさえすれば共にいて助けて下さることを私は知っている。

私はタナー副管長，ロムニー副管長，十二使徒および教会幹部に強力な面々をいただいていることをありがたいと思う。彼らは今まで経験しなかったほどに固く一致している。教会幹部はひとつになって働き，声をひとつに合わせて世に語っている。

彼ら兄弟たちのあとに従い，その声に耳を傾けなさい。私はゴードン・ヒンクレー兄弟が語ったように，主からこの場に遣わされた者として自分の証を述べたい。私はこれまで幾つかの試練を乗り越えてこられたことを主に感謝しているが，おそらくこれからも，主のみ旨をすべて行なうまで鍛練されるには今まで以上の試みにあわねばならないことと思う。

ときには霊界と現世とを隔てる幕が非常に薄くなって，少し動きさえしたら霊界をかいまみることができそうに思ったことが一度ならずあった。私は，ことさら主が与えて下さる以上のことを願ったりせずに待っているが，主はたしかに天におられる。

私はすばらしい聖徒たちに祝福を授ける。教会幹部の愛を，各自の家庭に，教会員に，携え帰っていただきたい。私たちは教会員でない人々にも友好の手をさしのべる。また行くべき方向を見失った人々にもさしのべる手が届いて，遅すぎないうちに彼らがこの群れに戻るようにと願っている。彼らもみな神の子供で，神は全員を救うようにと望んでおられるからである。

平安があなたがたにあるように。国法のもたらす平安ではない，世のすべてのものに打ち勝ってこそ得られると救い主が言われたその平安である。そのことを知っていただきたい。また，このわざが主のみわざであり，主が福音のあらゆる神権時代同様に今も私たちを導いておられるということを，私がみじんの疑いもなく知っていることをわかっていただきたい。これらのことを，真心からへりくだり，主イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

目　次

第144回
年次総大会
1974
4. 5−7

時の動き

1973

10.23　ノーベル物理学賞に江崎玲於奈氏に決定。

11.2　ペーパーパニックによる品不足，便上値上げに通産省が次官談話発表。

11.5　アラブ産油10カ国，石油戦略強化を決定

12.7　石油危機などに伴う買占め，売り惜しみ，狂乱物価などに対処するために生活安定法案を閣議決定。

12.26　ハロルド・B・リー大管長逝去。

12.30　スペンサー・W・キンボールが第12代大管長として召される。

1974

2.　パレスチナゲリラ，クウェートの日本大使館を占拠。

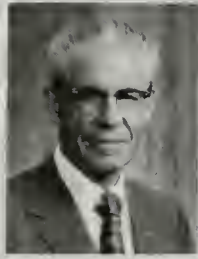
2.13　ノーベル賞作家ソルジェニツイン氏，ソ連国外へ追放さる。

3.3　パリで史上最大の航空機事故。トルコ航空機エアバスの乗員乗客345人（日本人49）全員死亡。

3.10　フィリッピンのルバング島で小野田元小尉，救出さる。

3.18　インドの食料暴動深刻化。死者100人を越す。全州ゼネスト。

4.5—　第144回年次総大会。新大管長会が支持さる。L・トム・ペリーが十二使徒に，J・トーマス・ファイアンズ，ニールA・マックスウェルが十二使徒補助に支持さる。

大管長会

第一副管長
N・エルドン・タナー

スペンサー・W・キンボール

第二副管長
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン

マーク・E・ピーターセン

デルバート・L・ステイプレー

リグランド・リチャーズ

ヒュー・B・ブラウン

ハワード・W・ハンター

ゴードン・B・ヒンクレー

トーマス・S・モンソン

ボイド・K・パッカー

マービン・J・アシュトン

ブルース・R・マッコンキー

L・トム・ペリー

大祝福師

エルドレッド・G・スミス

清く保ち，神のみ業を推し進める

大管長

スペンサー・W・キンボール

兄弟姉妹ならびに友人の皆さん，今年もまた主なる救い主イエス・キリストの生誕の月，4月が巡ってきた。私たちは4月6日にそれを祝っており，今年もその週末には末日聖徒イエス・キリスト教会第144回年次総大会を開催している。過去3回の大会は指導者にハロルド・B・リー大管長を迎えていたが，今大会は姿を見ることができない。実に寂しいことである。リー大管長は多くの才能を持った力と勇気の人であり，ひと筋に主の教えに従う人であった。

そんな彼を私たちが失ったのは12月26日だった。彼は難攻不落の山にそびえる巨大な峰であった。永遠の時の流れの中で偉大な足跡を残した人だった。

ジョー・M・ショー姉妹が追悼の詩を書かれたが，私はそれを持って，謙遜に真心から，ハロルド・B・リー大管長への私たちの愛を表明したいと思う。同時にここに，リー姉妹の同席を得らたことを感謝する次第である。

神の予言者ハロルド・B・リー大管長に寄せて

予言者すでに逝き，神の聖徒ら
墓に立ちて悲しむ。
我ら泣き，天は泣き，
涙冬の芝土にしたたる。
生きかつ死に，この言葉の
価を知らざる者あり。
かの人主の予言者たるを
知らぬがため。
遠国に住み，声聞かず，
面を見ず，触れしことなき者の
かの人に慰めを受くる者あり。
かの人のやさしき慈愛を知る者あり。
予言者の胸中近くに住み，
ひざまずき，相祈る者あり。
気高き人とまみえ，
彼ら，かの人の愛の手を知る。
かの人を知りし我，かの名をほめたたう。
かの人を今知りし我。
我ら天とともに泣きし師走の
悲しき日は胸に久しく残るべし。

私たちは大管長の逝去を心から悲しむものである。しかし今となっては，残された私たちにはただ前進のみである。

記者会見では，例にもれず，「大管長，教会を指導する立場に立たれましたが，これからどうなさいますか」と尋ねられた。

私の答えはこうであった。十二使徒としての過去30年間，私は現在ある包括的で完全なプログラムの編成や方針の設定にわずかばかりにしか関与してこなかった。また，近い将来に大きな変更が加えられるとも思わない。ただ，既存のプログラムに幾つかに特に力を入れたいと望んでいる。今は，私たちの努力をさらに強化し，プログラムを強固なものとし，方針を再確認する時である。

私たちは，今最大の問題が教会の急速な発展にあることを認めている。教会員数の増加ぶりは著しく，ここ数年で倍増している。30年前は数十万人であったが，今は300万人を越える。1943年に私が初めてステーキ部を訪問する責任を受けたときは146であったステーキ部が，現在635ほどになっている。1943年には38の伝道部が，現在107である。当時海外にステーキ部はなかったが，今では70を数える。この空前の発展は喜びであるが，同時に非常なチャレンジでもある。もちろん数字は二の次である。まず大切なことは，すべての人が永遠の生命を得ることである。そこで1974年の一大チャレンジは，急増する教会員のユニットによく訓練された指導者を備えること，それらの教

会員たちがまわりの世界から自らを清く保てるように助けることである。そうするとき，私たちに関係ある幾つかの重要な事柄が再認識されるであろう。

ひとつは，私たちの社会に対する責任である。主はこの神権時代の取るべき立場を明らかにされた。予言者ジョセフ・スミスに与えた啓示の中で，主はこう言われた。「さて，われ誠にこの国の法律に就きて汝らに告ぐ……。立憲的にして，且つ権利と特権とを支持してかの自由の主義を擁護するこの国の法律は，すべての人類に属し且つわが前に正しとせらる。この故に主なるわれは，汝……がこの国の立憲的法律なるその法律の力となることを正しく認むるなり。」(教義と聖約98：4－6)

教会はその後，この啓示に呼応して次のような信仰箇条を発表した。「われらは，王，大統領，統治者，長官に従うべきを信じ，また法律を守り，敬い，支うべきを信ず。」(信仰箇条第12条)

1835年の総大会で，教会は満場一致で「ひろく政府および法律に関する所信の宣言」を採択した。その内容は次の通りである。「われらは信ず，すべて政府は政府の法律を施行せんがため，必然吏員および長官らを要す。而して，公平と正義とを以て法律を行う如き人物は，これを求めて共和国の場合ならば人民の投票により，他の場合にはまた主権者の意志によりて支持すべきなり。」(教義と聖約134：3)

1903年にジョセフ・F・スミス大管長は語った。「教会(として)は政治に関与しない。教会員個人個人が自分の意志で特定の政党に属するのである。……」(“*The Probable Cause*”『相当の根拠』「インプルーブメント・エラ」1903年6月号，p.626)

1951年の10月大会で，大管長はこのように述べている。

「私たちの一致を脅かすものは，熱狂的な政治論争から発展した見苦しい個人間の対立である。教会は公平，正義，自由を基礎とした良い政治と，役人の清廉潔白なこと，市民活動の義務を果たすことなどの諸原則を唱道する権利を有しながらも，個人の選択と参加の自由を何ら圧迫しない。……それに反した説明をする者は権威なく間違いを犯す者である。」(スチーブン・L・リチャーズ，*Conference Report*「大会報告」1951年10月，pp.114，115)

私たちは，政府と政治に関する現在の教会の立場を示すものとして，上記の声明を再確認するものである。さらに正義と平等に基づいて法律を適用する役人たちを選ぶ神聖な責任を果たすために，教会員は政党の集会に参加し，そこで影響を及ぼすようにしていただきたい。

すべての末日聖徒は，その国の法律を支持し，敬い，従うべきである。

教会の前例のない発展に伴う第2の問題は，世のことである。険しい山や深い谷，熱い砂漠や底知れぬ海ではなく，あまりにも多くの教会員が迎合するその生き方のことである。

「世と世にあるものとを，愛してはいけない。もし，世を愛する者があれば，父の愛は彼のうちにない。すべて世にあるもの，すなわち，肉の欲，目の欲，持ち物の誇は，父から出たものではなく，世から出たものである。」
(Iヨハネ2：15,16)

世は，私たちの生活を少しずつ侵食する。恐ろしいことである。多くの者にとって，世にありながら世のものとならないことは，何とむずかしく思われることか。

主はイザヤを通じて，こう言われる。

「わたしはその悪のために世を罰し，その不義のために悪い者を罰し，高ぶる者の誇をとどめ，あらぶる者の高慢を低くする。」(イザヤ13：11)

サタンは主を非常に高い山に連れて行き，「もしあなたが，ひれ伏してわたしを拝むなら，これらのものを皆あなたにあげましょう」(マタイ4：9)と約束した。

「これらのもの」とは邪悪のきわみ，悪徳の地，物質的な喜び，肉欲の誘惑であった。

昔，主は綿密な計画をされた末，こう宣言された。「見よ，これわが業にしてわが栄光，すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」(モーセ1：39)

さらに，「……かくして汝らすべてての罪より清められ，この世に於て永遠の生命の言を受け，来るべき世に於て永遠の生命，まことに不死不滅の栄光を受くるなり」(モーセ6：59)と。

肉の働きは数多い。それはパウロが述べた通りである。「……苦難の時代が来る。その時，人々は自分を愛する者，……無情な者，無節制な者……となるであろう。(IIテモテ3：1－3)「……すなわち，彼らの中の女は，その自然の関係を不自然なものに代え，男もまた同じように女との自然の関係を捨てて，互にその情欲の炎を燃やし，男は男に対して恥ずべきことをなし，……悪事をたくらむ者…となり，…」(ローマ1：26,27,30)盗む者，大酒飲み，奪う者となるであろう。

「不貞のやからよ。世を友とするのは，神への敵対であることを，知らないか。おおよそ世の友となろうと思う者は，自らを神の敵とするのである。」(ヤコブ4：4)

これが，私たちが世と呼んでいる醜い行ないの幾つかである。

主は十字架にかけられる直前にこう嘆願された。「わたしがお願いする

のは，彼らを世から取り去ることではなく，彼らを悪しき者から守って下さることであります。」（ヨハネ17：15）

これは私たちが常々捧げている祈りであり，教会員が正しい生活によって聖められることこそ，私たちが努力を傾けている点である。

パウロは上記の醜悪な罪の数々を「悪霊の教」と呼び，その張本人を「惑わす霊」と呼んだ（Ⅰテモテ4：1参照)。そのゆがんだ生活は今世紀も変わってはいない。むしろますますひどくなり，世間に許容され，広められ，悪化の一途をたどるばかりである。

私たちは世界各地の教会員に申し上げたい。「神に従いなさい。そうすれば，彼はあなたがたから逃げ去るであろう。」（ヤコブ4：7）

私たちの説教は，一面，再認識あるいは再確認の言葉かも知れない。私たち教会員に「聖地に立て」とはっきり申し上げたい。(教義と聖約45：32)

今日私たちが語っているのは新しい教義ではなく，創造のときからの教えである。

世の中の情勢や忍びよる悪の影に，ばく然とした不安感を抱く人があるかも知れない。しかし主は言われた。「……もし汝らに備えあらば怖るることなからん。」(教義と聖約38：30) そして，「わたしは平安をあなたがたに残して行く。……あなたがたは心を騒がせるな，またおじけるな」（ヨハネ14：27）と。

あなたがたは導きを求めてここに来られた。その指標を与えることが，指導者の務めである。兄弟たちが語るとき，あなたがたは主のみたまを感じるであろう。福音は私たちの生活に目的を与える。それは幸福への道である。

エライザ・R・スノー姉妹は，主についてこう詩(うた)った。

「光と生命の道をしめし，
主は神のもとへ導きます」
(末日聖徒讃美歌72番)

さて，家族は基礎となる組織である。私たちは天父の子である。天父が私たちを愛しておられるように。私たちは子孫に結ばれている。すべての徳はキリストの福音を織りなす糸である。

その光に照らされた道は，私たちを正常で清らかな男女交際へ導き，それはやがて完き権能を持つ神のしもべが永遠にふたりを結び固める，あの聖壇での清らかな結婚に至るのである。ヘブルの聖徒たちはこう教えられた。「すべての人は，結婚を重んずべきである。また寝床を汚してはならない。神は，不品行な者や姦淫をする者をさばかれる。」（ヘブル13：4）

そして，結婚を非難したり後回しにしたり禁止したりする人々を，パウロは責めた。結婚の責任を回避するのはおおむね利己的であったり，冷淡で自己中心的であったりという気持からである。結婚反対の主張をする者は多い。教会員ですら，結婚を延ばしたり，異議を唱える者がある。それらの「悪魔の教え」にあざむかれる人々のすべてに対して，私たちは正常な状態に立ち戻るよう勧告する。私たちは，あらゆる人が真の幸福の基として，正常な結婚を受け入れるようにと呼びかける。主は人間に，性を慰み物として与えられたのではない。もともと結婚は家族を前提としたものである。詩篇の作者は述べている。

「見よ，子供たちは神から賜わった嗣業であり，胎の実は報いの賜物である。壮年の時の子供は勇士の手にある矢のようだ。

矢の満ちた矢筒を持つ人はさいわいである。(詩篇127：3－5）

栄えある親となる機会を故意に拒否する者は，哀れむべきである。親であることの大きな喜びは，本来の満たされた生活に欠くことのできないものである。初めに神がこう命じておられることを，私たちは知っている。「生めよ，ふえよ，地に満ちよ，地を従わせよ。……」(創世1：28)

そしてこう記している。「神が造ったすべての物を見られたところ，それは，はなはだ良かった。……」(創世1：31)

この神権時代にはこう啓示されている。「そは，この処女たちはわが誡命によりその子孫の殖えて地を充さんため，また永遠の世に於て最高の栄に進み，かくして人々の霊を生まんがために彼に与えられたればなり。ここに於いてわが父の御業は絶ゆることなく，かくして御栄は父に在るなり。」(教義と聖約132：63)

私たちは家庭の崩壊が世に広がっていることを嘆いている。すべて夫は一生涯妻を愛し，いつくしみ，守り，妻は夫を愛し，敬い，支持すべきである。歴史家モーセは主のみ言葉を告げている。「それで人はその父と母を離れて，妻と結び合い，一体となるのである。」(創世2：24)

パウロは言う。「妻たる者よ。主に仕えるように自分の夫に仕えなさい。キリストが教会のかしらで……あられるように，夫は妻のかしらである。

夫たる者よ。キリストが教会を愛してそのためにご自身をささげられたように，妻を愛しなさい。

それと同じく，夫も自分の妻を，自分のからだのように愛さねばならない。自分の妻を愛する者は，自分自身を愛するのである。自分自身を憎んだ者は，いまだかつて，ひとりもいない。かえって，おのれを育て養うのが常である。」（エペソ

5 ：22, 23, 25, 28, 29)

これはよく，夫にも妻にも誤解されやすい聖句であるが，よくよく思いはかり天父のみこころに反しないようにしなさい。キリストが教会を導かれたように夫が家庭を導くとき，不満の声はほとんど聞かれないであろう。

あなたの知っている離婚を考えてみなさい。ほとんどの場合，そこに利己心が存在することを発見するであろう。

たいがい離婚は不当で，弱さとわがままから起き，当の本人たちが大きな不幸に見舞われるばかりか，かわいそうな子供たちの心を引き裂き，ぬぐいがたい打撃を与える。

汚れない子供たちが親の罪の結果を被るとき，親の利己心もそこにきわまる。離婚した人々は，いがみ合う家庭で育つより片親のもとで育てた方がよいと言うが，そのもっともらしい主張に対する答えはこれである。いがみ合う家庭に争う親は不要である，と。

たくさんの離婚事例を調べた人があり，そのほとんどがわがままに起因することを発見した。できるだけたくさん取って，できるだけ少なく与えようとする態度である。調査では，当事者の90パーセントほどが離婚事由に双方または片方の不貞をあげていた。

不貞はまったくのわがままである。その罪に，他を思う心がたとえ一片でも見いだせるだろうか。従って，善良な夫婦がもしわがままを捨てるならば，一致もできるであろう。

再度申し上げるが，増加しつつある堕胎は，罪悪である。計画的堕胎の恐ろしい罪は正当化しがたい。外聞を恐れて面子のためとか，不都合を処理する，責任を逃れるなどのために堕胎を行なうことは，もってのほかである。そのような手術をどうして甘受できようか。また経済的に援助を与えたり，励ましたりどうしてできようか。特殊な場合に正しいとされることはあっても，それはごくまれである。私たちは堕胎を罪の中でも重いものとし，断固，民に警告するものである。

「堕胎は今日の最も忌まわしく，罪深い行為の一つである。なぜなら，この恐ろしい堕胎容認が，性的な不道徳をもたらしているからである。」(「神権会報」1973年２月，p.1)

幻覚剤については，「……教会は，幻覚剤および類似の薬物を常用すると，肉体的，精神的な欠損をきたしたり，道徳基準を低下させたりするので，誤用，悪用することに一貫して反対してきた。」私たちはこの宣言を再確認する。

サタンのたくらむ最も恐ろしい悪事のひとつとして，私たちは子供から老人までの全教会員に，肉体の誤用から来る束縛と苦痛と悔恨の縄目に甘んじることのないよう，声を大にして警告するものである。

人の体は神の霊の子供が宿る神聖な幕屋であり，不当な扱いや神聖を汚す行為は，ただ痛恨と後悔をもたらすのみである。従って，汚れなく，清くありなさい，と勧告したい。

ユダは言っている。「……終りの時に，あざける者たちがあらわれて，自分の不信心な欲のままに生活するであろう。」(ユダ18)

私たちはペテロと共に，「たましいに戦いをいどむ肉の欲を避けなさい」と勧める。(Ｉペテロ２：11) 見苦しい露出行為やポルノグラフィー，その他心と霊を汚す逸脱した行動を避けなさい。自分の体であれ人の体であれ，愛撫してはならない。正しい結婚関係による以外は性の交わりを避けなさい。これは私たちの造り主がいかなる場所，いかなる時にも禁じておられることであり私たちはそれを再確認する。結婚生活においてさえ，度を過ぎた行為やゆがんだ形が存在することもあろう。反することをしていくら正当化に努めても，天父の失望をとりなすことはできない。これに関して，有名な伝道者ビリー・グラハムの言葉を引用しよう。

「……聖書は神が造り，神が定め，神が祝福されたものとして性と性の正しい行使を公にしている。神御自らがふたつの理由で，両性に引き合う力を与えられたことは明白である。ひとつは人類の繁殖，ひとつは夫婦が真に一体となるための愛の表現である。神が人類最初の男女に『一体となれ』と命じられたことは，『生めよ，ふえよ』との戒め同様に重要であった。

聖書は，性に関する罪悪は，性に内在する何かいやしいものを利用することでなく，清く善であるものを悪用することを明白にしている。また，性はすばらしい従者になり得るばかりか，恐ろしい主人にもなり得ること，愛と友情と幸福を培うこの上ない原動力となり得るばかりか，世にある力のうち最も破壊的な力になり得ることを，はっきりと教えている。」(ビリー・グラハム“*What The Bible Says About Sex*”「性について聖書は言う」*Reader's Digest*「リーダーズ・ダイジェスト」1970年５月号〔英文〕)

私たちは，あらゆる形の不貞行為に対して，反対の立場をとることを再確認する。

教会員たちの母親たちは神聖な役割がある。以下の文は大管長会の声明の抜粋である。私たちはこれを再度強調するものである。

「このように，母親になることは神聖な召しである。主の計画を遂行するための神聖な献身の姿である。第一の位を保ち，『何にてもあれ，主なる彼らの神の命じたまわんすべての

ことを彼らが為すや否やを見ん』(アブラハム3：25) ために第二の位の地上へ送られる人々を，肉体，精神，霊ともに養い育てることへの献身である。彼らが第二の位を保つように導くことは母親の務めである。『第二の位を保つ者は，とこしえに栄光をその頭に附け加えられん。』(アブラハム3：26)

この母親の神聖なる務めは母親だけが出来るものであって，他のだれにも譲り渡せないものである。乳母も保育所も，子守りもだれもその代用をすることはできない。ただ母親だけが，父親や兄弟姉妹の愛の手に助けられて要求に応じた充分な世話ができるのである。

金銭のため，名声のため，あるいは社会奉仕のためとはいえ，ほかの仕事のために子供を他人の手に預ける母親は，『わがままにさせた子はその母に恥をもたらす』(箴言29：15) ことを，心に銘記するがよい。この時代の主は言われた。両親が子供に教会の教義を教えないならば，『罪その両親の頭に留るべし』と。(教義と聖約68：25)

母親の愛は神の愛に近いものである。それは人に課せられた最も気高く最も神聖な務めである。その聖なる召しを尊ぶ女性は，天使に次ぐ者である。あなたがたイスラエルの母よ，神はあなたがたを恵み，守り，勇気と力，信仰と知識，聖なる愛と義務への献身を与えたまい，あなたがた自らの聖なる召しを存分に果たさせたもう。母親ならびに未来の母親たちよ。純潔でいなさい。清さを保ちなさい。正しく生活しなさい。あとに続く子孫が最後の世代に至るまで，あなたを祝福された者と呼べるように。」(『大管長会メッセージ』*Deseret News*「デゼレト・ニューズ」1942年10月，p. 5)

これが私たちのプログラムである。今再び神のみ業を確認し清く，正直にまた大胆にそのみ業を押し進め神を敬う生活を必要としている世の人々にこの真理の福音を携えていこうではないか。

私たちの永遠の目標は生命である。それは，主が私たちに示して下さった道に従うことのみによって得られる。

それが真実で誤りのないことを私は知っている。私は天父を愛し，御子を愛し，弱い器ながら偉大な永遠のみ業を押し進めることができることを誇りに思う。これらのすべてを真心からへりくだり，イエス・キリストのみ名により証申し上げる。アーメン。

最後の時

十二使徒評議員会会員

ハワード・W・ハンター

今から2000年近く前，人類史上最も重要な週の最初の出来事が，ベタニヤで展開された。この地方での，3年間のつらい伝道を終えたナザレのイエスは，親しくしていたマリヤ，マルタ，ラザロの家を後にし，意を決してエルサレムの城門の方に歩いて行かれた。この古代の町の中に，イエスのことを神を冒瀆する者，悪霊にとりつかれた者，ユダヤの律法を犯す罪人と考えている人や，逆にイエスこそ予言者でありメシアであり，生ける神の子だと確信している人々もいた。こうした人々の考えに関係なく，ユダヤ人はすべて権威と権能をもって教えを説いておられた御方が，律法学者でもパリサイ人でもないことを知っていた。

「さて，ユダヤ人の過越の祭が近づいたので，多くの人々は身をきよめるために，祭の前に，地方からエルサレムへ上った。人々はイエスを捜し求め，宮の庭に立って互いに言った，『あなたがたはどう思うか。イエスはこの祭にこないのだろうか』。」（ヨハネ11：55,56）

ユダヤの法律は，この最も神聖な記念式典に，すべての成人男子の参列を義務づけていた。しかし議会の議員たちはイエスの死刑を公言していたので多くの人々は，まさかイエスが公衆の面前に姿を現わすとは思っていなかった。

イエスはどこにあっても，その身が危険にさらされていることを感じておられた。しかし，敢て過越の祭を祝いにエルサレムに上って来られたのである。しかも，華麗さや厳かさとはほど遠い，謙遜と平和の象徴である弱々しいロバに乗られて。

大勢の群衆は，イエスを歓迎するためにエルサレムを出て行き，シュロの木の枝を道に敷き，叫びつづけた。「ダビデの子に，ホサナ。主の御名によってきたる者に，祝福あれ。」（マタイ21：9）

マタイはその時の様子を次のように記している。「……町中がこぞって騒ぎ立ち，『これは，いったい，どなただろう』と言った。そこで群衆は『この人はガリラヤのナザレから出た預言者イエスである』と言った。」（マタイ21：10,11）

律法を知っていたすべての人々にとって，これこそ，昔から予言者が予言し，イスラエルの子孫が待ち焦がれていた，イスラエルの王の凱旋なのであった。群衆は歓喜し，口々に叫んだが，イエス御自身は黙っておられ，さながら王のようであった。

イエスは，天父がこよなく愛しておられたエルサレムに近づくと，涙を流して言われた。「いつかは，敵が周囲に塁を築き，おまえを取りかこんで，四方から押し迫り，おまえとその内にいる子らとを地に打ち倒し，城内の一つの石も他の石の上に残して置かない日が来るであろう。」（ルカ19：43,44）

イエス御自身も，身に差し迫った事態を感知しておられた。それは，実らすためには枯れなければならない穀物があることや，殺されると知っていながら，先に殺された父の僕の代りとして，ぶどう園に使わされた息子のたとえ話を語られたことからもわかる。そして，その重荷にくずれてしまいそうになられたこともしばしばあった。

「今わたしは心が騒いでいる。……父よ，この時からわたしをお救い下さい。しかし，わたしはこのために，この時に至ったのです。」（ヨハネ12：27）そのイエスを前進させたのは御父のみ旨を完うしようとする揺らぐことのないひたむきな決心であった。

主はその命が風前の灯と化したときでさえ，静かにこう言われたのであった。「わたしは光としてこの世に

きた。それは，わたしを信じる者が，やみのうちにとどまらないようになるためである。」（ヨハネ12：46）このような言葉は，結果として敵を結束させることとなったが，それでもなお続けて言われた。「わたしは自分から語ったのではなく，わたしをつかわされた父ご自身が，わたしの言うべきこと，語るべきことをお命じになったのである。」（ヨハネ12：49）

どうにかして言葉のわなにかけようとして，イエスに反対する人々の中で最も奸智にたけた者たちは，政治およびラビ法典に関する難問をふっかけた。パリサイ人，ヘロデ党からなるグループが，次のような悪意に満ちた質問をしたのである。「……先生，わたしたちはあなたが真実なかたであって，真理に基いて神の道を教え，……知っています。……答えて下さい。カイザルに税金を納めてよいでしょうか，いけないでしょうか。」（マタイ22：16，17）

もし肯定すれば，ローマの律法のもとにしいたげられていたアブラハムの子孫にあたる人々からその受け継ぎを放棄したかどで非難されることは必至であったし，また逆に否定すれば政治的な扇動者として，直ちに逮捕されたであろう。しかしイエスの答えは，そのどちらでもなく，ただ税として納める貨幣を詰問者たちの前にかざしながら，「これはだれの肖像，だれの記号か」と言われた。無論，その辺の子供でも一目瞭然に分かるものだった。「カイザルのです」と彼らは答えた。このような簡単な質問で，イエスはこのやり取りの指導権を握り，その貨幣を返しながら「……それでは，カイザルのものはカイザルに，……返しなさい」（マタイ22：20，21）と言われた。いわゆる「貨幣にその人の名と肖像が刻まれているなら，それは合法的に持主である彼に返してやるべきである」と言うことである。イエスはこのようにして敵の企てを見事にくつがえされたが，それは決してイエスの本来の使命ではなく，また望みとすることでもなかった。彼らもまたイエスの救いの対象となる人々であったからである。

イエスはたとえ彼らが敵意に満ちていようと，彼らを気づかい，愛された。彼らが立ち去ろうとしたとき，イエスはこう願って言われた。「神のものは神に返しなさい。」貨幣にカイザルの肖像が刻印されているように，彼らも含め，すべての人間には，天父なる神の肖像が刻印されているのである。人間は神にかたどって創造され，イエスは彼らが神のみもとに帰れるように道を備えられた。それにもかかわらず，「彼らはこれを聞いて驚嘆し，イエスを残して立ち去った。」（マタイ22：21，22）

それからしばらくして律法学者が，神学のことでイエスを罠にかけようとして言った。「先生，律法の中で，どのいましめがいちばん大切なのですか。」（マタイ22：36）律法学者たちは，モーセの律法の原典を細分化し，緻密なまでに分類し過ぎたために，かえってある部分は，正反対の意味になってしまっていた。しかしイエス御自身は，このような律法論争には，微塵もしばられることがなかった。救い主の次の一言は律法の核心を貫くものであり，再分化されたものをひとつの完全な形に総合するものであった。「『心をつくし，精神をつくし，思いをつくして，主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な，第一のいましめである。第二もこれと同様である，『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。」（マタイ22：37―39）

このようにしてイエスは，悪意，ねたみ，狡猾さに満ちた質問に，愛，哀れみ，高邁な理想の形でお答えになられたのであった。そしてこの地上での使命ももはや終りを告げようとしていたときにも，イエスは群衆の前を去り，弟子たちを励まされ，これから起ころうとすることに関して警告された。さらにエルサレムの崩壊のこと，さらに末の日の再降臨の前に起こる苦難や背教などについても話された。また長い間，遠方の国に行き，家を留守にしていた主人が帰って来て，りっぱな目的のために投資するようにと与えたそれぞれの能力や才能をどの程度伸ばしたか，しもべたちと一緒に数えあげてみるだろうという話もされた。そして羊飼いが羊を山から分けることについても話された。

羊飼いとは，飢えている者に食べさせ，渇いている者に飲ませ，裸でいる者に着せ，悩める者を思いやる人々のことである。イエスはまた婚宴の場に来ているおとめたちについても話された。花婿が来るのが延びたが，彼女たちの幾人かはあかりをともすに十分な油を持ってた。しかしほかのおとめたちは，油が底をつき，あかりが消えるのをただ眺めているだけであった。こうしてイエスは，弟子たちに目を覚まして祈れと教えられた。しかしこれは，寝る間も惜しんで願い求めよと言うことでもなければ未来のことだけに没頭せよと言うことでもない。むしろ，イエスは現在なすべきことに沈着かつ十分に心を配り，着々と進むことを望んでおられたのである。

さて犠牲の時が刻一刻と近づいていた頃，イエスは十二使徒と共に，だれにもわからない，静かなある二階の間に退かれた。

そこで主は，特別な証し人であるこの使徒たちが悪魔の誘惑に打ち勝つことができるようにと，上着を脱ぎ，手ぬぐいをとって腰に巻き，使徒たちの足を洗われた。この崇高な

愛と一致の行ないは，この後に続く過越の晩餐の前奏曲として全くふさわしいものであった。

この過越の晩餐は，パロがかたくなであったためにエジプト全土に広まった破壊の手から，信仰篤きイスラエルの子孫の長子たちが「過越させて」いただいたとき以来，象徴さらには儀式として，イスラエルの民の間で忠実に実行されて来た。過越というこの古代の御加護の誓約を実行している中で，平穏無事の象徴であり，御自身の体と血の象徴である聖餐をイエスが教えられたということは，何と時宜を得ていたことだろう。イエスは，パンを取り，それを裂き，また盃を取り，それを祝福した際，霊の糧と永遠の救いの道をもたらす神の子羊として，御自身を捧げられたのである。

新しい誓約は新しい戒めをもたらす。イエスは弟子たちに命じて言われた。「互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように，…それによって，あなたがたがわたしの弟子であることを，すべての者が認めるであろう。」(ヨハネ13：34—35)

この世での生涯がまさに終わろうとするときまで，イエスはその威厳に満ちた霊と偉大な力とを示された。イエスはこの時に至ってもなお，自らの悲しみに心を奪われたり，間もなく訪れようとしている苦難に思いをめぐらしたりはされなかった。ただ愛弟子たちの現在，また将来のことを案じておられたのである。平安というものは，個人にとっても教会にとっても，お互い無条件の愛のもとにのみ保たれるものである。イエスはそのことを承知しておられた。イエスの全精力は，彼らが必要としていること，すなわち今まで教えられていた訓戒を実際の模範を通して教えるということに注がれていたように思われる。そしてイエスは弟子たちに，慰めと戒め，そして警告の言葉を与えられた。

「あなたがたは，心を騒がせないがよい。……わたしの父の家には，すまいがたくさんある。……あなたがたのために，場所を用意しに行くのだから……わたしは道であり，真理であり，命である……。わたしの名によって願うことは，なんでもかなえてあげよう。……わたしは父にお願いしよう。そうすれば，父は別に助け主を送って，いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。……わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたのところに帰って来る。………あなたがたにわたしが命じることを行うならば，あなたがたはわたしの友である……これらのことを命じるのは，あなたがたが互に愛し合うためである。」ヨハネ14章，15章より)

最後の夜に数人を伴ってゲツセマネの園に近づいたイエスは，言語に絶するような大きな使命を前に気を強く持っていられるよう，御自身のために祈って欲しいと使徒たちに願うこともできたかも知れないが，それよりもイエスは彼らのために，彼らと同じように御自身に従われた人々のために祈られたのである。その場にい合わせ，その祈りを聞いたヨハネは次のように記している。

「……わたしがお願いするのは，彼らを世から取り去ることではなく，彼らを悪しき者から守って下さることであります………彼らも世のものではありません。………真理によって彼らを聖別して下さい。……わたしは彼らのためばかりではなく，彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも，お願いいたします。父よ，それは，あなたがわたしのうちにおられ，わたしがあなたのうちにいるように，みんなの者が一つとなるためであります。すなわち，彼らをもわたしたちのうちにおらせるためであり，それによって，あなたがわたしをおつかわしになったことを，世が信じるようになるためであります。」(ヨハネ17章)

本当に心うたれるこのとりなしの祈りを終え，イエスは肉体と霊の苦痛にひとり立ち向かうために進んで行かれた。主イエス・キリストの近代の十二使徒のひとりは次のように記している。

「ゲツセマネの園におけるキリストの苦悶は，その大きさにしても原因にしても，人間の心では計り知れないものがある。その苦悩の時に，イエスは……サタンが加えることのできるあらゆる恐怖に立ち向かい，これに打ち勝たれたのである。……人間には理解できないが，実在する非常に現実的なある方法によって，救い主はアダムからこの世の終りに至るまでの全人類の罪を御自身に引き受けたもうた。」(ジェームズ・E・タルメージ「基督イエス」p. 700)

イエスが無実のうち告訴され，不法に裁判され，処刑されるのはもはや時間の問題であった。しかしイエスは何人たりとも成し得なかったことを実行された。すなわち，墓から甦られたのである。墓は再び世の光と生命に満ち，イエスは父のみもとへと昇って行かれた。死に打ち勝ったナザレのイエスは，今や救い主イエスとなられたのである。

余りにもあわただしい現代の生活に比べると，イエスの生活はいかに単純明解であり，質素であった。イエスを取り巻いていたのは高慢な世の権力者ではなく，貧しい人々，賤しい人々，謙虚な人々であった。そしてその生活や複雑なものは何ひとつなかった。イエスの語られた言葉は，当時耳を傾けて聞くすべての人々に影響を及ぼすのである。

歴史は今，イエスの死を証明する

に足りる証拠を提供してくれる。私は，イエスの死を確信していると同様に，かつてこの世に生を受けた人々，またこれから受けようとする一人一人の「救い主」として，イエスが今も生きてましますことに対して，静かな，しかも強い確信を抱いている。今再び過越の週に入る時，生ける神の生ける御子，復活されたイエス・キリストのことに思いはせようではないか。イエスのみ名のもとに，心をひとつにし，互いに愛し合い，戒めを守るよう願うものである。イエス・キリストのみ名により，アーメン。

永遠に続く結婚

十二使徒評議員会会員

ゴードン・B・ヒンクレー

愛する兄弟姉妹，主のみわざのために日本の北から南まで何千キロをも，共に旅して歩いた友人の渡辺驥兄弟が捧げた開会の祈りを，私は感謝している。またブリガム・ヤング大学の神権者のコーラスを聞いて霊感された思いである。

彼らの声には，心を打つ美しい何かがある。聖なるみたまが私を導いて下さるならば，私の席の後方にすわる彼らにも，私の言葉を捧げたいと思う。そして同時に，全教会の若人たちに申し上げたい。

今この地は「若者の空想が愛の思いに向かう」(アルフレッド・ロード・テニスン「ロックスリーホール」) 春である。そしてこの4月は若者と乙女が6月の結婚を夢みるときである。

初めにふたつの経験を述べさせていただきたい。

ひとつは先頃，建造あらたなワシントン神殿での出来事である。その折りに，大勢の新聞記者がつめかけていた。他の教会の建物と概念や目的が違い，神聖な内部に入ることのできる人も異なっているこの美しい建物に，彼らは好奇心を抱いていた。

建物が主の宮居として奉献されてからは資格ある教会員しか中に入れないが，奉献しないうちは1カ月ないし1カ月半の間，内部全体をだれでも見学できること，また，私たちは神殿を世間の目から隠すつもりはないが，神殿が奉献されたあとは非常に神聖なものと考えるので，清い生活と教会の標準をきちんと守っている人しか神殿に入ることはできないと説明した。

私たちは神殿を建てる目的について話し，特に心ある男女ならだれでも関心があると思われる永遠の結婚について説明した。その時に，1958年ロンドン神殿公開日のある経験を思い返したものである。

その日，興味熱心な人々が何千人も建物に入るために長蛇の列を作っていた。交通整理にあたった警官が，英国人がこんなにして教会へ入りたがっているのを見るのは初めてだと語った。

建物の見学者は最後にまとめて質問をするようになっていた。私は夜だけ，宣教師と一緒になって質問者と話をした。ある若夫婦が神殿の正面階段を降りてきたとき，何かおわかりにならないことはありませんかと尋ねると，女性が率直に答えた。「ええ，ある部屋で『永遠の結婚』と，ガイドの方が説明していましたが，それはどういうことですか。」そこで，私たちは門の近くのかしの大木の下のベンチに腰かけた。指にはめられた結婚指輪で彼らは夫婦だとわかり，握り合った手は互いの愛情のほどを示していた。

「さて，先程の質問ですが，」と私は切り出した。「あなたがたは土地の教会で結婚されたのですね。」

「はい，ほんの3カ月程前です。」彼女は答えた。

「牧師さんが司式のとき，この世の別れについても述べられたのを覚えていますか。」

「どういうことでしょう。」彼女はすぐに聞き返してきた。

「あなたは命が永遠だと信じていますね。」

「はい，もちろんです。」と，彼女は答えた。

私は続けて言った。「永遠の愛なしに永遠の命が考えられますか。おふたりとも，互いに別れ別れになった永遠の幸福を想像できますか。」

すると即座に「いいえ」という答えが返ってきた。

「牧師さんはあなたがたの結婚式で何とおっしゃいましたか。はっきりと覚えていませんが，こういうことを言われたはずです。『病める時も健

康の時も，そして富めるときも，貧しいときも，良い日も，悪い日も，命のあらん限り』と。それが牧師さんの権能の及ぶ範囲なのです。つまり死がふたりをわかつまでです。もしあなたがたがその場で質問を投げかけたとしたら，死んでしまえば結婚も家族も存在しないと牧師さんははっきり言われたことでしょう。」

「しかし，私たちの御父は子供たちを愛し，子供たちに最善のものを与えるために，人間関係のうちで最も神聖で崇高な結婚と家族の関係が正しい情況のもとで続くようにはからって下さいました。

救い主と使徒たちの感動的な言葉のやりとりの中で，ペテロが『あなたこそ，生ける神の子キリストです』と言うと，主は『バルヨナ・シモン，あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは，血肉ではなく，天にいますわたしの父である』と答えられましたが，主はそれからペテロや弟子たちに向かって，こうおっしゃっています。『わたしは，あなたに天国のかぎを授けよう。そして，あなたが地上でつなぐことは，天でもつながれ，あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう』(マタイ16：13−19)

主がそのすばらしい権威をお与えになったとき，使徒たちは生死を越えて永遠に及ぶ力を持つ神聖な神権の鍵を受けたのです。これと同じ権能が，昔権能を持っていたペテロ，ヤコブ，ヨハネといった使徒たちによって，現在地上に回復されて存在しています。」そう話してから，今度の日曜日に神殿が奉献されたあと，この宮居で結婚しにやってくる人たちのために，それと同じ聖なる神権の鍵が使われると言った。その人たちは死によってもわかたれず時がたっても滅びない絆で結ばれるのである。

これがあのとき英国で，新夫婦に述べた私たちの証である。愛する若い友人たち，きょうあなたがたに告げる証もそれと同じであり，私は，世のすべての人々にも同じ証を告げるものである。天父はその子たちを愛し，子供たちが今も永遠にも幸福になるよう願っておられる。人間関係のうちで最も深い夫婦と親子の関係以外に，まさる幸せはどこにも見いだせない。

数日前，私はある大病の母親の臨終の枕元に呼ばれた。ほどなく彼女は，夫と4人の子供を残して亡くなった。下の子は6歳の男児だった。痛ましく，つらい，深い悲しみがその場をおおった。しかし彼らの涙の奥底から，美しい確かな信仰が輝き出ていた。今悲しい別離があると同じに，いつか必ずうれしい再会があるという信仰が。彼らの結婚は聖なる神権のもと，主の宮居で今も永世にも結び固められて出発したからである。

女性を真心から愛する男性，男性を真心から愛する女性であるならば，だれでも自分たちの愛が永遠に続くことを望み，夢みるものである。しかし結婚は権能によって結ばれる契約である。もしそれが国の権能であれば，効力は死によって終りとなる。しかし国の権能に，死を乗り越えた御方から恵みの力が加えられて，夫婦がもし契約を守ってふさわしく生活するならば，その関係は死後も続く。

私がはるかに若く，逞しい体をしていた頃，踊ったダンスにこんな歌があった。

愛はバラのようなもの
咲いて育って
そして枯れ
夏が過ぎると死んでしまう。

これはただの歌である。しかしこれは，互いに愛し合う男女が，時を越えて永遠の将来を見つめて幾世紀もの間抱き続けてきた疑問である。

そしてその疑問に対して私たちはそんなことはないと答える。啓示された主の計画のもとでは，愛と結婚は夏が過ぎれば枯れてしまうバラのようではないことを再度強調しておく。愛と結婚は，天の神が永遠であられるように，確かに永遠である。

しかし，何よりも尊いその賜は，自制や徳や神の戒めに対する従順といった代価を払ってのみ得られるのである。それはむずかしいかもしれないが，真理を理解すればそれだけの動機が生まれて，可能となる。

あるときブリガム・ヤングはこのように述べた。「我々の社会に，物事の本来あるべき姿を理解したならば，正しく結婚するためにはたとえここから英国まで旅をせよと言われてもそれをいとう青年はいない。また福音を愛し，福音の祝福を望みながら，別の方法で結婚するような女性は，我々の社会にはいない。」(*Discourses of Brigham Young*「ブリガム・ヤング説教集」p. 195)

大勢の人が，神殿結婚の祝福を受けるために旅行をしている。ハワイ神殿への参入のために，食を抜いてまでお金を貯えた日本の末日聖徒たちを知っている。ロンドンでは，南アフリカから英国のサーリにある神殿まで，身のまわりの物を何も持たずに1万キロの空の旅をしてきた人々に出合った。彼らの目には輝きがあり，顔には笑みがあり，口から出る証は皆，彼らが払ったどのような犠牲にもまさる価値あることであったという言葉である。

ニュージーランドでは，オーストラリアの西岸から来たという男性の証を聞いたことがある。民事結婚をしたあとで妻子と共に教会に入った

彼は，あの広大な大陸を渡りタスマン海を越えてニュージーランドのオークランドに着き，美しいワイカタ渓谷の神殿に詣でたという。彼はこのようなことを言っていた。「とても神殿訪問をする余裕はありませんでした。わが家の財産といえば古い車と家具と食器だけで，わたしは家族に『神殿に行けそうにない』と言ったんです。でも美しい妻や子供たちの顔を見回わしたとき，私の口を突いて出た言葉はこうでした。『神殿に行かないわけにはいかない。主が父さんに力を与えて下さるなら，うんと働いてまた車や家具や食器は買える。だが愛するおまえたちを失なうことにでもなったら，永遠にみじめだもんな。』

私たちの多くはいかに先を見通すこともなく，あすのことを考えずにきょうだけのことにとらわれていることか。しかしあすという日は確実に来る。死も別離も確実に来る。正しく結婚し，正しい生活をしたならば，家族の絆は，必ずやってくる死や過ぎ行く時を乗り越えて続くのである。そのことを知れば，平安がいかに心を慰めることか，またその確信はいかにうるわしいことか。人は愛の歌を書き，それを歌う。望み，あこがれそして夢みることもある。しかし，時と死と力を越えた権能で結び固められなければ，それは皆ロマンチックなあこがれにしか過ぎない。

何年も前に，ジョセフ・F・スミス大管長は壇上から語った。「主の家は秩序の家であって混乱の家ではない。…これはさらに神の律法と神の家の秩序に従わずに，今も永世にも結び合わされることは決してないという意味である。人々はそれを望み，この世においてはそれに到達するかも知れない。しかし，神の権能と御父，御子，聖霊のみ名により執行され，認められない限り，その結び付きは何の効力も有さない。」（「福音の教義」第2巻，p. 3）

まとめるに当って，ひとつの話をしよう。実話ではないが，そこに流れている原則は真実である。満月が輝き，バラは花開き，ふたりの間に聖なる愛が熟したとしよう。ジョニーはメリーに言った。「メリー，ぼくは君を愛している。ぼくの妻に，ぼくの子供たちの母親になってほしい。でも永遠にはいやだ。ある期間だけで，あとはさよならだ。」するとメリーは月の光に涙を浮かべて言った。「ジョニー，あなたはすてきだわ。世界にたった一人しかいない人よ。あなだを愛しています。夫に，わたしの子供たちの父親になって下さい。でもほんのしばらくだけ。それでさよならよ。」

おかしな話ではないだろうか。しかし，「新しくかつ永遠の誓約」によって永遠に結ばれる機会があるのに，死によって終わる結婚をする人たちは，この青年男女のプロポーズの言葉と実際は同じことを言っているのではないだろうか。

生命は永遠である。天の神は，永遠の愛と永遠の家族関係を実現された。

愛する若人の皆さん，神の祝福があってあなたがたが結婚を待ち望むとき，この世の全生涯の実り豊かな家族関係ばかりか，神の約束のもとで愛と交わりを確め合う，良い状態を望むことができるように。

私は，この権能の源である主イエス・キリストが実際に生きておられることを証する。キリストの力，キリストの神権が私たちの間に存在し，聖なる宮居で行使されていることを証する。主が授けられたものをあなどってはならない。それにふさわしく生活し，それにあずかり，その聖なる神権の聖めの力で，あなたがたの間を結び固めなさい。この祝福を，私はあなたがたのためにへりくだり祈るものである。これらの証と，それが真実であることを主イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

危急の時

十二使徒評議員会会員

マービン・J・アシュトン

皆様と同様，私もここ数カ月の間，エネルギー危機について，またそれが私たちにとってどのような意味があるのかということについて考えてきた。多少不自由なことはあったが，どうにか運良くその危機を乗り越えてきた。きょう私は，私たちの身近にあってしかもまだ乗り越えていない危機，私たちが注意する必要があろうと思われる危機について考えてみようと思う。

できれば心の中で次のような場面を思い浮べていただきたい。教会の建物，そこに最近掛けられたばかりの看板がある。それには次のように記されている。「霊の燃料入手可。割当量なし。引換券不要。無制限。来たれ，そして備えよ。」次に，玄関マットに次のように書いている家庭を想像してみていただきたい。「ようこそ。霊の油お分けします。そのまま中へどうぞ」。さらに，その表情から，「神は生けりと知る。わが杯はあふるるばかりなり」という言葉が輝き出ている，そんな人を想像してみていただきたい。

兄弟姉妹の皆様，現在は危急の時代である。霊の危機の時である。真夜中に迫ろうとしている時である。世界中に拡がる霊の危機に対応するため，今すぐに行動を起こさなければならない。この危機を乗り越えるには実行をおいてほかにない。引き延ばしは人類の進歩にとって致命傷となる。ありがたいことに，備えの油が不足することは，決してないのである。その油は，自らの意志で，一滴ずつ，義しい生活をしながら貯えるものである。

私たちの贖い主イエスは，現在の私たちのために，力強いたとえ話でもって，一人一人が絶えず備えをなすことのいかに大切かを力説された。この「十人のおとめ」のたとえ話は全人類に与えられた警鐘である。

「そこで天国は，十人のおとめがそれぞれあかりを手にして，花婿を迎えに出て行くのに似ている。

その中の五人は思慮が浅く，五人は思慮深い者であった。

思慮の浅い者たちは，あかりは持っていたが，油を用意していなかった。

しかし，思慮深い者たちは，自分たちのあかりと一緒に，入れものの中に油を用意していた。

花婿の来るのがおくれたので，彼らはみな居眠りをして，寝てしまった。

夜中に，『さあ，花婿だ，迎えに出なさい』と呼ぶ声がした。

そのとき，おとめたちはみな起きて，それぞれあかりを整えた。

ところが，思慮の浅い女たちが，思慮深い女たちに言った，『あなたがたの油をわたしたちにわけてください。わたしたちのあかりが消えかかっていますから。』

すると，思慮深い女たちは答えて言った，『わたしたちとあなたがたとに足りるだけは，多分ないでしょう。店に行って，あなたがたの分をお買いになる方がよいでしょう。』

彼らが買いに出ているうちに，花婿が着いた。そこで，用意のできていた女たちは，花婿と一緒に婚宴のへやにはいり，そして戸がしめられた。

そのあとで，ほかのおとめたちもきて，『ご主人様，ご主人様，どうぞ，あけてください』と言った。

しかし彼は答えて，『はっきり言うが，わたしはあなたがたを知らない』と言った。

だから，目をさましていなさい。その日その時が，あなたがたにはわからないからである。」（マタイ25：1－3）

この十人のおとめとは，イエス・キリスト教会の会員を指すのであっ

て，世間一般の人々を指すのではないと判断したほうがよい。

思慮深いおとめも思慮の浅いおとめも，皆一様に，婚宴の席に招かれてはいた。皆，その宴席がいかに大切なものかよく知っていたのである。このおとめたちは，異邦人でも異教徒でもなかった。堕落していたり，行方不明になっていることもなかった。むしろ，十分な知識を持ったおとめたちであって，救いと昇栄をもたらす福音を手中にしていた人々だった。しかしその福音を生活の中心に置いていなかったのである。おとめたちは，道は知っていた。だが，愚かにも，花婿の到着に際して，備えを怠ったのである。思慮の浅いおとめたちも含めて，皆，花婿の到着に備えてあかりを整えていた。しかし，油は使い果たしていた。だから，一番必要とする時に，補給するものが何もなかったのである。皆，生涯ずっと警告を受けていたというのに。

現在，私たちの中でも，多くの人々が同じような状態にある。忍耐心と自信がないために，準備を怠り始めている。また真夜中は決して来ないなどと正当化して惰眠を貪り，自己満足している人々もある。自分のあかりに油を入れておくという責任は，一人一人に課せられた要件であり，機会である。霊の備えという油は分け与えることができない。思慮深いおとめたちは，不親切や利己心からこの瀬戸際に立った思慮の浅いおとめたちの申し出を断ったのではなかった。この油は，やみに光を与え，道を照らし出すために一人一人が持たなければならないものであって，分け与えることはできないのである。たとえ話にあるように店で買えるものではなく，私たちが生活する中で，義しい生活をしながら一滴ずつ貯えていくものなのである。

病いの人を訪ねることによってもたらされる祝福を，どのようにして分かち合うことができようか。やもめや父のない子を助けることからもたらされる祝福を，どのようにして分かち合うことができようか。一人一人の持つ証をどのように分かち合うことができようか。大会に出席するという祝福はどうだろうか。什分の一の原則に従って生活することから得られる従順の教えはどうだろうか。はっきり言えることは，この種の油は，一人一人が自分で蓄えていかなければならないということである。引き延ばさないようにしようではないか。真夜中までには，まだ時間はあるが，しかし，引き延ばしをしている人には，もう時間はないのである。「しかし，その時がまだこない中にあなたたちの試しの時はすでに過ぎ去って，あなたたちが自分の救いを受ける日はぐずぐずしている間に永久になくなってしまい，あなたたちの亡びはきまってしまう。」（ヒラマン13：38）

現在，私たちは，急いで主の再臨の備えをしなければならない。

警告の声に聞き従い，自分のあかりに義の油を貯める備えを続けている人々には，大きな祝福が与えられるのである。

ここで，前の話に戻って，「霊の燃料入手可，割当量なし，引換券不用，無制限。来たれそして，備えよ」という看板のある教会の建物について，もう一度考えてみよう。もちろん，人は皆それぞれ，様々な建物を思い浮かべていることと思う。恐らくは，一番よく通っている自分のワード部や支部の建物であろう。

今日，私が心の中に描いているのは，ニュージーランド・ウェリントンステーキ部のマスタートンワード部の建物である。私たちは，2月にこの素晴らしい礼拝の家を献堂する機会に恵まれた。私はこれまで，あれ程，しみひとつなくきれいな建物に入ったことがない。見た目も，香りも真新しい建物であった。適切な簡素さの中にも，美しく，主に献納するのにふさわしい外観を誇っていた。これは教会員の手になる建物であった。

また教会員によってその費用が支払われた建物であった。建物は部屋の隅々まで，教会員の手で磨き上げられ，誇らしい限りであった。庭も趣味のよい造りで，構造も問題なかった。非教会員である町長の話によれば，それは幸福な人々の手で建てられた教会堂であった。私たちがそこへ行く3週間前には，献堂までに恐らく工事は間に合わないだろうと言う人もあった。だがそのような疑念を抱いた人々は，このワード部の素晴らしい監督と会員たちを知らなかったのである。暮らし向きは豊かでなくとも，固く決意した人々であった。壁にペンキを塗り，床にワックスをかけることは夜子供を寝かせつけた親たちの仕事であった。また適切な励ましを受けた少年たちは，礼拝堂の周囲の芝生に緑をよみがえらせ，草花を咲かせるために，水の入ったバケツを運んできた。と言うのも，ニュージーランドでは長い間雨が降らなかったからである。こうして作業は完成した。いや，完成しただけではなく，輝やくばかりになったのである。人々は，このようにして，犠牲，準備，協力，信仰，勤労などを通じて自分のあかりに油を一滴ずつ蓄えたのである。このワード部の会員たちが夜中に集まって一緒に働くにしたがい，お互いの愛も深められた。人々はまた，喜びのうちに，その心を輝かせたのである。

教会のどのワード部やステーキ部の建物でも，霊の油を手に入れることはできる。来て，備えをしていただきたい。ワード部の会員の仲間に

入って一緒に仕事をしていただきたい。ただ物を提供するのではなく，自分自身を提供していただきたい。参加もせずに利益だけを得るのはよくない。他人のことを思いやり，他人のために奉仕している人々は，そのあかりに油を満たしているのである。世界中のエネルギー危機は，保護と節約によってその危機を脱しつつあるが，これとは全く反対に，霊の危機はよく使い，備えることによって解消できるのである。きょう皆様に申し上げたいことは，与えれば与える程自らの霊の油を蓄えることになるということである。

私は今，ある一軒の家のことを考えている。皆様や私の友であるひとりの隣り人の家である。その人の家は確かに「ようこそ。霊の油お分けします。そのまま中へどうぞ」という言葉が掲げられていると申し上げてよい程の家である。このような家が，愛するスペンサー・W・キンボール大管長の家なのである。皆様がどこにいようとも，大管長は皆様の友である。その家は祈りの家であって，大管長が祈るとき，私たちは主のみ力を身近に感ずるのである。キンボール大管長と毎日親しく交わるという大きな祝福に浴している私共は，ごく最近大管長が日毎祈りにより新しい見識を身につけていると言われたのを耳にした。祈りとは，学習を経験することであり，力を経験することであり，また，へりくだる機会であって，霊の燃料の供給源である。キンボール大管長と共に祈ることにより，霊は再び活気づけられるのである。

このスペンサー・W・キンボールという人は神の予言者でありながら，しかもなお祈ることによって祈りのなんたるかを学んでいる。大管長は賢明にも次のように私たちに教えている。「聖餐会に出席することは，何年にもわたって一滴ずつあかりに油を蓄えることである。断食，家族の祈り，ホーム・ティーチング，肉体的な欲望の制御，福音の伝道，聖典学習，こうした献身と従順の行為は皆，蓄えを増すための大切な一滴なのである。親切な行為，什分の一などの献金，健全な思いやりや行動，永遠の誓約の下での結婚なども，油を蓄えるための大切な要素であって，この油により，私たちは夜中でも，あかりの油を使い切ったら，補給ができるのである。」（スペンサー・W・キンボール“*Faith Precedes the Miracle*”「奇跡に先駆ける信仰」p. 256）

神は謙遜な祈りに耳を傾けておられることを皆様に証申し上げる。もしそうでなければ，神は決して私たちに祈るよう求められなかったであろう。現在，私たちが祈りの中で特に大切にしなければならないことを言えば，敬虔な思いで静かに耳を傾ける時間であろう。揺るぎない信仰をもって祈りの井戸へ行く人は日毎そのあかりのための油を汲み上げていると言えないであろうか。また，有意義な黙想にふけることにより，蓄えてある油の量を増やすことも可能である。

ここで再度，皆様が御存じの方で神の王国の仕事のために積極的に献身している人々のことを一緒に考えてみていただきたい。そのような人人と交わるのは，大きな感激である。またそのような人々の熱意を感じ，神のみ業に携わろうとの決意の程をうかがうのは，霊を高める経験である。私は今，2年前に改宗したばかりの22歳のある美しい女性について考えている。私たち夫婦がこの女性と会ったのは，カリフォルニアでのことである。彼女は，最近見つけ出した極めて大切なもの，すなわちイエス・キリストの福音に深く心酔していた。そのような彼女と一緒に時を過ごすのは，大きな感動である。彼女からは，その知人，とりわけ彼女の素晴らしい両親を家族にできるだけ早く福音を分かち与えようとする誠意が感じられる。彼女は準備し，実行しながら，あかりに油を貯めているのである。私たちは，彼女が神の生きておられるのを知り，イエスがキリストであることを知っているということに，みじんの疑いもない。まことに，彼女の杯は，その恵まれた知識と確信とであふれているのである。

その彼女が，ある時，私たちに優しく，しかし熱心に頼み込んだことがあった。少し時間を割いて，彼女の素晴らしい家庭で待つ両親を訪ねて欲しいと言うのである。私共は，すぐにそうすべきだと感じたので訪ねてみた。その家庭には暖かい雰囲気が満ちていた。平安と一致と愛とがあった。彼女の言葉である。「私の22年間はとても素晴らしいものでした。チャレンジに富み，しかも報いある時だったんです。私は数え切れない程の祝福を受けてきました。天父に心から感謝しています。天父は私を祝福して下さり，こんなに愛する両親を一緒に，色々なことをする機会を与えて下さいました。教会や福音は，私がどんなことでも一生懸命するよう，励ましを与えてくれます。特に良い生活をするときや，私の祝福を他の人々にも，分けてあげたりするときは，必ずです。」

彼女こそ，神の選り抜きの娘である。彼女はアルマ34：32に記されていることの重要性と真理を十分に知っていた。「現世は，人間が神に逢う用意をしなくてはならぬ時期である。現世の生涯は，人間が各々働きを遂行せねばならぬ時期である。」

兄弟姉妹の皆様，今は危急の時である。霊の危機の時であり，真夜中

がすぐそこに迫っている。「この故に，汝ら主の日来るまで聖き所に立ちて動くことなかれ。見よその日の来るは速かなればなり，と主は宣う。」(教義と聖約87：8)

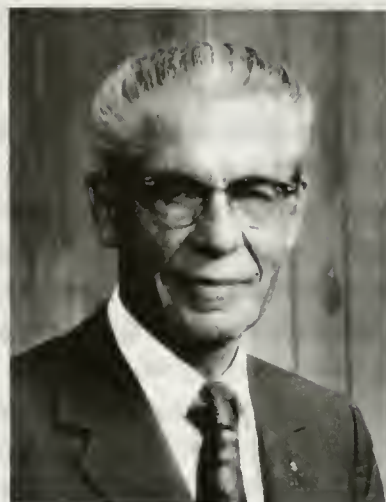
私は天父に，日々私たちの備えの助けをして下さるよう，そしてそれによって私たちが進歩しようと思うたびに，また行動を起こすたびに一滴ずつ霊の油を蓄えることができるよう，祈っている。看板は，私たちに見る気持ちさえあれば，はっきりと読みとれるはずである。神の慈悲と愛があればこそ，私たちは，「霊の燃料入手可。割当量なし。引換券不要。無制限。来たれ，備えよ」と言えるのである。私たちの家庭内でも適切な準備と行ないがあれば，「ようこそ。霊の油お分けします。そのまま中へどうぞ」と言えるのである。

最後に私の証を申し上げたい。皆様のあかりも霊の燃料であふれるまでになることが可能である。そのためには，神と人とに義しく仕えて，日々一滴ずつ油を蓄えなければならない。

神は生きておられる。イエスはキリストであり，私たちの贖い主である。そしてこの教会は地上における主の天国である。このささやかな証をイエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

聖　会

大管長会第一副管長

N・エルドン・タナー

兄弟姉妹の皆様，この聖会は極めて厳粛な会合である。それゆえ，厳粛な思いで，この会に参加し，また司会したいと思う。かなり時間がかかる予定である。しかし，私たちが今申し上げたような思いでいる限り，決して退屈な時間となることはないはずである。

私たちは，今，ソルトレーク・シティーのテンプル・スクエアーにあるタバナクルに集い，教会の公式の聖会を開いて新しい大管長を初めて支持する挙手を行ない，教会員としての意思を表明しようとしている。この方法は，ジョン・テイラー大管長が総大会で初めて支持の挙手を受けて以来，現在までずっと行なわれている慣行に従って執られるものである。

教会の神権者たちは，このタバナクルの収容力の限度一杯まで，神権定員会別に席に着いている。

大管長会，十二使徒評議員会およびその補助，大祝福師，七十人最高評議員会会長及び管理監督会の各会員は，従来通り，タバナクルの演壇上にある席に着いている。

十二使徒会地区代表，十二使徒会および七十人最高評議員会伝道部代表は，演壇の両側にある席，すなわち手すりの内側の一段低くなったところにある席と演壇と同じ高さのところにある席，および会場の最前部の席に着いている。

祝福師は，会場の最前部に近い席に着いている。

教会の大祭司，すなわちステーキ部長会，高等評議員，定員会会長会と会員，およびワード部監督会の各員は，会場の一階中央にある席を後部二階席の下まで使って座っている。

七十人は，会場一階の北側（左側），二階席北側の下の席に着いている。

長老は，会場一階の南側（右側），二階席南側の下の席に着いている。

アロン神権者（祭司，教師および執事）は，一階席の大祭司の後方，後部二階席の真下の席に着いている。

その他教会の一般会員は，今まで申し上げた以外の席に着いている。

また多くの人々がアッセンブリー・ホール，ソルト・パレス，あるいはそれぞれの家庭に集まっている。教会員ならどこにいようとも，支持の挙手に参加することが出来る。

挙手は，まず神権定員会，続いて大会出席者の順で行なわれる。

定員会は次の順序で挙手を行う。

1. 大管長会
2. 十二使徒定員会
3. 祝福師
4. 大祭司，この中には，十二使徒会補助，地区代表，伝道部代表，ステーキ部長会，高等評議員，定員会会長会及び会員，管理監督会それにワード部監督会が含まれる。
5. 七十人
6. 長老
7. アロン神権者（祭司，教師および執事）
8. 神権者を含む会場の全聴衆

挙手は次のように行なわれる。

それぞれ定員会あるいは神権組織が呼び上げられ，提示された役員を支持するための挙手を行なうよう求められる。挙手をする人々は，呼び上げられた時には立ち上がり，賛成の挙手を求められたら，右手を直角に曲げて上げる。これは挙手の対象となった役員を支持しているということを主に示すためである。そして手を降ろす。次に反対の挙手をする人々も右手を直角にして上げるよう求められる。支持するよう読み上げられた役員を心から支持することはできない，ということを主に証するためである。

賛成，反対の挙手が行なわれた後に，定員会の会員は席に着く。

全定員会は以上の方法で同じように挙手を行なう。

あらゆる人が，自から望むままに全く自由に挙手できる。この挙手にはいかなる形であれ，強制はない。賛成の挙手をするときには，挙手の対象となった役員を支持する。すなわち，明確かつ率直に完全な信頼を置いて支持するという厳粛な誓約を主と結ぶのである。

全定員会が以上の方法で挙手を行なったあと，神権の有無にかかわらず，全聴衆の挙手が求められる。その時には全員が起立する。支持の挙手をする者は，右手を挙げてその役員を支持することを証明する。賛成の挙手が終わると，反対の挙手が求められる。その時も同じく右手を直角に挙げてその意を示す。

定員会による挙手の対象となる役員は次のとおりである。

大管長
第一副管長
第二副管長
十二使徒定員会会長
十二使徒評議員会会員
大祝福師

副管長，十二使徒評議員会，大祝福師を，教会に対する予言者，聖見者にして啓示を受ける者として認めるための支持。

定員会による以上の役員の支持の挙手が終わった後，残りの教会幹部，教会中央役員，教会補助組織管理会役員の支持が，通常の総大会の挙手の方法に準じて行われる。以上の方法は，ジョン・テイラー大管長の定められた手続きにのっとったものである。

では，挙手を始める準備をしていただきたい。教会員のみ挙手に参加する資格がある。

ひとつの定員会かあるいは場合によっては複数の定員会が，一度に立ち，定員会ごとの挙手を行なう。定員会はそれぞれ指示されたときに起立し，着席の指示があるまでそのままでいていただきたい。

願わくは主の導きがあって，みたまが留まり，主によって定められたこの厳粛な会が無事進められるように。また，それにより，主の教会の会員が，教会を管理し，その業を指導し，全人類を救いと昇栄に導くよう主から召されている人々を支持するという意志の表明ができるように。

まず，大管長と副管長を支持するための挙手を定員会ごとに行なう。

大管長会についての挙手

大管長会は立っていただきたい。

スペンサー・ウーリー・キンボールを末日聖徒イエス・キリスト教会の予言者，聖見者，啓示を受ける者として，また大管長として支持するよう提議する。

この提議に賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に右手を挙げてその意を表わして下さい。

ナサン・エルドン・タナーを大管長会第一副管長として支持するよう提議する。

賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に右手を挙げて下さい。

マリオン・ジョージ・ロムニーを第二副管長として支持するよう提議する。

賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の者も同様に。

大管長会は着席して下さい。

次に十二使徒定員会の方はお立ちいただきたい。

スペンサー・ウーリー・キンボールを末日聖徒イエス・キリスト教会の予言者，聖見者，啓示を受ける者として，また大管長として支持するよう提議する。

賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。

ナサン・エルドン・タナーを大管長会第一副管長として支持するよう提議する。

賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。

マリオン・ジョージ・ロムニーを第二副管長として支持するよう提議する。

賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。

十二使徒評議員会は着席して下さい。

会場内の祝福師および大祝福師はお立ちいただきたい。

スペンサー・ウーリー・キンボールを末日聖徒イエス・キリスト教会の予言者，聖見者，啓示を受ける者として，また大管長として支持するよう提議する。

賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。

ナサン・エルドン・タナーを大管長会第一副管長として支持するよう提議する。

賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。

マリオン・ジョージ・ロムニーを第二副管長として支持するよう提議する。

賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。

祝福師は着席して下さい。

会場の大祭司，すなわち，十二使徒会補助，十二使徒会地区代表，十二使徒会および七十人最高評議員会伝道部代表，ステーキ部長会，高等評議員，定員会会長会および会員，管理監督会，ワード部監督会，以上の方々はお立ちいただきたい。

スペンサー・ウーリー・キンボールを末日聖徒イエス・キリスト教会の予言者，聖見者，啓示を受ける者として，また大管長として支持する

よう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
ナサン・エルドン・タナーを大管長会第一副管長として支持するよう提議する。賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
マリオン・ジョージ・ロムニーを第二副管長として支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
大祭司は着席して下さい。
会場の七十人，すなわち七十人最高評議員会会員，その他の七十人定員会会長会および会員はお立ちいただきたい。
スペンサー・ウーリー・キンボールを末日聖徒イエス・キリスト教会の予言者，聖見者，啓示を受ける者として，また大管長として支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
ナサン・エルドン・タナーを大管長会第一副管長として支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
マリオン・ジョージ・ロムニーを第二副管長として支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
七十人は着席して下さい。
会場の長老，すなわち定員会会長会および会員はお立ちいただきたい。
スペンサー・ウーリー・キンボールを末日聖徒イエス・キリスト教会の予言者，聖見者，啓示を受ける者として，また大管長として支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
ナサン・エルドン・タナーを大管長会第一副管長として支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
マリオン・ジョージ・ロムニーを第二副管長として支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
長老は着席して下さい。
会場のアロン神権者，すなわち，教師，執事両定員会会長会，及び祭司，教師，執事の各定員会会員はお立ちいただきたい。
スペンサー・ウーリー・キンボールを末日聖徒イエス・キリスト教会の予言者，聖見者，啓示を受ける者として，また大管長として支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
ナサン・エルドン・タナーを大管長会第一副管長として支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
マリオン・ジョージ・ロムニーを第二副管長として支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
アロン神権者は着席して下さい。
会場の全聴衆，すなわち神権を持つ者も持たない者も，教会員は全員お立ちいただきたい。また，アッセンブリー・ホール，ソルト・パレスその他の会場にいる方々も同様に立って挙手に参加していただきたい。さらにラジオやテレビを通してこの会を視聴しておられる方々にも参加していただきたい。
スペンサー・ウーリー・キンボールを末日聖徒イエス・キリスト教会の予言者，聖見者，啓示を受ける者として，また大管長として支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
ナサン・エルドン・タナーを大管長会第一副管長として支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
マリオン・ジョージ・ロムニーを第二副管長として支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
全員着席して下さい。キンボール大管長，これまでのところ，ただいまの提議もそれ以前の提議もすべて満場一致で支持されているようです。

十二使徒会会長および十二使徒定員会全会員についての挙手

次に，十二使徒定員会会長および定員会の全会員を支持するための挙手をお願いしたい。
大管長会は立っていただきたい。
エズラ・タフト・ベンソンを末日聖徒イエス・キリスト教会の十二使徒定員会会長として支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
末日聖徒イエス・キリスト教会十二使徒定員会会員として，エズラ・タフト・ベンソン，マーク・E・ピーターセン，デルバート・L・ステイプレー，リグランド・リチャーズ，ヒュー・B・ブラウン，ハワード・W・ハンター，ゴードン・B・ヒンクレー，トーマス・S・モンソン，ボイド・K・パッカー，マービン・J・アシュトン，ブルース・R・マッコンキーおよびL・トム・ペリーを支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を

表わして下さい。反対の方も同様に。
大管長会は着席して下さい。
十二使徒定員会はお立ちいただきたい。エズラ・タフト・ベンソンを末日聖徒イエス・キリスト教会の十二使徒定員会会長として支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
末日聖徒イエス・キリスト教会十二使徒定員会会員として，エズラ・タフト・ベンソン，マーク・E・ピーターセン，デルバート・L・ステイプレー，リグランド・リチャーズ，ヒュー・B・ブラウン，ハワード・W・ハンター，ゴードン・B・ヒンクレー，トーマス・S・モンソン，ボイド・K・パッカー，マービン・J・アシュトン，ブルース・R・マッコンキーおよびL・トム・ペリーを支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
十二使徒定員会は着席して下さい。
会場の祝福師および大祝福師はお立ちいただきたい。
エズラ・タフト・ベンソンを末日聖徒イエス・キリスト教会の十二使徒定員会会長として支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
末日聖徒イエス・キリスト教会十二使徒定員会会員として，エズラ・タフト・ベンソン，マーク・E・ピーターセン，デルバート・L・ステイプレー，リグランド・リチャーズ，ヒュー・B・ブラウン，ハワード・W・ハンター，ゴードン・B・ヒンクレー，トーマス・S・モンソン，ボイド・K・パッカー，マービン・J・アシュトン，ブルース・R・マッコンキーおよびL・トム・ペリーを支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
祝福師は着席して下さい。
会場の大祭司，すなわち，十二使徒会補助，十二使徒会地区代表，十二使徒会および七十人最高評議員会伝道部代表，ステーキ部長会，高等評議員，定員会会長会および会員，管理監督会，ワード部監督会，以上の方々はお立ちいただきたい。
エズラ・タフト・ベンソンを末日聖徒イエス・キリスト教会の十二使徒定員会会長として支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
末日聖徒イエス・キリスト教会十二使徒定員会会員として，エズラ・タフト・ベンソン，マーク・E・ピーターセン，デルバート・L・ステイプレー，リグランド・リチャーズ，ヒュー・B・ブラウン，ハワード・W・ハンター，ゴードン・B・ヒンクレー，トーマス・S・モンソン，ボイド・K・パッカー，マービン・J・アシュトン，ブルース・R・マッコンキーおよびL・トム・ペリーを支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
大祭司は着席して下さい。
会場の七十人，すなわち七十人最高評議員会会員，その他の七十人定員会会長会及び会員はお立ちいただきたい。
エズラ・タフト・ベンソンを末日聖徒イエス・キリスト教会の十二使徒定員会会長として支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
末日聖徒イエス・キリスト教会十二使徒定員会会員として，エズラ・タフト・ベンソン，マーク・E・ピーターセン，デルバート・L・ステイプレー，リグランド・リチャーズ，ヒュー・B・ブラウン，ハワード・W・ハンター，ゴードン・B・ヒンクレー，トーマス・S・モンソン，ボイド・K・パッカー，マービン・J・アシュトン，ブルース・R・マッコンキーおよびL・トム・ペリーを支持するよう提議する。賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
七十人は着席して下さい。
会場の長老，すなわち定員会会長会および会員はお立ちいただきたい。
エズラ・タフト・ベンソンを末日聖徒イエス・キリスト教会の十二使徒定員会会長として支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
末日聖徒イエス・キリスト教会十二使徒定員会会員として，エズラ・タフト・ベンソン，マーク・E・ピーターセン，デルバート・L・ステイプレー，リグランド・リチャーズ，ヒュー・B・ブラウン，ハワード・W・ハンター，ゴードン・B・ヒンクレー，トーマス・S・モンソン，ボイド・K・パッカー，マービン・J・アシュトン，ブルース・R・マッコンキーおよびL・トム・ペリーを支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
長老は着席して下さい。
会場のアロン神権者，すなわち，教師，執事両定員会会長会，および祭司，教師，執事の各定員会会員はお立ちいただきたい。
エズラ・タフト・ベンソンを末日聖徒イエス・キリスト教会の十二使徒定員会会長として支持するよう提議する。
賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
末日聖徒イエス・キリスト教会十二使徒定員会会員として，エズラ・

タフト・ベンソン，マーク・E・ピーターセン，デルバート・L・ステイプレー，リグランド・リチャーズ，ヒュー・B・ブラウン，ハワード・W・ハンター，ゴードン・B・ヒンクレー，トーマス・S・モンソン，ボイド・K・パッカー，マービン・J・アシュトン，ブルース・R・マッコンキーおよびL・トム・ペリーを支持するよう提議する。

賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。

会場の全聴衆，すなわち神権を持つ者も持たない者も，教会員は全員お立ちいただきたい。さらにアッセンブリー・ホールにいる方々やその他ラジオやテレビを通してこの会を視聴している方々も立ってこの挙手に参加していただきたい。

エズラ・タフト・ベンソンを末日聖徒イエス・キリスト教会の十二使徒定員会会長として支持するよう提議する。

賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。

末日聖徒イエス・キリスト教会十二使徒定員会会員として，エズラ・タフト・ベンソン，マーク・E・ピーターセン，デルバート・L・ステイプレー，リグランド・リチャーズ，ヒュー・B・ブラウン，ハワード・W・ハンター，ゴードン・B・ヒンクレー，トーマス・S・モンソン，ボイド・K・パッカー，マービン・J・アシュトン，ブルース・R・マッコンキーおよびL・トム・ペリーを支持するよう提議する。

賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。

聴衆は全員着席して下さい。

これまで見る限り，この提議もすべて満場一致で賛成の挙手が得られました。

大祝福師についての挙手

次に大祝福師を支持する挙手をお願いたしたい。

大管長会はお立ちいただきたい。

エルドレッド・G・スミスを大祝福師として支持するよう提議する。

賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。

大管長会は着席して下さい。

十二使徒定員会はお立ちいただきたい。

エルドレッド・G・スミスを大祝福師として支持するよう提議する。

賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。

十二使徒定員会は着席して下さい。

会場の祝福師および大祝福師はお立ちいただきたい。

エルドレッド・G・スミスを大祝福師として支持するよう提議する。

賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。

祝福師は着席して下さい。

会場の大祭司，すなわち，十二使徒会補助，十二使徒会地区代表，十二使徒会および七十人最高評議員会伝道部代表，ステーキ部長会，高等評議員，定員会会長会およびその会員，管理監督会，ワード部監督会，以上の方々はお立ちいただきたい。

エルドレッド・G・スミスを大祝福師として支持するよう提議する。

賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。

大祭司は着席して下さい。

会場の七十人，すなわち七十人最高評議員会会員，その他の七十人定員会会員および会員はお立ちいただきたい。

エルドレッド・G・スミスを大祝福師として支持するよう提議する。

賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。

七十人は着席して下さい。

会場の長老，すなわち定員会会長会および会員はお立ちいただきたい。

エルドレッド・G・スミスを大祝福師として支持するよう提議する。

賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。

長老は着席して下さい。

会場のアロン神権者，すなわち，教師，執事両定員会会長会および祭司，教師，執事の各定員会会員はお立ちいただきたい。

エルドレッド・G・スミスを大祝福師として支持するよう提議する。

賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。

アロン神権者は着席して下さい。

会場の全聴衆，すなわち神権を持つ者も持たない者も，教会員は全員お立ちいただきたい。またアッセンブリー・ホールにいる方々やラジオ，テレビを通してこの会を視聴している方々も，立ってこの挙手に参加していただきたい。

エルドレッド・G・スミスを大祝福師として支持するよう提議する。

賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。

全聴衆は着席して下さい。

この提議も同様に満場一致で賛成の挙手が得られた。

予言者，聖見者，啓示を受ける者についての挙手

次に予言者，聖見者，啓示を受ける者を支持する挙手をお願いしたい。

大管長会はお立ちいただきたい。

副管長，十二使徒，大祝福師を予言者，聖見者，啓示を受ける者として支持するよう提議する。

賛成の者は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の者も同様に。

大管長会は着席して下さい。

十二使徒定員会はお立ちいただきたい。

副管長，十二使徒，大祝福師を予言者，聖見者，啓示を受ける者とし

て支持するよう提議する。
　賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
　十二使徒定員会は着席して下さい。
　会場の祝福師および大祝福師はお立ちいただきたい。
　副管長，十二使徒，大祝福師を予言者，聖見者，啓示を受ける者として支持するよう提議する。
　賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
　祝福師は着席して下さい。
　会場の大祭司，すなわち，十二使徒会補助，十二使徒会地区代表，十二使徒会および七十人最高評議員会伝道部代表，ステーキ部長，高等評議員，定員会会長会およびその会員，管理監督会，ワード部監督会，以上の方々はお立ちいただきたい。
　副管長，十二使徒，大祝福師を予言者，聖見者，啓示を受ける者として支持するよう提議する。
　賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
　大祭司は着席して下さい。
　会場の七十人，すなわち七十人最高評議員会会員，その他の七十人定員会会長会および会員はお立ちいただきたい。
　副管長，十二使徒，大祝福師を予言者，聖見者，啓示を受ける者として支持するよう提議する。
　賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
　七十人は着席して下さい。
　会場の長老，すなわち定員会会長会および会員はお立ちいただきたい。
　副管長，十二使徒，大祝福師を予言者，聖見者，啓示を受ける者として支持するよう提議する。
　賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
　長老は着席して下さい。
　会場のアロン神権者，すなわち，教師，執事両定員会会員はお立ちいただきたい。
　副管長，十二使徒，大祝福師を予言者，聖見者，啓示を受ける者として支持するよう提議する。
　賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
　アロン神権者は着席して下さい。
　会場の全聴衆，すなわち，神権を持つ者も持たない者も，教会員は全員お立ちいただきたい。さらに，アッセンブリー・ホールにいる方々，ラジオやテレビを通してこの会を視聴している方々も同様に立って挙手に参加していただきたい。
　副管長，十二使徒，大祝福師を予言者，聖見者，啓示を受ける者として支持するよう提議する。
　賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
　全聴衆は着席して下さい。
　キンボール大管長，これまで見る限り，この提議も満場一致の賛成の挙手が得られたようです。
　ジョン・テイラー大管長によって定められた手続きに引き続き，これまで支持を受けなかったその他の教会幹部や教会中央役員，さらに補助組織の長を支持する挙手をお願いしたい。これは通常の総大会の方法に従って行われる。聴衆は挙手の間，立つ必要はない。全会員が一勢に挙手する。アッセンブリー・ホールにいる方々やラジオ，テレビを通してこの会を視聴している方々もこの挙手に参加していただきたいと思う。

　十二使徒会補助として次の方々を支持するよう提議する。
　アルマ・ソニー
　エルレイ・L・クリスチャンセン
　スターリング・W・シル
　ヘンリー・D・テイラー
　アルビン・R・ダイヤー
　フランクリン・D・リチャーズ
　セオドア・M・バートン
　バーナード・P・ブロックバンク
　ジェームズ・A・カリモア
　マリオン・D・ハンクス
　ジョセフ・アンダーソン
　デビッド・B・ヘイト
　ウイリアム・H・ベネット
　ジョン・H・バンデンバーグ
　ロバート・L・シンプソン
　O・レスリー・ストーン
　ジェームズ・E・ファウスト
　J・トーマス・ファイアンズ
　ニール・A・マックスウェル
　賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。

　スペンサー・ウーリー・キンボールを末日聖徒イエス・キリスト教会信託統治人として支持するよう提議する。
　賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。

　七十人最高評議員会会員として，次の方々を支持するよう提議する。
　セイモアー・デルワース・ヤング
　ミルトン・R・ハンター
　アルバート・セオドア・タトル
　ポール・H・ダン
　ハートマン・レクター・ジュニア
　ロレン・C・ダン
　レックス・D・ピネガー
　賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。

　管理監督会として次の方々を支持するよう提議する。
　管理監督として，ビクター・L・ブラウン
　第一副監督として，H・バーク・ピーターソン
　第二副監督として，ボーン・J・フェザーストン
　賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。

十二使徒定員会地区代表と十二使徒定員会および七十人最高評議員会伝道部代表を現状のまま支持するよう提議する。

賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。

次にあげる各部局，委員会，その他の教会中央組織の役員として次の方々を提議する。

歴史部

顧問として，ハワード・W・ハンター，ブルース・R・マッコンキー

実務部長としてアルビン・R・ダイヤー

管理副部長としてジョセフ・アンダーソン

実務部長補佐としてアール・E・オルソン

教会歴史記録者としてレオナルド・J・アーリントン

教会図書記録保管者としてドナルド・T・シュミット

福祉活動部

顧問として，マービン・J・アシュトン

評議会議長としてビクター・L・ブラウン

社会活動部長としてロバート・L・シンプソン

教会福祉部長としてジュニア・ライト・チャイルド

保健活動委員長としてジェームズ・O・メイソン博士

家庭の夕べ委員会

顧問としてボイド・K・パッカー

実務部長としてジェームズ・A・カリモア

神権伝道委員会

実行委員会委員長としてエズラ・タフト・ベンソン

副委員長としてゴードン・B・ヒンクレー，トーマス・S・モンソン，ブルース・R・マッコンキー

実務部長としてロレン・C・ダン

メルケゼデク神権委員会

トーマス・S・モンソン

ボイド・K・パッカー

マービン・J・アシュトン

ブルース・R・マッコンキー

軍務関係委員会

顧問としてボイド・K・パッカー

実務部長としてデビッド・B・ヘイト

神権系図委員会

顧問としてマーク・E・ピーターセン，ハワード・W・ハンター，

実務部長としてセオドア・M・バートン

音楽部

顧問としてマーク・E・ピーターセン，ボイド・K・パッカー

実務部長としてO・レスリー・ストーン

タバナクル聖歌隊

団長としてアイザック・M・スチュワート

指揮者としてリチャード・P・コンディ

准指揮者としてジェイ・E・ウェルチ

主任オルガニストとしてアレクサンダー・シュライナー

オルガニストとしてロバート・N・クンデック

オルガニストとしてロイ・M・ダーリー

施設管理部

顧問としてマービン・J・アシュトン

実務部長としてジョン・H・バンデンバーグ

内務伝達部

顧問としてトーマス・S・モンソン，ボイド・K・パッカー，マービン・J・アシュトン，ブルース・R・マッコンキー

実務部長としてJ・トーマス・ファイアンズ

広報部

顧問としてマーク・E・ピーターセン，ゴードン・B・ヒンクレー

実務部長としてウェンデル・J・アシュトン

教会教育理事会

スペンサー・W・キンボール

ナサン・エルドン・タナー

マリオン・G・ロムニー

エズラ・タフト・ベンソン

マーク・E・ピーターセン

デルバート・L・ステイプレー

リグランド・リチャーズ

ヒュー・B・ブラウン

ハワード・W・ハンター

ゴードン・B・ヒンクレー

トーマス・S・モンソン

ボイド・K・パッカー

マービン・J・アシュトン

ブルース・R・マッコンキー

L・トム・ペリー

アルビン・R・ダイヤー

マリオン・D・ハンクス

A・セオドア・タトル

ポール・H・ダン

ビクター・L・ブラウン

ベル・S・スパッフォード

教会教育部教育委員長としてニール・A・マックスウェル

教会財務委員会

教会監査員として

ウイルフォード・G・エドリング

ハロルド・H・ベネット
ウェストン・E・ハミルトン
リー・S・ビックモア
デビッド・M・ケネディ
ワレン・E・パフ
ジェームス・A・ノーバーグ

メルケゼデク神権MIA
顧問としてトーマス・S・モンソン，ボイド・K・パッカー，マービン・J・アシュトン，ブルース・R・マッコンキー
実務部長としてジェームズ・E・ファウスト
実務副部長としてマリオン・D・ハンクス，および現在組織されている中央管理会役員全員を現状のまま。

アロン神権MIA
管理監督会のビクター・L・ブラウン，H・バーク・ピーターソン，ボーン・J・フェザーストーンの指導の下に

アロン神権MIA（若い男性）
若い男性会長してロバート・L・バックマン
第一副会長としてリグランド・R・カーティス
第二副会長としてジャック・H・ガスリンド・ジュニア
および現在組織されている中央管理会役員全員を現状のまま

アロン神権MIA（若い女性）
若い女性会長としてルース・ハーディ・ファンク
第一副会長としてホーテンス・H・チャイルド
第二副会長としてアーデス・G・カップ
および現在組織されている中央管理会役員全員を現状のまま

扶助協会
会長としてベル・スミス・スパッフォード
第一副会長としてマリアン・クラーク・シャープ
第二副会長としてルイス・ワレス・マドセン
および現在組織されている中央管理会役員全員を現状のまま

日曜学校
会長としてラッセル・M・ネルソン
第一副会長としてジョセフ・B・ワースリン
第二副会長としてリチャード・L・ワーナー
および現在組織されている中央管理会役員全員を現状のまま

初等協会
会長としてラバーン・ワット・パームリー
第一副会長としてナオミ・ワード・ランドール
第二副会長としてフローレンス・リース・レーン
および現在組織されている中央管理会役員を現状のまま
以上の提議に賛成の方は右手を挙げてその意を表わして下さい。反対の方も同様に。
キンボール大管長，私が見た限りすべての提議が満場一致で賛成の挙手を得られたようです。

我ら何をか聞く

大管長

スペンサー・W・キンボール

愛する兄弟姉妹の皆さん。距離の遠近を問わず　私たちは世界各地から集まってきて，この聖なる集会に臨んでいる。聖会はイスラエルの時代より聖徒たちの間でよく知られていた。その種類もいろいろあるが，一般には，神殿の献堂，あるいは新しい大管長会を支持するために開かれる特別な集会，またはロレンゾ・スノー大管長に与えられた什分の一に関する啓示のようにある啓示を支持するために招集される神権者の集まりなどを指してきた。

予言者ジョセフ・スミスは聖会についてこう語っている

「汝ら切にここに停まれよ。而して，正にこの最後の王国に於ける最初の働き人たちの聖会を招集せよ。」（教義と聖約88：70）

ジョセフ・スミスとブリガム・ヤングは，神権の各職を代表する人々を含む全会衆からまず支持を受けた。ブリガム・ヤングが支持を受けたのは1846年3月27日であったが，そのときは評議員会によって「イスラエルの陣営全体を管理する長に全会一致で選ばれた。」（B・H・ロバーツ *A Comprehensive History of the Church* 「教会概史」第3巻，p. 52）次いで支持を受け，ホザナの歓呼があった。

ハロルド・B・リー大管長に至るまで，歴代の大管長はいずれも聖会において教会の神権者より支持を受けてきた。リー大管長が支持を受けたのは1972年10月6日である。

初めて聖会を導入したのはジョセフ・スミスである。ジョセフは説教を終えた後，大管長会を初めとして，各定員会に，自分を予言者，聖見者として進んで認める気持があれば起立してその意を表わし，祈りと信仰によってそのように支持してくれるように求めた。

すべての定員会が次々にこの求めに応じた。次に予言者は，聖徒の全会衆にも起立してその意を表わすように求めた。

予言者はさらに続けて，神権定員会に，次いで一般の聖徒に，教会の大勢の指導者と評議員会への支持のの気持を起立して表明するように求め，それも同様の方法をもって承認された。

ジョセフ・スミスは次のように語っている。

「すべて満場一致で支持された。そこで私は全会衆に予言した。聖徒たちがそれぞれの職（種々の教会の定員会を指す）にあるこれらの兄弟たちを支持する限り，主は彼らを祝福したもう。……イエス・キリストのみ名によって断言する。天の恵みが彼らと共にある。また，主の油注がれし者がこの時代の人々に証を述べ，主の言葉を宣言するときに，もしそれを受け入れるならば，彼らは祝福されるであろう。しかしもし受け入れなければ，神の裁きが彼らに下り，主のしもべを拒む町や家は滅ぼされるであろう」と。続いて，ホザナの歓呼があった。（「教会概史」第2巻，pp. 416—418参照）

今日皆さんは教会がどのように機能を果たしているかを目にした。そして主の力強い業を見，すべてのことがどのように全会一致で進められるかを確認した。導かれる者が導く者を支持するのである。この会は自ら指名権を行使できる会である。従って，全教会員に出席を呼びかけた。

私たちは今日皆さんから支持を受けたので，今自分の義務を果たそうという決意を堅くしている。私たちは皆さんの支持の挙手を深く感謝している。私たちが今願っているのは，これまでの時代，神権時代を通じて受けつがれてきた主の勧告に完全に沿って正しく人々に助言と勧告を与えることだけである。私たちは皆さ

んを愛している。だから完全な進歩と喜びと幸せを受けてほしいと思っている。ご存知の通り，これらは神の予言者や指導者を通して宣言された神の訓戒に従ってこそもたらされるものである。

私たちは天父とその御子イエス・キリストに思いを向けるとき，平和の福音を宣言する天の声の美しい合唱を耳にすることができる。

私たちは民の代表者として，昔コロサイの聖徒たちに使徒パウロが与えた提言に従う。「……上にあるものを求めなさい。そこではキリストが神の右に座しておられるのである。あなたがたは上にあるものを思うべきであって，地上のものに心を引かれてはならない。」(コロサイ3：1,2)

「キリストの言葉を，あなたがたのうちに豊かに宿らせなさい。そして，知恵をつくして互に教えまた訓戒し，詩とさんびと霊の歌とによって，感謝して心から神をほめたたえなさい。」(コロサイ3：16)

従って私たちは，この愛の美しい調べを心に抱いて，一致団結して主の業を押し進めるつもりである。この主の業は1世紀だけのものでも，1千年間のものでもない。それは永遠にわたるものだから。

永遠の美しい調べに耳を傾けるときに，何が聞えるであろうか。

父祖アダムに直接語りかける神の声を聞くことができる。

「われは神なり，われはこの世を造れり。また人をその肉体をとらざる前に造りたり。」(モーセ6：51)

そして父祖アダムは，世の創造以来基本となってきた数々の真理を私たちに告げた。福音は昨日も今日も，また永遠にわたって変わらないものである。そして私たちには次のように伝えられている。「……神の子始祖の罪を贖いたまえり。贖われたれば両親の罪その子らの頭に帰すること能わず，彼らは創世の前より全ければなり。」(モーセ6：54)

アダムはバプテスマを受け，聖霊を授かった。

そしてアダムを通して，私たちは神の御子であるエホバの降臨を知った。また堕落した人アダムが死より贖われることも知った。アダムはこう言っている。「……われこの世に生きて悦びを受け，われまた再び肉体に在りて神を見ん。」(モーセ5：10)

死すべき状態になったために，アダムとイヴは子孫を持つことができるようになった。その結果，地上の家族は永遠を手中におさめているのである。この予言者アダムとその妻は「神を呼ぶことを」止めなかった。(モーセ5：16)

「かくの如くして，一つの聖き儀式により，説かれたる福音により，またその福音のこの世の終りまで世にあるべしと宣べられたる神の御旨によりて，よろずの物すべてアダムに授けられたり。されば誠に件の如くなりき。」(モーセ5：59)

従ってこれは永遠である。

アダムは神権を受け，また覚えの書に系図を保存した。

神よ，私たちにこの力強い基を与えて下さった予言者がいることを感謝する。

さらに私たちのために道をまっすぐに備える助けを及ぼしたもうひとりの予言者がいることを感謝する。その予言者はエノクである。彼は神と言葉を交わし，神の告げられたままに予言し，神の道を教えた人であった。

「見よ，わが『みたま』汝の上にあり，されば汝の言うところわれすべてこれを正しとせん。されば，山々は汝の前より逃げ去り，河はその流るる途を変えん。汝はわれにありわれ汝にあり，この故にわれと共に歩け。」(モーセ6：34)

この神の予言者は神と共に歩み，世の初めからキリストと万人の復活に至るまで，神の創造物を目にした。また聖典にはこう記されている。

「エノクとそのすべての民は神と共に歩めり。彼はシオンの真中に在りしに，シオン無くなりぬ。神これをとり挙げて，自らの懐に受入れたまいしが故なり。」(モーセ7：69)

また耳を傾けてみよう。何がきこえるだろうか。人類の父である義人アブラハムの声が聞こえる。神よ，聖人であり義人であるこの予言者アブラハムをお与え下さったことを感謝する。アブラハムは，主なるエホバと親しく言葉を交した私たちの先祖である。

アブラハムは天文学者となり，天空と宇宙に関する多くの秘れたる知識を授けられた。そして，当時天文学の中枢をなしていたエジプトの重立った学者たちと交流してそれを伝えたのであった。また，この地球の創造に先立つ前世の出来事も，アブラハムに知らされた。そして，予言者であるこの族長は，この地球に人が住むに至った経過をよく知ったのである。こうしてアブラハムは，神に純粋な信頼を寄せることの大切さを私たちに教えたのであった。

アブラハムは，息子イサクを犠牲にするように求められたとき，イサクは生きて，おびただしい子孫を持つであろうとの約束を受けてはいたが，超人的な信仰をもってその息子を捧げた。なぜならアブラハムには，たとえイサクの命が取られても，神には「死人の中から人をよみがえらせる力がある」という揺るぎない信仰があったからである。(ヘブル11：19) それゆえ，私たちはこの偉大な予言者を神に感謝している。

ではまた耳を傾けよう。何が聞こえるだろうか。

予言者モーセの声が聞える。あの忌まわしい捕われの身からイスラエルの自由を嘆願する声が。主はモーセを受け入れられると，燃えるしばの中から声をかけ，次のように命じられた。「……足からくつを脱ぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである。

……わたしは，あなたの先祖の神，アブラハムの神，イサクの神，ヤコブの神である。」(出エジプト3：5，6)

そこでまた私たちは，主の前に光を輝かした偉大な予言者モーセのゆえに「感謝を神にささげん」と歌う。

再び耳を傾けよう。何が聞こえるだろうか。主の教会の導き手であったペテロに語るエホバの声が聞こえる。「人々は人の子をだれと言っているか。」(マタイ16：13) この問いに対して，一点の疑いもなく確信をもって答える偉大な予言者ペテロの声が聞こえる。「あなたこそ，生ける神の子キリストです。」(マタイ16：16) また，変貌の山での経験を思い起こし，決して弱まることのない証を述べるその声が聞こえる。

「わたしたちの主イエス・キリストの力と来臨とを，あなたがたに知らせた時，わたしたちは，巧みな作り話を用いることはしなかった。わたしたちが，そのご威光の目撃者なのだからである。

イエスは父なる神からほまれと栄光とをお受けになったが，その時，おごそかな栄光の中から次のようなみ声がかかったのである，『これはわたしの愛する子，わたしの心にかなう者である』。

わたしたちもイエスと共に聖なる山にいて，天から出たこの声を聞いたのである。」(IIペテロ1：16―18)

イエスが十字架にかけられた後，背教が起こった。そして何世紀もの間，霊的な暗黒が厚く地を覆っていた。その後，機が熟し，前の時代と同様に示現と啓示が開け，偉大な目ざめが訪れるのである。

再び耳を傾けよう。何が聞こえるだろうか。

大きな疑問をもって森の中でひざまずく少年の声が聞える。その声は尋ねる。真理とは何か，私はどの教会に入ればよいのか，と。この人こそ，最後の神権時代の門戸を開いた偉大な予言者である。全能の父なる神が，その傍らの御方を指して，「こはわが愛子なり，彼に聞け」(ジョセフ・スミス2：17) という声が聞こえる。これこそ，多くの時代にあって最も壮観な示現と言えるだろう。

さらに耳を傾けると，別の声が聞こえる。「われは神の子イエス・キリストなり。……われは始めなり終りなり」(教義と聖約11：28,110：4) と，その声は告げる。

主のみ手にある道具として，永遠の福音を回復し，また過去十数世紀の間失われていたすべてのものを回復するようにと，若い予言者に主のみ言葉が下された。それから，これらの示現と啓示は何年もの間続き，エホバの声がたびたび聞かれた。こうして，この若い予言者を通して，福音の真理と神権，使徒職，権威と権能，それに教会の組織，すべてこれらが地上に回復されたのである。その結果，啓示と永遠の真理が再び地上に存在し，受け入れるすべての人々に授けられるようになった。こうして神の計画は回復され，人は神の完き力と栄光を身に受けることができるのである。

再び耳を傾けて，予言者ジョセフ・スミスの声を聞こう。その声はこう告げている。「兄弟よ，われらまことに偉なる大義に向って進まざらんや。進み行きて退くことなかれ。奮い起てよ，兄弟たち。進み進みて勝利に至れ。汝ら喜べ大いに喜べよ。世の人，歌声を張り裂けしめよ。死者よ，王インマニュエルに永遠讃美の歌を語り出せ。インマニュエルこそ創世の前より，われらをして死者をその囚屋より贖うを得しむることを定めたまえり。そは囚人は釈さるべければなり。

山々は喜びの声を挙げよ。汝ら谷よ，皆声高く叫べ。すべて諸々の海と乾ける地とは，汝らの永遠なる王の為したもう驚嘆すべき御業を語れ。河よ，小川よ，谷の流よ，歓びの声を挙げて流れ下れ。森よ，野の樹よ，みな主を讃えよ。堅き巌よ，喜びに泣け。日よ，月よ，暁の星よ，共に唱え。神の子らよみな喜びの声を挙げて叫べ。永遠の創造物よ，御名をとこしえに宣べよ。われまた汝らに告ぐ，われら天より聞く声は如何ばかり栄あるや。その声はわれらの耳に，栄と救いと誉と不死不滅と永遠の生命と，また王国と公国と権能とを告ぐるなり。」(教義と聖約128：22,23)

これらの声が聞こえ，これらの予言者たちが語った。今日は主の日である。私たちは主のみ手の中にあり，回復された福音は今地上にある。

私たちは皆さんのために働くつもりである。また皆さんに対する愛を心にみなぎらせて，ふさわしい栄えある行く末に皆さんを導くため，最善を尽くすつもりである。

前を見つめてすきに手をかけ，上を見つめて光に目を向け，恐れ，おののき，愛をもって御父の業に携わる。私たちは天父が現在も生きておられることを知っている。また，栄光を受けた御子イエス・キリストも生きておられる。さらに，これが神の業であることを私たちは知っている。私たちは主イエス・キリストのみ名によってこの神聖な証を申しあげる。アーメン。

イエスが歩まれた道

十二使徒評議員会会員

トーマス・S・モンソン

愛する兄弟姉妹，私は感激のあまり胸がいっぱいである。この記念すべき日に皆様と私は，主イエス・キリストのみたまを豊かに受けてきた。この教会は主の教会であり，主の名前をいただいている。主の予言者は，私たちをこの世の束縛を越えさせ，天の高みに引き上げて下さった。私たちは心に誓いを立てて支持の挙手をした。神の王国は，決してそれることなく永遠の道を前進していく。

昨年12月の寒い日に，私たちはこの由緒あるタバナクルに集まって，私たちが愛し，尊敬し，付き従ってきたハロルド・B・リー大管長をいたみ，弔辞を述べた。その予言にあふれた言葉，強力な指導性，そして献身的な奉仕は，私たち全員に完成を目指して進みたいという望みを与えた。リー大管長は「神の戒めを守り，主の道に従いなさい。主の足跡をたどりなさい」と力強い勧告を与えられた。

同じ日の夕方遅く，私は数日前に届いていた旅行代理店のパンフレットに何気なく目をとめた。それは目を見はらせるような色彩で印刷されたもので，説得力に富む宣伝文句が載っていた。内容は，ノルウェーのフィヨルドからスイスのアルプスまでの団体旅行であった。そしてほかにも，聖地のベツレヘム，すなわちキリスト教の発生地を訪れる企画もでていた。このパンフレットの一番下に，簡潔ではあるが「さあ，イエスが歩まれた道を歩いてみましょう」という強烈な誘いの言葉が書かれていた。

私の心は再び，神の予言者リー大管長が述べた，「主の道に従いなさい。主の足跡をたどりなさい」という勧告にもどっていった。そして私はある詩人の言葉を思い浮かべた。それは，次のような詩である。

私はきょう
イエスがはるか昔歩まれた所を歩いた。
イエスがたどられた道を，
ゆっくり，敬虔な思いにひたりながら。

当時の小道は，
そのまま残っていて，
平和があたり一面に漂っている。
私はきょう
イエスが歩まれた所を歩いて
そこにイエスの存在を感じた。

道はベツレヘムを通っていた。
ああ，何と懐しい思い出だろう。
ふつふつとよみがえってくる。
あの幼い足が歩き回った，
ガリラヤの小さい丘が続いている

オリブ山，栄光に輝く光景。
イエスが前に知りたもうた所。
私はうねりながら流れる力強いヨルダンの流れを見た。
遠い昔と同じ姿だ。

私はきょう
イエスがひざまずいた所でひざまずいた。
イエスがたったひとりで祈られた所，
ゲッセマネの園で
その時私の心から恐れが消え去った！

私は重い荷を取りあげた。
そしてイエスをすぐそばに感じながら，
カルバリの丘を登った。
イエスが十字架の上で亡くなった所へ！

私はきょう
イエスが歩まれた所を歩いた。
そして主を何と身近に感じたこと

であろう。

—ダニエル・S・トゥーヒッグ

主を身近に感じるのに聖地を訪れる必要はない。イエスが歩まれた所を歩むためにガリラヤの海岸やユダヤの丘を歩く必要はない。

事実，イエスの言葉が私たちの唇にあり，イエスのみたまが私たちの心に宿っていれば，またイエスの教えが，私たちの生活にとけこんでいれば，この世の旅路を歩きながら，イエスの歩まれた所を歩むことができるのである。

私たちがイエスにならって，未来に確信を抱き，御父に生きた信仰を持ちながら，また相互の間に純粋な愛を抱きながら歩むことができるように，私は願っている。

イエスは「失意の道」を歩まれた。

聖なる町のことで悲しまれたイエスの嘆きが私たちにどれほどわかるだろうか。イエスは言われた。「ああ，エルサレム，エルサレム，預言者たちを殺し，おまえにつかわされた人々を石で打ち殺す者よ。ちょうどめんどりが翼の下にひなを集めるように，わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それだのに，おまえたちは応じようとしなかった。」(ルカ13：34)

イエスは「誘惑の道」をも歩まれた。

かの悪魔は，あらん限りの力をふり絞って，誘惑に富んだ詭弁を弄しながら，40日40夜断食し飢えているイエスを誘った。次のようになじって言った。「もしあなたが神の子であるなら，これらの石がパンになるように命じてごらんなさい。」イエスは答えられた。「人はパンだけで生きるものではない。」また悪魔は言った。「もしあなたが神の子であるなら，下へ飛びおりてごらんなさい。『神はあなたのために御使たちにお命じになると，あなたの足が石に打ちつけられないように，彼らはあなたを手でささえるであろう』と書いてありますから。」イエスは彼に言われた。「主なるあなたの神を試みてはならない。」さらに悪魔の誘惑が続いた。「もしあなたが，ひれ伏してわたしを拝むなら……この世のすべての国々とその栄華とを……あなたにあげましょう。」すると主は答えられた。「サタンよ，退け。『主なるあなたの神を拝し，ただ神にのみ仕えよ』と書いてある。」(マタイ4：3,4,6—10)

そしてイエスは「苦難の道」を歩まれた。

ゲッセマネの苦悩を考えてみよう。「『父よ，みこころならば，どうぞ，この杯をわたしから取りのけてください。しかし，わたしの思いではなく，みこころが成るようにしてください。』……イエスは苦しみもだえて，ますます切に祈られた。そして，その汗が血のしたたりのように地に落ちた。」(ルカ22：42,44)

あの十字架の残忍さを忘れることのできる人がいるだろうか。主は言われた，「わたしはかわく……すべてが終った」と。(ヨハネ19：28,30)

そう，私たちはみな失意の道を歩むことになるだろう。もし機会がありながら見逃がしたり，権利を誤用したり，愛する者に教えなかったりするならば。人はまたみな誘惑の道にも出あうだろう。「さりながら，悪魔が人の子らを試むるは是非必要なり。すなわち人は悪魔の誘惑がなければ己が自由意志を使い得ず…」(教義と聖約29：39) とあるからである。

同様に私たちはまた苦難の道をも歩むだろう。私たちは羽ぶとんに横たわったままで天に昇ることはできない。世の救い主は，非常な苦難にあってから天に昇られたのである。しもべである私たちが主よりも安易な道を期待できるであろうか。復活祭の勝利の前には十字架の悲劇がなければならないのである。

こういった辛い悲しみの道を歩むと同時に，私たちはまた永遠の喜びをもたらす道をも歩むことができる。

私たちはイエスと共に「従順の道」を歩むことができる。これは決してやさしいことではない。「彼は御子であられたにもかかわらず，さまざまの苦しみによって従順を学」ばれた。(ヘブル5：8) サムエルが残した言葉を私たちの標語としようではないか。「…見よ，従うことは犠牲にまさり，聞くことは雄羊の脂肪にまさる。」(サムエル上15：22) 不従順の最後の結末はとらわれの状態であり，死である。他方従順の報いは自由であり，永遠の生命である。

私たちはイエスのように「奉仕の道」を歩むことができる。

人々の間で教え導いたイエスの生涯は，善意の光を投射するサーチライトにもたとえられるものであった。イエスは手足のなえた人に力を与え，盲人の目に視力を，耳しいに聴力を，そして死者の体に生命を与えた。

イエスのたとえ話は力ある教えである。良きサマリヤ人のたとえ話でイエスは，「あなたの隣人を愛せよ」と教えられた。(ルカ10：27) 姦淫の現場を捕えられた女をやさしく扱うことによって，イエスは慈愛にあふれる理解を待たなければならないと教えられた。またタラントのたとえによって，私たち一人一人に自己を向上させ，完成をめざして努力するように教えられた。イエスは御自分の道に沿って私たちが人生の旅路を前進できるよう，周到な準備をされたのであった。そうでなければ，なぜ「あなたも行って同じようにしなさい」と勧告されたのだろうか。(ルカ10：37)

最後にイエスは「祈りの道」を歩

まれた。

三つの永遠の祈りから三つの大きな教訓を得ることができる。最初はイエスが伝道しておられたときの教えである。主は言われた。「祈るときには，こう言いなさい，『父よ，御名があがめられますように。』」（ルカ11：2）

第二はゲツセマネの祈りである。「…わたしの思いではなく，みこころが成るようにしてください。」（ルカ22：42）

第三は十字架の上から言われたものである。「父よ，彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか，わからずにいるのです。」（ルカ23：34）

私たちが天父と交わり，御父の力を受けることができるのは祈りの道に従ったときである。こうしたイエスが歩まれた道を歩む信仰を，そして希望を持とうではないか。神の予言者，聖見者，啓示を受ける者が，きょうそうするよう私たちに呼びかけられた。私たちはただイエスに従えばよいのである。イエスの歩まれた道を一歩一歩踏みしめて行けばよいのである。

私が初めてキンボール大管長と出会ったのは，24年前に私がここソルトレーク・シティーで監督をしていた若いときのことであった。ある朝電話がかかってきて受話器を取ると，次のように語る声が聞こえてきた。「私はスペンサー・W・キンボール長老です。あなたにお願いしたいことがあるのですが。あなたのワード部で，第5南通りに面した大きなビルの裏に，小さな目立たないトレーラーハウスがあります。そこにナバホ・インディアンの未亡人マーガレット・バード夫人がいます。バード夫人は，自分が役に立たないつまらない者であると思って，気力を失っています。あなたと扶助協会の会長会でバード夫人を訪問し，友情の手を差し伸べ，特別に彼女を歓迎して下さいませんか。」私たちはそのとおり実行した。

奇跡のようなことが起こった。マーガレット・バード夫人は，新しく発見した環境の中で生気を取り戻し，見違えるように明るくなったのである。失意は消え去った。苦悩の中にあった失われた羊は，訪れを受け，見いだされたのである。このひとつのドラマに参加した人々はみなそれぞれ成長した。

しかし実を言うと，この場合の本当の羊飼いは，自分の責任下にある99匹をおいて失われた貴重なひとりの人間を気づかって探索に出かけた，この使徒だったのである。スペンサー・W・キンボールはイエスが歩まれた道を歩んでこられた。そして今もなおその道を歩み続けておられる。

私たちがイエスの歩まれた道を歩むとき，イエスの足音に耳を傾けるようにしようではないか。手を伸ばして大工イエスの手に触れようではないか。そうすればイエスを知るようになるだろう。昔，湖のそばでイエスを知らない者の所へ来られたときのように，名もなく見知らぬ人のように私たちのところへ来られるかも知れない。イエスは昔と同じように「あなたは，わたしに従ってきなさい」（ヨハネ21：22）と私たちに呼びかけ，今の時代に果たさなければならない仕事を私たちに課したもう。イエスは戒めを与えられる。人がそれに従うとき，その人が賢明であるか単純であるかを問わず，苦労し，葛藤し，災難を経験するうちに，主は御自身をあらわされるのである。人々は主の助けによって葛藤や災難を切り抜け，自分自身の経験によって主がだれであるかを知るようになる。

私たちはイエスがベツレヘムの赤子や大工の息子以上の人，いかなる教師よりも偉大な教師であることがわかる。すなわちイエスは神の御子なのである。イエスは彫像を作ることも，絵を描くことも，あるいは詩を書くことも，軍隊を率いることもされなかった。一度も王冠をかぶらなかったし，王の笏を持ったことも，肩に紫色の衣をかけたこともなかった。イエスのゆるす度量には枠がなく，忍耐は尽きるところを知らず，勇気にも限界がなかった。イエスは人を変えた。人の習慣，考え，野心を変えた。人々の気質，態度，性質を変えたのであった。人々の心を変えたのである。

ここで使徒の長であったペテロという，私たちになじみのある人のことを考えてみよう。彼はシモンと呼ばれる漁夫であった。信仰が薄く，疑い深い，性急なペテロは，イエスが大祭司のもとへ連れて行かれた夜のことを忘れることができなかった。そこには主が貪欲と利己心を責めた祭司や，また主により偽善者であると決めつけられた長老たち，そしてイエスによって無知を暴露された律法学者がいた。さらに最も残忍で危険な敵とみなされていたサドカイ人もそこにいた。この夜，群衆は「イエスにつばきをかけ，目隠しをし，こぶしでたたきはじめた。また下役どもはイエスを……手のひらでたたいた。」（マルコ14：65）

たとえ一緒に死ぬようなことになっても，決してあなたを知らないなどと言わないと約束したペテロはどこにいたのだろうか。聖なる記録には次のようにある。「ペテロは遠くからイエスについて行って，大祭司の中庭まではいり込み，その下役どもにまじってすわり，火にあたっていた。」（マルコ14：54）この夜ペテロは主の予言どおりイエスを知らない，と3回否定した。主はつつかれたり，

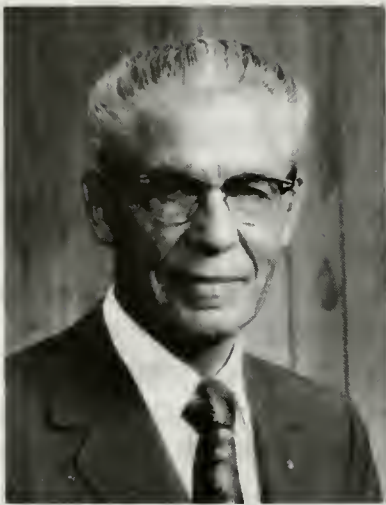
あざけられたり，またなぐられたりして恥ずかしめを受けたが，それでも声ひとつあげず威厳を保っておられた。そしてイエスはふりかえってペテロを見られた。

ある年代学者はペテロに生じた変化を次のように書いている。「これで十分であった。ペテロにはもう危険という言葉は存在しなかった。もはや死を恐れることもなくなった。彼は外へとび出して，朝が白みかけるのを待った。この悲嘆に暮れ，深く罪を悔いた使徒は自分の良心に責められて立っていた。そこで過去の生活，恥，弱点，そして過去の自分などはすべて，敬虔な悲しみの中に押し殺し，新たに高貴な誕生を迎えたのであった。」（フレデリック・W・ファーラー，*The Life of Christ*「キリストの生涯」p. 604）

次にタルソのサウロがいる。サウロは学者で教師(ラビ)の書物に通じていた。一部の今日の学者はこの教師(ラビ)の書物を非常な知識の宝庫としている。しかし何らかの理由でこれらの書物もパウロの心を満たしはしなかった。彼はいつまでも次のように叫び続けた。「わたしは，なんというみじめな人間なのだろう。だれが，この死のからだから，わたしを救ってくれるだろうか。」（ローマ7：24）ところがある日パウロはイエスに会った。そして見よ，すべてが新しくなったのである。その日から死ぬときまで，パウロは人々に「古き人を脱ぎ捨て」，「真の義と聖とをそなえた神にかたどって造られた新しき人を着るべきである。」（エペソ4：22，24）と説き続けた。

時の経過も人の生活を変える贖い主の能力を変えはしなかった。主は死んだラザロに言われたように，今日も私たちに「出てきなさい」と呼びかけておられる。（ヨハネ11：43）疑心暗鬼や罪の悲しみ，不信の死から出てきなさい。新しい生命にいできたれ。出てきなさい，と。

私たちがそのようなわずらいから出て，イエスが歩まれた道に沿って歩むとき，イエスが立てられた次の道を覚えよう。「見よ，われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。われは世の光にしてまた世の生命なり。」（IIIニーファイ11：10，11）「われは始めなり終りなり。われは生ける者なり殺されたる者なり。父と汝らの間の仲保者なり。」（教義と聖約110：4）

イエスの証に私の証を加えたい。イエスは生きたもう。きょう主の予言者が支持された。スペンサー・W・キンボール大管長がその人である。以上のことをイエス・キリストのみ名によって証する。アーメン。

祈りの重要性

大管長会第一副管長

N・エルドン・タナー

私はちょうど1年前の聖会で，教会幹部や中央管理会役員の支持と同時に，末日聖徒イエス・キリスト教会の予言者，聖見者，啓示を受ける者，新大管長として，ハロルド・B・リー大管長の支持を求める責任を与えられた。

リー大管長は万人から愛され，尊敬された傑出した力強い指導者であり，教会を管理した短期間に多くのことを成し遂げた。私たちは皆，その逝去を驚き，悲しんだ。しかし私たちは，主が豊かな報いとまた別の仕事に召すため，彼を呼び戻されたことを承知している。リー大管長の逝去に引き続き，私たちの愛するスペンサー・W・キンボール大管長が末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長，予言者，聖見者，啓示を受ける者として召され，任命と聖任を受けた。

私はキンボール大管長が主によって選ばれ，この時期に教会を管理すべく予任されていたことを証したい。ここに彼が健康体をもってこの栄誉にあずかり重責につくまでには，数々の奇跡が行なわれている。キンボール大管長は各地のステーキ部大会と今期の聖会で心からの支持を受けた。彼の補佐として召されたことは，実に名誉であり特権であり祝福である。私は，自分の決意と合わせ，主から知恵と判断力と霊感と能力をたまわって，大管長の指示のもと，大管長にも主にも認められる働きをなし，地上の神の王国建設に力を捧げたいと願い，祈るものである。

私は各地の全教会員に呼びかけたい。予言者，聖見者，啓示を受ける者，イエス・キリストの使徒，王国なるキリストの教会の大管長に神より召された者として，彼を一致団結して受け入れ，支持するように。また，自分に課せられた責任を果たして，正義を押し進め，自己の救いと昇栄をかち得るように。

さらに主は言われる。

「この故に汝ら教会員は，彼が上より受くるままに汝らに与うる誡命と彼の言とを皆心にとめてよく聞き，わが前に全く聖き道を履むべきなり。そは彼の言は，汝ら全き忍耐と信仰とを以て，あたかもわが口より聞くが如くにこれを受け入るべきなればなり。これらのことを為さば，地獄の門も汝らに打ち勝たざるべし。而して，誠に主なる神は汝らの前より暗闇の力を追い払い，汝らの為と神の御名の栄光のためにもろもろの天をも震い動かしめん。」（教義と聖約21：4－6）

末日聖徒イエス・キリスト教会が主の指示により組織されたのは今からちょうど144年前で，この末の世のキリストの教会の初代大管長として主より召されたのは予言者ジョセフ・スミスであった。そのときに先ほど引用した指示が教会員に与えられたのである。神の王国建設を促進し，真理と正義を広め，人々をキリストに導くことは私たち全員の責任である。

また来週は，主なる救い主がかの偉大な復活の奇跡によって死のかせを砕き，復活体として，墓からよみがえられた日を祝う記念の週である。あらゆるキリスト教徒が生ける神の子イエス・キリストのなしたもうた大いなる犠牲に感謝の心を向けることは，自然であり当然であり且つ正しいことである。主はあなたがたや私を含めて全人類が罪の赦しを受け，復活し，不死不滅と永遠の生命にあずかるようにと，みずからの命を捧げて下さった。なぜならば主が言われているように，「…これわが業にしてわが栄光，すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり」（モーセ1：39）だからである。

そしてまた，「永遠の命とは，唯一

の，まことの神でいますあなたと，また，あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります」（ヨハネ17：3）とも言われた。

ヨハネはこう記録している。「イエスは……言われた，『わたしはよみがえりであり，命である。わたしを信じる者は，たとい死んでも生きる。また生きていて，わたしを信じるものは，いつまでも死なない。……』」（ヨハネ11：25，26）

イエス・キリストの犠牲と大いなる復活の奇跡および世に対するキリストの教えについて，今大会で多くのことが言われた。今後もまたさらに語られるであろう。私たちはただキリストにより，キリストを通してのみ復活と死後の生命への希望を抱くことができるのである。主は予言者たちや御自身の教えを通じて，私たちに生命と救いの計画を与えられた。それを受け入れ，従うならば，地上にあってものちの永遠の世にあっても，最も大いなる喜びと成功と幸福が得られるであろう。主は地上におられた間に祈りの重要さといかに祈るかを教えられた。しばしの時間をとって，それについてお話したいと思う。

主は言われた。

また祈る時には，偽善者たちのようにするな。彼らは人に見せようとして，会堂や大通りのつじに立って祈ることを好む。……

あなたは祈る時，自分のへやにはいり，戸を閉じて，隠れた所においでになるあなたの父に祈りなさい。すると隠れた事を見ておられるあなたの父は，報いてくださるであろう。

……くどくどと祈るな……。

だから，あなたがたはこう祈りなさい，(「だからあなたがたはこう生活しなさい」と言いかえることもできよう。)

天にいますわれらの父よ，

御名があがめられますように。

御国がきますように。

みこころが天に行われるとおり，

地にも行われますように。

わたしたちの日ごとの食物を，

きょうもお与えください。

わたしたちに負債のある者をゆるしましたように，

わたしたちの負債をもおゆるしください。

わたしたちを試みに会わせないで，悪しき者からお救いください。王国と力と栄光とは，永遠にあなたのものだからです。アーメン。(マタイ6：5－7，9－13，13は欽定訳)

これは主の祈りとしてよく引用され決められたときにそのまま一言一句繰り返すものと考えられているが，現に主は「このようにして祈りなさい」と言っておられる。それは，主の言われたことはしっかり胸にとどめるべきだが，祈りは私たちと天父とをつなぐ直接の媒介であり私たちは，感謝の気持ちを自分の言葉で率直に表現し，そのときに必要な導きと祝福を願う，真心からの祈りを捧げなくてはならないということである。

まず，主が言われた通り，心を集中して天父に話ができるように，戸を閉めて世のわずらいを避けなくてはならない。主の祈りで語られた言葉の意味を考えてみよう。

主は「天にいますわれらの父よ」と言われた。この言葉から，神は私たちの父，全人類の父であることがわかる。また，だれであってもどこにあっても，すべての人は神を天にいますわれらの父よと呼ぶように勧められている。前もって約束がなくとも天父のところへ行き，天父がそこにおられて話を聞き，祈りに答えて下さると知って率直に思いを打ちあけることができるのは，何とすばらしいことであろうか。私たちは神が天にあって生きておられ，私たちが天父の霊の子供であり，御子イエス・キリストがだれにでも神を父と知って呼び求めるように教えられたことを知っている。

次に主は「御名があがめられますように」と言われた。私たちの日々の行ないに，特に礼拝するときに，神のみ名をあがめることはいかに大切であろうか。私たちは，み名を聖いものとして尊び，他の人もそうするように尽力してこそ，神のみ名をあがめることができる。また私たちは，愛と敬虔を示し，真心をもって礼拝し，神の栄光と結び付くすべてのことを行なって，み名をあがめるべきである。

「御国がきますように。みこころが天に行なわれるとおり，地にも行なわれますように」。この言葉を考えるとき，私たちはそれが成就できる道はただひとつ，天父を自分の神として受け入れ，戒めを守り，地上の神の王国発展のために働くことであると，認識しなくてはならない。神の教会，神の王国は現在地上に樹立されているが，私たちが神の教えを受け入れ，教えに従い，それを世に伝えて初めて，教会は確立するのである。

主は1831年に予言者ジョセフ・スミスに言われた。

「神の王国の鍵はこの世の人の手に委任され，福音はここより転じ行きて世の果にまでも達せん。あたかも人手によらず山より切り出されたる石の転がり出でて，ついに全世界に充ち満つるが如し。

主の御名を呼びてこの世に神の王国を来らせ，世に住める人々をしてこれを受け，来るべき時代の備えを為さしめよ。その時，人の子は地上に建てらるべき神の王国にかなうため，彼の栄光に輝く衣を召されて天の中より降りたもうべし。これを以

て，願わくは天の王国の来らんため，まず神の王国を出で行かせたまえ。神よ，かくして天に於ける如く，地に於ても栄光あらせたまえ。またかくして，汝の敵を征服したまえ。誉と能力と栄光とは，ときはかきはに神のものなればなり。アーメン。」（教義と聖約65：2，5，6）

みこころが行なわれますようにと祈る人は，自分の分を果たすための用意をしなくてはならない。私がまだ少年の頃，父は，「祈りに答えてほしいなら自分で頑張るがいい」と言った。自分で何かをする用意もなく，御国がきますように，みこころが行なわれますようにと祈ってもむだである。

「わたしたちの日ごとの食物を，きょうもお与えください」という言葉を考える時，それを「わたしたちの日ごとの必要物を，きょうもお与えください」と言い換えることができよう。私たちは持ち物のすべてをまったく主に頼っていることを認識すべきだからである。主は私たちの造り主，すべてのものを与えて下さる御方である。主は私たちに，思考し，推理し，学び取る頭脳を与えて，私たちが知識と技術を用いて物を豊かに生産し，自分の用を満たし，隣人にも分けるようにと望んでおられる。私たちは自分に必要なすべてのことと，自分のためになるすべてのことについて祈るように命じられている。ふさわしい状態で天父を呼び求め，日常生活の恩恵とすばらしい祝福のすべてに感謝を表わし，助けを願うことはいかに大切であろうか。祈るときに，それらの祝福を自分や他人のために，また主の御業と主の御名の栄光のために賢明に用いようと決意すべきである。私たちが神のみこころを行なってこそ，主権者たる神を認めることになるのである。

「わたしたちを試みにあわせないで，悪しき者からお救いください。」この言葉を考えてみると，天父が私たちに聖典を与え，予言者を送って私たちを教えて下さり，私たちがその教えを受け入れたときに誘惑が避けられることを認識すべきである。戒めを守り，イエス・キリストの教えに従えば，誘惑に対抗する力が与えられる。また，悪の誘惑を受けるような立場に身を置かないので，私たちは悪から救われる。

マルコ伝にはこう書いてある。「誘惑に陥らないように，目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが，肉体が弱いのである。」（マルコ14：38）私たちは勇気と力と望みと決意と，正直，真実，貞潔，慈善，徳および自分にしてほしいことを人に行なう能力を求めて祈らなくてはならない。常に祈りをもって真理を探究するときに，私たちは徳高きこと，好ましきこと，よき聞こえあること，あるいは褒むべきことをたずね求めなくてはならない。そうすれば主は，私たちの願いによく答えてくださるであろう。「私たちを試みに会わせないで」ください，そうすれば私たちは悪から救われるのである。

「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように，わたしたちの負債をもおゆるしください。」この言葉について考えてみよう。マタイの記録したこの言葉を，ルカやマルコと比べてみるとおもしろい。ルカは，「わたしたちに負債のあるものを皆ゆるしますから，わたしたちの罪をもおゆるしください」（ルカ11：4）と書いている。

またマルコはこう表現している。「また立って祈るとき，だれかに対して，何か恨み事があるならば，ゆるしてやりなさい。そうすれば，天にいますあなたがたの父も，あなたがたのあやまちを，ゆるしてくださるであろう。（もしゆるさないならば，天にいますあなたがたの父も，あなたがたのあやまちを，ゆるしてくださらないであろう）。」（マルコ11：25，26）

主は言っておられる。「主なるわれは，その赦さんと欲する者も赦す。されど汝らにはすべての人を赦すことを求めらる。」（教義と聖約64：10）さらに，私たちは7度を70倍するほど，何回でも人を赦すようにと言われている。私たちは，主に自分の罪を赦していただこうとするときに，必ず友や隣人を赦しているかどうか，胸に手をあてて問うてみるべきである。私たちが皆，隣人を愛し，赦したならばいかにすばらしいことであろう。そうしたときに，主に自分の愚行を赦してほしいと願いやすくなり，悔い改めにふさわしい実を生じるべく真に悔い改めたときに，神の赦しと慈悲を自分に期待できるのである。

そのような赦しについて，聖典には明快に記されている。「もしも，あなたがたが，人々のあやまちをゆるすならば，あなたがたの天の父も，あなたがたをゆるして下さるであろう。もし人をゆるさないならば，あなたがたの父も，あなたがたのあやまちをゆるして下さらないであろう。」（マタイ6：14，15）

さらにまた，「この故にわれ汝らに告ぐ，汝ら互いに赦し合うべきなり。そは，人その兄弟の過ちを赦さざれば，その人主の前に罪に値する故にして，そは更に大いなる罪なお彼に在ればなり。」（教義と聖約64：9）

私たちの主は十字架の上で，赦しの精神の模範を示された。「父よ，彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか，わからずにいるのです」（ルカ23：34）と。また，迫害され，石で打たれた忠実な弟子ステパノについては，「そして，ひざまずいて，大声で叫んだ，『主よ，どうぞ，

この罪を彼らに負わせないで下さい』。こう言って，彼は眠りについた。」(使徒7：60）と書かれている。

この偉大な悔改めと赦しの原則を私たちの生活に実践することはいかに大切であろうか。隣人に悪意や悪感情をいだいて赦さないものは，不快と不安な心を持った不幸な人で，そのままいくならば魂が毒され，自分の内に一層大きい罪を残すことであろう。他人に悪意や悪感情をいだいていた人が，後に，勇気と力を得て，その人のところへ行ってあやまり，愛を示して和解をし，新しい良い関係を作ることができて，ふたりとも大いに救われ，幸せになる，といった話は数知れない。

さて，では「王国と力と栄光とは，永遠にあなたのものだからです。アーメン」という言葉について考えよう。再び，神は私たちの父であることが思い出される。また，私たちの求める王国が神の王国であること，そしてあらゆる善は私たちの力で達成できるのではなく，神の力と神の栄光によることに気づく。私たちは，神の戒めを守り神と隣人に仕えて感謝を表わすことの大切さを知って，自分の受けているすべてのものを神に感謝すべきである。

願わくは，世の救い主，神の御子イエス・キリストがあなたがたや私のためにこの世に来て命を捧げて下さったことを常に忘れず，御子の教えを生命と救いの道として受け入れ，不死不滅と永遠の生命を受ける備えをなして御子の犠牲を受けるにふさわしい生活をするように。そうしたときに，私たちは神のみ名をあがめ，自分に救いをもたらすのである。

「アーメン」というのは，言われたことを厳粛に心から確認し，承認する結びの言葉である。私たちは自分の言動でこの言葉を裏付けようではないか。

祈るときには，ゲッセマネの園のイエス・キリストの祈りを思い出そう。

「それから，イエスは彼らと一緒に，ゲッセマネという所へ行かれた。そして弟子たちに言われた，『わたしが向こうへ行って祈っている間，ここにすわっていなさい』。そしてペテロとゼベダイの子ふたりとを連れて行かれたが，悲しみを催しまた悩みはじめられた。そのとき，彼らに言われた，『わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて，わたしと一緒に目をさましていなさい』。そして少し進んで行き，うつぶしになり，祈って言われた，『わが父よ，もしできることでしたらどうか，この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし，わたしの思いのままにではなく，みこころのままになさって下さい』。」マタイ26：36—39)

「わたしの思いのままにではなく，みこころのままになさって下さい」と言えるように私たちが心の準備をすることは，いかに大切であろうか。

さらに近代の主の言葉に耳を傾けよう。

「王国を与えられたるわが教会の人々よ聴け。地の礎を据え諸々の天と天の万群とを造り，生きて動き実在するすべてのものを造りたる者の言を聴きて耳を傾けよ。また言う，死の汝らを捕えざる様わが言を聴け。すなわち，うかと過すひと時に夏は過ぎ去り，刈り入れは終りて汝らは救われざるなり。御父と人との仲保者にして，また御父の前にとりなしをする者の言に耳を傾けよ。」(教義と聖約45：1—3)

神はまさしく生きておられ，私たちの救い主イエス・キリストにより，イエス・キリストを通して，私たちの祈りをいつでも聞いて答えて下さることを，証申し上げる。私たちは神の教えと戒めに従うことにより，地上の神の王国建設に貢献し，神のみ名をあがめることができるのである。そのようにできることを，イエス・キリストのみ名によりへりくだり祈るものである。アーメン。

誠に然り「アーメン」

十二使徒評議員会会員

マーク・E・ピーターセン

今大会において，私たちは正式に末日聖徒イエス・キリスト教会の新しい大管長をその職に任じた。まさに重要な出来事である。

これは，144年にわたる教会歴史の中でもわずか12回行なわれたにすぎない。今朝タバナクルで開かれた聖会で，スペンサー・W・キンボール大管長は教会の大管長，主の予言者，聖見者，啓示を受ける者として支持の挙手を受けられた。

支持の挙手は満場一致でなされた。そこにはまた聖霊のはっきりした確認があり，この壮大なタバナクルに集まっていただれもがその聖なる力を感じた。ラジオやテレビでその模様を見聞きしていた人もまた同様の経験をしたことであろう。そしてモーセの時代の如く，「民はみなアァメンと言」ったのである。(申命記27章参照)

何とすばらしい人物が選ばれたことか。この数年十二使徒評議会を導き，またハロルド・*B*・リー大管長の死後今大会に至るまでの間，十二使徒評議員会の決議によって教会の大管長としての任を果たしてきたその人は，今やここに神の命じられた霊的指導者，主のみ言葉と主のみこころを釈き示す者として教会員の支持の挙手を受けるに至ったのである。

彼はこの高貴な役職を非常に謙虚に受け入れた。謙遜な人で僭越なところも見られず，彼は「堅固なやぐら」(詩篇61：3）であり，何でも積極的に行ない，先見の明を備えた人，そしてあらゆる点で行動の人である。

30有余年にわたる十二使徒としての任務を通じて，彼の示した驚くべき精力，み業に傾ける並々ならぬ熱意，無私の態度，神の王国建設のために祭壇の前に自己をすべて捧げたその決意は，彼を教会全体に知らしめる所以となっている。

彼の献身は尽きることを知らない。彼はまさしく聖別された主イエス・キリストのしもべである。彼の健康は奇跡的な回復を遂げた。この偉大なる任務を遂行できるように。このように彼が癒されたことは，彼の召しが神からのものであることを示す明白な証拠であり，まさしく神のみ業である。

主から授けられた奇しき力を行使するに当たって，彼は決してその力の根源を忘れることがなく，主のみこころが何であるかを知り，そのみこころを実行しようと常に努めている。

キンボール大管長は，その非常な熱意と精力もさることながら，彼は親切で哀れみ深く柔和であって，人を助けたいという気持ちにあふれた，完璧なキリスト教徒である。そして人に新たな光を投げかけ，新たな希望を与えて，主の道に立ち帰らせ，数多くの道を踏み迷った人々一人一人の手を取り，救いの道へと導いてきた。

正すことが必要とされ，彼自身その必要性を認めたときは，常に愛と親切の心で温かい同情の手を差し伸べ，しかも正義に堅く立ちながら，人々を正してきたのだった。

困難な仕事に直面したとき，特に今度の責任は最も困難なものであろうが，彼は決して責任から逃避せず，信仰と祈りと彼の高貴な人格に備わる力のすべてをもって立ち向かっていく人である。その結果，み業は止まることなくしかも適切に行なわれるのである。

彼は常に自分の力の限界を気に留めながらも，この業が神のみ業であり，主は謙遜な人々を用いて主の目的を成就されるということを知っている。

キンボール大管長は，ニーファイの言葉に確固たる信仰を抱いている。「……私は，主が命じたもうことに

は，人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり，それでなくては，主は何の命令も人に下したまわないことを承知しているからである」（Ｉニーファイ３：７）この聖句は彼の信仰の拠所となっており，成功の秘訣となっているのである。

主の計画はこれまで同様，今後も進展してゆくであろう。なぜなら全能の神が日々スペンサー・Ｗ・キンボール大管長を導き，彼を通して働かれているからである。主のみ業は決して衰微せず，他の民に渡されることもない。

今日，教会員が全会一致で新しい大管長を支持したとき，彼らは大管長に従うという誓約をするに当たって非常な責任を引き受けたばかりか，回復された主イエス・キリストの福音のきわめて大切な原則を擁護したのである。

彼らは，神とタバナクルをはじめラジオ，テレビの放送網を通じて集った数十万に達する証人の前で，支持の挙手をすることにより誓約を交わしたのである。

大管長を支持するということは，彼の指示に従うことである。彼は今日の主の代弁者であり，これには非常に重要な意味がある。予言者ジョセフ・スミスの時代にこの問題が持ち上がったとき，主は教会の指導者について次のように言われた。

「……また聖霊によりて感ずるままに語るべきことは……

およそ聖霊に感じたる時語るところはことごとく聖典の言となり，主の意となり，主の精神となり，主の言となり，主の声となり，世を救いに導く神の能力となるべし。」（教義と聖約68：3,4）

教会員として新しい大管長に支持の挙手をすることによって，私たちは彼が与える永遠の生命の言葉に努めて留意するという神聖な誓約に身を委ねたことになる。

主は近代の聖典の中でこう言っておられる。「汝ら神の口より出るすべての言によりて生くべければなり。」（教義と聖約84：44）

では，どのようにしてその言を受けるのだろうか。それは，むろん神の予言者を通じてである。

世の始めから神はその方法をとってこられた。アモスへの啓示で主は言われた。「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは，何事をもなされない。」（アモス３：７）

これは旧約聖書の中で主が示された方法であったが，新約聖書の時代も同様であり，また今日も然りである。

144年前教会が設立されたとき，主は原則を回復されることによってこの意味を明らかにされ，この地上における主の教会の指導者が主の代弁者であって，人を自分に従わせようとして自己推薦をするような人ではないと言われた。

1830年４月６日，主は新しく任命された教会の大管長について，大管長はまた主の代弁者であると告げられた。

その後，主はジョセフ・スミスを予言者，聖見者，啓示を受ける者としても指名された。このようにして，主は次のように教会員に命じられたのである。

「この故に汝ら教会員は，彼が上より受くるままに汝らに与うる誡命と彼の言とを皆心にとめてよく聞き，わが前に全く聖き道を履むべきなり。

そは彼の言は，汝ら全き忍耐と信仰とを以て，あたかもわが口より聞くが如くにこれを受け入るべきなればなり。」（教義と聖約21：4,5）

続けて，主はこの命に従う者に大いなる約束を与えて言われた。

「これらのことを為さば，地獄の門も汝らに打勝たざるべし。而して，誠に主なる神は汝らの前より暗闇の力を追い払い，汝らの為と神の御名の栄光のためにもろもろの天をも震い動かしめん。」（教義と聖約21：６）

一体この約束以外に何を求めることがあろうか。この聖句は，大切な原則，すなわち私たちが今日の支持の挙手から学ばなければならないもうひとつの訓戒を思い起こさせるものである。それは，この地上におけるキリストの教会の長たる者は一時代にただひとり存在し，彼は今日のキンボール大管長と全く同様に選ばれ支持されなければならないということである。だれもこの召しを自分で得ることはできない。大管長はアロンの場合のように，神の召しを受けなければならないのである。（ヘブル５：４参照）

主は任命を秘密にすることは許しておられない。正当な手続きを踏むため万事は公に，しかも人々の支持の挙手によって行なわれる。主は言われた。「……およそ誰か権威ある者より聖職に按手任命され，またその者の権威を有てることと，教会の長たる者たちより正式の按手聖任を受けたることとが教会員の知る所にあらざれば，何人といえどもわが福音を宣べんために出て行くこと，または教会を創立することを許されざるべし。」（教義と聖約42：11）

主は続けて言っておられる。「すべてのことは………各教会各々の全体一致によりて為さざるべからず。」これは衆知ということ，また支持の挙手によるということを表わしている。

さらに主は，「正式に組織せられたるわが教会支部のある所にありては，何人といえどもその教会支部の支持の挙手によらずしてはわが教会内のいかなる職にも按手聖任さるる能わず。」（教義と聖約20：65）と言われ

た。

また，次のようにも言われた。「われ今汝らに一つの命令を与う。すなわち汝ら須らくこの職を全部充たしてわがその名を挙げたる人々をわが一般大会に於て承認すべし。然らずんば，これを否認すべきなり。」（教義と聖約124：144）

この原則は，あらゆる種類の熱狂家や偽りの教師，指導者を排除するものである。そして，教会にあって指示する者の声は明らかに唯一つであり，それは啓示により，また教会の総大会で人々の支持の挙手を受け正式に選ばれた予言者，聖見者，啓示を受ける者の声であるということに主の民の注意を喚起するものである。

今日，その人はスペンサー・W・キンボールである。

ジョン・テイラー大管長は，大管長を支持するときの進め方について次のように述べている。その方法はまさに今日，私たちがとったものである。「これは，古代イスラエルの民の間で行なわれていたと同様，主がシオンの民に制定された規範である。……これは神のみ声であり，民の声である。」（*The Gospel Kingdom*「福音の王国」p.134）

ブリガム・ヤング大管長はこの件について討議した際，さらに次のように語った。「（主）はひとりの予言者の口を通じてのみそのみこころを民にお知らせになる。主が民に啓示を与え，新しい教義を示し，あるいは懲罰を与えようとするとき，主はその職に召され按手任命された者を通じて行なわれる。」（*Discourses of Brigham Young*「ブリガム・ヤング説教集」p.212）．まさしくその人こそ教会の大管長である。

ブリガム・ヤングはさらに述べている。「主なる全能の神がこの教会を導いておられる。あなたがたが自らの義務を遂行しているならば，神は決してあなたがたを迷いには導かれないであろう。」（「ブリガム・ヤング説教集」p.212）

ヒーバー・J・グラント大管長は述べている。「天父の望んでおられない人がイエス・キリスト教会の長になるのではないだろうかと思いわずらう必要はない。天父の望んでおられる人以外にイエス・キリスト教会の長に就く人はいないからである。」（G・ホーマー・ダーラム編 *Gospel Standards*『福音の標準』，「インプールブメント・エラ」，1969，p.68）

さて，キンボール大管長はどのような権能を持っているのだろうか。教会の大管長である彼は，この最後の神権時代，福音が回復されるにあたって天使により予言者ジョセフ・スミスに与えられたあらゆる鍵と権能を有している。大管長は権威ある者の按手によりこれらの権能を授けられた。ここで私は繰り返し申し上げたい。キンボール大管長は，以前あらゆる鍵と権能を持ち，キンボール大管長にそれらを与える権威を有していた人々の按手によってこれらすべての権能を授かったのである。

教会の歴代大管長はいずれも，すべての鍵と権能を有してきた。だれもそれらなくして働くことはできない。また教会も存続し得ないのである。

もし予言者ジョセフ・スミスがこれらの権能の鍵を墓に携え行ったのだとすれば，今日どうして私たちはこの業を遂行できようか。鍵なくして主のみ業は進まないのである。ジョセフ・スミスに与えられたすべての鍵と権能は教会指導者の手で絶えることなく保持されねばならなかった。

もし，ジョセフが死者の救いの鍵を有したまま世を去ったとすれば，私たちはどうして神殿事業を行なうことができるだろうか。

権威を持たずにどうしてあらゆる国民，部族，国語，民族に福音を宣べ伝えることができようか。

また，もし開拓者たちが神の権能を有していなかったとすれば，予言者イザヤの予言を成就すべくなぜこの山の頂に来て，この地に教会の本部を設置したのだろうか。

救い主の再臨に先立ち，やがて世界中から主の民が集合するであろう。イスラエル集合の鍵は，この鍵を保持しそれをジョセフ・スミスに託した予言者モーセを通して私たちに伝えられたものであるが，主の民の集合もこの鍵なくしてどうして行なわれ得るだろうか。また，神の権能を持たずに世界各地に教会のステーキ部を設立することができるだろうか。

私たちは，天使によって予言者ジョセフ・スミスに与えられた種々の権能が教会にあり，依然としてこの教会に存在していることが容易に理解できる。

神の権能は常にひとりの人，すなわち予言者，聖見者，啓示を受ける者である教会の大管長に委ねられているのである。

これに代わる他のいかなる方法も存在しない。なぜならこれは主の方法であり，主が御自分の業を指示し，導かれる道だからである。

まさしくアモスの言葉は真実である。「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは，何事をもなされない。」（アモス3：7）

ウイルフォード・ウッドラフ大管長は次のように語っている。「イスラエルの長老たち，並びに神の聖徒の皆さん，私はあなたがたが召しの尊厳と神聖さに奮い立ち，自らの職務と誓約を完全に実証するようお勧めしたい。あなたがたの働きによって

権威を，鍵を，そして神権を支持しなさい。神の眼，天使の眼，人の眼はあなたがたの上に注がれており，業をなし終えたとき，あなたがたは正当な報いを受けるであろう。」(マシアス・F・カウリー編，*Wilford Woodruff*「ウイルフォード・ウッドラフ」，デゼレトニューズ，1909，p.657)

私は贖い主が生きておられることを知っている。贖い主は親しく，今日私がこれまでお話ししてきたことが真実であることを私に知らせて下さった。天父なる神は生きておられる。この教会は生ける神の教会であり，救い主なるイエスがみ業を導いておられる。キンボール大管長はまさしく主の予言者である。この聖なる証のすべてを心からへりくだって，いと高き主イエス・キリストのみ名により証申し上げる。アーメン。

予言者と主の民の予任

十二使徒評議員会会員

ブルース・R・マッコンキー

スペンサー・W・キンボールが末日聖徒イエス・キリスト教会大管長，主の民に対する予言者，聖見者，啓示を受ける者であり，これからの時代にあって地上の神の代弁者となるべく予任されていたと，私は信じる。キンボール大管長は予言と啓示のみたまにより，このつとめに召され選ばれ，聖任されたのである。彼が今や先頭に立って主の民を導くべきことは，私たちが証し，仕えるお方のみこころでありみ旨であると主のみたまが十二使徒の一人一人に証言したことを，私は知っている。

それは主がご自身の声でこう言われたと同じである。「私のしもベハロルド・B・リー大管長は，私の命じたすべてのことに忠実かつ真実であった。あなたがたの中での彼の務めはすでに完了した。私は彼を永遠のぶどう園の別のより大いなる働きに召した。そして今，私の民を導き，私が自ら地上を統治しに訪れるあの大いなる日のために民を備える働きを続けるように，主なる私はしもべであるスペンサー・W・キンボール大管長を召す。そして，私のしもベジョセフ・スミスについて言ったと同じことを，彼に対しても言う。『……汝ら教会員は，彼が上より受くるままに汝らに与うる誡命と彼の言とを皆心にとめてよく聞き，わが前に全く聖き道を履むべきなり。そは彼の言は，汝ら全き忍耐と信仰とを以て，あたかもわが口より聞くが如くにこれを受け入るべきなればなり。

主なる神かくの如く言う。われは彼に霊感を与えて，善を為すために大いなる力を以てシオンの大事を推し進めしむ。われ彼の勤勉なるを知り，また彼の祈りを聞けり。』（教義と聖約21：4，5,7)」

すでに世を去った予言者たちは信じやすく，他の環境のもとで別の民に与えられた勧告は信じて従えると思いやすいようである。しかし，主が地上に予言者を置かれたどの時代もそうであったように，私たちの遭遇する大きな試練は，主の生ける予言者の言葉をよく聞き，今の時代に与えられる勧告と指示に従うかどうかということである。

「われらアブラハムの子と，ユダヤ人は神に言えり。
われらみ父に従い，ゆずりを受けんと。
されど主イエスの口より，叱責のむち飛びて，
汝ら従うべく名を連らねた者の子アブラハムの子孫とあらば，その道を歩み，父祖の天罰の固き鎖より逃れいでたるものを。
われら聖見者モーセと古えの予言者を持てり，
かれらが言葉は金銀の宝。
されど主イエスの口より，荘厳な声いでて，モーセに向かわばかの言葉を聞け
大いなる値の報いを得べし
モーセわが降臨とわが地上の業を告げたればなり。

われらならうべきペテロとパウロを持てりとおのれの神をあがめつつ信者は言う。
されど生者と死者との主なるお方はかく言われる。
汝の時代の予言者，かの教師たり聖見者たる者の手に
われ鍵を渡しぬと。
み父のみ旨にかなわんため，汝ら彼らに頼れと。

確かに，私たちの時代に地上の神の王国，教会を管理する謙遜な人々は，古えの使徒や予言者と同じく，この末日に地上の王国を導くために神より選ばれた人々である。スペンサー・W・キンボール大管長，N・

エルドン・タナー副管長，マリオン・G・ロムニー副管長のそばでほぼ毎日を過ごす私たちは，彼らが下す裁断の知恵と判断に目をみはり，彼らがかつて大管長会ペテロ，ヤコブ，ヨハネと同等の義の説教者であることをよく知っている。

地上の主のみ業を導くこれらの兄弟の召しが偶然ではあり得ないと，申しあげてよろしいだろうか。そこには主の力がある。主は初めからそのことをよく知っておられる。主は救いの計画を定め，主の永遠の福音がアダムからジョセフ・スミスまでの各神権時代に人に啓示されるよう命じられた。全能の主は，主のみ名によって働き，すべての神権時代に主の言葉を世界に伝える予言者と使徒とを選ばれた。主のみ業に働く人々を選び，予任された。そして彼らを時をはからって地上へ送り，絶えずこの世の用意をさせ，創世の以前に受けるべく予任されたその役職に召すのである。

ここでスペンサー・W・キンボール大管長を，主の民の指導者となるべく用意され，予任され召された者の典型として，説明させていただきたいと思う。彼はまことに，信仰の家で生まれた。キンボール大管長はイサクとアブラハムから霊的資質を受けついだヤコブのように，現在の使徒の管理職に備えて才能や資質を生まれつき授けられていた。

しかもその準備はこの世に誕生する前から行なわれていた。彼はゆえあって信仰の家に生まれた。彼が光と真理と救いの牧者として民の間に立つ準備は，この世だけに限られなかった。事実，彼は地の基が据えられる以前に召され，選ばれ，予任された神の霊の子であり，神御自身が臨席されたかの前世の大会議に，私たちの眼前でも計画し，約束されたその使命を，彼は今こそ果たしているのである。

ジョセフ・スミスは言った。「世の人々に導きと恵みを施す召しを持つすべての者は，この世界のできる以前，天上の大会議でまさにその目的のために聖任された。」また予言者は自分についてこのように語っている。「私は，自分があの大会議で，実にこの役職に聖任されたのだと思う。」（*Teaching of the Prophet Joseph Smith*「予言者ジョセフ・スミスの教え」 p.365）キンボール大管長は今やジョセフ・スミスの着た外套をまとい，同じ予任の律法の翼下に入ったのである。

かの会議の場にいた私たちの父アブラハムは，前世の霊の軍勢を示現に見る祝福を得た。彼はこのように告げた。「これらすべてのものの中には，高貴にして偉大なるもの多くありたり。」その霊は「善し」と言われている。（アブラハム3：22）アブラハムは，永遠の父なる神がその力ある者たちの「中に立ちて」，「これらの者をわが統治者となさん」，「アブラハムよ，汝はこれらの者の一人なり。汝は生れざる前に選ばれたり」と言われたのを見た。（アブラハム3：23）

アブラハムがそうであるように，すべての予言者は，またそのことに関して責任の違いこそあれ，イスラエルの全家，主の地上の教会の全会員と共に，皆予任の祝福にあずかっている。

エレミヤに主は言われた。「わたしはあなたをまだ母の胎につくらないさきに，あなたを知り，あなたがまだ生れないさきに，あなたを聖別し，あなたを立てて万国の預言者とした」。（エレミヤ1：5）

この世でメルケゼデク神権を受ける者はすべて，アルマが教えるように，「神の先見の明によって創世の前からすでに選んで備えておかれた。」なぜならば，彼らは前世で高貴にして偉大なるものだったからである。（アルマ13：3）

また，パウロはこの予任の律法を選びの教義と呼び，それによってイスラエルの全家に，「子たる身分を授けられることも，礼拝も，数々の約束も」与えられると言っている。（ローマ9：4）パウロは，忠実な教会員，すなわち「神を愛する者たち」，「ご計画に従って召された者たち」が「御子のかたちに似たものと」なって「キリストと共同の相続人」となり，御父の王国で永遠の生命を得るよう予任されていると述べている。（ローマ8：17,28）

彼はまた教会員について，神が「みまえにきよく傷のない者となるようにと，天地の造られる前からキリストにあってわたしたちを選び」，養子縁組によってイエス・キリストの子となり，この世では「罪過のゆるし」を受け，来たるべき世では永遠の栄光を受けるように予任されたと言っている。（エペソ1：7）

私たちの持つ古代，近代の聖典には，神の先見の明により，この世での特別な働きに召された人々や，イスラエルの家系に生まれ，良き羊飼いの声を聞いて地上の主の羊の群れに入る雄々しい人々への約束など，どちらも予任の律法についての記述が多い。

キリスト御自身が，予任された予言者のひな型と言えよう。キリストは永遠の会議で救い主，贖い主として選ばれた。ペテロはキリストを，時の絶頂に無窮永遠の贖いをなし遂げるために来るべき御方として，「きずも，しみもない小羊……キリストは，天地が造られる前から，あらかじめ知られていた（予任されていたの意）」（Ⅰペテロ1：19,20）と語った。4千年間，すべての予言者はキリストの来臨を証し，その慈悲と愛

を声高く告げた。

「肉体に宿りたもう」（Ⅰニーファイ11：18）主の母マリヤ，イスラエルに導きと恵みを施した偉大な予言者モーセ，使命を帯びて世の終りの示現を見た黙示者ヨハネ，回復の予言者，聖見者ジョセフ・スミス，彼らは皆この世の務めに携わる何百年，何千年前から指名されていた。予任された働きは，あらかじめ知られ，計画されていたからである。

バプテスマのヨハネや古代の十二使徒やコロンブスのなすべきことは前もってすべて知られ，準備が整えられた。しかしこれらは皆，単なる青写真である。主のみ業はすべてあらかじめ計画，準備されており，そのみ業に召され，選ばれた人々はまず前世で，それからなお誠実かつ忠実であるならば再度この地上で，主から任命を受けるからである。

では，これからの時代に主を代表して王国を管理すべく選ばれた者，すなわちこの教会の大管長はどうであろうか。彼は，実に忠実な先祖の後裔と言うにはあまりあるものである。彼は事実神の息子であり，全能者の霊の子である。彼は永遠の御父と共に住み，その顔を見，声を聞き，とりわけ重要なことにはそのみ言葉を信じ，その律法に従ったのである。

従順により，一致により，自己の義しさによって，選ばれし愛子のあとを継ぐべく選ばれたゆえに，スペンサー・W・キンボールは前世において高貴にして偉大であった。彼は他のすべての才能にまさって霊性の賜を伸ばした。信じる才，真理を受け入れる才，正義を求める才を。

彼は「神の如き者」，（アブラハム3：24）主なるエホバを知り，礼拝した。彼はアダムとエノクの友であった。ノアやアブラハムから助言を受け，イザヤやニーファイとまみえ，天の王国でジョセフ・スミスやブリガム・ヤングと共に仕えた。

前世は遠く離れた神秘な場所ではない。私たちは，慣れ親しんだ私たちの父の永遠の家を離れて，わずか数十年しか経っていない。私たちは皆，永遠の霊が土の幕屋に住まいを得る以前に，主のみ業のため共に働いた友や仲間たちと薄い幕によって隔てられているに過ぎないのである。

私たちがかの地での交わりを思い出さないように幕が引かれたことは事実である。しかし私たちは，永遠の御父があらゆる力，あらゆる勢力，あらゆる支配，あらゆる真理を持ち，自らも家族の単位の中に住んでおられることを知っている。また私たちが，神の形にかたどって造られ，神のようになる力と能力を授けられた神の子供であることを知っている。また，主が私たちに自由意志を与え，従順によって永遠の生命が得られる律法を定められたこと，かの地で私たちには友や仲間がいたこと，さらに，私たちは最も完全な教育機構の中で教えられ，訓練されたこと，主の永遠の律法に従順であったため数え切れないほどに多種多様な才能を伸ばしたことを知っている。

そしてそこから，予任の教義が出てくる。私たちは地上に来るときに，前世で律法に従順であったために得た才能や能力を携えて来る。モーツァルトは音楽的才能を持って生まれたために，8歳でソナタを作曲した。メルケゼデクは，「子供の時に神をおそれ，獅子の口をとどめ，猛火を消した」（霊感訳創世14：26）ほどの信仰と霊的な能力を備えて，この世に生を受けた。一方，カインはルシフェルに似て，初めからいつわり者であり，この世では，「汝は『滅亡』と呼ばれん，汝もまたこの世の前より在りたればなり」。（モーセ5：24）と言われたのである。

これが予任の教義である。選びの教義である。主が地上で特定の人々を選び，愛されたことのわけはこれであり，主が「わたしの羊はわたしの声に聞き従う。わたしは彼らを知っており，彼らはわたしについて来る。わたしは，彼らに永遠の命を与える。……」（ヨハネ10：27,28）と言われたことのわけはこれである。このすばらしい真理を知った私たちには，キリストのくびきを負い，戒めを守り，喜ばれることをして主に従うという責任が，他のどの民にもまして，重くかかってくるのである。もし私たちが主を愛し，主に仕えようとするならば，主がみ言葉を教えようと遣わされる使徒や予言者の言葉に心を向けるであろう。

現代の世の中が必要とするのは，主が予言者を送ってみ旨とみこころを啓示することではない。主はすでにそれをなされた。私たちには予言者があり，私たちは霊感のみたまを持つ大勢の人によって導かれている。現代が実に必要とするのは，人が聞く耳を持ち，予言者の口から出る言葉に心を留めることである。

イスラエルに予言者のあることを，神に感謝し，ほめまつらん。

聞く耳を持ち，主の予言者の声に心を留めるよう，願いたてまつらん。

神がみたまを私たちに注ぎたまい，それにより，大いなる末日の業の神性と真実とを知り得ることを，神に感謝したてまつらん。その永遠の真理をイエス・キリストのみ名により証申し上げる。アーメン。

汝ら主の器を持つ者よ潔くあれ

大管長会第二副管長

マリオン・G・ロムニー

愛する兄弟たち，私は今日，「汝ら主の器を持つ者よ潔くあれ」(教義と聖約133：5）という聖句をテーマとして，心にあることを述べたいと思う。これは神権の召しを全力を尽くして遂行するあなたがたにとって，実に時宜を得たテーマではないだろうか。まず初めに，私は証を述べたい。私はキンボール大管長が予言者であり，主よりその代弁者として召された人であること，またタナー副管長も，啓示により第一副管長に召されたことを，みたまの力を通して知っている。私はこのふたりを「誠心より」支持するものである。(教義と聖約17：1）

このようにしてあなたがたの前に立っていると，私はペテロが当時の兄弟たちに向かって自らの思いを述べたときと同じような気持にかられる。ペテロは言った。「……あなたがたは，選ばれた種族，王国の神権者……」(欽定訳Iペテロ2：9）この地上に住むあらゆる人々の中で，私たちは最も栄誉ある民である。

私たちは神の霊の息子として前世で大会議に臨み，天父が福音の計画をお示しになるのを耳にした。そして第一の位を保つ者はさらに附け加えられ，第二の位を保つ者は「とこしえに栄光をその頭に附け加えられん」と，そのみ言葉を拝聴したのである。(アブラハム3：26)

私たちは第一の位を保った。なぜなら肉体を「附け加え」られてこの地上にいるからである。

私たちがさらに，とこしえに栄光をその頭に付け加えられることを望むならば，この地上にいて次のふたつのことをなさねばならない。まず第一に神権を受けることであり，第二に神権の召しを全力を尽くして遂行することである。主は，神権なくしてだれもこの栄光にあずかることはできないと言われた。「而して汝らが受けたるこの神権に来らざる者はすべて禍なるかな………」(教義と聖約84：42)

神権を受けた私たちは，神権の召しを全力を尽くして遂行するならば，さらに栄光を付け加えられるであろう。さて私はあなたがたに，主が神権につける誓約を私たちにお与えになるときに用いられた言葉を聞いていただきたいと思う。

主は言われた。「およそ忠実にしてわが今語れる二つの神権を得，而してその天よりの召を全力を尽して遂行する者たちは，(ただ受けるだけではない。受けて全力を尽くして遂行するのである)『みたま』により聖められてその肉体再新さる。

これらの者はモーセの息子たちとなり，アロンの息子たちとなり，(引用している章，すなわち第84章の啓示の前の部分で，主はメルケゼデク神権者をその神権の位に基づきモーセの息子たちとして，またアロン神権者とその神権の位からアロンの息子としておられる）アブラハムの子孫となり，また教会員にして王国の民となり神の選民となる。(私たちの意図するところはこの召しと選びを確かなものにすることである。それを可能にする唯一の方法は，とりもなおさず，神権を受け，その召しを全力を尽くして遂行することである。続けて主は約束された。)

主は言う，またすべてこの神権を受け入るる者は，われを受くるなり。(このことを考えていただきたい。神権を受け，その召しを全力を尽くして遂行する者は『われを受くるなり』と主は言っておられる。)

そは，わが僕らを受け入るる者はわれを受くればなり。

また，われを受け入るる者はわが父を受くるなり。

而して，わが父を受け入るる者はわが父の王国を受くるなり。この故

にわが父のもてるすべては彼に与えらるべし。(かくして栄光はとこしえに付け加えられ，主の持てるすべてのものが私たちに約束される。)

而してこは神権に属ける誓詞と誓約によりて然るなり。この故にこの神権を受くる者は，すべてわが父のこの誓詞と誓約とを受け（主からこの約束を受け)，而してこれをわが父は破ることも変えることも為したもうはずなし。(破るのは私たち人間の側である。そして実際多くの人々がこの誓約を破ってしまう。その結果はこうである。)

されど何人にまれ一度この誓約（神権を尊び，その召しを全力を尽くして遂行するという誓約）を受けて後これを破り，またことごとくこれに違背する者はこの世に於ても未来の世に於ても罪の赦しを受くることなかるべし。(ここで主が述べておられるのは必ずしも赦されざる罪のことではなく，この神権を受けてしかもなおその何たるかを理解していながら，召しを全力を尽くして遂行しない者は，後の世で取り戻そうと思っても取り戻せないものを失ってしまうということである。)

われ今汝らに一つの誡命を与えて汝ら自らを警めしむ。すなわち汝ら永遠の生命なる言に勉めて心を留めよ。

そは，汝ら（神権を受けたる者は）神の口より出るすべての言によりて生くべけれなり。」(教義と聖約84：33—44)

この勧告から私は，「1847年1月14日，アイオワ州カウンシル・ブラフスの近くミズーリ河の西岸，オマハネーションのイスラエル陣営の冬季野営地に於て，大管長ブリガム・ヤングを通じて」与えられた偉大な啓示の中の主のみ言葉を思い出した。(教義と聖約136前書き)

「……そは汝らいまだ潔からざればなり。また，汝らいまだわが栄を受くる能わず，されど汝ら忠実にわが言いたる言をすべて守らば栄を見ることを得ん。この言はアダムの時よりアブラハムに至り，アブラハムよりモーセに至り，モーセよりイエスとその使徒に至り，イエスとその使徒よりジョセフ・スミスに（そして私たちはこう付け加えることができよう。すなわち『そしてキンボール大管長に』）至るまでのものにして………」(教義と聖約136：37)

「神権に属ける誓詞と誓約」という言葉を考えるとき，あなたがた一人一人もかつて同じ経験をしたことであろうが，私は，約束された祝福の崇高さに畏怖の念をおぼえ，また同時に，その祝福を受けるに必要な条件を考えると，自らを低くせざるを得ない。

約束の祝福を受けるために，私たちが「勉めて心を留め」なければならない「神の口より出る」「永遠の生命の言」は数多くあると思われる。その中に次の戒めがある。「安息日を覚えて，これを聖とせよ。」(出エジプト20：8)

私たちの時代にあって，主は安息日を守ることを非常に重要視しておられる。聖徒たちが初めてミズーリ州インデペンデンスに集合したとき，主はシオンを建設しそこに住む人々が守らなければならない標準を示された。その中で強調されたもののひとつが，安息日の遵守である。主は言われた。

「汝なおさら充分に世の汚れに染まざる様，祈りの家に行きてわが聖日に汝の聖式を捧ぐべし。

そは誠にこの聖日は，汝命ぜられて働きを休み，いと高き者に礼拝を捧ぐべき日なればなり。

されどこの主の聖日に於ては，いと高き者に汝の捧物と聖式とを奉りて，兄弟たちに向い主の前に於て汝の罪を告白するを忘るべからず。

而して汝この日には他に何事をもなすことなかれ。たゞ汝が断食を完からしめんため，言い換うれば汝悦びを以て充されんため，真心をこめてその食物を支度することのみを為すべし。」(教義と聖約59：9,10,12,13)

私たちは安息日を安息日として過ごさないことが普通になっている社会に住んでいる。そのような中で神権の召しを全力を尽くして遂行するために，私たちは，世にあって世のものとなってはならない。なぜなら主はこう言われたからである。「シオンに住む民は，また安息日を守りてこれを聖くすべし。」(教義と聖約68：29)

安息日に買物をするべきではない。安息日にシオンの町で買物をする人はひとりとしていないだろう。

安息日に娯楽行事に参加したり，猟やつりに出かけるべきではない。

もし，私たちが神権の召しを全力を尽くして遂行したいと心から思うならば，主が教義と聖約の59章で与えられた指示の範囲内で安息日を過ごすはずである。

ほかにも「永遠の生命の言」をあげてみよう。

「………汝ら主の器を持つ者よ潔くあれ。」(教義と聖約133：5。38：42も参照のこと)

「だから世の人々よ，汝らはみな自分のしたことに対して裁きを受けるようになることを記憶せよ。

それで，もしも汝らが自分らの試しの生涯で悪いことをしようとするならば，神が裁きをなさる座で自分たちが汚れていることが解るであろう。汚れているものは神と一しょに住むことができぬから，汝らは永久に捨てられなくてはならない。」(Iニーファイ10：20,21）これはニーファイの言葉である。

「しかしごらん，またよく聞け。神

の王国はけがれているものでないから，どんな不潔なものも神の王国に入ることができないのである。……」（Ｉニーファイ15：34）

それから600年の後，復活したイエスはニーファイ人の弟子たちにこう語られた。「そもそも，清からざるものは御父の王国に入ることを得ず。信仰をし，すべての罪を悔い改め，終りまで誠をつくし，以てわが血によりてその衣を洗いし者のほかには御父の安息に入り得る者なし。」（IIIニーファイ27：19）

この最後の神権時代の初頭，イエスは大会に集った兄弟たちにこう言われた。「汝ら悪しき人々の仲間より離れよ。己れ自らを救え。汝ら，主の器をもてるものは潔くあれ。」（教義と聖約38：42）

そして同じ年に再びイエスはこう言われた。「汝らバビロンより去れ。汝ら主の器を持つ者よ潔くあれ。」（教義と聖約133：５）

以上あげた聖句は，パウロがコリント人へ書き送った手紙の中の一節を思い起こさせる。「あなたがたは神の宮であって，神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。もし人が，神の宮を破壊するなら，神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら，神の宮は聖なるものであり，そして，あなたがたはその宮なのだからである。」（Ｉコリント３：16,17）

現代社会は汚れた行為のるつぼと化している。もし神権の召しを全力を尽くして遂行しようと思うならば，私たちはそのような社会に対して油断なく身を固めておかなければならない。

主は知恵の言葉の中でそれらの行為についていくつか警告を与えられた。

「すなわち，汝らの中に葡萄酒または強き飲料を飲む者あらば，見よ，それは宜しからず。また汝らの御父の眼にも適わざるなり。……」

「……タバコは体のためにならず……。」

「また言う。熱き飲料は体や腹のためにならず。」（教義と聖約89：5,8,9）

言うまでもないが，いかなる種類のものであっても，習慣性のある薬剤を飲用することは知恵の言葉の真意をそこなうものであり，心身共に汚れることになる。

召しを全力を尽くして遂行しようとする神権者は，私たちのこの放縦の社会に蔓延するあらゆる汚れ，書物に，ステージやスクリーンに，娯楽場に，その他いろいろなところで見受けられる汚れを遠ざけるはずである。神は潔くない神権者がみもとに来るのを許したまわない。

今日の私たちの社会を我がもの顔にはいかいする最も堕落した，人を卑しい者にする悪は，不貞という悪である。主がシナイ山からとどろくような声で語られた言葉をもう一度思い起こそうではないか。「あなたは姦淫してはならない。」（出エジプト20：14）

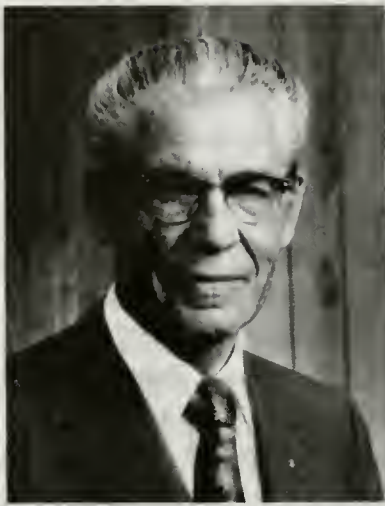
モーセの律法では，この罪を犯した者の受ける罰は死であった。私たちが住むこの堕落と放縦の時代にあって，人々は，この罪を犯しても別に罰を被ることはないと考えている。しかしながら神の律法にあってこの罪が人の霊を滅ぼす罪であることは，いつの時代も同じである。その受ける報いは霊の死なのである。姦淫の罪を犯し，まだ赦しを得ていない人は，神権の召しを全力を尽くして遂行していくことはできない。クラーク副管長はかつてこう語った。「主は私通（未婚の男女が性的な関係を持つこと──訳者注）と姦淫との間にいささかの区別もおいておられない。」（*Conference Report*「大会報告」1949年10月，p. 194）私はこれにこう付け加えたい。「主は姦淫と性の倒錯を，いささかも区別しておられない」と。

イエスが私たちにお与え下さった標準はこうである。「『姦淫するな』と言われていたことは，あなたがたの聞いているところである。

しかし，わたしはあなたがたに言う。だれでも情欲をいだいて女を見る者は，心の中ですでに姦淫をしたのである。」

この罪がいかに重大であるかは次の節で明らかである。「もしあなたの右の目が罪を犯させるなら，それを抜き出して捨てなさい。五体の一部を失っても，全身が地獄に投げ入れられない方が，あなたにとって益である。」（マタイ５：27―29）

確かに私たち神権者は，神権の召しを全力を尽くして遂行し，やがては永遠の生命を得て「とこしえに栄光をその頭に附け加えられる」者として，次の主の戒めを守るよう熱心に務めるはずである。「汝ら主の器を持つ者よ潔くあれ。」（教義と聖約133：５）

そのようになることをへりくだり祈りつつイエス・キリストのみ名により，アーメン。

主に選ばれし者

大管長会第一副管長

N・エルドン・タナー

愛する兄弟の皆様，多くの場所において，直接間接にこの会に臨んでいる神権者の兄弟たち，(今晩，この会には20万ほどの人々が臨んでいるが) この集りは王の軍勢，偉大なる兄弟たち，世にあって最も大いなる力である。神の神権者たるこの末日聖徒イエス・キリスト教会の偉大なる兄弟の中のひとりであること，それは何たる幸福，何たる祝福であろうか。

今宵，私たちは導きを受け，みたまを受け，信仰と証を築き，美しいコーラスを楽しんだ。さて私たちはこれからほどなくして，神の予言者の声に耳を傾ける特権にあずかる。彼はイエス・キリストの教会の大管長，地上における今日の主の代弁者である。私たちはこの偉大なる指導者スペンサー・W・キンボールに従おうという決意と聞く耳とをもって，彼の声に耳を傾けようではないか。

私は主が選ばれた4人の予言者に，副管長として仕えるというこの上ない特権にあずかった。私は彼らがまさしく神の予言者であることを証する。私はここで皆様方と共に，主が教会の指導者たちをどのようにして選び，聖任し，任命したもうかを再度考えてみたい。その継承は，何と円滑に行なわれることであろうか。

イエスは地上におられたとき，伝道を始め教会を建て，「弟子たちを呼び寄せ，その中から十二人を選び出し，これに使徒という名をお与えになった。」(ルカ6：13) そして主は使徒たちに言われた。「よく言っておく。あなたが地上でつなぐことは，天でも皆つながれ，あなたが地上で解くことは，天でも皆解かれるであろう。」(マタイ18：18)

このことから，主は彼らに鍵と権能を含む完全な使徒職を与えられたことがわかる。彼らは時来たらば先任使徒として，または教会を預る者として働くことができた。ペテロ，ヤコブ，ヨハネはキリストが地上を離れたもうた後，最高管理体である大管長会を構成する者として働くよう任命されたのである。

末日における教会も，同じ原則に基づいている。ジョセフ・スミスが主に選ばれた後，ペテロ，ヤコブ，ヨハネが現われて，彼とオリバー・カウドリにメルケゼデク神権を授け，彼らを主イエス・キリストの使徒に聖任した。

教義と聖約には，ジョセフ・スミス（二代目）は教会の第一の長老として召されたと記されている。「……父なる神の御こころと汝らの主イエス・キリストの恩恵とにより汝は聖見者，翻訳者，予言者，イエス・キリストの使徒，教会の長老と称せられん。また汝は聖霊に感じて教会の基を築き，それを最も聖き信仰に築き建てん。」(教義と聖約21：1，2）

12人の使徒が召されることと，その人々を選ぶ方法について予言者とオリバー・カウドリに知らされたのは，教会が組織される前年1829年6月であったが，最初の十二使徒評議員が任命されたのは1835年のことであった。それからモルモン経の3人の見証者たちは予言者ジョセフ・スミスを通して与えられた主の指示のもとに，使徒に聖任されるはずの12人を捜し出すよう指示を受けた。(*Documentary History of the Church*「教会歴史記録」第2巻p.186，187，教義と聖約18章)

その人々は予言者ジョセフの指示に従って選ばれ，使徒に聖任され，パウロやイエス・キリスト時代の使徒たちに与えられたと同じ権能を与えられた。このことは次のように記されている。「またこの十二人は，前記の三人の管理大祭司（教会の大管長会）と権威と権能とを同じくせる

定員会を構成す。」（教義と聖約107：24）つまり，権能においては大管長会と同じである。

また，「教会歴史記録」にはこう記されている。「次にスミス大管長は現在の大管長会の次に位置する十二使徒の義務と権能について説明した。……また十二使徒は，『私ならびに現在私の副管長であるシドニー・リグドン，およびフレデリック・G・ウィリアムス』によって構成される大管長会以外のものの管理は受けない。『もし私がいなくなれば（死ねば），十二使徒を管理する大管長会はなくなる』。」（「教会歴史記録」第2巻pp. 373—74）

ウイルフォード・ウッドラフ大管長は語っている。「末日聖徒の皆様に申し上げる。神の王国の鍵はここにある。またこれからもあるであろう。人の子の再臨のときまで。すべてのイスラエルに知らしめよう。……かつて地上に存在した者のうちで，神の王国の鍵を持ちながら人を迷いに導いた者はひとりもいない。」（*Discourses of Wilford Woodruff* 「ウイルフォード・ウッドラフ説教集」pp. 73，74）ジョセフ・スミスの死後，ブリガム・ヤングは次のような言葉をもって会を召集した。「私は特別な会を開き，さまざまな神権定員会に属する人々とお会いしたいと思う。……」そしてこの集会で彼はこう述べた。

「……私はこの時代におけるイエス・キリストの使徒——予言者ジョセフを通して啓示によって神に召され，地上の神の王国の鍵の保持者として聖任され油注がれた使徒として，十二使徒定員会の私の召しを遂行する。」

そして彼はこう尋ねた。「教会はこう望んでいるのだろうか。彼らは十二使徒が人々の最高管理体として支持されることを望んでいるのだろうか。」この案は全員一致で支持され，彼が反対の挙手をとったが，手を挙げる者はいなかったと記録されている。

ブリガム・ヤングが，順次神権定員会の支持を得ようとしたことは明らかである。同様に今朝私たちも，聖会においてそれを行なった。彼はこう言っている。「これ（この支持の方法）は他の方法に代わるものである。またこれは定員会ごとに行なわれる。」（「教会歴史記録」第7巻，pp. 230，232，240）続いて彼は，新しい大管長会が組織されるまで，十二使徒はひき続き元の地位に留まって働き，王国の鍵を持ち，教会の業を管理し，すべての事柄に対して正式な指示を与えると説明した。ジョセフ・スミスの死以来，これまでずっとこの手順がとられてきた。そのように，このときも大管長会が組織され，ブリガム・ヤングが教会の大管長となるまで3年半の間，十二使徒が教会を指導したのである。

ウイルフォード・ウッドラフ大管長は，なぜ十二使徒会の会長以外の者が教会を管理するよう召されるべきではないのか，その理由を問われたとき，このように答えている。「第一に，教会の大管長が亡くなった時だれが教会を管理する権能を持つのだろうか。それは神の啓示によって聖任され組織された十二使徒定員会である。他のいかなるものもこの権能を持たない。では，十二使徒が教会を管理するときは，だれが教会の管理者となるのだろうか。それは十二使徒会の会長である。大管長会が組織され，大管長が2名の副管長を管理するときに，大管長が教会の管理者であるように，彼が十二使徒を管理する間は，事実上教会の管理者である。」これは1887年3月28日ヒーバー・J・グラント長老宛の手紙の中に述べられており，ウイルフォード・ウッドラフの署名がある。この原則は今に至るまで百年有余続いているのである。

教会の全歴史を通じて，教会の大管長として選ばれた人々は，確かに予任された，その時期に最もふさわしい人であった。ジョセフ・スミスは初めてブリガム・ヤングに会ったとき，将来彼が教会の大管長となるであろうと言ったと記録されている。ブリガム・ヤングが十二使徒会の会長となり教会の大管長となった出来事について考えてみると，エレミヤやその他の予言者がそうであったように，彼は確かに生を受けるずっと以前から予任され選ばれていたことがわかる。

予言者ジョセフが世を去ったとき，教会の大管長としての責任を受ける準備のできている人はいないように思われた。ジョセフは教会のために啓示を受ける賜を授けられた人，他の多くの予言者に勝る力を備えた人であり，彼こそ，その業を遂行するにふさわしい人であった。しかし彼の死後教会の大管長となったブリガム・ヤングも，その時代のために備えられた人だったのである。彼もその時に必要な事柄を行なう特別な賜と才能とをもっていた。ブリガム・ヤングは偉大な指導者であり，開拓者であり，組織者であった。彼はかつて予言者ジョセフが予言した通り，まさしく教会を導く人，ロッキー山脈のただ中に教会を打ち建てる人であった。

また，ジョン・テイラー大管長がいかにして守られたかを知れば，さらにこのことに納得がゆく。ジョン・テイラーは殉教するはずの人であったかもしれない。しかしながら彼は，ジョセフ・スミスが殺されたときに受けた致命的な傷に耐えたのである。彼の働きをすべて考えてみれば，彼が確かにそのとき必要とされていた

人であることの裏付けが得られる。同じことが彼に続く教会のすべての大管長にも言える。

リー大管長が教会を管理した期間はほんのわずかであったが，彼の指導のもとに大いなる進展と成就があり，教会のさらに大きな進歩と成長の基が置かれたことを理解するに違いない。

今私たちは，主に選ばれ予任された新しい大管長を迎えた。彼は30年間使徒として訓練され，試みられ，鍛えられ，この高く聖き役職のために，3度も命を救われた。

「予言者ジョセフ・スミスの教え」に次のような言葉がある。「世の人々のために働くよう召されたすべての人々は，この世が造られる前，天上の大会議において，正にその目的のために聖任されていたのである。」（p. 365）

何度も言われてきたことであるが，予言者を召し，予言者の任を解きたもうのは主である。私たちは常にこのことを心にとめておかねばならない。他のいかなる力も予言者を召したり，予言者の任を解いたりすることはできない。前に指摘したように，教会の大管長が世を去ったときは，十二使徒定員会が後を受け，先任使徒すなわち十二使徒会会長が管理者となる。

ハロルド・B・リー大管長が亡くなったときに起った出来事は重大な意味を持つ。ロムニー副管長は病院に呼ばれ，リー大管長と話した。リー大管長は，しばらくの間その任務が遂行できなくなると考え，ロムニー副管長に言った。「タナー副管長は遠くへ行っています。私の代わりに，教会の仕事を進めていただけませんか。」その少し後，キンボール会長がやって来て，ロムニー副管長に「私にできることでしたら何でもいたしますから遠慮なくおっしゃって下さい」と言った。しかし，そうこうするうちにリー大管長の死が告げ知らされると，今度はロムニー副管長がキンボール会長に向かって言った。「さあ，責任は十二使徒定員会の会長であるあなたに移りました。私はあなたの指示に従います。私に助けられることなら何でもしますよ。」

これこそ教会の秩序に従った全き範例であり，教会が大管長会空席のまま放置されることは決してなく，大管長会の次世代への移行がいかに円滑に行なわれるかを示す，すばらしい模範である。キンボール会長は十二使徒会会長として，時を置かず教会を管理する責任を受けた。

私はここで彼が教会の大管長として指名され聖任されたときの手順について述べたいと思う。しかしその前に，14年前の1960年4月4日に与えられたキンボール大管長の大会説教を引用したい。

「優しく幼な子を見おろしながら，その子が大管長に，あるいは国の指導者になった姿を心に描かない母親がいるだろうか。母親は腕の中に抱かれている子供が，政治家に，あるいは指導者に，予言者になる姿を心に浮かべるものである。そしてどの夢かが現実のものとなるのである。ある母親はシェイクスピアを世に出し，またある母親はミケランジェロを，そしてアブラハム・リンカーンを，そしてある母親はジョセフ・スミスを世に送った。

神学者がよろめきつまずいているとき，人々が口々に偽りを語り心の定まらないとき，人々が主の言葉を求めてこなたかなたへはせまわるのに，これを得ないとき，また過ちが拭い去られ霊的な暗黒が晴らされ，そして天が開かれることが必要なときに，ひとりの幼な子が生まれる。」何と予言的なことであろうか。（1960年4月大会報告）

1895年3月28日，ソルトレーク・シティーにちょうどこのような幼な子が産まれた。名前はスペンサー・ウーリー・キンボールである。この偉大な人の誕生から今日までの半世の間には，1974年7月号の聖徒の道にボイド・K・パッカー長老が巧みに書き表わされたように，非常に興味ある話がある。

ウィルフォード・ウッドラフは大管長として在任当時，大管長の死後は時を置かず次世代の大管長会を組織することが主のみこころであると語った。ゆえに，1973年12月30日，リー大管長死去のわずか4日後，十二使徒定員会のキンボール会長は大管長会の再組織について話し合い，定められている措置をとるために，十二使徒定員会全員を神殿の一室に集めた。副管長であったロムニー長老と私は，それぞれ十二使徒定員会の自分の位置へ戻った。

キンボール会長はリー大管長の死去に深い悲しみの意を表わし，自分がその任に不十分であると思われる旨を述べた後，大管長会再組織についてどのように感じているかを先任順に話すようにと言われた。

十二使徒全員が話し終わると，彼は今こそ大管長会を再組織する時であり，主は彼すなわちスペンサー・W・キンボール会長がこの期間教会を管理するよう望んでおられると感ずる旨を表明した。愛に満ちた主のみたまがあふれんばかりに注がれ，兄弟たちの思いにも言葉にも完全な一致と調和があった。我々の望みも目的もただ主のみむねに従うことであった。だれの心にも疑問は湧かず，すでに表明された主のみむねのみが胸にあった。

その後，エズラ・タフト・ベンソン長老が，大管長会を組織し，スペンサー・W・キンボールを大管長，予言者，聖見者，啓示を受ける者，

教会を預る者として支持し，任命すべきであると正式に提議した。この提議は即座に満場一致で採択された。

キンボール会長は，謙遜に進み出て，その提議を受け入れることを表明し，それから主のみたまと祝福が彼に注がれ，主の御旨を行なうことができるようにと祈られた。彼は常にリー大管長が教会の大管長として働けるよう，健康と体力と活力と主の祝福が与えられるようにと祈っていたと語った。また彼は愛する妻カミラと共に，真心からこの責任が自分の肩に置かれることがないようにと祈り，リー大管長は自分よりも長生きされるに違いないと考えていたと特に強く語った。この時私はゲッセマネの園で祈られた救い主を思い浮かべた。「……わが父よ，もしできることでしたらどうか，この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし，わたしの思いのままにではなく，みこころのままになさって下さい。」（マタイ26：39）そして彼はその杯を受けた。

その後，彼は第一副管長としてN・エルドン・タナーを，第二副管長としてマリオン・G・ロムニーを選んだ。私とロムニー長老はキンボール会長を教会の大管長として支持すること，全力を尽くしてそれぞれの責任を全うすることを表明し，彼の上に主の祝福があるよう祈った。

続いてベンソン長老が十二使徒評議員会会長に支持された。そしてキンボール長老は部屋の中央に席を取り，全員が彼の頭に手を按いた。我々は真に主のみたまが我々と共にあり，暖かいものが胸に満ちるのを感じた。ベンソン長老のすばらしい祈りと祝福によって，スペンサー・ウーリー・キンボールは末日聖徒イエス・キリスト教会の予言者，聖見者，啓示を受ける者，そして大管長として聖任され任命された。

私はすべてが教会の方法と秩序にのっとって行なわれたこと，そしてスペンサー・W・キンボールが主の予言者，主の教会，地上における主の王国の大管長であることを証する。

これは皆様方に対する，そしてまた，世に対する私の証である。彼が大管長として指名されて以来，ステーキ部大会において，そして本日のこの聖会において，人々は熱烈に彼を支持した。キンボール大管長を神の予言者として受け入れ支持し，神の王国の建設のために，さらに言うならば大いなる義のために，彼の指示のもとに全力を尽くして働き，世を私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの再臨に備えさせることは，私たちひとりびとりにとって大いなる特権であり名誉であり責任でもある。

しかしながら今までもそうであったように，まだ大管長の選出と手順に疑問を持つ人がいる。ある人などは自分が教会の大管長になるべきであるなどと私に書いてよこした。私は皆様に申し上げたい。今述べたような教会における手続きやイエス・キリストの教えは人間の手により審議に付されるような類のものではないことを覚えていただきたい。それは主の教会，加えて王国の会員であること，予言者を受け入れ支持するという特権と責任と祝福を伴うものである。そして私たちが教会員として，また私たちの持つ神権に対してふさわしいかを決めるのは私たち自身の問題なのである。

教会の指導者たちは主に対して責任があるということを常に心にとめておいてほしい。主は指導者たちが誤った方向に進むとき，彼らの道を正し，彼らがその任を成し終えたとき彼らを解任したもうのである。我々は以前からずっと警告し続けてきた。神が教会を管理する者として権能を与えられた人に逆らい，悔い改めないならば，主はその人からみたまを取り上げられる。

兄弟たち，主のみたまの導きを受け，その祝福に浴したいと望むならば，つぶやかず，不平を言わず，欠点を捜さず，その地位には他の人が就くべきだなどと考えず，主の選びたもうた人に忠実でありなさい。三人の見証者のひとりであり，天の御使いから神権を受けたオリバー・カウドリや大管長会の一員であったシドニー・リグドンのような高い地位にあった人でさえ，神の予言者に異議を唱え，批判したために教会から脱落した。

皆様が，指導者として神が選びたもうた人を誠実に信じ，支援し，支持し，従うよう祈る。そうするとき私たちは祝福を受け，主のみたまは常に私たちと共にいて下さるだけでなく私たちが家族に信仰深く活発であるようにと教え励ますとき家族の上にも同様の祝福が注がれるのである。そして神のみ業は成し遂げられ，神のみこころが行なわれる。主は主の予言者についてこう言っておられるからである。

「そは彼の言は，汝の全き忍耐と信仰とを以て，あたかもわが口より聞くが如くにこれを受け入るべきなればなり。これらのことを為さば，地獄の門も汝らに打ち勝たざるべし。而して，誠に主なる神は汝らの前より暗闇の力を追い払い，汝らの為と神の御名の栄光のためにもろもろの天をも震い動かしめん。主なる神かくの如く言う。われは彼に霊感を与えて，善を為すために大いなる力を以てシオンの大事を推し進めしむ。……」（教義と聖約21：5—7）

イエス・キリストの御名によりて申し上げる。アーメン。

豊かで満ち足りた人生を計画する

大管長

スペンサー・W・キンボール

今宵，神権者と共に集う機会にこの上ない幸福を感じている。この土曜日の夜の神権会のために早くから集まって来られた父親の方々，ならびにその息子たちを拝見して喜びはまた格別である。大勢の方々は，良い席を取るために，１，２時間も前から集まって来られた。また何千名もの父子が連れ立ってこのタバナクルへあるいは国中の数多くのステーキ部とワード部の建物へ急いでいる姿は喜ばしいものである。これは私たちが世に広め，愛している家族生活の喜ばしい一面であり，同時に，世の人々が本来家族のあるべき姿として認め始めているものである。すなわち，父親とその息子は家族生活の一環として一緒にここで時を過ごすのである。

私たちは皆さんの出席をいただき感謝している。皆さんに非常な感謝を覚え，また心からの愛を感じている。

まず，皆さんの献身と忠実な働きをたたえたい。全般的に神殿では最大限にその仕事が進められており，礼拝堂には人が満ちている。出席数は増加し，献身度も増している。家庭の夕べを開く家族も増加の一途をたどっている。私たちは，教会全体に見られる信仰と愛の発露を喜んでいる。特に，合衆国外のステーキ部と伝道部における会員数の増加と効果的な活動の進展を喜んでいる。この教会は，世界の教会である。さらに私たちは，人種，国籍を問わず全人類が属する教会へと一歩一歩近づきつつあると信じている。

木曜日に他の指導者の方々と話し合った幾つかの事柄を，ここで皆さんに発表したい。大管長会と十二使徒評議員会は，すべてのワード部ならびに独立支部において長老定員会を組織することを認可した。これに従い，ワード部あるいは独立支部内に住む長老たちを，最大96名までその人数に関わりなく，会長会の下に長老定員会として組織することができる。96名以上の長老がいるところでは，定員会を分割する必要がある。幹部の兄弟たちは，より多くの地元のユニットで長老定員会を強く活動的にすれば，この偉大な力の源を最も有効に利用できると考えている。

もうひとつ，神権に関する事柄として次のものがある。すなわち，ステーキ部長は，七十人最高評議員会から適正な手続きによって事前に承認を得た兄弟たちを，ステーキ部内で七十人に聖任し，また七十人会長に任命することができる。これは，今日この時をもって直ちに発効するものである。これに伴って，多くの遅延が是正され，ステーキ部指導者と七十人の間の活動が効果的に進むようになるにちがいない。この新たな変更に伴う効果が伝道活動にまで及ぶよう望んでいる。

指導者の兄弟たちに申し上げたい。皆さんは，手引きや会報類を読んでいたら，数多くの手紙を節約できていたであろう。特に，神殿推薦状発行に先立つ面接に対して皆さんの注意を喚起したい。また，問題があれば監督のもとに行くよう，聖徒たちに勧めてほしい。

父親である皆さんが，確固たる態度で息子を育てていることに対して賞賛の気持ちをおくりたい。私たちは皆さんすべてを愛しており，皆さんの信仰を高く評価している。また，皆さんの成長と努力を誇りに感じている。年長の多くの子供たちはすでに伝道を終え，さらに多くの若者たちが，将来宣教師になろうとしている。

皆さんは，人生を豊かで満ち足りたものにするために，計画を立てなければならない。執事である皆さんにとって，現在計画することは，必

ずや豊かに人生を生み出すものとなるにちがいない。伝道に捧げるためにすでに貯金を始めているであろうか。

皆さんは，職業や生涯の仕事をまだ選んでいないかもしれないしかし，たとえ将来弁護士か，医師か，教師か，技師か，いずれになるかわからなくても，人生において定めることのできる一般的なものがたくさんある。皆さんはすでに数々の決断を下しており，また現在下そうとしているものもある。今現在から結婚までの間に，皆さんは何をしようと計画しているだろうか。また，結婚のために何をしようと考えているだろうか。

皆さんは，きわめて忠実な執事，教師，祭司になるよう今決心することができる。取り消すことのできない誓約をもって今それを決心することができる。立派な聖徒になることができるし，自分の時間を正しく有効に使うこともできる。もし自分の時間を適切に使うならば，あらゆる点で均衡のとれた，幸せな人生を送れるのである。

皆さんは今この早い時期に，伝道に出られる年齢になったら誉れある伝道をしようと決心することができる。そして，その目標を抱いて，お金をかせぎ，それを貯め，自分の伝道にそれを使い，また同時に，生涯の中の栄えあるその時期のために思いと心を十分に備えるため，学び，働き，あらゆる機会をとらえようと決意することができる。

伝道プログラムはどうしても従わなければならないものでしょうか，という質問を，これまでしばしば受けてきた。その答えはもちろん，否である。すべての人には自由意志が与えられている。また，すべての若い男性は伝道に出るべきでしょうか，という問合せもある。それに対する教会の回答は，然りである。また，主の答えも然りである。この答えを拡大して私たちはこのように言う。確かに，すべての男性会員は，什分の一を支払い，集会に出席し，清い生活を送り，世の汚れから離れ，主の神殿で日の光栄の結婚をするよう計画すべきであるが，それと同じように伝道に出るべきである。

以上あげたものはどれひとつ，強制ではないが，しかし自分自身のためにこれらを行なうべきである。次の詩は私たちによく知られている。

汝知らずや，人みな自由なるを
　人生を選び，己が行く末を選ぶ。
とわなる真理与えられたれば
　神，人を天は強いたまわじ。
知恵と愛と光もて，
　説き，勧め，正しく導き，恵みたもう。
はかり知れざる善とやさしさ，
しかれども人に強いたまわじ。
（英文讃美歌　90番）

福音のいかなる部分にも強制は存在しない。1833年，主はこう言われた。「見よ，ここに人の自由意志あり。而して，ここに人の罪を受くる所以あり。何となれば太初より在りしところのものは人々に明白なり。然るに，人々はその光明を受け入れざればなり。」（教義と聖約93：31）

これは，アダム以来，主は人々に正しい教義を教えてこられ，私たちはこれらを受け入れることも拒むこともできる，しかしその責任は私たちにある，という意味である。同時に，バプテスマの時に聖霊を受けている私たちは，皆善悪を区別できるという意味でもある。良心は私たちに，何が正しく，何が誤っているかをささやく。従って，私たちは他人を責めたり，自分の置かれた情況のせいにしてはならない。何が正しいかを私たちは知っているのである。

すべての人には自由意志がある。盗むことも，ののしることも，酒を飲むこともできる。ポルノ雑誌で心を汚すこともできる。怠惰に暮らし，義務を怠り，性的な罪を犯し，また殺人さえ犯すことがあるかもしれない。そこには何の強制もない。しかし，罪は早晩，完全にそれに相応する罰をもたらすことを知らなければならない。それ故，悪行を選ぶ者は実際愚かだと言える。

人は皆，集会に出席せず，什分の一を払わず，伝道に出ず，神殿で受けた義務と特権を無視することもできる。しかし賢明な者ならば，それが恵みを失う行為であることを知っているにちがいない。

主はこれにも答えておられる。「また，人ことごとくその手に正義を取り腰に忠信を纏いて，世に住める人々に警めの声を挙げ，言葉と逃げ走ることと両つながらによりて悪人の上に荒廃のおそい来るを宣べんことを欲す。」（教義と聖約63：37）「人ことごとく」と言われていることに気づいたためであろうか。すべての少年も人の中に含まれる。当然のことながら，私たちは不浄な生活を送り，性的あるいはその他の罪悪に浸っている若者を伝道に出すことはない。このような若者は十分な悔改めによって清められる必要がある。そうして初めて，考慮されるのである。従って再び繰り返そう。ふさわしく，かつ資格のある末日聖徒の男性はことごとく，伝道に出るべきである。

清くかつ自由な，豊かな満ち足りた生活を送れるよう，すべての若者は，自分の人生の方向を定め，また自分自身と天父に対して，どんな人生を送り，それを栄えあるものとするために何をするかについて，誓約を立てる必要がある。

ある人がこのことを次のような話

に言い表わしている。

「私は夢の中で，どことなく銀行のように見える，ある立派な建物に来た。しかしそこは銀行ではなかった。なぜなら，『時間売ります』という，真ちゅう製の看板がかかっていたからである。

そこで私は，疲れ切って青ざめた男が体を引きずるようにして階段をのぼって行くのを見た。彼は病人のようであった。彼がこう言うのを聞いた。『医者に，来るのが5年遅かったと言われました。ですからその5年を買うんです。そうすれば，命が助かります。』

それからまた別の男が来て，事務員に言った。『神が私にすばらしい能力と才能を与えて下さっていたことに気づいたときには，もう遅かったんです。私はそれらを伸ばすことを怠ったのです。だから，なるはずだった自分になれるように，10年を売って下さい。』

次に若い男が来て言った。『会社から，もし私に準備ができていれば，来月からある重要な地位に就けると言われました。でも，私は準備してません。来月その地位に就けるように，準備するための2年をください。』

このように，病弱で，希望がなく，落胆し，苦しみ，ここを訪れた多くの不幸な人々がやがて顔に微笑をうかべて帰っていったのであった。その顔に言い尽くせない喜びがあった。非常に必要とし欲していたもの，時間を手に入れたからである。

やがて私は目覚めた。そして，これらの男たちが持っていないもの，彼らが決して買うことのできなかったもの，時間が私にあることを喜んだ。私のしたい，そしてしなければならない多くの事柄を行なう時間を。もしその朝，口笛を吹きながら仕事に就いたとしたら，それは大きな幸せで心が満たされていたからである。もし時間を有効に使うなら，なお十分な時間が残るからである。」（著者不詳）

私がほんの子供の頃立てた目標のひとつについてお話しよう。それはソルトレーク・シティーから来た教会の指導者が大会で，私たちは聖典を読むべきである，と言ったのを聞いたときのことである。私はそれまで一度も聖書を読んだことがなかったのを認めた。その夜その説教を聞いたあと，1ブロックほど離れた家に戻り，狭い屋根裏部屋への階段をのぼり，小さな机の上にある小さな灯油ランプに火をつけた。それから，創世記の初めの章を数章読んだ。1年後，私はその大きなすばらしい本のすべての章を読み終えて，聖書を閉じた。

私は読み続けていた聖書が66の書から成ることを知った。それから，聖書は1,189章にわかれ，（英文で）1,519頁もあることを知ったときには，読むのをやめようかとさえ思った。私の手に負えそうもなかった。しかし，他人にできることなら，自分にもできることを私は知っていた。

14歳の少年には理解しにくい箇所が数々あることを知った。また，特に興味のない頁もかなりあった。しかし，66の書を1,189章，1,519頁にわたって読み終えたとき，私はひとつの目標を定めてそれを達成できたという，言い知れぬ満足を味わったのであった。

私は今自慢をするためにこの話をしているのではない。私が灯油の明かりでそれをやれたのだから，皆さんは電気の明りでそれをすることができる。ただそれを言いたいがために例としてこの話を使ったに過ぎない。私は1頁も残さずに聖書を読み通したことを今でも喜んでいる。

私が子供の頃に定めたもうひとつの目標についてお話しよう。

私は知恵の言葉と，それを守って生活するときにもたらされる祝福とを耳にして成長していた。私はタバコを噛んでいる人々をよく目にした。しかしその口もとににじみ出ている褐色の汁を見ると，何とも気持ちが悪くなるのであった。自分で巻きタバコを作り，多くの時間を無駄にしている人々も見てきた。彼らは刻みタバコの包みと紙とを買い，1日のうち何度も，その紙に刻みタバコを広げ，それを巻き，細い方の端を曲げて，それからそのタバコを吸った。私には，それは全く無意味で時間とエネルギーの浪費であると思えた。しかしその習慣がしだいに人々の間に広まると，やがて既製のタバコが買えるようになった。女性が喫煙を始めたときに味わった嫌悪感を私は今でも覚えている。

私は少年の頃，私の住んでいた小さな町の通りで催された独立記念日の祝いに行ったことがある。そこではある人々は競馬に興じ，またある人々は賭け事師のようにそれらの馬に賭けていた。また，多くの人々がタバコを口にし，ポケットに酒ビンを持っていた。そして，ひどく飲んでいたために目もうつろで，やたらにしゃべり，不敬な言葉を吐いていた者もいた。

ポニーの組合せをしてレースの準備ができるまで少しの時間がかかった。そして，ほとんどそのたびに，だれかが「やろう，やろう」と声をかけた。すると男たちは，少年も含めて皆決められた場所に集まって，なぐり合い，血を流し，ののしり，憎しみ合ったのであった。

私は人々がこのように恥ずべき行為に走っているのを見て，また胸を悪くした。その日私はピンクレモネードを飲み，走る馬をながめながら，この小さな町に住むこれら多くの隣

人のように，ウイスキーを飲んだり，不敬な言葉を語ったり，ののしったり決してしないようにしようと，再び決心したのであった。

私が知恵の言葉を決して破らないようにしようと決心したのは，まだ小さな子供の頃であった。しかも，だれからも強制されずにそうしたのである。私はそれがどこかに書かれてあり，主がどう言っておられたか，おおよそを知り理解していた。また，主がこれを告げられたとき，これらすべての有害な要素を断つことを主は喜ばれること，従って私がしたいと考えた事柄は天父の喜びであることを，私は知っていた。そこで，私はこれらの有害なものに決して手を出すまいと堅く決心したのであった。十分に，またはっきりと決心したので，自分自身と天父に対して立てたこの約束を守り通すことは大して困難ではなかった。

後年，アリゾナ州のロータリークラブの地方理事をしていたときに，国際会議でフランスのニースに出かけた。その祝賀会の一環として，地方理事のための豪華な夕食会が催され，広い会場に豪勢な食事が準備された。その会場に到着したところ，それぞれの席に7つのグラスがおかれていた。また銀食器と皿が数多く並んでいた。しかもすべて，ヨーロッパで最上のものばかりであった。

食事が始まると，ウェイターたちが給仕のために入って来て，各テーブルに7人ずつつき，ワインとウイスキーをついだ。各席におかれた7つのグラスにアルコールがつがれ，美しい色を放っていた。私は故郷を遠く離れていた。そして多くの理事を知っていた。また彼らも私を知っていた。しかし恐らく彼らは，私の宗教も，知恵の言葉に対して私の取っていた態度も知らなかったことだろう。いずれにせよ，悪魔が私にささやきかけるような気がした。「いい機会だ。お前は国からはるか離れた地にいるんだ。ここにはお前を見ている者はいないぞ。グラスの中のものを飲んだって，だれにもわかりっこない。いい機会だ。」次に心地良いみたまのささやきを感じた。「お前は自分自身に誓約を立てている。決してそれを破らないと約束した。天父とも誓約を交わし，これまでそれを破ったことはない。この誓約を破ったら，今までのことはすべて水の泡だ。」1時間後にその席を立ったとき，7つのグラスはそのままであったと言えば十分であろう。グラスは，1時間前にアルコールがそそがれたまま，手も触れることなく，美しい色彩を放っていた。

さらに，少年時代のことを今思い出す。ある時，私たちのところに来た郡治安官から，私たちの住んでいた通りのすぐ北側にある家の木造のポーチの床下が，窃盗品の格好の隠し場所になっていたことがわかったと聞かされたときには，とても恐ろしかった。いや驚いたと言った方が良いだろう。その家に住んでいた若者は，窃盗犯だったのである。彼は物を盗む癖があったようである。だからと言って，自分がそれを使うかと言えばそうではない。それまで町中の多くの人々から，馬車のむちと馬車用のひざ掛けがなくなったという届けが出されていた。これらの盗難品はそのポーチの床下にあり，この少年も最後にはそれらを盗んだことを認めた。私たちがそのことでどれほどのショックを受けたか，また彼がこの恐ろしい弱点に打ち負かされたことで私たちは彼をどれほど気の毒に思ったか，今でも覚えている

R・W・エマソンは言っている。「人は皆，隣人にだまされることがないように気を配る。しかし時が経つと，自分がその隣人をだますことがないように心を配る日が訪れる。それから万事が好都合に進む。彼は買物用の手車を日輪の凱旋車に変えたのである。」（“*The Complete Writings of Ralph Waldo Emerson*”「ラルフ・ウォールド・エマソン全集」p.585）

私たちの行ないがどのように私たち自身に付き従うか，そして自分の蒔くものは必ず自分で刈り取らなければならないことを，この少年は知らなかったのである。私たちのすべての体験は人生の価値を増すか，あるいは損なうかのいずれかである。邪悪な思いを抱いたり，邪悪なことを行なえば，必ずそれ相応の報いが下される。

最近ある新聞に，2百万ドル以上の高額の額面小切手を拾った少女の話が出ていた。彼女はすぐにそれをどのように使おうかと思い巡らし始めたと，あとで語っている。しかし結局，その小切手を持ち主に返した。そして新聞によると，彼女が期待していたよりもずっと少ない礼金を受けたのである。正しいことを行なったことに対してなぜ報酬を期待するのだろうか。贈られた礼金に，なぜがっかりするのだろうか。人々は善行に報いを受ける必要があるだろうか。皆さんは，遺失物を返すときにお礼を期待しはしないだろうか。皆さんは，信仰箇条の第13条を学んでいることだろう。「われらは，正直，真実，貞潔，慈善，高徳なるべきこと，およびすべての人に善を行うべきを信ず……」

私は万引き行為について少し話したいと思ったが，時間がないようである。私たちの社会において，商店が万引きに対処するために，利益の中からかなりの割合を別分けしておかなければならないということは，全く恥ずかしいことである。末日聖徒の社会において，少なくとも住民

の一部が末日聖徒の社会において，このようなことがあるとはいまわしいことである。

では，もうひとつのちょっとした体験をもって話を結びたいと思う。それは，ペルーのトクエパラでのことである。私たちは教会堂を献堂していた。その鉱山の町で働いていた人々の多くはアメリカ人であった。献堂式の後，彼らはある家で食事をした。私たちがその家でほかの部屋に移ったところ，男の子が私のもとに来て言った。「キンボール兄弟，僕，伝道に出ようと思ってるんです。僕に祝福を与えて下さいませんか。」

そこで私は尋ねた。「ああ，いいでしょう。祝福を与えることはとてもうれしいことだからね。でも，先程別の部屋でお会いしたのは君のお父さんではないかな？」

「ええ，そうです。」

「じゃ，なぜ祝福をお父さんに頼まないのかな？」と私が聞くと，彼は答えた。「お父さんは祝福したくないと思います。」

そこで私はその場を出て，すぐにその父親のもとに行って尋ねた。「あちらにすばらしい息子さんがいますね。彼は父親のあなたから祝福を受けたいと思っていますが，あなたは彼に祝福を授けたいとは思いませんか。」

すると彼は，「息子は私に祝福を頼まないと思います」と言った。

しかし，その家にいた会員たちが一緒に集まったとき，私はその父親と息子が間もなく並んでそこにいるのを目にした。ふたりは同じ思いを持ち，その少年の父親は喜んでその申し出を受けたことが私にはわかった。

この会に臨んでいる少年たちは，この話を心に留めておいていただきたい。皆さんには，世界で最もすばらしいお父さんがいる。皆さんのお父さんは神権を所有しており，喜んで皆さんに祝福を授けることであろう。父親は皆さんにそれを示したいと望んでおり，私たちは父親に子供たちは時として内気な態度をとることを覚えていてほしいと思う。子供たちは父親の皆さんが世界で最もすばらしい人であることを知っている。しかし，皆さんが一歩前進して彼らの気持ちを察するならば，恐らく皆さんにとって非常に栄えある時を得ることであろう。

兄弟の皆さんと，今宵この場で共に過ごせることは，すばらしい経験である。皆さんに平安が与えられるように。また，ここ数日間何度も言われてきたことであるが，義のみが恵みをもたらす。神が皆さんを祝福されんことを。私は少年ならびに成人の皆さんに証申し上げる。神は生きておられ，イエスはキリストである。これは救いと昇栄の偉大な計画であり，唯一の道であり，不義の中には決して幸福は見いだせない。私たちの主イエス・キリストのみ名によって証する。アーメン。

聖　霊

大管長会第二副管長

マリオン・G・ロムニー

愛する兄弟姉妹の皆様，私はこの会の開会でなされた主のみたまを求める祈りに，国籍人種のいかんを問わず皆様の力添えを願うものである。話の主題からして，もし私の話に主のみたまが伴わなかったならば，言葉は空を打つ無益なものとなるからである。

末日聖徒イエス・キリスト教会の信仰箇条第1条には，「われらは，永遠の父なる神と，その御子イエス・キリストと聖霊とを信ず」と言われている。

1年前の大会では，永遠の父なる神について話があった。半年前の大会のテーマは，神の御子イエス・キリストであった。そしてきょう，私たちは聖霊について神より啓示された幾つかの真理を考えてみよう。

どの聖典も聖霊のことを教えている。聖霊は慰め主，神のみたま，聖きみたま，真理のみたま，あるいは主のみたまと呼ばれることがある。

それらの聖典によれば，聖霊は一個の御方である。

予言者ジョセフ・スミスは言った。「御父は，人間の有する肉体と同じく触知し得る骨肉の体を有したもう。御子もまた然り。されど，聖霊は骨肉の体を有ちたまわずして霊の御方なり。……」(教義と聖約130：22)

イエスは聖霊を男性の呼び名で呼ばれた。弟子たちに向かい，このように言われた。

「……わたしが去って行くことは，あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ，あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば，それ（彼*him*）をあなたがたにつかわそう。」(ヨハネ16：7)

さらに，

「……真理の御霊が来る時には，あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それ（*he*）は自分から語るのではなく，その（彼の*he*）聞くところを語り，きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう。御霊はわたしに栄光を得させるであろう。わたしのものを受けて，それをあなたがたに知らせるからである。」(ヨハネ16：13，14)

「聖霊は御自身を人の姿かたちに現わすことがおできになる」とジェームズ・E・タルメージ博士は書いている。「それはみたまとニーファイとのすばらしい出会いに示される通りである。そのとき，みたまは予言者ニーファイに姿を現わし，希望や信仰について質問をし，神のことについて教え，彼と顔と顔を合わせて語られた。ニーファイはこう言っている。『私は「みたま」に，……人が人に物を言うように話した。それは「みたま」が人の形をして居たもうのを眼のあたり見たからである。しかしそれでも私はそれが主の「みたま」であることを知っていた。そして「みたま」も私に人が人に物を言うように話したもうた。』」(*Discourses on the Holy Ghost*「聖霊に関する説教」N・B・ランドウォール編，p. 13)

愛弟子ヨハネは言った。「天においてあかしをする方が御三方おられる。御父と言と聖霊とである。そしてこの御三方はひとつである。」(欽定訳Iヨハネ5：7，8)「一致する」のはもちろん，御父と御子と聖霊が思いと目的において一致することにほかならない。御三方について予言者ジョセフは言った。

「……この御三方はひとつである。言い換えれば，御三方は万物を司るたぐいなく偉大な至上の管理体を成しており，御三方により万物が創造され，……この御三方で神会が構成されており，この意味で御三方はひとつなのである。」(ブルース・R・マッコンキー*Mormon Doctrine*「モ

ルモンの教義」第2版 p.320 より引用）

神会の一員として御父と御子とひとつである聖霊は，御父と御子のように全知であられる。聖霊は「事物の……知識」（教義と聖約93：24）を有したすべての真理を理解する。

キリストの光が「神の前よりさし出でて広大なる宇宙に満ち充」つる（教義と聖約88：12）ように，聖霊の影響力，賜は同時にあらゆる場所に現われる。

「聖霊が……くだった」（使徒11：15）「聖霊に満たされて」（ルカ1：15）「聖霊の賜物」（使徒2：38）「聖霊を受けよ」（ヨハネ20：22）「火と聖霊とのバプテスマ」（教義と聖約20：41）などという聖典の記述は必ずしも一個の御方としての聖霊をさすのではなく，その力や影響や賜を言うのである。

聖霊の重要な働きのひとつは，御父と御子を証することである。天使がアダムに語ったあの日，アダムが捧げた犠牲は「御父の生みたもう……ただ独りの御子が犠牲となりたもうことのひながたなり」と告げられ，「聖霊アダムに下りて」御父と御子の証をしたのである。（モーセ5：7，9）

イエスがバプテスマを受けられたとき，聖霊は「はとのように下って」（マタイ3：16）キリストの神性を証した。

イエスはキリストであると知った人は，皆その証を聖霊から受けている。パウロはコリント人へ宛ててこう書いた。

「そこで，あなたがたに言っておくが，神の霊によって語る者はだれも……聖霊によらなければ，……『イエスは主である』と言うことができない。」（Iコリント12：3）

イエスは，「あなたこそ，生ける神の子キリストです」というペテロの言葉に答えて次のように言われたとき，そのことを意味されたのである。

「バルヨナ・シモン，あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは，血肉ではなく，天にいますわたしの父である。」（マタイ16：16，17）

聖霊は御父と御子が神であることを証するだけでなく，真理，特に福音の真理を証する。

モロナイは書いている。「……私はあなたたちにすすめたい。あなたたちはこの記録を読む時に，……それが真実なものかどうかをキリストの御名によって永遠の父なる神に問え。もし誠心誠意でその上キリストを信じながら問うならば，神は聖霊の力によってこの記録が確なものであることをあなたたちに示したもうにちがいない。」（モロナイ10：3，4）

そしてそのあとに，大きな約束を加えている。

「そして聖霊の力によって一切の事の事実であるかどうかがあなたたちに解る。」（モロナイ10：5）

何千何万の人がこのチャレンジを試し，その後聖霊の力によって記録が真実であることを証している。

聖霊は真理を証されるだけでなく，真理を啓示し，教える御方でもある。

救い主は弟子たちに，「もしあなたがたがわたしを愛するならば，わたしのいましめを守るべきである」と言われた。

「わたしは父にお願いしよう。そうすれば，父は別に助け主を送って……すなわち，……聖霊は，あなたがたにすべてのことを教え，またわたしが話しておいたことを，ことごとく思い起こさせるであろう。」（ヨハネ14：16，26）

「あなたがたが会堂や役人や高官の前へひっぱられて行った場合には，何を弁明しようか，何を言おうかと心配しないがよい。言うべきことは，聖霊がその時に教えてくださるからである。」（ルカ12：11，12）

パウロはコリント人に宛てて書いた。

「ところが，わたしたちが受けたのは，この世の霊ではなく，神からの霊である。それによって，神から賜わった恵みを悟るためである。この賜物について語るにも，わたしたちは人間の知恵が教える言葉を用いないで，御霊の教える言葉を用い，霊によって霊のことを解釈するのである。」（Iコリント2：12，13）

私たちに聖典があるのは聖霊のおかげである。聖霊はその中の真理の福音を啓示したばかりか，予言者たちに予言のみたまも与えられた。

ペテロは言った。「聖書の預言はすべて，自分勝手に解釈すべきでない……。なぜなら，預言は決して人間の意志から出たものではなく，人々が聖霊に感じ，神によって語ったものだからである。」（IIペテロ1：20，21）

記録には，はじめに「……聖霊アダムに下りて……アダム神を讃めて『みたま』に満たされ，この世にあるすべての眷族に就き予言し始めて言いけるは……」（モーセ5：9，10）とある。

いつの時代もそうである。ルカは，バプテスマのヨハネの父ザカリヤが，「聖霊に満たされ，預言して言った……」（ルカ1：67）と記している。

この末日の神権時代の主の約束，すなわち「神は……聖霊の言い尽し難き賜によりて……知識を汝らに与えたまわん」（教義と聖約121：26）という言葉は，どのようにしてその言い尽し難き賜が与えられるのか，という疑問を投げかけるであろう。

私たちに定められた方法は，主イエキ・キリストを信じる信仰，罪の悔い改め，罪の赦しのために水に沈められるバプテスマとそれに引き続

く按手礼を受けることである。

使徒の教会にあっても，この方法に従い聖霊が授けられた。

「エルサレムにいる使徒たちは，サマリヤの人々が，神の言を受け入れたと聞いて，ペテロとヨハネとを，そこにつかわした。ふたりはサマリヤに下って行って，みんなが聖霊を受けるようにと，彼らのために祈った。それは彼らはただ主イエスの名によってバプテスマを受けていただけで，聖霊はまだだれにも下っていなかったからである。そこで，ふたりが手を彼らの上においたところ，彼らは聖霊を受けた。」（使徒8：14—17）

パウロがエペソに来て，ある弟子たちに出会ったとき，「彼らに『あなたがたは，信仰にはいった時に，聖霊を受けたのか』と尋ねたところ，『いいえ，聖霊なるものがあることさえ，聞いたことがありません』と答えた。『では，だれの名によってバプテスマを受けたのか』と彼がきくと，彼らは『ヨハネの名によるバプテスマを受けました』と答えた。そこでパウロが言った，『ヨハネは悔改めのバプテスマを授けたが，それによって，自分のあとに来るかた，すなわち，イエスを信じるように，人々に勧めたのである』。人々はこれを聞いて，主イエスの名によるバプテスマを受けた。そして，パウロが彼らの上に手をおくと，聖霊が彼らにくだり，それから彼らは異言を語ったり，預言をしたりし出した。」（使徒19：2—6）

主はこの末の世の教会の長老たちの義務を述べた中で，「バプテスマを受けて教会に入りたる者に，聖典の示すところに則り，火と聖霊とのバプテスマを受くる按手を施して教会員たることを確認し」（教義と聖約20：41）と言われた。

また伝道の業に数人の兄弟を召したときには，こう言われた。

「……われ汝らに一つの誡命を与う。汝らこの民に中に行き，その名をペテロと言いし古えのわが使徒が言いし如くこの民に言うべし。

『……主イエスの御名を信ぜよ。罪を赦さるるために聖き誡命に従い，悔い改めてイエス・キリストの御名によりてバプテスマを受けよ。而して何人にてもかくする者は，この教会の長老の按手によりて聖霊の賜を受くべし』と。」（教義と聖約49：11—14）

聖霊の賜とは，その人が神の戒めに従っている限り与えられるみたまの導きと教化と交わり，また聖きみたまの影響を受ける権利のことである。

聖霊の賜を受けることの大切さは言い尽くせない。それは，ヨハネの言う火のバプテスマであり（ルカ3：16参照），イエスがニコデモに語られた霊による誕生である。

「よくよくあなたに言っておく。だれでも，水と霊とから生れなければ，神の国にはいることはできない。」（ヨハネ3：5）

聖霊を受けることは，罪に悩む魂をいやし，赦しを生じさせる療法である。

キリストの教会を他のすべての教会および宗教と区別する目印は，教会員が受ける聖霊の賜である。

それはまた，末日聖徒イエス・キリスト教会を他のすべての組織，団体と区別するものでもある。

予言者ジョセフ・スミスとエライヤス・ヒグビーは1839年に，バン・ビューレン大統領との会見後，ワシントンD. C. からハイラム・スミスに手紙を送った。その中にこう書かれている。

「会見の中で，大統領に他の宗教と私たちの宗教の違いはどこかと質問された。ジョセフ兄弟はバプテスマの様式と按手による聖霊の賜が違うと言った。私たちは，他の事柄は皆聖霊の賜に包含されると考えていたからである。」（*Documentary History of the Church*「教会歴史記録」第4巻，p. 42）

それはそのはず，聖霊は啓示者だからである。聖霊の賜は「……啓示の『みたま』なり。……これはモーセがイスラエルの人々をして乾ける土を踏みて紅海を渡らせこれを導きし『みたま』なり。」（教義と聖約8：3）と，主は言われた。

神が生きておられ，御子イエス・キリストは私たちの救い主，贖い主で，キリストの福音は救いの計画，永遠の生命への道であり，末日聖徒イエス・キリスト教会はキリストの教会で，福音を宣べかつ救いの儀式を執り行なうための権能を持ち，教会はそこから活力と力と権威を受けているという証は，聖霊から教会員個人に与えられる。

愛する兄弟姉妹，友人の方々，国籍人種のいかんを問わずあらゆる皆様方に，私がこれまでお話してきたすべてのことが真実であると，証申し上げる。

聖霊は私に，それが真実であると啓示された。神は生きておられること，私たちは神の子供であること，キリストは生きておられること，その福音は真実であり，末日聖徒イエス・キリスト教会はイエス・キリストの教会であること，スペンサー・W・キンボール大管長は主の教会を管理するため主より召された予言者であること，聖霊はすべてのことを啓示し，証する御方であること，そして私たちは皆モロナイの言うように聖霊の力によって「一切の事の真実であるかどうか」がわかること（モロナイ10：5）を，私は聖霊の力により，知っている。

私は真心からへりくだり，皆様方

が主イエス・キリストを信じて，悔い改め，主の御名によりバプテスマを受け，主の教会の長老たちの手によりこの言い尽くし難き聖霊の賜を受けられるよう，そしてその後，聖霊の導きに従うようにとお勧めする。

そうする人は，救い主が来られるときに救い主にまみえる備えをすることになるのである。

「わが栄光をもて来るその日に，十人の処女につきわが語りしたとえは成就すべし。賢くして真理を受け入れ聖霊の導きに従い騙されざりし者は，誠にわれ汝らに告ぐ，彼らは伐られて火に投げ入れらるることなくその日に堪うるべし。地はゆずりとして彼らに与えられ，彼らは殖え満ちて強くなり，その子孫らは罪を犯すことなく育ちて救いに入らん。主は彼らの中に在りてその栄光は彼らの上に輝き，主は彼らの王にして立法者たるべし。」(教義と聖約45：56—59)

私たちすべての者が聖きみたまの導きに従って，その大いなる日に「堪うる」備えをなさんことを，イエス・キリストのみ名により，へりくだり祈る次第である。アーメン。

われら，すべて神のこれまでに啓示したまいしことを信ず

十二使徒評議員会会員

ボイド・K・パッカー

今朝，愛するロムニー副管長は聖霊というテーマで話し，私たちに新たな啓示を開いて下さったが，私は副管長の言葉からとても大きな励みを得た。皆さんもそう感じたことと思う。

情勢の定まらない世にあって，啓示が絶えず教会に下されていることを私は神に感謝している。

また，啓示が予言者にのみ限られていないことも感謝している。教会幹部も受けることができるのである。さらに世界各地の教会指導者から，何かを決定するときや，もっと光明と知識を必要とするときに導きを与えられているという話をいつも聞く。

また両親も霊感と啓示を受け，事実ロムニー兄弟が話して下さったその力を通して家族を導くことができるのである。当然のことながら，私たち一人一人が，ふさわしく生活するならば，みたまとの交わりを持ち個人的に導きを受けることができるはずである。

過去の予言者は彼らの受けた啓示を記録してきた。そして，それを受けるに至った神聖な歴史と共に，聖典の中に記している。もちろん，その最もよく知られた例は聖書である。私たちは教会において，ほとんどの人がもはやしなくなったことをしている。私たちは自分たちで熱心に聖書を読んでいる。

また他の聖典すなわち啓示の書にも恵まれている。モルモン経，教義と聖約，高価なる真珠がそれである。

聖書以外の聖典があると公言するときに，私たちは次のように尋ねられることだろう。「これらの啓示はどこから得たのですか？　これらの書はどこから与えられたのですか？」

これらの質問に答えようとして，私たちは，古代の予言者が作った記録をウリムとトミムを使って翻訳したことをすぐに話す。また，神のみもとから送られてきた天のみ使いの訪れについて話し，さらに何のためらいもなく，主御自身が現われたもうたことを話す。

すると多くの人々はこれらの説明が何か奇妙な物語であるかのように考え，それらを真面目に考えようとはしない。そして聖書の時代には当然であった啓示が，今日の時代にも与えられているという考えを否定するのである。

それでもなお，これらの聖典は存在する。私たちはこれらをどこからか得たのである。そこで言う。「手に取って，読んでみて下さい。そして試し，自分で調べて下さい。」けれども不幸なことに，ほとんどの人は試してみようとさえしない。

これらの人々は，ヒュー・ニブレー博士が数年前に書いたあるたとえ話の中の人々のようである。そのたとえ話を一部引用したいと思う。

「ある時，ひとりの若者が畑を耕していて，大きなダイヤモンドを見つけた。そこで彼はそのことを人々に話した。そして，人々にただでその石を見せ，みんなはそれを認めた。ところがひとりの心理学者が，みんなのよく知っている事実を例にとって，その若者は妄想に陥っていると説いた。またある歴史学者は，以前にも何人かの人々が畑でダイヤモンドを見つけたと言ったが，それがうそだったことを説明した。さらに，この地方にあるのは水晶だけで，ダイヤモンドなど全くないと言う地質学者が現われた。若者が見つけたのは水晶だと言うのである。そしてその地質学者は，その石の検査を頼まれると，大儀そうに何も言わず，ただ微笑を浮かべて静かに首を横に振って断わった。また言語学の教授は，その若者がその石を指して使った語が，ほかの人々がダイヤモンドの原石を指して使っている語と全く同じ

ものであることを証明した。従って彼は単に，その当時の人々が共通に用いていた言語を使っていたと言うことになる。さらに社会学者は，4大都市の花屋の店員合計177人の内，その石が本物であると信じたのはわずか3人であると言った。その石を見つけたのはその若者ではなく，誰かほかの者であることを説くために書物を著わした牧師もいた。

最後に，ひとりの貧乏な宝石商が，石の鑑定をまだ終えていないので，ダイヤモンドかどうか確実で名の通った鑑定人に頼んで調べてもらい，答えを出したらどうかと指摘した。だれがこの石を見つけたか，その発見者は正直で正気かどうか，だれが彼を信じるか，彼はダイヤモンドとレンガの区別ができるかどうか，ダイヤモンドが畑から見つかったのかどうか，また人々が水晶やガラスをダイヤモンドと見誤ったかどうか，これらはすべてダイヤモンドかどうかと何の関係もないのである。そこでダイヤモンドの鑑定人たちが呼ばれた。ある鑑定人たちはそれが本物であると言った。しかし他の者たちはそれをひどい冗談だと取って，そのことに真剣に取り組むことで自分の威厳と評判を危くすることのないようにした方がよいと言った。こうした中で悪い影響を残すことがないように，ある人が，その石は実際にはとてもよくできた人造ダイヤであるという説を出した。しかし，これも作り事に変わりはない。これに異議を唱えられるならば，農夫の若者が良質の人造ダイヤを造ることは，本物を見つけることよりも，はなはだすばらしい功績であるということである。」(*Lehi in the Desert and the World of the Jaredites*,「砂漠のリーハイとジェレドの世界」pp. 136，137)

私たちがこれらの聖典を持っていることは事実である。繰り返すが，私たちはこれらをどこからか得たのである。

多年の間，これらがどこから得られたかについて数多くの解釈と意見が出されてきた。しかも提議されたこれらの説はそのほとんどが，これらの書をそれほど読んでいない人々によるものである。さらに，ジョセフ・スミスがそれらを作り，彼自身がそれらを著わした。従って彼はその非難を受けなければならない，という考えを持った人々によることがほとんどである。

しかしこのことは彼にはるかに大きな信望を与え，実際よりも大きな功績を持たせることになる。私はこれを受け入れることはできない。なぜなら，このことは彼を測り知れない天才に仕立てることになるからである。彼がそうであったとは思わない。彼が何の助けも受けず，神の導きなしにそれらを創作したと考えることは，不合理なことである。

事実は明瞭である。それはジョセフ・スミスが神の予言者であり，それ以上の者でも以下の者でもないことである。

聖典はジョセフ・スミスから与えられたというよりはむしろ彼を通してもたらされたものである。彼は啓示が与えられる仲立ちとなった。それ以外の点では，古代の予言者たちや近代の予言者たちと同様に，彼も並の人間である。

これらの啓示の書は偽りである，その証拠に，初版以降，聖典の内容に変更が加えられていると主張する人々がいる。彼らはこれらの変更部分を引用して，あたかも彼ら自身が啓示を宣言しているかのように，ここに偽りの証拠がたくさんあると言う。あたかも，それらの啓示について知っている唯一の人であるかのように。

もちろん，変更や改正の加えられた部分はある。少し調べただけでもそれがわかる。しかし，正しく検討すればこれらの改正は，異論ではなく，むしろその書が真実のものであることの証となるのである。

予言者ジョセフ・スミスは，学問のない，一介の農家の息子であった。彼が若い頃に書いた手紙を読むと，綴りも文法も，また語法もあまり洗練されていないことがうかがえる。

そのような彼を通して，文学的にも味わいのある形で啓示がもたらされたということは，全くの奇跡である。そして引き続き多くの点で改善が加えられたことで，それらを尊ぶ気持は増すばかりである。

ここで，これらの変更は基本的に，文法，語法，句読点，明文化の点で最小限文章を洗練したものにすぎなかったことを強調しておきたい。従って根本の原則は何ら変わっていない。

では，そのことがなぜ広く告げられていないのだろうか。その理由は明らかである。比較してみたところで何の意味もなく，全く取るに足らないので話す必要がないからである。とにかくこのことは，これらの書が真実のものか否かに全く何の関わりも持っていないのである。

古代の予言者モロナイは，多くの啓示を編纂した後，次のように語っている。「もしこの記録の中に足らない所があれば，それは人間の欠点によるものである。しかし，私たちはこの記録に何ら足らない所を見出さない。けれども，神はすべてのことを知りたもうからこの記録を非難する者は慎んでその考えを捨てよ，そうでないとおそらく地獄の火に投げ入れられるであろう。」(モルモン8：17)「すべてこの記録を受け容れ，この記録の中に欠点があるからと言ってこれを咎めない者は，この記録

に記してあることよりも偉大なことを知るであろう……」(モルモン8：12)

人はある石を取り上げて，それが何かを正しく確認するために，粘板岩あるいは砂岩であることを確認する検査を行なったとする。そしてこの検査の後，「ダイヤモンドであることは認められなかった」と言って調べるのを止めたとする。

たとえそれが正しくても，彼の得た結果は，それがダイヤモンドかどうかを何ら明らかにするものではない。数多くの検査を行ない同じ結論に到達するかもしれないが，誤った方法を使っていてそれがダイヤモンドかどうかを確認することはできない。

彼が正しい方法に従ってその石を検査するときに，ただそのときのみ，正確な結論を得ることができるのである。それまで，「ダイヤモンドであることは認められなかった」という彼の結論は，何ら価値のないものだと言えるであろう。

長年の間，無数の人々が，これらの啓示を正しい方法によらずに調べてきた。そして彼らは一様に，パウロの語った言葉を証明している。「生れながらの人は，神の御霊の賜物を受け入れない。それは彼には愚かなものだからである。また，御霊によって判断されるべきであるから，彼はそれを理解することができない。」(Iコリント2：14)

これまで述べてきたように，これらの聖典のダイヤモンドは，検査に耐えうるものである。ダイヤモンドのための検査にそれをかけたら，そのダイヤモンドが本物かどうかわかるのと同じように，確かに聖典もそのための検査にかけることができる。

非常に確実な方法がある。しかしこれを用いるためには，批判から霊的な問いかけへと心の態度を変えなければならない。

聖典を調べるのに，あいまいな態度で，さらには不誠実な気持でとりかかり，何も得られずに止めてしまう人々がいる。これは，彼らが備え，受けるに足る分そのものしか得られなかったためである。もしあなたがそれを，あいまいな問いかけや，無益な好奇心，あるいは善意から出たものだが一時的にすぎない探求に応じるものだと考えているなら，それは誤りである。同様に，狂信家に応じるものでもない。

誠実なへり下った心で静かに人生を過ごすときにこそ，人は確かなものを知ることができるのである。真理にまつわる多くの要素は，人生の備えができて始めてもたらされる。

しかしそれらの証がもたらされるのは非常に早い。老若を問わず多くの謙遜な人々がこのような証を持てるという可能性を軽視してはならない。多くの人々は現に，学問や科学の分野で得られる知識にまさる証を持っている。謙遜な人がみたまを通して問い，正しい生活に基づいて得た証を述べるとき，彼がその他の点では無知であるからといってその証を否認したりせず，それに心を配りなさい。

学界で巨人と言われる人でも霊的に小人とみなされる人が多い。そのような人は，通常倫理的にも虚弱である。そして，神のみ業を滅ぼそうと，すぐに自ら破壊者の一員になり下がるのである。不節制，不敬，不道徳な人，破壊的で，その地位にいる値のない人の証に気をつけなさい。

予言者ニーファイはこう言っている。「……罪のある者は真理が胸の底まで刺しつらぬくために真理を残酷だと思うのである。」(Iニーファイ16：2)

またこの予言者は語っている。「書く時には話す時ほどの力がない。それは，人が聖霊の力で語るときには，聖霊がその話を人の心の中に浸みこませるからである。

しかしながらごらん，世の中には聖霊に対してその心をかたくなにする人が多いから，聖霊はこれらの人々を感動させることができない。従ってこれらの人々は書き記してある多くのことを捨てて，これを価値のないものと見なす。」(IIニーファイ33：1，2)

さらに彼は，自分の書き記してきた言葉は，人々に善を行なうように勧めるものであると言っている。「イエスのことを教え，またイエスを信じて終りまで堪え忍べと説き勧めている。イエスを信じて終りまで堪え忍ぶならば永遠の生命を得るのである。

私の書いた言葉は真理をはっきりと語って罪悪をきびしく咎めるから，悪魔のような精神の者でないかぎりは，誰も私の書いた言葉を怒らないであろう。」(IIニーファイ33：4—5)

新約聖書に，私たちが心に留める価値のあるひとつの警告がある。ペテロと他の使徒たちが議会によって監禁された。しかし天使により解放された。その後また議会に連れて来られた。そこで彼らは証を述べた。「わたしたちはこれらのことの証人である。神がご自身に従う者に賜わった聖霊もまた，その証人である。」(使徒5：32)

議会のある者たちは使徒たちを殺そうとした。しかし，律法学者ガマリエルは，次のような賢明な発言をした。「イスラエルの諸君。あの人たちをどう扱うか，よく気をつけるがよい。」(使徒5：35) それから，ふたりの説教者の例を引用した。「この人も滅び，従った者もみな散らされてしまった。」

そしてガマリエルは忠告を与えた。「あの人たちから手を引いて，その

なすままにしておきなさい。その企てやしわざが，人間から出たものなら，自滅するだろう。

しかし，もし神から出たものなら，あの人たちを滅ぼすことはできまい。まかり違えば，諸君は神を敵にまわすことになるかも知れない。」（使徒5：37—39）

啓示は教会内に存続している。教会のためには予言者がそれを受けておりステーキ部のためにはステーキ部長がいる。伝道部には伝道部長，定員会には会長がいる。ワード部には監督がおり，家族には父親がいる。そして，個人は自分のために啓示を受ける。

これまで多くの啓示が与えられてきた。そしてそれらは，進み行く主のみ業の中にはっきりと見いだされる。おそらくいつの日か，これまでに与えられ，記録されてきた他の啓示が出版されることであろう。このように私たちは神が「神の王国につきて多くの偉大にして重要なることを啓示したもうこと」（信仰箇条第9条）を信じ，待ちもうけているのである。

最後に教義と聖約から聖句を読んで，その中にある約束と定則とを確認したいと思う。

「誠に，主かくの如く言う。その罪を捨ててわれに来り，わが名を呼び，わが声に従い，わが誡命を守るあらゆる人々は，わが面を見てわれ在るを知ることあらん。」（教義と聖約93：1）

しるしを求める者ではなく，思いと心と体を清くして備える者となるよう勧めるものである。

主は言われた。「故に，汝らの心誠心誠意神に向わんがために，汝ら自ら聖くせよ。さらば，汝ら神を見るの時あらん。そは，神その面を汝らに現わすべければなり。而してそは神の時，神の欲するまま，神の旨によりて起るべし。」（教義と聖約88：68）

私は啓示が実際にあることを証する。私はそれらをこれまで調べ試みてきた。この大会で私たちの前に座っている15人の教会幹部は，主イエス・キリストの特別な証人である使徒に召され，聖任された人々である。主が生きておられることを証する。イエス・キリストの福音は救いに至る力であり，また私たちは求めれば，これらのダイヤモンドが本物であることを知ることができる。これらをイエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。

墓での三日間

大祝福師

エルドレッド・G・スミス

昨年の春，私は妻と共に聖地を訪れるというすばらしい機会に恵まれた。エルサレムでの最後の日，私たちは朝早くホテルを出て墓の園に歩いて行った。運よく私たちのほかだれひとりいなかった。私たちは畏敬の念に満たされゴルゴタ，すなわち，されこうべの丘をじっと見入っていると，そこに3本の十字架が並び，苦悶のキリストの上の方に「ユダヤ人の王イエス」(マタイ27：37参照)と書かれた有様がありありと心に思い浮かんできた。そして「私たちは，私たちのために払われたあのイエスの苦しみにふさわしくあるだろうか」という思いにふと駆られた。

次いで私たちは，歴史上はアリマタヤのヨセフの所有となっている例の墓に目を転じた。ヨセフとニコデモは，女の手を借りて，この墓にイエスを葬った。弟子たちはイエスを後にしてその場を去った。彼らは墓の入口に石をころがしてふさぎ，そして皆帰って行ったが，マグダラのマリヤとほかのマリヤとはそこにいた。(マタイ27：60，61参照) ふたりは墓のそばに身を寄せ合ってすわり，じっと墓を見つめていた。

私たちは聖典の中に，エルサレムに大破壊があって，神殿の幕が「真二つに裂けた」(マタイ27：51) ことを知らされている。しかしこの大陸における破壊の様は，それをはるかにしのぐものであった。地が激しく揺れ動き，3時間のうちに町は崩壊し，あるものは埋没し，あるものは焼失した。また都市のあった所に山が生じた。嵐，大風が止んでから全地は深い暗黒の霧に覆われた。3時間にわたる崩壊の後，このような暗黒は3日の間続いた。そしてその間人々には声，ただ御一方の声しか届かなかった。イエスは御自身を示して言われた。

「見よ。われは神の子イエス・キリストなり。われは天地とその中にある万物を造れり。われは最初より御父と共に在りき。而して今，われは御父に在り，御父はわれにまします。御父はすでにわれによりてその御名の栄えを示したまえり。

われは，わが民のところへ降りしが，わが民はわれを受け容れざりき。すなわち，われが来ることを示す聖文はすでに事実となりたり。」(Ⅲニーファイ9：15，16)

イエスは民に，破壊が起こったのは彼らの罪悪のためであり，ひときわ義しい人たちのみ災いをさけられたのだと告げられた。また，復活の後の御自身の訪れに備えさせるため，民に，悔い改めよ，そうするならば受け入れるであろう，という言葉を残された。

その声はまたモーセの律法にふれ，この律法はイエス御自身によって全うされたことを告げた。「これより後，汝らは血を流すことを以てわれにいけにえを供うべからず。われはもはや汝らのもろもろのいけにえと火祭とを正当なるものとして受け容れざればことごとくこれらを廃めよ。

これより後，犠牲としてわれに捧ぐべきものは，真にへりくだる心と悔いる精神なり……。」(Ⅲニーファイ9：19，20)

主はみ業を進めておられたとき，2度「『わたしが好むのは，あわれみであって，いけにえではない』……。」と言われた。(マタイ9：13；12：77)

体が墓に横たえられていた間のイエスのもうひとつの大切な働きは，死者の霊を訪れることであった。主はあるときこう言われた。「よくよくあなたがたに言っておく。死んだ人たちが，神の子の声を聞く時が来る。今すでに来ている。そして聞く人は生きるであろう。」(ヨハネ5：25)

十字架にかけられているとき，イ

エスは，罪の宣告を受けたがイエスを信じた強盗に向かって言われた。「よく言っておくが，あなたはきょう，わたしと一緒にパラダイスにいるであろう。」（ルカ23：43）

ペテロは言った。「キリストも，あなたがたを神に近づけようとして，自らは義なるかたであるのに，不義なる人々のために，ひとたび罪のゆえに死なれた。ただし，肉においては殺されたが，霊においては生かされたのである。

こうして，彼は獄に捕われている霊どものところに下って行き，宣べ伝えることをされた。

これらの霊というのは，むかしノアの箱舟が造られていた間，神が寛容をもって待っておられたのに従わなかった者どものことである。その箱舟に乗り込み，水を経て救われたのは，わずかに八名だけであった。」（Iペテロ3：18―20）

これは福音の重要な原則である。この原則によって，全人類は福音を聞き，受け入れ，そして死後も進歩を続けるという機会を与えられるのである。

ペテロはこのようにも語っている。「死人にさえ福音が宣べ伝えられたのは，彼らは肉においては人間としてさばきを受けるが，霊においては神に従って生きるようになるためである。」（Iペテロ4：6）

キリストの体が墓に横たわっていた間にふたつの非常に不思議なことが起こった。そのひとつは，人々に教えを説き，もはやいけにえを受け入れずと告げる主のみ声がこの大陸の住民に聞こえたことである。このとき主はまだ復活しておられなかったことを覚えていただきたい。主は復活された後再びこの地を訪れ，御自身を示され，人々に教えを説かれた。2番目は，救い主が獄に捕われている霊たちに宣べ伝えられたということである。

3日目に，ひとりの天使が降って来て，墓をふさいである石を転がした。私と妻はその朝，園の中を散策しながら容易にそこに置いてあった石を思い浮かべることができた。墓の入口は切り立った丘の斜面に開かれていた。その入口は小さく，前にはくぼみがあった。そのくぼみを使って石を移動し，開閉をしたのであろう。

私たちはそこで，週の初めの日の明け方にマグダラのマリヤとほかの女たちがイエスの死体を清めるために香料を持って行くと，石がとりのけてあるのに気づいたというところを思い出した。彼女たちが見ていると，ひとりの天使が女たちに向かって，イエスはよみがえられたのだと言った。そして，「行って弟子たちにイエスはよみがえられたと告げよ」と言った。

マリヤはペテロとヨハネを見つけ，天使から言われたことをふたりに話した。ふたりは走り出したが，年の若いヨハネの方が先に着き，墓の中をのぞいてみたが中へは入らず，ペテロがやってきてから彼の後に入った。墓に入って見ると，イエスの体はなく，亜麻布がきちんとたたんでおいてあった。それからペテロとヨハネは自分の家に帰って行った。「しかし，彼らは死人のうちからイエスがよみがえるべきことをしるした聖句を，まだ悟っていなかった」（ヨハネ20：9）のである。

「しかし，マリヤは墓の外に立って泣いていた。そして泣きながら，身をかがめて墓の中をのぞくと，

白い衣を着たふたりの御使が，イエスの死体のおかれていた場所に，ひとりは頭の方に，ひとりは足の方に，すわっているのを見た。

すると，彼らはマリヤに，『女よ，なぜ泣いているのか』と言った。マリヤは彼らに言った，『だれかが，わたしの主を取り去りました。そして，どこに置いたのか，わからないのです』。

そう言って，うしろをふり向くと，そこにイエスが立っておられるのを見た。しかし，それがイエスであることに気がつかなかった。

イエスは女に言われた，『女よ，なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか』。マリヤはその人が園の番人だと思って言った，『もしあなたが，あのかたを移したのでしたら，どこへ置いたのか，どうぞ，おっしゃって下さい。わたしがそのかたを引き取ります』。間違えようのないほどに，イエスは彼女に『マリヤよ』と言われた。マリヤはふり返って，イエスにむかってヘブル語で『ラボニ』と言った。それは先生という意味である。

イエスは彼女に言われた，『わたしにさわってはいけない。わたしは，まだ父のみもとに上っていないのだから。ただ，わたしの兄弟たちの所に行って，「わたしは，わたしの父またあなたがたの父であって，わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く」と，彼らに伝えなさい』。」（ヨハネ20：17）

墓に来ていたほかの女たちは，天使から弟子たちの所に行ってイエスはよみがえられたと告げよ，と言われていた。すると途中イエスは彼らに出合って，「『平安あれ』と言われたので，彼らは近寄りイエスのみ足をいだいて拝した。」（マタイ28：9）

彼らはそこでも，兄弟たちの所に行って告げるように言われた。

イエスはトマスと首をつって死んだユダを除く弟子たち全員に姿を現わされた。そして後に，トマスも含めたすべての弟子たちにお現われになった。

「イエスは彼に言われた，『あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は，さいわいである』。」（ヨハネ20：29）

イエスは幾度も弟子たちに会われ，ガリラヤでは五百人にのぼる人々の前に姿を現わされた。そればかりか，このアメリカ大陸の住民にもその姿を現わされたのである。その様子はモルモン経に記されている。

園の中を散策していたのは，妻のジーンと私のふたりだけだった。私たちは墓の方に近づいて行った。そして主が，「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは，世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな，またおじけるな」（ヨハネ14：27）と言われた，その安らぎの心というものを感じたのだった。

私たちは，イエスがマルタに「わたしはよみがえりであり，命である。わたしを信じる者は，たとい死んでも生きる」（ヨハネ11：25）と言われたことを心から信じることができた。

イエスの復活により，全人類は永遠に進歩できるようになった。イエスは私たちが進み進んで永遠に進歩できる道を開いてくださったのである。

私は，自分が初めてニューヨーク西部にある聖なる森を訪れたときに感じたと同じような気持に襲われた。私はある日の早朝ひとりきりであの森に出かけた。そして，キリストが園でマリヤに会われたように，まさしく御父と御子が少年ジョセフ・スミスに姿を示されたという証を得たのであった。

まさしくイエスは生きておられる。そしてこの地上に神の王国を再び確立し，栄光のうちに来臨して地を治めるための備えをされたのである。

神が私たちに，そのみこころを理解するための知識と理解力とを，また主の教えに従って生きる希望と力とをたまわらんことを。イエス・キリストのみ名により祈るものである。アーメン。

あなたの信仰の盾を強くしなさい

十二使徒評議員会会員

L・トム・ペリー

この総大会は私にとって非常に特別な会であり，実に胸が詰まる思いである。先程，教会員の皆様の挙手により，思いもよらない地位に支持された。このように特別な状況なので，少々私事に関する話をしてもお許しいただけるのではないかと思う。

私は家庭で教会幹部を愛し尊敬するように教えられてきた。初等協会卒業の条件のひとつとして十二使徒の名前を覚えることがあったが，父は時間をさいては私が暗記するのを助けてくれ，その上幹部の一人一人についても辛抱強く教えてくれた。

事実ラジャー・クラウソンからチャールズ・A・カリスに至るまで，当時の十二使徒の名前を今すぐにでもあげることができるし，彼らの生涯の出来事もよく覚えている。

この新しい召しについて思いめぐらしていた私は，ふとこう考えた。もしも家庭の夕べで今日の十二使徒について話す父親がいたらどうだろうか。その父親は私について何と言うだろうか。

いろいろ考え，さがしあぐねた結果，子供たちに話して聞かせても良いと思われることがひとつ浮かんできた。それは私が，イエス・キリストの福音を愛し理解していた両親のもとに育ったということである。両親は，パウロがエペソの聖徒にあてて書いた次の勧告の言葉をよく理解していた。「最後に言う。主にあって，その偉大な力によって，強くなりなさい。悪魔の策略に対抗して立ちうるために，神の武具で身を固めなさい……すなわち，立って真理の帯を腰にしめ，正義の胸当を胸につけ，平和の福音の備えを足にはき，その上に,信仰のたてを手に取りなさい。それをもって，悪しき者の放つ火の矢を消すことができるであろう。」（エペソ6：10，11，14―16）

雨の日両親は，帽子やレインコート，雨靴を身につけさせてくれた。それと同じように，来る日も来る日も私たちを，神の武具で固めてくれたのである。家族の祈りで神権者である父がひざまずき，主に悪しき者の放つ火の矢から家族を守って下さいと祈るとき，信仰の盾が一層堅固になるのを感じたこともある。私たちの盾がまだ強くなっていない間，私たちは事あるごとに両親の盾に身を寄せることができた。

愛にあふれた両親は，私たちが地上に生を受けた瞬間から，私たちのために注意深く信仰の盾を築いてくれた。このことを知った上でこの人生の旅路を歩めたということは，どんなに心強かったか知れない。

この盾がどのように力を発揮するか例をあげてみよう。海兵隊にいたある日のこと，休暇が出て皆で出かけることになった。出かけて間もなく私は，一緒に出かけた仲間があまり良くない連中だということに気づいた。同時に彼らが私を誘ったわけもわかった。彼らは私がどんな標準を守っているか知っていたのである。帰るときになっても私はしらふでいて，酔った自分たちを介抱してくれると思っていたのだった。

そうこうしながら私たちはロサンゼルスの市電に乗り，あるダンスホールに向かった。仲間はすでにアルコールを飲み始めており，私はすぐにも彼らと別れるつもりになっていた。あの護りの盾が働いたのはこのときである。私は両親が陰で私のために祈っていることを知っていた。電車が止まって乗客がどっと入ってきた。乗り込んできた人々のため，私は仲間と離ればなれになり電車の後方に押しやられてしまった。その時私はすばらしい若人たちに出会ったのだった。間に立っている私を見つけると，ひとりがこう話しかけてきた。「やあ，水兵さん，私たちはモ

ルモン教徒です。私たちの教会について何か知っていますか。」

私は「もちろんです」と答えて，彼らと一緒に電車を降り，ワード部の社交活動に向かったのである。

確かに信仰の盾は身近にあった。私がふさわしくあって時が来れば天使のような人を主の神殿に連れて行き，祭壇でその人と永遠に結び固められるよう，私を悪しき者の放つ矢から守ってくれたのである。

私は自分の経験から，子供たちのまわりに救い主イエス・キリストに対する信仰の盾をおく尊い両親に恵まれることがどんなに大切であるか，身をもって知った。私はこの盾が確かに力を持っていることを証する。神の子は皆こうした経験を味わうべきではないだろうか。すなわち，まず朝父親から家族への祝福と信仰の保護の盾をもらい，それから家を出てその日の活動に入るべきである。

キンボール大管長，私はあなたが私に下さった主に仕えるこの召しを心から喜んでお受けする。私はあなたの召しが神の召しであることを知っている。私はあなたの中に，エジプトのパロが昔ヨセフを見て，この人こそ「神の霊をもつ」人だと言ったその同じ特質があることを知っている。(創世41：38)

私は，何らかの方法でこの定員会で奉仕することにより，あなたが背負っている重荷を少しなりとも分け持たせていただければと思っている。

ベンソン十二使徒評議員会会長，私はあなたを愛し，あなたの偉大な指導力を尊敬している。私は，天の王国で御父に仕えたいと心から願っている。私にできることでしたら何でも使っていただきたい。

そしてこれまで共に働かせていただいたすばらしい同僚，ハンクス長老とファウスト長老へ。私たちは互いにすばらしい兄弟愛を育むことができた。私がこの召しに応えることができるように，何と忍耐強く指導して下さったことであろうか。お二人に私の感謝の気持をお伝えしたい。

そして今日私の声を聞くすべての人々に，神が生きてましますことと，イエスがキリストであり，スペンサー・W・キンボールがまことに主の予言者であることを証する。どうか教会の門をたたき私たちの仲間に加わっていただきたい。私たちはあなたの信仰の盾を強くするお手伝いをしたいと思っている。この盾を強くすることによって，あなたがたは，自分と悪しき者の力との間には強力な防衛線を敷き，いつも自分が守られているという確信を持って生活できるようにイエス・キリストのみ名によりへりくだり祈っている。アーメン。

救い主の使命

十二使徒評議員会会員

デルバート・L・ステイプレー

愛する兄弟姉妹，友人の皆様，救い主は告げておられる。「見よ，われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。」(IIIニーファイ11：10)「わたしは，世の光である。わたしに従って来る者は，やみのうちを歩くことがなく，命の光をもつであろう。」(ヨハネ8：12)

救い主の使命や教え，奇跡，贖いの犠牲，復活，永遠のみ栄えに昇られたことについては多く書き記され，数多くの説教がなされている。キリストはまさしく私たちの主であり，救い主，贖い主，神である。主は言われた。「わたしが天から下ってきたのは，自分のこころのままを行うためではなく，わたしをつかわされたかたのみこころを行うためである。」(ヨハネ6：38)「……わたしがきたのは，羊に命を得させ，豊かに得させるためである。」(ヨハネ10：10)「そして，……またきて，あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。」(ヨハネ14：3)

ここに，この地上における救い主の使命の目的がある。すなわちそれは，私たちに永遠の生命を得させ，天において天父や救い主と共に住まわせるということである。

主は，私たちが永遠の生命に至る道を理解できるように教えを授けて下さった。また多くの奇跡を行なって，御自分がまさしく神の御子であるという証と証拠を示された。御自分の命を捧げるという贖いの犠牲は，主の全人類に対する偉大な愛を示すものである。救い主はこう言っておられる。「人がその友のために自分の命を捨てること，これよりも大きな愛はない。」(ヨハネ15：13) 主は御自分が私たちの友であることを証明してこられた。だが，私たちはどうであろうか。祈りの時間を取り，救い主について知るための，また自分自身を救い主の友とするための勉強に時間をさいてきただろうか。J・G・スモールはこう書いている。

わが巡り合いしかの友
親切，誠実，思いやりに満ちて，
いと賢き助言者，導き手
力ある守り手なり。

わが巡り合いしかの友，
わが救いのため血を流し，息絶えぬ。
わが賜わりしは生命の賜のみならず，友は自らを捧げたり。

わが巡り合いしかの友，
われを天のみ座へと導く
全能の力もて，
道を照らしつつ。

イエスが語りかけられた群衆の中に，足なえや耳しい，目しい，盲人の人たちがいたことを想像していただきたい。群衆は救い主に，救い主は群衆にと互いにあふれんばかりの愛を感じていた。群衆はイエスの語りたもうた慰めの言葉に深く感動し，喜びの涙を流した。同様にイエスも彼らの心に触れて，彼らに対する憐れみと慈悲の心に満たされた。主は群衆を見まわして，「汝らの中にて今病める者あるか。その者たちをここに連れ来れ。汝らの中にて足なえ，めくら，びっこ，かたわ，らい病人，痿えたる者，つんぼ，またはいかなる病にてもあれ悩める者は，その者たちをここに連れ来れ。われは……これらの者を医さんとす。

……汝らの信仰われが汝らを充分医すに足ると認む」と言われた。(IIIニーファイ17：7，8)

すると群衆は悩んでいる者，足なえ，目の見えない者，口の利けない者たちを連れて来たので，イエスはその者たちを皆癒された。そこで病

を癒された者も健康な者も，その場にいた者は皆感謝と賛美でひれ伏した。(Ⅲニーファイ17：10参照)

それから救い主は御自分のまわりに子供たちを呼び寄せ，群衆に地へひざまずけと仰せになった。イエスは自らも地にひざまずいて御父に祈られた。その有様について記録は次のように語っている。「これを口で言いあらわせる者もなく，筆で書きあらわせる者もなく，また人間の心で想像できぬほど偉大で驚嘆すべきものである。イエスが，私たちのために御父に祈って居りたもうのを聞いたとき，私たちの心に満ちた喜びは人間の想像ができないものである。

……イエスは御父に祈ってしまうと立ち上りたもうたが，群衆は喜びのあまり疲れてしまった。

しかし，イエスがかれらに……起てと命じたもうと，

……ここに於てイエスは『汝らはその信仰の故にさいわいなり。見よ，今わが喜びは満ち溢れたり』とかれらに言って，

涙を流したもうた。……イエスはそれからかれらの小さい子供たちを一人一人近よせてこれに祝福を与え，かれらのために御父を祈りたもうた。

そしてこれをしてしまうとまた涙を流したもうた。」(Ⅲニーファイ17：17—22)

私たちは，これらの善良で信仰厚い人々の美しい心とイエスが彼らに示された大いなる愛を悟っているだろうか。偉大な主なるキリストが自らの祈りの中で示された訓戒はここにあるのである。主は絶えず人々に関心を払うという模範を示しておられた。そして人々のために，また人々が特に必要としていること，個人個人が求めている事柄について祈っておられた。イエスは群衆に向かって勧告された。「されば汝らはわが名によりてたえず御父に祈らざるべからず。

汝らの妻子が祝福を受くるよう，……家族の祈りを御父に捧げよ。」(Ⅲニーファイ18：19，21)

私たちは救い主のこの言葉を理解しているだろうか。救い主は御父に祈りを捧げ，病人を癒し，子供たちを祝福された。それと同様に，私たちにも援助を必要としている人のために祈り，妻子を祝福する権利を行使するようにと救い主は教えておられるのである。そうすることは，私たちにとって単なる祝福であるばかりでなく，家族生活を守るすべとなる。私たちは，そうした祈りを通して持たらされる霊的な力によって互いの愛と一致をより一層緊密にすることができるのである。

もう一度この聖句を読ませていただきたい。「汝らはその信仰の故にさいわいなり。見よ，今わが喜びは満ち溢れたり。」(Ⅲニーファイ17：20)

救い主の喜びが満ち溢れるのは，私たちが悔い改め，信仰を持ち，神の戒めを守るときである。

「『この故に，悔い改めて幼児のごとくわれに来る者は，われことごとくこれを受け容るるべし。かかる者はすでに神の王国に居る者と同じなればなり。見よ，われはかれらのために一度わが生命を捨てて，また生命を得たり。故に世界の隅々に至る者たちよ。悔改めをなし，われに来りて救いを受けよ』と。」(Ⅲニーファイ9：22)「その罪を悔い改め，わが名によりてバプテスマを受けんと願う一切の人々に，汝らは次の方法を以てバプテスマを施さざるべからず。」(Ⅲニーファイ11：23)

福音の真髄，すなわち悔い改めと赦し，そして永遠の生命。ここにこそ救い主の贖いの犠牲の真の意味が示されているのである。

「このようにして，神は創世の前から定めた永遠の大みこころを成就したもう。このようにして，人の贖い救われることと亡びと不幸とは生ずるのである。

それであるから……来たいと思う者は誰でも来て生命の水を自由に無料で飲んでよろしい。また来たいと思わない者は誰でも来ることを強制されない。しかしこの者は終りの日にその行いによって報いを受ける。」(アルマ42：26，27)

言い換えれば，その選択は私たちにかかっているということである。もし私たちが善をなせば，善なるものが返って来ようし，悪を働けばその報いとして不幸な有様に陥るであろう。主は私たちをことごとく救いたいと望んでおられるが，主のみこころを拒む者がいることも御存知である。救い主のその苦悶は次の聖句によく表われている。「ああ，エルサレム，エルサレム，……ちょうど，めんどりが翼の下にそのひなを集めるように，わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。」(マタイ23：37)

予言者たちもまた人々に，主のみ言葉に耳を傾けて悔い改めるよう叫んできた。「ああ罪悪を犯す人たちよ，浮世の無益な物を誇る人たちよ，義の道を知っていると人の前で言いながら，羊飼がこれまでも呼び現在まだ叫んで居たもうのにその御声に耳を傾けず，あたかも羊飼のない羊のように迷っている者よ」(アルマ5：37)

良い羊飼い，主なるイエスは，私たちに愛と憐れみを抱いておられるので，一人一人を招いておられる。主は罪を犯した人を赦して下さる。主は人が救われることをお喜びになるからである。

私たちが救いを得，昇栄に至るために救い主が払われたその犠牲に対して私たちは決して完全な恩返しをすることはできない。私たち一人一

人の義務は，自らの心と生活を吟味して，主がいかに慈悲深く思いやりのある御方であるかを心に深く思い計ることであろう。ジョージ・ハーバートは言った。「いと恵み深き主よ，願うは一つなり，われらに感謝の心を与えたまえ。」

先週，私はある婦人から手紙をいただいた。中にはこのように記してあった。「私たちは天父を心から愛しております。もし私が残りの生涯全時間を捧げたとしても，私は主がお与えくださったこの貴い福音に対して主にお返しをすることはできません。

ベンジャミン王は民への説教の中で次のように述べている。「……今一度これをお前たちに言おう。お前たちがもしも神の栄光を知り，……罪の赦しを受けているならば，……神の偉大なことと，自分が役立たずで何のねうちもないことと，……自分に神が恵み深く幸抱強くましますこととを忘れずに思い起こして低くへりくだり，毎日毎日主の御名によって祈り，……将来のことを確く信じて変らないことを望む。

もしもお前たちの行いがこのようであるならば，お前たちはいつも喜び，神の愛に浴し，……お前たちを造りたもうたお方の栄光，……をいよいよ深く知るようになる。

またお前たちは互いに傷つけ合う心がなく，安らかに暮して，あらゆる人にその当然受けるはずのものを与えたいと思うようになる。

またお前たちは，自分の子供らを飢えさせたりはだかのまま置いたりはしないであろう。またお前たちは自分の子供らが神の律法に背き……を許さず，

お前たちは自分の子供らに真の道を行う事と真面目でなければならぬ事と互いに愛し助けねばならぬ事とを教えるであろう。」（モーサヤ４：11―15）

義しい行ないをしようと努力しているとき，私たちはしばしば試練に遭って悩む。しかし主はこのような慰めを与えておられる。「すべて重荷を負うて苦労している者は，わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。

わたしは柔和で心のへりくだった者であるから，わたしのくびきを負うて，わたしに学びなさい。そうすれば，あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。」（マタイ11：28，29）

「われは世の光にしてまた世の生命なり。われはアルパにしてオメガなり，始めにして終りなり。

われがこの世に来れるは，世の人に贖いと救いを与え，また世の人を罪より救うためなり。」（IIIニーファイ９：18，21）

「そして，……またきて，あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。」（ヨハネ14：３）

さて，今は私たちがこの大いなる約束を成就するために準備をなし，ふさわしい者となる時期である。多くの人は物事に対する正しい価値感を失い，霊に関わる進歩を犠牲にして富を追い求めている。あらゆる仕事，義務，責任を手がけるに当って，私たちはまず，神の御子ならどうされるかということを考慮しなければならない。主であり救い主であるイエス・キリストは，私たちに永遠の幸福を得る道を示して下さっている。私たちは皆，自らの救いと栄光を主の功徳に頼らなければならないのである。私たちに永遠の幸福を得る道を示して下さっている。

神の偉大なる生命と救いの計画の中にあってキリストが実に生きておられる御方であることを証する責任を持つ者として，私は人の霊は決して滅びることがなく，この現世を越えて生き続けるということを心から証するものである。また私は，神が生きておられ，その御子イエスが生きておられること，私たちが教えている福音は真実であることをへりくだり証申し上げる。また愛するスペンサー・W・キンボール大管長は神から召されていることを証する。私は大管長にこの上ない愛と尊敬と賞賛の心を抱いている。私は大管長を支持し，助け，また従って行きたいと思う。なぜなら，私は彼が今日主の民のために油注がれた方であることを知っているからである。神が私たち一人一人を祝福したもうて，私たちが主と交わした誓約に正しく忠実であるように。イエス・キリストのみ名によりへりくだり祈るものである。アーメン。

伝道――最大の責務

十二使徒評議員会会長

エズラ・タフト・ベンソン

この栄光に満ち満ちた安息の日，皆様の前に立つ私の心はへりくだり，感謝の気持で一杯である。キンボール大管長，このタバナクル合唱団の美しい姉妹たちをはじめ私たちすべてが，今の歌のように，愛する予言者であるあなたのために共に祈っている。新たに十二使徒会の一員に加えられたL・トム・ペリー長老に申し上げたい。あなたはこの地上で最もうるわしい仲間に入れられた。私たちはあなたを十二使徒会に喜んで迎え入れたい。また十二使徒補助に召されたJ・トーマス・ファイアンズ，ニール・A・マックスウェル両長老をも同じ気持をもって迎えたいと思っている。

兄弟姉妹，私たちの愛する指導者，故ハロルド・B・リー大管長のことを思うにつけ，私の心は他の多くの人々と同じようにいたむのである。私たちはこの世において55年来の知己であった。いや，この世だけではなく前の世においてもそうであったに違いない。しかし私はまた，私の心に平安と慰めとをもたらすひとつの確信を得た。それは，神の予言者が時ならずして天に召されることはないということである。リー大管長のこの地上での召しは見事に達成された。今や彼は，幕のかなたこなたで進展しつつある主の偉大なる計画にあって，さらに重要な責任に召されて働いているのである。彼はキリストのような特質を備えた，霊的な洞察力の鋭い人であった。

彼が召された大きな目的は，人の子らに救いをもたらすことであった。主は予言者ジョセフ・スミスにこう言われた。「汝ら，人の値は神の前に大いなることを憶えよ。」（教義と聖約18：10）

人の子らに救いをもたらし，昇栄にいたらしめること，これこそ教会の一大関心事である。リー大管長は，何にも増してこの偉大な計画に心を注いでこられた。また彼が，シオンの若者に，全世界の天父の子供たちに，そして洋の東西を問わず真理の大義に対して霊的な影響を及ぼしたことに感謝したい。

私は30年間，キンボール大管長の隣に座を占めてきた。私たちは同じ日に十二使徒評議員会に加えられた。私はこの方の偉大さをよく知っている。そして愛し尊敬している。真実彼は気高い神の人，謙遜で霊感あふれる神の予言者である。私は心から彼を支持する。そして彼と共に，人種や信条，国籍，政治的見解の別なく，天父の子供たちすべてを愛している。

私はキンボール大管長と彼の副管長たちが，リー大管長の指導の下に進められてきたプログラムにおいて主要な役割を果たしてきたことに喜びをおぼえる。なぜなら，男女を問わず人格を築き，両親や家庭や個人が直面する数々の問題に解答を与えるプログラムで，これ以上のものはないからである。私たちはキンボール大管長の霊感あふれる指導の下で，この同じプログラムをさらにゆきすぎないものとし，確立していくつもりである。今日ほどこのプログラムが必要とされる時期は，かつてなかった。

モルモンが伝えるメッセージ，すなわちイエス・キリストの回復された福音が世の人々の前に明らかにされてから140余年経つ。

1830年6月，サミュエル・ハリソン・スミスはニューヨーク州の田舎道をとぼとぼと歩いていた。彼は教会が回復されて初めて伝道の旅に出た人である。彼は兄である予言者ジョセフ・スミスにより宣教師に按手任命された。この偉大な宣教師は伝道の初日，40キロもの道を歩き続けたが，背中の，かの新しく見なれな

い書物は1冊も売れなかった。空腹と疲労でふらふらになったサミュエルは，ある家で一夜の宿を請うた。しかし自分の使命について説明するかしないうちに返ってきた言葉はこうだった。「うそつきめ，とっとと出て行ってくれ。そんな本を持ってるやつには，わしの家に足を踏み入れてもらいたくない。」仕方なくまた歩き続けたが，彼の心は失意と悲しみに打ちひしがれるばかりであった。そしてその夜はりんごの木の下で一夜を明かした。

回復された教会，末日聖徒イエス・キリスト教会の，この神権時代の伝道事業は，このような全くみじめな状態で始まったのであった。

かの最初の宣教師が，みすぼらしい姿で混乱した世に救いのメッセージを伝える旅に出かけてから，144年の歳月が流れた。その間この大事業は，神の子らを救うという神が与えたもうた重大な命を遂行しつつ，たゆまず前進を続けてきた。それは，この「特殊な民」の歴史の中でもまさに劇的な章を織り成している。なるほどキリスト教世界の歴史を振り返ってみても，自分の務めに対してこれほど勇気を示し，喜んで犠牲を捧げ，限りない献身を払ってきた例はほかに見当たらない。聖徒たちは，男も女も子供も，すべて物質的な報いを何も望まずにこの一大事業に身を捧げてきたのである。

彼らは自分たちが主イエス・キリストの使いであると固く信じていた。たとえぬかるみや雪の中を重い足をひきずり，川を泳いで渡り，衣食住にこと欠くことがあっても，召しに応えてきたのであった。

父親や息子たちは自ら進んで家族を残し，仕事も捨てて，肉体的な苦痛と容赦ない迫害に耐えながら，世の至る所へ歩を進めて行ったのである。後に残された家族は，しばしばひどい難儀にあいながらも，「宣教師」の仕送りのために喜んで一生懸命働いた。このような努力を続けていく人々の心は，すべて喜びと満足であふれていた。家にいる家族は特別な祝福を受けていることに，感謝の気持を示し，宣教師たちはこのときのことを，「生涯で最も幸福な時期」とまで言っているのである。

1830年以来教会の専任宣教師として働いた人は小さく見積もってみても14万から15万を数え，このほか専任の召しを受けないながらも雄々しく伝道の業に携わった各地方の男女も，相当な数にのぼることは言うまでもない。現在でも2万名以上の人々がこの業に奉仕している。

海外へと赴くこの忠実な使者たちは，延べ9千8百万日から1億5百万日を伝道の業に費やし，自らの生活のために4億2千万ドルから4億5千万ドルの金を自分でまかなっている。これには赴任や伝道に必要な交通費，赴任先での教会による管理費，その他各地方独自の伝道諸経費は含まれていないのである。

恐らく全世界のどこを捜してみても，義を押し進めるためにこれだけの人が自らの意志で犠牲を捧げている姿を見ることはできないであろう。彼らは必ずしも富裕なわけではない。しかも，「主のみ業」のために，昔から現在に至るまで律法として定められている什分の一の律法に従って，全収入の什分の一を献金するように期待されている人々なのである。

なぜだろうか。時間や財産，そして家庭の安らぎや家族の暖いつながりを犠牲にさせるものは，一体何なのだろう。

それは，神がこの地上の人間に再びみ姿を現わされ，過去の時代の人々が受けていたと同じ賜や祝福と共にその教会を再び設立されたこと，また聖なる神権を再び付与され，子供たちの祝福のためにそれを行使する権能を与えられたこと，これらに対する燃えるような確信があるからではないだろうか。確かにそれは末日のこの偉大な業が神のみ業であるとの一人一人の証であり，全能者の命令に忠実に従う信仰である。また神の誓約の子としての私たちの義務，神が生きてましまし子供たちを愛してくださるということ，そして私たちにはあらゆる国々にいる人々の人格を築き上げ救いをもたらすという使命があるということへの確信，これらが私たちを献身へとかりたてるのである。

父祖アダムの時代から予言者ジョセフ・スミスならびにその後任者の時代に至るまで，この地上に神権が存在した時代における主要な義務は，救いにかかわる福音の永遠の原則，すなわち救いの計画を宣べ伝えることであった。アダムはそのことを自分の子供たちに教えた。(モーセ5：12) ノアの長年にわたる伝道をはじめ，古代のすべての予言者の教えを考えてみようではないか。(モーセ8：16—20) 彼らはそれぞれの時代にあって，人の子らに福音のメッセージをもたらし，差し迫っている裁きを逃れる唯一の手段である悔改めを叫ぶように命じられたのであった。主は古代の使徒の偉大な使命について実に明確に述べられた。「……あなたがたは行って，すべての国民を弟子として……」(マタイ28：19)

復活したモロナイがジョセフ・スミスのもとを訪れた最初の頃，はっきりと告げたことがある。それは予言者の名前が善きにつけ悪しきにつけ人々の間に知れわたり，新しい聖典とそれに載せられた回復された福音が「末の世にわが選びたる弟子たちの口より」世に出されるということであった。(教義と聖約1：4)

教会が組織される1年以上も前に

主はこう言われた。「……一つの驚嘆すべき業，まさに人の子らの中に現われんとす。……見よ畑は早白くして刈り入れを待つが故なり。」（教義と聖約４：１，４）そして初期の時代の改宗者たちは次のような義務を果たすように勧告された。「この故に，汝ら神の役務に出で立たんとする者は，終りの日に臨みて神の前に咎なくして立たんため，すべからく心をつくし，勢力をつくし，思をつくし，体力をつくして神の役務をなせ。」（教義と聖約４：２）

初期の宣教師に与えられた約束は偉大なものである。彼らはこう告げられた。すなわち「人の値は神の前に大いなる」ものであり，人が「もし生涯今の世の人々に向いて悔改めを叫ぶことに力を尽し，唯一人の人たりともわれに導かば，わが御父の国に於て彼と共に汝らの悦び如何ばかりぞや。」（教義と聖約18：10，15）

これらの約束はすべて，1830年４月６日に教会が正式に組織される以前に与えられたものである。この時期にはほかにも多くのすばらしい約束がなされた。

そして教会が組織されるや，人々はバプテスマを受け，ふさわしい兄弟たちは神権の職に按手聖任され，悔改めを叫び回復された福音のメッセージを伝える務めに任命された。そしてそれから後の啓示にはさらに大きな約束が含まれていた。その多くが，福音を宣べ伝えるという神聖な義務が回復された教会に課せられているという内容であったことは論を待たない。その年の秋，予言者を通して主から次のようなみ言葉が与えられた。

「われ誠にまことに汝らに告ぐ汝らはゆがみて片意地なる今の世の人々にわが福音を宣べんため高鳴るラッパの響の如く汝らの声を挙げんために召されたり。

見よ，畑は早白くして刈り入れを待つ。然も日はすでに傾き働き人をわが葡萄園に呼び入るる最後の時なり。」（教義と聖約33：２，３）

主は謙遜な使いたちにはっきりと言われた。「われ再び来る時のために主の道の備えをなせばなり。」（教義と聖約34：６）また彼らの語る言葉は，聖霊の力によって鼓舞され，彼らが忠実である限り人々にとって主のみこころとなり聖典の言葉となるという約束も与えられた。また主は次のように断言しておられる。すなわち彼らは「世の人を試さんために遣わ」されたのであり，「心に衰えを感ずることなく，また心暗くなることもな」けれど，頭髪が「神知りたまわずには」「一筋も地に落」ちることがないのである。（教義と聖約84：79，80）

もはや驚くにはあたらない。彼ら一人一人の証と上に述べたような主の感動に満ちた約束によって，この新しい福音の神権時代の幕は切って落されたのである。数も少なく貧しい環境にありながらも，彼らは金銭的な報いを全く望まず，一人一人が犠牲を払いながら力強く前進して行った。これに加えて主は重要な宣言を行なっている。すなわちキリストの再臨とそれに伴う世の終り，つまり悪の最後に備えるにあたり，その証明として福音が与えられるのは，これで最後だということである。彼らの義務は差し迫った裁きに備えるよう警告することであった。これは今日の私たちの義務でもある。彼らは私たちと同じように，主が語られた次の言葉を理解していた。

「そは，無人の境となるほどの懲しめを蒙りてこの世は空しくなり，世の人々はわが来る時の光輝により焼きつくされてことごとく亡び失するに至ればなり。

見よ，この言はわれまたエルサレムの滅亡に就きて正にその民に告げたる如く語るなり。この事のかつて今までに実証せられし如く，今またわが言は実証せらるべし。」（教義と聖約５：19，20）

1831年末，主がその教会に与えられた啓示の出版を考慮するときが訪れた。このときまでに教会は数多くの啓示を受けており，悪魔がさし向ける迫害の手をものともせず，非常な発展を見せていた。主は長老たちの集会で予言者を通じ，教会の人々に向けた偉大な啓示を与えられた。「誠に主の声はすべての人々に及ぶものなれば，一人ものがるる者なし。」（教義と聖約１：２）今まで与えられたいかなるメッセージも，この全世界の人々に向けて語られた回復された福音のメッセージほど明確で，また力強いものはほかにない。以前は疑問があったかもしれないが，この言葉により疑問の余地は全くなくなったのであった。私たちのメッセージは全世界に向けられたメッセージである。

教会が教義と聖約を主の言葉として受け入れていることを認めながら教義と聖約第１章を読む人は，なぜ私たちが全世界いたるところに宣教師を送るかということに疑問を抱いたりしないであろう。主要な義務のひとつであるこの伝道の業は，まさに教会の会員の上に課せられている。なぜなら主がこう言われたからである。「而して，この末の世にわが選びたる弟子たちの口より，すべての人々に警めの声は及ばん。」（教義と聖約１：４）そして主の約束が続く。「この末の世の弟子たちは進み行けど，一人もこれを止むる者なからん。そは主なるわれ，彼らに命じたればなり。」（教義と聖約１：５）さらにこれらすべては「汝ら（この世に住める人々）に公にせんためわが彼らに与えしところ」のものであると述

べている。(教義と聖約1：6) そして主のみ声が地の果てにまで及ぶことを明らかにした後，主はこう指摘された，「されば，主なるわれ，この世に住める人々に襲い来るべき禍を知れば，わが僕ジョセフ・スミス（二代目）を呼び天より語りて彼に誡命を下せり。」(教義と聖約1：17)

そして他のあらゆる神権時代にもそうであったように，現在も逃れる手段が予言者を通じて啓示されている。主はこのように強調しておられる。「……主なるわれは，これらの事を進んですべての人に知らせんと思うなり。そは，われは人々を偏り見る者にあらざれば……」(教義と聖約1：34，35)

勧告の結びとして主は「誡命をしらべ」るよう奨励しておられる。これらの戒めは人類に祝福をもたらすために啓示されたものである。なぜなら「われらは真実確なる誡命にして，その中に言われたる予言も約束もすべて成就さる」からである。(教義と聖約1：37) 主は言われる。「わが言は過ぎ行くことなくしつ成就すべし。わが声にて言わるるも，僕らの声にて言わるるもみな一つなり。」(教義と聖約1：38) 私が引用したこの啓示が与えられてから2日後，主は教会に対してこう告げられた。「わが教会の長老たちを遙かに離れたるもろもろの国民に遣わして…万国の民を訪わしめ……」(教義と聖約133：8)

このように私たちは，全世界に住む末日聖徒として，これらの偉大な業への証を胸に，教会に課せられたこの偉大な義務を，へりくだり感謝の心をもって引き受けるのである。私たちは天父の子供たちの救いと昇栄という大事業に携わる機会があることを喜んでいる。私たちはこの地上に神の王国を建設するために，主が祝福された時間と財産を喜んで捧げようではないか。これは私たちの第一の義務であり，同時にすばらしい機会である。この精神はいつの時代にあってもイエス・キリストの教会の伝道活動の特徴をなすものである。そしてこの時満ちたる神権時代の訪れを示すしるしもそうであった。忠実な末日聖徒のいるところには，この大義のために喜んで犠牲を払おうという精神がどこにでも見られる。大管長会は，第2次世界大戦の最中に世の人々に向けてこのような声明を発表した。「我々の，また教会のいかなる行為も，神がお与えになる命令をさまたげることはできない。」(*Conference Report*「大会報告」1942年4月，p. 91)

要するに，私たちは主の業，すなわち王国の設立と発展，義の拡大のためにすべてを捧げるのである。これこそ大いなる責任である。キンボール大管長は，木曜日に行なわれた地区代表セミナーにおいてこの大いなる責任を強調された。私たちはこのチャレンジを感謝して受け，主の力を祈り求めながら前進して行こうではないか。

この大事業は神のみ業である。主イエス・キリストが主御自身の教会，末日聖徒イエス・キリスト教会を通して導いておられる業なのである。私はこのことをへりくだり，感謝の気持ちをもって証する。イエス・キリストのみ名により，アーメン。

予　言

十二使徒評議員会会員

リグランド・リチャーズ

兄弟姉妹の皆様，この歴史的な大会に皆様とともに出席し，あふれんばかりの主のみたまを受けられることを天父に感謝したいと思っている。今，ニーファイが語った言葉がしみじみと頭によみがえってくる。ニーファイは今日を予見し，モルモン経が世に現わされることを告げた。神の聖徒たちが全地の面に集結し，その上に神の権能が大いなる栄光をもって注がれる日を見たのであった。

今こうしてこのタバナクルや隣接の建物に集まっている大勢の，あふれんばかりの人々の会合が，ほかに世界中のどこにあるだろうか。昨晩の神権会は全世界に放送された。このみ業をなすのは神の力であり，この教会は，主がこの地上に最後にお立てになった神の王国であり，それは決して崩れることも，他の人々の手に渡ることもないのである。私たちは神の命によって，この王国が大いなる山となり，全地を覆うまで切り出されていくと告げられている。

私はこれまで証を述べて下さった，わが友，教会幹部の方々に感謝する。おそらく，みたまの導きを得て生活している人ならばだれであっても，彼らが天父の真の僕であることを心の奥底に感じられたことであろう。

ベンソン長老は，先日の木曜日に，キンボール大管長が十二使徒会地区代表集会で語った言葉を引用された。キンボール大管長は素晴らしい言葉で，主の戒めを守ることの大切さを私たちに再度教えて下さった。私たちに課せられた責任は，この福音を天が下すべての国民に分かち与えることである。時折，私たちは自分はすでに福音を知っているという現状に満足してしまい，当然の義務である福音を分かち与えることに熱意を欠くことである。

私たちはこの大会で，主が教えと導きを施しておられた時のことを再び告げられた。特に，ハンター長老が一つ一つ物語のように述べて下さったイエスの生涯と働き，さらにアシュトン長老が語られた，5人の賢いおとめと愚かなおとめの話には深い感銘を覚えている。私たちは愚かなおとめの中に数えられることのないように，主の再臨に備えなければならない。

さらにここで，私が今感じていることを少し加えておきたい。私は，予言されたことはかならず起こると信じている。その予言の言葉が記されている聖典が私たちに与えられていることを，深く感謝している。もし聖典がなかったならば，私たちは天父とその偉大な計画のこと，さらには現世の生活を終えた後，私たちはどうなるかといったことについて，何ひとつ知ることはできないであろう。

イエスは，「聖典を調べなさい。あなたがたは聖典の中に永遠の生命があると思っているが，聖典は私について証をするものである。」（欽定訳ヨハネ5：39）と言われた。この大会でも，イエスに対して民衆がどのような証をし，イエスが十字架にかけられた時には，その衣をくじを引いて奪い合ったことも詳しく教えられた。

イエスは復活後，丁度，エマオに向けて旅していたふたりの弟子たちに現われ，一緒に歩いて行かれた。「しかし，彼らの目がさえぎられて，イエスを認めることができなかった。」（ルカ24：16）イエスは，弟子たちがイエスのこと，伝道や復活のことについて語り合っていることを耳にし，これまで教えられたことを弟子たちがまだ理解していないことを知ったのであった。

イエスはこう言われた。「ああ，愚かで心のにぶいため，預言者たちが説いたすべての事を信じられない者

たちよ。」(ルカ24：25) そして，モーセをはじめ，数多くの予言者たちが御自身についてどのように証をしてきたかを弟子たちに説明されたのである。ペテロはこの出来事について，イエスが弟子たちの理解の眼を開き，聖典を解することができるようにして下さったのだと説明している。今日世の中には数千に上るもろもろの教会がある。これは，取りも直さず人々が聖典を理解せず，人の教えを教義として説いていることに起因している。そのため必然的に，福音の回復が起こらねばならなかったのである。

使徒ペテロは次のように述べている。「こうして，預言の言葉は，わたしたちにいっそう確実なものになった。あなたがたも，夜が明け，明星がのぼって，あなたがたの心の中を照すまで，この預言の言葉を暗やみに輝くともしびとして，それに目をとめているがよい。聖書の預言はすべて，自分勝手に解釈すべきでないことを，まず第一に知るべきである。なぜなら，預言は決して人間の意志から出たものではなく，人々が聖霊に感じ，神によって語ったものだからである。」(IIペテロ1：19—21)

これが真実だとすれば，私たちは，聖書が天上での戦いから，天と地が更新される終わりの日に至るまでのすべてのことをまとめた主の計画書であるという確かな予言の言葉を持っているわけである。これこそ，主は初めから終わりのことを告げていたと述べた時に，イザヤが意図したことなのである。(イザヤ46：10参照)

ペテロもまた，かつて他の使徒たちとともに経験した輝かしい思いを忘れたことはなかった。その時，救い主は昇天され，やがて白い衣を着たふたりの人が現われ，こう言われた。「ガリラヤの人たちよ，なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは，天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で，またおいでになるであろう。」(使徒1：11)

そこで私は思った。私たちは，あの賢いおとめのように救い主の再臨に備えて自分の生活を整えるだけでなく，予言者たちが再臨の前に予言された事柄について考え，私たちは暗やみを抜け出し，その意味をよく理解できるようにならなければならない，と。

ペンテコステの日の後，ペテロはキリストを死に追いやった人々に対して次のように語っている。

「だから，自分の罪をぬぐい去っていただくために，悔い改めて本心に立ちかえりなさい。それは，主のみ前から慰めの時がきて，あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエスを，神がつかわして下さるためである。このイエスは，神が聖なる預言者たちの口をとおして，昔から預言しておられた万物更新の時まで，天にとどめておかれねばならなかった。」(使徒3：19—21)

私は，単なる改革ではなく，万物の更新を宣言している教会は，この教会を除いてひとつもないと思っている。私たちは，聖なる予言者の口を通して語られた万物の更新が実際に起こるまで，ペテロが神の予言者であることを信じ，救い主の再臨を待ち望むことはできないのだろうか。世の人は，なぜそのことを理解し，私たちが宣言する万物の更新に耳を傾けようとしないのだろうか。

マラキの言葉をよく読むと，マラキ書全体がこの末の日の記述に終始しているように思える。先程，テイラー長老が述べた什分の一の律法や，主の大いなる恐るべき日が来る前に予言者エライジャが現われて，父の心を子に，子の心を父に向けることなどが記されている。マラキ書の3章の冒頭にこうある。「見よ，わたしはわが使者をつかわす。彼はわたしの前に道を備える。またあなたがたが求める所の主は，たちまちその宮に来る。…その来る日には，だれが耐えよう。そのあらわれる時には，だれが立ち得よう。」(マラキ3：1，2)

これはキリストの降誕について語っているのではないと思う。降誕の時，キリストは，「たちまちその宮に来る」こともなかったし，だれも地に倒れることもなかった。精練の火や布さらしの灰汁のように人々を洗い清めるために訪れたのでもなかった。しかし，末日にイエスが訪れる時には，悪人は山や岩に向かって叫び声を上げ，「さあ，われわれをおおって，御座にいますかたの御顔と小羊の怒りとから，かくまってくれ」(黙示6：16) と言うであろう。

私は皆さんに，また全世界の人々に尋ねたい。主が，マラキを通して言われた，主の訪れ（ここでは再臨のことを指す）の前に道を備える使者とはだれのことだろうか。私たち末日聖徒は，この使者がほかでもない，予言者ジョセフ・スミスであることをよく知っている。ジョセフ・スミスはみずから名乗りを上げたわけではない。ただヤコブ書の「あなたがたのうち，知恵に不足している者があれば，その人は，とがめもせず惜しみなくすべての人に与える神に，願い求めるがよい。そうすれば，与えられるであろう」(ヤコブ1：5) という言葉を読んで森に入っていった。彼はどの教会に加わってよいか分からなかった。そして祈った時，天が開かれたのである。

キンボール大管長は，今回の大会の話の中で，主がどのようにしていにしえの予言者にみこころを表わされたか説明して下さった。神は生き

ておられ，地の面と天の間のすべてのものを統治しておられる。現代は，パウロが「それによって，神は天にあるもの地にあるものを，ことごとく，キリストにあって一つに帰せしめようと」(エペソ1：10) される時満ちたる神権時代である。換言すれば，主がその再臨に備えて地上のすべての業を完了する時である。したがって，もし主が再臨の道を備えるために使者を遣わしているとするならば，その使者は今，どこにいるのか。

皆さんに繰り返し申し上げるが，使者は神が遣わされるのであって，自分から申し出るものではない。パウロは，「信仰は聞くことによるのであり，聞くことはキリストの言葉から来るのである」(ローマ10：17) と言われた。さらにこう付け加えている。「聞いたことのない者を，どうして信じることがあろうか。宣べ伝える者がいなくては，どうして聞くことがあろうか。つかわされなくては，どうして宣べ伝えることがあろうか。」(ローマ10：14，15)

このようにして主の約束されたみ使いとしてジョセフ・スミスが召されることは，主の再臨に道を備えるために不可欠のことであった。この神が召されたみ使いこそ，紛れもない予言者である。アモスは次のように述べている。「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは，何事をもなされない。」(アモス3：7) したがって神が召されたみ使いならば，その人は予言者である。私たちがよく歌う讃美歌に次のような詞がある。

たたえよ，主の召したまいし
主と語りし予言者を
末の時をはじめたる
わざを世みな崇めよ

(讃美歌144番)

これが，私たちの予言者に対する思いである。みずから名乗りをあげることによって，予言者に召された人はだれもいない。

私がこれまで聖典を研究してきた限りでは，ジョセフ・スミスは救い主を除き，かつてこの地上に生を受けたどの予言者よりも多くの真理を明らかにしていると思う。このような驚くべき真理が与えられていることを，私は主に感謝する。

イザヤは次のように述べている。「主は言われた，『この民は口をもってわたしに近づき，くちびるをもってわたしを敬うけれども，その心はわたしから遠く離れ，彼らのわたしをかしこみ恐れるのは，そらで覚えた人の戒めによるのである。』」(イザヤ29：13) どこに行けばこの人の戒めを見ることができるだろうか。全世界に存在する何千という教会の中にそれを見ることができないだろうか。

「それゆえ，見よ，わたしはこの民に，再び驚くべきわざを行う，それは不思議な驚くべきわざである。」(イザヤ29：14) この不思議な驚くべき業は，まさに真理を愛する人が知りたいと願い，飛び付きたくなるようなものでなければならない。かくして「彼らのうちの賢い人の知恵は滅び，さとい人の知識は隠される」のである。(イザヤ29：14)

これが私たちの持っているものである。私はこれまで何回も牧師たちと話す機会があったが，彼らから質問されたことはほとんどない。と言うのも，私が彼らに説明することは皆，神の聖なる書，聖書から取り上げていたからである。それも彼らが一度も耳にしたことのないことばかりであった。兄弟姉妹の皆様，私たちはかくも不思議な驚くべき業を知っているのである。

もし主が予言者やみ使いを立て，主の再臨のために道を備えるとすれば，まず第1に行なうことは，そのみ使いを通して，父なる神とその御子イエス・キリストの属性に関し世の中の人々が抱いている誤った考えを改めさせることであろう。当時，すべての教会では，三位一体説を唱え，体も感情もない神を信じていた。

モーセはこうした状態を以前から予測していた。モーセはイスラエルの子らを約束の地へ導く時，こう言われた。「その所であなたがたは人が手で作った，見ることも，聞くことも，食べることも，かぐこともない木や石の神々に仕えるであろう。」(申命4：28) モーセが約3000年前に語った言葉は，ジョセフ・スミスが驚くべき示現を受けた当時の全世界のキリスト教会の唱える教義の中に，一言一句たがわず示されている。さらに，モーセはこう付け加えている。「しかし，その所からあなたの神，主を求め，もし心をつくし，精神をつくして，主を求めるならば，あなたは主に会うであろう。後の日になって，あなたがなやみにあい，これらのすべての事が，あなたに臨むとき，もしあなたの神，主に立ち帰ってその声に聞きしたがうならば，あなたの神，主はいつくしみ深い神であるから，あなたを捨てず，あなたを滅ぼさず，またあなたの先祖に誓った契約を忘れられないであろう。」(申命4：29―31)

私たちは今，その末日に生を受けている。主が予言者ジョセフ・スミスをお立てになって，それを私たちに明らかにして下さったことを心から感謝している。

御父と御子イエス・キリストは実際にジョセフ・スミスに現われ，神会とはどういうものかを教えられた。ジョセフ・スミスの次の疑問は，どの教会に属すべきかということであった。世の数ある教会の中で，どれ

が正しい教会かを判定する権利を有しておられるのは，天が下にこの世の救い主をおいてほかにいない。救い主はその時，当時の教会はすべて人の考えと教えを説いており，どの教会にも属してはならないと言われたのである。

そのことについて詳しく説明している時間もないが，ただひとつ，モロナイの訪れとモルモン経が金版から翻訳されたことを考えてみていただきたい。主がエゼキエルに記録するようにと命じられた，ユダの記録とともにひとつとなるべき他の書物のことを知っている人がこの世の中にだれかほかにいるだろうか。その記録がどこにあるかを知っているのは，私たちだけである。この記録には主が，ユダヤ人と異邦人にイエスがキリストであることを教えるために取っておかれた知識が含まれている。今日のユダヤ人はモルモン経以上のことを知る必要はない。なぜならこのモルモン経には，イエスの降誕，そして十字架にかけられた時のしるし，またこのアメリカ大陸を訪れられたこと，ニーファイが示現を通して見た，幼な子を抱えたマリヤ，さらにその子が成長して，世の罪を負って十字架にかけられることなどが記されているからである。私たちはただ主が予言者を通じて備えて下さっている計画に従えばよいのである。

さらに罪の赦しを得るために水に沈めるバプテスマを執行する権能であるアロン神権を持つバプテスマのヨハネがジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリに現われて，互いにバプテスマを施す方法を教えられた。この世の中にほかにその権能を持っている人がどこにいるだろうか。続いてペテロ，ヤコブ，ヨハネが聖なる使徒職の権能，メルケゼデク神権を回復した。このメルケゼデク神権は，この地上に最後の神の王国，教会を築く権能であり，決して絶えることも，他人に譲り渡されることのないものである。次いでモーセが現われ，末日にイスラエルを集合させる鍵を与えられた。

エレミヤは次のように述べている。「主は言われる，背信の子らよ，帰れ。わたしはあなたがたの夫だからである。町からひとり，氏族からふたりを取って，あなたがたをシオンへ連れて行こう。わたしは自分の心にかなう牧者たちをあなたがたに与える。彼らは知識と悟りとをもってあなたがたを養う。」（エレミヤ３：14，15）皆様はこの大会で耳にしたような主の心にかなう牧者の声をどこで聴くことができるだろうか。彼らは皆，神から召され，聖任された御方である。彼らこそ，エレミヤが語った，主の心にかなう牧者である。

さらに主は，エレミヤを通じて次のように言われた。

「主は言われる，見よ，わたしは多くの漁夫を呼んできて，彼らをすなどらせ，また，そののち多くの猟師を呼んできて，もろもろの山，もろもろの丘，および岩の裂け目から彼らをかり出させる。」（エレミヤ16：16）これが，私たちの今推し進めている業である。エレミヤはその日を予見してこう言われた。「主は言われる，それゆえ，見よ，こののち『イスラエルの民をエジプトの地から導き出した主は生きておられる』とは言わないで，『イスラエルの民を北の国と，そのすべて追いやられた国々から導き出した主は生きておられる』という日がくる。……」（エレミヤ16：14，15）エレミヤは，「町からひとり，氏族からふたりを取って」と言われたが，それが，きょう大会に集っている皆様方である。

兄弟姉妹の皆様，神の祝福が皆様方の上にあるように。私は，なぜ証の声を上げるのをためらう人がいるのか理解できない。私にとってそれは，不思議な驚くべき業であり，世界中で最も偉大な動きである。万事が一夜の夢のようにはかなく消え去ってゆく今日にあって，この教会，この王国は神の命じたもうた行く末に向かって絶えず発展してゆくのである。これらの証を，主イエス・キリストのみ名によって述べるものである。アーメン。

正しく尊い目的

大管長

スペンサー・W・キンボール

愛する兄弟姉妹の皆さん。栄えある大会も終りに近づいてきた。多くの教会幹部の方々が述べて下さった説教や証は正直で，深い意味を持った，しかも皆人々の心を動かさずにはおかないものばかりだった。彼らは皆霊感によって，主のみ言葉を語っていたからである。

何かを行なう場合，どのような方法で行なうかということはとても大切である。しかし，何のために行なうかということの方が，それ以上に大切である。

私たちは主に仕えようと決意しており，その目的が正しく，尊いことを確信している。しかし何にもまして，私たちには，神が現在天に住んでおられ，また神の御子イエス・キリストが私たちにひとつの計画を与えて下さったという知識がある。この主の計画によって，私たちと愛する者たちは，忠実であれば永遠の生命を授かるのである。この永遠の生活は，達成と喜びと発展に満ちた，多忙な，目的のある生活であろう。

あなた方は，この世においてこれまでに味わった喜びの中から最も大きなものを思い出せると思う。ところが次の世の生活はこの世の生活の延長であり，この世に増して大きく，倍加された，しかももっと望ましい意味の深い事柄を伴うのである。この世の交わりすべてを通じて，あなた方は進歩と喜びと成長と幸福を得る。そしてこの世の生涯を閉じた後も私たちは，現世に似た状態のもとに置かれる。ただ現世と異なる点は，制限が少なく，もっと光栄があり，大きな喜びがあるということである。

ジョン・ヘンリー・ジョウェットはこう語っている。「祭壇を築くことはだれにでもできる。だが，火を呼びおこすためには神が必要である。家を築くこともだれにでもできる。だが，家庭をつくるためには主〔と両親〕が必要である。」(『家庭における神』，ジョン・ヘンリー・ジョウェット，*A Treasury of Inspiration*「インスピレーションの宝」，ライフ・L・ウッズ編，p. 260)

あなたがたがこれまでにたびたび耳にしてきた教会のこの基本プログラムは，家庭を本来の目的を果たせる場とするものであり，家族に霊感と啓示を与えるものである。自分自身の思いつきと能力にのみ頼って物事を決める人は，非常に重大な過ちを犯すことになり，その影響ははかり知れない。

ある人が言っているように，「多くの人々は，学齢に達してから博士号を得るまで，16年ないし20年間，こつこつと勉強を続ける。そして医学や工学，心理学，数学，社会学，生物学などを学ぶ。そのために研究や調査を重ね，クラスに出席し，授業料を払い，教師や教授の助けを受ける。ところが，万物の造り主であり，すべてのものの創造者である神について学ぶときには，祈りも怠りがちで，研究する時間もきわめて限られている。にもかかわらず，神についての真理を見出すことができると考えているのである。

主が私たちに，聖典を調べ，祈るように命じられたのはこの理由による。主は言われた。「聖典を調べなさい。というのは，あなたがたは，聖典の中に永遠の命があると思っているからである。聖典は，わたしについてあかしをするものである。」(欽定訳ヨハネ5：39) また主は言っておられる。「ああ，愚かで心のにぶいため，預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。キリストは必ず，これらの苦難を受けて，その栄光に入るはずではなかったのか。」(ルカ24：25，26)

パウロはコリント人に次のような印象深い言葉を書き送っている。「兄

弟たちよ。わたしもまた，あなたがたの所に行ったとき，神のあかしを宣べ伝えるのに，すぐれた言葉や知恵を用いなかった。

なぜなら，わたしはイエス・キリスト，しかも十字架につけられたキリスト以外のことは，あなたがたの間では何も知るまいと，決心したからである。

わたしがあなたがたの所に行った時には，弱くかつ恐れ，ひどく不安であった。

そして，わたしの言葉もわたしの宣教も，巧みな知恵の言葉によらないで，霊と力との証明によったのである。

それは，あなたがたの信仰が人の知恵によらないで，神の力によるものとなるためであった。

しかしわたしたちは，円熟している者の間では，知恵を語る。この知恵は，この世の者の知恵ではなく，この世の滅び行く支配者たちの知恵でもない。

いったい，人間の思いは，その内にある人間の霊以外に，だれが知っていようか。それと同じように神の思いも，神の御霊以外には，知るものはない。」（Ⅰコリント2：1－6，11）

またパウロはこう続けている。「ところが，わたしたちが受けたのは，この世の霊ではなく，神からの霊である。それによって，神から賜わった恵みを悟るためである。

この賜物について語るにも，わたしたちは人間の知恵が教える言葉を用いないで，御霊の教える言葉を用い，霊によって霊のことを解釈するのである。

生れながらの人は，神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また，御霊によって判断されるべきであるから，彼はそれを理解することができない。」（Ⅰコリント2：12—14）

ヨブは語っている。「しかし人のうちには霊があり，全能者の息が人に悟りを与える。」（ヨブ32：8）

「百卒長，および彼と一緒にイエスの番をしていた人々は，地震や，いろいろのできごとを見て非常に恐れ，『まことに，この人は神の子であった』と言った。」（マタ27：54）

ある時，ふたりの人が列車で旅をしながらキリストのすばらしい生涯について話し合っていた。そのうちのひとりが言った。「イエス・キリストについて扱ったら，興味深い物語が書けると思いますね。」

するともうひとりが答えた。「それを書けるのはあなただけですよ。イエスの生涯と性格をそのまま描き出したらいかがですか。イエス・キリストは神の子であるという一般の観念を破って，人間臭い人間としてありのままに描くんですよ。」

この話は実行に移され，物語が書き上げられた。提言した人はインゲルソール大佐で，著者はルー・ウォーレス，その著書は「ベン・ハー」であった。

物語の筋を組み立てる過程で，彼が見出したのは，イエスが罪とは無縁のお方だということであった。その生涯と性格を調べれば調べるほど，イエスはただの人間以上のお方であるという確信が深まってくるのだった。そして最後に，十字架の下の百卒長のように，彼も「まことに，この人は神の子であった」と叫ばずにはいられなくなったのである。

私が以前考えたことも感じたこともない事柄を，主は夢を通して人々に明らかにしてこられた。ジョージ・F・リチャーズが会長のときに，十二使徒評議員会の席上で，私は一度ならずこのことを聞いた。リグランド・リチャーズ兄弟の尊父であるリチャーズ会長はこのように語った。

「兄弟たち，私は夢を信じている。主は私に幾度も夢を見せて下さった。それは私にとって，あたかも現実のようであった。また，国を飢饉から救う手段となったパロの夢や，故国から一行を率いて大海を渡り，この約束の地へ来るよう告げたリーハイの夢や，その他聖典に記された数々の夢のように，私の夢も神からのものだった。

私たちが大切な夢を見るにふさわしくないということではない。40年以上前に私はある夢を見たが，それは主からのものであると私は確信している。私はこの夢の中で，中空に立っておられる救い主のみ前にいた。私は主から何の言葉も受けなかったが，主に対する私の愛は，筆舌に尽くせないほどであった。この世の人はだれも，神が示しを与えたまわない限り，私が救い主に対して感じたような愛を主に抱くことはできないことを私は承知している。私はそのまま主のみ前にとどまりたかった。けれども，ある力によって私は主から引き離された。

その夢を見た結果，私は，何が求められようと，福音が私に何を求めようと，私に求められるものはたとえ命でも差し出そうという気持に駆られた。

また，『わたしの父の家には，すまいがたくさんある。……あなたがたのために，場所を用意しに行く……わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである』（ヨハネ14：2，3）と救い主が弟子たちに言われたが，その言葉を聖典で読んだときにもそうであった。そこが私の望んでいた場所なのだと思う。

救い主と一緒にいることができ，あの夢の中で味わった同じ愛の気持を抱けるならば，それこそが私の存在の目標であり，生涯の望みなのである。」

ジョージ・Q・キャノン長老は，一時教会の大管長会で働いた人であるが，彼はこのように語っている。「私は神が生きておられることを知っている。またイエスが生きておられることも知っている。私は現に主にまみえたからである。これは神の教会であり，私たちの贖い主であるイエス・キリストの上に築かれていることを知っている。私は事実を知っている者として，主イエス・キリストの使徒としてあなた方に証する。今日，主のみ前にあってあなた方に証することができる。主は現在も将来にわたっても生き続けたもう。また主は争う者のない統治者として地上に来られ，世界を治められるであろう。」(1896年10月総大会の説教 *The Deseret Weekly*「ザ・デゼレト・ウィークリー」1896年10月31日，第53巻，p. 610)

兄弟姉妹たち，教会幹部はこれと同じ証をもっている。そしてそれが真実であることを知っている。彼らは，天父から遣わされた真の僕なのである。

兄弟姉妹たち，私はこれらの予言者たちの証に私の証を加えたい。私は主が生きておられることを知っている。また，主にまみえることができ，主と共にいることができることを知っている。主の戒めを守って生活し，主に命じられ，幹部の兄弟たちに促された事柄を実行するならば，私たちはいつも主のみそばにとどまることができるであろう。

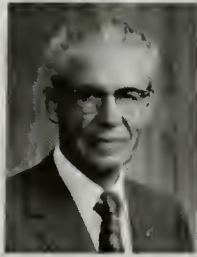
私はあなた方にこの証を残す。主イエス・キリストのみ名によって，アーメン。

目　次

第144回
半期総大会
1974
10. 4-6

時の動き
1974

4.11　第4次中東戦争責任問題でイスラエルのメイア首相辞任。
4.15　厚相諮問機関の人口問題審議会，「人口白書」を報告。1夫婦の子供は平均2人にすることなどを報告。
5.9　伊豆半島沖地震，マグニチュード6.9，死者30。
5.19　フランス大統領選挙，ジスカール・デスタン氏当選。インド初の核実験。
6.5　世界保健機構，インドで天然痘死亡者1.5万人と発表，第1次大戦以来最悪の流行。
6.18　大阪で某宗教法人の教祖が，6月18日に大地震が起こると予言，これが成就せず，自殺をはかる。ロンドン，英国国会議事堂爆破事件。
8.8　ニクソン大統領辞任。9日，新大統領としてフォード氏，就任
8.15　朴大統領狙撃事件。大統領夫人死亡。在日韓国人文世光逮捕さる。
8.30　三菱重工本社爆破事件。丸の内ビル街で死者8人。重軽傷250人以上。
9.15　日本赤軍派，ハーグの仏大使館占拠。
10.4―第144回半期総大会。

大管長会

第一副管長
N・エルドン・タナー

スペンサー・W・キンボール

第二副管長
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン

マーク・E・ピーターセン

デルバート・L・ステイプレー

リグランド・リチャーズ

ヒュー・B・ブラウン

ハワード・W・ハンター

ゴードン・B・ヒンクレー

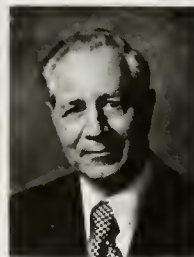
トーマス・S・モンソン

ボイド・K・パッカー

マービン・J・アシュトン

ブルース・R・マッコンキー

L・トム・ペリー

大祝福師

エルドレッド・G・スミス

神は欺かれざればなり

大管長

スペンサー・W・キンボール

兄弟姉妹，友人の皆さん，この大会でお会いできることを心から喜んでいる。皆さんが，この大会で語られるすべての事柄から，励ましと霊感を受けられるようにと願っている。

私たちは記者会見の度に，「ところで，教会の状態はいかがですか」という質問を受ける。その都度，私たちは「教会は順調に大きく，強くなっています」と答えている。

現時点で，ステーキ部の数は全世界に661を数える。私が教会本部に入った1943年には148しかなく，また海外にはひとつのステーキ部もなかった。教会が大海を越え，大陸に至るまで，私たちは何年も待たなければならなかった。しかし，ロムニー副管長が1958年5月にニュージーランドのオークランドにステーキ部を組織されたのを皮切りに，現在海外には86のステーキ部を数えている。1943年の時点では，宣教師の数，活動ともに小規模であったが，現在は112の伝道部，661のステーキ部伝道部を擁し，約1万8000名の宣教師を派遣している。着実に成長の歩みを進めるこの姿を私たちはうれしく思っている。

私たちがなぜこれほどまでに幸福なのかとの質問を受けたらこう答える。「それは，私たちにはすべてのものがあるからです。すなわち，あらゆる機会に満ちた人生，死を恐れない確信，成長，発展が，とどまることのない永遠の生命があるからです」と。

世界の四方にいる，数多くの人種からなる330万の会員とともに，私たちはまた新たな成長と発展の年を迎えようとしている。

私たちは集会に出席し，それぞれに責任を果たすべく努めている。神殿への参入者数は増加の一途をたどり，そこで行なわれた儀式の数は，私たちが霊的に大きく成長していることを示している。大学，インスティテュート，セミナリー，その他定例集会でのレッスン，これら教育プログラムにも満足すべきものがある。かくして，さらに広範な知識と確固たる証が築かれている。

世の多くの教会が困難に直面し教会堂の建築を差し控え，あるいは断念している今，私たちの建築プログラムは全世界で進展の一途をたどっている。ほとんど毎日のように新しい教会堂が建ち，幸福で忠実な人々で埋められている。

私たちは満足しているのでも，自慢しているのでもない。しかし，いついかなる時も救い主が言われた言葉を胸に抱いている。主は言われた，

「もしわたしの言葉のうちにとどまっておるなら，あなたがたは，ほんとうにわたしの弟子なのである。

また真理を知るであろう。そして真理は，あなたがたに自由を得させるであろう。」(ヨハネ8：31,32)

私たちは主の崇高な祈りを忘れてはならない。

「わたしがお願いするのは，彼らを世から取り去ることではなく，彼らを悪しき者から守って下さることであります。

わたしが世のものでないように，彼らも世のものではありません。

真理によって彼らを聖別して下さい。あなたの御言は真理であります。」(ヨハネ17：15－17)

兄弟姉妹の皆さん，私たちは美化キャンペーンに着手した。私たちは多くのものを捨てる。人口の増加よりもはるかに早いスピードでごみはたまってゆく。そこで皆さんに家の内外をきれいにするよう求めたい。「人は土地の管理者であって，所有者ではない」のである。

壊れたへいは修繕するか，さもなくば取り払い，使わない納屋は修繕し，屋根をふき，塗装し，あるいは

処分し，家畜小屋や囲いは修繕し，ペンキを塗るかあるいは処分し，雑草の生い茂った水路の周辺をきれいにし，人の住んでいない建物は壊すべきである。都会，郊外を問わず私たちの社会の全域にわたって，納屋，家畜小屋を清潔にし，修理し，塗装し，歩道を作り，水路の周辺をきれいにし，私たちの財産を目に麗しいものとしていただきたい。

若人のグループ，補助組織，神権定員会に対して，この美化運動を強力に推進するよう依頼している。

主はこのように言われた。

「地と，それに満ちるもの，世界と，その中に住む者とは主のものである。」（詩篇24：1）

「われ主なる神，かの人（アダム）をとり彼をエデンの園に置きてこの園の手入れをなさしめ，またこれを守らしめたり。」（モーセ3：15）

私たちは皆さんの手にある財産を美しく飾り，保護するよう強くお願いしたい。

再び大切な選挙の時がやって来た。皆さんに政党の綱領をよく研究し，候補者について知るよう勧めたい。そして主の導きを求めて祈ってから，投票所に行って投票していただきたい。

私たちはいわゆる一夫多妻主義に関して警告したい。これはあなたがたを真理から迷わせるものである。主は数十年前に予言者を通してこの計画に終止符を打たれた。そして予言者はこの啓示を全世界に宣言した。外部の人々はあなたを欺き，大きな悲しみと自責の念を与えようとしている。これらあなたを惑わすような人々といかなる関係も持ってはならない。主の言葉を無視することは誤りであり，罪である。主はこのことについてすでに断言しておられる。

子供たちに名誉と高潔，また正直について教えていただきたい。盗みがどれほど罪深いことかを知らない子供が私たちの中にいる，というようなことが考えられるだろうか。破壊行為，盗み，強奪などの蔓延（まんえん）には信じ難いものがある。家族を正しく教育し，この潮流から守っていただきたい。

兄弟姉妹，私たちはこの民に，忠実であるように教えている。「われらは，王，大統領，統治者，長官に従うべきを信じ，また法律を守り，敬い，支うべきを信ず。」（信仰箇条第12条）常に忠実であり誠実でありなさい。

私たちの教会の最も大きな特徴といえば，それは，教会員がアルコール飲料，茶，コーヒー，タバコを断っていることであろう。この計画に従う勇気と証を持っていない者も幾らかはいるが，大多数がこれを厳格に守っている。

現代の予言者を通じて神よりの啓示が多く与えられているが，そのひとつに知恵の言葉として知られている教義と聖約89章がある。現在に至るまで141年間，私たちはこの啓示が伝える偉大な真理を実践してきている。すなわちぶどう酒と強き飲料を避け，茶とコーヒーは体のためにならず，いかなる形ででもタバコをたしなまず，ただ打身とすべての病める家畜に効く薬草であることを知っている。（教義と聖約89：8参照）

最近「何かを始める日」を設けているミネソタ州のある町で，公共機関を通じて人々に禁煙を勧めたというニュースを耳にした。そして1月7日にそれを実施し，271人が禁煙を実行したと聞いている。このように物事に目覚めている社会とその指導者たちに賛辞を送りたい。

さて，ここ数年来私たちは，この知恵の言葉によって制限されているものを飲用することが，数え切れないほど多くの疾病の原因となっていることを多くの医学者を初め，他の人々からも認められていることを聞いている。私は親しい友人の病床に立ち，彼ががんで他界するのを目にしたことがある。医師の話によるとタバコが原因となったということであった。私はまたアルコールという悪魔に殺された人々の埋葬を手伝い，そのほか罪のない多くの人々が酔っ払い運転の犠牲となって亡くなったことも知っている。

アルコール飲料は罪のない第三者にまでも多くの悲しみ，苦痛，苦悩，死をもたらしている。社交上でしか酒をたしなまない人は，絶対にアルコール中毒にならないと言う。しかし，そう言い切れるだろうか。

知恵の言葉を破る者は，奇妙な，もっともらしい言い訳を並べる。どうして，生ける予言者を通して与えられた啓示を無視していてよいだろうか。主はこの啓示を別の予言者によって繰り返し，はっきりとした戒めとされた。

実業界ではアルコールを勧めるのをもてなしとする習慣があるが，私たちはこれを嘆いている。特にクリスマスの時期になると，多くの人々は主イエス・キリストの降誕を，いわゆる社交パーティーという形で祝っている。実はこれは主を侮辱していることなのである。人々は楽しい時を持とうとして酒を飲み，活力や自信を得るために酒を飲んでいるが，これは何と悲しい習性だろうか。

私たちは皆さんに，あらゆる種類の薬剤をできる限り避けていただきたいと申し上げる。精神安定剤や睡眠薬に頼る人があまりにも多い。これらはかならずしも必要ではないものである。

数知れない多くの若者がマリファナや麻薬の類で，心身を損ね，あるいは廃人化しているが，実に悲しむべきことである。

もうひとつ警告したいことがある。それは多くの人が安息日に日用品を買っているということである。もし私たちがこの日に買い物をしなければ，多くの従業員が仕事から解放され，休息と礼拝の時を持つことができるだろう。しかし，多くの人々が言い訳や詭弁をろうして，安息日に買い物をすることを正当化しようとしている。すべての人に申し上げる。安息日を聖く保ち，日曜日の買い物をしないように，と。

忠実な末日聖徒は，賭ける賭けないにかかわらずギャンブルに使うトランプ遊びをしないと思う。競馬，ゲーム，スポーツ一切に関してギャンブルをしないように強く求めたい。

このことに関しては明朝の福祉集会で多くのことが語られるはずである。多くの人が親の責任をほかの機関に任せているが，これはまったく遺憾なことである。

生活必需品を一年分貯蔵するということに無頓着な人々もいる。緊急時に人々の必要を賄うための教会のプログラムに十分な資金と物資を蓄えたいと願っている。そして援助を受けた人は，それに対して相互依存の精神で積極的な働きをされるように強く勧めたい。監督の皆さんに申し上げる。援助を与えるに当たっては，物惜しみをしてもいけないし，与え過ぎても良くない。また援助を受ける人が正直，公正で分別のある人かどうかを見極めていただきたい。

災いの時が来たら，多くの人はびんに果物を詰め，庭を耕し，果物の木を植えておいて，日用の食糧だけは自給できるようにしておけばよかったと思うことだろう。

主は私たちがだれにも依存しないで生活するよう意図された。しかし多くの農夫が牛乳を店から買い，家屋と土地を持っている者が園芸野菜を店から買っている。やがて荷を運ぶ自動車が来なくなり，店の棚が空になった時，多くの人々が飢えることであろう。

私たちは労働の大切さを知っている。十戒の第4番目に，「六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ」（出エジプト20：9）と言われている。一方労働時間が急速に短縮されつつある現状は，一体全人類のためになるのだろうか。主ははっきりとした意図のもとにこれを語られたと思う。私たちは遊ぶことや旅行することしか考えず，私たちの経済は，物見遊山にうつつを抜かす大衆，ゲームに興じる大衆，酒飲みの大衆に貢献しているように思われてならない。

私たちはさらに，家庭，店舗，レストランその他に非常な無駄を見ている。食事が終わると，多くの食物をごみ箱に捨ててしまう。それは，恵まれない国でひと口の食べ物を求めて飢えている多くの人々の必要を賄うことのできる量なのである。多くの人々が飢えている一方で，私たちは多くを投げ捨て，むだにしている。

私たちはこれまで，自分の家を持つよう会員たちに奨励してきた。自分の家を持つ人々の間にも安定している人とそうでない人とがいる。分析家は再び苦難の時代が到来することを予測している。その時，全収入あるいはそれ以上を費やしている人々はどうするのだろうか。就職の機会がなくなり，収入が減らされたらどうするのだろうか。あなたは収入の範囲内で生活しているだろうか。事態が悪化したら支払えないような負債を負っていないだろうか。経済的な打撃を受けた時に，それを十分に緩和するものを持っているだろうか。

食糧品の価格は高騰している。しかし，失業して，収入が大幅に減少することを思えば耐えられよう。

娯楽施設に行って驚くことは，神への冒瀆が公然と認められていることである。戒めは言う。「あなたは，あなたの神，主の名を，みだりに唱えてはならない。」（出エジプト20：7）祈りと説教以外の場で，主のみ名を用いるべきではない。神への冒瀆はかつて重罰に値する罪であった。冒瀆とは，道徳的に弱い人がする強がりである。

私たちの民の両親，指導者はポルノグラフィーに対して妥協を許してはならない。これこそ実はごみであるのに，おいしい食物として売られている。多くの作家はそういった食物で社会を汚すことに喜々としている観がある。これを法令で規制することはできない。ポルノグラフィーと性の放縦，倒錯には関連性がある。私たちは官能的な意味での極度の興奮状態，ストリーキング，その他狂気の沙汰を崇拝する世界に住んでいる。人間の低劣化はどこまで進むのだろうか。私たちが世に染まらぬよう守りたまえと主に祈る。相当な地位にある人々が心と霊が汚染された地に投げ込まれている現状はまことに悲しむべきことである。私たちの民すべてが全力を尽くしてこの醜悪な改革に足を踏み入れないよう呼び掛けたい。

ポルノグラフィーが無害であるかのように主張する人がいるが，実にばかげたことである。犯罪と関係があることは明白である。殺人，強盗，婦女暴行，売春，営利目的で堕落行為をあおることなどは，この不道徳という思いによって培養される。性犯罪の統計は，犯罪とポルノグラフィーの間に一定の関係があることを物語っている。

ポルノグラフィーは社会的な標準を下落させる以外の何物でもない。家族はあらゆる手段を尽くして子供

たちを守っていただきたい。私たちは何もかもが許される世界に住んでいるが，許す世界すなわち退化する社会に埋没しないようはっきりとした意識を持つ必要がある。自由を主張する世の多くの人々が道徳的に堕落した状態に陥ってしまっていることを私たちは驚いている。不道徳を許容しようとする趨勢が，この世代の人々の道徳意識を破壊してしまうのではないかと恐れるのである。

カリフォルニア州知事リーガン氏はこのように述べている。「われわれはこの人道主義社会において被告人の持つ権利を擁護してきた。無実の人を罰すること以上に恐ろしいことはない。しかし，今や，われわれは罪人に対して必要以上の気遣いをしている。我々は罪人を犯人とは呼ばず，病人と呼んでいる。確かに彼は病気かも知れない。しかし社会の生んだ敗北者でもある。社会がその罪に対して裁きを受けないでいるのに，どうして彼が責めを受けなければならないのか。」

私たちは犯罪者を罰すること，さらには子供をしつけることまでもためらっているかのようである。合衆国の犯罪増加率は，人口増加率の9倍近くに達していると言われている。合衆国で過去2年間に生まれた第一子の三分の一は，婚姻関係にない両親から生まれたと言われている。合衆国では1年間に約40万の私生児が生まれており，他の多くの国々も同様の記録を示している。高等学校を中退する女子生徒の約半数は妊娠のためである。ほかにも驚くべきことがある。毎年100万人以上のアメリカ人女性が不法な堕胎を行なっている。これはあらゆる罪の内最も卑しむべきもののひとつである。厄介(やっかい)払いのために，体面を守るために，あるいは楽をするために，生まれ来るべき子供を葬っているのである。この堕胎のために，毎年約8千人の女性が命を落としていると言われている。また報告によれば，合衆国の大学生の死因で第一位を占めるのが自殺だそうである。

ある有名な作家によれば，「イエス・キリストはその道徳的厳格さのゆえに，もはや世の人々の心をとらえることがなくなってきている。キリストはその道徳的厳格さをもって，あらゆる行動を非難している。」キリストは私利私欲をむさぼる社会を非難している。安免を求める風潮，事なかれ主義を非難し，私たちの道徳的放縦を非難しておられる。また力に頼る私たち，愛を否定し，気高い人生を歩むことを拒む私たちを攻撃しておられる。私たちの社会は，安楽のみを愛する社会であり，安楽と文明とを同じものだと考えている。主の計画は厳格であることを天父と御子に感謝申し上げたい。

パウロはこのことをはっきりと述べている。

「きよい人には，すべてのものがきよい。しかし，汚れている不信仰な人には，きよいものは一つもなく，その知性も良心も汚れてしまっている。

彼らは神を知っていると，口では言うが，行いではそれを否定している。彼らは忌まわしい者，また不従順な者であって，いっさいの良いわざに関しては，失格者である。」（テトス1：15，16）

家庭は教育の場である。すべての父親は息子に，母親は娘に教えるべきである。その後子供たちが受けた助言を無視したとしても，子供たちには何ら弁解の余地がない。

道を踏み外す両親の数に私たちは驚かされる。不信仰の結果招いた離婚，家庭の分裂の数を見る時，私たちは教義と聖約に記されている基本原則に目を向けざるを得ない。

「汝……姦淫を犯すなかれ。……また何事にてもこれに類することを為すことなかれ。」（教義と聖約59：6）

すべての人に申し上げる。心と体を清く保ち，滅亡と大きな苦しみをもたらす道に足を踏み入れてはならない。主は言われる。

「『姦淫するな』と言われていたことは，あなたがたの聞いているところである。

しかし，わたしはあなたがたに言う。だれでも情欲をいだいて女を見る者は，心の中ですでに姦淫をしたのである。」（マタイ5：27，28）

さて，心の中の卑しい思い，目の欲，肉の欲は大きな罪へとつながる。すべての男性は家庭に愛を育むようにしなさい。すべての女性は夫を支え，自分の心を本来あるべきところ，すなわち家庭に置きなさい。すべての若人は妥協を許そうとする誘惑から離れ，みずからを強く律して性的不純という堕落から身を守りなさい。彼らは，なるべく早い内から，またすべての面で，そして継続して悔い改めなければならない。

同性愛はいかなる形であれ罪である。ポルノグラフィーが罪に走らせる。ここにどっちつかずは存在しない。

ある人々は男らしさ女らしさという概念を無視し，悪にふけり，また明らかにそれを打ち壊そうとしている。男性のような服装，身繕い，行動をとる女性が次第に増えている。他方女性のような服装，身繕い，しぐさをする男性が増えている。この増大する中性主義によって人生の高貴な目的が砕かれ，損われている。神は御自分のかたちに人を創造された。すなわち，男と女に創造された。主は最も善きことを知っておられる。性を変える男女は創造主に対して償いをしなければならないだろう。

J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長の言葉をもって皆さんの注意を喚起したい。「私たちの文明は，純潔，神聖な結婚，聖い家庭に基を置く。これらを打ち，滅ぼす者は，キリスト教徒といえども野獣と何ら変わるところがない。」*Conferesce Report*「大会報告」1938年10月，p. 137)

愛する兄弟姉妹の皆さん，あなたがたは信仰を試されている。あなたは指導者の言葉に耳を傾けているだろうか。

この放縦の世における罪は何も若人に限られたことではない。最近私は映画の雑誌を読んでいて驚いたことがある。ある人が結婚について，単なる法律上の契約を負うだけのものであると述べ，次のように語っていた。「結婚制度は廃止すべきである。そうすれば何ら社会的圧力もなく，ユートピアのようなところになるだろう。」彼から質問を受けたある女性はこう答えていた。「結婚なんて廃止すべきですわ。私は，結婚せずにふたりで静かに暮らしている人々を知っています。でも，そうした関係の中で成長した子供が悪い影響を受けるなんて見たことがないわ。」

こういった考えを持っているのは，結婚をせずに同棲(どうせい)することを唱道している人だけではない。私はこのことを私たちの民に力の限りを尽くして知ってもらいたいと思う。

もう一度申し上げる。私たち教会員は結婚する。すべて正常な人は結婚すべきである。(多少の例外はあろう。) すべて正常な結婚をしたふたりは親となるべきである。聖典はこう語っている。

「何人にても結婚を禁ずる者は神より聖職の按手任命を受けたる者にあらず，そは結婚は神の人に定めたるところなればなり。

この故に，人各々一人の妻を有つことは義し。而してこの二人の者一体となるべし。すべてこれは，この世の造られたる目的に適わんためなり。」(教義と聖約49：15, 16)

地は結婚と家族なくして善とされず，また存続し得ない。老若を問わず結婚をせずに性的関係を持つことは，主の目に憎むべきことである。悲しむべきことに，多くの人々はこれらの偉大な真理に目を閉じている。

私たちはこれまで幾度となく，これら世につける有害な事柄について述べてきた。私たちが主の祝福を受けるために取り除かなければならないその他の事柄について手短かにまたはっきりと話したいと思う。

夫婦は互いに愛し慈しまねばならない。夫婦は特に不信仰，不道徳によって家庭を破壊に陥れてはならない。

片親だけで成長している子供のパーセンテージが日増しに高まっている。これは主のみこころにかなうことではない。主は父親と母親に子供を育てるよう望んでおられる。子供から両親を奪うような人はやがて厳しく問いただされる日が来るはずである。主は片親でなく両親に対して，その子供を正しく教えない時「罪その両親の頭に留るべし」と言われた。(教義と聖約68：25) 崩壊した家庭について正当な理由を申し立てることは難しい。離婚のほとんどは，利己心の結果である。裁きの日は迫っている。家族を見捨てた両親は，大いなる裁き主の満足できるような弁解や言い訳を見付けることができないだろう。

繰り返し申し上げる。男女の性倒錯は地を満たすことができない。彼らは弁解の余地なく罪に定められる。いかなる正当化も力を持たない。そして神はそれを赦したまわない。

堕胎に関して，私たちは今年生まれるべき何百万の子供が命を絶たれたという報告に悲しみを覚えている。この忌まわしい罪に走った女性，そして時には罪がこれを生んだのであるが，彼女らを助けた人々は，かならず応報があることを覚えるべきである。神よりの罰がかならず下る。

結婚は永遠にわたるものである。私たちはこのことを真剣に考え，行なっている。私たちは両親となって，子供たちを世にもたらし，義のうちに育て，教える。

若人が家族を制限するために手術し，かなりの両親がこの精管切除手術を勧めているという報告に私たちはあきれ果てている。忘れてはならない。主の再臨は近い。愚かな説明や論理では満足されない聖なる判士は，答えようにも言葉を見いだせない質問をされるであろう。主は公正に裁きを下される。

なぜ私たちは自分の行く末を自分の手の中にとどめてしまうのだろうか。開拓者時代に最初に粗末な小屋を築いた時以来，真の文明は家庭と家族がその中心を占めていた。神より与えられた計画をゆがめる者はかならず悲惨な結果を招く。家族はともに働き，ともに遊び，ともに神を礼拝すべきである。

私たちは川の流れに浮くコルクのように，誤った考え，危険な道，悪魔の教えに行く末を任せることができるだろうか。私たちはだれにそそのかされるのか。安易な道をとり，「狭くて細い」道から，悲しみに至る安易で広い道に針路を転じるのか。(マタイ7：13, 14参照) 私たちは愚かなことはしない。あなたは耳を傾けているか。あなたは中央と地元の指導者の忠告，勧告に従おうとしているだろうか。それとも，たとえ暗い荒野に通じる道であっても，自分の道を歩むのだろうか。

愛する皆さん，神が祝福したもうように。天の声に耳を傾けなさい。

神はまさしく生きておられる。神は公平であり，義の判士である。正義は同情，赦し，慈悲の前を進む。

覚えておいていただきたい。神は天にまします。神は地球を組織された時，目的をもっておられた。そして今も同じように目的をもって私たちを見守っておられる。神の戒めを破る者は自責と苦痛のうちに歯がみし，苦しむだろう。神は欺かれない。人が自由意志を持っていることは確かである。しかし，神が欺かれることはない。(教義と聖約63：58参照)

天父の律法に厳格に従って生活するよう，ここで勧告したい。イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

あなたが立ち直ったときには，兄弟たちを力づけてやりなさい

十二使徒評議員会会員

L・トム・ペリー

最近私はほんの5日間ほどではあったが，学校にもどる機会を得た。情報処理関係の講座に招待されたのである。初めは学校の雰囲気に自分を慣らすことで精一杯であったが，次第に人間が開発した驚嘆すべき近代技術に心を奪われていった。「キーボードに記号を幾つか打ち込むだけで，5000キロ離れた所にあるファイルから情報が得られるのですよ」という講師の言葉に私は面食らってしまったが，はたしてわずか5秒もたたない内にその情報が映し出されたのである。

私たちは新しい，キャビネットタイプの小型印字機を見せてもらった。高速でかさばることもない。外見は市販されている印字機とまったく同じだが，違うのは今まで私が見たものと比べて効率がはるかに良くなっているという点である。作動ボタンを押すと，普通の印字機と同じように左から右へ印字を始める。ところがこの機械は，もどりの時も右から左へ印字してしまうのである。それだけ時間の節約になる計算である。私はその速度，正確さに目をみはった。そして今までの機械の常識を打ち破った画期的な進歩に驚嘆の声を上げたのである。

この人類が考え出した最新の技術をいろいろ調べている内に，私が事務器というものにはじめて接した時のことを思い出した。5歳か6歳の頃だったろうか。それは当時監督であった父が書記の人たちと一緒に仕事をする時に使っていた，古い，手動の計算機だった。このように事務機の分野だけを取ってみても，私のこれまでの生涯の内に驚異的な進歩を遂げて来ているのである。

こうした科学技術の発達のことを考えると，今後どれだけの進歩が得られるか期待に胸を膨らませないではいられないのである。同じように主の創造の過程を思い浮かべながら，私はその構成の見事さに畏怖の念を抱いていた。そして主は世の始めである創造の時から地球が日の光栄の状態に入る最後の時まで，私たちの必要を満たすために，原料となるものをすべて与えて下さっている。

今朝私たちの予言者が引用した偉大な聖句をここでもう一度読んでみたい。

「地と，それに満ちるもの，世界と，そのなかに住む者とは主のものである。」（詩篇24：1）

聖典の中で私が面白いと感じてきたことがひとつある。主が義なることについて語られる時に，豊かな，満ちあふれた，沢山の，といった言葉が発せられるということである。窮乏や欠乏といった言葉は主から来るものではなく，人間が作り出したものである。人間が「生めよ，ふえよ，地に満ちよ，地を従わせよ」という神の最初の訓戒に従わなかったために生じたものなのである。

主は私たちの可能性を最大限にまで伸ばすために，死すべき肉体を得てこの地球上にいる間にどのような行動をとるべきかを私たちに教えて下さっている。その第一は主の言葉を信じ，主を愛すること，第二は隣人を愛し，彼らが主の実在を知り，主に対する証が得られるように助けることである。律法学者がキリストに次のような質問をしてきた。「先生，律法の中で，どのいましめがいちばん大切なのですか。」答えはこうである。

「『心をつくし，精神をつくし，思いをつくして，主なるあなたの神を愛せよ』。

これがいちばん大切な，第一のいましめである。

第二もこれと同様である，『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これらの二つのいましめに，律

法全体と預言者とが，かかっている」。(マタイ22：36－40)

救い主のこの答えから，私たちはふたつの偉大かつ基本的な戒めが何であるかが分かる。私はこれをあなた方の前にもう一度確認し，その意味をさらに深く理解されんことを望みたい。

第1の戒めについては，モルモン経の中の，父と息子の間に起こったひとつの出来事が語ってくれる。アルマは救い主の時代よりも150年近く前に住んでいた大祭司である。彼は自分の名を付けるほどであるから，よほど息子を愛していたに違いない。しかし息子アルマは，成長すると父親の教えから離れてしまった。聖典にはこう記録されている。

「かれは非常に罪深い男で邪神を信じ，言葉が多くてよく人にへつらい，多くの者をまどわして自分のしているような罪悪を犯させた。」(モーサヤ27：8)

父は息子アルマの生活を変えようと熱心に努めたが，効果がなかった。そこで父アルマは主のもとへ行き，息子アルマがしるしを受けてみずからの悪事を知り，正しい道を示されるようにと願ったのである。息子アルマの身の上に驚くべき出来事が起きたのはその後であった。天使が彼の前に現われ，悔い改めよと命じたのである。

この偉大な示現が閉じられるや，息子アルマは驚きのあまりに地に倒れてしまった。そして口も利けず，力を失って立つこともできなかった。そこで連れの者はアルマを担いで父のもとに運び，そこに横たえた。ところが父アルマは大いに喜んだ。それがまったく主の力によるものであることが分かったからである。そして父は祭司たちを呼び集め，アルマが再び力を得ることができるよう二日二晩ともに断食し祈るように願った。彼らの祈りは答えられ，アルマは力を得て彼らの前に立ち上がり，心配しないで喜んでくれと言った。アルマはこう語った。

「私はすでに罪を悔い改めて主に贖われた。ごらん，私は『みたま』によって生れた。

主は私に『天下の万民は男女を問わず，あらゆる国民，あらゆる血族，あらゆる国語の民，あらゆる人々にいたるまでみな新に生れざるべからざることを怪しむなかれ。人はみな神によりて生れ，その堕落したる肉欲の有様より正しき有様に移り，神に贖われて神の息子または神の娘とならざるべからず。

かくて人は新なる者となる。しからざれば決して神の王国に住むことを得ず』と仰せになった。」(モーサヤ27：24－26)

このアルマの言葉は私たち一人一人にとって証となるものである。それは，心を入れ替えて主の道を歩むという価値ある，実り多い経験をしたいと望む時に，私たちの人生にどのような出来事が起きるかを教えてくれるからである。

改宗は終着点ではない。新しい人生への道の出発点である。ではここで，改宗した後に何をすべきかという第2の戒めについて，聖典の中からもうひとりの偉大な人物を紹介しよう。キリストが地上でみ業に携っておられた時に，最初にイエスに従った人々の中のひとりについて新約聖書に記録がある。聖典は記している。

「さて，イエスがガリラヤの海べを歩いておられると，ふたりの兄弟，すなわち，ペテロと呼ばれたシモンとその兄弟アンデレとが，海に網を打っているのをごらんになった。彼らは漁師であった。

イエスは彼らに言われた，『わたしについてきなさい。あなたがたを，人間をとる漁師にしてあげよう』。

すると，彼らはすぐに網を捨てて，イエスに従った。」(マタイ4：18－20)

さて，漁ができるということはペテロにとっては財産であり，世の物を得る才能であった。お気付きのことと思うが，ペテロは最初から，世のものと神のものと，どちらかを選択するように求められていたのである。ペテロは救い主と親しく交わるという地上では得難い経験を通して改宗したのであった。聖典にはペテロがヤコブ，ヨハネとともに町から離れた高い山に連れて行かれ，そこで大いなる示現を受けたことが記されている。

「ところが，彼らの目の前でイエスの姿が変り，その顔は日のように輝きその衣は光のように白くなった。」(マタイ17：2)

私たちは，このような偉大な示現の後でも，救い主がペテロに引き続きその使命と責任を思い起こさせていることに気付く。

「シモン，シモン，見よ，サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。

しかし，わたしはあなたの信仰がなくならないように，あなたのために祈った。それで，あなたが立ち直ったときには，兄弟たちを力づけてやりなさい。」(ルカ22：31,32)

そしてペテロは，救い主が人類に授けられた中で，最も偉大な顕われを目撃する特権に浴した。なぜ偉大かといえば，十字架の悲しみを目撃し，ついで復活された主を見る権利を与えられたからである。しかし復活を目撃した後でも，ペテロは自分自身の改宗ということをまだ深い意味ではとらえていなかったようである。救い主は栄光のうちに弟子たちにそのみ姿を現わされた後で天に昇られ，弟子たちは再び世に取り残さ

れたが，その時ペテロが最初に考えたことは，世の仕事へもどることであった。

聖典から見てみよう。「シモン・ペテロは彼らに『わたしは漁にいくのだ』と言うと，彼らは『わたしたちも一緒に行こう』と言った。彼らは出て行って舟に乗った。しかし，その夜はなんの獲物もなかった。

夜が明けたころ，イエスが岸に立っておられた。しかし弟子たちはそれがイエスだとは知らなかった。

イエスは彼らに言われた，『子たちよ，何か食べるものがあるか』。彼らは『ありません』と答えた。

すると，イエスは彼らに言われた，『舟の右の方に網をおろして見なさい。そうすれば，何かとれるだろう』。彼らは網をおろすと，魚が多くとれたので，それを引き上げることができなかった。」(ヨハネ21：3－6)

ここで救い主はペテロに偉大な教訓を与えている。神につけることは，世につけることを越えているということである。主は世の物である魚を人に与える力を持っておられる。しかし主にとってはそれは二義的なものである。

そこで最後に，ともに食事を済ませた後で，ペテロは救い主の使命について偉大な教訓を受ける。

「イエスはシモン・ペテロに言われた，『ヨハネの子シモンよ，あなたはこの人たちが愛する以上に，わたしを愛するか』。ペテロは言った，『主よ，そうです。わたしがあなたを愛することは，あなたがご存じです』。イエスは彼に『わたしの小羊を養いなさい』と言われた。」(ヨハネ21：15)

そして救い主の問い掛けは2度，3度と続き，ついにペテロは心を痛め， 主にこう答える。「主よ，あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることは，おわかりになっています。」(ヨハネ21：17)

ここでペテロは「あなたが立ち直ったときには……」と言われた救い主のみこころをはじめて悟ったのである。私たちが立ち直ったとき，すなわち改宗した時には，救い主の羊を養うこと，言葉を換えて言えば何かを行なう責任が生じてくるのである。改宗によって私たちが心に決めた事柄の真価が表われるのは，それが実行に移された時，すなわち主を知っているという証が基となって何かが行なわれ，そこから何らかの成果が得られた時である。

この改宗の過程は，今の神権時代における教会の多くの偉大な指導者の生活の中にも見いだすことができる。彼らは改宗を遂げた後で，非常な熱意を持って兄弟たちを強めようとした。この点で常に私の心を動かすのがジョン・テイラーの話である。

福音がはじめてテイラー兄弟とその家族にもたらされたのは1836年の4月，彼らがカナダのトロントにいた時で，パーレー・P・プラット長老によってであった。当時牧師をしていたジョン・テイラーは，プラット長老が教える事柄をひと言も聞き漏らすまいと耳を傾けた。そしてプラット長老の8回にわたる説教を書き留め，聖書と照らし合わせて矛盾がないかどうか確かめようとしたのである。テイラーはこの作業に3週間専心し，納得がいったのでバプテスマを受けた。

それから1年後，ジョン・テイラーはオハイオ州カートランドを訪れた。当時カートランドは町全体が背教の空気に包まれ，悲しいことにカナダへの伝道から帰ったパーレー・P・プラットも，その紛争に心を悩まされていた。プラット長老はなぜ予言者ジョセフが誤りに陥っていると思うかをテイラー兄弟に説明しようとしたが，それに対してジョン・テイラーは，次のように確固たる信念をもって答えている。

「パーレー兄弟，あなたがそのようなことをおっしゃるとは驚きですね。カナダを立つ前，あなたはジョセフ・スミスが神の予言者だと強く証されました。また彼が始めた業が真実神からのものだと言われました。そればかりでなく，あなたはそれらのことを啓示によって，聖霊の賜によって知ったとおっしゃったのです。また，たとえあなたや天の使いがほかのことを語ったとしても信じてはならないときつく言われたではありませんか。

パーレー兄弟，私が従っているのは人ではなく神です。あなたが原則を教えて下さったお陰で，私は神に近づくことができました。私は今，あなたが伝道中に持っておられたと同じ証を持っています。み業が半年前に真実であれば，今も真実なはずです。ジョセフがその時予言者であったのなら，今も予言者のはずです。」(B・H・ロバーツ，*Life of John Taylor*「ジョン・テイラーの生涯」 pp. 39，40)

このテイラー長老の言葉によってみずからの非に気付いたパーレー・P・プラットは力付けられ，予言者ジョセフのもとへ行って涙を浮かべながら赦しを請うた。そして教会の導き手である予言者に固く忠誠を誓ったのである。まさに改宗したジョン・テイラーの言葉がパーレー・P・プラットの生涯に霊的な影響を与えたのであった。

「あなたが立ち直ったときには，兄弟たちを力づけてやりなさい。」(ルカ22：32) この世のあらゆる富や豊かさは，義しきにかなって享受するよう神から賜わったものである。それに対して私たちは，神を愛するよう求められる。また主と主の道に改

宗して主の羊を養い，殖やし，地に満たし，兄弟たちを強めることが期待されているのである。願わくば私たちすべてが改宗の何たるかを悟り，この地上に神の王国を建設することに力を注ぐことができるように。またアルマやペテロやジョン・テイラー大管長，その他あらゆる神権時代にあって偉大な予言者であり教会の導き手であった人たちが，主の奇しきみ業を目の当たりにしてみずからの生涯を主の目的に捧げてきたように，私たちもその道をたどることができるように。

この大会にあって私も証したいと思う。神は生きておられ，イエスは世の救い主であり，今日ここでこの大会を管理しているスペンサー・W・キンボール大管長は予言者である。このことを考えていただきたい。主の予言者が今日この地上にいるのである。私がこう証するのはそのことを知っているからである。イエス・キリストのみ名により，アーメン。

良い習慣は良い人格を育む

十二使徒評議員会会員

デルバート・L・ステイプレー

愛する兄弟姉妹ならびに友人の皆様，今年の6月大会の席上，スペンサー・W・キンボール大管長は若人や青少年の指導者，さらには全教会員に対して，自分が日頃習慣として行なっていることを一つ一つ列挙してみるように勧告した。彼はこう語った。「望ましくない習慣を捨てて代わりに良い習慣を取り入れれば人は変わる。あなた方は良い思いと行ないによって，その性格と将来の姿を形造っているのである。」

きょう私は，良い人格を育む上で良い習慣がいかに大切かということについて話したいと思う。

故デビッド・O・マッケイ大管長が好んで用いた言葉に次のようなものがある。「私たちは思いをまき，行ないを刈り取る。行ないをまき，習慣を刈り取る。また習慣をまき，人格を刈り取る。そして人格をまき，行く末を刈り取るのである。」(C・A・H, *The Home Book of Quotations*, 1935, p. 845)

私たちが末日聖徒として目指す将来の生活は，良き思いが良き行ないに表わされる生活であり，常に心の中に平安があり正義を選ぼうという決意がみなぎっている生活である。そして目指す行く末は救い主が神の忠実な子供たちのために用意された日の光栄の王国にあって受け継ぎを得ることである。

私たちは，生まれながらにして，一定の習慣を身に着けているわけではない。気高い人格を身に着けているわけでもない。そうではなく，私たちは神の子供として，どのような人生を歩むか，どのような習慣を身に着けるかを選択する権利と機会を与えられているのである。

孔子はすべての人の本質的なものはいつの時も同じである，と言っている。習慣が別れ道となるのである。

思いが行ないに先行することは言うまでもないが，良い習慣というものは，ただ単に決心をしたからと言って自分のものにできるわけではない。良い習慣というものは日常生活の中の行動を通して養われてゆくものである。人格が築き上げられるのは，決して大きな試練に遭った時ではない。そのような時はただその人の人格が現われるに過ぎない。人生に指針を与え，人格を形成するこの習慣というものは，日常の何ら取るに足らない出来事の中で形成されていく。言葉を換えて言えば，日ごろの行ないが人格を造るのである。

賢者ソロモンはこう説いた。「子をその行くべき道に従って教えよ，そうすれば年老いても，それを離れることがない。」(箴言22：6)

子供を幼い頃から訓練するということをひとつの習慣としておけば，その習慣が子供の将来の基礎となり，後の生活の力となるのである。両親の皆様，幼い子供は罪を犯すことができないと断言している主の啓示を思い起こしていただきたい。子供は責任を執れる年齢に達するまでキリストの内に生きており，その間悪魔は何の力も及ぼすことができない。したがって生まれてからの8年間というものは，両親が子供に良い習慣を形成し立派な人格を育むよう教え，訓練するのにまたとない期間である。そして主が，この8年間を両親に与えたもうたのである。

ブリガム・ヤングは次のように教えている。「私は若人に言いたい。忠実でありなさい。なぜならあなた方は，将来何が待ち構えているか知らないからである。また，悪い習慣を捨てなさい。」(*Journal of Discourses*「説教集」11：118) この勧告は若人だけでなく大人にも適用できよう。

私たちは，前途に何が待ち構えているかを知らない。しかし正しい行

ないをしていれば安全であるし，力も得られる。私たちは福音の原則に従って生活を整え，永遠の生命への旅を続けるに当たって正しい進路を取らなければならないのである。

人生をながめて見ると，良い人格を築く習慣こそすべてであることがよく分かる。そのような行ないによって，私たちはまことの富と価値ある人生という収穫を手にするのである。私たちがどんなに立派なことを言おうが，その人が生きている姿に勝るものはない。

マハトマ・ガンジーは言った。「人間の究極の目的は，習慣をすべて征服し，みずからに内在する悪に打ち勝ち，善を正当な位置に回復させることである。」

世の人々に受け入れられている生き方でも，神の目から見れば受け入れられないものもある。しかしながら，神がお与え下さった標準はあらゆる人のためのものである。標準は変わることがない。そして神の子供たちのために，真の生き方とは何かを絶えず明確に示してくれるのである。

私たちは神の前に思慮深く振る舞わなければならない。罪を犯してはならない。悪意に満ちた人の誘いに乗ってはならないのである。

悪い習慣は私たちの思いや人格，行動を反映したものであり，神が霊の賜として授けて下さった信仰，正直，高潔などの優れた資質を低下させてしまう。

ある人はこう述べた。「みずからの悪い習慣を自慢する人は，それだけの人でしかないと言っていい。」

アメリカの古代の予言者リーハイは，みずからの民に次のように語った。「人は皆善悪をわきまえることを充分に教えられている。」（IIニーファイ2：5）

この死すべき世にあって私たちの選択はふたつにひとつである。すなわち天父の望みである善を選ぶか，さもなくばサタンの計画である悪を選び，その絶え間ない誘いに屈してしまうか，どちらかである。

人が悪に染まり始めると，その人格は地に落ち，破滅への人生をたどるであろう。罪に走ると，その人の悪に抵抗する力，自制心，品性は弱められて，さらに重大な罪を犯してしまうのが常である。霊にかかわる律法を破り，霊的な資質を拒むにつれて，私たちの抵抗力は無くなっていく。そして結局は，悪に抵抗する力をすべて完全に失ってしまうのである。悪を呪いながら，その舌の根もまだ乾かない内に悪を行なうような生活を続けている人の不幸な有様を想像していただきたい。

私たちに課せられた大きなチャレンジは，自己を制する方法を知ることである。しかも自分自身の力で見いだし，実行に移さなければならないのである。神に導かれていない人に従うことのないように注意を払う必要がある。私たちには悪魔の業をくじく責任がある。罪を犯させようとする誘惑に屈して，悪魔の目的に加担したり，いつまでもなすがままに放置したりしてはならない。

習慣は改善することができるし変えることも可能である。主はこのように言われた。「そは人自らの中に自由の意志ありて己れの事を自ら為す者なればなり。」（教義と聖約58：28）

悪い習慣や罪や弱さに浸ってしまったために，もうそれを捨てることも悔い改めることもできないと言うのは誤りである。人間の心は正義へと向かうものなのである。私たちは神の霊の子供であり，心の内にすべての悪しき行ないを克服する力を生み出すことができるのである。

古いことわざによれば，良い習慣は誘惑を拒むことによりもたらされるという。多くの場合，誘惑への抵抗は絶え間ない戦いという形を取るので，自分の生活の中に食い込んでしまった悪い習慣を克服するには，みたまの助けを求めなければならない。

私たちが熱心に求めるならば，主はそれができるように力を与えてくださる。讃美歌に次のように歌われている。

たえず頼り主求む
み声により慰む
たえず近く主あれば
悪の力弱まらん

（讃美歌102番）

私たちは主の戒めや律法を忠実に守れば，救い主に近くいることができる。

そして天には，慈愛に満ち，親切で，私たちをこよなく愛してくださる御父が，私たちを助けようとしておられる。悪を行なおうとする誘惑を退ける力を得るには，自己を修練し，自分自身をコントロールすることができるようにならなければならない。悪い行ないを征服し，肉体的にも霊的にも好ましくない結果を生ずることのない自由な状態にみずからを置いた時の気持ちはたとえようのないものである。悪い習慣に打ち勝って代わりに良い習慣を身に着け，神の子としてふさわしく従順かつ忠実に生きる時，私たちは神のみ前に通ずる道を歩み始めるのである。

私たちは品性を高め，人格を高揚する活動に熱心に参加すべきである。そうすれば百害あって一利なしというような事柄に割く時間は無くなる。私たちの習慣は，信仰と証を呼び起こすようなものでなければならない。

最も良い習慣として私たちが養わなければならないことのひとつとして，みずからの責任について理解を

深めるために聖典を読むことがある。神の戒めを知りかつ守ることによって，私たちは信仰と表裏一体となる正義を全うする方法を見いだしていく。そして良い習慣は私たちが向上するための備えとなるのである。

私たちはこう自問しなければならない。「私が日常考え，行なっていることは，永遠の生命を受けるにふさわしいことだろうか。永遠の目標に目を向けて，それを達成しようとしているだろうか。」少しでも最善を尽くしていない点があれば，それは決して十分とは言えない。特に主の業を行なうに当たっては。

主は悔い改めて主の前に正しく道を歩むように言われた。「正しく道を歩む」とは道徳的な事柄に関する原則を完全に守り，かつ自分の心に正直に生きるということである。私たちは，家庭を義と名誉の住む所とするよう教えられている。名誉という言葉は今日の世の中ではあまり使われなくなってきている。名誉という言葉は，義務，責任，永遠の価値を持つ物に対する尊敬の念といった意味を含む。また常に規律を固く守って正しい行ないをし，みずからの義務をよく果たして人の模範となるという意味も含む。

世の進む道が神の道と異なるならば，あえて世の道と決別しようではないか。利己心，不正直，不道徳な事柄が横行する混乱した世にあって，私たちはみずからを高邁な道に置き，私利私欲を超越した心からの奉仕，信頼，正直，徳行，その他人格を高潔なものにしてくれるあらゆる徳性をはぐくみ，また強めていくように努力しようではないか。思いは私たちの行く末を決定する。そしてその行く末は私たちの人格により決まる。この人格こそ私たちの習慣を総集したものにほかならないのである。良い人格を得るには相当な努力が必要である。

アーネスト・L・ウイルキンソンはブリガム・ヤング大学の学生にこう語った。「人格は……何もしなくとも安易に得られるものではないし，また世の人の歓心を買いながら得られるものでもない，また熱心に求めただけでも得られないし，だれか代理の人に得てもらうこともできない。ましてやせり市で手に入れることもできないものである。人格とは，困難なことを克服しようと一生懸命努力することによってもたらされる報いなのである。私たちは人が不可能と思うことをやり遂げることによって成長する。」

その通りである。永遠の生命を得るために必要な人格は，この世において良い習慣をもとにして形成される。良い習慣が人格を形成する要素を提供してくれるのである。個々人が各々その身に着けるべき人格を身に着け，それが国家全体に及ぶようになると，その国家も人格を具えたと言える。個人の場合も国家の場合も同じであるが，善とは単に悪を行なわないということではない。真実，正直，好ましきこと，そして良き聞こえあるあらゆることを愛し，行ないに示すことなのである。

自分自身に対して高い目標を定め，神を生活の中心とすることによりその目標を達成しよう。神はあらゆる真理，正義，平和の源である。また神の律法が永遠のものであることを記憶しようではないか。永遠に変わることがないのである。生活を楽しむ方法として妥協を許したり悪い習慣を選ぶことを大目に見るような道徳律，霊の律法はない。人は神の道を変える権利を主張するかも知れない。しかし主はきのうも，きょうも，そして永遠に同じである。人に与えられた神の標準と真理は，神のすべての子供たちに常に真実の生き方を示してくれるに違いない。

天父に喜ばれるような習慣をみずからの中にはぐくむことにより，私たちの人格は高められ，ますます人に良い感化を及ぼし，人の模範となり，愛する人や友人に祝福を与え，生活を豊かなものにすることができる。また真の満足感が得られ，心に平安と幸福を打ち立てることができるのである。私たちは心から望み，求めるひとつの宝を得ることができ，それは永遠の喜びへとつながるだろう。なぜなら主はこう約束しておられるからである。「従って人善を為さば決してその報いを失わざらん。」（教義と聖約58：28）

以上述べた事柄もすべて第一歩から始まる。それは「できる」と決心することである。

願わくば私たちがあらゆる悪を捨て，良い習慣と高潔な人格に伴う義の標準とを維持することにより，永遠へ向けて人生設計の第一歩を踏み出すことができるように。

私は人生において良い習慣と高潔な人格がいかに価値あるものかを心から証したい。先に引用した，私たちの愛する予言者であり指導者であるスペンサー・W・キンボール大管長の勧告は実に賢明で時宜にかなったものであり，私たちが従っていかなければならないものである。これらをイエス・キリストのみ名により証する。アーメン。

引き延ばしてはならない

大祝福師

エルドレッド・G・スミス

ひとりの天使がまだ18歳にも満たないある若者のもとを訪れ，自分は神のみ前より遣わされた者であると告げた。この天使こそ，モルモン経に記された最後の予言者，モロナイである。そしてその若者は，ジョセフ・スミスであった。

モロナイは聖書から数多くの言葉を引用して語ったが，それはほとんど，栄光のうちに再臨されるイエス・キリストのために道を備える時がすでに来ていることを宣言するものであった。その時モロナイは，マラキの言葉を次のように引用した。「見よ，わたしはわが使者をつかわす。彼はわたしの前に道を備える。またあなたがたが求める所の主は，たちまちその宮に来る。見よ，あなたがたの喜ぶ契約の使者が来ると，万軍の主が言われる。」（マラキ3：1）

この言葉は，主が再び来られる時，主は「その宮」すなわち神殿に来られるということを強調している。言い換えるなら，主が来られる神殿が地上になければならないということである。

モロナイはまた，聖書の聖句とは若干言葉を変えて，マラキ書3章の5節と6節を引用した。

「見よ，主の大いなるおそるべき日の来る前に，予言者エライジャの手によりて，われ神権を汝に顕さん……彼は先祖になされし約束を子らの心に植え，子らの心にその先祖を思わしめん。もし然らずば，主の来る時，全地はことごとく荒れ廃れん」（ジョセフ・スミス2：38，39）

福音が回復される過程で予言者ジョセフ・スミスに数々の指示が与えられたが，その最初の指示の中で，神殿とそこで行なわれる儀式に関連した事柄が示されたことは，非常に意義のあることだと思う。つまりこのことから，神殿に関する事柄が福音の本質的要素の中でもきわめて重要なものであることを知ることができる。

このメッセージの中で求められている事柄を満たすためには，神殿がなければならない。また，エライジャが神権の権能を携えて来なければならない。さらに，先祖の記録を集め，儀式を行ない，結び固めが行なわれるという約束を果たす教会員が，いなければならない。

神はみずから，アダムとイヴを夫婦として最初の家族をもうけられた。しかし家族という組織は，人類がある程度進歩したら捨ててもよいというような，人間の手になる組織ではない。私たちの生活に最も影響を与えるもの，最も大切なものはすべて家族に結び付いている。それは愛が家庭の中心となっているからであり，私たちは愛のある所に幸せをも見いだすからである。まことに，人が独りでいるのは良くない。主はその知恵によって，人がこの地上にあって幸福を得，またその喜びを永遠にわたって保てるように，ひとつの方法を備えられた。最も大きな喜びと幸せは，家族を通じてもたらされるのである。この世の生涯を通してそうであるならば，なぜ次の世において，そうでないと言うことができるだろうか。

家族は非常に大切である。そのために主は，福千年の終わりまでに福音を受け入れるすべてのアダムの子孫が，神権の権能によって一家族として共に結ばれるということを，私たちに明らかにされた。この神権の権能によって地上において結び固めることは天でも結び固められ，地上において結ぶことは天でも結ばれるのである。

この地上に来るすべての人は，受け入れる気持ちがあれば，福千年の終わる前にこれらの結び固めに伴うあらゆる祝福を受ける機会にあずかるに違いない。そうでなければ，神は公平であるとは言えないからである。

これらの結び固めの祝福を得るためにはまず，バプテスマの儀式を受けてイエス・キリストの教会に入る必要がある。ついで，この世においても永遠にわたっても，夫婦が結び固められることである。また，永遠の結婚誓約の下に生まれていない子供たちは，その両親に結び固められなければならない。結び固められた子供は，新しくかつ永遠の誓約の下に生まれたと同様に，あらゆる祝福を受けることができるのである。

この律法なしに死んだ者は，身代わりの儀式によってこれらの祝福を受ける特権にあずかることができる。ここに私たちの責任がある。私たちはまず，生きている人々に福音を教えなければならない。それから，この律法なしに死んだ先祖の記録を集めて，彼らのためにこの大切な業を行なう必要がある。

末日に福音が回復されると，子孫は心をその先祖に向ける，という約束が先祖に与えられた。この意味は，私たちが先祖のために儀式を行ない，彼らに与えられた約束を成就しなければならないということである。これを行なわなければ，私たち自身の救いも危うくなるのである。

バプテスマの儀式だけでなく，家族を永遠の単位として結び固める儀式もこの地上で行なわなければならないものである。まず私たち自身の儀式を行ない，次にすでに霊界に行っている先祖のために身代わりの儀式を行なう。この最も神聖な儀式は，まさにこの目的のために建てられ，主に捧げられた聖なる神殿で執り行なわなければならない。

近代の啓示の中で，主は予言者ジョセフ・スミスに次のように命じておられる。

「わが名により，最と高き者の住むべき一つの宮居を建てよと。

そは彼来りたもうて，汝らのすでに失いたるもの，すなわち彼の取り去りたまいしもの，すなわち完全なる神権を再び回復したもう土地はこのほか世に一つもあらざればなり。」（教義と聖約124：27，28）

これらの神殿は，最も重要であり，かつ特別な目的のために建てられている。生者はここで最も神聖な儀式を受け，家族は永遠に結び固められるのである。神殿は美しい建物であり，またそうあるべきであるが，それはただ見るためだけの記念物ではない。そこには，生者，死者を問わずすべての義人が昇栄の祝福にあずかることのできる，唯一の道が備えられている。私たち生ける者は神殿に参入し，この聖なる結び固めの儀式を受け，それを受けた者は先祖に心を向け，先祖が同じ祝福にあずかれるように身代わりとして道を備えなければならない。

このために，家族の探求が必要である。これまで天にとどめ置かれたえりすぐりの多くの霊が福音を受け入れ，先祖のために神殿の仕事を行なうことができるように，いまこの地に送られている。夫あるいは妻，または夫婦だけが改宗し，家族の中で唯一の教会員となっている例を私は幾つも知っている。そのほとんどの場合に，立派な系図記録を彼らかあるいは家族のだれかが持っている。その内のある人々はその記録を一生懸命に神殿に送り，儀式が施せるように努めている。けれども，先祖の名前を送らず，手元に置いている人々も大勢いる。私たちは遅らせてはならない。残された時は少ない。神殿の数が増し，それとともに多くの儀式が行なえるようになった。現在新しい神殿では，毎日約3千以上の儀式を行なうことができるのである。したがって記録を手元にとどめていてはならない。所定の用紙に記入し，神殿へ送っていただきたい。

主が幾世紀もの間これらの記録を保存するように人々に霊感を与えて来られたとしても，もし私たちが悪魔の説き付けに乗って，記録の提出を引き延ばし神殿の儀式を行なわなければ，主の業はくじかれることだろう。このような話がある。サタンが使いの者たちを集めて，義の軍勢とどのように戦ったらよいか彼らに尋ねた。するとある者が言った。「では行って，それは真実でないと言いましょう。」「いや，それは効果がないだろう」とサタンが答えた。そこで次の者が，「私は半分だけ真実だと言いましょう」と言うと，サタンは「いや，それでは十分でない」と答えた。次の者はこう言った。「では出掛けていって，それは皆真実だ，だが急ぐ必要はまったくないと言いましょう。」そこでサタンは「行け。かならずその方法はうまくいくだろう」と言った。ルシフェルに勝利を収めさせてはならない。私たちは先祖のために主の業を進めなければならない。さもなければ，「主の来る時，全地はことごとく荒れ廃れ」るであろう。（ジョセフ・スミス2：39）この地球の行く末は，私たちがこの神殿の業を行なうか否かに懸かっていると思う。

忠実な行ないによってみずからのふさわしさを証明するすべての神の子に救いと昇栄の祝福を与えるため，福音はこの末日に回復された。そしてこれは決して再びこの世から取り去られることはないのである。地球が存在し，私たちがその上で生活しているのは，ひとつの目的があるからである。それはアダムのすべての子孫に，この生涯の間に永遠の家族をもうける機会を与えることである。

ここで証を申し上げたい。この福音は，私たち一人一人に永遠の家族をもたらすため，神権の権威と権能とともにこの末日に回復された，イエス・キリストの福音である。イエス・キリストのみ名によって，アーメン。

信仰の戦いに雄々しくあれ

十二使徒評議員会会員

ブルース・R・マッコンキー

パウロの書簡の中に次のようなチャレンジがある。

「しかし，神の人よ。……義と信心と信仰と愛と忍耐と柔和とを追い求めなさい。信仰の戦いをりっぱに戦いぬいて，永遠のいのちを獲得しなさい。」(Ⅰテモテ6：11，12)

私たちの同胞である使徒パウロがそのように書き送ったのは，神の子を救い主として受け入れ，キリストのくびきを身に負い，主に仕え主の戒めを守ることをバプテスマの水の中で誓約した人々に対してであった。私たちもそれと同じことを，キリストのみ名を身に受け，真理と義の旗の下に集ったすべての人に申し上げたい。雄々しくありなさい。立派に戦い抜きなさい。そして真理を固守し，戒めを守り，世に打ち勝ちなさい。

みずからも世と敢然と戦い，勝利を収めたパウロはこう語っている。

「わたしは戦いをりっぱに戦いぬき，走るべき行程を走りつくし，信仰を守りとおした。今や，義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には，公平な審判者である主が，それを授けて下さるであろう。わたしばかりではなく，主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであろう。」(Ⅱテモテ4：7，8)

私たちは主の教会の会員として，激烈な戦いを経験しつつある。私たちはキリストの大義のために，サタンやその他，世のあらゆる肉欲や悪と敢然と戦う者の中に数えられた。そして味方のために敵を打ち砕くことを誓ったのである。敵味方を見誤るようであってはならない。私たちの同胞であるもうひとりの使徒はこう書いている。

「不貞のやからよ。世を友とするのは，神への敵対であることを，知らないか。おおよそ世の友となろうと思う者は，自らを神の敵とするのである。」(ヤコブ4：4)

この大戦争は今，地球上の至る所で熾烈を極め，不幸にも傷つく者は多く，中には死に至る者さえもいる。だが，この戦いは今に始まったものではない。悪の軍勢が人間の自由意志を滅ぼそうとし，ルシフェルが全能の父が打ち立てられた進歩と成長の道から離れて私たちを連れ去ろうとした時，天上で戦いが起こったのである。

その戦いは地上でも続いている。悪魔は今なお教会を呪い，「神の戒めを守り，イエスのあかしを持っている者たちに対して，戦いをいどん」でいるのである。(黙示12：17)

それは今も昔も同じである。そして聖徒が悪魔とその軍勢を打ち負かすことができるとすれば，それは「小羊の血と彼らのあかしの言葉」によるのであり，また「死に至るまでもそのいのちを惜しまない」ことによるのである。(黙示12：11)

さてこの戦いに中立はないし，また あり得ない。主の教会の会員はどちらか一方を選ばなければならない。ここで戦う兵士は，パウロのように勝利者となり「義の冠」を受けるか，さもなくばパウロが言うように，主が「神を認めない者たちや，わたしたちの主イエスの福音に聞き従わない者たちに報復」される日に「主のみ顔とその力の栄光から退けられて，永遠の滅びに至る刑罰を受ける」かどちらかである。(Ⅱテサロニケ1：8，9)

またこの戦いで勇気をもって雄々しく戦おうとしない者は，それだけで敵に助勢したとされる。「われにくみせざる者はわが敵なればなり。」(Ⅱニーファイ10：16)

要するに私たちは，主の教会に付く者となるか敵対する者となるか，すなわち主の民の中に数えられるか

それとも罪の報いを受けるか，どちらか一方を選ばなければならない。片足を教会に置き，もう一方の足を世に置いていたのでは霊的な救いは得られないのである。私たちは選ばなければならない。教会か世かどちらか一方を。中間はない。そして主が愛されるのは，主の軍勢に名を連らね，堂々と勇気を持って戦う雄々しい人である。

古代の教会のある会員たちに，主は言われた。

「わたしはあなたのわざを知っている。あなたは冷たくもなく，熱くもない。むしろ，冷たいか熱いかであってほしい。このように，熱くもなく冷たくもなく，なまぬるいので，あなたを口から吐き出そう。」(黙示3：15，16) 日和見主義者は，戦いが激しくなると退却してしまう。そのような人に勝利の冠を得られずはずがない。世に負けているからである。

証があり，清く正直な生活をしている教会員でも，雄々しくなければ日の光栄の王国を受け継ぐことはできない。彼らが行くのは月の光栄である。次のような啓示がある。「これらの者はイエスの証詞をなすに雄々しからず，この故に彼らはわれらの神の王国の冠を得ざるなり。」(教義と聖約76：79)

イエスはこう言われた。「手をすきにかけてから，うしろを見る者は，神の国にふさわしくないものである。」(ルカ9：62)

「イエスの証詞」とは何だろうか。また雄々しくあるために，私たちは何をしなければならないのだろうか。

「あなたは，わたしたちの主のあかしをすること……を，決して恥ずかしく思ってはならない。むしろ，神の力にささえられて，福音のために，わたしと苦しみを共にしてほしい。」(IIテモテ1：8) パウロはそうテモテに書き送った。また愛弟子ヨハネに神のみ使いが語っているように，「イエスのあかしは，すなわち預言の霊である。」(黙示19：10)

主の証！イエスの証！何と栄光あふれる深遠な概念であろうか。それは天父と御子と永遠にともに住む栄光と名誉へのとびらを開いてくれる。イエスの証とは，キリストを信じ，その福音を受け入れ，律法に生きることにほかならない。

イエスは主である。アダムの堕落によってもたらされた肉体と霊の死を贖うためにこの世に来られた神の御子である。イエスは血をもって私たちを買い取って下さった。イエスはよみがえりであり命である。そして「死を滅ぼし，福音によっていのちと不死とを明らかに示されたのである。」(IIテモテ1：10) 主は私たちの救い主，贖い主であり，天父と私たちとの仲保者である。「神は唯一であり，神と人との間の仲保者もただひとりであって，それは人なるキリスト・イエスである。」(Iテモテ2：5)

救いはキリストにある。この名こそ，私たちに復活という何にも換えられない賜を勝ち得させてくれる天が下におけるただひとつの名なのである。主なくして復活はなく，全人類は永久に滅び去るであろう。また永遠の生命はなく，慈悲深い天父のみもとに帰ることも，日の栄光の玉座に着くこともできなくなるであろう。

主によりもたらされたものは数多い。しかしその一部始終については，いかなる言葉をもってしても語り尽くせず，いかなる心の目をもってしても思い描くことができず，またいかなる思いをもってしても推し量ることができないのである。

「ほふられた小羊こそは，力と，富と，知恵と，勢いと，ほまれと，栄光と，さんびとを受けるにふさわしい。」(黙示5：12)

キリストが神の御子であること，およびキリストが救いの徳を持ちたもうお方であることについての完全な証は，主の完全な福音が完全な状態で与えられるまでは存在しない。しかもその福音への証は聖霊からの啓示により得られる。聖きみたまが私たちの内なる霊に語り掛ける時，私たちは啓示されたメッセージが真実であることを確信を持って知るのである。

証とは，イエスがキリストであること，またジョセフ・スミスとその後継者たちがキリストに関する知識と今の世の人々の救いとについて啓示する人々であること，そして末日聖徒イエス・キリスト教会が地上における神の王国であり，ここここそ救いを見いだすことのできる場であることを，啓示を通して知ることである。

イエスの証は予言のみたまであり，みたまの賜である。そしてそれが完全な形でもたらされるのは，主の教会の忠実な会員に対してである。イエスの証は常に聖霊を伴侶とする人のために備えられている権利であり，また人を予言者に任命する霊的な賜である。これはモーセの祈りを成就するものである。「主の民がみな預言者となり，主がその霊を彼らに与えられることは，願わしいことだ。」(民数11：29)

では，イエスの証に雄々しくあるとはどういう意味だろうか。

それは，勇敢で大胆であるということであり，世との戦いに力と精力と能力をすべてつぎ込むことであり，信仰のために敢然と戦うことである。「強く，また雄々しくあれ。」そう主はヨシュアに命じたまい，続いてその強さと勇気が，主の律法の中に記されているあらゆる事柄を心の中に

思い量り，かつ従順に実行に移すことにあると説明された。（ヨシュア1：6－9参照）義を全うするに当たって，雄々しくあるということはきわめて重要なことである。そして，それはすなわち，完全なる福音のすべての律法に従順に従うということである。

イエスの証に雄々しくあるには，「キリストの御許に来てキリストによって全く」なり，「すべて神のみこころに背くことを捨て」，「勢いと心と力とをつくして神を愛する」ようにしなければならない。（モロナイ10：32）

イエスの証に雄々しくあるには，キリストとキリストがもたらされた福音に対して揺るぎない信仰を持たなければならない。すなわち地上で行なわれている業が真実神の業であることを知ることである。

しかしこれがすべてではない。雄雄しくあるとは，信じることや知ること以上でなければならない。つまり私たちは聞くだけの者ではなく，行なう者とならなければならない。雄々しいということは口先だけの奉仕とは違う。救い主が神の御子であることをただ口に出して言うだけでは不十分なのである。従順，実行，そして自分自身が義しい生活を送ること，これが雄々しいということである。

「わたしにむかって『主よ，主よ』と言う者が，みな天国にはいるのではなく，ただ，天にいますわが父の御旨を行う者だけが，はいるのである。」（マタイ7：21）

イエスの証に雄々しくあるには「これからもキリストを確く信じて疑わず，完全な希望の光を抱き，神とすべての人とを愛して強く進まなければならない。」そして「終りまで堪え忍ぶ」のである。（IIニーファイ31：20）それは私たちの信じる宗教に生きること，すなわち教えることを実践し，戒めを守ることなのである。そして「困っている孤児や，やもめを見舞い，みずからは世の汚れに染ま」らず，「清く汚れのない信心」を生活の中に表わすことである。（ヤコブ1：27）

イエスの証に雄々しくなるには，情欲を抑え，欲望を制し，世俗的な悪しき物事から離れていなければならない。それこそ世に打ち勝つことであり，私たちの手本であり，神の子の中で最も雄々しいお方がとられた方法である。道徳的に清くあり，什分の一や他の献金を納め，安息日を尊び，心に目的を抱いて祈ることであり，必要とあらばすべてを犠牲にすることである。

イエスの証に雄々しくなるには，あらゆる点で主の側に立たなければならない。主が選ばれるように選び，主が考えられるように考え，主が信じたもうように信じることである。また，主が語られるように語り，主が行なわれるように行なうことである。そしてキリストが天父とひとつであるように，私たちもキリストの思いを内に抱いてひとつにならなければならない。

私たちの教義には，あいまいな点がまったくない。時にはそれを実生活に応用するのが困難に思えることもある。しかし次のように心に深く考えてみれば助けになるかもしれない。

もしも自分の関心が神の王国の建設よりもこの世の宝を蓄えることの方に注がれていて，それでイエスの証に雄々しいと言えるだろうか。

生活に余裕がありながら伝道活動や神殿の建設，困っている人に力を貸さないとすれば，それはイエスの証に雄々しくあると言えるだろうか。

教会や教義について知ろうとする時に，知識のみに頼っていて雄々しいと言えるだろうか。身をもって霊的な事柄を経験するよりも教義の一つ一つを取って論議を戦わす方に関心がある場合はどうだろうか。

神権を授ける資格について教会が採っている方針を憂慮し，この教義に対して，今や新たな啓示が必要な時だと考える人は，イエスの証に雄々しくあると言えるだろうか。

週末に船で遠出したり，別荘へ出掛けたり，その他いろいろな娯楽を追い求めて日曜日の霊的な責任を怠っていながら，イエスの証に雄々しいと言えるだろうか。

かけ事やトランプをし，ポルノ映画を見に行き，日曜日に買物をし，その他世の人々が受け入れているあらゆる事柄を行なっていてイエスの証に雄々しいと言えるだろうか。

もしも私たちが救いを得たいと望むのであれば，生活の中に，まず神の王国に関する事柄を取り入れなければならない。私たち主の教会の会員にとって，行き着く先は神の王国か，さもなくば無か，どちらかに違いない。私たちは暗やみから抜け出た。そしてキリストの驚くべき光の中にいる。光の中を歩もうではないか。

さて，私は将来を予測できると言う積もりはないのだが，しかし心に強く感じていることがある。それは，世の状態がこれから先，良い方向には向かわないのではないかということである。世情が邪悪の一途をたどってついには人の子の再臨を迎えるであろう。そして世の終わりとなり，悪しき者は滅ぼされるであろう。

私は世の中がますます邪悪になるにつれて，少なくとも教会員の中で忠実な人々はますます善くなっていくと思う。そしてかつてなかったほどに数多くの責務を負わなければならない日が来るであろう。その責務とは，正しい選択をすることであり，

教会を擁護することであり，戒めと教えと原則を固守することであり，キリストがその教義を教え，世の人人に証をするために召したもうた使徒や予言者の勧告に耳を傾けることである。このことが他のいかなる事柄よりも，またこの神権時代のいかなる時よりも必要とされる日が来るであろう。

さて，これは主の業であり，神の業である。私たちの天父の事業である。そこには主のみ手がある。それゆえにこの世の中でイエス・キリストの福音ほど大切なものはないのである。それは救いを得させる神の力であり，もし私たちが常にまた永遠に，福音とその大義の内に歩み，生き，行動し，呼吸し，考えるならば，この世においては平安と喜びと幸福を得，来るべき世において永遠の栄光へと進むことができるであろう。

私たちは教え，そして証する。私たちはきょう，永遠の真理の原則について教えてきたが，それは聖霊の力を通して教えるすべての人に証を述べる特権を与えてくれる。その証とは，私たちが宣言してきた教義は真理であり，もしも人がその教えに確信を持ち，それに従って生きるならば，慈悲深い天父がその人に授けたいと願っておられる祝福はすべてその人のものとなるということである。

私はこれまで宣言されてきた教義が真理であることを証し，またイエスが主であり，救いはイエスの内にあること，さらに私たちが神の王国に救われるのは，天が下にイエスの名をおいてほかにないことを証する。

願わくば神が私たちに知恵と先を見通す力と決断力，そして主の軍勢に加わって雄々しく戦う勇気を与えたまわんことを。それはジョージ・アルバート・スミス大管長が鮮かに表現されたように，「主の方(かた)に立つ」ためなのである。イエス・キリストのみ名により，アーメン。

人はいかにして救われるか

大管長会第二副管長

マリオン・G・ロムニー

愛する兄弟姉妹ならびに友人の皆さん。私がこの話をするに当たり主のみたまを受けられるように，そしてまた皆さんが主のみたまをいただいて私の言葉を聞くことができるように，ともに祈っていただきたい。私はこれから，イエス・キリストの福音のごく基本的ではあるが，非常に大切な事柄を幾つかお話したい。また，私たちがみたまを受けて理解を増すことができるように，多くの聖句を使って話を進める積もりである。

末日聖徒イエス・キリスト教会は，信仰箇条第3条でこのように宣言している。すなわち，

「われらは，キリストの贖罪によりすべての人類は，福音のおきてと儀式とを守ることによりて救われ得ると信ず」と。

私はイエス・キリストの教会がこの宣言に対して抱いている見解について，ここでお話したい。

ここで用いられている救われるとは復活すること，ならびに清められ，日の光栄を受け，不死不滅の状態となって神と交わり，永遠の進歩の過程を歩み続けるために，神のみ前にもどることを意味する。

これがどのような意味かを少しでも知るためには，まず神と人の姿ならびに属性を知り，互いの関係を知っておくことが必要である。

人は霊の結合体，すなわち二元性を備えた存在，つまり触知し得る骨肉の体をまとった霊である。一方神は，永遠の生命を持つ，救いの状態に入った完全なお方である。神は不死不滅の状態と，最高の光栄に高められた状態の両方を具えておられる。人が福音の律法と儀式に従えば受けることのできる，かの神聖な状態を神はすでに享受しておられるのである。

現在，永遠の光栄のうちにいるのは，全能なる神のみではない。数限りない救われた人々も神との交わりを享受しているのである。そこでは家族関係が存在する。霊の子も生まれている。人の霊はそこにおいて生まれるのである。近代の啓示は，もろもろの世界に住むすべての者は「神より生れたる息子と娘」(教義と聖約76：24）であることを断言している。私たちの天父なる神は，実際に私たちの霊の父である。パウロがアレオパゴスの評議所で語った，かの偉大な説教の中で宣言したように，私たちは「神の子孫」(使徒17：29)なのである。

父なる神は不死不滅のお方である。しかし人はまだ不死不滅の状態にはなく，死すべき体を持つ存在である。人の体は土から造られ，死ぬと元の土にもどる。だが人の霊はどうなるのだろうか。多くの人々がこの最も大切な疑問を心に深く思い巡らしてきた。シェイクスピアもこの点を取り上げ，「生きる，死ぬ，それが問題だ」という有名な言葉を吐いたハムレットの口をを借りて，このことを語っている。

生きる，死ぬ，それが問題だ……
死ぬ——眠る——
……しかも眠ってしまえば，みんなおしまいではないか，
おれたちの心の悩みも，この肉体につきまとう数知れぬ苦しみも。
だとすれば，それこそ願ってもない人生の終局ではないか，死ぬ——眠る——
眠る！　夢を見るかもしれない，
そうか，ここでつかえるのだな。
この世のありとあらゆる煩いから脱れて，
眠って，さてその先どんな夢を見るか，それだ，
それを思うと心が鈍らずにはおられぬのだ——この躊躇がこの悲惨な人生をいつまでも永びかすのだ。
でなくて，誰がおめおめ我慢する

ものか，この世の鞭や嘲り
暴君の無法な振舞い，いばりくさった奴らの侮蔑
辱められた恋の痛み，裁判ののろくささ
役人どもの空いばり，つまらぬ奴らを相手に
立派な人がじっと堪え忍ばねばならぬ数知れぬ屈辱
誰がこんな重荷を忍ぶものか，短剣のただのひと突きで，
この世から脱れ出ることができるのに？
生活の苦しみに打ちひしがれ，汗にまみれて呻きながらも
ただ死後のある不安，いったんその境を越えて行った旅人が
まだ誰一人戻って来たためしのない，あの未知の国への不安があればこそ，おれたちの決心もにぶるのだ。
この世を去って知らぬ禍いを求めるよりは，
とどまって現在の苦しみを堪え忍ばせるのだ。
(「ハムレット」第3幕，第1場，三神勲訳)

シェイクスピアはこのせりふの中でドラマチックに，人の死んだ後その霊はどうなるかという疑問を投げ掛けている。けれどもその答えは告げていない。彼は主がこの疑問に直接答えておられたことを知らなかったのである。

紀元前75年頃，アメリカ大陸にアルマという名の神の予言者が住んでいた。彼は人間は死後どうなるのかを知りたいと強く願った。そして強い信仰を持って主に祈り求めたので，主は天使を遣わしてアルマにその答えを示された。アルマはこれを次のように記録している。「あらゆる人の霊は…… この死ななくてはならぬ肉体を離れるとその霊に生命を与えたもうた神のところへ帰るのである。……

それから義しい人の霊はパラダイスととなえる幸福な有様，すなわち安息と平和な有様に入り一切のわずらいと憂いと悲しみとを離れて息(やす)む。

次に悪人の霊は……そとの暗やみの有様に追い出され，泣き悲しんで歯がみをするのである。……

これがすなわち悪人の霊の有様で，かれらは暗やみの中で大そう恐れおののきながら自分たちに下る火のような神の怒りを待っている。かれらは復活の時までこのような境涯に止まらなくてはならない。しかしこれと同時に義人はパラダイスに在る。」(アルマ40：11—14)

教会はこの聖句を事実として受け入れている。

アルマのこの言葉は，文字通り万人の復活があることを告げている。そして同様のことを，パウロもコリント人にあてて書き送っている。

「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように，キリストにあってすべての人が生かされるのである。」(Iコリント15：22)

教会は，イエス・キリストが死に打ち勝たれたことによって，御自身のためばかりでなく全人類のためにも墓を開かれたという，聖典の告げる教えを信じている。

教会はまた，復活後人は皆それぞれ不死不滅の状態で，神の裁きの座に引き出され，この試しの世においてなした行ないに応じて最後の裁きを受ける，という聖典の告げる教えを信じている。その裁きの座での宣告は，福音の律法と儀式に対する従順，不従順によって定まるのである。この世においてこれらの律法と儀式に従った者は，イエス・キリストの贖いの血によって罪の汚れから清められ，神の日の光栄の王国に救われて，神とともに永遠に住まうことになる。しかし，福音の律法と儀式に従わない者は，その受ける報いは小さいであろう。

アルマはこの最後の裁きについて，次のように語っている。

「この回復の時が来ると義人は神の王国で栄光を得て輝きを放つ。

しかし，これに反して悪人には恐ろしい死滅が来る。……苦い杯のかすを飲むのである。」(アルマ40：25—26)

紀元前550年ごろにも，当時のアメリカ大陸のある予言者が，「キリストの贖罪により，すべての人類は，福音のおきてと儀式とを守ることにより」どのようにして救われるかについて述べている。したがって横柄とは思うが，私のこの話を結ぶに当って，その予言者の記録から少し長くなるが言葉を引用したい。これを読むのに6分間ほど掛かるが，時間を掛ける価値は充分にあると思う。

私が読むところを理解し，実際に行なうなら報いとして，神の下さるもろもろの賜の内最大のもの，すなわち永遠の生命を受けるであろう。彼は兄弟たちに向かって言った。

「私はあなたたちの多くが未来の事を知ろうと思って，大いに探し求めたことを知っている。それ故にあなたたちはわれわれの肉体は必ずやせ衰えて死ぬものであるけれども，未来に於いてわれわれは復活体となって神に会うと言うことを知っていると私は明らかに認めている。

また真に，私たちが出てきたエルサレムに於て神が肉体のまま世の人々に現われたもうと言うことをあなたたちが知っていると明らかに認めている。〔先程も述べたように，彼らがこのことを語っているのは，紀元前600年に近い頃のことである。〕その事が世の人々の間に起るのは真実大切である。それは大いなる造り主が万人を自分に服従させるためにはまず自らこの世の人に服従し万人のために死にたもう必要があるからである。

大いなる造り主の憐み深い道が成就するために万人に死が伝わったから必ず復活を来す能力がなくてはならない。そしてこの復活は人間の始祖が堕落をしたから必ず人間にこなくてはならない。そして人間の始祖が堕落をしたのは律法を破ったから生じたのである。かように人間は堕落をしたために，主の御前から追い出されてしまった。

それでその罪の贖いは，キリストの限りない贖罪でなければならない。すなわちそれがキリストの限りない贖罪でなかったならば，この朽ちる肉体が朽ちないものになることができないから，人間に下った最初の裁きが限りなく続かなくてはならない。もしそうであるならば，この肉体は墓に横たえられて朽ち果てもとの土に帰って再びよみがえることはない。

おお大いなる神の知恵よ。その深い憐みと御恵みよ。ごらん，もし肉体がもうよみがえらないならば，私たちの霊は必ずあの天使，すなわち永遠の神の御前から堕ちて悪魔となった天使に服従してもうよみがえることは決してない。

そして私たちの霊は必ずあの天使のようになり，私たちは悪魔すなわち悪魔に属する使たちとなって私たちの神の御前から締め出され，あの偽りを生む親と共に，彼自身のように不幸の中に留らなければならない。

しかしイスラエルの聖者である私たちの神が救いの道を立てたもうたから……肉体の死である墓は一時的のものであって，やがてその中にある死体を解き放つ。

また……霊の死である地獄もやがてその中にある死んだ霊を解き放つ。〔神のみ前から締め出されることは全くの地獄である。〕それであるから，墓と地獄とは何れもその中にある死者を出さなければならない。すなわち地獄はその捕えた霊を放ち，墓はその捕えた肉体を放たなければならない。そこで人の体と霊とはもとの通り一しょになるのであるが，これは全くイスラエルの聖者のもちたもう復活の能力による。

おお私たちの神の計画の偉大なことよ。……その霊と体とはまたもとの通り一しょになる。ここですべての人間は不朽で不死不滅の者となり，しかもかれらは生ける人であってこの世で肉体を持っている私たちのように物事を知る力を具え，今の私たちが持っている物事を知る力はその時に完全になるのである。

それで私たちは，自分に罪があること，汚れていること，裸であることをすべて完全に覚るのである。しかし義人たちは自分の喜びと義しさを覚りつくして，清浄の衣すなわち義の衣を着せられる。

さて，すべての人々がこの第一の死から復活するとかれらはすでに不死不滅となっているから，イスラエルの聖者の審判（さばき）の座に出なければならない。それから裁判があって，すべての人々は神の神聖な裁判の法によって裁かれなければならない。

そして義しい者たちはやはり義に止まり，汚れた者たちはやはり汚れに止まる。……かれらの苦しみは，果しなくいつまでもいつまでも炎が昇る燃える硫黄の湖の如くである。この事の確であるのは，主の生きていますように確である。……

しかしごらん，イスラエルの聖者を信じ，この世の苦難を堪え忍び，世の辱しめを物ともしないイスラエルの聖者の聖徒である義人たちは，この世の始めからかれらのために用意された神の王国を受け嗣いで，その喜びはとこしえに充ち満ちる。

おお私たちの神イスラエルの聖者の憐みの大きなことよ。神はその聖徒らをあの恐ろしい怪物である悪魔と死と地獄と永遠の苦しみである燃える硫黄の湖から救いたもう。

おお私たちの神の偉大な神聖さよ。誰でもみな神の声に聞き従うならば，神はあらゆる人を救うためにこの世に降りたもう。見よ，神はおよそアダムの家族である者は男でも女でも子供でも，差別なくあらゆる命のある者の苦痛を受けたもう。

神がこのように苦痛を受けたもうのは，一切の人類をあまねく復活させて，あの大裁判の日にすべての人を神の御前に立たせんがためである。

神はすべての人に向って，汝らはイスラエル聖者を全く信仰して悔い改め，神の御名によってバプテスマを受けよ。さもなければ神の王国には救われないと仰せになる。」（IIニーファイ9：4—9, 11—16, 18—23）

しかし，「悔い改めて神の御名を信じ，その御名によってバプテマスを受け」，終わりまで忍ぶ者は救われるであろう。（IIニーファイ9：24）

愛する兄弟姉妹ならびに友人の皆さん。このように主が命じられた方法によれば，すべての人は福音の律法と儀式に従うことができ，キリストの贖いによって救われるのである。

私自身の証を申し上げたい。これらの教えは真実である。末日聖徒イエス・キリスト教会はキリストが建てられた教会である。主はこの教会に権能を与えておられる。そして，救いをもたらす福音の原則と儀式について全人類に教え，それを施すよう，主より権限を託されていることを証する。

私たちの告げる言葉によく耳を傾け，祈りの気持ちを持って考えるよう，心からへりくだり，愛を込めて申し上げる。もしそのようになさるなら，あなた方は同様の証を受け，救いへの道を歩み，神の王国に救われることであろう。私たちはすべてがそのような状態に至ることができるように，主なるイエス・キリストのみ名により，へりくだってお祈り申し上げる。アーメン。

敗北者はいない

十二使徒評議員会会員

マービン・J・アシュトン

今年の夏のある暑い夜のことだった。私は妻とプロ野球の試合を見に行った。試合が始まって間もなく，私たちは遅れてやって来たひとりの男の挙動に気を取られた。その人はそばを通り掛かると，私の方を見て，聞いた。「どっちが負けてる？」「いや，どちらも。」するとその男はちらっとスコアーボードに目を向け，同点ではないのを見てから，私のことをいぶかしく思いながら歩いて行った。

男が私たちから離れた所に席を見付けてからすぐ，妻がこう言った。「あの方はあなたのことをあまり良く知らないんでしょう。」「どうしてだい？」「だって，もしあなたのことをよく知っていたら，あなたが敗北者はだれもいないと信じていることを分かっていたはずでしょう。先んずる者もいれば遅れる者もいます。でも，だれひとり敗北者はいないのです。そうじゃありませんか？」私はにっこり笑ってうなずいた。

得点よりも態度がはるかに大切なことはだれでも知っている。希望や心のはずみといったものは得点よりはるかに大切であり，今ある地位や身分以上に大切なのは，私たちの進む方向なのである。

聖典にはこう記されている。「人となりはその心に思うそのままであるからだ。」（欽定訳箴言23：7）この言葉は歴史上どの時代にもそうであったように，今日にも当てはまる。私は以前，体に「生まれつきの敗北者」という言葉を入れ墨にした若者に会ったことがある。彼に会ったのが州刑務所だと聞いても，皆さんは驚かれないと思う。

またある時，私はふたりの少年に水泳ができるかどうか尋ねてみた。ひとりは「できないよ」と言い，もうひとりは「わかんないや。泳いだことがないんだもの」と言っていた。おそらく知らず知らずの内に，子供たちの心の持ち方が彼らの言葉に表われるのであろう。

この危険をはらんだ世の中にあって，正しい心構えを持って生活することは，金銭に換えられない貴重な財産である。今日ほど確信を持って前進することが大切とされている時代はない。人に遅れを取ることはあっても，正しい方向に進んでいる限り敗北者にはなり得ないのである。神は旅路の半ばにして私たちの足跡を採点されたりはしない。創造主は私たちが勝利者となることを期待され，いつでも私たちの願いに答えられるように備えをして下さっているのである。悲しいことだが現実には，今日多くの人が神との交わりに背を向け，みずからと同胞に対して破滅の原因となるような態度を助長している。私たちがさらに一層の前進を図るためには，元気一杯，確信と勇気を持って，人々の先頭に立って前向きに人生を歩んで行かなければならない。

聖典には次のように記されている。「何事にも感謝すべし。」（教義と聖約98：1）「すべての事に就きて，主なる汝の神に感謝すべし。」（教義と聖約59：7）「およそすべてを感謝して受くる者には栄光を与えられん。」（教義と聖約78：19）これらは感謝する時の心構えだけでなく，私たちの生活をより良い方向へと導く指針ともなるものである。そして，この指針にしたがって，はじめて報いがもたらされるのである。「すべての事に就きて神に感謝すべし」という私たち一人一人に課せられたチャレンジについて考えていただきたい。もしそのようにするならば，私たちは自分自身を進歩のない，遅れたままの状態にとどめておくことはないであろう。来る日も来る日も，私たちは自分の昨日の記録を破るために励

まなければならない。他人の記録ではない。私たちは，主の助けによってすべてのことを成し遂げ，真に永遠という道程の勝利者になるのである。

私たちは，自信というものを，心の奥にしっかり根を下ろしたものにするよう努力しなければならない。その自信は将来私たちを，自己を信頼させる人物へと成長させてくれる。生活全般において自信と謙遜さのバランスを適度に保つことはいかに大切なことであろうか。自己に対して正しい認識を持ち，自己を信頼するならば，私たちの内に神の属性の片鱗が宿っており，それが意義深い成長の過程において養われてゆく日を待っているということに，一人一人が気付くだろう。そして，この事実に対してふさわしい心構えを持つなら，みずから持っている可能性と調和した生活ができるのである。

高慢に注意しなければならない。自己本位の人はいつも自分中心に考え，どこにあってもうまくやっていくことはできないであろう。利己主義は愚かさがもたらす苦痛を麻痺させる麻酔薬であると言った人がいる。うぬぼれは人の魂をむしばむがんとなる。

私たちが執る日々の態度によって結果は決まる。私たちは何が起こるかということよりも，起こったことにどう対処するかということに心を寄せるべきである。自己に対して偽りのない態度を執ること，これは永遠にわたって究めなければならない事柄である。しばらくの間は力がないかも知れないが，積極的な態度はおのずと自己の最善を尽くすように私たちを仕向けるであろう。自分に偽りのない態度を執るためには，現実を直視してみずからを確固たるものとし，自己修練を心掛けることが必要である。

ここで19世紀の作家ジョサイア・ギルバート・ホランドの詩を採り上げさせていただきたいと思う。栄誉殿堂入りしたホランド博士の胸像には，「求む」と題する自筆の力強い詩が刻んである。

神は世に男たちを置かれた。
　今の時代に求められるのは
強い精神力，寛大な心，真の信仰
　を持ち，いつでも働く準備のできた手，
名誉欲に屈することなく，
　買収されない男，
自己の見解，意志を持ち，
　節操を重んずる男，
その人は偽りを言うことがない。

正しい態度を執ること，それは優れた人格を得る前提条件となる。私たちは，正しい態度を行動に移す勇気のある人物を必要としている。今日私たちは，忍耐力があり，目的に向かってたゆまず努力をする人物をより多く必要としている。また私たちは，ジョセフ・スミス，ハロルド・B・リー，スペンサー・W・キンボールのような揺るぎない確信を持った人物をより多く必要としている。彼らは皆雄々しく，また恐れることなくその揺るぎない確信を人々の前に明らかにしたのであった。ジョセフ・スミス――私たちは彼の次のような態度に心打たれる。その言葉には彼の持つ堂々たる威厳と心構えが貫かれている。

「私も正にその通りであった。私は実際に光を見た。その光の唯中に二人の御方を見た。そしてその方々は真実私にお言葉をかけたもうた。私が示現を受けたと言うために憎まれまた迫害せられても，なおそれは真実である。そして私がこのように言うために，人々が私を迫害し罵(ののし)り偽ってあらゆる悪口をあびせている間に，私は自分の胸の中で語るようになった『何故(なぜ)真実のことを話すから私を迫害するのか。私は本当に示現を受けたのだ，私がどうして神に抗(さか)らえようか。何故(なぜ)世の中の人は，私が本当に見たものを見ないと言わせようと思うのか。私は示現を受けたのであるからそれが事実であるのを身を以て知っている。私は神がそれを知りたもうことを知っている。私はそれを打ち消すことはできなかった。また敢て打ち消そうともしなかった。私は少くとも，本当にあったことを打ち消すならば神の怒りを受けて罪の宣告を受けることを知っている』と。」(ジョセフ・スミス2：25)

正しい態度を構成するもうひとつの大切な要素は，変化に対処する能力である。順応性があれば，事物の変化にひどい打撃を受けたり，失意のどん底に投げ落とされたりすることはない。愛は，私たちが試練や悲しみに遭う時，ひとつの大きな緩衝装置となるのである。

私たちは，自分自身はもちろんのこと，周囲の人々にも希望を抱くように絶えず働き掛けなければならない。私たちはみずからの手で，暗やみの日々を輝く日々にしなければならないのである。大きなチャレンジを抱え，重荷を背負った人が，この世でただひとつの重要な戦いにあって勝利に向かって前進している姿を目にすることは，喜びであり，光であり，また希望ではないだろうか。希望を持ちなさい。そうすれば，失敗や逆境の中にあっても，いつも次のチャンスがあり，明日という日のあることが分かるであろう。

私たちの時代における最大の悲劇は，神の子である私たちがみずからの持てる能力を十分に発揮できないで生きていることである。「わたしに従ってきなさい。」(マタイ19：21)救い主のこの言葉を理解しなければ，

勇気と力を得ることはないであろう。希望と信頼の主，慈しみ深い救い主は，私たちの過去，現在がどうであれ，すべての人に招きの手を差し伸べて下さっている。救い主は完全な模範を示された。またその態度も完壁であった。その生涯もしかりである。救い主は，どのような犠牲を払おうととも御自分の召しに忠実であろうとされたのである。救い主の働き，その生涯，その教えを私たちは大切にしている。主の足跡によって，私たちの歩む道ははっきりと示されている。主の生涯は私たちの力の源である。私は宣教師たちに何度もこう言ってきた。「若者が伝道の召しを最後までやり遂げたか否かということよりも，伝道中の経験がその宣教師に影響を与えたか否かということの方が重要なのである。」

御子イエスはひたすら御父のみ業に携わり，多忙を極めておられたが，そのために心配する母や病人，友，幼児たちを顧みられないことは一度もなかった。この姿勢，この奉仕の精神，これこそ内なる偉大さの現われ以外の何物でもない。救い主に倣って奉仕することを学ぶ時，私たちは人生を豊かに生きることを知る。私たちは，神の子らに奉仕することにより，ふさわしい態度を身に着け，やがては神を見いだすのである。

ナザレは取るに足らない小さな町だった。格別に歴史的に有名な所があるわけでもなく，人々の嘲笑の的でしかなかった。「ナザレからなんのよいものが出ようか」（ヨハネ1：46参照）とあるように，ひとりの勝利者も生まれなかった。しかし主の態度，主のみ業，主の生涯を通して，この無名の小さな町の名は広く知れわたるようになった。後に人々は主のことを「ナザレのイエス」と呼んで，かつてはさげすんだその町を尊ぶようになった。

イエスはかつて御自分の民から受け入れられなかった。それでもイエス御自身とそのみこころ，道，み業を知れば，イエスがまさに王の王，主の主であることが分かるであろう。たとえ侮りさげすまされ，虐待されても，勝利と喜びは救い主のものであった。うむことなく善き業に励んでおられたからである。希望を失い，挫折し，落胆した人々に，主は真理が勝利を収めるであろうと教えられた。また神殿を汚した人々に対して大胆に言われた。「『私の家は，祈りの家ととなえられるべきである』と書いてある。それだのに，あなたがたはそれを強盗の巣にしている。」（マタイ21：13）この時の主の言葉と行動は，主御自身の人格，確信，勇気，正しい態度の別の一面が表われたものである。

勇気ある行動，正しい態度を愛する世の人は皆，救い主の生涯の最後の場面を繰り返し読むべきである。この「平和の君」は，真の威厳のうちにその生涯を送られた。しかし主の郷里の人々は主の偉業を冷笑した。また主を捨てて逃げ去った弟子もいた。主に敵する者たちはまさに勝利を収めるばかりであった。（少なくとも彼らはそう思っていた。）しかし主は，その時どんな態度を執っただろうか。不平，粗探し，報復，敗北であったか。いや，決してそうではない。「あなたがたは，心を騒がせないがよい。」（ヨハネ14：1）「わたしはすでに世に勝っている。」（ヨハネ16：33）何と威厳ある言葉であろう。

主のこの世での生涯の最後の週，人々の叫びは「ホザナ」から「十字架にかけよ」に取って代った。それでも主の確固たる勇気はさらに歩を進め，勝利を収めた。心の正直な人たちは，主がなんのために戦い，しかもなぜ死ななければならないのか知ろうとした。この世における主の最後の一週間は，その態度がいかに偉大なものであったかを教えている。この試練の時を最後まで忠実に歩まれた主の姿を見ながら，主が持っておられた勇気とその力をともに学ぼうではないか。弟子たちとの最後の晩餐，ゲッセマネの園で天父との強い交わりを求めておられる姿（「この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし……みこころのままになさって下さい。」〔マタイ26：39参照〕），戦いの後の勝利の兆し，十字架上のキリストと兵士たち，これらの光景を思い出していただきたい。人々がイエスを拒み，反逆の構えを見せ，大胆にいどんできた時，彼らを迎えた声は，「だれを捜しているのか。……わたしが，それである」（ヨハネ18：4，5）であった。市の城壁からさほど遠くない丘の上で，救い主は十字架上の人となった。主がこの残酷な刑で苦しんでおられた時，主を「彼は敗れた。行く手を阻まれ，挫折した」と遠くからながめていた人々がいたことは疑う余地がない。現在でも同じような考えがあるが，何という誤った考えであろうか。ナザレのイエスが敗北者？断じてそうではない。ナザレのイエスは，私たちの救いの主，贖い主，勝利者，神の御子なのである。

主は今日も，私たちが確信に満ちた断固たる態度でいるように望んでおられる。讃美歌「主のみ言葉は」の7番にそのことが感動的に歌われている。

主われに頼る者の霊
　敵の手には渡し得ず
地獄かれに迫るとも
　われその霊を見捨てはせず
必ずわれは見捨てず

（讃美歌96番）

兄弟姉妹の皆さん，主が実に生き

ておられること，またイエスが神の子であり，その力について，そしてイエスがこの地上に来られた目的について特別な証を宣べることは何と素晴らしいことであろうか。この教会は，主の教会であり，この福音は主の福音である。またこれは，自己に打ち勝ち，忠実に励み，勝利者となる人々に与えられた計画である。これらが真実であることをイエス・キリストのみ名により証申し上げる。アーメン。

永遠の絆

十二使徒評議員会会員

マーク・E・ピーターセン

私はこの機会に，キンボール大管長の偉大な指導力に対して深い感謝の意を申し述べたいと思う。あなた方もまた私と同じ気持を抱いておられるに違いない。キンボール大管長は，私たちに霊的な感動を与えて下さる。彼は力ある神の人であるが，非常に謙遜な人でもある。また彼は多くの人と広く交わりを持っており，私たちはこぞって，この上なく大管長を愛している。私はきょう，この場において，私たちが大管長の指導にいかに感謝しているかということと，私たちが心と霊のすべてを尽くして大管長を支持していることをあなた方に代わって申し上げても差し支えないのではないだろうかと思う。私たちはキンボール大管長の指導に深く感謝するものである。

私の友人にケネスという名の人物がいる。彼には美しい妻と幼い4人の子供がいて，彼自身はと言うと善良な一市民であり，しかも仕事もよくできる男である。

彼の家族は一致団結しており，何をするにもどこへ行くにもいつも一緒で，遊ぶ時にもそうであった。これを知って，中には，一体彼らはこれ以上何が必要なのだろうかと不思議に思う人がいるかも知れない。しかし，彼らにはひとつ足りないものがあるのである。しかも非常に重大なものが。すなわち，この家族には自分たちが今味わっている幸福と家族の絆を永遠のものとするための何かが欠けているのである。

彼らは現在の生活にこの上なく満足しており，彼らの未来に，あるひとつの可能性が横たわっているなどと考えたことは一度もなかった。それは，今の生活がすべて終わりを告げ，今ある家族の幸福や絆がもはや続かず，またその喜びが単なる思い出にしか過ぎなくなる日がやって来るかも知れないということである。

ケネスと妻のルシールはともに善良で正直で徳高い人である。ふたりは教会に行かず，教会なしでも十分立派な人間になれると考えている。彼らは子供たちに正直と徳とを教え，教会が教えることはすべて自分たちでできると考えている。

ともかく，彼らは家族で楽しく過ごすために週末の時間が必要だと主張する。土，日曜はケネスが仕事から解放される数少ない日なのである。そこで教会に出掛けることはまったく彼らの生活に水を差すことになるし，週末ごとの計画に支障を来すことにもなるのだ，とそう彼らは考えるのである。

ここで私はケネス一家に，また彼らと同じような状況にある家族の方方すべてにお話したいと思う。ケネス，しばしの間私たちの助言に耳を傾けて欲しい。

私たちは君が家族をどんなに深く愛しているかよく知っている。だが，その愛をさらに大きく育てることができる。人生とは予測のつかないものだ。今味わっている幸福や喜びもいつまで続くか保証はないし，永遠には続かないということを君は知っていると思う。

ケネス，君は同じ職場の仲間ラルフ・スチュアートのことを覚えているだろう。事故に遭って不具となり，果ては命を落としてしまった彼を。一体彼の家族の絆はどうなったのだろうか。そして今，彼らの週末のレクリエーションはどこへ行ってしまったのだろうか。このようなことを話して気に障ることがあったら赦してもらいたい。

君は現実的で，いつも物事を真正面からとらえる人だ。それなのに，なぜ自分の家族のこととなるとそうしないのか。

先日，通り掛かった美しい石造りの教会の前に，小ぎれいな掲示板が

出ていた。次の日曜日に話される牧師の説教のテーマを告げるもので，次のような質問が書かれていた。「あなたは永遠という時をどこで過ごそうとしていますか。」

私はその言葉に目を引かれ，足を止めて考えていると，何年か前，大きな飛行場でリチャード・L・エバンズ長老と一緒にいた時のことを思い出した。その時，私たちは人々が急ぎ足で往来する様子を見ていたが，飛行機に向かって駆けて行く人もいれば，タクシーや友人を捜して歩いている人もいた。

エバンズ兄弟は人々の流れから目を転ずると，私に向かってこう尋ねてきた。「あの人たちは実際，自分がどこに行こうとしているのか考えているのだろうか」と。

ところがケネス，君と同様に彼らはその問題にいささかの注意も払っていなかったのだ。

私は君に尋ねたい。「君は実際どこへ行こうとしているのか。それに君の家族もだ。君の前途にあるのは楽しみばかりだろうか。また，いつも家族と一緒の生活ができるのだろうか。君は永遠ということについて考えたことがあるのか」と。私たちは日曜学校で次の讃美歌をよく歌ったものだ。

輝く家は　永遠の生命
星は輝く　働きゆかん

また次のようにもある。

天に向かいて　日々に進まん
善き業なせば　家近づく
（讃美歌168番）

君には忘れてしまったものがひとつあるのではないだろうか。この古き良き歌は，まさにそのことに私たちの心を向けさせてくれるのだ。

ケネス，永遠の世界は現実に存在するのだよ。私は，君がすでにそのことを知っていると確信しているし，天に永遠の御父がおられることも信じていると思う。しかし，私たちはその永遠の中にあって，みずからのためにふさわしい場所を確保すべく何をしているだろうか。

私たちは，神が最も慈悲深いお方，すなわちこの上なく慈悲ある御父であるがゆえにまた正義の神であるという事実をすべて受け入れなければならない。

私はそう考えている。それならば，天父が私たちに望んでおられるのは何なのだろうか。

山上の垂訓で救い主が命じられたように，主は私たちが御父のようになることを望んでおられる。（マタイ5：48参照）　神の子である私たちは，将来，神に似た者となるのに十分な素質を内に秘めているのである。子供が成長して親と同じようになるのはごく当然のことではないだろうか。しかしながら単に心の中で願うだけであったり，身に着けるのがひとりよがりの美徳でしかないならば，私たちは神に似た者となることはできない。

私たちが従うべき計画は主御自身が定められたものであり，その計画のみが私たちに望み通りの結果をもたらしてくれるのである。この計画は，現世においても来るべき世においても成功を収めるための公式となるものである。もしこの計画に従わないとすれば自分自身を拘束することになる。これはすべての面において同じではないだろうか。ケネス，君は学校で化学を勉強したことがあるだろう。そこで，実験の時公式通りにしなかったらどんな事態が起こるか予想できるに違いない。また履修課程を終えなければ卒業できないことも分かっているはずだ。永遠の来世についても同じことが言える。私たちは主の公式，すなわち主の福音に従わなければならない。

そのようにするならば，君が今，味わっているこの家族の絆をいつまでも保つことができる。そればかりか，死も復活もその絆を絶つことはできないのである。君もそうありたいと思わないだろうか。

しかし，不完全な方法から完全なものは生じ得ないことを主は承知しておられる。それゆえ，主は違背することのないようにとの訓戒を伴った完全な公式を与えて下さったのである。学校においてもそうであったように，主の公式に従わず，またその計画を心から完全に受け入れなければ，祝福を授かることはできないのである。

主が御自身の律法を破られるはずはないということを銘記して，主が言われた幾つかの事柄に目を向けてみよう。そのひとつに従順がある。神の律法に従うことはまったく道理にかなったことである。

主が従順について語られた箇所を幾つか読んでみよう。救い主はニーファイ人に次のように言われた。

「われに来りて救いを得よ。まことにわれ汝らに告ぐ，われが今汝らに下したるこの命令を守らずば，決して天の王国に入るを得ず。」（IIIニーファイ12：20）

ここで，この言葉が君にとって，また君の家族にとって何を意味するのか考えて欲しい。よく研究し，深く考えていただきたい。「われが今汝らに下したるこの命令を守らずば，決して天の王国に入るを得ず。」　これは非常に重大な言葉である。

教会初期に，救い主は啓示によって本質的に同じことを言われた。「たえずわが誡命を守れ，……されど，わが誡命を守らずば汝はわが居る所に来るを得ず。」（教義と聖約25：15）

ケネス，君は神権を授かっている。主は神権を付与された者の将来に大いなる約束を与えておられるが，そのための条件を次のように定められた。「そは，汝ら神の口より出るすべての言によりて生くべければなり。」（教義と聖約84：44）

永遠に主とともにいたいと願うならば，私たちは主が求めておられる事柄を行なうことによってその特権を得なければならない。君にはその意味が理解できるだろう。もし永遠に主とともにありたいと望むなら，私たち自身が主に似た者となることはもちろん，妻や子供たちにも同じことが要求される。しかし，私たちがそのようになれるのは，主の戒めを守り，主の教会にあって主の定められた計画に従うことによってのみである。教会のプログラムとはまさしく救いの計画であり，その道に従うことによって私たちはキリストの持っておられるような特性を培い，キリストに似た者となることができるのではないだろうか。

もし私たちがキリストに似た者でない状態のままで主のみ前に立つことができたとしても，私たちはまったく場違いな感じしか受けないのではないかと思う。言うまでもなく，このような方法で主のもとに帰ることはあり得ないが。

不断の努力なくしてキリストのような特質を身に着けることはできない。私たちはそれが成長への過程であり，主の福音を人生の指針とすることによってのみもたらされるということを承知しなければならない。

そのことに生半可な態度であってはいけない。私たちはすべからく心を尽くし，勢力を尽くし，思いを尽くして主に仕えなければならない。また主の教会において活発にその業に携わることもキリストの福音の一部であることを覚える必要がある。主はそのことを強調しておられる。「このキリストの教会に属する者は皆教会の誡命と誓約とをすべて遵奉すべし。」（教義と聖約42：78）

私たちは，自分自身がまくところのものを刈り入れると教えられている。これが刈り入れの律法である。畑に麦の種をまけば麦が育つ。それと同様に，私たちがもし人格形成の上で義の種をまくならば，義の実を刈り取るであろう。主御自身が言われた通りである。「何事にても汝ら蒔くところのものをまた刈り入るべければなり。この故に，汝ら善の種を蒔かばそのむくいとしてまた善の実を取り入るべし。」（教義と聖約6：33）

このように刈り入れの原則はすべてに適用される。例えば，主は言われた。「もしも，あなたがたが，人々のあやまちをゆるすならば，あなたがたの天の父も，あなたがたをゆるして下さるであろう。」（マタイ6：14）

また「あなたがたがさばくそのさばきで，自分もさばかれ，あなたがたの量るそのはかりで，自分にも量り与えられるであろう」（マタイ7：2）と仰せになった。

言い換えれば，今この場で来世においても家族の絆を保ちたいと計画するならば，永遠の来世に赴いた時その絆が得られるのである。しかしその目標に向けて努力を払わなければ，その祝福は奪われてしまう。

ケネス，君に尋ねたいことがある。君は君の奥さんに永遠の来世をどこで過ごして欲しいと思っているか。それに君の子供たちもだ。君は奥さんや子供たちをいつまでも自分のそばに置いておきたいと思わないだろうか。そうでなければ，君はいつかは離れ離れになってしまう計画を立てていることになるのだ。

君は，君が現世においてしりごみしたばかりに，奥さんが夫と子供を失ったまま永遠の来世を送らなければならないような羽目に陥ることを望むだろうか。

また君の子供たちが君のために父母との家族の絆なくして孤児として過ごすことを望むだろうか。

君のとる行動が君の妻子の永遠の生活に影響を及ぼすことを，君は自覚していないのではないだろうか。子は親の模範に従うものである。君が示す模範次第で子供たちが神を信じ，神に仕え，また清い習慣を身に着けるか否かが決まるのだ。そして同様に子供は自分が受けた影響をまたその子供，つまり君の孫に及ぼす。そのことが分かれば，今の君の行ないが生まれ来る君の子孫にどんな影響を与えるかも理解できるだろう。

君は彼らに何を望むか。最善のものか，それともつまらないものか。

今こそ君と神との関係を固く結ぶ時ではないか。君自身の救いのために君の奥さんのためにまた君の子供たちや孫たちのために。

私たちは皆家族の幸福を願っているが，不従順や神を無視するところに幸福はあり得ない。なぜ世の道に従うのか。そこに心の満足など得られようはずがない。また払う犠牲も大きいのだ。

これまで述べてきたように，家族の永遠の絆を得るには，神殿結婚が必要である。それ以外の道は考えるだけでも恐ろしい。というのも，私たちが神殿結婚を拒絶すれば家族の絆を来るべき世まで保つことはおろか，伴侶のないまま永遠に別離孤独のままでいなければならないと主は仰せになっている。

スペンサー・W・キンボール大管長はこの点について次のように語っている。

「永遠ということ，永続する幸福，神にまみえ神とともに住まうという

特権，あなたがたはこれらのことをみずから危うくしてはいないだろうか。学習，研究，そして熟考することに欠けているために，すなわち偏見や誤解，知識の不足から，この大いなる特権と祝福をみずから失ってはいないだろうか。

またみずからを永久に別離孤独で生き，他人に仕える者としてはいないだろうか。子供が死んだり，あなた方が世を去る時自分の子供を手放し，孤児にしたいと思っているのだろうか。生涯に得た最高の喜びすべてが『更に附け加えられ』，強められ，増し加えられ，永遠のものとされるというのに，ただひとり孤独なままで永遠の道を進みたいと思うのだろうか。それとも……この大いなる真理を無視し，退けようと言うのであろうか。」

そして大管長は言われた。「皆さん，どうかこの呼び掛けを無視しないでいただきたい。あなたがたの目を開いて見，耳を澄まして聞くことをやめないようにとお願いする。」（「聖徒の道」1975年1月号，pp. 2－5）

そこでケネス，私は君にもうひとつ尋ねたい。君にとって10人のおとめのたとえ話はどんな意味があるだろうか。その中の5人は思慮が浅く，5人は思慮深い者であった。思慮深い者たちは将来のために準備をしたが，思慮の浅い者たちは何の備えもしなかったため主の前から締め出された。そして用意のできた思慮深い女たちは主に迎えられたのであった。

ケネス，私はキンボール大管長とともに君のような立場にいるすべての人に，そしてその家族に訴える。主の命令を受け入れ，主に仕え，永遠に主とともにいることのできる場所を得るようにと。

救い主の約束は私たちが主の命令を受け入れてはじめて大いなる約束となる。主の仰せにある通りである。

「われを受け入るる者はわが父を受くるなり。

而して，わが父を受け入るる者はわが父の王国を受くるなり。この故にわが父のもてるすべては彼に与えらるべし。」（教義と聖約84：37，38）

しかも主を受け入れることは私たちが幸福になるための特権でもある。主イエス・キリストの聖なるみ名により心からお祈り申し上げる。アーメン。

死の後には

十二使徒評議員会会員

リグランド・リチャーズ

兄弟姉妹の皆さん，この素晴らしい大会にともに集うことができ，どの部会においても音楽や兄弟たちの話を堪能できたことを感謝する次第である。きょう私は皆さんの前で，天父と，私たちのために贖罪の犠牲として命を捧げられた御子イエス・キリストと，また，素晴らしい生き方を教えてくれる回復された主の福音に対し，私の抱いている愛を申し述べたいと思う。この福音は，地上での働きを終えた後に永遠の世界が存在することを私たちに教えてくれる。

私は，教会を巡り，伝道部を訪れ，伝道本部の人々と会い，教会員の信仰を感じる度に抱く聖徒たちへの愛をお伝えしたい。私たちはみたまが豊かに注がれていることに感謝している。その結果，今日，世界の至る所で教会は成長し，発展している。私は高貴なる指導者キンボール大管長とその副管長を，神に感謝申し上げる。私をはじめ教会員はすべて彼らを愛している。それは彼らがまことに御父の僕だからである。

私はきょう，この世で成人しない内に，また結婚の誓約は交わしたが自分の子供をもうける機会がない内に他界してしまったというような子を持つ両親の方々に向けて，お話をしたい。そのような経験のある家庭は少なくないと思う。

様々な国で，戦場に命を散らした青年はかなりの数になるであろう。私がオランダ伝道部長であった時，伝道部内のひとりの素晴らしい宣教師が永遠の栄えに入るのを見届けたことがある。

私はまた，日の光栄の王国にともに昇栄するにふさわしくない男性と連れ添いたくないために，この世で結婚の機会を持たない忠実な素晴らしい大勢の女性たちのことを考える。その多くは伝道に出て，御父のみ国の建設とシオンの若人の育成のために勤勉に働いている素晴らしい女性たちである。

心に感じていることを，私自身の家族を例にとって話させていただきたいと思う。私たち夫婦はオランダで伝道に携わっていた時に一女に恵まれたが，帰国してさほどの年月もたたない内にその子は他界した。妻はその子が生まれた時に，天使が連れてきたのを見たような気がすると何度も私に言っていたのだが，その子は死んでしまった。また，私はその子の4人の姉妹のことも考える。その内のひとりはきょう，扶助協会中央管理会長会の副会長として皆様方の支持を受けたが，他の3人も，才能は多少違っても皆立派な素晴らしい女性である。

私は3歳半で亡くなった子供のことを考えると，神が天地を統治しておられ，あの子もいつかは自分の栄えに入って，地上で両親に育てられた4人の姉妹と同じ機会にあずかるという信仰を得ていることを，神に感謝するのである。また「もしわたしたちが，この世の生活でキリストにあって単なる望みをいだいているだけだとすれば，わたしたちは，すべての人の中で最もあわれむべき存在となる」（Ｉコリント15：19）というパウロの言葉を神に感謝している。つかの間のこの世では，神が忠実で信仰深い者たちのために考えておられるすべてのことをすべての子らのために成就されるのは不可能なことであろう。

高価なる真珠に記されているモーセの言葉が心に浮かぶ。「見よ，これわが業にしてわが栄光，すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり」（モーセ1：39）ときどき考えるのだが，私たちはこの聖句について深く考えてみたことがあるだろうか。「人に不死不滅をもたらす」こ

とが，ロムニー副管長が今朝指摘された通り，私たちが復活の後にもはや死ぬことはないということを意味するものだということは，理解できると思う。では，永遠の生命はどうであろう。そのことを考えると，私はこの言葉の中に，神が忠実で誠実な子供たちの将来に計画しておられるすべてのことは，神のみこころにかなう時にかならず実現するという感を覚えるのである。

モルモン経の中には，人は皆同じ時に生まれるわけではないし，同じときに死ぬわけではない，それは問題ではないということが書かれている。(アルマ40：8参照)　ここでアブラハムの言葉を思い浮かべるのだが，彼は霊たちが地上に置かれるのを見た時に，主は彼らが命じられたすべてのことを行なうかどうかを試そうと言われた。「而して，最初の位を保つ者は更に附け加えられ」(アブラハム3：26)。これはこの世に来る前の霊界でのことである。「第二の位を保つ者は，とこしえに栄光をその頭に附け加えられん。」(アブラハム3：26) 死んだ私たちの子も，自分の年相応に精一杯，第二の位を保ったのである。

そして，私は主が予言者ジョセフ・スミスに告げられたみ言葉のことを思う。「神の業，計画，目的が破れ，また水泡に帰するは共に有り得べからず。」(教義と聖約3：1)　これはすなわち，子らのために宣言されたことを成就しようとする神のみ手は，何人も阻み得ないということである。さらに教義と聖約の中で，主は言っておられる。「その企図は敗るることなく，またその御手を止め得る者絶えてなし。永遠より永遠に主は同じにして，その齢は尽くることなし。」(教義と聖約76：3,4)

また，主は予言者ニーファイにこう語られた。「そはわが業の今なお完成せざるのみならず，人間の終りの時になるも，またそれより進みて限りなき未来になりても完成せざるべからざればなり。」(IIニーファイ29：9)　さてこれらのことから分かるのは，高価なる真珠に書かれているように人に栄光を与える主のみ業がやむ時は決して来ないということである。この栄光は人の頭の上に永遠から永遠に増し加えられるのである。

私の家族について思いをはせれば，4人の娘の後に生まれた息子はたくましい青年に成長した。しかし彼は，私がカリフォルニアでステーキ部長をしていた当時，海岸で事故に遭い死亡した。16歳になったばかりの時で，父の私と同じほどの背丈があった。あの子の兄弟について考えてみると，きょうこの場にいる彼らには皆家族があり，ひとりは十二使徒会地区代表として働いている。このことからも，私には亡くなった息子が来るべき永遠の世で，この世にまだ生きている兄弟たちよりも劣った栄光を受けるとは考えられない。彼が死んだ時，高校の校長先生が訪問され（教会員ではなかったが），リチャーズ姉妹に「彼は私がこれまで教えた生徒の中で一番良い子でした」と話をされた。あの子が大人になっていくにつれ，私たちもそのように感じたものだった。

私はまた，丁度同じ年齢で死んだ幼い孫娘のことも考える。その両親も兄弟姉妹もきょうこの場にいる。その子は数日病の床に伏した後，16歳で死んだ。かわいい女の子だった。ほかの子供たちがこの世に生きていて受けるすべてのものを，あの孫娘もいつかは受けられるという神の計画がなかったとしたら，天父に対する，また天父の御計画の完全さに対する私の感謝の思いは薄れてしまっていたであろう。

イエスの言われたたとえ話が思い出される。

「あなたがたのうちで，だれかが邸宅を建てようと思うなら，それを仕上げるのに足りるだけの金を持っているかどうかを見るため，まず，すわってその費用を計算しないだろうか。そうしないと，土台をすえただけで完成することができず，見ているみんなの人が，……あざ笑うようになろう。」(ルカ14：28—30)

もし神が人に不死不滅と永遠の生命を与える仕事を始めながら，その仕事を完成させる機会を用意されなかったとしたら，それは邸宅を建て始めながら完成することのできない建築者と同じであろう。

再び私の家族のことにもどるが，妻の妹がつい先ごろ亡くなった。彼女は伝道にも行き，補助組織で働いた気高い女性である。ところが彼女は生涯独身であった。私は，主の御計画は不完全であるはずがなく，彼女はいつか，自分の姉（私の妻）が素晴らしい家族を持って受けたと同じすべての喜びを得られるはずだと信じている。「その企図は敗るることなく，またその御手を止め得る者絶えてなし。」(教義と聖約76：3)

それで，私は福千年の時代が来ることを神に感謝している。その千年間にいかに多くの仕事が待っていることか。それについて多くを話す時間はないが，イザヤの言葉が心に浮かぶ。イザヤは福千年をかいま見た。彼は，新しい天と新しい地ができ，おおかみと獅子が共に伏して獅子が牛のようにわらを食べる時代を見た。民は家を建ててそこに住み，ぶどう畑を作って，その実を食べる。彼らが建てる所にほかの人は住まず，彼らが植えるものは，ほかの人が食べない。すべての人はみな自分の手の働きを享受するからである。(イザヤ65：17—25,11：6—9参照)　そし

て，イザヤはこう記している。「彼らは主に祝福された者のすえであって，その子らも彼らと共におるからである。」(イザヤ65：23) これは代々の家族のつながりを意味するように聞こえないであろうか。

また私は使徒パウロのこの言葉を，神に感謝している。「ただ，主にあっては，男なしには女はないし，女なしには男はない。」（Iコリント11：11）　これは真実であり，主は，子らがいつかはその大いなる祝福を受けられるように計画しておられるはずである。

ここで，その福千年について主のみ言葉を読んでみよう。

「また死ぬることなきを以て如何なる悲しみもあることなからん。その日，誰にても幼児は年とるまで死ぬることなく，その命は樹の齢と等しかるべし。而して，彼の死ぬるや眠ることなからん。すなわちこの世に於て眠ることなくして，瞬く間にその身変りて天に上げられ，その休息は栄光に輝かん。」(教義と聖約101：29―31)

人は木のよわいまで生き，瞬く間に身を変えられるのである。

さて，もうひとつ予言者ジョセフに対する主のみ言葉を読みたいと思う。

「地はゆずりとして彼らに与えられ，彼らは殖え満ちて強くなり（夫婦という関係がなければ殖えることはできない），その子孫らは罪を犯すことなく育ちて救いに入らん。主は彼らの中に在りてその栄光は彼らの上に輝き，主は彼らの王にして立法者たるべし。」(教義と聖約45：58,59)

日の光栄の王国を受け継ぐ者たちについて，主はこのように啓示された。「……この光栄は最高完全の光栄にして，永久にその子孫の続くことなり。」(教義と聖約132：19)

そのため，私はいつか霊界で，息子の選んだ花嫁に会える日を楽しみにしている。息子が，先ほど述べたかわいいめい（私にとっては初孫）のようにすてきな相手を見付けられるとしたら，それは何と素晴しいことであろうか。そのことを正しく理解していただくために，福千年に起こる出来事についてブリガム・ヤング大管長とウイルフォード・ウッドラフ大管長の言葉を読んでみたい。

ヤング大管長はこのように語っている。「この業を遂行するために，ひとつの神殿のみならず何千の神殿がなければならず，何千何万の男女がそれらの神殿に入り，主の啓示以前に生きた人々のために儀式を行なうであろう。」(「説教集」3：372) 考えてもみて欲しい何千の神殿が建ち，何万の人々がその神殿に入るとしたら，神殿の儀式を待つ霊たちのために主がどんなことを用意しておられるか，幾らかでも想像もできよう。

また予言者ウイルフォード・ウッドラフは次のように述べている。「救い主来臨の折には，一千年がこの贖いの業に捧げられ，神殿がこのヨセフの地――南北アメリカのそこかしこと，ヨーロッパやそのほかの地に出現する。」(「説教集」19：230)

私はきょうの話を私の信仰をもって結びたい。主は御自分の業を心得ておられ，早くして世を去った人々が悲しむことのない計画を用意しておられると，私は信じている。そこで最後に使徒パウロの言葉を引用したい。パウロは第三の天，神のパラダイスに捕らえ行かれて，書くことの許されないものを見た。彼はこう言っている。「目がまだ見ず，耳がまだ聞かず，人の心に思い浮びもしなかったことを，神は，ご自分を愛する者たちのために備えられた。」（Iコリント2：9）これこそ，神を信じる私の信仰である。皆様方に私の祝福を捧げ，イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

落胆してはならない

十二使徒評議員会会長

エズラ・タフト・ベンソン

この話の責任を与えられ，心からへりくだり，感謝している。

私がこれから話すことが，将来困難に直面した時に，物心両面にわたって何らかの役に立つことを希望してやまない。

主が予告されているように，私たちは現在人々が肉にあっても，また霊にあっても恐れおののいている時代に生きている。（教義と聖約45：26参照）多くの人はこの人生の戦いに疲れ，落胆している。最近の大学生の主な死因は自殺であると言われている。また試練と苦難の伴う善悪の最後の対決の時が近づくにつれて，現在サタンは失望と落胆，意気消沈，憂うつをもって聖徒を打ち負かそうとますますその力を増している。

しかし，私たち末日聖徒は，すべての民の中にあって慌てず，しかも決して悲観的にならないようにしなければならない。なぜなら「地より平和の取り去られ，悪魔自らの領土を支配する時」であっても，「主もまたその聖徒らを支配し，その真中にありてこれを」統治されることをよく知っているからである。（教義と聖約1：35，36）

将来の困難な時代にあっても，教会はそれを導かれる神のみ手のもとに存続することは確かである。そうだとすれば，私たち一人一人の責任は教会とその教えに忠実であることではないだろうか。「最後まで固く立ちて，打ち勝たれざるものは救わるべし」（ジョセフ・スミス1：11）私たちがこの失望と落胆と絶望を与える悪魔の計画に打ち負かされることがないように，主は多くの方法を用意しておられる。そしてこの方法に従えば，私たちの霊性は高められ，喜びへ通じる道に歩み出せることだろう。

その第1は悔い改めである。私たちはモルモン経の中に，「絶望は悪い行いから来る」（モロナイ10：22）という言葉を見いだす。またアブラハム・リンカーン大統領は次のように言っている。「善いことをした時は気持ちも良いが悪いことをした時には気持ちも悪い。」「罪悪は人を絶望と落胆の淵へ引きずり込む。そして罪悪を犯して一時的な快楽を得たとしても，結局は不幸に終わってしまうのである。「罪悪は決して幸福を生じたことはない。」（アルマ41：10）罪悪は神の業と調和することなく，むしろ霊を弱めるものである。したがって，人はいつも神のすべての律法と調和しているかどうかみずからをよく吟味する必要がある。私たちが守るあらゆる律法には，それ相応の祝福がある。しかし律法を守らなければ，かならずそれ相応の挫折を招くようになる。絶望という重荷を背負っている者は，主のもとに来ると良い。なぜなら，主のくびきは負いやすく，その荷は軽いからである。（マタイ11：28—30参照）

第2は祈りである。必要な時の祈りは大きな恵みをもたらす。ささいな問題から，ゲッセマネのようなひどい苦しみを伴う試練の中にあっても，私たちは祈りを捧げることによって神に近づき，大きな慰めと助けを得ることができる。「勝利者たらんことを常に祈るべし。」（教義と聖約10：5）私たちはいつも祈りを欠かしてはならない。少年ジョセフ・スミスは聖なる森において悪魔が自分を破滅させようとした時にどのように祈りを捧げたかについて，次のように記している。「何とぞ逃れしめたまえと，全力を振りしぼって神を呼び求めた。」（ジョセフ・スミス2：16）これもまた，私たちが絶望に陥って破滅することのないようにするひとつの鍵である。

第3は奉仕である。自分を忘れて人々のための義しい務めに精を出す

なら，あなたの見識は高まり，個人的な問題も無くなる。また少なくとも，物事を正しく見る力が得られるであろう。ロレンゾ・スノー大管長は次のように言っている。「もし少しふさぎ込むようなことがあるなら，周囲を見回し，もっと苦しい状態にある人を捜しなさい。それからその人の所に行って，その苦しみが何かを知り，主があなたに授けて下さった知恵をもってそれを取り除くように努めなさい。そうするとあなたのふさいだ気持ちは晴れ，楽になるだろう。そして主のみたまはあなたの上にあり，すべての事柄が明らかになるであろう。」(*Conference Report*「大会報告」，1899年4月6日，pp.2，3)

自分の問題を解決することにのみ追われている女性よりも，子供を正しく育てようと努めている女性の方が，霊的な成長という点から見れば，より良い機会を持っている。

第4は仕事である。地球はアダムのゆえに呪われたが，働くことは神からの祝福であって，悲しむべき事柄ではない。神にもなすべき仕事があり，私たちも仕事をもって働くべきである。退職した人の多くは活気を失い，早く死ぬようである。悪魔でさえも怠惰の地獄にいるよりは，できるはずもない砂のロープを作る仕事を選ぶ，という言葉があるが，私たちはよく働き，自分自身と責任ある人々のために霊的，精神的，社会的，また物質的な必要を満たすようにすべきである。イエス・キリストの教会には，神の王国を前進させるためになすべき仕事が沢山ある。伝道，家族の系図，神殿の仕事，家庭の夕べ，そしてその他の教会の責任を受け，全力を尽くして遂行することは，私たちがなすように求められている仕事のほんの一部分に過ぎない。

第5は健康である。肉体の状態は霊にも影響を及ぼす。これこそ主が知恵の言葉を与えられた理由である。私たちは早寝早起きを励行し（教義と聖約88：124参照)，自分の力以上に急がず（教義と聖約10：4参照）すべてに節度を保って行動すべきである。一般に自然の状態のままの食物を多く食べ，添加物を加えずに精製もできるだけしないようにすれば，その食物は私たちの健康にとってもっと良い物となる。食物は心にも影響する。そして体を構成するある要素が欠乏すると，心がふさいでくる。定期的に健康診断を受けることは予防に役立ち，病気の早期発見をし，すぐに治療することができる。休息と運動は健康には欠かせない。また新鮮な外気の中での散歩は霊を活気付けるものである。健全なレクリエーションは私たちの宗教活動の一部である。つまり生活に変化をもたらすことが必要なのである。ただそのように考えるだけでも霊を鼓舞することができる。

第6は読書である。これまで多くの人が試練に直面した時，モルモン経を開き，力と励ましと慰めを得てきた。また旧約聖書の詩篇も，苦しみに陥った人々の心に対する特別な糧となっている。今日私たちには，近代の啓示である教義と聖約という書物が与えられている。予言者の言葉，特に教会の現在の大管長の言葉は是非読む必要がある。これらは悩んでいる人に導きと慰めを与えるものである。

第7は祝福である。人は特に危急の際に，また重大な危機に直面した時，神権者の手によって祝福を受け，慰めと導きを得た。予言者ジョセフ・スミスでさえも，ブリガム・ヤングに祝福を求め，身も心も慰めと導きを得て喜んだ。同様に父親も自分の妻と子供たちに祝福を与えることができる。祝福師の祝福を受け，その言葉を絶えず祈りの気持ちをもって思い巡らすならば，特に困った時に，必要な洞察力を得ることができる。聖餐はそれにあずかるすべての人々に祝福をもたらす。

したがってしばしば聖餐を受ける必要がある。病床に伏している人々もそうすべきである。

第8は断食である。ある種の悪霊は祈りと断食とによらなければ，追い出すことはできないと聖典に記されている。(マタイ17：21参照) 私たちは定期的に断食することによって，心を清め，肉体と霊を強めることができる。通常の断食，すなわち断食日曜日に行なうよう告げられている断食は，食物も飲み物も口にすることなく，24時間行なうものである。必要な場合，ただ飲み物を取るだけで，それ以上長く断食する人もいる。断食に際しては知恵を用いるべきである。そして断食を終える時には，胃の負担にならない程度の食物をもって終わるとよい。断食を実りあるものとするために，祈りと黙想をそれに加えるべきである。また，体を使うことは最小限にとどめる必要がある。聖典の言葉や断食を行なう理由についてよく思い巡らすことができれば，そのこと自体祝福である。

第9は友人である。あなたの言葉を聞き，喜びを分かち合い，あなたの重荷を負い，あなたに正しく助言を与える真の友のとの交わりは，決してお金で買えないものである。予言者ジョセフ・スミスの次の言葉は絶望の獄に捕らわれている人にとって特別な意味のある言葉である。「友からの便りがどれほど心をなごませるものか。それは，たとえだれからのものであれ，思いやりの気持ちを呼び覚まし，さらに行動へと駆り立てる友情の印である。」(*Teaching of the Prophet Joseph Smith*「予言

者ジョセフ・スミスの教え」p.134）

あなたの家族が最も親密な友人であることが理想的である。そして最も大切なことは，天の御父ならびに私たちの兄であるイエス・キリストと友になるように願うことである。あなたを徳に導く人と友になれることとは何という祝福であろうか。友を得るには，自分から好意を示さなくてはならない。友情はまず家庭から始まり，ついでホーム・ティーチャー，定員会指導者，監督，その他教会の教師や指導者へと広がるものである。また，聖徒たちとしばしば会合し，交わりを持つことによって，気持ちを鼓舞することができるのである。

第10は音楽である。霊感に満ちた音楽は，崇高な思いを心に満たし，正しい行ないへ人を駆り立て，心に平安をもたらす。サウルが悪霊に悩まされていた時，ダビデはサウルのために琴を弾いた。するとサウルの気持ちは静まり，悪霊は彼を離れた。（サムエル上16：23参照）かつてボイド・K・パッカー長老は，霊感あふれるシオンの歌を幾つか覚えるようにとの賢命な勧告をしたことがある。誘惑に遭い，心が動揺している時，讃美歌を口ずさみ，霊感に満ちた言葉を思い出すことによって，悪い思いを払い去ることができるからである。またこうすれば，弱々しい沈んだ思いをも払い去ることができる。

11番目は忍耐である。かつてジョージ・A・スミスが病気を患っていた時，彼のいとこの予言者ジョセフ・スミスが見舞いに来た。ジョージ・A・スミスは当時の模様を次のように述べている。「彼（予言者ジョセフ・スミス）は，ノバスコーシアの最も深い坑道に落ち込んでも，ロッキーの山々が頭上に伸し掛かってきても，落胆してはならない。努力を続け，信仰を用い，真の勇気を失わずにそれらの中から抜け出し，その頂に立たなければならない，と私に言った」（*George A. Smith Family*「ジョージ・A・スミスの家族」，ゾラ・S・ジャービス編，p.54）

悪魔の陰うつな霊があなたを離れるまで，ただ正直に悪魔の働き掛けに耐え続け，負けないようにしなければならない時がある。主は予言者ジョセフ・スミスに次のように言われた。「汝の不幸，汝の困苦はただこれ束の間なり。

然り而して，もし汝よくこれを耐え忍ばば，神は汝を高きに挙げたまわん。」（教義と聖約121：7，8）

たとえ絶望の真っただ中にいても，心からの努力を払うことによって，私たちはついには輝く光のもとに立ち返ることができるのである。私たちの主なる救い主イエスでさえも，十字架にかけられていた間，一時御父からひとり取り残されて最後の試みに直面されたのである。そして人の子らのためにその業を続けられた。それから間もなく，救い主は栄光を得，全き喜びを受けられたのである。あなたが試練に出会う時には，かつて得た勝利を思い起こし，忠実であれば続いて与えられる恵みを数えることができる。この試練に伴い，さらに大きな祝福が与えられるという確固たる希望が持てるのである。また，時至らば神がすべての者の涙をぬぐいたもうこと，そして「目がまだ見ず，耳がまだ聞かず，人の心に思い浮びもしなかったことを，神は，ご自分を愛する者たちのために備えられた」（Iコント2：9）ことを確かに知ることができる。

12番目は目標である。物事を判断する能力のあるすべての神の子は，目標すなわち，短期目標と長期目標を定める必要がある。適切な目標を達成しようと邁進している人は，落胆の気持ちなどすぐに打ち砕いてしまう。そして，ひとつの目標を達成すると，すぐ新しい目標を定める。こうしていつも目標を持ち続ける。毎週聖餐を受ける度に，私たちはイエス・キリストのみ名を受け，御子を常に忘れず，また主の戒めを守るという目標に対して決意を新たにするのである。また聖典には，イエス・キリストがみ業の準備をするに当たって，「ますます知恵が加わり，背たけも伸び，そして神と人から愛された」（ルカ2：52）と書かれている。これには霊的，知的，肉体的，社会的な4つの面が関係している。また，「汝らはいかなる人物にてあるべきか。まことに汝らはわれと同じ人物ならざるべからず」（IIIニーファイ27：27）と主は言っておられる。私たちは主の足跡を踏み，主と同じようにすべての美徳を具え，主を拝し，私たちの召しと選びを確かなものにするために業に励むという生涯の目標を持っている。

使徒パウロは次のように述べている。「兄弟たちよ。……ただこの一事を努めている。すなわち，後のものを忘れ，前のものに向かってからだを伸ばしつつ，目標を目ざして走り，キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである。」（ピリピ3：13，14）

主のようになろうという目標を心に抱きなさい。そうすれば，主を知り，主のみこころを行ないたいと心から求めることによって，沈んだ気持ちを払い去ることができる。使徒パウロは「キリスト・イエスにあっていだいているのと同じ思いを，あなたがたの間でも互に生かしなさい」（ピリピ2：5）と言い，またキリストも「何を念うとも，念々われを見るべし」（教義と聖約6：36）と言っておられる。もし私たちがこの

ようにすれば，どうなるであろうか。「あなたは全き平安をもってこころざしの堅固なものを守られる。」（イザヤ26：3）

予言者ジョセフ・スミスは次のように言っている。「救いとは，自分のすべての敵に打ち勝ち，それらを足下に踏みつける以外の何ものでもない。」（「予言者ジョセフ・スミスの教え」p.297）神が義にかなった方法を与えておられることを心に留めるなら，私たちはこの失望，落胆，絶望といった敵に打ち勝つことができる。そして，ここで私が述べたのはそのための方法である。「あなたがたの会った試錬で，世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試錬に会わせることはないばかりか，試錬と同時に，それに耐えられるように，のがれる道も備えて下さるのである。」（Ｉコリント10：13）

まことに，人生は試練である。人生は試みの世である。いにしえの聖なる人々が，自分のことを「この世をさすらう旅人にして巡礼」（教義と聖約45：13）であると考えたように，私たちも天の家を離れているためにそのような気持ちを抱く時がある。

あなた方は，ジョン・バンヤンの「天路歴程」という本を知っているであろう。クリスチャンという名の主人公が，苦難の末，天の都へ迎えられたという話である。彼はそれを自分の目標とした。しかしこの目標を達成するためには，多くの障害を克服しなければならなかった。その中のひとつが「落胆の沼」からの脱出である。霊性を高め，喜びへ通じる道に歩みを進めるために，私たちは失望と落胆と絶望という悪魔の計画に打ち勝たなければならない。そのためには，私が今述べてきた12の方法がある。すなわち，悔い改め，祈り，奉仕，仕事，健康，読書，祝福，断食，友人，音楽，忍耐，それに目標である。

将来困難に遭遇する時これらをすべて使って，巡礼者クリスチャンのように大きな幸福をこの世で得，そして日の光栄の最高の王国において全き喜びを受けることができるように祈る次第である。イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

高潔

大管長会第二副管長

マリオン・G・ロムニー

親愛なる神権者の皆さん，私はこの話をする機会を大きな栄誉であり同時に大きな責任であると考えている。話す間主の祝福があることを確信している。私が話すことがアロン神権者にもメルケゼデク神権者にも役立つことを願っている。そこで私は高潔ということについて2，3話したい。

ある定義によれば，高潔とは「正しい心，正直，誠実などの健全な道徳の原則を守っている状態」である。

正直，高徳，廉潔などの同義語を区別して，ある辞書は次のように書いている。「高潔は不朽の高徳性，中でも信頼にこたえるという特質を指す。」

世界が現在高潔な人を切望していることは，私が多くの言葉を費やすまでもない。このことは，あらゆる出版物，放送，その他あらゆる視聴覚メディアに明らかである。

A・P・スタンレーはこう言っている。「完全に信頼できる高潔な人はいないのか。人が挫折した時も毅然として立つ人，忠実な真実の友，正直に，恐れることなく忠告を与える人。騎士道精神にあふれた立派な相手はいないのか。こういった人は，千歳の岩から切り出された石塊ともいえよう。」

現在私たちの文明そのものが死の危険にさらされている。この文明を救い出すには，高潔な人が必要である。

この途方もなく大きな仕事を果たすために主は神権者を召された。これはほかでもないあなたがたのことであり，私のことである。アロン神権者とメルケゼデク神権者の両方を含むすべての神権者がこの任に当たるのである。

主はかつて人に与えられたものの中でも最高の信頼を私たちに託された。私たちは主の信頼を裏切ってはならない。私たちは高潔の徳を具えた男性にならなければならない。私たちが昇栄にあずかれるかどうかは，どんな危険に出会っても，どんな状況におかれても，主が託された信頼に忠実にこたえられるかどうかに懸かっている。(「末日聖徒イエス・キリスト教会歴史」3：380参照)

予言者ジョセフ・スミスは，永遠の生命を得るには完全な高潔さが必要であると教え，次のように言っている。

「人がキリストに信仰を抱き，罪を悔い改めて，罪の赦しのバプテマスを受け，聖霊を受けたなら，……続いて神の前にへりくだり，義に飢え渇くようにその人を導かなければならない。そして神の口から出る一つ一つの言葉によって生きるように指導しなければならない。もし人がそうするなら，主は間もなく，子よ，あなたは昇栄を得るだろう，と言われるに違いない。」

しかしこの約束が実現するのは，「主がその人を徹底的に試し，どんな危険を冒しても主に仕える決意のあることを見届けた」後のことである。(「教会歴史」3：380)

私たちは，執事から使徒に至るまで神権の召しを受けた教会指導者の中に，上記の高潔の徳を行ないに示した模範を見ることができる。

例えばキンボール大管長がいる。長年大管長は高潔の徳を示す模範であった。彼が主から託された神聖な信頼に命を懸けてでもこたえることは，だれも疑わないだろう。

タナー副管長も同様である。事実，実業界，政界における傑出した経歴が示す彼の実績は，実に周到な準備と勇気に基づくものであり，彼の同僚はタナー副管長のことを「高潔の人」と呼んでいる。

ここでこの高潔，あるいは同義語である正直，誠実の徳に関係のある

事例を2, 3挙げてみよう。まずアロン神権者の皆様に当てはまる次の話を紹介しよう。

「4人の末日聖徒の少年が，ユタのある町から遠出の旅行に出かけた。4人は高等学校の最終学年の1年間，この旅行のためにお金をためていた。今や卒業式も終え，それぞれのスーツケースを自動車のトランクに入れ，心配する親や羨望の目で見送る友だちに別れを告げて出発した。ユタ州境を越え他の州に入った時，4人はお互いに祝福し合った。彼らは車を道路わきに止め，はじめて足を入れた他州がどんなものか見ようと外に出てみた。この若い旅行者たちはみなわくわくした気持ちになり，冒険心から大変なことを考えだした。

彼らは一日おきに両親に葉書を出して居所を知らせ，何か困ったことがあった場合，受取人払いで電報を打つことを約束していた。4人の内のひとりは，自分がすることに一々前もって許可を得る必要がなく，自分で決めることができるのは本当にいい気持ちだ，と言った。するともうひとりが，僕たちは旅に慣れた者のように振る舞うべきであって，田舎の少年がはじめて家を離れたような印象を与えてはならないと言い出した。この少年は続けて，そのためにはこの冒険旅行の間モルモンであることをすっかり忘れようと提案した。『どうして』と残りの3人が理由を尋ねると，今こそ厳しい枠から離れて，モルモン教会外の他の人々が経験している楽しいことをちょっと試してみる好機だ，というのであった。『とにかく，どうということはないじゃないか。ここではだれもぼくたちを知らないし，ぼくたちが教会員であることをとやかく言う人はいないんだ。』

新しい体験をするのだという興奮で彼らの判断は狂い，全員が，ではやってみようじゃないかということになった。彼らはこれから，自分たちは東部から短期間ユタに来ている学生だと称することにした。自動車のナンバープレートがユタになっているので，こうするしかなかった。

第1日目の夜，彼らは有名な行楽地に着いたので，そのそばにキャンプを張ることにした。夕食の後，4人は楽しみを求めて大きなホテルに入って行った。そこに入るとすぐにリーダー格の少年が，今こそ長い間厳しい両親や教師に禁じられていたことを試してみる時だ，と提案した。最初に少年たちの目に留まったものは，ラウンジの端の方に掛かっている大きなネオンサインであった。そこには，『バー。ビール，カクテルあります』と書かれていた。これこそ『ちょっとばかり罪を犯す』格好の第一歩であると考えて，4人はバーに入りビールを1杯ずつ注文することにした。しかし，けばけばしい照明に照らされたバーに入り，魅惑的なアルコール飲料のびんがずらっと並んでいるのを見た時，彼らは緊張した。4人を代表して注文しようとした少年は最初声が出なくて，つばを飲み込んでようやく聞き取れるような声で『ビール4杯下さい』と言ったのだった。

ビールは大して味の良いものではなかったが，雰囲気と興奮が勢いを付けた。彼らは次第に大胆になり，次はどんな冒険をしようかというところに話が進んだ。彼らの話はだんだんきわどいものになってきた。その時突然きちんとした身なりの人がバーに入ってきて4人のテーブルに向かって歩いて来た。この人の顔と決然とした歩調で自分たちの方へ来るのを見て，彼らはすっかり色を失ってしまった。

この男の人は，少年たちの座っているテーブルの所に来ると，4人の内のひとりに手を伸ばして，『失礼ですが，あなたはユタ州のジョージ・レッドフォードさんの息子さんではありませんか。』少年は口が利けなくなるほどにおじけてしまった。ビールの入ったグラスを持つ指は凍ったようになり，震えるような声で答えた。『はい，そうです。』すると見知らぬ紳士は言った。『君たちがホテルのロビーに入ってきた時から，君だと分かったよ。私はヘンリー・ポールセンと言って，君のお父さんが働いている会社の副社長です。私は去年の冬ホテル・ユタで会社の晩餐会の時に，君とお母さんに会っています。私は，君がモルモンの少年であることをどう思うかと別の役員から聞かれて，モルモンの神権について説明していた様子を一度も忘れたことがありません。正直言って，君がバーの方へ歩いて行くのを見て少し驚きました。しかし，モルモンであろうとなかろうと，家を離れてしまえば，子供は子供，同じようなものですね。』

この少年たちは説教壇からは決して聞けない説教に接したのであった。彼らはすっかり意気消沈し，恥ずかしさのあまりうなだれてしまった。彼らは半分飲み残したグラスを後にロビーを通ってホテルを出たが，皆の視線を浴びているような気がしてならなかった。キャンプを張った所まで帰る道が暗かったのはせめてもの慰めだった。『だめだったな。』教会員であることを伏せておこうと言い出した少年が，緊張をほぐそうとして言った。それに対して，男の人に話し掛けられた少年が答えた。『だけど，ぼくたちにまだ良識が残っているとすれば，この経験を最良の教訓にすることができるよ。』」

ではここでもうひとつの事例を挙げてみよう。それは故チャールズ・W・ニブレー副管長が語るジョセフ・

F・スミス大管長の経験である。皆さんの中の若い長老たちにとってためになる話であると思う。

故ジョセフ・フィールデング・スミス大管長の父親であり，同じく教会の大管長になったジョセフ・F・スミスについて，ニブレー兄弟は次のように語っている。「スミス大管長から聞いた話の中で彼の勇気と忠誠を表わすものに次のような逸話がある。それは1857年の秋に，サンドウィッチ諸島での伝道を終えて帰る時のことであった。スミス大管長はロサンゼルスを経由して，当時『南のルート』と呼ばれていた道を通って帰還した。同じ年にジョンストンの軍隊がユタに向かっており，自然の勢いとして，モルモン教徒に対する悪感情が高まり，一種の興奮状態が感じられたころであった。彼を含む小さな幌馬車隊が南部カリフォルニアで少し歩を進めて野営したところ，反モルモン運動の荒くれ者たちが馬でキャンプに押し掛け，呪いの言葉を口にし，ののしり，『モルモンの奴ら』はただではおかないぞと脅しの言葉を吐いていた。ジョセフ・F・スミスはキャンプから少し離れた所でたき木を集めていたが，彼の隊の幾人かが川を下って，かん木の間に隠れるのが見えた。その時のことを彼はこう語った。」とニブレー兄弟は話を続ける。「『私はなぜ彼らの前から逃げなければならないのか。なぜ彼らを恐れなければならないのかと考えた。』と。彼はたき木を一杯抱えて，キャンプのたき火の方へと進んだ。そこにはまだ拳銃を手にしたひとりの暴漢がいて，『モルモンの奴らめ』と怒鳴り声を上げ，呪いの言葉を吐いていたが，ジョセフ・F・スミスを見ると『お前はモルモンか』と大声で言った。

『そうだ，正真正銘，筋金入りの。』きっぱりとした言葉が返された。

この荒くれ男は彼の手を取って言った。『ほう……，お前……気持ちのいい奴だ。お前みたいなのには会ったことがない。若いの，握手しよう。自分の信念をはっきり言える男に会えてうれしいよ。』」(*Gospel Doctrine*「福音の教義」1939年度版，p.518)

アブラハム・リンカーンの「分かれた家は立つことができない」という演説は彼の高潔な人格をよく伝えている。ジョン・ウェスレー・ヒルは，その著「神の人，アブラハム・リンカーン」の中で次のように書いている。「リンカーンは合衆国上院議員の指名を受けて演説の草稿を書いたが，それは自主独立の精神と一度定めた目的はあくまで追求する態度をよく示していた。……これは『分かれた家は立つことができない』という演説としてよく知られている。その中には，『半分奴隷で半分自由』の状態では合衆国は存続し得ないという歴史的な宣言が含まれていた。リンカーンは友人のジェシー・K・デュボイスに次のように語っている。『私は分かれた家は立つことができないということについて書いた部分をあなたに読んで聞かせることを断わった。それはあなたがかならずその部分を別のものに変えるか，一部を修正するように求めることを知っていたからである。私は決して変えないと心に決めていた。意識してあの句を加えたのである。そしてことによってはあの句とともに滅んでもよいと考えていた。……あの句を除いて勝つよりは，演説にあの句を入れて敗れる方が良かったのである。』」(*Abraham Lincoln-Man of God*「神の人，アブラハム・リンカーン」1927年，p.151)

リンカーンにとってあの「半分奴隷で半分自由」という表現を演説の中に残すには真実の勇気が必要であった。彼は野心を抱いていた。上院議員になることによって大統領の地位に近づくことが可能であった。しかし当時の政界の空気は，まだ彼の見解を受け入れる用意ができていなかった。問題の言葉を含めれば，上院議員の席は彼の手に入りそうにもなかった。そして事実リンカーンは敗れた。このことを彼はよく知っていた。しかしそれでも自分の信念と一致した行動をとる勇気を持っていた。彼のとった行動は上院への門を閉ざすことになったが，後には大統領への門を開くことになった。これは国家にとって幸運なことであった。

J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長も高潔の人であった。まだ若い時に短期間ユタ州シーダー・シティーにある州立ノーマルカレッジの南分校を管理したことがあった。彼はこの大学の運営に大いに貢献した。「2年後……大学が申請していた資金を交付するよう州議会の議員たちに働き掛けて欲しいと頼まれた。

それに対し彼は，手紙で10万ドルもの要請を支持することはできないと，きわめて率直に説明した。

彼はこう言っていた。『率直に言ってあなたがたはあまりにも多くの金額を求めています。

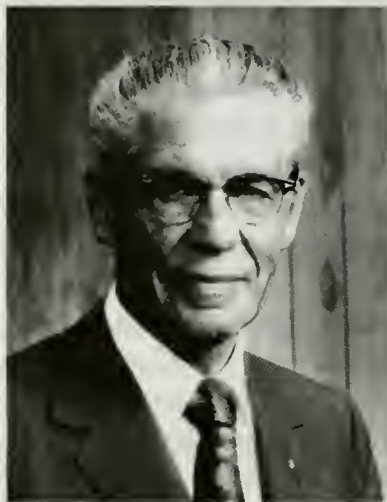
私はこの件を慎重に検討しましたが，あなたがたが要求している支出金を認めるよう各代表者に働き掛けることは，どう考えてもできない相談であります。……

10万ドルの考えを捨てて，5万4000ドルを目標にするというのなら，微力ながら最善の協力を惜しまない積もりです。しかし，あくまで高額をというのなら，私は黙って見ていましょう。これは本気で申し上げているのです。』

この手紙に見られる率直さは，クラーク副管長の長い経歴を通じて，人と交わり，対処する際の顕著な特

徴であった。彼が人を推薦する時の言葉の中には，決してお世辞は見られなかったが，彼の率直で誠実な態度を知る人々は，クラーク副管長を非常に信頼したのであった。彼の口から出る言葉は本当に心でそう考えていることであると信じることができたからである。」（デビッド・H・ヤーン・ジュニア，*Young Ruben*「若きルーベン」ブリガム・ヤング大学出版部，pp. 113, 114）

神権者の皆さん，もし私たちが皆キンボール大管長やナサン・エルドン・タナー，ジョセフ・F・スミス，アブラハム・リンカーン，あるいはJ・ルーベン・クラーク・ジュニアのように勇気のある，高潔な人格を具えていればどんなに素晴らしいことであろうか。主は私たち主の神権を持つ者にそれを期待しておられる。

私たちがこの高潔という大切な徳をよく考え，身に着けることができるよう，神の助けを求め，へりくだってイエス・キリストのみ名により祈りを捧げるものである。アーメン。

罪を犯した人に対する私たちの責任

大管長会第一副管長

N・エルドン・タナー

愛する兄弟の皆様，私はへりくだって皆様の前に立ち，話す間主のみたまと祝福が引き続き私たちの上にとどまるよう願っている。神権を保持することは，何と栄えある特権であろうか。これは，教会の中でも最もへんぴな地域で，しかも小さな支部でつい最近執事に聖任された少年であろうと，教会の最高の地位に就いている大祭司であろうと，ひとしくいえることである。このような神権を受けている私たちは，主と誓約を交わしており，その誓約を守り，主の前に義しく歩む限り，数多くの祝福を受けることができる。

先日，私はある熱意にあふれた帰還宣教師と話をした。この人は教会員になってからまだ5年しかたっていなかった。彼は次のような興味ある話をしてくれた。

この青年は高い理想を持った立派な両親に育てられた。しかしこの教会が教える数多くのこと，例えば，今日地上に神の予言者が存在すること，死後身と霊が再び結合して文字通り復活し，永遠に生きること，さらに人は神の霊の子供であるという麗しい，重要な概念などは，考えてもみなかった。また福音が回復されたこと，身と霊を持ちたもう神が生きておられること，そして世の救い主イエス・キリストが生きておられ，文字通り肉において神の御子であるなどの教えを，一度も耳にしたことがなかったのである。

ある避暑地で働いていた時のことであった。そこにはほかにも多くの若者が働いていたが皆楽しい時を過ごしているようであった。そのような中でこの少年は，他の仲間とは違った生活をしている3人の若者に心を引かれた。3人はタバコやアルコール，睡眠薬なども飲んでいないようであった。あらゆる角度から見て非常に高い標準に従っており，道徳的にも清いようであった。

彼は次のように語った。「私は彼らに引かれるようになり，彼らと話をしてなぜほかの人々と違うのか知ろうとしました。3人は自分たちがモルモン教徒であることを告げ，知恵の言葉を守っていることを紹介し，この戒めについて説明してくれました。また主が『あなたは姦淫してはならない』（出エジプト20：14）と命じられたことや，性的な罪は教会で最も重い罪と考えられていることを話してくれました。」

彼はこうも言った。「私はこの青年たちと非常に親しくなり，彼らが教えてくれたこと，すなわち彼らの生き方が好きになりました。3人は教会について何でも話してくれました。彼らは教会を誇りに思っているように見えました。他の若い人々と生き方が異っていることを恥かしいと思っている様子はありませんでした。しかしこのキャンプ場に，福音の原則を守っていない教会員が一部いることも教えてくれました。」

私はこの一部の会員があるべき生活を行なわず，誘惑に負け，正しいと知っていながらそれを守るだけの強さがないことを悲しく思った。もし彼らが心から改宗していて，キリストの福音とその教えを恥としてなかったら，彼らもまただれか他の人に良い影響を及ぼし，生活を変えさせ，忠実な者に約束された最後に与えられる祝福にあずかる備えをさせることができたであろう。

さらに彼は続けて言った。「3人の中ひとりは，帰還宣教師でした。私がますます興味を抱くようになるのを見ると，伝道地でしていたように，私に福音を教えてくれました。私は両親に手紙を書いて，このことを知らせました。両親はひどく落胆し，悲しみました。しかし家に帰って一部始終を話したところ，私の生活態

度や習慣が良くなっていったこともあってバプテスマを受けることを許可してくれました。私はこのことを本当に感謝しています。」

この青年が教会に加入したのはわずか19歳の時であった。彼は続けて，アロン神権を与えられた時の喜びと，主の十字架上の死を記念する聖餐を祝福し，配る特権について説明してくれた。またこの神聖な儀式のことを考えると謙遜になり，常に，身なりをきちんとし，ふさわしい者となるように努め，いつも主がそばにおられるような積もりで行動したと語っていた。

ある時，祭司として，新しく会員になる人にバプテスマを施す機会があった。しかもそれが救い主にバプテスマを施したバプテスマのヨハネに与えられたのと同じ権能，特権にあずかることなのだということを知って，彼は大きな祝福を感じた。彼が語るのを聞きながら，私は，すべての若人がこの儀式を執行できることがどれほど重要なことであり，また大きな特権であるかを感じ取り，理解してくれたらどんなに良いだろうか，さらに主が私たちに神権者としての務めを果たし，ふさわしい生活を送るように期待しておられることを知ることができたら，どんなに良いだろうかと考えた。

それからこの青年は，1年後に監督とステーキ部長から伝道に出る面接を受けて，その備えができていることを示すことができ，本当にうれしかったと語った。彼は知恵の言葉を厳格に守り，安息日を聖く過ごし，什分の一や献金を納めていた。またあらゆる意味で道徳的にも清く，女性を尊び，女性の友だちと接する時は，自分の妹と交際する男性に守って欲しいと思うような標準に従って交際した。彼はこのことをとても誉れに思い，心から喜び，主が自分をその代理人として認めて下さったのだという確信を持って，主の使いとして伝道地に赴くことができた。そしてはじめての改宗者にバプテスマを施し，確認した時の感激も話してくれた。

またある人にメルケゼデク神権を授け，長老に聖任するように言われた時も，非常に謙遜な気持ちになった，と述べていた。また主のみ名によって事を行なうというこれらの特権にふさわしい状態でいることがいかに大切なことか，また彼はある人を聖任したが，自分が聖任する長老も大管長が聖任する長老もまったく同じ長老であることを知った。そして心から主にへりくだり，主に感謝していた。

最後に，その青年は間もなく結婚することを告げ，顔を輝かせながら，彼も婚約者も道徳的に清く，ふさわしい状態で神殿に入り，この世にあっても，また永遠にも結び固められることを感謝していると述べていた。

そこで私はこの青年に言った。「神の権能，言い換えれば神のみ名によって行動する権威を与えられた青年以上に，大きな特権あるいは責任を与えられた人はいません。あなた方は，これから神殿で聖なる神権によって結び固められます。そして，約束されたすべての祝福と特権を享受するのです。」

今日教会の中で育った青年の中には，神権が与えられることを当たり前のことと考え，特権ではなく，権利であると考える人が非常に多い。知恵の言葉を破り，不品行であることが当世風の生き方であると考える人が多いようである。私は断固として申し上げたい。主は決してそのようなことを喜んでおられない。神権を受けている若い男性は神権にふさわしく生活しなければならないし，ふさわしくない者は，ふさわしくなるまで昇進できないのである。これはきわめて大切なことである。

また伝道の召しを受ける前に十分な資格を具えるように準備する必要がある。知識，能力，人格の面で完全に任せられるかどうかも分からない人物を選び，会社を代表させ，その種類の何たるかを問わず契約締結権を与えるというようなことをする大会社の経営者がいるだろうか。

ましてや，主を代表し，主のみ名によって語る者がふさわしい状態にいるということはなおさら重要なことである。主はふさわしい者となるために備えている人，力を蓄え，価値ある人間になり，真理を証し，悪を非難し，キリストの福音を擁護すべく準備しているすべての人々を非常に喜んでおられるに違いない。子供が道を踏み外した時，それがどの子かにかかわりなく親が悲しい思いをするように，ひとたび誓約を交わした者がそれを破った場合，主も失望と悲しみを味わわれるのである。

私はすべての若い男性にはっきり申し上げたい。私たちが誓約を守るならば，幸福になり成功を収め，人々から愛され，私たちとは異なる信仰を持ち，私たちを嘲ける人々からさえも尊敬を勝ち取ることができるようになるであろう。彼らは私たちが誓約を守り，決意を守り通し，信仰を擁護し，人とは異なった生活をすることは当然のことと思っている。このことは，教会員が犯罪を起こした場合によく分かる。共犯者の宗派については何も触れられないのに，モルモン教徒，あるいはモルモン教会の会員であるということはよく報道されるからである。

指導者の皆様に強調したい。神権者やこれから神権を持とうとする人と親しく交わっていくことは，私たちの責任であり，また特権でもある。私たちの教えや模範，証によって，

彼らが福音を理解し，責任を知り，福音の教えに添って生活することの重要性を認識するように，援助を与えなければならない。

あなた方が少年たちを愛し，また彼らが成功を収め，幸福になるためにできる限りのことをする用意があることを知らせなさい。しかし，ふさわしい生活をし，今後も受け入れた福音の標準に従いながら神権の義務を全力を尽くして遂行する備えができていなければ，だれも神権の昇進を受けることはできないし，神殿推薦状も伝道の召しも受けられないのである。ふさわしくないのに神権の昇進を許したり，神殿推薦状を与えたりすることは，決して愛あることではない。悔い改め，変わることを期待して若い男性を伝道に出すことも同じである。人は召される前にかならずふさわしいことを証明しなければならない。主は資格を具えたふさわしい代表者を求めておられる。

さて，若い男性の皆様にもう一度申し上げたい。あらゆることに正直であることはきわめて大切なことである。伝道に出たり，神殿に入るために，監督やステーキ部長にうそをつく者もいる。そのような人々は決してこれらの特権に値しないのである。主を欺くことはできない。

指導者の皆様，伝道に出ようとする人と面接する時，その人が主の代表者として主から何を期待されているかを聞き出すようにしていただきたい。躊躇することなく微に入り細にわたった面接をし，その人がふさわしいかどうか，何か罪を犯していないかどうか，また伝道の召しをどう思っているかを知る必要がある。それからふたりで主がそのことをどう感じておられるかを考え，その結論に従って行動していただきたい。

資格のないふさわしくない青年を伝道に出すことは，決して正しいことではない。そのような人は召しから受けるみたまを感じることができない。伝道に出たとしてもその地で伝道部長の重荷となり，伝道活動を妨げるだけである。伝道部長にとって宣教師を破門したり，罪のために送還したりすることがどれほど心を痛めることであるかを私は知っている。

もし罪を犯した青年がいれば，その人を愛していることを感じさせ，義しい道にもどれるようどんな援助も惜しまないことを告げなさい。サタンが解き放たれ，その軍勢は若い男女を道から踏み外させようと躍起になっていることを忘れてはならない。これらの若い人々が福音の原則に従って生活することができるよう，常に彼らを励まし，教え，導くように備えていただきたい。あなた方の怠惰が原因で道に迷ったというような少年少女をひとりも出さないようにしていただきたい。

次に罪を犯した者について述べよう。伝道部長，ステーキ部長，および監督には，あらゆる種類の背罪について，それをどう調査し，処理するか，その方法が示され，教えられている。重い罪を犯している者は，進歩することができない。そして罪の中にとどまっている限り幸福にはなれない。告白し，悔い改めるまでその人は捕らわれの身である。愛としかるべき処罰をもって正しく導かれた人は，後にあなたの思いやりと理解に，また指導力に感謝するだろう。義しく裁かれることによって，その人は悔い改め再び教会の活動に加わる門戸が開かれるのである。しかし何らかの措置はかならず講じられねばならない。

教会の活動に活発に参加していない人に気を付けなさい。もし何かおかしい，あるいはだれか罪を犯しているようだと感じれば，愛をもってその人の所に行き，何があったかを知る責任がある。その人はあなたの心遣いに感謝するだろう。迅速に行動することによって，それ以上の罪を防ぐこともできる。問題のある人を救い，囲いの中に連れもどしていただきたい。

一部の監督またステーキ部長さえもが，これまでに一度も人を破門したり，処罰したことがないし，今後もする積もりはないと言っているという報告が私のもとにある。このような態度はまったく間違っている。イスラエルの判事は，必要であれば義しい裁きを下す責任がある。裁く責任を持つ人にとって大切な言葉が教義と聖約20章に出ているので読ませていただきたい。「誰にてもキリストの教会員にして罪を犯し，また過ちに陥りたる者は聖典の指図するところに則りて処理すべし。」（教義と聖約20：80）

兄弟たちよ，聖典と手引きを熟読し，その指示通りに，必要な時には教会員を処罰していただきたい。直接管理する責任にある指導者が罪を見て見ぬ振りをしたり，大目に見たり，または隠そうとしたりすることは，決して罪を犯した人にとって愛あることではないということを覚えておいていただきたい。

このことについて触れたジョン・テイラー大管長の言葉を読んでみよう。「さらに，何人かの監督は，会員の罪を隠そうとしているということを耳にしている。私は神の名によって彼らに告げる。その罪はあなた方の頭（こうべ）に下ると。あなた方の中で人の罪に加担したり，あるいはそれを弁護する者はその罪を負わなければならなくなるだろう。監督やステーキ部長の責任にある人々はよくこのことを心に留めていただきたい。神はそれをあなた方の手に求められるのである。あなた方は正義の原則に手

を加えたり，人々の非行や腐敗を覆い隠すために教会の職に任命されているのではない。」(*Conference Report*「大会報告」1880年4月，p. 78)

兄弟の皆様，これは非常に強い言葉である。しかもこれは神の予言者である教会の大管長が語った言葉である。またジョージ・Q・キャノンも次のような重要な声明を残している。「神のみたまは疑いもなく，非常に悲しんでおられ，このような行為を犯した者を見捨てられるばかりか，私たちの周囲でこのようなことが行なわれるのを止めなかった者，行為者を責めなかった者をも見捨てられるだろう。

私たちはこの世の中で生活しなければならないが，決して世の者となってはならない。私たちは世の人々とは異なる。私たちは世の流儀や標準を受け入れることはできない。私たちはイエス・キリストの福音を示されていて，私たちの標準がどのようでなければならないかはっきり知らされている。また神権が回復され，私たちはそれを受けている。私たちはあらゆる点で模範を示さなければならない。罪を犯した者に対する処置の方法と神権者の責任について，教義と聖約に数多くの聖句が掲載されている。その中でも次の聖句に注意していただきたい。

「この故に，今や神権者皆各々その義務を覚れ。また己が任命せられたる務めを全く勤勉に勤むべし。

およそ，怠惰なる者はその地位に居るに値せず，またその義務を覚らず信任さるるに足る行いを示さざる者は，その地位にある値なき者なり。」(教義と聖約107：99，100)

教会によって処置される事柄に次のようなものが含まれることが，聖典から明らかである。もちろんこれがすべてではない。すなわち，婚前交渉，姦淫，同性愛，堕胎，その他道徳的に恥ずべき行為，すなわち窃盗，詐欺，殺人などの犯罪，そして背教すなわち教会の規則や規律に対する公然たる反抗，故意に行なわれる教会のもろもろの規則への違背，妻子への虐待，いわゆる多妻結婚の唱道あるいは実施，その他教会の律法と秩序を乱すキリスト教徒らしからぬ行為である。

もしあなた方指導者が主の勧めに従って働くなら，主はあなた方を祝福し，力付け，導きを与えて下さるであろう。あなた方は主に仕える時に大きな喜びを得るに違いない。ただ，人が教会員の資格を剥奪されたり，破門された場合，あなた方はその人に一層の愛と関心を示し，その人が生活を立て直し，再び教会の交わりの中に完全にもどれるようになるまであらゆる努力を払う必要がある。これはきわめて大切なことである。

教義と聖約に次のように書かれている。「見よ，およそすでにその罪を悔い改めたる者は赦され，主なるわれもはやこれを忘るべし。

人罪を悔い改めしや否やは，見よ，彼は自らこれを告白しその罪を捨つべければ，その悔い改めたることはこれによりて知るを得べし。」(教義と聖約58：42，43)

今晩各所にあって，この話に耳を傾けている人々に強調したい。私たちの責任は，人を救うことである。私たち指導者は，自分にできる範囲のことをすべて行ない，会員を義しい道に導き，信仰を強くし彼らに次のことを教えなければならない。つまりそれは私たちは彼らを愛し，人はすべて神の前に大いなる存在であること，また私たちは天父なる神の霊の子供であり，神がいつも私たちを祝福しようと待っておられることを知ることである。私たちは両親や子供たちと親しく交わり，彼らが道徳的に清く，神の王国のふさわしい会員となって，天の王国に入る備えをするように導く責任がある。しかし決して異性と不必要な親しい関係をもつことのないように注意しなければならない。

後数分もすれば，私たちは神の予言者である大管長から，言い換えれば神の予言者から指導の言葉を受ける。彼が神の予言者であり，また神が実際に生きておられることを証する。また神の御子イエス・キリストが世の救い主であって，私たちが復活し，不死不滅と永遠の生命を得られるようこの世に来て命を捧げられたことを証する。私たちは今日神の予言者，すなわちスペンサー・W・キンボール大管長を通して主から導かれている。キンボール大管長とともにみ業に従事することは，大きな特権であり，栄誉であり，祝福である。彼に従うなら私たちは道を踏み外すことはない。

私たちが神権の召しを全力を尽くして遂行し，主の祝福を享受できるように心から祈っている。またロムニー副管長が言われたように，「私たちが高潔である」ことを立証できるよう。イエス・キリストのみ名によって，へりくだり祈る。アーメン。

ダビデとゴリアテ

大管長

スペンサー・W・キンボール

兄弟の皆さん，こよいここにお集まりの皆さんと，さらに19万5千人にも上る方々とこうしてお会いできることを感謝している。そして皆さんに心からの賛辞と愛をお伝えしたい。

かなり以前のこと，私がアリゾナ州セントジョセフステーキ部のステーキ部長会に属していた時，ある安息日に責任を受けてエデンワード部を訪れた。建物は小さく，大勢の会衆は床から50センチほど高くなっている壇の上の私たちのすぐ前までぎっしり詰まっていた。

集会の途中で，礼拝堂の最前列にいる7人の少年が私の目に留まった。ワード部大会に7人の少年が出席していることをうれしく思いながらそのことを心に留めて，別のことに思いを転じていた。しかし，間もなく私の注意は再び7人の少年たちに向けられた。

7人の少年がいっせいに右足を上げて足を組み，それからすぐにまたそろって足を組み変えるのである。妙なことをするな，とは思ったが，さして気にも留めなかった。

すると今度は，全員そろって右手で髪の毛をなで付け，それから体をやや傾けて手をほおにやり，同時に足を元のように組み直したのである。

すること全部がどうも奇妙である。集会で何を話そうかと考えようと努めながらも，そのことが不思議でならなかった。その時，私は一瞬ひらめきのようなものを感じた。そうだ！あの少年たちは私のまねをしていたのだ。

その日私は人生の教訓を得た。管理する立場にある者は細心の注意を払わなければならない。他の人々は私たちを観察し，私たちの中に模範を見いだそうとしていているのだということを。

模範は少年の人生にとって重要なものである。一般に，だれかの後についていく人は多いが，先に立って導いていく人はごく少数である。あなたがた若人全員が指導力を伸ばし，その上で自身をもって良い模範を示すようになることが大事なのは，そのためである。

それはあなたがたの生活にも当てはまる。もしあなたに弟がいるなら，彼らはあなたに目を向け，話すことに耳を傾ける。あなたがしたと同じことをし，あなたが言ったと同じことを口にする。このことを忘れないでいただきたい。

十代になったら，このことを胸の中にとどめておいていただきたい。あなたが出るべき集会に出，果たすべき義務を果たしていれば，たいてい弟はあなたのやり方についてくるものである。しかしその反対もあり得る。

それはまた伝道についても当てはまる。あなたがセミナリーやインスティテュートに熱心で，正しい態度を示し，伝道に出る準備をしているのを見れば，弟も同じ道を歩んでいくであろう。

「鏡をのぞくように人の生活を見，人から自分の範を得よと，彼に命じた」と言ったのはテレンティウスである。

イソップ物語の中にも，「ただ手本を示して下さい。そうしたらそれに従いましょう」という言葉がある。

模範は最良の教訓である。サミュエル・ジョンソンは「模範は説教よりも効き目がある」と語った。

あなたがた若人は，年齢にかかわりなく，今自分の人生を築いていることを承知していただきたい。見掛け倒しの安っぽい生活か麗しく有益な生活か，建設的で充実した生活か，それとも破滅に進む生活なのか，あるいは喜びと幸せに満ちた生活か，逆に悲惨な生活のどちらにも転ぶ可

能性を持っているのである。それはすべてあなた自身に，あなたの態度に懸かっている。あなたがどこまで昇り得るかは，あなたの態度と状況への対応の姿勢で決まるのである。

スイスの山，カナダの山，ユタの山，あなたがいずれの山に登る時でも，他の大勢の人がともに山にいどんでいることを覚えておいていただきたい。その人々もあなたと同じ難所を乗り越えてきたのである。

高い所に登り着いた人でも，その道は決して楽な時ばかりではなかったことを見逃さないでいただきたい。アブラハム・リンカーンは青年時代に，イリノイ州議会議員に立候補して大敗した。

次に事業に乗り出したが失敗し，17年の年月を無能な仲間の借金返済に追われた。やがて美しい女性に恋をし，婚約したが，彼女は死んでしまった。政界に入ってからは合衆国議会を目指したが散々な結果で，国有地管理局のポストを得ようとしたが失敗した。上院議員候補になった時も惨敗し，後に1856年には副大統領候補になりながらもまたもや落選，1858年にもダグラス氏と戦って敗北を喫した。しかし彼はそれらの重なる敗北にめげず，ついに極め得る最高の成功を収め，不朽の名声を勝ち得た。それが合衆国大統領アブラハム・リンカーンである。これが数々の本に書かれ，困難の山を乗り越えて，成功への道を切り開いたあのアブラハム・リンカーンの姿である。

再び繰り返そう。あなたがたは自分の望む通りに自分の人生を築くのである。

作者不詳の言葉がある。「人生に大きな障害のあることを喜べ。おおかたの人間が克服しようとする以上に障害の高いことを，また喜べ。その数の多いことを喜べ。群衆をかきわけ，抜きん出るためのチャンスをくれるのが，その障害なのだ。障害は君の友だ。もしも高い障害がなかったら，君は大勢に追い越されるはずなのだから。」

昔の話をお話したいと思う。ひとりの少年が人生の若い時期をどのように形造っていったかを。

およそ3千年の昔，イスラエルの王，サウルがみずからの高い位に不相応なことを露呈したため，主は後継者探しに予言者サムエルを遣わされた。予言者は8人の息子を持つエッサイの家へ行き，息子たちを目の前に呼んで会見した。誇り高い父が長子エリアブを連れて来た時，サムエルは「この人こそ，主が油をそそがれる人だ」と思った。

「しかし主はサムエルに言われた，『顔かたちや身のたけを見てはならない。わたしはすでにその人を捨てた。わたしが見るところは人とは異なる。人は外の顔かたちを見，主は心を見る』。」（サムエル上16：7）

誇り高い父親は次の子を呼んだが，彼も退けられた。顔かたちの美しい7人の立派な息子たちが次々と予言者サムエルの前を通り過ぎてしまってから，サムエルは父エッサイに，「むすこたちはこれで全部ですか」と尋ねた。するとエッサイは「まだ末の子が残っていますが野で羊を飼っています」と答えた。サムエルはエッサイに言った。「彼を連れてきなさい。」（サムエル上16：11参照）

やがて末の息子がやって来たが，彼は血色が良く，姿が美しく，人柄は明るかった。羊飼いで，1日の大半を野で羊と過ごしていたため，おそらく日焼けをしていたであろう。主はサムエルに霊感を与え，サムエルは「これがその人である」と言った。（サムエル上16：12）そして父親と息子たちが周りを囲む中で，サムエルは油の角を取り，油を注いで末の息子ダビデをイスラエルの王に召した。

その同じころ，イスラエルの宿敵ペリシテ人がイスラエル征服のために軍を集め，ある山の上に陣取った。イスラエルは小さな谷をはさんで反対側の山に陣をしいた。

戦闘を前に両軍が向かい会うと，ゴリアテという名の巨人が出て来て，イスラエルに戦いをいどんだ。

「なぜわれわれと戦いに出てきたのか。わたしはペリシテびと，おまえたちはサウルの家来ではないか。おまえたちから，ひとりを選んで，わたしのところへ下ってこさせよ。もしその人がわたしを殺すことができたら，われわれはおまえたちの家来となる。しかしわたしが勝ってその人を殺したら，おまえたちは，われわれの家来になって仕えなければならない。」（サムエル上17：8，9参照）さらにこう言った。「わたしは，きょうイスラエルの戦列にいどむ。ひとりを出して，わたしと戦わせよ。」（サムエル上17：10）

この男は巨人で，人々を震え上がらせた。3メートル近い背丈があってだれよりも高く，青銅のかぶとをかぶり，うろことじの重いよろいを身に着け，足には青銅のすね当，肩には青銅の投げやりを背負っていた。着ているよろいは実に重く，手に持つやりは機の巻棒のように長く，剣はかみそりのように鋭かった。その前を，盾を運ぶ者が進んだ。

ゴリアテは恐るべき敵であったに違いない。イスラエルの勇士たちが彼を恐れたことは無論である。イスラエル軍のだれもが縮み上がって退却するのは目に見えており，その挑戦を受けて立つ勇気や無鉄砲さを持つ者はひとりもいない様子であった。

この重大な時に，父エッサイはサウルの軍に送り出した上の3人の息子のことを心配していた。その息子たちがイスラエル防衛の戦いに出て

いる時，末の子ダビデは羊を飼う仕事をあてがわれていた。

優しい父親は羊の番をしていたダビデを呼び，いり麦とパンを陣営の兄たちに，10の乾酪を軍隊の長に届けるようにと命じた。

ダビデは朝早く起きて，エラの谷へ出発した。羊が獣に追い散らされたり殺されたり食べられたりしないように，父の羊の世話は番人によく頼んでおいた。

ダビデが陣地に着くと，軍勢はときの声を上げて戦いに出ようとしていた。

ダビデは荷物を預り人に託し，戦列の方へ走って行って兄たちの安否を尋ねた。

すると40日間毎日のように挑戦し続けたあのペリシテ人が，また出て来て大音声を上げた。

ダビデが戦列に行き着いた時，人々は言った。「あなたがたは，あのイスラエルにいどむ巨人を見たか。彼を殺す人には，王が大いなる富を与えられることを知っているか。巨人ゴリアテを殺すことのできる人には，その父の家が税を免除されるであろう。」(サムエル上17：25参照)

一番上の兄はダビデを快く迎えず，怒って言った。「なんのために下ってきたのか。野にいるわずかの羊はだれに託したのか。あなたの物見高さとわがままと悪い心はわかっている。戦いを見るために下ってきたのだ。」(サムエル上17：28参照)

ダビデは兄の非難に気分を害したらしく，「わたしが今，何をしたというのですか。理由なくここへ来たと言うのですか」(サムエル上17：29参照) と言った。彼は自分がイスラエルを救うために，霊感に促されてここへやって来たのを知っていた。

サウル王がこの少年を呼び寄せた時，ダビデは受けた霊感を，その啓示を繰り返し述べた。「だれも彼のために心配し，恐れてはなりません。わたしが行ってあのペリシテびとと戦いましょう。」(サムエル上17：32参照) しかしサウルは驚き，ダビデに言った。

「行って，あのペリシテびとと戦うことはできない。あなたは年少だが，彼は若い時からの軍人だからです。」しかしダビデはサウルに言った。「しもべは父の羊を飼っていたのですが，しし，あるいはくまがきて，群れの小羊を取った時，わたしはそのあとを追って，これを撃ち，小羊をその口から救いだしました。その獣がわたしにとびかかってきた時は，ひげをつかまえて，それを撃ち殺しました。しもべはすでに，ししと，くまを殺しました。この割礼なきペリシテびとも，生ける神の軍をいどんだのですから，あの獣の一頭のようになるでしょう。」(サムエル上17：33―36)

そしてまたこう言った。「ししのつめ，くまのつめからわたしを救い出された主は，またわたしを，このペリシテ人の手から救い出されるでしょう。」サウルはダビデに言った。「行きなさい。どうぞ主があなたと共におられるように。」(サムエル上17：37)

サウルは自分のよろいをダビデに着せたが，重過ぎるため，ダビデはよろいを脱いだ。

そしてサウル王に，「わたしはこれらのものを着けていくことはできません。慣れていないからです」と言った。(サムエル上17：39参照)

少年ダビデは小川を渡る時にかがみ込んで5個の石を拾い，それを羊飼いの袋に入れ，手には石投げを持ってペリシテ人の巨人に近づいていった。

このことは明らかに巨人を驚かせた。そして侮辱に憤った。血色が良く，若くて姿の美しい少年を見て，怒りと不快を感じたペリシテ人は言った。

「つえを持って，向かってくるが，わたしは犬なのか。」ペリシテびとはダビデをのろった。ペリシテびとはダビデに言った。「さあ，向かってこい。おまえの肉を，空の鳥，野の獣のえじきにしてくれよう。」(サムエル上17：43―44)

ダビデは堂々と立ってペリシテ人に言った。「おまえはつるぎと，やりと，投げやりを持って，わたしに向かってくるが，わたしは万軍の主の名，すなわち，おまえがいどんだ，イスラエルの軍の神の名によって，おまえに立ち向かう。きょう，主は，おまえをわたしの手にわたされるであろう。わたしは，おまえを撃って，首をはね，ペリシテびとの軍勢の死かばねを，きょう，空の鳥，地の野獣のえじきにし，イスラエルに，神がおられることを全地に知らせよう。またこの全会衆も，主は救を施すのに，つるぎとやりを用いられないことを知るであろう。この戦いは主の戦いであって，主がわれわれの手におまえたちを渡されるからである。」(サムエル上17：45―47)

ペリシテ人と羊飼いの少年は，どちらも自信をもって接近していった。

「ダビデは手を袋に入れて，その中から一つの石を取り，石投げにはめて，ねらいを定め，ものすごい勢いでペリシテ人の額を撃った。おそらくは唯一のすきある場所だったのであろう。石は巨人の額に深く刺さり，大ほらふきの大漢はうつむきに地に倒れた。」(サムエル上17：49参照)

あなたがた若人の中に，石投げを使ったことのある人が何人いるか分からないが，私は少年の時に自分で石投げを作り，石を見付けてきて的を探し，随分と上達したものである。丁度水泳用の足びれくらいの大きさの皮を5センチほどの長さのだ円に

切り取り，両端に小さな穴を開け，長い皮ひもを両方に結び付けて，片端には指が入る結び目を作る。それからその石投げに石を載せ，頭上でくるくる回して弾みを十分付け，ひもの片方を離して石を的目掛けて飛ばすのである。

私たちは石投げや呼び子や水泳の時に使う足びれやボールなど，おもちゃは何でも自分で作り，使い方も手慣れたものであった。

「こうしてダビデは石投げと石をもってペリシテびとに勝ち，ペリシテびとを撃って，これを殺した。ダビデの手につるぎがなかった……」（サムエル上17：50）ダビデは石投げだけを持っていたのである。

ダビデの武器は小石と石投げと霊感と啓示であった。彼には勇気と力と自信と，特に天父への信仰があり，天父に祈りを捧げていた。

その一方，40日もうぬぼれと傲漫な態度を続けたペリシテ人は，死の最後を遂げた。

ダビデは地面にうつぶした敵の体に近づき，首をはねた。敵軍の心中に恐れが生じたのは確かである。案の定敵は退散し，ひとりの霊感を受けた少年が敵の全軍を破ることとなった。イスラエル軍は逃げるペリシテ人を追撃し，戦いに勝利を得たのである。

イスラエルの王は，そのように奇跡的な勝利を収めた少年は一体だれかと尋ね，ヨナタンは彼に自分の剣と弓と帯を与えた。聖書によれば，「またダビデは，すべてそのすることに，てがらを立てた。主が共におられたからである。」（サムエル上18：14）

さて，若い兄弟諸君，現代のダビデにはかならずゴリアテという敵があり，どのダビデも相手のゴリアテを倒すことができることを覚えていて欲しい。そのゴリアテは，握りこぶしや剣や銃で戦う悪漢ではないかもしれない。血の通う肉体を持ってはいないかもしれない。3メートルの背丈はなく，武装していないかもしれない。しかし，どの少年にもゴリアテはいる。そしてどの少年も石投げを持ち，滑らかな石のある小川に近づくことができる。

あなたがたは自分を脅かすゴリアテに出会うであろう。そのゴリアテがならず者であろうと，盗みや破壊の誘惑であろうと，強奪の誘惑，気まぐれな出来心の誘惑，肉欲の罪の誘惑，あるいは教会活動をさぼろうという衝動であろうと，あなたの出会うゴリアテがたとえ何であろうともあなたは彼を殺すことができる。しかしこのことを忘れてはならない。勝利者となるには，ダビデの歩んだ道を歩まねばならないことを。

「ダビデは，すべてそのすることに，てがらを立てた。主が共におられたからである。」（サムエル上18：14）

ダビデは誠実に父の羊を飼った。父からほかの仕事を与えられた時にも，羊の番人なしに放って出掛けはしなかった。

ダビデは信頼された。父から羊を託されて，羊を守るためには，たとえ危険を冒しても熊を殺し，ライオンを殺した。野獣の口から小羊を救い出して親に返してやった。ゴリアテを殺すために5個の石を拾ったが，必要なのはたったひとつであった。彼は立派な少年で，天父を信じていた。そして主に信頼を置いていた間はだれをも恐れることはなかった。あのペリシテ人の巨人をなじってこのように言ったのである。「おまえはつるぎと，やりと，投げやりを持って，よろいをつけ，盾をとる者を連れて，わたしに向かってくるが，わたしは万軍の主の名，すなわち，おまえがいどんだ，イスラエルの軍の神の名によって，おまえに立ち向かう。」（サムエル上17：45）

しばらく前，私は雑誌からある広告を切り抜いた。それにはこう書いてあった。

「いつの日か，私たちはだれでも逆境の冷たい風にさらされる。ある者はそこから逃げ，糸の切れたタコのように地面に落ち，ある者は一歩も譲らず，襲いかかる風は彼を楽々と高く揚げる。私たちはどのような試しに出会うかによってではなく，何を克服するかによって測り見られるのだ。」

そのパイプラインの広告には，「川も山も海もこのパイプラインの作業の手を阻めない。行く手を阻むものがあれば，パイプラインは越え，もぐり，向きを変えて行く」と書かれていた。

この教会の，そして全教会員の心にいつもある思いは，今晩タトル兄弟が話された伝道活動のことである。主は使徒たちに，教会事務局にある美しい絵に見られるように，全世界に出て行ってすべての造られたものに福音を宣べ伝えよと言われた。（マタイ28：19，20参照）あなたがた若人に再び言いたい。あなたがたの責任はその召しにこたえることである。もし監督やステーキ部長会から主の召しを受けたならば，その召しを立派に果たすのはあなたの特権であり，義務でもある。また伝道の目標を掲げたら，世界各地に出て行って福音を宣べ伝えるためにはお金が掛かることを忘れないでいただきたい。今からそのためのお金をため始めるのは，あなたの特権であることも心に留めて欲しい。

プレゼントをもらったりアルバイトをしたりしてお金が入るごとに，伝道のための貯蓄に幾らかを回すことである。少年たちは両親に頼らずに，自分で伝道資金をためたいであろう。バプテスマを受けて聖霊を授

けられた世界各国の少年は，福音を世の人々に証する責任がある。またそれはあなたがたにとって良い機会であり，あなたがたを大きく成長させるであろう。

私はエドガー・A・ゲストの「装備」（*Equipment*）という詩が好きである。

少年よ，自分でそれを解決しなさい
偉人の持てるものは，すべて君にもある2本の腕，2本の手，2本の足，ふたつの目
賢明に使うならば　その頭脳も。
彼らは皆その装備をもって始めたのだ
さあ，頂上目指して行け，そして言うのだ「ぼくにはできる」と。
賢人，偉人，彼らを見よ
ありふれた皿で食事を取り
同じようなナイフとフォークを使い
似たような靴のひもを結ぶ
世は彼らを雄々しく賢いと思う
だが君は，彼らが初めに持ったものをすべて持っているのだ。
君は勝利を得，重要な存在になれる。
その気になれば　偉大な人物になれる。
君が闘おうとするものに　君の装備は充分なのだ
君の足，手，頭脳は使うためのもの
偉業を成し遂げた人も
君と同じに　人生を始めたのだ。
君が出会うべき障壁は君だ
君の境遇を選ぶのは君だ
君はどこへ行きたいのか，それを言わなければならない
真理をどれだけ学ぶかを告げるのだ
神は君に人生の装備をされた。
だが神は君に，何になりたいかを決めさせるのだ。
勇気が内から湧き出なければならない
人は勝利に向って決意を固めなければならない
少年よ，自身でそれを解決しなさい
君は偉人の持てるすべてを持って生まれたのだ
彼らも皆，君と同じ装備をもって始めたのだ
自分をしっかりと見定め，そして言うのだ「ぼくにはできる」と。
（*Collected Verse of Edgar A. Guest*「エドガー・A・ゲスト詩集」シカゴ，レイリー・アンド・リー社，1934年，p. 666）

あなたがたの前途に立ちふさがり，挑戦するもうひとりの巨人ゴリアテのことをお話したい。彼の現代における名はポルノグラフィー，または汚れである。別の詩を読んでみたい。

君が下品な話をする時
仲間にどんな気持ちを与えたか
しばし考えはしないだろうか。
仲間はそれを喜ぶと思うのか。
仲間が笑うから，それで得意になれると君は思うのか。

自分が心の中を
すべてさらけ出しているのを知らないのか
下品な話が君の口から出る時に。
それは君の汚辱を示し
それは君の無学を表わし
まことの楽しみを愛する気高い少年たちを不快にするのだ。

君は何か本物の常識を示しているとでも思っているのか，
心がどれだけ腐っているかを仲間に見せている時に。
父母と友とを辱めていることを君は知っているのか。
考えてみたまえ，少年よ，分かるだろう。

言葉を少し選び
もう少し上品に，
周りの人を尊重すれば，君は勝利者になる。
汚れと堕落と罪に
人生を送ろうとする人々に
はるかに先んじるのだ

この詩を私は少年の時に読んで深い感銘を受けた。これがあなたがたの心を打つようにと願っている。

少年時代アリゾナ州に住んでいたころ，ほとんどの農家がメロン畑を持っていて，できたメロンを売りに出す家もあった。ときどき少年たちが仲間を誘い，夜のやみに乗じてメロン畑に忍び込み，ジャックナイフで手当たり次第にメロンに切り付けた。彼らはメロンを食べたいわけではなく，ただ何かをめちゃくちゃにしたいという醜悪な衝動に駆られたのである。それを，私はどうしても理解できなかった。ものに火を付けたり，窓ガラスを割ったり，敷物を引き裂いたり，荒々しいいたずらを，私はどうしても理解できなかった。

ダビデは，そのようなことをしなかったであろう。彼はライオンを素手で殺したが，それは羊を守るためであった。ゴリアテを殺したが，それはイスラエルを救うためであった。素手で熊を殺したが，これも父の羊を救うためであった。

もしあなたがたが，乱暴ないたずらを企てる仲間の前に居合わせたならば，彼らがそれを思いとどまるように，特に何の価値もなく，人格に傷跡を残すだけの行為をやめるように勧めて欲しいと思う。

モルモンの言葉を覚えておいでであろう。

「この試しの生涯の間賢くせよ。自分の身からあらゆる汚れを払い去れ。情欲を満そうとして願い求めてはならない。むしろ何の誘惑にも負けずに生ける真の神に仕えると言う固い決心をもって願い求めよ。」(モルモン9：28)

ヘンリー・バン・ダイクのこの詩はあなたがたの心に残ることであろう。

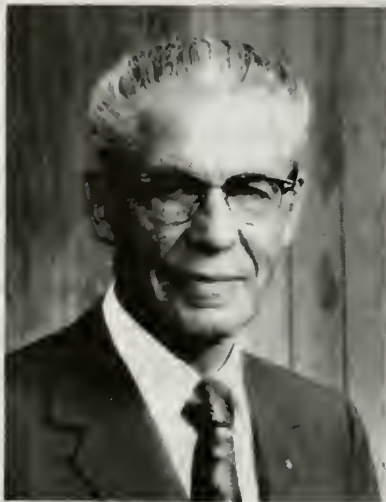
人は己が目を罪でかすませ
天の光明を疑惑で曇らせ
宮に壁を築いてあなたを閉じ込め
鉄の教条を立ててあなたを入れない

(外なる神にむけて)

あなたがた素晴らしい若人は，月並みであってはならない。あなたがたの生活は清く，あらゆる罪の思いや行ないから離れていなければならない。うそや盗みや怒りや不信仰があってはならず，正しいことを行なうのに怠慢であってはならない，性的な罪はどんな時にもどんなことでも犯してはならない。

あなたがたは善悪を知っている。あなたがたは皆，バプテスマの後で聖霊を受けた。思いや行ないのよしあしを人に判断してもらう必要はない。みたまによってそれを知るからである。今，あなたがたは自分の絵を描き，自分の彫像を彫っている。それを立派に仕上げるのは，まさにあなた自身なのである。

神が，愛する若人を祝福されんことを。私は天父があなたがたのまことの友であることを知っている。天父があなたがたに行なうように言われることはすべて義しく，あなたがたを祝福し，雄々しく強くするであろう。「またダビデは，すべてそのすることに，てがらを立てた。主が共におられたからである。」(サムエル上18：14)

神があなたがたを祝福されんことを，イエス・キリストのみ名によりお祈り申し上げる。アーメン。

わが子よ，こよいなぜさまようのか

大管長会第一副管長

N・エルドン・タナー

この麗しい安息日の朝，皆様に話をするに当たり，主のみたまと祝福が終始私たちとともにあらんことをへりくだって祈るものである。

「こよいわがさまよえる息子はいずこに」という歌を，私はよく覚えている。皆様の中にも思い出される方がおありであろう。愛する予言者スペンサー・W・キンボール大管長はよくこの歌を歌われたが，そのしみじみとした歌い振りは多くの人の涙を誘ったものである。その歌詞をここで読んでみたい。

こよいわがさまよえる息子はいずこに
わが心の安らぎ，わが心の憂いありし日はわが喜び，わが光，
われ愛し，祈る息子よ。
かの日は朝露のごと清らかに
母の膝にたわむれし彼
面は輝き，心まことに，
こよなく優しき彼
おお，わが息子こよいいずこ
こよいいずこに
わが心　思いにあふれむ
彼を愛するがゆえ　汝こそ知れ
おお，こよいわが息子はいずこに
(作者不詳)

今朝私はこの言葉を置き換えて，「わが子よ，こよいなぜさまようのか」と，さまようすべての人々に問いたい。

辞典によれば「さまよう」とは，当てや計画や目的なしに行動したり旅行したりすること，流浪し漂泊すること，ふらついたり当てどもなく歩くこと，逸脱した行動や意見をとって迷い出ること，とある。

これらの定義を頭に置いて，「現代はなぜ，かくも多くの人々がさまようのか」という疑問について話したいと思う。

はるかな昔から，人々は地上のあちこちをさまよい，多くの者が迷い込んだ荒野から抜け出す道を見いだせないでいる。「荒野」を辞書で引くと，無人の土地，道のない土地，人跡の絶えた荒廃地などの意味があるが，途方に暮れて当てどもなく人生をさまよう人は，大切なこの世の時期に進歩するために与えられている貴重な時間を浪費しているのである。

だれでも人生のある時期に，行く先に当てがなく幾ばくかの迷いを感じたことがあると思う。ある意味で，それは荒野をさまようことである。その迷いの原因を幾つか考えてみよう。

狡猾な悪人も加えて，サタンとその軍勢は，さまよう人を荒野に引き止め，やがてはその人を滅ぼして主のみ業を阻止しようとする。アダムとイヴは主ではなくサタンの声に従った時，史上はじめての迷える者となった。彼らはエデンの園から放逐され，神の戒めを守るようになるまでさすらいの時期を過ごした。

カインはサタンに従う方を選んだため，弟アベルを殺害する結果となったが，そのカインも放逐されて，罪の荒野をさすらうことになった。多くの人，多くの民が同じ道をたどった例を，聖典の中に読むことができる。ソドムとゴモラは町を救うために必要な義人の数を満たすことができず，住人の悪のために滅ぼされてしまった。ノアの箱舟の話はよく知られている。わずか8人を除いて，世のすべての人々が主の教えと警告に耳を貸さなかったために滅びた話である。

神の戒めは人に人生の安全な道を示し，御父の王国へ連れ帰ってくれるものであるが，それに従うことの大切さを知らず，学びもしないために，荒野をさまよっている人がいる。彼らはペテロが言ったように欺かれ，悟らないでいるのである。

「しかし，民の間に，にせ予言者が起ったことがあるが，それと同じく，あなたがたの間にも，にせ教師が現れるであろう。彼らは，滅びに至らせる異端をひそかに持ち込み，自分たちをあがなって下さった主を否定して，すみやかな滅亡を自分の身に招いている。また，大ぜいの人が彼らの放縦を見習い，そのために，真理の道がそしりを受けるに至るのである。」(IIペテロ2：1，2)

またある者は，仲間の歓心を買おうとして悪いと分かっていながら禁じられた道にさまよい出ている。彼らは非難やあざけりに耐えられず，悪い事に抗しきれないのである。したがってそのような人は，仲間や道を踏み外した大人たちや，サタンが使うような狡猾な方法を世に広めようといつもたくらんでいる邪悪な人々から大きな圧力を受けているのである。

救い主が地上を歩まれた時代にも，そのような迷える人々はいた。ヨハネはこのように記している。

「しかし，役人たちの中にも，イエスを信じた者が多かったが，パリサイ人をはばかって，告白はしなかった。会堂から追い出されるのを恐れていたのである。彼らは神のほまれよりも，人のほまれを好んだからである。」(ヨハネ12：42，43)

彼らは性格の弱さゆえに迷っている。霊は熱していても肉体が弱いからである。(マタイ26：41参照) それらの迷える人々は失意とあくなき欲求の荒野にいる。彼らは律法を知っていても，自分の肉欲と情欲を満たすだけの，はかない喜びを求めて誘惑に屈してしまうのである。

そして，多くの犠牲を伴う偽善の荒野もある。言うことと行なうことの違う偽善者は彼自身がまっすぐな狭い道を踏み外しているだけでなく，世にはびこるそのような不正直，不信を目にする多くの若人や罪のない人々をも道連れにして，人間への信頼を失わせ，行く当てを見失わせているのである。

救い主が律法学者とパリサイ人を偽善者として非難されたマタイ伝23章を，私たちはときどき読み返さなければならない。13節にはこう書かれている。

「偽善な律法学者，パリサイ人たちよ。あなたがたは，わざわいである。あなたがたは，天国を閉ざして人々をはいらせない。自分もはいらないし，はいろうとする人をはいらせもしない。」

また，家や社会の指導者の良くない見本を見て，荒野にさまよい出る人も多い。最も頻繁に見られるのが，この悪い見本である。ポルノグラフィー，婚前交渉，不貞，同性愛などは現代の世の中で容認され，私たちはまさにソドムとゴモラの二の舞を演じつつある。世の中はあまりに腐敗している。私たちには，人格を備えた強力な指導者が各地に必要である。清廉，高潔で信頼に足る模範的な指導者が。

啓示によって与えられた知恵の言葉に違反すれば，多くの者は禁断の悲しむべき道に迷い出てしまう。罪は罪を呼び，さらにスリルと興奮を求めて，ついには破滅に至る。私たちは皆，アルコールやタバコや幻覚剤の悪影響を承知しているというのに，なぜ多くの人が道を踏み外すのだろうか。

若者がイエス・キリストの福音の原則から迷い出るのは，家庭内での両親のふさわしからぬ見本が大きな原因である。家の中でアルコールやタバコを口にすることは，子供たちにも同じことを，さらには様々な麻薬にふけることをも許可するようなものである。そして子供たちは家を捨て，リュックを背にしたヒッチハイカーのように，目的も，これといった行先もなく，真理と正義のまっすぐな狭い道をそれてさまよい歩くという結果に至る例が非常に多いのである。彼らはもはや自由ではない。自由を求めると言いながら実は悪癖の奴隷となっており，その荒野を脱け出して光と愛の中へもどることを切実に求めているのだが，それはもはや至難の業となっている。

不道徳が世にはびこっているが，主はそれを非難された。不道徳は荒野に迷い出る一番確実な道である。主は言っておられる。「あなたは姦淫してはならない。」(出エジプト20：14) 悲嘆と憂いの重荷を背負うのは，この罪やその他の罪であっても，罪を犯す本人だけにとどまることはない。その罪は犠牲者を生み出し，多くの人々に影響を与え，悲嘆と憂いというひどい重荷を背負わせるのである。

先日私は新聞でひとつの記事を読んだ。そこには，長い間心痛を負いながら，さまよう息子を気遣い，待ちわび，息子のために祈ったであろう母親の憂いと苦悩がにじみ出ていた。

「凶器を所持した婦女暴行容疑の16歳の少年が警官に射殺されたが，警察当局の語るところによると，その少年の母親は当局に謝意を表したとのことである。

少年は木曜日，38口径のピストルを警官に向けて発射しようとしたため……射殺された。

母親は……そのあと『息子を処置して下さってありがとうございます。もう息子のことで苦しまなくて済みます』と語った。」(*Deseret News*「デゼレト・ニューズ」1974年7月26日)

確かに，死よりも悪いことはある。自己満足に陥り，傲慢な態度で，何でも自分独りでできると考えてさま

よう人々がいる。彼らは自分と神との関係も，自分が神の恵みに依存していることにも気付かない。聖典は私たちにこう忠告しているのである。

「心をつくして主に信頼せよ，自分の知識にたよってはならない。

すべての道で主を認めよ，そうすれば，主はあなたの道をまっすぐにされる。」(箴言3：5，6)

迷う者の中でおそらく一番多いのは，自己を統御するということに対して，決心もできず，希望も持てない者であろう。彼らの荒野は暗くて実にわびしい。彼らは己の主人となるまでに，幾度も幾度もつまずいては倒れる。

ダビンチがある時このように言った。「あなたは，あなた以上に偉大な人間を支配することはないし，あなたよりもつまらない人間を支配することもない。人の成功の高さは克己によって，人の失敗の深さは放逸によって測られる。……この法則は永遠の正義の表われである。」

ソロモンの言葉を引用すると，「自分の心を治める者は城を攻め取る者にまさる。」(箴言16：32)

キリストはこのことを，次のような言葉で教えられた。これはおそらく，道を踏み誤らないための最良の方法であろう。

「狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きく，その道は広い。そして，そこからはいって行く者が多い。命にいたる門は狭く，その道は細い。そして，それを見いだす者が少ない。」

この言葉は真実である。まっすぐな細い道を歩み，わき道が非常に危険なことを承知している者は，人生に成功を収め，進歩と達成を得る人々である。道を外れて遠回りをする者は，失敗と破滅への道の途上にあることを知るであろう。

最近耳にした話を，ふたつ御紹介したい。ひとりは富も地位もある家庭に育ったひとりの青年の話である。彼は聡明で学業成績も良く，工学技術にたけていて，将来の職業も生活も保証されていた。ところがいつしか，彼は現代のいわゆる自由思想の持ち主の例に漏れず「自分の好きなことを好きなままに行なう」友だちを選んでいた。

前途の危険を忠告されても，彼は禁じられた道を歩み続け，アルコールや麻薬を経験し，放蕩生活を送った。そしてついには家族を捨て，国中を放浪しながら，遊民ともいうべき放浪者たちの仲間に加わったのである。だれに対しても責任がなく，行くも来るも思いのままで，何の義務も持たず，見たところ望む通りののんきな生活をしているようであった。

しかし，まっすぐな細い道からそれた人の話は，かならずと言ってよいほど悲しい結末になる。先程の青年の人生も悲劇に終わった。彼は麻薬とアルコールに酔って霧の夜更けに仲間とオートバイを飛ばし，橋の欄干に激突して死んだのである。友だちと遊び半分の協定でも結んでいたのであろう。彼らは青年の親にも知らせず火葬にし，事故の現場にその灰をまき散らしたという。

遺体をきちんと埋葬したいと願うことさえかなわなかった両親や愛する人々の嘆きを，想像してみていただきたい。みずから選んで放浪し，自分でも分からないものを求めて放浪し，人生を浪費する若者，その若者が後に残した大勢の親兄弟の，毎日の悲痛を考えてもみていただきたい。

先日の晩に見たテレビ映画の中で，父親が娘に，身を滅ぼす悪の道に誘う仲間から離れ，家にもどってきて欲しいと訴えていた。その娘は連れもどそうとする父親を振り切って「私には自分で人生を選ぶ権利がある」と言うと，父親はそれに答えて「おまえは自分だけでなく家族のみんなも苦しめているんだよ」と言った。

キリストは私たちを罪から救うために苦しみを受けられ，ひとたび死なれたが，私たちがこの世にあっても，来るべき世にあっても幸福になるようにと与えられたその教えと計画を拒んだ時には，再び苦しまれるに違いない。なぜならキリストは，私たちを深く愛しておられるからである。破滅に至る道を説くサタンに従うのではなく，キリストの道を選ぶというだけの条件で，神が無限の富を約束されたということを私たちが理解できないのはどうしてなのだろうか。

もうひとつお話したいのは，今の話と似たような状況の別の放蕩息子の例である。彼も仲間に誘われ，彼らの言う「体制」の束縛からの自由を求めて家庭を捨てた。そしてやはり例に漏れず，アルコールやタバコや麻薬を経験し，不道徳に走った。

しかし違うのはその結末である。彼の胸の奥深くにあった何かが，家族との接触を保たせていた。何かが少年時代に受けた教えを思い起こさせ，家族と会った時に，やむにやまれぬ家族の心情と愛をぶつけられて，彼はついに不承不承家族の集まりに出ることを承知した。家に立ち寄ったある時に，その集まりが持たれたのである。ひげは伸び放題，長髪はもじゃもじゃの風体で，彼はその席に出た。

家族は非難したい気持ちはあったが，彼を歓迎し，愛を示した。青年は家族の深い愛情を感じて，それが仲間の表面的な友情に勝っていることを知った。そしてその後家族とともに教会へ行き，そこで自分に関心を示してくれる優しい少女に会った。彼は間もなく風呂に入ってひげをそ

り，身なりを整えて本来あるべき生活にもどった。

禁断の道へ迷い込まないようにするということは，すなわち親を敬うことであり，神を尊ぶ秩序正しい社会の標準に従うということである。概して，私たちは見たり話したりする通りに行動するものである。清潔な品位ある団体に属したいならば，私たちはその団体の規則や標準を受け入れなければならない。

神の律法に従えば祝福と幸福がもたらされる一方，真理と正義の道からさまよい出るすべての者には，どのみち罰と悔恨がやって来る。それは実に人はまくものを，刈り取るからである。(ガラテヤ6：7参照)

私たちは子供や愛する人たちが禁断の道に迷い込むのを手をこまぬいて見ているのではなく，その前に，禁断の道に心を引かれたり，誘われることのないように，逆に言えば，義の道を選ばずにはおられないというようにしなければならない。これは非常に大切なことである。私たちはそれを，愛と言葉と模範によって行なうのである。

戒めを知って，理解し，守り，イエス・キリストの福音の教えを学んで，それに従うならば，私たちは悲しい孤独な荒野にさまようことなく，まっすぐな狭い道を歩み続けるであろう。私たちには栄えある約束が与えられている。

「およそこれらの言葉を憶えて守り且つ行い，この誡命に従って歩むすべての聖徒らは，そのへそに健康を受けその骨に髄を受けん。また智恵と知識の大いなる宝まことに秘れたる宝を見出さん。而して走れども疲れず，歩けども気を失うことなからん。主なるわれ彼らに一つの約束を与う。すなわち，さつりくの天使はイスラエルの小児たちが如く，彼らを過ぎ越して屠ることなかるべし。」(教義と聖約89：18―21)

道なき荒野から抜けいで，道がまっすぐに永遠の生命へと続く花咲く太陽の園へ行こうと模索しているさまよう人々に心から申し上げる，光と知識の源により頼みなさい。神と御子イエス・キリストに目を向け，御二方について学びその戒めに従いなさい。御二方は生きておられる。そのみ言葉は真実で，幸福と永遠の生命への道は御二方による以外にないと，証申し上げる。

また私は厳粛に証したい。イエス・キリストは現在まったき福音を持ち，神の予言者を頭に備えたキリストの教会を再びこの地上に立てられた。それによって私たちは荒野を出て，光の中へ進む道を歩むことができる。私たちは地のあらゆる人々に，研究をし，他の人々とともに永遠の生命をもたらすキリストの教会に加わるようにお勧めする。これらのことをへりくだり，イエス・キリストのみ名により祈る次第である。アーメン。

多く与えられる者は多く求められる

十二使徒評議員会会員

ボイド・K・パッカー

私はきょう，福音を分かち合うという私たちの責任について，まだ主の教会の会員となっていない方々にお伝えすると同時に，教会員の方々にはそれを思い起こしていただきたいと思っている。

3週間前，私がニューヨークの空港でヨーロッパ行きの飛行機を待っていた時のことである。航空会社の従業員が席を立ち，座っている私の所につかつかと歩み寄って来て言った。

「私の甥がふたり，あなたの教会に入っているんですけど，教会に入ってからのふたりの生活の変わりようといったら私にはとても信じられないほどです。」ほんのつかの間の会話であったが，私は，甥子さんが教会に入ったことについてその母親である彼女のお姉さんがどう思っておられるか尋ねてみた。

「姉は大変な喜びようでした。」そう言うと，彼女は家族がふたりの息子のことをどんなに心配していたか話してくれた。それは彼らが，タナー副管長が語ったような迷える者であったからである。「ふたりがどんなに変わったか信じられないほどですわ。長い髪をばっさり切って，まるで人が変わったようです。」彼女はそう付け加えた。

それから，私が搭乗しようと席を立った時にも，彼女はもう一度私に感謝して「皆さんがどうしてそのように変わられるのか分かりませんわ」と言った。

彼女の疑問に答える意味で，私たちがなぜ高い標準を維持するかということについて一言説明させていただきたい。それは福音の原則がいかりとなり避け所となるからである。プログラムや手段，方法が変更されることはあっても，標準が変えられることはない。それだからこそ私たちは導かれ守られているのである。

私たちは人々に福音を分かち合おうと絶えず努力を重ねてはいるが，人々の好みに合うように福音を変えることはできない。標準は私たちが定めたのではない。主が設けられたものであり，この教会は主の教会なのである。

まだ主の教会に入っていない方々にお願いしたいことがある。もしみずから持っているものを分かち合いたいという私たちの願いの熱心の度が過ぎると感じられているようであれば，容赦していただきたい。福音を分かち合わないと，福音を失ってしまうことになるからである。それは福音の命ずるところを行なおうとするなら，どうしても欠くことのできない条件だからである。したがって伝道の業は思い付きによるものではなく，揺るがぬ決意の下に行なわれているものなのである。

あなた方は現在世界中で1万8千人以上の宣教師が全時間を伝道に捧げていることを御存じのことと思うが，その内21歳以上の者はごくわずかで全体の5パーセントに満たない。

これは伝道が活気に満ちた，また若人に強く訴え掛けるというふたつの面を持っていることを物語っている。若人にとって心躍る青春の日々の2年間を捧げ，自費で福音を宣べ伝えるということは並々ならぬ信念を要することである。

また，彼らが伝道の業を成し遂げても別に不思議ではない。なぜなら，彼らは真理を教えているからである。この教会は主の教会だからである。主は御みずから宣言して「全地の面に於ける唯一の真にして生命ある教会」（教義と聖約1：30）と言われた。

しかしながら，私たちの懸命な伝道にもかかわらず，この教会に入るのは容易なことではない。世間一般の人にとっては，ほとんど全面的な生活の転換が求められるからである。

教会に加わろうと加わるまいと，あらゆる転換は生活の著しい進歩を意味するのだが，それでもある人にとってはこれが大きなチャレンジとなる。

例えば，教会に入るためにはあらゆる不品行を捨て去らなければならない。また夫は妻に，妻は夫に貞節を尽くすという誓約のもとに置かれる。また若人は生命の源となる聖なる力を結婚の時まで抑制するよう求められる。

信頼できる家族関係は教会の大きな理想である。

自制心が必要とされる。教会員はいついかなる時にあってもアルコール性飲料は一切飲用しない。タバコについてもまったく同じことが言える。たとえ沢山の量でなくとも，習慣性のある茶やコーヒーなどの刺激性飲料を用いてはならない。このことから当然，睡眠薬に対する私たちの在り方も理解していただけると思う。これらは言うまでもなく明らかなことである。

ほかにも改めるべき点は多々ある。例えば，謙遜であり，正直であり，敬虔であり，安息日を守ることなど，これらはすべて私たち一人一人を立派な人間にしてくれる。

再び申し述べたい。活発な伝道活動にもかかわらず，この教会の会員となる資格を得るのは決して容易なことではないし，いったん入ったとしても決して安易な道ではないのである。もっとも，安楽な教会を求めており，それがあなたにとって重要だとしたら，この教会はそのようなものではない。

数年前，ある伝道部を管理していた時のこと，ふたりの宣教師が素晴らしい家族を教えていた。すでにその家族はバプテスマを受けたいという希望を述べていたが，ところが突然その気持を失ってしまった。什分の一についてのレッスンを受けてから，父親はそれ以後の宣教師との集会を全部取り消してしまったのである。

がっかりしたふたりの長老は，支部長（彼は改宗してまだ日が浅かった）にそのことを報告し，この素晴らしい家族を支部に迎えられなくなったと告げた。

数日後，支部長は長老たちに話して，その家族を今度訪問する時に自分も同行させてくれるように頼んだ。

「教会には入らないことになさったそうですね。」支部長は父親に話し掛けた。

「その通りです。」

「長老たちから，あなたが什分の一のことで迷っていらっしゃるということを聞きました。」

「ええ，そうなんです。それまで宣教師の方は什分の一のことについて話して下さいませんでした。それでそのことを知った時に『什分の一なんてあまりにも多くのものを要求し過ぎます。今まで教会では一度だってそのようなことを求められたことはありません』と言いました。私たちにはあまりにも多過ぎます。ですから，教会には入れないんです。」

「断食献金についてはお聞きになりましたか？」支部長は尋ねた。

「いいえ。それは何ですか？」

「私たちの教会では毎月２食，食事を断ってその食事に相当する金額を貧しい人のために差し出すのです。」

「そういうことについて宣教師の方は教えてくださいませんでした。」

「では，建築資金についてはお話ししたでしょうか？」

「いいえ。それは何ですか？」

「教会ではみんなで助け合って礼拝堂を建てます。ですから，もしあなたも教会にお入りになっていれば，金銭，労働両方の面でそれに参加したいと思われるでしょう。ついでながら申し上げますと，今私たちは新しい礼拝堂を建築中なんですよ。」

「はじめて伺いました。でも宣教師の方はお話しになりませんでしたよ。」

「福祉プログラムについては説明しましたでしょうか？」

「いいえ。どういうことですか，それは？」

「そうですね。私たちはお互いに助け合う必要があると考えています。もしだれか経済的に苦しい人や病気の人，失業している人，困っている人がいれば，私たちはいつでも援助の手を差し伸べることができるのです。教会にお入りになれば，あなたにも援助していただくことになると思いますが。

また，私たちの教会には専門の聖職者がいないということについてはお話したでしょうか？　私たちは皆，それぞれの時間と才能と金銭，すべてを捧げて奉仕します。しかし，それに対して金銭的な報酬は一切受けないのです。」

「そういうことははじめて伺いました。」父親は言った。

「そうですか。」支部長は続けた。

「什分の一のようなほんの小さなことで心が変わるようであれば，はっきり言って，あなたはまだこの教会に入る準備ができていません。あなたの判断は正しかったと思います。まだお入りにならない方がよいでしょう。」

支部長は宣教師とともにその父親のもとを辞したが，後からひとつのことを思い付き，すぐさま引き返して言った。

「あなたは人々がなぜこういったことを皆喜んで行なうのか不思議に思ったことはありませんか？　私はこれまで什分の一のことで請求書を受け取ったことは一度もありませんし，

だれかが呼び掛けて集めるのでもありません。でも私たちは什分の一を納めるのです――それにその他のものも全部。――そうすることは大きな特権であると考えているのです。

その理由がなぜかお分かりになれば，あなたは主が言われた商人のように，行って持ち物を皆売り払い，高価な真珠を買うことでしょう。」

「しかし」支部長は言った。「それはあなたがお決めになることです。私はただ，あなたがそのことについてお祈りしてみて下さればと思います。」

数日後，その人は支部長の家を訪れた。無論，宣教師との約束を再び取り付けに来たのではなかった。それはもう必要なかった。彼は家族のバプテスマの日を決めに来たのだった。その家族は祈っていた。ひたすら熱心に祈りを捧げていたのである。

こういう出来事は，高い標準に心を引き付けられる個人，あるいは家族の中に毎日起こっている。彼らはそれを拒まないのである。

私たちは，この地上において最も偉大なものをみずから守るという責任がある。それは何かと問われれば，もちろん，主の戒めをすべての面において守ろうとすることである。こうした高い標準から来ることで，実際問題としてただひとつ困るのは，教会が急速に発展し，しかもとどまることを知らないということである。そのため私たちは絶えず気を配り，教会の組織が一人一人の益となるように，そのユニットを小規模で効率の良い状態に保つよう心掛けてきた。

標準を守ることに困難を覚えている教会員でさえ（実際にこのような会員がいるのだが），それらの標準を擁護しようとするのである。教会に入った人が速やかにこの世的なものと縁を切るためには，古い会員も新しい会員と同様にフェローシップを受け，訓練される必要がある。

「天国は，良い真珠を捜している商人のようなものである。

高価な真珠一個を見いだすと，行って持ち物をみな売りはらい，そしてこれを買うのである。」（マタイ13：45，46）

さて，あなた方の中で，世のものを断念したりそれまでの習慣を変えるといったことを必要以上に難しいことであると考えることのないように，私は英国初の女性下院議員となったナンシー・L・アスター女史の言葉を借りて再度申し上げたいと思う。

彼女は老いるということを非常に恐れていた。しかし，みずからも老境に至って，人生を達観し次のように述べた。「私はいつも年を取るのを恐ろしく思っていました。なぜって，年を取ってしまうと自分のしたいことが何もできなくなるからです。しかしそれも，自分でしたくないと思っていることなら，そう気に病むこともありません。」

私は，まだ教会に入っていない方々に申し上げたい。皆さんは絶対に福音を受け入れなければならないということはないが，私たちは皆さんに福音を勧めなければならないと。これまで皆さんに福音を受け入れる機会を提供してきたこと，そこに皆さんにとっても私たちにとっても非常に重要な意味を持つ何かがあるのである。福音はそれを拒む者にも受け入れる者にも真実であり，どちらも福音による裁きを受けるのである。

さて，ここで教会員の方々に，福音を分かち合うという義務について思い起こしていただくため，教会歴史の中からひとつの話を取り上げてみよう。

1850年代も後半，ヨーロッパから渡って来た多くの改宗者は，苦闘を重ねながらグレートソルトレークの盆地目指して進んでいた。彼らの多くは非常に貧しく，牛や馬に引かせる大きな車を買う余裕がなかったので，わずかばかりの家財を手車に積み，それを引いて歩かなければならなかった。これら手車を引いた開拓者たちは，教会歴史の中でも最も痛ましく悲惨な出来事を経験したのであった。

そのような中にマッカーサー兄弟の率いる一隊があった。同行していた英国の改宗者アーチャー・ウォルターズは，1856年7月2日，日記に次のように記している。

「パーカー兄弟の6歳になる坊やが迷子になった。それでパーカー兄弟は息子を捜しに引き返した。」（ルロイ・R・ヘイフェン，アン・W・ヘイフェン共著，*Handcarts to Zion*「手車でシオンへ」p. 61）

アーサーは，ロバートとアン・パーカーの間に生まれた4人の子供の内，下から2番目であった。3日前，一行は突然の雷雨の中であわただしくテントを張った。アーサーの姿が見えなくなったのはその時だった。両親は，彼がほかの子供たちと一緒に遊んでいるものとばかり思い込んでいたのである。

その日の早い時間に，一行が足を休めた時，小さな男の子がやぶの陰に腰を下ろして休んでいるのを見たという者が現われた。

さて皆さんの多くは小さな子供をお持ちのことと思うが，疲れ切った6歳ほどの子供が焼け付くような夏の日にどんなに早く寝付いてしまうか，またどんなにぐっすり寝入ってしまうか，よく御存じのことと思う。キャンプが移動するくらいの音では目も覚めないのである。

2日間，一行はそこに止まり，兄弟たちは全員アーサーを捜索した。そして7月2日，ほかに取るべき手段もなく，一行は西へ向かうよう命

じられた。

日記によると，ロバート・パーカーは再び幼い息子を捜してひとり引き返した。彼がキャンプを立つ時，その妻は鮮やかな色の肩掛けを夫の肩に掛けてピンで止めながら，次のように言った。

「もしアーサーが死んでいたらこの肩掛けを掛けて葬ってあげて下さい。そしてもし生きていたら，これを旗にして合図して下さい。」

彼女はほかの幼い子供たちを連れて手車を引きながら，懸命に隊について進んだ。

毎夜，アンは道に出ては合図を待った。7月5日，夕暮れ近く，彼らが見ていると，東の方から人がやって来るのが見えた。間もなく，沈む夕日に照らされて，鮮やかな真紅の肩掛けがかすかにアンの目に入った。

ある日記には次のように記されている。「アン・パーカーは哀れにも，砂の上にへなへなと座り込んでしまった。そしてその夜，彼女は6日振りにぐっすりと眠ることができた。」

7月5日，ウォルターズ兄弟はこう記している。

「パーカー兄弟が迷子になっていた息子を連れてキャンプに到着すると，キャンプ中が大きな喜びに包まれた。母親の喜びは表わしようのないものであった。」（ヘイフェン著「手車でシオンへ」p. 61）

私たちは詳細をすべて知っているわけではない。名も知れぬ森の住人が――どうしてそのような人がそこにいたのか思いも寄らず，何度も首をかしげたが――その幼い男の子を見つけ，病いと恐怖で参っているその子を父親が見付け出すまで世話をしていたのであった。

その当時としては，ごくありふれたこの話はここで幕となるのだが，私たちにひとつのことを問い掛けている。もしあなたがアン・パーカーの立場にいたとしたら，幼いわが子を救ってくれた名も知れぬ森の住人にどのような思いを抱くであろうか。尽きせぬ感謝の念ではないだろうか。

この思いを理解すること，それは御父がその子らのひとりを救おうとする私たちに寄せてくださる感謝の気持ちを幾分なりとも感じ取ることである。その感謝の念こそ私たちが力を尽くして目指すべき目標である。なぜなら，主はこのように言っておられるからである。「而して汝らもし生涯今の世の人々に向いて悔改めを叫ぶことに力を尽し，唯一人の人たりともわれに導かば，わが御父の国に於て彼と共に汝らの悦び如何ばかりぞや。」（教義と聖約18：15）それもさることながら，その「唯一人の人」が私たち自身であったなら，と私は付け加えたい。

それゆえ，私たちは万人に向かって来れと訴えるのである。私たちがあなた方をこの世から呼び集めるのは，得ることのできるものがあるからではない。それよりも与えることの方が多いからである。あなた方はこの教会で必要とされている。できるならば家族ぐるみで，またそうせざるを得ないと言うのであれば，ひとりでお入りになっていただきたい。

この教会には御父があなた方に与えることのできるすべてのものがある。しかし代価を払わずして受けることはできない。「多く与えられた者からは多く求められ」（ルカ12：48）るからである。

この教会は主の教会であり，あなたがそこに属することに対してすべての人が好意的である，ということはない。多くの人，否，ほとんどの人は，あなたを変わり者と見るであろう。教義によっては理解し，受け入れるのに容易でないものもある。戒めを守ることはたやすいことではない。繰り返すが，その標準は高いものである。しかし，あなたの今いる所から始めることができるのである。

あなた方の中には不幸や心配事，罪のために苦しみの重荷を背負っている方が多くいるであろう。また品位を落とすような習慣に捕らわれて苦闘している人，孤独，失望，挫折と戦っている人も数多くいると思う。また中には，家庭の不和や結婚生活の破綻，失恋などで苦しんでいる方もいよう。

私たちはこれらのことでつまずきはしない。それらはすべて退け得る，すなわち克服できるのである。あなたがだれであろうと，またどのような状態にいようと，私たちは友情の手を差し伸べよう。そうすれば私たちは相互に高め合い，他の人々を高めることができるのである。

この教会は主の教会である。私はイエスがキリストであり，現在も生きておられるという証を持っている。一般にイエスは単なるひとりの力ある人と教えられている。私はその御方がイエス・キリストであり，神の御子，御父の生みたもうた独り子であることを知っている。またイエスが骨肉の体を有しておられることを証する。まさしくこの教会は主の教会である。イエス・キリストのみ名により証申し上げる。アーメン。

神を知る

十二使徒評議員会会員

ハワード・W・ハンター

私たちは再び教会の総大会にともに集うシーズンを迎えた。かつて荒涼たる未開の地であったこの西部の山あいに，初期の開拓者たちが築いた，長い歴史をもつ壮大なタバナクル。私たちはそのタバナクルで現在こうして大会を開いている。この大会には世界各地の数多くの国々から聖徒たちが集まっている。この大聴衆を前にしたながめは，まことに素晴らしいものである。ある人々はヘッドホンを付け，自国の言葉で大会の話を聞いている。私たちは英語で話しているが，異なった言葉を話す人々のために同時通訳され相互理解が保たれている。

数年前までこのように多くの，異なった言葉を話す人々の集まりで，同時にコミュニケーションを図ることは不可能であった。また，世界中の遠隔の地からこの地まで旅をするのに，現在のような短時間で来ることも考えられないことであった。このような近代設備の開発と科学の進歩には驚くばかりである。人類は目的達成を目指して，前の時代には未知の分野に手を広げ，地の諸元素と自然の力を征服する道を一歩一歩前進しているのである。

科学の加速度的な進歩に伴って，現代社会では数々の発明がなされ，それが広く一般生活に活用されるようになっている。科学の進歩には驚嘆するばかりである。しかし私たちは，これが自然の法則，すなわち神の律法を応用した結果であることを知っている。数多くの現代科学の進歩は，まさに奇跡と驚異であり，新旧約聖書中の多くの奇跡を凌駕するものである。最初は奇跡のように驚異の眼で見ていたものも，やがて日常生活に溶け込むと，当然のことのようになってしまう。

人類の知識は急激に増加し，科学の探究は歴史上かつてないほどの速さで進んできた。これは実業界，政府，教育機関が努力を傾注した結果である。世界の富と収益の大部分がこの研究につぎ込まれ，全世界の数限りない人々が時間と労力を費やし，研究を続け，科学の知識と理解をさらに伸ばそうと励んでいる。人類がいつの時代にあっても，宇宙の法則の知識を追い求めてきたことは周知の通りであるが，この追求は今や新しい段階を迎えつつある。そして真理を求める研究はますますその範囲を拡大しているのである。

科学は現代の世界において，人類に安楽さと快適さとを与える驚嘆すべき事物を提供し，かつてないほど生活水準を高めている。生活必需品から高価なものまですべてのものが手に入るようになった。だからといって，神や宗教の教え，イエス・キリストの福音から離れていってよいだろうか。知識が増すにつれ，人々は科学的に証明された原則に信頼を置くようになった。その結果，神の存在が科学的に立証されないということで，神を信じない者が出てきた。実際は，科学的な探究は真理を究めるひとつの試みであり，同じ原則が宗教の真理を立証する探究にも用いられている。

イエスは山上に集った群衆に次のように言っておられる。

「求めよ，そうすれば，与えられるであろう。捜せ，そうすれば，見いだすであろう。門をたたけ，そうすれば，あけてもらえるであろう。

すべて求める者は得，捜す者は見いだし，門をたたく者はあけてもらえるからである。」（マタイ7：7，8）

この言葉は，断固たる決意の下に，また熱心に真理を探究するようにとのひとつの訓戒であるように思える。これは科学におけると同じように，宗教についてもいえる。いずれの場

合も過程は同じである。必要な資料を調べ，誤りが立証されたものを捨て，明らかになった正しいもののみを残す。この探究に生涯を懸けなければならないこともある。

科学の探究も大切だが最大の探究は神を求めることである。すなわち，個性をもった神が存在していることを確認し，御子イエス・キリストの福音を知ること，これは大切な探究である。神について完全に理解することは容易でない。しかし，この探求には不断の努力が要求される。そのために，この知識の追求に腰を上げようとしない人々がいる。彼らは骨折り，努力することをいとい，まったく逆の，努力も要さず，神の存在を否定する道を取ろうとする。そのことをある著述家は次のように述べている。

「沢山の音楽家がいる。しかし，私たちのほとんどは音楽家ではない。音楽の才を欠いている者もいる。しかし大部分の者は音楽に対する興味を欠いているのである。またたとえ音楽の才を持つ者でも，長年にわたる不断の努力なしに偉大な音楽家には成り得ない。偉大な演奏家といわれる人は，国際的な名声を勝ち得た後でも，長時間の練習を続ける。……たゆみない練習と，長時間に及ぶ厳しい鍛錬がなければ，いかなる者も，抜きんでた運動選手，技術のたけた機械工，熟達した医師，偉大な演説家，高名な弁護士になることはできない。……目を閉じ，耳をふさいだ状態で，自分には音楽家になる才能がないので，音楽家になる者は存在しないと言うことは何とばかげていることだろう。自分は発明家になれないので，エジソンのような発明家は存在しない。また自分には画家になる才能も興味もないので画家になる者は存在しないということも，これと同じである。自分が神を見たことがない，という理由だけで神は存在しないと断言するようなことも同様に愚かなこととは言えないだろうか。理性的に判断してそうは言えないだろうか。

「神の存在を知ろうと努力しない者は，この世においておそらく神が存在していることを，知ることはないだろう。しかし彼が無知であるがゆえに，神の存在を否定したとしても，決して正しいとはされないのである。」（ジョセフ・F・メリル，*The Truth Seeker and Mormonism*「真理の探究者とモルモニズム」pp. 76—77）

科学の真理に関する知識を求める時にも，神を見いだそうとする時にもともに信仰が必要である。これが起点である。これまで信仰は様々に定義されてきた。その中で最も典型的なものはヘブル人への手紙の著者による定義である。それは次のような意味深い言葉で語られている。

「さて，信仰とは，望んでいる事がらを確信し，まだ見ていない事実を確認することである。」（ヘブル11：1）　科学者は分子や原子や電子を直接には目にしないが，それらが存在していることは知っている。また，電気や放射線や磁気も目に見えないが，これらが存在していることも知っている。同じように，神を熱心に求める者は，神を直接に見なくても，信仰によって神の存在を理解している。これは希望以上のものである。信仰は確信，すなわちまだ見ていない事実を確認することである。

ヘブル人への手紙の筆者は続けている。「信仰によって，わたしたちは，この世界が神の言葉で造られたのであり，したがって，見えるものは現われているものから出てきたのでないことを，悟るのである。」（ヘブル11：3）　ここで信仰とは，世界が神の言葉によって造られたことを信じること，すなわちその確信を持つことであると述べられている。この事実に対しては証人を立てることはできない。しかし信仰は，私たちが地球やすべての自然界の驚嘆すべき事柄の中に見ているものが神によって創造されたものであると教えている。まだ見ぬ神の存在，文字通りの復活，霊にかかわる奇跡，これらを信じることは，科学の分野における発見を信じるのと同じく道理にかなっている。信仰は宗教の領域においても，科学の領域においても，ともに第一に大切なものなのである。

キリストはこの世で導きと恵みを施しておられた時，神に関する真理を知るにはどうしたらよいかについて，次のように説かれた。「神のみこころを行おうと思う者であれば，だれでもわたしの語っているこの教が神からのものか，それとも，わたし自身から出たものか，わかるであろう。」（ヨハネ7：17）　主はまた，御父のみこころと，大切な戒めとについて次のように語っておられる。「心をつくし，精神をつくし，思いをつくして，主なるあなたの神を愛せよ。」（マタイ22：37）　神のみこころを行ない，神の戒めを守ろうと努める者は，御父を証するという主のみ業が神聖なものであることを，個人的に与えられる啓示によって悟ることであろう。

ヤコブは知識を得たいと望む人に，どうしたらそれが与えられるかを説明している。「あなたがたのうち，知恵に不足している者があれば，その人は，とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に，願い求めるがよい。そうすれば，与えられるであろう。」（ヤコブ1：5）　ヤコブのこの言葉は，科学的な意味での事実に基く知識について語ったものではないと思う。これは天から下される啓示について語ったものである。この

啓示は，人が次のような訓戒に従った時に，その祈りの結果として与えられる答えである。

主の次の言葉をよく聞いていただきたい。

「主かくの如く言う。主なるわれはわれを畏るる者に恩恵と憐みとを与え，終りまで義しく且つ真実にわれに仕うるものに誉を与うるを喜ぶ者なり。」続いて，終わりまで義しくかつ心から主に仕える者に次のような約束が与えられている。

「彼らの得る報いは大きく，その栄は永遠なるべし。われは彼らにすべての奥義，すなわち昔より今に至り，またこれより永き未来にわたるわが王国のあらゆるかくれたる奥義を知らしめ，わが王国に就けるすべてに関するわが旨を知らしめん。

誠に永遠の驚異をも彼らは知らん。またやがて起るべきこともわれ彼らに示さん。すなわち多くの代のことを彼らに示すべし。

而して，彼らの知恵は大いなるものとなりてその覚(さと)りは天に届かん。彼らの前にはすべて賢き者の知恵も滅し，慎み深き者の覚りも物の数ならず。

そはわが『みたま』によりて彼らの覚りを開き，わが能力によりてわが意の秘密を彼らに知らしむればなり。すなわち，誠に人の眼いまだ見ず，人の耳いまだ聞かず，人の心にいまだ入らざるものをも知らしむと。」(教義と聖約76：5—10)

このように私たちには，神を求める際の定則と，その探求を成し遂げるための手段が与えられている。信仰，愛，祈りがそれである。科学は確かに人類のために驚くべきことをなしている。しかし人が独力で行なわなければならない事柄，すなわち神の実在を知るという最も大切な事柄にまで，科学が介入することはできない。その仕事は決して安易なものではなく，苦労も多い。けれども主が述べておられるように，「彼らの得る報いは大きく，その栄は永遠」なのである。(教義と聖約76：6)

私には，神が実在のお方であり，現在生きておられるという強い確信がある。神は私たちの天の父であり，私たちはその霊の子供である。神は天地を，そして地上にある万物を創造された。また神は，宇宙を支配する永遠の法則を定められたお方でもある。人は探求を続けることによって，少しずつこれらの法則を見いだしてゆくのである。これらの法則はこれまで常に存在してきたし，今後も永遠に変わることなく存続するであろう。私はイエスがキリストであり，生ける神の御子であり，救い主であることを証申し上げる。イエスは，贖いの犠牲を捧げて，全人類に永遠の生命を与える道を備えられた贖い主である。願わくば主の祝福があって，私たちが霊性をさらに高め，神を知り，神を見いだし，神に仕えてその戒めを守ろうと決意できるように。またその望みを抱くことができるように。これらのことをイエス・キリストのみ名によってへりくだり祈るものである。アーメン。

山の上にある町

十二使徒評議員会会員

ゴードン・B・ヒンクレー

兄弟姉妹の皆さん，聖霊の導きがあり，私の語る事柄を通して皆さんの信仰を増すことができればと願っている。最近私はひとつの素晴らしい経験をした。1週間のほとんどを他の人とともにワシントン神殿の入口に立ち，特別な来賓の接待に過ごしたのである。こうした来賓の中には合衆国大統領夫人や最高裁判事，上院議員，下院議員，各国大使，牧師，教育者，実業界指導者などがいた。その特別の招待の週を皮切りに，30万人を越える訪問者がこの聖なる建物を見学したのだった。

新聞や雑誌はワシントン神殿についてかなりの紙面を割き，ラジオ，テレビは大々的に報道した。近年東部でこのように衆目を集めた建物がはたしてあっただろうか。

見学者はほとんど例外なく，この建物を高く評価し，敬虔な気持ちを覚えた。心に深く感じる人も多かった。フォード大統領夫人は神殿を去る時に，「本当に素晴らしい建物です。きっと皆さんが素晴らしい霊感を受けられると思います。」と語っていた。

連日他の人と一緒に，神聖な建物に立って合衆国内外のそうそうたる人々と握手を交わしていると，ふたつの思いが幾度となく心をよぎり，私の頭から離れなかった。つまり過去の歴史と，そして現在と将来に対する思いである。

フォード大統領夫人がスペンサー・W・キンボール大管長と並んで写真を撮っている姿を拝見しながら，私の心は135年の昔に飛んでいた。当時教会員はイリノイ州コマースで家もなく日々の糧にも事欠き，間もなくやって来る，厳しい冬を迎えようとしていた。彼らはミズーリ州を追われ，安住の地をイリノイ州に求めてミシシッピー川を渡って来たのだった。彼らは川が大きく湾曲する美しい場所に土地を購入したが，ひどい沼地で，馬も牛も泥だらけになった。しかし聖徒たちの大変な努力と犠牲によって，やがてこの地は美しいノーヴーとなったのである。しかし1839年，家を追われて寄る辺のない何千という人々はその集合地コマースに集結した。彼らは長年の労働によって建てた家や納屋，教会や公共の建物，数多くの豊かな農園を後にし，暴徒に殺された愛する人々をミズーリの地に葬って来たのであった。土地を追われ，無一物になったにもかかわらず，ミズーリ州からは何らの賠償も受けられず，ついに彼らは，合衆国大統領と議会への請願を決意した。ジョセフ・スミスとエライヤス・ヒグビーが，ワシントンへ行く任を受けた。

ふたりは1839年10月20日に馬車でコマースを出発した。5週間後にワシントンに到着し，第1日目の大半は安い宿捜しに費やした。ハイラム・スミスあての手紙に「この町で一番安い宿を見付けた」(*History of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints*「末日聖徒イエス・キリスト教会歴史」4：40）と記されている。

彼らは当時の大統領マーチン・ヴァン・ビューレンを訪れ，その主旨を述べたが，大統領は「お説はごもっともですが，私としては何もして差し上げられません。……あなた方に肩入れをすると，ミズーリ州の票を失うでしょうから」(「教会歴史」4：80）と返事したのである。

ふたりは次に議会に訴えた。数週間がたち，何ら満足できる返事も得られないままジョセフは馬を飛ばしてコマースに帰ってきた。ヒグビー判事は後に残って請願したが，結局，議会は何ら手を打たないと知らされただけであった。

1839年，ジョセフ・スミスがワシントンで拒否されてから，スペンサ

ー・W・キンボール大管長が歓迎され，尊敬を受けている1974年までの間を振り返ると，教会が政府職員から敬意と信頼とを勝ち得るに至るまで，何と長い道のりを要したことかと思う。これがつい先ごろ，私がワシントン神殿で過ごした数日間，胸中を去来した思いである。

この1839年から1974年の間には，さらにいろいろな出来事があった。1844年6月27日ジョセフとハイラムの死，ノーヴーの崩壊，川を渡ってアイオワ准州へ向かう荷馬車の長い隊列。1846年春の雪と泥にまみれた破滅的な野営地。ミズーリ州ウインタークオータース。さらにペストや熱病による多くの犠牲者。請願には耳を貸さなかった政府からの召集令状。また，エルクホーン川，プラット川，スイートウォーター川，サウスパスを越え，ソルトレーク盆地に至る過酷な行進，東部や英国から長い道のりを旅して来た人々。手車を引きながら，ワイオミングの冬に倒れた人々。入植した盆地で抜いても抜いてもはびこる雑草との果てしない戦い，乾き切った土に水を引くための何キロにも及ぶ灌漑水路，偏見から生じた攻撃と非難の叫び，この同じワシントンで制定され，連邦政府の保安官が守る法の下での市民権の剝奪。これらは長い歴史を物語る一つ一つの出来事である。

この厳しかった時代が，今や過去のものとなったことを神に感謝したい。そうした試練の炎の中にあっても，なお信仰を保ってきた人々に感謝を捧げる次第である。私たちが今受けているもののために彼らの払った代償は，何と大きかったことか。兄弟姉妹，私たちはそのことを忘れてはならない。そのほか正しい生活によって，教会員が尊敬を受けるように地盤を築き上げてきた人々にも感謝する。そして末日聖徒イエス・キリスト教会に対する理解が増し，評価と認識が広く豊かになったこの良き時代を感謝する。

初めは好奇心でワシントン神殿を訪れた人が，帰る時には目に涙をたたえていることもしばしばであった。こうした大勢の人々と握手を交わしながら，私はそのようなことを考えていた。

しかし，これらは概して過去のことである。現在と将来のことについても幾つかの思いがある。いつか私は高速道路を車で走っていた時，そこを通る人ならだれでもそうなのだが，樹木の茂る丘から天に向かってそびえ立つ主の宮居の輝く尖塔を，驚異のまなざしで見上げた。その時，心にひとつの聖句の言葉が浮かんできた。それは，主が山の上に立って民に教えられたみ言葉である。

「山の上にある町は隠れることができない。また，あかりをつけて，それを枡の下におく者はいない。むしろ燭台の上において家の中のすべてのものを照させるのである。そのように，あなたがたの光を人々の前に輝かし，そして，人々があなたがたのよいおこないを見て，天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」（マタイ5：14—16）

今やワシントン神殿ばかりでなく，全会員が，隠れることのできない山の上の町のようになっている。

私たちは名前だけの教会員が犯罪にかかわり，モルモンだとことさらに報道されるのに憤慨することがある。他の教会の信者だったら何も言われないのにである。

しかしそれは，ある意味で私たち教会員に対する賛辞とは言えないだろうか。世間は私たちにより良いものを期待しており，たまたまだれかがつまずくと，それがすぐニュースに載るのである。実に，私たちは隠れることのできない山の上の町である。私たちが主の望んでおられるようになるには，実際に「選ばれた種族，王国の神権者，聖なる国民，神につける民」とならなければならない。「それによって，暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを，あなたがたが語り伝えるためである」。（欽定訳Iペテロ2：9）

世の潮流がこのままの状態で進み（事実変わる気配は一向にないが），反面私たちが予言者の教えに従い続けたならば，私たちはますます世から注目される特異な民となってゆくであろう。例えば，家庭の尊厳が世の圧力に屈して崩壊する一方で，もし私たちが信仰を守り続け家庭を神聖なものとする立場を見失わないならば，その立場はさらに際立って特異なものとなってゆくことであろう。

また，性の放縦の風潮が広まり続ける中で，1世紀余りにわたり一貫して教えられてきた教会の教えは，ますます特異に，また奇異にさえ感じられるようになるに違いない。

一般社会にあって，その習慣がまったく当たり前の事になっている状況とともに，甘い広告に誘われ，年々アルコール消費量が増えている中で，1世紀以上の昔に主が定められた私たちの立場は，世にあってますます風変わりなものとなるであろう。

政府が国民の要求を一手に引き受けてそれを満たそうとする方向の中で，私たちが行なっている社会的な事業の自立性とその背後にある教義は，ますますユニークになるであろう。

安息日が買物の日と変化しつつある中で，シナイ山上で主の指をもって書かれ，近代の啓示でも強調されたあの律法の教えに従う人々は，ますます特異な人々になるに違いない。

世にありながら世のものとならないことは，かならずしも容易なこと

ではない。私たちは，まったく自分たちだけでは生きられはしないし，それを望んでもいない。私たちは他の人々と交わらなければならない。そうしてこそ，親切もでき，人にも好かれる。独善的な気持ちや態度を拭い去ることができる。しかしそれでも私たちはみずからの標準を守ることができる。私たちは往々にして世に染まり勝ちである。現に多くの者がそれに屈しているのである。

1856年，私たちが主にこのソルトレーク盆地で外部との交流もなく暮らしていたころ，ある人々は自分たちが世の道に染まることはないと考えていた。しかしそのような考えに対して，愛する大管長の祖父に当たるヒーバー・C・キンボールは，こう答えている。「兄弟たち，私はあなた方に言いたい。間もなく今は平和なこの盆地にもいろいろな人が混じり合って住み，神の民の敵の顔と聖徒の顔の区別が難しいほどになる時が来るであろう。」さらに続けて「多くの者がふるいにかけられる時に注意しない。やがて大変革の時が来て，多くの人が倒れる時が来る。試し，試み，試練がやって来る。はたしてそれに耐えられるのはだれだろうか。」（オルソン・F・ホイットニー，*Life of Heber C. Kimball*「ヒーバー・C・キンボールの生涯」p. 446）

私はこの試練がどのような性質のものか，はっきりとは知らない。ただ，その試練の時は今であり，世の道に従うのではなく，いかに福音に従うか，その力に懸かっていると考えるのである。

私は決して社会からの逃避を勧めているのではない。むしろ私たちには実業，科学，政治，医学，教育その他価値ある建設的な仕事において，自分たちの地歩を固める責任とチャレンジが与えられている。私たちはすべての人々の祝福のために，世の仕事にあって技術，知性の面でひいでた者となるべく，みずからを訓練する義務がある。私たちは他の人々とともに働かなければならない。しかしそのために，自分の標準を放棄する必要はない。

私たちは，指導者の勧告に従うならば，家庭の尊厳を保持することができる。そうする時に，周囲の人々は敬意をもってそれを見，その方法を知りたいと思うようになるであろう。

私たちは国家の根幹を揺るがすポルノグラフィーやわいせつの風潮に対抗することができる。アルコール飲料を避け，販売や広告を規制する法律を定めるように立ち上がることもできる。そうして共鳴する人々を見いだし，手を携えてともに闘うこともできるのである。

私たちは困っている人々を政府の手に任せるのではなく自分たちでもっと良く助け，それによって援助を受ける人々の自立と尊厳を守ることができる。

私たちは安息日の買物をやめることができる。ほかに6日もあるというのにわざわざ日曜日に家具を買う必要はないし，服を買う必要もない。少し気を付けて計画すれば，日曜日に食料品を買わないようにすることなど容易にできることである。

このほか私たちが教会で教えられている他の標準を守る時，世の多くの人は私たちに敬意を払い，彼らみずからもそれが正しいと知っていることに従おうとする力を得るのである。

イザヤの言葉にこうある。「多くの民は来て言う，『さあ，われわれは主の山に登り，ヤコブの神の家へ行こう。彼はその道をわれわれに教えられる，われわれはその道に歩もう』と。」（イザヤ2：3）

私たちは妥協する必要はない。いや，妥協してはならないのである。

主がこの神権時代にともされた明かりは，全世界を照らす明かりとなって，私たちの良い業を見る人々が天にいます御父をあがめ，私たちが示す模範に倣うようになるのである。

つい先日の晩のこと，合衆国のある指導者がワシントン神殿を去るに当たって，塔を見上げながら言った。「この美しい建物は，私たちの偉大な国家，偉大な国民を形造る諸徳の象徴です。私たちにはそのような象徴が必要なのです」と。

そのような象徴はワシントン神殿以外に沢山ある。しかもより感動的な象徴である。まずあなたや私が，そしてすべての人々が，家庭や職場，娯楽の場にあっても人が仰ぎ見，教えを受ける山の上の町のような人物となり，地の民が力を得る国民の旗印とならなければならない。私は，神が生きておられ，私たちの救い主であり贖い主であることを証する。また，この業が真実であることを主イエス・キリストのみ名により証申し上げる。アーメン。

栄誉の殿堂

十二使徒評議員会会員

トーマス・S・モンソン

キンボール大管長，この大会も間もなく幕を閉じようとしていますが，この大会に出席し，話に耳を傾け，その進行を見てきた一人一人の気持ちを使徒ペテロの次の言葉がよく表わしているように思います。

変貌の山での出来事の後でペテロはイエスにこのように語っている。「主よ，わたしたちがここにいるのは，すばらしいことです。」（マタイ17：4） キンボール大管長，私たちがこの大会に出席できたのは，「すばらしいことです。」

皆様に話をするこの機会をいただくに当たり，これまでと同様，憐れみたまが私にも注がれるよう祈っている。

ある晴れた冬の日，ニューヨークの中心街マンハッタンと，郊外のウエストチェスターを結ぶ高速道路をひとりの友人と一緒に車で走っていた。その道すがら，彼はこの地域にある史跡を幾つか教えてくれた。史跡を巡る小道の間に幹線道路が網の目のように張り巡らされていた。

と突然，懐かしいヤンキースタジアムが目に飛び込んできた。数多くの名選手を輩出したスタジアムであり，私が少年時代にあこがれた英雄たちの故郷である。何万人もの観客の声援を浴びながら，堂々と試合をする野球選手にあこがれない少年が，はたしているだろうか。

冬であったので，スタジアムを取り巻く駐車場は閑散としていた。観衆もピーナツ売りも，入場券を売る人も，だれもいなかった。しかし，ベーブ・ルース，ルー・ゲーリック，ジョー・ディマジオなど，偉大な野球選手の思い出は消えるものではない。彼らは栄誉の野球殿堂入りを成し遂げ，その卓越した能力と技量の記録は永遠に保存されているのである。

人の生涯についても野球と同じことが言える。私たちはそれぞれ，意識の内部に，私たちの生涯の方向付けを与えてくれた真の指導者のために，個人の栄誉の殿堂を持っている。また，幼年時代から現在に至るまで，私たちを導く権威を行使してきた人々は大勢いるが，私たちの審査をパスして，栄誉の名簿に名前を記された人は比較的わずかである。しかもこの審査は，権力を誇示する礼装品や，この世の富を度外視して行なわれる。私たちがよく考えた上でこの聖なる場所に入れる指導者は，通常，真理のために献身し，私たちの心を燃え立たせてくれた人々である。これらの人々は，義務に忠実であることが人間の本質であると考えさせ，またありきたりの日常の出来事を打破し，いつもあのような人物になりたいという気持ちを起こさせる人である。

私たち一人一人はおそらく，栄誉の殿堂入りを審査する資格のある審査員となれることだろう。では，あなたならこの名誉ある地位にだれを推薦するだろうか。自分自身を推薦できるだろうか。候補者は多く，競争は熾烈である。

私は栄誉の殿堂に，この地上に住んだ最初の人アダムを推薦したい。モーセの書には，アダムについて次のように記されている。「アダムは主の誡命によく従いぬ。」（モーセ5：5） アダムはふさわしい人である。

辛抱強く忍耐する人としては，高潔で完全な人，ヨブを挙げなければならない。彼はこの上ない苦しみを受けながらも，「わたしの証人は天にある。わたしのために保証してくれる者は高い所にある。わたしの友はわたしをあざける，しかしわたしの目は神に向かって涙を注ぐ」（ヨブ16：19，20） と言明している。また，「わたしをあがなう者は生きておられる」（ヨブ19：25） と語っている。

ヨブもふさわしい人である。

キリスト教徒は皆，使徒パウロの名でよく知られている人，サウロを推薦するだろう。彼の説教は霊のマナであり，その奉仕の生涯はすべての人への模範である。この恐れを知らない宣教師は，世の人々に次のように宣言している。「わたしは福音を恥としない。それは……すべて信じる者に，救を得させる神の力である。」(ローマ1：16)　パウロもふさわしい人である。

次に，シモン・ペテロと呼ばれている人がいる。キリストについての彼の証には，心打つものがある。

「イエスがピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき，弟子たちに尋ねて言われた，『人々は人の子をだれと言っているか』。

彼らは言った，『ある人々はバプテスマのヨハネだと言っています。しかし，ほかの人たちは，エリヤだと言い，また,エレミヤあるいは預言者のひとりだ，と言っている者もあります』。

そこでイエスは彼らに言われた，『それでは，あなたがたはわたしをだれと言うか』。

シモン・ペテロが答えて言った，『あなたこそ，生ける神の子キリストです』。」(マタイ16：13－16)　ペテロもふさわしい。

また時と所は違うがニーファイが述べた証も思い出す。

「私は主が命じたもうたことを行って行う。私は，主が命じたもうことには，人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり，それでなくては，主は何の命令も人に下したまわないことを承知しているからである。」(Ｉニーファイ3：7)　確かに，ニーファイも栄誉の殿堂入りするにふさわしい人である。

推薦したい人が他にもいる。予言者ジョセフ・スミスこそその人である。その信仰，信頼できる人柄，証は，カーセージの獄へ向かい，殉教に身をゆだねた折に語った，彼自身の言葉の中にうかがえる。「われは，今ほふり場に引かるる子羊の如く行く。されど，わが心は夏の朝の如くに穏かなり。わが良心は神に対しまたすべての人に対しいささかの咎めもなし。」(教義と聖約135：4)　彼はみずからの血をもって証を結び固めたのである。ジョセフ・スミスもふさわしい人である。

男性だけでなく，女性にも推薦したい人がいる。まず，気高い忠節の模範，ルツが挙げられる。立派なふたりの息子を失って悲しみに打ちひしがれているしゅうとめナオミの心を感じ取り，また彼女の絶望と孤独の苦しみを察して，ルツは次のように述べている。この言葉は，忠節の典型と見なされてきたものである。

「あなたを捨て，あなたを離れて帰ることをわたしに勧めないでください。わたしはあなたの行かれる所へ行き，またあなたの宿られる所に宿ります。あなたの民はわたしの民，あなたの神はわたしの神です。」(ルツ1：16)　ルツのとった行動は，その言葉が真実であることを表わしている。彼女の名前も栄誉の殿堂に入れることができる。

誉れあるルツの子孫についてはどうであろうか。ヨセフがめとったナザレのマリヤはどうであろうか。彼女は，この世に生を受けた罪のない唯一のお方の母親となるように定められていた人であった。彼女がこの神聖な歴史的に意義のある務めを受けた時の言葉は，謙遜のひと言に尽きる。「そこでマリヤが言った，『わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように』。」(ルカ1：38)　確かに，マリヤもふさわしい人である。

「何がこれらの人々を偉人にしているのだろうか」という疑問が生じるであろう。それはほかならぬ，全能の天父に対する揺るぎない信頼と，神が遣わされた救い主の使命に関する確固たる証である。この知識は，彼らの生涯のつづれ錦を織り上げている金色の糸のようなものであると言えよう。

これらの偉人をして忠実に仕え，雄々しくその生命を捧げしめた，かの栄光の王とは，贖い主とはどなたであろうか。そのお方こそ，神の御子イエス・キリスト，私たちの救い主である。

主の降誕は予言者たちによって予言されていた。そして天使たちは，主のこの世における使命を告げ知らせたのであった。野にいる羊飼いたちに，次のように栄えある言葉が下されたのである。

「恐れるな。見よ，すべての民に与えられる大きな喜びを，あなたがたに伝える。

きょうダビデの町に，あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。」(ルカ2：10，11)

このイエスは，「ますます成長して強くなり，知恵に満ち，そして神の恵みがその上にあった。」(ルカ2：40)　その後イエスは，ヨルダンの名で知られる川で，ヨハネからバプテスマを受け，人々に対する伝道を正式に開始された。さらにイエスは，サタンの詭弁に惑わされることなく，御父より託された務めに敢然と立ち向かい，全身全霊を傾注し，またみずからの命をも捧げられたのである。イエスの生涯は罪なきこと，無私なること，崇高さにおいて，またその神聖さにおいて，語り尽くすことができない。イエスは働き，愛し，仕え，涙を流し，病める者を癒し，教え，証を述べられた。そして十字架上で悲惨な死を遂げられた。その後，

かりそめの墓からよみがえり，永遠の生命を得られたのである。

ナザレのイエス。この名は，天が下にあって，私たちを救い得る唯一の名であり，栄誉の殿堂において栄誉ある特別の位置を占める。

「だが，このような偉人の名を連ね，栄誉の殿堂を設けたところで，一体それにどんな価値があるのだろうか」と問う人がいるかもしれない。それに対してお答えしよう。アダムのように従順で，ヨブのように忍耐し，パウロのように教え，ペテロのように証を述べ，ニーファイのように仕え，予言者ジョセフのように自分自身を捧げ，ルツのように人を思いやり，マリヤのように誉れある務めを引き受け，キリストのように生きるならば，その時私たちは新たに生まれるのである。そしてすべての力を授かるのである。古い自我から永遠に脱却し，それとともに敗北と失望，疑念，不信も消える。その結果，新しい生命へ，すなわち信仰と希望，勇気，喜びの生命へ至るのである。大き過ぎるという仕事はなく，責任も重過ぎるということはない。また，いかなる義務も重荷とはならない。すべてが可能となるのである。

しかし，かならずしも過ぎ去った時代に，はるか昔の人々に模範を求める必要はない。ではここでその例をあげよう。クレイグ・サドバリーという名の兄弟がいる。彼は今日，ソルトレーク・シティーのあるワード部を管理している。さて，彼がオーストラリアのメルボルン伝道部に赴任する前，母親とともに私の事務所に来た数年前のその日に時間をもどしてみよう。クレイグの父，フレッドはまったく教会に関心がなかった。結婚してすでに25年たっていたが，フレッドは妻が教会を愛しているその気持ちを理解せず，教会にも入らなかった。

クレイグは私に，両親を深く愛していることを告げた。そして何らかの方法で，父親がみたまに動かされ，イエス・キリストの福音にその心を開いて欲しいと心から願っていた。それで私に助けを求めてきたのだった。私はこの望みがどのようにしたらかなえられるか，霊感を受けようと祈った。すると霊感が下され，私はクレイグにこのように言った。「心を尽くして主に仕え，託された神の召しに従いなさい。また，毎週両親に手紙を書き，ときどきお父さんに個人的に出しなさい。そして，あなたがお父さんを愛しており，息子であることをなぜ感謝しているかについて書きなさい。」

彼は私に礼を言うと，母親と一緒に事務所を出て行った。それから1年半ほどたって，母親がまた私の事務所に来た。そして涙ながらに，次のように話してくれた。「クレイグが伝道に出てから間もなく2年になります。息子は忠実に働いて，伝道地で大切な責任を果たしています。そして，毎週かならず私たちに手紙を書いてくれました。最近のことですが，主人のフレッドもはじめて証会で証してくれたのです。『皆さん御存じのように，私は教会員ではありません。けれども，クレイグが伝道に出てから，私の心に何かが起こりました。息子の手紙に心を打たれました。その一通を読ませていただきたいと思います。

「お父さん，今日僕たちは素晴らしい家族に，救いの計画と，日の光栄の王国における昇栄の祝福について教えました。そこで自分の家族についても考えてみました。この世の何よりも，僕はその王国でお父さん，お母さんと一緒に暮らしたいと思います。もしお父さんが一緒でなければ，そこは僕にとって日の光栄の王国ではありません。僕はお父さんの息子であることを感謝しています。僕がお父さんを愛していることを知って下さい。あなたの息子クレイグより」

それから主人はこう言ったんです。『これから言おうとしていることは，家内もまだ知りません。私は家内を愛してますし，息子のクレイグも愛しています。結婚して26年になりますが，やっと教会員になる決心が付きました。福音のメッセージは神のみ言葉で，長い間この真理を知っていたように思います。けれども，私に行動を起こさせたのは息子の伝道です。私はクレイグが伝道を終える時に夫婦で会いに行けるように，もう準備を整えています。息子が専任宣教師として施す最後のバプテスマは，私が受ける積もりです。』」

揺るぎない信仰をもったひとりの年若い宣教師は，神とともに現代の奇跡を起こしたのである。愛する人と心を通わせたいという彼のチャレンジは，彼と父親の間に横たわる延々たる距離によって一層難しくなった。しかし，愛の精神は広大な太平洋を越え，崇高な語らいのうちに心と心が通い合ったのである。

はるかかなたの地オーストラリアで，腰まで水につかって父親とともに立ち，右手を直角に挙げて儀式の言葉を宣言した時，クレイグに勝る偉人がほかにいただろうか。「フレッド・サドバリー，われはイエス・キリストにより権能を受けたれば，天父と御子と聖霊との御名に由りて汝にバプテスマを施す，アーメン。」

母親の祈りと，父親の信仰，それに息子の奉仕が神の奇跡をもたらしたのである。母，父，息子，それぞれが栄誉の殿堂に入るにふさわしい。

彼らが，そして私たち一人一人が次のような天よりのみ言葉にふさわしい生活ができるように願っている。

「主なるわれはわれを畏(おそ)るる者に恩(めぐ)

恵と憐みとを与え，終りまで義しく且つ真実にわれに仕うる者に誉を与うるを喜ぶ者なり。
　彼らの得る報いは大きく，その栄は永遠なるべし。」（教義と聖約76：5，6）
　こうして永遠不朽の栄誉の殿堂における私たちの座は保証されるのである。これは私の切なる祈りである。ここで皆様に私の証を残したい。ナザレのイエスは私たちの救い主であり，贖い主である。また御父に対する私たちの仲保者である。これらのことを主イエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。

家族に流れる海流

大管長

スペンサー・W・キンボール

私ははじめて氷山を見た時のことを，今でもはっきりと覚えている。1937年，キンボール姉妹と私は汽船でカナダのモントリオールを出航し，セントローレンス川から北大西洋へと抜けて，はじめて大西洋を横断した。

セントローレンスを抜けてかなり沖合いを航行していたある日，船内にちょっとした興奮が巻き起こった。氷山が見えたのである。船客の大半はデッキに駆け登って見物した。青い空と暗い海を背景に巨大な白い氷山が遠くに見えた。

高山の険しい峰のように海の中をゆっくりと流れていくさまは，実に美しいながめであった。それまで話に聞いてはいたが，その時はじめて，自分の目の前に，氷の険しい頂を見たのである。

これを見て，ホワイト・スター会社の汽船タイタニック号が処女航海で大西洋横断の途中に，悲劇的な沈没を遂げたことを思い出した。1912年4月4日の夜更け，巨大な氷山が，この新造大型船に衝突した。1503名の乗客は英国と合衆国の名士が多かったが，沈没とともに海中に引き込まれ，救助されたのはわずかに703名であった。

そして，今から4年ほど前，私たちはイギリスから合衆国に飛行機で向かった時，グリーンランド上空から再び氷山を目にした。空路はほとんど雲の上だったが，グリーンランド上空を飛んだ時には空は晴れ上がり，雲ひとつなかった。太陽はまぶしく輝いていた。あのように雄大で美しい光景はめったに見られるものではない。遠々と広がるのは，巨大な島を覆う，ぶ厚い氷のじゅうたんであった。厚い氷河がゆっくりと谷から海に進み，砕けて氷山になっているのも見えた。フィヨルドは，大洋目指して流れてくる氷の山でびっしりと埋まっていた。そこが，33年前に見たあの無数の氷山の生まれ故郷だったのである。

グリーンランドの氷原で生まれた氷山の進路は明らかであった。ゆるやかなラブラドル寒流はバフィン湾とデービス海峡を通って絶え間なく南下しながら，風と波と潮の勢いにも負けず巨大な氷山を運ぶのである。海流は，表面を吹く風よりもずっと大きな力で自分の道を進む。

この自然の相克を，私たちは自分の生活に引き比べてみた。親の正しい教えによって家族に生じる生活の海流が，誤った世のおびただしい悪影響の波風にも負けず，子供の進む方向を決めることが，幾度もあるであろう。

私たちの見るところ，海の波の下には無視することのできない大きな力が存在し，また，私たちの生活にもそのように強い力が存在する。

強大なミシシッピ川も，大海流に比べれば小川同然である。海流の中でもことに壮観なのがラブラドル寒流だという。それに次ぐのがメキシコ湾流で，この海流はメキシコ湾の東側から合衆国東岸に沿って北上し，大西洋をまたいでヨーロッパ沿岸を暖める暖流である。このメキシコ湾流はミシシッピ川の1千倍の水量を運ぶ。また，規模からいえばそれに劣りこそすれ，ラブラドル寒流は年々何千の氷山を，生まれ故郷のグリーンランドから，メキシコ湾流と出会って解けるまで，確実に忠実に運び続けている。かのタイタニック号が悲運に殉じたのは，ちょうどラブラドル寒流とメキシコ湾流が合する地点であった。

私たちの道が，氷山と同じような自分ではほんの一角しか認知できない力によってかなり左右されるということは実際にある。しかし，私たちは氷山ではなく，むしろ船の方で

ある，というのも真実である。自分で動く力があって，海流に気付きさえすればそれを都合良く利用することもできるからである。

このように，もし私たちが正しい生活という目標に向かって流れる強く確実な海流を，家族の中に生み出せたならば，親も子供も，困苦や落胆，誘惑や時流の逆風にも負けずに，前進できるであろう。

若者も大人も，時には，はたして乗り切ることができるだろうかと思うほどの，実に多くの渦巻く風に身をさらしている。時流の風は不安定な人々，世と歩調を合わせたいと思っているような人々を押し流す。性の誘惑の風は結婚生活を破壊し，輝ける未来を打ち砕き，人々を堕落させる。悪い仲間，幻覚剤，瀆神行為，ポルノグラフィーこれらは，もし私たちが正しい生活に向かう強く確実な海流に乗っていなければ，私たちを押し流して行ってしまうであろう。私たちは親として，家族の一員としてふさわしい生活を営むことにより，生活の海流を定め，それを強力にしなければならないのである。

私たち一人一人には，清く神聖で真実な，世の力に支配されることのない，力強い神となる可能性が宿されている。私たちは聖典から，自分が永遠の存在で初めに神とともにあったことを教えられている。(アブラハム3：22参照)　そのことを知ると，人の尊厳についてほかと異なる認識が生まれるのである。善良な家庭の子供たちが反抗したり，道を踏み誤ったり，罪を犯したり，挙げ句の果てには神と争ったりするのを，私はしばしば目にしてきた。海流を起こそう，模範になって教えようと自分の最善を尽くしてきた両親にとって，それは大きな悲しみである。しかし，よくあることだが，その子供たちの多くが，迷いの年月を過ごした後に，心を和らげ，失っていたものを悟り，悔い改めて自分の周囲の人々の霊的な面に大きな貢献をするのである。

このようなことが起こり得ると私が信じるのは，次のような理由からである。いろいろな逆風が吹き付ける中で，彼らは自分で意識している以上に大きく，自分の家庭で培われた生活の海流の影響を受けていたからであろうと思う。後日，彼らが自分の家庭の中に父母の家庭と同じ雰囲気を再び作りたいと思った時，きっと両親の生活に意義を与えた信仰に立ち返ることであろう。

もちろんのこと，正しい両親ならかならず子供を引き止めておくことができるという保証はないし，できる限りのことをしないならば，子供は遠のいていくであろう。子供にも自由意志が与えられている。

だがもし，私たちが親として子供たちに影響を与え，「狭く細い道」へ心を向けさせなかったなら，その時には，悪と誘惑の波風が子孫を道から連れ去るに違いない。

「子をその行くべき道に従って教えよ，そうすれば年老いても，それを離れることがない」。(箴言22：6)

私たちの知っていることは何かといえば，子供に良い影響を及ぼそうと努める正しい両親は終わりの日に咎なしとされ，全員とはいわないまでも，子供たちの大半を救いに導くことができるだろうということである。

モーサヤ書に，人の心の相克が述べられている。

「肉欲に従う人は神の敵であって，アダムの堕落してこの方そうである。しかし，人がもし聖霊の導きに従い肉欲に従うことをすてて主キリストの身代りの贖罪に由って聖徒となり，幼児のように従順で柔和で謙遜で愛情に富み，幼児がその父に従うように，主が負わせたもうすべてのことに喜んで服従しないならば，とこしえに神の敵となるであろう。」(モーサヤ3：19)

「肉欲に従う人」とは，動物的な情欲に負け，霊的な心を曇らせてしまう「この世的な人」のことである。

数年前の外国旅行でのことだが，その国の公立学校に通う子供たちがクラスで宗教に対して絶えず集中攻撃を受けているということを聞かされていたので，私はどのようにして子供たちを教会につなぎ，信仰を守ってあげられるのかと教会の指導者に尋ねたことがあった。すると彼らはこう言った。「真理と誤りの区別ができるように，家庭でよく教えるのです。学校に行って聞かされる無神論がそのまま耳から耳へ通り過ぎるように。子供たちは私たち親を愛し，信頼して，信仰をしっかり守ってくれています。」神はこのような忠実で献身的な親たちを祝福される。

まず第一には，永遠に添い遂げるために個人的なことを調節していこうとする努力が見られる地に足のついた結婚である。このような健全な基盤があってこそ，子供たちは平安を得るのである。

現代の評論家は，急激に変化する世の中で，人々は連帯感の喪失からある種のショックを受けていると指摘する。私たちの社会の流動性ということは私たちの子供が何度も何度も住む所を変え，祖父母，おじ，おば，いとこといった近親者や旧来の隣人との親しい交わりを無くしていくということをも意味している。私たちは自分の家族に，自分たちが永遠に一緒なのだという気持ちと，外部でどんな変化があろうとも，家族関係は決して変わらない基本的なものだという意識を養うことが，また大切である。私たちは，子供が親戚の人たちを知るように努めるべきである。彼らの話をし，文通しようと努め，訪問をし，家族の輪に加わる

などが必要である。

体の大きさはどうあれ，あなたが子供たちを腕に抱いて，その子を愛しており，永遠に一緒にいられるのがうれしいと話し掛けたのは，最近ではいつのことであったろうか。取り立てて理由はないが，伴侶を喜ばせようという気持ちで，ちょっとしたプレゼントを内緒で買って来たのは，いつのことだっただろうか。一輪のバラを持ち帰ったり，ハートの形を付けたパイを作ったり，生活に愛と暖かさを加えるちょっとした行為を，最近ではいつしただろうか。

建築資金や赤十字に寄付をしたり，土曜日に長老定員会で未亡人の家のペンキ塗りを手伝うといった計画があったなら，子供たちにもその話をし，できれば計画の決定や実行に参加させなさい。家族にバプテスマや確認の儀式や按手聖任を受ける人がいたなら，家族みんなでその会に出席できるし，野球チームに入っている子供には全員で声援を送ることもできる。家庭の夕べや食事の時や祈りの時にはいつも全員が顔を合わせるし，みんな一緒に什分の一を納め，教えと模範でこの麗しい原則を学ぶこともできる。

家庭は，主に頼ることが特別に何かあった時のためでなく，日常の自然な経験となる場でなければならない。そのためのひとつの方法は，毎日の熱心な祈りである。ただ祈るだけでは十分でない。親として自分が知らなければならないこと，家族のためにしなければならないことを啓示して下さるという信仰を持って，実際に主に話し掛けることが大切なのである。ある人たちが，祈っていると，子供が目を開けて主が本当にそこにおられるのを見たがったという。それほど神を身近に感じさせる，率直な祈りだった。

子供が家を離れて学校や伝道に行く，妻が精神的に疲れている，子供が結婚する，大切な決断に助言を求められたなど，いずれの場合にも父親は祝福師の責任を行使して家族を祝福することができる。

また，忘れてならないのは，特に父親不在の時に，母親が子供たちとともに祈って子供のために主の祝福を呼び求めることである。母親は神権によってではなく，一家を正しく治めるという神から与えられた責任によって，それを行なうのである。

私たちが氷山とは異なっているひとつの大切な点がある。私たちには，みずから動く力があり，そのため船と同じように，望むところへ動いて行くことができるのである。海流に気付けばそれを利用することもできる。南米から北米の大西洋沿岸の港へ航行する巨大なオイルタンカーや鉱石積載船は，丁度，飛行機がはるか上空のジェット気流に乗るように，メキシコ湾流を利用すると言われている。

もし海流に逆らいたければそれもできよう。しかし海流の影響から逃れることはできない。ピアリーが北極に向かった時，自分が島のように大きい流氷に乗っていることに気が付いた。犬を連れて北極を目指したが，流氷は海流のため，それよりもずっと速い勢いで南に流れていったという。

兄弟姉妹たち，家庭は私たちの宝である。家庭そして家族は，私たちのよって立つ基盤である。そのことを，今度の大会では幾度も聞いた。家庭生活，互いに愛し合い頼り合う親子について。それこそ，主が私たちのために計画された生き方である。

さて，3日間にわたり多くのことを教えてくれた盛大な大会の終わりに当たって，尽力された兄弟たち，また話を通じて知識と多くの情報と豊かな霊感の宝を私たちに与えてくれた兄弟たちに祝福を差し上げたい。

兄弟姉妹たち，帰宅しても，大会をとびらの外に締め出さないでいただきたい。自分の身に着けて，家に持ち帰って欲しい。教会員，家族にその話をし，聖餐会でも一部報告をしていただきたいと思う。だがとりわけ，あなた方の家族に話をして，あなた方が受けた霊感，生活を変えて天父にさらに喜ばれるようになろうという決意からもたらされる恩恵を，与えていただきたい。

今大会の最後に，私たちはあなた方を祝福し，天なる主の祝福を与える。兄弟姉妹たち，私はこれが主のみ業であることを知っている。あなた方は，訳もなくわざわざ遠くからやって来たのではない。自分の魂を養いにやって来たのである。

私は主が生きておられることを知っている。アダムとともにおられた神，ヨルダン川のほとりに来て，「これはわたしの愛する子，わたしの心にかなう者である」（マタイ3：17）と言い，御子を世に紹介され，この世のすべてを御子に託されたその神が生きておられることを。また，私たちが礼拝するのは，変貌の山に来て，不完全ながら主のみ業に携わるはずのペテロ，ヤコブ，ヨハネの僕たちに再度，「これはわたしの愛する子，わたしの心にかなう者である」（マタイ17：5） と言われたその神であること，そのまったく同じ神が，私たちがその存在を知っている神，ニューヨーク州に来て，昔ニーファイ人に告げたと同じことを告げ，長い間暗黒をさまよっていた世に「こはわが愛子なり，彼に聞け」（ジョセフ・スミス2：17） と言われたその神であることを，私は知っている。

イエスはキリストであり，生ける神の御子である。私はそれを知っている。私たちの教えている福音がイエス・キリストの福音であり，私た

ちの属する教会がイエス・キリストの教会であり，そこで教えられていることはイエス・キリストの教義であり，方針であり，イエス・キリストのプログラムであることを，私は知っている。もし私たちが皆，主からすでに与えられた計画や将来与えられる計画にそのまま従ったならば，すべての約束は成就されるのである。神はあなた方を祝福しておられる。私たちは愛と感謝とともに，主の祝福をあなた方の上に注がれるよう御子イエス・キリストのみ名によって祈る。アーメン。

目　次

第145回
年次総大会
1975
4. 4-6

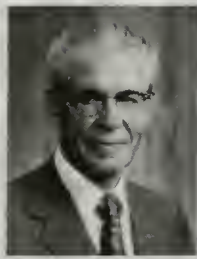
時の動き

1974

10.8　前首相，佐藤栄作氏にノーベル平和賞授与が決定される。
10.14　三井物産本社，予告爆発事件。
10.27　日本東京ステーキ部が分割され，日本横浜ステーキ部が新設される。
11.5　米国中間選挙で民主党圧勝。
11.25　日野市帝人研究所爆破事件。
10.9　三木内閣発足。
12.10　大成建設予告爆破事件。
12.23　鹿島建設爆破事件。

1975

1.8　デビッド・B・ヘイト，十二使徒に任命さる。
2.28　間組本社爆破事件。
3.5　パレスチナゲリラ，イスラエルのテルアビブ空港に侵入。翌朝全員射殺さる。
3.10　山陽新幹線，博多まで開通。
3.21　エチオピア帝政廃止。
3.25　サウジアラビアのファイサル国王，甥のムサエド王子によって暗殺さる。
4.4　米政府による米国行ベトナム戦災孤児輸送機が墜落，199人が死亡。
4.4—6　第145回年次総大会。W・グラント・バンガーター，ロバート・D・ヘイルズ，アドニー・Y・小松，ジョセフB・ワースリンが十二使徒評議員会補助に召さる。

大管長会

第一副管長
N・エルドン・タナー

スペンサー・W・キンボール

第二副管長
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン

マーク・E・ピーターセン

デルバート・L・ステイプレー

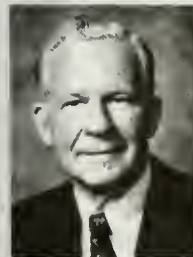
リグランド・リチャーズ

ヒュー・B・ブラウン

ハワード・W・ハンター

ゴードン・B・ヒンクレー

トーマス・S・モンソン

ボイド・K・パッカー

マービン・J・アシュトン

ブルース・R・マッコンキー

L・トム・ペリー

大祝福師

エルドレッド・G・スミス

わたしを主よ，主よ，と呼びながら，なぜわたしの言うことを行わないのか

大管長

スペンサー・W・キンボール

この1週間私たちは復活祭を祝ってきた。復活祭おめでとう，とすべての人々に申し上げたい。聖典は主の復活の模様を次のように記している。

「さて，安息日が終って，週の初めの日の明け方に，マグダラのマリヤとほかのマリヤとが，墓を見にきた。

すると，大きな地震が起った。それは主の使が天から下って，そこにきて石をわきへころがし，その上にすわったからである。

その姿はいなずまのように輝き，その衣は雪のように真白であった。

見張りをしていた人たちは，恐ろしさの余り震えあがって，死人のようになった。

この御使は女たちにむかって言った，『恐れることはない。あなたがたが十字架におかかりになったイエスを捜していることは，わたしにわかっているが，

もうここにはおられない。かねて言われたように，よみがえられたのである。さあ，イエスが納められていた場所をごらんなさい。

そして，急いで行って，弟子たちにこう伝えなさい，『イエスは死人の中からよみがえられた。見よ，あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。そこでお会いできるであろう』。あなたがたに，これだけ言っておく。」（マタイ28：1－7）

「歴史の中心点は，ベツレヘムの馬小屋にある。」（ラルフ・ソックマン）

イエス・キリストのみ名とその意味するものは世の歴史の奥底に深く根を下ろしており，それはいかなる時代にも抜き取られることはなかった。キリストは4月6日にこの世に降誕された。神の息子のひとりとして，神の生みたまいし独り子としてキリストが降誕された。この誕生にはこの上ない大きな意味がある。

キリストが導きと教えを施された3年間。その大切さにおいてこの3年間に比肩し得るものは世にない。

そして十字架にかけられる時が来た。イエスはみずからの墓と同様に，全人類の墓を開くために，死を味わう必要があった。

あの深い闇に閉ざされた十字架の時がなかったなら，墓よりいで来るという春はなかった。「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように，キリストにあってすべての人が生かされるのである。」（1コリント15：22）きょう私たちが喜ぶのはこのゆえんである。

「死よ，おまえの勝利は，どこにあるのか。死よ，おまえのとげは，どこにあるのか。」（1コリント15：55）

11人の使徒たちは，キリストについてオリブ山の頂に登って行った。そこにはふたりの天使がいて，次のように語ったと聖典は告げている。

「ガリラヤの人たちよ，なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは，天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で，またおいでになるであろう。」（使徒1：11）

「さて，キリストは死人の中からよみがえったのだと宣べ伝えられているのに，あなたがたの中のある者が，死人の復活などはないと言っているのは，どうしたことか。」（1コリント15：12）

この大会を通じて，私たちは信仰を新たにし，証を強め，主が正式に任命し，権限を与えたもう た僕から主の道を学ぼうとしている。この機会に私たちは交わした誓約と約束，それに決意を今一度心に刻み込もうではないか。

私たち教会員は，水に沈められるバプテスマを受け，聖なる神権を持つ正しい権能を与えられた人の按手

により聖霊を受けている。私たちは神の前にみずからを低くしてバプテスマを受け，イエス・キリストの教会に迎えられている。私たちはバプテスマを受けることを望み，悔いる精神とへりくだりたる心をもって進みいで，そして教会員の前に証した，すなわち，自分の罪を心から悔い改め，終わりまで主に仕えるという固い決意をもってイエス・キリストのみ名を受くると。また，罪の赦しを得させるキリストのみたまを受けたことを，行ないによって表わすと証したのである。

つい先頃，幹部の兄弟たちとともに私はブラジルのサンパウロおよびアルゼンチンのブエノスアイレスで開かれた地域大会に出席した。私たちはそこに出席した人々に，シオンは南北両アメリカにあると申し上げた。ちょうど，大きな鷲が翼を広げているように，南北両アメリカともシオンなのである。

南アメリカで教会は大きく進歩し，発展している。人々は幸福感を味わい，その心は鼓舞され，高められていた。若人はうれしそうにダンスをしていた。やがて彼らが指導者になるのである。

「イスラエルの集合」は，はるかかなたの地の国々に住む人々が福音を受け入れ，故国にとどまる時にも成就している。メキシコ人にとってのイスラエルの集合はメキシコで行なわれ，北欧に住む人々にとってはスカンジナビア，ドイツ人にとってはドイツ，ポリネシア人は彼らが住む海の島々，ブラジル人はブラジル，アルゼンチン人はアルゼンチンがそれぞれ集合の地である。私たちが，現在350万を数え，なおもその数において成長し，自立の力を強め，さらに忠実の度を強めている民を導くに際して，主が助けをたもうことに感謝を捧げたい。

今日，19,000人近くの宣教師が福音を宣べ伝えている。「畑は早白くして刈り入れを」待っている。（教義と聖約４：４）宣教師と会員たちが多くの人々に福音を伝えている。

私たちは，地の四すみ，世界の果てまで宣教師を送っている。そして東西南北，海の島々，いずれの地にもくまなくよきおとずれを携え行くことのできる日が来るのを待ち望んでいる。今やこの教会は世界の教会である。ステーキ部数約700，ワード部および支部7,500，伝道部は150を数える。私たちは，大海で淵がおおわれるように，全地を福音で満たしつつある。

教会は繁栄を見ている。教会員は一般に教えに忠実であり，幸福な生活を営んでいる。最近のこと，東部のある著名人から次のような質問を受けた。「なぜモルモンはこんなに幸せそうなのですか。」私はこう答えた。「私たちはあらゆるものを持っているからです。つまり，イエス・キリストの福音があり，光，神権，権能，約束，誓約，神殿，家族，真理と，すべてがあるからです。」

最近，私たちはワシントンＤ.Ｃ.で壮大な神殿を献堂した。さらに，南アメリカのサンパウロにも神殿を建てることを発表している。

以前，私たちは大会において，主が私たちのためにこの美しい世界を創造し，父祖アダムに地を耕し，人の住居とするよう命じられたことを再確認した。この戒めは今なお生きている。

私たちはすべての人に提案したい。過度の汚染を抑え，地を手入れし，きれいにし，豊かな産物をもたらす美しい地とするように，主は食物，衣服，家屋，小屋，果樹園，野菜畑，ぶどう園など，それらのために地より生じるもろもろの草と善きもの，すべてこれら季節に応じて地より生じるものは，皆人のため，人の用いるために造られ，人の目を楽しませ，心を喜ばせるためのものである。これらは肉体を健やかにし人に活力を与えるよう，食物，衣服，味，香りのために作られた。これらすべてを人に与えることを，神は喜びとしておられる。人はこの目的にかなって適量に用いることを求められている。（教義と聖約59：16―20参照）

だが，家の周囲を見回すと，雑草がはびこり，水路の土手にはくずや廃物が散らかっており，目を覆うばかりである。破れた囲い，壊れた納屋，塗料がはげ，傾きかけた家畜小屋，壊れた門を見るにつけ，私たちは悲しみを覚える。住まいと所有地にもう一度目を向けていただきたい。

ブリガム・ヤング大管長にまつわるこのような話がある。ある地域の人々に家屋を手入れし清潔にするよう求めたが，人々はそれをしなかった。このためヤング大管長はその地域を訪れて説教することを拒否し，次のように述べた。「あなたがたは，私が家屋を整えるよう求めたにもかかわらず，耳を貸さなかった。とびらのちょうつがいは壊れたままで，小屋の塗装ははげており，壊れた囲いも一向に修理されていない。」

ある雑誌に次のような記事があった。

「裏庭には，現在人々が必要としているものがある。インフレを抑え，世界の食糧危機を緩和するひとつの手段がそこにある。

それは『土地』である。それも，さほど広くなくとも構わない。

使わなくなった遊び場，ガレージの裏手の日の当たる場所，敷地の奥まった所にある３メートル位の細長い土地，雑草が伸び放題になっている敷地やキャッチボールに使っている場所で十分である。

食費を削減するには，この土地に

野菜を栽培すればよいのである。

手入れを怠らないならば，5×6メートルの土地を使って，6カ月間で300ドル（約9万円）に相当する新鮮な作物が取れる計算になる。

現在多くの人々が庭に菜園を造り，果樹を植え，食品保存用の容器を購入しているという報告を受け，私たちは喜んでいる。このソルトレーク・シティーの職員を初めとする多くの人々も，わずかな土地を利用して作物を植えている。第二次世界大戦中の家庭菜園が思い起こされる。勧告に耳を傾け，それを実行しているこれらの家族に，賛辞を呈したい。

私たちは今真剣に，教会員に目を向け，倹約を実行して，基本的な日用品を1年分貯蔵するよう教えている。

また聖徒に健康の律法に従って生活するよう教えている。これは，長命と健康をもたらすものである。

ある大学の調査によると，「モルモン教会の会員の肺癌と食道癌の発生率はきわめて低い」という結果が出ている。モルモンは喫煙と飲酒をしないため，他の人々より健康で知的にも優れていると述べている著名な博士もいる。食道癌とアルコール性飲料の間の因果関係を指摘しているこの学者は，さらにこう述べている。「ユタ州に住む人々は，アメリカ全体と比較して，心臓発作による死亡率が25パーセント低いが，これはタバコを吸わないことによるものであると言うことができる。」

私たちは，この国の多くの地域で報じられている道徳心の低下に戦慄を覚えている。万引きと詐欺による被害はこの国だけで数十億ドルに上っている。

「あなたは盗んではならない。」（出エジプト20：15）主はこれをアダムの子孫に告げ，石の板に刻み込まれた。両親は，人格を損うこの恐しい行為に陥らないよう子供を教育すべきである。正直は，人々との交際の上でも，自己を修める上でも力ある徳である。偽りを言う者は，私たちの社会から遠ざけられる。不正直はどのようなものであれ咎められるべきであり，「あなたは盗んではならない」のである。

私たちは350万会員に訴えたい。正直，高潔を守り，入手した物に対して代価を払い，支払っただけの物を受け取るようにしなさい。私たちは子供に正直と徳を教えるべきである。

以前からかけ事はその種類を問わず禁じられている。努力なしに，無償で，正当な代価なしに何かを得るということから，人は勝ち負けに関係なく堕落し傷つく。

最近目にしたある雑誌に，アメリカにおける主な犯罪と年間の損害額を一覧表にしたものがあった。賭博による損失がその第1であった。

賭博による損失額は，幻覚剤によるものの5倍，ハイジャックによる損害の20倍以上，横領，詐欺，文書偽造の4倍，窃盗，強盗，万引きの10倍以上，破壊，放火の25倍以上，国家，州，地方警察を維持する費用に更生施設および，犯罪を扱う法廷の運営費用を加えたものの2倍以上にも上っている。

さて，賭博の代価は一体何であろうか。

年間300億ドル（約9兆円）が消えてゆくのである。

さらに，合衆国のある州では歳入の増加を図り，宝くじを行なっている。クラブ，宗教団体までもが，賭博ゲームを主催している。

この金額を正しい目的に使うとしたらどんなことができるかを考えてみていただきたい。年間300億ドルを飢えた人々のために回したら，どんなことができるであろうか。

新聞に目を転じると，女性と十代の若者の喫煙が増加し，女性の肺癌発生率が上昇し始めているという。憂慮に耐えないことである。肺癌患者の約80パーセントは喫煙者である。だがこれは，問題の一端に過ぎない。気腫，気管支系の病気，心臓病は，喫煙と密接な関係がある。これらは，治療に多額の費用を要し，苦痛が大きい。さらに若死にを招く。

主は，1833年「熱き飲料は体のためにならず」という啓示を与えられた。私たちはこの意味を明らかにする事実を近年得ている。これは茶とコーヒーのことである「タバコは体のためにならず……人間のために良きものにあらず……葡萄酒または強き飲料……は宜しからず。また汝らの御父の眼にも適わざるなり。」（教義と聖約89：5—9参照）

主はこれらの事柄を明らかにされた時，喫煙の習慣が癌を招き，飲酒の習慣が多くの事故と病を招くことを知っておられた。

これは今や全教会員への戒めである。ある教会員がこれら禁じられたものを用いていることを私たちは知っている。だがイエス・キリストはこう宣言しておられる。「わたしを主よ，主よ，と呼びながら，なぜわたしの言うことを行わないのか。」（ルカ6：46）彼らはこの主の言葉をどう説明するというのだろうか。私たちは，教会員が主の言葉に耳を傾けるよう心から希望している。

さて，ユタ大学のふたりの研究員により，この教会は伝統的に死亡率が低いことが証明された。1971年現在で人口の約72パーセントが教会員であるユタ州は，合衆国で死亡率がもっとも低い州である。ユタ州の2倍近い死亡率の州が幾つかある。

またこの調査は，飲酒と喫煙に関連して死因となった10の病気の内，心臓病，癌，肝臓病の3つは，合衆国全体と比較してユタ州の発生率が

低いことを明らかにしている。このように，教会員の死亡率は，知恵の言葉と関係があるのである。

さらに，この律法を顧みない人々に尋ねたい。なぜ守らないのか。主の言葉があるのにどうして顧みないのか。

「わたしにむかって『主よ，主よ』と言う者が，みな天国にはいるのではなく，ただ，天にいますわが父の御旨を行う者だけが，はいるのである。

その日には，多くの者が，わたしにむかって『主よ，主よ，わたしたちはあなたの名によって予言したではありませんか。また，あなたの名によって悪霊を追い出し，あなたの名によって多くの力あるわざを行ったではありませんか』と言うであろう。

そのとき，わたしは彼らにはっきり，こう言おう，『あなたがたを全く知らない。不法を働く者どもよ，行ってしまえ』。」(マタイ7：21—23)

主の戒めに従って生活していながら，ときに戒めを無視し，禁じられたものを取り入れること，これは危険なことである。

天地創造に続くはるか以前の時代にさかのぼってみると，主はエノクにこう言っておられる。「見よ，これら汝の兄弟らを，彼らはわが手に成れる工なり。われ彼らを創りし日に彼らの知識を与え，エデンの園に於て人に彼の自由意志を与えたり。」(モーセ7：32) これらの禁じられたものを用いることに関して，私たちは友人や世の人々の自由意志を奪おうなどという気は毛頭ない。しかし私たちは主が知恵の言葉を与えられた時，全人類に向けて語られたと信じている。

歴史を振り返ると，金の牛や木，石，金属の偶像を拝む人々がそこかしこに見られる。しかし，現代ほどに多くの人が肉欲という神に頭を垂れた時代はなかったのではないかと考える時，慄然たる思いに駆られる。心と肉体を破滅に追いやるこの盲目的崇拝は全世界にはびこる恐れがある。私たちは離婚が激増していることを知っている。私たちは離婚を肯定しない。これらのことに悲しみを覚えている。離婚が正当とされる場合があるにしても，そのような例はきわめてまれである。通常，離婚の原因は夫婦の一方もしくは双方の利己心にある。それは醜いものであり，関係者に大きな打撃を与える。失うものは多く，悲しみ，孤独，精神的不満をもたらす。特に子供たちから奪われるものは計り知れない。離婚を正当化する理由はいくらでもある。私たちの調査によれば，離婚のほとんどは，不貞と，肉欲の神への崇拝がその理由になっている。

このソルトレーク・シティーからさほど離れていないある小さな都市では，341組が結婚する一方で，同時に272組が離婚したという。このような事態を何をもって正しいとすることができるのだろうか。

夫婦が己を捨て，互いに献身するならば，主が言われた理想的な結婚にもどることができるであろう。主は言われた。「この故に，男はその父母を離れてその妻と結び合い二人一体となるべし。」(モーセ3：24)

夫がその妻と交わした誓約に忠実であって，妻に誠意を示し，利己心を捨てるならば，離婚件数は下降線を示すようになるであろう。パウロは次のように命じている。「夫たる者よ。キリストが教会を愛してそのためにご自身をささげられたように，妻を愛しなさい。……それと同じく，夫も自分の妻を，自分のからだのように愛さねばならない。自分の妻を愛する者は，自分自身を愛するのである。自分自身を憎んだ者は，いまだかつて，ひとりもいない。」(エペソ5：25,28,29)

そして，妻が偏狭な態度と利己心を捨て，主にみずからを捧げるように公正な夫にみずからを捧げ，教会がキリストに従うようにその夫に従うならば，離婚率は低下し，家族は成長し，子供の笑い声が聞かれるようになるであろう。神は男と女を創造して，それぞれに特有の才能，力，責任を与え，それぞれ個有の責任を果たす能力を与えられた。

男が家族のもとへ帰り，女性が子供たちのために身を献げる時，本来の夫婦の在り方にもどるのである。女性にとっての人生最大の仕事は母親たることである。女性は神とともに働く者であって，女性を除いてそのような影響力を発揮できる立場にいる者はいない。女性は国家の命運をその手に握っている。なぜならば，国民一人一人の人格を形成する責任と機会は女性に与えられているからである。

カリフォルニアのあるステーキ部で，ひとりの母親が次のように話すのを聞いたことがある。「私は女性であることを感謝しています。また妻であり，母親であり，末日聖徒であることを感謝しています。」これほど力強い説教がほかにあるだろうか。母親たることは最大の天職である。

出版物や教会の説教を通じて堕胎に対する警告がたびたび発せられている。このイエス・キリストの教会も堕胎に反対している。そして，都合上のことであれ，罪を隠すためであれ，この堕胎を行なうことも関与することもないよう全会員に勧告している。

堕胎は，現代の最も忌まわしく罪深い行為のひとつである。寛大さが性的不道徳という結果へと発展している様を私たちは目にしている。生命の泉に対して不当に干渉を加える

ことは，道徳的，精神的，心理的，肉体的に重大な影響を及ぼすと私たちは考えている。妊娠から出産へのいずれの過程であっても，それを妨げることは，神の戒めの中で最も神聖な「ふえよ，地に満ちよ」(創世1：28) という戒めを破ることになる。

堕胎の罪に関与した教会員は，状況に応じて，教会の評議員により懲戒処分を受けなくてはならない。主はこの時代に十戒を繰り返して述べておられる。「汝盗むなかれ。また，姦淫を犯すなかれ。また，人を殺すなかれ。また何事にてもこれに類することを為すことなかれ。」(教義と聖約59：6) この主の言葉に，十戒と同じものを見ることができる。

私たちは国中に広まっているポルノグラフィーを容認することはできない。法律によってこれを制限しようとの動きがあるが，最善の策はポルノグラフィーに対して家族が防御壁を設けることである。皆様に尋ねたい。「あなた方は善良な民であるのに，この悪習を家庭に持ち込んで，家族や隣人を堕落させたいのか」と。

モーセは，煙に包まれ揺れ動くシナイ山から下りてきた時，さまようイスラエルの子らに，行動規範となる十戒を与えた。しかし，これらの戒めは何ら目新しいものではなかった。アダムとその子孫は時の初めよりこれらの戒めを与えられ，これらに従って生活するよう命じられていた。主はモーセに対して繰り返し言われただけのことなのである。そして，戒めは，人が地上で生活し始める以前に，天上の会議において現世で人を試みるものの一部として定められたものである。

十戒の第1番目で，人は主を礼拝するよう求められている。そして第4番目で，特に安息日を礼拝の日としている。「あなたはわたしのほかに，なにものをも神としてはならない。……安息日を覚えて，これを聖とせよ。六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神，主の安息であるから，なんのわざをもしてはならない。」(出エジプト20：3－10)

安息日を守らないということは，天地創造の前に私たち一人一人に対して定められた試験を通過していないという証明になるのである。主は試しておられる。「彼らを試し，何にてもあれ，主なる彼らの神の命じたまわんすべてのことを彼らが為すや否やを見ん。」(アブラハム3：25)

私たちは買い物は週日に行なうよう強く勧め，再び申し上げたい。「わたしを主よ，主よ，と呼びながら，なぜわたしの言うことを行わないのか。」(ルカ6：46)

「安息日を覚えて，これを聖とせよ」と言われた主の言葉を，私たちは文字通りに理解し，信じている。

主は正しい社会生活の在り方を定められた。だが世の多くの人々は，特に結婚，性生活，家庭生活についてそれを変えようと努めている。しかもそれが意識的に行われていることに戦慄を覚えている。彼らにこの警告を発したい。「賢い人の知恵は滅び，さとい人の知識は隠される。」(イザヤ29：14)

兄弟姉妹の皆さん，あなた方がすべての義務を果たし，戒めに従おうと努める時に，神の祝福があるように。主に似たものとなるために努力を払っているあなた方に祝福を与え，願わくは，神が，家庭，家族，個々の生活にあってあなたに豊かな恵みを与えたもうように。イエス・キリストのみ名により，祈り奉る。アーメン。

霊の故郷

十二使徒評議員会会員

トーマス・S・モンソン

紺碧の水をたたえた名高いガリラヤの海を見下ろす位置に歴史に名を知られた地「山上の垂訓の山」がある。この寡黙な友がその場を目撃した哨兵のように次のように言うのが聞こえてくるようである。「この地上で最も偉大な御方が最も偉大な説教，すなわち山上の垂訓を述べられたのはこの山の上である」と。

この地を訪れた人は，本能的にマタイによる福音書を思い出し，次の箇所を読む。「イエスはこの群衆を見て，山に登り，座につかれると，弟子たちがみもとに近寄ってきた。そこで，イエスは口を開き，彼らに教えて言われた。」（マタイ5：1,2）イエスが教えられた真理の中に，次のような厳かな言葉がある。「狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きく，その道は広い。そして，そこから入って行く者が多い。

命にいたる門は狭く，その道は細い。そして，それを見いだす者が少い。」（マタイ7：13,14）

この言葉は廃れることはない。賢明な人々は時を越え時代を越えて，イエスのこの簡明な言葉に従って生きようと努めている。

ナザレのイエスは，石のごろごろとした聖地の険しい道を巡り歩き，良き羊飼いとして，御自分を信じるすべての人々に，細い道を歩んで永遠の生命に至る門を入るにはどうすればよいかについて教えられた。「わたしについてきなさい。わたしは道である。」イエスはこう言われた。

人々が，聖霊がペンテコステの日に注がれるのを心待ちにしたのは，少しも不思議なことではない。宣べ伝えられるのはイエス・キリストの福音であったし，行なわれるのはそのみ業であった。また主の業を委任されたのは，キリストの教会の長である使徒たちであった。

歴史は，実際ほとんどの人がイエスのもとに来ず，また教えられた道にも従わなかったことを物語っている。主は十字架にかけられ，使徒たちは殺され，真理は受け入れられなかった。人々の心を照らす輝く日の光はいつしか消えて，夕やみが迫り，やがて暗黒の夜が地を覆ったのである。

やみに支配された状態，すなわち背教については，次の聖句の一語一語にはっきりと描写されている。イザヤは「暗きは地をおおい，やみはもろもろの民をおおう」（イザヤ60：2）と予言し，アモスは地に飢饉が起こることを予言して次のように言っている。「それはパンのききんではない，水にかわくのでもない，主の言葉を聞くことのききんである。」（アモス8：11）またペテロは，偽教師が憎むべき異教の教えをもたらすことについて警告し，パウロも人々が健全な教えに耐えられなくなる日が来ることを予言した。

しかし，暗黒時代は一向に終わりを告げそうもなかった。はたして，この冒瀆の夜に夜明けはなかったのだろうか。慈悲深い御父は人類を忘れ去ってしまわれたのだろうか。また，御父はいにしえの時代のように天の使いを遣わされないのだろうか。

真実の道を求めてやまない正直な人々は，命を懸けて道しるべを打ち建てようとした。改革の始まりであった。しかし前途は容易ではなかった。迫害は激しく，個人の犠牲も大きく，計り知れない代価が払われた。改革者たちはさながら荒野の道を明々と照らし，道しるべを見失った人々を必死になって捜している開拓者のようであった。改革者たちは道しるべさえ見いだせば，それが人類をイエスが教えられた真理に連れもどしてくれると思ったのである。

ジョン・ウイクリフは他の人々の助けを得ながら，ラテン語訳のウルガタ聖書をはじめて英語に訳したが，当時の教会はありとあらゆる手段を使ってそれを破壊しようとした。そ

こで聖書はひそかに手書きにせざるを得なかった。聖書は，非公開の書として一般大衆は読むことを禁じられていたのである。ウイクリフの信奉者の多くは容赦なく罰せられ，中には火刑に処せられた者もあった。

聖書の絶対性を主張したのはマルチン・ルターである。聖書の研究を通して，ルターは聖書の教えと教会で教えられている教義，儀式を比較することになったのである。ルターは個人の責任と個人の良心の権利のために戦った。命を懸けてまで戦ったのである。脅迫され迫害されても，ルターは，「私は戦う。ほかに道はないのだ。神が助けて下さる」と大胆に宣言した。

ジョン・フスは教会内の堕落に反対して大胆不敵に語ったため，捕らえられて，市の外で火刑に処せられた。フスは首を鎖で杭につながれ，体の回りには麦わらと薪があごの辺りまで積まれ，油が振り掛けられた。最後に，フスは自説を取り消すか否かを問われた。めらめらと燃え立つ炎の中で，フスは歌を歌った，しかし，火の手がフスの顔を目掛けて燃え上げり，歌声は途絶えた。

スイスのツウィングリはその著作と教えを通じて，すべてのキリスト教の教義を聖書の言葉と徹底的に照らし合わせ，再考しようと試みた。「それがどうしたというのか，肉体は殺せても魂を殺すことはできないのだ。」彼の残した最も有名なこの言葉は，私たちの胸を躍らせる。

今日，ジョン・ノックスの「神と共にいる人は常に優位に立つことができる」という言葉を認めない者はいるだろうか。

ジョン・カルビン。病と絶え間のない労働のために年よりも老いて見えた彼は自分の哲学を次のような言葉で要約している。「われわれの知恵は，おおよそふたつの面から成っている。神の知識とわれわれ自身の知識である。」

ほかにもまだ例を挙げることはできるだろうが，ウイリアム・ティンダルについて取り上げれば十分であろう。ティンダルは，人々は聖典の約束について知る権利があると考えた。彼は自分の聖書翻訳に反対した人々に対して，こう宣言している。「もし神が私の命を救って下さるなら，……私は畑を耕す少年をしてあなた方以上に聖典について知らしめよう。」

偉大な改革者たちの生涯と教えは，このようなものであった。彼らの行動は英雄的であった。彼らは多くの貢献をし，また多くの犠牲を払った。しかし彼らは，イエス・キリストの福音を回復したのではなかった。

こう言うと，ある人は改革者について，彼らの犠牲はむだだったのか，彼らの苦闘は徒労に終わってしまったのかと尋ねるだろう。私はそのような質問に，声を大にして「とんでもない」とお答えする。今や聖書は人々の手の届く所にある。人々は以前にも増して自己の道を見いだすことができるようになった。もちろん，だれもが読み，理解することができればの話であったが。しかし，ある者は読み，ある者は読んだ者の話に耳を傾けることができた。そしてすべての人が，祈りを通して神に近づくことを許されたのである。

待ちに待った回復の日がついに訪れた。ここで，後に予言者となった，ひとりのすきを手にして働いた少年の証を思い起こしながら歴史上の重要な出来事を今一度振り返ってみよう。証人はジョセフ・スミスその人である。

ジョセフはその体験を次のように記している。「私たちの住んで居た土地に宗教上の非常な騒ぎが起った。この騒ぎは……全教派に及び，……人々の間に……仲間割れとを引起して『ここを見よ』と叫ぶ者もあれば，『かしこを見よ』と叫ぶ者もあり，……

……ある日のこと，私は新約聖書ヤコブ書第一章第五節の『汝らの中もし智恵の欠くる者あらば，惜しむことなく，また咎むることなく，すべての人に与うる神に求むべし，さらば与えられん』という所を読んでいた。

どの聖句にもまさって，この時ほどこの言葉が私の心に真に力強く迫って来たことはない。それは私の心の底と言う底を大きな力で貫き通すような気がした。私はこの言葉を再三再四思いめぐらして，もし誰か神よりの智恵を必要とするならば，正にそれは私であることを知った。なぜならばこの際私はどうしてよいか知らなかったし，当時の私の智恵よりももっと深い智恵が得られなかったなら私は為すべき方法を知らなかったからである。それと言うのも，……宗教々師たちは，聖書の同じ章句をめいめい非常に異って解釈し，その結果人が聖書に訴えて疑問を決しようとする信頼をことごとくうちこわしていたからである。

とうとう私はこのまま暗黒と混乱の中に止まらねばならぬのか，それともヤコブの指図をする通り神に願わねばならぬのか，どちらかにせねばならぬという結論に達した。……

そこで神に願うと言うこの決心に従い，これを実行しようとして私は森の中へ人を避けて入り込んだ。それは千八百二十年の早春，一点の雲もない美しい朝であった。

私は，……ひざまずいて自分の心の願いを神に祈り始めたが……

私は自分の真上に太陽にも増して輝く一つの光の柱を見た。そしてその光の柱は次第に下りてきて，光はついに私の上にふり注いだ。

……そしてその光が私の上に留った時，私は筆紙に尽し難い輝きと栄光とを有ちたもう二人の御方が私の

真上の空中に立ちたもうのを見た。そしてその中のお一人が私に言葉をかけて私の名を呼びたまい，他のお一人を指して『こはわが愛子なり，彼に聞け』と仰せられた。」（ジョセフ・スミス2：5,11―17）

御父と御子イエス・キリストがジョセフ・スミスにそのみ姿を現わされたのである。こうして時満ちたる神権時代の朝が訪れ，長い霊の暗黒は追い払われたのであった。まさに創造の時，光がやみに取って代り，昼が夜に続いたように。

その時から今日まで，真理は絶えることなく存在している。現に私たちは真理を手にすることができる。かつてのイスラエルの子らと同じように，果てしない長いさすらいの日々は，私たちが個々の約束の地に入ることで終わりを告げるのである。

福音の回復は，著名な教育者ロバート・ゴートン・スプラウルが述べた暗影を追い払うものである。スプラウルはアメリカ各地に散在する教会を調査し，次のように言明している。

「わが合衆国には，すべてがそうだと言えないまでもかなりの数に上る人々が，実際にはキリスト教を信じていないのにキリスト教的信仰生活を送っているという特有の姿が見られる。私たちは教会に行き，教えを受けるように言われているが，そのようにして，分かることは，教会の声が霊感によって与えられたものではないということである。今日の教会の声は，私たちの声の反響にすぎない。したがって，教会に足を向けても幻滅以外の何物も生じないことは明らかである。このような悪循環を脱する道はただひとつ，それは私たちの声ではなく，私たちの信ぜざるを得ない存在からの声，すなわち真実の声を求めることである。牧師のこの世における務めは，この声を聞き，私たちにその声を聞くように仕向け，またその声が語るところを私たちに教えることである。もし牧師がその声を聞くことができず，また教えることもできないとすれば，私たち俗人は完全に道に迷ってしまう。その声がなければ，天地が創造されなかったように，世界を救うこともできないのである。（*Vital Speeches*1940年9月1日，p. 701）

かの有名なウインストン・チャーチルの言葉は，世界の切迫した必要を最も端的に表わしていると言えよう。チャーチルは次のように述べている。「おそらく私ほど多くの経験をした人はいないと思う。今日私たちの前に明らかになってきた，予言者が必要であるという状況ほどに忍耐，沈着さ，勇気そして不屈の精神を必要とし，私を悩ませた問題はない。」

今日，私たちは神の予言者スペンサー・W・キンボール大管長の声を聞いている。この説教壇からキンボール大管長は全世界の人々に呼び掛けているのである。「旅人よ，さすらいの旅をやめて帰りなさい。イエス・キリストの福音に来なさい。あなたの霊の故郷である天の港に帰りなさい。あなたはそこで真理を見いだすであろう。また神会の御三方が実在することと，救いの計画に伴う慰め，結婚の誓約の神聖さ，祈りの力を知るであろう。霊の故郷に帰りなさい」と。

多くの人々は，誘拐されて遠くの村に連れて行かれた幼い男の子の話をずっと前から知っていると思う。男の子はこのような境遇の中で，実の両親のことも住んでいた家のことも知らないまま若者に成長した。若者は激しい望郷の念に駆られた。

しかし，目指す家はどこにあるのだろう。両親はどこにいるのだろうか。せめて親の名前さえ覚えていれば希望がないわけではなかっただろうに。若者は必死になって子供の頃の出来事を思い出そうとした。

一瞬のひらめきにも似た霊感によって，若者は鐘の音を思い出した。村の教会の塔から安息日の朝ごとに鳴り響いていた鐘の音だった。村から村へ，若者は聞き覚えのある鐘の音を捜して放浪の旅を続けた。似たような音もあれば，記憶とは程遠い音もあった。

疲れ果てた若者はある日曜日の朝，ついに，とある町の教会の前に立った。鐘が鳴り始めると，じっと耳を傾けた。聞き覚えのある音だった。それまでに聞いたどの音とも違う，紛れもなく若者の幼少時代の記憶の中に鳴り響いていた鐘の音だったのである。まさしく同じ鐘，鐘の響きであった。若者の目に涙があふれた。若者の心は喜びと感謝の気持ちで一杯だった。若者は崩れるようにその場にひざまずき，鐘のある塔のかなたを仰ぎながら，「神様，ありがとう。私は家に帰りました。」と感謝の祈りを捧げた。

聞き覚えのある鐘の音と同じように，イエス・キリストの真の福音は熱心に求める人の心に響く。皆さんの多くは記憶に残る鐘の音を捜して長い旅を続けてこられた。末日聖徒イエス・キリスト教会は皆さんに心からお願いしたい。宣教師にあなたのとびらを開けなさい。神のみ言葉に心を開きなさい。あなたの心，あなたの身と霊を開いて真理を証する静かな細い声に耳を傾けなさい，と。予言者イザヤは「…『これは道だ，これに歩め』という言葉を耳に聞く」（イザヤ30：21）と約束している。そうすれば，先の若者のように，皆さんもまたひざまずいて，「主よ帰ってまいりました」と感謝することであろう。

皆さんの上に祝福があるようにイエス・キリストのみ名によって祈っている。アーメン。

自由意志を用いて

十二使徒評議員会会員

デルバート・L・ステイプレー

兄弟姉妹ならびに友人の皆さん。神が人類に与えられた最も大切な賜は自由意志の原則，つまり永遠の父なる神がこの世の霊の子供たちに教えて下さった選択の権利である。これは，人が地球に住むようになる前に天上の大会議で定められたことである。神の子供たちは霊の状態にある時に選択の自由を与えられた。そこで神の計画が明らかにされ，彼らは自由の身に生まれ，この世で自分の思うままに選び，行動する，他に譲ることのできない自由の権利を受け継ぐようになったのである。永遠の進歩のためには，善悪両方の影響下に置かれるということが絶対に必要であった。

古代アメリカに住んでいたニーファイ人の予言者リーハイは次のように述べている。

「それは，すべての物事には必ずその反対のものがなければならぬからである。…もしも物事にその反対のものがないならば，正義も不正も聖潔も憐むべき様も善も悪も生ずることができぬ。」(IIニーファイ2：11)

私たちは天父の息子，娘として，現世において行使すべく，この自由意志という賜を付与されている。私たちは善を選び，主なる神が命じられるすべてのことをするかどうか試しを受ける。私たちは神の霊の子供として，正しい選択を通して自由意志を伸ばし，親切，謙遜，初志を貫くといった特質を身に着けるために必要な，良心という力を生来受け継いでいる。

ブルース・R・マッコンキー長老は自由意志について次のように述べている。

「自由意志が存在するためには，四つの偉大な原則が貫かれなければならない。1. 律法が存在しなければならない。全能の神の力によって定められた律法，従うことも従わないこともできる律法が必要である。2. 反対のものが存在しなければならない。善と悪，美徳と悪徳，正と誤，つまり引く力と押す力の反対のものがなければならないのである。3. 自由意志を享受する者は善悪を知らなければならない。つまり，相反するものの違いを知る必要がある。4. 束縛のない選択の力が強くなければならない。

自由意志は偉大な赦しの計画の中でも不可欠の位置を占めるものとして人々に与えられたものである。(*Mormon Doctrine*「モルモンの教義」p. 26)

すべて善きものは神からもたらされ，反対に悪しきものはサタンから来るものである。そのことをブリガム・ヤングは次のように説明している。

「地上には神に付くか，それとも世，つまり悪魔に付くかのふたつの群れしかないのである。キリスト教徒や異教徒の人々が唱える宗教や宗派がどれほどあろうとも，またどれほど異なる教義が存在しようとも，分けられるのはふたつしかない。すなわち天または神に付くものか，あるいは神の日の光栄の王国とはおよそかけ離れた王国しかない。(*Discourses of Brigham Young*「ブリガム・ヤング説教集」ジョン・A・ウイッツオー編，p. 70)

自由意志は神とともに永遠に存在する不変の原則である。私たちが自分の生活で賢明に使うようにという願いのもとに神が与えて下さった贈物である。選択の自由とは，私たちが何か事を行なう時に，あるいは決定を下す時に第一義的に考えなければならない道義上の規範と言える。

「この自由意志の力によって，皆さんや私そして全人類が責任ある者とされ，みずから選ぶ道や人生，身体を使って行なう行為に対して責任を

負うことになる。」（*Discourses of Wilford Woodruff*「ウイルフォード・ウッドラフ説教集」pp. 8，9）

私たちは邪悪な行為を正当化するために自由意志を行使することはできない。人間は生活の中で自由に善悪を選び，その選びによって主の戒めに従順になることも，不従順になることもできる。いかなる強制も抑制も受けることなく選択できるのである。

自由意志は，悪事を働き，他人の権利や特権を侵害するような自由ではない。私たちは罪を犯した人が次のように言って自己を慰めているのをよく耳にする。「別に他人に迷惑を掛けてるわけではなし，いいじゃないか。」しかし人がもし，姦淫の罪を犯す道を選ぶなら，罪の罰を受けなければならない。その人は，彼を愛し彼に導きと模範，家族の一致によってもたらされる永遠の祝福を求めている人々を忘れて，罪の故に自分の妻や家族の権利を侵害していることになる。この人は，彼が言うところの「自由意志の行使」によって，結局他人を傷つけている。

自由意志に対してこうした誤った考えを抱いている人があまりにも多い。彼らは自由意志を良い方向に用いるのでなく，悪い方向に用いている。おそらく，皆さんは次のような言葉を耳にしたことがあると思う。「自分が望むなら，タバコを吸おうが，酒を飲もうが私の勝手でしょう。私の自由意志なんだから。」なぜ彼らは永遠の価値観に立って物事を考えて，こう言えないのだろうか。「もちろん私には自由意志がありますから，自分でそう望むならば，タバコを吸うことも酒を飲むこともできます。でも私は，自分の生活を改善し，悪ではなく，正義を選ぶために自由意志を用いたいのです。」これは人の生活に見られるあらゆる悪徳に対しても言えることである。もし私たちが正しい心構えを持つならば，悪徳は美徳に変えられ，その美徳はそれ相応の報いを受けるものである。良きことのために自由意志を用いるために，私たちはまず罪人が持つ言い訳がましい，尊大で傲慢な態度を取り除く必要がある。

ブリガム・ヤングはこう述べている。「人は万事自分の気に入った通りにするように許されてはいない。なぜなら，良い社会にはかならずそれを統制する規則がある。……規則に違背することは，市民生活の上でも宗教生活の上でも容認できないことである。人は，相手が神であろうが人間であろうが罪を犯したならば，かならずその罪に値する罰を受けなければならないのである。」（「ブリガム・ヤング説教集」p. 65）

それでは自由意志はどの範囲まで行使できるものだろうか。ブリガム・ヤングは次のように答えている。「自由意志には限界がある。これはすべての物質，生物にも言えることである。人間の自由意志はこうした法則を犯すことはできないのである。人は命か死かのどちらかを選択しなければならない。……人に与えられた自由意志には責任が伴っており，律法に反することを行えば，かならず全能者の手にゆだねられて正されるか，罰せられなければならない。

私たちは慎重に用いて，与えられた自由意志を失うことのないようにしなければならない。義人と罪人，永遠の生命と死，幸福と不幸の間の相違はこうである。昇栄した人々に与えられる特権に制限はなく，とどまる所を知らない。またその祝福は絶えることがなく，……彼らは永遠に増し加えられるのである。ところが，その賜を拒み，主の賜わった憐れみを軽んじ，みずからを主のみ前から遠ざけ，悪魔と交わりを持つようになった人は直ちにその自由意志を制限され，その行動もまた制限される。」（「ブリガム・ヤング説教集」pp. 63—64）

神は戒めを与えられた時，律法に従えば祝福を与えるが，律法に背けば罰を与えるという約束をされた。故ジェームズ・E・タルメージ長老は次のように述べている。「律法に対する従順は自由人の習いである。罪人は律法を恐れる。それは，律法が自分の自由を擁護してくれるからではなく，律法に敵対するがためにかえって自由が奪われ，制限されるからである。神の子供たちを強制的に罪に至らせるような邪悪な力を許されるのが神の目的ではないならば，人を力ずくで義に向かわせるのも神の計画ではないのである。」（*The Great Apostasy*「大背教」pp. 34—35）

いかなる人間，あるいはサタンや主といえども人の自由意志を奪うことはできない。人は決してお互いを隷属する関係に置いてはならない。サタンは私たちをその支配下に置こうとする。しかし神は人の行動を強いることはない。私たちに自由意志を与えて，あらゆる種類の試練や誘惑，邪悪と戦うようにして下さった。しかももし従順であるならば，神のみ前にたち帰ることができるように私たちを導く原則を示された。神の王国の基は完全な自由の上にある。老若男女を問わずすべての人は，自分の良心の命ずるままに神を礼拝する権利が与えられている。自己の行動に対して創造主に責任を負うのはその本人をおいてほかにはない。

神は永遠の福音，生命と救いの原則を私たちに示された。そして私たちが自分の行動の結果を主に対して責任を執ることを了解した上で，選ぶも拒むも私たちに任された。主はだれにも福音を受け入れるように強

制されないし，もし受け入れたとしてもそれを守るように強制されることもない。「彼らは自分で行動し，自分で選び取るのである。」（「ブリガム・ヤング説教集」p. 57）

神がこの地上の子供たちの中でみ業をなされる時，サタンも大きな力を振るう。時の初め以来，すべての福音の神権時代は，神に力がなかったからではなく，人が自由意志を誤用し神につまずくことによってその終焉を迎えた。

現在，サタンが人々の心に入って荒々しい行いをさせていることは明白な事実である。聖典の言葉を借りれば，現在はまさにサタンがみずからの領土を支配している時である。人類の父祖アダムとイヴを巧みに誘惑して以来，サタンの偽りと誘惑の力は決して絶えることなく人々に及んできた。しかも現代ほどその力が効果的に，そして恐るべき勢いで人々の心をむしばんでいる時もないのである。

サタンの力に対して免疫になっている人などだれもいはしない。救い主でさえも3度も大きな誘惑に遭われたが，決してそれらの誘惑に屈服することはなかった。

私たちもまた，試練のひとつとしてキリストのように誘惑に遭うことが必要なのかも知れない。主は次のように述べておられるからである。

「さりながら，悪魔が人の子らを試むるは是非必要なり。すなわち人は悪魔の誘惑なければ己が自由意志を使い得ず，何となれば，人もし苦きを知らざれば甘きを知り得ざればなり。」（教義と聖約29：39）

サタンの狡猾な働きに注意し，気を付けていただきたい。サタンは決っして私たちを惑わすことをやめたりはしない。物事を人の気にいるようにしたり，あるいは正しく見せ掛けることにかけては天才である。その実，私たちを道徳的退廃へと導くのである。またサタンは自由意志を認めず，私たちの心や思い，行動をすべて支配しようとする。こうしたサタンの働きを，私たちは映画や雑誌，テレビ番組の中だけでなく，しばしば人々や国家の行動の中にも目にするようになってきた。もし私たちの思いが肉欲のことに傾いているなら，私たちは自由意志への誤用へと強い誘惑を受けることであろう。

人はひとたび罪を犯すと，サタンの支配下に置かれ，なかなかそこから脱出することができなくなってくる。

あなたを妥協点に連れていく人を警戒しなさい。正義に妥協は許されない。妥協は罪を生み，罪は後悔を生む。後悔は人を深く傷つけるからである。

自分を制することのできない者は決して自由にはなれない。真の自由意志とは神の律法に従ってはじめて得られるものである。心していただきたい。善と悪とは決して解け合うことはないのである。ふたつは相反するものであり，人の中で調和をとりながら共存し合うことはないイエスが教えられたように，かならず一方が他方を支配するようになるのである。

「だれも，ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し，あるいは，一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは，神と富とに兼ね仕えることはできない。」（マタイ6：24）

中間の道はない。私たちはサタンの邪悪な働き掛けに打ち勝つために堅固な礎を築かなければならない。

人は，神が与えたもう昇栄を得るために，自由意志を正しく使い，神の律法と戒めに従う必要がある。

自由意志は，もし正しく，賢明に用いるならば神の王国で奉仕する機会を与えるものである。そして天から数多くのえりすぐりの祝福を受け，喜びと幸福に満ちた，日の光栄の永遠の生命を授かるのである。

ウイルフォード・ウッドラフ大管長は次のように述べている。

「私たちは現在，ひとつの偉大な学校にいる。そこは非常な有意義なところである。そこで毎日重要なレッスンを学んでいる。心をみがき，思いを制してすべてを完全に神の律法とみたまに従わせるよう教えられている。そして私たちは一致し，心をひとつにしてこの地上に神の目的を完成させなければならない。」（*Discourses of Wilford Woodruff*「ウイルフォード・ウッドラフ説教集」pp. 10—11）

キリストこそ私たちの教師である。キリストはみずからの模範を通して，私たちが自由意志を用いて永遠の生命を得る道を示して下さった。

私たちは自分に与えられた自由意志をどのように使っているだろうか。神に近づくように努めているだろうか。それとも神から離れてはいないだろうか。神が与えたもうたこの賜を行使する時に喜びと幸福感を味わっているだろうか。またそれは自分の進歩に役立っているだろうか。

私たちの自由意志を用いて，神の律法に従い，それを守る時に得られる約束と祝福と，そうできなかった場合のこととを深く考えていただきたい。

願わくは，神の祝福があって，私たちが勇気と希望をもってこの自由意志を正しく，かつ真理に基づいた方法で用いることができるように，イエス・キリストのみ名によりへりくだってお祈り申し上げる。アーメン。

賛　辞

十二使徒評議員会会員

L・トム・ペリー

なかなかうまく表現することができないが，生涯を奉仕に捧げ，そこに喜びを見いだしたひとりの気高い女性にこの席で賛辞を呈したいと思う。

私たちがはじめて会ったのは，今から30年前私がちょうどステーキ部MIAの書記に召された時のことである。彼女はあるワード部の管理役員であった。私はステーキ部の指導者会で出席を取る責任を受けていた。当時，私たちはひとりずつ立ってもらって出席を取っていた。ある晩，ワード部ごとに出席を取っていた時のことである。私は若い男性の方を雑作無く終え，次に若い女性たちの出席を取り始めた。突然，私の目はひとりの美しい女性にくぎ付けになった。もう出席人数などどうでもよかった。私はきょう教会の歴史記録者に告白したいと思う。教会の記録保管庫にある当時の記録でこの集会の項は正確でないと。

それから８カ月後，私は彼女の手を取って，主の宮居の聖壇にひざまづいた。そしてこの地上で述べられた最も栄えある言葉，「今も永世にも」という言葉に耳を傾けていた。その時，私は主より権能を受けた者によって結婚の結び固めを受け，もしふさわしい生活を続けるならば愛する伴侶とこの世にあっても来るべき世にあっても結び固められるという約束を賜わった。結婚して数日を経ずして，私は彼女が隣人に対する深い愛を持った人であることを知った。台所からただよってくるおいしそうなにおいが，すべて私のためのものとは限らなかった。困っている人を見たら，手をこまねいて放って置くことのできない人であった。

私が多忙な毎日の仕事を終えて家に帰り，しかも翌朝までに完成しなければならない仕事を持って帰っている時でも，その晩困っている人に奉仕を行なうために出掛けていかければならないことがよくあった。そして車でその場所に行く途中も，心の中でこうつぶやいていた。「どうして私が今晩出掛けなければならないのだろうか。明日の朝までに完成しなければならない仕事もあるというのに。」そんな私が目的地に着いて目にするのはいつも目を輝やかせて，人々に愛を示している彼女の姿だった。子供たちはうれしそうに跳び回り，その両親は彼女の思いやりに涙ぐんでいた。帰途の私はまったく心を洗われた思いで，その晩その場におれたことを心の中で主に感謝していたのである。

妻は家族の中の自分の役割りについてよく理解していた。彼女は神が望んでおられることを喜んで果たした。私に対しても深い信頼を寄せ，私が割り当てられたことはかならず実行すると深く信じていた。私の責任は，よく働き，家庭の守護者，建設者となることであった。そして彼女の責任は家庭の中に愛と麗わしさを増すことであった。私たちが結婚した時，すでに彼女は仕事の面でかなりの経験を積んでいた。私はまだ学問を続けなければならなかった。初めは，確かに彼女の給料が私のを上回っていた。しかし，ある晩私が家にもどって大学の卒業資格を得たことを告げると，彼女は翌朝，躊躇することなく，責任者のところに行って仕事をやめてしまった。彼女にとって主婦という仕事は何にもまして大切なものであった。また母親となることは最も高貴な召しだと考えていた。家庭における彼女の子供たちへの愛と関心と思いやりは際立っていた。

この慈愛に満ちた行為が家族の中に広まっていった時，間もなく私たちの家族に予期せぬことが起こり始めた。数年前，私たち一家はカリフ

ォルニア州に移った。そして家屋を購入するお金をためるために，しばらく家財道具一式整ったアパートを貸りた。そこで私たちの家財道具は物置きにしまっておくことにした。ある晩，聖餐会で，私たちのところから数キロ離れた地域に住む人々がひどい洪水に見舞われ，困っているので皆さんの援助をお願いしたいと監督から要請があった。それから数日後仕事を終えて家に帰ってみると，玄関にトレーラーが止まっていた。私は一体何が起こったのだろうかと足早に家の中に入っていった。すると妻の返事はこうだった。「あら，言ってなかったかしら。先週聖餐会の後で，洪水で困っている人を救うために私たちの使っていたものでよかったら，どうぞと監督に申し上げておいたんですよ。」

また妻は，日曜日に教会で遠方から来られた旅行者に会うと，すぐに自分の家に泊めていた。しかも私がそのことを何も知らず，その晩教会の責任を終えて帰ると，その人たちが余分の寝室にいる。そしてはじめて気付くといった風であった。どういう人々が多いかと言えば，部屋を捜している学生，父親の転勤で新しい住居を捜している家族，そのほか海外での仕事を終えて帰って来た家族などいろいろな人がいた。私たちは住む所が見付かるまで，いつも喜んで彼らに家を提供した。

こうした数多くの親切にもかかわらず，彼女にとって決して十分ということはなかった。5年ほど前，彼女が不治の病を患っていることを告げられ，私たちは大きな衝撃を受けた。生き長らえられたとしても，半年から1年とのことであった。しかし妻はそれを信仰と勇気でしっかりと受け止めていた。私はこれほどの勇気と信仰を目にすることは二度とあるまいと思ったほどである。医者がこのことを私たちに告げた時も，私の方を向いてできる限り平静に，しかも自分の信仰を奮い起こしてこう言った。「このことはだれにも言わないで下さい。私たちの今の生活を変えたくもないし，病人だからと言ってだれにも特別扱いしてもらいたくありません。こうして彼女の肉体の苦痛との戦いが始まった。しかし，そのことは肉体的に助けを必要としている人々への思いやりの気持を深めることになっただけであった。そして必要なものが与えられていることへの感謝の念はより大きなものとなり，人々に対する関心はさらに高められた。

その後短い間に大手術が3回も連続して行なわれた。そのことを知っていたのはごくわずかな人で，皆秘密にするよう約束させられていた。入院中の生活はいつも同じで変わることがなかった。綿密な計画を立て，まず日曜日に教会に出席した。そして月曜日の朝早く手術を行なう。火曜日には，ベッドから降りる訓練をする。水曜日には少しずつ歩き回り，体力の回復に努める。そして木曜日はもう看護婦を助けて，病院にいる他の患者の世話をしている。金曜日になると，医者のところに行って家に帰してくれるよう説得する。そして土曜日の早朝には医者もあきらめてしまって彼女を退院させる。日曜日，再び明るい顔で教会に出てくる。だれひとり彼女が大手術をしたと考える人はいない。集会が終わるとすぐに，私は彼女を家に連れて帰り，必要な休息を取らせる。私ができるだけ彼女のそばにいて助けようとすると，きまってほかの困っている人のことを口にする。「もう私は大丈夫です。今度の木曜日の晩にはごちそうを作って待ってますわ。」

妻は病気を完全に主のみ手にゆだねていた。そして主は妻を祝福し，病気に耐え，自分の望み通りの生活をする力を授けて下さった。病気が重くなったある晩，私は妻にベッドで休んでいるよう言い聞かせた。それでも彼女の返事は変わらなかった。「いいえ，私はそのような生活はしたくありません。」

主は彼女を祝福し，さらに4年間も余命を与えて下さった。医学の力ではこれは不可能なことであった。私たちにとって，この年月ほど祝福された日々はなかった。私がこの重大な職に召され，妻とそろって壇上に立ったのは，その間のことであった。

こうして妻は，私に寄せてきた期待がある程度達成されるのを見ることができたのである。

主は彼女を主のみもとに呼びもどすに一番良い時を待っておられた。私がその年の多忙な旅行を終えるのを待っておられた。使徒に召されて数カ月後，初めて家で過ごした土曜日に，彼女はこの世を去って主のみもとに召されたのである。

その最後がまた彼女らしかった。妻は起きて，家族のために朝食の用意をしていた。すると突然，皿を落とす音が聞こえ，彼女の小さなうめき声がしてきた。私は彼女の身に何か起こったと思って急いで書斎を出た。彼女は発作を起こし，そのために右手がまったくきかなくなっていた。私は素早やく彼女を抱き上げ，そばの長いすに横たえた。この長いすは妻が昼間でも休むことができるように台所の近くに置いていたものである。

目には恐れの気持ちが表われ，麻痺状態はわき腹に広がってきた。私は急いで医者を呼んで来ることを彼女に告げた。すると妻は，「まず，私を祝福して下さい」と頼んだ。私は彼女の頭に両手を按いた。その時主の大いなる憐れみによって，私は最

後の時が来たことを知らされた。祝福を授けて医者を呼ぶために部屋を出る時も，彼女は何とかして右手と右足を動かそうとしていた。そして私が聞いた彼女の最後の言葉はこうであった。「私は普通の人間の半分をも生きられませんでした。」

それからの，この世における最後の2時間はまさに彼女の生涯を物語っていた。つまり，自分のことを二の次にし，いつも人のために援助を惜しまないその姿であった。主は憐れみによって，彼女を幕の彼方に連れて行き，心痛と肉体的な苦痛を取り去って下さった。そして今彼女は再び，幸せな生活を送っている。そんな彼女の住むパラダイスはきっと素晴らしい所に違いない。

数百通にも上る同情の手紙をいただき，私たちは心から感謝している。もしここでそれらを分類するとすれば，彼女のこの地上での生活から見てふた通りの山に分けられるかもしれない。最初の手紙の山を代表するものとして合衆国東部のある人から寄せられた手紙を紹介したい。「私たちがはじめて手にしたモルモン経は彼女が下さったもので，私たちにとっては霊感の人でもあります。またバプテスマの日に家族に示して下さった温かい思いやりを私たちは決して忘れることはできません。その晩には夕食に招待され，本当に楽しい一時を過ごさせていただきました。」

妻はイエス・キリストの教会員であることを心から感謝していた。彼女の人生はその基の上に築かれたものであった。さらにキリスト教会の会員であることが彼女の支えであり，永遠の希望となっていた。そして私たちの主，救い主の使命についての自分の証を多くの人に分かち合いたいと思っていた。また妻の貯蔵プログラムの中には，小麦やかん詰め，その他の貯蔵物資のほかに12冊のモルモン経があった。しかも彼女はそれらを他の貯蔵物資と同じように定期的に数え，いつも補充していった。モルモン経を購入しておくことについて彼女はこう述べている。「食糧品は使ってしまうと，なくなります。でもモルモン経をプレゼントすれば，それから受ける恵みと喜びは決して絶えることがありません。」

2番目の手紙の山にある手紙には次のように記されている。「彼女は妻であり，母親であると同時に私のステーキ部の霊的生活の教師でもありました。私は45分間のレッスンを毎月1回欠かすことなく約1年間受けてきましたが，それは私の生活に大きな影響を及ぼすようになりました。私にとって彼女は決して忘れることができない人のひとりです。彼女は私に霊的生活を模範で示して下さいました。いつも人々の必要としていることを理解し，それを満たしてやるように一生懸命に努力していました。

主は私たちにこう言われた。「汝相愛して共にこの世に生きよ。されば死にたる者を失いたるために涙を流し，ことに栄光ある復活の望みを有たざる者のためにいよいよ歎き悲しめ。

およそ，われにありて死ぬる者は死を味わうことなし。そは死は彼らにとりて甘ければなり。」（教義と聖約42：45—46）

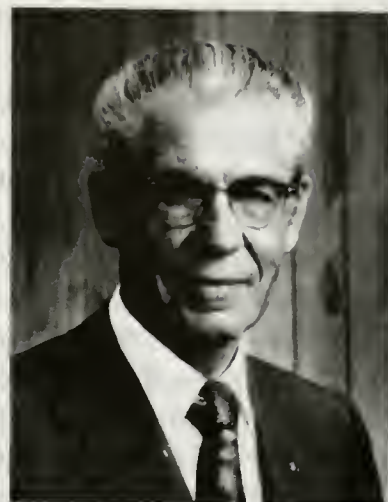
私は今ほどこの聖句を身にしみて感じたことはない。私にとって彼女がいないことは寂しいことではあるが，彼女にとってその死は甘いものであった。そのことは彼女の生前の生活が物語っている。

今，私は彼女に心から感謝し，皆さんもそのような生活をするように勧めたい。私は奉仕によって苦痛を和らげ，信仰によって落胆した心を奮い立たせる姿をこの目で見てきた。また勇気が彼女の生来の力をさらに大いなるものとし，愛が生活の在り方を変える様を目撃してきた。

願わくは神の祝福があって，こうした彼女の思い出が皆さんの生活に喜びと満足を与えることができるように，イエス・キリストのみ名によってへりくだり祈っている。アーメン。

アメリカにおけるキリスト

大管長会第一副管長

N・エルドン・タナー

先日，南アメリカの偉大な国々を訪問し，その地の献身的な聖徒たちの信仰と熱意に触れ，同時にモルモン経の背景となった地にいるのだとの実感を味わってもどってきた。そのこともあって，今私はモルモン経について是非話をしたいという気持ちに駆られている。この書物には，古代アメリカ大陸の住民の歴史が記されている。

ブラジルのサンパウロとアルゼンチンのブエノスアイレスにおいて催された地域総大会で，みたまにあふれた数々の会に出席し，大勢の素晴らしい兄弟や姉妹たちと交わった。そして，彼らの純粋な信仰と，主に仕えてこの地上に主の王国を確立したいという大きな望みに，強く心を打たれた。

私たちの予言者であるキンボール大管長が，彼らの中に立った時に彼らに示した愛，そして大管長が，取り巻く人々に祝福と助言を与えた時に彼らの目にあふれた喜びの涙，これはまことに心温まる光景であった。その有り様を見ながら，私は，古代のニーファイ人も復活した主の訪れを受けて同じように麗しい経験をしたに違いないと思い巡らしていた。主は確かに西半球に住む他の羊を訪れたもうたのである。そして彼らは主の羊の群れに入り，主の福音を説き踏み行なうためのひとつの組織を与えられたのであった。

そのことは，モルモン経の中で，ニーファイ第三書と呼ばれている箇所に記されている。私は今日，このことについて述べたい。しかしその前に，モルモン経の存在が確かであり，かならず世に現われるということを証している予言を聖書から幾つか引用したいと思う。

次に挙げるのは，旧約聖書のエゼキエル書の言葉である。「人の子よ，あなたは一本の木を取り，その上に『ユダおよびその友であるイスラエルの子孫のために』と書き，また一本の木を取って，その上に『ヨセフおよびその友であるイスラエルの全家のために』と書け。これはエフライムの木である。あなたはこれらを合わせて，一つの木となせ。これらはあなたの手で一つになる。」（エゼキエル37：16，17）

この書の内容から，これらの木は聖書とモルモン経を指すということが分かる。また，モルモン経がどのようにして世に現われたかを知ると，黙示者ヨハネの語った言葉の意味がよく理解できる。すなわち，ひとりの天使が実際に天より下り，モルモン経の翻訳のための原版となった記録をジョセフ・スミスに渡したのであった。黙示録には次のように記されている。

「わたしは，もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者，すなわち，あらゆる国民，部族，国語，民族に宣べ伝えるために，永遠の福音をたずさえてきて，大声で言った，『神をおそれ，神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを，伏し拝め』。」（黙示14：6，7）

神は世の初めからすべての神の子らに関心を示して来られたが，今日でも同じように私たちに関心を寄せておられる。これを裏付ける聖句は沢山ある。したがって私たちは，この末の日にも神は予言者を通して絶えず啓示を下し，私たちを導かれることを信じている。予言者アモスはこう言っている。「まことに主なる神は，そのしもべである予言者にその隠れた事を示さないでは，何事をもなされない。」（アモス3：7）

救い主は次のように語っておられる。「わたしにはまた，この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らを

も導かねばならない。彼らも，わたしの声に聞き従うであろう。そして，ついに一つの群れ，ひとりの羊飼となるであろう。」（ヨハネ10：16）

このことから，救い主が十字架の刑を受けて復活した後，予言されていたしるしと驚異のうちに西半球の民を訪れたもうたわけが明らかである。それは，主はこの世においてともに暮らした民に，主の福音を学び，それに従って生活する機会と特権を与えられたが，この西半球の民にも同じ機会と特権を与えるためであった。

この訪れを記したニーファイ第三書の記録以上に，神と人との交わりを美しくかつ詳しく記した記録は，聖典のどこを捜しても見いだせないと思う。私はこの記録を読むようにすべての人々に勧めたい。そこにあるのは警告の言葉と，美しい教え以外の何ものでもない。これらの警告と教えを受け入れ，それに従って生活するならば，それは世の人々や，このような生き方を求めている人に，ほかの何物にもまして平安と幸福をもたらすものとなるであろう。また，聖書では答えることのできない数多くの疑問に対しても，適確な解答を得ることができる。

ニーファイ第三書は，新約聖書の4つの福音書よりも詳細に，多くの知識を提供してくれる。さらにそこには，主の教義と教え，そして主の慈悲がそのままに記されている。この理由から，多くの人々はニーファイ第三書を「第5の福音書」と呼んでいる。

ニーファイ第三書は，キリストの誕生を告げる予言の記事で始まる。しかし，世の始めからその時に至るまで，また今日においても見られるように，その予言をあざけり，予言者の言葉が成就する時はすでに過ぎたと言う者たちが多かった。そして彼らはある一日を定めて，その日までに予言されたしるしが現われなければ，信じる者たちをすべて殺すことにしたのである。

そのことでニーファイは「熱心に主に祈りを捧げた。」（Ⅲニーファイ1：12）それに対して主はニーファイのもとを訪れ聖なる予言者の告げたことが成就する時は，間近であると答えられた。こうしてすべてのしるしが現われ，新しい星が空に出たので，予言を信じなかった者たちは「地に倒れて死んだようになった。」（Ⅲニーファイ1：16）ここに私たちが学ぶべき第一の教訓がある。つまり神の予言者の言葉はかならず成就するのである。

しかし，民は間もなく，自分たちの経験したしるしと驚異をすべて忘れてしまい，悪事にふけるようになった。そして戦いがあり，ガデアントン強盗団が興り，国が荒廃し始めた。そのような中で，正義を守って主を呼び求めたニーファイ人たちは彼らの敵を打ち負かすことができた。そして自分たちの救われたことについて神をたたえたのである。

記録にあるように，彼らは「かれらの罪や憎むべき行いやみだらな行いをことごとく捨てて夜昼熱心に神に仕えた。」（Ⅲニーファイ5：3）こうして彼らは栄えた。

「多くの都市が新しく建てられ，多くの古い都市が修理され，都市から都市へ，地方から地方へ，また所から所へ行く多くの街道が開通された。」（Ⅲニーファイ6：7，8）

このように，モルモン経の記録は，この地方に古代文明が栄えていたことを証している。学問のない一介の若者が神の賜と力によって翻訳したモルモン経は，現在科学が証明しつつある事柄を，非常に詳細かついきいきと描写しているのである。

まことにこれは，この末の日に世に出されるよう神の手によって守られてきた真実の記録である。

話をもとにもどそう。今日の世でもそうであるが，民は繁栄すると高慢になり，論争を始めた。ある者たちは故意に神に逆らった。この結果，わずか6年の間に民の大部分は邪悪に陥ってしまった。そこでニーファイは伝道を始め，勇敢に悔い改めを説いた。

悔い改めを説くこと，これは神の予言者の務めである。たとえ受け入れられなくても行なわなければならない義務である。民はニーファイに対して怒ったが，彼は威勢と大きな権能とをもって教えと導きを与えた。

「ニーファイがその主イエス・キリストを信ずる信仰は非常に深くまた固かったから，天使たちが毎日ニーファイに導きと恵みを与え……

ニーファイは，イエスの御名によって悪鬼と汚れた霊とを追い出し，その上民のために石で打ち殺された自分の兄弟を蘇生させた。」（Ⅲニーファイ7：18，19）

その後再び，予言者たちが予言したように，キリストが十字架にかかりたもうたことのしるしが現われ，嵐や地震，暗黒，雷，火がその出来事の証として起った。多くの都市が海中に没し，山々が隆起し，地の全面がその様相を変えた。これは3日間続き，「ある所では民が『この大きな恐しい時が来ない前に悔い改めておけばよかったものを。悔い改めておいたならば，わが兄弟たちは命を助けられて大きな都ゼラヘムラで焼け死ななかったものを』と泣き叫ぶのが聞えた。

またほかの所では民が『この大きな恐しい時が来ない前に，悔改めをして予言者らを殺さず，石でこれを撃たず，また追い出さなければよかったものを。このようなことをしなかったならば，われらの母や美しい

娘や息子たちは命を助けられて，大きな都モロナイハ市で生き埋めにされることはなかったものを』と泣き叫んでひどく悲しむ声が聞えた。このように，民の歎きとうめきとはまことに甚しくまた恐しいものであった。」（Ⅲニーファイ８：24，25）

明らかにこれもひとつの教訓である。過去の歴史を見ると，予言者を拒み，邪悪な行ないを悔い改めようとしなかった者たちは災いを被り，予言者の警告を心に留めなかったことを嘆き悲しみ，後悔している。御存じのように，主の使徒たちも，神の王国を築き，民を悔い改めさせて幸せな生活に入らせようと努めたというだけの理由で迫害を受け，石で撃たれたのである。

今日の世の人々は，神の予言者の言葉を拒んでいる。戦争が操り返されているが，地の面を嘆きとうめきが覆っているとはいえないだろうか。また，若人が義の道をそれて，アルコールやタバコ，幻覚剤，その他禁じられたものに手を出し，その結果苦しみを被り，悲劇に陥っていることを，また彼らがいつも気まぐれな行為に走っていることを，大勢の人々が嘆いてはないだろうか。いかに多くの人々が現在の社会に存在している不法行為を，悲しんでいることだろう。私たちは，姿を消した古代文明のようにならないために，過去の歴史から得た教訓を心に留める必要がある。

キリストはこのことを古代のニーファイ人に告げられ，その声は「地のすべての人々に」聞こえた。（Ⅲニーファイ９：１）主は彼らに民の罪悪と憎むべき行為を思い起こさせ，また住民の邪悪のために滅びた数多くの都市のことについて語られた。そして次のように言われた。

「さてこれらの亡びたる者よりも義しきが故に命を助けられたるすべての者どもよ。われが汝らを医すを得るために，汝らは今われに立ち帰りて罪を悔いまた心を改めざるか。

まことにわれ汝らに告げん。もしわれに来らば永遠の生命を得。見よ，われは憐み深き手を汝らに向いて伸べたれば，すべてわれに来る者はわれこれを迎えうる故に幸福なり。」（Ⅲニーファイ９：13，14）

主のみ名によって語る予言者たちを通して，主は今日の人々も同じように招いておられる。この福音は，主がエルサレムで教えられた福音と同じものであり，また，古代のアメリカ人に恵みと祝福を与えるため教会を設立した時に教えられた福音と同じものである。

主の声を聞いた後，大勢のニーファイの民は神殿に集まってイエス・キリストのことと，彼らが耳にした事柄とについて語りあっていた。するとまた声が聞こえた。「わが喜ぶ愛子を見よ。われはこれに由りてすでにわが名の栄光を示しぬ。わが愛子に聞け。」（Ⅲニーファイ11：７）

彼らが天を仰ぐと，天から白い衣を着た一人のお方が下って来られるのが見えた。彼らは自分たちに現われたこの御方を天使であると思っていたが，この御方は次のように言われた。

「見よ，われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。

われは世の光にしてまた世の生命なり。」（Ⅲニーファイ11：10，11）

集まっていた人々は全員地に倒れた。すると救い主は，敬虔な思いと謙遜の念に満たされていた彼らに祝福を与え，教えを授けられた。それから，ニーファイにバプテスマを施す権能を授けられ，次のように言われた。「われは汝に権能を与う。われが再び天に昇りし後，汝はこの権能を以てこの民にバプテスマを施せ。」（Ⅲニーファイ11：21）

主はまた他の者たちを召して，彼らにもこの権能を授けられた。それは，主のみ名によって儀式を施すためには権能が必要だったからである。さらに主は，バプテスマの儀式を施す時に用いる言葉を教え，また水中に沈める方法で執行するように指示を与えられた。これは末日聖徒イエス・キリスト教会で現在用いられているバプテスマの儀式と同じである。主はまた，御自分の説く教義は御父から与えられたものであり，決してそれについて論争してはならないと断言したもうた。そして，12人の弟子に，出て行って，地の果てまで主の言葉を宣べ伝えるように命じられた。

主は彼らに山上の垂訓を与えられたが，これはマタイ伝に記されているものとほとんど同じである。また主は，黄金律を説き，結婚と情欲と不貞に関して教えを授けられた。断食と祈りについても説き，また私たちが主の祈りと呼んでいる偉大な祈りの模範をも示されたのであった。人は神と富とに兼ね仕えることはできない。したがってまず神の王国と神の義とを求めるようにとも教えられた。

主は彼らに多くのたとえ話を語り，救いと昇栄に関するすべての事柄を教えられた。また，御自分の選んだ12人の弟子に特別な指示を与えられた。「汝らはわが弟子にして，ヨセフの家の残れる子孫なるこの民の光なり。

この地は汝らの受けつぐ地にして，御父これを汝らに与えたまえり。」（Ⅲニーファイ15：12，13）

主はニーファイ人に主の言葉を書き留めるよう命じられた。それは，エルサレムの民が聖霊によってニーファイ人や他の部族のことを理解しない時に，これらの記録によって彼

らが他の民族のことを知ることができるようにするためであった。これらの記録は，イスラエルの家に福音を説く手段となるものだからである。

主は民が主の言葉を完全には理解してないことを認め，各自の家に帰って主が言われたことをよく考えるように告げられた。しかし，彼らが涙を流し，しばらく自分たちとともにいて欲しいと望んでいる様子を御覧になって，主は彼らを隣れみ，病人や足や目の不自由な人，病で悩んでいる人々を呼び集め，彼らを癒された。主はまた子供たちを連れてこさせ，その真中に立つと，群集に地にひざまずくように命じられた。

「こう言って自らもひざまずいて御父に祈りたもうた。その祈りは書くことができないが群集の中でこれを聞いた者たちは次のように証を立てた。

『私たちが見たり聞いたりしたイエスの御父に対するお祈りは，人の目がまだ見ず，耳がまだ聞かないほど偉大で驚嘆すべきものである。

これを口で言いあらわせる者もなく，筆で書きあらわせる者もなく，また人間の心で想像できぬほど偉大で驚嘆すべきものである。イエスが，私たちのために御父に祈って居りたもうのを聞いたとき，私たちの心に満ちた喜びは人間の想像ができないものである』と。」（IIIニーファイ17：15，17）

それからイエスは，子供たちを一人一人近よせて祝福を与え，彼らのために祈り，「汝らの子供たちを見よ」と言われた。

「群集がこれを見ようと顔を上げる時天を仰いで見ると，天が開けて天使らが火の中に取り巻かれているような有様で天降り，小供たちを取りかこんだので小供たちもまた火に取りかこまれ，天使らは子供たちに祝福を与えた。」（IIIニーファイ17：23，24）

主は弟子たちに聖餐のパンを与え，次いで群集にそれを与えさせ，こうして民の間に聖餐の儀式が制定された。主はまた，彼らが聖霊を受けたいと願っていることを認め，彼らに聖霊を授けたもうた。さらに主は奇跡を現わし，約束を与え，イザヤの記録とすべての予言者の言葉から主の再臨のしるしについて研究せよと言われた。また来るべき裁きについて警告を与え，什分の一と死者のための業についても教えられた。次いで，主の教会は，主のみ名によって呼ばれることを告げ，再び民に悔い改めるよう警告を与えられた。

「さて，世界の隅々に至る者たちよ。汝らは聖霊を受けて聖められ，また終りの日にわが前に罪なしとせられんために今悔い改め，われに来てわが名によりてバプテスマを受けよ。これ汝らに与うる命令なり。」（IIIニーファイ27：20）

以上の教えはすべて，キリストが復活後ニーファイの民を訪れられた時に彼らに与えられたものである。そして，今日，私たちも主の教会においてまったく同じ教えを受けている。人々がこれらの教えを受け入れてそれに従って生活し，また神を御父とし，その御子イエス・キリストを世の救い主として受け入れるように，私は心から祈っている。スペンサー・W・キンボール大管長を神の予言者として受け入れ，従い，それによって，約束された祝福を享受するように祈るものである。イエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。

信仰——その第1歩

十二使徒評議員会会員

ハワード・W・ハンター

世界中のキリスト教徒は，歴史上最大の出来事と思われることを祝ったばかりである。つまり主が十字架にかけられ，再び墓からよみがえられたことを記念する日である。この出来事はすでに1900年以上の永きにわたって毎春祝われてきた。そして繰り返し，私たちに教えている。暗くて寒い冬が終わりを告げるその日，すべての生き物がその息吹きを始める備えをしていることを。

雪解けが始まると，木々や灌木は新しい芽を吹き出し，つぼみがふくらみ始める。全地が色と温かさのシンフォニーを奏で，新しい生命の訪れを告げる。寒々とした冬から美しい春へと，毎年繰り広げられる自然の移り変わりを目にする度に，やみと絶望のゲッセマネから栄光に満ちた復活へと変転する様が思い起こされる。取り去られた墓の入口の石の前で，こう告げる声があった。「そのかたは，ここにはおられない。よみがえられたのだ。」（ルカ24：6）

復活が現実に起こったことは，それを信じる勇気のある者にとって非常に重大な意味を持っている。しかし，復活は実際にあったのだろうか。イエス・キリストは今も生きておられるのだろうか。またこの地上に来られて福音を宣べ伝え，人類のために命を投げ出されたのだろうか。さらに墓からよみがえられ，私たちが生き返って永遠の生命を受けられるようにして下さったというのは本当だろうか。その証拠はどこにあるのだろうか。もし私たちに十分な知識がなければ，その真理についてどのような方法で知ることができるのだろうか。

皆さんに申し上げたい。私たちはこれらのことが実際に起こったことを心から信じている。それが真実であることを知っている。神は生きておられ，文字通り私たちの天父である。そしてイエス・キリストは神の御子であり，世の贖い主である。このイエス・キリストの贖いの犠牲を通して，かつてこの地上に住んでいた人々も，そしてこれからこの地上を訪れる人々をも含む全人類が死からよみがえって再び命を得るようになったのである。この証は他の人々が行なったのと同じ方法を通して得たものである。しかも，これは，もし人が次の聖句に述べられている勧告に従うならば，だれでも得られるものである。

「求めよ，そうすれば，与えられるであろう。捜せ，そうすれば，見いだすであろう。門をたたけ，そうすればあけてもらえるであろう。すべて求める者は得，捜す者は見いだし，門をたたく者はあけてもらえるからである。」（マタイ7：7—8）

またヤコブはイスラエル人にあてた手紙の中で同じ意味の勧告を与えている。

「あなたがたのうち，知恵に不足している者があれば，その人は，とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に，願いを求めるがよい。そうすれば，与えられるであろう。ただ，疑わないで，信仰をもって願い求めなさい。疑う人は，風の吹くままに揺れ動く海の波に似ている。」（ヤコブ1：5—6）

もちろん，信じる人もいれば，疑う人もいる。しかし私たちがこの聖典に述べられている教えに忠実に従うことができるならば，疑問は解け，その知識を得られるはずである。言うまでもなく，真理を知りたいという望みもなく，「風の吹くままに揺れ動く」人は，神と神の計画に関することを決して理解することはできない。予言者は次のような含蓄ある言葉を述べている。

「神にかかわる事柄には，非常に深い意味がある。従って時間をかけ，

多くの経験を積み，細部にわたって熟慮し，清い思いを持たなければ，その深い意味を理解することはできない。もしあなたがたが人を救いに導きたいと思っているなら，至高の天にその思いをはせ，暗黒の淵や永遠に広がる世界のことを深く考え，研究しなければならない。あなたがたは神と心を通わす必要がある。」（ジョセフ・スミス「教会歴史」3：295）

救い主がこの地上にもたらした福音は，人々に救いをもたらす喜びのおとずれである。要するに，イエス・キリストの福音こそ救いの計画である。キリストは次のように述べておられる。「よりてわれがすでに汝らに告げたることを記憶せよ。

見よ，われはすでにわが福音を汝らに授けたるが，その福音を言い換うれば次のごとし。まずわが父われをつかわしたまいたれば，われは父のみこころを行わんとてこの世に来れり。

わが父のわれをつかわしたまいしは，われが十字架にかけられて，後にあらゆる人々をわれに引きよせんがためなり。また人がわれを十字架に上げたる故に，今度は御父が世の中の人を必ずひき上げて，これを各々の行いの善悪に応じて裁判するためにわが前に立たせたもう。」（IIIニーファイ27：12―14）

聖典を丹念に研究すると，主が教えておられる福音の基本原則には次のような段階があることがわかる。

1，私たちは心の中で，イエスが神の御子であり，世の救い主であるというキリストに対する信仰を育まなければならない。

2，私たちは禍ちを悔い改め，キリストの教えに喜んで従うように努めなければならない。

3，私たちは過去の罪の赦しを得るために，定められた方式に従ってバプテスマを受けなければならない。

4，私たちは按手によって聖霊を受けなければならない。

5，私たちはこの世で最後まで義しい生活をしなければならない。

第1の段階は信仰である。その信仰も漠然としたものでなく，より具体的な，主イエス・キリストに対する信仰である。イエス・キリストが実在のお方であり，また神の御子であり，福音を宣べ伝え，全人類が再び生き返るようにその命を捧げ，復活を成し遂げられたお方であるかどうかを知るためには，心の中に真理を知りたいという純粋な願いをわきたたせる必要がある。そうした望みが強くなると確証を得ようという気持ちになってくる。

神が存在すること，あるいは御子が法にいう意味での神の子であるということを示す目に見える有形の証拠はない。しかし，真理についての探究がすべて，現実に見える決定的な証拠によって証明されるようになるとは限らない。神が存在するという決定的な証拠がないからと言って，神の存在を否定することは不合理なことである。その証拠が得られないため，私たちはしばしば科学の世界に実証的な確証を求めて，状況証拠の領域にまで入っていく。そして多くの時間を掛けて宇宙や地球，自然や人間の体，厳格な医学の法則，その他の諸現象を究明するが，これらすべての事柄は真理を探究する人の良心に，創造主がいて，この宇宙を支配する何者かがいるということを訴える。

もし決定的な証拠を得て，神の存在が明らかにされた場合，一体どのようなことになるであろうか。福音の第一原則にある信仰はどうなるであろうか。主がその教えの中で特に繰り返して強調されたことのひとつに信じることの大切さがある。信仰は具体的な証拠のない所に橋を架けるための土台である。これこそ，ヘブル人への手紙の中でその筆者が述べた「望んでいる事がらを確信し，まだ見ていない事実を確認することである。」（ヘブル11：1）換言すれば，信仰は，たとえ証拠がなく，また目に見える証拠によって明らかにされることがなくても，真理があることを確信することである。

かりにすべてのことが決定的な証拠によって明らかにされたとする。はたして信仰の力はどうなるであろうか。おそらく信仰の必要がなくなり，次第に消滅してゆくであろう。そしてこういう疑問がわいてくる。福音の第一原則，あるいは最初の段階である信仰がなくなった場合，福音の計画はどうなるであろうか。その土台は，音を立てて崩れ落ちるであろう。私はすべての事柄に具体的な確証が与えられないのは，そこに主のみこころがあるからであると明言したい。

疑い深い人は，信じられる証拠やしるしを求めるものである。このことに関して予言者アルマは指摘している。「もし天からのしるしを自分に見せてくれるならば確に知って信じようという人は多くある。

しかし，このようなことは信仰であるか。いや，これは信仰と言うことではない。なぜならば，もし人が物事を知っているならばこれを信ずる必要のあるわけがない。すでにこれを知っているからである。（アルマ32：17―18）

それからアルマはその民に信仰の原則について語り，信仰を種になぞらえ，まいた後，手入れをし，養い育てる必要があることを説いている。実を得たいという望みがあるから，種子をまく。そして種子をまいた者は，それが芽を出し，生長するであろうという信仰を持つのである。ア

ルマはこの信仰の種についてさらにこう述べている。

「種子から生える木が生長し始めると，あなたたちは『さあ，この木が充分に根を下ろして生長し，私たちのために実を結ぶようによく注意して養い育てよう』と言うが，今あなたたちがよく注意してこの木を養い育てるならば，根を下ろして成長し実を結ぶであろう。

これに反して，もしあなたたちが木をほっておいてこれを養い育てることに心を配らなかったならば，根がつくことなく，太陽が出てこれを照らしこれを熱するならば，根がないから枯れてしまうであろう。このときあなたたちはその木を抜いて捨てるのである。

しかし，木がこのように枯れるのは種子が悪かったためでもなく，また実がなったときその実が悪いためでもない，その土地が荒地であってしかもあなたたちが木を養い育てないためである。それであるから，その実を取ることができない。

これと同じわけで，あなたたちがもしも信仰を以て言葉の実るときを待ち設けながら言葉を養わなかったならば，決して生命の木の実をとることはできない。」(アルマ32：37—40)

こうして信仰はあらゆる行動の第一歩となる。また，福音を理解する上でもその第一歩とならなければならない。主イエス・キリストに対する信仰によって，私たちは贖いの犠牲が実際にあったことを知ることができる。私たちはこの第一の原則を学び，理解する必要がある。

マタイ伝の最後の2節は，主がガリラヤの山上で，11人の弟子たちに最後に現われた時の言葉を伝えている。この別れの言葉はキリストの教えがいかに大切であるかを強調し，それを聞いた人々にすべての人々に教えるという大いなる責任を委託したことを告げている。

「それゆえに，あなたがたは行って，すべての国民を弟子として，父と子と聖霊との名によって，彼らにバプテスマを施し，あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ，わたしは世の終りまで，いつもあなたがたと共にいるのである。」(マタイ28：19—20)

特に大切なのは，「教え」，「バプテスマを施す」という言葉である。この聖典に述べられている勧告に従い，教会の宣教師たちは老若を問わず全世界に出て行って，主イエス・キリストに対する信仰を初めとする多くの福音の原則を教えている。これは，主御自身が打ち建てられた方法である。マルコはその様子を，「また十二弟子を呼び寄せ，ふたりずつつかわすことにして，……」(マルコ6：7) と記録している。弟子たちは，今から1900年も昔に，世の中に出て行き，イエスが神の御子であるという証を述べた。そして今日も，献身的な主の使いが「ふたりずつ」全世界に出て行って同じ証を宣べ伝えている

世界の国々は，彼らが伝える福音のメッセージによって祝福を受けるであろう。また真理を心から求めてやまないすべての人は，もしこのメッセージに耳を傾けるならば，生ける真の神が存在し，イエスがキリストであり，全人類の贖い主であることを知ることができるであろう，願わくば，私たちがなお一層心を磨き，信仰を堅固にすることができるように，イエス・キリストのみ名によりへりくだり祈るものである。アーメン。

安息日

十二使徒評議員会会員

マーク・E・ピーターセン

この神権時代の初めに，主が予言者ジョセフ・スミスに最初に教えられたことの中に，神の戒めに真剣に聞き従うようにしなければならないということがある。

このことをジョセフの心にさらに深く植え付けるために，神はある時ジョセフから翻訳の賜を取り上げられた。また116ページにわたるモルモン経の翻訳原稿を紛失した時も厳しく叱責された。さらに家族が従うべき福音の原則を守って生活していないことで予言者に懲らしめを与えられたこともある。

その時，主は若い僕に厳しく命じておられる。「神聖なるものを軽んずることなかれ。」(教義と聖約6：12)

さらに古代の記録の翻訳について述べられた時も主は再び次のように命じられた。「これらのことを軽んずるなかれ。」(教義と聖約8：10)

また主が伝道活動に関する教えを与えられた時も，兄弟たちに再度主の言葉を真剣に聞くよう勧告し，次のように言われた。「彼らはこの言に心を留め，これを軽んずることなかれ。」(教義と聖約32：5)

私たちは決して主のみ言葉を軽んずるようなことがあってはならないのである。なぜならば御自身で述べているように神は欺かれないからである。(教義と聖約63：58参照)

こうした度重なる主の勧告にもかかわらず，人は主のみ言葉を軽んじ，自己の怠慢なのか，あるいは意識的に従わないのか分からないが，主のみ言葉を顧みることもなく，快楽の道を歩んでいる。

こうした信仰と一致しない行ないの最たるものに安息日に対する心の持ち方がある。安息日は聖なる日であり，私たちは安息日を軽んじてはならない。

律法の中で安息日ほど明確にその定義がなされているものはない。創世記の時代から今日に至るまで安息日ほど明確にしかも繰り返し述べられているテーマはない。

安息日の律法は神のみこころを最も反映している律法でありながら，しかもそれを受け入れ，遵守するよりも汚す人がはるかに多いのである。

私たちは俗悪化した今日の世の中についていつも論じている。また，現代の若人は一世代前の若人に比べてはるかにひどい誘惑に直面していると語ってきた。これは実際その通りだと思う。そして今日の親たちも，世の俗悪な事柄に捕らわれているという点においては，一世代前よりもその数を増やしているようである。

こうした危険な状況の中で私たちは自分を守るために何ができるであろうか。若人が世の汚れに染まらないようにするために，どのような助けを与えればよいだろうか。

主はこの疑問に答え，それは心を込めて安息日を聖く守ることによって達成されると言われた。おそらくそのようなとらえ方をされたことのある人はあまりないと思うが，もう一度主の言葉を読んで見よう。「汝なおさら充分に世の汚れに染まざる様，祈りの家に行きてわが聖日に汝の聖式を捧ぐべし。」(教義と聖約59：9）特に，「汝なおさら充分に世の汚れに染まざる様」という箇所に注目していただきたい。

この聖句についてしばらく考えてみよう。私たちは心から神を信じているだろうか。しかもまじめな心で。私たちは主が全知のお方であることを信じているだろうか。もしそのことを信じることができるならば，主とそのみ言葉に真剣に耳を傾けるはずである。あるいはこれから先も神からの啓示を軽々しく扱ってゆくのだろうか。主は御自身が語りたもうことの何たるかをよく御存じである。安息日を聖く守ることは，私たちが

なおさら充分に世の汚れに染まらないよう助けるものである。

もし世の汚れに染まらないことを願うならば，なぜその言葉をそのまま受け入れ，それを信じ，実行しようとしないのであろうか。

現在世の誘惑があらゆる形をとって私たちの周囲に迫っている。これは，だれもが認めていることである。私たちはこの事実に目を閉じてしまうことはできない。

この点を明確にするために，まずあなた方の周囲の大人や青少年の間でどれほどのアルコール飲料が消費されているかを考えていただきたい。タバコの消費量はどのくらいだろうか。麻薬についてはどうだろうか。あなたが住んでいる地域社会の犯罪増加率はどうだろうか。破壊的な行為はどうか。あるいは道徳の退廃はどうか。それらはあなたの家族をむしばんではいないだろうか。あなたの子供たちはそれにかかわり合ってはいないだろうか。そうした社会状勢にあなたは不安と恐れを抱いてはいないだろうか。

それでは，こうした状勢を打破するために神が用意された方法を使わないのはなぜだろうか。安息日を聖く守り，教会に出席することは神の戒めである。

神のみ言葉をまじめに受け止め，それに従った生活をするか，それとも安息日を軽んじ，無視し，その結果としてもたらされる不幸に甘んじようというのだろうか。

主が言われた言葉にはもっと深い意味があるのではないだろうか。その箇所をもう一度読んでみよう。「汝なおさら充分に世の汚れに染まざる様，祈りの家に行きてわが聖日に汝の聖式を捧ぐべし。」（教義と聖約59：9）

続いて私たちの問題の解決となる霊感された主の答えが記されている。「そは誠にこの聖日は，汝命ぜられて働きを休み，いと高き者に礼拝を捧ぐべき日なればなり。」（教義と聖約59：10）

したがって，聖典は，聖なる日に買物をやめよに言っているだけではない。私たちが正しく，しかも何の妨げもなくいと高き者に礼拝を捧げられるように特別な目的を心に抱いて行動するようにと勧告している。もっと簡潔に申し上げれば，私たちは安息日には，いつもの生活を変え，教会に行って神を礼拝するよう命じられているということである。

さらにこう啓示されている。「さりながら汝の誓言は，正しく毎日常に神に捧げられざるべからず。」（教義と聖約59：11）

言い換えると，主は決して日曜日だけの宗教を説いているのではないということである。私たちはいつも言葉と行いに矛盾がなくかつ従順であり，主を礼拝するよう努めなければならない。いわゆる「サンデークリスチャン」のような気持でいて自己の霊性を高めるできるだろうか。

しかも聖日は，教会に行くだけではない。当然，私たちは主を礼拝しに行くのだが，礼拝するためには，罪を告白し，悔い改めて自分の身を清くしておく必要がある。主は山上の垂訓の中で次のように述べている。「だから，祭壇に供え物をささげようとする場合，兄弟が自分に対して何かうらみをいだいていることを，そこで思い出したなら，その供え物を祭壇の前に残しておき，まず行ってその兄弟と和解し，それから帰ってきて，供え物をささげることにしなさい。」（マタイ5：23，24）

同じく主は近代の啓示の中でこう述べている。「されどこの主の聖日に於いては，いと高き者に汝の捧物と聖式とを奉りて，兄弟たちに向い主の前に於て汝の罪を告白するを忘るべからず。」（教義と聖約59：12）私たちが罪を告白すべき兄弟たちとは，監督のことである。

さて，安息日を正しく守ることが日々の生活にどれだけ益をもたらすかがお分かりいただけたと思う。

引き続き聖なる日をどのように過ごすべきかについて考えてみたい。

主はこう述べておられる。「而して汝この日には他の何事をもなすことなかれ。……真心をこめてその食物を支度することのみを為すべし。」（教義と聖約59：13）

日曜日には聖なる目的にだけ心を向け，それ以外のことはすべきでないというなら，その事を承知しながら安息日に商売したり，日曜日の仕事を奨励したり，あるいはまた日曜日に行楽地に出掛けることに対してどのような見方をすればよいのだろうか。

もちろん病院やその他の24時間勤務の職場で働く，社会にとって必要不可欠の労働者もいる。彼らには勤務状況を選択することなど許されないかもしれない。私たちはこういった人々のことを述べているのではない。しかしそのような条件下で働いている人はそう多くない。自分で時間を調整できるはずである。彼らは日曜日に教会に行くよりは，スキーや水泳に行ったり，映画を見たり，あるいは商売をしたりする方がよいと考えているのだろうか。もしそうだとすれば，彼らはそれだけ福音の道から離れ，他の福音すなわち日曜日に楽しんだり，仕事をしてもよしとする違った福音を受け入れているのではないだろうか。

なぜ人々は安息日に関する主の勧告にもっとまじめに聞き従おうとしないのだろうか。私たちは聖なるものを軽んじてはならず，安息日は聖なる日であることもよく知っている。

モーセの時代に，主は安息日をい

かに過ごすかが主に対する心の表われであると印象に残る説明をされた。それは私たちの信仰の度合いを測るはかりであった。「これは永遠にわたしとイスラエルの人々との間のしるしである」(出エジプト31：17) と神は宣言し，こう付け加えられた。「あなたがたは安息日を守らなければならない。これはあなたがたに聖なる日である。」(出エジプト31：14)

当時安息日を汚すものには死刑が科せられ，殺されたのである。それほど主は安息日の遵守を大切に考えておられた。それが今日和らげられ，主がそのみこころを変えられたとでも言うのだろうか。

また主は古代のイスラエル人に安息日を与えた時，御自身が生きたもうこと，すなわち「わたしが……主であることを，知らせるための」しるしとなると言われた。こうして安息日は証を築くものとなったのである。なぜなら，もし私たちが安息日を守るならば，主に対する知識と信仰が増すからである。これは私たちにとって非常に大切なことである。

もし私たちがこの聖なる日を故意に汚すならば，それだけ神に敵する者となるのである。そして聖約を破った者と呼ばれるようになることは疑いのないことである。なぜならば主は安息日を誓約によって，すなわち代々にわたる永遠の契約によって与えられたからである。(出エジプト31：16参照)

デビッド・O・マッケイ大管長は，安息日に関してもうひとつの重要な点を指摘している。それは，週の初めの日に救い主が復活されたことを記念するキリスト教徒の安息日は，当然のことながら日曜日であるということである。マッケイ大管長はまた，キリストの復活は歴史上最も偉大な出来事であり，私たちは安息日を正しく守ることによって主の苦難と復活を尊ぶのであるとも述べられた。(*Gospel Ideals*「福音の理想」pp. 397―98参照)

とことこを心に銘記し，主の贖いが私たちにとってどれ程重要なものか考えてみていただきたい。主イエス・キリストは，どれ程の愛を私たちに示して下さったのだろうか。私たちは不死不滅ということに関してどれほど深い関心を持っているだろうか。復活ということに対して，重要なことであるという気持ちを持っているだろうか。

安息日の遵守が私たちの改宗の度合いを示していることはすぐ分かる。

安息日を守るかどうかは，主がゲッセマネの園で苦しみ，十字架上で亡くなって再びよみがえられたことだけでなく，主御自身に対して私たちがどのような思いを持っているかの正確なはかりになる。私たちが真実の意味のクリスチャンであるか，また改宗が上辺だけのもので，主の贖いの犠牲の記念という意味がほとんど理解されていないかどうかを知るしるしともなる。

このように安息日が神聖な目的を持っているにもかかわらず，安息日よりも国の祝祭日の方が広く守られている事実を私たちは知っているだろうか。

私たちは神を2番目，3番目の所に置くのだろうか。それが私たちの望んでいることなのだろうか。一体このままでいいのだろうか。

私は皆さんに証する。主の聖日を正しく守ることは，私たちのできる最も大切なことのひとつである。それは私たちが永遠の救いを得るためには避けて通ることのできない道である。

いつも安息日を汚し，神のみ顔に不従順の石を投げつけておきながら，救いを願ったとしても，救いは得られないであろう。

それでも私たちは安息日を軽んじるのであろうか。

全能の神を軽んじようというのだろうか。

主は，私たちが神のみ前に入るためには，その口より出るすべての言葉によって生きなければならないと宣言しておられる。(教義と聖約84：44参照) そして安息日の律法は，福音のすべての計画の中で最も大切なもののひとつである。

願わくは私たちが勇気と分別を特ってこの律法を守るようイエス・キリストの神聖なみ名によってへりくだり祈るものである。アーメン。

従順，奉献そして犠牲

十二使徒評議員会会員

ブルース・R・マッコンキー

私は今，聖きみたまの導きがあって，福音の中で最も重要なふたつの教義について簡明に，しかも納得のいくように語ることができればと願っている

私たちは主の民であり，主の聖徒である。また多くのものを与えられ，多くのものを求められている。私たちは救いの計画につける条件，すなわち，なぜキリストが私たちの罪のために死なれたのか，また贖いの犠牲の祝福を完全に刈り取るために何を行なわなければならないかをよく知っている。

私たちはバプテスマの水の中で，主を愛し，主に仕え，戒めを守り，神の王国のことを生活の第一とすることを誓約した。それに対して，主は御父の王国における永遠の生命を約束して下さった。こうして私たちは幾つかのより高い律法を受け入れてそれに従っている。そしてこの律法は私たちが求めてやまない永遠の生命への備えをさせるのである。

そこで私は，これから犠牲と奉献の原則について少し説明しようと思う。これは，真の聖徒たちが神とキリストの住んでおられるところに行って，幾世代も昔の忠実な聖徒たちとともに受け継ぎを得るために従わなければならない原則である。

聖典にこう記されている。「そは，日の栄の王国の律法に従う能わざる者は日の栄に堪うる能わざればなり。」（教義と聖約88：22）犠牲の律法は日の光栄の律法である。奉献の律法もまた然りである。したがって日の光栄における報いを得たいと心から願うならば，私たちはこのふたつの律法を守らなければならない。

犠牲と奉献はからみ合っていて，どちらも切り離すことはできないものである。

奉献の律法とは，私たちが時間や才能，金銭，財産などを教会のために捧げることである。

しかもこうしたものは，この地上における主のみこころを進めるために用いられる。

犠牲の律法とは，私たちが所有しているすべてのものを真理のために喜んで犠牲にすることである。すなわち，私たちの身分や名声，名誉，賞賛，評判，その他家屋，土地，家族などすべてのもの，必要であれば生命までも犠牲にすることである。

ジョセフ・スミスは次のように述べている。「すべてのものを犠牲に捧げることを求めない宗教は，人を命と救いに導く信仰を育むために必要な力を得ることはできない。」（*Lectures on Faith*「信仰篇」 p，58）

私たちは常に奉献の律法をすべて守り，この地上に主の王国を打ち健てるために時間，才能，財産などをすべて捧げるように召されているわけではない。犠牲として多くを求められる人はそういない。また目下のところ，この啓示された宗教のゆえに殉教者を出すということはあまり考えられないことである。

しかしながら，私たちが日の栄光の救いを得るためには，ひとたびそうするように求められた時は，その律法に完全に従うことができるようでなければならない，と聖典に記されている。この中には，そうするように求められた範囲内でその律法を実践しなければならないということも含まれている。

例えば，什分の一を正直に納めずに，奉献の律法を完全に守る力を養うことができるだろうか。あるいは，時間や労力，金銭，財産などで今求められている小さな犠牲を払うことができなくて，必要な犠牲を求められた時に，はたして，すべてのものを喜んで犠牲に捧げることができるだろうか。

若い頃，私は監督の指示で，ある

裕福な人を訪ねて建築資金に1000ドルの献金をしてくれるよう頼んだ。彼は断わった。それでも彼は何か援助をしたいので，もしワード部で食事会でも開き，1食5ドルのチケットを売るようなことがあれば，2枚くらい買ってもよいと言っていた。それから約10日後，この金持ちは突然心臓病で亡くなった。それ以来，私はこの人の永遠の霊の行く末はどうなっただろうかと考え込んでしまった。

かつて，ある人がこのように言ったと思う。「あらゆる貪欲に対してよく警戒しなさい。たといたくさんの物を持っていても，人のいのちは，持ち物にはよらないのである。」続いて同じ人がたとえ話でこう語っている。「ある金持の畑が豊作であった。そこで彼は心の中で，『どうしようか，私の作物をしまっておく所がないのだが』と思いめぐらして言った，『こうしよう。わたしの倉を取りこわし，もっと大きいのを建てて，そこに穀物や食糧を全部しまい込もう。そして自分の魂に言おう。たましいよ，おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ，食え，飲め，楽しめ』。すると神が彼に言われた，『愚かな者よ，あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら，あなたが用意した物は，だれのものになるのか』。自分のために宝を積んで神に対して富まない者は，これと同じである。」（ルカ12：15—21）

神の予言者が，ある男の所有している土地で祭壇を築き，犠牲を捧げるようダビデに命じた時，その土地の所有者は土地のほかに，雄牛や犠牲に必要なものをすべて無償で差し出すと申し出た。しかしダビデはこう答えた。「いいえ，代価を支払ってそれをあなたから買い取ります。わたしは費用をかけずに燔祭をわたしの神，主にささげることはしません。」（サムエル下24：24）

私たちが払う代価が少なければ，天に蓄える宝も小さい。永遠の尺度で測れば，金持ちが出す倉一杯の捧げ物よりも，やもめが出す精一杯の捧げ物の方がもっと価値がある。

ある時，ひとりの金持ちがイエスの所に来てこう尋ねた。

「先生，永遠の生命を得るためには，どんなよいことをしたらいいでしょうか。」イエスは言われた，「もし命に入りたいと思うなら，いましめを守りなさい。」これは，主があらゆる時代の予言者に語ってきた答えである。

すると金持ちは尋ねた。「どのいましめですか。」イエスは言われた。「『殺すな，姦淫するな，盗むな，偽証を立てるな。父と母とを敬え』。また『自分を愛するように，あなたの隣り人を愛せよ。』」

この青年は善良で，熱心に義を求めていた人で，再びこう尋ねた。「それはみな守ってきました。ほかに何が足りないのでしょう。」

私たちもよくこう尋ねることがないだろうか。「戒めを守るだけで十分とは言えないのでしょうか。信頼されているすべてのことに，正直かつ忠実であるということのほかに一体何が求められているのでしょうか。従順の律法のほかに何があるのでしょうか。」

金持ちの青年の場合は，もっとあった。彼は奉献の律法を守って，この世の財産を犠牲にすることを求められた。イエスは次のように答えられた。「もしあなたが完全になりたいと思うなら，帰ってあなたの持ち物を売り払い，貧しい人々に施しなさい。そうすれば，天に宝を持つようになろう。そして，わたしに従ってきなさい。」

そしてこの青年は，皆さんがよく知っているように，「悲しみながら立ち去った。たくさんの資産を持っていたからである。」（マタイ19：16—22）

もしこの青年が日の光栄の律法に従うことができたならば，神の御子とどれ程親しい交わりを持てたか知れない。そして使徒たちとの交わりの中にどれ程の喜びを見いだし，啓示や示現を受けることができたか知れない。私たちはそのことを思い巡らすだけである。この青年がだれか名前も分からない。しかしこの青年の名前が聖徒たちの間に永久に記憶され，尊敬を受けることもできたはずである。

確かに主は，私たちが時折こたえる以上このことを期待しておられる。私たちは他の人々と異なる。天からの啓示を受けている神の聖徒である。多く与えられた者は多く求められる。私たちは神の王国のことを第一に考えるように求められているのである。

私たちは主の律法にふさわしい生活をし，すべての戒めを守り，必要であれば主のみ名の為にあらゆるものを犠牲にするよう命じられている。また奉献の律法の条件を満たすようにも求められている。

私たちはそれを果たすと約束している。神聖で厳かな誓約を，しかも神々と天使のみ前で誓約したのである。

私たちは従順の律法を守るという誓約の下にある。

また犠牲の律法を守るという誓約の下にもある。

奉献の律法も守らなければならない。

このことを頭に置いて，次の主の勧告を聞いていただきたい。「汝らもし，日の栄の世界に一つの所を得んことをわれに願わば，わが命じて汝らに求むるところを行いてその備えを為さざるべからず。」（教義と聖約

78：7）

神の王国を打ち建てるために時間，才能，財産を奉献することは，私たちに与えられた特権である。私たちは，多少の違いがあっても，すべてこの神のみ業を推し進めるために何らかの犠牲を払うことを余儀なくされる。従順は救いに欠くことのできないものである。奉仕も大切である。そして奉献と犠牲の律法を守ることも必要である。

隣人に警告の声を上げ，伝道に出て全世界に住む御父の子供たちにこの救いの真理を宣べ伝えることも私たちの特権である。私たちは教会のもろもろの組織で，監督，扶助協会の会長，ホームティーチャー，そのほか無数の責任を果たす機会にあずかることができる。さらに福祉計画で労働奉仕を行ない，系図の探究に励み，神殿で身代わりの儀式に参加することもできる。

また什分の一を正直に納め，断食，献金，福祉献金，ワード部予算，建築資金，伝道資金などを納めることもできる。私たちがこの世を去る時には，土地や財産の一部を教会に贈与することもできる。

さらに自分の時間を奉献して，福音を系統的に研究し，福音に精通する者となって，私たちを真理と正義の道に導く啓示の言葉を蓄えることもできる。

そして忠実な多くの教会員がこれらの戒めをすべて守っているという事実は，これが神のみ業であることのひとつの確固たる証拠である。会員が惜しみなく什分の一を納めている教会がどこかほかにあるだろうか。会衆の中の2，3パーセントの会員が常に自発的に，しかも自分の力で伝道活動に出ている教会がどこにあるだろうか。皆がひとつとなって神殿を建設し，私たちが実施しているような福祉計画を行なっている人々がほかにいるだろうか。さらにこれほど多くの人々が無償で教え，管理運営に携わっている教会がほかにあるだろうか。

真の教会では，雇われて教えることも，働いてお金を得ることもない。私たちはパウロの模範に従い，主から与えられた権能を濫用し，誤って使うことのないようにキリストの福音を報酬を期待することなく教えている。私たちは無償で受け，無償で与える。救いは無償だからである。渇く者はすべて招かれ，命の水を飲み，金銭や代価を払うことなしに穀物やぶどう酒を手に入れることができる。

私たちが神の王国で行なう奉仕のすべては永遠の律法に次のように記されている。「シオンで働く者はシオンのために働くべきである。もしも金銭のために働くならば亡びるであろう。」（IIニーファイ26：31）

私たちは，働き人が当然その報いを得るべきであることを十分承知している。王国の建設に全時間を注いでいる人々は衣食住や生活必需品を受ける必要がある。もちろん学校の教師や神殿を設計する建築士，教会堂を建てる業者，教会の事務を行なう管理者などは雇わなければならない。しかし，こうした雇われた人々も他の教会員と同様に主のみ業を推進するために自由意志を用いて自発的に参加している。銀行の頭取が福祉事業で働いたり，建築家が設計の仕事を投げ出して伝道に行く。建築業者が道具を休めて，ホームティーチャーや監督として働く。弁護士も法典や六法全書をしまってテンプル・スクェアーの案内人として働く。学校の教師も教室を出てから病気の孤児ややもめを見舞う。その卓越した才能を使って生計を立てている音楽家がいつも喜んで教会の聖歌隊を指導し，集会で発表する。また絵で生活の糧を得ている人も喜んで，しかも無償で援助を申し出ている。

それでもなお王国のみ業は推し進められなければならず，教会員は現在もそうであるが，今後もますますその重責を担うように求められるであろう。これは主のみ業であり，人間の業ではない。どのような代価を払ってでも，全世界に福音を宣べ伝えるようにと命じておられるのは主御自身である。どのような犠牲を払ってでも，神殿を建てるようにと命じておられるのは主のみ声である。また主は，飢えている人々に食物を与え，裸の人々に衣服を与える責任にある人がそれを果たさないためにこれらの貧しい人々の叫びがそのような人に対する証となって御自身のもとへ届くようなことがないように，貧しい人々を助けるように命じておられるのである。

主はそのみ声を通して私たちがみ業を推進するために時間と才能と財産を捧げるように命じておられる。私はこのことを教義として，また証を通して申し上げる。主は私たちが奉仕の業を広め，犠牲を払うようにと命じておられる。これは主のみ業である。主御自身がかじを取り，主の王国の進むべき道を示し，導いておられるのである。

教会のすべての会員に主はこう約束しておられる。もし私たちが真理を守り，忠実に福音の求める従順と奉仕，奉献と犠牲にこたえるならば，主は永遠に続く何千倍もの報いと永遠の生命を与えて下さるであろう。これ以上の望みがほかにあるだろうか。

主イエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。

モルモン経は神のみ言葉である

十二使徒評議員会会長

エズラ・タフト・ベンソン

私はきょう，最も重要なテーマに基づいて話をしたいと思う。私たち末日聖徒イエス・キリスト教会の会員は，モルモン経を神のみ言葉であると信じている。(信仰箇条第8条)神はそのように宣言しておられ，モルモン経の記録者たちも，モルモン経の見証者たちもそのことを宣言している。また，モルモン経を読んで，それが真実の書物であるという啓示を神から受けた人々も皆そのように宣言している。

教義と聖約第20章の中で，主は，「モルモン経を翻訳するために天より能力を彼（ジョセフ・スミス）に与えたり。この書の中には……イエス・キリストの完全なる福音とを載せたり。またこの書は霊感によりて与えられ……」(教義と聖約20：8―10）と告げておられる。

予言者であり，モルモン経の記録者のひとりであったニーファイは，この書物には「キリストの言葉」が記されていると証している。(IIニーファイ33：10）また最後の記録者であるモロナイも「これらのことが真実である」と証を述べている。(モロナイ7：35)

この現代に，天使として神から遣わされ，三人の見証者にこれらの古代の記録を見せた人こそ，ほかならぬこのモロナイである。三人の見証者の証言もモルモン経中に記されている。「われわれは神の御声が明らかに告げたもうたから，神の賜と能力によってこの記録が翻訳されたことも知っている。それであるから，われわれはこの経典が真実であることが確に解るのである。」

神の指示を受けてこの記録を翻訳した予言者ジョセフ・スミスも次のように証している。「モルモン経はこの地上において最も正確な書物であり，私たちの宗教のかなめ石であって，人がその教えに従って最も神に近づくことのできる書物である。」(*History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints*「末日聖徒イエス・キリスト教会歴史」，4：461)

モルモン経は今日の私たちのために書かれたものであり，その著者は神である。これは堕落した民の記録で，神より霊感を受けた人々が今日の私たちに恵みをもたらすために編纂したものである。当時の民はこの書物を読むことはなかった。なぜなら，これは私たちのために備えられたものだからである。

古代の予言者モルモンは，何世紀にもわたって，書き留められてきた記録を短くまとめた。そのためこの書物は彼の名にちなんでモルモン経と呼ばれている。初めから終わりに至るすべてのことを御存じの神は，今日の私たちが必要とする事柄をモルモンに告げ，それをその抄録の中に書き入れさせたもうた。やがてモルモンは，最後の記録者である息子モロナイにその記録を託した。そしてモロナイは，1,500年以上も前に書きながら，今日の私たちに対して次のように述べている。「見よ，私はあなたたちが今目の前にあるかのように話しているが，本当はあなたたちはまだ生れないのである。しかし，イエス・キリストが前以てあなたたちを私に見せたもうたのであなたたちの行いが今私に解るのである。」(モルモン8：35)

モルモン経が世に現わされた目的は，そのとびらの頁にあるように，「ユダヤ人と異邦人とにイエスは永遠の神なるキリストにましまして，万国の民に現われたもうことを確信させる」ことである。

モルモン経の最初の記録者である予言者ニーファイはこう語っている。「私が一心に志すところは，すべての人がアブラハムの神，イサクの神，

ヤコブの神のところへきて救われることを，かれらに説いて信じさせることである。

それであるから，私は俗世間に喜ばれることを書かないで，神と俗世間の仲間でない者を喜ばせることを書く。

であるから，私は私の子孫に人間にとってねうちのないことでこの版をふさいではならぬと命じよう。」（Ⅰニーファイ6：4－6）

モルモン経はふたつの方法をもって人々をキリストのもとに導いている。そのひとつは，キリストとその福音について率直に告げる方法である。モルモン経はイエス・キリストが神の子であること，私たちには贖い主が必要であり，また主に信頼を置くことが必要であることを証している。さらにモルモン経は，堕落と贖罪と福音の第一原則についても証している。その中には，へりくだりたる心と悔いる精神を持つことと，みたまによって生まれることの必要性も説かれている。また，私たちは正義を守って終わりまで耐え忍び，聖徒として徳高い生活を送らなければならないと，モルモン経は告げている。

第2は，キリストの敵を明らかにする方法である。モルモン経は偽りの教義を打ち破り，争論を鎮めるものである。（Ⅱニーファイ3：12参照）　またそれは，謙遜にキリストに従う者たちが，今日の悪魔の企てや戦略，その教えに対抗できるよう力を与えるものである。モルモン経中の背教者のタイプは，今日のそれによく似ている。私たちが誤りを見抜き，今日の誤った教育や政治，宗教，哲学などの概念といかに戦ったらよいかその方法を知ることができるように，神は実に無限の先見の明をもってモルモン経を備えられたのである。

神は私たちに，モルモン経をいろいろに活用するよう期待しておられる。私たちは祈りの気持ちをもって丹念に読むと同時に，読みながらこの書物が神の備えられた経典か，それとも無学な若者の創作によるものか，深く思い巡らすことが大切である。そしてこの書物に書かれていることを読み終えたら，モロナイが勧めているように，これらの言葉を試してみなければならない。

「またこの記録を受ける時，それが真実なものかどうかをキリストの御名によって永遠の父なる神に問え。もし誠心誠意でその上キリストを信じながら問うならば，神は聖霊の力によってこの記録が確なものであることをあなたたちに示したもうにちがいない。」（モロナイ10：4）　私はモロナイの勧めに従ってみた。そのことであなた方に証したい。この書物は確かに神が備えられたものであり，まことに真実のものである。

私たちはまた，福音の教えの基としてモルモン経を使わなければならない。教義と聖約第42章で，主は次のように述べておられる。「また当教会の長老，祭司および教師たちは……完全なる福音を載せたるモルモン経とに誌されたるわが福音の原則を教うべし。」（教義と聖約42：12）

モルモン経を読み，それについて教える時には，その聖句が「私たちの学問と利益になるように」見立てる必要がある。（Ⅰニーファイ19：23）

また，教会に反対する人々に対処する時にも，モルモン経を使わなければならない。父なる神とその御子イエス・キリストは，驚くべき示現のうちに，ジョセフ・スミスのもとを訪れたもうた。その栄えある出来事の後，ジョセフ・スミスはそのことをひとりの牧師に語った。ところが驚いたことに，その牧師は，今の時代に示現だの啓示だのというようなことはない，このようなことはすべて過去のことだと言って，ジョセフ・スミスをあざけったのであった。（ジョセフ・スミス2：21参照）

この言葉は，非教会員や異論を唱える会員が教会に対して投げ掛ける反論を象徴するものである。言い換えれば彼らは，神が予言者たちを通して今日も教会にそのみこころを示されるという事実を信じていないのである。堕胎であろうが，多妻結婚であろうが，あるいは安息日の曜日の問題であろうが，反論を招くものはすべて基本的に，ジョセフ・スミスとその後継者が実際に神から啓示を受ける予言者か否かという点に帰着する。次にモルモン経を使って，多くの反論をどのように処理すればよいか，その手順を示そう。

まず第1に，反論されている事柄について理解する。

第2に，啓示からその答えを出す。

第3に，その答えがどれほど正しいものであるかは，啓示が現代の予言者を通じて与えられるか否かに懸かっていることを示す。

第4に，現代の予言者と啓示の有無は，モルモン経が真実か否かにすべてが懸かっていることを説明する。

したがって，反対者が解決しなければならない問題はただひとつ，モルモン経が真実か否かである。もしモルモン経が真実の書物であるならば，イエスはキリストであり，ジョセフ・スミスは予言者であり，また末日聖徒イエス・キリスト教会は真の教会であって，この教会は今日予言者が啓示を受けて導いていることになる。

私たちの主要な務めは福音を宣べ伝えることである。しかも，有効に宣べ伝えることである。私たちはすべての反論に答える義務はない。人はみな信仰をもって物事を決しなけ

ればならない状態にいつかは置かれる。その時には彼はすべてを自分自身で決しなければならない。ニーファイは次のように語っている。「あなたたちがもしもこの言葉がキリストの言葉でないと思っても，終りの日になってキリストは能力と大きな栄光とを以てそれがキリストの言葉であることをあなたたちに認めさせたもう。そのときにあなたたちと私とはキリストの法廷で対面する。そうすれば，あなたたちは私が弱い者であるのにこれらの事を書けとキリストから言われたことを知るであろう。」（IIニーファイ33：11） 人は皆，神から責任を問われるのを知って，みずからを裁くに違いない。

モルモン経は「イスラエルの家に属する……民の旗」となり，その言葉は「世界の隅々までも響き」わたると主は告げておられる。（IIニーファイ29：2） 私たち教会員は，特に宣教師は，このモルモン経を世界のすみずみまでも響きわたらせ，証する者とならなければならない。

モルモン経は私たちの掲げる偉大な旗である。それはジョセフ・スミスが予言者であったことを示し，キリストのみ言葉を告げるものである。そしてモルモン経のもつ大きな使命は，人々をキリストのもとに導くことである。その他の事柄はすべて第二義的なものである。「あなたはキリストについてもっと知りたいですか」というのが，モルモン経の黄金の質問である。モルモン経によって立派な求道者が見付かる。それには「俗世間に喜ばれること」は書かれていない。したがって，世俗的な生活を追う人々はモルモン経に関心を示さない。この書物は実に人々をえり分ける大きなふるいである。

モルモン経の教義と教えを一生懸命に学び，またこれを誠実に伝道の業に用いている人は，ユダヤ人と異邦人とレーマン人に私たちの告げるメッセージが真実なものであることを確信させるために，神がこの書物を伝道の道具として宣教師に与えておられることをその心に強く感じるに違いない。

ところが私たちは，十分にモルモン経を活用していない。もしも私たちがそれを用いて子供たちをキリストのもとへ導かなければ，家庭は堅固なものとならないだろう。また，この書物を使って社会主義や進化論，合理主義，人文主義などの中に見られる偽りを明らかにし，それに対抗するすべを知らなければ，私たちの家族は世の流行や教えに打ち負かされてしまうかもしれない。宣教師はモルモン経を携えて宣べ伝えなければ，よい成果を上げることはできない。親しい交わり，倫理的な面，文化的な面，教育的な面に引かれて教会に改宗した人も，モルモン経に記されている完全な福音にまでその根を下ろさなければ，真昼の光に耐えることはできないであろう。またモルモン経を旗として掲げなければ，福音を教えるクラスは霊的に満たされることがないであろう。さらに，イエス・キリストのみ言葉を読んでそれを心に留め，秘密結社が生まれ存続しないように努めない限り，国家は次第に衰退するようになる。モルモン経が告げているように，過去のアメリカの文明は秘密結社のために滅びたのであった。

かつてある宣教師たちは，伝道の帰途，モルモン経を軽々しく扱ったために，教義と聖約第84章にあるように，主の叱責を受けた。そうした行為の結果，彼らの心は暗くなっていた。主が語っておられるように，モルモン経を軽んじる行為は，全教会を，またシオンの子らをさえ呪いの下に置いたのである。続いて主は言っておられる。「されば人々悔い改めて，新なる誓約すなわちモルモン経と先にわが与えたる以前の誓約とを思い起して，ただにこれを口にするのみならず，またわが誌したる所に従いてこれを実行するまで依然この咀いの下にあるべし。」（教義と聖約84：54—57参照） 私たちは今なおこの呪いの下にとどまってはいないだろうか。

モルモン経を読む人は，伝道に出たいという気持ちを抱くに違いない。現在私たちはもっと多くの宣教師を必要としている。しかし同時に私たちが必要としているのは，モルモン経についてよく知っており，それを愛読している人々の所属するワード部や支部や家庭から出る，よい準備のできた宣教師である。宣教師としてモルモン経を携えて集会を開き，福音を教える，大きなチャレンジと準備の日は間近に迫っている。私たちは福音のメッセージを宣べ伝えるにふさわしい宣教師を必要としているのである。

結果がどのように出るかは私たちがモルモン経にどのように応じるかに懸かっている。主は言っておられる。「信仰をしてこれを受け入れ義しき行為をなす人々は永遠の生命の栄冠を受くべし。

されど信ぜずして心を頑固にし，これを受け入れざる人々はこのこと己れらが罪せらるる所以となるべし。

何となれば，これを主なる神語りたまいたればなり。」（教義と聖約20：14—16）

モルモン経は真実の書物だろうか。然り。

それはだれのための書物だろうか。私たちのためのものである。

その目的は何か。人々をキリストのもとに導くことである。

それはどのようにして行なわれるだろうか。キリストについて証し，キリストの敵を明らかにする。

私たちはモルモン経をどのように使えるだろうか。この書物について証し，これを使って教え，これを旗として掲げ，伝え広める。

私たちはこのことを行なってきただろうか。まだまだ十分ではない。

永遠の結果は，この書物に対する私たちの態度に懸かっていると言えるだろうか。然り，祝福も呪いもそれに懸かっている。末日聖徒はすべて，生涯この書物を学び続けるべきである。さもなければ，みずからの魂を危険にさらし，霊的かつ知的な一致をもたらすものをなおざりにしていることになる。確かに，モルモン経を読んでキリストの岩を基にして立ち，鉄の棒をしっかり握っている改宗者と，そうでない改宗者との間には大きな相違がある。

四半世紀前，ある教会幹部がこのタバナクルで次のように語った。「私が弁護士を開業しようとしていた時のことである。私の家族はそのことを少し心配していた。私が信仰を失うのではないかと恐れたからである。私は弁護士として働きたかったが，それ以上に，自分の証を保ちたいと思っていた。そこでちょっとした計画を立てた。あなた方もこれを行なってみたらいかがだろうか。その計画とは，毎朝一日の仕事を始める前に，30分間モルモン経を読むというものだった。……こうして私は一日の内のわずかな時間を割いてモルモン経を読み続けた。そしてそれは9年間続いた。こうして私は，モルモン経に書かれている事柄に調和した生活を送っていれば，主のみたまとの調和を保つことができることを知った。」(*Conference Report*「大会報告」，1949年4月，p. 36）モルモン経は，何にも増して私を主のみたまに近づけてくれる。先に引用した幹部は，マリオン・G・ロムニー副管長である。私は彼の考えに共感を覚える。

次に，私たちはモルモン経について何を語らなければならないだろうか。この書物は真実の書物であるという自分の証である。私はこのことを，自分が今生きていることを知っているように確かに知っている。かつて予言者ジョセフ・スミスが言ったように，私たちも言うのである。「私は兄弟たちに，モルモン経はこの地上において最も正確な書物であり，私たちの宗教のかなめ石であって，人がその教えに従って神に近づくことのできる書物であると語った」と。

このかなめ石について知り，これを使い，もっと神に近づくことができるように，イエス・キリストのみ名によって祈る。アーメン。

勇気のある人が必要である

大管長会第二副管長

マリオン・G・ロムニー

神権を持つ兄弟たち，私は今晩勇気について少し話をしたいと思う。一般に勇気には，外に現われる勇気と内なる勇気があると言われている。

しかし私の経験から言えば，内なる勇気を持っている人，言い換えれば自分自身に真実である人は，同時に外に現われる勇気も持ち合わせている。偉大な文豪シェイクスピアの戯曲「ハムレット」の中で，登場人物のポローニアスは息子にいろいろな点で指示を与えている。そして長い独白を次の言葉で結んでいる。

「いちばん大事なことは，おのれに誠実なれ，ということだ。

さすればかならず，夜が昼につぐごとくにじゃな，

他人に対しても誠実ならざるを得ん。」

(「ハムレット」第1幕，第3場，三神勲訳)

私たちは皆良心を持っており，この良心が内なる勇気の根源である。本当に勇敢な人はかならず自分の良心に従う。何が正しいのかを知っていながらそれをしない人は，憶病者である。

教会関係の出版物の中には，勇気ある人の例が沢山見いだされる。例えば，予言者ジョセフ・スミスのことを少し考えていただきたい。近所のプロテスタントの牧師に示現について話したところ，彼は嘲笑された。その時のことを彼は次のように書いている。

「然しながら，これにも関わらず私が先に示現を受けたことは事実である。

私は実際に光を見た。その光の唯中に二人の御方を見た。そしてその方々は真実私にお言葉をかけたもうた。私が示現を受けたと言うために憎まれまた迫害せられても，なおそれは真実である。そして私がこのように言うために，人々が私を迫害し罵り偽ってあらゆる悪口をあびせている間に，私は自分の胸の中で語るようになった『何故真実のことを話すから私を迫害するのか。私は本当に示現を受けたのだ，私がどうして神に抗(さか)らえようか。何故世の中の人は，私が本当に見たものを見ないと言わせようと思うのか。私は示現を受けたのであるからそれが事実であるのを身を以て知っている。私は神がそれを知りたもうことを知っている。私はそれを打ち消すことはできなかった。……』」(ジョセフ・スミス2：24，25)

予言者は若い時だけでなく，生涯自己に真実であった。最初の示現を受けてから18年後に，予言者は何人かの兄弟たちとともに，「まだ建て掛けで，吹きさらしになった裁判所に」何週間か「閉じこめられた。」

パーレーP・プラットは次のように記している。「そんな退屈なある夜，私たちは真夜中まで眠られぬまま横になっていた。しかし，番兵たちが口にするわいせつな冗談や聞くに耐えない呪いの言葉，恐ろしい瀆神の言葉，下品な話を何時間も聞いていて，耳も心も苦痛にうめいた。……

私はうんざりした気持ちになり，心は激しく揺れ動いた。身の毛のよだつ思いとともに義憤がほとばしるのを覚え，立ち上がってその番兵どもを叱責せずにはいられない気持ちになった。しかし，私はすぐ隣りにジョセフがいて，目を覚ましているのを知っていたが，彼にもほかの兄弟たちにも何も語らなかった。突然ジョセフが立ち上がり，雷鳴か，ほえたける獅子のような声をとどろかせた。それは私が記憶する限り次のようであった。

『黙れ。地獄の底からはい出てきた悪魔め。イエス・キリストのみ名によってお前たちを叱責し，口をつぐむように命じる。もう一刻たりとも

そのような言葉を聞いてはおれない。そのような話はやめよ。さもなければ，即刻，お前たちか私のどちらかが死ぬことになるぞ。』

彼は語るのをやめた。何人たりとも近づくことのできない威厳をもって堂々と立っていた。鎖につながれ，武器も持たずに。しかし静かに，動じることなく，天使を思わせる風格を持ってジョセフは震えおののく番兵たちを見すえていた。番兵たちは武器をだらりと地にさげ，中には地面に落としていた者もいた。ひざをがくがくさせながらすみの方で縮み上がっていた。ひざまずいて，彼の赦しを請うた者もいた。そして交代の時まで静かにしていた。」

パーレーは次のように続けている。「私は英国の法廷で法衣に身を包んだ裁判官と，その前に引き出され余命いくばくもない犯罪者を見たことがある。また議会の厳粛な会議で法を制定するのを目撃したこともある。私は，王国の命運を決定するために集まった王，王宮の部屋，王座，王冠，皇帝を想像しようと努めた。しかしここに，この小さなミズーリ州の村の牢獄で，深夜鎖につながれて立っている人ほど威厳と風格を持った人を見たことはなかった。」（*Autobiography of Parley P. Pratt*「パーレー・P・プラットの自叙伝」pp. 209—211）

明らかに予言者はここで，内なる勇気と外見に現われる勇気を同時に見せている。

彼は自分自身と神に真実であったので，最後には命を犠牲にすることになった。それは同時に，彼に永遠の生命と昇栄を保証するものであった。

私たちはモルモン経からニーファイの大きな勇気を読むことができる。リーハイと家族がレミュエルの谷で宿営していた時，主がリーハイに，息子たちをエルサレムに遣わして，レーバンから記録を手に入れて来させるよう指示されたことを覚えておられるであろう。レーマンとレミュエルは，それは「むつかしいこと」（Ｉニーファイ３：５）であるとつぶやいたが，弟のニーファイはこう言った。「私は主が命じたもうたことを行って行う。私は，主が命じたもうことには，人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり，それでなくては，主は何の命令も人に下したまわないことを承知しているからである。」（Ｉニーファイ３：７）

彼らはエルサレムに向かった。そしてくじを引いて，レーマンが町に入って行った。ところがレーマンはレーバンから泥棒呼ばわりされ，その上殺してやると脅された。

それでレーマンは版を手に入れることができずに弟たちの所へ帰って来た。彼は初めからできないと考え，そしてそれを証明したのだった。彼は父親の所へ帰ろうと主張した。しかし弟のニーファイは言った。「主が生きていまし私が生きているように確に，私たちは主の命じたもうたことを果すまでは荒野にいる父のところへ帰らない。」（Ｉニーファイ３：15）

ニーファイの懸命な説得に従って，彼らは相続の土地へ行き，金銀やその他の貴重な品々を集めて，それでレーバンから記録を買おうとした。

ところが，その宝物が欲しくなったレーバンは，僕たちをやってそれらを奪わせた。兄弟は荒野の中へ逃げて殺されるのを免がれ，岩穴に身を隠した。そこで兄たちは「棒で〔ニーファイとサームを〕うち叩いた。」（Ｉニーファイ３：28）すると天使が現われて，ふたりを責めた。しかし天使が去ると，レーマンとレミュエルは記録を手に入れることは不可能である，レーバンは「有力な人で五十人を指揮することができる，いや五十人を殺すことさえもできる。それならば，どうしてわれわれを殺せないわけがあろうか」とニーファイに言った。

しかしニーファイは，「全世界が向っても主の強さにはかなわない……それなら，どうして主がレーバンとその家来の五十人よりも強くないことがあろうか。いや，レーバンに何万人あっても主の強さにはかなわない」（Ｉニーファイ４：１）と答えた。

そこで兄たちはニーファイに従ってエルサレムにもどり今度はニーファイが町の中に入って記録を手に入れ，出てきた。このようにニーファイの信仰と勇気は偉大なものであった。

リーハイの家族がエルサレムを去った頃，その地方にダニエルという若者がいた。この人の生涯も勇気そのものであった。リーハイが去った年からちょうど３年後に当たる紀元前597年に，ダニエルはネブカデネザルによってバビロンに捕らわれ人として連れ去られた。そこに着いて間もなく，ダニエルはシャデラク，メシャク，アベデネゴとともに，王の食物と酒で「自分を汚すまいと」（ダニエル１：８）これを拒み，早速勇気を示している。言い換えれば，王が命じたにもかかわらず，彼は当時の人々が守っていた「知恵の言葉」を守ったのであった。

彼は後に王の夢を説いて，年老いた王に，これは「いと高き者の命令であって」（ダニエル４：24），王は人々から追われ，野の獣とともに住み，７年間「牛のように草を」食い，「ついにあなたは，いと高き者が人間の国を治めて，自分の意のままに，これを人に与えられることを知るに至るでしょう」（ダニエル４：25）と言って，人並み外れた勇気を示し

ている。彼は続いて王に，「罪を離れ，……不義を離れなさい」（ダニエル4：27）と勧告している。

主権が「地の果にまで」及んでいる（ダニエル4：22） 王に，ひとりの捕らわれ人が上のように話し掛けるには，いかに勇気が必要であるか想像できるだろうか。ダニエルはその勇気を示したのである。そしてあり得ないことのように思われるだろうが，ダニエルの方が王より長生きしたのである。

このダニエルは，ネブカデネザルを継いだベルシャザル王から，壁に書かれた不思議な文字を解読するよう呼び出された時も，同様の勇気を示している。彼はベルシャザル王に，この文字の解き明かしはこうですと言って説明した。

「神があなたの治世を数えて，これをその終りに至らせたことをいうのです。

あなたがはかりで量られて，その量の足りないことがあらわれたことをいうのです。

あなたの国は分かたれて，メデアとペルシャの人々に与えられることをいうのです。」（ダニエル5：26―28）

勇敢なダニエルは文字の意味を読んだだけでなく，その前にベルシャザル王に，王の罪悪がこの裁きを招いたのである，と宣言している。さらにその罪のひとつは，王の父ネブカデネザルがエルサレムの神殿から持ち帰った器物を汚したことであり，もうひとつの罪は，「天の主にむかって」（ダニエル5：23，ダニエル5章参照） みずから高ぶったことである，と王に告げている。

続いて記録を読むと，「カルデヤびとの王ベルシャザルは，その夜のうちに殺され」たとある。（ダニエル5：30）

王国を継いだメデアびとのダリヨスは，国を120の州に分け，各州にひとりの総督を立て，120人の総督の上に3人の総督を立てた。「ダニエルはそのひとりであった。」（ダニエル6：2）

この地位にあってダニエルは，大きな危険を冒して勇気を示さなければならなかった。他の「総監および総督らは，……ダニエルを訴えるべき口実を得ようとした。」彼らはダニエルをねたんでいたが，しかし何の口実も得ることができなかった。

「そこでその人々は言った，『われわれはダニエルの神の律法に関して，彼を訴える口実を得るのでなければ，ついに彼を訴えることはできまい』と。

こうして総監と総督らは，王のもとに集まってきて，……一つのおきてを立て，……今から三十日の間は，ただあなたにのみ願い事をさせ，もしあなたをおいて，神または人にこれをなす者があれば，すべてその者を，ししの穴に投げ入れる……ようにして下さい」と説いた。

さてダニエルはこのことを知ると，すぐ家に帰った。ところが彼の家の窓は開いていたので，人々は家の中を見ることができた。ダニエルは部屋の中で「以前からおこなっていたように，一日に三度ずつ，ひざをかがめて神の前に祈り，かつ感謝した。」（ダニエル6：4―8，10参照）

このように自己と神に忠実であったダニエルが大きな信仰と勇気を持っていたことに疑問を抱く人は，ひとりもいないであろう。

この後の物語を読む必要はないと思う。皆さんが御存じの通りである。もはや王はメデヤ人とペルシャ人の法律を変えることができないので，ダニエルは獅子の穴に投げ込まれた。しかし，主が獅子の口を閉ざされたので，ダニエルは救われた。

勇気に基づくすべての行為が，このような目をみはるほどの報いをもたらすわけではない。しかし，かならず平安と満足が得られる。ちょうど憶病がかならず悔いと良心の苛責を引き起こすのと同じである。

私はこのことを自分の経験から知っている。私は15歳の時，革命でメキシコから追われたが，当時のことをよく覚えている。私たちの家族はテキサスのエルパソからロサンゼルスへ移った。私はそこで，モルモンを嫌う人たちに囲まれて働くことになった。しかし自分がモルモンであることは黙っていた。するとしばらくしてジョセフ・F・スミス大管長がロサンゼルスへ来て，私の両親を訪れ，夕食をともにした。非常に質素な食事であった。実に乏しい食事であったことを覚えている。その日大管長は私の頭に手をおいて，「モルモンであることを決して恥ずかしいと思ってはいけない」と言われた。

実はその頃私はモルモンを口汚くののしる人々の前にいて堂々としていられない自分を情なく思っていたところだった。

またオーストラリアへ伝道に行っていた時のことも覚えている。私は壮大なジェノラン洞窟を見に行った。その中を歩いていると，ガイドが言った。どなたかあの岩の所へ行って歌を歌っていただけませんか。この洞窟の音響効果がよく分かります。」

その時みたまは，「さあ，あそこへ行って『高きに栄えて』を歌いなさい」と私にささやき掛けた。私は躊躇した。そうしている間に，人々は先へ進み，私は機会を逸してしまった。このことを思い出す度に私は残念でならない。マッケイ大管長が次のように言われるのを聞いて，私はようやく主が赦して下さったと感じることができた。彼はこう言った。

「私は伝道中に，あることをするようにとのみたまの声を聞いたことがあった。しかし私はそのことをしなかった。それ以来そのことをいつも残念に思っている。みたまのささやきを受けたら，かならず従うようにしなさい。みたまを受けられるような生活をし，みたまの導きを受けた時には，それに従う勇気を持つようにしなさい。」

神権者として私たちは老いも若きも皆，すべてのことについて自己と創造主に真実であることができるよう，勇気を培う決心をしようではないか。

神がこのために私たちを祝福したもうよう，イエス・キリストのみ名によって祈る。アーメン。

成功者は克己によって測られる

大管長会第一副管長

N・エルドン・タナー

愛する兄弟たち，この壮大なタバナクルにおいて神権者の顔をながめ，世界中の多くの人々が放送に耳を傾けていることを思うと，ここに立つことは実に大きな特権であり，祝福であり，また霊感を賜わる機会であると思う。イエス・キリストの教会に属して神の権能を授かり，主のみ名によって行動できることは，何と名誉なことであろうか。私たちは世界中にいる多くの神権者のことを思うと，大きな勇気を得，主を賛美せずにはおられない。

南米のブエノスアイレスでの地域大会に出席した時，メルケゼデク神権指導者会において，アルゼンチン，ウルグァイ，パラグァイ，チリを代表する1,300名以上もの出席者を迎えることができ，私たちは主に感謝した。一般大会には，ブラジルで5,500名以上，アルゼンチンでは10,000名以上の人が集まった。

主のみ業が前進し，主の王国が世界にあまねく築き上げられていることは明らかである。大管長が，サンパウロに神殿を建設すると発表された時，会員は感激し，心を躍らせ，大変な喜びようで，感謝の念を表わしていた。ブラジルとアルゼンチンの会員たちは全力を尽くして神殿建設を支持すると誓った。

福音を受け入れてその教えに従って生活する人々の生活に変化を見，彼らの証を聞くことは，実に心強いことであり，福音が真実のものであることを知る機会でもある。

ところで，ベネズエラのカラカスである晩，私たちが聖徒と求道者たちの会合に出席した時のことである。大管長は，そこに集まった出席者の数を500名と見ていた。私は話を始める前に，1974年，75年にバプテスマを受けた人々に立っていただき，それから，73年，72年，71年，70年の人々にもそれぞれ立っていただいた。また，教会に5年以上いる人々にも立つようにお願いした。しかし起立したのはわずか3名であった。しかもその3人は訪問者であった。このことから，その地域において，いかに，主のみ業が進んでいるかがお分かりいただけると思う。

さて，兄弟たち，今晩私は，できればすべての人々にも認識していただきたいことなのだが，神権を保持することがいかに大きな特権であるかを強調したい。また世の光となり，神の王国の建設を助けることができるように，神権を尊び，召しをよく遂行するよう決意していただきたい。また同時に，不死不滅と永遠の生命を授かることができるよう，みずからを備えるように強調したい。イエス・キリストを世の救い主として受け入れる決意をし，その教えに従って生活すること以上に大きな目標はない。またそれ以外のことによって大きな進歩は達せられないし，喜びも満足も得られないのである。

今私の声を聞いているすべての人は，永遠の生命と昇栄のためにみずからを備えることに専念したいと思っておられるに違いない。また自分の行ないを見て主が喜んでおられるのだということを知りたいと望んでおられるに違いない。しかし，このような人は少なく，そうした祝福にふさわしい生活をしようと努力しない人々もいる。そこでこのような人のことを念頭において，自己訓練，自制，克己についてこれから話をしたいと思う。これは，ひとたび始めたことを最後までやり遂げようとする時，また祝福を心から望んで得ようとする時に，私たち全員にとって大切なものである。

まず，幾人かの哲学者の言葉を引用したいと思う。

プラントは次のように言っている。「最初にして最大の勝利は，自己を

制することである。反対に自己に負けることは，すべての内で最も恥ずべき，罪深いことである。」

またダ・ヴィンチはこう言っている。「自己を統御すること以上に大きな統治もなければ，小さい統治もない。」また次のようにも言った。「人の成功は克己の度合いによって測られ，失敗は放縦の度合いによって測られる。…… この法則は永遠の正義の表われである。自己を統御できない人は他人を統御することができないであろう。」換言すると，そのような人はふさわしい父親にも，指導者にもなることができないということである。

賢者ソロモンは味わいのある言葉を残している。

「怒りをおそくする者は勇士にまさり，自分の心を治める者は城を攻め取る者にまさる。」(箴言16：32)

克己にはふたつの大切な要素がある。そのひとつは，あなたの進路を決めることである。いわゆる，道徳の標準という帆を揚げることである。他のひとつは意志の力である。すなわち，帆を揚げて進む船に働く風である。前にも言ったように，人格は良い結末に向けて自己を治める能力の範囲で決められる。何が良い人格を築き上げるかを言葉で言うのは難しいが，克己を見ればそれがどういうものであるか知ることができる。克己はいつも人々の賞賛を得るが，克己のなさは人々の同情を買う。しかし，大抵は意志の力の問題である。

次のガリソンの言葉には，そうした偉大な決意が見られるように思う。

「私は真剣である。言葉を濁さないし，言いわけもしない。一寸も退きはしない。そうすれば私の言い分は聞き入れられる。」(ウイリアム・ロイド・ガリソン)

これは，正義と真理の業に従事している私たち全員に当てはまることである。

キリストは私たちに，いかにすれば成功の道を歩めるかを，もっと詳しくはっきり答えておられる。それは次の聖句からよく分かる。

「狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きく，その道は広い。そして，そこからはいって行く者が多い。

命にいたる門は狭く，その道は細い。そして，それを見いだす者が少ない。」(マタイ7：13，14)

このことを考えてみると，目的地に通じるまっすぐな狭い道を進み続ける人は，この世において成功し，自己実現と自己達成を勝ち得る人である。この人は，直線が二点間の最短距離であり，回り道は非常に危険であることを十分認識している。このためには，自制と自己訓練が必要である。

他方，目的を意識せず，自己の訓練を図らない人は，回り道をし，失敗と滅亡を味わうのである。

まっすぐな狭い道に従って歩もうとすれば，制約，束縛，強制が付きまとい，心引かれるものを一切控えて生活しなければならないと不平を言う人がいる。しかし，このような生活は勝利と目標達成を保証する。この勝利を得るには，目標を立てて，その道からそれないように心を配り，それに従わなければならないことを自覚すべきである。

「狭い」という言葉は非常に意味深い言葉である。よく人々は，まっすぐな狭い道に従っていれば偏狭になると非難する。確かにそのためには，自制と克己が必要である。ある面では制約され，限度を設けられることを知り，それに備えなければならない。しかし，それは人間を束縛するものでも何でもないことを悟らなければならない。むしろこの道は，解放と独立と自由への道である。

次の言葉を覚えていただきたい。

「偉人が到達し維持している頂点は決して一足飛びに成し遂げられたのではなく，仲間が眠りについている夜の間にこつこつと働いて達成されたものである。」(ヘンリー・ワーズワース・ロングフェロー)

また，働かないものには報酬がないが働く者にはかならず報酬がある，ということも覚えていただきたい。財政上の成功を望むなら，あるいは幸福を，健康を，または道徳的に潔白であることを望むなら，そして心に信仰による平安を見いだしたいならば，確かな道はただひとつである。それは，まっすぐな狭い道，すなわち貞節の道，勤勉，節制，誠実，徳行の道である。

どんな分野でも，成功をおさめ，卓越した者になりたいと願うならば，若いうちから立派な人間になろうと決意し，大人になるまでその決意を引き延ばさないことが肝要である。そして，自分を鍛える勇気と力と確信を持って，自制と克己を働かせるのである。

私には，バトミントン選手として知られている孫がいる。彼は16歳でチャンピオンになった。彼は，毎朝何キロも走り，体調をよく整えてこの勝利を得た。学校の勉強も怠らず，熱心にバトミントンの練習をし，知恵の言葉を厳格に守って健康の原則に従った生活をしている。私は彼を誇りに思っている。

神権者である兄弟たちよ，今晩どこでこの話を聞いていようと，あなた方は神権を授かっているという大きな特権に感謝すべきである。また，神権を受けたとき，神権を尊び，それにふさわしい生活をすると主と誓約を交わしたことを忘れてはならない。

「俗悪で，神聖を汚すような，いかなる事柄にも染まらないようにし，心身ともに清く保つことが極めて大

切である。日曜学校と聖餐会に出席して，主イエス・キリストが私たちのために大きな犠牲を払って下さったことの記念である聖餐を配るとき，あなたは自分がふさわしい者であるか，手は汚れていないか，心は清いか，さらに過去1週間ふさわしくない行ないをしていないかどうか，自分をよく確かめるようにしなければならない。

先日，聖餐会に出席したとき，白いワイシャツを着用し，ネクタイをして，清潔できちんと身づくろいをした青少年が聖餐の祝福をし，聖餐を配っているのを見て実にうれしかった。しかも配っている間中非常に敬虔であった。私はあとで，その若い神権者たちと監督をほめて，主はあのように聖餐式が執り行なわれたことを喜んでおられるに違いないと言った。聖餐式は最も神聖な儀式である。私たちに敬意と敬虔の態度が欠けるとき，神は果たしてお喜びになるだろうか。

また，神権を保持する若い男性が，1週間の間に，知っていながら良くない言行をしていたならば，神はお喜びになるはずがない。

数年前，執事になってから1年経つ一番年上の孫が私の所にきて言った。「おじいさん，僕，1年前に執事に召されてからずっと100パーセントですよ。」私は問い返した。「100パーセントって，どんな意味かね。」もちろん私は知っていて尋ねたのだが，孫は答えて言った。「僕ね，執事に召されてから，聖餐会と日曜学校と神権会を一度も休んでいないよ。」

私は，それはえらいね，とほめてこう言った。「ジョン，もし伝道に出る年齢になるまで100パーセントを続けたら，伝道に出る資金を出してあげよう。」孫はにこっと笑顔を見せて，「きっと続けるよ」と言った。

私はおそらく続かないだろうと思っていたが，孫は100パーセントを通す決心をしていた。私は彼が約束を果たすために自分の心を抑えたことが2回あったことを覚えている。一度は，叔父が子供たちを連れて旅行に出かけようと，彼を誘ったときのことであった。ジョンは言った。「日曜日に，僕が集会に出席できる場所がある！」しかし「ない」と言われたので，彼はこう言った。「じゃあ，僕は行けないよ。だって僕は100パーセント出席するつもりなんだもの。」それで海や島への楽しい旅行を犠牲にしたのであった。

もう一度は，週末に足を折ったときのことであった。彼が最初に医師に聞いたことはこうであった。「日曜日に教会に出席できますか。僕は100パーセント出席したいんです。」もちろん，彼は松葉杖をついて出席した。

こうして彼は19歳になった。「おじいさん，僕は約束してからずっと100パーセント出席したよ。」私は喜んで彼に伝道資金を出した。この達成は彼の生涯に非常に大きな影響を与えている。もはや彼にとって，自己を訓練したり，正しいことや成功をもたらす事柄を行なったりすることは，それほど難しくはないのである。

すべての神権者が知恵の言葉を固く守ることはいかに大切なことであろうか。タバコ，茶，コーヒー，アルコール，麻薬等に手を出さないこと。また安息日を聖く保つこと，いつも正直で正しくあること，いかなる場合にも主の道にふさわしく，また主に受け入れられる者であるように修養することが極めて大切である。

サタンは活動の手をゆるめることはない。そして巧みな悪知恵で私たちの欲望や情欲，友人を通じて，私たちにふさわしくない悪事を行なわせようと誘惑している。また，若者ばかりではなく，高い地位にいる人々もしばしば誘惑に負けている。私たちは常に，悪に対して防御の盾を取り，警戒を怠らないようにしなければならない。私たちは自分がだれであるのか，また何を達成しようとしているのかを決して忘れてはならない。気をゆるめてはならない。

以前私は，伝道に召される前に不道徳な行為をしたある宣教師と話をして非常に悲しい思いをしたことがあった。彼は，監督にもステーキ部長にも黙っていた。このように，彼はうそをついて，道徳上の罪と虚言の罪を二重に負って伝道に出たのであった。彼は主のみたまを得ることはできなかった。ついに，伝道部長のところに行って自分の過ちを認めた。そして彼は深く悔い改め，主に赦しを祈り求めたのであった。

彼は私に話したとき，こう言った。「私は破門でも何でも覚悟しています。ただ神とのつながりを回復し，神の赦しを得たい気持ちで一杯です。」

私たちは，いかなる点においても心を動揺させてはならない。私たちはいつでも伝道に，神殿結婚に，また教会の活動に備え，良い模範になって，他の人々に私たちの生活態度から良い影響を及ぼすように努めなければならない。そしてそのことをいつも心に留めておく必要がある。

非常に多くの人がこのように言う。「1本のタバコ，1杯のコーヒー，少量の麻薬ぐらいなら体の害にはならない。」

最初の1杯に手を出さなければ，決して2杯目に手を出すことはないことを強調したい。手を出さなければ，決してアルコール中毒患者になることはないのである。

主は，どこで何をしていようと，すべての少年に関心を持っておられる。私たちは皆ある職務，召し，あるいは責任にあずかるよう予任されているのである。

キンボール大管長は少年の頃，十二使徒になろうとは少しも思わなかったそうである。事実，彼は十二使徒に召されたとき，その責任にふさわしくなれるよう，何度も涙ながらに祈りを捧げたと話しておられた。

しかしながら，私はあえて申し上げたいのだが，主が心の中に定められたみ業に従事できるよう，若いときから自己訓練と克己によってよく準備をした最良の模範を，私はキンボール大管長に見るのである。さて神の予言者であるキンボール大管長はすべての若者に，熱心に学び，清い生活をすることにより身をふさわしく保ち，伝道資金を貯蓄し，伝道に出る準備をするように話された。

若い兄弟たちに申し上げたい。もしあなた方が，大管長が求めたことを実行するならば，幸福と成功はあなた方のものとなるであろう。そして多くのよいことをなし遂げ，権能をもった人から与えられる主の召しに対していつでも準備ができた状態を保つことができるのである。

ブエノスアイレスで行なわれた地域総大会に出席していて，私はジレット・レーザー社の南米全域の責任者である方に会った。彼は主が望まれる道に従って少年時代を送り，神権者としてどんな地位についてもそれを立派に果たしてきた。彼は，アルゼンチンからブリガム・ヤング大学に学び，そこで学生自治会の会長となった。大学を出ると，アメリカ合衆国のジレット社に就職し，最近，南米全域の責任者に任命されたばかりであった。彼は大会中，キンボール大管長の話を全部通訳した。

彼は予言者の通訳ができるとは，全く光栄ですと私に言った。また，彼の生涯にとって福音がどんな意味を持っているか，そしてそれは今の仕事に対してどのような備えとなったかを話してくれた。

主はいつでも，十分信頼できる人，伝道の地でよく主を代表できる人，そして，いかなる場合にも信頼でき，神の王国建設を助ける準備のできている人を求めておられる。

主は言われた。「見よ，これわが業にしてわが栄光，すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」(モーセ1：39)　主は私たち神権者に，福音を宣べ伝える助けをし，福音を実践し，また人々も実践できるように助けることを求めておられる。これは人々に不死不滅と永遠の生命を得させるためである。

この復活祭の時期にあたり，私は，イエス・キリストが現在生きておられ，真に生ける神の御子であること，地上に降臨し私たちのために生命を犠牲にされたこと，そして生命と救いの計画を授けて下さったことを証したい。これこそが，私たちが回復された主の教会で教えている福音である。また私たちが，神の予言者スペンサー・W・キンボールによって導かれていることをあなた方と全世界に証したい。

私たちが，自己訓練と克己の原則を適用し，神権者として受けている数々の祝福にふさわしい者となれるよう，また神のみ前に正しく歩むことができるよう，へりくだってイエス・キリストのみ名により祈る。アーメン。

ふさわしい神権者になろう

大管長

スペンサー・W・キンボール

私は今晩この会で話された4名の教会幹部の方々の素晴らしい説教を聞きながら，もし世界中のすべての少年が，またすべての男性がこのような説教を聞いて，人々が持つべき思い，目指すべき理想，そして標準を知ることができればどんなによいことだろうかと考えた。この教会の神権者である私たちは，個人の生活や教会の仕事においてこれほどの指導と霊感を受けることができ，何と幸せなことだろうか。

私は今管理役員に，特にイスラエルの「共通の判士」である監督とステーキ部長に話したい。

まず教会初期の大管長と予言者の言葉を読んでみよう。ジョン・テイラー大管長は次のように語っている。

「さらに，何人かの監督は会員の罪を隠そうとしているということである。私は神の名によって彼らに言おう。あなたがたはその人の罪を負って，裁きを受けなければならない。あなたがたの中に人の罪を故意にゆがめる者がいればその人はその罪を引き受けなければならない。また人の罪に加担し，罪を覆い隠す者は，その罪を身に受けなければならない。監督や支部長の責任にある人々はよくこのことを心に留めていただきたい。神は罪人の処理をあなたがたの手に委ねておられるのである。あなたがたは正義の原則に手を加えたり，人々の非行，腐敗を覆い隠すために教会の高職に任命されているのではない。」(*Conference Report*「大会報告」1880年4月，p.78)

次にやはり大管長会の一員であったジョージ・Q・キャノンの言葉を読もう。

「神のみたまは疑いもなく，非常に嘆き悲しみ，このような行為を犯した者を見捨てられる。そればかりでなく，私たちの周囲でこのようなことが行なわれるのを止めなかった者，行為者を責めなかった者をも見捨てられるだろう。不義を阻止し，過ちを明らかにする適切な手段を講じないとき，上は大管長から下はすべての神権者に至るまで，神のみたまは失われ，神の賜，祝福，および力の後退が見受けられることになる。」(*Journal of Discourses*「説教集」26：139)

さて兄弟の皆さん，この点についてほかにも数多く教会幹部の話を引用することができる。

私たちは，面接する指導者が罪を犯した人に個人的な同情を寄せ，家族に愛を感じるあまり，その人が当然受けなければならない罰を差し控える傾向が非常に強いことを懸念している。

罪を犯した人が当然会員権を剥奪されるか，破門されるかしなければならないときに，赦されて何の罰も受けないことがあまりにも多い。また，破門されて然るべき罪人が会員権の剥奪で終わっていることも非常に多い。

このような場合あなたがその罪を背負わなければならないとテイラー大管長が言われたことを覚えていただきたい。兄弟たち，あなた方は人の重大な罪を背負いたいだろうか。

あなた方は予言者アルマの言った言葉を覚えているだろうか。「さて，……罰が定めてなかったならば，人は悔改めをすることができなかった。」(アルマ42：16)

このことについてしばらく考えていただきたい。あなた方はこの点に気がついていただろうか。本当の完全な悔改めをしないと，赦されることはあり得ない。しかも罪のない所に悔改めはないのである。これは確かに永遠の原則である。

もうひとつつけ加えたいことがある。決定を下すのはステーキ部長か監督で副ステーキ部長，副監督ある

いは高等評議員は，その決定を受け入れるか，拒むかいずれかの立場に立っている。他の普通の事柄を扱うときのように，賛否の挙手をするのではない。

神の律法を破った人があなたがたの所へ来たときは，以上のことを覚えていただきたい。

不相応な同情に道を譲ることは簡単である。しかし罪を犯した人は苦しまなければならない。これは絶対に必要なことである。そしてそう要求するのは監督や支部長ではなく，人間が生まれながらにして持っている個有の性質がそうさせるのである。この処罰の手続きは，特に成人と既婚者に，中でも神殿に入った者に適用される。この人々は神の神聖な律法を曲げることはできないことを理解しなければならない。

次に先日ジョセフ・スミスについて書いたウイルフォード・ウッドラフの記録を読んでいて興味を覚えたことがある。私たちは誤った誇りを持っておごり高ぶった人を見かけることがある。こういった人は自分の思い通りに事を進めようとするか，それができなければやめるかどちらかである。監督かだれかとちょっとした口論をしたために，ワード部を去って，二度とワード部の敷居をまたごうとしない人を見たことはないだろうか。

予言者はこう言っている。「私たちは自分が占めている地位のことで高慢になることは少しも許されていない。大管長であれ，副管長であれ，使徒であれ，または他のいかなる人であれ，もし心の中で自分がいなければ神は不自由される。主のみ業を進めていく上において自分は特に重要な存在である，と感じるなら，その人は危険な状態にある。私はジョセフ・スミスから，この教会の第二の使徒オリバー・カウドリが彼に，『もし私がこの教会を去れば，教会は倒れるだろう』と言ったということを聞いた。ジョセフ・スミスは『オリバー，それではやってみるといい』と答えた。彼は去った。そして彼はつまづいた。しかし神の王国は決してつまづかなかった。私は今の時代に，他の使徒でやはり自分がいなければ主はみ業を進められないと考えた人を知っている。しかし主は彼らがいなくてもみ業を押し進められたのであった。ユダヤ人にも異邦人にも，大なる者にも小なる者にも，また富める人にも貧しい人にも，すべての人に申し上げたい。全能の神は御自身の内に力を持っておられ，み業を進めていくためにだれか特定の人に依存しておられるということはない。しかし主が人を召してみ業に従事させるとき，人は主を信頼しなければならない。」（ウイルフォード・ウッドラフ *Discourse* 『説教』「デゼレト・ウィークリー」 1890年4月6日，40：559，560）

さて神権を持つ兄弟の皆さん，大会のたびに遠くからこの神権会に父と子が一緒に来て出席し，大会の説教を聞くことには，特別な意義がある。

私はあなた方の中に素晴らしい若者が数多くいるのを目にし，間もなく父親となり，指導者となり，監督，ステーキ部長，あるいは宣教師となっていく姿を感じるとき，大きな感激を覚える。

今この会場には非常に多くの若人がいる。そしてその多くは執事である。私は自分が執事であったときのことを覚えている。（もっともだいぶ昔のことであるが。） 私は執事になることは，非常に大きな栄誉であると思っていた。父は私の責任のことにいつも心を配り，馬車で断食献金を集めることを許してくれた。私の責任は自分の住んでいた町の一角で献金を集めて回ることであった。しかし家々を回るとかなりの距離になり，その上小麦粉の袋ひとつ，果物のびん詰め1本，野菜，パンなどが集まると，大変重かった。それで馬車を使うと非常に便利で快適であった。後で現金で納めるようになったが，当時は品物で納めていたのである。天父のためにこの奉仕をすることは，大変大きな栄誉であった。時代が変わって，品物の代りにお金が納められるようになったが，この奉仕をすることは依然として大きな栄誉である。

私は今も執事である。私はいつも自分が執事であることを誇りに思っている。聖会で使徒たちが聖餐を祝福し，他の教会幹部が聖餐のテーブルの所へ行ってパンと水を受け取り，集まったすべての人に配って空になった容器を返すのを見るとき，私は自分が執事であり，教師，祭司であることを大変誇りに思う。

神殿で開かれる特別な集会で，教会幹部が聖餐のテーブルについて祝福し，続いて聖餐を配るとき，私の心臓の鼓動は音が聞こえるほど高鳴り，私は神聖なアロン神権を持っていることと，聖餐の儀式を執行できる特権に感謝の念を抱くのである。

またパンを割いて祝福し，使徒たちに与えられたのはイエス・キリストであることを思い出す。私も同じようにできることを誇りに思う」ふさわしい状態で聖餐を配り，敬虔であるようにと話したタナー副管長や他の兄弟たちの先ほどの話を記憶していただきたい。

父親である皆さん，ウォルター・マックピークの記事を読んでお聞かせしたいと思う。「少年はリンカーンやワシントンのような英雄をたくさん必要としている。しかし同時に，すぐ身近にも英雄が必要である。大きな力を持ち，すぐれた人格を持っ

た人を個人的に知る必要がある。町で出合ったり，一緒にハイキングやキャンプに行ったり，家の近くでふだん何気なく接触できる人が必要である。彼らは一対一で質問したり，話をしたりできる人を必要としている。」

すべての父親は息子に対してこのように身近な存在となっていただきたい。またすべての父親は家庭の夕べを開いて，息子や娘にそれぞれ自由に発言する機会を与え，家族ですることを共に計画し，家族の祈りを捧げ，子供たちに家庭の夕べに参加する機会を与えていただきたい。

少年の皆さん，人生には大切な目的がある。天父なる神は，あなた方のためにひとつの世界と人生を備えられた。この人生は特筆に値するものにもなれば，通りいっぺんのものにもなり得る。それはあなた方次第である。12歳ともなれば，多くのことが期待されるようになる。この人生は運にまかせて生きるものではなく，力を尽くし，努力し，計画して生きるものである。ユダヤ教では，男子は12歳で成人と見なされるということである。主イエス・キリストが両親に連れられて神殿に来たとき，主がそこにとどまって指導者や博士たちと知的な会話を交わされたのは，そのためであると思われる。

さて，よく尽くしてくれる父親に恵まれた子供は，今度は自分で天父なる神，両親，それに出合うすべての人に喜ばれる生活を送る責任を負っている。あなた方は成長していく過程で，ロムニー副管長が力強く話されたように，勇気を出さなければならない場面に何度も遭遇するであろう。

ある沈没寸前の船に乗っていた従軍牧師が青年に言った。「あなたは若く，前途は洋々としている。さあ，これを使いなさい。」こう言ってこの牧師は救命具を下士官に渡し，間もなく船と共に沈んでいった。

「それは1943年2月3日のことであった。この悲劇はアメリカの軍隊輸送船ドチェスター号の水雷による沈没であった。この従軍牧師のほかに，これとほぼ同じことを言って救命具を譲り，命を犠牲にした牧師が3人いた。以上の4人の内，ひとりはカトリック教徒で，ふたりはプロテスタント，ひとりはユダヤ教徒であった。」

人は人生を築くのに法定の年齢に達するまで待つ必要はない。幼児の時，子供の時から始まるのである。

主イエスが神殿に行かれたのが弱冠12歳，十字架にかけられたのが33歳であったことは興味深いことである。また予言者ジョセフ・スミスが神から示現を受けたのがまだ15歳に満たない時であり，モロナイの訪れを受けて金版のことを知らされたのがわずか18歳の時であったことも，注目すべきことである。また金版を受け取って，重責を担ったのは，まだ22歳の時であった。そして弱冠24歳の時にモルモン経を出版し，24歳を少し越えた年齢で啓示に基づいて地上に神の王国を組織している。

さらに最初の使徒たちも若く，29歳から36歳であったことも興味深いことである。彼らがこのように若いにもかかわらず，円熟しており，強く，気品があったことは，信じられないほどである。

少年は立派な大人に成長する。これまで何千人，何万人もの宣教師が伝道に出かけ，伝道から帰ってきた。伝道の業に携わる若人は，立派な大人になって帰ってくる。あなたは，若人が19歳で伝道に出かけて行き，2年後に背も高く，立派な，しっかりした目的をもった大人になって帰還する姿を何度も目にしたことだろう。

ある大企業の幹部は，「少年をどのようにして大人に育てるか」という質問に次のように答えている。彼に問われた質問は厳密には，「人を本当の人物にするのは何であろうか」というものであった。私は彼の答えに同意する。

「いろいろな要素があるが，少年のときに耳を傾けた内なる声が最も重要である。この声を私たちは良心と呼んでいるが，これは私たちの思いを制御する。そして人の思いは行為となって表われる。繰り返し行なう行為は習慣となるので，今あなたが考え，行なっていることは，未来のあなたを示していると言える。

少年をその名前に恥じない人物にするためには何をしなければならないかと問われれば，私はこう答えよう。決して嘘をついたり，人をだましたりしてはならない。嘘をつく人は弱虫である。また同時に泥棒である。すべてのことについて真理を尊ぶ勇気があれば，あなたは克己の道を前進していると言える。

一生懸命に働きなさい。あなたの心は倉庫のようなもので，あなたは棚に品物を貯えるのである。良い品質の品物で倉庫を満たしなさい。あなたが今日形作る，仕事と勉強の習慣は，明日のあなたの生活の基となることを覚えなさい。

楽しく暮らしなさい。体力とスポーツマンシップを必要とする活動的なゲームをしなさい。自分自身がルールを守り，人にも同様にするよう求めなさい。

そして創造主を敬いなさい。神はすべての善の源である。測り知れない受け継ぎに感謝を表わす最も良い方法は，『義務，名誉，国家，そして神』の規約に沿った生活をすることである。

もしこのように生活し，すべてのことについて最善を尽くすなら，あなたが培う心と魂は，いつか立派な

人物の心と魂になるだろう。」(J・エドガー・フーバー)

大切なのは姿勢である。人は背が高くなることを望むとき，天に向かって伸びをし，高貴な人になりたいと思うとき，まず品性のある衣服を着，空を飛びたいと思うとき，翼を持たなければならない。また，正しい人になりたいと思えば，正義の外套をまとわなければならない。

ジョージ・ホール卿についての言い伝えがある。話の真偽はともかく，これから教訓を学び取っていただきたい。「ジョージ卿は良くない生活を送っていた。酔っ払いで，賭博にあけくれ，取引きでは不正を働き，彼の顔はそれまでの生き様を如実に反映していた。それはひどく醜い顔であった。

ある日彼は田舎の純朴な少女に恋をして，結婚を申し込んだ。ジェニー・ミアは，見苦しく醜い顔の人とは決して結婚できない，私は本当の愛の鏡である聖人のような顔の人と結婚したい，と言った。

当時皆がしていたように，ジョージ卿はロンドンのボンド街にいるアエニアス氏のところへ行った。アエニアス氏はろうの面を作っていた。その技術は完璧の域にまで達していて，人々は面をかぶっている人がだれであるかを見抜くことができなかった。その技術を証明する例として，借りたお金を使い込んだ債務者が，彼の面をかぶって債権者の前を気づかれずに歩いて通ることができた，と言われている。アエニアスは倉庫へ行って面を選び，火で熱してジョージ卿の顔につけた。そこでジョージ卿が鏡をのぞき込むと，愛に富んだ聖人のような顔が映っていた。彼の容貌は一変し，間もなくジェニー・ミアと結婚することができた。

彼は田舎に小屋を買った。それはばらの木に囲まれてほとんど人目につかない小屋で，小さな庭がついていた。それ以来彼の生活は180度転換した。自然に興味を持つようになり，野の石に説教，小川に書物，そしてすべてのものに善を見出すようになった。以前の彼はただ遊び疲れて，人生に全く興味を持っていなかった。しかし今は親切を施すことと，周囲の世界に夢中になっていた。

彼はただ新しい生活を始めることにのみ満足しないで，過去の償いをしようとした。極秘のうちに法務官を通じて，自分が詐欺によって得た利益を返還した。そして毎日人格に磨きをかけ，美しい思いを加えていった。

ところが偶然前に彼と一緒に働いていた仲間が，彼の正体を知った。そこで彼のもとを訪れ，昔の悪い生活にもどるよう誘いかけた。彼が断わると仲間は彼を襲い，面をはぎとってしまった。

彼は顔をおおった。すべてが終わったのだ。新しく発見した人生も，愛の夢も。彼が足もとに面を落としてぼう然と立ちつくしていると，妻が庭を一目散に走ってきて彼の前に身を投げ，とりすがった。そして見上げた彼女の目に映ったのは一体何だっただろうか。見よ，一本一本のしわから，特徴ある細かな点に至るまで，あの面とそっくりの顔だった。全く美しい，均斉のとれた顔になっていたのである。」

人の営む生活が，また心に抱く思いが顔に刻まれることは，疑いのないところである。

時間があるので，興味深い記事を少し読んでみたいと思う。

噂

どの町でも，どの通りでも，
ほとんどどの家でも，あなたは
そこここをうろつく小さな鬼に
出会うだろう。
歯を見せては冷たい笑いを浮かべ，
あなたの揺り椅子によじ登り，
どこにいてもあなたにとりついてくる小鬼。
そしてあなたのすぐ近くにたどりつくと，
あなたの耳に何かささやきかける。
人の恥となるちょっとした噂を。
この鬼の名前は，「小さな噂」である。
決してはっきり「知っている」とは言わない。
ただそう聞いた，と言うだけである。
しかしそれでもあなたにささやきかける。
するとあなたも行って人にささやきかける。
少しの中味がありさえすれば，
噂というものは間違っていても，
ジョンがヘンリーに言えば，ヘンリーからジョーに，
ジョーがメアリーに言えば，メアリーからフローに，
フローがミルドレッドに言えば，ミルドレッドからルースに伝わる。
そしていつの間にか真実として語り継がれるようになる。
あなたはこの小さな鬼を知っているだろう。
自分で知っているとは言わない。
これは真実だとは言わない。
ただあなたにささやくだけである。
あなたも行って，
ほかの人に話すことを知っているからである。
このようにして日が沈む前に，
彼は悪魔の業を助けるのだ。
そして喜びと善意を，
隣近所から奪い去っていく。
「噂」に気をつけよ，
彼が家に忍び込み，中傷を言いふらしたとき。
どんな場合にも証拠を求めよ。
だれから，いつ，どこで聞いたかを，
ただ口づてに聞いたというのであれば，一言も信じないとはっきり宣言

し，
私はそんな町のつまらないおしゃべりなど，
人には伝えない，と返事せよ。
噂がいくらほほえみかけ，作り笑いをしようと，
悪魔の業を助けることは拒まなければならない。
——詩「幸福な時」より

兄弟たち，今晩聞いた212人の男性コーラスは本当に美しかった。あなた方に会えたことは素晴らしいことである。神権者として主に仕えることは栄誉である。王や皇帝が所有しているものよりも大きな，この貴重な神権を持つことは，何と恵まれていることだろうか。すべての少年が兄弟や父親と共にこの神権にあずかれるということは，何と素晴らしいことだろうか。神が皆さんを祝福し，今晩この集会で話されたことが心に深く浸透し，私たちの益となるように願っている。

これは主のみ業である。私はあなた方少年と成人の方々にこのことを知って欲しい。これは主のみ業である。私はそのことをはっきり知っている。この証をあなた方に知っていただきたい。もちろんあなた方自身もこの証をお持ちであろう。共に前進し，私たちの大きな未来に備えようではないか。神があなた方を祝福されるように，イエス・キリストのみ名により，アーメン。

復活祭に寄せて

大管長会第二副管長

マリオン・G・ロムニー

全世界の兄弟姉妹，これから少々の時間私が話す間に主の助けが得られるように願い求めていただきたい。なぜなら，私がこれから話そうとすることは，地上に住むすべての人間にとって重要なものだからである。

復活を記念するこの時節に，今年も復活について多くのことが語られた。復活がどのような意味を持つのかについて完全に理解することはできないにしても，復活が実際にあるのだ，ということについては，心に深く刻み込んでおく必要がある。

パウロはコリント人へ宛てて書いた手紙の中で，復活がイエス・キリストの福音の中枢をなすものであることを暗に示している。

「もしわたしたちが，この世の生活でキリストにあって単なる望みをいだいているだけだとすれば，わたしたちは，すべての人の中で最もあわれむべき存在となる。

しかし事実，キリストは眠っている者の初穂として，死人の中からよみがえったのである。

それは，死がひとりの人によってきたのだから，死人の復活もまた，ひとりの人によってこなければならない。

アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように，キリストにあってすべての人が生かされるのである。」（Ｉコリント15：19―22）

パウロの手に成るこの偉大な解説を吟味する手始めとして，「死がひとりの人によってきたのだから」という句を取り上げてみよう。「人」とは一体何であろうか。この疑問は時代を越えて人々の口にのぼってきたものである。ヨブは苦しみの中でこう叫ぶ。

「人は何者なので，あなたはこれを大きなものとし，これにみ心をとめ，朝ごとに，これを尋ね，絶え間なく，これを試みられるのか。」（ヨブ７：17，18）

またこうも書かれている。「人はいかなる者か，どうしてこれは清くありえよう。女から生れた者は，どうして正しくありえよう。」（ヨブ15：14）

これに対して，詩篇の作者はこう答えている。「人は何者なので，これをみ心にとめられるのですか，人の子は何者なので，これを顧みられるのですか。ただ少しく人を神よりも低く造って，栄えと誉とをこうむらせ」（詩篇８：4，5）

この疑問に対して聖典は，明確で力強い解答を与えてくれる。人間は，死すべき骨肉の体を有する，神の子供なのである。これは人間の創造のときに明らかにされた。創世記は，地球と地球に置かれるすべてのものに，霊における創造があったことを告げている。それには人間も含まれており，神は「自分のかたちに人を創造された。すなわち，神のかたちに創造し，男と女とに創造された」のである。（創世１：27）

「地にはまだ野の木もなく，また野の草もはえていなかった。主なる神が地に雨を降らせず，また土を耕す人もなかったからである。

しかし地から泉がわきあがって土の全面を潤していた。

主なる神は土のちりで人を造り，命の息をその鼻に吹きいれられた。そこで人は生きた者となった。」（創世２：５―８）

これは現代の聖典の言葉と一致する。「而して，人間は霊と体とより成る。」（教義と聖約88：15）

さて，「死がひとりの人によってきたのだから」とあるが，死とは何だろうか。死とは，肉体と霊とが離れることである。

アダムとイヴは，生ける霊の結合体として創造されたとき，永遠に生きる能力を与えられていた。彼らは

罪がなく純粋で，また徳も高く，神と交わるにふさわしい生活をしていた。実際彼らは，天父なる神との交わりの中で満ち足りた生活を送っていたのである。事実天父はエデンの園にいる彼らのもとを訪れ，言葉を交わし，数々の教えを授けたもうた。この教えは彼らにとって必要なものであった。霊から霊の結合体への変化の過程において，彼らの記憶から過去の出来事がすべて消し去られてしまっていたからである。

「主なる神はその人に命じて言われた，『あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。

しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると，きっと死ぬであろう。』」(創世2：16,17)

詳細にわたって説明する時間は到低ないが，重大な事実は，アダムとイヴが教えに反して禁断の木の実を食べたということである。こうして彼らは自分の体内に食物を入れ，食物は彼らの体にある変化をもたらした。それは，しかるべき時に人の霊と肉体は分離する，すなわち人は死ぬということであった。

神の戒めを破ったことに対するこの罰は，アダムのすべての子孫に受け継がれた。こうして「死がひとりの人によってきた」のである。(Iコリント15：21)

あらゆる人におとずれる死によって，肉体は地に帰り，霊は霊界へと戻る。

死によって肉体から離れた霊は，不安定な状態に置かれる。このことについてヤコブは次のように記している。

「もし肉体がもうよみがえらないならば，私たちの霊は必ずあの天使，すなわち永遠の神の御前から堕ちて悪魔となった天使に服従してもうよみがえることは決してない。

そして私たちの霊は必ずあの天使のようになり，私たちは悪魔すなわち悪魔に属する使たちとなって私たちの神の御前から締め出され，あの偽りを生む親と共に，彼自身のように不幸の中に留らなければならない。」(IIニーファイ9：8—9)

従って死からの贖い，すなわち復活は，人間の将来の幸福にとってどうしても必要なものとなるのである。

「元素は永遠なるものにして，分つ能わざる様に結合したる霊と元素とは完き喜びを受く。

この両つのもの，相離るる時人は完き喜びを受くることを得ず。」(教義と聖約93：33,34)

さて全知全能の神は，この状態を予見しておられた。アダムが善悪を知る木の実を食べることにより，死が全人類に及ぶことを御存知だったのである。また神は，人間が自らの責任ではないのにもかかわらず永遠に死の苦しみを味わうことに対して，不公平であるとも考えておられた。そこで神は，キリストの死と復活を通して贖いの業を行なわれたのである。

主はこの点について，近代の啓示の中でこう語っておられる。

「さてわれ誠に汝らに告ぐ。そもそも汝らのために為されたる罪の贖いによりて，死せる者よりの復活は来るなり。

而して，人間は霊と体とより成る。

また死にたる者より復活することは，霊と体とを贖うことなり。

されば，この霊と体との贖いはすべてのものを生かす者によりて来り，地の貧しき者と柔和なる者は地をつぐべしとその生かす者の胸の内に定められたり。」(教義と聖約88：14—17) 生かす者とはイエス・キリストである。

さて，イエス・キリストとはだれであろうか，だれひとりとして，また人間が総力を結集してもなし得ない復活をどのようにしてなされたのであろうか。聖典はこれらの質問に答えてくれる。それによると，霊界においてイエスは，私たちと同じように永遠の父なる神の子供であった。この点でイエスは他の人間と変わるところがない。しかしながら異なるのは，私たちがアダムの子孫として死を味わうように定められているのに比べ，キリストの肉体は死に従属することのない，不滅の体を持ちたもう天父なる神から生まれたということである。従ってキリストは，天父から無限に生きる能力を受け継いでおられ，生と死を支配する力を持ちたもう。このことはパリサイ人への主御自身の宣言の中に見ることができる。

「わたしはよい羊飼である。よい羊飼は，羊のために命を捨てる。

わたしはよい羊飼であって……羊のために命を捨てるのである。

父は，わたしが自分の命を捨てるから，わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは，それを再び得るためである。

だれかが，わたしからそれを取り去るのではない。わたしが，自分からそれを捨てるのである。わたしには，それを捨てる力があり，またそれを受ける力もある。」(ヨハネ10：11，14，15，17，18)

人類が死に支配され，死からよみがえることができないので，イエスが地上に来たまい，アダムの堕落を贖うために自ら進んでその命を捧げられた。復活の力はこうしてもたらされたのである。

主が死に打ち勝たれたことの第一の証拠は，もちろん主御自身の復活である。これが現実の出来事であったことを示す証拠は数多い。マリヤは復活した主の声を聞き，その姿を見た。(ヨハネ20：11—17参照) また

イエスがよみがえったことを告げに行くために道を急いでいた女たちにも主は姿を見せ，話しかけられた。そこで「彼らは近寄りイエスのみ足をいだいて拝した。」(マタイ28：9,10参照)

また主は，エマオへ向かっていたふたりの弟子と歩みを共にされ，言葉を交わされた。(ルカ24：13―16,28：32参照)　使徒には，少なくとも2度は姿を見せたもうた。最初はトマスが不在のとき，そしてその1週間後，今度はトマスがいたときである。主は使徒たちに話しかけ，手足の釘あとをお見せになった。使徒たちは，イエスの求めにより「焼いた魚の一きれをさしあげ」た。すると「イエスはそれを取って，みんなの前で食べられた。」(ルカ24：36―43;ヨハネ20：26―29参照)

さらにイエスはテベリヤの海辺で7人の弟子と食事を共にされた。(ヨハネ21：1―22)　あるときは一度に500名以上もの人がイエスを目撃している。(Iコリント15：6)　また主は「ケパに現れ」，「そののち，ヤコブに現れ」，パウロにも現われた。(Iコリント15：5,7,8)　さらにガリラヤの山では「11人の弟子たち」に対して，すべての国民に教えを宣べ伝えるように命じておられる。(マタイ28：16―20)

最後に「イエスは彼らをベタニヤの近くまで連れて行き，手をあげて彼らを祝福された。祝福しておられるうちに，彼らを離れて，〔天にあげられた〕。」(ルカ24：50,51)

主は復活の後にエルサレムで導きと教えを施されたが，それを終えるとアメリカ大陸のニーファイ人のもとを訪れ，恵みを施しておられる。

イエスの復活の記録は驚異と霊感に満ちている。と同時に重要なのは，イエスによりもたらされた復活の力が全人類に及ぶという確信を得られたことである。これは主の約束である。

マタイはこう記録している。「また墓が開け，眠っている多くの聖徒たちの死体が生き返った。」(マタイ27：52,53)

イエス御自身も，死すべき肉体を持って伝道しておられたとき，こう語られた。「墓の中にいる者たちがみな神の子の声を聞き，善をおこなった人々は，義人の復活のときによみがえり，悪をおこなった人々は，不義なる者の復活のときによみがえって，それぞれ出てくる時が来るであろう。」(霊感訳ヨハネ5：28,29)

主は復活後にアメリカ大陸で伝道しておられたとき，この重大な真理である全人類の復活について強調するため，他の人々の復活に関するサムエルの予言とその成就とを記録の中に入れるように指示された。当然記録されているはずのものをニーファイ人の弟子たちが忘れていたのである。それは主の十字架上の死のひとつのしるしとしてニーファイ人に与えられたもので，「多くの墓が開かれてその死者を出し，多くの聖徒はよみがえって多くの人々に現われる」というものである。(ヒラマン14：25)

ニーファイ人の弟子はこう語っている。「主よ，サムエルは今主が仰せになりたる通り予言して，その予言はすでにみな事実になれり。」(IIIニーファイ23：10)

黙示者ヨハネは，福千年の開始と時を同じくして起こる復活の示現を，次の言葉で結んでいる。これはもはや遠い将来のことではない。

「……彼らは生きかえって，キリストと共に千年の間，支配した。

それ以外の死人は，千年の支配が終るまで生きかえらなかった。」(黙示20：4,5)

また，次のようにつけ加えている。

「また，死んでいた者が，大いなる者も小さき者も共に，御座の前に立っているのが見えた……

海はその中にいる死人を出し，死も黄泉もその中にいる死人を出し，そして，おのおのそのしわざに応じて，さばきを受けた。」(黙示20：12,13)

アミュレクはゼーズロムにこう語っている。

「キリストの死によって肉体の死の縄目が解かれあらゆる人がこの肉体の死から復活することができる。

ここに於て霊と体とは再び合して完全な形となり，手足も骨の関節も私たちが今持っている本来の形に返り……

この復活はあらゆる人が全部受けるのであって，老若男女の区別なく悪人と善人とを問わず，奴隷と自由人とのへだてなく……完全な形にかえるのである。」(アルマ11：42―44)

このようにして，パウロの次の宣言は成就するのである。

「それは，死がひとりの人によってきたのだから，死人の復活もまた，ひとりの人によってこなければならない。

アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように，キリストによってすべての人が生かされるのである。

ただ，各自はそれぞれの順序に従わねばならない。最初はキリスト，次に，主の来臨に際してキリストに属する者たち」である。(Iコリント15：21―23)

このようにして人間は不死不滅の体を受けることができるようになり，主は，「人に不死不滅と永遠の生命をもたらす」という「主の業」のうち，最初の部分を終えられたのであった。(モーセ1：39)

復活について，私たちはいかに多くのものを贖い主に負っていること

だろう。しかしこれが最終目標ではない。不死不滅の体を得ることは，永遠の生命を得るために欠かすことのできないひとつの資格条件なのである。不死不滅とは死を味わわないという意味で，言わば時の長さを表わすのに対し，永遠の生命は，受ける生命の質を問題にした言葉であり，神御自身が享受しておられる生活のことを表わしている。

来たるべき世には，栄光の階級の異なる3つの王国がある。星――最も低い栄光，月――中間，日――神御自身が享受しておられる光栄，の3つである。これらの王国は，それぞれひとつの律法によって支配される。

人は霊界において裁きを受け，この働きに応じて報いを受ける。復活のときにその体は，王国の光栄と彼らがこの死すべき世において従ってきた律法とによってよみがえるのである。(教義と聖約88：17―32参照)

イエス・キリストの福音は，アダムから時の絶頂に至るまでの予言者に啓示され，彼らを通して教えられてきた。またイエスがこの地上で伝道しておられたときに教え，実践されたのもこの福音であった。さらに，この時満ちたる神権時代に回復されたのは，まさしくイエス・キリストの福音である。この福音は今，末日聖徒イエス・キリスト教会が，正しい権能の下に全世界にわたって教え，福音の諸儀式を執行している。これはまさしく，死すべき肉体を有する人間に適用される，日の光栄の律法なのである。

日の光栄の体を得て復活するためには，この律法に従うことが前提となる。これを得た者の栄光はいかに大きく，また得られなかった者の悲しみもいかに大きいことか。予言者ジョセフ・スミスは，ある葬儀の席上，次のように語った。「復活のときに希望や期待がくじかれるとしたら，それは筆舌に尽くし難いほど恐ろしいことである。」(*History of the Church*「教会歴史」 6：51)

この律法については，この大会において再三にわたって取り上げられ，論じられてきた。これからはさらにその機会が多くなることであろう。よく耳を傾け，従うようにしていただきたい。

この話を結ぶにあたり，私は，今まで話してきたことが真実であると証したい。イエスが生きておられ，神の御子であり，神の生みたまいし独り子としてこの地上に来られたこと，そして死に打ち勝ち，墓からよみがえり，全人類のために復活の力を得られたことを，私は，聖霊のみたまを通して知っている。

ゲッセマネの園や十字架上での主の苦しみは，私たちに悔改めてキリストの福音に心から従うことにより，不死不滅はおろか永遠の生命をも得る手段を与えてくれた。これこそ神の賜の中で最も偉大なものである。このことをイエス・キリストの聖なるみ名により厳粛に証申し上げる。アーメン。

今こそ，その時である

十二使徒評議員会会員

マービン・J・アシュトン

先日，旧来の知人にお会いして，「どうですか，仕事はうまくいっていますか」と尋ねると，こんな答えが返ってきた。「今月さえ何とか切り抜ければ，まぁ大丈夫でしょう。」彼の返事を聞きながら，そう言えば，ここ数年彼はいつも同じ返事を繰り返しているようだと思った。私はこの友人が，喜びや満足感を口にするのを，いまだかつて一度も聞いたことがなかった。

このしばしのやり取りの中から，多くの人にありがちなひとつの考えが浮んだ。つまり，人生の極みはすぐ目の前にあるとか，向こうの丘を越えたところにある。あるいは数年先だ，退職後だ，明日だ，来年だ，いや16歳になった時だ，来年の夏だと繰り返す。私たちはいつも，幸福とか成果とかいったものを遠い将来のことのように思わせるために，自分自身に制限を加え，自己を過去の中に埋没させてしまっている。それは，現在を耐え忍び，よりよい未来を切望するものでしか現在をとらえることのできない姿である。

こうした考えを持つ者は，決して実りある将来を勝ち取ることはできない。明るい未来は今日という日を正しく用いることのできる者の上に開けるものである。私たちは，前進しながら，満ち足りた生活を見出してゆく必要がある。現在を自ら不幸な状態に陥れ，愚かな引き延ばしをしていて，どうして幸せな未来を望むことができようか。一般に，日々の恵みを数えて生活する人々は，感謝することを知り，もっと多くの恵みを得るようになる。明るい未来をじっと待っているだけでは，麗わしい今日という日までも失ってしまう。想像もつかない未来の生活に備えることに明け暮れ，ようやくそれを見出した時には，時間がないと言っても後の祭りである。私たちは将来の喜びを切望しながら，今必要なこと，行なわなければならないことから逃避していることがよくある。過ぎゆく日々の試しを一つ一つ突破していってはじめて，永遠に至る道が開けるのである。私たちは，現在こそ永遠に至る過程を成すものであることを絶えず自分に言い聞かせる必要がある。

「人は努めて善き業に従い，多くの事をその自由意志によりて為し，多くの正しき事を為し遂げよ」（教義と聖約58：27）という勧告の中で，時間的な点を取り挙げて言えば，それは今であり，今日であり，一刻の猶予も許されないのである。悔い改めを明日に引き延ばす者を賢いと言えるだろうか。日一日と時が経つごとに，それを得ることは難しくなる。私たちがもし，明日に引き延ばすことなく，きょう対処することができるならば，心の問題や誤解の大部分は解消されるに違いない。

それぞれの時間を精一杯に生き，一日の最大の恵みを刈り取ることこそ知恵である。重大な明日を決定づける今日という日を無為に過ごしていて，果たして賢いと言えるだろうか。私たちは与えられた一日を賢明に生きなければならない。それが私たちの務めである。家族と共に過す時間があれば，家族の一致を図り，人格を高めるよう努力する必要がある。今日の少女は明日の女性であり，今日の少年は，明日の男性である。私たちが将来，どのような男性，女性を育むかは，彼らに現在をどう生きるかを教えることに懸かっている。毎日，愛や尊敬，誉れ，高潔などの諸徳があふれる家庭で育てられる子供は何と幸福であろうか。両親の皆さんに申し上げる。今こそ親子の関係を密にしていくように努めていただきたい。子供たちが両親の素晴らしさを判断するのは，権威を示した

り，品物を買い与えることではない。両親の日々の行ないである。子供たちに代価を払わせることもなく，自由奔放な生活をさせていて，彼らを成長させることはできない。

健康であれば，それを楽しむことである。健康でなければ，健康が得られるように今努力を始める必要がある。人があちこちで，大きな決意をし，日々の行動を改め，自己訓練をして目標を達成し，困難を克服しようとしている姿を見ていると感動を覚えずにはいられない。進歩と達成は，「今」という機会を活用することを知っている人々にもたらされるものである。ここで，決心と日々の実行によって素晴らしい成果を収めたひとつの例を皆さんにお話ししたい。

1960年，オーストラリアのメルボルンでオリンピックが開催された。ある日，スポットライトに照し出された表彰台に，背の高い金髪の美しいアメリカ娘が立っていた。彼女はこの世の檜舞台で見事，第1位に輝き，金メダルを受けたのである。表彰台に立つ少女を見て，幾人かの少年がこう叫んだ。「彼女こそ，すべてを手に入れたんだ。」

表彰を受ける彼女のほおに涙が流れていた。人々は彼女が勝利に感動したのだと思っていた。観衆のほとんどは，彼女がどれほどの決心と自己訓練をしてきたのか知らなかった。彼女は5歳の時，小児マヒにかかり，それがもとで腕も足も動かすことができなくなった。両親は毎日，彼女をプールに連れて行き，水の力で何とか腕を動かす訓練をさせた。そして，ようやく水のない所でも自力で腕をあげることができた時には，大声をあげ，泣いて喜んだ。次の目標は，プールの横幅を泳ぎ切ることである。次いで縦幅，その後何回もと，繰り返し訓練が続けられた。くる日もくる日も，泳ぎ続け，忍耐の連続であった。そしてついにこのオーストラリアのメルボルンで，しかも水泳の中でも最も難しい種目と言われるバタフライで金メダルに輝いたのである。

もしこの少女が，5歳の時に，何かを達成し，困難を克服するよう励まされていなかったとしたら，どうであろうか。明日に備えるために今日を，今を大切にするよう導いてきた両親は，何と力強い人々であろうか。

ここで有名な救い主の教えの幾つかを取り上げ，意味を一層明確にするために，「今」という言葉を加えてみた。「もしあなたがたがわたしを愛するならば，わたしのいましめを守るべきである」……今。(ヨハネ14：15)「全世界に出て行って，すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」……今。(マルコ16：15)「わたしに従ってきなさい」……今。(ルカ18：22) 確かに主を愛するならば，私たちは主に仕えなければならない。……今。

私たちの中には，今日の教会におけるフェローシップや活動に物足りなさを感じている人々がいる。もちろん，彼らはそのことを公然と口に出したりはしない。彼らは私たちを必要としており，私たちも彼らが必要である。今こそ彼らがその道を見いだすよう助けることは，私たちの義務であり，祝福である。私たちは皆，神の羊であり，最上のものが得られるように養い育てられなければならない。きょうこそ，私たちだけでなく，主が彼らを，心にかけ，愛しておられることを知らせる時である。主は門口に立ち，私たちを喜んで赦し，悔い改めの道に迎えようとなさっている。神は，私たちに今こそ行動を起こす勇気を求めておられる。

現在，私たちは皆，神のために早急に時間を割く必要がある。神の道を選んで，やがてそれを永遠の伴侶とすることができる人は賢明である。神を知り，神と親しく交わる時はきょうと言う日である。真の豊かさを得るためには，一刻一刻，日々を神と共に過ごさなければならないのである。

神のことを考える時間
神のことを考える時間がない？
私たちは何という愚か者だろうか。
日々の雑務に追われ，
大切なものを見失っている。
人生の主，生命そのものとも言える私たちの神を。

神のことを考える時間がない？
それでは食べて寝る時間は，
愛を語り，死に直面する時は。
神のことを考える時間をとりなさい。
さもなくば，あなたの魂は萎縮し，
死に際に天使が来て，その扉を叩くとき
悲しい，ぶかっこうな姿で
永遠の世界に足を踏み入れなければならないだろう。
(ノーマン・L・トロット「宗教詩傑作集」p. 65)

私たちは，神のことを考えれば考えるほど神に似た者となる。ロバート・ルイス・スティーブンソンは至言を残している。「聖徒とは努力を続ける罪人である。」救い主イエス・キリストは，「もしわたしの言葉のうちにとどまっておるなら，あなたがたは，ほんとうにわたしの弟子なのである」(ヨハネ8：31) と述べておられる。

兄弟姉妹の皆さん，言わんとすることは明白である。私たちが今，努力し，仕え，自己を改善してゆくな

らば，毎時間，毎日は重大な明日に向かって私たちを前進させる時となるであろう。決断の時はきょうである。行動の時は今である。皆さんに証したい。私たちが時間を賢明に使うのを見て，神はきっと喜んでおられるはずである。

しかしみこころにかなわない人もいる。彼らは主の道に熱心に励むことを恐れているからである。また，近代の予言者，特にスペンサー・W・キンボール大管長の声に耳を傾けている人々の中にも，現在，いやきょう与えられた勧告を身に引き受ける勇気と望みを持つことができないが故に，神に対して失望している人もいる。もし私たちが，きょう始めるよりも明日の方が容易であると考え始めるならば，大きな禍ちを招くことになる。

こうした道から立ち帰る最も容易な方法は，他の人々と共に戻ってくることである。私たちが味わうことのできる最大の喜びは，きょうという日に，何かの目的をもって人々に奉仕し，しかもそれが後日，偶然に発見された時である。こうした生活態度を身につけ，友人の以前と異なる態度や成長を目のあたりにし，彼らと友好を深めることによって，私たち自身も日一日と高められてゆくのである。

今日一日だけ，
主よ，私が祈りを捧げるのは，
明日のためではない。
神よ，私を罪の汚れから救いたまえ，
今日一日だけ。
仕事を熱心に行ない，
十分に祈り，
言葉と行ないに愛を満たしたまえ。
今日一日だけ。
自分の思いを行なうに遅く
他人に従うことに早く，
あなたの愛で私を包みたまえ。
今日一日だけ。
悪口や無益な言葉を避け，
思いやりのない言葉を慎しみ，
私の口に封印をして下さい。
今日一日だけ。
私が祈りを捧げるのは，
明日のためではない。
主よ，私を導き，愛し，そして見守りたまえ。
今日一日だけ。
（シビル・F・パートリッジ「今日一日だけ」）

私たちは皆，シビル・F・パートリッジのこの選び抜かれた言葉に霊感を受けずにはおれないだろう。もし，「今日一日だけ」私たちが富ではなく，神に頼ることができるなら，またもし「今日一日だけ」権力や所有物，利益や世の地位に対する野望を永遠の宝とその探究に代えることができるなら，人々の生活はどれほど祝福されることができるだろうか。

もし金銭中心の計画を立て，お金で買えるものだけを欲しがるような性癖をもっているならば，今こそそれをやめて，私たちはお金で買えないものを失なっていないか尋ねていただきたい。日夜，金銭やこの世の富の蓄積，幸福な未来を保証できるものばかりを追い求めていては，私たちが捜そうとしている本当のものを見つけることはできない。自分たちに可能な充実した生活を見失なっている人は，すべてを見失うことにもなりかねない。

御存知のように，明日はきょうとつながっている。私たちがきょう何をするかによって，明日が決まる。アルマ書34章の32，33節を読んでみよう。「現世は，人間が神に逢う用意をしなくてはならぬ時期である。現世の生涯は，人間が各々働きを遂行せねばならぬ時期である。……あなたたちがこの世を去る時まで悔改めを引き延ばさないように……すすめる。」人生の頂点は，向こうの角を曲ったところではない。あるいは伝道や結婚を考え，家の支払いを終了した時でもない。また景気が好転したり，子供たちが成長した時でもない。人生の最高の時は今である。きょうこそ，本当の生活を始める時である。きょうこそ，明日に向かって足を踏み出す時である。未来は，今という時をいかに過ごすかを知っている人に約束されている。熱心に努力している人々の生活にとって重要でない日は一日もない。

今日国際紛争が一段落するまでその行動と約束を引き延ばそうとする風潮が世界各地に見受けられる。そのような方々に申し上げたい。「主のみ業」は前進させなければならないし，また必ず発展するものである。それには国境も時間の障壁もない。行動を起こす時は今である。私たちは今ほど刈り入れの鎌を入れ，この地上を主の目的のために備えることを必要とされている時はない。

兄弟姉妹の皆さん。ここでもう一度この言葉を読んでみたい。「さて，イエスはガリラヤの海べを歩いて行かれ，シモンとシモンの兄弟アンデレとが，海で網を打っているのをごらんになった。彼らは漁師であった。イエスは彼らに言われた，『わたしについてきなさい。あなたがたを，人間をとる漁師にしてあげよう』。すると，彼らはすぐに網を捨てて，イエスに従った。」（マルコ１：16—18）

願わくは，神の助けがあって私たちが引き延ばしをせずに，直ちに神に従うことができるように。今こそ主に仕える時である。私はこれらのことが真実であることを，昨日より今日となお一層の確信を得ていることを皆さんに証する。イエス・キリストのみ名により，アーメン。

キリストの象徴

十二使徒評議員会会員

ゴードン・B・ヒンクレー

これまで非常に霊的な大会であった。いま主のみたまがあって，これから語ることが，これまで耳にしてきた数々の素晴らしい話を補うことができればと願っている。

先日，アリゾナ神殿のオープンハウスが催された。神殿は全く装いを新たにし，約25万人の人々がその美しい装いに見入っていた。初日に他の宗派の牧師たちを特別招待者として招いていたが，数百名にのぼる方々が集まって下さった。私は恵まれて，見学を終えた方々に話をし，彼らの質問に答える機会があった。彼らにどのような質問でも，喜んでお答えしたいことを告げた。いろいろな質問がなされた。その中で，プロテスタントの牧師から次のような質問が提起された。

「神殿を巡って見ると，確かにこの神殿の正面にはイエス・キリストの名前が刻まれています。しかし，この建物のどこを捜しても，キリスト教の象徴である十字架，あるいはそれらしきものは見当りません。つまり，あなた方の教会のどの建物にも，十字架が置かれていないようですが，それであってどうしてイエス・キリストを信じていると言えるのですか。」

私はこう答えた。「恐らく同じキリスト教徒の兄弟である皆さんの中には，寺院の尖塔や礼拝堂の祭壇に十字架を飾ったり，衣服の上に十字架を身に付けたり，あるいは聖典や他の書物に十字架を刻み込んでいる方々もいらっしゃると思います。私は決して皆さんを中傷するつもりはございません。しかし，私たちにとって，十字架は死せるキリストの象徴であり，私たちが宣べ伝えるメッセージは生けるキリストの言葉であるからです。」

すると牧師はこう尋ねた。「十字架を使わないとすれば，あなた方の宗教の象徴は何ですか。」

私は，私たちの生活そのものが，唯一の価値ある信仰の表われであり，私たちの礼拝の象徴とならなければならないと答えた。彼が私を独善的で，自分勝手な人間だと思うことのないように願っている。確かにこの牧師が指摘したように，従軍牧師が認識標として軍服に付ける以外，私たちの教会では十字架を使っていない。私たちの立場は一見，イエス・キリストが信仰の中心であると宣言していることと矛盾しているように思われる。しかしこの教会の正式名は，末日聖徒イエス・キリスト教会である。キリストを私たちの主，救い主として礼拝している。聖書は神のみ言葉であると信じている。また旧約の予言者たちが神の霊感によってメシヤの来臨を予言したことも信じている。さらにマタイ，マルコ，ルカ，ヨハネの書に記録されているように肉を有する，御父の独り子，神の子が降誕し，教えと導きを施し，そして亡くなり，復活されたことに栄光を帰している。後年パウロが述べたように，私たちは「福音を恥としない。それは……すべて信じる者に，救を得させる神の力である。」（ローマ1：16）またペテロと同じように，イエス・キリストすなわち，「わたしたちを救いうる名は，これを別にしては，天下のだれにも与えられていない」（使徒4：12）ことを堅く信じている。

さらに新世界の人々に対する約束であるモルモン経には，かつて西半球に住んでいた予言者たちの教えと，ユダのベツレヘムで生まれ，カルバリの丘で亡くなられたイエスに対する証が記されている。またモルモン経はその信仰の基盤を見失いかけている世の人々に対して，イエス・キリストが神の子であることを証する，もう一つの力強い証人である。その

序文には，約1500年前にこのアメリカに住んでいたひとりの予言者によってはっきりと，モルモン経は「ユダヤ人と異邦人とにイエスは永遠の神なるキリストにましまして，万国の民に現われたもうことを確信させることである」と記されている。

また近代の啓示の書，教義と聖約には，キリスト御自身の言葉でこう記されている。「われはアルパにしてオメガなり。主なるキリストなり。すなわちわれは始めにして終りなり。世の贖い主なり。」（教義と聖約19：1）

こうした宣言や証を見聞きしたあなた方の多くは，先程の牧師と同じようにイエス・キリストへの信仰を告白しながら，なぜ死の象徴であるカルバリの丘の十字架を使おうとしないのかいぶかしく思われるかもしれない。

そのような人々に，私はまずこう答えなければならない。この教会の会員はだれも，全人類を救うために命を投げ出された救い主の尊い犠牲を忘れてはいない。ゲッセマネの苦しみ，裁判の席で浴びせられたあざけりの言葉，肉に食い込むいばらの冠，ピラトの前で群衆から受けた激しい怒号，カルバリの丘に至る道を重々しい足どりで進んでいった時の苦悩，大きな釘で手足を打ち抜かれたときの激痛，また十字架にかけられた悲しむべき日に肉体の苦痛にあえぎながら，「父よ，彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか，わからずにいるのです」（ルカ23：34）と言われた神の子のことを決して忘れたことはない。

この十字架こそイエスを苦しめた道具であり，平和の君を殺すために考案された恐るべき装置である。こうして悪魔は，病人を癒し，盲人の目を開け，死者を生き返らせたイエスの奇跡に報復しようとしたのである。イエスは荒涼としたゴルゴタの丘の上で，この十字架にかけられて，殺された。

私たちはそのことを忘れることはできない。いや，決して忘れてはならないのである。この時救い主，贖い主である神の御子は，私たち一人一人のために自ら身代りの犠牲に立たれた。その日の夕方，ユダヤ人の安息日が始まる前に，イエスの死体は十字架から降ろされ，急いで仮の墓に置かれた。この時，イエスに最も近く，そして熱心であった弟子たちでさえも希望を失ってしまったのだった。彼らは以前イエスから告げられたことをまだ十分に理解できず，ただ取り残されたという気持ちがしていた。彼らが信じていたメシヤが亡くなられたのである。すべての希望と期待と信仰を寄せていた主が目の前から消えてゆかれたのだ。永遠の生命について教え，ラザロを墓からよみがえらせたあの御方が，すべての人と同じように確かに亡くなられたのである。今こそ，悲しく短かい生涯の幕切れの時がきた。その生涯は，昔イザヤが予言したように「侮られて人に捨てられ，悲しみの人で，病を」（イザヤ53：3）知る者の生涯であった。

「……彼はわれわれのとがのために傷つけられ，われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめをうけて，われわれに平安を与え，」（イザヤ53：5）今亡くなられたのである。

私たちは，現在の暦では土曜日に当たるユダヤ人の安息日に，イエスを愛した人々がその死を悼んでどれほど悲しんだか，ただ推測するしかない。

しかし主の安息日の，週の初めの日の明け方，悲しみに打ち沈み，墓にやってきた人々に天使が現われてこう告げた。「あなたがたは，なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。」

「もうここにはおられない。かねて言われたとおりに，よみがえられたのである。」（マタイ28：6）

ここに人類史上最大の奇跡が起こった。かつてイエスは人々に言われた。「わたしはよみがえりであり，命である。」（ヨハネ11：25）その時人々はその意味がよく分からなかった。しかし今初めて，その意味を知ったのである。イエスが悲しみと苦痛の中で，さびしく亡くなられたことの意味を。そして，今や3日目に，イエスはその能力によって「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように，キリストにあってすべての人が生かされるのである」（Ｉコリント15：22）ということを確かなものとするために眠れる者の初穂としてよみがえられたのである。

カルバリでは，死せるキリストであった。しかし，墓から出た時は，生けるキリストとなっていた。十字架はユダの裏切りによる苦き結実であり，ペテロの否定の総括である。そして亡骸（なきがら）のない墓はイエスが神の子であるという証となり，永遠の生命を確実にするものとなった。しかもそれは，「人がもし死ねば，また生きるでしょうか」（ヨブ14：14）というヨブの問いに答えるものである。

もしイエスが死んだままであったなら，いつかは人々の心から消え去り，せいぜい歴史書の中の数行に描かれる偉大な教師で終わっていたかも知れない。しかし，この復活によって，イエスは死を超越できる人となった。今や弟子たちはイザヤと共に確固たる信仰をもって，「その名は，『霊妙なる議士，大能の神，とこしえの父，平和の君』ととなえられる」（イザヤ9：6）と声高らかに叫ぶことができるであろう。

それはまた，ヨブが待ち望んでい

た言葉の成就でもあった。「わたしは知る。わたしをあがなう者は生きておられる，末の日に彼は必ず地の上に立たれる。

わたしの皮のうじがこの体を滅ぼしたのち，わたしは肉に在りて神を見るであろう。

しかもわたしのこの目で見るであろう。わたしの見る者はこれ以外のものではない。わたしの心はこれを望んでこがれる。」(欽定訳ヨブ19：25—27)

またマリヤは初めてよみがえられた主を見たとき，「ラボニ」(ヨハネ20：16) と叫んでいる。まさにイエスは，命を制する人だけでなく，死をも制する先生となられたからである。こうして死の苦痛を超越し，墓の力を打ち砕いたのである。

そして信仰を表わすことを恐れていたペテロの心を改宗させ，疑い深いトマスには，「わが主よ，わが神よ」(ヨハネ20：28) と心から，敬虔な気持ちで言わせている。この驚くべき出来事の中で，主が述べられた「信じない者にならないで，信じる者になりなさい」(ヨハネ20：27) という言葉を，私たちは決して忘れることができない。

次いでイエスはそのみ姿を多くの人々に現わされた。パウロはそのことを，「五百人以上の兄弟たちに，同時に現われた」と記している。

また西半球にも，イエスが語りかけられた他の羊がいた。「天から出てくるような声が聞えた……その声は，『わが喜ぶ愛子を見よ。われはこれに由りてすでにわが名の栄光を示しぬ。わが愛子に聞け』とかれらに仰せになっていた。……

時にそのお方は手を伸して群集に話しかけて仰せになった。『見よ，われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。……

起ちてわれに近づけ。』(IIIニーファイ11：3，6，10，14)

続いて復活された主が古代アメリカの人々の間で宣べ伝えた教えと導きの様子が美しい言葉でつづられている。

最後に近代の聖典もイエス・キリストについて証している。イエス・キリストは，予言されたこの時満ちたる神権時代の幕明けを告げるために再びこの地を訪れられた。輝く示現の中で，復活された生ける主と神なる天父がひとりの少年に現われた。この少年はやがて予言者となって古代の真理の回復の業を始めた。この責任を託された近代の予言者ジョセフ・スミスは，実に「多くの証人の雲」(ヘブル12：1参照) に囲まれている中で，冷静な言葉でこう述べている。

「さて，この子羊に就きて為されたる様々の証の挙句，われらの為す最後の証はすなわち『主は実に生きたもう』こと是なり。われらは，彼がすなわち神の右に座したもうを見たり。また，御父の生みたもう独子なりと証したもう声を聞けり。すなわち諸々の世界は彼の手により，彼の手を経て，また彼に因りて先に作られ，また現に作られ，これに住む者たちも皆神より生れたる息子と娘なることを証したもう。」(教義と聖約76：22—24)

このほかにも，数百万人の証人が聖霊の力によって，イエスが実に生きたもう御方であることを証し，今もなお証しつづけている。

この証こそ彼らの安らぎであり，力である。例えば，私は最近南ベトナムに住む友人のことをよく考えている。私は今，彼がどういう状態で，どこに住んでいるのか全くわからない。ただ知っていることは，彼が物静かで，永遠の父なる神と生ける御子キリストに対する揺るぎない信仰をもっていたことである。この悲しみの大地に自由の灯が消え果てたとき，以前口ずさんでいた彼の歌声がよみがえってきた。

深く行けと召す時は
　水は汝を溺らさじ
われ汝と共にあり
　汝を助け悩みはらし
祝福の恵み与えん

(讃美歌96番)

従って私たちは死の象徴である十字架を信仰の象徴にはしない。救い主は生きておられるからである。では，何を用いればよいのだろうか。いかなる印も，いかなる彫刻や美術，その他の代用物も生けるキリストの栄光とみ業を表わすことはできない。イエスはどのような象徴を使うかについて，こう答えておられる。「もしあなたがたがわたしを愛するならば，わたしのいましめを守るべきである。」(ヨハネ14：15)

キリストを信じる私たちが，卑劣で，下品で，俗悪なことをすることは，キリストの概念を汚すことである。逆に，上品で，寛大な行ないを示せば，私たちが受けているみ名を一層輝やかすことになる。

従って，私たちの生活は，永遠の神の子，生けるキリストに対する証を表わす意義ある模範とならなければならない。

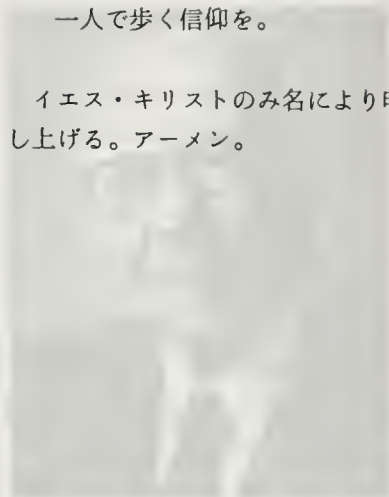
兄弟姉妹の皆さん，それは決して難しいことではない。しかも非常に大切なことである。決して忘れてはならないことである。

われは贖い主の生きたもうを知れり，
　苦痛と死に打ち勝たれし，
勝利の救い主，神の子，
　わが王，わが主，わが指導者を。

主はわが確かなる信仰の岩の上に
　住みたもう。
人類の明るい希望，
良りよき道を照らす灯火，
　死のとばりを透す光である。

あなたの慈愛にあふれるみたまを
　私に注いで下さい。
　あなたのみがもたらす平安を，
あなたが住みたもう永遠の王国に
　続く道を

　一人で歩く信仰を。

　イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

主は一つ，信仰は一つ，バプテスマは一つ

十二使徒評議員会会員

リグランド・リチャーズ

兄弟姉妹の皆様。共にこの大会に出席する名誉と特権をいただき心から嬉しく思っている。これからしばらくの間，主のみたまがあって私が語ることがここに集っている人々だけでなく，テレビやラジオを通じて大会の模様を見聞きしている人々にも霊感を与えることができるように願っている。

私は新たに大管長に召されたキンボール長老が特に伝道活動を強調されたことに非常に心を動かされた。キンボール大管長は歩みを速めて，現在の宣教師をその数において今の2倍にしたいと述べられた。考えてみると，私は少年の頃からずっと宣教師であったような気がする。子供のとき読んだ本の中で特に印象深く残っているのに，ジョージ・Q・キャノン長老が書かれた「予言者ジョセフ・スミスの生涯」という書物があった。この本を読んで私は深い感銘を覚え，予言者ジョセフ・スミスを心から愛し，彼のメッセージが真実であるという強い証を持つようになった。それ以来，私はこのメッセージを全世界の人々に宣べ伝えたいといつも思っている。

先の木曜日，地区代表集会の最後にキンボール大管長は，一度に数千人の改宗者を生む日が来ることを待ち望んでいることを告げられた。私はそれを聞きながら，胸の高鳴るのを止めることができなかった。そして私は自分にこう問い返した。「その通りだ。それができないことがあろうか。私たちは世の中で最も大切なメッセージを与えられ，しかもこのメッセージは主から見ればすべての子供たちに欠くことのできないものである。これは，あのペンテコステの日にペテロが述べたことと同じである。その群集は強く心を刺され，こう叫んだ。「兄弟たちよ，わたしたちは，どうしたらよいのでしょうか。」（使徒2：37）この時ペテロがどう答えたか覚えているだろうか。

「悔い改めなさい。そして，あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために，イエス・キリストの名によって，バプテスマを受けなさい。そうすれば，あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう。

この約束は，われらの主なる神の召しにあずかるすべての者，すなわちあなたがたと，あなたがたの子らと，遠くの者一同に，与えられているものである。」（使徒2：38—39）

ペテロはこの時3千人の人々にバプテスマを施している。このペテロと同じ召しに応えること以上に，今日真理を求めてやまない人々に与える祝福があるだろうか。

救い主は十二使徒を召して，教会を立てられた。しかしその教会は聖なる予言者が予見したように地上に留まることができなかった。そして末日に主がその業を成し終える時がくることも予言した。

予言者パウロは，主がその深いみこころを明らかにして次のように言われたと記している。「それは，時の満ちるに及んで実現されるご計画にほかならない。それによって，神は天にあるもの地にあるものを，ことごとく，キリストにあって一つに帰せしめようとされたのである。」（エペソ1：10）

こうして私たちにそのメッセージが与えられ，この世の人々はそのメッセージに喜んで聞き従うことがなければ，主のみ前に立ち帰る道を見出すこともできなくなったのである。

先日私は新約聖書を読み終え，救い主や使徒パウロをはじめとする多くの指導者の言葉を読み，当時の教えに触れ，深い感銘を覚えた。特に使徒パウロはこう述べている。「主は一つ，信仰は一つ，バプテスマは一つ。」（エペソ4：5）そこで私は考

えた。もしパウロが今日生きていて，数多くの教会を見たら何と答えるだろうか，と。

この間私の秘書が統計を調べてくれたところでは，昨年（1974年）の5月現在で合衆国内だけに697の異なる宗教が存在している。もし「主は一つ，信仰は一つ，バプテスマは一つ」と言ったパウロが今生きていたら，一体どの教会に行くだろうか。従ってこの世に一つの教会しかないはずであるとしたら，どれが真実の教会かを知るために神の導きを求めなければならない。それが，私たちの証である。

今日私たちが世の人々に伝えるべきことは福音の回復のメッセージである。「しかし，たといわたしたちであろうと，天からの御使であろうと，わたしたちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら，その人はのろわるべきである。」（ガラテヤ1：8）これは厳しい勧告である。しかしパウロは救い主とその教えを通して知ることができた真理を教えていない人々のことを取り上げて，消極的に述べたのでは決してない。

きょうここに集っている方々をはじめ，テレビやラジオに耳を傾けている大勢の人々の前に立ちながら，もし私がパウロの説いた同じ福音を宣べ伝えていなければ，パウロの言うのろいを私も受けることを知った。だが，私は皆様に証する。この教会は地上における唯一真の生ける教会であり，人々に救いをもたらす福音の儀式を執り行なう権威を神から給わっている教会である。

偉大な出来事は，救い主の時代に教会が組織されたことである。そしてさらに輝やかしいことが起こったのは，救い主がそれに最後の仕上げをなされた時である。言うまでもなく，主の大いなる贖罪がなかったならば，それも不可能であった。パウロはこのように述べている。「それは，時の満ちるに及んで実現されるご計画にほかならない。それによって，神は天にあるもの地にあるものを，ことごとく，キリストにあって一つに帰せしめようとされたのである。」（エペソ1：10）

私たちの教会は，それを与えられた唯一の教会であり，主がその仕上げを成し終えた教会である。そして私たちは今，その時満ちたる神権時代にある。

さらに輝しいことが起っている。救い主が復活後500人の群衆の面前で天に昇られた時，白い衣を着たふたりの人がこう言っている。「ガリラヤの人たちよ，なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは，天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様でまたおいでになるであろう。」（使徒1：11）もし世の人々がその出来事を信じているならば，彼らは神の予言者が来て，それは成就されたということを宣言されるのを諸手をあげて待っているはずである。

アモスは次のように述べている。「まことに主なる神はそのしもべである予言者にその隠れた事を示さないでは，何事をもなされない。」（アモス3：7）言い換えると，主がこの時満ちたる神権時代である末日に，地上にその業を確立されるとすれば，天にあるものも地にあるものもすべてキリストにあって一つに帰せしめるために，予言者が必要である。

これまで神は地上でみ業をなす時，その頭に予言者を置かれないでは何もなされなかった。讃美歌に「感謝を神にささげん，予言者の尊き」と歌われている。私たちには現在生ける予言者がいる。決して死せる予言者の教えにだけ頼る必要はない。私たちを教え，導いてくれる生ける予言者がいるからである。

イエスはそのことをはっきりと述べている。「わたしにむかって『主よ，主よ』と言う者が，みな天国にはいるのではなく，ただ，天にいますわが父の御旨を行う者だけが，はいるのである。」（マタイ7：21）さらにこう述べている。

「その日には，多くの者が，わたしにむかって『主よ，主よ，わたしたちはあなたの名によって預言したではありませんか。またあなたの名によって悪霊を追い出し，あなたの名によって多くの力あるわざを行ったではありませんか』と言うであろう。

そのとき，わたしは彼らにはっきり，こう言おう，『あなたがたを全く知らない。不法を働く者どもよ，行ってしまえ。』」（マタイ7：22—23）

これが，権威を受けず，キリストのみ名を通して働く神の権能を持たない教会に対してキリストが下した宣告である。

さらにイエスはこう述べておられる。「もし盲人が盲人を手引きするなら，ふたりとも穴に落ち込むであろう。」（マタイ15：14）イエスはふたりが盲人であったなら，目的地に着くことはできないと言っておられるのである。そこで私たちは自らを整えて，パウロが語った唯一真の教会を必ず見出す必要がある。そのためには，聖なる予言者の言葉を調べることである。

イエスはこういわれた。「あなたがたは，聖書の中に永遠の命があると思って調べているが，この聖書は，わたしについてあかしをするものである。」（ヨハネ5：39）これは聖典を研究することによって達成されるものである。さらにイエスは復活後，エマオに向かう道でふたりの使徒たちに現われてこう言われた。「ああ，

愚かで心のにぶいため，預言者たちが説いたすべてのことを信じられない者たちよ。」（ルカ24：25）それからモーセや他の予言者たちがイエスに対して証している事柄をすべて示された。イエスは弟子たちが聖典をよく理解できるように彼らの心を開かれたとルカは記している。

それはまさしくイエスが今日生ける予言者を遣わし，御父と御子が予言者ジョセフ・スミスに現れたことを通してなされていることである。世の人々に伝えるべきメッセージでこれと比肩できるものがほかにあるだろうか。世の人々が主を愛していながら，このメッセージを聞いても，それが真実かどうかを知ろうとしないのはなぜだろうか。

私は，かつて牧師として働いていながら，この教会に加わった多くの善良な人々を知っている。先週，ロスアンゼルスに住んでいるある牧師から電話があった。彼は20年間もバプテスト教会の牧師として働いていた。そしてモルモン教会の長老と会い，予言者ジョセフ・スミスを通して回復されたこの福音について教えられた。すぐに彼は牧師をやめ，教会の会員になった。そして今は近くの神殿で働いている。先日の電話は，私が宣教師のために書いた書物が，この神権時代に地上に真理を回復するために主がどのようなことをなされたかを理解する上で大きな助けになったことへの感謝の言葉であった。

数年前，私は北西部から出て来たひとりの牧師を改宗に導いたことがある。彼は私の事務所を訪れてこう言った。「リチャーズ兄弟，私はメソジストの牧師であった時，あまり人々のために尽くしていなかったように思います。それに比べると今は，こうして回復された完全な福音を知っています。ぜひ友人のところに行って，私が見出したこの福音を彼らに伝えたい気持ちでいっぱいです。でも恐らく彼らは私の言うことに耳を貸してくれないでしょう。私は彼らの教会の背教者ですから。」

こうして彼は牧師をやめ，ビルのエレベーター係になって自立し，教会に入る道を選んだ。「私は今，妻とふたりで神殿に参入できる日が待ち遠しくてたまりません。」それ以来，私はよく彼を神殿内で見かけるようになった。

彼はまたこのようにも述べている。「教会に入った頃，私はジョセフ・スミスが予言者であることをはっきり知っていますと言う気持になかなかなれませんでした。でもそのことを信じていました。ところがある日バロー兄弟が頭の上に手を按いて，私に神権を授けてくれた時，これまで感じたこともないようなものが私の体を貫くのを覚えたのです。これまでだれもそのようなことを私にして下さいませんでした。まさしくそれは主から来たものです。」これこそ人が心を開いて，主がこの地上に回復された真理に心から聞き従い，理解したいと思う時に与えられるものである。

ここで私は自分の著わした書物の中の一節を引用したい。それは，「モルモンの力」（*The Strength of the Mormon Position*）という小冊子から取ったものである。この話は後に，十二使徒評議員会会員のオルソン・F・ホイットニー長老も，「あるカトリック教徒の話」の中で引用している。

「しばらく前のこと，ローマカトリック教徒の学者がユタ州にきて，ソルトレークのタバナクルで演説したことがあった。私は彼とだいぶ親しくなり，自由に卒直に意見をとりかわした。その人は，たぶん12カ国語も話せるような学者で，神学，法律，文学，科学，哲学などにも通じていた。ある日，彼は私に次のように言った。『あなた方モルモンはある意味では無知な人です。なぜなら今あなた方の占めている位置がいかなるものか御存知ないからです。全キリスト教会の中で存在する理由があるのはカトリック教会以外は，あなた方モルモン教会だけなのです。問題はカトリックとモルモンの間のことだけです。我々が正しければあなた方がまちがっており，あなた方が真ならば我々は偽りです。問題はそれで終りです。プロテスタントは存在する意味がありません。なぜなら，もし我々がまちがっていれば，彼らは我々から芽がでたのであるから我々と同じようにまちがっており，一方我々が正しければ，彼らはずっと前に我々から離れ去って背教したのであるから真の教会とは言えない。もし我々がいつも主張しているように，使徒ペテロから神の力（神権の鍵とも言えるもの）が継承されているなら，ジョセフ・スミスやモルモン教徒の必要性は認められない。しかし我々がそのような力をもたないならば，ジョセフ・スミスのような人が必要になり，モルモン教徒の存在理由が明らかになる故に，要は福音がキリストの時代から現代までの永い間変えられないで続いてきたか，それともそれが変えられたために末の日に新しく元通りに回復されねばならなかったかという問題におちつくのです。』」（「奇しきみわざ」p. 2，3）

そこで697にのぼる異なる教会の会員たちがこの話の妥当性を認めるならば，自分の教会の牧師たちは一体何の権威を持って儀式を執行しているのか知りたいと思うだろう。もし前述の話が真実ならば，カトリックかモルモンのどちらかしかないからである。私はいつも，カトリックと聖書の双方が一致することは決して

ないと人々に述べてきた。なぜなら，聖書は初期の教会からの背教と末日における回復についてはっきり宣言しているからである。

御存知のように，ヨハネがパトモス島に追放されていた時に，主のみ使いはこう言われた。「ここに上ってきなさい。そうしたら，これから後に起るべきことを，見せてあげよう。」（黙示4：1）これはキリストが亡くなられてから30年後のことである。み使いは，さらにサタンが「聖徒に戦いをいどんでこれに勝つことを許され，さらに，すべての部族，民族，国語，国民を支配する権威を」（黙示13：7）与えられたことをヨハネに示された。これは明らかに初期の教会から完全に背教が起こることを述べたものであり，だれひとり例外として許されることはなかった。

続いてみ使いはヨハネに「もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者，すなわち，あらゆる国民，部族，国語，民族に宣べ伝えるために，永遠の福音をたずさえて」（黙示14：6）くると教えられた。言うまでもなく，永遠の福音がこの地上に残っているならば，み使いが天からそれを携えてくる必要はない。永遠の福音こそ人を救うことのできる唯一の福音である。従って私たちが世に伝えるメッセージは，私たちがこの永遠の福音を持っているということである。

ペテロは，「神が聖なる預言者たちの口をとおして，昔から預言しておられた万物更新の時まで」（使徒3：21）イエスを天にとどめておかれたと述べている。私たちはその更新の時を迎え，真理を愛する者はだれであっても，もし自ら喜んで求めるならば今生きていると同じように真理を知ることができるのである。イエスは次のように約束しておられる。

「わたしの教えはわたし自身の教ではなく，わたしをつかわされたかたの教である。神のみこころを行おうと思う者であれば，だれでも，わたしの語っているこの教えが神からのものか，それとも，わたし自身から出たものか，わかるであろう。」（ヨハネ7：16―17）

私たちは今万物更新の時を迎えている。しかも神がお立てになるひとりの予言者とはペテロであり，万物の更新は救い主の再臨までないということを私たちは信じることができない。それが私の証である。皆様の上に神の祝福があり，このみ業が全世界に広がり，地を満たすことができるよう祈っている。これらをすべて主イエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。

長老見込み会員への勧告

十二使徒評議員会会員

ボイド・K・パッカー

兄弟姉妹の皆さん。この部会の終わりにはキンボール大管長がお話しされることになっている。そこで私はこの部会の始まる前に，長短合わせて3つの話を準備していることをキンボール大管長に申し上げておいた。聖歌隊の発表の間に一枚のメモが届き，一番長い話をするようにとのことであった。

こんな話がある。あるステーキ部を組織するために，キンボール大管長と共にコロラド州を訪れたときのことである。集会も終わりに近づき，あと10分ほどしか残っていないのにキンボール大管長も私もまだ話していなかった。ステーキ部長が私の名前を読み上げたとき，キンボール大管長は私の方に身を寄せてこう言われた。「どうぞ，残りの時間を全部使って下さい。」

私は1分間証を述べて席に戻った。続いてステーキ部長がキンボール大管長の名前を読み上げたとき，何か走り書きをしていた。それから立ち上がると，そのメモを私に手渡された。それにはこう記されていた。「従順は犠牲にまされり。」そこできょうは，彼の勧告に従って話を進めたいと思う。

再びこうして実り多い大会を閉じるに当たり，数多くの説教に心を動かされ，心が揺り動かされるのを感じている。その反面，生活の中でこうした最も大切な霊的な影響を受けることのない人々のことを忘れ去ることができない。

そうした人々の中に，教会員でありながら霊的進歩の機会を逃がしている長老見込み会員と呼ばれるグループがある。

長老の職は威厳と誉れに満ちた霊的な権威と権能を持った召しである。「見込み会員」という言葉は，希望や可能性，将来の展望を含んだ意味がある。そこで私はきょうの話をこうした長老見込み会員の方々に送りたいと思う。またこのメッセージが他の人々にも十分役立つものであると信じている。

こんなことを申し上げていいかどうかわからないが，皆さんは本当に心の奥底から，教会の一員になりたいと望んでいるだろうか。何から始めたらよいか本当にわかっているだろうか。恐らく心の中でこうつぶやいたことがあるだろう。「もしあの時，止めることができていたら」「もっと若い頃にチャンスがあったら」「これまで全く無駄なことばかり繰り返してきました」「もう手遅れです」「今さら私の人生を変えるなんてとてもできません。」

皆さんはそうした感情や思いを断ち切りたいと思いながら，どうしようもないでいる。「とにかくどうしていいかわかりません。何から手を着けていいか検討もつかないのです。」

私は以前，ある経験を通して非常に大切な教訓を学んだ。先週日本を訪問して，再びその経験を新たにし，私は，そのことをこの大会で述べようと思った。

第二次世界大戦中，空軍のパイロットであった私は，太平洋諸島での軍務を終えて，1年間を日本で占領軍と共に過ごした。もちろん，日本語も少しは理解できるようにならなければならない。特に場所を尋ねたり，食物の注文は日本語で言う必要があった。

こうして私は日常のあいさつ，多少の数字，あるいは会釈の仕方について学んだ。そして教会の他の会員と同じように，勤務外の時間をすべて日本人の伝道に注いでいた。そうした中から，私はこの非常に難しい言語の幾つかを学んだ。

1946年7月，大阪で最初のバプテスマが行なわれた。佐藤龍猪兄弟姉

妹のバプテスマである。彼らにレッスンをしたのはほとんど他の人であったにもかかわらず，私は恵まれて佐藤姉妹にバプテスマを施した。

決して日本が嫌いなわけではなかったが，ただ一つだけ頭から離れないことがあった。それは故郷のことである。私は故郷の家を後にしてほぼ4年になる。戦争も終わり，どうしても家に帰りたかった。

やっとその日が訪れた。私はもう2度と日本へ来ることはあるまいと思って，この歴史の頁に終止符を打ったのである。

それからの歳月を，私は教育を受け，家族を養うことで忙しく働いた。私の周囲に日本人がいるわけでもないし，覚えた日本語の言葉を使う場があったわけでもない。それらはぼんやりとした遠い過去の思い出の中に取り残され，26年という歳月に押し流されていた。そしてその記憶が2度とよみがえってこようとは思ってもみなかった。そんな時，私は日本に行く責任を受けた。

東京に着いた翌日の朝，私はアボ伝道部長と共に伝道本部を出ようとしていた。その時，ひとりの日本人の長老がアボ伝道部長に日本語で話しかけてきた。アボ伝道部長は急用ができたので，少し待って下さいと言って謝った。

アボ伝道部長はその長老と書類に目を通しながら，日本語で話をしていた。それから一通の手紙を取り出し，その中の言葉を指差して，こう言った。「これは，……」

その言葉を聞いて，私はアボ伝道部長よりも前に，頭の中で次の言葉を発していたのだった。「これは何ですか。」私はその言葉の意味を知っていた。アボ伝道部長がその長老に何と言っているのかわかった。26年間の空白を乗り越えて，わずか1晩日本にいただけで，突然一つの言葉が私の心によみがえってきたのである。「これは何ですか。」

私はこの言葉を26年間も使ったことがなかった。2度と使おうと思ったこともなかった。しかし，その言葉は決して私の記憶から消え去ってはいなかったのである。

私は日本に10日間ほど滞在した。最後の旅行は福岡であった。福岡を立つ朝，渡辺兄弟姉妹が私を空港まで送ってくれた。私は後の席で子供たちから昔覚えた日本語を習っていた。子供たちは喜んで幾つかの新しい言葉を教えてくれた。

その時，私の心にちょうど26年前に覚えた短い歌がよみがえってきた。それを子供たちに歌った。

もも太郎さん，もも太郎さん
おこしにつけたきびだんご
一つわたしにくださいな

タバナクルの指揮をしているオットレー兄弟は，私の歌を聞いてとまどっていたようですが，……

渡辺姉妹が，「その歌なら私も知っていますよ」と言ったので，私たちは一緒に子供たちに歌ってあげた。それから渡辺姉妹は，その歌詞の意味を説明してくれた。私はその意味もよく覚えていた。

それは，子供のいないある老夫婦の物語である。彼らは息子を授かるように祈っていた。ある日，川で大きな桃を見つけ，あけてみると中に赤ちゃんがいた。そこでその子に桃太郎と名付けた。それから桃太郎が成長して，悪人たちから人々を救い，英雄になったことが述べられている。

私はこの歌を26年前に覚えていた。しかし自分がその歌を知っていることに気づいていなかった。私はその歌を自分の子供たちに歌ってあげたこともなければ，その物語を話したこともない。26年間にわたって全く記憶の外に追いやっていたのである。

私はその時，非常に大切な経験をしたと思った。そして良いことは決して忘れ去れないことを知ったのである。私がひとたび異なる言語を話す人々の中に足を踏み入れたとき，記憶がよみがえり，しかも一瞬のうちに戻ってきたのである。その上新しい言葉もすぐに覚えられる。

むろん，私はこうした経験を得るためには，注意深い心と良い記憶力を持たねばならないと言っているのではない。この中には，私たちすべてに当てはまる人生の教訓が含まれている。長老見込会員の兄弟たちを初め，同じような境遇にあるすべての人に当てはまるものである。

もしあなたが霊的な真理について語られている環境の中に戻っていくならば，すでに忘れてしまっていたと思っていた記憶がいっせいによみがえってくるであろう。長い間使わずにしまったままにして置いた事柄が突如としてよみがえってくる。そしてそれを理解する能力も高められるのである。

もしあなたが聖徒たちの仲間に入ろうと努力するならば，すぐに霊感された言葉の意味がわかるようになるであろう。しかも想像できないほどの早さで，あなたは教会を去っていたことがうそのような気持ちになるであろう。もしあなたが教会に戻ってきた時に，今までずっといたような気持ちになれるとしたら，これほど大切なことはない。

ある時，私が管理しているニュー・イングランド伝道部で宣教師の大会が開かれた。長老たちが待っている部屋に足を踏み入れたとき，後方の席に座っている背の高い老人の姿が目に映った。

その老人は私にこう言った。「私は74歳になってようやくこの福音を知ることができました。」

そして集会に出席させて下さいと言ってきた。「私はただもっと知りたいのです。後ろの席で結構です。決してご迷惑はかけませんから。」

それからほとんど涙を流さんばかりの声で後悔の念を述べていた。「どうして今までこの福音に気がつかなかったのでしょうか。私の人生はもう終わりです。子供たちもみな大きくなって，私のもとを離れていきました。今さら福音を学んでも手遅れです。」

私はこの老人に説明した。教会でしばしば見かける奇跡は教会に加わる人（あるいは再び教会に活発になった人）が変わることであると。彼らは世俗的なこの世の生活に慣れきっていた。そんな時に宣教師に出会った。その後は世にあっても，決して世のものとはならなかったのである。彼らの思い，感情，行動は急激に高められ，あたかも長い間教会員であったかのようになるのである。

これが，このみ業に伴う偉大な奇跡である。主はいつも償いと祝福の道を用意しておられる。主と交わるのにくどくどした言葉はいらない。特別に日本語でなければならないとか，英語でなければならないということはないのである。

純粋な英知が私たちの心に訴える神聖な方法があり，そうでなければ長い時間をかけて獲得しなければならないことを一瞬のうちに知るようになるのである。特に私たちが謙遜になって主を求める時，主は霊感を与えて下さるのである。

各地の教会を旅して回り，ステーキ部長や他の教会指導者と会い，彼らが福音を完全に理解し，教会の手続きと原則によく精通していることを知って驚いている。そして彼らがしばしば，しかも長い期間にわたって不活発であったことや，逆につい最近教会に入ったばかりの人であることを知ってなお一層驚くのである。

私たちがしばしば無駄だと思っていた過去数年間が非常に有意義なものに変ったり，苦しい経験から得た幾つかの教訓が，霊感の光に輝き出され，非常に意義あるものとなるのである。

恐らく皆さんは，ぶどう園の労働者のたとえ話を読んだことがあると思う。そこを読んでみたい。

「天国は，ある家の主人が，自分のぶどう園に労働者を雇うために，夜が明けると同時に，出かけて行くようなものである。彼は労働者たちと，一日一デナリの約束をして，彼らをぶどう園に送った。それから九時ごろに出て行って，他の人々が市場で何もせずに立っているのを見た。そして，その人たちに言った，『あなたがたも，ぶどう園に行きなさい。相当な賃金を払うから』。そこで，彼らは出かけて行った。主人はまた，十二時ごろと三時ごろとに出て行って，同じようにした。五時ごろまた出て行くと，まだ立っている人々を見たので，彼らに言った，『なぜ，何もしないで，一日中ここに立っていたのか』。彼らが『だれもわたしたちを雇ってくれませんから』と答えたので，その人々に言った，『あなたがたも，ぶどう園に行きなさい』。さて，夕方になって，ぶどう園の主人は管理人に言った，『労働者たちを呼びなさい。そして，最後にきた人々からはじめて順々に最初にきた人々にわたるように，賃銀を払ってやりなさい』。そこで，五時ごろに雇われた人々がきて，それぞれ一デナリずつもらった。」（マタイ20：1－9）

賃金は十分にある。しかもすべての人に一デナリずつある。朝早く来た人も，遅く来た人のためにも主に感謝する。日の光栄の王国では部屋が不足することはない。部屋は全員のために用意されている。

私たちはこの世では絶えず競争意識に惑わされている。チーム競争では，勝者を選ぶために敵，味方に分かれなければならない。勝者がいれば，敗者もいるはずである。しかしこれは誤まった考えである。

主の目から見れば，全員が勝者である。しかも私たちは，その勝利を勝ち取らなければならない。しかも主のみ業における競争とは，他人とではなく，過去の自分との競争である。

私は，それが容易であると言っているのではない。また目に見える変化について語っているのでもない。しかし何らかの変化があるはずである。決して容易なことではないが，不可能なことではない。しかも今すぐにそれが可能である。

さきほどのたとえ話がまだ残っているのでそこを読んでみたい。思うに，このたとえ話の後半部は，私たち活発な教会員のために述べられているようである。

「さて，夕方になって，ぶどう園の主人は管理人に言った，『労働者たちを呼びなさい。そして，最後にきた人々からはじめて順々に最初にきた人々にわたるように，賃銀を払ってやりなさい。』そこで，五時ごろに雇われた人々がきて，それぞれ一デナリずつもらった。ところが，最初の人々がきて，もっと多くもらえるだろうと思っていたのに，彼らも一デナリずつもらっただけであった。もらったとき，家の主人にむかって不平をもらして言った，『この最後の者たちは一時間しか働かなかったのに，あなたは一日じゅう，労苦と暑さを辛抱したわたしたちと同じ扱いなさいました』。そこで彼はそのひとりに答えて言った，『友よ，わたしはあなたに対して不正をしてはいない。あなたはわたしと一デナリの約束をしたではないか。自分の賃銀をもらっ

て行きなさい。わたしは，この最後の者にもあなたと同様に払ってやりたいのだ。自分の物を自分がしたいようにするのは，当りまえではないか。それともわたしが気前よくしているので，ねたましく思うのか。』このように，あとの者は先になり，先の者はあとになるのであろう。」（マタイ20：8—16）

長老見込み会員の兄弟たち，私たちが皆さんの贖いのためにどれほど努力を払っているか知っていただきたい。私たちは，皆さんが神の王国であるこの教会に戻ってきて，再び霊感された言葉を語ることができるよう熱心に祈っている。それが2年後であろうが26年後であろうが，あるいは死の間際であろうが問題ではない。もう一度申し上げる。教会に立ち帰ることによって，あなたはすぐに多くのものを得ることができる。しかも今まで教会を離れたことがなかったような気持ちになるのである。

過去を振り返ってみると，皆さんは必ずこうした経験をしたことがあると思う。私たちはこの世の来る前に生きていたことを啓示によって知っている。私たちは自分の経験を前世にまでさかのぼることができる。

私たちは神の子であり，この世に生まれる前から主と共に住んでいた。そして主のみ前を去って，肉体を得て試しを受けるためにやって来た。

ある人は主の力の及ばないところに迷い込み，すでに主を忘れてしまったと思っている。また神も自分たちのことを忘れてしまったのではないかと思うことさえある。

しかし，26年後によみがえったあの日本語の言葉のように，子供の時に覚えた正義の原則はいつもあなたから消えさることはない。

しかも主のみ前で覚えたことが，みたまのささやきとしてよみがえる時，あなたはそれがどこか聞き覚えのあることのように感じるに違いない。

そして生活を変えたことから来るきまり悪さもやがてなくなり，すぐにあなたは神の教会，神の王国に完全に適した人になるのである。あなたはこの神の王国で必要とされ，あなたの経験を通して語る言葉は，他の人々を救う大きな力となるのである。

兄弟の皆さん，そして長老見込み会員や現在それと同じような状況にある方々に証したい。イエス・キリストの福音は真実である。私たちは皆さんを愛している。神権ホーム・ティーチャー，扶助協会の姉妹，監督，ステーキ部長，定員会指導者など主の霊感を通して語る人々の声，すなわち教会の指導者と呼ばれる人々は皆，かのダビデがわがままな息子アブサロムに言ったように，「わが子よ，どうぞ帰ってきて下さい」と呼びかけている。

家族や家庭にそうした霊性を感じられない人々も，神の恵みによって，荒野での彷徨の旅を終え，再び私たちのもとに戻ってきて語り合うことができるのである。そして私が知っていると同じように，神が生きておられることを証するのである。イエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。

人はなぜ罪を黙認し続けるのか

大管長

スペンサー・W・キンボール

愛する兄弟姉妹の皆さん。間もなくこの年次総大会もその幕を閉じようとしている。あなた方もこの大会から多くのものを得たことであろう。そう願っている。

この大会で，大勢の人々が麗しい証と力強い説教を述べた。また，数百万になんなんとする聴衆が清い心と寛容な気持ちをもって，これらの言葉に耳を傾けてこられたものと思う。私たちは，その中から大勢の人々が，現在数百万の会員を擁するこの偉大な教会に加わることを望まれるものと期待している。

私たちはこの福音が真実であることを知っており，全世界の人々にこのことを証している。そして，人々が過去の偏見や誤解をすべて拭い去って，イエス・キリストの羊の群れに加わるよう，私たちは願っている。汚れなく，純粋な福音は，この教会にこそあるからである。

この大会中，幹部の兄弟たちはいろいろなテーマで話をしたが，それらはすべて，イエス・キリストの福音の原則に関するものであった。

数日前の記者会見において，次のような質問を受けた。「今日の社会で，あなたが最も憂慮しておられることは何ですか」と。私はその記者会見ですでに取り上げられていた教会の発展に伴う問題をあげようと思った。なぜなら，現在教会は著しい発展を続けており，民を導く指導者を育てることにやや困難をおぼえているからである。しかし喜ばしいことに，私たちは常に前進を続けている。

私はこのことを即座に心の中に思いめぐらし，先の質問に答えようとしたとき，アッシリアとバビロニアが世に権力をふるった時代のことが心に浮かんできた。私は今，昨夜の神権会でロムニー副管長が語った，旧約聖書のベルシャザルの物語を思い起こしている。彼は，バビロンがキュロス（クロス）大王に征服される前に大きな勢力を奮った最後の王で，あの名高いネブカデネザルの息子であり，後継者であった。私たちは，エルサレムにある聖なるソロモンの神殿を汚し，その神殿から多数の高価な品々を運び去った，ネブカデネザルの不敵な略奪行為のことも思い起こした。ベルシャザル王は大臣一千人と盛大な酒宴を催し，彼らと共に酒を飲んでいた。一千人分の食事を用意することは，容易なことではない。

ベルシャザルは，主の目的のためにすでに献堂されていた聖なる神殿から彼の父が略奪してきた金銀の器をただながめるだけでは飽き足らず，それで酒をくみかわしたのであった。彼は1千人の大臣だけでなく，王子や妻やそばめをも宮殿に招いたのである。彼に招かれた者たちは，飲み食いし，金，銀，青銅，鉄，木，石などの神々のために乾杯したものと思われる。(ダニエル5：1－4参照)

今日の世の中の様子，特にその放縦に満ちた様を思いめぐらし，私は歴史は繰り返すのではないだろうかと思うようになった。今日の新聞や雑誌を読むと，ふたつの時代の間に極めて著しい類似点があるように思われる。多くの場所で，社会の指導者と仰がれるおびただしい数の人々が盛大な酒宴を設けている。実業家やその妻，めかけたちも同様である。彼らは酒に酔いしれ，放縦な生活を送り，不道徳に走り，不貞を働いている。これらの記事を読むにつけ，私は「歴史は繰り返す」とつぶやかざるを得ないのである。

私は現代の世の道徳について，いやになるほど多くのことを語ってきた。しかし，主は教義と聖約の中でこう言っておられる。「汝ら今の代の人々に向いて，悔改めのほか何事を

も語るべからず。わが誡命を守りまたわが誡命に従いてわが業を起すを助けよ。」(教義と聖約６：９)

また言っておられる。「悔い改むる人を見て彼の悦びは如何に大いなるか。

これを以て，汝らは今の世の人々に悔改めを叫ばんために召さるるなり。」(教義と聖約18：13，14)

初期の聖徒たちがミズーリ州に向かっていたときに，次のような主のみ言葉がその指導者たちに下された。

「彼らは行く行く教えを説きて至る所に真理の証をなし，富める者，位高き者，卑しき者，貧しき者を訪いて悔改めを為さしむべし。

世に住む民悔い改むる心あらば，彼らに教会を建てさせよ。」(教義と聖約58：47，48)

そのように，今は悔改めの時代であると思う。人々が自らの状態をふり返り，本来の姿にその生活を変える時代である。

かつて主がシモン・ペテロに直接に戒めを与えられたように，今日の指導者にも戒めが下されている。「この故にわれ汝らに一つの誡命を与う。汝らこの民の中に行き，その名をペテロと言いし古えのわが使徒が言いし如くこの民に言うべし。」(教義と聖約49：11) 私は，ペテロが人々にその生活を清くし，罪を悔い改めるよう絶えず呼びかけていたことを知っている。

ペテロは言っている。「愛する者たちよ。あなたがたに勧める。あなたがたは，この世の旅人であり寄留者であるから，たましいに戦いをいどむ肉の欲を避けなさい。

異邦人の中にあって，りっぱな行いをしなさい。そうすれば，彼らは，あなたがたを悪人呼ばわりしていても，あなたがたのりっぱなわざを見て，かえって，おとずれの日に神をあがめるようになろう。」(Ｉペテロ２：11，12)

未婚の男女が肉体関係を持つことも今日の世では普通になっていると聞く。彼らは，結婚などもはや必要ないと，いつも声を大にして叫んでいる。結婚することなしに一緒に暮らし，肉体関係を結ぶことに対し，彼らはほとんど何の恥らいも感じていないのである。神がその律法を変えられたのであろうか。それとも，弱く，あてにならない，横柄な人間が勇気を賭して神に挑み，神の律法を変えたとでも言うのだろうか。罪は過去のことですまされるだろうか。悪魔ははるかな昔にのみ，人々の心を支配したのだろうか。

アブラハムは，ソドムやゴモラ，その他の低地の町々が邪悪であったことを知っていた。カインが語ったように「わが知るべき主とは何人なりや」(モーセ５：16) と言う，邪悪で，神を信じない者たちがそこに住んでいたのであった。アブラハムは，それらの町の滅ぼされる日が近づいたのを知ったとき，彼らをあわれに思い，「五十人の正しい者のために」他の者たちを助けて下さいと主に請い願った。(創世18：24参照) アブラハムはさらに請い続け，45名の正しい人がいたら助けて下さるように，40名，30名，20名，さては10名の正しい人のために助けて下さるようにと願ったのであった。しかしそれらの悪徳の町には，10名の正しい人さえ見出せないことは明らかだった。(創世18：24－32参照)

悪は続き，罪人は頑として変わらなかった。彼らは滅びが下されようとしていることを警告されながらもそれを笑い，あざけった。そして，ソドムの名を広く知らしめた罪深い行為は絶えて止まなかった。事実，町の住民たちは，清い御使いたちが町に来たのを見て，御使いたちを陥れようと考えた。

罪深い男たちは御使たちの泊まっていた家に押しかけ，その入口を押し破ろうとしたのである。(創世19：４－11参照)

アブラハムは，その町を救うために，彼がなし得るすべてのことを行なった。しかし民の堕落と放縦ははなはだしく，それを救うことは不可能であった。

「主は硫黄と火とを主の所すなわち天からソドムとゴモラの上に降らせて，これらの町と，すべての低地と，その町々のすべての住民と，その地にはえている物を，ことごとく滅ぼされた。」(創世19：24，25)

歴史は繰り返すということを，私たちは目の当たりにしている。ポルノグラフィー，姦淫，同性愛が世にはびこり，自由奔放な生活をする人が増してきたのを見ると，サタンの時代が戻り，歴史は繰り返されているように思えるのである。

今日の社会に住む非常に多くの人々が，品のない姿で，汚らわしい言葉を使い，奇行に走り，堕落しているのを見ると，サタンはその邪悪な手を伸ばして，この地上の民を彼の軍勢に引き入れてしまったのだろうかとさえ思う。私たちの世界を脅かしている悪を追い払うに足るだけの正しい人々はいないのだろうか。人々はなぜ悪に妥協し，罪を黙認し続けるのだろうか。

最近私は；ふとした機会に，６代前の大管長会の声明を見出した。私は今，その声明文から多くの箇所を読んでもらいたいと思っている。なぜなら，神が昨日も今日も明日も，永遠にわたって同じ神であることをその声明から思い起こせるからである。神が昔の予言者たちと，救い主の時代の予言者たち，現代の予言者たちに与えられた戒めから，私たちは，神が昨日も今日も，永遠にわたって同じ神であることを十分に理解

できるのである。

私たちは，人間が状況に即座に左右されてしまう存在であるとは信じない。現代は過去の時代と異なり，人々の知性は優れ，現代は過去の時代に取って代わったのだと考える人々がいるが，私たちはそれには承服しかねる。主は，過去に下された言葉をいつまでも守り続けられるであろう。そして，自分自身と伴侶と家族を敬い，正しい生活を送るよう人に期待をかけられるのである。主はこのことを過去に何千回となく繰り返し述べてこられた。

記者の方々に話しながら，そのことが私の心に浮かんできたのであった。私たちは現在行なっていないどのようなことを行なえるだろうか。どこまで行なえるだろうか。この世において正義を守り続けるために，何を変えればよいだろうか。もしもこれを行なわなければ，バビロニア人や，幾分方法は異なるがソドムとゴモラ，その他の町々に下されたと同じ滅びが下されるように思えるからである。

私たちはこのことを非常に強く感じている。私たちが福音を宣べ伝えている理由はここにある。この理由で私たちは子供たちに警告を与え，彼らを教え，青少年にも警告を与えている。また，すでに結婚している人々に，その結婚を美しく清い状態に保つよう警告しているのもこの理由による。

兄弟姉妹，この大会を終えるにあたって申し上げたいことがある。高い霊性をもってそれぞれの家に戻り，教会幹部の話から得た証と，心に受けた深い感動を，家族や友人，ワード部，ステーキ部，支部の会員に伝えていただきたい。

最後に証を述べたい。私は神が生きておられることを知っている。イエス・キリストは生きておられる。主は私たちを愛し，私たちに霊感を下し，私たちを導いておられる。主は私たちを愛しておられる。主は愛や悲しみの感情を持っておられる御方である。私たちが主のはっきり示された，まっすぐな道からそれると，主は非常に悲しまれるのである。

この証を主イエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。

目　次

■10月3日（金）午前の部における説教

■10月3日（金）午後の部における説教

■10月4日（土）午前の部における説教

■10月4日（土）午後の部における説教

■10月4日（土）神権会における説教

■10月5日（日）午前の部における説教

■10月5日（日）午後の部における説教

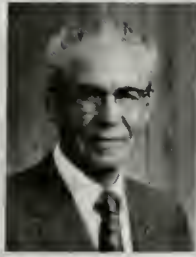
■10月4日（土）福祉部会における説教

第145回
半期総大会
1975
10. 3-5

時の動き

1975

- 4.21　大分県中部でマグニチュード6.4の直下型地震。
- 4.30　南ベトナムのサイゴン陥落。30年にわたったベトナム戦争に終結。
- 5.7　英国のエリザベス女王来日。
- 5.16　日本女子登山隊，エベレスト登頂に成功。
- 5.19　連続爆破事件の容疑者グループ逮捕さる。
- 6.25　七十人最高評議員会会長ミルトン・R・ハンター長老逝去。
- 7.4　米国，建国200年を迎える。
- 7.12　自治省，3月31日現在の人口が1億1千万を突破と発表。
- 7.20　沖縄海洋博開幕。
- 8.3　モロッコでヨルダン航空機墜落，188人全員死亡。
- 8.4　日本赤軍，マレーシアの米国，スウェーデン大使館を占拠。犯人らはリビアへ。
- 8.10　北アイルランド紛争激化。ベルファストで3人死亡。100人負傷。
- 8.28　興人倒産。戦後最大の倒産。
- 9.6　トルコ東部で大地震。マグニチュード6.5。死者3000人。
- 9.30　天皇，皇后が訪米の途に。
- 10.3—第145回半期総大会。
- 5　七十人第一定員会が組織さる。
- 12.2　ヒュー・B・ブラウン，エルレイ・クリスチャンセン両長老逝去。

大管長会

第一副管長
N・エルドン・タナー

スペンサー・W・キンボール

第二副管長
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン

マーク・E・ピーターセン

デルバート・L・ステイプレー

リグランド・リチャーズ

ヒュー・B・ブラウン

ハワード・W・ハンター

ゴードン・B・ヒンクレー

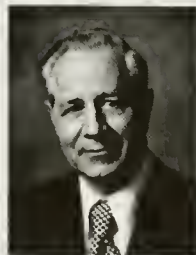
トーマス・S・モンソン

ボイド・K・パッカー

マービン・J・アシュトン

ブルース・R・マッコンキー

L・トム・ペリー

大祝福師

エルドレッド・G・スミス

実践の時代

大管長

スペンサー・W・キンボール

私たちは，この会場におられる方々，ならびにテレビやラジオで視聴しておられる方々をこの大会に歓迎したい。また，心からの愛を皆様にお伝えしたいと思う。

本日私たちは，4名の新しい教会幹部の召しを発表したい。彼らは主のみ業の中で特に伝道の業に携わることになる。これまで七十人最高評議員会の幹部書記を務めてきた，バウンテフルのジーン・R・クック長老は，七十人最高評議員会会員になる予定である。また，七十人第一定員会が組織される予定である。この定員会には将来70名の会員が召され，7名から成る会長会が管理することになる。本日，3名の兄弟が七十人第一定員会に召されることになっている。ベルギー出身，現在ドイツのフランクフルトに在住している七十人のチャールズ・A・ディディエ兄弟，テキサス州サンアントニオから現在チリ・サンチャゴ伝道部の伝道部長を務めている七十人のウイリアム・ロウセル・ブラッドフォード兄弟，それにコロラド州トワオク出身でニューメキシコ州シプロックに在住している現アリゾナ・ホルブロック伝道部長である七十人のジョージ・パトリック・リー兄弟の3名である。以上4名の兄弟たちは，教会幹部の責任に就くことになる。これら4名の教会幹部は，後ほどこの大会で，他の教会幹部と共に皆様の支持をいただくことになっている。

私たちは本年2月と3月に，ブラジルのサンパウロとアルゼンチンのブエノスアイレス，次いで8月には，台湾，香港，フィリピン，韓国，日本でそれぞれ地域大会を開催した。過去5年間に開いた地域大会に出席した人々は約11万4,000名を数える。このように私たちは，ソルトレークの総大会に来ることのできない人々のために，大会を開いている。

南米の人々のために，サンパウロに神殿を建てることを発表し，次いでアジアにおいても，東洋の人々のために日本に神殿を建てることを発表した。これは発展のしるしであると思う。これらふたつの神殿が建てられ，献堂されるときには，両地域に住む人々にとって，神殿への距離は大幅に短縮され，時間と経費は節約できることになり，容易に神殿に参入して，聖なる儀式にあずかれるようになるであろう。

人々は，これらの地域大会に出席するため,自動車やバス，列車，飛行機，また船で遠方からはるばるやって来た。大会に出席するために,多大の犠牲を払ったのであった。ひとりの姉妹の手紙から引用したいと思う。

「最後の一般大会は特に素晴らしい会でした。キンボール大管長は人々に別れの言葉を述べて手を振られました。そして一同は,『神よまた逢うまで』を歌い，私たち夫婦は抱きあって涙を流しました。

私は教会員であることが大きな祝福だと思っています。」

別の姉妹はこう書いている。

「すべて終わりました。何が。地域大会が。彼ら指導者がこの地にもっと長く居て下さればと思います。……予言者の飛行機が到着する日はどしゃぶりでした。ところが不思議なことに，飛行機が空港に着く直前に，太陽がさんさんと照り始めたではありませんか。台風の予報が出ていました。しかし，幹部の方々がお帰りになるまで，台風はやって来ませんでした。私はキンボール姉妹に同伴した折，彼女と一緒に歩けるなんて信じられないことですと言いました。するとキンボール姉妹は，あなたと全く変わりがないですよ，とおっしゃいました。姉妹は洗濯もすれば，皿洗いもするし，料理，野菜作りなど，私がすると同じことをするとお

っしゃるのです。」
別の手紙には次のように書いてある。
「地域大会は本当に素晴らしく，フィリピンのモルモン全員にとって貴重な経験でした。初めて大管長が会場を訪れ，会衆が『感謝を神にささげん』を歌い始めたとき，私は泣いてしまいました。
私たちはマニラからさほど遠くない所に住んでいます。そのため，大会後は毎晩家に帰ることにしていました。日曜日の大会が終わったのは午後10時頃でした。そこで私たちは，12時の外出禁止の合図が鳴るまでに帰宅しようと道を急ぎました。ところが途中で，自動車の後輪がパンクしてしまったのです。それで私たちは宿泊しなければなりませんでした。幸いなことにひとりの警官が来て，今夜はこれ以上先へは行けないだろうから適当な場所を見付けて泊るようにと言ってくれました。そこで私たちは，外出禁止時間が解除される午前4時まで，ガソリンスタンドに泊りました。翌日私たちは，大会の後片付けのために再びマニラに戻りました。
統一した服装で「山の如く強く」を歌う1,200名の若人のコーラスは，あたかも一人一人がその曲を作った人のような思いを抱かせる，心のこもった見事なものであった。
各国の政界の指導者に会う機会をいただいたとき，私たちは彼らに，教会の宣教師がその国にアメリカのお金を持ちこんでいるだけでなく，使節の役割をも果たしていることを説明した。宣教師たちは，国民の忠誠心と愛とを育て，新しい会員に正直と誠実とを教えている。現在東洋の教会員は約6万2,000名を数えている。
今回の大会でも，教会幹部から多くのテーマに基づいて話をいただく予定である。従って私は，皆様の注意を喚起したい若干の点についてのみ話したいと思う。
私たちはこれまで幾度か，菜園を造り，樹木を植えるように勧めてきた。そして今年，菜園の数が増したことを喜んでいる。私たちが車で出かける町はどこでも，以前に見られなかった菜園が見られる。トウモロコシやトマト，人参，玉ネギ，二十日大根，カボチャその他が作られている。私たちは皆様の働きを喜んでいる。ワード部の菜園や地域社会の菜園，隣り組の菜園が造られている。私たちは，皆様が自分の菜園から新鮮な野菜を収穫することによって，ある程度まで，生活費を減じてこられたものと確信している。
日本のある兄弟から，このような便りをいただいた。「今私は菜園を造っていますが，ジャガイモがとてもよくできています」と。
主はエデンに園を設けられたときに，次のように言われた。
「……人の用いんために備えたるすべてのもの……人はその食うに善きことを観たり。」（モーセ3：9）
「われ主なる神，かの人をとり彼をエデンの園に置きてこの園の手入れをなさしめ，またこれを守らしめたり。」（モーセ3：15）
現在の神権時代にも主は次のように語っておられる。
「……地に満つるすべてのものは汝らに与えらるべし。すなわち野の獣，空の鳥……
然り，また汝らの食物，衣服，家屋，小屋，果樹園，野菜畑，葡萄園など何れにしても，それらのために地より生ずる諸々の草と善きもの，
然り……地より生ずるものは，皆人の為人の用いんために造られ，眼を楽しませ，また等しく心を悦ばせんためなり。
然り，これらは肉体を健（すこやか）にし元気をつくるよう，食物，衣服，味，香りのために造らる。」（教義と聖約59：16—19）
ある少女からも次のような手紙をいただいた。「私はお父さんの畑作りを手伝っています。そして弟は庭の掃除をしています。」
デゼレトニューズ社とユタ州美術協会も，ユタ州のカルビン・ランプトン知事の提唱により，合衆国独立200年記念として，100万州民のために100万本の樹木を植えた。私たちは皆様がこのことを真剣に考えるよう願って止まない。樹木は美と祝福をもたらし，果樹は生活に必要なものを提供してくれる。
田園地方に住むある方からいただいた手紙には，次のようにある。「私たちは大管長の助言に従って屋敷を見直したのですが，恥ずかしくなりました。私の家は開拓時代の田舎家で，普通の納屋と鶏小屋，家畜小屋がついていました。また，柵は壊れたままでした。
私たちは古い納屋を取り壊し，柵を立て直してペンキを塗りました。その他の戸外の建物は白色に塗り，納屋の跡は掘り起こして菜園にしました。本当に楽しい仕事でした。ありがとうございます。」
アフリカのある行政官が嵐で荒廃した土地を視察したときのことである。彼は自動車でその地を訪れて見ると，たくさんの巨大な杉が根こそぎ倒れていた。そして担当官に言った。「ここに杉を植林しなければなりませんね。」すると担当官は答えた。「このような大きさの木になるには，2千年かかりますよ。おまけに，50年経たないと種もとれません。」
「それでは，今すぐに植林しなければ」と行政官は言った。これは皆様に対する勧告でもある。
「すべての者に各自の家のドアの前を掃かせよう。そうすれば全世界が

清められるだろう」とゲーテは語っている。

もうひとつ大切な事柄について述べたい。今日クリスチャンの住む多くの地方で，人々は聖なる安息日に，商店を開かせ営業させている。これを正せるのは私たちである。もし私たちが買わないようにするならば，商店は店を開けないことだろう。このことについてもう一度考えていただきたい。家庭の夕べで子供たちと話し合っていただきたい。今後一切安息日に買物をしないとすべての家族が決心できるならば，これほど素晴らしいことはない。

主イエス・キリストは言っておられる。「わたしを主よ，主よ，と呼びながら，なぜわたしの言うことを行わないのか。」（ルカ6：46）私は主が悲しみの気持をもってこれを言われたと思う。

エゼキエル書にはこのような一節がある。「わたしの民のようにあなたの前に座して，あなたの言葉を聞く。しかし彼らはそれを行わない。」（エゼキエル33：31）

主を愛していながら，なぜ主の律法を破るのだろうか。私たちは皆様が，安息日に物を買うことをやめるよう心から切に願っている。

私たちはまた，伝道の業を続けている。今年宣教師は数千名の増加を見，現在約21,000名に達している。福音を宣べ伝えるグループとしては，世界最大である。

新しい時代が訪れ，南アメリカやヨーロッパ，東洋，南洋諸島その他で何千名もの地元の宣教師が働くようになったことは，注目に価する。私たちは彼らの献身と働きに非常に満足している。地元の宣教師は伝道を始めるにあたって，言語の訓練を受ける必要はなく，ビザの必要もない。また，人々の生活様式や物の考え方もよく知っている。私たちはまた，全世界の教会において地元の指導者を召しており彼らの誠実な態度と優れた能力そして，献身的な姿を目にしている。

私たちは，離婚率の増加についても心を痛めている。離婚はすべて悲惨な生活，誓言の破棄，子供に対する義務の放棄と権利の喪失，家庭の破壊を意味する。離婚は好ましいことではない。正当化できる離婚は，ごくわずかであると思う。婚姻関係を持つにあたっては，十分な注意を払う必要がある。次いで男女は，最善を尽くして，その結婚を幸せに保たなければならない。これは可能なことである。

ほとんどの離婚は，わがままや，その他数々の罪による。使徒パウロはその解決策を知っていた。夫はその妻を愛し，妻はその夫を愛するようにとパウロは言っている。結婚生活を送る男女は，夫婦協力して入念に予算を組み，その通りによく従う必要がある。多くの結婚は店先で破綻をきたしている。無計画な買物が原因なのである。結婚は夫婦の協力なしには成り立たないことを覚えていただきたい。協力して計画を立て，家族のしつけにも共同であたるべきである。民事結婚が破綻をきたしている割合は非常に高い。私たちは，神殿結婚により夫婦の関係が一層親密なものになることを感謝している。

主が次のように言われたとき，悲しみの内にその言葉を発せられたように思う。「わたしにむかって『主よ，主よ』と言う者が，みな天国にはいるのではなく，ただ，天にいますわが父の御旨を行う者だけが，はいるのである。

その日には，多くの者が，わたしにむかって『主よ，主よ，わたしたちはあなたの名によって預言したではありませんか。また，あなたの名によって悪霊を追い出し，あなたの名によって多くの力あるわざを行ったではありませんか』と言うであろう。

そのとき，わたしは彼らにはっきり，こう言おう，『あなたがたを全く知らない。不法を働く者どもよ，行ってしまえ』。」（マタイ7：21―23）

家庭の安定は，社会の離婚率にかなり正確に反映される。

その他数多くの大切な理由から，私たちは若人に，結婚を大切にし，神聖な儀式を行なうために聖なる神殿に参入するように勧めているのである。

私たちは堕胎を禁ずるものである。人々がこの重大な背罪を犯すことのないように願っている。

「当教会は堕胎に（敢然と）反対しており，ごくまれな場合を除いて，堕胎をしたり，堕胎手術を受けたりしないように教会員に勧告している。……

堕胎は今日の最も忌まわしく，罪深い行為のひとつである。なぜならこの恐ろしい堕胎容認が，性的な不道徳をもたらしているからである。

堕胎の罪を犯した教会員は，事情によっては，教会の評議員会によって懲戒処分を受けなければならない。この深刻な問題を取り扱うにあたって，教義と聖約59章6節に述べられている主のみ言葉を心に留めておくとよい。『汝盗むなかれ。また，姦淫を犯すなかれ。また，人を殺すなかれ。また何事にてもこれに類することを為すことなかれ。』」（*Ensign*「エンサイン」1973年3月号，p. 64）

最近ある雑誌記者が次のように書いている。「社会の道徳は，現在最低の水準，歴史上類を見ないほど低い水準にまで落ち込んでいる」と。

私たちはますます激しさを加えつつある暴力と性の退廃を目にしながら，恐れを覚えている。非常に多くの手段を通して，私たちの居間に，

このような行為があからさまに伝えられているのである。しかし同時に，心の励みを覚えることもある。というのは，夕方の早い時間には，両親が何の心配もなしに子供たちに見せることのできるテレビ番組が，テレビ局幹部の好意によって確保されているからである。私たちは，それがさらに拡張されるよう切に願っている。神が彼らの義なる働きを祝福したまい，私たちの大切な家族がこの世の悪から守られんことを。

私たちは，故国を離れて当地に来たベトナム国民を受け入れるにあたって，援助を与えることができ，喜んでいる。私たちは個人的に，最初の避難民に会った。異国の新しい環境のもとに入った彼らに会ったとき，私たちは，幌馬車や手車でほとんど何も携えることなしにこの新しい土地に来た私たち自身の先祖を思い出した。現在，数百のベトナム人の兄弟姉妹が，私たちと共に新しい生活を始めている。その中には教会員もいれば，教会員でない人々もいる。私たちは，政府の支援金を受けずに，彼らに住まいを提供している。しかし私たちの受ける報いは，救い主の述べられた言葉にあるのである。

「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは，すなわち，わたしにしたのである。」（マタイ25：40）

これらの良き人々に衣食住を提供するにあたって援助して下さった，神権者や扶助協会の姉妹たち，ならびにその他の人々に感謝申し上げたい。

適正な関税を納めることなしに，物品を他の国に持ち込むことがないよう，正直であっていただきたい。時折，それを合理化する人々がいる。隣人からだまし取ったり，商店から盗んだりすることにはちゅうちょする人が，関税をごまかし，正しい申告をしないことを当然の権利であるかのように考えているのが現状である。私たちはこの行為を非難するものである。すべての点で，また自分の行なうすべての事柄において正直であるよう勧める。この規則にはいかなる例外もない。これらの納税義務その他に厳密に従い，正直であるように願っている。

この総括声明を終える前に，道徳に対する教会の立場を繰り返し申し上げたい。神は昨日も今日も，永遠に変わらない。神はご自身が昔に定められた道徳の標準を，人間の考えで変更し，更新することを決して願っておられない。罪は罪であり，時代がどう変わろうとも罪であることに変わりない。私たちは清い生活を送ろうと努めている。また幼年時代から青年時代を経て，死に至るまで，いかなる類にせよ，婚前の性生活は邪悪な行為であると宣言するものである。また既婚者は交わした誓約を守るべきであると宣言するものである。

つまり繰り返し言われているように，未婚の男女は完全に純潔を保ち，既婚者は完全な貞節を保つべきである。いわゆる性革命論者が秩序や状態を変えたことを私たちは受け入れることはできない。私たちはポルノや放縦，またいわゆる性の解放を，あらん限りの力をもって禁ずるものである。この不道徳な行為をもたらす放縦を教え，唱道する人々は，清い標準を定められた神から，いつの日か悲しい罰を下されることになるであろう。私たちはこのことを恐れている。

ここで再び，救い主の感銘深い言葉を繰り返したい。「わたしを主よ，主よ，と呼びながら，なぜわたしの言うことを行わないのか。」（ルカ6：46）

主はまた言われた。「汝ら今の代の人々に向いて，悔改めのほか何事をも語るべからず。」（教義と聖約6：9）

「わたしは人々になやみを下して，盲人のように歩かせる。彼らが主に対して罪を犯したからである。彼らの血はちりのように流され……

彼らの銀も金も，主の怒りの日には彼らを救うことができない。全地は主のねたみの火にのまれる。主は地に住む人々をたちまち滅ぼし尽される。」（ゼパニヤ1：17，18）

私たちは塔の上の見張り人である。人々に警告し，宣言し続けるものである。私たちの手には，ラッパがある。力強く吹き，警告を発しなければならない。

イザヤは語っている。「あなたに仕えない国と民とは滅び，その国々は全く荒れすたれる。」（イザヤ60：12）

この大会にあたって，話をする兄弟たち，ならびに話を聞く皆様方すべてに主の祝福があらんことを。そして，皆様の心が奮い立ち，証が心の内に高められるように。神を主と仰ぐ国民に祝福のあらんことを。天の恵みが皆様の上にあらんことを。イエス・キリストのみ名によって祈る。アーメン。

千年に1度か2度

十二使徒評議員会会員

ブルース・R・マッコンキー

千年に1度か2度，すなわち塵より成る死すべき人間が生ける霊の結合体となってから12回余りであろうか，人知を超越した途方もなく重要な出来事が起きている。そしてその出来事を契機として，天も地も全く新たな時代を迎える。

20世代に1度か2度，天地は完き友愛の絆でひとつに結ばれる。そこで神聖なドラマが繰り広げられ，それより後の地上の出来事は，全く異なった方向へと展開していく。

ある時は静かな園で，またある時は火と雷のシナイ山で，あるいは封じることのできない墓穴の中で，そしてある時は2階の部屋で，主は人類の諸事に自ら手を下され，人類の救いのためにみこころを表わしてこられた。しかもそれらの出来事は，ほとんどと言ってよいほど衆目の届かないところで起きている。そのことを知っていた人間はほんの一握りにすぎなかった。

今から6千年前にエデンの園の東で起きた出来事はそのひとつである。そこでアダムとイヴは，人類を生ずるために堕落したのであった。もうひとつの出来事は，それまでの歴史の流れを一変させるものであった。神を信じる老予言者は箱舟を造り，地のあらゆる住民と別れて7名の男女と共に乗り込み，水の墓から救われた。

これらの出来事の中で他の追随を許さないのは，エルサレムの城壁外のゲッセマネと呼ばれる園で，地球の主があらゆる毛穴から血をしたたらせ，苦しみを負われたことである。主は，悔改めを条件として全人類の罪を自らの身に受けられたのであった。さらにアリマタヤ人の墓の中で起きたもうひとつの出来事は，すべての生ける霊の結合体の生涯に影響を及ぼすこととなった。ひとりの完全な御方の罪なき霊が，神のパラダイスから，かつて槍で突かれ今は栄光の不死不滅となった体に戻ったのである。

しかしそれにも増してここで触れなければならないひとつの出来事がある。それは，この啓示に基づく宗教の最も偉大な真理と称されるほど重要な出来事である。1820年の早春のある美しく晴れわたった日，ニューヨーク州パルマイラの町はずれの森で起きている。それは4月6日のことであろうか。恐らくそうであろう。少なくともそう言い伝えられている。それはともかくとして，その日の出来事は，その日からかの大いなる終りの日に至るまでの間に生を受ける数十億とも何百億とも知れぬ天父の子らの救いに大きな影響を与えることになった。その終りの日に，御子は汚れない状態で王国を天父に引き渡される。

モリアンキュメルがゼーリン山に向かって「移れ」と命じたとき，山は実際に移った。また，モーセが海に向かって「分れよ」と命じたとき，海は左右に分れて壁となった。そしてヨシュアが「日よ，とどまれ，月よ，やすらえ」と命じると，そのようになった。しかしながら，これらの事柄をあの春の朝，ニューヨーク州西部の森で起きた出来事に比べてみれば，みな取るに足らない小さなことばかりである。

私たちは，この輝ける朝の天来の奇跡に対して，礼拝と感謝の思いを胸に満たしつつ畏敬の念をもって思いをはせる。ではまず，天が開けて奇跡が行なわれる背景について眺めてみることにしよう。

かの恵みの年，1820年は，それまでの1,400年間と同様，暗黒が地を覆い，人々の心がはなはだしく暗く閉ざされた年であった。山々が福音の光にその姿を浮かび上がらせていた頃，世はいまだ霊的な暗闇の中にあ

り，空には暗雲が低くたれこめていた。天使の導きはなく，神のみ声は聞かれず，造り主のみ顔を拝する人間はいない。賜，しるし，奇跡，その他古代の聖徒たちに授けられていたあらゆる特別な賜は，もはや心に信仰の根をおろした人々の共有するものではなくなっていた。示現は止み，啓示はなく，天は閉ざされていた。古の時代，選民の上に注がれた正義はもはや人々の上に降り注がれなくなった。

死者のよみがえりはなく，盲人の目が開かれることも聾者の耳がその機能を回復することもなかった。その行ないが天においても地においてもつながれるという正統な権能を有する者がいないのである。パウロは福音を説き，ペテロはその福音のために死んだ。その同じ福音が，もはやキリスト教各派の説教壇から宣べられることがなかったのである。

背教が極限にまで達し，全世界がくまなくその闇の中に埋没していたのである。かの卑しいナザレ人の宗教はどこにも見出せず，すべての宗教，教派が邪道に陥っていた。サタンは歓喜し，その使いたちはあざけり笑っていた。当時の社会や宗教界は，みなこのような状態であった。

しかし，万物を知りたまい，この世と地獄のいずれに対しても力を持っておられる神の深い知恵により，約束されていた回復の時が訪れた。1820年，偉大なるエホバは世の始めから聖なる予言者たちの口を通して語ってこられた万物更新の業を開始されることになったのである。こうして子孫のことについてアブラハム，イサク，ヤコブと交わされていた誓約がまさに成就されることになったのである。

植え込み，刈り取る季節になると，ぶどう園の主人は必要な人数をぶどう園に送る。人々の間における主のみ業は人によって行なわれるのである。すなわち，選ばれた者たちが主の僕となって働く。このようにして，定められた時に，定められた人ジョセフ・スミス・ジュニアがこの世に誕生した。この偉大なみたまの人については次のように言われている。「主の予言者にして聖見者なるジョセフ・スミスは，ただイエス・キリストを除くのほか，この世に生を受けたる何人よりもこの世に於ける人類の救いに尽したり。」（教義と聖約135：3）こうしてこの予言者は，予任されていた通り，偉大な末日の業の先駆者となった。

聖なる市シオンを築くために主がエノクを必要とされたとき，エノクはそこにいた。イスラエルの偉大なる立法者モーセを主が必要とされていたときには，そこにモーセがいた。また約束されたメシアが人々を贖うために自らの命を捧げる時が来たとき，大いなる救い主はそこにおられた。そして，「時満ちたる神権時代の先駆をなす」者として，偉大な末日の予言者ジョセフ・スミスがそこにいたのである。

主はジョセフ・スミスに次のように言っておられる。「地のいや果にある者すら汝の名を訊ね，愚なる者ども汝を嘲弄し，地獄は汝に向いて怒りを起さん。

然るに心の潔き者，賢き者，貴き者，徳ある者たちは汝の手の下よりいさめと権威と祝福とを常に求めん。」（教義と聖約122：1，2）

1820年，まさに時は熟し，みこころにかなう人がそこにいた。時を待たずして示現は開け，福音の真理の燃えさかる炎は，主のぶどう園にはびこる宗派のいばらと雑草を焼き尽くすこととなったのである。

その日に備えるかのように，将来の主の予言者のことを知らぬままひっそり平和な時を送っていた開拓地域には，宗教に対する関心と不安が高まっていた。堕落したキリスト教界の牧師たちは狂ったように自分の宗派の教えを説き，「ここを見よ」「かしこを見よ」と叫んでいたのである。（ジョセフ・スミス2：5）

宗教を公言する者たちはみな，あらゆる理屈と詭弁を弄して，自らが救いをもたらすと信ずる組織に改宗者を得ようとしていた。それはやがて激しい感情の対立にまで発展し，大勢の人々は互いに苦々しい気持を抱いていた。そして「言葉の争いと信念の動揺」から憎悪が広がり，人々はいろいろな宗派に分裂してしまったのである。（ジョセフ・スミス2：10）こうした論争のただ中にあって，将来の神の予言者は自分の胸に何度もこう問いかけた。「私は何を為すべきか。すべてこれらのともがらの中，何人が正しいか。或いは彼らは共にことごとく間違っているのか。もし彼らの中で誰かが正しいとするならば，それは何れであって，どうして，それがわかるのか」と。（ジョセフ・スミス2：10）

神が聖なる「言葉」であるイエス・キリストに命じて生ける光を輝かせたまい，真理を求めて思い悩む少年の心を照らしたもうたのは，まさにこの時であった。

聖典を調べ，福音の真理を心に銘記していただきたい。この世において永遠の生命の言葉を心ゆくまで味わい，来たるべき世における不死不滅の光栄を待ち望んでいただきたい。予言者たちが記した言葉を残らず読み，深く考え，祈って欲しい。これこそ主が，主の聖なる言葉に対して私たち人間にたどって欲しいと願っておられる道である。時の始めから終りに至るまで万事を見通し，すべての子供たちを愛と慈悲の下に治めておられる神は，この進歩と啓示の道に，そのみ手をもって少年ジョセ

フを導かれたのであった。

当時15歳のジョセフは，これからまさに見ようとしていることのために，またそのことについて述べた証のために，2千年の後には殉教を遂げるのである。そして彼が読んだヤコブ書の1節が，予言者の手になる聖なる書の中でも最も大きな影響を及ぼすこととなったのである。

モーセは次のような偉大な宣言を下している。これは，多くの人々が旧約聖書中最も価値ある言葉とみなしているものである。「イスラエルよ聞け。われわれの神，主は唯一の主である。

あなたは心をつくし，精神をつくし，力をつくして，あなたの神，主を愛さなければならない。」（申命6：4，5）また主イエスも，愛と奉仕について述べたこの言葉を取り上げ，第一の大切な戒めとしておられる。

次の聖句は，新約の時代に語られた最も偉大なものとして，大方の人が認めるところのものである。「神はそのひとり子を賜わったほどに，この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで，永遠の命を得るためである。」（ヨハネ3：16）

この種の聖句がいかに重要であり，なおかつ人々の生活に大きな影響を及ぼしているか，いくら語っても語り尽くせない。ヤコブの言葉は，最初の示現への扉を開き，すべての人がこの末日における神のみ業を知ることのできる方法を私たちに教えている。この短い言葉には，予言者の口を通して語られたどの言葉よりも力強い意味が含まれているのである。すなわち，やがて改宗者をもって全地を覆うという神の最も大いなるみ業の先駆けとなったのが，この聖句であった。

こう書いてある。「あなたがたのうち，知恵に不足している者があれば，その人は，とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に，願い求めるがよい。そうすれば，与えられるであろう。」（ヤコブ1：5）

何と平易で簡潔で純粋な言葉であろうか。時を超えてすべての人々に，彼らを造られた神のみこころを知る方法を告げた言葉がここにある。これこそ新約時代の最後の予言者のひとりが聖霊の導くままに書き記した言葉，末日の最初の予言者の胸に深い感銘を与え最も大いなる福音の神権時代を先導する役割を果たした言葉なのである。

人よ，あなたは知恵に不足してはいないだろうか。どの教会が正しくどれに加わるべきか知っているだろうか。もっと多くの知識を必要としてはいないだろうか。時間と空間という障害を乗り越えて，永遠の見地から物事を見ることができるだろうか。

では，神に願い求めていただきたい。神にまみえることを求めていただきたい。あなたの造り主を信頼し，真理とあらゆる義の源である御方に心を向けていただきたい。

しかしながら，その願いには条件が伴う。ヤコブはこう記している。「ただ，疑わないで，信仰をもって願い求めなさい。疑う人は，風の吹くままに揺れ動く海の波に似ている。

そういう人は，主から何かをいただけるもののように思うべきではない。」（ヤコブ1：6，7）

まさに歴史の分岐点であった。

神のみたまが静かに暗黒の世に下り始め，まだ世に生を受けていない人の霊が「光あれ」との宣言を待ちもうけていたちょうどそのとき，若きジョセフは神に導かれ，偉大な光明と真理の時代の先駆けとなったかの聖句に，思いをはせていたのである。

「どの聖句にもまさって，この時ほどこの言葉が私の心に力強く迫って来たことはない。それは私の心の底という底を大きな力で貫き通すような気がした。私はこの言葉を再三再四思いめぐらし……」（ジョセフ・スミス2：12）

これが神の方法であり，聖きみたまの働きである。ヤコブの言葉は，心を神に調和させる人々以外には決して知ることのできないある力をもって，偉大な末日の予言者の心に深く浸透していったのである。

その地方全域を憎悪と混乱に陥れていた宗教上の論争について，ジョセフ・スミスは次のように語っている。「種々な教派の宗教教師たちは，聖書の同じ章句をめいめい非常に異って解釈し，その結果人が聖書に訴えて疑問を決しようとする信頼をことごとくうちこわしていたからである。」（ジョセフ・スミス2：12）

彼は神に願い求めなければならなかった。すべての人がそうである。そして彼はそれを実行した。家からさほど遠くない森に入り，人目につかないところでひとりひざまづいて祈ったのである。彼は身も霊もすべて造り主に託し，心の願いを神に訴えた。

人類の将来と希望が開かれる時であった。陰うつな背教の闇の中に一条の光が投じられ，天地創造のときのあの「光あれ」との宣言が再び発せられる時であった。そして，福音の光，永遠のことばの光が，今まさに全地に降り注がれようとしていた。

しかし，重大な事柄は容易に進むものではない。地を揺るがすような出来事は，山ほどの抵抗にあうものである。すべての物事には反対のものがある。真の教会を見出そうとする人は，世の反対にあうのである。ジョセフ・スミスも例外ではなかった。

祈り始めるや否や，悪魔の軍勢が恐るべき力をもって戦いをいどんできた。ジョセフはこう語る。「……私は何とも知れぬ力によって捉えられ，ついに私は全く抵抗力を失った。またその力は私の舌さえしびれる程の驚くべき力を振ったので私は物言うこともできなかった。そしてあたりはだんだん暗くなり，一時はあたかも私はこのまま急に死んでしまうかのように思われた。」（ジョセフ・スミス2：15）

これがサタンのやり口である。天に住まう神が，あらゆる時代を通じて最も大いなる光をこの世に送ろうとされたとき，悪魔の軍勢は，彼らの暗黒の王国において最も深い闇と罪悪とをもって対抗したのである。約束されていた回復の業に対してこのように戦いをいどんだ私たちの共通の敵ルシフェルは，成就したこのみ業に対して今もなお戦いを企てている。

「しかし，私は自分を捉えたこの敵の力から何とぞ逃れしめたまえと，全力を振りしぼって神を呼び求めたが，私が今にも絶望に打ち沈んでわが身を破滅に任せようとしたその瞬間，それは考えただけの滅亡というようなものではなく，目に見えぬ世界から来た何ともわからぬ生き者で，全くこれまで私がどんな者に逢っても覚えたことのない程の驚くべき強い力を具えた者の力に打ち負けて，わが身を見捨てようとしたその瞬間，この非常な驚きの瞬間である，私は自分の真上に太陽にも増して輝やく一つの光の柱を見た。」（ジョセフ・スミス2：16）

こうして天は裂け，幕は開かれた。長い間閉ざされ続けた天から祝福が雨のように降り注ぎ，光明と真理，そして啓示と奇跡の時代が遂に到来したのであった。

神の偉大な末日のみ業の開始には，時，必要性，人，神のみこころ，これらの条件がすべて整っていた。天変地異は起こらなかった。シナイ山の雷と雲のような先触れはなかった。それはマグダラのマリヤが，開かれた墓の前で復活された主に「ラボニ」と畏敬の念をもって呼びかけたときの，あの静寂の中で起こった出来事であった。

そしてこの瞬間，重々しい暗黒は吹き払われ，かつて人に下され記録された中で最も崇高な示現が開かれて，古代の神々が再びそのみ姿を現わされたのである。

「私は自分の真上に太陽にも増して輝やく一つの光の柱を見た。そしてその光の柱は次第に下りてきて，光はついに私の上にふり注いだ。

その光の柱が現われるや否や，私はわが身を縛った敵から救い出された事に気が付いた。そしてその光が私の上に留った時，私は筆紙に尽し難い輝きと栄光とを有ちたもう二人の御方が私の真上の空中に立ちたもうのを見た。そしてその中のお一人が私に言葉をかけて私の名を呼びたまい，他のお一人を指して『こはわが愛子なり，彼に聞け』と仰せられた。」（ジョセフ・スミス2：16，17）

この御方こそ天におられる大いなる神である。何という驚異であろうか。天が開かれ幕が開き，宇宙の造り主が降りて来られる。そして，天父と御子が地上の人間に言葉をかけられるのである。再び聞かれる神のみ声，神は死んだのではなかった。実際に生きておられ，言葉をかけられる。私たちは今や，古代の人々と同じように神のみ言葉を聞くのである。

ジョセフ・スミスはこう語る。「私が主に伺おうとした目的は，私が何れに加入すべきかを知るためにすべての教派の中で何れが正しいかを知ることであった。それで私はわれに返って言葉が出せるようになるや否や，私の真上で光に包まれて立ちたもう御方に，すべてこれらの教派の中で何れが正しいかそして私は何れに加わるべきかを伺った。

ところがその御答えに『汝はその何れにも加わるべからず，彼らことごとく誤れるを以ってなり』と言いたもうた。そして，私に話しかけたもうたその御方は『彼らの信条はことごとくわが目より見て悪むべきものなり。また彼ら信条を口にする者たちはことごとく腐敗せり。また彼らは唇もてわれに近づけど，その心はわれに遠ざかれり。彼らは人の誡命を教えとして教え神を敬う様をすれども神の力を否む』と宣うた。」（ジョセフ・スミス2：18，19）

千年に1度か2度，新しい扉が開かれる。この世において平安を得，来たるべき世において永遠の生命を受け継ぐ者になりたいと望む者はみな，その扉をくぐらなければならない。

20世代に1度か2度，新たな時代の世が明ける。東から照る光は，人の心から地の闇を追い払う。

人目の届かないある静かな森の中で，天と地との親しい交流があった。1820年春のニューヨーク州パルマイラでのことである。そして，これに比肩し得る出来事は，もう二度と起こらない。

人間が神を求め，神がそれに答えられた。

ジョセフ・スミスが天父と御子にまみえた。

私はこのことを知っており，それを証する。イエスは神の御子であり，私たちはその証し人である。主イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

幼な子の信仰

十二使徒評議員会会員

トーマス・S・モンソン

大会の時節は，1年のうちでも何と素晴らしい時であろうか。ソルトレーク・シティーのテンプルスクウェアは，主のみ言葉を聞くために遠くからやってくる何千何万の人々の集合場所となる。きょうこのタバナクルには，あふれるばかりの人が集まっている。なつかしげな会話が合唱団の歌と祈りや説教を述べる人の声に変わると，うるわしい敬虔な雰囲気が場内を満たす。

皆さんの顔をながめ，真理への信仰と献身を目のあたりにし私はへりくだる思いを覚えている。歴史を経た座席の堅さは年月を越えてもいっこうに変わらず，座り心地も悪いというのに，皆さんは辛抱強く腰かけておられる。

特に，会場の子供たちに感謝している。左手の二階席には，10歳ほどのかわいい少女が座っている。その女の子の名前も，どこから来たのかも私は知らない。その汚れない笑顔とやさしい眼差しを見て，私はきょうのこれからの時間，準備していた話をやめて，あなたに話をしたいと思う。

私はあなた位の少年であった頃，私にも日曜学校の教師がいた。彼女はよく聖書から，世の救い主，贖い主であるイエスの話を読んでくれた。ある日彼女は，イエスのもとに連れてこられた幼な子の話をした。イエスに，子供たちの頭の上に手を按いて祈ってもらいたかったからである。イエスの弟子たちは子供を連れてきた人々を叱った。「それを見てイエスは憤り，彼らに言われた，『幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である』。」(マルコ10：14)

以来ずっと私はその日のレッスンを忘れることはできない。つい数カ月前も，私はその意味を再認識し，その力にあずかった。私の教師は主であった。そのときの経験をお話ししたいと思う。

ソルトレーク・シティーのはるか遠く，ルイジアナ州シュリブポートから130キロほどの所に，ジャック・メスビン家族が住んでいる。彼らは末日聖徒イエス・キリスト教会の会員である。つい最近まで愛らしい娘さんがいて，家中を明るくしていた。その名前をクリスタルという。しかし彼女はわずか10歳でこの世の生涯を閉じたのだった。

クリスタルは家のまわりの広々とした農場を駆けまわるのが好きだった。乗馬が得意で，4 Hクラブの成績もすぐれ，その地方や州の博覧会で賞をもらっていた。彼女の将来はまさにバラ色で，毎日は楽しかった。ところがそんなときに，足に異様なはれ物が見つかったのである。ニューオリンズの専門医は診察の結果，がん腫という診断を下した。足を切断しなければならなかった。

彼女は手術によって回復し，いつも陽気に，不平を言わず毎日を過ごしていた。しかしそれから，医師たちは，がんが小さな肺に転移しているのを発見した。メスビン家の人たちは，それでもあきらめず，クリスタルが教会幹部から祝福を受けることができるように，ソルトレーク・シティーへの飛行機の旅を計画した。メスビン家は教会幹部にひとりの知り合いもなかったので，クリスタルに全教会幹部の写真を見せて選ばせたのが，偶然にも私であったという。

クリスタルはソルトレーク・シティーまで来ることができなかった。病状が悪化したせいである。死は近づいていた。しかし彼女の信仰はぐらつかなかった。彼女は両親にこう言った。「ステーキ部大会はまだ？教会幹部もいらっしゃるんでしょう。きっとモンソン兄弟よ。私が行けな

いから主はきっとモンソン兄弟を私の所に送って下さるはずよ」と。

一方ソルトレーク・シティーでは，シュリブポートのことなど知るすべもないのに，珍しいことが起きていた。ルイジアナ州シュリブポートでステーキ部大会が行なわれる週に，私はテキサス州のエルパソへ行く責任を受けていた。ところが，エズラ・タフト・ベンソン長老の事務所へ呼び出しがあった。エルパソのステーキ部の分割はすでにほかの兄弟が準備しているので，私にほかの所へ行くようにというのである。もちろん異論はなかった。私はどこでもよかった。ベンソン長老はこう言った。「モンソン兄弟，ルイジアナ州のシュリブポートステーキ部へ行ってほしいと思うんですが。」私はその責任を引き受けた。やがてその日が来て，私はシュリブポートに着いた。

土曜日の午後は集会が幾つもあった。ステーキ部長会との会合，神権指導者たちとの集会，祝福師との面接，ステーキ部の指導者会。ステーキ部長のチャールズ・F・ケーブル兄弟が少々遠慮がちに，がんを病んでいる10歳の少女を祝福する時間があるだろうかと，私に尋ねた。少女の名前はクリスタル・メスビンだった。私は，できれば祝福したいと答え，彼女は大会に来るだろうか，それともシュリブポートの病院にいるのだろうかと尋ねた。スケジュールが詰まっているのは重々承知していた。するとケーブルステーキ部長は消え入るような小声で，クリスタルは家から外に出られないのですと返事した。シュリブポートから実に130キロの場所である！

私はその晩と翌朝の集会予定と，帰りの飛行便も調べてみた。時間は全くなかった。するとそのとき，別の方法が頭に浮かんだ。大会の祈りの中でその子のために祈れないものかと。主は必ずわかって下さるはずだ。そういうことにして，私たちは予定の集会をそのまま続けた。

そのことがメスビン家に伝えられ，了解はしたものの，みんないささか失望した。主は自分たちの祈りを聞いて下さらなかったのか。主はモンソン兄弟をシュリブポートまで遣わして下さったではないか。家族はもう一度祈った。最後の願いを聞いて下さい。大事なクリスタルの願いを聞きとどけて下さいと。

メスビン家の人たちがひざまずいて祈ったちょうどそのとき，ステーキ部センターの時計は7時45分を指していた。指導者会は霊的だった。私はメモを区分けして説教壇に立つ用意をしていた。すると，私の霊に語りかける声が聞こえてきた。その言葉は短かく，日頃聞き慣れたこの言葉だった。「幼な子をわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である。」（マルコ10：14）　メモを見る目がかすみ，私の心は祝福を求めているいたいけな少女のことでいっぱいになった。私は決断した。集会予定を変更した。集会よりも人の方がもっと大切である。私はジェームズ・セラ監督に，メスビン家に連絡を取ってきて下さいとお願いした。

メスビン家の人たちが祈り終えて立ち上がったところで，電話のベルが鳴り，翌日曜日，主の日の朝，私たちが断食と祈りの精神をもってクリスタルの病床にかけつけるという知らせが伝えられたのである。

私はあの早朝の，メスビン家が家庭と呼んでいる彼らの天国への道中を，決して忘れることができない。私はこれまで，聖なる宮居を含めて清い場所にたびたび入ってきた。しかし，主の存在をあのときのメスビン家におけるほど強烈に感じたことは，いまだかつてない。大きなベッドにひっそりと横たわったクリスタルは，本当に小さく見えた。部屋は明るくさわやかで，東の窓から寝室いっぱいに射し込んでくる日光は，私たちの心に満ちていた主の愛と同じにまばゆかった。

家族はクリスタルの枕もとを囲んだ。もう起き上がることもできず，話もできないほどに弱っている幼な子の顔を私は上からのぞき込んだ。病気は進み，すでに彼女は目も見えなかった。私はみたまの強い力を感じて，ひざまずき，彼女のかぼそい手を取って，ただこう言った。「クリスタル，モンソンですよ。」彼女は口を開いてつぶやいた。「モンソン兄弟，いらっしゃるってわかってました。」私は部屋を見まわした。立っている人はいなかった。みんながひざまずいていた。祝福を施すと，クリスタルの顔にかすかな笑みが浮かんだ。彼女の「ありがとう」というささやきを最後にして，私たちはひとりずつ静かに部屋を出た。

それから4日後の木曜日，シュリブポートの教会員がメスビン家の人々と信仰をひとつにし，クリスタルのためにやさしく愛の深い天父に特別な祈りを捧げる中で，クリスタル・メスビンの清らかな霊は，病にむしばまれた体を離れて神のパラダイスに入った。

あの安息日に陽の光があふれる寝室でひざまずいた私たちにとって，特に，毎日あの部屋に足を踏み入れ，クリスタルの臨終をみとった両親にとっては，ユージン・フィールドのこの不滅の言葉は，貴重な思い出を呼びさますものである。

おもちゃの小犬はちりに埋もれながら，
でもしっかりとけなげに立っている。

おもちゃの兵隊は赤くさび，
両手の小銃は青さびをふいて。
おもちゃの小犬が真新しかったあの頃，
おもちゃの兵隊がピカピカだった頃，
かわいいブルー坊やがおもちゃに
唇をよせて
そこへすわらせたあのとき。
「ねえ，ぼくが来るまで行かないで」
「静かに，静かにしてね」
そう言って坊やはベッドに歩いて行き，
かわいいおもちゃの夢を見た。
坊やが夢を見るときは，天使の歌が
かわいいブルー坊やの目をさます。
ああ，年は久しく，歳月は長く，
でも小さなおもちゃの友だちは今も変らず忠実に！
ああ，ブルー坊やに忠実に立っている。
昔と同じその場所で
小さな手が触れるのを待ち
かわいい顔のほほえみを待って。
長い長い年月を待ちながら
どうしたのかといぶかしげに
あの小さな椅子のほこりの中で。
かわいいブルー坊やはどうしたの，
唇をよせてそこにすわらせてくれたあのときから。

（*Little Boy Blue*　「かわいいブルー坊や」 *One Hundred and One Famous Poems*　より， p. 15）

私たちはいぶかり，待ち長らえる必要はない。救い主がこう言っておられる。「わたしはよみがえりであり，命である。わたしを信じる者は，たとい死んでも生きる。また，生きていて，わたしを信じる者は，いつまでも死なない。」（ヨハネ11：25，26）あなた方に，ジャック・メスビン，ナンシー・メスビンに，主は言っておられる。「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは，世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな，またおじけるな。」（ヨハネ14：27）そしてあなたがたの愛らしいクリスタルから，このような慰めの言葉が聞けるであろう。「あなたがたのために，場所を用意しに行くのだから。……わたしのおる場所にあなたがたもおらせるため……」と。（ヨハネ14：2，3）

二階席の愛らしい友人，あなたに，そして世界各地の信者たちに。私は，ナザレのイエスが幼な子らを愛し，幼な子の祈りを聞き，祈りに答えたもうことを証する。救い主は実にこう言われた。「幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である。」（マルコ10：14）

この言葉はユダヤの岸辺に集まった群衆たちに主が語られた言葉であった。

そしてまた責任を受けてルイジアナ州シュリブポートに行ったひとりの使徒に主が語られた言葉でもあったことを，私ははっきりと知っている。なぜなら，私がそれを聞いたからである。

私はこれらのことが真実であることを証する。イエス・キリストのみ名によって，アーメン。

世に与えるメッセージ

十二使徒評議員会会長

エズラ・タフト・ベンソン

心からへりくだり，感謝の心をもって，私は今日あなた方の前に立っている。私がこれから申し上げることを証する聖きみたまの力があるように願っている。

私たちの主，救い主イエス・キリストは，この時代に福音を回復し，主の教会，すなわち末日聖徒イエス・キリスト教会を設立された後，主の予言者ジョセフ・スミスを通じて次の啓示を下された。

「聴け，汝らわが教会の人々よ。いと高きところに住みて，すべての人を見まもる者の声は告ぐ。曰く，誠にわれ告ぐ，汝ら民よ，遥かなる所より耳を傾けよ。海の島々にある者よ，共に聴け。

誠に主の声はすべての人々に及ぶものなれば，一人ものがるる者なし。

而して，この末の世にわが選びたる弟子たちの口より，すべての人々に警めの声は及ばん。」（教義と聖約1：1，2，4）

今日私は警告としてまた証として教義をお話したいと思う。しかも聖なる使徒職を有するものとしてお話するつもりである。この職にある者の責任は，全世界ですべての民に向かって主のみ言葉を宣言することにある。十二使徒評議員会の兄弟たちも皆，私と同じように，全世界に向かってこれらのことを宣言し，すべての民にそれを証する責任を持っている。

主は，予言者ジョセフ・スミスが地上での務めを終えようとしている頃，彼に次のような戒めを与えられた。

「汝は今や，わが福音……に就きて厳かに宣言せん……この宣言は世の四隅に至るまで，あらゆる王に向い，……世のすべての国民に向いてなさるべし。」（教義と聖約124：2，3）ジョセフの務めは，万人を真理の光のもとへ招き入れ，彼らの才能を用いて，地上に神の王国を建設することであった。

この神から与えられた指示に従って1845年4月6日，すなわち，予言者ジョセフ・スミスと兄ハイラムが，真実の宗教の殉教者として世を去った先人と同じように大地をその血で染めた後に，十二使徒評議員会は次のような宣言を発表した。「世の諸々の王へ

アメリカ合衆国大統領閣下へ
諸州の知事各位へ
および諸々の国々の統治者ならびにその民へ」

その内容は次の通りである。

「神の王国は既に到来せり。いにしえの予言者らに予言されたる如く，世々祈りを求められたる如く到来せり。されば，この王国は全地をみたし，立ちて永遠に至るべし。

大いなるエロヒムは……再び喜びて，明らかなる示現により，また聖き御使らにより，諸天より語れり。また地上にある人と交わりを持ちたり。

かくの如き方法により，偉大にして永遠なる大神権，御子の神権による神権，すなわち使徒職は回復されたり。言い換うれば地上に戻されたり。

この大神権すなわち使徒職は，神の王国の鍵を握るものにして，また地上で結びしことを天にても結び，地上で解きしことを天にても解く権威を握るものなり。すなわち神の王国の儀式，組織統治，指示に関するすべての事を為し，執り行なうものなり。

この末の世に設立せらるるは，世の始めより予言者らによりて語られたるすべての事を回復せんためなり。

而して我らは証せん。主の来臨は今や近きにありと。今より後，多くの年を経ずして，国々の民もその王も，人の子が権威と大いなる栄光と

を持ちて天の雲のただ中より来臨さるるを見るべし。

この大いなる出来事のために，備えをなすは必要なり。

それ故に，我ら，いと高き所より得たる権能により，汝らに言葉を送り，戒めん。汝ら皆，聖き者の威勢の前に来たりて悔い改め，幼な児の如く自らを低くせよ。また，へりくだりたる心と悔いる精神とを持ちてイエス（キリスト）のもとに来たれ。また，罪の赦しを受けんため，イエスのみ名によりてバプテスマを受けよ。(これ，すなわち，主の埋葬にならいて水の中に沈み，主の復活にならいて新しき生命を得て再び起き上がることなり。) かくして汝ら，人に対する慈悲に満ちたるこの大いなる最後の神権時代にあたり，使徒及び長老らの按手によりて，聖きみたまの賜を受くべし。

このみたまは，我らの証が真実なりと，汝らに証を為すなり。また汝らの心に光を与うるものにして，汝らの中に在りて，予言と啓示のみたまとして働くものなり。また汝らの理解と記憶の及ばぬものをもたらすものにして，更に来たるべき事柄を汝らに示すものなり。

聖き使徒職及び神権の権威と権能とによりて儀式を施されて得たるこのみたまの光により，汝ら理解の力を賜り，光の子となり，而して，地上に来たるべきあらゆる事から逃るるための備えをなし，はたまた人の子の御前に立つための備えをなすなり。

我らは証せん。かく述べたる教義は，イエス・キリストの完全なる教義すなわち福音にして，唯一の真実にして永遠の変わることなき福音なりと。また，人が救われんために地上に啓示されたる唯一の御計画なりと。」(*Message of the First Presidency*「大管長会メッセージ」1：252—254)

私は，この宣言文の中で言われている偉大な真理を再確認し，新たに世に対して宣言することが，まことに時宜にかなったことであると考えている。

すべての国々の統治者と民に対し，私たちは厳かに，天の神が予言の成就としてこの地上に末日の王国を設立されたことを再度宣言する。聖なる天使たちは，この世の人々と再び親しく交わりたもう。神は再び天から御自身を現わされ，また神の子らの昇栄に必要なすべての聖なる儀式を執り行なう権威を持つ聖なる神権を，地上に回復された。主の教会は，いにしえに享受されたと同様の霊的な賜をすべて有して，現在人々の中に再度確立されている。これはすべて，キリストの再臨に備えるためである。主の大いなる恐るべき日は間近に迫っている。この大いなる出来事に備えるために，また差し迫った裁きから逃れる方法を教えるために，霊感を受けた使いたちは，この証と警告とを携えて地上の国々を巡って来たし，現在も巡っているのである。

地上の国々は，いまだに罪深い，不義の道を歩み続けている。人はこれまで与えられてきた際限のない知識を，主の意図されたように人の子らを祝福するためではなく，人類を破滅に陥れるために使ってきた。2度にわたる世界大戦といい，恒久平和を標ぼうしながら達せられない空しい努力といい，これは皆，民が邪悪なために地上から平和が取り去られたことを証明するものである。国々は罪のうちに生き延びることはできず，崩壊を招くだけであろう。しかし神の王国は永遠に存続する。

それ故，私たちは，主の謙遜な僕として，国々の指導者たちに向かい，神のみ前にへりくだるよう，また神の霊感と導きを求めるよう勧める。また，統治者と民に対しても，その邪悪な行ないを悔い改めるよう勧めるものである。主に心を向け，主の赦しを求め，へりくだって主の王国のもとに結束していただきたい。他に道はない。もしこのように行なうならば，あなた方の罪は消され，平安がもたらされ，そしてそれが持続するであろう。またキリストの再臨に備えて，神の王国の一員となるであろう。だが，もし悔い改めることを拒み，神の霊感の下に語る使いたちの証を受け入れず，神の王国のもとに結束しなければ，邪悪な人々に約束されたあの恐るべき裁きと災難があなた方に下ることだろう。

慈悲深い主は，逃れる道を備えられた。警告の声は，僕たちの口により，すべての人々に伝えられている。この声が聞き入れられないときには，殺りくの天使たちがいよいよその数を増して出て行き，全能の神の懲らしめがそうした国々に下り，定められた通り完全な終局が訪れるであろう。へりくだり悔い改めて主に立ち返るのでなければ，あなた方は戦争や荒廃など，言い尽くせないほどの苦悩を味わうことであろう。統治者とその民が悔い改めて，その邪悪で不敬な道を歩むことを止めない限り，先の大戦で味わった以上の恐ろしく，また際限のない破壊が必ず訪れる。神はあなどられるような御方ではないからである。神は，性的な不道徳の罪や秘密殺人結社や胎児の殺害などを決して赦されない。また，神の神聖な戒めや，僕のメッセージを無視する者も同様である。このような邪悪に対しては，必ず大きな罰が下されるであろう。世の国々は罪のうちに生き延びることはできない。逃れる道は明らかである。神の不変の律法が，高き天には厳として存在している。人や国々がこの律法に従うことを拒むとき，必ず罰が下される。

必ず滅びてしまうであろう。罪は必ず罰を要求するからである。

警告の声が広く宣べ伝えられるとき，それは必ず証を伴う。1845年に主イエス・キリストの使徒たちによって発表された偉大な宣言文の中にも，同じように証が述べられている。現在の使徒である私たちも，その宣言文を私たちの証として新たに述べるものである。

「かくて，我らは我らの生死にかかわりなく，奴隷と自由の身とにかかわりなく，宣言す，大いなる神はこの時代にあって語れりと。……そして私たちもそれを知っている。

神は我らに聖なる神権と使徒職と神の王国の鍵とを授け，いにしえの聖き予言者らに約束されたる如くあらゆるものを回復せり。──そして私たちもそれを知っている。

神はアメリカの先住民族の記録とその起源につきて啓示し，またその民族の行く末につきても啓示せり。──そして私たちもそれを知っている。

神は完全なる福音を，その賜，祝福，儀式と共に啓示せり。──そして私たちもそれを知っている。

神は我らに，まず異邦人より始めて次にイスラエルの残りの者とユダヤ人とにその証を述べよと命じたり。──そして私たちもそれを知っている。

神はまた言えり。もし彼ら悔い改めずして，真理の知識のもとに来たらず……殺人，虚言，高慢，祭司の偽善売教，売春，隠れたる憎むべき行為などをやめずば，その時彼らは，程なくして地より滅ぼされ，地獄へ投げ落とされん。──そして私たちもそれを知っている。

神は言えり。……完全なる福音が証としてあらゆる国々に宣べ伝えらるるとき，そのとき主は降臨し，主と共にすべての聖徒らは1千年の間この地を統治せんと。──そして私たちもそれを知っている。

神は言えり。これらの警告が下され，主の再臨のために民の備えが整うまで，主が栄光のうちに降臨したもうことも，邪悪な者共を滅ぼすこともなからんと。──そして私たちもそれを知っている。

天地は過ぎ行くとも，主の啓示されたる御言葉は，一点一画といえども成就せざることなかるべし。

それゆえ，重ねて我らすべての民に向かいて言わん。悔い改めよ。罪の赦しを受くるためにイエス・キリストのみ名によりてバプテスマを受けよ。されば汝ら聖霊を受け，真理を知り，イスラエルの家と共に数えらるべし。」（「大管長会メッセージ」1：263—264）

今日私がなすべきことはあとひとつしか残っていない。それは私自身の証を述べることである。

私は神が生きておられることを，また神が個性を持った御方であり，私たちの霊の父であられることを，さらに神がその子らを愛し，義しい祈りを聞き，答えられることを知っている。私は，神の子らが幸福になることこそ神のみこころであることを承知している。神は私たちすべてを祝福するよう望んでおられる。私は，イエス・キリストが神の御子であり，私たちの長兄であり，この世の創造主であり贖い主であることを知っている。私は，神がこの地上に再び王国を設立し，予言を成就されたことを，またその業が決して敗れることなく，最終的に地上であらゆる統治権を掌握し，イエス・キリストが王として永遠に統治されることを知っている。

私は，神が寛大にも再び天から御自身を現わされたことを，また，ジョセフ・スミスがその王国，すなわち末日聖徒イエス・キリスト教会を再び設立するために神より召されたことを知っている。私は，ジョセフ・スミスがこの業を成し遂げたこと，また基礎を築いたこと，そして偉大な末日の業を続けるためにその鍵と権能を教会に委ねたことを証する。この業は全能の神の指示のもとにジョセフが始めたものである。

私は，ジョセフ・スミスが，真理のために殉教はしたものの，いまだに生きていて，あらゆる福音の神権時代の中で最も偉大なこの神権時代の頭として永遠にその位にあることを知っている。ジョセフは神の予言者であり，聖見者，啓示を受ける者である。彼の後継者も同様である。私は，今日なお，主が霊感によってこの教会を導いておられることを知っている。その力を感じてきた。私は，大管長会やその他の教会幹部が，神の栄光とその子らの昇栄にのみ目標をおいていることを知っている。そして最後に，私は，このみ業を受け入れない者はだれでも，神の日の光栄の王国に救われることはないし，またすべての人に下る最後の審判の法廷でその裁きから逃れることができないことを知っている。

心からへりくだり，祈りの心をもってこの証を残したいと思う。私は自分がやがて造り主にまみえ，あらゆる人と共に神の裁きの法廷に立たなければならないことを充分承知している。私は，この偉大な末日の業が神のみ業であるという証をいただいていることを，世の中のあらゆるものにまして感謝している。また世界各地にいるすべての人々に対し，この証に耳を傾けるよう，イエス・キリストのみ名により勧めるものである。アーメン。

アメリカの将来

大管長会第二副管長

マリオン・G・ロムニー

愛する兄弟姉妹。私の話の間に私たちが共にみたまを受けることができるよう，一緒に祈っていただきたいと思う。私はきょう，主が私たちに伝えるようと苦心されたひとつの教えについてお話したい。

この国（アメリカ合衆国）建国200年に関連してよく聞かれるのは，「基本的な自由と平和と繁栄を，もう200年維持できるだろうか」という話である。

その答えは，「できる」である。私たちがそれぞれ悔い改め，この地の神であるイエス・キリストの律法に従うならば可能である。

主は律法の基本を，十戒と，山上の垂訓と，さらにはふたつの大切な戒めの中で述べておられる。

「心をつくし，精神をつくし，思いをつくして，主なるあなたの神を愛せよ。

……自分を愛するようにあなたの隣りの人を愛せよ。」（マタイ22：37，39）

2，000年以上も昔に，主は宣言された。「この土地は主がつれて来たもう者が所有するために神聖にされている。もしもこの人々が，主の与えたもう命令に従って主に仕えるならば，この土地は彼らにとって自由の国となり従ってここに住む者は決して自由を奪われることはないだろう。」（IIニーファイ1：7）

またもうひとりの古代の予言者はこう語った。

「この土地はすぐれた土地であるからこの土地を所有する民はこの地の神に事（つか）えさえすれば，奴隷とならず自由を奪われず天下のどのような国からもすべて支配を受けることがない。この地の神とは私たちがすでに記した言葉によって明らかに示されるイエス・キリストである。」（イテル2：12）

古代アメリカの住民の記録から，前述の言葉が成就されていることを指摘するのが，私の話の目的である。

ニューヨーク州の西部，パルマイラの近くに，「クモラの丘」（モルモン6：6）として知られる有名な丘がある。今年の7月25日に，私はその丘の頂上に立って，目の前いっぱいに繰り広げられる息を飲むようなパノラマを，畏敬の念に打たれながら見守っていたが，そのとき私は，その近辺で25世紀も昔に起きた出来事，すなわち偉大なジェレド人の国家の終焉を告げる出来事に遠く思いをはせた。

モルモン経を読んでおられる皆さんは，シズの率いる軍とコリアントメルの率いる軍の間で繰り広げられた，兄弟同士相争う戦いで，コリアントメル側は200万人近くを失い，200万人の男ばかりでなく「その妻子もまた一しょに」死んだ（イテル15：2）ことを思い出されるであろう。

戦いが激しくなってくると，生き残りの人たちが「ことごとくみなその妻子を伴って」（イテル15：15），クモラの丘の周辺に集まった。（イテル15：11参照）

「コリアントメルの方を善いと思う者はコリアントメルの軍へ集り，シズの方が善いと思う者はシズの軍へ集まった。

……ここに於いて男も女も子供もみな武器を持ち，楯と胸当とかぶととを身に着け，完全な武装を整え相対して出陣した。そして一日中互いに戦ったが勝敗はなかった。

その夜になると彼らは疲れて各々その陣に帰り，その味方の死者を非常に悲しみ歎き……。」（イテル15：13，15，16）

この戦いは何日にもわたって繰り返され，やがて「コリアントメルとシズとの二人を除いてそのほかの者はみな剣にかかって命を落とし」，シ

ズ自身も「多く血を失ったから気絶してしまっていた。」

「そこでコリアントメルはその剣によりかかってしばらく休んでからシズの首を打ち落した。この時シズはその首を打ち落されながらも一度は手をついて身をもたげたがまた倒れて，息をつこうと身をもがきながら最后を遂げた。

コリアントメルもまた地に倒れてまるで死んだ者のようであった。」（イテル15：29—32）

こうして，かつての強国，主が「全世界の中，汝らの子孫をもてわがために起す国民に勝る国民はなかるべし」（イテル1：43）と言われたジェレド人国家の末裔は，クモラのふもとで滅びたのである。

クモラの丘に立ってその悲劇的な場面を思い，現在の美しい回復の地を眺めながら，私は心に，「なぜそのようなことが……」と叫んでいた。

その滅亡から15世紀ないし20世紀前に，彼らの先祖の一団がバベルの塔から神に導かれてやってきたときのことを思い出すと，その答えはすぐにわかった。そのとき主は「約束の地とはほかのどのような地よりもすぐれてよい土地であって，神が義しい民に与えようとして備えておきたもう所である。それであるから，この約束の地が備えられた後いつであってもこの土地を所有する者たちは，ただ一つの真の神に事えなければ主の烈しい怒りがかれらに下ってかれらは亡ぼし去られると言うことを，主は断固としてジェレドの兄弟に誓いたもうた。

これで約束の地について神が定めたもうたことが明らかに知れる。すなわち，この地は約束の地であるから，およそこの地を所有する民は神に事えなくてはならぬ。もし事えなければ，神の烈しい怒りを受ける時になって亡ぼし去られる。神の烈しい怒りを受けて亡びる時はすなわち民の罪悪が極点に達する時である。

この地はすべてのほかの地よりも勝っている地であるから，この地を所有する者が神に事えない時に亡びてしまうことは神がとこしえに定めたもうたところである。」（イテル2：7—10）

この言葉の通り，ジェレド人は，今述べたようにしてアメリカの地で滅び去った。それは，彼らがこの地の神であるイエス・キリストの律法に逆らい，「罪悪が熟した」からである。

昔，神に導かれてこのすぐれた土地へやってきて，正義の内に発展を遂げ，強力な国家となり，その後悪に走って，堕落し，罪悪が熟し，神の言葉通りに滅ぼされた国民は，ジェレド人だけではない。

「神に導かれて」と，私は特に強調したい。それは先に指摘したように，民はそのように導かれると主が言っておられるからである。「主の御手によって導かれなければ何人もこの土地には来れない。

それであるから，この土地は主のつれてきたもう者が所有するために神聖にされている。もしもこの人々が，主の与えたもう命令に従って主に仕えるならば，この土地は彼らにとって自由の国となり，従ってここに住む者は決して自由を奪われることがないであろう。もしも自由が奪われるならば，それはかれらの罪悪によるのであって，罪悪がはこびる時地は悪人のためにのろわれるが，義しい者たちにとってはいつまでも祝福されるからである。（IIニーファイ1：6，7）

ここで述べる第2の文明国，ニーファイ人国家は，紀元前600年から紀元400年にかけてアメリカで栄えた国である。この文明も，ジェレド人国家と同じ理由によって，同じ場所で，同じようにして滅びた。その死闘の記録から引用しよう。

歴史家であったモルモンはこう記している。「さて私が，わが民であるニーファイ人が滅亡した記事を書いて結びとする。私たちはついにレーマン人の前をのがれた。……私たちはクモラの地へ進んで……民の残りの者を私たちは全部クモラの地へ集めた。……私の民と妻子とはレーマン人の軍が進んで来るのを見た時，すべての悪人の胸に満ちている非常に死を怖れる心を抱いてレーマン人と戦いを始める時を待った。

レーマン人は剣，弓，矢，まさかりおよびあらゆる武器を以て私たちを襲ったので，私と一しょに居た一万人の部下はうち倒され，私もまた負傷して兵の間に倒れたが，敵は私を殺さずにそこを通り過ぎた。

レーマン人は私の軍の中を通り過ぎて，私を入れて二十四人（この中に息子のモロナイも居た）を除くほか，私の民をことごとく殺した。そこで私たち二十四人は生きのこり，その翌日……クモラの丘から見わたすと，〔23万人〕の兵の殺された所も……見えた。

……私の民はただ私も一しょに居た二十四人と南の国々へ逃げた数人と，味方を去ってレーマン人に加わった数人とを除いて一人のこらず殺され……

私は死んだ私の民のことを悲しみ悼んで全身が引き裂れる思いがし，次のように叫んだ。

『美しい者たちよ。おまえたちはなぜ主の道を離れたのか。……お前たちはなぜお前たちを抱えようとして両手をひろげたもうたイエスを拒んだのか。

見よ，お前たちはこれさえしなかったならば死ななかったものを。……

美しい息子よ，娘よ，父母よ，夫

婦よ，美しい者共よ。どうしてこのように死んでしまったのか。

ああ，この大きな滅亡がお前たちに来ない内にお前たちは悔い改めたらよかったものを。』(モルモン6：14，5，7，9—12，15—19，22)

それから少しして，モロナイはこう書いた。

「見よ，私モロナイは父モルモンの記録を書きついで結びとする。……

そもそもクモラの大激戦の後，すでに南の国々に逃げていたニーファイ人はレーマン人に狩り立てられてとうとう一人のこらず殺された。

私の父もまたレーマン人に殺されて，私一人だけ生き残ったから私の民の悲しい全滅の記事を書かなくてはならない。」(モルモン8：1—3)

ジェレド文明とニーファイ文明の悲劇の結末は，主が次のように言われたことの証明である。「この地は約束の地であるから，およそこの地を所有する民は神に事えなくてはならぬ。もし事えなければ，神の烈しい怒りを受ける時になって亡ぼし去られる。神の烈しい怒りを受けて亡びる時はすなわち民の罪悪が極点に達する時である。」(イテル2：9)

モロナイが書いたこの言葉は，現在この土地を所有している私たちに向けた言葉である。「さて異邦人よ」(ここでいう異邦人とは，モルモン経の予言者たちが，現在のアメリカの住民と故郷の旧世界の民をさして使った言葉である)「さて異邦人よ，私は神が定めたもうことをあなたたちが知るように，またあなたたちに悔い改めをさせ，あなたたちが，罪の極まるまでに罪悪をつづけないように，またあなたたちに今までこの土地に住む民が自分の上に神の烈しい怒りを招いたようなことをさせないためにこの歴史をあなたたちに伝える。

ごらん，この土地はすぐれた土地であるからこの土地を所有する民はこの地の神に事えさえすれば，奴隷とならず自由を奪われず天下のどのような国からもすべて支配を受けることはない。この地の神とは私たちがすでに記した言葉によって明らかに示されるイエス・キリストである。」(イテル2：11，12)

「主の御手によって導かれなければ何人もこの土地には来れない」(IIニーファイ1：6)という主の言葉の通り，1492年に，コロンブスは神に導かれてアメリカへ来た。

時をさかのぼる紀元前590年から600年の間に，ニーファイは時の流れを越えて未来の示現を見，「眺めると，私の兄弟たちの子孫と大海をへだてている異邦人の中（つまりヨーロッパの国々の中）に一人の男が見えた。すると神の『みたま』が降りたもうてこの男に霊感を与えたもうたから，この男は大海を渡って約束の地……へ行った。

私はそれからまた神の『みたま』がほかの異邦人にも働きたまい，この人たちが……大海を渡って行くのが見えた。私にはまた約束の地に多くの異邦人がいるのが見え……。」(Iニーファイ13：12—14)

コロンブス自身が，自分は神に導かれてこの地（アメリカ大陸）へ来たとはっきり語っている。

「イザベラ女王の御前でアービング（宮廷歴史家）はこう述べている。『コロンブスは雄弁に力強く自分の計画を披露した。彼は自ら後に語ったように，天からの力で心に火をともされ，自分をこの壮大な計画をなすべく天から選ばれた使者だと考えた。……

コロンブスの息子フェルナンドは父の伝記の中で，あるときこう言ったと父の言葉を残している。『神は私に信仰と，その後勇気を与えたもうたから，私はいさんで旅立とうと思った。』

『この計画について私に霊感を与え，後には，海を西に向って行けば，スペインからインドへ航海できるとはっきり教えたもうた聖なる神のみ名によって』と，コロンブスの志も記録されている。」(ニーファイ・ローウェル・モリス*Prophecies of Joseph Smith and Their Fulfillment*「ジョセフ・スミスの予言とその成就」1945年 pp. 289，294，295)

コロンブスが導きを得たことから，私たちは現在このすぐれた土地にいるのである。

神は独立戦争で勝利を与えて下さった。この国の独立は神のおかげである。神はこれまでに義にかなったあらゆる業において，私たちを栄えさせて下さった。また，「この目的のためにわが挙げたる賢き人々の手によりて」(教義と聖約101：80) 合衆国憲法を制定したと，主は語っておられる。

神が御自ら愛する御子と共に予言者ジョセフ・スミスに現われイエス・キリストの福音の新しい神権時代を開かれたのは，この地である。神はこの地に神の教会を設立し，この地の隅々と可能な限り全世界に使いを送ってこの地の神であるイエス・キリストの律法を宣べ，教えている。

主はこの地について古代の宣言を新たに啓示し，何度も繰り返してこられた。「この地はすべてのほかの地よりも勝っている地であるから，この地を所有する者が神に事えない時に亡びてしまうことは神がとこしえに定めたもうたところである。」(イテル2：10)

このことが私たちに啓示されているのは，「神が定めたもうたことをあなたたちが知るように，またあなたたちに悔改めをさせ，あなたたちが罪の極るまで罪悪をつずけないように，あなたたちに今までこの土地に

住む民が自分の上に神の烈しい怒りを招いたようなことをさせないために」（イテル2：11）である。

私たちは時満ちたる神権時代にいる。この時代は主イエス・キリストの再臨で絶頂をきわめる時代である。主の再臨が近づいていることと，折々に地上の民に用意されていることに関して，主は144年の昔こう言われた。

「神の怒り限りなく悪しき人々の上に注がるる日……

この故に，主の声は耳ありて聞かんとするすべての人々に聞かれんため地の果までに及ぶ。

されば汝ら備えをなせ，そは主の来るは近ければなり。

而して主の怒りは燃え，主の剣は天にてうるおいたれば，今やこの世に住む人々の頭に下されん。

……地より平和の取り去られ，悪魔自らの領土を支配する時はなおいまだしともいえども今や近きにあり。

されど主もまたその聖徒らを支配し，その真中にありてこれを統治せん。……この世に下る審判のために天より下り来らん。」（教義と聖約1：9，11—13，35，36）

世界各地の教会員，非教会員を問わず，私の愛する兄弟姉妹。私は皆さんに自分の証を申し上げたい。私はきょうここでお話した事柄が過去の出来事も将来の出来事も，真実であることを知っている。私たちの目の前にあるものは明瞭，明確である。選択は私たちにかかっている。問題はただひとつ，この神権時代に属する私たちが悔い改めてこの地の神であるイエス・キリストの律法に従うか，あるいは罪悪の極みに達するまで律法を拒み続けるか，いずれかである。

私たちは悔い改めて律法に従い，それによって，この地の義しい人々に約束されている祝福を受けることができるように，贖い主イエス・キリストのみ名によってへりくだり祈る次第である。アーメン。

邪悪に対抗する

十二使徒評議員会会員

ゴードン・B・ヒンクレー

この壇上から語ることは，この上ない大きな責任である。従って，私は聖きみたまの導きがいただけるよう願っている。

最近，ひとりの青年が私を訪ねて来た。彼は顔立ちもよく，優秀そうな学生であり，また品もあった。だが，ひどく思い悩んでいる様子であった。彼は長い間，道徳的にはずれたことを行って来たが，ようよくそれに対して大きな疑問を抱くようになってきた，と言った。

「どうして，そんなに考え方が変ったのですか」と私は尋ねた。

彼は小指にはめた指輪を示した。重厚な金の台座の上に美しいダイヤモンドがはめてあった。彼はそれを誇らしげに見せ「これは以前祖父がはめていたものです」と彼は説明してくれた。祖父はそれを長男である父に贈ったんです。そして僕の父も長男である僕に贈ってくれたわけです。ところがある晩，僕が，例の仲間と一緒にいたときのことです。彼は僕の指輪の由来を知っていて，こう尋ねたんです。『君はその指輪を誰にあげるつもりだい。僕は君で最後だと思うな。』」

「私はそう言われて心中穏やかではありませんでした。」彼は話を続けた。「それまでそんなことを考えたこともありませんでした。『私はいったいどこに行こうとしているのだろうか。』自分に問いかけてみました。『私は光もなければ，希望もなく未来もない，そんな袋小路を歩いているんだ。』突然，自分には助けが必要なことがわかったんです。」

私たちは，現在の彼を築き上げた様々な影響について話し合った。彼の育った家庭のことを，仲間との交際のこと，彼の読んだ本や雑誌のこと，あるいは最近見た映画のことなど色々話し合った。彼は，数多くの仲間も同じような境遇にいるか，もっと悪い境遇にいる，と話してくれた。

その晩，私は執務室から家へ歩いて帰るとき，その青年の悲痛な姿が頭に浮かんで離れなかった。彼はやっと自分の立場を認識したのだった。もし彼が現在と同じような生活を続けていたら，決して自分の息子を持つこともなく，また彼の祖父から受け継いだ指輪を渡すこともできないであろう。青年は自分の将来に寒々としたものを感じ，ようやく助けを乞い願うようになったのだった。

夕食後，私は朝刊を広げてみた。朝出かけるとき，読んでおかなかったからである。さっと目を通している途中，映画の広告に目が止まった。大部分は，退廃的で暴力と性欲を刺激するような文句があからさまに書きたてられているのであった。

それから私は，私あての郵便物に目をやると，小雑誌が1冊あった。翌週のテレビ番組を一覧表にしたものである。この雑誌も同じような種類の番組で埋められていた。ニュース雑誌が1冊，私の机の上に置いてあった。この号では，犯罪率の増加に関する特集記事で埋められていた。そのグラフによれば，1963年から1973年の間に，人口はたった11パーセントしか増加していないのに，暴力犯罪は，何と驚くなかれ，174パーセントも増加しているとのことであった。さらに，その雑誌の記事によれば，警察力の増強と刑務所の拡張のために，数十億ドルの予算が追加されたとのことである。

ポルノ洪水といい，性や暴力を異常なほど助長する風潮といい，これはなにもこの合衆国だけに限ったことではない。ヨーロッパでも，他の数多くの地域でも，状況は同じである。最近のニュースによれば，デンマークのある映画会社が，神の御子の生涯を描く，卑わいで扇情的で不

敬な映画を製作予定だそうである。こうした世界の憂うべき潮流は腐敗が社会のすみずみまでに浸透している証拠である。

わが国の立法府や法廷も，この波に洗い流されようとしている。道徳から逸脱した行為を処罰する法律も，新しい法令や法廷の判例で覆されつつある。これは皆，言論の自由，出版の自由，そしていわゆる私事の選択の自由いう名のもとで行われているということである。だが，このいわゆる自由の結果，人は堕落した習慣と行為の奴隷となり，やがて破滅への道をたどることになる。その過程を，ある予言者はかつて次のような的確な言葉で表現している。「このように悪魔は，この人々をだまし，心を配って地獄へつれて行くのである。」(IIニーファイ28：11)

一方私は，この合衆国にも他の国々にも，何百万何千万という善良な人々がいることに，大いに満足している。大体のところ夫は妻に対して誠実であり，妻も夫に対して忠実である。子供たちも，穏健に，勤勉に，また神を信ずる信仰の中で育てられている。こうしたことから力を得て，私は状況を決して絶望的ではないと信ずるものである。また私は，みだらな行為と暴力が大手を振ってまかり通るのを黙って許したり，絶望的な気持になったりする必要がないことに満足を覚えている。その波は高く，勢いは強い。しかし，これまで述べたような力を十分蓄えて現在効果的に働いている少数の人々の力に，自分の力を加えるならば，必ず押し戻すことができるのである。私は，この邪悪に対抗するというチャレンジは，末日聖徒イエス・キリスト教会の会員なら，市民として決して避けることのできないチャレンジであると信じている。しかも，その戦いを始めなければならないとすればその時は今である。この精神にのっとり，私は，戦闘開始に際して留意すべき4つの点について提案したいと思う。

まず第一は，自分から始めよ，ということである。世界の改革は自己の改革から始まる。私たちの信仰の根本的な信条は，「われらは，正直，真実，貞潔，慈善，高徳なるべきこと……を信ず」(信仰箇条第13条) ということである。他の人々に高徳な影響を及ぼしたいと望むからには，まず私たち自身が高徳な生活をおくっていなければならない。私たちの生活の模範は，言葉を尽くして説く以上に大きな影響を及ぼすものである。私たちは他の人々を引き上げたいと望むなら，私たち自身一段高い所に立っていなければならないのである。

自分を尊敬することから，人の美徳は始まる。自分が神の子であって，天父の姿に形どって造られていること，また偉大な，神のような諸徳を発揮できるような大きな可能性が授けられていることを知っている人は，広く世にはびこっている汚ない，みだらな勢力に対抗するために，必ず自分を鍛えることであろう。アルマは息子ヒラマンに次のように言った。「神の命に従って生きよ。」(アルマ37：47)

主は山上で群集に向って語られたとき，次のように素晴しい言葉を述べられたが，これは単なる思いつきで言われた言葉ではない。「心の清い人たちは，さいわいである，彼らは神を見るであろう。」(マタイ5：8)

ある賢者も言った。「まず自分から正直な人間になりなさい。そうすれば世界からうそつきがひとり減る。」

シェイクスピアは，登場人物のひとりの口を借りて，次のような説得力のある訓戒を与えている。「おのれに誠実になれ。さすればかならず，夜が昼につぐごとくにじゃな，他人に対しても誠実にならざるを得ん。」(「ハムレット」第1幕，第3場，三神勲訳)

私は，この話を聞いているすべての人に対し，チャレンジを与えたいと思う。不浄なものを避け，心の思いを高めていただきたい。また，諸徳の模範になるように自分の行動を抑制し，言葉使いに注意して，ただ精神を高めて成長の助けになるようなことだけを語っていただきたい。

では，次に第2の点に移ろう。よりよい明日は，よりよい世代の育成から始まる。ということである。つまり両親は子供たちを育てるにあたって，もっと効果的に働くという責任がある，ということである。家庭は，高徳を育むゆりかごであり，性格が築かれ，習慣が培われる場所である。家庭の夕べは，主の道を教える良い機会である。

あなた方は，子供たちが色々読書をすることを知っているだろう。子供たちは本を読み，雑誌を読み，新聞を読む。子供たちの心の中に，最善のものを求める性質を育てていただきたい。子供たちがまだ小さいうちに，有益な物語をたくさん読んであげていただきたい。そのような話は，その内容の高徳さのゆえに，決して子供たちの心から消えることはないだろう。子供たちを良い本に親しませていただきたい。家のどこかの片すみに，小さくとも特別なコーナーを設けて，そこに偉大な精神を培うように意図された本を最低2，3冊はそろえておいていただきたい。

また，家の中には，教会などで出版された良い雑誌を置き，それを読むことにより思いが高められ，気高い精神の持ち主になれるよう配慮していただきたい。適当な家庭向けの

新聞を用意して，広く世間を見られるような汚らわしい宣伝や記事にさらされることなく，子供たちが世界の出来事を読めるようにしていただきたい。町に何か良い公演があるときには，家族そろって劇場へ出かけるようにしていただきたい。あなた方がそのような興業を後援するならば，その種の催し物を企画している人々には，この上ない激励になることだろう。情報機器やテレビをよく利用して，生活を豊かなものにしていただきたい。その中には良いものがたくさんある。だがそれでも選択する必要がある。キンボール大管長は，昨日，テレビ各局が夕方の主要時間帯に適当な家族向け娯楽番組を放送する努力をしている，と話された。このような努力を払っている人々には，良いものに対しては感謝の気持を，悪いものに対しては不満な気持を抱いていることを知ってもらうとよい。大体において，私たちは求めるものを得ている。問題は，私たちの大部分が求めようとしないことであり，さらに言えば，良いものに対して感謝の気持を表わさないことにある。

家庭に音楽を取り入れていただきたい。あなた方には，とても音楽的とは言えない曲のレコードをたくさん持っている十代の子供たちがいるかもしれない。その子供たちに折りに触れて，もっと良いものを聞かせてあげていただきたい。その影響下においていただきたい。音楽が自ら語りかけてくれるであろう。あなた方が考える以上に，子供たちは深く鑑賞しているものである。言葉では表現できないかもしれないが，心で感じられるものである。そして，その影響は年が経つにつれ，段々と表面に表われてくるであろう。

では次に第3の点である。世論の確立は少数の熱心な声から始まる。立法府の人々の面前で，けんか腰に大声をはり上げたり，こぶしを振り上げたり，脅迫したりしなさいということではない。私は，立法や行政の分野で重責を担う人々に対して，私たちの確信を熱心に，誠実に，かつ積極的に表明する必要があると信じている。残念なことに，少数ではあるが，さらに大きな自由を求めて所かまわずポルノを売りまくり，みだらな表現に一層拍車をかけている人々がいる。彼らが声を大にして叫ぶため，立法に携わる人々は，彼らの言うことが大多数の人々の意思を代表しているものだと信ずるようになるのである。

私たちは自分たちが全く後押ししていないものまで獲得しているようである。

私たちの声に耳を傾けてもらおうではないか。だが金切り声をあげようなどと思ってはいない。むしろ，確信をもって語り，それによって話す相手に，私たちの気持の強さと私たちの誠実な努力とを知ってもらいたいと思っている。心の思いを手紙にしたため，切手を貼って投函しただけで思いもかけない結果が生まれることがある。思いがけない結果は，重責を担っている人々との静かな対話から生まれるものである。

主はこの民に対して次のように言われた。「この故に善を為すにうむことなかれ。これ汝ら今偉大なる一事業の基礎を置きつつあればなり。それ，小なることより偉大なること起る。

見よ。主は真心と喜びて事に従う精神とを求む。」（教義と聖約64：33，34）

この「真心と喜びて事に従う精神」こそ，物事の本質である。規則や法令や法律を制定する人々に，それが地方であろうと中央であろうと，話しかけていただきたい。学校を管理する責任ある地位に就いている人々に話しかけていただきたい。無論，玄関払いをくわせる人もいるであろうし，あざけり笑う人もいるであろう。落胆するかもしれない。だが，それは今始ったことではない。エドモンド・バークは，1783年に下院で演説した際，大衆受けのしない主義主張を唱道する人々について，次のように言明した。

「彼は，自分の行く道にどんなわなが仕掛けてあるかよく知っている。…彼は自分のかかげた目的ゆえに，中傷され，ののしられる。彼はやがて，真の栄光を築き上げるためには悪評が不可欠な要素であることを心に留めるようになる。また，中傷と悪口が勝利には絶対に欠かせないものであることがわかる。」（ジョン・F・ケネディ「勇気ある人々」序文より引用）

使徒パウロは，アグリッパ王の面前で弁明する機会を与えられたとき，ダマスコへ行く途中におけるあの奇跡的な自分の改宗について話をした。主のみ声で次のように戒めを与えられたと宣言したのである。「さあ，起きあがって，自分の足で立ちなさい。」（使徒26：16）

私は，主が私たちに対して，次のように言われるのではないかと思っている。「さあ，起きあがって，自分の足で立ちなさい。そして真理のため，善のため，品性と美徳のために声を発しなさい。」

最後に，第4の点である。戦いのための力は神の力により頼むことから始まる。神こそ，あらゆる真理の力の源である。パウロはエペソ人に次のように書き送った。

「最後に言う。主にあって，その偉大な力によって，強くなりなさい。悪魔の策略に対抗して立ちうるために，神の武具で身を固めなさい。

わたしたちの戦いは，血肉に対す

るものではなく，もろもろの支配と，権威と，やみの世の主権者，また天上にいる悪の霊に対する戦いである。

それだから，悪しき日にあって，よく抵抗し，完全に戦い抜いて，堅く立ちうるために，神の武具を身につけなさい。」(エペソ6：10—13)

兄弟姉妹の皆様。邪悪の波が押し寄せている。紛れもなく洪水が起っている。私たちの大部分は，比較的平穏無事な生活をおくっているため，この洪水がどれほど広範囲に及んでいるかあまり認識していない。何億というお金が，ポルノを作り出す人々によりみだらなものを売り歩く人々により，また下品なもの，堕落したもの，性や暴力に関わるものなどの取り引きをしている人々に吸い上げられている。神が私たちに，強さと知恵と信仰と勇気を与えて下さるように。そして，市民として，これら諸悪に対抗して立ち上り，美徳を擁護する私たちの声に耳を傾けてもらおうではないか。これら諸徳が保たれていた昔は，人も国家も強大であった。だが，一方顧みられなくなったとき，人も国家も腐敗していったのである。

神は生きておられる。神は私たちの力であり，助け主である。私たちが努力を重ねるとき，善良な人々が大勢私たちの群れに加わることであろう。私たちはそれを心からへりくだって祈り，私の証する御方，すなわち主イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

民を備えさせる

十二使徒評議員会会員

デルバート・L・ステイプレー

愛する兄弟姉妹ならびにラジオ，テレビに耳を傾ける友人の皆さん。救いの主の降誕に先立って，来臨を告げる数多くの予言があった。古代の予言者たちは，世の人々がキリストを彼らの救い主，主，神として認めることができるように，主の降誕に先立つ出来事を知らせ，地上での使命を告げた。イスラエルの家にはキリストの地上の生活に関する数多くの予言の記録があったが，永遠の御父はそれでも特別の使者バプテスマのヨハネを送って，「民を主に備え」させた。(ルカ1：17)

キリストの降誕と生涯とそのみ業について古代の予言者たちの予言は成就された。そして，それらの予言を真心から信じる人々は，キリストを受け入れ，従う備えができていたこうした事実を見ても，キリストの再臨について予言されていることもきっと成就するはずである。

キリストの地上の使命が終り近くになったとき，弟子たちは世の終りについての教えに関心を持ち，ひそかにキリストに尋ねた。「『どうぞお話しください。いつ，そんなことが起るのでしょうか。あなたがまたおいでになる時や，世の終りには，どんな前兆がありますか』。

そこでイエスは答えて言われた，『人に惑わされないように気をつけなさい。』」(マタイ24：3，4)

そのとき救い主は再臨に先立って起こる出来事やしるしを弟子たちに話された。それはマタイ伝の24章に載っているので，よく調べてみるとよい。

イエスは，不法がはびこり，にせキリストが大勢の人を惑わし，にせ予言者が出て大きなしるしや奇跡を示し，選民をも惑わそうとし，大きな艱難が起こるであろうと弟子たちに話された。戦争と戦争の噂があり，国は国に敵対して立ち，飢饉や疫病や地震があって，予言者ダニエルが言ったような荒らす憎むべき者が出ると。

キリストの再臨に先立つ出来事についての予言は，地上の全住民への道しるべであり警告である。そのしるしが成就するのを目にしながら，これらの警告に聞き従わずにいられるだろうか。

バプテスマのヨハネがキリストの降誕に先立ってみ業のために道を備えるべく遣わされたように，神は救い主の再臨に備えてこの最後の福音の神権時代を開くひとりの予言者を送られたのである。予言者ジョセフ・スミスは疑い深い世に向って，イエスがキリストであり，まさに神の子であることを証した。

主は末日の啓示の中で，終りの時代には，艱難，荒廃，災害，破壊があることを再び繰り返された。主はこのように警告しておられる。

「その日，戦につきて聞かん，また戦いのうわさにつきて聞かん。全世界は揺れ動き……

人々の愛は冷やかになり，不法は満つべし。

この時に当り，その世に立ちて而も地に溢るる懲しめを見終りて後始めて過ぎ行く人々在るべし。世を亡ぼすべき疫病，地を覆うべければなり。

また地震も至る所に起り多くの荒廃は来らん。されどなお人々はわれに向いてこころを頑固にし，互いに剣を執りて殺し合うべし。」(教義と聖約45：26，27，31，33)

ずっと以前から世界のどこかに戦争があり，今も戦争の噂が多くの国の重大関心事となっている。また国は国に敵対している。

不安定な政府があり，倒れた政府がある。政界や実業界の指導者たちの高潔さ，誠実さ，正義などは，下落の一途をたどっている。

世には不法がはこびっている。そして多くの人々は，人を惑わして闇と罪の道へひきずり込むことに，良心の呵責をみじんも感じていない。

自分はキリストだ，予言者だと主張してはばからず，欺瞞と狡猾さで大勢の人をひきつける人々がいる。

飢饉と疫病は引きも切らず，地震は回数も程度も年々激しくなり，自然界の災害は，厳しさを加えていく。

サタンは人に猛威をふるい，実際，サタンの弟子，サタンの崇拝者だと表だって自称する人々がいる。

現在の世は，神を捨てた人や神を忘れた人であふれている。そして彼らは自分の判断に頼って，神の律法を変えようとしている。彼らにとって，神を信じることは時代遅れなのであろう。彼らは，神の戒めが，永遠不変なことを忘れている。私はひとつ尋ねたい。被造者が創造主よりも賢いことがあり得ようか。

わが国の裁判所は神の律法と戒めに代わり，人の作った法を取り入れている。神は死んではいない。神は永遠に同じで，確固として変わらず，神の子らへの愛とあわれみに満ちておられる。

悪の力は神の力と対立する。サタンは国家や国民生活の上に広く力をふるっている。国家の指導者が自分勝手な道を歩んでいると，誤解や問題は増加し，論争や争いがふえることだろう。

主は予言者ジョセフ・スミスに告げておられる。「汝ら備えをなせ。まさに来るべき事のために備えをなせ，そは主の来るは近ければなり。」(教義と聖約1：12)

このみ業の最後の神権時代に，主は「汝ら，主の大いなる日のために備えを為せ」(教義と聖約133：10)と警告された。

私たちは，主の再臨に備え，私たちに出来る最も大切なことは何であるかを充分に理解して，従順と忠実さによって主の罰から逃れようではないか。

そのために，次の事柄を考えなくてはならない。私たちは自分の生活と家庭とを整える必要がある。それはつまり，自分を見つめ，悪い行ないを認め，必要ならば悔改めをすることである。神の戒めをすべて守ること，隣人を愛すること，模範的な生活をすること，良い夫，良い妻となることである。そして子供たちを正義にかなった方法で教え導くこと，仕事や家庭ですべての行ないに正直であること，イエス・キリストの福音を世のすべての民に宣べ広めることである。

主は言われた。「見よわれその時期に於けるわが業を急ぐべし」と。(教義と聖約88：73)

主のみ業は急を要する。時は少い。この末日の主の王国の進展が急務であるということは，あわてふためき，ろうばいせよということではない。この福音の光と真理を求めるすべての人の間に，主の王国を早く確立し，強国にしたいという願いが込められているのである。福音は，すべての子らのための神の生命の計画なのである。

神は諸天を開き，主の再臨に備えるように子らに警告するため，予言者たちに天の使いを送ってみ業を急がれるであろう。

キリストは，「日はすでに傾き働き人をわが葡萄園に呼び入るる最後の時なり。即ち第十一時なり」(教義と聖約33：3)と強調された。

救い主は末日の教会を設立するにあたって，これが地上に主の王国を建てる最後の時であると言っておられる。(教義と聖約27：13参照)

予言者ダニエルは末日の神のみ業について語り，天の神が決して滅びず，他の民にも渡されず，永遠に立つ王国を建てられると告げている。(ダニエル2：44参照)

そのように，この福音の神権時代が最後である。主は，末日の教会が滅びるとは決して言われなかった。神はやがて大敵サタンを含めてすべての敵を征服される。神の律法と戒めを守り，主の味方につくことが明らかに得策である。危険の多いこの末の時代に，世に警告を発する私たちの責任は重大である。救い主は言われた。

「収穫は多いが，働き人が少ない。だから，収穫の主に願って，その収穫のために働き人を送り出すようにしてもらいなさい。」(ルカ10.2)

末日聖徒イエス・キリスト教会は，人の刈り入れに多くの働き人を送るというこのチャレンジに添ってキリストの永遠の福音をあらゆる国民，あらゆる血族，あらゆる国語の民，あらゆる世の人々に伝えるために，大勢の宣教師を召し，全世界に送り出している。

主はその民に，「われまた誠に汝らに告ぐ，主の再臨は近づきて夜来る盗人の如く世を襲うなり」(教義と聖約106：4)と警告された。

また，「見よ，主なる神は天の唯中を過りて叫ぶ天使を遣わして言わしむ。汝ら，主の道を備えよ。その道を備えてこれを直くせよ。主の来る時近ければなり」(教義と聖約133：17)とも言われた。

教会員と世の民にキリストの再臨の備えをさせ，キリストを受け入れる用意をさせるというチャレンジを，私たちはどのようにして果したらよいのだろうか。次の勧告に耳を傾けよう。

「その時主の腕現われて，主の声もまた主の僕らの声も聞かんとせず，予言者にして使徒なる者たちの言にも耳傾けんとせざる者のその民の中より絶たるべき日来るなり。

そは彼らわが儀式より離れ去り，わが永遠の誓約を破りたればなり。

彼らは主の義を打建てんために主を求めずして，あらゆる者おのが心のままに振舞いおのれらの神の姿を求むれども，その姿は人の世の像にしてその本質は一個の偶像なり。」（教義と聖約1：14―16)

主はこうも言われた。「主，われ言いたることは，われに言いたるなり。われ言い逃れせず。天地は過ぎ行くとも，わが言は過ぎ行くことなくして成就すべし。わが声にて言わるるも，僕らの声にて言わるるもみな一つなり。」（教義と聖約1：38)

主は，霊的なことにも物質的なことにも主の民のとるべき道を示すため，教会に予言者や使徒や教師を置かれた。これらの指導者たちの権利，権能，神権の力は，救い主御自身から来る。神に任命された指導者たちの勧告に従えば，私たちは安全である。

末日聖徒イエス・キリスト教会に属する私たちは，生ける予言者スペンサー・W・キンボール大管長が与えられている。彼が神から召されていることを私は証する。彼は私の教師，私の指導者，私の模範である。私は信仰と祈りによって彼を心から支持している。そしてキンボール大管長が予言者として，また指導者として神から召されていることを，私は一点の疑いもなく信じている。キンボール大管長の人格は清廉で，用意周到な頭脳を持ち，その勧告は賢く，判断は適格で，ビジョンは明晰である。彼はすべての人を心から愛し，人々の友であり，思いやりが篤い。

私たち教会員は，私たちの予言者である主の予言者に従って，その教えと勧告と彼自身が示す模範に心を留めたならば，決して道を誤ることはない。

救い主は末の時代について，さらにこのように教えられた。

「また日と月と星とに，しるしが現われるであろう。そして，地上では，諸国民が悩み，海と大波とのとどろきにおじ惑い。

人々は世界に起ろうとすることを思い，恐怖と不安で気絶するであろう。もろもろの天体が揺り動かされるからである。そのとき，大いなる力と栄光とをもって，人の子が雲に乗って来るのを，人々は見るであろう。

これらの事が起り始めたら，身を起し頭をもたげなさい。あなたがたの救いが近づいているのだから。

あなたがたが放縦や，泥酔や，世の煩いのために心が鈍っているうちに，思いがけないとき，その日がわなのようにあなたがたを捕えることがないように，よく注意していなさい。

これらの起ろうとしているすべての事からのがれて，人の子の前に立つことができるように，絶えず目をさまして祈っていなさい。」（ルカ21：25―28，34，36)

兄弟姉妹，私たちは予言の成就を見極め，自分の家庭を整えて，この重大な日のために備えようではないか。そして，民に主の再臨の備えをさせるというチャレンジを果たそうではないか。これらを，イエス・キリストのみ名によってへりくだり祈るものである。アーメン。

予言者と予言

十二使徒評議員会会員

リグランド・リチャーズ

兄弟姉妹，教会のこのすばらしい総大会に出席する機会にあずかり，とてもうれしく思っている。主のみたまの導きによって語るとき，私がこの限られた時間内で申し上げることが，あなた方の証を強めるものとなり，教会員でない方々にも何かを感じていただけると確信している。

今日私は，予言と予言者の重要性について少しお話したいと思う。

救い主は復活後，ふたりの弟子とエマオに向かわれたが，弟子たちは「目がさえぎられて」(ルカ24：16)救い主を認めることができなかった。救い主はふたりの弟子の話に耳を傾けながら，かつて御自身が教えられたことを，このふたりが理解していないことに気がつかれた。そこで救い主はこう言われた。「ああ，愚かで心のにぶいため，予言者たちが説いたすべてのことを信じられない者たちよ。」(ルカ24：25) そしてモーセをはじめとする予言者たちが，救い主のことをどのように証しているかを彼らに示された。聖典を調べれば，予言者たちが救い主の生涯と使命を極めて細い点に至るまで予言していることがわかる。例えば，救い主が十字架にかけられたとき，その衣をくじで引いて取るというようなことまでも予言している。(詩篇22：18)

ペテロは次のように言った。「こうして，預言の言葉は，わたしたちにいっそう確実なものになった。あなたがたも，夜が明け，明星がのぼって，あなたがたの心の中を照すまで，この預言の言葉を暗やみに輝くともしびとして，それに目をとめているがよい。

聖書の予言はすべて，自分勝手に解釈すべきでないことを，まず第一に知るべきである。(これは重要なことである。)

なぜなら，予言は昔決して人間の意志から出たものでなく，神の聖者が聖霊を感じて語ったものだからである。(欽定訳IIペテロ1：19—20) もし私たちにこれと同じ力があるなら，私たちは予言を理解できるはずである。

神の予言者たちは，救い主が時の絶頂においでになると予言したように，再臨に先立って起こる重要な事柄についても数多く予言している。そのうちのいくつかをお話してみたいと思う。

予言者アモスはこう言っている。「まことに主なる神は，そのしもべである預言者にその隠れたことを示さないでは，何事をもなされない。」(アモス3：7) もしこのことを理解していれば，予言者に導かれない業を捜し求める者はこの世にだれもいないはずである。主は頭である予言者に知らせないで，どのような業も行なわれない。予言者ジョセフ・スミスの時代から今日の予言者，スペンサー・W・キンボール大管長に至るまで，神が多くの予言者を私たちに与えて下さったことに感謝しようではないか。

私はキンボール大管長と37年もの間親しくしている。この世で彼ほどキリストに近い人を私は知らない。もしも主がキンボール大管長のような人を通して語られないとすれば，ほかにだれがそれにふさわしいと言えるだろうか。私は生ける予言者が与えられていることを感謝している。

「預言の言葉は，わたしたちにいっそう確実なものになった。」(IIペテロ1：19) と語ったときのペテロの言葉を味わい，主のみむねとみこころを知るためには神の予言者による以上に明らかでかつ確実な方法はないということを理解するならば，「まことに主なる神は，そのしもべである預言者にその隠れたことを示さないでは，何事をもなされない。」ことがわかるのである。(アモス3：7)

今日アメリカには，約700ものキリスト教会がある。しかし，前に述べたこの言葉を信じ，イエスが予言をどれほど重要に考えておられるかを知るならば，人は，神がみむねやみこころをあらわされる予言者のいる教会以外に，真理を捜し求めはしないはずである。

なすべきことはたくさんあった。ペテロは，ペンテコステの日の後キリストを殺した人々に向ってこのように言った。「だから，自分の罪をぬぐい去っていただくために，悔い改め本心に立ちかえりなさい。

それは，主のみ前から慰めの時がきて，あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエスを，神がつかわして下さるためである。

このイエスは，神が聖なる預言者たちの口を通して，昔から予言しておられた万物更新の時まで，天にとどめておかれねばならない。」（欽定訳使徒３：19―21）

このように，真理を求める人は，更新を求めることだろう。改革ではなく，継続でもない，更新を。もしペテロが神の予言者であったなら，救い主が再臨される前に，すべての予言者たちの口を通して語られた万物の更新が起こるはずである。キリストは「万物更新の時まで」天にとどめておかれることになっている，とペテロが述べているからである。失われたものを回復するこれら古えの予言者たちの訪れを受ける，この世の予言者がいない限り，更新は起り得ない。イザヤが予言したように，数々の教会は人の戒めを教えてきたのである。しかし私たちの教会には生ける予言者がいる。

主は予言者ジョセフ・スミスを立てられた。このことはこの大会で多くの人が証している。記録の示す限り，かつてこの地上に住んだどの予言者よりも，予言者ジョセフ・スミスを通して多くの真理が私たちに明らかにされた。ジョセフ・スミスは，救い主が再びおいでになる前に，この世に訪れてすべてのことを回復することになっていた古代の予言者たちから，多くのものを私たちに与えてくれた。彼が回復したものは数多い。

例えば，あなたがたはネブカデテザルの夢とダニエルの解き明かしを御存知だろうか。ネブカデネザルは夢を忘れた。そこで博士や法術士たちを呼び集めたが，その夢を解き明せるの者はだれもいなかった。そこでイスラエルのダニエルのうわさを聞いたネブカデネザルは彼に尋ねた。ダニエルは次のように答えた。「しかし秘密をあらわすひとりの神が天におられます。彼は後の日に起るべきことを，ネブカデネザル王に知らされたのです。あなたの夢と，あなたが床にあって見た脳中の幻はこれです。」（ダニエル２：28）

それから，私たちが現在生きているこの末日に至るまでのこの世の王国の興亡について語った。そして，末日に天の神はひとつの国を立て，これはいつまでも滅びることがなく，その主権は他の民にわたされないであろうと解き明かしたのであった。（ダニエル２：44参照）神は予言者を通して王国を築かれる。そうであるとすれば，神は予言者がいなくて，永遠に耐え得る王国を，お建てになるだろうか。

ダニエルは人手によらずに切り出されたひとつの石があるといった。それははじめほんの小さいもので，６人の男性によって建てられた王国であった。そしてダニエルが石は大きな山となって全地に満ちると言ったように，その王国は発展してきたのである。（ダニエル２：35参照）

今日のこの教会ほど，飛躍的発展を遂げている宗教団体はない。なぜなら，それは天の神がその約束に従って築かれたものだからである。

私が南部諸州伝道部の伝道部長をしていたとき，宣教師のひとりがある集会でネブカデネザルの夢について話した。その集会には求道者が数人出席していた。集会後私はドアの前に立って，彼らとあいさつを交わしていた。するとひとりの人が近寄って来て，牧師であると自己紹介し，こう言った。「あなたはあの王国がモルモン教会だと思っている訳ではないでしょうね。」

私は答えた。「なぜモルモン教会ではないとおっしゃるのですか。」

彼は言った。「そんなはずがありません。」

「なぜそんなはずがないのですか。」

「王のいない王国などあり得ません。あなた方には王がいません。ですから王国もない訳です。」

「あの，もう少し読んでいただけるとおわかりになると思います。ダニエル第７章を読んでみてください。そこにダニエルが天の雲に乗って人の子のような者がおいでになるのを見たこと，また『彼に主権と光栄と国とを賜い，諸民，諸族，諸国語の者を彼に仕えさせた。』（ダニエル７：14）とあります。」

私は続けた。「人の子のような者が天の雲に乗っておいでになったとき，もし王国の備えができていなければ，どのようにして王国を与えることができるでしょうか。それをしているのが末日聖徒なんです。」

あなた方は神の聖徒として，教会の偉大な伝道プログラムを促進し，また什分の一や献金を納めるために，時間，才能，財産，それに自分の子供たちをさえ犠牲にしている。このうなことは，今日の世にあって類のないことである。これは神が予言者

を通して働きかけておられるからである。パウロは当時の教会に次のように書き送っている。「あなたがたは，使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって，キリスト・イエス御自身が隅のかしら石である。」（エペソ２：20）

従って，真理を求めるものは，使徒と予言者を土台として建てられた教会を捜す必要がある。ここで私の証を申し上げたい。この教会こそ使徒と予言者を土台として建てられたイエス・キリストの教会である。そして主なるキリストは今なお，生ける予言者を通して教会を導いておられるのである。

このほかにも多くの予言者が与えられている。使徒パウロが，主はみむねの奥義を示して下さったと言っているが（エペソ１：９参照），これは確かなことである。では，みむねの奥義とは何か。「それは，時の満ちるに及んで実現されるご計画にほかならない。それによって，神は天にあるもの地にあるものを，ことごとく，キリストにあって一つに帰せしめようとされたのである。」（エペソ１：10）地上にあるほかのどの教会にも，天と地上のものをつなぐこのような計画はない。

また，私たちは，主の民が救い手としてどのようにシオンの山に登るかについての予言も知っている。（オバデヤ21）イエスは次のように言われた。

「死んだ人たちが，神の子の声を聞く時が来る。今すでにきている。そして聞く人は生きるであろう。」（ヨハネ５：25）なぜなら，この世を離れた人もすべて，この福音を聞く必要があるからである。すべてのひざは主に対してかがみ，すべての舌はイエスがキリストであると証すると言われている。（ローマ14：11参照）これによって，私たちは使徒パウロが述べた次の言葉の意味をさらによく理解することができる。

「そうでないとすれば，死者のためにバプテスマを受ける人々は，なぜそれをするのだろうか。もし死者が全くよみがえらないとすれば，なぜ人々は死者のためにバプテスマを受けるのか。」（Ｉコリント15：29）

この神権時代に起こることになっているもうひとつの偉大な出来事がある。それは，マラキを通して主が言われたように，主の来られる道を備えるために主の使いが送られ，主はすみやかに主の宮においでになるということである。「その来る日には，誰が耐え得よう。……彼は金をふきわける者の火のようであり，布さらしの灰汁のようである。」（マラキ３：１，２）これは明らかに最初の来臨とは何の関係もない。最初の来臨では，主はすみやかに主の宮においでにならなかった。また主のおいでになった日，すべての人は耐えることができた。しかし末日に主がおいでになるときは，邪悪な者は岩に向って，「さあ，われわれをおおって，御座にいますかたの御顔と小羊の怒りとから，かくまってくれ」（黙示６：16）と叫ぶであろうと言われている。

私たちには死者のための業があり，そのために神殿を有している。そしてこのことは，マラキの述べた次の言葉と密接な関係を持つ。「見よ，主の大いなる恐るべき日が来る前に，私は預言者エリヤをあなたがたにつかわす。彼は父の心をその子供たちに向けさせ，子供たちの心をその父に向けさせる。これは私が来て，のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである。」（マラキ４：５，６）

この結果を考えていただきたい。この約束があるように，エリヤ（エライジャ）が来たことを告げる人々がこの世のどこかにいるだろうか。エリヤはすでに来た。1836年４月３日，カートランド神殿において，ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリーに現われ，天地をつなぐ偉大な業の鍵を渡したのである。それ故に，神殿が建てられているのである。また同時に，イザヤが予見した事柄も現実となっている。「終りの日に次のことが起る。主の家の山は，もろもろの山のかしらとして堅く立ち，……すべての国はこれに流れてき，多くの民は……言う，『さあ，われわれは主の山に登り，ヤコブの神の家に行こう。彼はその道をわれわれに教えられる，われわれはその道を歩もう』と。律法はシオンから出，主の言葉はエルサレムから出るからである。」（イザヤ２：２，３）

この敷地内にある神殿はヤコブの神の宮であり，私たちの先祖である開拓者たちが，何千キロに及ぶ旅を終えた後，建てたものである。完成までに40年もの歳月を要した。素晴らしい建物ではないか。世の中にこれほど美しい建物があるだろうか。私がオランダで伝道していた当時，すべての改宗者は教会に入るや神殿に引かれて，持ち物すべてを売り，わずかなお金さえも貯めて，この国へ渡ろうとしたものである。その結果彼らは主の道を知り，その道を歩むことができたのであった。

このほかにもたくさんの予言があるが，イザヤが目にし，予言した次の事柄について申し上げたいと思う。「その日，主は再び手を伸べて，その民の残れる者を……あがなわれる。

主は国々のために旗をあげて，イスラエルの追いやられた者を集め，ユダの散らされた者を……集められる。」（イザヤ11：11，12）

ジョセフがわずか18歳のとき，天使モロナイは夜中に三度ジョセフを訪れ，さらに翌朝再び姿を現わし，

この句を再三引用して，予言が成就することを告げたのである。そのときに予言者ジョセフ・スミスに課せられた責任を考えていただきたい。彼は国々のために旗を揭げたのである。世の中に，この教会ほど会員たちのために力を尽くし，また会員を増やして，世の旗となっている教会はない。人々は私たちがこれらのことをどのように行っているのだろうと，私たちのもとにやって来る。

イザヤは集合について，このほかにも多くのことを知っていた。主はイスラエルをすみやかに集められ，イスラエルはくつのひもを解いたり，まどろんだり，眠ったりする時間さえないことをイザヤは予見している。（イザヤ5：27参照）何千年も昔のイザヤの時代にさかのぼって，当時の交通機関を目の前にしてこの言葉を記したことを想像していただきたい。

この予言の成就を示すものとして，次のようなことがある。マッケイ大管長は最初のステーキ部を組織するためにスコットランドに赴いたその帰途のことを，神殿において私たち十二使徒の兄弟たちに次のように語った。ロンドンを発ったのは午前2時で，それからシカゴに立ち寄って兄弟たちと少しの間会い，その夜自宅のベッドで休んだと。彼はくつのひもを解く時間もなかったそうである。そして，初期の頃，人々がシオンにやって来たときのことと比較した。人々は43日間船に乗り，それから幾週間もかかって平原を横切らなければならなかったのである。集合について考えていただきたい。聖徒たちがどのようにしてこの地（ユタ州）に向け，河岸を旅するはずであったか。その予言について考える時間があればと思う。開拓者たちはこれを成就したのである。主が彼らの悲しみを喜びに変えられることについて，エレミヤは次のように言っている。「『イスラエルの民をエジプトの地から導き出した主は生きておられる』とは言わないで，『イスラエルの民を北の国と，そのすべて追いやられた国々から導き出した主は生きておられる』という日がくる。」（エレミヤ16：14，15）

このことは，この教会が組織されて以来，主がその民に行なってこられたことである。そして現在，私たちはステーキ部と神殿を彼らのうちに設け，彼らはシオンのステーキ部に集められているのである。

さらにエレミヤはこう続けている。「主は多くの漁師を呼んで彼らを漁らせ，また多くの猟師を呼んで，もろもろの丘，山，岩の裂け目から彼らをかり出される」と。（エレミヤ16：16）世界各地に散在する伝道部に行くとおわかりになると思うが，現在21,000名以上の宣教師が戸口から戸口へ，村から村へと足を運び人々を集めている。それはまさに予言者が予言した通りである。この教会が文字通り，予言を成就していることがおわかりいただけると思う。

エレミヤは次のように言っている。「主は言われる，背信の子らよ，帰れ。わたしはあなたがたの夫だからである。町からひとり，氏族からふたりを取って，あなたがたをシオンへ連れて行こう。私は自分の心にかなう牧者たちをあなたがたに与える。彼らは知識と悟りをもってあなたがたを養う。」（エレミヤ3：14，15）

今日ここにおいでのあなた方は，町からひとり，氏族からふたりというように，主の道を学ぶために来られた方々である。今日この壇上に座っている幹部の兄弟たちは，主のみこころに従ってあなた方を教える牧者である。

あなた方すべてに神の祝福があるように，また，主は生ける予言者を通して，この教会が生ける予言者を土台として建てられていることを語っておられる。私たちが世の人々に証を述べるのは，このことが確かに主のみ業であると知っているからである。このことを認識していただきたいと思う。これが私の証である。この証を謙遜に，主イエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。

わが愛子に聞け

十二使徒評議員会会員

マーク・E・ピーターセン

この大会において私たちのために歌を歌い，素晴らしい演奏をして下さった皆さんに，心から感謝を申し上げたい気持で一杯である。これまでになく感動を覚えている。まことに個人的ながら，コーラスの方々ならびにオルガニスト全員に，私の感謝の気持を申し上げたいと思う。皆さんは，この素晴らしい大会に大きな貢献をしておられると思う。

私たち末日聖徒には，世の人々に与えるメッセージがある。それは神から与えられたものであり，神がこの時代に再び天より語りたもうたことを全人類に宣言するものである。

全能の神は次のように言っておられる。「聞け，汝ら諸々の天よ，地よ耳を傾けよ。喜べ，そこに住む者たちよ。主は神にして，主の他に救い主なければなり。

主の知恵は偉大にして，その為したもうところは驚嘆すべく……」（教義と聖約76：1，2）

また次のように告げておられる。「誠に主の声はすべての人々に及ぶものなれば，……すべての人々に警(いまし)めの声は及ばん。」（教義と聖約1：2，4）

私たちのメッセージで最も重要なのは，ナザレのイエスが主なるキリストであり，全人類の贖い主であり，クリスチャンの言う救い主であり，ユダヤ人の言うメシヤであるという点である。この同じイエスが，マリヤから生まれた，文字通り神の御子であり，このイエス以外に救い主はないことを，私たちは心から厳粛に宣言するものである。

全能の神は，ナザレのイエスが神の御子であることを繰り返し断言し，「わが愛子に聞け」とはっきり命じられた。そしてこの末日においても，全能の神は，イエス・キリストについて大いなる新たな啓示を下すに及んで，再び「彼に聞け」と命じられたのであった。　従って私たち末日聖徒は，イエス・キリストについての新たな近代の啓示を皆さんにお伝えするものである。父なる神は，「彼に聞け」と言っておられる。神の心からなる勧告に耳を傾けようとする人は，イエスの言葉を聞いていただきたい。

私たちのメッセージは，真理に基づくものである。この混乱した世界には欠かせない大切なものである。主御自身，次のように言っておられる。「汝ら民よ，遙かなる所より耳を傾けよ。海の島々にある者よ，共に聴け。

誠に主の声はすべての人々に及ぶものなれば，一人ものがるる者なし。」（教義と聖約1：1，2）

このように私たちが近代の主の啓示の言葉を宣言するときに，大勢の人々は，それが信頼できるものであるかどうかをすぐ心に問う。そして，その信頼性の大部分が，人としての私たちの信頼性にかかっていることを，私たちは十分に承知しているのである。このことを心に留めた上で，少し皆さんに，私たち末日聖徒についてお話したい。

私たちは，まじめで，立派な人格を身につけ，正直で，義しい生活を送るように命じられている。そして私たちは，信仰の基本原則として，徳と純潔とを教えている。また，家庭を堅固な避け所とするように提唱している。

私たちにとって，家族は文明の礎石であり，また常にそうでなければならない。家庭は正しい人間関係の基である。

私たちは教会の男女に，貞節は最も気高いものであることを教えている。私たちはみな神の霊の子であり，それにふさわしく生きるならば，ついには完全な者となって，天の御父のようになれるというのが主の計画

であるということを信じている。（マタイ5：48参照）

私たちは，家族は永遠の単位となるよう意図されており，死と復活の後，不死不滅と永遠の生命が得られることを信じている。

私たちが夫婦それぞれに貞節という高い標準を教えているのは，自らを備え，このような約束にあずかるにふさわしい者となるためである。私たちにある道徳の標準はただひとつ，万人に共通のものである。私たちはいつもこのように訴えている。「汝ら，主の器をもてるものは潔くあれ」と。（教義と聖約38：42）

教会員の増加は著しい。誠実な心を持つ男女は，すぐに私たちのメッセージに応える。10年前の会員数は250万であったが，現在では350万に達している。

私たちは着実に伝道プログラムを進めている。現在62カ国に133の伝道部が置かれている。しかし10年前はわずか74に過ぎなかった。また今日の宣教師数は21,168名で，そのほとんどが20歳前後の若者である。しかし10年前は12,585名であった。現在これらの宣教師は，自ら進んで2年間を捧げ，自費で伝道に携わっているのである。皆さんはこのことから，私たちが心から確信を抱いているものが，真実であることを判断していただけるものと思う。

教会は一般に，支部，ワード部およびステーキ部と呼ばれる組織に分けられている。この支部とワード部は教区に相当し，ステーキ部は管区に似たものである。10年前のワード部および支部数は6,000であったが，現在ほぼ8,000を数えている。またそれより大きな単位であるステーキ部は10年前には412であったが，今は700を越えている。そしてこれらは，南アメリカからスカンジナビア，アラスカから南洋諸島に至るまで，数多くの国々に見られる。

私たち教会員は一般に健康である。カリフォルニア大学公衆衛生学部のジェームズ・E・エンストロム博士は，去る4月9日付けの「パサデナ・スターニューズ」で，モルモンの癌の罹患率は全国平均の50パーセント以下であると報じている。癌の死亡率がアメリカ国内で最も低いのは，ユタ州である。

肺癌を見てみると，末日聖徒の女性は全国平均のわずか31パーセント，男性はわずか38パーセントに過ぎない。また，アルコール飲料と関連のある食道癌の場合，末日聖徒の女性は全国平均の11パーセント，男性は34パーセントである。以上の数字は，ユタ州癌登録所の理事を務めているジョセフ・F・ライアン博士の提供によるものである。

1971年度「合衆国統計要約書」（国勢調査局発行）をもとにしてユタ州と他州を比較してみるとおもしろい。合衆国全州における様々な病気の罹患率が，その順位に従ってすべてあげられている。次にその幾つかを取り上げたい。

心臓病の場合，ユタ州は46番目に位している。インフルエンザと肺炎は49位，脳血栓は46位，動脈硬化症は49位，肝硬変は45位，気管支炎と気腫，ぜんそくは30位，結核は50位，性病は50位，主要循環器と腎臓病の合併症は50位，循環器系の病気は50位，神経系に影響を及ぼす血管障害は50位，心臓病による高血圧は43位，その他の高血圧は50位，伝染病は50位，妊娠による余病は46位，幼児死亡率は50位である。

ユタ州のこれらの順位について語るとき，全人口の約30パーセントが私たちの教会に所属していないことを心に銘記しなければならない。ユタ州の統計には彼らも入っているのである。

教会は，青少年の育成を図るボーイスカウト・プログラムで，他をリードしている。私たちは，あらゆる国民，宗教，民族の少年を訓練する上で，このボーイスカウト・プログラムが非常に有効な組織であると考えている。

合衆国全体では，スカウトの年齢の少年でそれに登録しているのは，わずか23パーセントに過ぎない。しかし，末日聖徒の間ではその率は85パーセントとなっている。

合衆国全体でイーグル章を得ているのは，登録したスカウトの内の1.5パーセントであるが，末日聖徒では4パーセントである。

1974年度，私たちの教会はスカウティングの後援団体として，合衆国で2番目に多くの隊を後援している。当教会をしのいだのは，PTAであった。PTAの後援数は20,800隊で，当教会の後援数は14,344隊であった。また，当教会に続くのは，ユナイテッド・メソジスト教会の13,789，次いでローマ・カトリック教会の11,734である。

少年犯罪の多い今日，私たちの教会に所属する256,000人の十代の少年の内，70パーセントが教会に活発に出席し，同じく238,000の少女の内，73パーセントが活発であることは，まことに喜ばしいことである。このことを考えていただきたい。これほどの組織がどこにあるだろうか。考えてみていただきたい。アルコールやタバコ，また婚前の性関係を禁じる教会において，50万にも及ぶ十代の若者が献身しているのである。もしほかにこのような団体があるならば，教えていただきたい。皆さんは，教会の日曜学校の出席にも関心を持たれることだろう。幼ない子供たちの59パーセントが，毎週日曜学校に出席している。また，十代の若人の60パーセントが，毎日曜日，クラス

に活発に出席している。

私たちは教会で，「神の栄光は英智なり」と教えている。（教義と聖約93：36参照）私たちはまた，人の栄光も同じく英智であると信じている。このことを念頭に置いて，教育の普及に励んでいるのである。

カーネギー高等教育方策研究評議会の議長であるクラーク・カー博士は，昨年のユタ大学の卒業式で，次のような興味ある演説をしている。

「ユタ州は，3歳から34歳までの全人口の就学率を見た場合，合衆国一である。

ユタ州は，各年齢別の就学率を見た場合，16，17歳を除くと，すべて合衆国一である。このふたつの年齢では，ミネソタ州が一位である。

ユタ州は，25歳以上の全住民の平均就学年数は合衆国一である。……

ユタ州は，州の歳入に対する医学部の運営費を見た場合，合衆国一である。」

次いで彼はこう語っている。「カーネギー高等教育委員会は，50州のそれぞれで，高等教育の現況を調査した。その結果，他の多くの州と違って，ユタ州には大きな欠陥は何ら認められなかった。

素晴らしいことではないだろうか。さらに彼はこう問いかけている。「なぜユタ州はこれほどまでに抜きんでているのだろうか。富んでいるわけでも，歴史が古いわけでも，教育の振興に対する立地条件が良いわけでもない。その秘密を知ることができたら，恐らくどこへでも輸出できるだろう。しかしこれは容易ではない。なぜなら，その秘密はその歴史にあると思われるからである。皆さんの過去の指導者たちは，教育に大きく力を入れている。」続いて彼は，ブリガム・ヤングの話を引用して，教育の価値を訴えた。

教育に対するこのような考え方は大勢の教会員に影響を与え，その結果彼らは，合衆国やカナダを始め，世界各地で卓越した地位に就いているのである。

「会社幹部の地位にあるモルモン」というテーマの座談会で，マーク・W・キャノン氏が話したことであるが，最近の研究から次のことが明らかになったとのことである。アメリカの主要な事業体471社を調べた結果，州人口に対する社長の人数は，他のいかなる州よりもユタ州生まれが最も多い。合衆国の平均では，人口205,000人にひとりの社長であるのに対しユタ州は62,000人にひとりの社長を輩出している。現在61名の末日聖徒が1千万ドル以上の資産を有する会社で，社長あるいは取締役会会長，または副会長の地位にある。また，7,500万ドル以上の資産を持つ会社で要職に就いている人も数多くいる。

幾人かの末日聖徒は合衆国で閣僚を務め，カナダでも要職に就いてきた。軍隊には陸軍大将もいれば，海軍大将もいる。また，ある末日聖徒たちは長年合衆国議員を務めており，カナダの行政組織に入っている人々もいる。例えば，1952年に合衆国上院および下院に議席をおいていた末日聖徒は15名であり，今日は28名の議員がいる。

同じく，連邦銀行局，米国関税裁判所，米国関税委員会，連邦住宅管理局等でも，末日聖徒は要職に就いている。

モルモンの大祭司，ハービー・フレッチャー博士は立体音響を開発し，また同じくモルモンのフィロ・ファーンズワース氏はテレビを開発した。

国際ロータリークラブや国際ライオンズクラブの会頭を務めたモルモンもいる。アメリカ医師会やアメリカ銀行協会，その他各種の科学協会の会長をも務めている。また，科学界や実業界経済界の要職にある人は数多く，ここですべてを述べることはとてもできない。

今日，大勢の人々が，いわゆる「女性解放運動」（ウーマンリブ）に関心を寄せている。

皆さんは，選挙権を得た最初の女性がモルモンの女性たちであることを知ったら，喜ばれることだろう。モルモンの女性たちは，1世紀以上も前のブリガム・ヤングの時代にこの大切な権利を与えられたのである。

私たちは，モルモンの女性は世のいかなる女性よりも束縛が少なく，大きな自由を得ていると信じている。彼女たちは，万人に対する自由と公平の本当の意味を知っている。これこそ，宗教の一部であり，日常生活の基だからである。

私たちの教会には，女性自身が運営し，指導する，女性のための組織がある。女性の扶助協会として知られており，約100万の会員を擁するものである。この組織の指導者たちは世界婦人評議会で著しい貢献をしている。そのひとりであるベル・S・スパッフォード夫人は，最近，合衆国の全国婦人評議会会長を務めた。

この扶助協会の目的は，困っている人々に慈善奉仕をすることである。それと同時に，女性の教養を増し，彼女たちが人生の貴い目標を達成し，家族の中に気高い理想を築くのを助けることである。

私たちはメッセージの一部として，世の人々にモルモン経と呼ばれるもう一冊の新しい聖典を紹介している。現在この本は毎年100万冊以上出版されている。これは，古代アメリカの神聖な記録である。モルモン経のことを語るとき，聖書も使っているのかどうかとの質問を時折受けるが，もちろん聖書も使用している。私たちは，他のほとんどのクリスチャンと同様に，聖書を使い，それを標準

聖典のひとつとして受け入れている。しかしまた，モルモン経をも神のみ言葉と信じている。この本は，キリストを証する第2の書物であり，この末日における主のみ業を証するものである。

私たちは現代の啓示を信じており，全人類に，神は新たな予言者を起こしてこられたと宣言するものである。これらの予言者は，人類を導くために現代の啓示を受けて，それを伝えているのである。

私たちのメッセージは神聖であり，真理に基づいている。そして教会員は，堅実な市民であり，法律を守り，聡明で，進歩的な人々である。これは教会員を知っている人すべてが認めるところである。私たちの生活態度は適正で，使命とメッセージが神にその源をもつ確かなものであるという証拠を十分に反映している。皆さんが目にする通りである。私たちが偉大な宗教のメッセージを世の人々に宣べ伝えるのは，これまで私が話したような理由によるのである。

この暗黒と罪と混乱の時代に，皆さんは神からの新たな啓示を歓迎なさらないだろうか。この啓示によって，神の存在が再確認され，救いへの道が再び示される。そしてこの啓示は，丘の上の燈台のように，人生の進路を告げてくれるのである。

私たちは証する。神は世の造り主であり，現在も生きておられる。イエス・キリストはこの世の贖い主であり，現在も生きておられる。また私たちは一致して，主イエス・キリストに関する天父の戒めを公言するものである。「わが愛子に聞け」と。救いは主イエス・キリストの内にあり，主を通してのみ得られるのである。私たちはこのことを，主イエス・キリストの聖なるみ名によって証する。アーメン。

誓約に従いて

大管長会第二副管長

マリオン・G・ロムニー

兄弟たちよ，私は教会員数の急速な増加に伴う様々な問題について考えてみた。その結果，現在最も急を要する仕事のひとつは，長老見込み会員と不活発な長老の改宗ではないかと考えている。教会にはこのような状態にある兄弟が何万人といる。残念ながら，このようになる人々の数は，毎年，改宗者の数をしのいでいる。

状況を分析した結果，必然的に次のような結論が出た。それは，現在行なわれている事柄に加えて，こうした人々の生活を変えるよう激励するために何か他のこともしなければならない，ということである。彼らを折々のレクリエーションに誘うよりも，もっとしなければならないことがある。彼らが真に必要としているのは，改宗である。

辞書によると，「改宗する」という動詞は，「ある信仰から別の信仰に転向すること」と定義され，「改宗」という名詞は「確信を伴う信仰の変化に伴って起きる霊的かつ道徳的変化」と定義されている。また聖典の例を見ると，通常，「改宗した」ということは単にイエスとイエスの教えを頭の中で受け入れたということだけではない。イエスとイエスの福音を信ずる躍動的な信仰を持ったことであり，転換，すなわち人生の意味を理解する度合における，また関心，思い，行為などで神に忠誠を尽くそうとする度合における具体的な変化のことであるが，この転換を起させるような信仰を持ったことである。「改宗」が数段階を経て完成されるものとすれば，真の意味で改宗するためには，心から新しい人間にならなければまだ本物ではない。聖典ではこれを「再び生まれる」という言葉で記している。

完全に改宗した人の心の中では，イエス・キリストの福音に反することをしたいという望みはまったく姿を消し，代わりに神の愛が芽生える。神の戒めを守ろうという固い，自らを治める決意が生まれるのである。パウロは，ローマ人たちに，そのような人は新しい命に生きると説明している。

「それとも，あなたがたは知らないのか。キリスト・イエスにあずかるバプテスマを受けた私たちは，彼の死にあずかるバプテスマを受けたのである。

すなわち，わたしたちは，その死にあずかるバプテスマによって，彼と共に葬られたのである。それは，キリストが……死人の中からよみがえらされたように，わたしたちもまた，新しい命に生きるためである。」（ローマ6：3，4）

ペテロの教えによれば，「新しい命」に生きることより，人は「世にある欲のために滅びること」を免れ，また，自らの心のうちに信仰，徳，知識，節制，忍耐，信心，兄弟愛そして愛を成長させることにより，「神の性質に」あずかる者となるのである。（IIペテロ1：4-7参照）

「新しい命」に生きる人は，改宗した人である。一方，ペテロの説明によると「これらのものを備えていない者は，盲人であり，近視の者であり，自分の以前の罪がきよめられたことを忘れている者である。」（IIペテロ1：9）　そのような人は，たとえバプテスマを受けていたとしても，改宗したとは言えない。

モルモン経には，改宗によって起こった著しい変化の例が記されている。ベンジャミン王の最後の説教の時のことである。この説教が非常に力強いものであったため，ベンジャミンが話し終えたとき，群集は地に伏したほどであった。「かれらは，自分たちが肉の欲に支配されている有様をかえりみ，……高く叫んで言っ

た。『ああ憐みたまえ。キリストの血による身代りの贖罪の効力を及ぼして，われらが各々その罪を赦されて心を清められるようになしたまえ。われらは天地万物を造ってこの後人間に降臨したもう神の御子イエス・キリストを信じ奉る』と。」(モーサヤ4：2)

民がへりくだったのを見て，ベンジャミン王は次のように言葉を続けた。

「神を信ぜよ，神がましますことと，神が……万物を造りたもうたことと，天でも地でも全知全能であることとを信ぜよ。……

お前たちはその罪を悔い改めその罪を捨てて神の前にへりくだらなくてはならないことを信じ，神がお前たちを赦したもうように真心から祈れ。もしもこれらをみな信ずるならば謹んで実行せよ。」(モーサヤ4：9，10)

ベンジャミン王は，説教が終わったとき，民に彼の言った言葉を信じるかどうか尋ねた。

「すると民は……言った『まったく，われらは王の言われた言葉をみな信じ，またその言葉が確に真実であることを知っている。』」(モーサヤ5：2)

ではなぜ彼らはこのように強い確信を得たのであろうか。「それはわれらの心を非常に改めさせ，悪を行う性質をなくして常に善を行う望みを与えたもう……主の『みたま』に由るのである。

われらは残る生涯の中，神のみこころに従ってその命令をしたもう一切のことを守ると喜んで神と誓約をする。」(モーサヤ5：2，5)

不活発な人たちが皆，このような改宗の域に達したとしたら，本当に素晴らしいことではないだろうか。

長老定員会の会長である方々は，主のみ業のうち，この分野に大きな責任を負っているが，自分の定員会会員を改宗するために何をしているだろうか。

私はあなた方に，主が言われた次の手順について深く考え，熱意をもって実行するよう提案したいと思う。

「また長老の職を管理する長たる者の義務は，九十六人の長老を統轄しこれと共に会議を開きて誓約に従いてこれを教うべし。

この長は『七十人』の長とは別の者たらざるべからず。而して，全世界に出て行きて巡回せざる者の長たる様に定めらる。」(教義と聖約107：89，90)

誓約を教えていただきたい。誓約とは，2者またはそれ以上の者の間で取り交わされる，拘束力ある，厳粛な協定である。世の初めから，神の民は誓約の民であった。近代になって長老定員会の会長に与えられた，この「誓約に従いて（定員会会員を）教うべし」という戒めは，まだ戒められた通りには実行されていない。

福音の誓約を理解し，信じ，それに従って生活する人で，教会から遠ざかって不活発になる人はいない。私たちは主の新しくかつ永遠の誓約であるイエス・キリストの福音を理解し，霊界でそれを受け入れ，そのために天上の戦いに参加し，忠実な者には永遠の生命が与えられるという主の約束を実現するためこの地上にやって来た。このことを心から認める者は，この地上に来るときに交わした誓約を理解せざるを得ないのである。

私は，福音の「新しく且つ永遠の誓約」の意味を十分理解していないことが数多くの教会員が不活発になる根本的な原因である，と信じている。長老定員会の会長が「誓約に従い」定員会の不活発会員を「教え」，改宗するように務めるならば，彼らにこの地上に来るときに交わした誓約について教えるのに，それほど問題はないであろう。そのようなことを知らない人には，人生の目標もなければ，目的もない。そうなれば，その他の色々な誓約も意味が無くなってしまうのである。

私は最近旅行したとき，機内でこのことを裏付けるような経験をした。私は，全く初対面の人の隣に座ったので彼に仕事は何かと尋ねた。彼はそれに答えると今度は私の仕事は何かと尋ねてきた。私は自分の仕事について説明し，彼に，誕生前も死後も生き続けることを信じるかどうか尋ねてみた。彼はわからないと言った。彼は，誕生前に存在していたり，墓を越えて生き続けるということを想像してできないことはないが，それが一体どういう形でどういう性質のものなのか，全く見当がつかないということであった。

それから私は彼に，福音の計画についてできるだけ簡略に話をし，また私たちが何者なのか，どこから来たのか，どこへ行くのか，なぜここにいるのか，ということについて説明した。

「それは素晴らしい」と彼は言った。「それを知っていれば，生活をするにもはりがあるし，人生にも目的があるというものですね。」

まことにその通りである。これこそ正に福音の意図するところである。私たちがこの世で交わす誓約は永遠の生命という目標に到達するための手助けとなるものである。しかもこの永遠の生命については福音の新しくかつ永遠の誓約の中で説明されているし，またこの誓約によってこそ可能となるのである。

まず，この地上で私たちが最初に交わす誓約は，バプテスマの誓約である。このバプテスマの誓約を説明するにあたって，私は次に述べるア

ルマの言葉ほど良い説明はないと思う。

「『ごらん，ここにモルモンの泉がある。……あなたたちは神の羊の群に入って神の民と言われること，互いに苦難を軽くするために喜んで助け合うこと，悲しむ者を思いやって共に悲しむこと，慰めが要る者を慰めること，また神に贖われ第一の復活にあずかる者の数に入って永遠の生命を得るよう，いついかなる時でも，どのような所にいても，どんなことについても，死に至るまでも神の証し人になりたいと心から思っている。

従って，あなたたちがもしも真心からこれを望んでいるならば，あなたたちは主からますます豊にその「みたま」を賜るよう，主に仕えてその命令を守ると言う誓約を主に立てた証拠として，主の御名によってバプテスマを受けるのに何のさしつかえがあろうか』と。

集った民はこの言葉を聞いて非常に喜び，その手を叩いて『これはわれわれが真心から願うことである。』と言った。

このときアルマは……ヒーラムと言う一人の男をつれて行って水の中に立ち，高らかな声で祈って言った『主よ，汝のしもべが聖き心を以ってこの働きを為し得るよう「みたま」を与えたまえ』と。

こう言って祈ると主の『みたま』がアルマの上に降った。そこでアルマは『ヒーラムよ，われは全能の神より権能を受けたるにより，汝がすでに肉体の死ぬまで全能の神に仕えたてまつると誓約をしたる証拠として汝にバプテスマを施す。ねがわくは，主の「みたま」が汝の上に降り，また全能の神が創世の前より備えたもうたるキリストの身代りの贖いによりて汝に永遠の生命をたまわらんことを』と言った。（モーサヤ18：8-13）

主はこのバプテスマの誓約をこのように重要に考えておられるため，私たちに毎週この誓約を新たにするよう戒めを与えられたのであった。

「汝なおさら充分に世の汚れに染まざる様，祈りの家に行きてわが聖日に汝の聖式を捧ぐべし。」（教義と聖約59：9）

私たちは毎週聖餐にあずかるとき，心の中に聖餐の祈りの言葉を思い浮かべて，バプテスマの誓約を新たにする。このバプテスマの誓約に加えて，私たち聖なる神権を持つ者は皆，もうひとつ特別な，神聖でかつ最も重要な誓約を結んでいる。これは「神権に属ける誓約」（教義と聖約84：39）である。この誓約は，教義と聖約第84章に次のように記録されている。

「およそ忠実にしてわが今語れる二つの神権を得，而してその天よりの召を全力を尽して遂行する者たちは，『みたま』により聖められてその肉体再新さる。

これらの者はモーセの息子たちとなり，アロンの息子たちとなり，アブラハムの子孫となり，また教会員にして王国の民となり神の選民となる。

主は言う，またすべてこの神権を受け入るる者は，われを受くるなり。

そは，わが僕らを受け入るる者はわれを受くればなり。

また，われを受け入るる者はわが父を受くるなり。

而して，わが父を受け入るる者はわが父の王国を受くるなり。この故にわが父の持てるすべては彼に与えらるべし。

而してこは神権に属ける誓詞と誓約によりて然るなり。

この故にこの神権を受くる者は，すべてわが父のこの誓詞と誓約とを受け，而してこれをわが父は破ることも変えることも為したもうはずなし。

されど何人にまれ一度この誓約を受けて後これを破り，またことごとくこれに違背する者はこの世に於いても未来の世に於いても罪の赦しを受くることなかるべし。」（教義と聖約84：33-41）

私は以前，もしこの聖句が罰則規定なら，この誓約は受け入れなかった方が良かったのではなかろうか，と考えたことがある。この誓約を破った場合に自分与えられる罰について考えたからである。だが，これに続く聖句に次のように書かれていた。

「而して汝らが受けたるこの神権に来らざる者はすべて禍なるかな。」（教義と聖約84：32）

私にはただひとつのことしかないことがわかった。その誓約を受け入れ，尊ぶことである。これらの聖句から，私が神権を受けながら，その召しを全力を尽して遂行しなければ，永遠の生命を受ける資格を失うことは，すでに完全明白である。また，聖なる神権を受け入れなくても，同様にその資格を失うことであろう。安全な道は，ただひとつしかない。それは，誓約を受け入れて，その誓約の召しを全力を尽して遂行することである。主が次のように言葉を締めくくられたのは，こうした意味があったからだと思う。

「われ今汝らに一つの誡命を与えて汝ら自らを警めしむ。すなわち汝ら永遠の生命なる言に勉めて心を留めよ。

そは，汝ら神の口よる出るすべての言によりて生くべければなり。」（教義と聖約84：43，44）

では，4番目の誓約に移ろう。これまで3つの誓約について考えてきた。福音の「新しく且つ永遠の誓約」，バプテスマの誓約，そして「神権に属ける誓約」の3つである。で

は，これから兄弟たちにお話しする第4の，そしておそらくは数々の誓約の中でも極致とも言える誓約は，日の光栄の結婚の新しくかつ永遠の誓約である。

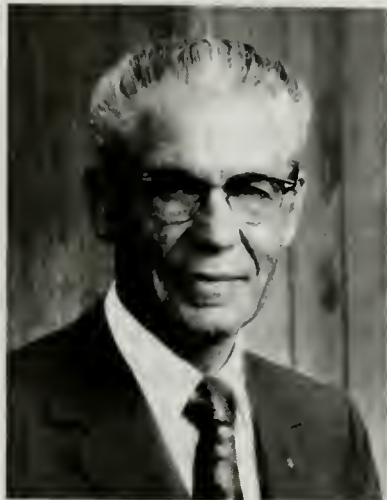
私が今申し上げた一連の神聖な誓約は，その意味が極めて深い。非常に「厳粛」な誓約であるため，主は，「(私たちの) 胸にしかと命ぜよ。(私たちの) こころに……銘記すべし」(教義と聖約43：34) と戒めておられる。

誓約に伴う義務は，その報いを受けたいと望む者が必ず守らなければならないものである。私たち一人一人に責任がある。私たちが交わした誓約を，私たち自身どのように守っていくか，その方法に責任があるのである。また同時に，私たちの管理の下にいる人々が誓約を破った場合，それが私たちがよく教えなかった結果起こったことだとすれば，それについても責任があるのである。

主もそう言っておられるし，私も繰り返して言おう。「長老の職を管理する長たる者の義務は，九十六人の長老を統轄しこれと共に会議を開きて誓約に従いてこれを教うべし。」

さらに主は，神権者の義務に関する偉大な啓示を閉じるにあたって，次のように言われた。「この故に，今や神権者皆各々その義務を覚れ。また己が任命せられたる務めを全く勤勉に勤むべし。

およそ，怠惰なる者はその地位に居るに値せず，またその義務を覚らず信任さるるに足る行いを示さざる者は，その地位にある値なき者なり。」(教義と聖約107：89，99，100)

神の助けがあって，私たちが誓約に従って生活することができるよう，また，主が私たちの責任の下におき，私たちに教えるよう命じられた人々を私たちが正しく教えることができるよう贖い主イエス・キリストのみ名によって祈るものである。アーメン。

彼らは神のほまれよりも，人のほまれを好んだからである

大管長会第一副管長

N・エルドン・タナー

壇上に座って，この歴史的に名高いタバナクルに集う多数の神権者の群れをながめながら，私はアセンブリーホール，ソルトパレス，プロボのマリオットセンター，カナダや合衆国全域の会場，その世界各地でこの大会を視聴している何千何万という男性の姿を心に思い浮かべていた。私は非常に心を動かされ，圧倒される思いであった。それぞれの会場に集い，予言者の声に耳を傾け，主のみ言葉を聞いて自らの生活を建て直し，さらに良き業と生活を始めようという，偉大な権威と権能の力を感じたからである。

これは，これまで集った男性の集会で最大のものである。あなた方の前に立つことは，極めて大きな特権であり，同時にまた重い責任でもある。私は今宵あなた方の前で話す間，主のみたまが引き続き留まって下さるよう，心から祈っている。

まず第一に，私は，教会の素晴らしい若人に心から感謝の意を表したいと思う。あなた方は特に選ばれて神権を持つ者となり，あらゆる国々にあって指導者となっている。また，この偉大な目的のために自らの備えをなして下さっていることにも感謝している。自分が何者であるかを認識し，また自分の責任が何であるかを認識し，さらに，伝道にいくにふさわしい生活をしている若人は，やがて教会にあっても地域社会にあっても，指導者となるであろう。私は今日の社会において青年男女が世の悪に対抗し，神権を尊び，イエス・キリストの教会の会員であることの意味を理解することがいかに困難であるか，よく知っている。

問題を抱えている人もいないではない。私はそのような人々に，悔い改めて義の道を歩み，罪より離れ，忠実な者に与えられる祝福のために自ら備えをなすよう，主のみ名により訴えるものである。あなた方は選ばれて，今日この時代に，この世に送られたのである。私たちの持つ神権は非常に重要であり，私たちの仕事は極めて大切である。福音の教えに従って生活する以上に，大きな喜びと成功をもたらすものはない。模範になっていただきたい。良い影響を及ぼしていただきたい。主から与えられるいかなる召しにも応じられるよう常に備えをなし，ふさわしい生活をしていただきたい。

私たちは皆，主に選ばれた僕として，主のみ業のために予任されてきた。主は私たちを，主のみ名によって行動する神権と権能を受けるにふさわしい者とみなして下さったのである。周囲の人々が，あなた方の指導を仰ごうとして常にあなた方に注目しているということを，絶えず心に留めていただきたい。あなた方は，良きにつけ悪しきにつけ，人々の生活に影響を及ぼしており，その影響は次の世代にも伝えられるのである。

私たちがいかに大きな責任を負っているか，次のような認識に立てば一層力強く説明できるであろうし，またはっきりと理解していただけると思う。世界には，およそ999人にひとりの割合でしか，末日聖徒イエス・キリスト教会の会員は存在しない。また，およそ333人のキリスト教徒に対してひとりの末日聖徒という割合でしかない。

現在，世界中の神権者の数は，人類の歴史が始まって以来最高である。かつてない勢力と影響力を持ち，しかもその重要性は昔と何ら変わらないが，以前にも増して大きな問題とチャレンジを抱えていると言える。世界は，その力と強さと影響力とを必要としている。様々な問題に対応できる指導を必要としており，また世にはびこる悪によって引き起こされる問題に打ち勝つ力を必要として

いる。

主は，正にその目的のために，この末日に主の教会を設立された。教会の将来の進歩は，また事実，世界の将来は，私たちが神権の職をいかに全力を尽くして遂行するかにかかっている。執事，教師，祭司，そしてメルケゼデク神権者は皆，一人一人が救い主と力をひとつにするという責任と特権を受けている。私たちは主のみ手の中にあってその道具となり，さらに，主のみ業と栄光とを達成するため，すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすために主を助けて働くのである。私たちのほかには，これと同じ権能や，このように特別な召しが与えられている人はない。

もし私たち一人一人が神権を尊び，その召しを全力を尽くして遂行し，さらにサタンの攻撃に対抗するために日々あらゆる面でその影響力を駆使しようとするならば，私たちの及ぼす影響の大きさは想像に難く，測り知れないものがある。私たちの中には，神権を受けることを当然のように考えている人があまりにも多いように思われる。主の望んでおられることをまだまだ完全に理解してはいない。必要なときには変人呼ばわりされても正しいことのために立つ，というほどの確信と勇気と不屈の精神が，まだないのである。

学校のグラウンドで遊んでいる子供でも良い影響を与えることができる。フットボールのチームでも，大学の校内でも職場の同僚の間でも，福音に従った生活をし，神権を尊び，正義の立場を取ることにより，無言のうちにも良い影響を与えることができるのである。正しい行ないをしているあなた方を尊敬はしているものの，同じ信仰を持ちながらあなた方を批判したり，嘲笑したりする人も大勢いることであろう。だが，救い主御自身も，その確信を翻そうとしなかったために苦しめられ，馬鹿にされ，つばを吐きかけられ，遂には十字架にかけられたのである。このことを忘れないでいただきたい。主が弱気になって，「一体何のためにこんなことを」と言ってその使命を放棄したとしたら，一体どんなことが起きたか考えてみたことがあるだろうか。私たちは義務を放棄しようとしてはいないだろうか。世の防害や邪悪に対抗して雄々しい僕になろうとしているだろうか。勇気を出して，確信の上に固く立ち，真に心からキリストに従う者のひとりに数えられるよう努めようではないか。

先日，ある人が私にこのようなことを言った。「自分がなにをすればよいのか知っていて，その上一見福音の証を持っていそうでいながら，福音に従った生活をしようとせず，世の反対に抗して固く立つ勇気や強さを持ち合わせていない人々がいます。これはなぜでしょうか。」私は次の様に答えた。「人がその教えや信仰に反するすることに同調したり，実際に行なったりするのには，それ相当の理由があるのではないかと思います。」それから私は聖典の中から数カ所聖句を引用して話した。

「見よ，召される者は多けれども選ばるる者は少し。選ばるることなきは，これぞもそも何の故ぞ。

そは，人々の心甚しくこの世に属けるものの上にあり，唯々人間の誉を得ることをのみ望み，次の如き一つの戒めを知らざるによる。

曰く，神権の権能は天の能力と固く結びつきて離るべからざるもの…なり，と。」(教義と聖約121：34-36)

次に「しかし，このことは知っておかねばならない。終りの時には，苦難の時代が来る。

その時，人々は自分を愛する者，金を愛する者，大言壮語する者，高慢な者，神をそしる者，親に逆らう者，恩を知らぬ者，神聖を汚す者，

無情な者，融和しない者，そしる者，無節制な者，粗暴な者，善を好まない者，

裏切り者，乱暴者，高言をする者神よりも快楽を愛する者，

信心深い様子をしながらその実を捨てる者となるであろう。」(IIテモテ3：1-5)

そして，最後に次の聖句を引用した。「しかし，役人たちの中にも，イエスを信じた者が多かったが，パリサイ人をはばかって，告白はしなかった。会堂から追い出されるのを恐れていたのである。

彼らは神のほまれよりも，人のほまれを好んだからである。」(ヨハネ12：42,43)

今宵，私がお話したいと思うのは，この最後の聖句についてである。

この聖句を聞いていて，自分の態度に思い当るところがあって，心の中につらい思いを抱いている人がどれほど多くいることだろうか。もしそうならば，今宵を期して，自分が何者なのかを忘れてしまったり，世の名声を得ようと思ったりすることを止めて，生活態度を変え，悔い改め，神のほまれと祝福とにあずかることができるように，進んで努力しようではないか。主の僕である私たちにとって，自分が何者であるか常に心に留め，それに従って行動するということは，何と大切なことであろうか。

私が先程申し上げたように，神権者が皆天よりの召しを全力を尽くして遂行したら，私たちは世にあってどれほど良い影響を与えられることであろうか。また神権者が常に義を選んだとすれば，人は皆どれほど幸福になり，成功感を味わうことであろうか。反対に自分が正しいと知っていることをせず，世の名声ばかり

望む人がいるが，そのような人々を見るのはいかにも悲しい限りである。そういう意味で，私は，ある立派な教会員であった人の話を忘れることはできない。彼は，州議会議員に選ばれたあと，仲間のだれからも良く見られたいと思うようになった。彼は，人に名前を知られたいがために，自分の標準を下げ，ある会合で一杯，また他の会合で一杯と酒を飲んでしまった。そのようなことが何度も続き，とうとう彼は，昼食のときでも夕食のときでも，仲間と一諸に酒を飲むようになった。そしてさらに，これは彼の意図しなかったことであろうが，その大望に反して，彼はアルコール中毒になってしまったのである。その結果，選挙民の支持を失い，彼を愛し，彼のために悲しんでくれる友人や家族の尊敬を失い，やがてアルコール中毒患者として早死にしてしまった。何と悲しい事例であろうか。これも皆，彼が神のほまれよりも人のほまれを好んだからである。

だが，事例はこれだけにとどまらない。私たちは，下院議員や上院議員がその地位と自尊心と，他人からの尊敬を失った例を知っている。それは彼らが名声を欲し，誘惑に抵抗する強さを持ち合わせていなかったために起きたことなのである。私たちには主の約束が与えられている。まず神の国と神の義とを求めるならば，これらのものはすべて添えて与えられるという約束である。むろん，これらのものすべてとは，私たちのためになるもののことである。

人々は，私たちが私たち自身の標準に従って生活するように期待しているし，またそのように生活するときに一層尊敬の念を抱くものである。もちろん，私たちを他の道に進ませようとすることもあるかもしれないが，人々には私たちへの期待感が常にあることを絶えず心に留めておこうではないか。

私はあなた方に証を述べたいと思う。私はこれまでの政界，実業界での経験を通じて，そして個人生活の面でも，福音の教えに従って生活しようとして不都合なことに出会ったことがなかった。また決して妨害を受けたこともなかった。むしろその逆で，主から賞賛と祝福を受けたと感じている。また，いつでも，強さと導きとを求めて主に呼びかけることが容易であったし，事実そのようにしてしばしば強さと導きとを得た。

私の申し上げたいことは，まず神の国と神の義とを求める人すべてに対して，主はその約束を果たして下さるということである。

最も大切なことは，四六時中警戒を怠らず，決して，人気を集め，人のほまれを得るという目的で，自分の標準を放棄してはならないということである。教会幹部のひとりが，祭司のときに経験した出来事を話してくれたことがある。今，仮に彼のことをジョージと呼んでおこう。あるとき，彼の友人が，ガールフレンドをパーティー会場から彼女の家に送っていくことになった。ところが彼女の妹も一緒だったため，ジョージは彼から妹を送ってくれるよう頼まれた。ジョージは引き受けた。しかし，家へ着いて間もなく，居間に一緒に座っていると，その女の子が突然立ち上がって電灯を消すと，戻って来て彼のひざの上に座り，彼を誘惑し始めた。彼は，拒めば自分の人気が落ち，侮辱されることもわかっていた。しかし彼はそれを拒むと立ち上がって，家へ帰ってしまった。彼はこの話をしながら，多くの人々は自分のことをいくじなしだと思うだろう，でも自分はエジプトに売られたヨセフの話を非常によく覚えていた，と語った。

「ある日ヨセフが務をするために家にはいった時，家の者がひとりもそこにいなかったので，彼女（ポテパルの妻）はヨセフの着物を捕えて，『わたしと寝なさい』と言った。ヨセフは着物を彼女の手に残して外にのがれ出た。」（創世39：11，12）

このためにヨセフがどれほどの苦しみを受けたか，また主からどれほどの祝福を得たか，私たちはよく知っている。

ジョージは続けて次のように言った。「私が彼女と一緒にいたら，どんなことが起きたことか。考えただけでもぞっとします。そんなことをしていたら，私は主の僕としてここにいることは決してなかっただろうとよく思います。」あるとき，この話をひとりの青年に話したことがあるが，彼は「相当な決断力がないとそういった行動がとれませんね。」と答えた。私はそれ以来，同じような状況のもとで正しい決断を下すためには，確かに根性と気骨と意志の力がいるということをよく考えるようになった。誘惑に負けるということは，すなわち弱いということである。どんなに信仰の強い人でも，絶えず警戒する必要があるのである。

このように，私たちの決断や行為によって自分の生涯が左右されることがたびたびある。青年の中にも，大人の中にも，このような試練にあっている人が多い。またその他にも様々な種類の誘惑があって，その忠実さや性格の強さが本当に試されている。自分が何者なかを絶えず心に留め，神が見守っていて下さることを覚えていれば，そのような誘惑を避けることも，それに抵抗することも可能である。火遊びには必ずやけどの危険がつきまとうことを，いつも心に留めておいていただきたい。

家族のために生計を維持し，また立派な市民として地域社会と活動に

参加するのは大切なことである。だがそのために，神に召され選ばれた子供としての，また神権者としての義務や責任を忘れたり，無視したりするほどにこの世のことに巻き込まれるようであってはならない。私たちは絶えず警戒していなければ，まっすぐで狭い道からしだいにはずれ，やがて，完全に道に迷って，自分にも家族にもそして主にも大きな失望を与えるようになり，自分の意志や目的や希望とは全く異なったものになってしまうであろう。

私はこの種の話をよく耳にする。人は自分が何者かを忘れて，仲間の中で人気者となり，彼らのほまれを得ることを望むのである。運動選手の中には，成功したいという気持やほまれを得たいという気持で無我夢中になってしまい，神より与えられた務めや，神から認められることの大切さを忘れてしまう人がよく見受けられる。このような人は結局，方向を見失ってしまうのである。同じことが，政治家にも，慈善事業団体の会員にも，専門職に携わる人にも，実業家にも言える。ほまれや名声に対するこの願望は，少なからず人の行動を左右する。そしてその誘惑に屈服するとき，自分ではほんのおつきあいだと思っても，実際には自分の性格までもねじ曲げてしまうのである。

先日，この問題について話し合っているとき，私にこんなことを言った人がいる。それは，神のほまれよりも人のほまれをいつも愛する人は，だんだんとサタンの部下らしくなっていく，ということである。このサタンは，前世にいたとき，全人類を救おうと申し出た者である。だがひとつの条件があった。名誉と栄光を，神にではなく，自分自身に帰するよう求めたのである。サタンは，結果よりも，ほまれの方に関心があった。栄光とほまれこそが目的なのであった。私の友人は，さらに話を続けた。もし人が神を喜ばせることよりも，人を喜ばせることに関心を持ち続けていたら，その人は結局，サタンと同じような苦汁をなめることになるであろう。人のほまれを求める者は，他人の助けとはならず，傷つける破目に陥る場合が多いからである。それと言うのも，私利私欲に走って一時的なことしかせず，何ら永続性のあること，有益なことをしないからである，と言うのである。

神が私たちに向けられる愛と思いやりが永続するのに対し，人のほまれはつかの間のものであって必ず失意を招くことを私たちは知っている。私たちが自らふさわしいことを知って神より賞賛の言葉をいただくとき，どれほど大きな満足感を味わうことであろうか。

キリストの教えを信ずる者にとって，全く言語道断と言えることがある。それは，高い地位にある人々が，声を大にして不道徳を勧め唱道している人々のほまれを得ようとして，こうした邪悪にさして反対することもなく，キリストの教えに水をさしているということである。キリストは，十戒の中で明確に次のように言っておられる。「あなたは姦淫してはならない。」（出エジプト20：14）

さらにコリント人への第一の手紙にも，次のように書かれている。

「それとも，正しくない者が神の国をつぐことはないのを，知らないのか。まちがってはいけない。不品行な者，偶像を礼拝する者，姦淫をする者，男娼となる者，男色をする者，……は，いずれも神の国をつぐことはないのである。」（Ⅰコリント6：9，10）

私たちはまた主のみこころに反するような法案がすでに立法化され，現に立法化されつつあることを知っている。それは，最も悪らつで勝手な法律である。兄弟たちよ，主は私たち神権者が義に固く立ち，全勢力を用いてそのような行為に反対し，止めさせ，さらに，主イエス・キリストの教えに従って生活することを全教会員に勧めるよう望んでおられる。

ここで，ニール・マックスウェル長老の文を引用しよう。

「指導者の中には，進んで厳しいことを言う人がいる。だがその内容は真実で，語る必要のあることである。そのように厳しいことを言う指導者は，本当に人々を愛し，人々のことを思いやっている人なのである。自分に従う人からほまれとかっさいを得るために，人を安全な道から誘い出して，２度と浮かび上がれない泥沼に追い込むような指導者ほど冷酷な指導者はない。まっすぐで狭い道は，正にその通り，まっすぐで狭いのである。それは，険しい上り坂の旅である。地獄に至る道は，道幅も広く，ゆったりとした下り坂である。そして，その道を歩いている人たちは自分が下っていることになかなか気が付かない。人のほまれに気が散って下り坂に気が付かないこともある。そのために警戒信号も見落してしまう。金の小牛をとるか，十戒をとるかの選択は，今でも続いているのである。」（「ある考え」と題してニール・A・マックスウェル長老からタナー副管長宛に送られた1975年8月12日付，未刊行書簡）

全くもってその通りである。パウロがテモテにあてた警告も，今なお同じように通用するであろう。

「神のみまえと，生きている者と死んだ者とをさばくべきキリスト・イエスのみまえで，キリストの出現とその御国とを思い，おごそかに命じる。

御言を宣べ伝えなさい。時が良く

ても悪くても，それを励み，あくまでも寛容な心でよく教えて，責め，戒め，勧めなさい。

人々が健全な教に耐えられなくなり，耳ざわりのよい話をしてもらおうとして，自分勝手な好みにまかせて教師たちを寄せ集め，そして，真理からは耳をそむけて，作り話の方にそれていく時が来るであろう。」（IIテモテ４：1-4）

末日聖徒イエス・キリスト教会の会員であるということは，何と幸運なことであろうか。この教会には，四大標準聖典，すなわち，聖書，モルモン経，教義と聖約，高価なる真珠に記された完全な福音がある。また，神の予言者がいて，神はこの末日に私たちを導くために，この予言者を通して語っておられる。

使徒行伝から読もう。「この人による以外に救はない。わたしたちを救いうる名は，これを別にしては，天下のだれにも与えられていないからである。」（使徒４：12）

ヨシュアが言ったように，私たちも勇気と力強さと理解力と熱意と決断力とを持とうではないか。「あなたがたの仕える者を，きょう，選びなさい。ただし，わたしとわたしの家とは共に主に仕えます。」（ヨシュア24：15）

心からへりくだって，イエス・キリストのみ名によりお祈り申し上げる。アーメン。

神権者の特権

大管長

スペンサー・W・キンボール

兄弟の皆さん，私達が22万5,000人の男性からなる大会衆の一員であるということは，考えただけでも非常に胸の高なることである。この中には，膚の色の異なる方も，顔つきの違う方もおられる。しかし，皆，神権者であることに変わりはない。私たちは，神権者を皆愛している。また今宵，この偉大な大会に共に集まって下さったことを感謝している。

今宵，この会場で数々の大切な教えを聴いてきた。私はここで多少の息抜きに，ひとつの短い話をしたい。ここに集まっている若い諸君は，神権者になる前に，皆，信仰箇条を勉強したことと思う。皆さんは，まだ信仰箇条を覚えているだろうか。しかも，一語一句正確に覚えているだろうか。もし信仰箇条を完全に覚えているなら。家へ帰って，お父さんの前でそれを暗唱してみていただきたい。

数年前のことである。初等協会に出席しているひとりの男の子が，カリフォルニアへ行く列車に乗っていた。その子はひとりきりで窓際に座り，飛ぶように過ぎ去っていく電柱をながめていた。通路をはさんで，やはりカリフォルニアへ向うひとりの紳士が座っていた。その紳士は，小さな男の子が友人や親戚の連れもなく，ただひとりで旅行しているのに興味を引かれた。男の子は小さいながら，服装はきちんとしていたし，行儀もよかった。この紳士は，その少年にとても感銘を受けた。

しばらくすると，紳士は通路を横切って少年の隣りの席に座り，声をかけた。

「こんにちは，どこまでいくの。」

「ロスアンゼルスです。」

「親戚でもいるのかね。」

「はい，ロサンゼルスに。今ひとりで旅行していますが，おじいさんとおばあさんの所へ行くんです。おじいさんとおばあさんが駅まで来てくれます。学校が休みなので，少しの間そこにいるつもりです。」

「君はどこから来たの。どこに住んでるの。」

「ユタ州のソルトレーク・シティーです。」

「おお，それじゃ，君はモルモンだね。」

「はい，そうです。」少年は誇らしげに答えた。

「それはおもしろい。私は，モルモンのことや，モルモンの信仰のことについてわからないことがあるんだよ。モルモンの造った美しい町を訪れたこともある。建物は美しかったし，通りには街路樹が植わっていたし，家並もきれいだった。美しいバラや花の咲き誇った花壇も見事だった。でも，どうしてモルモンがあんなに素晴らしい人たちなのか，まだ調べてみたことがないんだよ。モルモンがどんなことを信じているのか，知りたいと思っているんだがね。」

「では，ぼくたちが信じていることを御説明します。『われらは，永遠の父なる神と，その御子イエス・キリストと聖霊とを信ず。』(信仰箇条第1条) これが第1です。」

この実業家は，これを聞いていささか驚いたが，熱心に耳を傾けていた。少年は続けた。「『われらは，人は皆各々其身にてなしたる罪に対して罰を受け，アダムの咎に対して罰を受けざることを信ず。』(信仰箇条第2条) これが第2です。」

この旅の紳士は心の中で思った。「こんな小さな男の子が，これほど大切なことを知っているなんて，これは並のことではないぞ。」

少年はさらに続けた。「『われらは，キリストの贖罪により，すべての人類は，福音のおきてと儀式とを守ることによりて救われ得ると信ず。』(信仰箇条第3条) これが第3で

す。」紳士はこの小さな男の子の言葉にすっかり驚いてしまった。まだスカウトの年齢にもなっていない少年なのだ。だが，その少年は一向に構わず，信仰箇条第４条を続けて言った。「『われらは，福音の第一原則と儀式とは，第１，主イエス・キリストを信ずる信仰，第２，悔改め，第３，罪の赦しを受くるために水に沈めらるるバプテスマ，第４，聖霊の賜を授かるための按手礼，なることを信ず。」

「全く素晴らしい。君が，君の教会の教えをあんまりよく知っているので，びっくりしたよ。なかなか賢いね。」

相手のよい反応にますます勇気を得たジョニーは，さらに続けた。「『われらは，福音を宣べ，且つその儀式を執り行うためには，啓示と，権威ある者の按手により，神によりて其任に召されねばならぬことを信ず。』（信仰箇条第５条）これが第５です。」

「それは，道理にかなった教義だね，人がどういうふうに神から召されるのか，知りたくなってきたよ。人がどのように召しを受け，按手されるのかはよくわかったが，でも，どういう人が福音を宣べたり，その儀式を執り行なったりする権能を持つのかね。」

ふたりは，召しや支持や按手のことについて話した。そして，少年が言った。「もっとお知りになりたいですか。」

紳士は，年端のいかない子供が，教会の教えをこれほどまでに詳しく知っているとは並大抵のことではないと思い，言った。「そうだね，続けてくれるかい。」

そこでジョニーは暗唱を続けた。「『われらは，教会には，初期の教会に在りたると同一の組織，すなわち使徒，予言者，監督，教師，祝福師等のあるべきことを信ず。』（信仰箇条第６条）これが第６です。」

それから，このことに関連して話が続いた。「そうすると，君の教会には，ヤコブやヨハネやペテロやパウロのような使徒とか，モーゼやアブラハムやイサクやダニエルのような予言者がいるというんだね。しかも，祝福師までいるんだね。」

その少年は，その質問にすぐに答えた。「はい，祝福師もいます。聖書には，祝福師のことが伝道者となっています。祝福師は教会のステーキ部のある所で召されます。そして，祝福の欲しい教会員には皆，神の霊感によって，祝福師の祝福というのを授けるんです。ぼくも自分の祝福師の祝福を受けました。そして，祝福文をたびたび読んでいます。また，ぼくたちの教会には，使徒が12人います。昔の使徒と全く同じ召しと権能を持っている使徒です。」

紳士は，次のような質問で問い返してきた。「君たちは，異言を語るかね。啓示や予言を信じているのかね。」

すると少年は，目を輝かせて答えた。「『われらは，異言を語る力，予言する力，啓示，示現を受くる力，病を医す力，異言を釈く力等の賜あることを信ず。』（信仰箇条第７条）これがぼくたちの信じている７番目のことです。」

紳士は息が止まる思いだった。「そうすると君たちは聖書を信じているんだね。」

少年はまた答えた。「その通りです。『われらは，正確に翻訳されたる限り，聖書は神の御言葉なりと信ず。またモルモン経も神の御言葉なりと信ず。』（信仰箇条第８条）これが第８番目のことです。」

紳士は，私たちが聖典も啓示も信じていることがわかった。少年はさらに暗唱を続けた。「われらは，すべて神のこれまでに啓示したまいしこと，すべて今啓示したもうことを信じ，なお今より後，神の王国につきて多くの偉大にして重要なることを啓示したもうことを信ず。」（信仰箇条第９条）「われらは，イスラエル人は，文字通りに四方より集合し，その十支族の元に立ちかえることを信ず。われらは，シオンはこの（アメリカ）大陸に建てられ，キリストは御自ら地上に王となりて治めたまい，地球は元にあらたまりて楽園の栄えを受くることを信ず。」（信仰箇条第10条）

紳士はじっと耳を傾けていた。彼は，通路の反対側の自分の席に戻ろうなどとは，みじんも思わなかった。ジョニーはさらに続けた。「われらは，自らの良心に従い，全能なる神を礼拝する特権ありと主張す。また，われらは，すべての人々にこの特権を許し，何所なりとも，如何様なりとも，または何なりともこれを礼拝することを妨げず。」（信仰箇条第11条）。「われらは，王，大統領，統治者，長官に従うべきを信じ，また法律を守り，敬い，支うべきを信ず。」（信仰箇条第12条）

そして，遂に最後まで来た。少年は信仰箇条の第13条を暗唱し始めた。「われらは，正直，真実，貞潔，慈善，高徳なるべきこと，およびすべての人に善を行うべきを信ず。まことにパウロの訓戒に従うというを得べく，われらはすべてのことを信じ，すべてのことを望む。すでに多くのことを堪え忍びたれば，あらゆることを堪え忍び得んことを望む。もし何にても，徳高きこと，好ましきこと，よく聞えあること，あるいは褒むべきことあらば，われらはこれをたずねもとむるものなり。」

少年は，信仰箇条を全部暗唱し終わって，ホッとした様子だった。紳士は，はた目にもわかるほどかなり

興奮していた。教会のプログラムの概略を話してくれたこの少年の能力に感銘しただけでなく，教会の教義の見事なまでの完璧さに敬服したのであった。

紳士は言った。「ロサンゼルスに2日間ほどいて用事をすませたら，ニューヨークへ帰るつもりでいたんだよ。でも，会社へ電話して，1日，2日遅らせることにしよう。そして帰りにソルトレーク・シティーに立ち寄って，教会の訪問者センターで，君の話してくれたことについてもっと詳しく聞いてみることにするよ。」あなたがたのうち，何人が信仰箇条を覚えておいでだろうか。若い人たちだけでなく，大人の方にも尋ねたい。信仰箇条を覚えておいでだろうか。今の話と一緒に暗唱できただろうか。信仰箇条を覚えていれば，いつでも説教の準備ができていることになる。しかも，信仰箇条は，一番の基礎となるものではないだろうか。子供たちが皆信仰箇条を学び，それを完全に覚えたら，どれほど素晴らしいことだろうか。一言一句間違わずに言えたら，本当に素晴らしいと思う。

私がどのようにしてそれを覚えたか，お話したいと思う。以前にもお話したと思うが，私は乳しぼりを日課としていた。その頃の私は指2本でしかタイプライターを打てなかった。そんな手つきで，私は小さなカードに信仰箇条を全部タイプしたものであった。そして，さくの中で腰かけに座って乳しぼりをしている間中，私はそのカードを傍らにおいて，何度も何度も復唱したのである。ともかくも私は，そのようなことを何度も繰り返して，遂に信仰箇条を全部言えるようになった。しかも一語一句間違わずに言えるようになったのである。このことは私にとって大変価値があったと思う。若人諸君も，私と同じように覚えていただけないだろうか。

さて次に，もう少し年長の人には，聖典を引用してお話したいと思う。パウロの書いたヘブル書から聖句を読みたい。

「神は，むかしは，預言者たちにより，いろいろな時に，いろいろな方法で，先祖たちに語られたが，この終りの時には，御子によって，わたしたちに語られたのである。神は御子を万物の相続者と定め，また，御子によって，もろもろの世界を造られた。

御子は神の栄光の輝きであり，神の本質の真の姿であって，その力ある言葉をもって万物を保っておられる。そして罪のきよめのわざをなし終えてから，いと高き所にいます大能者の右に，座につかれたのである。

御子は，その受け継がれた名が御使たちの名にまさっているので，彼らよりもすぐれた者となられた。」（ヘブル1：1—4）

この聖句を読むと，教義と聖約132章の聖句を思い出す。この章の中で，主は，ロムニー副管長がお話し下さったように，この新しくかつ永遠の誓約を受け入れ，また様々な誓約に従って生活した人たちは皆天使よりすぐれた者となると約束しておられる。このような人たちは，天の門を守護している諸天使諸神の前を通りすぎて，進んでいくのである。

「いったい，神は御使たちのだれに対して，『あなたこそは，私の子。きょう，わたしはあなたを生んだ』と言い，さらにまた，『わたしは彼の父となり，彼はわたしの子となるであろう』と言われたことがあるか。」（ヘブル1：5）

諸天は天使たちで満ち充ちているかもしれないが，天使たちは，神の御子と同じような存在ではない。また，あなた方とも同じ存在ではないと申し上げたい。あなた方は，約束された祝福によって，主の王国で昇栄にあずかることのできるというこの高い召しにふさわしい人々なのだからである。

「さらにまた，神は，その長子を世界に導き入れるに当って，『神の御使たちはことごとく，彼を拝すべきである』と言われた。」（ヘブル1：6）

この御方が神の御子である。私たちが，心を尽くし，思いを尽くし，勢力を尽くし，体力を尽くして礼拝しているイエス・キリストである。イエス・キリストこそ，神の御子なのである。

「こういうわけだから，わたしたちは聞かされていることを，いっそう強く心に留めねばならない。そうでないと，おし流されてしまう。」（ヘブル2：1）おし流されてしまう。この偉大な神権プログラムを進めて行くとき，私たちが決して，この栄光あふれる事柄をおし流してしまうことのないよう，切に望んでいる。

「わたしたちは，こんなに尊い救をなおざりにしては，どうして報いをのがれることができようか。この救は，初め主によって語られたものであって，聞いた人々からわたしたちにあかされ（たのである。）」（ヘブル2：3）

ペテロ，ヤコブ，ヨハネ，パウロ，その他の兄弟たちから私たちは，この尊い救いの計画を聞いた。そしてこれらの人々は，その計画を主御自身から聞いていたのである。

「なぜなら，万物の帰すべきかた，万物を造られたかたが，多くの子らを栄光に導くのに，彼らのの君を，苦難をとおして全うされたのは，彼にふさわしいことであったからである。」（ヘブル2：10）

兄弟たち，今宵，この話を聴いておられる22万5,000人の兄弟たち。私はあなた方がすべて神々になり得る

と考えている。宇宙には，まだまだ多くの空間がある。主がその方法を知っておられることは，すでに明らかである。主は，私たち22万5,000人全員のために諸々の世界を造って下さることであろう。恐らく私たちも，この業を助けることになるに違いない。

様々な可能性について，また栄光ある末来について考えていただきたい。たった今生まれたばかりの子供でも，この栄光あふれる計画を受け継ぐことができるのである。その子供も成長し，やがて美しい女性に出会う。ふたりは聖なる神殿で結婚し，主のすべての戒めを守って生活し，自らを清く保つ。ふたりは神の子となり，偉大な計画を推し進める。天使の前を通り過ぎ，また天を守護している諸天使諸神の前を通り過ぎる。こうしてふたりは昇栄に達するのである。

教義と聖約132章に，アブラハムもこのようにして与えられた戒めをすべて受け入れたと書かれているのを覚えておられることと思う。アブラハムはすでにその王座についたと書かれている。彼はすでに昇栄に達したのである。もちろん，彼が死んでから，すでに数千年を経ている。再びパウロの言葉を引用しよう。「このように，子たちは血と肉とに共にあずかっているので，イエスもまた同様に，それらをそなえておられる。それは，死の力を持つ者，すなわち悪魔を，ご自分の死によって滅ぼ」すためである。（ヘブル2：14）これは，死の支配を受けたのち，死からよみがえって復活体となることによって，可能になった

「確かに，彼は天使たちの性質を継いだのではなくアブラハムの血統を継がれた。」（欽定訳ヘブル2：16）

こうして，アブラハム，イサク，そしてヤコブ，さらにはダビデを経て，つまり主は，アブラハムを通じて生れ，神の御子となられたのである。

「そこで，天の召しにあずかっている聖なる兄弟たちよ。あなたがたは，わたしたちが告白する信仰の使者また大祭司なるイエスを，思いみるべきである。（イエスもここにおられる多くの人々と同じように大祭司である。また，この壇上の幹部たちと同じように使徒である。）

おおよそ，家を造る者が家そのものよりもさらに尊ばれるように，彼は，モーセ以上に，大いなる栄光を受けるにふさわしい者とされたのである。

『……だから，わたしはその時代の人々に対して，いきどおって言った，（主はこのように言われた。ここで言う人々とは，エジプトにいた人々であって，エジプトで捕われの身になっていた人々である。）だから，わたしはその時代の人々に対して，いきどおって言った，彼らの心は，いつも迷っており，彼らは，わたしの道を認めなかった。

そこで，わたしは怒って，彼らをわたしの安息にはいらせることはしない，と誓った』。」（ヘブル3：1,3,10,11）

安息というと，ぶらぶら散歩したり，戸外に出て草の上に横になったりすることなど，くつろいだ状態のことを考えがちである。しかし，そのようなくつろいだ状態は，主が語っておられる安息とは異なる。安息を得る人とは，最も活動的な人であり，最も一生懸命働く人であり，最も時間を有効に用いる人であり，最も天父に近い生活を送る人である。様々の労苦からは解放されるが，決して自分の業を放棄することはない。

次に，他の聖典からもう少し引用してお話したいと思う。高価なる真珠から引用する。もちろんこの会は神権会であるから，あなたがたは全員神権を持っておられるはずである。神権を持つということは，まことに偉大な特権である。ここで少し，父祖アブラハムの言葉の中から読んで，神権を持つことがアブラハムにとってどれほど大切なことであったか説明したいと思う。アブラハムは次のように語っている。

「また，わがために更に大いなる幸福と平安と安息とあるを知りたれば，（この安息が，先程私が述べた安息のことであり，皆さんはこの安息を得るために励んでいるのである）われは先祖の祝福と，この祝福を他に施す職に按手聖任されんことを乞い求めたり。而して，われは義に随う者なりければ偉大なる知識ある者たらんと望み，義に随う更に大いなる者たらんこと，また更に偉大なる知識を持ち多くの国民の父，平和の君たらんことを望み，また数々の教えを受けんこと，神の誡命を守らんことを望みたれば，われは先祖に属ける権能を保つ正当の世嗣，大祭司となりたり。」（アブラハム1：2）

アダムからノアまで10代，さらにノアからアブラハムまで10代であったと思う。アブラハムは先祖の祝福を受け継いだ。ではこの先祖とはだれのことであろうか。それは，最初の時代に，諸国にあって族長となった義人たちのことである。

アブラハムはさらに次のように言っている。「この権能は先祖よりわれに授けられたり。そは先祖より伝えられ，時の始めより（これはいつのことであろうか。アダムが初めて地上に置かれたときのことである。）まことに太初よりすなわち創世の前より今日に至るまで伝えられしものなり。こは誠に長子の権能にして，最初の人すなわちわれらが最初の父なるアダムに授けられ，先祖を通じてわれに至る。

われは，神が子孫に就きて先祖に与えられし任命に従い，われを神権者に任命したまわんことを乞い求めたり。」（アブラハム1：3，4）

これこそ，私たちが生まれ落ちたときから受け継いでいるものである。私たちに必要なことは，この祝福を受けるにふさわしくなることである。この祝福なくして，私たちは神殿へ行くことはできないし，神殿へ行かずに結び固められることはない。そうすれば，永遠に家族を持つことはできないし，私たちの業を進めていくこともできないのである。

「わが先祖は，彼らの義と主なる彼らの神が与えおかれし数々の聖なる誡命より背き，異教徒の神々を礼拝して全くわが声に聴き従うを拒みたり。」（アブラハム1：5）

そのためにアブラハムはその地を去らなければならなくなった。彼はカルデアを去って川沿いに北上し，ハランに着いた。現在のトルコである。そして，そこからパレスチナへ向かったのである。

このように聖句を読んで退屈でなければ，もう2，3カ所読んで，それで話を結びたいと思う。

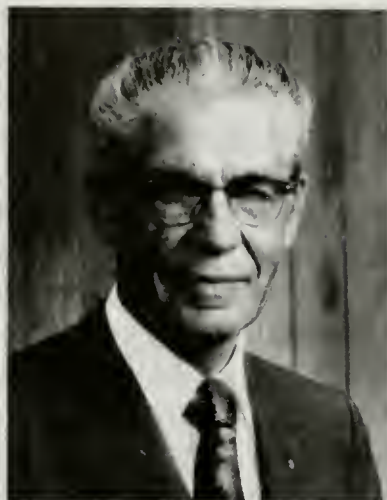
「而して，神の声われに至れり。（これは，主が祭壇上のアブラハムの命を取ろうとしていた男を打たれた直後のことである）……わが名はエホバなり。われ汝の祈りを聞きて降（くだ）り来れるは，汝を救い，また汝を父の家よりすべての親族より離して汝の知らざる他国に連れ行かんためなり。……

ノアにありし如く，汝にもまた然あらん。されど汝が導きと教えを施す業によりて，わが名はとこしえにこの世に知らるべし。」（アブラハム1：16,19）さらに「われ……汝にわが名……を被らしむべし。」（アブラハム1：18）そのわが名とは，イエス・キリストのみ名のことである。神権は「神の御子の神権の聖なる神権」（教義と聖約107：3）と呼ばれている。後に，メルゼデクの名前がこの神権を指す名称として与えられた。それは，神の御子のみ名を繰り返し使うことを避けるためである。これに関連して，私は度々，教会員が神のみ名をあまりにも気軽に使い過ぎているように感ずることがある。主は，繰り返しを避けるために，この神権にメルケデク神権という名称を与えられたが，これはその点で良い模範である。

最後に，話を終える前にもう1カ所，アブラハムの言葉を引用したい。「されど，われは今後われ自らよりさかのぼりて創世の前に至る年代記を描かんと努むべし。そはわれがその記録を手に入れし故にして，今に至るまでこれを所有せり。（これは，この大会の会期中，私たちが思い巡らしてきた他の業と考え合わせてみると，極めて大切なことである）

されど，神権の権能に関する先祖すなわち族長らの記録は，主なるわが神わが手の中に守り置きたまいぬ。この故に創造の始まりの知識も，また諸々の遊星，諸々の星の知識もこれらが先祖に知られたるままわれ今日まで守り来れたり。されば，わが後に来たるべき子孫のため，この記録にある若干（なにがし）かのことを努めてここに誌すべし。」（アブラハム1：28,31）

兄弟たち，神権を持つということは，本当に意味深いことである。執事から教師，祭司へと昇進できる神権を持ち，さらには，永遠に続く神権，すなわち私たちがふさわしい限り永遠に存続し，私たちの盾ともなり，永遠の世界に至る道ともなる神権を持つということは，本当に意味深いことなのである。私は，主が私たちを祝福して下さって，私たちが長老であることを決して当然のことと思ったり，普通のことだと思ったりしないよう，切に祈っている。「彼はただの長老さ」「彼はただの七十人さ」「彼はただの大祭司さ」というような言葉も聞かれる。大祭司，その大祭司であるということは，どのような人の生涯にあっても，必ず大きな意味を持つのである。それを軽んじ，とりたてて素晴らしいものと考えない人は，それを通じて与えられる祝福を決して理解することはないであろう。

これは皆，教会の教義からの教えである。主は言われた。「主は全能の神である」「私はイエス・キリストである。」「私はエホバである」と。主こそ，私たちの礼拝している御方である。私たちの歌う歌は，そのほとんどが主についての歌である。私たちの祈りは皆，主についての祈りであり，私たちの集会での話は，主についての話である。私たち主を愛し，敬愛している。私たちは，今この時から，再び，三たびそして四たびと，主に一層近く生活し，主の与えて下さった約束と祝福に適った生活をすると約束し，この身を主に捧げるのである。このことを，愛の限りを尽くして，イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

神の律法

大管長会第一副管長

N・エルドン・タナー

この美しい安息日の朝，テンプルスクウェアのこの歴史的なタバナクルにおいて大勢の会衆を前にし，また他の場所において本大会の模様を視聴しておられる多くの人々のことを心に思い浮かべながらこの話をするにあたって，「みたま」と主の祝福が私たちにあるようへりくだって祈るものである。

この偉大な国，アメリカ合衆国の200年祭のことを述べるとき，私は，主がその予言者を通じて下された，ふたつの重要な言葉を思い起こす。

「ごらん，この土地はすぐれた土地であるからこの土地を所有する民はこの地の神に事えさえすれば，奴隷とならず自由を奪われず天下のどのような国からもすべて支配を受けることがない。この地の神とは私たちがすでに記した言葉によって明らかに示されるイエス・キリストである。」(イテル2：12)

また主は言っておられる。

「われ実にこの目的のためにわが挙げたる賢き人々の手によりてこの国の憲法を制定せしめ，流血によりてこの国を贖えり。」(教義と聖約101：80)

私たちが現在住んでいるこの国の真の価値を認める人々と共に，また，合衆国憲法起草者が定めた民主主義の原則の維持と強化に努めようと決意している大勢の国民と共に，私は真心から力を合わせて働きたいと願っている。

いつか，ひとりの若者から次のように言われたことがある。「なぜこのように多くの法律や規則や規定があるのでしょうか。どうして私たちは自分のしたいことを自由に行なえないのですか。人がこの世にいるのは幸福を得るためであって，人に与えられている最大の賜は自由意志であると教会は教えているでしょう。」

そこで私は彼に，宇宙におけるすべてのものは，創造主なる神によって組織された宇宙自体でさえも，自然の法則として知られている法によって治められていることを説明した。私たちは，秩序を保ち，人類の権利を擁護し，他人の権利を犯す人々を罰するために，国の法律，すなわち人の定める法律が必要であることも，彼に説明した。そしてその例を幾つか挙げた。それから私たちは，神の律法と，神の戒めを守ることの大切さについて，かなり細かい点まで話し合った。

きょうは私たちの交わした会話がどうかというのではなく，法が人類に及ぼす影響の大きさについてお話したいと思う。そのために，法を3つに分けたいと思う。第1は自然の法則，第2は人の定めた法律すなわち国の法律，第3は人の救いと昇栄に関わる神の律法である。

まず自然の法則についてお話しよう。皆さんは，毎朝決まった時刻に昇る太陽が昇ってこなくなったら，どのようなことが起るか考えたことがあるだろうか。地球が1日だけ自転を止めたらどうだろうか。1日と言わずとも，ほんの数分でもいい。重力の法則が働かなくなったらどうだろうか。ごく短期間の内に，地球と全人類は滅びるであろう。宇宙の全天体は宇宙空間内でコントロールされ，法則によって運行している。

もし鉄が熱せられたときに，ある日は膨張し，別の日には収縮するとしたら，世の人はだれも機械工場を営むことができないし，いかなる種類の器具も造ることができない。これらの法則は不変である。私たちがいつも，いかなる状況の下にあっても依存することのできるような法則でなければならない。

私たちが毎日行なっているすべての事柄を振り返り，いかに自然の法則に依存しているか，また私たちの

目的を遂げるためにどれほど文字通りにそれらに従わなければならないかを考えてみると興味深い。

私たちは人間が月面を歩くのを見た。また，異なった国の人と宇宙船が宇宙空間でランデブーできたことに驚異の目を見張った。生命の有無を調査する使命を帯びて火星に向かった宇宙探査ロケット，バイキングをも見た。もしもいずれかの自然の法則が働かなかったら，宇宙計画は完全な失敗に帰し，生命は失われていたことだろう。私たちは天文学者の予告を読むと，畏敬の念を覚える。彗星の出現や日食，月食を非常に正確に予知することができるからである。

これはすべて，創造主が自然の法則によって，創造物をその中に保っておられることになる。

法則とは真理の応用にほかならない。偉大な思索家の著書から引用した次の言葉に注意を向けていただきたい。

フランク・クレインは言っている。「真理は宇宙の条理である。それは行く末の論究であり，神のみこころである。従って，人が発明し，あるいは発見するもので，それに代わり得るものは何もない。」（レオ・J・ミュア，*Flashes from the Eternal Semaphore*「永遠の信号機が投ずる光」p. 100）

W・ドクリフは言っている。「基本的な真理には，推移するものは何もない。真理の意味に関する知識は増し，真理の応用法は変わることがある。しかし，真理の偉大な原則は永遠に同じである。」（同上，p. 101）

主はジョセフ・スミスに下した啓示の中で，次のように宣言しておられる。

「また誠にわれ汝らに告ぐ。彼は昔より万物に一つの律法を与え，この律法によりて万物は時と期に随い運行を止めざるなり。

而してこの運行の道は定まりて動かず，正に天地の道にして地とすべての遊星に通ずるものなり。

而して，地と星とはまたその時と期に於て，分と時と日と週と月と年とに於て相互に光を与うるなり。………

地はその道をかけり，日輪は昼間その光を与え，月輪は夜その光を与え，諸星もまた夜にその光を与え，みな神の能力の中にその光栄を顕してかけり行く。……

そもそも，これらは皆王国なれば，その何れにてもまた如何に小さきものにても，見たる人は皆みいつ堂々と進む神を見たるなり。」（教義と聖約88：42―47）

このように，自然の法則は，私たちがこれを知っていようといまいと，常に同じように働く。この法則を知らない子供は，熱いストーブに触れるとやけどをする。重力の法則を無視すれば，ひどい傷を負うかもしれない。また，自然の法則を理解し，それに従って生活するならば，そのことから恩恵を受ける。そして，これらの法則を無視し，反する行為をとる人々が直面する数々の危険から逃れることができる。

次は，国の法律すなわち人の定めた法に関してであるが，私たちは法律によって治められる必要がある。法律は悪事を行なう人々を取り締まるだけでなく，すべての人々の権利を守るためのものである。教義と聖約を引用しよう。

「われらは信ず，政府は人間のために神により制定されたるものにして，社会の福利と安全のため法律を制定しまたそれを施すに当り，政府に関して人間の為す行動に対し神は人間に責任を負わせたもう。

われらは信ず，政府は各個人に対し良心の自由なる行使，財産の所有権とその管理，および生命の保護などを保証する如き法律を制定し，且つこれを犯さるることなく保持するにあらざれば，如何なる政府も平和に存立するを得ず。

われらは信ず，すべて政府は政府の法律を施行せんがため，必然吏員および長官らを要す。而して，公平と正義とを以て法律を行う如き人物は，これを求めて共和国の場合ならば人民の投票により，他の場合にはまた主権者の意志によりて支持すべきなり。」（教義と聖約134：1―3）

当教会の信仰箇条12条には，このようにある。「われらは，王，大統領，統治者，長官に従うべきを信じ，また法律を守り，敬い，支うべきを信ず。」

すべての国民が政治の問題を知っておくことは，極めて大切である。国の法律を知ること，および，政務を司る正直で賢明な人々を選べる場合には，それを積極的に行なうことが大切である。

行政機関を通過した法令の合法性に，それが国の最高法廷で合法と立証された場合でさえも，疑いをはさむ人々が大勢いる。このような人々は，その法律を無視し，また法律に違犯することを意に介しないのである。

かつてアブラハム・リンカーンは次のように述べた。「悪法は，もし存在するならば，できるだけ速やかにそれを廃止すべきである。しかし，効力を持つ間は厳密に守るべきである。」

これは，法律の遵守に関する当教会の態度でもある。私たちは次の声明を発した人の言葉に同意するものである。

「実際に法律を無視し，あるいは愚弄する人は，自分の座っている板をのこぎりでひく愚か者に似ている。社会の崩壊には，法律を敬わずに無

視する態度が最初のしるしとして必ず現われる。法を尊重する態度は，あらゆる社会における最も基本的な美徳である。なぜなら，法律に反するものは，暴力と無秩序だからである。」(*Case and Comment*「判例と注釈」，1965年3－4月，p. 20)

法律に対する無視，違犯，あるいは自分勝手な解釈については，何らの正当化も言いわけもできない。キリストは私たちに，法律を守る民の偉大な模範を示しておられる。それは，キリストを苦境に陥れようとしていたパリサイ人が，カイザルに税金を納めてよいかどうか尋ねたときのことである。この問いかけに対して，イエスは税として納める貨幣にだれの肖像が刻まれているかと尋ねられた。そして彼らがカイザルの肖像ですと答えると，次のように言われた。

「それでは，カイザルのものはカイザルに，神のものは神に返しなさい。」(マタイ22：21)

いかなる国民も，それぞれに責任があり，自分が選んで住んでいる国の法律の範囲内で行動しなければならないということを，常に心に留めておく必要がある。さらに教義と聖約から引用したい。

「われらは信ず，すべての人はその固有不動の権利を政府の法律によりて保護せらる間その属する各自の政府を支持し擁護すべき義務あり。されば，かかる保護の下にあるあらゆる国民にして，治安の妨害，謀叛などを為すは妥当にあらず。故に，かかる輩は罪に従って処罰すべきなり。而して，すべての政府は公共の福利を保証するために，政府の判定に於て最も善く計画せられたる如き法律を制定する権利を有す。されど，また同時に良心の自由を神聖に保つべきなり。」(教義と聖約134：5)

ではここで，神の律法について考えてみよう。神の律法も，自然の律法と同じように，明らかであり，拘束力があり不変である。また，私たちの成否，幸不幸は，この律法の理解度と，人生における応用の程度に左右される。私たちは次のように言われている。

「そもそも創世の以前より天に於て定められる一つの変らざる律法ありて，あらゆる祝福はこれに基くなり。

すなわち，われら何にても神より祝福を受くる時には，この祝福の基く律法に従うによりて然るなり。」(教義と聖約130：20, 21)

私たちは，福音には人間関係，すなわち精神的および霊的な生活に関する人生の律法が含まれていると信じている。これらの律法は，自然界における自然の法則と同じように，有効範囲内においてだけ作用するものである。

予言者ジョセフ・スミスは，知識を得ることの大切さと，律法に従うことの重要性を認めていた。彼は聖徒たちに次のように説いている。

「およそ，われらのこの世に於て達する英智の一切は，何にてもよみがえりの時われらと共によみがえるべし。

さればもしある人ありて，精励従順によりこの世に於て他の人よりも一層勝れたる知識と英智とを得ば，未来の世に於てそれだけ利を得べし。」(教義と聖約130：18, 19)

主のみ言葉は私たちにとって非常に明瞭であり，主の律法は私たちの幸福のためにはっきりと定められている。にもかかわらず，ある人々は自分の判断のみに頼り，神の律法を無視し，みじめで不幸な状態に陥っている。その理由を理解することは困難である。予言者ヤコブは次のように勧告している。

「それであるから兄弟たちよ，主に向って勧めをしようとはしないで主から訓戒を受けようとせよ。ごらん，あなたたちは主が智恵と正義と大きな憐みとをもって，造りたもうた万物を勧め戒めて治めたもうていることを知っている。」(モルモン経ヤコブ4：10)

また，ソロモンはその深い知恵によって語っている。

「心をつくして主に信頼せよ，自分の知識にたよってはならない。

すべての道で主を認めよ，そうすれば，主はあなたの道をまっすぐにされる。」(箴言3：5, 6)

イエス・キリストの福音の道標は明らかである。私たちには十戒がある。その例を幾つか挙げよう。

「あなたはわたしのほかに，なにものをも神としてはならない。……

あなたは殺してはならない……姦淫してはならない……盗んではならない……偽証してはならない……

安息日を覚えて，これを聖とせよ。」(出エジプト20章参照)

また山上の垂訓はあなた方すべてがよく承知しておられるものである。さらに律法の中でどの戒めが大切かをイエスは告げておられる。

「『心をつくし，精神をつくし，思いつくして，主なるあなたの神を愛せよ』。

これがいちばん大切な，第一のいましめである。

第二もこれと同様である，『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。」(マタイ22：37, 39)

これらふたつの戒めを守ることが全世界にどれほど大きな影響を及ぼすか，いくら強調しても過ぎることがないほど，私たちの評価をはるかに越えたものである。平和と正義が津々浦々にまで行きわたるのである。

私たちはまた聖典をガイドとして与えられている。これは，予言者を通して，神が直接啓示によって下したもうみ言葉を記したものである。

その予言者のひとりが，スペンサー・W・キンボール大管長である。主は今日，キンボール大管長を通して語っておられる。そしてこれら予言者の教えを受け入れ，これに従って生活するときに，私たちは永遠の生命を得ることができるのである。私たちは皆，パウロのように感じ，語る勇気を持とうではないか。

「わたしは福音を恥としない。それは，……すべて信じる者に，救を得させる神の力である。」（ローマ１：16）

主は言っておられる。「見よ，これわが業にしてわが栄光，すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」（モーセ１：39）

このことは主が御自身の命を捧げられたほど何にも替え難いものであった。すなわち，主の贖いの犠牲によって，私たちは復活し，不死不滅と昇栄を享受することが可能となったのである。主の偉大な目的を達するために，宣教師として働く素晴らしい特権と祝福と機会があることは，私たちにとって何と幸いなことだろうか。

このような約束が与えられている。「汝らわが言うところを行わば，主なるわれこれに対して責任あり。されど，汝らわが言うところを行わずば汝ら何ら約束を受けず。」（教義と聖約82：10）また，次のような警告もある。

「わが律法を受けてこれを行う者はすなわちわが弟子にして，わが律法を受けたりと言いてこれを行わざる者はわが弟子にあらず。これらの者は，汝らの中より追い出さるべし。」（教義と聖約41：５）

実に先程の私の若い友が感じたように「人がこの世にいるのは幸福を得るためであり，「人に与えられている最大の賜は自由意志である」という教会の教えと，私たちには法が必要であるという事実との間に何の矛盾もないことは明らかである。私たちには選択の自由があり，律法に従ってその律法に基づく祝福を享受することもできれば，律法に従わずにいることもできる。律法に従わなければ，私たちのために備えられている完全な喜びを決して享受することはできないのである。

次のような主の栄えある約束をもって，私はこの話を結びたいと思う。

「主は言う。わが命に従い，誠心を以てわが栄光を仰ぎ見て今この地に集り来れる人々は，見よ，幸福なるかな。

そは生くる者は地をつぐことを得，死ぬる者は全く働きを休みて安息を得。されど彼らのなしたる業はその人々につき従いて，わが備えるたる父の住居に於て冠を受けしむればなり。

然り，その足シオンの地の上に立ちて，わが福音に従い居る者は幸福なるかな。その者は報いとして地の善きものを受け，而も地はそれを力強く生ずべければなり。

またわが前に忠実にして勤勉なる者は，天より祝福をもて冠を受くべく，また誠に少からざる誡命とその時々に関する啓示とを与えらるるなり。

この故に，われ彼らに一つの誡命を与う。曰く，汝心を尽し，勢力と思いと体力とを尽して主なる汝の神を愛すべし。また，イエス・キリストの名によりて神に仕うべし。」（教義と聖約59：１－５）

私は，これらの事柄が真実であることを，イエス・キリストのみ名によって証する。アーメン。

人々が健全な教えに耐えられなくなる時が来るであろう

十二使徒評議員会会員

L・トム・ペリー

総大会の折に少し早めに来て，この偉大なタバナクルの通路を歩きながらこの会場に集まる大会の訪問者と挨拶を交わせることは，私にとって喜びである。これが真に世界の大会であることをあなた方はご存知である。

たとえ話す言葉は違い，意思を通じる方法は異なっても，握手を交わし，目を見れば，共通の絆があることがすぐにわかる。国境を越えた兄弟姉妹の愛があるのである。

私たちはこの大会において，アメリカ合衆国に宛てたメッセージをいくつか送ってきた。このようなとき，私は，通訳を介してこのメッセージを聞く他の国の人々の顔を関心を持って見ていた。それはお座成りの関心ではなかった。皆心から関心を抱き，理解していたのである。私はそうあって然るべきだと思う。歴史で学ぶように，何度も繰り返される全世界共通のテーマがあるように思えるからである。

私たちはこの偉大な国を愛している。また，あなた方の国も愛している。なぜなら，そこはあなた方の故郷だからである。私は今，アメリカ合衆国200年祭の計画を援助するという素晴らしい責任をいただいている。かって，これほどはっきりと歴史を見つめ，政府の計画に携わる機会をいただいたことはない。

数カ月前のこと，合衆国200年祭における宗教団体の参加を募るために特別の会合が催された。そして，国内の大勢の宗教指導者をその会合に招くよう，私に依頼があった。こうして私たちは400名の者がワシントンD.C.に集まり，この素晴らしい祝典に貢献する方法について，2日間討論を交わした。

私は出席した大勢の宗教指導者に深い尊敬の念を覚えたが，同時に，あなた方が自由主義者と呼んでいる一連の人々にはとても心配な気持を抱いた。

この2日間に及ぶプログラムの一環として，私たちは約20名ずつの小グループに分かれ，この祝典において教会が貢献できる事柄について話し合った。

初日のプログラムを終えたところで私はこの会合に出席するよう招いたひとりの人と話す機会を得た。そこで，この国の諸教会が国民に共同で発することのできる宣言，および神の導きが必要であることの確認，ならびに合衆国政府の設立にあたって主が導きの手を伸べたことに対する感謝の言葉を準備できるか否かについて話した。この人がその夜いつまで起きていたかは知らないが，朝食で顔を合わせたとき，彼は先の宣言の草稿をもう準備していた。すぐれた内容のものだった。

私はその朝，私たちのディスカッショングループでそれを提示できると喜んだ。けれども，私の喜びもつかの間であった。私たちの神である主に関する宣言は，いかなるものも承諾できないというのが，この小グループの宗教指導者の一致した意見であった。この種の宣言は無神論者に不快な気持を与えるだろうと，彼らは結論した。特に彼らが言うには，無神論者にも自分の信念を表明する権利があるというのである。もちろん私は万人に自由意志を守る権利があることには完全に同意する。しかし，すべての人に受け入れられないからということだけで，私たちの堅い確信を封じてしまうことは良くない。私は活発に反対意見を述べた。けれども，私たちが論ずれば論ずるほど，ますます反対者は結集するだけであった。結局私たちは，いかなる宣言も出すことができなかったのである。

私はその成り行きと，私たちの努

力が無駄であったことに全く当惑を覚え私たちの宣言に反対した宗教指導者を捜し出すことにした。そして彼と話すにあたって，私はさらに大きなショックを覚えたのであった。彼は神学の学位を幾つも持つ，キリスト教徒の指導者であった。にもかかわらず，私の質問に対する彼の返答は，次のようであった。

問：「この偉大な国を設立するにあたって，神が当時の指導者たちを導かれたことをお信じになりますか。」

答：「私の学んだ限りでは，いかなる時代にも神は人類の事柄を指図してはおられません。」

問：「あなたはそのような考え方をもって，毎週人々の前に立ち，キリスト教の教義を教えていらっしゃるのですか。」

答：「ええ，むずかしいことではありませんよ。会衆の代表者たちを集めて，そのグループの一致した意見があれば，それを説くんです。」

もう一度繰り返して申し上げたい。私はワシントンD. C. でこの会合に出席していた間に，多くの献身的な素晴らしい教会指導者たちに会った。しかし同時に，この旅行を終えて戻るときに大きな不安を感じた。それは，この国だけでなく全世界の多くの教会の説教台から，神が告げられた教えではなく，人の教えが説かれる傾向が強まっているのではないだろうかということにである。

私は，会合を終えるにあたり，この大きな宗教指導者の集まりが永遠の父なる神に対する感謝の宣言を下さなかったことに非常に失望した。しかしながら，この200年祭の年度中，少なくとも次のふたつの点を私の声として聞いてもらおうと堅く決心して戻って来たのであった。

まず第一に，正しいと信じていることを擁護する勇気を増すことである。天は閉じられていないという証を，私は宣言しよう。主は，この世においてそのみ声に耳を傾けるすべての子らを今なお導いておられる。私はまた，義しい政府の基は，人の努力に導きをもたらす主から与えられた律法であるという私の揺るぎない確信を説こう。義しい政府は主の導きを受ける。タナー副管長が引用した聖句は，合衆国政府の設立に関するものである。「われ実にこの目的のためにわが挙げたる賢き人々の手によりてこの国の憲法を制定せしめ，流血によりてこの国を贖えり。」（教義と聖約101：80）

私は，憲法起草者の心の中にあった信仰を絶やさないために，自分にできる限りのことをすべて行なおうと決意している。

ジョージ・ワシントンは次のように宣言している。「国民は，神と聖書なしに正しく治めることは不可能であることを承知している。」

また，第7代合衆国大統領のアンドリュー・ジャクソンは，「聖書はこの共和国が依って立つ岩である」と宣べている。

私は今日皆さんの前で，主なる神は今なお神の子らの諸事を治めておられるという，私の信仰を再び言明したいと思う。神の律法は確かに，すべての法が建つ基である。従って私たちは，神が与えられた律法を進んで支持し，擁護しそれに従って生活しなければならない。

次に私は，自分たちの学問によって神の律法を変えることができると信じ込んでいる人々に対して，ここで公に反対を唱えたいと思う。人類が意見を一にしようとも，決してこれらの神聖な律法を変える力はないのである。

これらうわべだけの博識者たちが，どのように神聖な結婚制度を彼らの誤った教義と教えによって破壊しようとしているか，その一例を挙げてみたい。次に引用するものは，最近のある出版物から取ったものであるが，ほかにも類似するものは数多くある。

「これらの証言の根拠として，あるオブザーバーたちはこう語っている。『変遷する社会の要求に合わせて何世紀もの間変えられてきた結婚制度は，やがて廃止されることになると言われてきたが，今や我々は，まさにそのような時代に直面している。』究極的に結婚は，宗教上の儀式あるいは法律上の承認行為としてでなく，単なる社会的事実として受け取られることになるだろうというのが，彼らの判断である。」（ウイリアム・H・マスターズ，バージニア・E・ジョンソン共著，*The Pleasure Bond*「放縦のなわ目」p. 179）彼らは，結婚に対する考え方を新たにするようキリスト教徒に求めている。徐々にであれ，不承不承であろうと，独断主義は人道主義に屈しつつあると彼らは言う。また彼らは，自分たちの研究から明らかになったように，婚外の男女関係は神に忠実さを表わす手段となるであろうと確信をもって語るのである。

このような教えが人類に対する主の命に全く反することを，私は知っている。主の計画における外形的な秩序を見ても，主が訂正を必要としておられるようなことを私は何ら見出せないのである。地球は同じ方向に回り続けているし，地軸の角度も変わっていない。海から上がってくる水蒸気は雲となり，地に降り，川を下って海に入る循環を繰り返しており，何ら変わることなく人に恵みを与えている。

神が人類のために定められた律法についても全く同じである。神は時の始めにこのように宣言しておられる。

「また主なる神は言われた，『人がひとりでいるのは良くない。彼のために，ふさわしい助け手を造ろう』。…

そこで主なる神は人を深く眠らせ，眠った時に，そのあばら骨の一つを取って，その所を肉でふさがれた。

主なる神は人から取ったあばら骨でひとりの女を造り，人のところへ連れてこられた。

そのとき，人は言った。『これこそ，ついに私の骨の骨，わたしの肉の肉。男から取ったものだから，これを女と名づけよう』。

それで人はその父と母を離れて，妻と結び合い，一体となるのである。」（創世2：18,21-24）

夫婦の結びつきは，主にあって聖なるものであり，軽薄に取り扱うべきものではない。また，結婚の誓約は，主なる神が天と地を創造されたその目的と使命を果たすために欠かせないものである。

いつの時代にも主は，夫婦のこの聖なる関係を保護するために，神聖な律法を宣言しておられる。モーセがイスラエルの子らを治めるために，律法が必要なことを知ったときに，主は彼に，「あなたは姦淫してはならない」（出エジプト20：14）という宣言を下されたのであった。

神の生みたもう独り子は，この世において，この永遠の律法を再び次のように強調された。「『姦淫するな』と言われていたことは，あなたがたの聞いているところである。

しかし，わたしはあなたがたに言う。だれでも，情欲をいだいて女を見る者は，心の中ですでに姦淫をしたのである。」（マタイ5：27,28）

主は，モルモン経にあるように，アメリカ大陸においても，この不変の教えを再び宣言しておられる。「汝姦淫すべからず。」（モーサヤ13：22）

主はまた，近代の聖典にその教えを記さずにおくようなことはなさらなさった。近代の世に，主は再び次のように宣言しておられる。「汝ら姦淫することなかれ。姦淫をなして悔い改めざる者は捨てらるべし。」（教義と聖約42：24）

神の律法は，過去にも未来にも，決して矛盾がない。そしてどの時代の聖典も，人が変えることのできない不変のメッセージを宣言しているのである。

私は今日，古代の使徒パウロが語った言葉を私の警告の言葉として声高らかに述べたいと思う。「人々が健全な教に耐えられなくなり，耳ざわりのよい話をしてもらおうとして，自分勝手な好みにまかせて教師たちを寄せ集め，そして，真理からは耳をそむけて，作り話の方にそれていく時が来るであろう。」（IIテモテ4：3,4）

皆さんに私の証を残したい。神の律法は終始一貫し，いつまでも変わりがない。そして私たちは，神の律法に従って生活するときに，この世の生涯において喜びと達成感と平安を見出すことだろう。一方，神の律法を悪用し，変え，無視するならば，神の裁きを受けなければならない。そしてそうするときに必ずや，苦悩と悲哀と心痛とを被ることになるのである。

次の詩を書いた詩篇作者の精神を読み取っていただきたい。「地と，それに満ちるもの，世界と，そのなかに住む者とは主のものである。」（詩篇24：1）

私たちが正しいと承知している事柄を擁護する勇気を持てるよう，神の導きのあらんことを，イエス・キリストのみ名によってへりくだって祈る。アーメン。

タバナクル

十二使徒評議員会会員

ハワード・W・ハンター

本日は，この大会衆を擁するテンプルスクウェアのモルモンタバナクルにとって歴史的な日である。このタバナクルが主のみ業のために献納された日から，きょうでちょうど2世紀目を迎える。この建物はユニークな建築物として知られており，ラジオを聴きテレビを見る全世界の人，は，ここがモルモンタバナクル合唱団とオルガン演奏の起点であることを知っている。今大会は，このタバナクルが献堂された1875年10月の総大会から百年目にあたる。百年前のきのう，献堂されたのである。建築に携った初期の開拓者たちの労苦と物質的な犠牲が，ここに来て音楽や言葉に耳を傾ける何百万何千万の人々に祝福をもたらしているのである。

その建設者たちの物語は私たちの心を捕えて放さない。彼らがミシシッピー河岸の家をあとにしたとき，未踏の西部についてほとんど知識を持っていなかった。彼らはグレートアメリカン砂漠の焼けつく道を越え，長い苦闘の旅を経て，1847年7月24日，土曜日にソルトレーク盆地へ入った。日曜日は礼拝に捧げられ，月曜日と火曜日は盆地内外の探検が行なわれた。その翌日の夕方には町の位置が決定され，ブリガム・ヤングが神殿の建設予定地にステッキを立てた。

木曜日にはニューメキシコで除隊になったモルモン大隊の一団が盆地の聖徒たちに加わり，人数は400人ほどにふえた。除隊してきた人々はすぐ，神殿用地の南東の角に仮の集会所を造る仕事にかかった。これがタバナクルの前身である。山から丸太を切り出して地面に立て，葉のついた木の枝で覆って屋根とした。盆地で最初のこの建物は，到着1週間後の土曜日に完成し，翌日の日曜日には，人々はその木陰で礼拝をすることができた。

もちろんその集会所は仮のものであったが，2年間初期の開拓者に利用され，その後壊されて同じ場所にもっと大きなものが建てられた。2番目の集会所の屋根は木の枝と土ででき，100本の柱がそれを支え，最初のものと同じように側面はあいていた。使用されたのは天気の良いときだけであったが，以後3年間集会所として使われた。

そのころには，聖徒たちはすでに新しい開拓地に慣れ，土地を開墾し，家を建てていた。しかし集会や礼拝を行なうのにもっと適した会場が必要だった。彼らは，どんな天候のときにも使えて，もっと長持ちする建物を求めてタバナクルの建設に着手した。建物の側面はアドービれんがで，けた組みの屋根を支えた。そのために，以前の集会所で不便を感じていた支柱が必要でなくなった。

アドービれんが造りのタバナクルは，後に旧タバナクルとして知られるようになったが，建築に1年を費やして，1852年の総大会のときに初めて使用された。しかし盆地にやってくる聖徒の数が多くなったため，大会時には建物が狭く，入場できない人も多かった。それから2年後の4月大会では，会場に人があふれ，7千名が場外で大会に臨んだ。その年の10月大会の前に，大会出席者を収容できる大きさを持つ3番目の仮の集会所が建てられた。

ふさわしい建物が必要なことは明白だった。そこでブリガム・ヤング大管長は，現在私たちが座っている大タバナクルと言われる新しい建物の設計を指示した。それは最初の開拓者がこの砂漠の盆地に到着してから，わずか15年目であった。1863年の4月大会で何人もの話し手が，発表されたこの建物の話をし，経済的な犠牲や建築への協力を全員に呼びかけた。限られた資材しかなく，輸

送のための鉄道もない辺境の開拓者の住人にとって，それは大事業であった。外部からの資材はすべて，牛車でミズーリ州から輸送しなければならなかった。什分の一基金は10年来建造中の神殿に必要であったため，タバナクルの建築費は寄付に頼るしかなかった。聖徒たちは現金をほとんど持たなかったので，宝石，建築資材，パン，労力など，自分の持ち物を何でも寄付するように要請された。

建物は奥行76メートル，幅45メートルで，端は半円形，そして46本の円柱で屋根を支えることになった。また，高さ7メートルの柱の上端から13メートルの高さ，すなわち床上20メートルに及ぶ楕円形の屋根を持つ。床はよく見えるように，後ろ正面から前正面まで5メートルの傾斜がつけてあった。設計施工当時は，柱のない建物として世界最大と言われていた。

1863年春に工事が開始された。フォートダグラス後方のレッドバットキャニオンから赤砂岩の大石塊が切り出され，木材の大半はワサッチ山脈の松林で伐採されてビッグコットンウッドキャニオンの製材所で加工された。タバナクルの中央部分が先に完成し，次に西側先端の曲線部がつけ加えられて，オルガンの製作と据付け工事が開始された。ボルトや，釘や帯金は入手できなかった。そのため，木材の交差部分は木に穴をあけ，ほぞをかませてつないだ。そして端はくさびでその場所に固定した。木材が裂けたときは生皮を巻いた。すると，乾燥するに従って生皮が縮み，万力を使ったように強力に梁を支えることができた。

大型パイプオルガンの製作の話にはだれもが驚く。オルガンが初めて演奏された当時は，ふいごに男性5人がかりで空気を送り込んだ。それでは大変ということでその後は最下部に水車を取りつけ，さらに電気が普及するようになってようやく，その動力が確保されたのであった。建物が完成した当時はすでに座席が足りなかったので，わきと後方に桟敷が設けられ，3千名の座席が追加された。

以来この建物で集会や大会が行なわれたが，献堂されたのは今から百年前の1875年，10月大会のときである。このときにはすでに鉄道が敷かれていた。その週の日曜日，ユリシーズ・S・グラント合衆国大統領が初めて，旗とまん幕に飾られた特別列車でユタ準州に来訪した。停車場からウォーカーハウスに至る道路にはサバススクールの児童が列を作り，その後ろには何百人という見物人が大統領と護衛の馬車の隊列を一目見ようと立ち並んだ。新聞はソルトレーク・シティーについて論評し，人口はおよそ2万5千，「宗教的用途にあてられる公共の建物数は人口に対する割合においては合衆国中のどの町や村をものしぎ，恐らくは教会，集会所の座席数総計はこの社会の男女子供の全員を優に上まわる」と書いた。（「ソルトレーク・ヘラルド」紙，1875年10月3日，6：102）その翌朝，グラント大統領はエメリー総督と共にテンプルブロックへ行き，真新しいタバナクルに入った。

土曜日の総大会午前の部の初めに，ブリガム・ヤング大管長は，ジョン・テイラー長老が献堂の祈りを捧げると発表した。その祈りを全文読んでお聞かせしたいが時間がないので，その一部のみをご紹介しよう。テイラー大管長の祈りはこうであった。「汝が古の契約の民に慈悲を賜わらんことを。おお主よ，汝がよしと見たもうときに，愛顧と懇願の精神が彼らの上にとどまり，汝が散らしたまいしすべての国々より彼らが集められ，父祖のゆずりを受け，その贖い主を知り，エルサレムが主の玉座とならんことを。」それから次のような興味深い請願をした。「おお主なる贖い主よ，道から迷い出たレーマン人に，子孫に誓約を再新するとその祖先に汝が約束したまいしレーマン人に慈悲を垂れたまえ。汝が彼らに夢とビジョンとを与え，彼らが汝を求め始めしことを感謝したてまつる。」（「デゼレトニューズ」紙，24：594）

その日の午後の大会で，ジョージ・Q・キャノン長老は，家族を残し宣教師として伝道に携わる人々の名前を読み上げた。総勢105名であった。当時，宣教師に召される者は総大会においてこのタバナクルの前壇から氏名を読み上げられるのが慣例となっていた。後に宣教師の人数がふえるに伴ってこの慣例は変わり，やがて大管長から文書で召されるようになった。もし総大会で氏名を読み上げて宣教師に召す方法が現在も続いていたら，この大会では7,923名の名前を呼ばなければならない。それだけで3日間の大会の半分を使ってしまうはずである。7,923名という数字は半年前の総大会以来召された宣教師の数で，ちなみにその数は今この会場に着席している人々の数とほぼ同数である。

ジョージ・Q・キャノン長老は，献堂を控えたタバナクルのこの壇上に立ち，伝道活動について話をした。彼の言葉は，現在の大管長が語っていることを，過去から語りかけているようである。キャノン長老は次のように語っている。「長老たちは，神が世の民のただ中で行なっておられること，これからなそうとしておられることについて，警告の声を上げるべく，何百人と東部諸州に旅立って行った。その目的のために，彼らはヨーロッパに，西海岸に，太平洋

の島々に，アジア，アフリカに行く。彼らは全地の面のあらゆる国々を越えていくであろう。数百万のアジアの民は，やがてイスラエルの長老たちから救いのよきおとずれを聞くであろう。……イスラエルの長老たちが告げるこの福音の声が地の端から端へ響きわたるときは間近い。それは万国へ証人として説き伝えられねばならないからである。」(*Journal of Discourses*「説教集」13：53)

時は変わり，生活の状態は違っている。しかし，この回復された福音の目的は変わらず，真理は不変である。今はすでに亡き人々の犠牲と努力は，現在の私たちにとって祝福となり，これから後の人々に対する私たちの責任を思い起こさせてくれる。この建物はその記念碑である。タバナクルは，この入口を入り，ここから音楽や言葉でそのおとずれを聞く世界中の人にイエス・キリストの福音を紹介する偉大な宣教師として立ち続けてきたのである。幾年月もの，間，教会の宣教師はそのおとずれを，携え，地上の何十万何百万の人を祝福してきた。彼らは今もなおその同じおとずれを携え，それに耳を傾けて信じる人を永遠にわたって祝福し。ている。その教えは真実である。私はこのことをイエス・キリストのみ名によって証する。アーメン。

死者の贖い

十二使徒評議員会会員

ボイド・K・パッカー

兄弟姉妹の皆さん，私は昨今心に非常に強く感じている事柄を本日の話のテーマに選んだ。これは非常に神聖な性格を持つものであるために，普段以上に皆さんの支持の祈りを必要としている。

主はこの世におられたとき，人が救われる道はひとつ，ただひとつしかないことを明らかにされた。「わたしは道であり，真理であり，命である。だれでもわたしによらないでは，父のみもとに行くことはできない。」（ヨハネ14：6）その道をたどるにあたって，次にあげるふたつの事柄が極めて大切になってくる。まず第一に，人類の救いを保証する権威が，主のみ名にあるということである。「わたしたちを救いうる名は，これを別にしては，天下のだれにも与えられていないからである。」（使徒4：12）次に，永遠の生命を得るためにすべての人が通らなければならない門として，欠くことのできない儀式，バプテスマがある。

主はそれらの過程，しかもすべての過程を支配する権威が主御自身の内にしかないことを宣言されるにあたって何らの躊躇も弁解も加えられなかった。この過程を経てこそ，私たちは天父のみ前に戻ることができるのである。この理念は，使徒たちの心の中にもはっきりと描かれていた。使徒たちが教えを宣べ伝えたのは，人が自らを救うひとつの道，この唯一の道を備えるためであった。

何世紀もの間大勢の人々が，事実ほとんどの人々がその道を全く見出せなかった。そして，これについて説明することは非常に困難になった。恐らく彼らは，他の道を認めることを寛容の徳を示すものだと考えたのであろう。その結果人々は，その教義を曲げたり，あるいは変更を加えたりした。

主御自身が「命にいたる門は狭く，その道は細い。そして，それを見いだす者が少ない」（マタイ7：14）と述べておられるにもかかわらず，人々は「主は一つ，バプテスマは一つ」というこの厳格な言葉は，あまりにも制限的であり，排他的であると考えるのである。

バプテスマは不可欠のものであるので，あらゆる国民，血族，あらゆる国語の民，および世の人々にイエス・キリストの福音のメッセージを伝えることに，是非とも関心を持たなければならない。これは，主から戒めとして与えられたものである。

主の真のしもべは，福音の原則に耳を傾けるすべての人を改宗しようとすることだろう。また，主が不可欠のものと宣言されたバプテスマを勧めることだろう。程度の差こそあれ，ほとんどのキリスト教会で福音の伝道が行なわれている。しかしながらそのほとんどは，人々が福音を聞けるように実際に何らかの働きかけをするでもなく，ただ教会員から得られるものをもって満足しているのである。

末日聖徒イエス・キリスト教会における力強い伝道精神と活気ある伝道活動は，真の福音と権能が当教会にあるという，極めて素晴らしい証となっている。しかも私たちは，この世のすべての人に福音を宣べ伝える責任を受けているのである。「全世界の人々を改宗しようというわけですね」と問われたら，「そうです。私たちは生きているすべての人に宣べ伝えるつもりです」と，私たちは答える。

ある人々は，このチャレンジに対してすぐに言うであろう。「どうしてです。それは不可能でしょう。そんなことはできっこない」と。

それに対して私たちは，「ことによるとそうかもしれません。でも，とにかく私たちはそれをします」と簡

単に言っている。

それは不可能であるという暗示に対して，私たちは，この業を義にかなって進めることができるようにあらゆる能力と資力を投入することを喜んで決意するのである。先程のチャレンジと比べた場合，現在の成果はまだ十分とは言えないかもしれない。しかし，世界中で今達成されつつある事柄，あるいは試みられつつある事柄を考えると，そこには無視し難いものがある。

現在，21,000名以上の宣教師が伝道に従事しており，その特権に応えている。これは努力のほんの一部にすぎない。しかし私は，人数から受ける印象をとやかく言うつもりはない。なぜなら，私たちは当然あるべき状態にまだ達しているとは決して考えていないからである。それ以上に大切なことは，もし人々が彼ら一人一人の宣べ伝えている確信の源を知るならば，それだけで十分に彼らはこの業が真実であることの証人になり得るということである。

生ける者すべてを捜し求め，彼らに福音を教え，バプテスマを勧める務めを，私たちは決して休もうとは思わない。また，失意を抱くこともない。この業には大きな力があり，このことは，心から求めている人により実証されるからである。

主の教会であることを立証するもうひとつの特徴がある。それはバプテスマにも関連するものである。バプテスマを受けずに死んだ人々について，非常に不安をかき立てる疑問がある。死者はどうなるのか，と。もし人を救い得る名が主を別にしては天下のだれにも与えられていず（まことにその通りなのだが），彼らがその名を聞くことさえなしに世を去ったならば，またバプテスマが不可欠のもので（その通りなのだが），彼らがそれを受け入れる機会さえなしに死んだならば，彼らは一体どうなっているのだろうか。

これを説明することはむずかしい。またこれは，人類のほとんどが関係する問題である。

宗教の中には，ほとんどのキリスト教派よりも大きく，またそれらの宗教を合わせると，すべてのキリスト教教派よりも大きい宗教も幾つかある。そして何世紀もの間，それらの宗教の信者たちは次々と世を去ったが，バプテスマという言葉を全く聞いたことはなかった。彼らはどうなるのだろうか。

これは人々の心を非常に動揺させる疑問である。主は一つ，バプテスマは一つという教えがありながら人類のほとんどがその影響下にないことはどのように考えればよいのだろうか。この疑問に解答が与えられなければ，人類の大多数が失われることになる。また，正義あるいは慈悲の律法に反することにもなる。こうした疑問に答えられずしてキリスト教自体存続できるだろうか。しかしながら，真実の教会ならば，人心の動揺を招くこの疑問に対して満足できる答えを与えられるはずである。

また，答を何ら持たない教会が，どうして主の教会であると主張できるだろうか。主は，バプテスマを受けていない大多数の人々を忘れることを良しとはしておられない。

この疑問に対する答えを何ら持たないことを当惑の面持ちで認める人々は，この世における主のみ業を管理する権能，すなわち全人類に救いをもたらす業を管理する権能を主張することはできない。

キリスト教徒たちがバプテスマそのものは大して重要な意味を持たないと考えるようになったのは，バプテスマを受けていない人々の行く末に関して全く答えを持たなかったからである。また，キリストのみ名も必ずしも必要ないと思うようになった。そして，人を救い得る名はほかにあるにちがいないと，考えるようになったのであった。

この難問に対する答えは，人が考え出せるものではなかった。ただ，啓示によってのみ与えられた。啓示という言葉を強調したい。啓示もまた，主の教会に欠かせない特徴である。私たちの教会が設立されたとき，啓示を通しての主との交流の道も開かれたのである。そしてこれは現在まで，絶えることも変わることもなく，この教会にある。

バプテスマを知らずに死んだ人々の疑問について語るとき，私は最も敬虔な気持になる。これが神聖な業に結びついているからである。世の人々にはほとんど知られていないが，私たちはある業を従順に進めている。そしてこの業の前途には人の夢をはるかにしのぐ驚くべきものがある。これは神より霊感を受けた，真実の業である。そこに答えがある。

教会の初期の時代に，予言者ジョセフ・スミスは啓示によって，古代に建てられていた神殿に以たひとつの神殿を建てるようにと指示を与えられた。また，人類を救うためにそこで執行すべき儀式も啓示された。

次いで，キリスト教会で一般に無視され，見過ごしにされていたひとつの古代の聖句が理解され，大きな意味をもつようになったのである。「そうでないとすれば，死者のためにバプテスマを受ける人々は，なぜそれをするのだろうか。もし死者が全くよみがえらないとすれば，なぜ人々が死者のためにバプテマスを受けるのか。」（Ⅰコリント15：29）

これが答えであった。正当な権能を持つ者の手により，全く機会のなかった人は身代りによるバプテスマを受けることができた。そうしたときにその死者は，自らの望みによっ

て，バプテスマを受け入れることも，拒むこともできるのである。

この業は，現在キリスト教界でほんの一部の人しか信じていない，極めて基本的なある事柄をはっきりと再確認するものとなった。その事柄とは，死後にも生活があるということである。誕生がこの世の生活の始まりであると同様に，死はこの世の生活の終りに過ぎない。贖いの偉大な業は，この死すべき世ばかりでなく，死後も続くのである。

主は言っておられる。「よくよくあなたがたに言っておく。死んだ人たちが，神の子の声を聞く時が来る。今すでにきている。そして聞く人は生きるであろう。」（ヨハネ５：25）

1918年10月３日，ジョセフ・F・スミス大管長は幾つかの聖句について思いめぐらしていた。そのひとつは，次のペテロの言葉である。「死人にさえ福音が宣べ伝えられたのは，彼らは肉においては人間としてさばきを受けるが，霊においては神に従って生きるようになるためである。」（Ｉペテロ４：６）

このとき，驚くべき示現が開かれ，スミス大管長は，義人の群れを見た。また大管長は，彼らの間で導きと恵みを施すキリストを見た。次いで，福音を聞く機会のなかった霊たちや，福音に雄々しく従わなかった霊たちを見，彼らを贖うための業を見た。ここで，この示現についての大管長の記録を引用したい。

「私は，主が真理を受け入れなかった邪悪な者，不順な者たちの間へ自ら行って教えられたのではないことを知った。見よ。主は義人の中から軍勢を組織し，使者を任命して権威と権能とを与え，闇の中にいる者たち，さらにはすべての人の霊のもとに福音の光を携えて行くよう命じられた。このようにして死者に福音が宣べ伝えられた。」（『死者の贖いに関する示現』29—30，「高価なる真珠」追加文）

当教会は身代りによってバプテスマを執行する権能が与えられている。従って死者が，説かれた福音に耳を傾け，それを受け入れたいと願うとき，救いに欠くことのできないこの儀式は身代りの儀式の執行によって有効となるのである。この必須の儀式を免じられる者はだれもいない。事実，主御自身も例外ではなかった。

現在私たちは，課せられているこの業を果たすことに全力を尽くし，熱心にこの業を推進している。私たちは亡き親族の記録を集め，ひいては全人類の記録を集めようとしている。そして，古代にあったと同じ型の，聖なる神殿のバプテスマフォントで，これらの聖なる儀式を執行しているのである。

「どうも理解できない」と言う人がいるかもしれない。しかし，単なる不思議にはとどまらない。神聖な卓越した業である。この業それ自体が，イエスは私たちの主であり，バプテスマは不可欠のものであり，主が真理を教えられたことを立証している。

そこで，「かつてこの世に住んだことのあるすべての人々のためにバプテスマを施そうというのですね」と問われるかもしれない。

これに対する答えは簡単で，「はい」と言うだけである。私たちはそうするように命じられているからである。

「全人類のためにですか。どうやって。それは不可能ですよ。現在生きているすべての人に福音を宣べ伝えることが大きなチャレンジであるならば，ましてやこれまで世に生まれた人全員のために身代りの業を行なうことは，不可能とも言えるでしょう。」

しかし私たちはこう答える。「ことによるとそうかもしれません。でも，とにかく私たちはそれをします。」

再び申し上げる。私たちは落胆しない。自分たちの務めを休むことも，それを果たすことに対する言い訳もしたいと思わない。チャレンジに比べた場合，現在の成果は実際に少ない。しかし，他のいかなる場所でも行なわれていないことから見て，主が私たちの働きを喜んでおられることは確かである。

すでに私たちは，数億の名前を集めており，その業は神殿において進められている。また，将来建てられる数々の神殿において続けられることだろう。しかし私たちは，成果の大きさをとやかく言うつもりはない。なぜなら，私たちはまだ本来あるべき姿になっているとは決して考えていないからである。

この業について深く考える人々は，死者の名前の中で集めることのできないものについて尋ねるであろう。「記録に名前のない人についてはどうなるのですか。その人々に対してはできないでしょう。名前を捜し出す方法がないのだから」と。

これに対して私は，「あなたは啓示を忘れておられる」と答えよう。私たちはこれまで，この方法によって数多くの記録を与えられてきた。啓示は個々の会員に与えられ，彼らは全く奇跡的な方法で家族の記録を見出しているのである。また，他の業では見られない，この業に特有の霊感を感じることがある。

そして私たちは，自分のなし得る事柄をすべて行なったときに，残りの部分が与えられ，道が開かれるのである。

すべての末日聖徒は，この業に対して責任がある。この業がなければ，福音の救いの儀式は，福音が真実であるという宣言をこの世において聞く機会のなかった人々のために施せないことになる。

この業から，生者に関連してもうひとつの恩恵が得られる。それは家族生活と家族の永遠の存続とに関係することである。私たちが最も神聖に，また大切にしているもの，すなわち自分の家族内の愛する者たちとの交わりに関わることである。

私の家族の記録にある手紙を読むと，この精神を幾分かでも感じることができると思う。アリゾナ州グレアム郡サフォードからの1889年1月17日付の手紙を読みたいと思う。これは私の先祖で初めて教会に入り，その数日後に死んだ曾祖父，ジョナサン・テイラー・パッカーのことが書かれている。この手紙は義理の娘が家族宛に書き送ったものである。

彼女は，私の曾祖父が数週間耐え忍んできた苦しみと苦難について述べた後，次のように続けている。

「けれども，私は彼のためにできる限りのことをするつもりです。それが私の務めだと思います。私の愛するお母さんのためにして欲しいと思うと同じことを，私は義父のためにするつもりです。」

さらに彼女はこう書いている。「お父さんは，皆さんに，祝福の原則に忠実であるようにと言っています。そして，アブラハムと，イサクと，ヤコブの祝福が皆さんの上にあるように願い，復活の朝にまた会おうと皆さんに別れを述べています。

マーサ，涙でもう字がよく見えません。ですからこれで終わります。姉メアリー・アン・パッカーより」

私は幕の彼方でこの曾祖父を初め，祖父や父にも会えることを知っている。また，完全な福音がこの地上にない時代に生きていた先祖たちにも会えることを知っている。これらの先祖たちは，主のみ名を耳にすることなく，バプテスマの機会にあずかることもなしに，この世を去ったのである。

この教義ほど，この教会を他の教会とはっきり分つものはないことを申し上げたい。私たちはこれがなければ，他の教派の人々と同じように，新約聖書がバプテスマを不可欠なものであると宣言している言葉を受け入れながらも，ほとんどの人がそのバプテスマを受けることができなかったことを認めざるを得ないだろう。

しかし私たちには啓示がある。死者のためのバプテスマをはじめとする聖なる儀式がある。この死者のためのバプテスマを義務として私たちに課している啓示は，教義と聖約128章にある。ここで，この章の終りの部分を2，3節読みたいと思う。

「兄弟よ，われらまことに偉なる大義に向って進まざらんや。進み行きて退くことなかれ。奮い起てよ，兄弟たち。進み進みて勝利に至れ。汝ら喜べ大いに喜べよ。世の人，歌声を張り裂けしめよ。死者よ，王インマニュエルに永遠讃美の歌を語り出せ。インマニュエルこそ創世の前より，われらをして死者をその囚屋より贖うを得しむることを定めたまえり。……

山々は喜びの声を挙げよ。汝ら谷よ，皆声高く叫べ。すべて諸々の海と乾ける地とは，汝らの永遠なる王の為したもう驚嘆すべき御業を語れ。河よ，小川よ，谷の流よ，歓びの声を挙げて流れ下れ。森よ，野の樹よ，みな主を讃えよ。堅き巌（いわお）よ，喜びに泣け。……

この故に，いざわれら一教会員として，一人の民として，また末日の聖徒として，義しきに適う捧物を主に捧げん。またいざわれら，主の神殿の完成せる時，その中に於て，主が完全に受け入れたもう価値ある，われらの死者の記録を載せたる一冊の書を主に呈せん。」（教義と聖約128：22—24）

証を述べたい。これは真実の業であり，神は生きておられ，イエスはキリストである。また，この偉大な務めを負って現代のイスラエルを導いている神の予言者が，今日この地上にいる。私は，主が生きておられ，死者の贖いの業を心にかけて見守っておられることを知っている。イエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。

家族の探究

大祝福師

エルドレッド・G・スミス

時の初めに，神はアダムを地上に置き，魚と鳥と家畜を治め，また全地を治める権能をアダムに与えられた。今日，ある人々にとって，これ以上の祝福はないように思われる。しかし，アダムが全地を治める権能を持っていたにもかかわらず，神は言っておられる。「人がひとりでいるのは良くない。」（創世２：18）こうして神はアダムに，伴侶として，助け手としてイブを与えられた。次いで神は，ふえよ，地に満ちよという最初の大切な戒めを彼らに与えられた。

アダムとイブが善悪を知る木の実を食べて，園から追放され，死すべき世の生活を始めるようになるまで，どれ位の期間エデンの園に住んでいたか，私たちには告げられていない。ただ私が指摘しておきたい点は，神御自身が最初の家族を定められたということである。結婚は，人が作った制度でも，人類の進歩の過程で廃止することのできるものでもない。私たちの生活の中で最も関係が深く，大切なものはすべて，家族に関連を持つ。しかもその中心をなすものは愛であり，愛のある所に，幸福もある。

確かに，人がひとりでいるのは良くない。主はその知恵によって，人がこの地上で幸せになり，また永遠にわたってその喜びを持続する道を備えられた。この最も大きな喜びと幸せは，家族を通して得られるのである。人類の歴史が始まって以来，これは変わらない。来世は別だと言えるだろうか。家族は非常に大切である。従って主は，この世の家族はみなひとつに結び固められなければならないことを，私たちに告げられた。

福千年の終りまでに，福音を受け入れるアダムの子孫は全員，神権の力によって一家族としてひとつに結び固められなければならない。この神権の権能により地上で結び固めることは天でも結び固められ，地上でつなぐことは天でもつながれるのである。

この世に来る人は全員，福千年の終りまでに，これらの結び固めの祝福をことごとく受ける機会を持つに違いない。もしそうでなければ，神は公平でないことになる。しかし，これらの結び固めの祝福を得るためには，まずバプテスマの儀式を受けてイエス・キリストの教会に入らなければならない。次いで夫婦は，この世においても永遠にわたっても結び固められなければならない。また，この結婚以外の結婚によって生まれた子供たちは，その両親に結び固められなければならない。こうするときに，彼らは新しく且つ永遠の誓約の下に生まれたかのごとく，諸々の祝福を受けることができるのである。

この律法を知らずに世を去った人々は，身代りによって，この祝福を受ける特権にあずかることができる。私たちの責任が存在するゆえんはここにある。私たちはまず，生者に福音を教えなければならない。それから，この大切な業が行なえるように，律法を知らずに世を去った家族の記録を集めなければならないのである。

教義と聖約128章から予言者ジョセフ・スミスの言葉を引用しよう。

「さてわが親愛なる兄弟姉妹よ。われ断言す，こは死者と生者とに関する原理原則にして，われらの救いに関して決して軽々に見過すべからざるものなり。それ死にたる者の救いは必要にして，死にたる者の救わることはわれらの救いにとりて必須なることなり。パウロわれらの先祖に就きて言いたる如くわれらなくば彼らは完うせらるることなし。すなわちわれらの死にたる者なくば，われらもまた完くなる能わず。」（教義

と聖約128：15。ヘブル11：40参照)

パウロはコリントの人々に復活の原則について教えた際，この点を次のように述べて明らかにした。

「そうでないとすれば，死者のためにバプテスマを受ける人々は，なぜそれをするのだろうか。もし死者が全くよみがえらないとすれば，なぜ人々が死者のためにバプテスマを受けるのか。」(Iコリント15：29)

これは，パウロの時代に，死者のための身代りの儀式が執行されていたことを示している。

予言者ジョセフ・スミスがモロナイから受けた最初の指示のひとつに，マラキ4：5，6からの引用があった。モロナイはこの句を次のように引用している。

「見よ，主の大いなるおそるべき日の来る前に，予言者エライジャの手によりて，われ神権を汝に顕さん。……

彼は先祖になされし約束を子らの心に植え，子らの心にその先祖を思わしめん。もし然らずば，主の来る時，全地はことごとく荒れ廃れん。」(ジョセフ・スミス2：38，39)

予言者ジョセフ・スミスはこう言っている。「神が私たちに与えたもうたこの世での最大の責任は，私たちの死者を探すことである。」(*Teachings of the Prophet Joseph Smith*「予言者ジョセフ・スミスの教え」p. 356)

このことは，このバプテスマと結び固めの業を，これを受け入れるすべての神の子のために行なわなければならないことを意味する。現在この世に住んでいる教会員だけでなく，この世に住んでいる間に機会がなくて，将来イエス・キリストの福音を受け入れる私たちの先祖をはじめすべての人々のために行なうのである。

主はこの偉大な業を始めるにあたって，まず諸々の鍵と神権の権能を回復しておられる。これは，1836年4月にカートランド神殿で行なわれた。このとき，エライジャがジョセフ・スミスとオリバー・カウドリに結び固めの鍵を回復したのである。次いで主は，この選ばれた神権時代にこの世に来るために留めておかれた特別な霊たちを，この世に送り出された。福音を受け入れる，雄々しく強い霊たちを送られたのであった。これらの霊たちは，現在，世界の至る所に送られており，福音が伝えられると，それを受け入れている。そしてその核を中心に家族や友人が福音を受け入れるのである。こうして彼らは主の神殿に参入し，自分自身の結び固めを受け，次いで身代りとなって先祖のために結び固めを行なうのである。

さらに主は，この業を援助するために，今なお多くの事柄を行なっておられる。主はほかにも優れた霊たちをこの世に送ってこられた。この霊たちは，科学的な手段と設備を開発する特別な知識と訓練を受けている者たちである。そのおかげで，主のみ業の進展は早められており，また名前の収集，分類，保管，および照合が重複することなく，組織的に行なわれている。これは奇跡にも等しい。私たちが主のみ業を容易に行なえるように，主は可能な限りすべての事柄を行なっておられるのである。皆さんはこれらの手段を利用しておられるだろうか。

私たちはこれらの祝福を理解しているだろうか。もし理解するならば，大勢の改宗者が，多大の労力と多額のお金を心から喜んで費やして自分たちの両親へ結び固められる機会を得，そうすることに価値を見出すであろう。

また私たちは可能な限り，あらゆる先祖の記録を集める必要がある。生半可な態度でなく，熱心に，絶え間なく，祈りの気持をもって求めていただきたい。都合のよい時まで待っていてはならない。都合のよい時など来ないかもしれないからである。年老いるまで引き延ばしてはならない。明日何が起こるか，私たちには全くわからない。それであるから私たちは，今家族の結び固めを完全になし終えるようにしなければならないのである。だれもこの業に伴う責任を逃れることはできない。私たちは，叔母やその他の親戚がこの業を行なっていたからと考えて，言い逃れすることはできないのである。

「あなたは先祖の中に，盗人や犯罪人など，好ましくない人を見出したらどうしますか」と尋ねられ，系図を探究していたある若い婦人は，次のように答えた。「先祖がどのように生きたかは，私に関係ありませんわ。ただ，この世に生きていて，この世を去ったという事実だけです。特に，私が今いるのはその先祖のおかげです。ですから，その先祖のためにバプテスマと結び固めの業を行なって，その借りを返したいと思います。それを受け入れるかどうかは，先祖の責任ですわ。」

これが，私たち一人一人に課せられた責任である。この業がなければ，私たちはだれも完全になることはできない。教会の他の責任で忙しくて，系図に少しの時間もあてることができないという言い訳を，主が受け入れて下さるかどうか疑わしい。私たちが行なうべきことを行なわなければ，だれか他の人が行なうことになる。なぜなら，それは必ず行なわなければならないからである。自分の責任を怠るときに，どうして数々の祝福を受けることを期待できるだろうか。

全世界の人々に，励ましの言葉を述べたいと思う。快活に，勤勉に，主を信頼して生活していただきたい。

そうすれば，主はあなた方を助けて下さるであろう。あなた方は恐らく，記録を集める特別な業に携わるためあるいは特別な伝道の務めを果たすために，現在いる地に置かれたのである。従って，もしあなた方が主の導きを請うならば，主は皆さんの業を成功させ，満たされた気持を与えて下さることであろう。

大勢の立派な教会員が，多くの記録を棚に積み上げている。集めただけで，まだ神殿の業を行なうために送っていないのである。それらの記録を神殿に送れるようにしていただきたい。大勢の霊たちが，その業の行なわれるのを幕の彼方で待っているからである。「実践しよう」というキンボール大管長の呼びかけに応えようではないか。「実践」，これは本大会における格好のスローガンであると思う。

私たちはこの業によって，主の再臨のための道を備えることができる。従って，この業に熱心に携わるすべての人々に主の祝福があらんことを。私はこれが主のみ業であることをあなた方に証する。イエス・キリストのみ名によって，アーメン。

愛は持続しなければならない

十二使徒評議員会会員

マービン・J・アシュトン

私の友人が最近，とても大切なことを学んだと自分の経験を話してくれた。まだ小さい彼の息子の話であった。友人は仕事から帰ると，息子の頭をなでて，「お父さんはおまえが好きだよ」言った。

すると少年は，「ああ，お父さん。好きでなくってもいいから，フットボールをして遊んでよ」と返事をした。この少年は，父親に欠けていたものを教えてくれたのである。

私たちも含めて世の多くの人々は，愛を単なる言葉で表わしがちである。

しかし，本当の愛は作用する過程である。まことの愛には人の行ないがある。愛が真実であるには持続しなければならない。方便やのぼせや興奮，おせじ，欲望といったものが愛と間違われることが実に多い。私たちの愛が，口に出したその場限りの表現や，そのときだけの感情にしかすぎない薄っぺらなものだとしたら，何と空しいことだろうか。先だって数人の大学生が，年上の人々の言うことで一番いやなのは，「何か私にお手伝いできることがあったら言って下さい」という言葉だと話してくれた。ほかの人もそうだと思うが，彼らは言葉よりも行ないがずっと大切だと思っているのである。

私たちは人に対する愛を，適当な間隔を置いていつも口に出して表現すべきだが，それを行ないで証明するには長い時間がかかる。まことの愛は持続しなければならないのである。偉大な羊飼いはそのように考えておられた。主は，「もしあなたがたがわたしを愛するならば，わたしのいましめを守るべきである」（ヨハネ14：15)，「わたしの羊を養いなさい」（ヨハネ21：17）と言っておられる。愛が続くためには行動が必要である。愛は過程である。ただの言葉ではない。口先ではない。その場限りの気分ではない。愛は便法でもなければ，都合に合わせたものでもない。「もしあなたがたがわたしを愛するならば，わたしのいましめを守るべきである」，「わたしの羊を養いなさい」は神から与えられた宣言であり，養い，維持する過程で愛が最もよく示されることを私たちに教えてくれる。

先程の友人の子息より何歳か年上で，ここから数百キロ離れた州刑務所に入っている若者から，私たちはその愛の過程についてさらに学ぶことができる。私は先日彼から感動的な手紙を受けたが，その中で彼は，現在の状態に至った原因やそれに伴う苦悩を切々と語ってくれた。彼はこのように書いている。「父は僕を全然愛しているようには見えませんでした。それでいて『おまえが大好きだ』と大げさに言ってはキスをするんです。だからぼくは『おまえが大好きだ』って言いさえすればいいのだと思うようになりました。家の仕事をきちんとするようにきつく言われたこともなければ，道徳や霊的なことを教えられたことも全然ありません。いまだに両親がどんな主義をもって生きているのか知らないのです。」

まだ会ったことのないこの友人の言葉をもう一度繰り返してみたい。「『おまえが大好きだ』と言いさえすればいいのだ」と。私は有益なことを教えてくれた彼を友と呼びたい。彼の言葉を，この機会に皆さんのお役に立てたいと思う。

父親の側から見ても，彼の父は家族を養い守ったと言えるだろうか。おそらく家族は食物には不自由しなかったであろう。息子は屋根の下で無事に，長い歳月を日夜，外の自然から守られていたに違いない。しかし私は彼の両親やそのほかの人たちに言いたい。養うことは，食べ物をあてがうだけのことではない。人はだ

れでもパンだけでは生きてゆけない。養うとは，愛によって，その人に物質にも精神にも道徳的にも霊にも十分な栄養を与えることである。守るとは，愛や思いやり，親切の中に模範や躾が適度になされている状態である。守るとは，家の壁と屋根を与えるだけのことではない。家庭を愛に満ち充ちたところとするためには，生活と愛の積み重ねが必要なことを私たちはいつも思い起こさなければならない。

さて，私たちはどのようにしたら，本当の愛を表わすことができるだろうか。自分の抱いている愛をどうしたらわかってもらえるだろうか。ペテロは主なる教師から，どうしたら愛を一番よく示せるかについて教えられた。「イエスが死人の中からよみがえったのち，弟子たちにあらわれたのは，これで既に三度目である。

彼らが食事をすませると，イエスはシモン・ペテロに言われた，『ヨハネの子シモンよ，あなたはこの人たちが愛する以上に，わたしを愛するか』。ペテロは言った，『主よ，そうです。わたしがあなたを愛することは，あなたがご存じです』。イエスは彼に『わたしの小羊を養いなさい』と言われた。

またもう一度彼に言われた，『ヨハネの子シモンよ，わたしを愛するか』。彼はイエスに言った，『主よ，そうです。わたしがあなたを愛することは，あなたがご存じです』。イエスは彼に言われた，『わたしの羊を飼いなさい』。イエスは三度目に言われた，『ヨハネの子シモンよ，わたしを愛するか』。ペテロは『わたしを愛するか』とイエスが三度も言われたので，心をいためてイエスに言った，『主よ，あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることは，おわかりになっています』。イエスは彼に言われた，『わたしの羊を養いなさい』。（ヨハネ21：14—17）

最近あなたが家族や友だちから養われたのはいつだったであろうか。肉体の糧や思想の糧，計画，1日の活動の予定，娯楽や楽しみ，悲しみ，心配，関心，瞑想を共にしたのはいつだったであろうか。これは，愛し，心配してくれる人とだけ共にできることである。あなたは不幸と試練にあった人たちを慰めに行き，かえって遺族の信仰や信頼に養われた経験がないだろうか。守り，養うことで愛を示す最良の方法は，時間を取って毎日毎時間それを証明することである。行動が伴わないときは，愛や慰めを表わしてもそれは空しい。神は私たちを愛し続けて下さる。私たちが奉仕と励ましを続けるならば，家族や隣人は私たちを愛してくれる。まことの愛は命そのものと全く同じく永遠である。永遠の幸福が，養い守り，気遣い続けることの中にないとどうして言えよう。神の目的を悟り，神の子供たちを理解するとき，私たちは善をなすのに疲れることはない。

天の御父はきっと，言葉だけの愛の表現にはうんざりしておられることだろう。神は予言者やみ言葉を通じて，神の道は言葉ではなく実行の道であることを明らかにしておられる。神は口先よりも行ないを喜ばれる。私たちは神への愛を，み言葉を守り，人々を養うことで示すのである。

ここで皆さんにふたつの例をお話したい。どこにでもある話だと思うが，毎月，毎日，毎時間，互いに愛を示し合っている人の例である。それがどこにでもある話だと言うわけは，私たちが常日頃，自分のまわりに行動に表われるまことの愛を見ているからである。まず最初は，突然夫に死なれたひとりの母親のことである。彼女には10歳を越えたばかりの子から伝道に出る年齢までの，3人の息子がいた。長年，模範と懸命な努力で，自力で経済を支え，子供たちを励まし，家族を一致させてきた。

養い，守ることの成果は，3人の立派な宣教師，学生，夫，父親となった子供たちであった。その息子のひとりは最近このように話している。「母はいつも時間を取って愛を示してくれたのです」と。この母親は，息子たちがなお教育を求め，自分の家族を持とうとしている現在も，まことの愛を示し続けている。

かなり以前に，ある所の建築請負人の技術と心構えに感心したことがある。彼の完璧を求める気持と仕事に対する誇りにひかれて，私はいろいろ質問し，親しくなった。彼はまだ若い頃に両親を失い，何人かの弟や妹をひとりで養ってきた。正式な教育は中学2年で断念しなければならなかった。そして弟や妹たちが自立できるようになってから，結婚をした。ところが結婚後1年で，妻が重い病気にかかり，長期の闘病生活を余儀なくされた。それから25年間妻の健康が徐々に悪化していく間，彼は妻とふたりの息子の面倒をみてきた。手術を受け，多額の費用がかかったが，彼はよく働き，世話をし，無条件に愛した。私は彼を訪れて，自分が本当に立派な人間に会えたことを知った。愛は持続しなければな。らない。愛は耐えることである。彼は並の人間ではなかった。彼がどんな状況の下でも養い，守り，分かち合うまことの愛を知っている人であることは，彼の行ないが教えていた。長い人生の間に，悲しい出来事や危機や死別にもめげず，まことの愛の根本となる原則を実行している人たちを見ることは，何という喜びであろうか。平凡な日常生活にあっては，毎日のささいな表現がまことの愛を

示し，その中にこそ礼儀や思いやりや親切が一番よく表わされることがある。私は今，機会を逃がさずに息子のために時間を取り，一緒に散歩して自然の不思議を発見するなど，息子と裸で接する場を設けているある父親のことを考えている。あなたの知っている母親たちのことを考えてみてほしい。喜んで娘に料理やお菓子作りを教えている母親たち。息子に本を読んで聞かせたり一緒に読んだりして，読書の楽しみを教えている母親たち。弟に切手の収集法を教えている兄，弟の話の準備を手伝う姉，彼らも愛を行動に表わしている人たちである。「なんとつまらない，なんと平凡な」と思う人もいるかもしれない。しかし，このようなことが養うことの基であり，それは結果として，喜びと幸せを生じるのである。

ほかの例をあげよう。チームの少年たちのために勝つこと以上のものを求めているコーチ，デートをする娘や息子を寝ずに待ち，いつでもじっくり話合いのできる母親や父親，旅行の準備を助け合う家族など。宣教師に常に励ましの手紙を書きながら，ふさわしい相手とふさわしい時にふさわしい場所で結婚しようと身を清く保っている20歳前後の女性も，何気ない日常の愛を示す立派な一例である。またいつも変わらず妻を愛して，子供たちに日々まことの愛の何たるかを教えている父親も素晴らしい模範である。皿洗いや子供を寝かしつけるといった普段の仕事を手伝うことも，行ないが伴わないために空しく聞こえる甘い言葉よりはるかにまことの愛を伝えるものである。愛を本当に理解している人は，愛とはもともと，さりげない，継続する真心からのものであることを知っている。

家族や隣人，地域社会への伝道など，神への愛を示す機会には際限がない。家族が落胆したり反抗したり迷い出ていったりしたときに，ややもすると愛を示すことを止める人たちがいる。しかし，愛を受けるに足りないと思われるときこそ，愛が一番必要なのである。愛はおどしや非難，失望した様子や仕返しで表現できるものではない。まことの愛には，時間と忍耐と手助けと継続する行為が必要とされる。私はひとりの長老見込み会員のことを考えている。彼は35年間というもの全く教会には不活発だったが，今では我が家のホームティーチャーとして私を養って下さる。私は彼に，「ジョン，どういうわけでまた教会に戻ってこられたんですか」と尋ねたことがある。すると，彼はこう答えた。

「私の妻がどうしてもあきらめなかったんです。それに今晩私のわきにすわっているホームティーチャーの同僚が上手に私を『後押し』してくれたんですよ。」特にふたりの人が愛とはどういうものかよく知っていたために，現在ジョンは幸せを得，一生懸命にみ業に励んでいるのである。

神を愛するにはその愛は継続しなければならない。家族を愛するにも，国を愛するにも，そして恋人への愛にも，自分を愛するにも，その愛を持続させなければならないのである。

愛の言葉を聞くことよりも行ないにそれを求める幼い息子や囚人，学生，母親，父親，娘，あるいは見知らぬ人，たとえどのような者であれ，私たちには，「愛しているよ」という言葉以上のものが必要であり，またそれを受ける価値があるのである。私たちは時間を取り，己を捧げて愛をそれなりの行動や実行に移す決心をしようではないか。神もまた，言葉以上のものを必要としておられる。私たちが養い，守り，保ち続ければ，神は喜ばれる。

中身のある愛は，それにあずかるすべての人に喜びと幸せをもたらす長続きのするものである。この真理を私たちが知ることができるように，天父の助けを祈るものである。願わくは家族，友人，見知らぬ人，そして私たちの予言者や神に対して時間を取り，言葉の愛が行ないにより裏付けられていることを日常の生活で示せるように。愛が神と人とに受け入れられるためには，心の中から湧き出ていつまでも続かなければならないことを，私たちが知ることができるように。

まことの愛には時間がかかることを私たちが忘れずにいられるように，天の御父に祈る。神は，私たちが時間を取って，養い，守り，世話することに伴う祝福を享受できるように助けて下さる。皆さんに証をしたい。私たちの属しているこの教会は真実である。これは，生ける天の御父と救い主イエスの永遠の愛によって回復され，守られてきた。このことをイエス・キリスト尊いみ名によって申し上げる。アーメン。

兄弟たちの説教

大管長

スペンサー・W・キンボール

兄弟姉妹の皆さん。3日間，延べ8回のセッションにわたって開かれた栄えある大会も，間もなく終わろうとしている。幹部の兄弟たちは心から主の教えを説き，主イエス・キリストの福音に関わる数多くの偉大な真理に心を向けるよう注意を喚起してきた。

この大会に出席して説教を聴いた指導者ならびに教会員は，霊感を受け，心の高まりを覚えたことと思う。また幹部の兄弟たちの説教を聴いて心に浮かんだ思いを，数多くメモにしてきたことであろう。あなた方指導者がその務めを完全に果たせるように，有益な提案が数々与えられた。また，自分自身の生活を整えるために役立つ提案も示された。私たちがこの大会に来た第一の理由はここにある。

私は自分の席に座っていながら，今夜この大会を終えて帰宅してからのことを心に思い巡らしていた。私の生活には，完全にする余地のある事柄が非常に多くある。私は心の中でそのリストを作っていた。そして今，大会を終えたらすぐにそれを始めたいと思っている。

あなた方は，福音の原則を非常に力強く語る兄弟たちの言葉を聞いてきた。ベンソン兄弟がその霊的な説教の中で，神の不変の律法は天上にあっても同じく不変であると語る言葉をも私たちは聞いた。人々や国家がその律法に背くときは罰が下るにちがいないと，ベンソン兄弟は語っている。彼らは滅びることだろう。罪は罰を要求するからである。さらに彼はこう語っている。「それ故，私たちは，主の謙遜な僕として，国々の指導者たちに向かい，神のみ前にへりくだるよう，また神の霊感と導きを求めるよう勧める。」大胆な声明である。しかし全くその通りなのである。

あなた方がお聞きになったように，トーマス・S・モンソン長老は，十二使徒評議員会会長がいかに主の霊感を受けて幹部の訪問先を変えているかについて話した。モンソン長老は，死を間近にした子供に祝福を授けるため，必要な場所に遣わされたのであった。モンソン長老は私たちに，どのようにして予定が変更され，彼がその地の大会に赴くことになったかを話してくれた。その訪問時に彼は，130キロ以上もの道を車に揺られ，やがて幼な子に別れを告げなければならなかった家族に会ったのである。

自制力を失い，放縦な生活の欲求に屈して，その力を失うことになった偉大な権力者の例を幾つかあげて語ったシル長老の言葉を，あなた方はお聞きだろうか。熊手でごみを集めることに専念し，冠を受けることを断わった男の話「天路歴程」についても彼は話した。

またシル長老は言っている。「私たちには大義がある。世の中で一番の大義がある。問題は私たちがどのように戦うかである。」

家庭の夕べプログラムについてのカリモア長老の話もあった。何と素晴らしい話であろうか。あなた方はみな，それぞれの家に帰ったら，家庭を築くこの栄えあるプログラムを怠ることなく実施していただきたい。扶助協会大会で述べられたように，悪魔はどこを攻めればよいかを知っている。悪魔は家庭を攻め，家族を破壊させようとしている。悪魔はそれを望んでいるのである。幹部の兄弟たちが述べたように，彼らの述べたサタンの業は結局，家庭，家族，両親，それに愛する者たちを破滅に追いやるものであることがわかるであろう。これこそ，サタンが欲していることなのである。私たちの家族の中でサタンがこのようなことを行

なえないように，心の備えをしようではないか。

タトル長老やその他の兄弟たちから偉大な伝道活動の話を聞いた。

ロムニー副管長は聖典を引いてこのアメリカ大陸の国々の歴史について詳しく語った。ニーファイ人とジェレド人について話し，次いで，主の約束を取り上げて語った。この約束の地を所有する国民は，この地の神であるイエス・キリストに仕える限り，決して束縛を受けず，天下のいかなる国々からもしいたげられることはないのである。これについて語った言葉は，合わせてもわずか数語に過ぎない。しかし，それは何と大きな価値ある約束であろうか。

マッコンキー長老は，千年ごとに1度か2度，大きな祝福が下されると語っている。そしてそのことを詳しく取り上げ，この神権時代に私たちに与えられた偉大な計画，すなわち福音の回復の計画について話している。

ハンクス長老は，息子をしつけ，教え，導く父親の力と，そのために何をなせばよいかについて語った。

あなた方はヒンクレー長老の言葉も聞いている。ヒンクレー長老は，現在の世の人々を押し流さんとしているポルノの洪水，それに性と暴力が衆目を集めていることを語った。彼は私たちに，指導者たちすなわち議会がこのような状況を制する適切な法を制定するよう求めている。そして，彼らがそれを行なうときに感謝を述べ，もしも行なわなければそうするよう少し注意を促すように勧めている。私もその通りだと思う。

教会は委任がなければ効果的にその機能を果さないと，ヘイト長老は語っている。委任するためには，神権が必要である。神権はすでに私たちに与えられている。従って，業を押し進める備えはできているのである。

その他すべての兄弟たちの話を引き合いに出せたらと思う。これらの説教はすべて例外なく有益なものである。席に着き，耳を傾け，祈ったときに，実に私たちはその話に胸を打たれたのである。

今朝この建物の歴史について語ったハンター長老の話について述べたいと思う。私はこの地で生まれ,もうこの地に久しい。しかし今日のような話を聞いたことはなかった。これらの善良な民，私たちの先祖が払った犠牲と労苦の美しい物語に感謝している。私たちは先祖のお陰で，少なくとも不自由なくこの偉大なタバナクルに集えるのである。何と長い期間使われてきたことだろう。彼が語ったように，100年間も使われてきたのである。この建物は100歳にもなるのである。

この建物の中で，予言者や使徒や，その他の指導者たちが数多くの偉大な説教を述べてきた様が思い出される。兄弟たちが心から捧げた祈り，長年続いている合唱団や指導者たちの姿が思い出される。この建物は何と大きな貢献をしてきたことか。私は少なくとももう100年間この建物が存続するようにと願っている。

ハンター長老は伝道の業について述べるにあたり，もし伝道に行く人々の名前がこの説教台から読み上げられるとしたら，それだけで丸一日かかると述べた。今年召された宣教師は，タバナクルの収容人数，すなわちこの会場におられる方々とほぼ同数となっているのである。私たちがあなた方を全員伝道に召したらいかがであろうか。

そのほかの素晴らしい説教についても述べる時間があればと思う。なぜなら，私にとって，これらの事柄をまとめ，自分が聞いたこと，覚えておきたいこと，そして実行したいことを心の中で整理することは助けとなるからである。

結婚に関してのペリー兄弟の力強い説教について取り上げたい。これは現実の問題である。サタンは私たちを破滅に導く事柄にねらいをつけている。その筆頭が結婚ではないだろうか。私たちが結婚を止め，家庭生活を放棄したら，サタンにしてやられることになる。

兄弟姉妹たち。この福音はイエス・キリストの福音である。耳を傾けるすべての人々にとって価値あるものである。この3日間に私たちが語ってきたことは真実である。全くの真理である。耳を傾けて聞くすべての人に救いと昇栄を必ずもたらすものである。

これはキリストの福音であり，キリストは私たちの主である。これはキリスト教会である。私たちは主に従い,主を愛し,主をたたえ,主に栄光を帰す。今こそ私たちは前進し,あらゆる点において主に従わなければならない。福音は回復され，現在私たちのために完全な福音が地上に置かれている。かつてこれほどまでに完全で，広汎に乃ぶ福音はなかった。私たちはこれまでの時代でこれほどのものを知らない。福音は今日，私たちをはじめ，それに耳を傾ける幾百万の人々のために地上に置かれているのである。人々がそれを放棄し，無視するという誤ちを犯すことのないように願っている。耳を傾けてきたあなた方に，神の恵みがあらんことを。

また，現在この会場にいるすべての人々に，神の恵みがあらんことを。あなた方が家族のもとに戻るとき，神があなた方と共にその家庭に行かれるように。平安があり，あなた自身の人生も家族の生活も大いなるものとならんことを。これらの祝福を主に願い，ここで私の証を申し上げ

たい。この業は神の業であり，神は生きておられ，イエスはキリストであり，救い主であり，贖い主である。主が計画された生命の道は，すべての点にわたって正しく真実である。あなた方への大きな愛と感謝の気持をもってこの証を申し述べたい。イエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。

誉れある仕事を得るために

十二使徒評議員会会員

ハワード・W・ハンター

今朝ほど私たちは，今日の社会に対応するために個人と家族，ワード部ひいては教会全体を備えることに関して数々の重要な話を耳にした。そうした備えのひとつに，ブラウン管理監督と副監督たちが家族の備えとして説明された雇用条件の改善がある。これは他人を助ける立場にある私たち指導者にとって非常に重要なことなので，もっと詳しくこのことについて述べてみたい。

興味あることに，アダムが堕落した後，最初に与えられた指示は，労働に関する永遠の原則であった。主は，「あなたは顔に汗してパンを食べ」（創世3：19）と言われた。天父は私たちを愛しているが故に，働くようにという戒めを与えられた。これは永遠の生命に至る鍵のひとつである。人は勤勉に努める時に安易な生活からは望めない大きな進歩成長と達成と祝福が得られる。神はこのことを御存じであった。

主の計画の中で，仕事の重要性を示している原則が幾つかある。第1に，契約の民である私たちはできる限り自立しなければならない。自由意志を危険に陥れるような施しやその他のプログラムを回避するようにしなければならない。第2に，私たちは主が祝福として与えて下さった家族を支えるために働く必要がある。神の息子はすべて自活することを願い，夫に先立たれた気高い母親は子供たちを支えるために働き手として，また親として懸命に働いている。最後に，私たちが働くのは生活必需品を手に入れ，残りの時間と精力を主のみ業のために捧げるためである。時折，会社で熱心に働く人は，教会の責任にも喜んで時間を捧げる人である。理想的には，私たちの関心や適性，訓練に合った仕事を捜す必要がある。人間の仕事はそれ相応の収入を得るだけのものでもない。仕事を通して自分は価値ある人間であるという満足感や喜びを得られなければならない。その中に日々の進歩向上に結びつく何かがなければならないのである。

それでは「誉れある仕事」とはどういうことか，その定義について少し触れてみたい。「誉れある仕事」とは正直な仕事のことである。公正な価格がつけられ，欺きや偽り，不正などもあってはならない。製品やサービスは最高のものであり，雇い主も顧客もすべて予想以上のものを受ける。また誉れある仕事は道徳性の高いものである。決して社会の善や道徳性を弱めるものであってはならない。例えば，酒類の販売や麻酔薬を不正に売買したり，かけ事をする仕事に関係してはならないのである。世界を住みよい所とするための善と奉仕を与える仕事でなければならない。誉れある仕事はよい報酬にも恵まれる。そして私たちが自立し，家族を養うことのできる，十分な収入が与えられる。その上，私たちが立派な父親として責任や教会の責任を果たす時間も与えられるのである。

「十分な収入」という言葉について説明しておこう。現代は物質社会の時である。末日聖徒は生活必需品とぜいたく品を混同しないように注意する必要がある。適切な収入によって生活に必要な基本的なものを手に入れる。しかし自分勝手なぜいたくを求めた結果，しばしば救い主の福音に対する完全な忠誠を忘れ去っている人々もいる。

そこで私たちが助けたいと願っている若人の皆さんに正しい仕事を身に付ける上で重要な4つの段階について述べてみたい。

まず第1に，この大切なことについて主の助けを得ることである。第2に，注意深く前もって計画を立てる。第3に，可能な限り，必要な情

報を集める。第4に，適切な職業と教育の準備をすることである。

第1段階の祈りは，全段階を通じて行なうべきことである。私たちが情報を集め，判断を下し，適切な訓練と経験を積み，仕事を求める時，謙遜に祈ると同時に自分の力で努力をすることが必要である。決定を下すのは私たちの責任であるが，もし私たちが心から願うならば，主は私たちの知恵を増して下さるであろう。

第2の重要な段階は，職業に対する計画を前もって立てておくことである。計画を早く立てることができれば，それだけ早く職業技術も身に付けることができる。両親は，子供たちが将来どのような仕事につくかということをまじめに考えるように教え，導く大切な責任がある。もちろん，両親は知恵を用いて子供たちが職業を決定する上で脅しではなく，注意深い助言を与える必要がある。

第3段階は，できるだけ多くの人材や情報源を利用して情報を集めることである。青少年と両親はその援助をワード部福祉活動援助責任者，学校の就職相談員，その他の人々に依頼する。そして会社を訪問し，雇い主と会い，また実際にいろいろな仕事で働いてみることは職業に対する見方を広げてくれる。

情報を効果的に収集することの中に，現在どのような職業が求められ，将来はどうなるかといった動向について調べることがある。社会は短期大学卒を多く必要としているのに，大勢の人々が大学に進み，市場にないような仕事の訓練を受けている。大学で訓練を受けることも大切だが，同時に私たちは大工や農夫，機械技師といった技能職の訓練を受けた若者も必要である。

最後に仕事を決め，その決定が正しいと感じたところから，本格的な準備を開始する。訓練に，たとえ徒弟教育，大学教育，職業教育などが含まれていたとしても，職業のために正式に認可された訓練を受けておいた方が有利である。よい仕事，高い賃金を得たいと思ったら，そのために十分な準備をすることである。

しかし現実には，自分の責任を果たすためにとにかく収入の得られる仕事を見つけようとする人がほとんどである。特に，1930年代初期に起こった大恐慌の時はそれが著しかった。しかも，その頃に比べれば減少していたとはいえ，現在でも依然として多く見られる。重要なことは，自ら選んだ仕事であって，しかもその仕事に喜びを持ち，自分の貢献していることが感じられる仕事につくことである。たとえ現在行なっている仕事がうまくいっていても，その仕事に心からの満足感を覚えることができなければ，仕事を変えることを祈りの気持ちで考えても決して遅くはない。そして再度段階を踏んで計画し，情報を集め，ふさわしい準備を行なうのである。

次に，神権定員会の責任に関して一言申し上げたい。仕事の空きがあることが分かったら，すばやく行動を起こすことである。仕事を求めている人にできる限り早く接触し，仕事の申請をさせる。この制度の成功の鍵はワード部福祉活動委員会およびアロン神権，メルケゼデク神権定員会が握っている。

求職者や雇用の状況に関する情報が流れるのは神権の系統を通してである。定員会は仕事を捜している人やさらによい仕事につきたいと願っている人々を知り，彼らが仕事を見つけることができるように助けなければならない。ワード部の福祉活動委員会は雇用責任者を召して活動させる。雇用責任者は若人に最高の仕事を得させるために職業に関する教会のすべての情報に精通しておく必要がある。

個人的な経験を申し上げると，ある時，私は妻と話し合い，自分の生涯の仕事を決めた。私は薬剤師になるために調剤のコースを幾つかとっていた。ところが多くの人と同じく，途中で気持ちが変わり，銀行業務の仕事に就いた。銀行と言えば非常に安定した仕事である。しかし私は何としても弁護士への道に進みたいという希望を持っていた。当時，すでに結婚をし，家族を養わなければならなかった私にとって，非常に重大な決定である。それでも私は断食と祈りをし，最良の方法をとるために情報を集め，4年間の勉強を終えて大学院の法科に入学した。昼間は働かなくてはいけないので，夜のクラスを選んだ。その数年間は，決して安易な日々ではなかった。しかし私たちが，もし確固たる決意を持って努力するならば，どのような希望も必ず成就できるはずである。さらに妻の助けと支援があったことは言うまでもない。妻はいつも家にいて家庭をよく治め，子供たちの世話をした。妻が私に示してくれた愛や励まし，倹約，そして助けは，外で働いて得られるどのような物質的な貢献よりもはるかに大きなものであった。

家庭の主婦は，家庭において全く大きな責任を果たしている。献身的な母親や妻ほど全力を使い果たしている人を私は知らない。そして主は男性には一家の稼ぎ手としての責任を課されたのである。

もちろん，姉妹たちも仕事の計画を立てなければならないこともあるそのような時，姉妹は可能な限り，結婚前に教育や職業訓練を終えるようにしていただきたい。もし姉妹たちが夫に先立たれたり，離婚した場合，あるいは何らかの理由で働く必要が生じた時，立派な，報酬のよい

仕事についてもらいたいからである。もし姉妹が結婚していなければ，自分の才能と賜を十分に発揮できる仕事につくのが当然である。

兄弟姉妹の皆さん。私たちは今，仕事や職業に対して自己を十分に備えるために必要なことをすべて行なう必要がある。そのために最善を尽くすのは私たちの責任である。家族を立派に養なうのも私たちの責任である。自分自身を備えることに加えて，私たちは他の人々を助ける必要がある。これが，神権に基づく責任の真髄である。

私は会員一人一人のことをこれほど考える教会の一員であることを心から感謝している。また個人の福利に絶えず関心を寄せている教会幹部の方々と交友を深められることを非常に喜んでいる。この教会は主の教会である。これは主のみ業であり，主の予言者によって導かれる教会である。私たちがこの勧告に従い，よりよい備えができるようにイエス・キリストのみ名によって祈る。アーメン。

福祉活動

大管長会第二副管長

マリオン・G・ロムニー

兄弟姉妹の皆様，きょうここでありとあらゆるテーマに基づいた話を聴きながら，私は数年前に起こったひとつの出来事を思い出していた。これは，私たち教会幹部にとって非常に珍しいことだが，その時私はステーキ部大会で特別なテーマについて話すよう依頼された。私がユタ州のリッチフィールドを訪れ，クリフォード・ヤング兄弟がモンロー市を訪れた。リッチフィールドの大会では，当地の若い学生たちのコーラスがあった。そして彼らはそのまま午後は，ヤング兄弟のステーキ部大会が開かれているモンロー市に出かけて行ったのである。午前中の大会で，私は割当てられたテーマに基づいて話をした。そしてヤング兄弟も午後の大会で，割り当てられた同じテーマの話をした。私たちが十二使徒評議員会で報告した時，ヤング兄弟はこう述べた。「素晴らしい大会でした。ただ一つ気懸りだったことは，コーラスを歌って下さった生徒たちが，同じテーマの話を2度も聞かねばならなかったことです。」そこで当時十二使徒評議員会会長であったジョージ・F・リチャーズが次のように述べた。「いいえ，そのことについて何も心配していません。恐らく，その生徒たちもあなた方が同じテーマで話したことに気づいていないでしょう。」

確かに私がこれから語ることは，今朝他の教会幹部の方々が話の中で述べたことと重復するかもしない。

先程ブラウン監督が語ってくれたように，教会の福祉事業部は3つのプログラムから成り立っている。つまり生産活動に代表される従来の福祉プログラムと，個人の奉仕，保健サービスである。このプログラムは，当初の旧福祉プログラムに代わって，今後生産配送プログラムと呼ばれるようになった。これは，「あなたは顔に汗してパンを食べ，ついに土にかえる」（創世3：19）という主の宣告と，「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」（マルコ12：31）という第2の戒めの実践である。

申し上げるまでもなく，皆さんは，昔これらの戒めがどのように人々の生活の中に生かされてきたかご存知である。聖典は，エノクの時代の有様を次のように記している。「主の民の上にありたる主の栄光甚だ大いなりければ，すべての国民主を怖れたり。…主，その民をシオンと呼びたまえり。彼ら心を一にし，精神を一にし，義に住みたればなり。されば彼らの中に貧しき者一人もなかりき。」（モーセ7：17―18）

またイエスが十字架にかけられた時に起こった天変地異の中を生き残ったアメリカ大陸に住むニーファイ人たちについてこう書かれている。「第三十四年，第三十五年と過ぎ去ったが，イエスの弟子たちはすでに国中ここかしこにキリストの教会を起しておった。…そればかりでなく，一同は一切の所有物を共有したので富んでいる者と貧しい者との区別もなく，自由なものと奴隷との区別もなくて，誰もかれも自由となり天の賜を授けられた。」（Ⅳニーファイ1.3）

この最後の神権時代にも，教会が組織されて9カ月後に主は聖徒たちに貧しい人々を養うようにと命じられた。そして，もし貧しい人々を助けることができなければ，主の弟子にあらずと言われた。（教義と聖約38章参照）

それから5週間後の1831年2月9日，主は協同制度の啓示を与えられた。（教義と聖約42章参照）

そしてひと月と経ずして，主は再び同じテーマについて述べ，協同制度が確立されるまで「汝ら貧しき者，乏しき者を訪れて救いを施さざるべ

からず」(教義と聖約44：6）と命じられた。

それから4年と3カ月の間，聖徒たちはミズリー州インディペンデンスで協同制度を始めた。しかしそれも失敗に終わり，聖徒たちはジャクソン郡の土地を追われ，家庭を建て直すためにシオンの陣営をカートランドからミズーリに移した。しかしこの旅も目的を達するには至らなかった。1834年6月22日，ミズーリ州フィッシングリバーで，主は聖徒たちを家庭に連れ戻すことのできなかった理由を次のように述べられた。

「誠にわれ，わが苦しめる民の贖いに関するわが旨を知らんとして寄り集れる汝らに告ぐ，見よ，われ汝らに告ぐ。われ一人一人に就きて言わず，教会員全体に就きて言うなれど，もしわが民罪を犯さざりせば彼ら今にも贖われ居りしならんに。されど見よ。彼らはわが彼らに要求したるところにおとなしく従うことを覚らずしてあらゆる悪に満ち，彼らの中の貧しくして苦しめる者たちに聖徒たるにふさわしく物資を領(わか)たず。日の栄の王国の律法の要求する和合一致に従いて一致協力せず。およそ日の栄の王国の律法の諸原則によらずんば，シオンを建ること能わず。これによりて建てずば，シオンをわれに受け入るることかなわざるなり。されば，わが民の律法に従順なることを覚るまでは必ずこれを懲しむるを要す。もし必ず要すれば，彼らの受くることによりて打ち懲しめらるるなり。」(教義と聖約105：1－6）

こうして協同制度の下で生活するという要求は却下された。そしてより低い什分の一の律法が啓示され，断食の律法と共に今日まで守られてきた。

他方，扶助教会はノーブーで予言者ジョセフ・スミスによって組織されて以来，貧しい人々のために偉大な奉仕の業を行なってきた。そして聖徒たちの間で，数多くの協同計画が自発的に行なわれるようになった。

この協同制度の原則に向かって始められた次の全教会的プログラムが教会の福祉プログラムである。1936年10月の大会で，ヒーバー・J・グラント大管長は全教会員に宛てた大管長会のメッセージを朗読されたが，その一部をここで紹介したい。

「前回の4月大会で約束したように，私たちは教会の福祉計画に着手することになりました。…

このプログラムの正式の目的は，1936年10月1日までに，現金あるいは必要な食糧，燃料，衣服，住居などの物資を全く自発的に寄贈してもらい，この冬期間中困っているふさわしい教会員の家族にそれらを供給することです。そしてこの緊迫した経済情勢の中で，教会員の中に苦しむものが一人もいないようにするためです。

当時私は監督として総大会に出席し，このメッセージを耳にした。ちょうど39年前のことである。そこで私たちはこの勧告に従い，直ちにワード部の集会場の地下に簡単な貯蔵庫を作り，衣服や必要な食糧を集めたことをよく覚えている。

グラント大管長はそのメッセージの中でさらにこう述べていた。

「私たちの第一の目的は，可能な限り，いまわしい怠惰や施しのもたらす悪幣を除去し，独立心，勤勉，倹約，自尊心を再び私たちの間に確立する体制を築くことである。教会の目的は，人々の自立を助けることにある。勤労が再び教会員の生活を貫く原則にならなければならない。

偉大な指導者ブリガム・ヤングは今私たちが置かれている同じような状況の下でこう語った。

『貧しい人々のために仕事を定め，果樹園の手入れや柵の取り壊し，その他溝を掘ったり，垣根を作ったり，役に立つことは何でもやらせなさい。そして彼ら自身で肉やパン粉，生活必需品を購入できるようにさせなければならない。』

この勧告は今の私たちにもそのまま当てはまるものである。

それからグラント大管長はその日までの達成状況を報告して，次のように語っている。」

「ワード部やステーキ部はすべて自分たちの必要だけでなく，他のワード部やステーキ部をも援助するよう期待されている。それ以外に教会が目的としている業を可能ならしめる方法はない。しかも自分のワード部やステーキ部の必要を満たすだけでよいと認められる立場にあるワード部やステーキ部はほとんどないのである。

この大いなる業はこの冬の間ずっと縮少することなく続け，できればこの厳しい季節を乗り切る活力を養い続けなければならない。そして春が来た時，食糧の供給状況を一層強化するようにする必要がある。それができれば，私たちは今年とは比べることのできないほど豊かな生活を送ることができる。つまり種蒔き時からその備えに取り掛かることができるからである。私たちは，困窮や苦しみが私たちの間からなくならない限り，今全力を注いでいることを中断することなど考えてはならない。だれも飢えたり，着る物がなく寒さに震えたりしていないかを見守る責任は監督とそのワード部の会員一人一人の双肩にかかっている。困っている人にはワード部の全組織を使って援助しなければならない。ワード部外の援助を得たい時は，必要な援助をステーキ部長会に申し出，次いで地区組織，あるいは教会の管理監督会に申し出るようにする。管理監督会の第一の責任は，教会全体の貧

しい人々の世話をすることである。

こうした大いなるみ業を行なっている人々に対して，主は豊かな祝福を注いで下さっている。そして，今後も人々が貧しい人々に対する義務を果たす限り祝福を注いで下さるであろう。

幾世代も前に，主は古代イスラエルの民に向かって，什分の一を倉に携えてくるように命じてこう言われた。

『これをもってわたしを試み，わたしが天の窓を開いて，あふるる恵みを，あなたがたに注ぐか否かを見なさいと，万軍の主は言われる。』(マラキ３：10)

また主はこの末日の人々に向かって次のように言われた。

『また汝らの財物を貧しき者に分ち与うれば汝らこれをわれに為すなり。』(教義と聖約42：31)

また次のようにも戒めておられる。

『この故に，もし何人たりともわが造りし多くの物の中より取り，わが福音の律法に従いてこれを貧しき者乏しき者に自己の取前をわかつことをせざる時は，悪人と共に地獄に落ちて苦悩を受け目を挙げて望み視ん。』(教義と聖約104：18)

ヤコブはまた，ニーファイの民に向かって次のように言われた。

『財産を求める前にまず神の王国を求めよ。あなたたちがすでにキリストに望みをもってから宝を求めたならばその通りに宝が手に入るであろう。しかし，その時あなたたちがその宝を求める目的は，裸でいる者に着物を着せ，飢えている者に食を与え，束縛されている者を救って自由にし，病んでいる者と悩んでいる者とを救うなど，およそ善事(よいこと)を行うことである。』(ヤコブ２：18，19)

皆さん方一人一人の上に主の祝福があらんことを願っている。また主がその民に終わりまで霊感と導きを与えて下さり，この困難な時代に苦しみあえいでいる忠実な人々を援助することができるように祈っている。」

この大管長会からのメッセージを読み終えた後，グラント大管長は政府の公共事業計画に対して教会員のとるべき立場について次のように述べられた。

「私たちが公共事業促進局のために働くよう勧める時は，彼らに熱心に全精力を傾けて働くようお願いしている。昔公共事業関係の責任者をしていた父が私にこう言っていた。『私は今，だれが仕事のために働き，だれがお金のためにだけ働いているかはっきりと振り分けることができる。ある人はただお金をかせぐためにのみ働いている。その反面，仕事を終えようと一生懸命に働いている人も大勢いる。』

そこで公共事業局のために働く人々にお願いしたい。お金のためでなく，仕事のために働いてもらいたい。

ブリガム・ヤング大管長はこう述べている。

『私は自分の経験を通してひとつのことを学んだ。それは今，私の信念のひとつになっている。男性であっても女性であっても，もし彼らが健康であり，必要なものを働いて得ることができ，しかもこの地上にそういった仕事が残されているならば，お金や食糧，衣服などを与えても彼らにとって何の益にもならないのである。これは，私の信念であり，私はそれに基づいて行動している。それに反する道をたどることは，社会の滅亡を招くものであり，人々を怠け者にしてしまうことである。

社会の滅亡は州の滅亡であり，それはとりもなおさず国家の滅亡でもある。」(「大会報告」1936年10月)

大管長会がそのメッセージの中で明確に述べているように，福祉プログラム確立の目的は２つある。第１に，忠実な教会員がだれも生活必需品にこと欠くことのないように見守ること。第２に，労働可能な人すべてに仕事を与えることである。

福祉プログラムが発表された同じこの大会で，Ｊ・ルーベン・クラーク副管長は次のように述べている。

「働くことは非常に大切なことであり，この地上における律法である。アダムはエデンの園を追われた時，『あなたは顔に汗してパンを食べ』るという栄えある宣告を下された。そしてアダムを父祖とする人間は，この律法の宣言なしには存在し得ないのである。どんな仕事であろうとも，働くことほど素晴らしいことはない。

詩人ミルトンは，『失楽園』の中で仕事への賛歌を次のように詠んでいる。これは，エデンの園におけるアダムとイブの様子をはっきりと教えている。

神様は人間に，日と夜の如く労働と休息を
逐次に與へられたのだから…
終日懶惰にぶらついている生物は，
休息も少なくてよい譯だが，
人間は指名された心身の仕事を毎日する。
その仕事が人間の威厳を宣揚し，
人間のあらゆる事が天が昭覧あるを表すのだ。
その間他の動物は不活動に彷徨するのみなので，
彼等の所業を神は問題とされない。

(『失楽園』「世界文豪代表作全集」木内打魚訳，p. 232 世界文豪代表全集刊行会)

兄弟姉妹の皆さん。もし私たちに仕事に対する威厳と尊敬のみを心に植え付けることができるならば，どのような仕事であろうと，私たちが

悩んでいる多くの問題は解決されるはずである。人間がこの地上に住まうようになって以来，まだ一度も怠惰の中で正しい生活を送ったことなどなかったし，今後もそのような計画が生じるはずはないと私は堅く信じている。」(「大会報告」1936年10月)

この福祉プログラムは当初から，失業者のために仕事を見つけ，仕事に就かせることよりも生活の必需品を生産することの方が容易であった。1974,1975年の統計によると，福祉プログラムの援助を受けている者でそれに見合う労働をした人は全体の4分の1にしかならない。私たち神権指導者にとってあまり好ましい数字ではない。今こそ，私たちはこの方面でもっと「「歩みを速める」必要があると思う。

この福祉プログラムに関係して，ほぼ300にのぼるステーキ部が福祉活動雇用センタープログラムに参加している。1974年に教会の雇用制度を通じて得られた仕事は，17,346件に達する。私たちは雇用問題に関する神権指導者の協力に心から感謝している。と同時に，この不況の中にあって，私たちは雇用問題になお一層の関心を寄せる必要がある。私たちがこのプログラムに熱心に参画すれば，それだけ人々から感謝され，その価値も認められるようになるであろう。

しかし決して忘れてならないことは，この福祉プログラムの第一の目的が，「いまわしい怠惰」や「施しのもたらす悪幣」を除去して，人々の間に「勤勉，倹約，自尊心」を再び確立することにあるということである。そして，「勤労が再び教会員の生活を貫く原則にならなければない」ということである。(「大会報告」1936年10月参照)

先程の雇用問題に比べて，やや進歩していると思われるのが，このプログラムの生産部門である。大管長会はこう言われた。「ワード部やステーキ部はすべて自分たちの必要だけでなく，他のワード部やステーキ部をも援助するよう期待されている。」(「大会報告」1936年10月)

この責任を果たすために，ワード部は独自で，あるいは他のワード部と協力して生産施設を確保する必要がある。1936年から1941年の最初の5年間，メルビン・J・バラード長老とリー大管長（当時はステーキ部長）のふたりが教会の全ステーキ部を訪問して，福祉地区を設定し，プログラムを説明して回った。その後15年間，私は教会幹部から召されて，合衆国とカナダの全ステーキ部の指導者と会ってきた。私たちの責任は，このプログラムについて説明し，翌年の生産費を割り当て，監督自ら，あるいは他の監督と協力して生産計画を始めるように勧めることであった。

この間，福祉委員会の代表者が定期的に教会幹部と共にステーキ部大会に出席し，そこで福祉活動集会を開いてプログラムの説明をした。教会の福祉について教える方法は変化しても，その目的は以前と全く変わらない。原則は永久に生き続けるのである。私たちの進むべき目標は福音が完全に生かされている状態，すなわち協同制度である。

最新の情報によれば，合衆国およびカナダのワード部の約73パーセントが福祉生産事業に携わっている。従って，福祉生産事業に関与していないのは残りの27パーセント，1千余りのワード部にすぎないのである。ステーキ部長や監督の職にある指導者の皆さん，この残りのワード部が全部生産事業に着手できるよう歩みを速めていただきたい。

皆さん。今一度自己を振り返って，時のしるしを見究めていただきたい。私たちは主が述べられたその時がまさに近づいていることを認識しなければならない。

「見よ，こはわれ汝らを備うる準備と，わが与うる礎と範例とにしてこれによりて汝らに与えらるる誡命を成就すべし。これ，汝らに如何なる艱難下るといえども，わが摂理によりて日の栄の世界の下に在る他の一切の生くる者の上にわが教会員の自立せんがためにして，…。」〔教義と聖約78：13—14)

早速，私たちは行動を開始し，福祉予算の割り当てを現金ではなく，自分の計画によって得られた物資で支払おうではないか。

これまで言及してきたことは，福祉事業部のほんの一面に過ぎない。ほかにも重要なプログラムが多くある。この教会の社会福祉プログラムを通じて行なわれる救済，励まし，慰め，社会復帰，家庭用品の供給，友情の形成，希望と平安，その他慈愛に満ちた奉仕活動など枚挙にいとまがないほどである。これらはお金では決して買うことのできない大切なものである。

最近行なわれるようになった保健サービスは驚くべき成果をもたらしている。

このプログラムの活動については今朝，幾つか紹介された。

このプログラムの副産物は他の組織への多大な財政的な救済である。もし私たちが自発的に行なわなければ，この事業にかかる費用はなくなってしまうであろう。例えば，1974年7月1日から1975年の6月30日までの1年間に，私たちは福祉事業を通して，支出や総経費のほかに2000万円を上回る価値の援助を行なっている。

合衆国の教会員数は全人口のほぼ1パーセントである。従って，もし

他の人々がすべて私たちと同じような援助をしてくれるとしたら，少なくとも20億ドルに達するはずである。

私たちは教会員を，まだ福祉活動の基本も分らず，実施にほど遠い地域の羊の群れに教会員を派遣させることを急いでいる。そこで皆さん方ステーキ部長や監督の援助によって，フルタイムの福祉事業宣教師に召すことができる豊富な経験を持つ，熟達した指導者とその妻を推薦していただきたい。こうして召された夫婦は地元の神権指導者を助けて，福祉活動の基本原則を教え，医療あるいは農業宣教師を管理しながら地元の発展に貢献するのである。

福祉活動宣教師となる夫婦は以下の資格を満たしていなければならない。

1，監督，ステーキ部長あるいはそれと同等の教会の職で，福祉活動の管理運営に直接的に携わった経験を有する兄弟。

2，現在，扶養の義務のある子供たちを持っていない。

3，ラテンアメリカやアジア，太平洋諸国の島々に赴いて18カ月から24カ月の伝道期間中奉仕できるだけの経済的，肉体的，情緒的備えができている。

4，すべての面でふさわしい標準を身につけている。

特に必要とされるのは，言語能力さもなくば言語をすばやく習得する能力である。また『陰の立役者」として人々を援助する指導性も必要とされる。

各ステーキ部やワード部の会員たちを祈りの気持でよく検討すれば，この条件に合う夫婦が必ず出てくると私たちは確信している。

兄弟姉妹の皆さん。私はこの業が真実であることを証する。私たちは皆さんを心から愛している。そして皆さんがこの大いなる業を行なっていること，さらにこれから推し進めようとされていることを心から感謝している。主の祝福が私たちの上にあらんことを，イエス・キリストのみ名によって祈る。アーメン。

なすべきことは多い

大管長

スペンサー・W・キンボール

今朝私は，福祉プログラムに関する説明を聞き，全く新たな励ましと勇気を得ることができた。

ここでは2，3のことについてのみお話したいと思う。まず，福祉プログラムの運営と監督に携わっておられる方々に心からの謝意を表したい。次に，ロムニー副管長が指摘されたようになすべきことはまだまだ多い，と申し述べたい。私たちのプログラムは，さらに能率を高め，基本的な問題に対してより広範囲に適応できるはずである。第3に，私たちを敵視している人々が，私たちがこの世の人々に提供し得るこれらの多種多様かつ広範囲にわたる援助手段を目のあたりにすることを望むものである。

私たちは大いなる業を行なっている。もしも人々が私たちの努力を批判せず私たちと同様のことを行なおうとするならば，それは喜ばしいことである。

このプログラムに熱心に従事するあなた方すべてに神の祝福があらんことを。すべてのワード部，支部，ステーキ部，伝道部において，まだ水準に達していないところがあるならば，水準にまで引き上げようではないか。そして，主が望んでおられるところまで近づこうではないか。

それぞれの地に帰り，この大いなる業を遂行するにあたり，主の祝福があなた方の上にあらんことを。イエス・キリストのみ名により，アーメン。